

森町

# 濁川左岸遺跡 — A地区 —

— 北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成13・14・15年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

森町

# 濁川左岸遺跡 ーA地区ー

ー北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書ー

平成13・14・15年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



A地区からB地区を望む



表土

II層 (Ko-d)

III層 <B-Tm

IV層

V層 (Ko-g含む)

VI層

VII層

基本土層

口絵 2



H-6, 11, P-56



H-7



H-12, 16



H-15

口絵 4



H-18



H-20



H-6, 11



H-6, 11



H-7



H-7



H-12, 16



H-12, 16



H-15



H-15



H-18



H-18

口絵 6



H-20



H-20



F-28



F-36



F-37



P-2



P-56





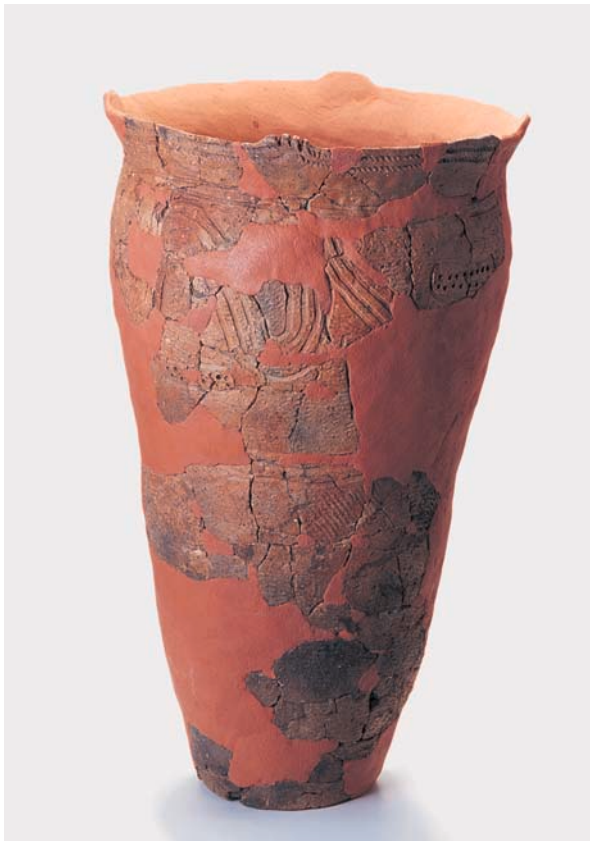
土製品 1 (図IV-70)



P-87-1 (図III-67)



IV群 a 類土器11 (図IV-15)



IV群 a 類土器 (図IV-13)



IV群土器108 (図IV-31)



涌元式土器

## 例 言

1. 本書は日本道路公団北海道支社が行う北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）建設工事に伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成13・14年度に実施した森町濁川左岸遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書には平成13・14年度に調査したA地区の調査結果を掲載する。
3. 調査は平成13年度を第2調査部第4調査課が、平成14年度を第2調査部第3調査が担当した。
4. 本書の執筆は、各章・節について担当の調査員がそれぞれ行い、文末に文責者名を記している。全体の編集は大泰司統が行った。最新の森町の遺跡の分布と動向については鎌田 望がまとめた。
5. 遺構は調査を担当した調査員がそれぞれ整理し、大泰司が取りまとめた。遺物は土器・石器等を大泰司が担当した。
6. 遺物等の現場での一次整理および台帳管理は平成13年度は影浦寛・袖岡淳子が、平成14年度は大泰司が担当し、最終的に大泰司が統括した。
7. 発掘調査での写真撮影は平成13年度を中山昭大、平成14年度は各担当の調査員が行い、遺物の写真撮影・焼付けなどは中山が行った。
8. フローテーション資料については大泰司が統括した。
9. 各種分析、同定は下記に依頼した。  
種子同定（札幌国際大学 椿坂恭代） 動物遺存体同定（パリノ・サーヴェイ）
10. 火山灰分析および土層の観察は第1調査部第1調査課花岡正光による。
11. 石器の石材鑑定は第1調査部第1調査課花岡の指導のもと、大泰司が行った。
12. 遺物・記録類は整理および報告書作成後、森町教育委員会が保管する。
13. 調査にあたっては下記の諸機関および諸氏にご協力、ご指導頂いた。  
北海道教育庁文化課、森町教育委員会、八雲町教育委員会、長万部町教育委員会、森町立濁川小学校、森町教育委員会：藤田 登・荻野幸男・横山英介・佐藤 稔・八重樫 誠・山田あや子・渡部明美、八雲町郷土資料館：三浦孝一・柴田信一、八雲町教育委員会：吉田 力、札幌国際大学：吉崎昌一・椿坂恭代、北海道教育大学函館校：鴈沢好博、北海道開拓記念館：平川善祥・山田悟郎・右代啓視・鈴木琢也・添田雄二、(財)北海道北方博物館交流協会：野村 崇、函館市教育委員会：田原良信・野村祐一、函館市立博物館：長谷部一弘、函館市立博物館五稜郭分館：佐藤智雄、七飯町教育委員会：山田 央、南茅部町教育委員会：阿部千春・福田祐二・南茅部町埋蔵文化財調査団：小林 貢・輪島慎二・坪井睦美、今金町教育委員会：寺崎康史、乙部町教育委員会：森 広樹、上磯町教育委員会：森 靖裕、上ノ国町教育委員会：松崎水穂・斉藤邦典、木古内町教育委員会：菅野文二・木元豊・三上英則・大谷内愛史、知内町教育委員会：松本征八・高橋豊彦、松前町教育委員会：久保 泰・前田正憲・谷岡康孝・天方直仁、厚沢部町教育委員会：石井淳平、伊達市教育委員会：大島直行・青野友哉、苫小牧市博物館：赤石慎三、苫小牧市勇武津資料館：佐藤一夫、苫小牧市：宮夫靖夫・二階堂啓也・工藤 肇・兵藤千秋・大泉博嗣・渡辺俊一・鈴木耕栄、泊村教育委員会：田部 淳、札幌市教育委員会：加藤邦雄・上野秀一・羽賀憲二・仙庭伸久・秋山洋司・石井 淳・柏木大延、石狩市教育委員会：石橋孝夫・工藤義衛、恵庭市教育委員会：上屋真一・松谷純一・森 秀之・長町章弘、江別市教育委員会：高橋正勝・野中一宏・稲垣和幸、千歳市埋蔵文化財調査センター：大谷敏三・田村俊行・豊田宏良・松田淳子、千歳サケのふるさと館：高橋 理、平取町教育委員会：森岡健治・長田佳宏、深川市教育委員会：葛西智義、富良野市教育委員会：杉浦重信・澤田 健、釧路市埋蔵文化財調査センター：石川 朗、網走市郷土博物館：和田英昭、斜里町立知床博物館：松田 功、常呂町埋蔵文化財センター：武田 修、羅臼町教育委員会：涌坂周一、青森県立資料館：鈴木克彦、青森県埋蔵文化財センター：成田滋彦、青森県教育委員会：神 康夫、青森市教育委員会：遠藤正夫・児玉大成、八戸市教育委員会：村木 淳・小笠原善範、東北町教育委員会：古屋敷則雄

## 凡 例

1. 本文および図・表中では以下の略号を用い、原則として確認順に番号を付した。なお一部の図中において、平成14年度に調査したものについて濁川左岸遺跡の頭文字「N」をそれぞれの略号の頭に付けた。報告書本文中においては今回「N」の呼称ははずした。  
H (NH)：住居跡                      P (NP)：土壇                      F (NF)：焼土・石組炉  
SP (NSP)：柱穴様の小土壇        HP：住居内の柱穴                HF：住居内の焼土
2. 遺構図中の出土遺物は、それぞれに凡例を付した。掲載遺物で出土位置の判るものについては図番号で示した。
3. 掲載した実測図の縮尺は原則として以下のとおりである。下記以外の図および、例外については図内にスケールを付して示した。  
遺構 1：40        遺物出土状況 1：20        復元土器 1：3        土器拓影 1：3  
剥片石器・磨製石器 1：2        礫石器 1：3（但し大型の砥石と台石・石皿は1：4）  
土・石製品 1：2（再生土製品は1：3    大型の石製品はそのつど縮尺を示した）
4. 遺構の規模は「確認面の長軸長／床面・壇底面での長軸長×確認面の短軸長／床面・壇底面での短軸長×確認面からの最大深（単位はm）」の順で記した。一部破壊されているものについては現存長を（ ）で示し、不明のものは一で示した。
5. 土層の表記は、基本土層はローマ数字で、遺構の覆土はアラビア数字で示した。
6. 土層の色調は『新版標準土色帖19版』（小山・竹原1997）に準じた。
7. 土層の説明は『土壌調査ハンドブック改訂版』（日本ペドロロジー学会編 1997）を参考に、土性、粘着性、堅密度および礫の混入、その他に分けた。一部、土層の混在状態は、基本土層や上記の略号などを用いておもに下記のように表してある。  
A + B：AとBがほぼ同量混じる  
A > B：AにBが少量混じる  
A ≫ B：AにBが微量混じる
8. 火山灰の略号は、『北海道の火山灰』（北海道火山灰命名委員会 1982）による。
9. 遺構図中の方位は真北を、細数字は標高（単位はm）を示している。
10. 遺構図中の一部には、遺構掲載遺物の掲載番号を示し、その出土位置を示した。Sの表記は礫であり、Pの表記は土器である。
11. 石器・土製品・石製品の大きさは以下の要領で示した。なお、破損しているものについては現存最大値を（ ）で示した。  
最大長×最大幅×最大厚（単位はcm）

# 目 次

口絵

例言

凡例

目次

挿図目次

表目次

図版目次

## I 調査の概要

1 調査要項 .....	1
2 調査体制 .....	1
3 調査に至る経緯 .....	2
4 調査概要 .....	2
(1) 発掘区の設定 .....	2
(2) 調査の方法 .....	3
(3) 遺跡の土層 .....	4
(4) 整理の方法 .....	4
(5) 遺物の分類 .....	11
(6) 調査結果の概要 .....	15

## II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と周辺の地形 .....	21
2 周辺の遺跡 .....	21

## III 遺構と遺物

1 住居 .....	29
2 土壌 .....	85
3 焼土 .....	134
4 柱穴状の小土壇 (SP) .....	162

## IV 包含層出土の遺物

1 土器・土製品 .....	183
2 石器・石製品 .....	265

一覧表 .....	303
-----------	-----

V 自然科学的分析	
1 森町濁川左岸遺跡出土の動物遺存体	359
2 森町濁川左岸遺跡A地区から出土した炭化植物種子	365
VI 成果と課題	371
引用・参考文献	383
写真図版	387
報告書抄録	563
奥付	

## 表 目 次

表 I - 1	遺構名変更一覧
表 I - 2	出土遺物一覧
表 II - 1	森町の遺跡一覧
表 II - 2	八雲町の遺跡一覧
表 III - 1	遺構一覧 (A 地区)
表 III - 2	遺構一覧 (B 地区)
表 III - 3	遺構出土遺物一覧
表 III - 4	遺構出土掲載土器一覧 (復元土器)
表 III - 5	遺構出土掲載土器一覧 (拓影図)
表 III - 6	遺構出土掲載石器・石製品一覧
表 IV - 1	包含層出土土器一覧
表 IV - 2	包含層出土掲載土器一覧 (復元土器)
表 IV - 3	包含層出土掲載土器一覧 (拓影図)
表 IV - 4	包含層出土掲載土製品一覧
表 IV - 5	包含層出土石器一覧
表 IV - 6	包含層出土掲載石器・石製品一覧
表 V - 1	検出動物分類群一覧
表 V - 2	分析資料の一覧
表 V - 3	骨同定結果
表 V - 4	森町濁川左岸遺跡炭化種子出土表

## 挿図目次

I 調査の概要	図Ⅲ-23 H-15の遺物(7)
図I-1 遺跡の位置	図Ⅲ-24 H-15の遺物(8)
図I-2 遺跡周辺の地形と調査区	図Ⅲ-25 H-15の遺物(9)
図I-3 発掘区設定図	図Ⅲ-26 H-15の遺物(10)
図I-4 基本土層と土層断面(1)	図Ⅲ-27 H-15の遺物(11)
図I-5 基本土層と土層断面(2)	図Ⅲ-28 H-15の遺物(12)
図I-6 基本土層と土層断面(3)	図Ⅲ-29 H-16
図I-7 遺構位置図	図Ⅲ-30 H-16の遺物(1)
	図Ⅲ-31 H-16の遺物(2)
II 遺跡の位置と環境	図Ⅲ-32 H-18と遺物(1)
図II-1 遺跡周辺の地形(1)	図Ⅲ-33 H-18の遺物(2)
図II-2 遺跡周辺の地形(2)	図Ⅲ-34 H-20(1)
図II-3 遺跡周辺の地形(3)	図Ⅲ-35 H-20(2)と遺物(1)
図II-4 周辺の遺跡	図Ⅲ-36 H-20の遺物(2)
	図Ⅲ-37 H-20の遺物(3)
III 遺構と遺構出土の遺物	図Ⅲ-38 H-20の遺物(4)
図Ⅲ-1 A地区遺構位置図	図Ⅲ-39 H-20の遺物(5)
図Ⅲ-2 H-6(1)	図Ⅲ-40 H-20の遺物(6)
図Ⅲ-3 H-6(2)と遺物(1)	図Ⅲ-41 H-20の遺物(7)
図Ⅲ-4 H-6の遺物(2)	図Ⅲ-42 P-2と遺物(1)
図Ⅲ-5 H-6の遺物(3)	図Ⅲ-43 P-2と遺物(2)
図Ⅲ-6 H-7(1)	図Ⅲ-44 P-9と遺物
図Ⅲ-7 H-7の遺物(1)	図Ⅲ-45 P-10と遺物、P-13と遺物
図Ⅲ-8 H-7の遺物(2)	図Ⅲ-46 P-15と遺物、P-16・18・19
図Ⅲ-9 H-11と遺物	図Ⅲ-47 P-20と遺物、P-21と遺物、P-22
図Ⅲ-10 H-12	図Ⅲ-48 P-23と遺物、P-24・25・26
図Ⅲ-11 H-12の遺物(1)	図Ⅲ-49 P-27、P-28と遺物(1)
図Ⅲ-12 H-12の遺物(2)	図Ⅲ-50 P-28の遺物(2)
図Ⅲ-13 H-12の遺物(3)	図Ⅲ-51 P-29、P-30と遺物、P-31と遺物、P-32
図Ⅲ-14 H-12の遺物(4)	図Ⅲ-52 P-33と遺物、P-34と遺物
図Ⅲ-15 H-15(1)	図Ⅲ-53 P-35・36・37、P-38と遺物
図Ⅲ-16 H-15(2)	図Ⅲ-54 P-39と遺物、P-40と遺物
図Ⅲ-17 H-15(3)と遺物(1)	図Ⅲ-55 P-41・42、P-43と遺物(1)
図Ⅲ-18 H-15の遺物(2)	図Ⅲ-56 P-43の遺物(2)、P-44と遺物、P-45・46
図Ⅲ-19 H-15の遺物(3)	図Ⅲ-57 P-47、P-48と遺物、P-49
図Ⅲ-20 H-15の遺物(4)	図Ⅲ-58 P-50と遺物、P-51と遺物、P-52
図Ⅲ-21 H-15の遺物(5)	
図Ⅲ-22 H-15の遺物(6)	



図Ⅲ-59 P-54、P-55と遺物  
図Ⅲ-60 P-56と遺物(1)  
図Ⅲ-61 P-56の遺物(2)  
図Ⅲ-62 P-57・58、P-59と遺物  
図Ⅲ-63 P-63と遺物  
図Ⅲ-64 P-64と遺物、P-66、P-71と遺物  
図Ⅲ-65 P-72、P-73と遺物  
図Ⅲ-66 P-74と遺物、P-76、P-75と遺物  
図Ⅲ-67 P-83、P-87と遺物  
図Ⅲ-68 P-91・93・94、P-95と遺物、P-96  
図Ⅲ-69 F-1・2・3・4・5・6  
図Ⅲ-70 F-7・8・9、F-10と遺物  
図Ⅲ-71 F-11と遺物  
図Ⅲ-72 F-12・13・14・15、F-16と遺物  
図Ⅲ-73 F-17・18、F-19と遺物(1)  
図Ⅲ-74 F-19の遺物(2)、F-20・21  
図Ⅲ-75 F-22・23・24、F-25と遺物  
図Ⅲ-76 F-26・27・28  
図Ⅲ-77 F-28と遺物(1)  
図Ⅲ-78 F-28と遺物(2)、F-29と遺物(1)  
図Ⅲ-79 F-29の遺物(2)、F-32と遺物  
図Ⅲ-80 F-30・31・33・34・35  
図Ⅲ-81 F-36と遺物(1)  
図Ⅲ-82 F-36の遺物(2)  
図Ⅲ-83 F-36の遺物(3)  
図Ⅲ-84 F-36の遺物(4)  
図Ⅲ-85 F-37と遺物、F-38  
図Ⅲ-86 柱穴状の小土壌(1)全体図  
図Ⅲ-87 H-21  
図Ⅲ-88 柱穴状の小土壌(2)SP1区  
図Ⅲ-89 柱穴状の小土壌(3)SP2区  
図Ⅲ-90 柱穴状の小土壌(4)SP3区  
図Ⅲ-91 柱穴状の小土壌(5)SP4区  
図Ⅲ-92 柱穴状の小土壌(6)SP5区  
図Ⅲ-93 柱穴状の小土壌(7)SP6区  
図Ⅲ-94 柱穴状の小土壌(8)SP7区  
図Ⅲ-95 柱穴状の小土壌(9)SP8区  
図Ⅲ-96 柱穴状の小土壌(10)SP9区  
図Ⅲ-97 柱穴状の小土壌(11)SP10区  
図Ⅲ-98 柱穴状の小土壌(12)SP10・11区土層

図Ⅲ-99 柱穴状の小土壌(13)SP11区  
図Ⅲ-100 柱穴状の小土壌(14)SP12区  
図Ⅲ-101 柱穴状の小土壌(15)SP13区  
図Ⅲ-102 柱穴状の小土壌の遺物(1)土器  
図Ⅲ-103 柱穴状の小土壌の遺物(2)石器

#### IV 包含層出土の遺物

図Ⅳ-1 包含層出土の土器(1)  
図Ⅳ-2 包含層出土の土器(2)  
図Ⅳ-3 包含層出土の土器(3)  
図Ⅳ-4 包含層出土の土器(4)  
図Ⅳ-5 包含層出土の土器(5)  
図Ⅳ-6 包含層出土の土器(6)  
図Ⅳ-7 包含層出土の土器(7)  
図Ⅳ-8 包含層出土の土器(8)  
図Ⅳ-9 包含層出土の土器(9)  
図Ⅳ-10 包含層出土の土器(10)  
図Ⅳ-11 包含層出土の土器(11)  
図Ⅳ-12 包含層出土の土器(12)  
図Ⅳ-13 包含層出土の土器(13)  
図Ⅳ-14 包含層出土の土器(14)  
図Ⅳ-15 包含層出土の土器(15)  
図Ⅳ-16 包含層出土の土器(16)  
図Ⅳ-17 包含層出土の土器(17)  
図Ⅳ-18 包含層出土の土器(18)  
図Ⅳ-19 包含層出土の土器(19)  
図Ⅳ-20 包含層出土の土器(20)  
図Ⅳ-21 包含層出土の土器(21)  
図Ⅳ-22 包含層出土の土器(22)  
図Ⅳ-23 包含層出土の土器(23)  
図Ⅳ-24 包含層出土の土器(24)  
図Ⅳ-25 包含層出土の土器(25)  
図Ⅳ-26 包含層出土の土器(26)  
図Ⅳ-27 包含層出土の土器(27)  
図Ⅳ-28 包含層出土の土器(28)  
図Ⅳ-29 包含層出土の土器(29)  
図Ⅳ-30 包含層出土の土器(30)  
図Ⅳ-31 包含層出土の土器(31)  
図Ⅳ-32 包含層出土の土器(32)  
図Ⅳ-33 包含層出土の土器(33)

- 図IV-34 包含層出土の土器 (34)
  - 図IV-35 包含層出土の土器 (35)
  - 図IV-36 包含層出土の土器 (36)
  - 図IV-37 包含層出土の土器 (37)
  - 図IV-38 包含層出土の土器 (38)
  - 図IV-39 包含層出土の土器 (39)
  - 図IV-40 包含層出土の土器 (40)
  - 図IV-41 包含層出土の土器 (41)
  - 図IV-42 包含層出土の土器 (42)
  - 図IV-43 包含層出土の土器 (43)
  - 図IV-44 包含層出土の土器 (44)
  - 図IV-45 包含層出土の土器 (45)
  - 図IV-46 包含層出土の土器 (46)
  - 図IV-47 包含層出土の土器 (47)
  - 図IV-48 包含層出土の土器 (48)
  - 図IV-49 包含層出土の土器 (49)
  - 図IV-50 包含層出土の土器 (50)
  - 図IV-51 包含層出土の土器 (51)
  - 図IV-52 包含層出土の土器 (52)
  - 図IV-53 包含層出土の土器 (53)
  - 図IV-54 包含層出土の土器 (54)
  - 図IV-55 包含層出土の土器 (55)
  - 図IV-56 包含層出土の土器 (56)
  - 図IV-57 包含層出土の土器 (57)
  - 図IV-58 包含層出土の土器 (58)
  - 図IV-59 包含層出土の土器 (59)
  - 図IV-60 包含層出土の土器 (60)
  - 図IV-61 包含層出土の土器 (61)
  - 図IV-62 包含層出土の土器 (62)
  - 図IV-63 包含層出土の土器 (63)
  - 図IV-64 包含層出土の土器 (64)
  - 図IV-65 包含層出土の土器 (65)
  - 図IV-66 包含層出土の土器 (66)
  - 図IV-67 包含層出土の土器 (67)
  - 図IV-68 包含層出土の土器 (68)
  - 図IV-69 包含層出土の土器 (69)
  - 図IV-70 包含層出土の土器・土製品 (70)
  - 図IV-71 包含層出土の石器 (1)
  - 図IV-72 包含層出土の石器 (2)
  - 図IV-73 包含層出土の石器 (3)
  - 図IV-74 包含層出土の石器 (4)
  - 図IV-75 包含層出土の石器 (5)
  - 図IV-76 包含層出土の石器 (6)
  - 図IV-77 包含層出土の石器 (7)
  - 図IV-78 包含層出土の石器 (8)
  - 図IV-79 包含層出土の石器 (9)
  - 図IV-80 包含層出土の石器 (10)
  - 図IV-81 包含層出土の石器 (11)
  - 図IV-82 包含層出土の石器 (12)
  - 図IV-83 包含層出土の石器 (13)
  - 図IV-84 包含層出土の石器 (14)
  - 図IV-85 包含層出土の石器 (15)
  - 図IV-86 包含層出土の石器 (16)
  - 図IV-87 包含層出土の石器 (17)
  - 図IV-88 包含層出土の石器 (18)
  - 図IV-89 包含層出土の石器 (19)
  - 図IV-90 包含層出土の石器 (20)
  - 図IV-91 包含層出土の石器 (21)
  - 図IV-92 包含層出土の石器・石製品 (22)
  - 図IV-93 包含層出土の石器・石製品 (23)
  - 図IV-94 包含層出土の土器分布図 (1)
  - 図IV-95 包含層出土の土器・土製品分布図 (2)・石器分布図 (1)
  - 図IV-96 包含層出土の石器分布図 (2)
  - 図IV-97 包含層出土の石器・石製品分布図 (3)
  - 図IV-98 包含層出土の石器分布図 (4)
- V 自然科学的分析
- 図V-1 H-15出土の骨針
  - 図V-2 フローテーション試料採取位置図
- VI 成果と課題
- 図VI-1 葛西編年と濁川左岸遺跡出土土器の対比
  - 図VI-2 縄文時代後期前葉土器編年図
  - 図VI-3 成果と課題に関連する濁川左岸遺跡出土の石器・石製品

## 図版目次

図版V-1 H-15出土の骨針

図版V-2 濁川左岸遺跡出土の炭化種子

### 図版1

- 1 平成13年度調査風景
- 2 平成14年度調査風景

### 図版2

- 1 H-6, 11南-北セクション
- 2 H-6, 11東-西セクション
- 3 H-11東-西セクション

### 図版3

- 1 H-6, 11完掘
- 2 H-7北西-南東セクション
- 3 H-7北東-南西セクション

### 図版4

- 1 H-7 HF-1と黒いしみ
- 2 H-7 HF-1セクション
- 3 H-7完掘

### 図版5

- 1 H-12南-北セクション
- 2 H-12東-西セクション
- 3 H-12 HP-2~4セクション
- 4 H-12完掘

### 図版6

- 1 H-15北東-南西セクション
- 2 H-15北西-南東セクション
- 3 H-15完掘

### 図版7

- 1 H-12, 16東-西セクション
- 2 H-12, 16南-北セクション
- 3 H-12, 16完掘

### 図版8

- 1 H-18確認
- 2 H-18東-西セクション
- 3 H-18南-北セクション

### 図版9

- 1 H-18 HF-1セクション
- 2 H-18立石1, 2セクション

3 H-20確認

4 H-20セクション

### 図版10

- 1 H-20 HP-1セクション
- 2 H-20 HF-1確認
- 3 H-20遺物出土状況
- 4 H-20上面遺物出土状況
- 5 H-21完掘

### 図版11

- 1 P-2確認
- 2 P-2セクション
- 3 P-9セクション
- 4 P-10セクション
- 5 P-10遺物出土状況
- 6 P-13セクション

### 図版12

- 1 P-13完掘
- 2 P-15確認
- 3 P-15セクション
- 4 P-15完掘
- 5 P-16セクション
- 6 P-16完掘

### 図版13

- 1 P-18セクション
- 2 P-19セクション
- 3 P-18, 19遺物出土状況
- 4 P-20セクション
- 5 P-20完掘
- 6 P-21セクション
- 7 P-22セクション

### 図版14

- 1 P-23セクション
- 2 P-23完掘
- 3 P-24確認
- 4 P-24セクション
- 5 P-24完掘
- 6 P-25セクション
- 7 P-25完掘

8 P-26完掘

図版15

1 P-27セクション

2 P-27完掘

3 P-28セクション

4 P-28遺物出土状況

5 P-29セクション

6 P-30セクション

7 P-30完掘

図版16

1 P-31セクション

2 P-31完掘

3 P-32セクション

4 P-32完掘

5 P-33セクション

6 P-33完掘

7 P-34セクション

8 P-34完掘

図版17

1 P-35セクション

2 P-35完掘

3 P-36セクション

4 P-36完掘

5 P-37セクション

6 P-37完掘

7 P-38セクション

8 P-38完掘

図版18

1 P-39セクション

2 P-39遺物出土状況

3 P-39完掘

4 P-40セクション

5 P-40遺物出土状況

6 P-40完掘

7 P-41セクション

8 P-41完掘

図版19

1 P-42完掘

2 P-43セクション

3 P-43完掘

4 P-44セクション

5 P-44完掘

6 P-45セクション

7 P-46セクション

8 P-46完掘

図版20

1 P-47セクション

2 P-47完掘

3 P-48セクション

4 P-48完掘

5 P-49セクション

6 P-49完掘

7 P-50セクション

8 P-50遺物出土状況

図版21

1 P-51セクション

2 P-51完掘

3 P-52セクション

4 P-52完掘

5 P-54セクション

6 P-55セクション

7 P-56セクション

8 P-56完掘

図版22

1 P-57, 58完掘

2 P-59セクション

3 P-63セクション

4 P-63遺物出土状況

5 P-64セクション

6 P-64完掘

図版23

1 P-66セクション

2 P-66完掘

3 P-71セクション

4 P-71遺物出土状況

5 P-72セクション

6 P-72遺物出土状況

7 P-73セクション

8 P-73完掘

図版24

- 1 P-74セクション
- 2 P-74遺物出土状況
- 3 P-75セクション
- 4 P-75完掘
- 5 P-76セクション
- 6 P-76完掘
- 7 P-83セクション
- 8 P-83完掘

図版25

- 1 P-87検出
- 2 P-87完掘
- 3 P-91セクション
- 4 P-91完掘
- 5 P-93セクション
- 6 P-93完掘
- 7 P-94セクション
- 8 P-94完掘

図版26

- 1 P-95セクション
- 2 P-95完掘
- 3 P-96セクション
- 4 P-96完掘
- 5 F-10確認
- 6 F-11確認
- 7 F-11セクション
- 8 F-19セクション

図版27

- 1 F-17, 18, 19確認
- 2 F-25確認
- 3 F-29セクション
- 4 F-28セクション
- 5 F-28遺物出土状況

図版28

- 1 F-28確認
- 2 F-28立石セクション
- 3 F-36セクション

図版29

- 1 F-36確認
- 2 F-37確認

図版30

- 1 SP-1 遺物出土状況
- 2 SP-2 遺物出土状況
- 3 SP-5, 6 セクション
- 4 SP-188, 189, 190セクション
- 5 SP群完掘

図版31

- 1 沢セクション
- 2 沢完掘
- 3 IV層遺物出土状況
- 4 IV層遺物出土状況

図版32

- 1 平成13年度A地区完掘
- 2 平成14年度A地区完掘

図版33

H-6 出土遺物 1~10, 12~14

図版34

H-6 出土遺物11, 16~28, 33

図版35

H-6 出土遺物15, 29~32, 34, 35

図版36

H-7 出土遺物 1~11

図版37

H-7 出土遺物12~17  
H-11出土遺物 1~6

図版38

H-12出土遺物 1~13

図版39

H-12出土遺物14~19  
H-15出土遺物 1, 2

図版40

H-15出土遺物 3~7

図版41

H-15出土遺物 8~11

図版42

H-15出土遺物12~17, 21

図版43

H-15出土遺物18~20, 22, 23

図版44

H-15出土遺物24~27, 31~33

- 图版45  
H-15出土遺物28~30, 34~47
- 图版46  
H-15出土遺物48~59
- 图版47  
H-15出土遺物60~71
- 图版48  
H-15出土遺物72~79
- 图版49  
H-15出土遺物80~88
- 图版50  
H-16出土遺物 1~12
- 图版51  
H-16出土遺物13~17  
H-18出土遺物 1~7
- 图版52  
H-18出土遺物 8, 9  
H-20出土遺物 1~3
- 图版53  
H-20出土遺物 4~8
- 图版54  
H-20出土遺物 9~13
- 图版55  
H-20出土遺物14~20
- 图版56  
H-20出土遺物21~30
- 图版57  
H-20出土遺物31, 32  
P-2 出土遺物 1~4
- 图版58  
P-2 出土遺物 5~8  
P-9 出土遺物 1~4
- 图版59  
P-9 出土遺物 5, 6  
P-10出土遺物 1  
P-13出土遺物 1~5  
P-15出土遺物 1~3  
P-20出土遺物 1~3
- 图版60  
P-20出土遺物 4, 5
- P-21出土遺物 1  
P-23出土遺物 1, 2  
P-28出土遺物 1~4
- 图版61  
P-28出土遺物 5~11  
P-31出土遺物 1, 2
- 图版62  
P-30出土遺物 1  
P-33出土遺物 1  
P-34出土遺物 1~3  
P-38出土遺物 1, 2
- 图版63  
P-39出土遺物 1~6  
P-40出土遺物 1  
P-43出土遺物 1, 2
- 图版64  
P-43出土遺物 3~5  
P-44出土遺物 1, 2  
P-48出土遺物 1, 2  
P-50出土遺物 1~3
- 图版65  
P-51出土遺物 1  
P-55出土遺物 1  
P-56出土遺物 1, 2, 4, 6
- 图版66  
P-56出土遺物 3, 5, 7~21
- 图版67  
P-56出土遺物22, 23  
P-59出土遺物 1  
P-63出土遺物 1~3
- 图版68  
P-64出土遺物 1  
P-71出土遺物 1~4  
P-73出土遺物 1  
P-74出土遺物 1, 2  
P-75出土遺物 1, 2
- 图版69  
P-87出土遺物 1~4  
P-95出土遺物 1  
F-10出土遺物 1

F-11出土遺物 1  
図版70  
F-11出土遺物 2, 3  
F-16出土遺物 1  
F-19出土遺物 1~5  
図版71  
F-25出土遺物 1, 2  
F-28出土遺物 1~5  
図版72  
F-28出土遺物 6  
F-29出土遺物 1~5  
F-32出土遺物 1  
F-36出土遺物10, 11  
図版73  
F-36出土遺物 1~5  
図版74  
F-36出土遺物 6~9  
F-37出土遺物 1, 2  
図版75  
S P 出土遺物 1~12, 14, 15, 17, 18  
図版76  
S P 出土遺物13, 16, 19~26  
図版77  
S P 出土遺物27, 28  
包含層出土土器Ⅲ群 1~6  
図版78  
包含層出土土器Ⅱ群 1~14  
図版79  
包含層出土土器Ⅱ群15~19, Ⅲ群15~21  
図版80  
包含層出土土器Ⅲ群 7~12  
図版81  
包含層出土土器Ⅲ群13, 14, Ⅳ群 1~3  
図版82  
包含層出土土器Ⅲ群22~36, 39~41  
図版83  
包含層出土土器Ⅲ群37, 38, 42~51, 53  
図版84  
包含層出土土器Ⅲ群52, 54~63, 65, 66

図版85  
包含層出土土器Ⅲ群64, 67~69  
図版86  
包含層出土土器Ⅲ群70~77, 79~85  
図版87  
包含層出土土器Ⅲ群86~91, 93, 96, 97  
図版88  
包含層出土土器Ⅲ群92, 94, 95, 98~109  
図版89  
包含層出土土器Ⅲ群78, 110~115  
図版90  
包含層出土土器Ⅳ群 4~9  
図版91  
包含層出土土器Ⅳ群10~13  
図版92  
包含層出土土器Ⅳ群14~19  
図版93  
包含層出土土器Ⅳ群20~25  
図版94  
包含層出土土器Ⅳ群26~31  
図版95  
包含層出土土器Ⅳ群32~37  
図版96  
包含層出土土器Ⅳ群38~42  
図版97  
包含層出土土器Ⅳ群43~48  
図版98  
包含層出土土器Ⅳ群49~54  
図版99  
包含層出土土器Ⅳ群55~60  
図版100  
包含層出土土器Ⅳ群61~65  
図版101  
包含層出土土器Ⅳ群66~71  
図版102  
包含層出土土器Ⅳ群72~77  
図版103  
包含層出土土器Ⅳ群78~83  
図版104  
包含層出土土器Ⅳ群84~89

- 图版105  
包含層出土土器IV群90~95
- 图版106  
包含層出土土器IV群96~101
- 图版107  
包含層出土土器IV群102~107
- 图版108  
包含層出土土器IV群108~111, 222
- 图版109  
包含層出土土器IV群112~117b, 118
- 图版110  
包含層出土土器IV群117c, 119~125c
- 图版111  
包含層出土土器IV群125d~133
- 图版112  
包含層出土土器IV群134~137, 139
- 图版113  
包含層出土土器IV群138, 140~144a, c
- 图版114  
包含層出土土器IV群144b, 145~150
- 图版115  
包含層出土土器IV群151~154, 156~158
- 图版116  
包含層出土土器IV群155, 159~161
- 图版117  
包含層出土土器IV群162~169
- 图版118  
包含層出土土器IV群170~185
- 图版119  
包含層出土土器IV群186~210
- 图版120  
包含層出土土器IV群211~217a
- 图版121  
包含層出土土器IV群217b~221, 223~225
- 图版122  
包含層出土土器IV群226~228
- 图版123  
包含層出土土器IV群229~235, 237
- 图版124  
包含層出土土器IV群236, 238~244
- 图版125  
包含層出土土器IV群245~251
- 图版126  
包含層出土土器IV群252~267
- 图版127  
包含層出土土器IV群268~271
- 图版128  
包含層出土土器IV群272~274
- 图版129  
包含層出土土器IV群275~279, 281, 282
- 图版130  
包含層出土土器280, 283~286
- 图版131  
包含層出土土器IV群287~293, 295
- 图版132  
包含層出土土器  
IV群294, 296~298, 300, 302
- 图版133  
包含層出土土器IV群301, 343, 367, 439
- 图版134  
包含層出土土器IV群299, 303~308
- 图版135  
包含層出土土器IV群309~314
- 图版136  
包含層出土土器IV群315, 317~320, 322
- 图版137  
包含層出土土器IV群316, 321, 323~326
- 图版138  
包含層出土土器IV群327~334
- 图版139  
包含層出土土器IV群335~342, 344
- 图版140  
包含層出土土器IV群345~354, 356
- 图版141  
包含層出土土器IV群355, 357~364
- 图版142  
包含層出土土器IV群365, 366, 368~379
- 图版143  
包含層出土土器IV群380~393



- 図版144  
包含層出土土器Ⅳ群394～401
- 図版145  
包含層出土土器Ⅳ群402, 404, 406
- 図版146  
包含層出土土器Ⅳ群403, 407～410
- 図版147  
包含層出土土器Ⅳ群405, 411, 412
- 図版148  
包含層出土土器Ⅳ群413～417, 420～422
- 図版149  
包含層出土土器Ⅳ群418, 419, 423, 424b
- 図版150  
包含層出土土器Ⅳ群424a, 425～432a
- 図版151  
包含層出土土器Ⅳ群  
432b, 433a, b, 434, 435
- 図版152  
包含層出土土器Ⅳ群433c, d, 436～438, 441
- 図版153  
包含層出土土器Ⅳ群442～445, 447
- 図版154  
包含層出土土器Ⅳ群440, 446,  
Ⅵ群 1, 5, 6, 土製品 2
- 図版155  
包含層出土土器Ⅵ群 2～4, 7, 8,  
土製品 1, 3～6, 12～18
- 図版156  
包含層出土土製品 7～11, 石製品 1
- 図版157  
包含層出土土製品19～42,  
土製品 1 正面, 側面
- 図版158  
包含層出土石器 1～29
- 図版159  
包含層出土石器30～43
- 図版160  
包含層出土石器44～53
- 図版161  
包含層出土石器54～63
- 図版162  
包含層出土石器64～76
- 図版163  
包含層出土石器77～85
- 図版164  
包含層出土石器86～91
- 図版165  
包含層出土石器92～97
- 図版166  
包含層出土石器98～107
- 図版167  
包含層出土石器108～111
- 図版168  
包含層出土石器112～129
- 図版169  
包含層出土石器130～141
- 図版170  
包含層出土石器142～154
- 図版171  
包含層出土石器155～169
- 図版172  
包含層出土石器170～191
- 図版173  
包含層出土石器192～203
- 図版174  
包含層出土石器204, 205  
包含層出土石製品 1～12

# I 調査の概要

## 1 調査要項

遺跡名：濁川左岸遺跡（北海道教育委員会登録番号 B-15-22）  
事業名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査  
委託者：日本道路公団北海道支社  
所在地：茅部郡森町字石倉町401ほか  
調査面積：4,930㎡（平成13年度：1,300㎡、平成14年度：3,630㎡）  
発掘期間：平成13年7月24日～10月26日  
平成14年5月7日～8月30日  
整理期間：平成14年10月28日～平成15年3月31日（B地区 1808㎡）  
平成15年4月21日～平成16年3月31日（A地区 3122㎡）

## 2 調査体制

財団法人北海道埋蔵文化財センター

（平成13年度）

理事長 大澤 満  
専務理事 宮崎 勝  
常務理事 木村 尚俊（平成13年7月17日まで）  
総務部長 柳瀬 茂樹  
第2調査部長 大沼 忠春（第1調査部長兼務 平成13年7月18日付）  
第4調査課課長 熊谷 仁志（発掘担当者）  
主任 影浦 覚（発掘担当者 A地区の調査）  
主任 中山 昭大（9月中旬からA地区の調査）  
主任 袖岡 淳子（発掘担当者 B地区の調査およびA地区包含層遺物の一次整理）  
文化財保護主事 大泰司 統（10月からA地区の調査）

（平成14年度）

理事長 大澤 満（平成14年6月30日まで）  
森重 楯一（平成14年7月1日から）  
専務理事 宮崎 勝  
常務理事 畑 宏明  
総務部長 下村 一久  
第2調査部長 西田 茂  
第3調査課課長 熊谷 仁志（発掘担当者）  
主任 村田 大（発掘担当者）  
主任 影浦 覚（発掘担当者）  
文化財保護主事 大泰司 統（発掘担当者）

(平成15年度) (整理作業のみ)

理 事 長 森重 楯一  
専 務 理 事 宮崎 勝  
常 務 理 事 畑 宏明  
総 務 部 長 下村 一久  
第 2 調 査 部 長 西田 茂  
第 3 調 査 課 課 長 熊谷 仁志 (発掘担当者)  
主 任 大泰司 統 (発掘担当者)

### 3 調査に至る経緯

北海道縦貫自動車道路は(函館～名寄)は、函館を起点として苫小牧市・札幌市・旭川市を經由し、名寄に至る総延長488kmの路線である。長万部町国縫IC～士別市士別剣淵IC間の375.9kmはすでに供用され、七飯～長万部間について平成5年11月から建設工事が進められている。

平成2年4月に、七飯～長万部間について日本道路公団札幌建設局(現：日本道路公団北海道支社)から北海道教育委員会に埋蔵文化財についての事前協議がなされた。協議を受けた北海道教育委員会は、平成2年4月に所在確認調査を実施し、平成5年から北側の長万部町から順次試掘調査を開始した。

濁川左岸遺跡については平成13年4月24・25日に試掘調査が実施された。その結果、用地内南側で縄文時代後期前葉の多量の遺物と共に遺構と見られる落ち込みが確認され、用地内の包蔵地面積8,600㎡(工事区域内4,500㎡)が発掘調査必要範囲とされた(図I-1・2)。

濁川左岸遺跡の調査は、平成13年度当初の調査計画にはなかった。当初計画では森町本内川右岸遺跡を調査する予定であったが、同遺跡の工事工程の変更によって、急遽、投入予定人工の見合い分で濁川左岸遺跡を実施することとなった。

平成13年度の調査は、調査範囲内の工事工程の都合から調査区両端の2地点計1,300㎡を調査した。平成14年度は3,630㎡調査を実施し、最終的には4,930㎡を調査し、濁川左岸遺跡の調査を終了した。

多くの遺構が検出され、遺物も約20万点にも及ぶことから、整理作業は平成14・15年度の2ヵ年に行うことになった。

平成14年度には北側部分(B地区)の整理を行い、報告書を刊行している。平成15年度は南側部分(A地区)の整理作業を行い、平成16年度に刊行することとなった。(熊谷仁志)

### 4 調査概要

#### (1) 発掘区の設定

発掘区の設定に当たっては日本道路公団北海道支社の「北海道縦貫自動車道本茅部工事平面図(2)1,000分の1図」を使用した。工事予定上り線の中央線上の中心杭であるSTA. 444とSTA. 445を通る線を基軸のMラインとし、STA. 444を基準に4m方眼を設定した(図I-3)。Mラインと並行に南西へ向かってL、K、J…とした。更に、STA. 444を通りそれに直行する線を10ラインとし、北西へ向かって11、12、13…とした。この方眼は南端交点をアルファベットとアラビア数字の組み合わせで呼称する(例：STA. 444はM-10)。更に必要に応じて2m方眼に4分割または1m方眼に16分割し小発掘区とした。2m方眼の小発掘区は杭のある側から反時計回りにa、b、c、dを付し(例：M-10-a)、1m方眼の小発掘区は小発掘区のアルファベットから反時計回りに1、2、3、

4とした(例:M-10-a-1)。但し、事実記載の文中においては「区」の名称を用いて、M10区、M10a区とハイフンを略して記述した。ラインがまたがる時には、M~O-10~11区など、ハイフンを用いた。

この方眼の日本測地系による平面直角座標は第X I系で以下のとおり。

STA. 444 (調査区杭番号M-10)  $X = -206064.5983$   $Y = 19511.8843$

STA. 445  $X = -205999.8906$   $Y = 19435.6588$

また、測量法の改正に伴い、平成14年4月1日に現行の平面直角座標系(昭和43年建設省告示第3059号)は廃止され、新たに世界測地系に基づく平面直角座標系(平成14年国土交通省告示第9号)が施行された為、世界測地系による平面直角座標を併記しておく。なお、座標の変換には国土地理院のホームページで公開されている座標変換ソフト「TKY 2 JGD」を使用した。

この方眼の世界測地系による平面直角座標は第X I系で以下のとおり。

STA. 444 (調査区杭番号M-10)  $X = -205808.1900$   $Y = 19218.7326$

STA. 445  $X = -205743.4835$   $Y = 19142.5088$

水準測量は北海道茅部郡森町字石倉町34番地先に所在する、1等水準点第5971号を用いて、各測量に使用した。

1等水準点第5971号  $H = 9.3115\text{m}$

以上のように、調査区の設定は道路工事の工事平面図を基にした。この原図は函館側を起点にしたものであり、森町から八雲町、長万部に至るまで噴火湾に沿って走る道路の形状に準じて作図されている。その結果、絶えず山側が図の上方となっている。このため工事用図面に準じて作成した大縮尺の図面は、北方向が上を向いているとは限らない。北方向についてはそのつど方位記号で示した。

## (2) 調査の方法

調査範囲は濁川によって形成された森町側の高い段丘と、無名沢によって開析された八雲町側の低い段丘からなる部分である。両段丘の間に沢跡が確認され、これを境に森町側の高位段丘を「A地区」、八雲町側の低位段丘を「B地区」と呼称し調査を行った。発掘区では30ラインより南東側が「A地区」北西側が「B地区」となる(図I-7)。

試掘調査の結果から、多量の遺物の出土と遺構の検出が予想されたため、調査予定範囲全てを通常発掘範囲とした。調査に先行し重機により表土、火山灰を除去した。一部、抜根による攪乱が見られたが、遺物包含層は良好に残存していることがわかった。

調査は主に、平成13年度のA地区を影浦と中山が、B地区を袖岡が、平成14年度のA地区を大泰司が、B地区を村田が担当した。

### 包含層調査

Ⅲ~Ⅴ層の遺物包含層は、調査区ごとに遺物の多寡、土層の変化を見極めながら、必要に応じてジョレン、移植ごて、竹ベラなどを用いた人力による手掘り作業により掘り下げた。

### 遺構調査

包含層調査時に土層の変化により確認された遺構については、その平面長軸と短軸に土層観察用のベルトを残して掘り下げた。

## 遺物の取上げ

包含層出土の遺物は、発掘区および層単位での取上げとした。出土状況に応じて、小発掘区による取り上げ、写真や出土状況図の作成など詳細な記録化に努めた。遺構出土の遺物は、遺構上部の自然堆積層(Ⅲ層・Ⅳ層に相当)に包含されていたものについては、遺構および層位を記録して取上げた。覆土、床面または塙底面出土の遺物は、図面、台帳等に出土位置を記録し、遺構単位で連続番号を付して取上げた。ただし、調査の都合により、覆土から出土した遺物の一部は、層位による一括取上げを行っている。

## (3) 遺跡の土層

基本層序は平成13年度の調査により決定され、平成14年度もこれを踏襲している。斜面部や沢地形で、層厚に差はあるものの堆積状況に相違はない。Ⅲ層～Ⅴ層が遺物包含層である。以下各層について記す(図I-4～6 図版31)。

I層：表土 調査前の現況は、スギやマツなどが植林された山林である。

II層：駒ヶ岳火山灰d (Ko-d)層 1640(寛永17)年に降下した平均径3～5mmの軽石堆積層である。灰白色を呈する。層厚は約80cm。下層になるに従い、パミスの径が大きくなる。

III層：黒褐色土層 平坦部、斜面部ともに層厚約5cm。黒色腐植土と風成堆積した白頭山苦小牧火山灰の混交層である。Ⅲ層とⅣ層の間において、白頭山苦小牧火山灰(B-Tm)のレンズ状の堆積がところどころで認められたが、沢地形跡などを除き、総じて層界は不明瞭であった。

IV層：黒色土層 主な遺物包含層である。層厚は約40～50cmであるが、平成13年度調査区のA地区は濁川に向かって緩やかな斜面で黒色土の流れ込みが確認され、場所によっては約80cmの堆積を示しているところも認められた。特に沢地形跡などのIV層下部においては、IV層とⅤ層が混合した流れ込み土の堆積が顕著である。

V層：黄褐色土層 漸移層である。駒ヶ岳火山灰g (Ko-g)層由来の橙褐色砂質土を含む。

VI層：黄褐色砂礫層 調査区中央の沢を挟みA地区は黄褐色の砂礫層である。人頭大の円礫を多数含んだ水成の二次堆積層である。昨年度報告したB地区では約12,000年前の濁川カルデラの噴火による火砕流堆積物が見られたが、A地区においては火砕流のルートから外れていたため、より古い時代の二次堆積層がⅤ層の下に堆積していた。このことから濁川火砕流発生以前における濁川左岸遺跡の旧地形としてはA地区とB地区の間で、現在以上に標高差のあったことが予想されている。

その他、本文中で脆い頁岩を主体とする基盤層をⅦ層と表記したところもある。

## (4) 整理の方法

現地では野外作業と並行して遺物の水洗、分類、遺物台帳作成、注記作業を行った。注記は小片や微細なものを除いた遺物に、遺跡名略号(NS)・遺構名または発掘区・遺物番号・層位名を記入した。また、竪穴住居の炉と焼土付近の土壌のフローテーション作業を行っている。冬期の整理作業で、土器の接合・復元、石器・礫の接合、土器、石器等の実測・製図、計測、集計、写真撮影、記録類の整理を行った。

(村田 大・影浦 覚・大泰司 統)

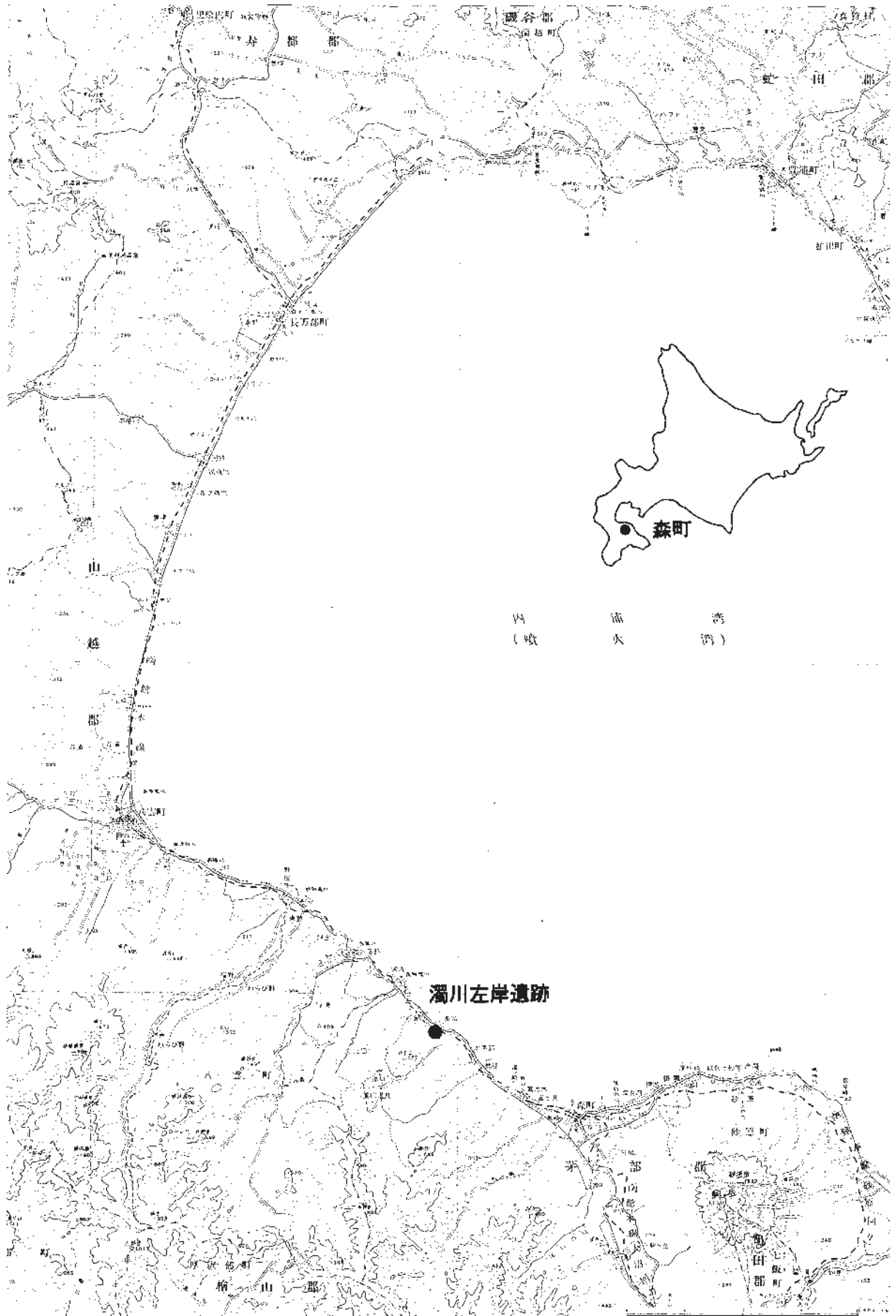


図 I - 1 遺跡の位置 (この図は国土地理院発行20万分の1地形図、「室蘭」を複製、加筆したものである)

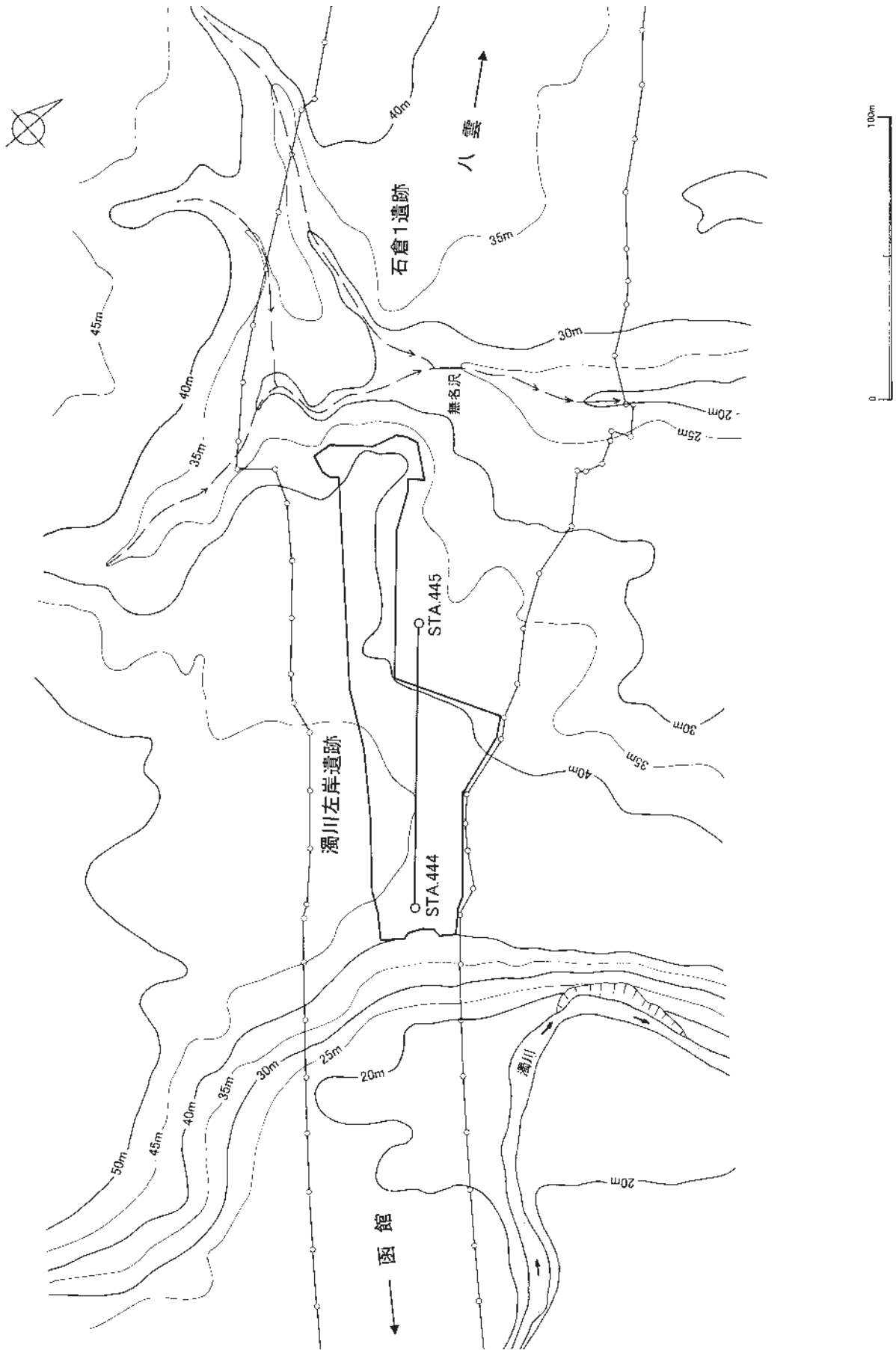


図 I - 2 遺跡周辺の地形と調査区

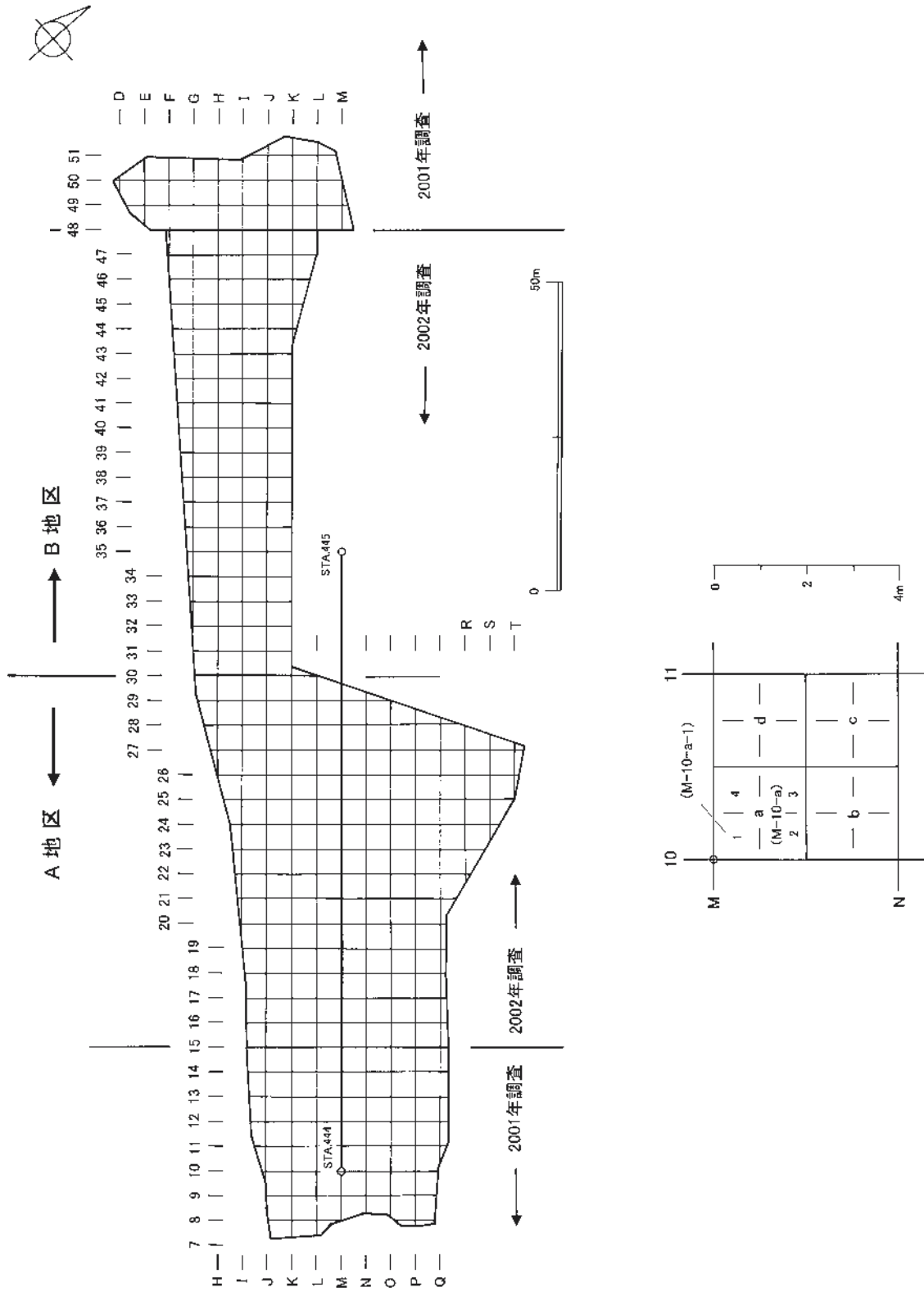


図 I - 3 発掘区設定図



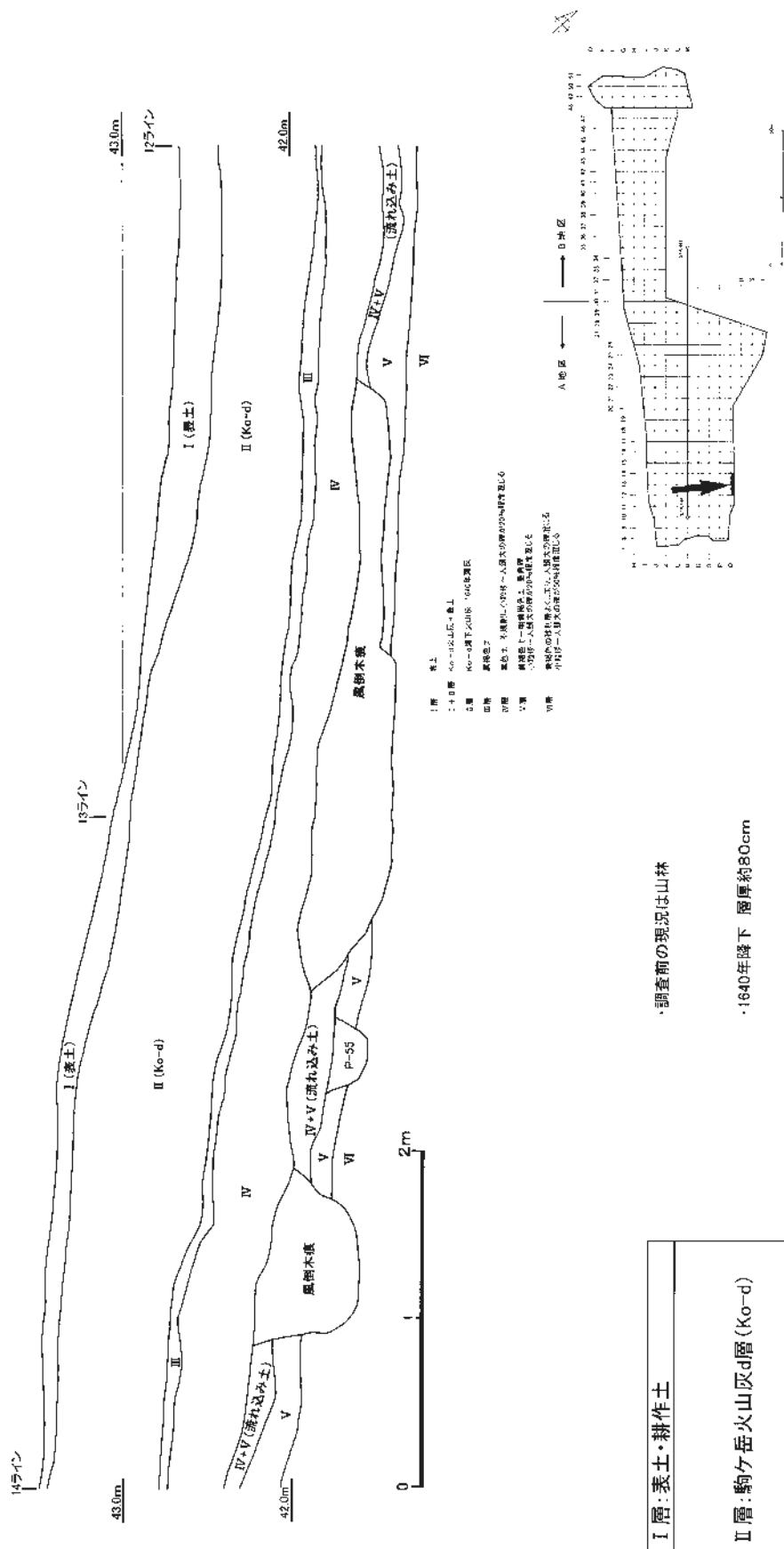


図 I - 4 基本土層と土層断面 (1)

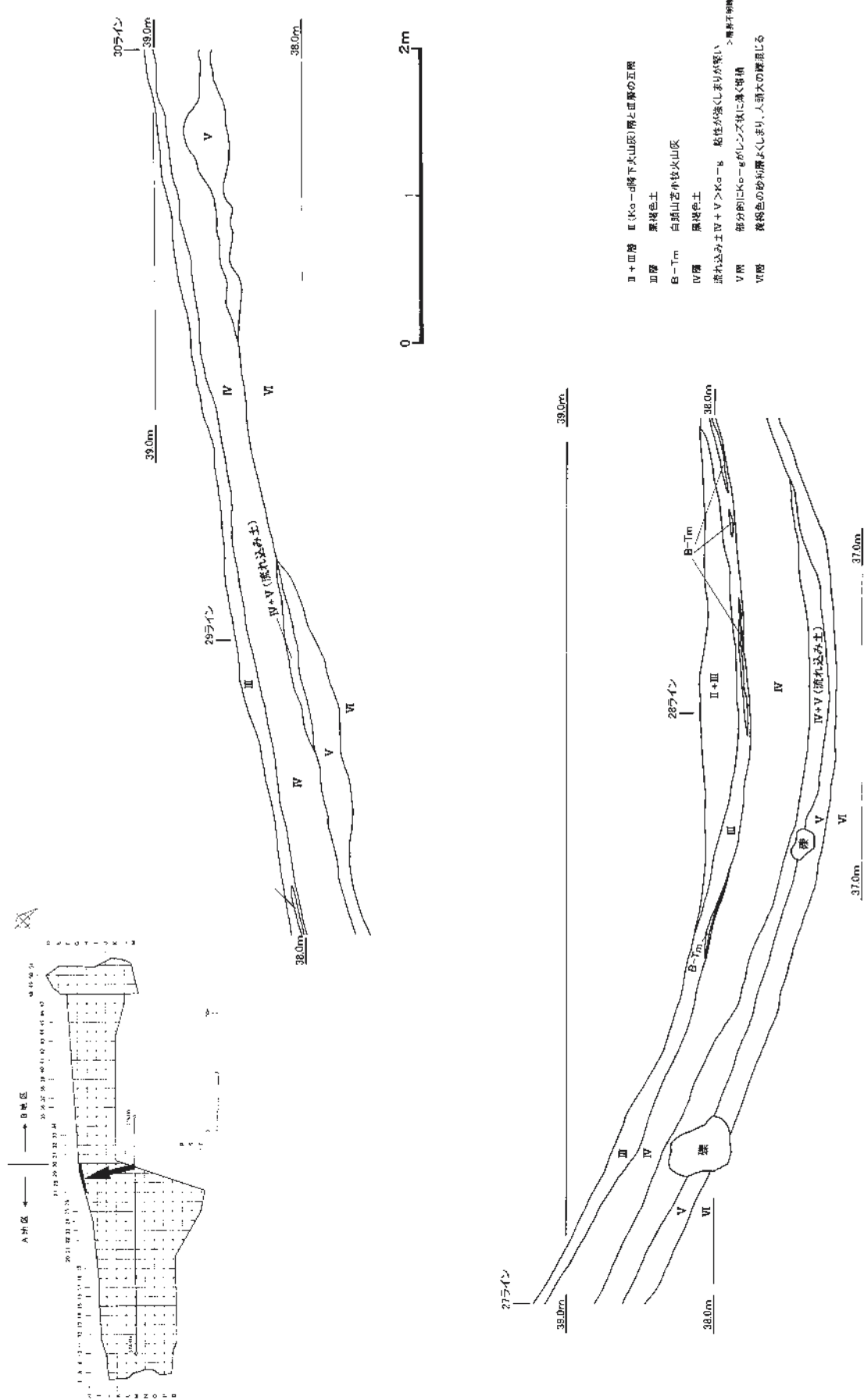


図 I-5 基本土層と土層断面 (2)

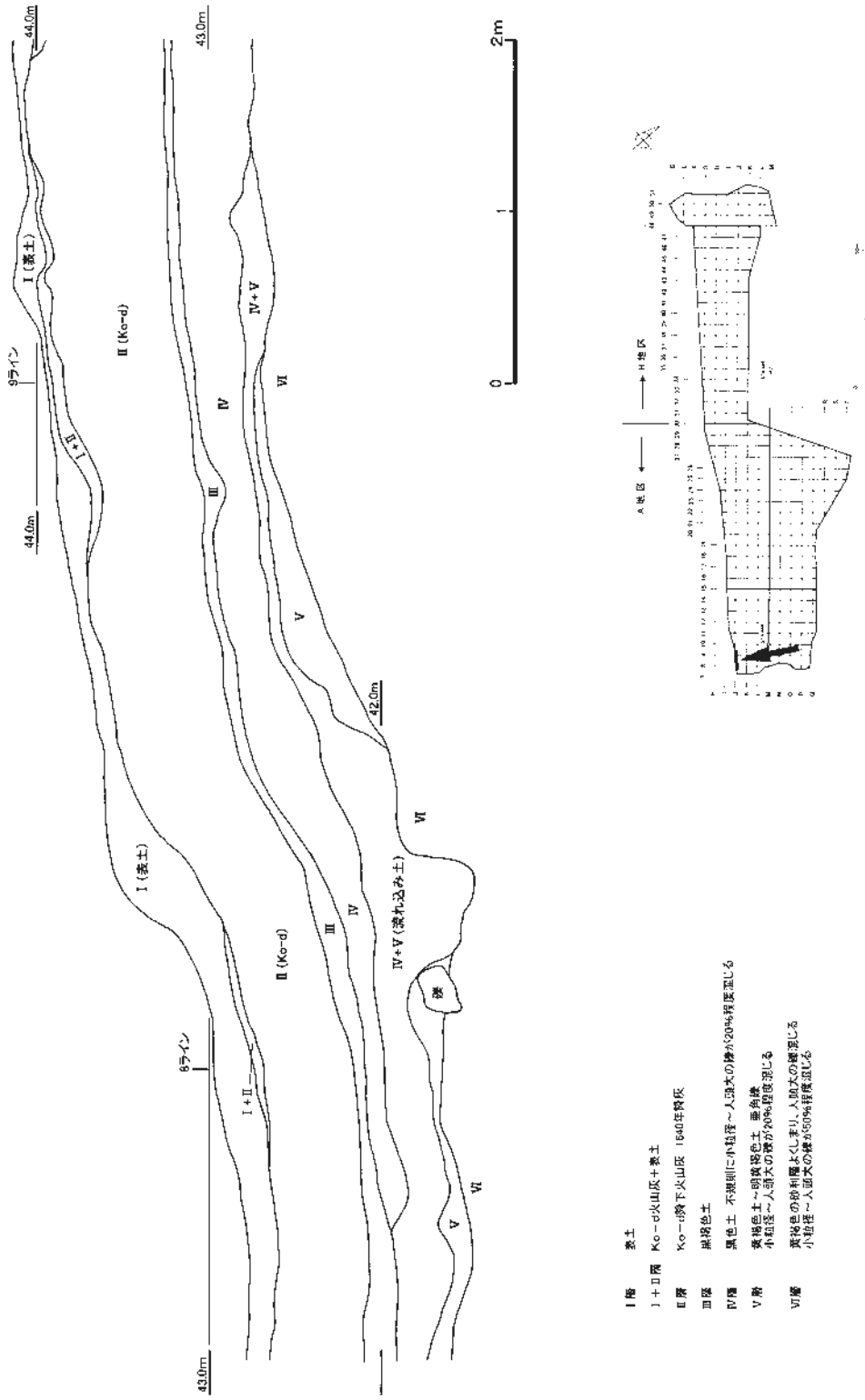


図 I - 6 基本土層と土層断面 (3)

## (5) 遺物の分類

### 土器等

土器は便宜的に縄文時代早期をⅠ群、前期をⅡ群、中期をⅢ群、後期をⅣ群、晩期をⅤ群、続縄文時代をⅥ群、擦文時代をⅦ群と分類した。この各群にアルファベットの小文字を組み合わせてより細かい時期区分を示した。前半をA類、後半をB類、あるいは前葉をa類、中葉をb類、後葉をc類としている。また掲載表において紙面の都合上「群」「類」を省略する場合がある。例えば「Ⅳ群a類」ならば「Ⅳa」と略して表記している場合がある。

今回報告する調査区の資料には、Ⅱ群、Ⅲ群、Ⅳ群、Ⅵ群の土器がある。

#### Ⅰ群 縄文時代早期に属する土器群（今回は出土していない）

a類 貝殻文が施されるもの

b類 縄文、撚糸文、絡条体圧痕文、組紐圧痕文、貼付文等の施されるもの

#### Ⅱ群 縄文時代前期に属する土器群

a類 縄文の施された丸底、尖底を特色とするもの。（今回は出土していない）

b類 円筒土器下層式土器に相当するもの。

#### Ⅲ群 縄文時代中期に属する土器群

a類 円筒土器上層式土器に相当、もしくはその系譜を引くと考えられるサイベ沢Ⅶ式、見晴町式に相当ないし併行するもの。Ⅲ群b1類の胴部破片も一部含む。

b類 Ⅲ群a類を中期の前半として、後半に属するもの

b1類 榎林式のうち見晴町と並行ないしは直後のもの

b2類 榎林式のうち大安在B式に近いものと、大安在B式に相当ないしは並行するもの。

b3類 ノダップⅡ式、煉瓦台式に相当ないしは並行するもの。

#### Ⅳ群 縄文時代後期に属する土器群

a類 天祐寺式、涌元式、鳥崎式、大津式、白坂3式、十腰内Ⅰ式に相当ないしは並行するもの。

b類 ウサクマイC式、手稲式、鯨潤式、加曾利B式、に相当ないしは並行するもの。

c類 堂林式、三ツ谷式、湯の里3式に相当ないしは並行するもの。（今回は出土していない）

#### Ⅴ群 縄文時代晩期に属する土器群（今回はいずれも出土していない）

a類 大洞B式、大洞BC式に相当ないしは並行するもの。

b類 大洞C<sub>1</sub>式、大洞C<sub>2</sub>式に相当ないしは並行するもの。

c類 大洞A式、大洞A'式に相当ないしは並行するもの。

#### Ⅵ群 続縄文時代に属する土器群

（今回報告の範囲からは恵山式土器・後北B式・後北C1式が出土した）

#### Ⅶ群 擦文時代に属する土器群（今回は出土していない）

土製品 土器を除いた土製の加工品。土器破片を利用した再生土製品についてはまず素材となった土器をそれぞれ、土器分類にあてはめたのちに、抽出したため、別集計とした。（大泰司）

### 石器等

石器は出土した包含層出土の石器を純粹にA地区について分類した。分類・細分に関しては、これまで刊行してきた報告書と比較検討するために、群名とその序列、類名は従来のセンター分類におおよそ準じた。しかし、一部の群名とその名称と細分については遺跡と地区の状況を反映させたため多

少の変更をした。そして、台石・石皿の群を設けたため群は増えている。付記すると、A地区は縄文時代中期と後期を主体とする遺跡であり、特に中期の遺物量がB地区より多い。またB地区はA地区より縄文時代前期の遺物量が比率的には多い。従って、同一遺跡でありながら、前回報告となるB地区と今回報告のA地区では出土する石器の組成に差があるものである。また文章中において「明瞭な調整」の目安としては石器幅の8分の1以上の刃幅を、押圧剥離が規則的に連続して形成するものとし、「全面調整」とは、石器の正中線に至るまでの深い調整を両側縁から施す状況を指すものとした。

#### A類 石鏃

1. 凹基有茎のもの
2. 平基有茎のもの
3. 凸基有茎のもの（ただし平基としたのものには凸基気味のものがあり、また尖基のもので基部の可能性を指摘できる部分を持つものがある。また、特に幅の狭いものと幅の広いものの2形態に分かれる）
4. 尖基鏃（この範疇に入りうるが、凸基有茎の縁辺が潰れた可能性のものが出土）
5. 凹基無茎
6. 平基無茎
7. 折損品・未成品

尚、凹基有茎のものには両面全面に調整がおよび、特殊なアグ（アグの先に微妙な段を持つ）のものがある。B地区においては平基ないし凸基有茎のものにもこのアグを持つものがあつた。またB地区において「茎部が小さく舌状に張り出すもの」とした凸基有茎のものは今回出土しなかつた。

#### B類 石槍又はナイフ

1. 凸基有茎のもの（B地区のように茎部が微妙な舌状に作られるものはなかつた）
2. 尖基のもの

#### <Ⅱ群>石錐

##### A類 石錐

1. 刺突部分を持つもの（剥片の一端に刺突部を長く作り出すもの）
2. 棒状のもの

#### <Ⅲ群>つまみ付きナイフ・スクレイパー

##### A類 つまみ付きナイフ

1. 両面調整のもの（「両面全面調整で鋭利な先端部を持つ」ものがある）
2. 縦長剥片を主とする縦長の素材を用いるもの 明瞭な調整を持つもの  
B地区と比べて刃部整形の位置と調整方法が多岐にわたっていた
3. 横長剥片を用いているもの
4. 極浅い調整が縁辺に施されているもの（簡単なつくりのもの・未成品の可能性もあるもの）
5. 横長の形状のもの 石製品的な性質が窺えるものもある（B地区においては確認出来なかつた）
6. 分類不能（つまみ部分のみの残存等）

##### B類 スクレイパー

B地区に比べて調整方法が多岐にわたっていたため、形状と調整から傾向は掴み難かつた。まず調整の度合いから、刃部が明瞭なものと不明瞭なものに分けた。（目安として石器幅の8分

の1以上の刃幅を、剥離が規則的に連続して形成するもの)と極浅形の調整を施す簡単なものに分けた。そのうち明瞭な刃部を持つものとして

「石筥(いわゆる両面全面調整の石筥)」「トランシェを思わせるもの(両側縁に整形痕・調整痕があるもの)」「明瞭な調整が片面のほぼ全周をめぐるもの」「急角度の刃部を持つもの 端部が搔器的なものも含む」「搔器(明瞭に急角度な刃部を作り出してはいないものの、搔器的な機能を想定できる刃部を持つものも含む)」「鋸歯状の刃部を持つもの」「礫器的なもの(礫の端部を両面ないしは片面から打ち欠き、鋭利な端部を持つもの)」

B地区において細分の要素のひとつとして抽出した、正面観が外側に張り出す曲線的な刃部で、明瞭な調整を持つものは今回、細分の要素として特に抽出するほど量がなかった。

<IV群>石斧類(刃部形態の分類は佐原真(1977)に倣った。B地区より形態が多様である。)

A類 石斧(成形・調整方法から分類)

1. 打ち欠き調整後全面研磨したもの  
(刃部形態がわかるものとして、弱凸強凸円刃、弱凸強凸偏刃、両凸偏刃、両凸平刃のものがある)
2. 敲打調整後全面研磨したもの(加えて擦り切り痕あるものを含む)  
(刃部形態がわかるものとして、弱凸強凸円刃・同平刃・同偏刃、弱凸強凸平刃のものがある)
3. 全面を研磨したもの(素材の形状を生かしたものを含む)  
(刃部形態がわかるものとして、弱凸強凸円刃・同平刃・同偏刃、両凸円刃、弱凸強凸偏刃のものがある)
4. 石斧未成品

B類 石のみ

石斧のうち細身で小型なもの(未成品・石製品的なものを含む)

(刃部形態がわかるものとして弱凸強凸平刃、弱凸強凸円刃・同平刃)

<V群>たたき石

A類 たたき石

1. 凹み石とされるもの
2. 顕著な打ち欠きを伴う機能部を持つもの(「礫器」とでもいうべき石器で「両面調整」「片面調整」のものがある)
3. 亜球礫のほぼ全面に敲打が巡るもの
4. 割礫の割面を用いるもの
5. 両端付近に打ち欠きないしは敲打があるので、偏平打製石器未成品の可能性のあるもの
6. 北海道式石冠未成品の可能性のあるもの
7. 礫の一部に敲打痕を持つもの

「礫の側縁を使用するもの」「礫の端部を使用するもの」「縁辺と端部を使用するもの」「両端と側縁を用いるもの」「縁辺と平らな面を用いるもの」「一端と平らな面を用いるもの」「礫の平らな面を用いるもの」がある。

そのうちでも特に「礫の側縁を使用するもの」について偏平打製石器の項目で刃部様と称した機能部を持つものが特徴的である。打ち欠きによる明瞭な調整を持ち、角柱状の礫ないしは長軸に長さがある楕円礫の側縁に打ち欠きによる調整痕を持つ。この形のは縄文時代後期前葉の遺構から出土する(H-20-30・32、P-63-3、P-71-4、P-73-1、F-19-5)。

<VI群>すり石

A類 すり石 確実に擦痕が観察できるもので「礫の平らな背腹を微妙に用いているもの」「表面を敲打・裏面に擦りのもの」「礫の平らな面を用いるもの」「端部に機能部があるもの」「側縁を使用するもの」「球礫や歪球礫の一端に擦痕を持つもの」がある。

B類 北海道式石冠

1. 全面に敲打で調整する、あるいはその可能性が高いもの
2. 短軸で、半割した楕円礫に敲打によって持ち手と思われる溝を作る、あるいはその可能性が高いもの（頂部にも調整が及ぶもの、上面観の楕円形に対して長軸に沿って溝が走るもの、ミニチュアともいべき小型のもの、偏平打製石器に類する形状のものがある）
3. 未成品の可能性が高いもの

C類 偏平打製石器（機能部に敲打痕を持つものがほとんどだが、従来の分類を踏襲し、すり石に分類。同一遺物について、3つの観点「石器正面観の形状・石器正面観と底面観から見た機能部の形状」から分類・検討をした）

石器の正面観の形状から

「半円形」「楕円形」「礫素材の形状を留めるもの」「方形のもの」「素材に打ち欠き調整を施したのみで未成品の可能性が高いもの」に分かれる。

石器の底面観（機能部・機能面の形状）から

「機能面が底面観について明瞭な面を持つもの」「機能面があるものの明瞭とは言い難いもの」「面部分を持たずいわば刃部様の機能部を有するもの（その中で石器の厚さが3.4cm以上の肉厚で重量感のあるもの（1000g以上を目安とする）がある）」

石器の正面観から見た機能部の形状から

「直線的なもの」「曲線的に張り出すもの」「使用の頻度が高かったものかノッチ状に凹むもの」「(図上の) 頂部・底部に機能部を有するもの（「頂・底部とも直線的なもの」「頂・底部のうち片方が曲線的でもう片方が直線的なもの」「頂・底部の両方に直線的な機能面を有するもの」に細分）

<VII群>砥石・石鋸

A類 砥石：砥面と想定し得る機能部が平滑ないしは凹面を形作るものが出土した。

B類 石鋸：扁平な板状の礫の側縁に擦り切りの道具として用いたと考えられる擦痕があるもの。B地区では出土していないが、石鋸の素材としてよく選択される板状に節理する豊浦町・虻田町の遺跡に特徴的な安山岩の出土があり、また、出土遺物中に、擦り切りによる石斧がある。

<VIII群>台石・石皿（破片レベルでは両者の見分けがつかないものがほとんどである。）

A類 石皿

1. 楕円形に近い平面形をした顕著な皿部分を有する、典型的な石皿
2. 楕円礫など平らな面を持つ礫を選択し、顕著な擦り面を持つもの

B類 台石：A類以外の敲打・研磨の台と成り得たと想定できる石器。ただし、破片レベルで石皿との判別は難しく、更には、北海道式石冠を作るための割礫を含む可能性もある。

機能面に残る痕跡から「敲打痕を持つもの」「かすかに擦痕を持つもの」「敲打痕と擦痕の見られるもの」「縁辺に敲打調整を加えるもので、その機能面に敲打痕と擦痕を持つもの」に細分でき、このうちで、表裏面とも確実に使用しているものもある。

## &lt; X群 &gt; 両面調整石器・石核・剥片類

## A類 両面調整石器

石器の両面に調整が入り、縁辺に使用痕を断定できないもので、石核の性質を備えている可能性がある、又は他の分類に当てはまらないものをここに分類した。

## B類 石核

打面が顕著で、剥片剥離面ないしはそれに準ずるものが認められるものを当てはめた。

## C類 フレイク

人為的に母材から打ち剥がされたもので、他の石器分類（Uフレイク・Rフレイクを含む）にあてはまらないものをここに当てはめた。

## &lt; X I群 &gt; 加工痕・使用痕等の作為がみられる剥片や礫

## A類 ピース・エスキーユ

上下両端に潰れ痕跡があるもの、どちらかの端部から裂けるような剥離痕があるものを選んだ  
B地区にはなかった側縁に調整が連続するものもA地区からは出土した

## B類 Uフレイク

潰れている連続して欠けているなどの人為的な使用痕が認められるものを当てはめた。

## C類 Rフレイク

連続して剥離された痕跡を持つものを当てはめた。

## D類 加工痕・使用痕（被熱を含む）のある礫・礫片

## E類 礫・礫片（意義づけて運んできた可能性のある原石・軽石・自然の作用による穿孔礫を含む）

今回は貝化石（コシバニシキガイ）の出土もあった。）

## &lt; 従来から当センターで群・類名を用いないもの &gt;

石製品：実用品とは考え難い、装飾品等を含めた石の加工物

## 【引用文献】

- 佐原 眞 1977 石斧論—横斧から縦斧へ—『考古論集 慶祝松崎寿和先生63歳論文集 別冊』  
鈴木道之助 1991 石鏃『石器入門事典—縄文—』 (大泰司)

## (6) 調査結果の概要

濁川左岸遺跡は、森町中心部から北西へ約5km、標高約37~45mの濁川左岸段丘上に位置する。調査区は濁川によって形成された南東側の高位段丘（A地区）と無名沢によって開析された北西側の低位段丘（B地区）および両段丘の間の沢跡からなる。遺構、遺物はおもに調査区両端の濁川と無名沢に面する緩斜面および平坦面から検出されている。

調査は、平成13・14年度の2ヵ年に行われ、平成13年度は、調査対象面積4,500㎡のうち、工事工程の都合から調査区両端にあたるA地区850㎡、B地区450㎡の計1,300㎡について行った。平成14年度は、前年の調査結果から、B地区北東側の斜面部に遺構の存在が想定されたため430㎡を拡張し、A・B地区合わせて3,630㎡の調査を行った。最終的な調査面積は4,930㎡となった。なお、拡張部分からは6基の土壌が検出されている。

遺構数について記述する前に、昨年度までの報告書および年報において、遺構配置図で示してきた遺構名に変更があった（表I-1）ことを記す。H-10については遺物接合作業をする中でふたつの遺構として取り扱うには不自然が生じ、調査者・影浦に対して土層の検討を要請したところ、土層断



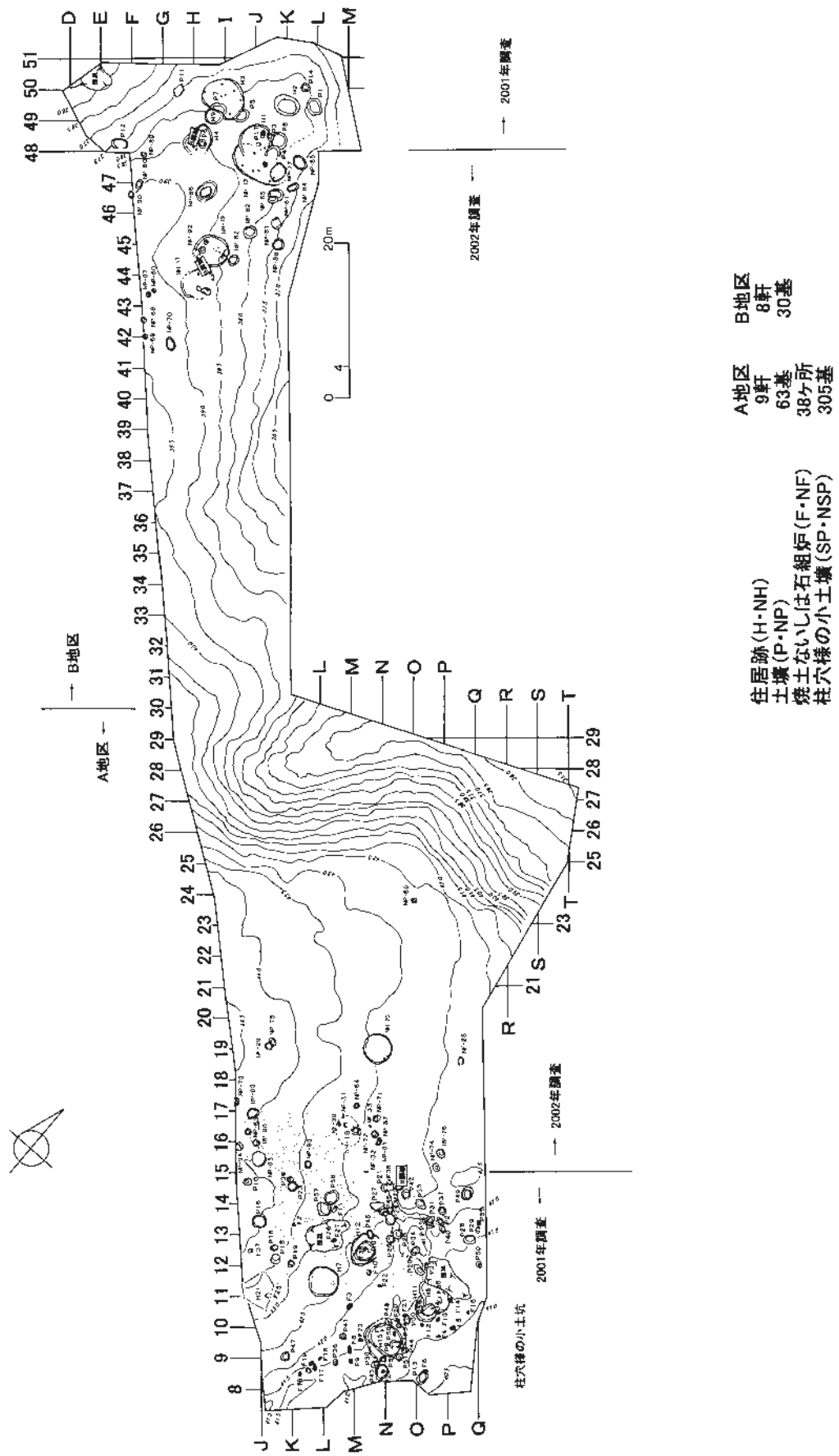


図 I - 7 遺構位置図

面と遺物接合状況からは2軒の住居とは認められない事について合意を得たため、H-15のベンチ部分であると結論づけた。整理作業が進捗しており、かつ遺物量が多いため遺物番号の変更をせず旧H-10の遺物番号を生かして整理作業を行った。H-5については、調査者・中山が担当した時点で床面が掘り過ぎとなった状態で影浦から調査を引き継いだため、住居として確定できない状況にあった。そのため調査者のほうからF-36として扱いたいという申し出があったため遺構名を変更した。しかし遺物の出土状況および炉の形状と規格等から住居の可能性は捨てきれなかったため、遺構の性格を検討する際には、包含層に戻したのものも含め、旧H-5としてとりあげられた遺物を用いた。H-14については炉の形状から屋外炉として判断できるものと調査者と遺物の担当者間で意見が合致したためF-37として変更した。H-12とH-16についてはやはり上部が掘り過ぎになった状態で調査者が引き継ぎしたため、机上での綿密な再検討の結果、調査者が付属遺構の所属の変更とあらたな焼土の認定を行い、遺物の出土状況についてもそれと傾向が合致したためF-38の認定等の作業を行った。またP-53については攪乱であると調査者・影浦が机上で判断を下したため消滅した。

遺構は縄文時代のものがほとんどで、A地区・B地区合わせて、住居跡17軒、土壇93基、焼土（石組炉を含む）38ヶ所、柱穴様の小土壇が305基である。前回報告したB地区からは、住居跡8軒、土壇30基が検出された（図I-7、表III-1・2）。NH-、NP-など頭にNのついた呼称は平成14年度調査の際、H・Pラインの包含層遺物と遺構遺物が混じることを避けるためにつけた便宜上の名称である。前回の報告では整理作業が途中であった為、Nの呼称をつけたまま遺構の記載を行ったが、遺物整理が進展したため、今回の本文中においては混乱を避けるためNの呼称を基本的にはずした。ただし、調査年次の判別には有効であるため全体の遺構配置図と土層注記にのみNの呼称を残した。

A地区の遺構について、竪穴住居が8軒と、小柱穴が一周巡るものを平地式住居として捉えたものが1軒を加えて9軒を住居跡とした。土壇は63基、焼土は38ヶ所、柱穴状のピットは305基である。

住居は円形をして石組炉を持つH-6・7・12・18・20が代表的な後期前葉のものである。F-36にもその可能性がある。H-20は涌元式の住居という可能性が高い。縄文時代中期の住居はベンチ構造を持つものである。H-15は縄文時代中期中葉サイベ沢Ⅶ式以前のもので、H-16は出土遺物から中期の可能性が高い。H-11は中期中葉、ないしは後期前葉の可能性があるので、明確には判断できないが、礫が立石風の出土状況を示しており、調査区内の例のみから考えると後期前葉の可能性がある。他に平地式としたH-21がある。

土壇については、全体的に中期前半か後期前葉か判断し難いものが多い。M16～P12区を結んだラインに位置する沢地形に沿って比較的集中する。時期決定の根拠を見つけにくく縄文時代中期前半～後期前葉の時期に周囲の遺物の出土状況などから決定したものがほとんどである。縄文時代後期前葉と判断した土壇として、覆土上位に配石を伴うP-2、立石と倒立した深鉢を埋設するP-10、立石風に大型の礫や礫石器が出土したP-23、覆土最上部に礫の縁辺を打ち欠くように使用したたたき石が出土したP-63・71・73がある。縄文時代後期前葉、白坂3式の同一個体がまとまって出土したものとP-39がある。遺物出土状況から縄文時代中期中葉の可能性が高いものとして、P-28・43・50・55・59・87がある。P-50には石器埋納の可能性が高い。P-55・59はそれぞれに同一個体のサイベ沢Ⅶ式石器が比較的まとまっていた。P-87からは大木8b式が出土している。時期決定が難しいものの、特徴的なものとして、Ⅵ層を掘り込んだ際に出てきた礫を投げ込んだ可能性があるものとして、P-18・19・29がある。またP-15・57・58・95は直径が1.5mを超える大型のものである。P-95は後期前葉のものである。他は時期判断の根拠が乏しいものである。P-15は小柱穴が周囲を

巡り、P-57・58について調査者は中期前葉と推定した。

焼土は後期前葉のものと考えられる石組炉がF-10・11・25・28・29・36である。類似するものとして石組炉を思わせる立石を伴うF-37がある。F-28と29は規模が比較的大型なもので形状も類似する。F-28は石組炉を挟んで立石と埋甕が検出された。F-32は焼成面からIV群A類土器がまとまって出土し、当期のものとする。他のものについては時期決定の根拠を見つけにくく縄文時代前期後半～後期前葉の時期に周囲の遺物の出土状況などから決定したものがほとんどである。

柱穴状のピットは後期前葉のものと考えられる。あくまで机上での検討だが、11個の環状の配置と3個のC字状の配置、5列の直線状の配置を検討した。C字状の配置では、東側に環の切れ目がある。石組炉に伴う立石の向きと同一である。

遺物はA・B地区合わせて19万8007点が出土した(表I-2)。このうちA地区は土器・土製品が15万5659点で、石器・石製品が1万276点である。

土器はIV群a類が際立った出土で、涌元式が多く出土していることに特徴がある。次いでIII群a類が多い。B地区と比べ比率的にはII群b類の出土が少ない。続縄文時代の土器は3点復元できた。石器は各種出土しているが、北海道式石冠、偏平打製石器、たたき石などの礫石器類が比較的多い。とりわけ偏平打製石器が目立つ。

付記として、前回報告したB地区の概要を再掲載する。住居跡は楕円形を呈し大形のもの(H-3・H-13)、円形もしくは不整形を呈し石組炉を持つもの(H-1・4・H-17・19)、小形のもの(H-2・9)がある。楕円形のもの、縄文時代前期後半、II群b類土器の時期に、石組炉を持つものは縄文時代後期前葉、IV群a類土器の時期に属するものと考えられる。土壌は大まかに平坦面に位置するものと、緩斜面に位置するものとに分かれる。このうち、平坦面に位置するものは径50cm程の小形で円形のものが多い。P-60からは長さ5cm～10cmほどで、一部接合関係が認められ、同一母岩から剥離されたと思われる頁岩製の石核、二次加工のある剥片、剥片などが82点出土している。これらは縄文時代後期前葉頃のものと考えられる。緩斜面に位置するものは長軸長約1.5m～2mの楕円形を呈し、掘り込みも比較的深いものである。P-1・11・12・14・61・81・82・84・86・88は埋め戻しの覆土で土壌墓の可能性もある。P-82からは土器とともに北海道式石冠、偏平打製石器、たたき石などの礫石器が13点出土し、副葬品の組み合わせを示す貴重な資料が得られている。これらは縄文時代中期前半、III群A類土器の時期に属するものと思われる。B地区の出土遺物は、土器27,860点、石器等4,211点の合計32,071点である。土器はIV群a類のものが最も多く、次いでII群b類、III群a類が多い。また、続縄文時代恵山式の土器が1個体まとまって出土している。また、ヒスイ製玉類の未製品が1点出土している。

(村田・大泰司)

表 I - 1 遺構変更一覧

「濁川左岸遺跡-B地区」の報告書中の遺構配置図について整理作業の中で検討した結果、遺構名称に変更があったため記載する

変更前の遺構名	変更後の遺構名	伴う変更			
		変更前	変更後	変更前	変更後
P-53	消滅	遺構消滅			
H-10	H-15 のベンチ部分	H-15HP-8	消滅	H-10HP-3	H-15HP-15
		H-15HP-9	消滅	H-10HP-4	H-15HP-16
		H-15HP-10	消滅	H-10HP-5	H-15HP-17
		H-15HP-11	H-15HP-8	H-10HP-6	H-15HP-18
		H-15HP-12	H-15HP-9	H-10HP-7	H-15HP-19
		H-15HP-13	H-15HP-10	H-10HP-8	H-15HP-20
		H-15HP-14	H-15HP-11	H-10HP-9	H-15HP-21
		H-15HP-15	H-15HP-12	H-10HP-10	消滅
		H-10HP-1	H-15HP-13	H-10HP-11	H-15HP-22
H-10HP-2	H-15HP-14	H-10HP-12	H-15HP-23		
H-5	F-36	遺構名変更のみ			
H-14	F-37	遺構名変更のみ			
H-12HF-1 (H-12の覆土中の焼土だったもの。H-12とH-16の構造を検討した結果付属遺構の所属が一部変更)	F-38	H-16HF-1	H-12HF-1	H-16HP-18	H-12HP-7
		H-16HP-1	H-12HP-1	H-16HP-20	消滅 (H-16覆土下位の一部分)
		H-16HP-2	H-12HP-2		
		H-16HP-3	消滅 (H-16覆土下位の一部分)	H-16HP-27	消滅 (包含層M-12区)
		H-16HP-12	H-12HP-4		
		H-16HP-14	H-12HP-5	H-16HP-28	消滅 (包含層M-11区)
H-16HP-17	H-12HP-6				

表 I - 2 出土遺物一覧

総点数 198007点

土器等	A地区包含層土器	A地区遺構土器	A地区合計	B地区包含層土器	B地区遺構土器	B地区合計	総計
IIb	887	48	935	5309	572	5881	6816
IIIa	13614	3928	17542	2863	857	3720	21262
IIIb-1	790	50	840	0	0	0	840
IIIb-2	47	6	53	0	0	0	53
IIIb-3	6	3	9	0	0	0	9
IIIb	122	263	385	0	0	0	385
IVa	128755	6123	134878	17514	673	18187	153065
IVb	708	9	717	0	0	0	717
VI	214		214	59	0	59	273
不明土器	75	3	78	0	7	7	85
土製品・焼成粘土塊	7	1	8	5	1	6	14
合計	145225	10434	155659	25750	2110	27860	183519

石器等	A地区包含層石器	A地区遺構石器	A地区合計	B地区包含層石器	B地区遺構石器	B地区合計	総計
石鏃	110	6	116	49	3	52	168
石槍又はナイフ	13	2	15	7	2	9	24
石錐	19	1	20	4	1	5	25
つまみ付ナイフ	38	9	47	24	0	24	71
スクレイパー	384	53	437	147	21	168	605
石核	126	4	130	80	11	91	221
両面調整石器	25	1	26	20	0	20	46
ピエスエスキュー	27	1	28	7	0	7	35
Rフレイク	177	18	195	91	13	104	299
Uフレイク	438	19	457	151	37	188	645
フレイク	4439	367	4806	1879	135	2014	6820
北海道式石冠	160	16	176	36	9	45	221
偏平打製石器	428	41	469	69	27	96	565
石皿	30	15	45	12	1	13	58
台石	384	73	457	76	41	117	574
石斧 (石のみを含む)	125	7	132	25	4	29	161
すり石	53	3	56	13	6	19	75
石鋸	2	0	2	0	0	0	2
たたき石	426	42	468	106	42	148	616
砥石	26	6	32	10	0	10	42
軽石	16	2	18	8	9	17	35
原石	97	0	97	39	3	42	140
自然の穿孔がなされる礫	1	0	1	3	0	3	3
被熱・使用痕ありの礫	19	1	20	13	0	13	33
使用痕ありの礫	68	2	70	10	9	19	89
被熱礫	418	85	503	129	79	208	711
礫	1132	303	1435	313	356	669	2104
石製品	15	3	18	4	77	81	100
合計	9196	1080	10276	3325	886	4211	14488



## II 遺跡の位置と環境

### 1 遺跡の位置と周辺の地形

遺跡の所在する森町は、内浦湾（噴火湾）に面する渡島半島のほぼ中央に位置し、渡島支庁管内茅部郡に属する。東側は駒ヶ岳山頂から押出しの沢を境に砂原町と、南側は宿野辺川を挟んで大野町、七飯町と、南西側は渡島山地を分水嶺として厚沢部町と、西は茂無部川を挟んで八雲町と接し、北は内浦湾（噴火湾）に臨んでいる。

遺跡は森町市街地から北西へ約5kmの石倉地区に所在し、濁川左岸の河岸段丘上に立地している（図II-1～3）。石倉地区には濁川、石倉川、三次郎川、本内川、茂無部川などの内浦湾（噴火湾）に注ぐ大小の河川があり、これらの河川に面した河岸段丘上や海岸段丘上の平坦面には、平成15年11月現在で10ヶ所の遺跡が確認されている。

「石倉」地区は元名を「ショウンナイ」と呼ばれ、アイヌ語の「ショ」（滝・裸岩）、「ウン」（……のある所）、「ナイ」（川・沢）で、滝のある沢を意味し、現在の本石倉にそそぐ小川から得た名である。これが石倉と改称された由来は不明である。一説には箱館戦争時、榎本軍の石倉三左衛門の名に由来するとされているが、実際には、天明4（1784）年の『北藩紀略』には「イシクラ」、寛政3（1791）年菅江真澄の「えぞのてぶり」には「石倉」という地名がすでに登場している（竹内編 1987）。安政3（1856）年の記述である『竹四郎廻浦日記 卷の三十』には「石クラ」として「…此処も文化頃人家七軒有し由なるが当時四軒、人別三十二人有。…」との記述があり（松浦著・高倉編 1978）、『渡島日誌 卷の四』には同様の記述に苛斂誅求により人口が減ったとの解説が加えられている（松浦著・秋葉解読 1988）。

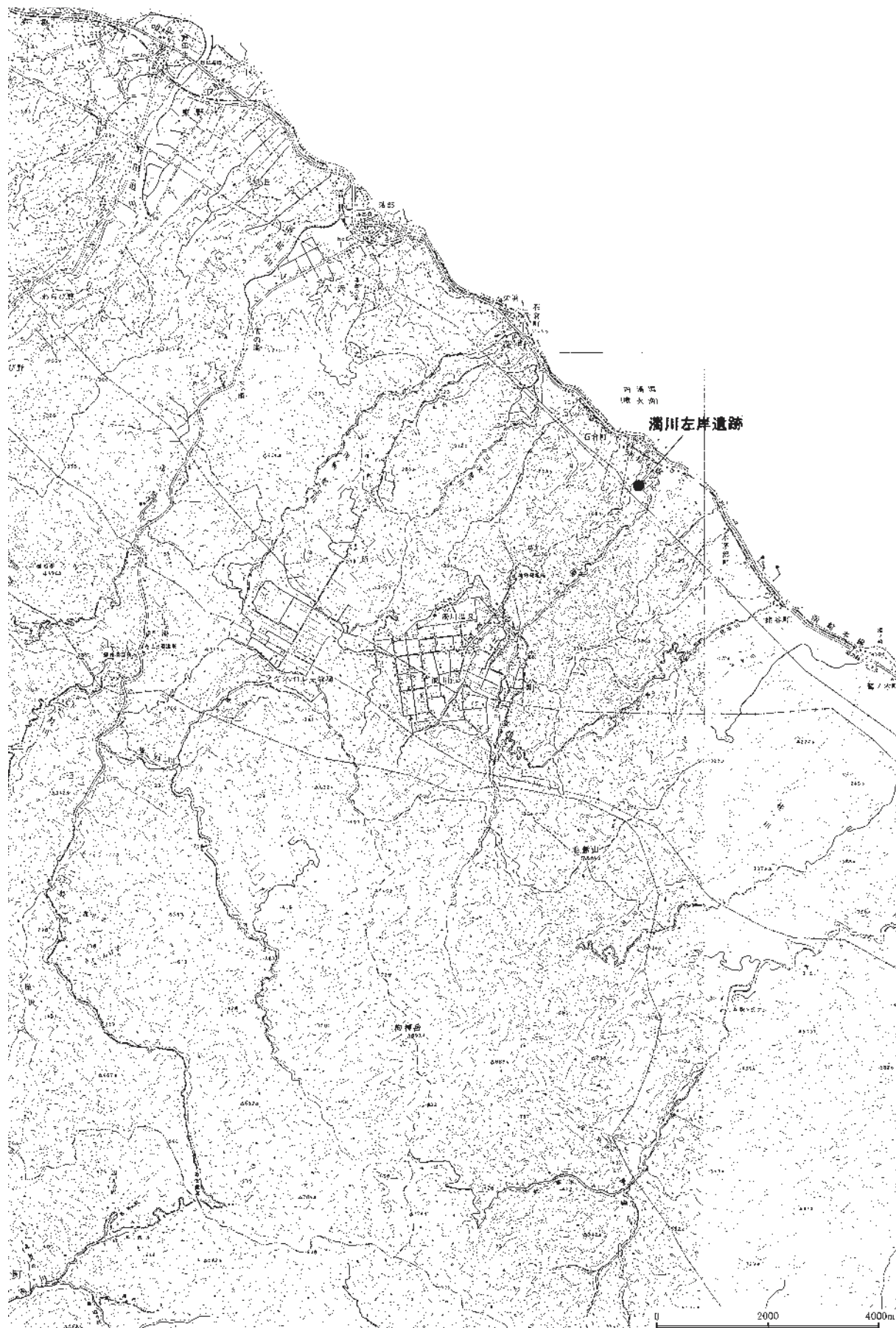
遺跡名にもある「濁川」は、アイヌ語で「ユウンベツ」と呼ばれ、温泉のある川の意で、これを濁川と呼称する経緯は、川水に温泉が流入して濁ったため、和人が意識改称したものである。

現在、海岸線から濁川の盆地へ至る主なルートは、濁川沿いの「道道濁川温泉線」であるが、明治29年製版、大日本帝国陸地測量部5万分の1地形図「狗神岳」では、石倉川左岸の河口付近から山越えの道が記されているのみである。また、大正9年製版の同図「上濁川」では、現在の石倉小学校から地熱発電所のある坊主山の南麓を回る山越えの道と濁川沿いの道が記載されている。濁川は急峻な谷地形を形成していることから、川沿いのルートは歩行には不向きであったのであろう。

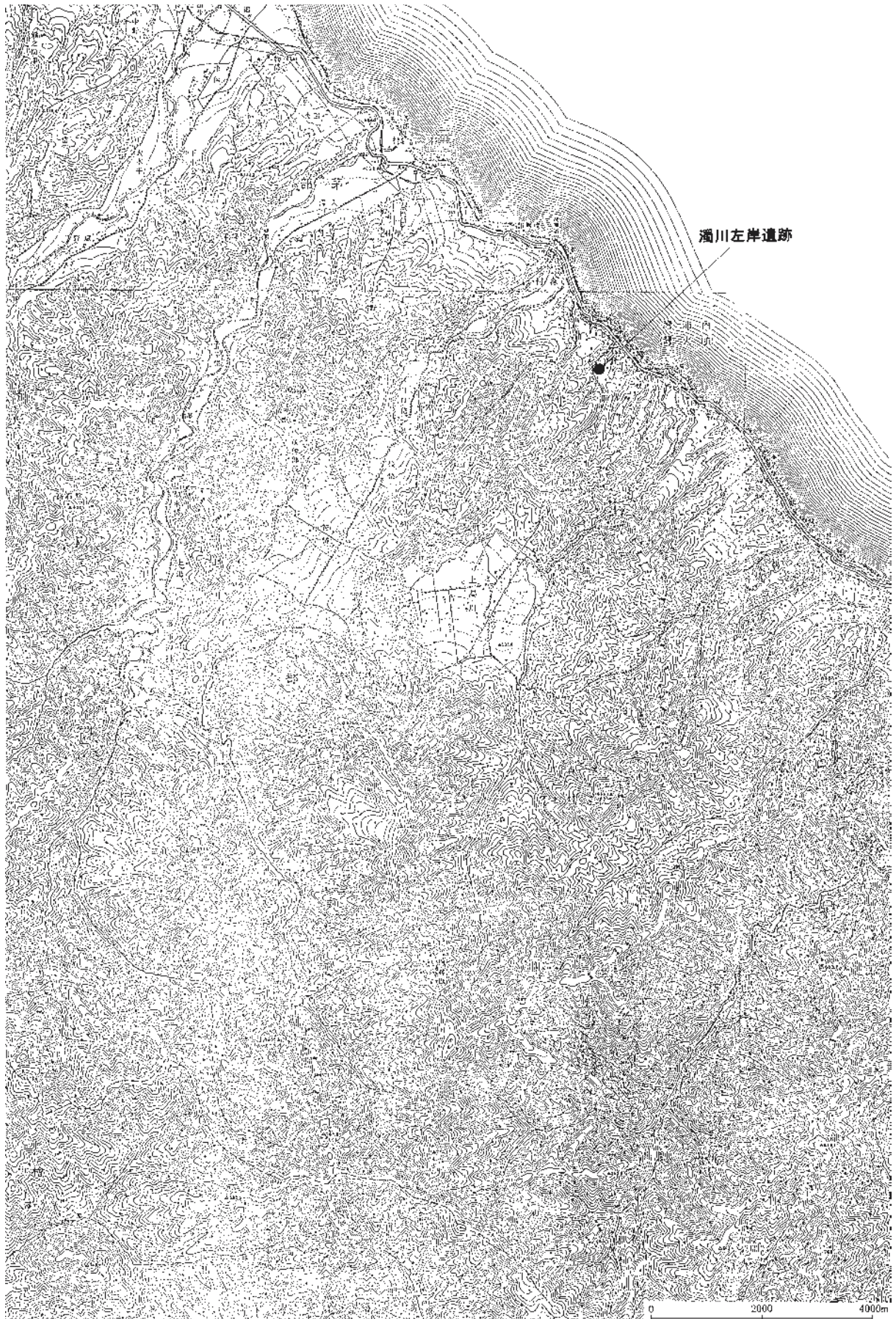
（村田・大泰司）

### 2 周辺の遺跡

森町では平成15年11月現在、41ヶ所の遺跡が登載されている。過去に調査が行われた主なものは、昭和27年から29年にかけて東京大学駒井和愛による尾白内貝塚の調査があり、縄文時代恵山式の土器、石器、骨角器が出土している。尾白内貝塚は昭和55年と平成4年に町教育委員会で調査が行われている。また、昭和30年代から40年代にかけては熊野喜蔵による姫川1遺跡（旧姫川A遺跡）、姫川2遺跡、森川1遺跡などが調査され、縄文時代前期から中期が主体の遺跡であることが確認されている。昭和38年には函館博物館による森川貝塚の調査で、縄文時代前期の円筒下層式、縄文時代恵山式、擦文式の土器、陶磁器、鉄器、古銭などが出土した。その他、町教育委員会によって、昭和46年に蛸谷遺跡、昭和49年に鳥崎遺跡、昭和51年にオニウシ遺跡、昭和59年・平成5年に御幸町遺跡など

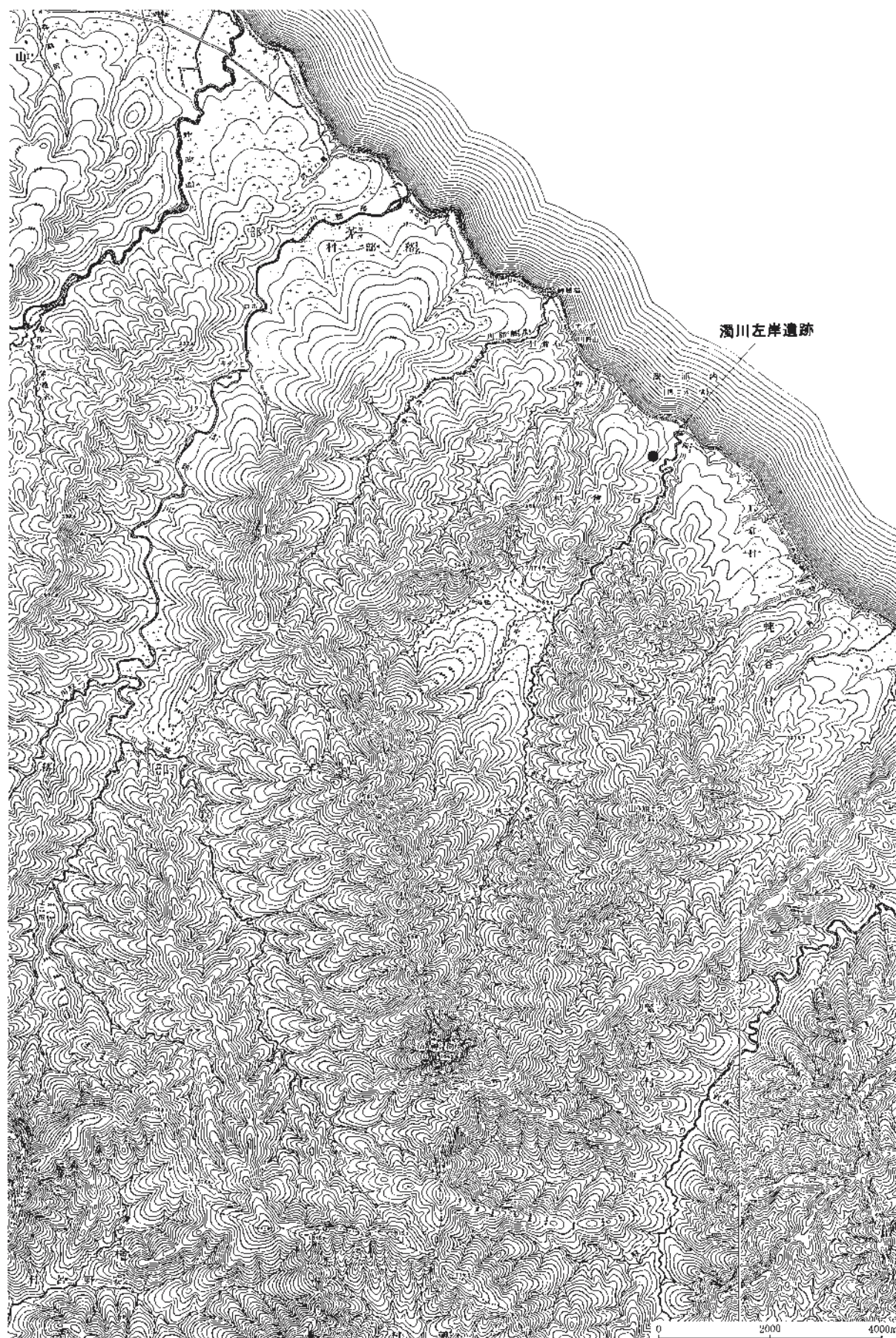


図Ⅱ－１ 遺跡周辺の地形（１）（この図は国土地理院発行5万分の1地形図、「駒ヶ岳」「濁川」「八雲」を複製、加筆したものである）



図II-2 遺跡周辺の地形(2) (この図は大日本帝国陸地測量部5万分の1地形図、大正6年製版「駒ヶ嶽」大正9年製版「上濁川」大正8年製版「八雲」を複製、加筆したものである)





図Ⅱ-3 遺跡周辺の地形(3) (この図は大日本帝国陸地測量部5万分の1地形図、明治29年製版「駒嶽」「狗神岳」「八雲」を複製、加筆したものである)

が調査され、おもに縄文時代中期から後期の様相が次第に明らかになっている。

分布は、尾白内川中流域と七飯町との境界である宿野辺川流域に数ヶ所の遺跡がある他は、森町市街地から茂無部川にかけての海岸段丘上と内浦湾（噴火湾）にそそぐ河川沿いに集中している。この地域の時期は、縄文時代中期から後期のものが大半であるが、河川沿いの遺跡は、内陸部に向かって縄文時代後期を主体とするものが増加する傾向が見られる。続縄文時代の遺跡は、森町市街地の低位の海岸段丘上に多い。図Ⅱ－4、表Ⅱ－1・2には濁川左岸遺跡が立地する森町北部の遺跡と位置的に近い八雲町南部の遺跡を掲載している。

最近では北海道縦貫自動車道建設工事に伴う調査が増加し、町教育委員会による鷲ノ木4遺跡、鷲ノ木5遺跡、栗ヶ丘1遺跡や当センターによる森川3遺跡、森川4遺跡、石倉1遺跡、石倉2遺跡、石倉3遺跡、倉知川右岸遺跡、三次郎右岸遺跡、三次郎左岸遺跡などが調査されている。

そのうち、茂無部川から濁川までの地域に所在する遺跡で、本書で報告するものを除く6ヶ所についての概要を北から順に述べる（図Ⅱ－4、表Ⅱ－1）。

**本内川右岸遺跡** 縄文時代中・後期の遺跡である。遺構は中期の土壇3基で、中期の円筒土器上層b式、ノダップⅡ式、後期前葉の天祐寺式などの土器と、石鏃、ポイント・ナイフ、つまみ付きナイフ、スクレイパー、石斧、すり石、たたき石、石錘、砥石、石皿・台石などの石器が出土した。

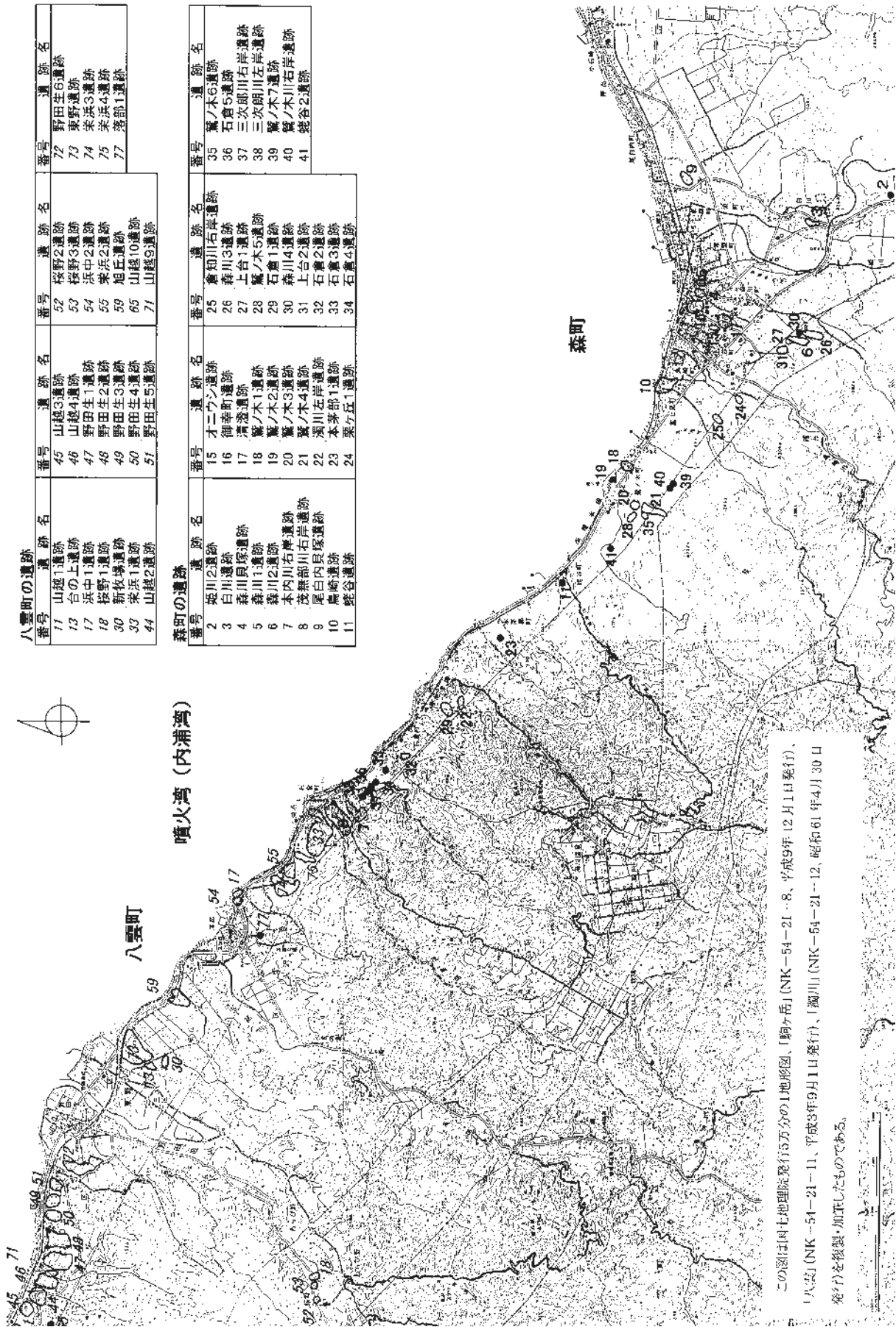
**三次郎川左岸遺跡** 縄文時代後期前葉を主体とする遺跡で、土壇1基、焼土1ヶ所を検出した。前期後半の円筒土器下層式、後期前葉の天祐寺式などの土器、続縄文時代の恵山式、後北式土器などが出土した。平成16年度以降も調査が予定されている。

**三次郎川右岸遺跡** 縄文時代中期後半を主体とする遺跡で、住居跡12軒、配石遺構1ヶ所、土壇60基、焼土15ヶ所を検出した。住居跡には埋甕をもつものや掘り込みの浅いものがある。土壇はプラスチック状や大型礫を伴うもの、掘り込みの浅いものなど多様なものがある。焼土は続縄文時代のものが多く、焼骨片が大量に混じるものがある。縄文時代中期のノダップⅡ式、後期前葉の天祐寺式、涌元式などの土器、続縄文時代の恵山式、後北式土器などが出土した。平成16年度以降も調査が予定されている。

**石倉3遺跡** 縄文時代後期前葉を主体とする遺跡である。段丘の平坦面に土壇を伴う不定形な配石が検出されている。

**石倉2遺跡** 縄文時代中期後半を主体とする急峻な尾根上の竪穴住居群である。住居跡11軒、土壇9基、Tピット10基、焼土2ヶ所、土器集中4ヶ所、フレイク集中2ヶ所、礫集中1ヶ所を検出した。遺物は縄文時代中・晩期の土器などが出土した。

**石倉1遺跡** 平成14年度から継続して調査している遺跡で縄文時代中・後期を主体とする。これまでに土壇4基を検出している。そのうち2基は壙口部に台石や大型礫をもつ。遺物は縄文時代中期～後期初頭の土器をはじめ、石鏃、スクレイパー、石核、たたき石などの石器、合わせて約27,000点が出土している。平成16年度以降も調査が予定されている。 （村田・大泰司・鎌田 望）



八雲町の遺跡

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
71	山越1遺跡	45	山越3遺跡	52	樺野2遺跡
73	台の上遺跡	46	山越4遺跡	53	樺野3遺跡
17	浜中1遺跡	47	野田生1遺跡	54	浜中2遺跡
18	樺野1遺跡	48	野田生2遺跡	55	浜中3遺跡
30	新秋保遺跡	49	野田生3遺跡	59	栄浜4遺跡
33	栄浜1遺跡	50	野田生4遺跡	65	旭丘遺跡
44	山越2遺跡	51	野田生5遺跡	71	山越9遺跡

森町の遺跡

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
2	坂川2遺跡	15	オニウツ遺跡	25	斎和川右岸遺跡
3	白川遺跡	16	御幸町遺跡	26	森川3遺跡
4	森川貝塚遺跡	17	清透遺跡	27	上台1遺跡
5	森川1遺跡	18	鷺ノ木1遺跡	28	鷺ノ木5遺跡
6	森川2遺跡	19	鷺ノ木2遺跡	29	石倉1遺跡
7	本内川右岸遺跡	20	鷺ノ木3遺跡	30	森川4遺跡
8	茂無部川右岸遺跡	21	鷺ノ木4遺跡	31	上台2遺跡
9	尾白内貝塚遺跡	22	濁川左岸遺跡	32	石倉2遺跡
10	鳥嶽遺跡	23	本茅部1遺跡	33	石倉3遺跡
11	総谷遺跡	24	栗ヶ丘1遺跡	34	石倉4遺跡
				35	鷺ノ木6遺跡
				36	石倉5遺跡
				37	三次郎川右岸遺跡
				38	三次郎川左岸遺跡
				39	鷺ノ木7遺跡
				40	鷺ノ木川右岸遺跡
				41	総谷2遺跡

この図は国土地理院発行5万分の1地形図、「駒ヶ岳」(NK-54-21-8、平成9年12月1日発行)、「八雲」(NK-54-21-11、平成3年9月1日発行)、「濁川」(NK-54-21-12、昭和61年4月30日発行)を複製・加工したものである。

図II-4 周辺の遺跡

表II-1 周辺の遺跡一覧(1) 森町の遺跡

\*掲載番号の太字(1・12~14)の遺跡は図II-4の範囲外になる。

掲載 番号	遺跡名称	種別	所在地	立地	標高(m)	時期(型式略名)	備考
1	姫川1	遺物包含地	字駒ヶ岳132-1~4	河岸段丘	167	縄文中期(円筒上層)	
2	姫川2	遺物包含地	字駒ヶ岳17-216、-217、-6	河岸段丘	112	縄文中期(円筒上層)	
3	白川	遺物包含地	字白川49-14	河岸段丘	48~50	縄文晩期・擦文	貝塚あり
4	森川貝塚	貝塚	森川町76~79ほか	海岸段丘	13~15	縄文前期・続縄文(恵山)、擦文、中近世	
5	森川1	遺物包含地	森川町69-2ほか	海岸段丘	15~18	縄文前(円筒下層b)・中期、続縄文(恵山)	1982「森川A遺跡」森町教委
6	森川2	遺物包含地	字霞台34-1、35-2	台地	80~100	縄文中~晩期、擦文	2002 森町教委発掘調査
7	本内川右岸	遺物包含地	字石倉町610-7・8	台地	40~60	縄文中(円筒上層b、ノダップII)・後期(天祐寺)	2003「森町本内川右岸遺跡」北埋調報182
8	茂無部川右岸	遺物包含地	字石倉町610-2・5	台地	40~60	縄文中~後期	
9	尾白内貝塚	貝塚	字尾白内926、929-1ほか	海岸段丘	10~14	縄文晩期(大洞A')・続縄文(恵山)	1981「尾白内」、1993「尾白内2」森町教委
10	鳥崎	遺物包含地	鳥崎31-1、字富士見町13ほか	海岸段丘	15~30	縄文後期	1975「鳥崎遺跡」森町教委
11	蛭谷	遺物包含地	字蛭谷町146-1ほか	河岸段丘	30~32	縄文中(円筒上層)・後期	1971 森町教委発掘調査
12	赤井川1	遺物包含地	字赤井川229	丘陵	175~195	縄文中期(円筒上層)	
13	赤井川2	遺物包含地	字赤井川229	丘陵	230~235	縄文中期	
14	赤井川3	遺物包含地	字赤井川229	丘陵	210	縄文中期	
15	オニウシ	集落跡	字上台町326-18	海岸段丘	25~35	縄文早(東釧路III)~中期(円筒上層)	1977「森町オニウシ遺跡発掘調査報告書」
16	御幸町	遺物包含地	字御幸町132-2、字清澄3-1ほか	海岸段丘	8~20	縄文中期(円筒上層)	1985「御幸町」、1994「御幸町2」森町教委
17	清澄	遺物包含地	字清澄27、29-2	海岸段丘	33~39	縄文中期(円筒上層)	
18	鷺ノ木1	遺物包含地	字鷺ノ木145-1ほか	海岸段丘	15~20	縄文中期(円筒上層)	
19	鷺ノ木2	台場跡	字鷺ノ木455ほか	海岸段丘	40	近世	
20	鷺ノ木3	遺物包含地	字鷺ノ木499-2ほか	河岸段丘	40~45	縄文中期(円筒上層)、続縄文(恵山)	
21	鷺ノ木4	遺物包含地	字鷺ノ木506~510	河岸台地	45~50	縄文中(円筒上層)・晩(タンネトウL)・続縄文(恵山)	2001~3 森町教委発掘調査
22	濁川左岸	集落跡	字石倉町401、446-1、448	河岸段丘	40~50	縄文前(円筒下層)・中(円筒上層)・後期前葉	2003「森町濁川左岸遺跡-B地区-」北埋調報190
23	本茅部1	遺物包含地	字本茅部町205、272~274、294	海岸段丘	80~85	縄文前(円筒下層)・中(円筒上層、見晴町)・晩期(大洞C2)	2003「森町本茅部1遺跡」北埋調報191、2004「森町本茅部1遺跡(2)」北埋調報199
24	栗ヶ丘1	遺物包含地	字栗ヶ丘38~44	河岸段丘	35~45	縄文中・後期	2001、02 森町教委発掘調査
25	倉知川右岸	集落跡	字栗ヶ丘7、11-1・2	丘陵	75~80	縄文中(円筒上層、サイベ沢VII)・後期(トリサキ)	2004「森町倉知川右岸遺跡」北埋調報196
26	森川3	集落跡	字森川町317-1・7	丘陵	100	縄文前・中期、続縄文(恵山)	2002、03 道埋文発掘調査
27	上台1	遺物包含地	字上台33-1、42-1、364	丘陵	90	縄文後期	2003 道埋文発掘調査
28	鷺ノ木5	遺物包含地	字鷺ノ木503-1、495-4・5	河岸段丘	70	縄文後期	2003 森町教委発掘調査
29	石倉1	遺物包含地	字石倉町395~397、403、404、439	丘陵	30~40	縄文中・後期	2002、03 道埋文発掘調査
30	森川4	遺物包含地	字森川町317-18	河岸段丘	90	縄文中・後期	2003 道埋文発掘調査
31	上台2	集落跡	字上台町326-5	河岸段丘~緩斜面	90~100	縄文中~後期	2003 道埋文発掘調査
32	石倉2	集落跡	字石倉町146、623-1・3・4、624-1、306	河岸段丘	60~75	縄文中~晩期	2004「森町石倉2遺跡」北埋調報197
33	石倉3	遺物包含地	字石倉町482、483、490	河岸段丘	65~75	縄文後期(天祐寺、トリサキ)	2004「森町石倉3遺跡・石倉5遺跡」北埋調報205
34	石倉4	遺物包含地	字石倉町511、520、521	河岸段丘	60	縄文後期	
35	鷺ノ木6	遺物包含地	字鷺ノ木505、511	河岸段丘	65~70	縄文後期	
36	石倉5	遺物包含地	字石倉町512、513、519	河岸段丘	55~60	縄文中期	2004「森町石倉3遺跡・石倉5遺跡」北埋調報205
37	三次郎川右岸	遺物包含地	字石倉町513、516	河岸段丘	40~47	縄文前・中・後期、続縄文	2003 道埋文発掘調査
38	三次郎川左岸	遺物包含地	字石倉町610-24	河岸段丘	35~50	縄文前・中・後期、続縄文	2003 道埋文発掘調査
39	鷺ノ木7	遺物包含地	字鷺ノ木町397-1ほか	尾根	60	縄文	
40	鷺ノ木川右岸	遺物包含地	字鷺ノ木町396	台地	60	縄文	
41	蛭谷2	遺物包含地	字蛭谷町281	台地	80	縄文	

表Ⅱ-2 周辺の遺跡一覧(2) 八雲町の遺跡

登録番号	遺跡名称	種別	所在地	立地	標高(m)	時期(型式略名)	備考
11	山越1	遺物包含地	山越434-1ほか	海岸段丘	30	縄文中期(円筒上層)	
13	台の上	遺物包含地	東野505ほか	河岸段丘	15~20	縄文中(円筒上層)・後(十腰内1)・晩期(タンネトウL)	1987「台の上遺跡」八雲町教委
17	浜中1	遺物包含地	落部470ほか	海岸段丘	14~15	続縄文(恵山)	
18	桜野1	遺物包含地	桜野25-1ほか	河岸段丘	60~65	縄文中期(円筒上層)	
30	新牧場	遺物包含地	東野757ほか	海岸段丘	30	縄文後期(十腰内1)	
33	栄浜1	集落跡	栄浜89ほか	海岸段丘	32~36	縄文前・中・後期、続縄文、擦文	1983「栄浜」八雲町教委、1987「栄浜1遺跡」同、1995「栄浜1遺跡-栄浜小学校校舎増築工事用地内埋蔵文化財報告書-」同、1996「栄浜1遺跡」同、1998「栄浜1遺跡IV」同
44	山越2	集落跡	山越349ほか	海岸段丘	20~30	縄文中(円筒上層・見晴町)・後期(天祐寺)	2001「八雲町山越2遺跡」北埋調報163
45	山越3	遺物包含地	山越402-1ほか	海岸段丘	32~34	縄文早(東釧路Ⅲ)・前(円筒下層d)・中(サイベ沢Ⅶ,見晴町)・後期(トリサキ)	2002「八雲町山越3遺跡・山越4遺跡」北埋調報166
46	山越4	遺物包含地	山越324-1ほか	海岸段丘	30~39	縄文前(円筒下層d)・中(円筒上層b,サイベ沢Ⅵ・Ⅶ,見晴町)・後期(天祐寺,ホッケマ)	2002「八雲町山越3遺跡・山越4遺跡」北埋調報166
47	野田生1	集落跡	野田生307ほか	海岸段丘	33~40	縄文早(貝殻文)・前(円筒下層)・中(円筒上層b,サイベ沢Ⅶ,見晴町,大安在B,ノダツⅡ)後期(前葉~後葉)、続縄文	2003「八雲町野田生1遺跡」北埋調報183
48	野田生2	遺物包含地	野田生355-1ほか	海岸段丘	34~39	縄文早(条痕文)・前(円筒下層c,円筒下層d)・中(円筒上層b,サイベ沢Ⅶ,見晴町,大安在B)・後(大津)期、続縄文(後北)	2002「八雲町野田生2遺跡」北埋調報167
49	野田生3	遺物包含地	野田生394-1ほか	海岸段丘	25~37	縄文中期(円筒上層)	
50	野田生4	遺物包含地	野田生378ほか	海岸段丘	26~38	縄文中(円筒上層b・上層c,サイベ沢Ⅶ,見晴町,榎林,大安在B)・晩期(大洞C1・C2)	2002「八雲町野田生4遺跡」北埋調報171
51	野田生5	遺物包含地	野田生303ほか	河岸段丘	30~35	縄文後期(大津,手稲)、続縄文(恵山,後北B・C2・D)、弥生系、擦文	2001「野田生5遺跡」北埋調報164
52	桜野2	遺物包含地	桜野41-1ほか	海岸段丘	70~75	縄文中(円筒上層)・晩期(タンネトウL)	
53	桜野3	遺物包含地	桜野22ほか	海岸段丘	80~85	縄文中(円筒上層)・晩期(タンネトウL)	
54	浜中2	遺物包含地	落部459ほか	海岸段丘	15~18	恵山	
55	栄浜2	遺物包含地	栄浜214ほか	海岸段丘	31	縄文中期(円筒上層)	2000,-01 八雲町教委発掘調査
56	山越5	遺物包含地	山越475,476	海岸段丘	14	縄文前・中・後期	1988[山越5・6遺跡発掘調査報告書]八雲町教委
57	山越6	遺物包含地	山越214,474,475	海岸段丘	14	縄文中期、続縄文	
59	旭丘1	集落跡	旭丘3ほか	海岸段丘	42~55	縄文前期(円筒下層d)・中期(円筒上層b~c)	1998「旭丘1遺跡」八雲町教委、2001 八雲町教委発掘調査
65	山越10	遺物包含地	山越399ほか	海岸段丘	40~50		
71	山越9	遺物包含地	山越325ほか	海岸段丘	20~35	縄文中期?	
72	野田生6	遺物包含地	野田生434ほか	河岸段丘	20~30	縄文中期	
73	東野	遺物包含地	東野252ほか	河岸段丘	10~40	縄文後・晩期、擦文	
74	栄浜3	遺物包含地	栄浜240,入沢411ほか	海岸段丘	10~40	縄文中期	2001 八雲町教委発掘調査
75	栄浜4	遺物包含地	栄浜269ほか	海岸段丘	20~50		
77	落部1	遺物包含地	入沢374-37ほか	河岸段丘	26~38	縄文中(サイベ沢Ⅶ,見晴町,榎林)・後(天祐寺,手稲)・晩期(大洞A)、続縄文(後北C2・D)	2003「八雲町落部1遺跡」北埋調報181

## Ⅲ 遺 構

遺構は縄文時代のものがほとんどで、A地区・B地区合わせて、住居跡17軒、土壙93基、焼土（石組炉を含む）38ヶ所、柱穴様の小ピットが305基である（図Ⅰ-7）。前回報告したB地区からは、住居跡8軒、土壙30基が検出された。NH-、NP-など頭にNのついた呼称は平成14年度調査の際、前年度、H・Pラインの包含層遺物と遺構遺物が混じって取り上げられていた反省を踏まえてつけた便宜上の名称である。前回の報告ではNの呼称をつけたまま遺構の記載を行ったが、遺物整理が進展したため、今回の本文中においては混乱を避けるためNの呼称を基本的にはずした。ただし、調査年次の判別には有効であるため全体の遺構配置図と土層注記にのみNの呼称を残した。事実記載の「位置・立地」の項目には調査区を示している。

A地区において、竪穴住居が8軒、小柱穴が一周巡るものを平地式住居として捉えたものが1軒、合計9軒が住居跡である。土壙は63基、焼土は38ヶ所、柱穴状のピットは305基である（図Ⅲ-1）。

### 1. 住居

住居は円形をして石組炉を持つH-6・7・12・18・20が代表的な後期前葉のものである。F-36にもその可能性がある。H-20は涌元式の住居という可能性が高い。縄文時代中期の住居はベンチ構造を持つものである。H-15は縄文時代中期中葉サイベ沢Ⅶ式以前のもので、H-16は出土遺物から中期の可能性が高い。H-11は中期中葉、ないしは後期前葉の可能性があるので、明確には判断できないが、礫が立石風の出土状況を示しており、調査区内の例のみから考えると後期前葉の可能性がある。他に平地式としたH-21がある。（大泰司）

H-6（図Ⅲ-2～5、図版2・3・33～35）

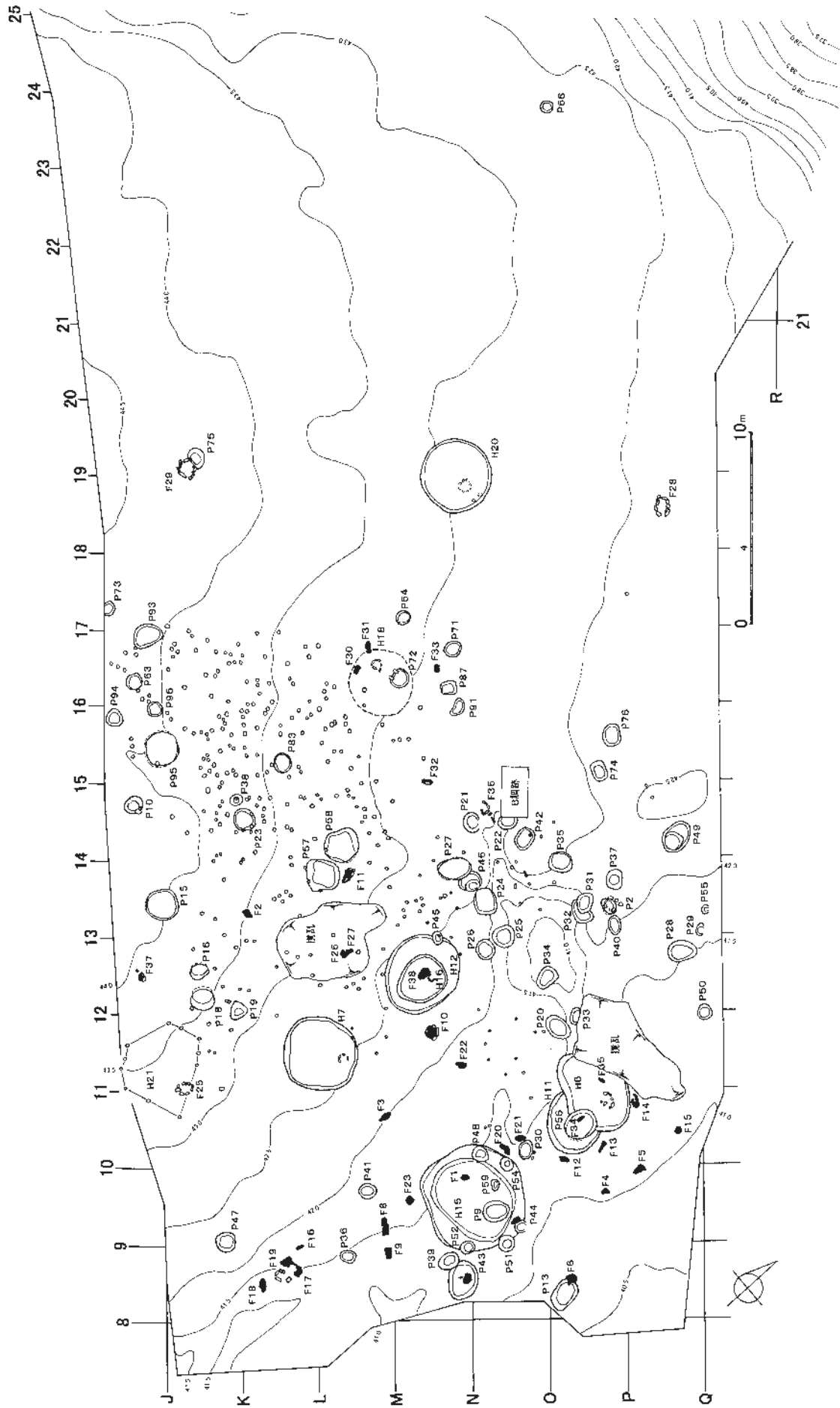
位置・立地：O・P-10・11 標高41.5～41.8mの平坦面。

規模：4.80/4.34×(2.94)/(2.69)×0.46m

確認・調査：O・P-11区において旧送電線のアンカーを入れた攪乱穴が検出された。その壁面を精査したところ、黒い大きな窪みが明瞭に確認された。窪みは底部が平坦であったため、当初から住居跡の存在が想定された。このためO-10・11区とP-10・11区の4グリッドに亘って、Ⅳ層上面の段階から平面形確認のための精査作業を行った。この作業で、不明瞭ながらも土の色調の違いが確認され、おおよその遺構の範囲が予測された。このため、その長軸に1本、長軸のベルトに直行させる形で短軸に2本、計3本のベルトを設定し、それらのベルトに沿う形でトレンチ調査を行った。トレンチ調査を進めて土層の堆積状況を確認していく中で、2軒の住居跡が重なり合い、さらにフラスコ状のピットと重なりあっていることが確認された。アンカー痕に破壊されているほうの住居跡を、当初のとおりH-6とし、あとから確認された住居跡をH-11とし調査を進めた。H-6がH-11の床面を破壊しているので、H-11の方が先に構築されたと考えられる。また、両者と切り合うフラスコ状のP-56は時期的には一番新しい。

覆土：4層に分層したが、Ⅳ層を主体とする黒色土が大半で、自然堆積である。

形態：一部を旧送電線のアンカー穴によって欠くが、残存部分から平面形は楕円形を想定できる。床面は中央部が平坦である。竪穴はⅤ層からⅥ層上面にかけて掘りこまれている。壁は西側で直線的に開きながら立ち上がるが、東側ではやや緩やかに立ち上がる。



図III-1 A地区遺構位置図

**付属遺構：**床面検出の段階でコの字形の石組炉が検出された。炉の位置は中央ではなく、長軸のライン上、4分の1と3分の1の間くらいの地点に作られている。柱穴様のピットは全部で14基が検出されたが、径が20cm前後のもの（HP-1・4）、径が10cm前後のもの（HP-3・7・8・10・11）、それよりも径が小さいもの（HP-2・5・6・9・12・13・14）とがある。

**遺物出土状況：**床面において、石組炉のほかに、いくつか人頭大の礫が検出された。2個が重なり合っているものや、集石状に集まっているものもあり、台石等の礫石器も含む。

**時期：**出土遺物と形態から縄文時代後期前葉、IV群a類の時期と考えられる。（影浦）

**フローテーション成果：**石組炉HF-1の覆土を採取し、フローテーション法にて処理した。動物遺存体については魚類の鱗棘と部位不明破片が焼骨片として検出された。炭化種子はアカザ属の種子が検出された（詳細はVI章を参照）。

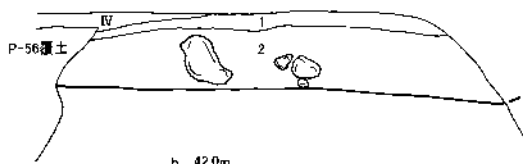
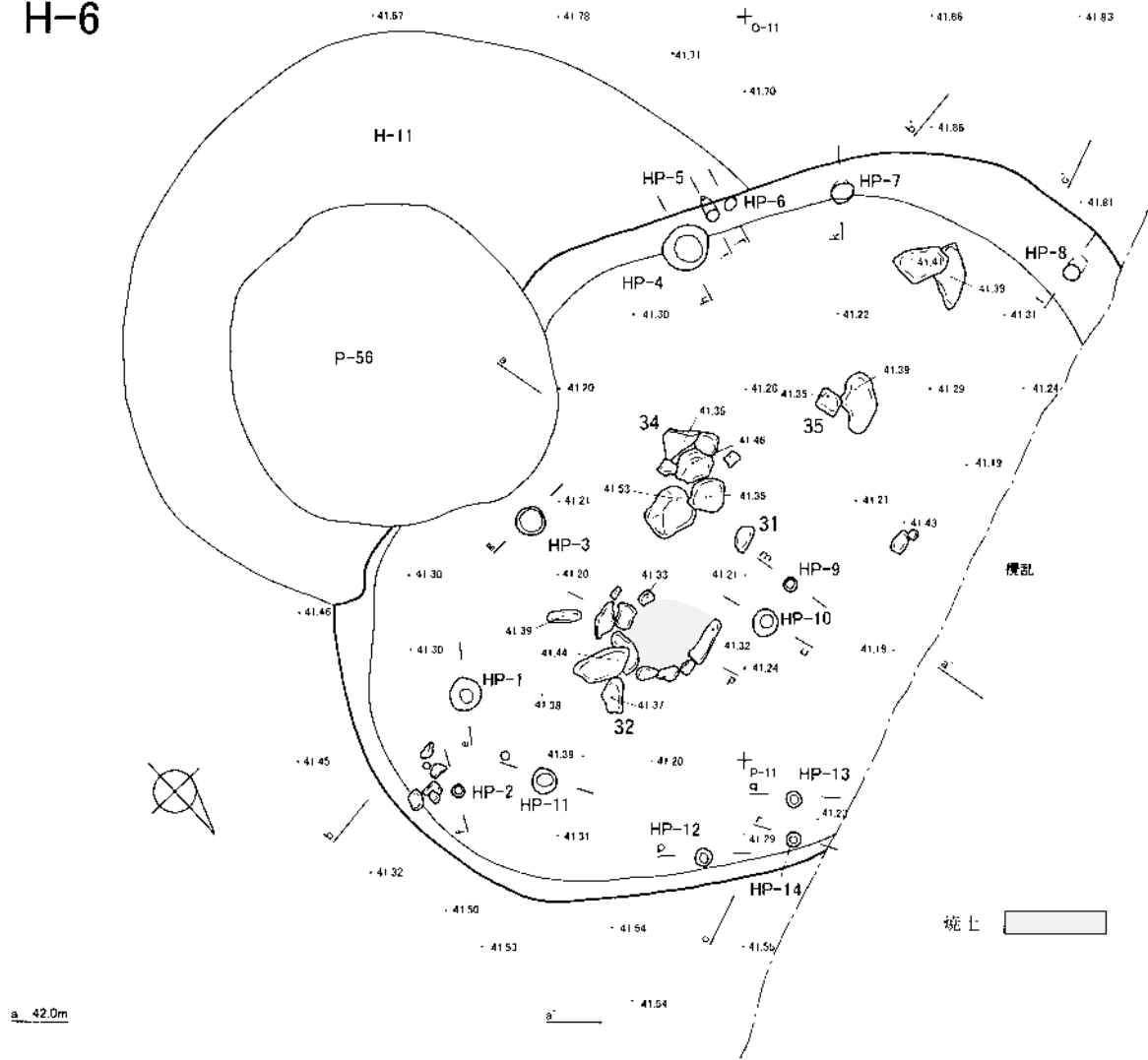
**掲載遺物 土器：**すべてIV群a類である。1は覆土上位から中位の遺物であり、2～4・6～10・16は覆土中位からの出土である。5・12・13は覆土下位からの出土、11・14は覆土の中位から下位にかけてのものが接合した。15は覆土の上位から下位にかけてのものが接合した。1は涌元式の範疇で新しい時期（葛西 勵（2002）で言うところの小牧野3期くらい）の土器と考える。8・9は涌元式の範疇だが、器形とトリサキ式的な文様から、より新段階の土器の可能性はある。10は大津式である。11・13は天祐寺式の貼付帯を思わせるものである。2本のバンドが口縁を巡るものである。11は縦方向の貼付による区画があるが、明瞭な折り返し口縁を持つ。13は稜の明瞭な2本の貼付帯により口縁部文様帯がありその間は無文帯で、ほぼ中央に一条の縄線が施される。

復元土器である1は覆土中位そして主に上位の遺物が接合し、さらに遺構より沢側のO10区出土のものが接合した。LR縄文施文後、沈線文とミガキ調整によって磨消縄文とする。内彎する口縁部形態に特徴がある。2は覆土中位および周辺の調査区のものに接合した。ナデ調整により無文にした後、縦方向に連続する刺突列を器面に巡らせる。残存部から口径は3～4cmで、口唇にも刺突がある。3はRL縄文を縦方向に施文後、口縁部をナデ調整によって無文にし、沈線および草本による半截竹管によって押し引き、折り返し口縁上に沈線、押し引き施文をする。4は、2ないし3段の折り返し口縁を成形した後、RL縄文を施文する。5の胴部には輪積痕が残る。複数段連続する折り返し口縁のようにする。RL縄文地文である。補修孔が残る。6・7はLR縄を横走させた後、口縁部をミガキないしナデ調整によって無文にし、上からLR縄線を施す。7の内面にはミガキ調整が施されるが、輪積痕と指頭による成形痕が残る、草本を思わせる擦痕がある。胴上部で丸みを帯びて膨らみ、一旦、窄まったところで直立して立ち上がる涌元式に伴う沈線文を持たない土器に特有な器形のひとつである。8は周辺の包含層と覆土中位のものが接合した。RL縄文施文後、沈線文、そして沈線内にミガキ調整を施す。三角形の突起様の波頂部が連続する。残存部から口径は12cm程度である。9は覆土中位からの出土である。RL縄文地文の後、沈線文を施す。10はLR縄文施文後、沈線文を施す。底面および底面際の胴部にはミガキ調整を施す。11は覆土中位から下位にかけての遺物が接合した。折り返し口縁成形後、粘土紐を貼付して、LR縄文を横走させる。12はRL縄文地文である。口唇部には平坦面をとりLR縄文を施す。二股で突起様の波頂部を持つ。13は粘土紐を貼り付けた後、縦方向のRL縄文を施文する。口唇部には平坦面をとりLR縄文を施す。14は縦方向のミガキ調整で無文の土器である。輪積痕が明瞭に残る。15はLR縄文にLを左巻きにした付加条縄文を地文とする。口縁部には2条のRL縄線を施す。底面および底面際はミガキ調整。16は内・外・底面いずれもヘラによるミガキ調整である。張り出す底部形態で、底径4.2cmの小型である。

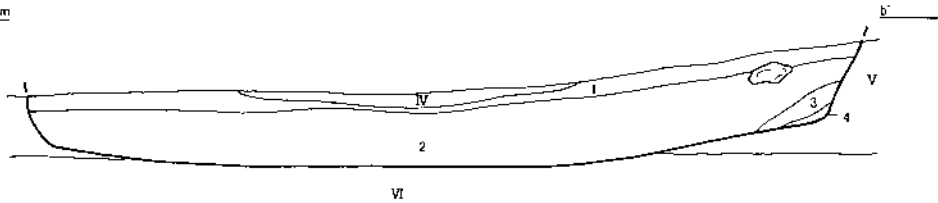
17～25は再生土製品である。20以外は土器破片の縁辺を細かく打ち欠いて円板形を作ろうとしたも



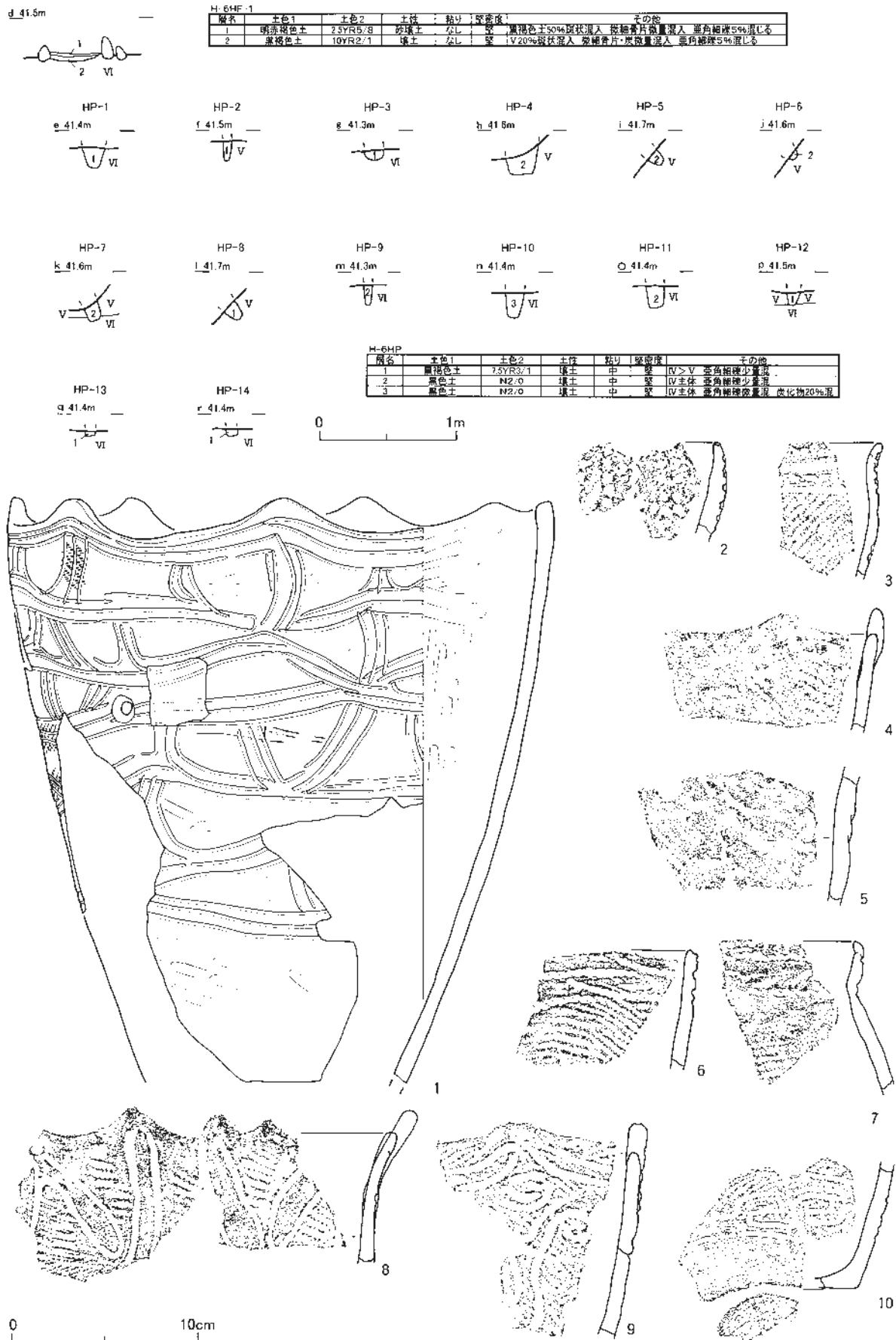
# H-6



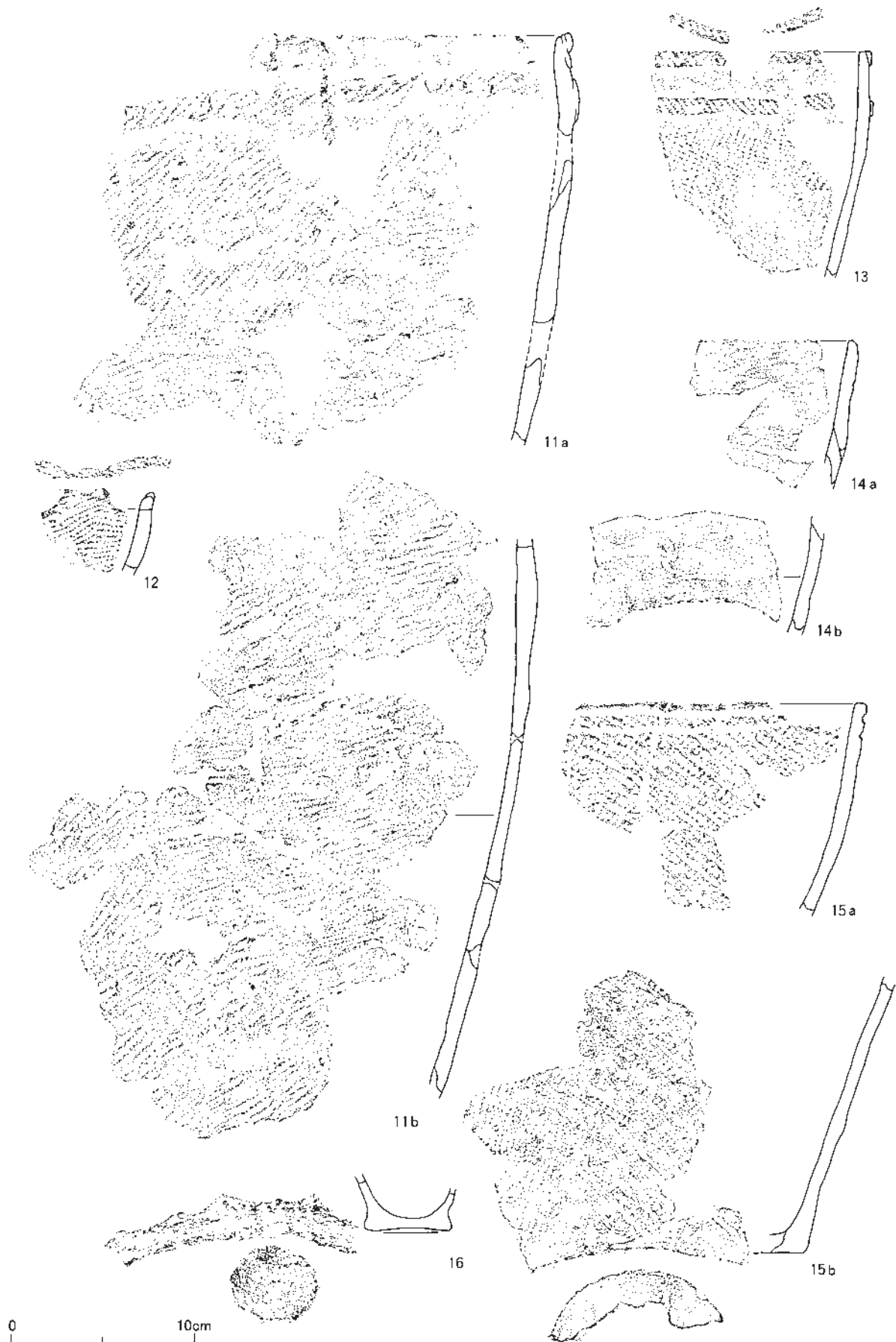
H-6						
層名	土色1	土色2	土性	粒径	堅密度	その他
1	黄褐色土	10YR1.2/1	塊状土	細	軟	IV主体 垂角細粒15%混入
2	黄褐色土	10YR2/1	塊状土	なし	硬	IV主体 垂角細粒15%混入
3	黄褐色土	10YR1.7/1	塊状土	中	軟	IV主体 垂角細粒7%混入
4	にんじん色褐色土	10YR4/3	塊状土	細	軟	V-VI



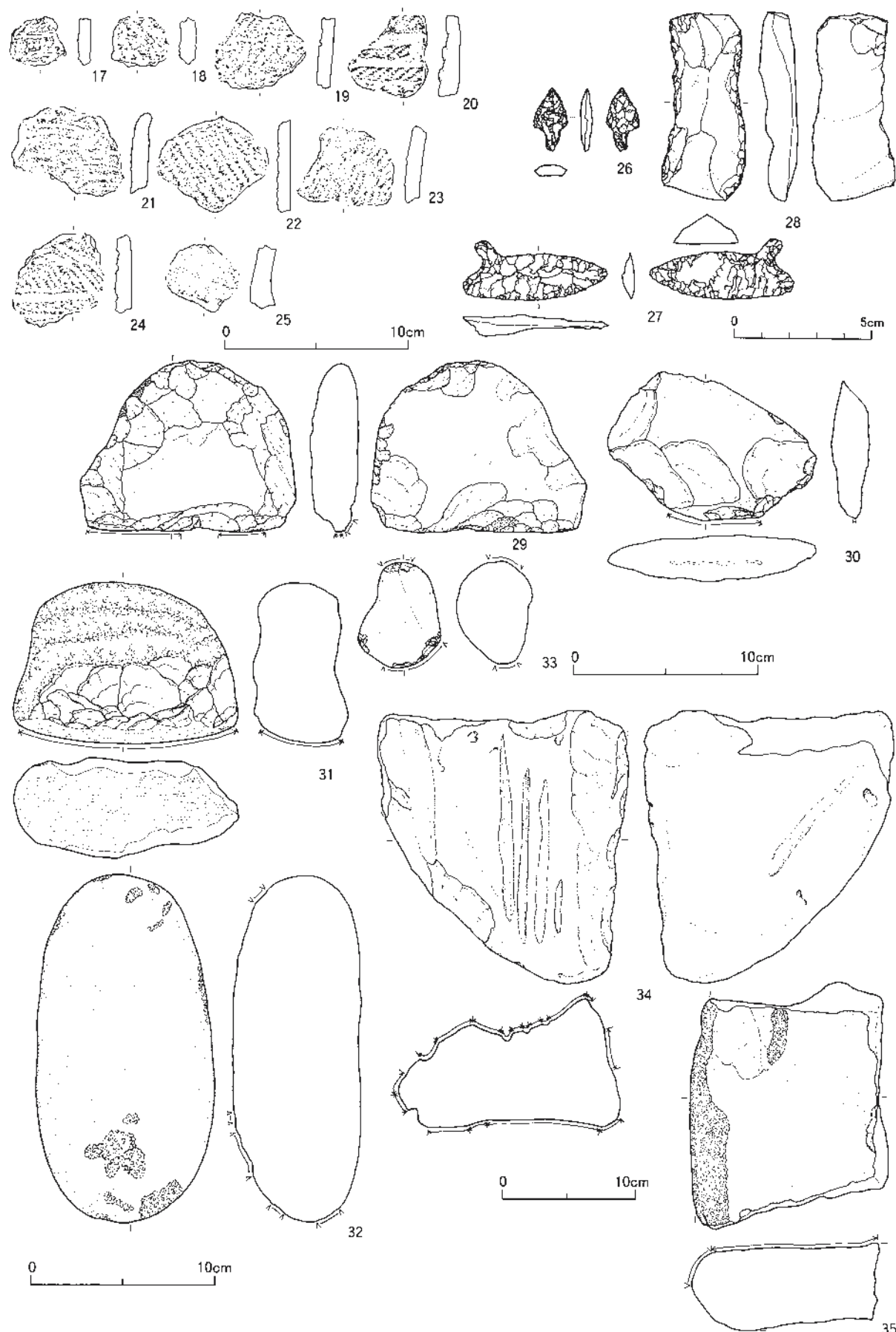
図III-2 H-6 (1)



図III-3 H-6(2)と遺物(1)



図Ⅲ-4 H-6の遺物(2)



図III-5 H-6の遺物(3)

のと考える。20は擦りによって隅丸方形に成形され、錘状に四辺に凹み部分を持っているものが欠損したものである。17・21・23は覆土上位から出土し、18・22・24は覆土中位から、19・20・25は覆土下位からの出土である。17～19・23～25はIV群a類、20～22はIII群a類の破片を加工したものである。**石器**：26・28・29・31は覆土下位、27は覆土上位、30・33は覆土中位、32・34・35は床面からの出土である。26は石鏃、黒曜石製で、両面全面調整、有茎凹基である。再生をしたものか側縁には細かい調整が刺突部にめぐる。27はつまみ付きナイフである。珪質頁岩の横長剥片を素材とする。刃部は柳葉形で、その一側縁の端部につまみ部分を有する。28はスクレイパーである。頁岩の縦長剥片の両側縁に明瞭な調整がある。背面の上半分にほぼ対応して微妙なノッチ状の凹みがある。つまみ付きナイフの装着部を連想させる。29・30は扁平打製石器である。いずれも板状の安山岩を素材とする。29は両面の縁辺に打ち欠きによる整形が見られる。一側縁について機能部は最大幅1cmの面をなす。機能面には敲打痕があり、その周辺には敲打の際のものか細かい剥離がめぐる。30は機能部について両面の縁辺に打ち欠きによる整形が見られる。機能部は面を持たず、その縁辺には敲打の際のものか細かい剥離がめぐる。31は北海道式石冠で、安山岩を素材とする。全面を敲打によって整形する。機能面には長軸方向およびに長軸に対して45°の角度で擦痕がはしる。機能面の周辺について敲打の際のものか細かい剥離がめぐる。32・33はたたき石である。32は安山岩の長楕円礫を用いたもので、主として長軸の端部に微妙な敲打痕がある。33はたたき石で覆土中位からの出土である。頁岩の垂円礫を用いたもので、長軸の上下端部に敲打痕がある。34は砥石で床面からの出土である。濁川火砕流起源の安山岩を用いている。楕円礫の割礫を用いたもので、両面に顕著な擦痕がある。正面にした側には所謂玉砥石を思わせる溝がある。側面にも顕著な擦痕がある。35は台石で床面からの出土である。板状の安山岩を用いている。一平坦面に擦痕がある。残存する側縁には敲打痕がある。(大泰司)

H-7 (図Ⅲ-6～8、図版3・4・36・37)

**位置・立地**：K・L-11 標高43m付近の平坦面。

**規模**：3.97/3.88×3.71/3.56×0.23m

**確認・調査**：IV層下面で黒色土の落ち込みとして確認。

**覆土**：IV層の下に、掘り上げ土等の流入による層が一枚ある。自然堆積である。

**形態**：平面形はやや角張った円形で、床は平坦で、壁の立ちあがりはやや緩やか。

**付属遺構**：西側に石で囲われた炉を1基持つ。南東側の壁際に柱穴が4か所ある。また、炉の周りには深さ2cm程度の黒色土の線が廻っているが、木根の可能性もある。柱穴のある南東側の壁際に一部床がベンチ状に張り出している箇所がある。

**遺物出土状況**：覆土中から土器1122点、石器・礫が合わせて70点が出土した。

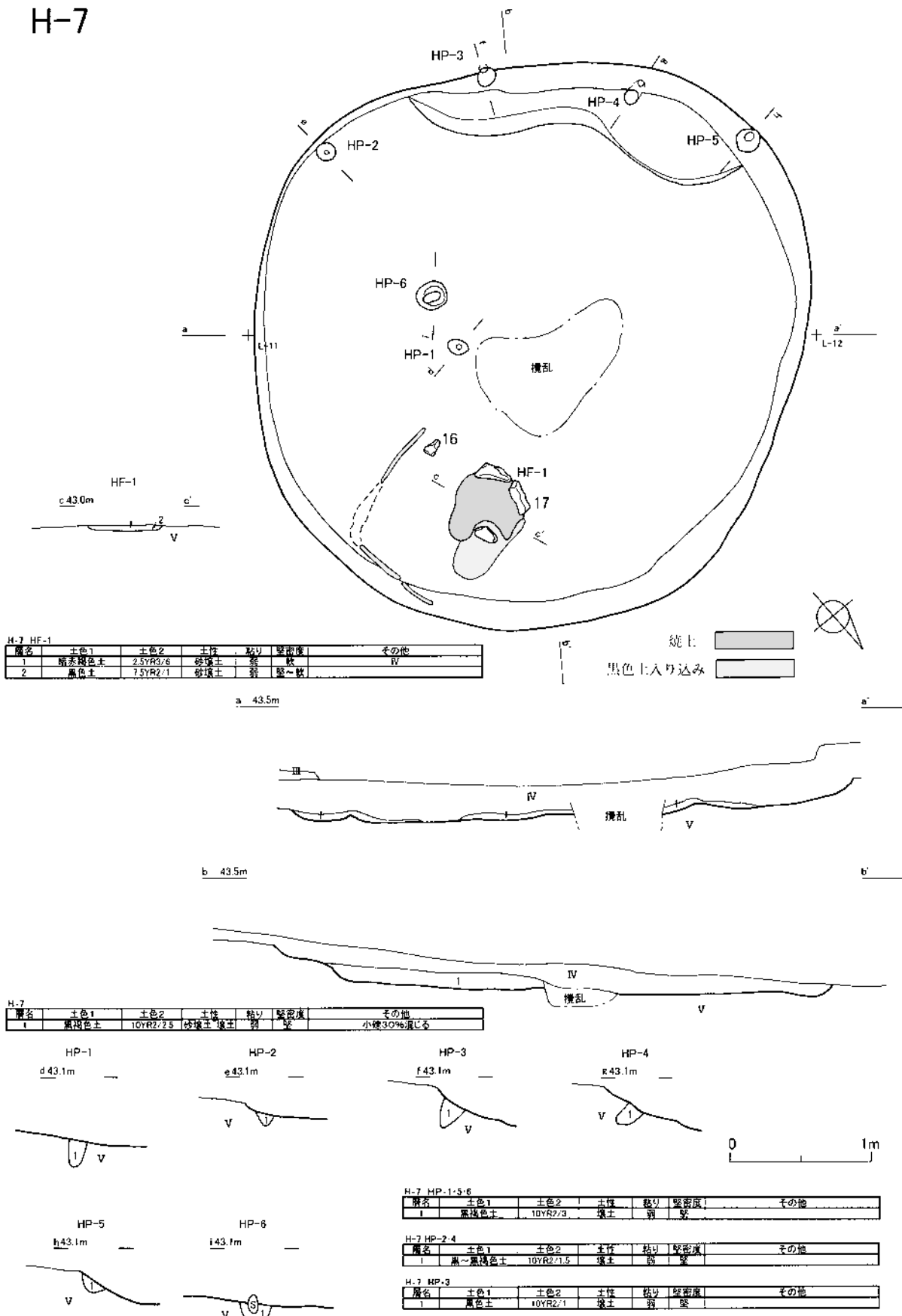
**時期**：床面出土遺物はないが、遺構の形態、覆土遺物より縄文時代後期前葉のものと思われる。

(中山)

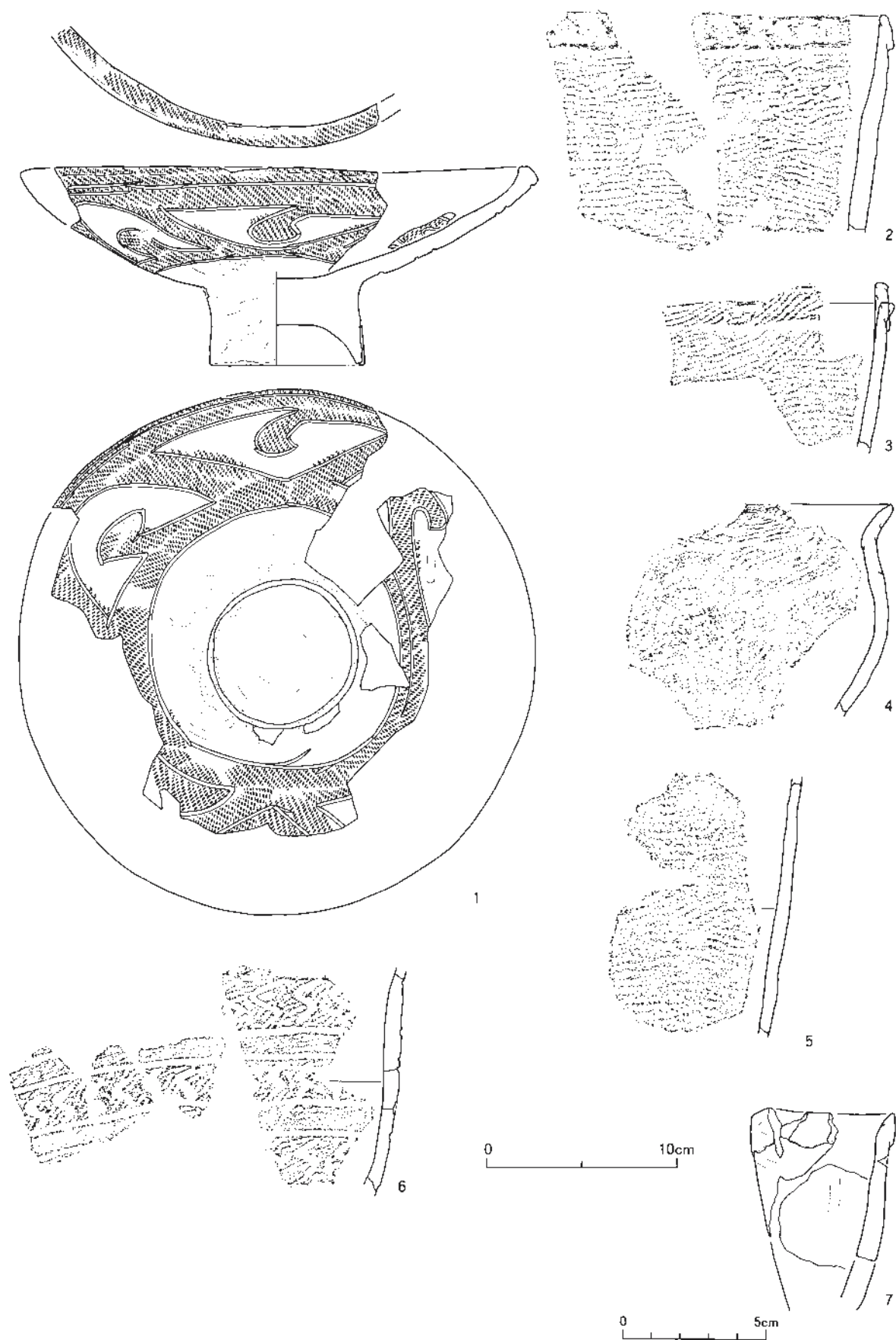
**掲載遺物 土器**：いずれもIV群a類である。1は白坂3式、6は大津式である。1は覆土上位と付属遺構HP-4そしてK10区を中心とした、遺構より沢側の遺物と接合している。2は包含層出土のものであるが遺構の覆土上位から中位にかけての遺構のものと同一体である。3は覆土中位のものと同様の包含層のものが接合した。4は覆土中位のものである。5は覆土上位と下位のもの同士が接合した。6は覆土上位のものと同様の緩斜面にたいして遺構より上位の調査区から出土したものが接合した。7は覆土下位の遺物と遺構より沢側の調査区からのものが接合した。

1は台付き浅鉢である。RL縄文を文様に則して施文後、沈線でなぞり、ミガキ調整を施して磨消

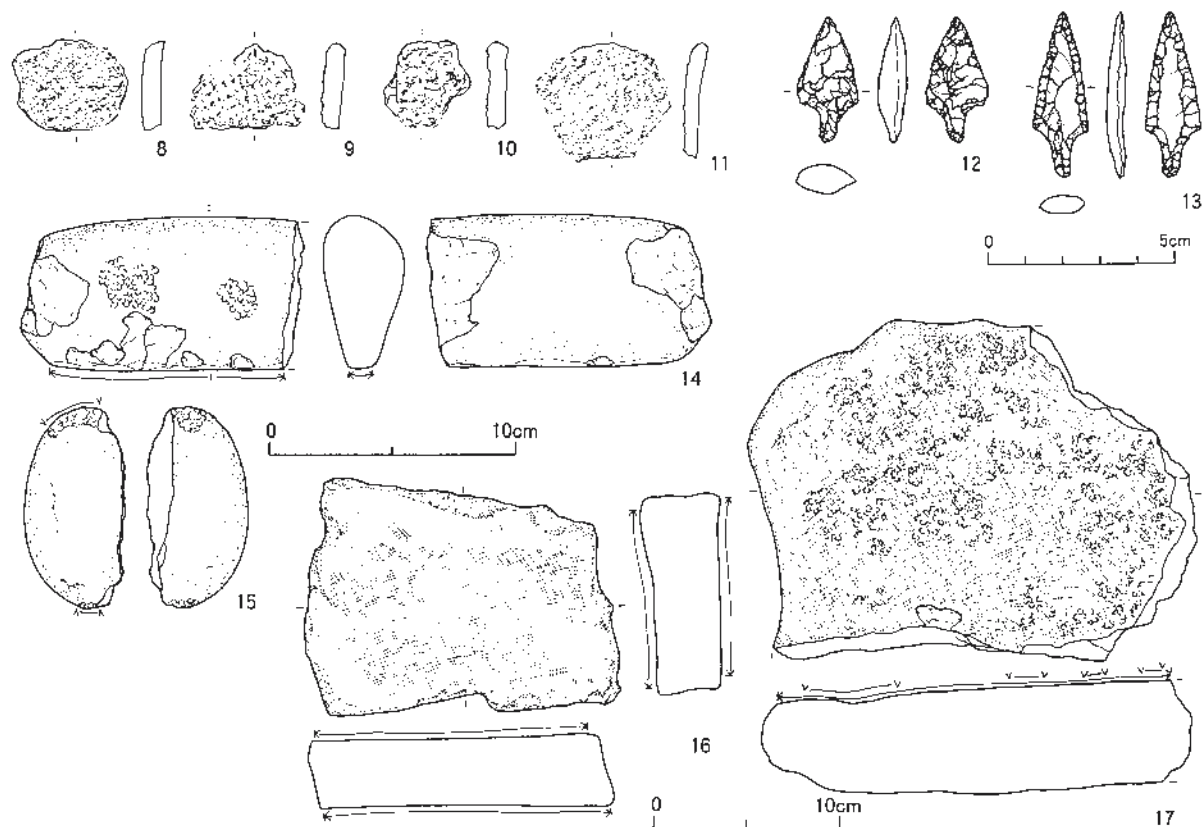
H-7



図III-6 H-7 (1)



図Ⅲ-7 H-7の遺物(1)



図III-8 H-7の遺物(2)



縄文とする。器内面はミガキ調整、上げ底の内面はナデ調整である。2はL縄文を施した後、折り返し口縁を成形する。3は折り返し口縁成形後LR縄文を横走させる。

4はL縄文を横走させる。口縁部はよく外反する折り返し口縁である。壺形の器形で、胴上部で丸く膨らみ胴下部はすぼまり、そしてそこには煤が付着している。5はLR縄文を横走させる。6はLR縄文施文後、沈線を施し、無文部はナデ調整である。7はミニチュアのIV群a類土器である。覆土下位のものと同遺構より沢側の調査区からのものが接合した。ミガキ調整で無文にした後、貼付により無文の折り返し口縁を成形する。内面はナデ調整である。

8～11は再生土製品である。Ⅲ群a類土器の破片について、縁辺を細かく打ち欠いて円板形を作ろうとしたもの。10は覆土上位から出土し、8・9・11は覆土中位からの出土である。

**石器：**12・14は覆土上面、13・16は覆土中位、15・17は覆土下位からの出土である。付記すると、14・16は土層観察用のベルトから出土した。

12・13は石鏃である。12はメノウ製である。両面全面調整で、肉厚な素材である。凸基有茎で長軸が短軸の2倍前後の長さがある。13は珪質頁岩製で、両面縁辺のみの加工である。凸基有茎で長軸が短軸の3倍以上の長さがある。14は扁平打製石器で、安山岩製の長楕円礫を素材とする。一側縁に顕著な擦痕がある。長軸方向に擦痕はのび、敲打のためか微細な剥離が周囲をめぐる。機能部を使用時にわれたものである。残存する一側縁は打ち欠きにより直線的である。15はたたき石で厚みのある安山岩の楕円礫を用いる。長軸両端に敲打痕があり、図化した下端を使用時に割れたものと考える。16は砥石であり、凝灰岩製である。長方形の板状の礫に対して主に長軸方向に磨りを行っている。17は台石でHF-1の炉石であった。安山岩製で、板状の礫を表裏の平らな面に擦痕と敲打痕がある。

(大泰司)

H-11 (図Ⅲ-9、図版2・3・37)

**位置・立地：**O-10 標高41.5～41.7mの平坦面。

**規模：**3.48/3.16×(1.80)/(1.58)×0.21m

**確認・調査：**旧送電線のアンカー穴によって確認したH-6を大きな住居跡と想定し、調査を進めていたが、ベルトを設定してのトレンチ調査を行う中で、2軒の住居跡の重なり合いであることが判明した。このため新しく確認されたほうの住居跡をH-11として調査を進めた。北側の約3分の1をH-6に破壊されており、さらに中心部分をP-56で破壊されているため、残存部分は少ない。

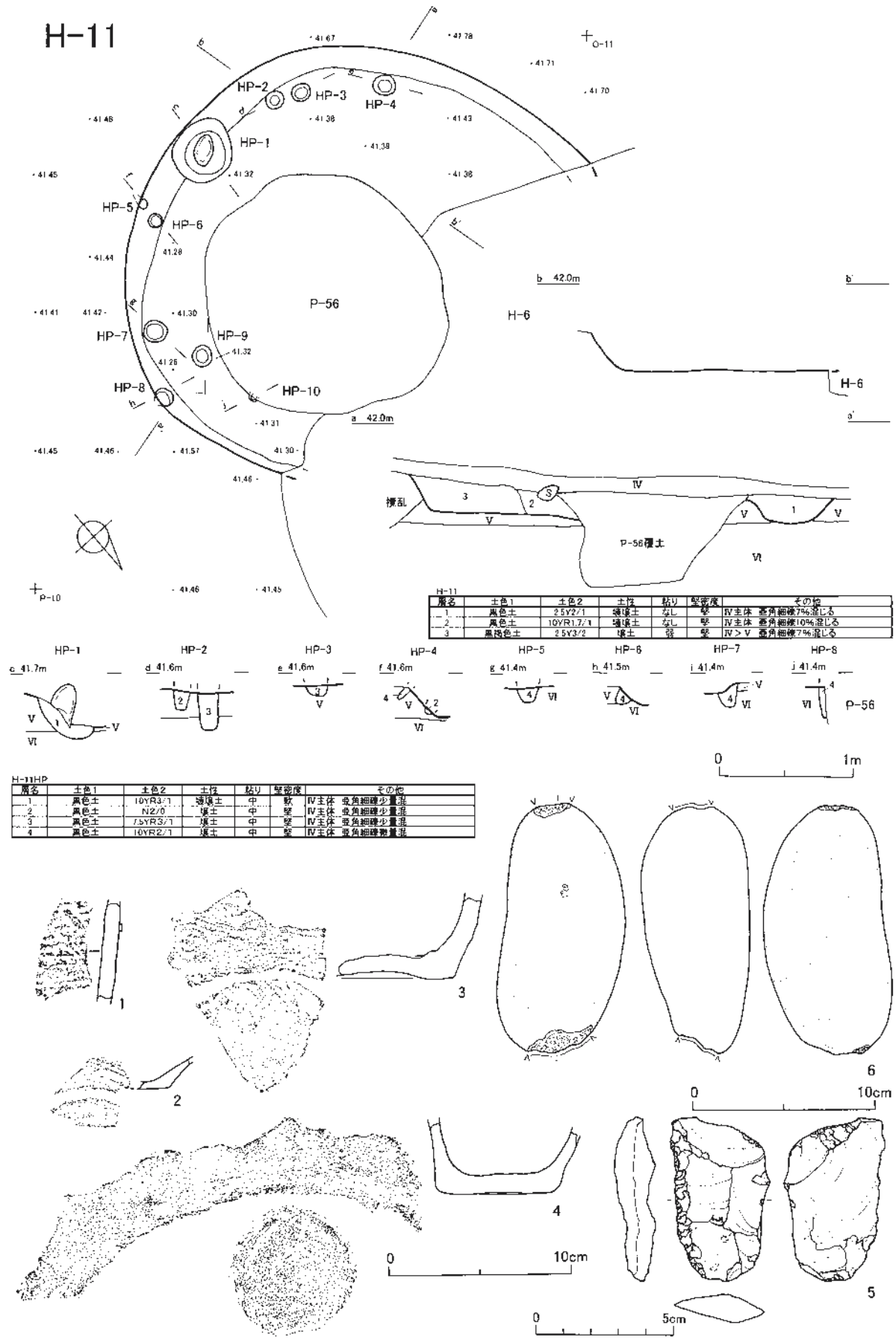
**覆土：**残存部分は少ないが3層に分層した。自然堆積によるものと考えられる。

**形態：**H-6及びP-56との重複で平面形の一部を欠くが、残存部分から平面形は円形を想定する。床面はV層を掘り窪めたものであるが、P-56によって中央を壊されているため、形状は定かではない。壁は緩やかに立ち上がる。

**付属遺構：**一部V層を堤状に掘り残しているものが東側で確認された。しかしながら大半がP-56に切られている。用途等の詳細は定かではない。柱穴は全部で10基確認されたが、大きさや掘り込みの深さは多様である。HP-1に関しては扁平礫が立っており、一応、この住居跡の付属ピットかと考えたが、あるいはH-11の廃絶後に掘り込まれた別のピットであるものかもしれない。HP-10はP-56に切られている。

**時期：**遺物が希薄であるため、判断は難しいが、H-6以前の構築であることは確実である。周囲の出土遺物から考えて、縄文時代中期中葉から後期前葉にかけての時期に構築されたものと考えられる。

(影浦)



図III-9 H-11と遺物

**掲載遺物 土器：**1はⅢ群a類で円筒上層d式に並行するものである。付属遺構HP-12からの出土である。LR縄文地文の上に粘土紐を貼付する。

2～4はⅣ群a類である。2・3は覆土中位からの出土である。4は覆土下位からの出土である。2はLR縄文地文の上に粘土紐を貼付する。黒色化した塗膜が残り、小型の特殊器形と考える。3・4は底部破片である。3は底面が上げ底で、木の葉の圧痕がある。外面は横方向のミガキ調整で、砂粒が左方向へ抜ける。4は内外面および底面ミガキ調整。

**石器：**5・6はいずれも覆土下位からの出土である。5はスクレイパーで、覆土下位からの出土である。流紋岩の横長剥片を素材とする。明瞭な剥離が背面右側縁に並び、端部付近に曲線的な刃部を形成する。6はたたき石で、覆土下位からの出土である。安山岩の棒状に近い楕円礫を用いる。長軸両端に敲打痕がある。(大泰司)

H-12 (図Ⅲ-10～14、図版5・7・38・39)

**位置・立地：**L・M-12・13 標高42.5m付近の平坦面。

**規模：**4.44/4.44×4.34/3.98×0.22m

**確認・調査：**V層上面で黒色土の落ち込みと、石組炉を確認した。当初ベンチ付きの住居と考え調査していたが、床面(標高42.4m付近)に焼土があることから、2軒の住居の重なったものとした。下にある住居はH-16である。

**覆土：**自然堆積による2層に分けられる。Ⅳ層主体の流れ込み土である。

**形態：**平面形はほぼ円形。壁の傾斜は緩やかで、特に西側は立ちあがりがかたまりしない。床面は平坦だが緩やかに傾斜している。

**付属遺構：**住居の中央からやや南よりの床面に56×38cm程の方形の焼土がある。周囲に小柱穴が多く、柱穴の確定は困難であったが、10基を柱穴とした。中でもHP-2からは石製品である、石棒が立った状態で出土した。また、HP-4は掘り方が認められた。ほぼ中央にある石組炉には焼土が無く、住居の床面より5～6cm高いところに位置し、規模も60cmぐらいと他の包含層の石組炉と同じぐらいなので、この住居のものでは無い可能性がある。

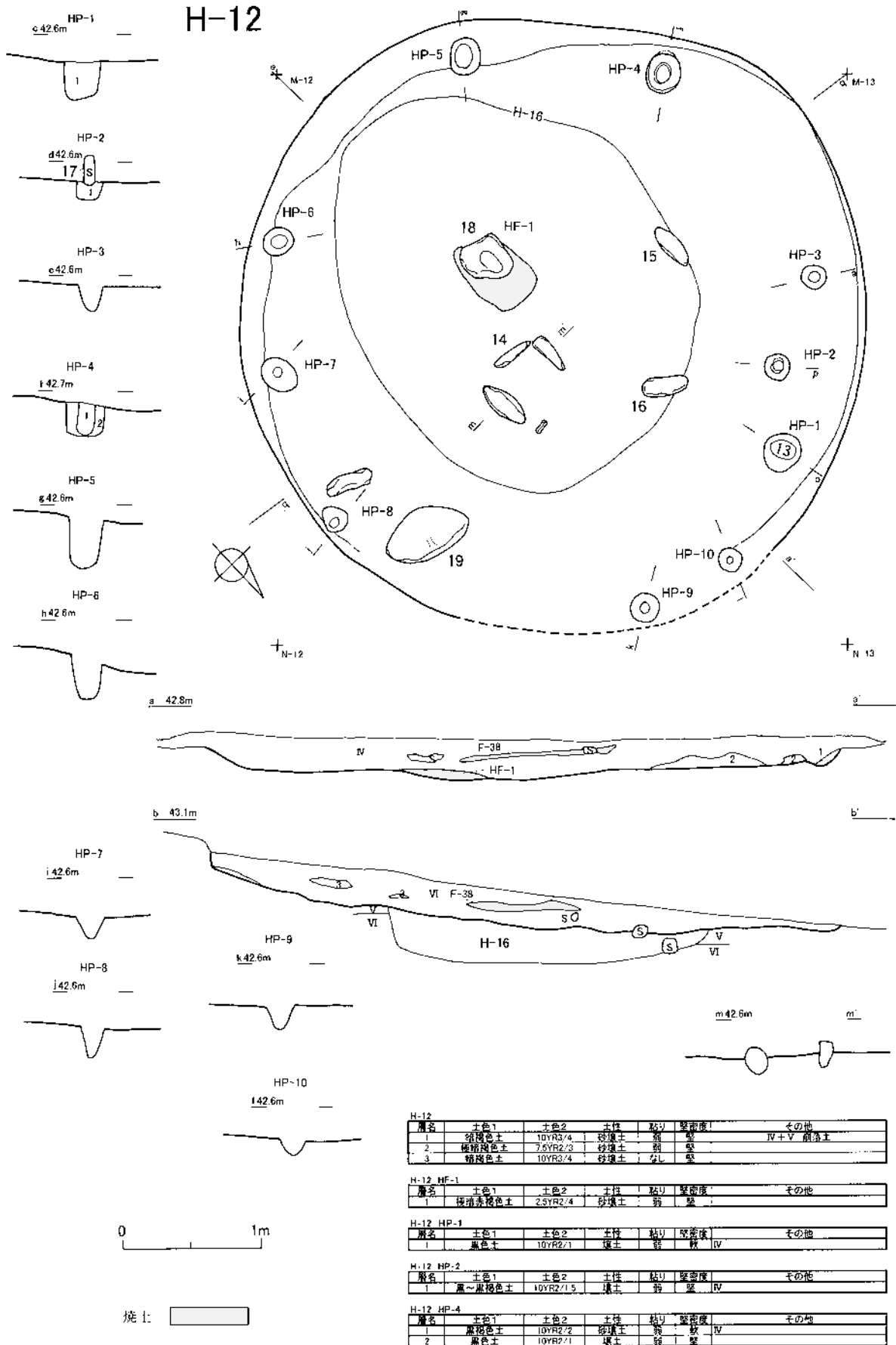
**遺物出土状況：**出土遺物は覆土上面のものが多く、床面から出土した遺物は無い。壁の立ちあがりのかたまりしない住居西側に礫が2個並んで出土した。入り口を示すものであろうか。

**時期：**住居形態と覆土の遺物より縄文時代後期前葉のものと思われる。(中山)

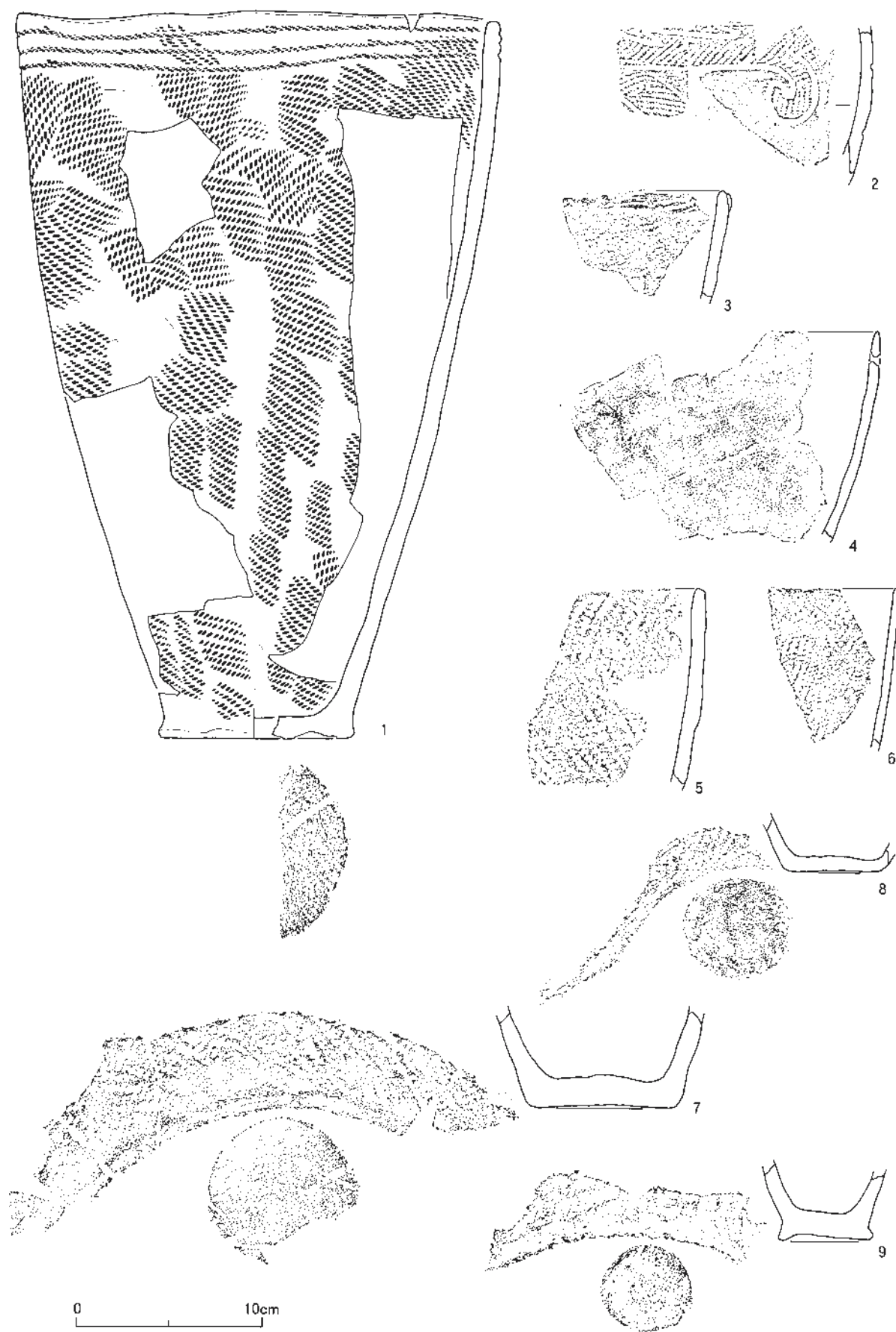
**掲載遺物 土器：**いずれもⅣ群a類である。2は白坂3式であるが、Ⅳ群b類に近似するものである。1は覆土上位から中位にかけてのもの、2・4・5は覆土下位、3・8は付属遺構からの出土である。3はH-12HF-1覆土、8はH-12HP-16覆土からの出土である。6・9は覆土中位、7は覆土上位からの出土である。

復元土器である1は、覆土上～中位のもの、遺構が構築されたM12・13区のもの、ものが接合した。LR縄文を横走させ、口縁部をナデ調整によって無文とし、LR縄線を3条施す。微妙に張り出す底部形態であり、底面は木の葉圧痕の上に、ミガキ調整を施す。

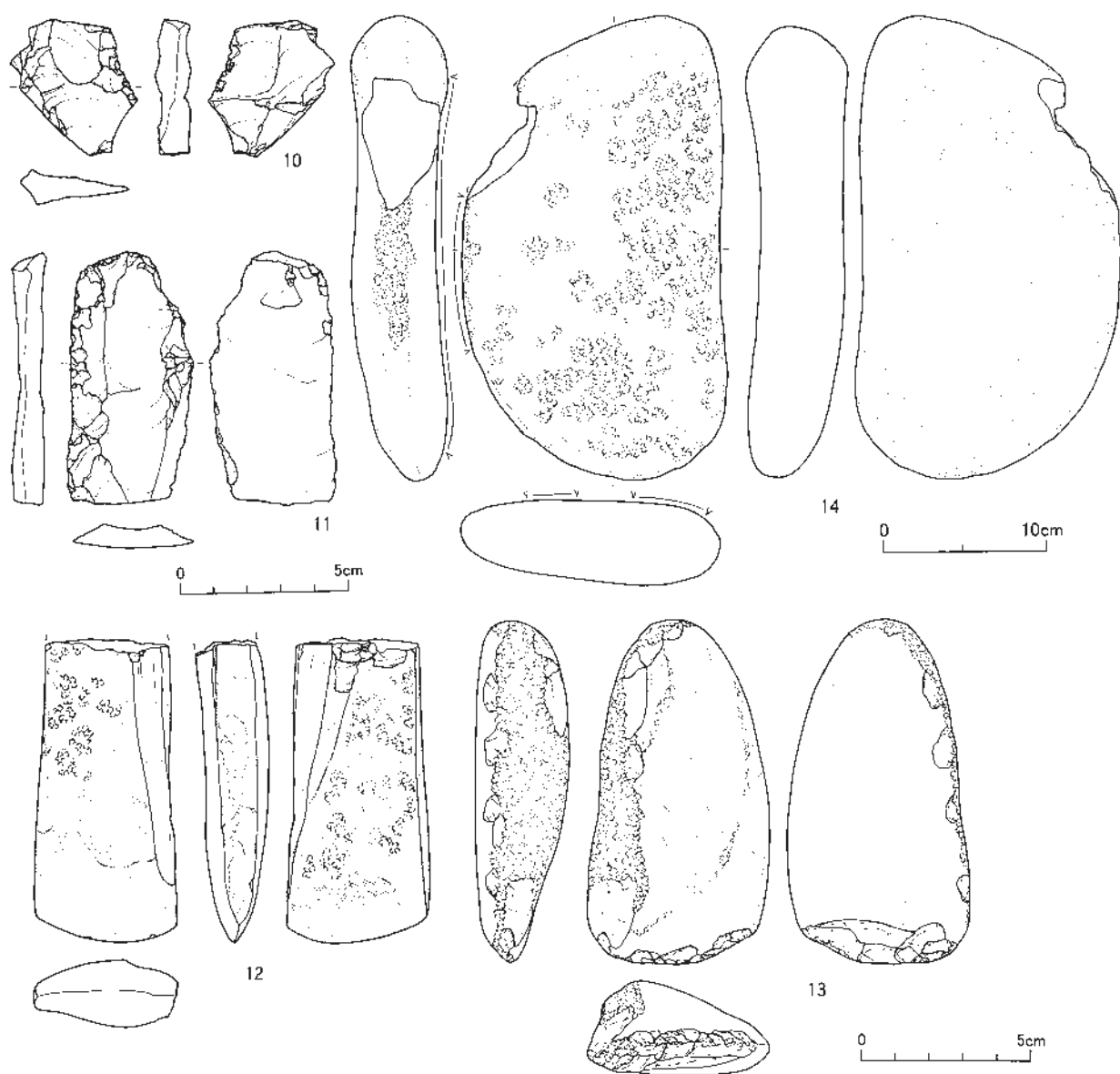
2は覆土下位のもの、この遺構と切り合うH-16覆土中位のもの、ものが接合した。RL縄文による磨り消し縄文。3は折り返し口縁を成形した後、LR縄文を施文する。4は外面ナデ調整によって無文にする。5は口縁部RL縄文、胴部はLRL縄文を施す。6はLRL縄文地文で口縁部は横方向胴部は縦方向に施文し、折り返し口縁を思わせる。内面は縦方向のミガキ調整だが、輪積痕が残る。7はLRL縄文地文を縦方向に施文する。底面は一定方向のミガキ調整である。8はRL縄文地文である。



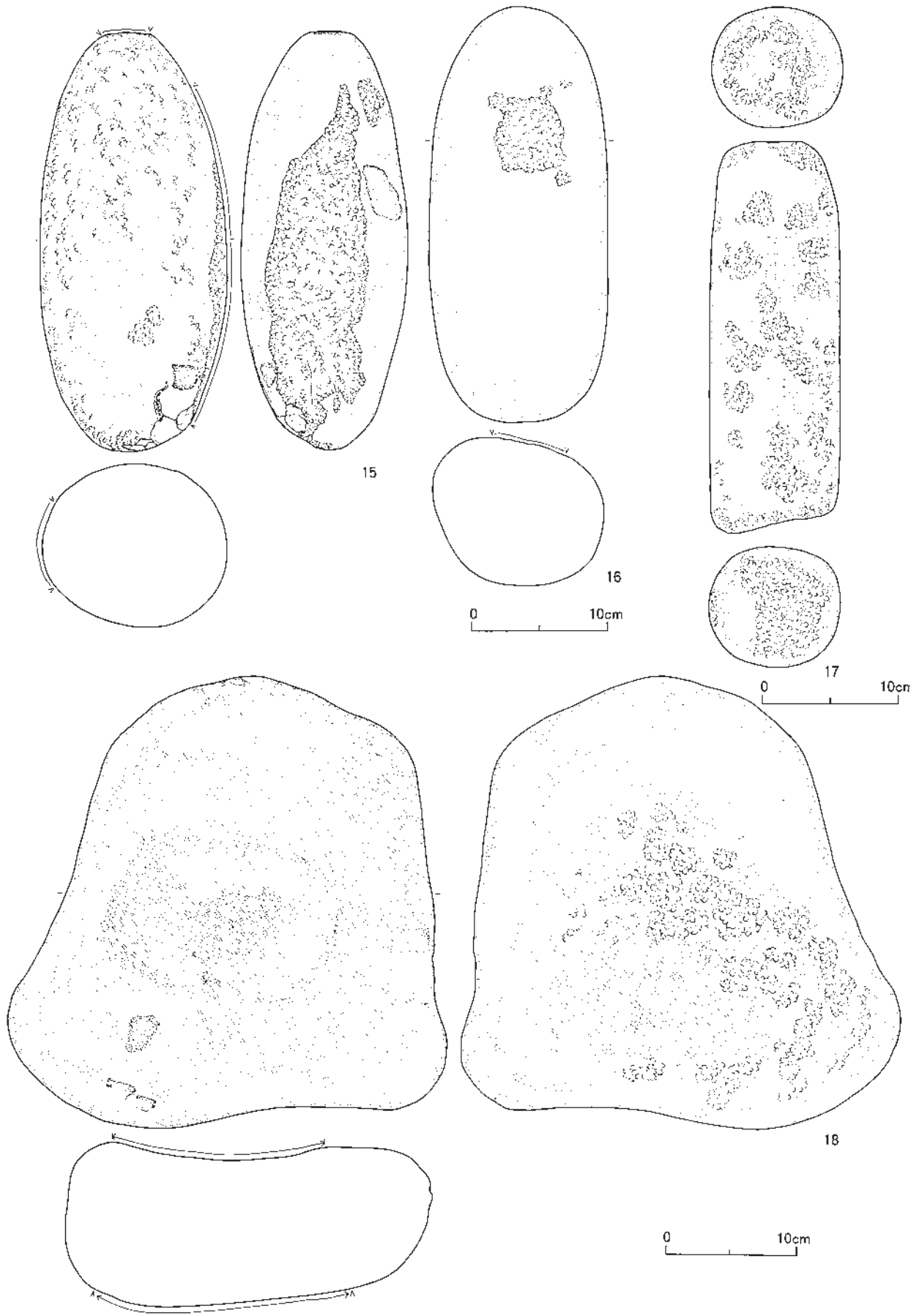
図III-10 H-12



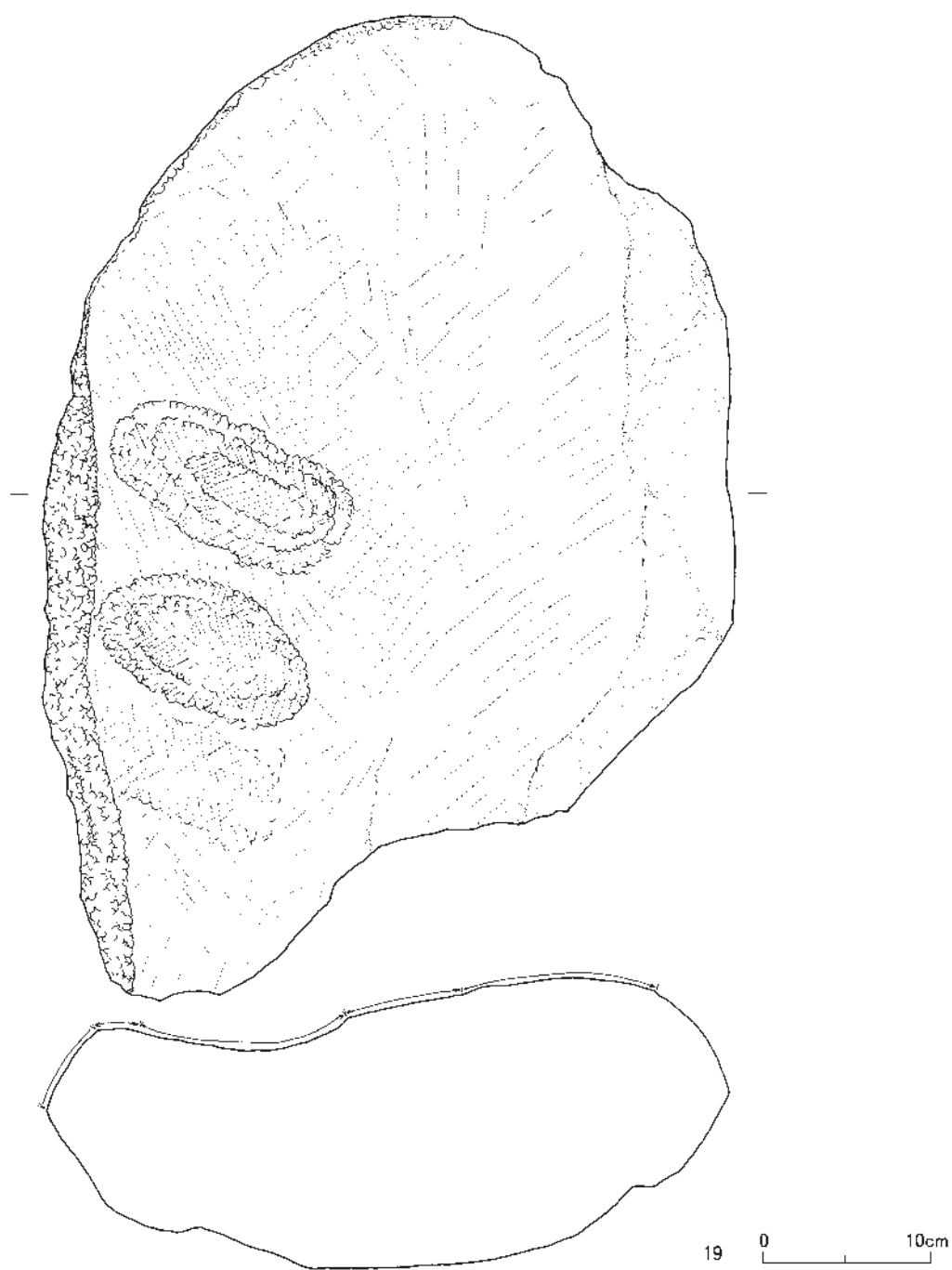
図Ⅲ-11 H-12の遺物(1)



図III-12 H-12の遺物(2)



図Ⅲ-13 H-12の遺物(3)



図Ⅲ-14 H-12の遺物(4)



底面はミガキ調整である。9はミガキ調整により無文地にする。張り出す底部形態で、底径4.5cm、底面ミガキで上げ底である。

**石器**：10・11は覆土中位、12は覆土上位、14・15・16・18・19は覆土、13・17は付属遺構からの出土遺物である。10はRフレイクで、チャートの剥片を用いている。一側縁に明瞭な剥離が並ぶ。剥離の押圧部分に潰れ等は確認できない。11はスクレイパーで、頁岩製の縦長剥片を素材とする。背面について両側縁に明瞭な調整を施し、右側縁には「つまみ付きナイフ」の装着部を思わせる凹みを有する。

12は石斧で覆土上位からの出土である。緑色泥岩を擦り切りによって整形したものである。全面に研磨が及ぶ。偏刃で弱凸強凸刃である。13は石斧で付属遺構HP-1覆土中から出土した。緑色泥岩製で、刃部が未調整である。素材本来の形状を生かしたものであり表面左側縁の膨らんだ部分を敲打によって調整した痕跡がある。全面に粗く研磨が施され、打ち欠きによって刃部を整形した痕跡がある。14は台石で覆土からの出土である。安山岩の扁平な楕円礫を用いる。一面について所々に敲打痕があり、正面図の右側縁、曲線のピークにも敲打痕がある。そしてその反対側の直線的な側縁側については被熱によるものか煤の付着がみられる、敲打痕の在る面のみでの付着で、一時期、炉石としての使用されたものである。使用痕の位置から台石に分類したが石組炉F-19とF-25で接合した炉石と類する石器である。15・16は石棒である。15は安山岩の棒状礫に整形のためと思われる顕著な敲打痕とかすかな擦痕が残る。先端部に平坦面を敲打によって整形する。16は安山岩の棒状礫の平坦な一部に敲打痕を持つ。

17は円柱状の石棒でHP-2覆土からの出土である。安山岩の棒状礫に整形のためと思われる敲打痕と擦痕が残る。両端部に平坦面を敲打と研磨によって整形する。18は台石である。両面に顕著な擦痕があり、片面は特に深く凹む。凹みの楕円形の形状が北海道式石冠の機能面を思わせる。19は石皿で安山岩の楕円礫の大型なものを素材として選択する。中央で、長軸よりやや側縁にずれた位置に顕著な擦痕による凹みを持つ。その凹みの中央に2ヶ所、楕円形の擦痕と敲打痕による楕円形の凹みが、長軸を平行にして並ぶ。その形状は北海道式石冠の機能面の形状を思わせる。またその2ヶ所の凹みとならんで同様な楕円形状の擦痕がやはり長軸方向を同一にして並ぶ。 (大泰司)

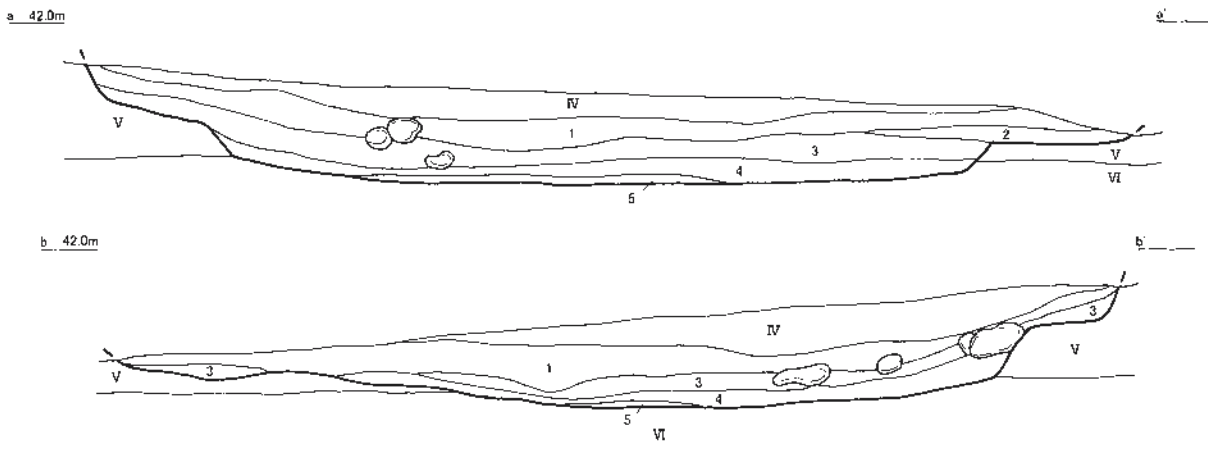
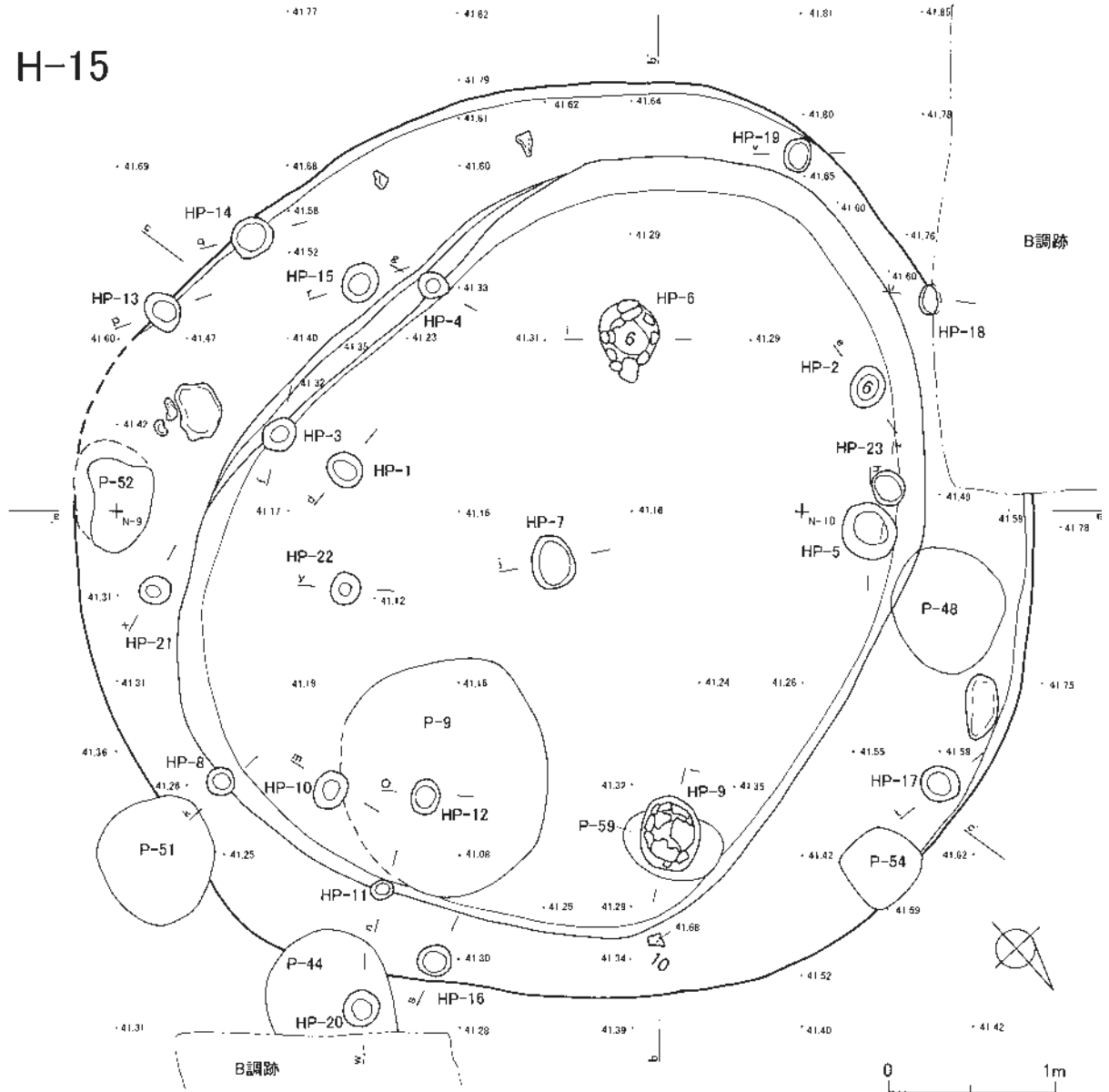
#### H-15 (図Ⅲ-15~28、図版6・39~49)

**位置・立地**：M・N-9・10 標高41.5~42.0mの平坦面。

**規模**：(5.68)／(5.62)×5.44／5.36×0.38m

**確認・調査**：M・N-10区にかけての試掘坑を掘り上げ、壁を精査したところ、一部に黒色土の落ち込みが観察された。周囲を広く精査したところ長軸4m以上の黒い平面形が現れた。このため十字にベルトを設定し、ベルト沿いにトレンチ調査を行った。トレンチ掘削段階で多量の土器片、フレイク、礫・礫片等が出土し、それに骨片や炭が加わる状況であった。覆土は暗褐色土を主体としたもので層界は不鮮明であった。このため、ベルトを残しつつ、覆土を全体的に下げた。結果、西側において、縄文時代中期中葉の一括土器が複数個体分、壁側から中央にかけて流れ込んだような状況で出土した。覆土を完全に除去した状態でなかったため、住居廃絶後の窪みに投げ入れられたものだと考えられた。図化・撮影するためにこれらの土器をはじめとした出土遺物を残しつつ床面を検出していくと、住居の周縁が浅く、中央部で深くなるということが次第に明らかとなっていった。このため、2軒の住居跡が重複している場合と、ベンチ状の住居跡である場合との2つの可能性が考えられた。前者の場合は比較的浅い住居が最初に構築され、その後、その住居跡が埋没する段階において、深めの住居が構築された。そして、その深めの住居が埋没する過程において、縄文時代中期中葉の土器が窪みに

H-15



層名	土色1	土色2	土性	粘り	緊密度	その他
1	黒色土	10YR1.7/1	埴壤土	粘	堅	IV主体 垂角繊維5%混じる
2	黒褐色土	7.5Y3.2	埴土	粘	軟	IV>V 垂角繊維1%混じる
3	黒色土	10YR2/1	埴土	中	堅	IV主体 垂角繊維5%混じる
4	黒褐色土	10YR3/1	埴土	粘	軟	IV>V 垂角繊維7%混じる
5	黒色土	7.5Y2/1	埴土	粘	堅	IV主体 黄片・炭・焼土約20%混在混じる・垂角繊維7%混じる

図III-15 H-15(1)

投げ入れられたという順番が想定された。床面を検出していくまでの段階で、土層観察に残したベルトを精査し、覆土観察を試みたが、床面の段を境に、覆土の先後関係や、中央部に新しい住居跡の重複を想定する場合の壁の立ち上がり等は確認できなかった。しかしながら、住居廃絶後の窪地に投げ入れられた縄文時代中期中葉の土器を見ると、廃絶後、それほど年月の経っていない段階のものと考えられ、住居も縄文時代中期中葉のものである可能性が高いよう思われた。ベンチの伴う住居は縄文時代前期～中期前葉にかけて見られるという認識が先行したため、土層観察で遺構の重複関係を認知できなかったものの、2軒の住居跡が重複していると判断して遺物を取り上げ、調査を進めた。しかしその後、整理段階で土器の接合作業を進める中で、2軒の住居跡として取り上げた遺物が、ほとんど同時期の遺物であることが明らかとなった。現場段階の覆土観察で遺構の重複関係を確認できなかった事実を踏まえ、再検討した結果、ベンチを伴う1軒の住居跡と判断するに至った。

**覆土：**5層に分層した。いずれもIV層を基調としたもので、層界は不明瞭であるが、自然堆積と考えられる。

**形態：**平面形はほぼ円形を呈する。床面はなだらかに浅く窪み、やや凹凸がある。最下層の覆土5層においては、微細な骨片と炭を夥しく検出した。あるいは覆土5上面が床面であった可能性も考えられる。床の周縁にはベンチ状の段が巡る。ベンチ部分は全周しており、幅が広いところでは1mを越え、狭いところでは20cmほどと一定していない。壁は緩やかに立ち上がる場所と急角度に立ち上がる場所とがある。ベンチ部分も段差が明瞭な場所と、ほとんど段差の見られないところがある。

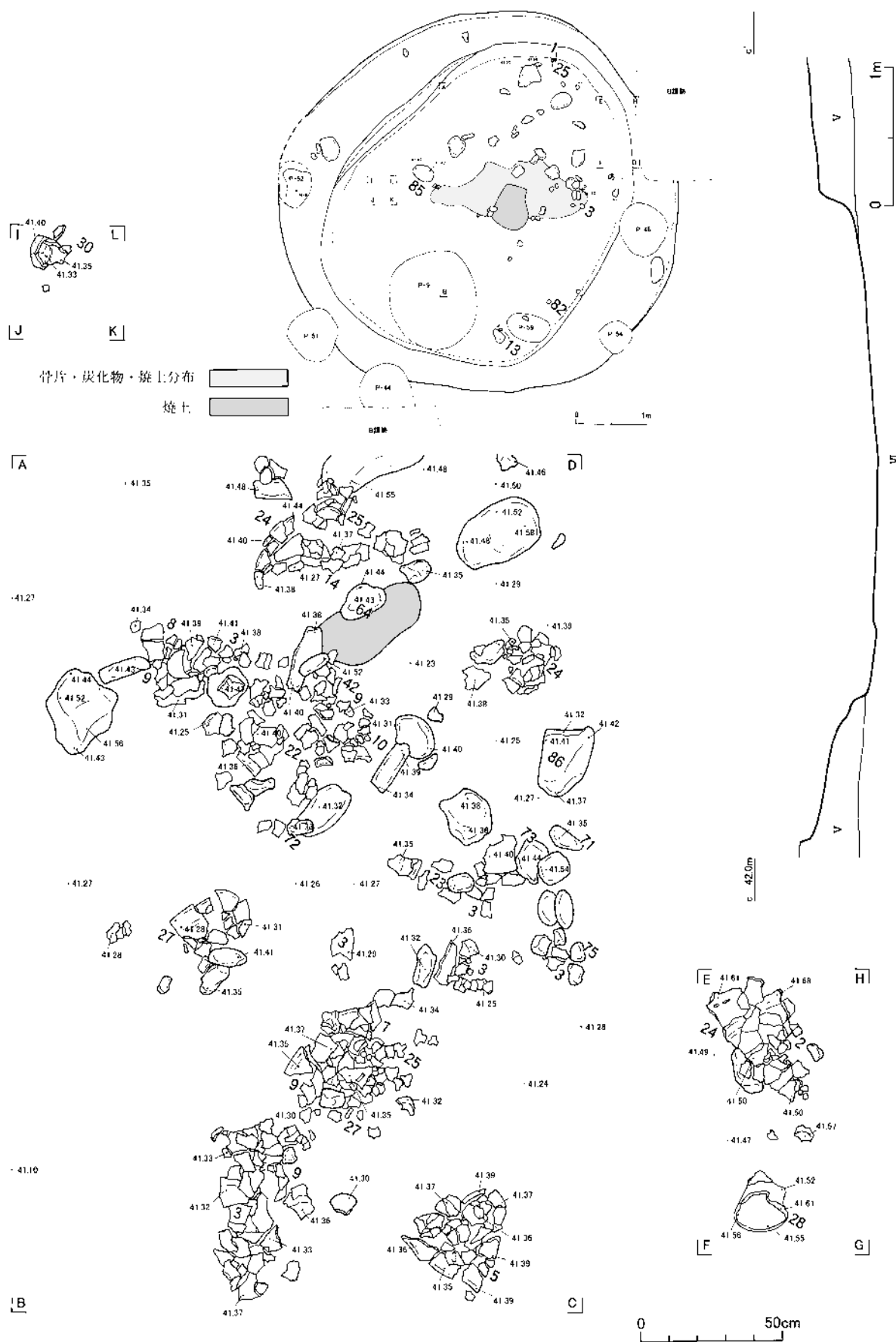
**付属遺構：**床面中央に焼土が検出され、覆土内遺物に被熱礫も含まれていたことから元々は炉があった可能性が高い。柱穴は全部で23基を数える。いずれもVI層の砂利層を掘り込んだものであり、覆土と自然層との層界は不明瞭なものが多い。検出面が円形を呈し、垂直な掘り込みを持つものを柱穴としたが、これらの中には木根痕等の自然攪乱もいくらか含まれているかもしれない。柱穴としたもののうち、HP-6とHP-9は掘り込みが深めで、覆土と自然層の間に礫を詰めていた。この2つは支柱穴の可能性が考えられる。

**遺物出土状況：**覆土中位から下位にかけて（特に覆土4層において）数個体の一括土器、及び石器等・礫が多く出土した。一括土器はいずれも縄文時代中期中葉のサイベ沢VII式相当のものであった。この住居に直接的に伴うものではなく、住居の埋没しかかった窪みに投げ入れたものと考えられる。

**時期：**覆土内に投げ入れられたと見られる一括土器がサイベ沢VII式相当であることから、それ以前で、そう時間が経過していない時期の構築が想定される。縄文時代中期前半と考えられる。（影浦）

**フローテーション成果：**床面直上の骨片を伴う焼土と、覆土中位覆土に骨片が混じっておりその土を採取した。その2ヶ所の試料をフローテーション法にて処理した。床面直上の骨片を伴う焼土からは、動物遺存体としては、ニシン、サケ・マス類、アイナメ、ブリ、ヒラメ、カレイ類、種不明なものを含め魚類が主に出土し、他に鳥類ないしは中形獣の部位不明のものが焼骨片として検出された。炭化種子として。クリ属とクルミ属のものが検出された。覆土中位からは、ニシン、イワシ、サケ・マス類、ウグイ類、タラ類、アイナメ、アイナメ科、ホッケ、ブリ、マダイ、タイ類、ヒラメ、カレイ類、種不明なものを含め魚類が主に出土し、他に、スズメ目、同定不可能なものを含め鳥類、種は不明だが中～大型獣の焼骨片が検出された。そのなかには種は不明だが、魚類の鱗棘製の骨針が、唯一、骨角器として検出された。炭化種子としては、タデ科、アカザ属、クリ属、クルミ属が出土した（詳細はVI章を参照）。

**掲載遺物 土器：**表記中に旧H-10とあるのは、H-15ベンチ部分からの出土を指している。復元土器1～9はⅢ群a類である。1・2・3・4・5・6・7・8・9はサイベ沢VII式土器ないしは並



図III-16 H-15 (2)

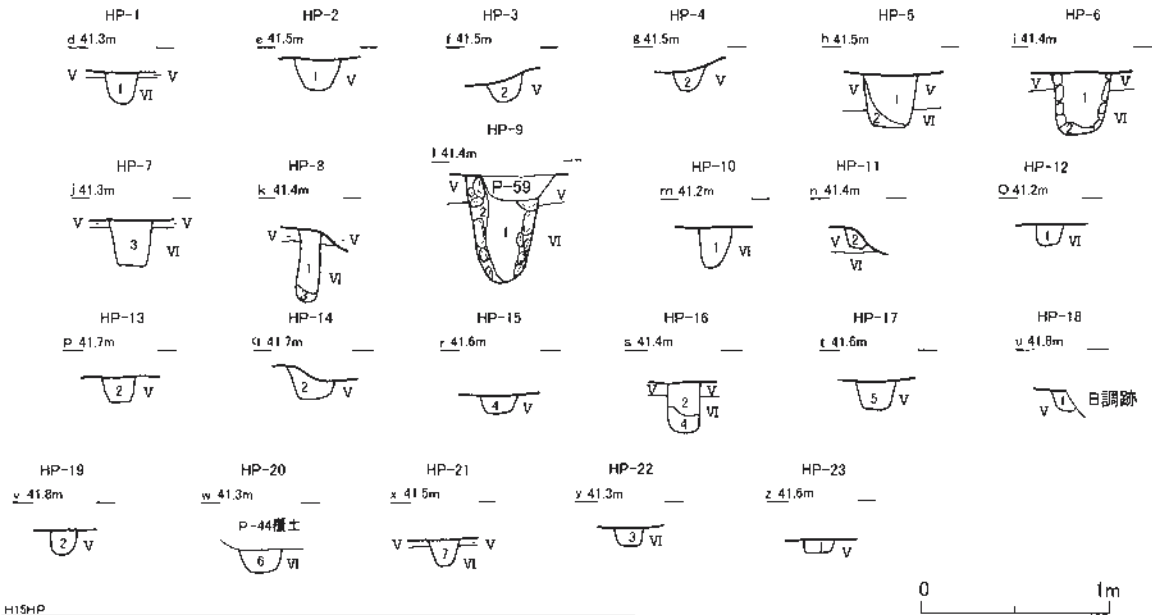
行である。1・2は床面から覆土上部までのものが接合した。3・8は床面出土のものが主体であり、覆土中位以下のものと接合した。4は覆土下位のものと同遺構周辺の調査区からのものが接合した。5は床面の遺物と覆土中位のもの接合した。6は床面および付属遺構HP-6および覆土下位からのものが接合した。7は床面と覆土下位からのものが接合した。9は床面のものを主として、覆土上～下位の遺物が接合した。

1は結束第2種R縄文で結束した2本の原体のうち一本にはr縄を巻きつけるたものを地文とし、口縁部には粘土紐を連続して貼付した上にL縄線を施す。器面について煤が胴部の最大径より上に付着している。2は結束第1種羽縄文地文施文後、RL縄圧痕を口唇に連続して施文する。波状口縁の中央に把手を貼付し、縄圧痕を施す。3は床面出土のものが主体であり、覆土中位以下のものと接合した。結束第2種羽縄文地文施文後、隆帯を貼付し、隆帯上および口唇にL縄を2本束ねたものを押圧する。内面はミガキ調整である。張り出す底部形態である。4と同一個体と考えられる破片は覆土中位から下位にかけてのものがある。底面は平底でミガキ調整である。5は結束第2種羽状縄文を施文する。口唇部にはヘラによる連続したキザミがある。内面はミガキ調整、外反する口縁部は横方向、その下は縦方向、底部際は横方向のミガキ調整である。底面は微妙な上げ底でミガキ調整を施す。6はRL縄文施文後、全面をナデ調整し、ほぼ無文とする。口唇部はヘラによるキザミを連続して施す。内面はミガキ調整で、口縁部は横方向、胴部は縦方向である。7は隆帯貼付後、結束第2種羽状縄文を施文、隆帯と口唇部には縄の圧痕がある。一对の突起には中央部貫通孔を成形する。8は結束第2種羽状縄文を施文し、口唇部にはヘラによる連続したキザミ、波状口縁の中央には貫通孔がある。底面は微妙な上げ底でミガキ調整を施す。9の底面には調整時の圧痕が残る。

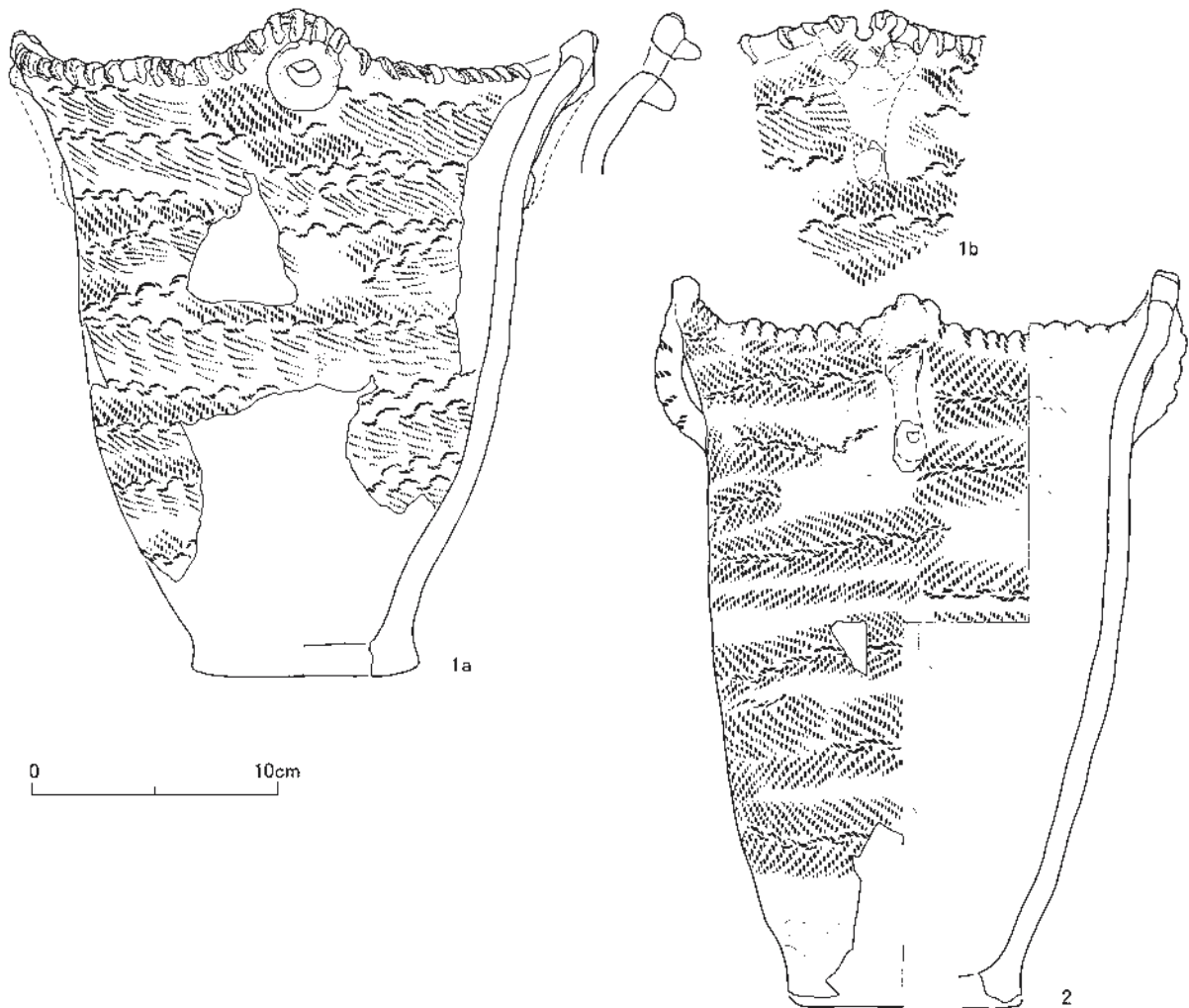
復元土器10・11はIV群a類である。10はH-15ベンチ部分である旧H-10床面からの出土であり、11は覆土下位からの出土であるが、胎土と焼成、そして旧H-10の遺物出土状況からIV群a類の時期のものとして判断した。10はナデ調整によって無文である。内面はミガキ調整で、底面はナデ調整である。11は漏斗を思わせる形状をした、土製品である。ナデ調整によって無文である。内面はナデ調整である。

12～33はIII群a類サイベ沢VII式並行である。12・16・18は旧H-10覆土上位、覆土上位からの出土である。13・25は覆土下位からの出土。14・24・27・32は覆土下位から床面にかけて出土したものが接合した。15・17・20・21・26・31は覆土の中位、旧H-10覆土下位からの出土。19・23・29・30は床面からの出土。22は覆土中～下位にかけて出土したものが接合した。33は付属遺構HP-2覆土からの出土である。

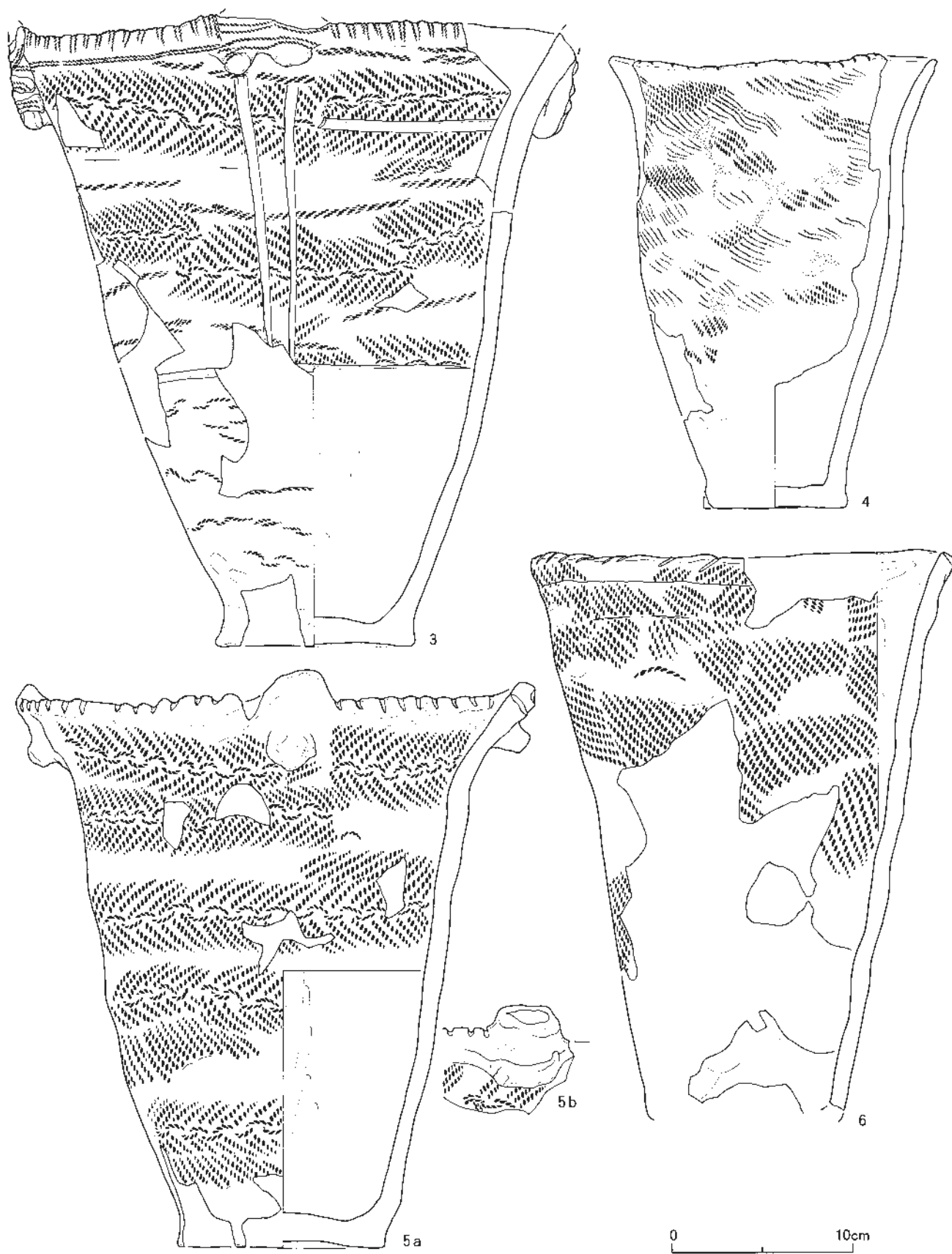
12はLR縄文地文に粘土紐を貼付し、隆帯上に沿わせてL縄線を押圧する。口唇部にはL縄線を連続して押圧する。13は口唇部、隆帯にL縄線を貼付。隆帯の区画中には爪の圧痕により充填する。内面は、口縁部は横方向のミガキ、胴部縦方向のミガキを施す。14はLR縄文施文後、粘土紐を貼付し、lとr縄を一組にして隆帯上に沿わせて、および口唇部に連続して圧痕を施す。台形の波頂部についてボタン状貼り付けふたつの間に穿孔がある。15は結束羽状縄文施文後、隆帯を貼付その上からl縄線を施す。口唇部にも、残存部分にはRL縄文を施文。内外面、特に内面の口縁部付近に煤が付着している。16は綾線文を持つRL縄文を施文後、粘土紐を貼付する。内面は口唇部横方向、胴部縦方向のミガキ調整だが、成形時の指頭圧痕が残る。17はRLとLR縄線の併用、円形貼付の直下の隆帯は結束が中央にくるようにして地文原体の押圧である。結束第2種羽状縄文施文後、隆帯貼付をする。口唇部にR縄線を連続して押圧する。18はサイベ沢VII式。覆土の上位、旧H-10部分から出土。LR縄文施文後に、半截竹管により沈線文様を描く。上下の突起のうち下側は縄文施文前に貼付。波頂部の



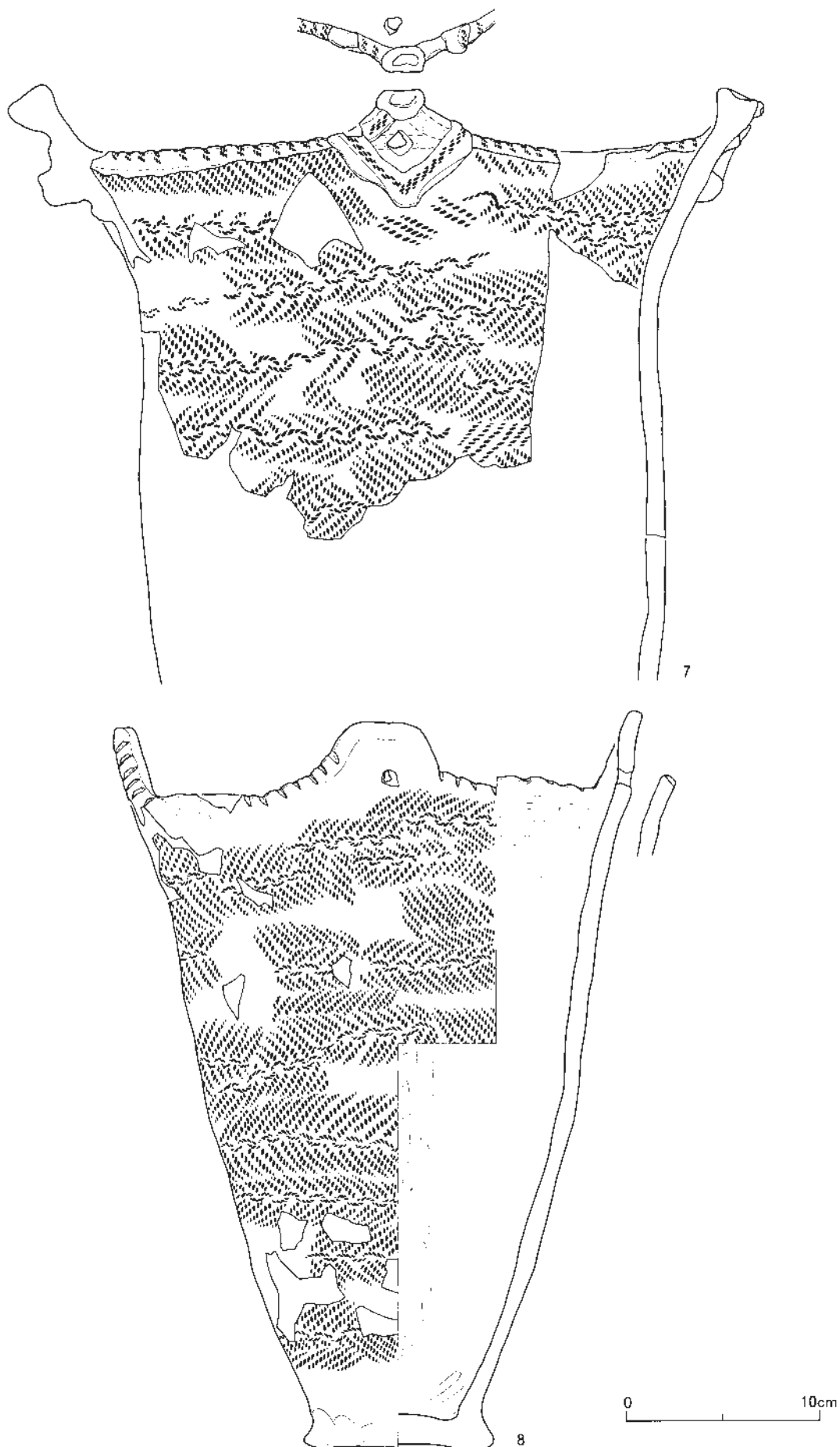
H15HP						
層名	土色1	土色2	土位	粘土	堅固度	その他
1	黒色土	N1.5/O	硬土	強	軟	IV主体 垂角小礫10~15%混じる
2	黒色土	10YR1.7/1	硬塊土	強	軟	IV主体 垂角小礫10~15%混じる
3	黒褐色土	10YR3.1	硬塊土	強	軟	IV>V 垂角小礫10~15%混じる
4	黒色土	10YR2/1	硬塊土	中	軟	IV主体 垂角小礫5%混じる
5	黒褐色土	10YR2/2	硬塊土	弱	軟	IV>V 垂角小礫5%混じる
6	暗褐色土	10YR3.3	砂塊土	硬L	堅	IV>V+VI 垂角小礫10%混じる
7	黒色土	N1.5/O	硬土	中	軟	IV>V 塊状混入 垂角小礫7%混じる



図III-17 H-15 (3) と遺物 (1)

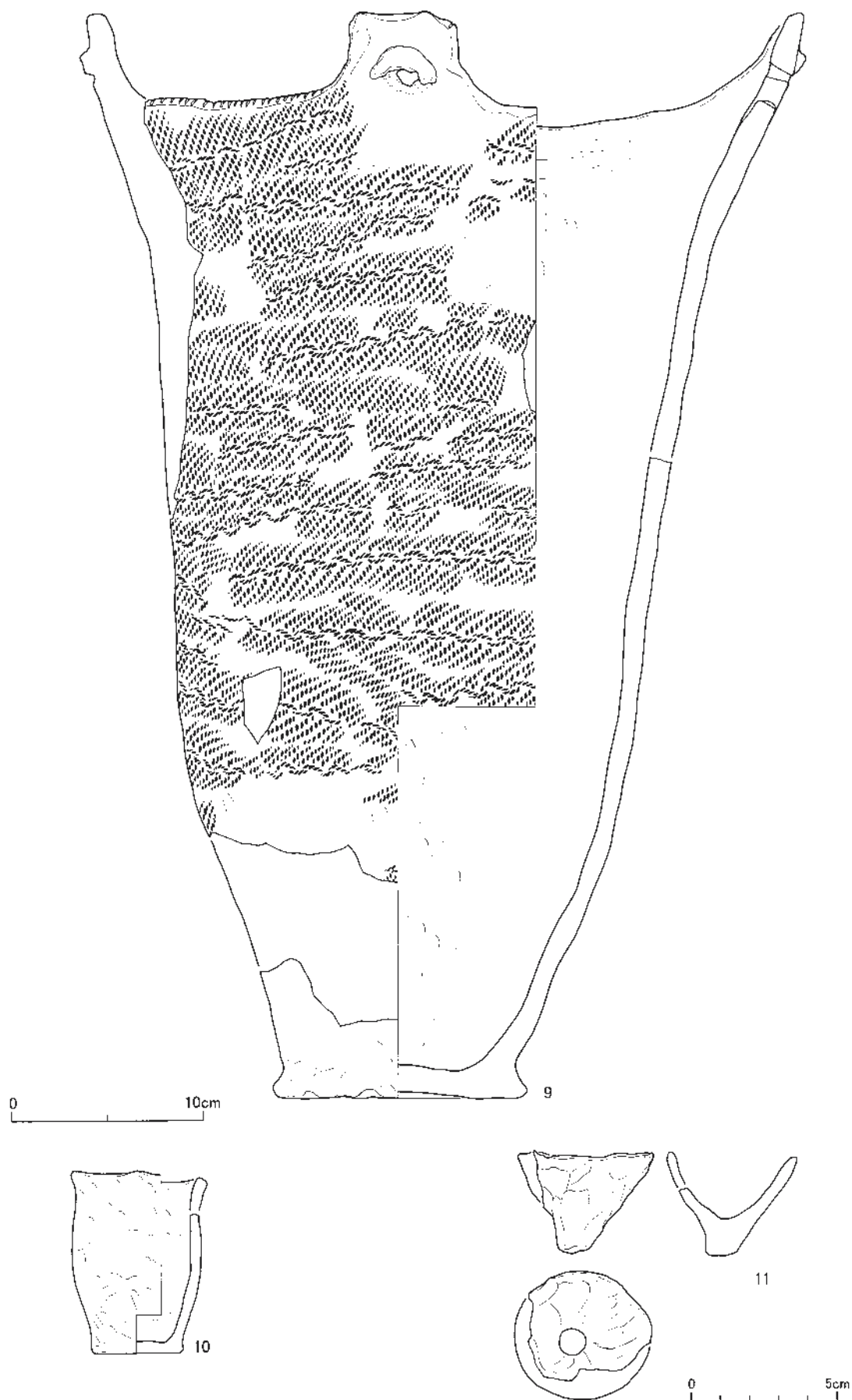


図Ⅲ-18 H-15の遺物(2)

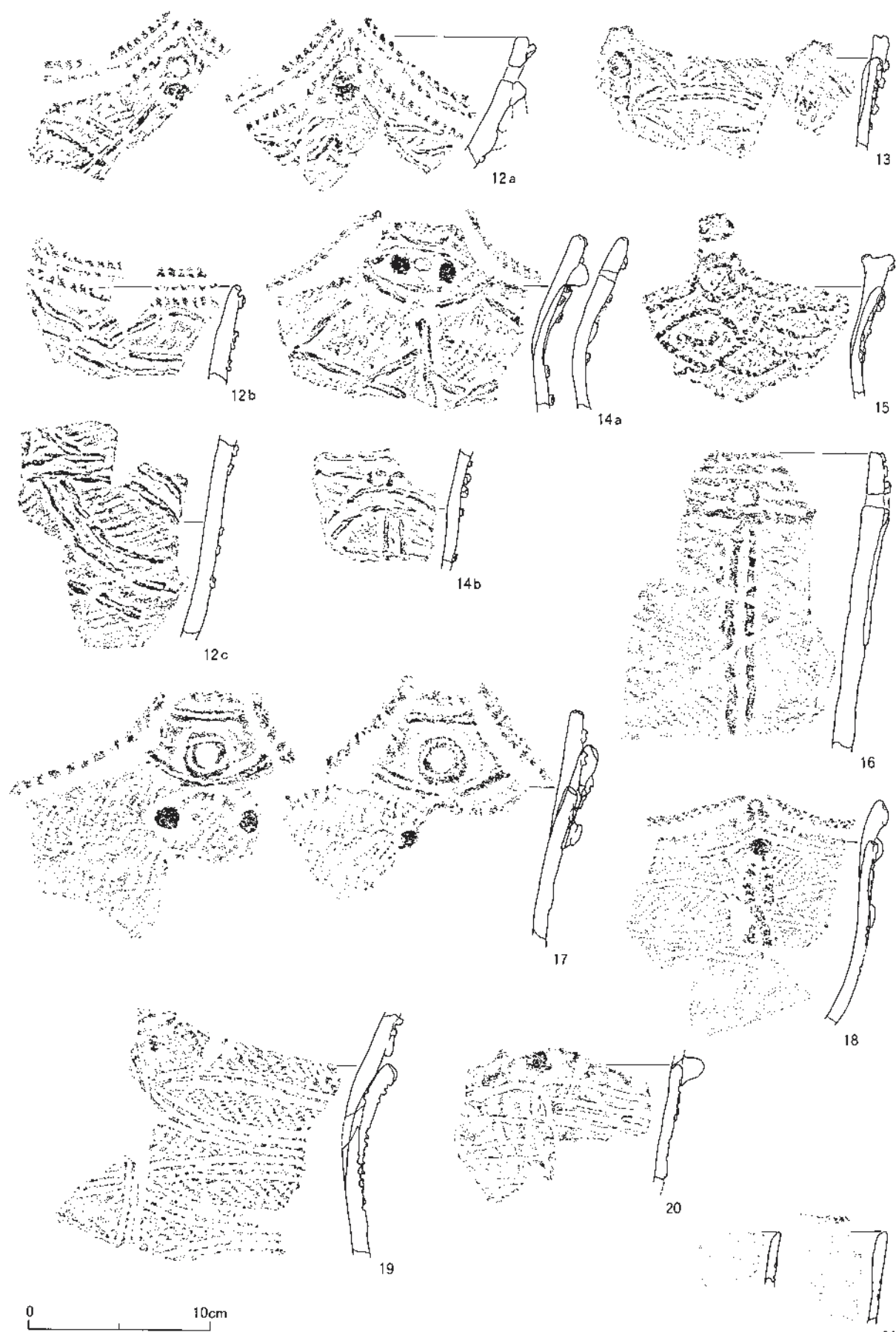


図III-19 H-15の遺物(3)

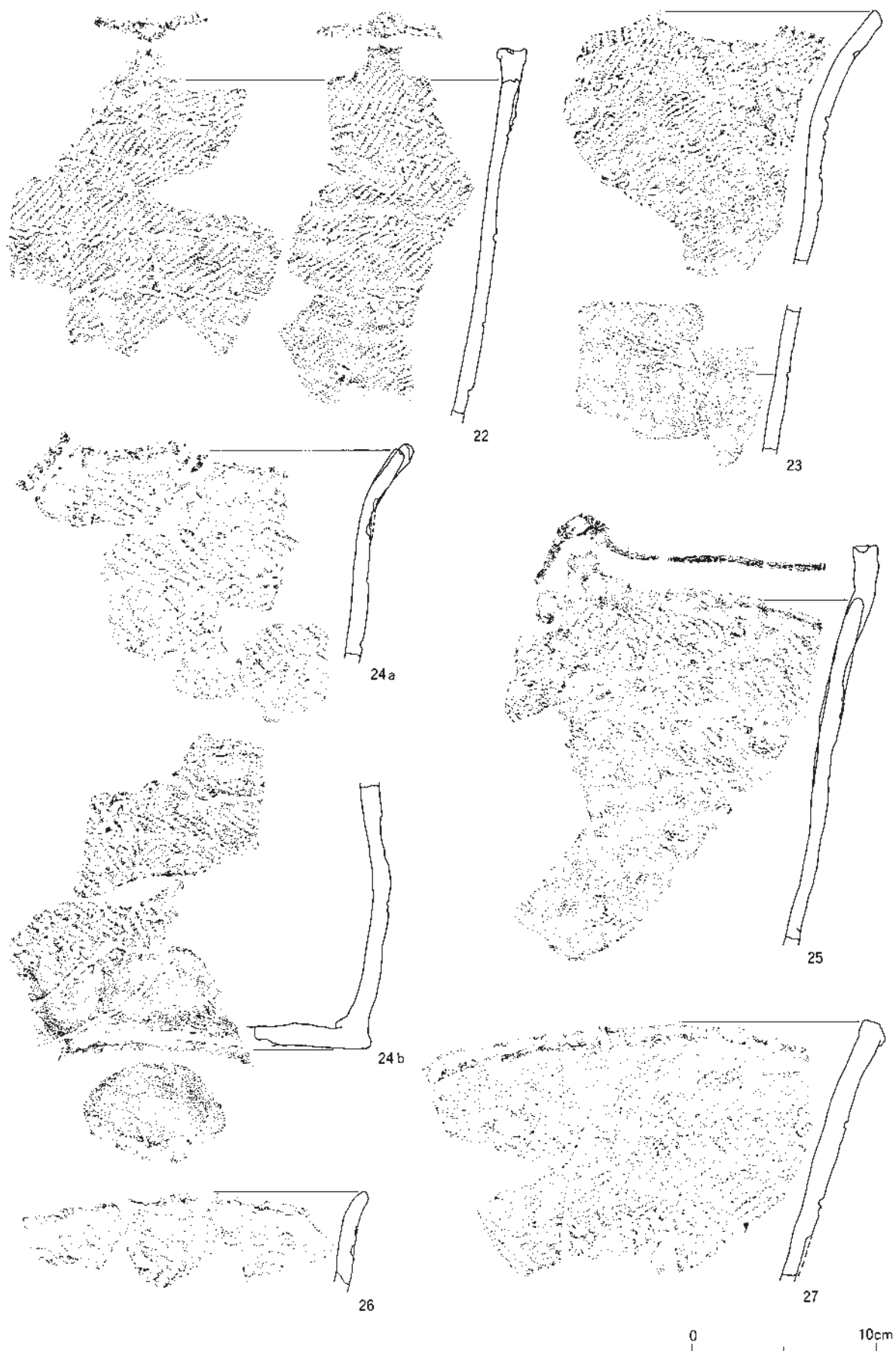




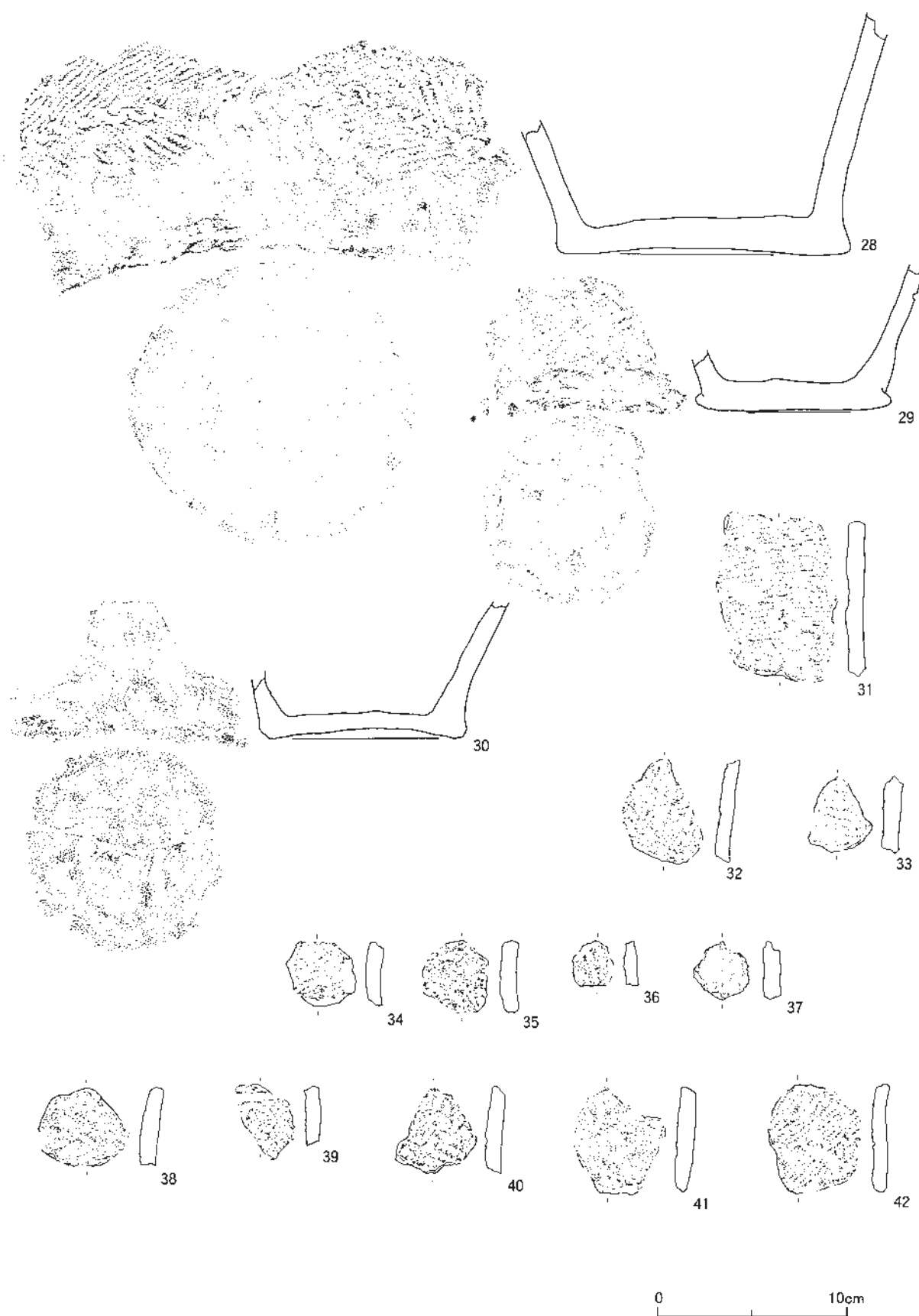
図Ⅲ-20 H-15の遺物(4)



図III-21 H-15の遺物(5)



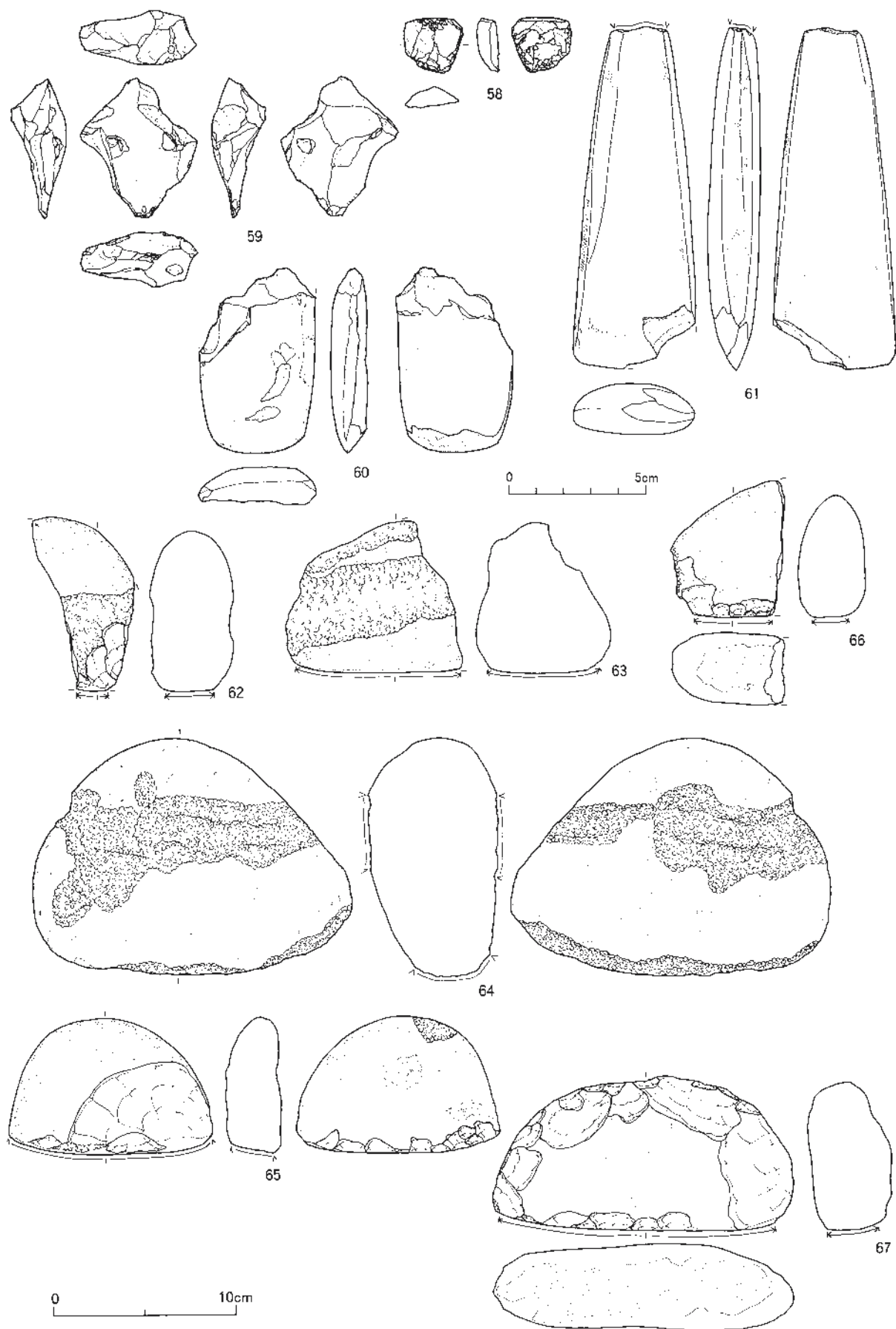
図Ⅲ-22 H-15の遺物(6)



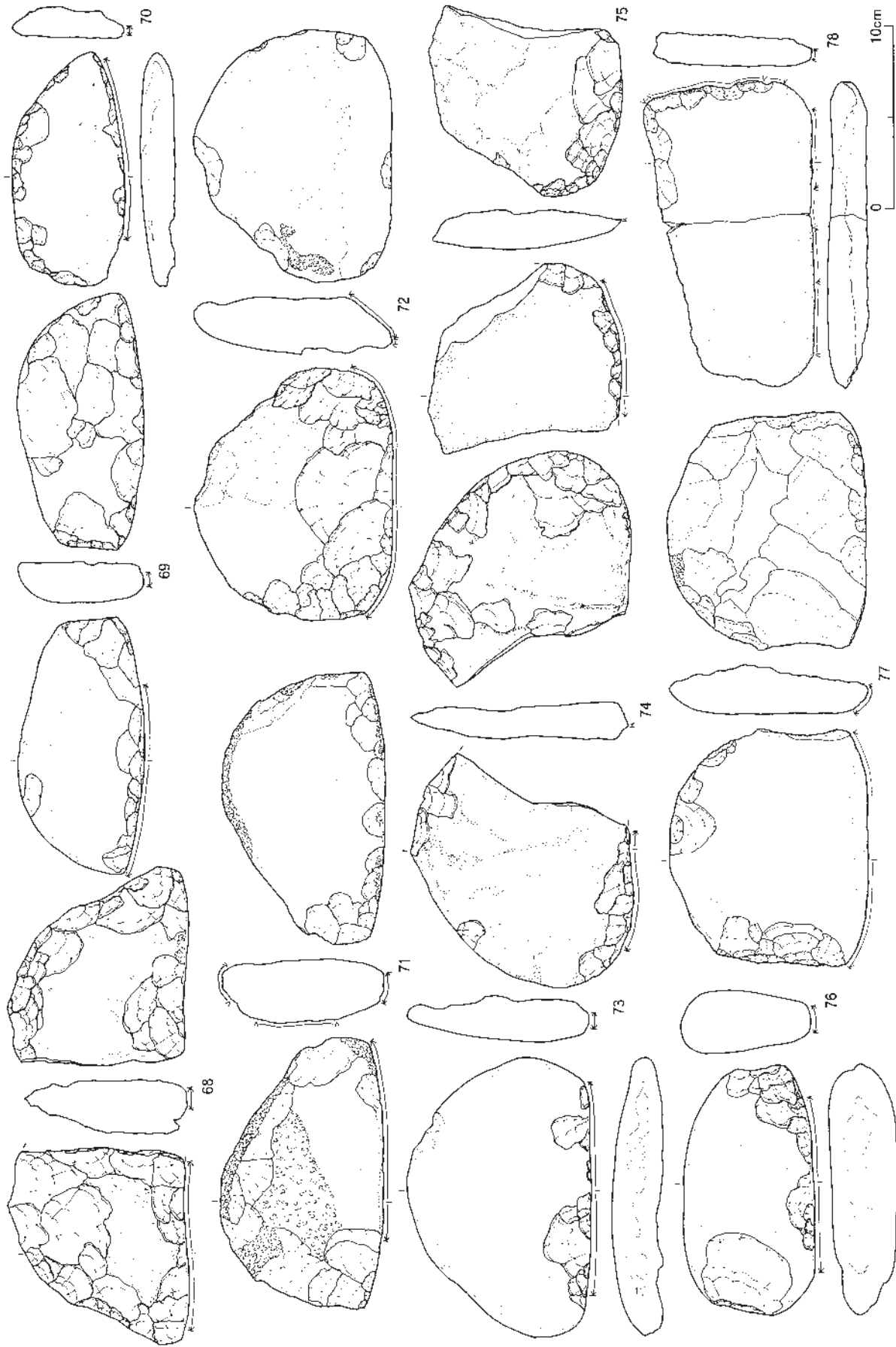
図III-23 H-15の遺物(7)



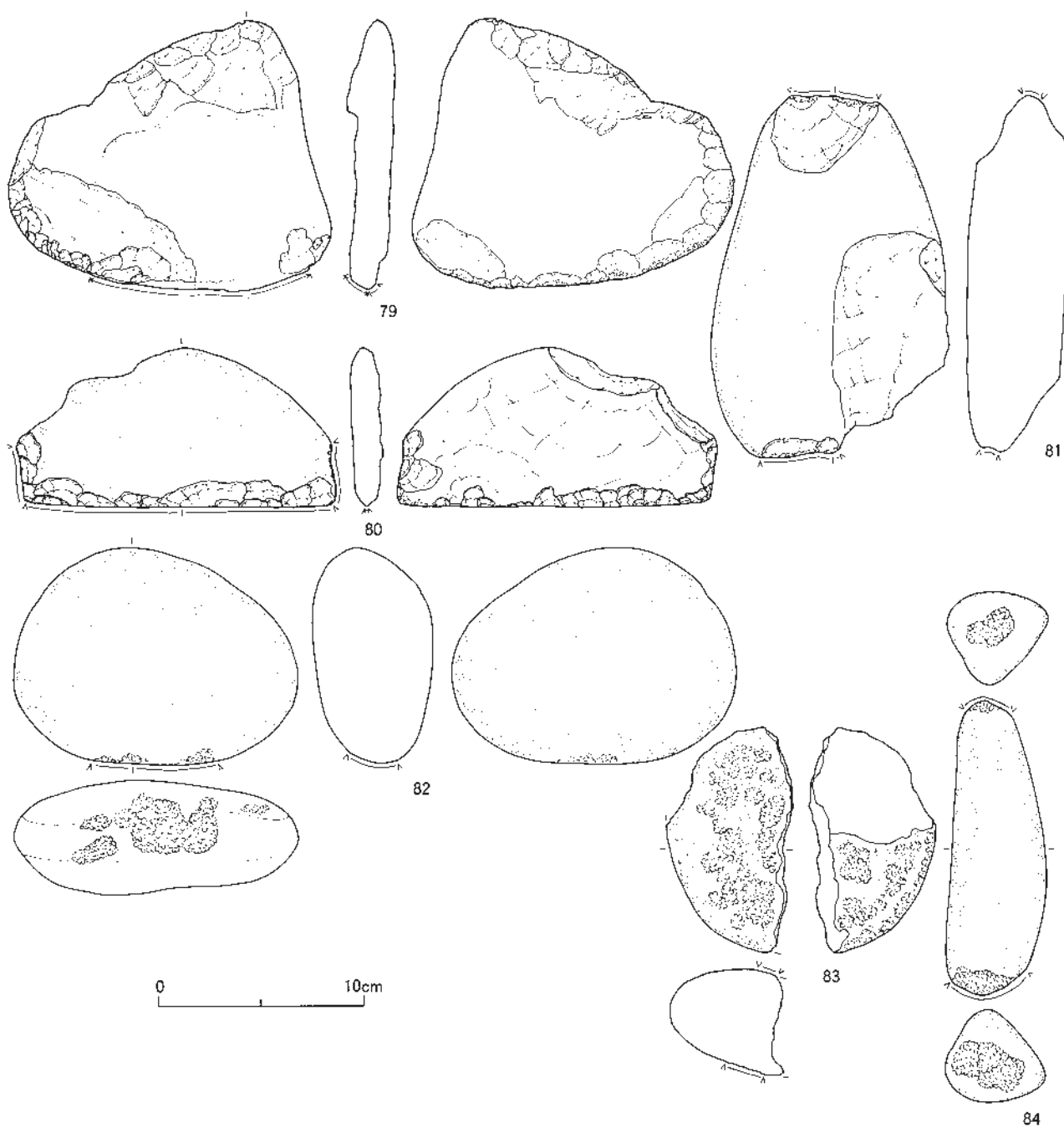
図Ⅲ-24 H-15の遺物(8)



図III-25 H-15の遺物(9)

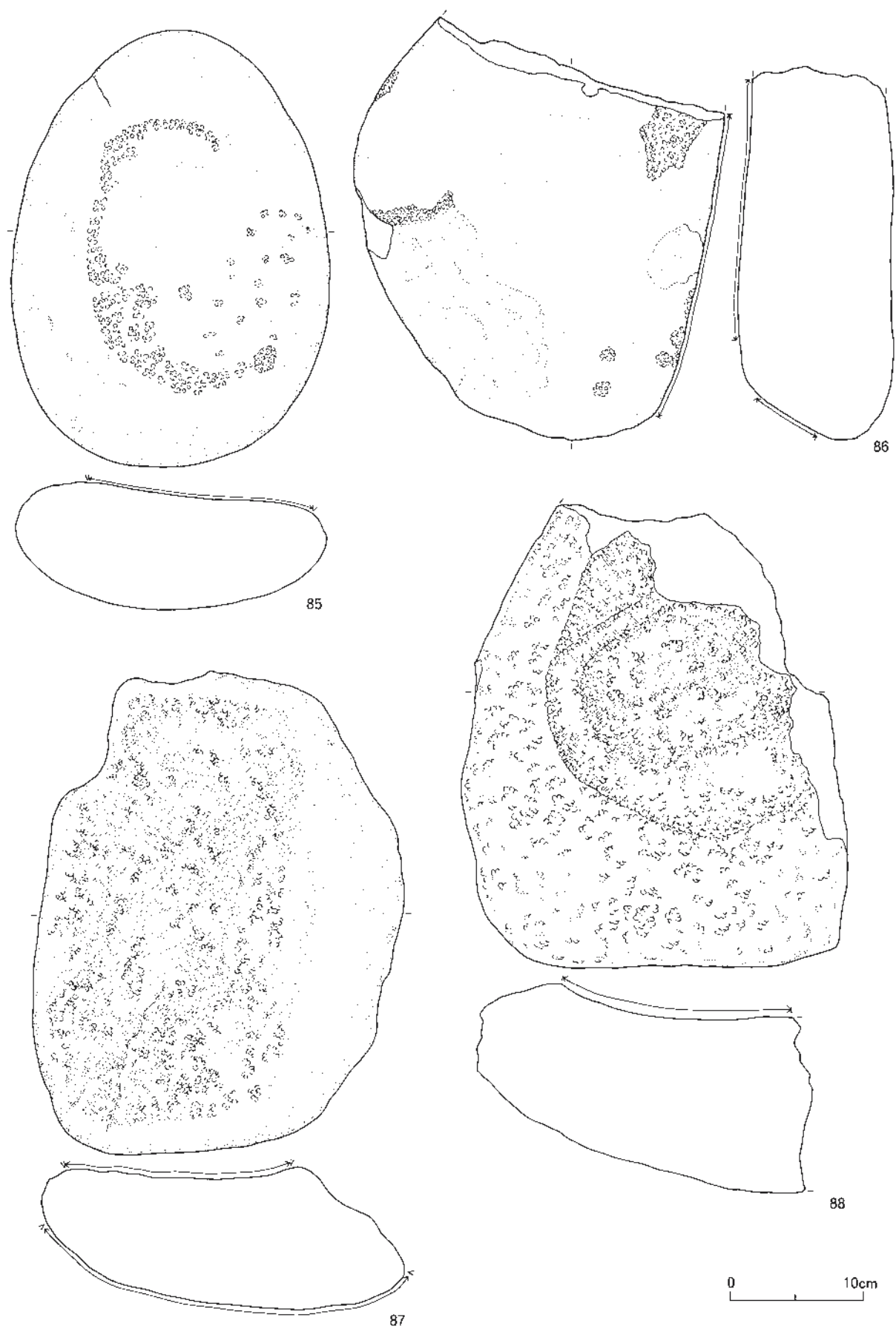


図III-26 H-15の遺物(10)



図III-27 H-15の遺物(11)





図Ⅲ-28 H-15の遺物(12)

突起と垂下文様は縄文施文後に貼付する。隆帯上にも同様の押し引き。r 縄線による圧痕を口唇部に施す。19はRL縄文施文後半截竹管による施文内面は横方向のミガキ調整。口唇にはキザミが連続し、隆帯にはr縄線。口縁部は断面三角形である。20は内面に成形時の指頭圧痕残る。ボタン状突起直上の波頂部は欠損している。21は旧H-10覆土中位出土のものこの遺構が立地する調査区のもの接合した。小型器形で、細い沈線文を持つ。半截竹管状の草本と思われる原体による。波頂部にも同一原体によるキザミ。22は綾線文を伴うLR縄文地文で、突起様の波頂部にLR縄圧痕がある。内面は横方向のミガキ調整だが、器面に成形時の指頭圧痕が残る。23は綾線文を伴う。LR縄文地文で、口唇部に粘土紐を一本貼付し、成形する。内面について口縁部は横方向、胴部は縦方向にミガキ調整を施す。口唇部にキザミが連続する。24は綾線文を伴うLR縄文地文で、口唇部にLR縄の連続圧痕がある。内面は口縁部に横方向、胴部には縦方向のミガキ調整がある。25は綾線文を伴うLR縄文地文で、口唇部に粘土紐を一本貼付し、成形する。内面について口縁部は横方向、胴部は縦方向にミガキ調整を施す。26はLR縄文施文後、口縁部を横方向にナデ消して無文にする。その上から半截竹管による右方向への連続押し引きを2列施す。口縁部断面は丸みをおびて外反する。内面は横方向のミガキ調整。27は結束第2種羽状縄文を地文に持つ。口縁部は断面三角形である。28は底部破片である。床面から出土した遺物である。底面はミガキ調整で、底部際はミガキ調整にて無文にする。胎土には海綿骨針が目立つ。29・30は底部破片である。29はLR縄文地文で、底部際はナデて無文にする。底径は9.5cmで、底部内面はナデ調整、胴部と底部は指頭で円を描くように押し付ける。30の底面はミガキ調整で、底部際はミガキ調整にて無文にする。31は魚骨回転圧痕文である。縁辺に打ち欠きがあり、再生土製品に関連するものと考え。32は綾線文を持つ。縁辺に打ち欠きがあり、再生土製品の範疇に入るものである。円板が欠けたものである。33はLR縄文地文である。縁辺に打ち欠きがあり、再生土製品の範疇に入るものである。円板が欠けたものである。

34~42は再生土製品である。III群a類土器の破片について、縁辺を細かく打ち欠いて円板形を作ろうとしたものと考え。34は旧H-10覆土下位、35~37・39は覆土中位と、いずれも覆土中位から出土した。41・42は覆土下位からの出土であり、40は床面からの出土である。

**石器**：43・46・52は旧H-10覆土中位でH-15覆土上位からの出土、51・53は旧H-10覆土上位でH-15覆土上位からの出土、44・48・66・67・69・70は旧H-10覆土下位でH-15覆土中位からの出土、76・81・83はH-15覆土上位、47・68・73・75・88はH-15覆土中位、49・54・55・56・58・60・61・63・77・78・80はH-15覆土下位、45・50・57・59・62・64・65・71・72・74・79・82・84・85・86・87はH-15床面からの出土である。

43~46は珪質頁岩製のつまみ付きナイフである。43は珪質頁岩製で、両面調整である。表面については全面に整形時の調整が及び、側縁に相対的に明瞭な調整が刃部を整形する。裏面については左側縁に浅い調整、右側縁には深形調整が及ぶ。44は片面の両側縁に明確な調整を持つ。端部と裏面右側縁については両面に調整が為される。45は横長剥片を素材とする。明瞭な調整が背面の両側縁に明瞭な調整が並ぶ。一側縁については両面調整で急角度の刃部である。46は片面の両側縁に調整が為される。右側縁は浅く、左側縁は極めて浅い。

47は石錐で頁岩を素材とする。剥片の一端を押圧剥離によって錐部分を作り出す。先端部は潰れ痕跡がある。48は石槍またはナイフで黒曜石製である。両面とも全面調整である縁辺には細かい調整がめぐる。茎部は折損してない。顆粒が筋状に入り込み、先端部は原石面である。調整しきれなかったあるいは、顆粒が筋状に入り込んだ箇所での折損である。

49~57はスクレイパーである。49~56は頁岩製で特に50・51・53~56は珪質頁岩である。57はメノ

ウ製である。49は頁岩製の両面全面調整で、折損品である。表裏面ともに右側縁に微細な調整がある。50は縦長剥片の背面について明瞭な両縁調整であり、覆面については両縁極浅形調整である。51は片面の両側縁に相対的に明瞭な調整を持つ。52は片面調整である。両側縁について、明瞭な調整が及ぶ。両端が欠損する。53は表面右側縁について両面調整である。両側縁について、明瞭な調整が及ぶ。両端が欠損する。相対的に明瞭な調整が側縁から端部にかけて彎曲する刃部を整形する。54は珪質頁岩製の縦長剥片を素材とする。背面のみに両側縁に明瞭な調整が並ぶ。55は縦長剥片を素材とする。不整な形状だが、片面調整で、一側縁には明瞭な、対となる側縁には極浅い調整が並ぶ。56は横長剥片を素材とする。おおそ三角形で、片面調整である。背面の二側縁には明瞭な、一側縁に極浅い調整がめぐる。57は横長剥片を素材とする。極浅の調整で、ノッチ状の刃部を整形する。

58はピース・エスキューで、黒曜石を用いる。上下端に潰れ痕がある。一側縁について極浅い両面調整がある。59は石核で、素材を打ち欠いた際にでたものである。下端に潰れ痕がある。60・61は石斧である。60は弱凸強凸刃の丸刃である。片岩製である。打ち欠きによって素材を得た後、全面に研磨を施す。61は緑色泥岩製である。長平に近い弱凸強凸の直刃である。全面に研磨が及ぶ。使用時のものか刃部が欠損する。基端部に敲打痕が残る。62は北海道式石冠である。安山岩製で、楕円礫の割礫を素材とする。素材の形状を生かし、敲打によって整形する。機能部はおおよそ長軸方向に向う擦痕があり、敲打によるものか縁辺には細かい剥離がめぐる。63は偏平打製石器である。多孔質の安山岩製で、半割した礫を敲打で整形する。敲打は頂部にも及ぶ。機能面は擦痕が顕著であり、長軸にたいしてほぼ45°にのびる擦痕である。機能面の形状が北海道式石冠的である。64は北海道式石冠未成品で床面からの出土である。多孔質安山岩で厚みのある楕円礫を短軸で割ったものを素材とする。敲打による整形が持ち手部分と機能部にある。未成品と考えられ、機能面に擦痕はなく、縦断面に持ち手部分が明瞭な凹みとならない。

65～80は偏平打製石器で、いずれも安山岩製である。65は扁平な長楕円礫を半割したものをを用いる。素材の形状を生かし、割面には敲打痕がある。被熱したものか、一部に赤色化がみられる。66は扁平な長楕円礫を素材にしたものである。一側縁は敲打により面を形成する。最大幅2.2cmの底面は敲打による機能面であるが、長軸方向に磨りの痕跡もある。機能面からの加撃によって折損する。67は北海道式石冠の素材としてよく用いられる、多孔質安山岩の楕円礫を素材とする。楕円礫の割礫を素材としており、縁辺を打ち欠いて整形する。機能部は最大幅3.4cmの面を有し、敲打の際にいったと思われる細かな剥離がめぐる。使用痕跡としては、敲打痕とおおよそ長軸方向を向く擦痕がある。68は板状の安山岩を素材とする。縁辺を両面から打ち欠いて半円形に整形する。機能部は所々面を為し、最大幅は1.6cmで、敲打の際にいったと思われる細かな剥離がめぐる。使用痕跡としては、敲打痕とおおよそ長軸方向を向く擦痕がある。折損しており、折損部分にも打ち欠きがある。69は長楕円形の扁平礫を打ち欠きによって整形する。一側縁は打ち欠きと敲打により直線的である。最大幅1.3cmの底面は敲打による機能面であるが、長軸方向に磨りの痕跡もある。70は扁平な割礫片を打ち欠いて整形する。打ち欠きは両面の全周に及ぶ。最大幅0.5cmの底面は敲打による機能面であるが、長軸方向に磨りの痕跡もある。底面と対になる上辺についても、敲打によって直線的だが、面を持つには至らない。71は扁平な楕円礫を素材とする。打ち欠きと敲打によって縁辺と図化した正面を整形する。機能部は面をなし、長軸方向および軸に対して45°にのびる擦痕と敲打痕がある。敲打に伴うものか細かい剥離がその周囲をめぐる。72は扁平な楕円礫を素材とする。打ち欠きと敲打がほぼ全面にめぐる。機能部は面を形成せず、刃部様である。機能部には整形によるものか、使用によるものか、敲打による細かい打ち欠き痕がめぐる。73は扁平な楕円礫の形状をそのまま生かし、一側縁を機能部として利

用する。機能部は最大幅1.2cmの面を有し、敲打の際についたと思われる細かな剥離がめぐる。使用痕としては敲打痕とおおよそ長軸方向を向く擦痕がある。74は板状礫を素材とする。全周に両面からの打ち欠きがめぐる。一側縁に直線的な機能部を有する。機能部は刃部様であり、面を持たない。敲打によるものか周囲には微細な剥離がめぐる。75は扁平な礫片を素材とする。機能部は正面観が曲線的であり、剖面側から打ち欠いて整形する。機能部には使用時のものか細かい剥離がめぐる。形状そのものについても剖面側から縁辺を打ち欠いて整形する。76は扁平な楕円礫を素材とする。長楕円礫の一辺を機能部とする。長軸の両端について両面からの打ち欠きによって直線的な一辺を作り出す。機能部は最大幅1.4cmの面を有し、敲打の際についたと思われる細かな剥離がめぐる。使用痕跡としては、敲打痕とおおよそ長軸方向に擦痕がある。77は扁平で楕円形をした礫片を素材とする。縁辺を打ち欠きと敲打痕によって整形する。両側縁は並行である。機能部は礫皮側に微妙な擦痕がある以外、使用痕や整形痕が明らかではない。機能部は明瞭な面を有するには至らないが、最大幅3mmで敲打痕が明瞭である。78は旧H-10床面、つまりH-15ベンチ部分床面のものと覆土下位のものが接合した。下半分は被熱によって赤色化する。被熱部の境界線は直線的であり、炉石を思わせる。割れて扁平な礫片を打ち欠いて整形する。一側縁は打ち欠きにより直線的である。最大幅0.5cmの底面は敲打による機能面であるが、長軸方向に磨りの痕跡もある。79は正面観が三角形をした扁平礫を素材とする。素材の形状を生かし、一側縁を残して両面からの打ち欠きによって整形する。図で底面とした部分と頂部に敲打痕がある。底面は全面に整形痕・使用痕がなく、礫皮を残す。被熱したものか一部に赤色化が見られる。80は楕円礫片を素材とする。剖面側の一側縁を打ち欠きと敲打によって直線的に整形し、機能部とする。両側縁についても同様である。被熱により一部赤色化する。機能部は最大幅6mmの微妙な面を持つ。機能部には長軸方向の擦痕があり、敲打によるものか微細な剥離が周囲をめぐらる。

81~84はたたき石で、安山岩を用いる。81は扁平な長楕円礫を素材とする。長軸両端を打ち欠きと敲打を加える。両側縁とも両面に痕跡があり、正面観が直線的になるまで敲打する。右側縁の大きな打ち欠き部分の一側縁に敲打痕がある。偏平打製石器の未成品の可能性が高い。82は厚みがある楕円礫を用いる。平坦な一側縁に微妙な敲打痕がある。83は全面に浅い敲打痕があるが、VI層起源の摩滅した礫の可能性もある。84は棒状礫を素材とする。両端に敲打痕が残る。

85・87・88は石皿、86は台石とした。いずれも安山岩を用いる。85は厚みのある楕円礫を用いる。一平坦面を磨りによって凹みが生じる。86は厚みのある割礫を用いる。一平坦面に磨りと敲打痕が観察できる。87は一面について敲打と擦痕により全面がひとつのゆるやかな凹面をなす。88は厚みのある楕円礫を用いる。一平坦面について磨りと敲打によって凹みが生じる。 (大泰司)

#### H-16 (図III-29~31、図版7・50・51)

**位置・立地：**M-12 標高42m付近の平坦面。

**規模：**2.91/2.70×2.28/2.09×0.38m

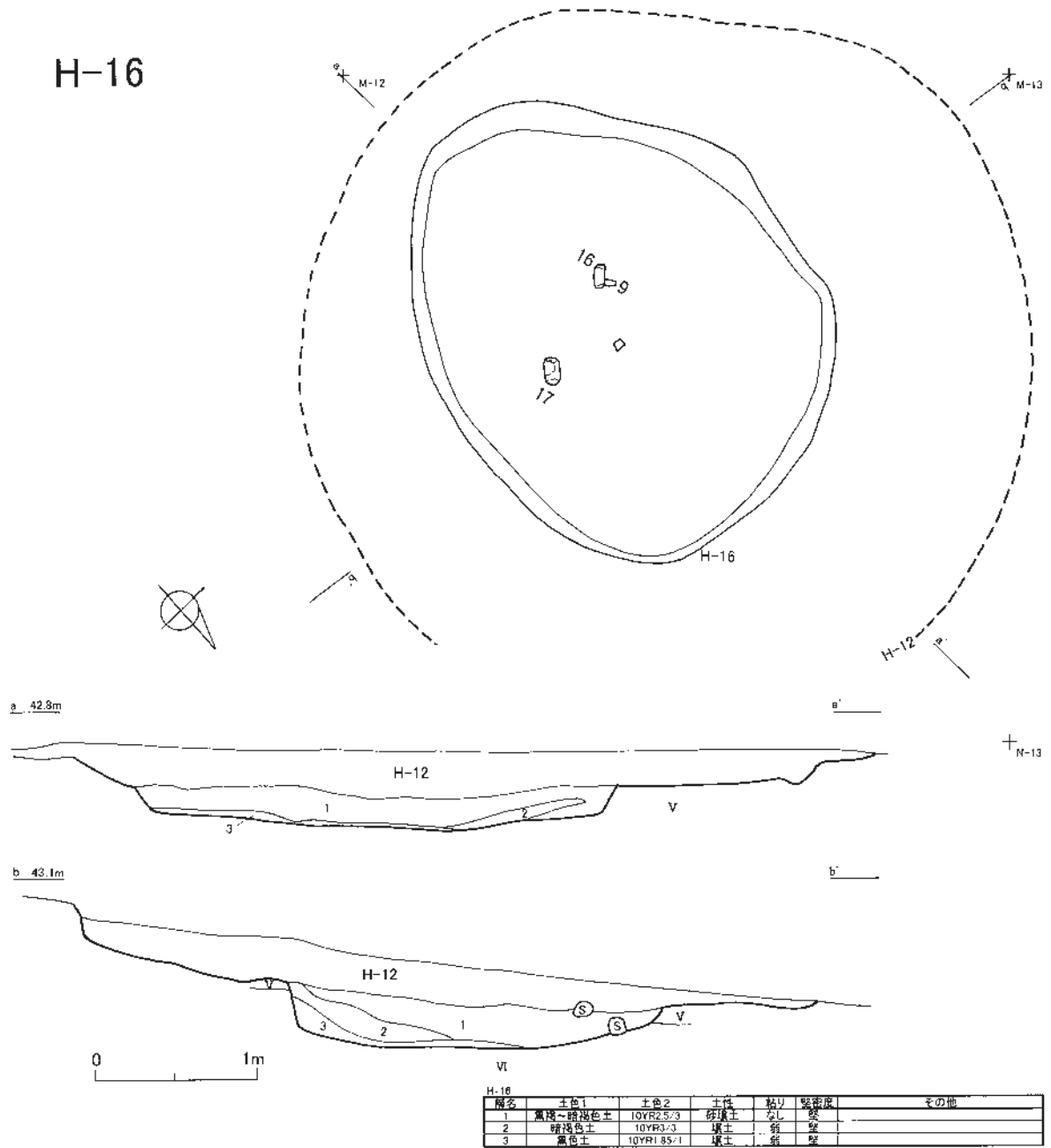
**確認・調査：**H-12調査中に確認。

**覆土：**3層に分層される。V層と流入土による自然堆積である。

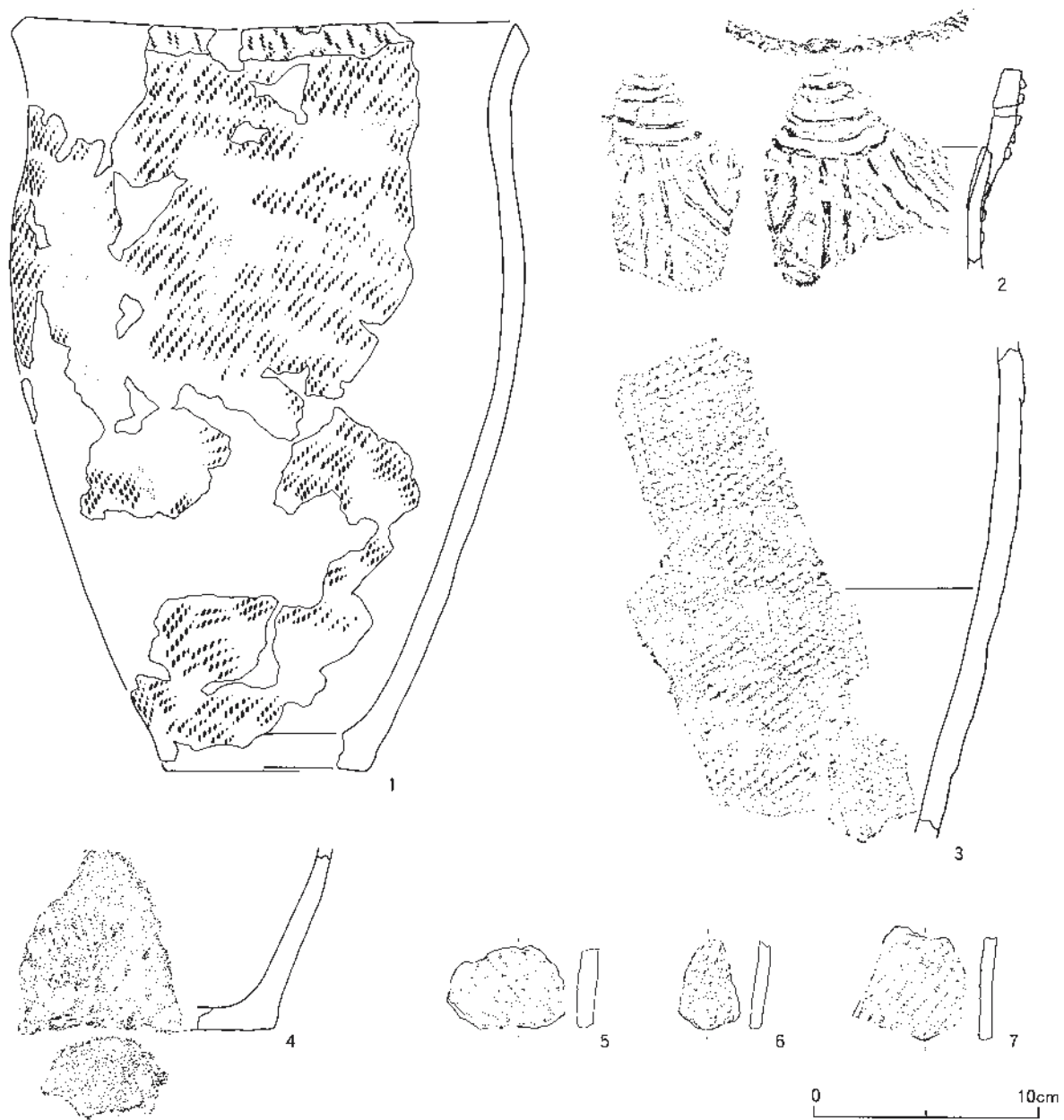
**形態：**平面形は不整な円形で、壁は明瞭に立ちあがる。床面はほぼ水平ではあるが、少々起伏があり、平坦ではない。VI層面を掘り込んで作られている。

**付属遺構：**床面に焼土は無く、柱穴も、H-16に関連すると考えられるものは無かった。

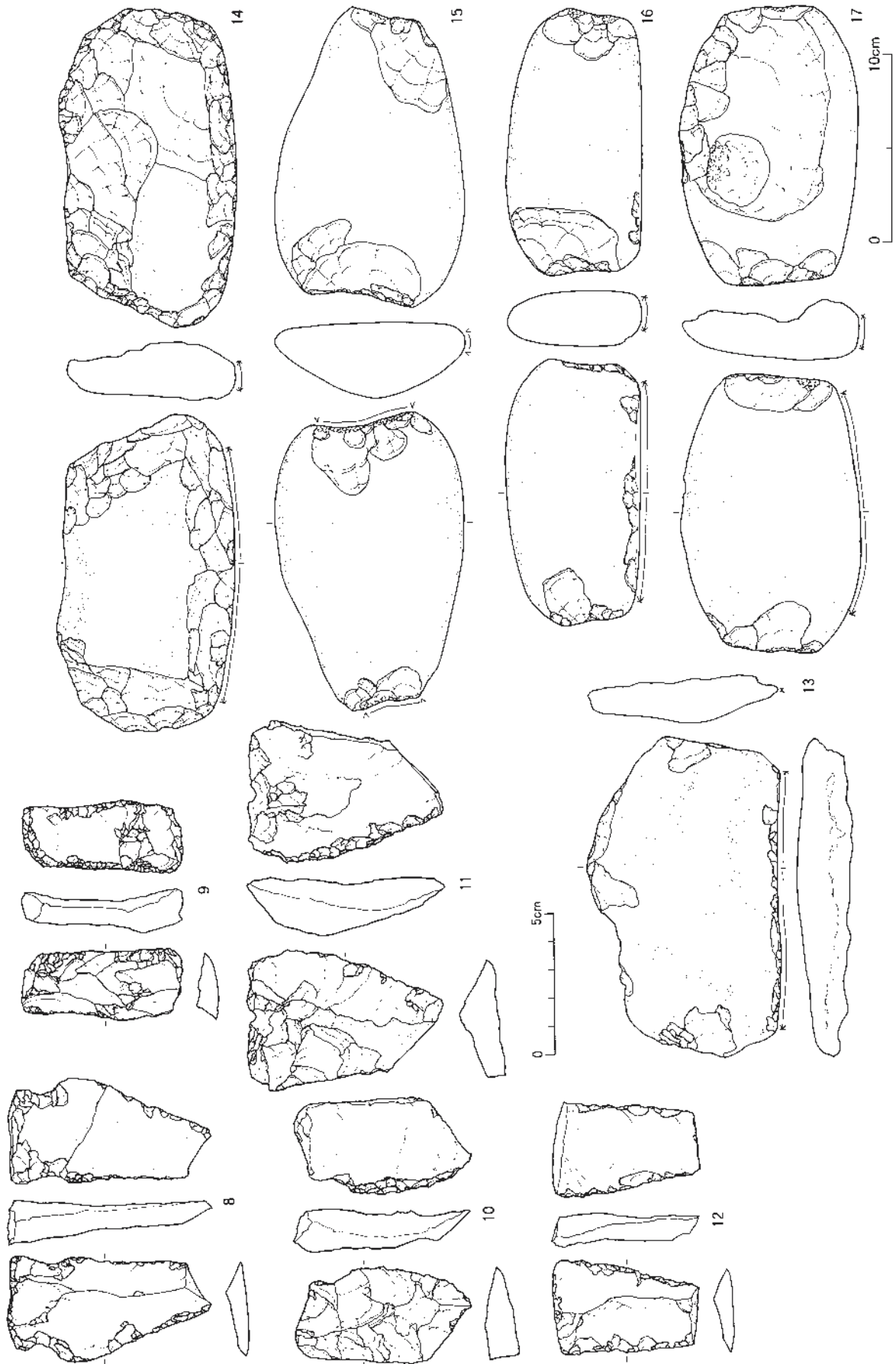
**遺物出土状況：**遺物は床面からスクレイパー1点、偏平打製石器2点、土器片2点が出土した他、覆土中からはほぼ一個体分の土器片308点、石器と礫が合わせて16点が出土している。



図III-29 H-16



図III-30 H-16の遺物(1)



図Ⅲ-31 H-16の遺物(2)

**時期：**H-12より古く、遺物の出土状況から縄文時代中期中葉のものと思われる。 (中山)

**フローテーション成果：**床面の焼土HF-1から試料を採取した。動物遺存体については魚類の鱗棘と部位不明破片が焼骨片として検出された (詳細はVI章を参照)。

**掲載遺物 土器：**1・2はⅢ群a類、サイベ沢Ⅶ式並行である。復元土器1は覆土上部からの出土である。LR縄文地文で、口縁部は断面三角形で、器面側についてLR縄線を連続して押圧する。内面はミガキ調整、胴部上半は横方向、下半は縦方向である。2は緩斜面の遺構構築位置よりやや上方の調査区からのものとH-15覆土中位のものが接合した。結束第1種だがLR縄同士の組み合わせである。隆帯を貼付し、隆帯上に1縄線を施す。

3～6はⅣ群a類である。いずれも覆土からの出土である。7は付属遺構HP-20からの出土である。3は覆土出土のものとの接合は、緩斜面において遺構より上方の調査区のもの接合した。RLR縄文を横走するように施文する。内面縦方向のミガキ調整。4はLR縄文地文を縦方向に施文する。

5～7は不整な形状であるが縁辺に細かい打ち欠きが観察されるため再生土製品の製作に関するものとする。5はLR縄文地文である。6はRL縄文を横方向に施文縦方向に施文する。7はRL縄文を横方向に施文する。

**石器：**8・12は覆土から、10・11・14・15は覆土下位から、13は覆土中位、9・16・17は床面からの出土である。

8はつまみ付きナイフで、頁岩製である。両側縁の両面から極めて浅い調整が連続する。先端部分は欠損する。9～12はスクレイパーである。9～10はメノウ製、11は頁岩製である。9の表面右側縁は明瞭な調整である。主要剥離面側の両側縁に浅い調整が施される。10は裏面の主要剥離面側について、明瞭な調整が連続する。11は正面右側縁について両面調整である。表面についてはまばらに調整が入り、裏面の主要剥離面側については明瞭な調整が連続する。12は縦長剥片の両側縁に極浅い両面調整を施す。主要剥離面側の端部にも極浅い調整がある。

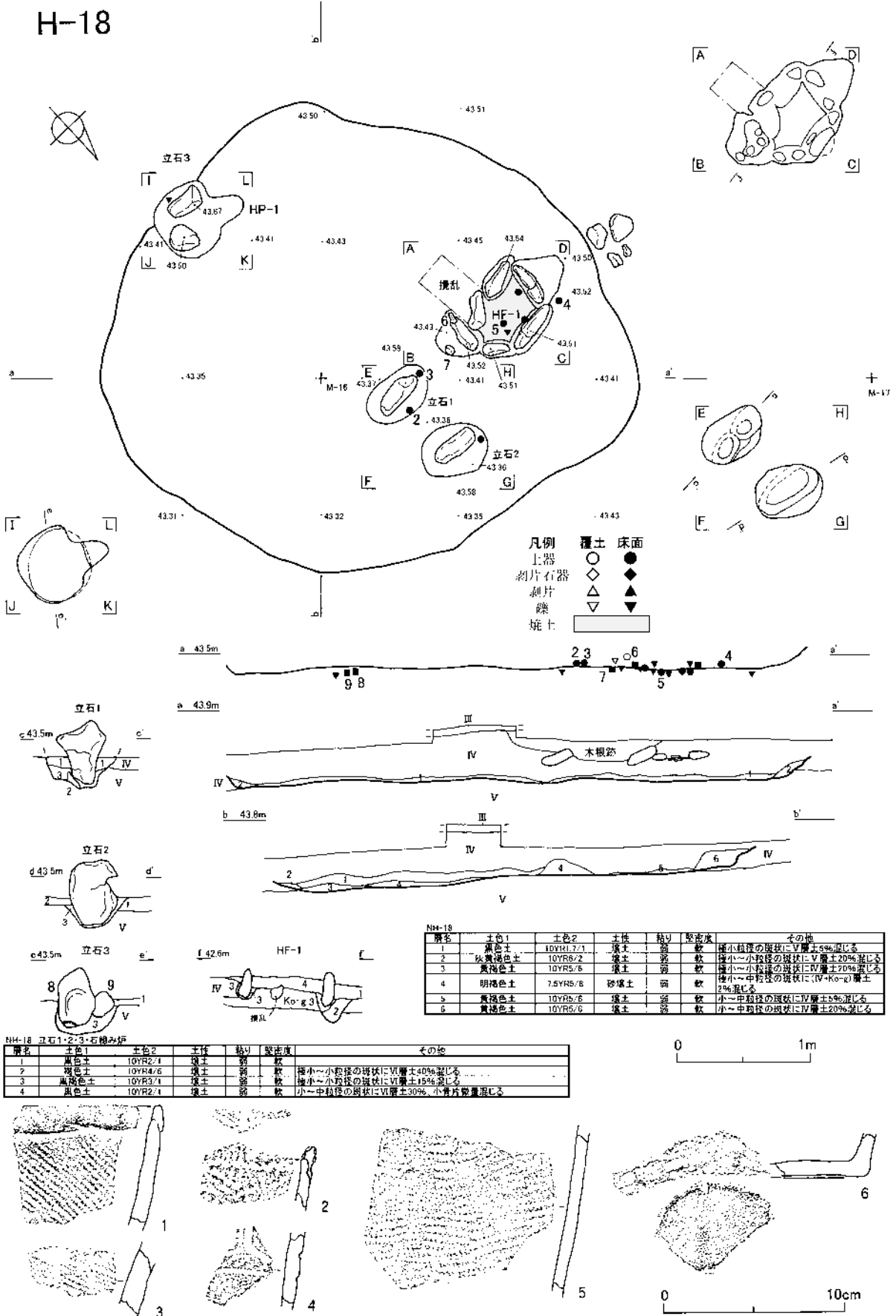
13～17は偏平打製石器である。ただし15は未成品の可能性が高いものとして使用痕からたたき石に分類している。いずれも安山岩製である。13は板状の礫を素材としている。両側縁および底面は両面からの打ち欠きによって整形し、正面観が直線的である。機能部は最大幅0.7cmの面を有するが、機能部全体には及ばずむしろ直線的である。14は板状の安山岩製である。縁辺を打ち欠きによって整形する。両側縁とも両面から調整するが面を形成するには至らない。機能面は最大幅1.7cmの機能面を有する。長軸方向の擦痕がある。15について、分類上はたたき石で偏平打製石器未成品の可能性が高いものである。扁平な長楕円礫を素材とする。長軸両端を打ち欠きと敲打を加える。両側縁とも両面に痕跡があり、正面観が直線的あるいは凹型になるまで敲打する。断面をとった部位については側縁に敲打痕がかすかに残る。16は扁平な長楕円礫を素材にしたものである。両側縁は打ち欠きにより正面観が直線的であるが面を形成するには至らない。最大幅2.3cmの底面は、長軸方向に磨りと敲打の痕跡がある。17は扁平な長楕円礫を素材にしたものである。両側縁は打ち欠きと敲打により正面観が直線的であるが面を形成するには至らない。最大幅2.0cmの底面は、長軸方向に磨りの痕跡がある。正面観左下には被熱による赤色化部分があり、被熱部の境界は直線的であり、炉石を思わせる。裏面図の中央より左寄りには敲打による凹みが整形される。頂部にも打ち欠きがある。 (大泰司)

H-18 (図Ⅲ-32～33、図版8・9・51・52)

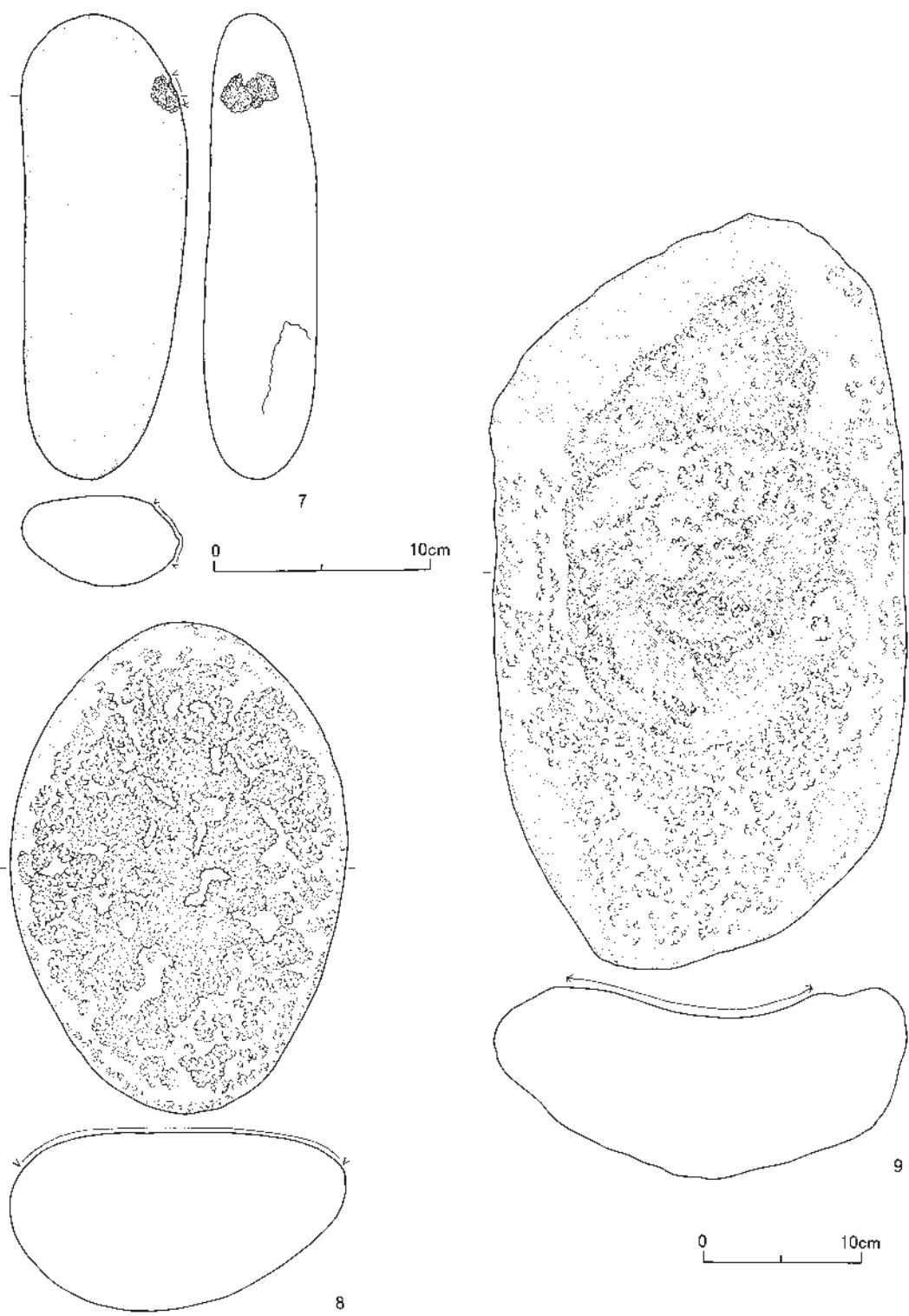
**位置・立地：**L-15・16 標高43.0～43.5m付近の平坦面。

**規模：**3.40×3.30×0.06m





図III-32 H-18と遺物(1)



図III-33 H-18の遺物(2)

**確認・調査：**IV層調査中に方形の石の配列とその東側に位置する一対の立石を検出した。石組炉を持つ住居を想定して土層断面観察用の土手を十文字に残して掘り下げたところ、IV層下位で極めて浅い黒色土の落ち込みを検出した。掘り込み面は検出面と同じである。平面形は不整な円形である。しまりのある床面を検出し、その平面形が土層確認の土手が示す掘り込みの壁と対応した。そこでその規模と、炉の存在から、極めて浅い竪穴住居と判断した。石組は方形の南辺にあたる側に現代の攪乱が入り、礫の配列が一部乱れている。そのため明瞭な設置順は判らないが、東辺なす大型礫を初めに埋め込み、その後、西側に向かって連続して埋め込んであるものと推定される。石組炉の東側には一対の大型礫が埋め込まれている。また住居の平面形の南壁についても立石が配されている。

**覆土：**覆土はIV層主体の自然堆積である。

**形態：**床面は締まりがありほぼ水平である、壁は壙底部から開口部に向かってゆるやかに立ち上がる。

**付属遺構：**炉と立石以外の付属遺構は確認できなかった。

**遺物出土状況：**遺物は床面直上から散点的に出土している。

**時期：**床面の土器と、住居に伴う石組の形態から縄文時代後期前葉の可能性が高い。

**フローテーション成果：**床面の石組炉から試料を採取した。動物遺存体についてはニシン、サケ・マス類、タイ類、カジカ類、種不明の魚類が焼骨片として検出された。炭化種子は種不明なものが検出された（詳細はVI章を参照）。

**掲載遺物 土器：**1～6はIV群a類である。1は覆土からの出土である。外面ミガキ調整で、底面ミガキ調整である。2は立石1の掘りかたからの出土である。LR縄文地文施文後、LR縄線を施文する。突起様の波頂部にも縄線を施す。内面には成形時の指頭圧痕残る。3は立石1の掘りかたからの出土である。LR縄文を横走させる。内面はミガキとナデ調整である。4は胎土から判断して大津式である。床面からの出土である。R縄文施文後沈線文を施す。5は覆土中位からの出土である。LR縄文を横走させる。縦方向のミガキ調整である。6は石組炉の炉石上からの出土である。LR縄文施文後、折り返し口縁部を成形する。折り返し口縁部は横方向のミガキによって無文にする。内面は横方向のミガキ調整で、折り返し口縁は輪積みの延長である。

**石器：**7は炉石わきの立石、8・9は立石3を構成していた。7はたたき石で、安山岩の棒状に近い楕円礫を素材とする。一側縁の一部に敲打痕がある。8は台石で立石として用いられていた。安山岩の楕円礫を用いる。平らな一面に敲打痕がある。9は石皿で立石として用いられていた。濁川火砕流起源の安山岩の不整な長楕円礫を用いる。敲打と擦痕による明瞭な凹みを持つ。 (大泰司)

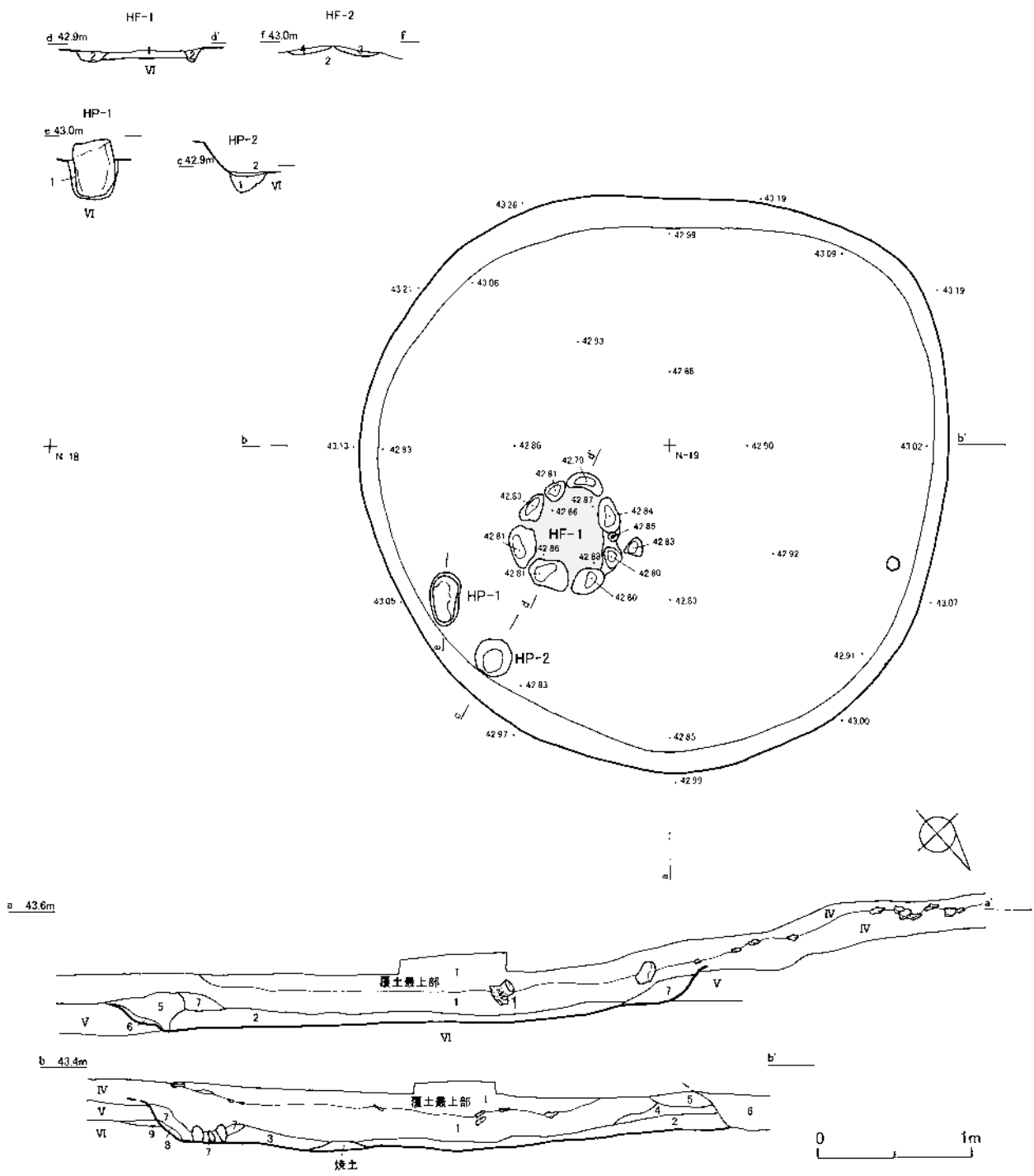
H-20 (図Ⅲ-34~41、図版9・10・52~57)

**位置・立地：**M・N-18・19 標高42.5~43.0m付近の平坦面。

**規模：**3.80/3.56×3.80/3.60×0.24m

**確認・調査：**IV層調査中に19ラインに沿った浅い沢地形において多数の遺物の出土があった。そこで盛土等の廃棄場を想定して掘り下げたところ、IV層下位で黒色土の落ち込みを検出した。掘り込み面は検出面と同じである。平面形は不整な円形である。しまりのある床面を検出し、それが土層確認の土手が示す、掘り込みの壁と対応したためその規模から竪穴住居と判断した。床面において、焼土を平面形の中心より南側から検出した。円形をした焼土の平面形に対して、その周辺には極めて小型の土壙が巡る。その東側にはひとつの立石とそれに対となる小土壙が検出された。石組炉の痕跡とその東側の対となる立石を想定した場合、それぞれの小土壙について、それらを構成していた礫の抜き取り痕跡と推定できる。このことから石組炉を持つ竪穴住居と判断した。

H-20



層名	土色1	土色2	土質	粘り	堅密度	その他
1	黒色土	10YR2/1	壤土	弱	軟	未風化の小～中歪角礫5% 極小粒径のハミス5%混じり
2	褐色土	10YR4/4	壤土	弱	軟	未風化の小～中歪角礫5%
3	褐色土	10YR1.7/1	壤土	弱	軟	未風化の小～中歪角礫5%
4	黄褐色土	10YR5/6	壤土	弱	軟	未風化の小～中歪角礫1% 比較的
5	黄褐色土	10YR5/2	壤土	弱	軟	未風化の小～中歪角礫1%
6	褐色土	10YR4/6	壤土	弱	軟	未風化の小～中歪角礫15% 未根跡
7	にふい黄褐色土	10YR5/4	壤土	弱	軟	未風化の小～中歪角礫5% 未根跡
8	黄褐色土	10YR5/6	壤土	弱	軟	未風化の小～中歪角礫5% 未根跡
9	明黄褐色土	10YR6/8	壤土	弱	軟	未根跡

層名	土色1	土色2	土質	粘り	堅密度	その他
1	にふい黄褐色土	10YR4/3	壤土	弱	軟	未風化の小～中歪角礫5% H-20の2層と同じ
2	褐色土	10YR4/4	壤土	弱	軟	未風化の小～中歪角礫5% H-20の2層と同じ

層名	土色1	土色2	土質	粘り	堅密度	その他
1	明黄褐色土	5YR5/6	壤土	弱	軟	VI層が接したものの
2	褐色土	10YR4/4	壤土	弱	軟	未風化の小～中歪角礫5% H-20の2層と同じ
3	暗褐色土	5YR3/6	壤土	弱	軟	
4	褐色土	5YR5/6	壤土	弱	軟	

図III-34 H-20(1)

**覆土：**覆土はIV層主体の自然堆積である。

**形態：**床面は締まりがありほぼ水平である、壁は壙底部から開口部に向かってゆるやかに立ち上がる。

**付属遺構：**炉と立石以外の付属遺構は確認できなかった。

**遺物出土状況：**遺物は床面直上から散点的に出土している。覆土の最上部に廃棄されたと考えられる遺物の量が際立って多い。

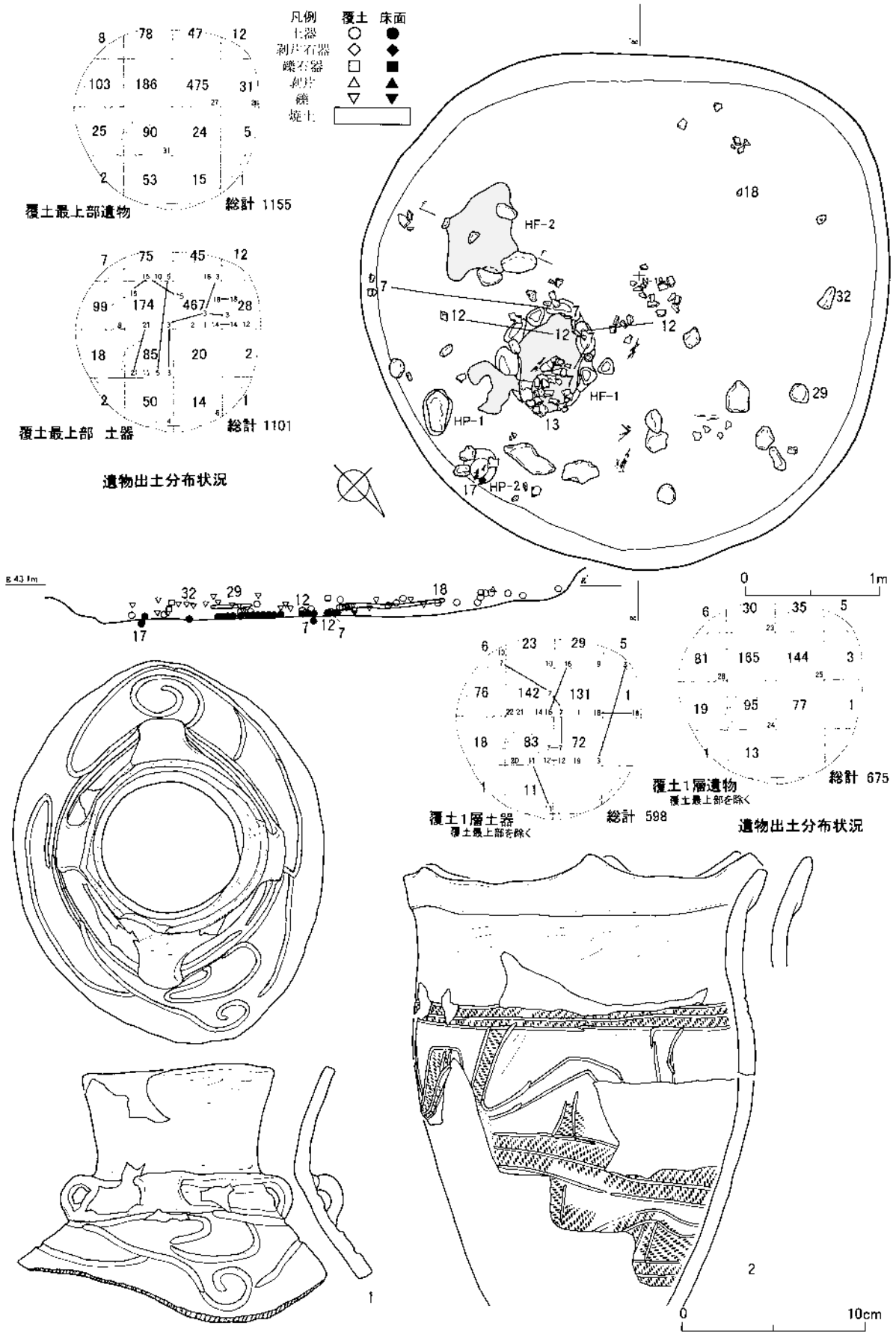
**時期：**床面の土器と、石組炉を持つ住居形態から縄文時代後期前葉の可能性が高い。

**掲載遺物 土器：**10がⅢ群 a 類でその他はいずれもⅣ群 a 類である。1は涌元式の壺である。8はトリサキ式の範疇に入るものである。2・10・11は涌元Ⅱ式である。

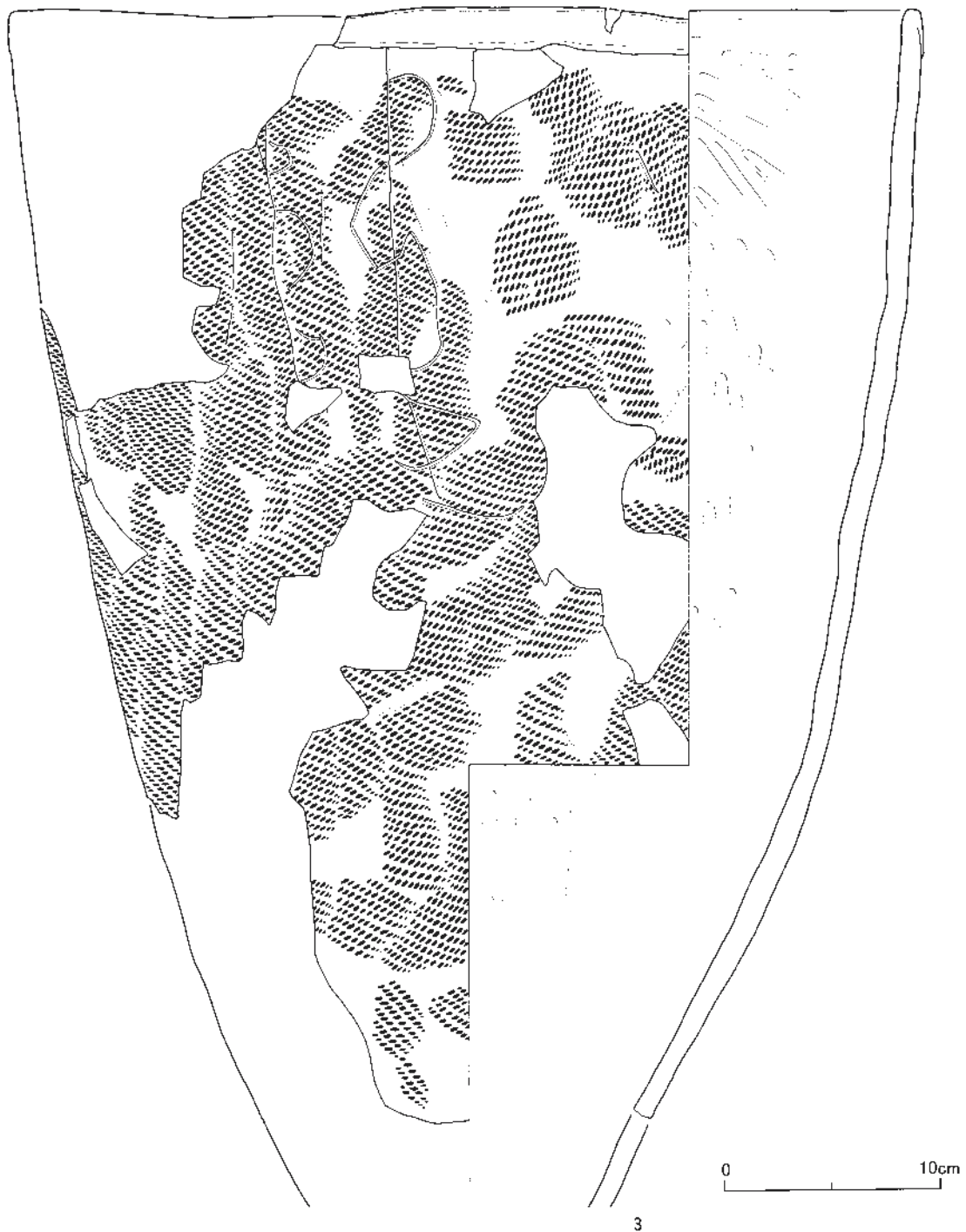
1は覆土1層 2・3・4・5・6・8・10・11・14・15・21は覆土最上部または覆土1層上部においてまとめて廃棄された遺物群からの出土である。7・12・13は生活面と考えられる覆土2層の遺物と、より上位の層にかけてのものが接合した。9・19・20・22・23は覆土1層からの出土である。16は覆土の上部から中位にかけてのものが接合した。17は覆土2層からの出土である。18は覆土の上位から下位にかけてのものが接合した。

1～7は復元土器である。1は覆土1層出土で、住居埋没後の凹みの中央部から出土した。隆帯を貼付後、沈線を施し、ミガキ調整を施す。赤彩がかつては施されたものである。焼成前に細い串を連続して突き刺して切断した痕跡がある。内面はミガキ調整によって輪積痕を埋める 口縁内面には蓋の受けのような張り出しがある 切断は文様の渦巻きに則して切断するため上面観は線対称ではない。2は覆土最上部の遺物とI～N-9～16区内のものが接合した。RL縄文を施文後、沈線文施文をし、ミガキ調整をして磨消縄文を施す。3は覆土最上部のものが主に接合し、覆土1層および遺構周辺の調査区のものに接合した。RL縄文を横走させた後、輪積みによって折り返し口縁部を成形し、垂下する沈線文を施す。底部際のすぼまる胴部はミガキ調整によって無文とする。4はJ15区のものを中心に接合し、覆土上部の遺物とI～O-11～17区のものに接合した。隆帯を主文様に沿って貼付し、沈線文を施文し、そして全体にミガキ調整を施す。5は覆土最上部のものを主とし、遺構周辺の調査区のものに接合した。LR縄文施文後、胴部上半を無文にして横方向に展開する沈線文様である。口縁部にはLR縄線を2条施す。6は覆土最上部にまとめていたものである。L縄文を施文した後、輪積みで無文の折り返し口縁部を成形する。7は覆土2層下位から覆土1層にかけてのものが接合した。覆土中の焼土と同時期の可能性が高い。LR縄文を縦方向に施文後、口縁部を無文にして、LR縄線を2条施す。底面際はミガキ調整によって無文とする。底部形態は微妙に張り出し、底面には木の葉圧痕がある。

8は覆土の最上部から出土したものと、13～16ラインを中心に広く出土したものが接合した。ミガキ調整により無文地にした後、楕円、渦巻き文を基調とした沈線文を描く。波状口縁で双頭部分に刺突が連続する。口唇部には平坦面をとる。9はLR縄文を縦走させ、その上に沈線を施す。無文の折り返し口縁を持つ。10は住居の覆土上位のものと遺構より緩斜面下方の包含層から出土したものが接合した。RL縄文を縦方向に施文する。そのうち沈線文様である。折り返し口縁上にも沈線文様を施し、折り返しのへり部分も沈線で縁取る。11は覆土上位のものと遺構より緩斜面下方からのものが接合した。LR縄文施文後沈線文である。複数単位の波状口縁 口唇部には平坦面をとり胴部文様帯より上部、口縁部に膨らみを持つ器形である。12は覆土の最上部から床面直上にかけての接合である。RL縄文を横走させた後、器壁の上にさらに粘土紐を輪積みして、折り返し口縁を形成する。折り返しは不明瞭で、口唇部分に平坦面をとる際、外側に微妙に折り返す、内面について口縁部は横方向のナデ調整、その下は縦方向のナデ調整、口縁部を成形した際の輪積痕が一部残る、器壁には焼成時の

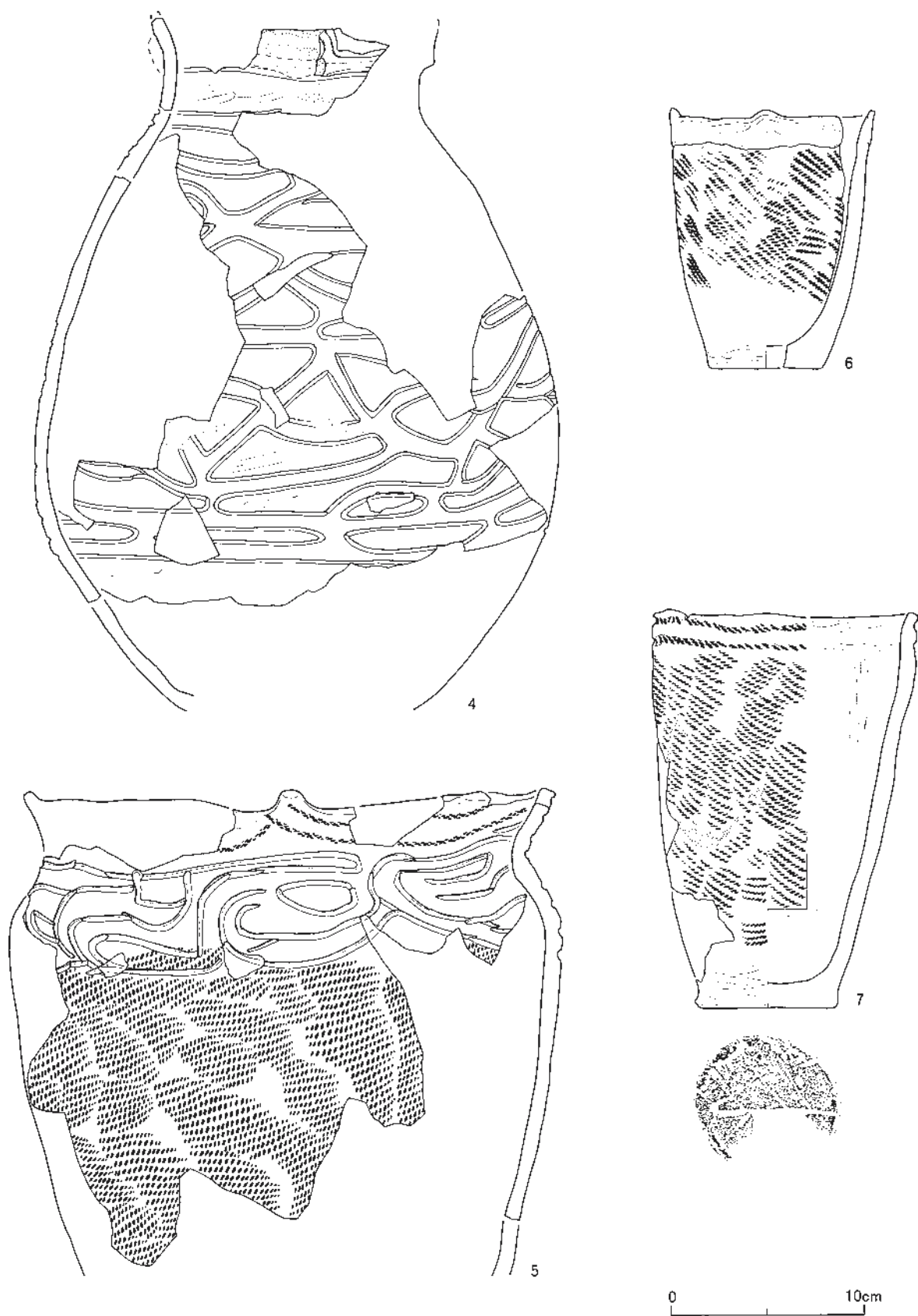


図III-35 H-20 (2) と遺物 (1)



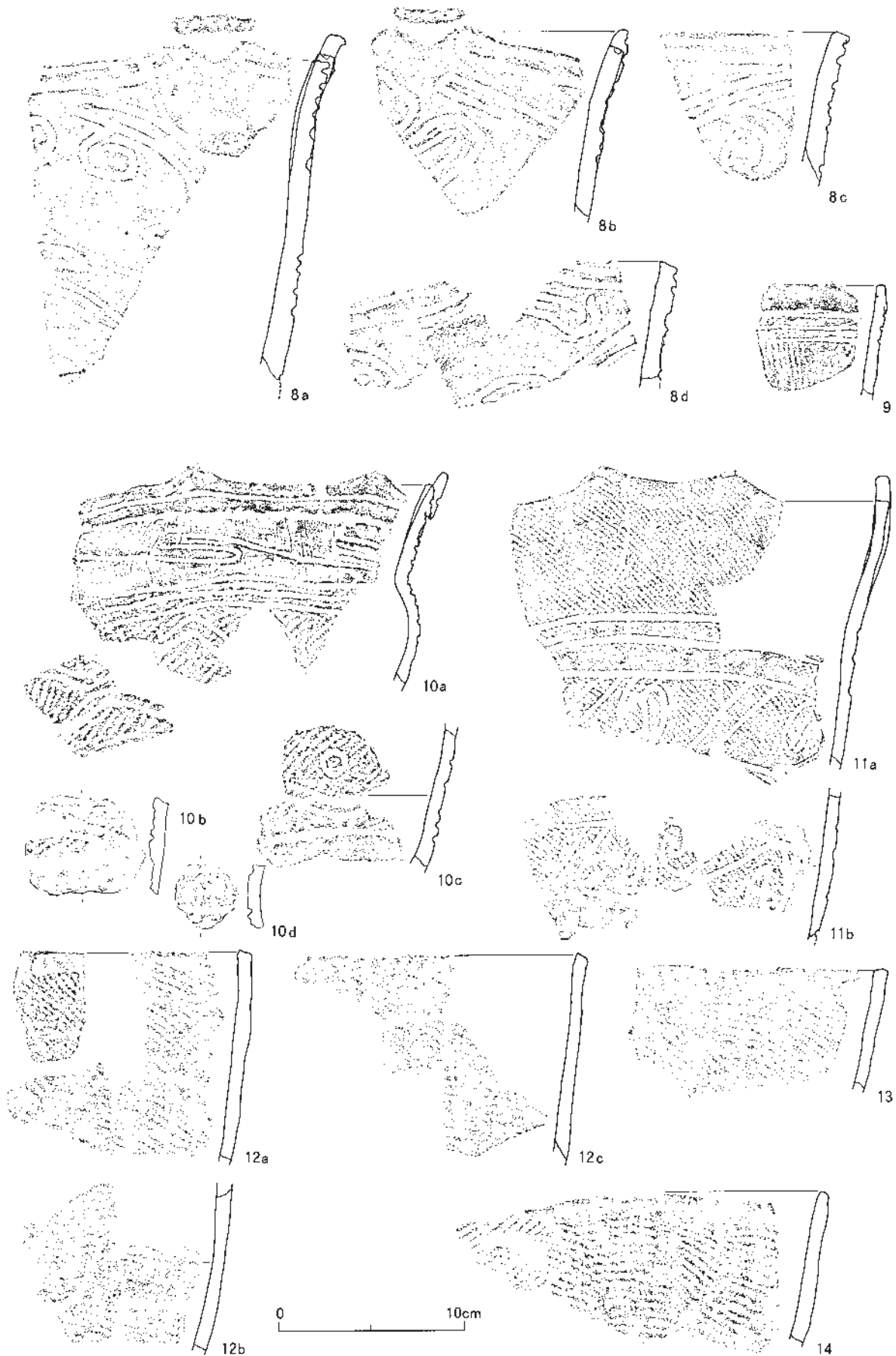
図Ⅲ-36 H-20の遺物(2)

ものと思われる黒色斑がある。同一個体の破片は多かったが、破砕が著しく接合状況は悪い。13は床面からの出土である。の地文はLr縄文を横走させる。内面について、口縁部は横方向、胴部は斜め方向のミガキ調整を施すが、輪積痕が残る。口唇部は径5mm程の粘土紐で整えて、平坦面をとる。14は覆土最上部と覆土1層ものそして緩斜面の住居より上側の調査区出土のものが接合した。RL縄文を横走させる。内面は口縁部の際まで縦方向のミガキ調整で、口縁部は横方向のミガキ調整。口縁部の断面は丸みをおびる。15は覆土の上部と住居脇の包含層の遺物が接合した。LR縄文施文後、口縁



図III-37 H-20の遺物(3)

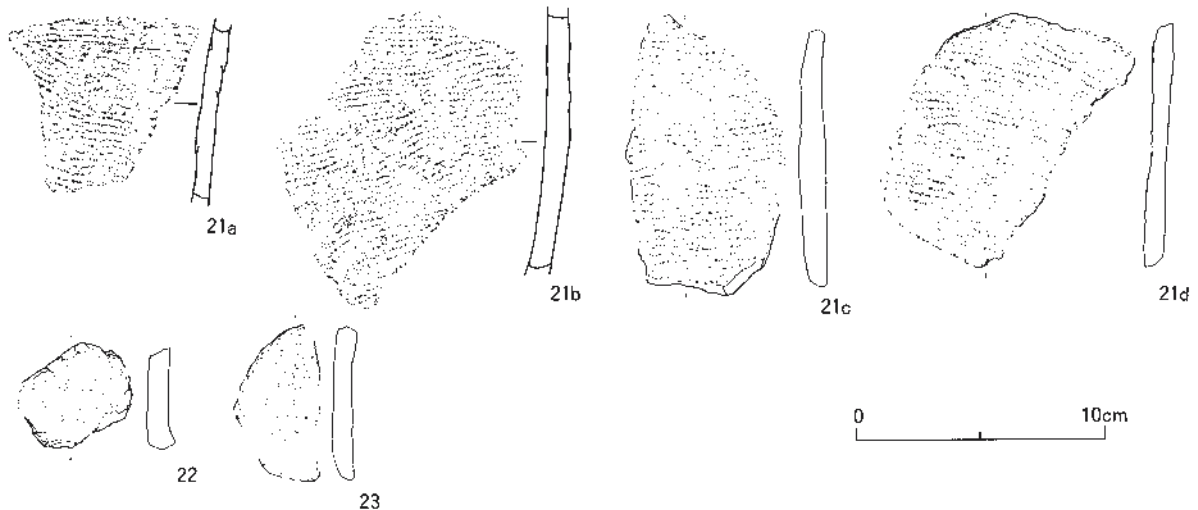




図Ⅲ-38 H-20の遺物(4)



図III-39 H-20の遺物(5)



図Ⅲ-40 H-20の遺物(6)

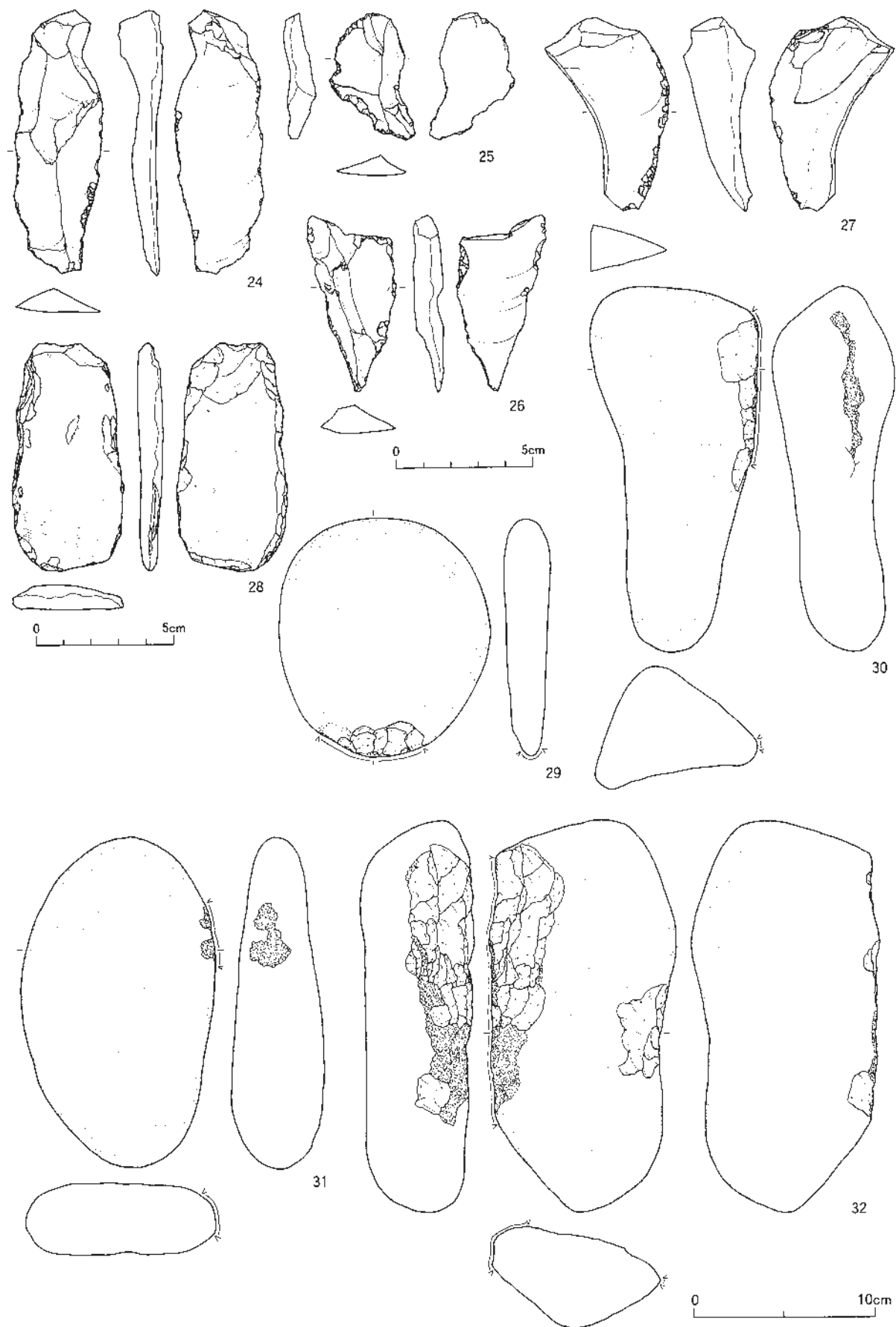
をナデ調整にて無文にし、その後LR縄線を施す。内面は胴部の最大径より下部は縦方向、上部は横方向のミガキ調整だが、頸部の継ぎ目が残る。外面について胴部の膨らみより上部に煤がよく付着する。16は覆土最上部と覆土1層の遺物が接合した。LR縄文を縦方向に施文後、口縁に同一原体と思われる縄線を2本施す口唇は1本の粘土紐で最後の成形をし、平坦面をとる。底面はケズリのようなミガキ調整。17は緩斜面において遺構より上位の調査区であるN~P-18・19区の出土遺物が接合した。LR縄文を縦方向に施文した後、LR縄線を2本口縁部に施す。突起様の波頂部にも表裏にわたって縄線を押圧する。内面についてミガキ調整が施されるが、口縁部については内面の輪積痕が明瞭である。18は覆土最上部から覆土下位にかけての遺物が接合した。内外面ともに、口縁部は斜方向、胴部は縦方向のミガキ調整である。三角形の突起様の波頂部を持つ小型器形。19~23は覆土1層の遺物である。19はRL縄文を縦方向に施文する。張り出す底部、底面ミガキ、底径7cmである。20は縦方向のミガキ調整で無文にする。窄まる底部形態で、底面はミガキ調整で、底径3.4cmである。21は覆土最上部と斜面のH-20より下位から出土した破片がさらに接合した。RL縄文を横走させる。内面は縦方向のミガキ調整である。cとdは縁辺に細かい打ち欠きがあり再生土製品の成形過程のものと考えられる。

3dとeそして22・23は縁辺に細かい打ち欠きがあり再生土製品の製作に関連するものである。22はⅢ群a類、23はⅣ群a類である。

**石器**：24・25・28は覆土1層から、26・27・31は覆土最上部からの出土、29・30・32は覆土2層からの出土である。24は頁岩製のつまみ付きナイフである。縦長剥片を素材とする。背面両側縁に極浅い調整がある。素材本来の形状がつまみ付きナイフのつまみ部として整形されたのか、装着の摩滅等による痕跡かは明らかではない。

25・26・27はスクレイパーである。25は不整な横長剥片を素材とする。背面に縁辺ほぼ全周に極浅い調整がある。26は不整な剥片を素材とする。背面の彎曲した一側縁に極浅い調整がある。27は折損した縦長剥片を素材とする。背面の両側縁に極浅い調整がある。

28は石斧である。片岩の薄い剥片を素材とする。表面全面に研磨痕があり、裏面は割面のままである。縁辺には細かい打ち欠き痕がある。未成品ないしは欠損した斧を再利用しようとしたものである。29はたたき石である。円形に近い扁平な安山岩の楕円礫を用いる。長軸上の一端に片面からの打ち欠



図III-41 H-20の遺物(7)

き痕があり、最大幅約0.2cmの微妙な面を持つ。機能面は敲打痕からなる。

30～32はたたき石で安山岩を用いている。30は断面が三角形をした安山岩の不整な棒状礫を素材とする。三角形のより鋭角的な角度を有する部分の稜にあたる側縁に片面からの打ち欠き痕があり、それぞれ最大幅約0.7cmで不連続な機能面を持つ。機能面は敲打痕からなる。31は安山岩の楕円礫を素材とする。一側縁の一部と長軸の一端に敲打痕がある。32は断面が二等辺三角形をした安山岩の不整な棒状礫を素材とする。二等辺三角形のより鋭角的な角度を有する部分の稜にあたる側縁に片面からの打ち欠き痕があり、それぞれ最大幅約0.8cm・0.3cmで不連続な機能面を持つ。機能面は敲打痕からなる。  
(大泰司)

H-21 (図Ⅲ-87、図版10)

**位置・立地：**I・J-10・11 標高44m付近の平坦面。

**規模：**4.22×3.80m

**確認・調査：**V層面で確認した。遺構の記載については、より関連性が高い、柱穴状の小土壇の頃で述べるものとする。  
(中山)

## 2. 土壇

土壇については、全体的に中期前半か後期前葉か判断し難いものが多い。M16区とP12区を結んだラインに位置する沢地形に沿って比較的集中する。時期決定の根拠を見つけにくく縄文時代中期前半～後期前葉の時期に周囲の遺物の出土状況などから決定したものがほとんどである。縄文時代後期前葉と判断した土壇として、覆土上位に配石を伴うP-2、立石と倒立した深鉢を埋設するP-10、立石風に大型の礫や礫石器が出土したP-23、覆土最上部に礫の縁辺を打ち欠くように使用したたたき石が出土したP-63・71・73がある。縄文時代後期前葉、白坂3式の同一個体がまとまって出土したのものとしてP-39がある。遺物出土状況から縄文時代中期中葉の可能性が高いものとして、P-28・43・50・55・59・87がある。P-50には石器埋納の可能性が高い。P-55・59はそれぞれに同一個体のサイベ沢Ⅶ式土器が比較的まとまっていた。P-87からは大木8b式が出土している。時期決定が難しいものの、特徴的なものとして、Ⅵ層を掘り込んだ際に出てきた礫を投げ込んだ可能性があるものとして、P-18・19・29がある。またP-15・57・58・95は直径が1.5mを超える大型のものである。P-95は後期前葉のものである。他は時期判断の根拠が乏しいものである。P-15は小柱穴が周囲を巡り、P-57・58について調査者は中期前葉と推定した。(大泰司)

P-2 (図Ⅲ-42・43、図版11・57・58)

位置・立地：O・P-13 標高42m付近の平坦面。

規模：1.00/0.78×0.76/0.64×0.95m

確認・調査：Ⅲ層下面で人頭大の礫が円形に並んでいるのが確認できた。Ⅳ・Ⅴ層を1m程掘りこんで作られている。覆土は埋め戻し土である。上面に円形に礫を配し、掘り込みも深く、覆土が埋め戻し土であることから墓壇の可能性が高いが、遺体、副葬品は出土していない。平面形は円形で壇底は平坦で、壁は垂直に近い立ち上がりである。遺物は上面の礫以外に土器90点、石器6点で、主に覆土の上位から出土しており、壇底部からの出土はない。

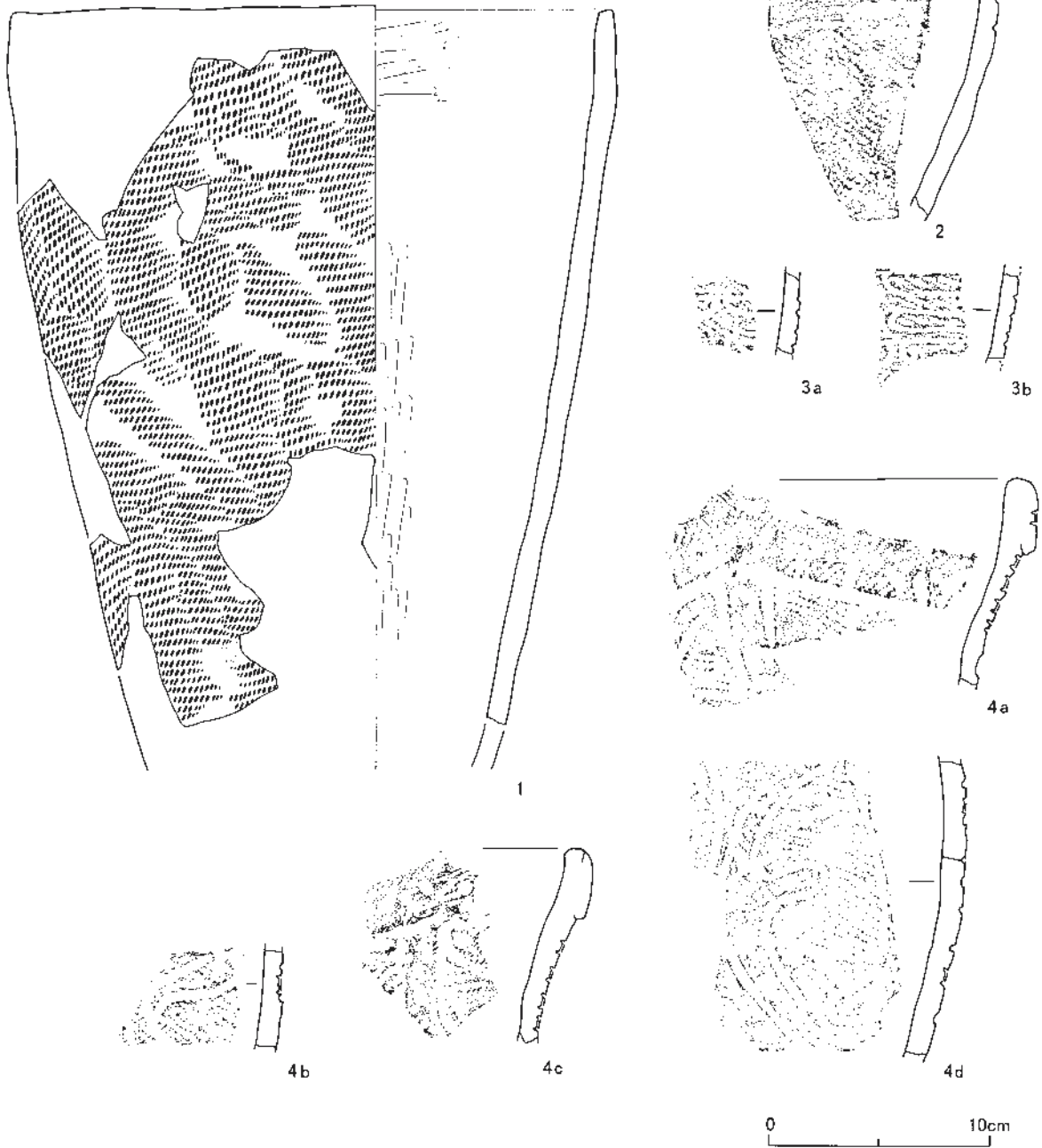
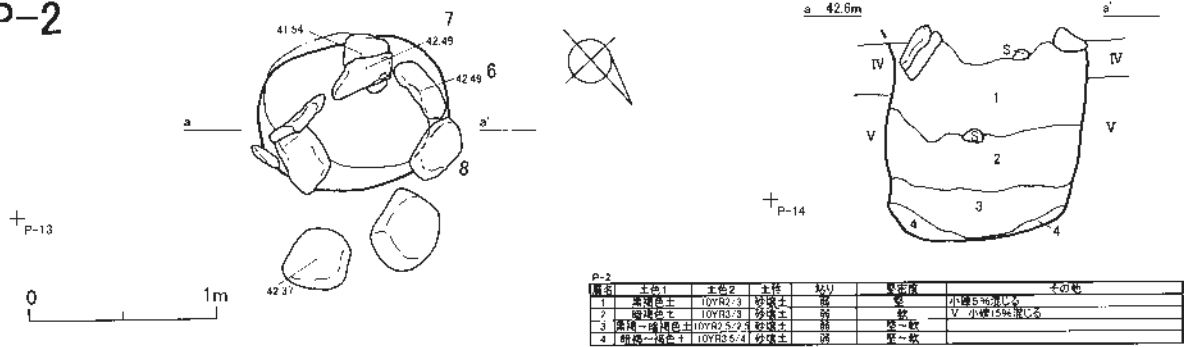
時期：出土遺物、確認層位より縄文時代後期前葉のものである。(中山)

掲載遺物 土器：いずれもⅣ群a類である。3・4は涌元式の範疇で4はより新しい段階のものである。1・2は覆土中位、3・4は覆土上位のものである。1は沢地形に対して遺構より上位にあるP13区からまとまって出土したものとP-2の覆土中位のものが接合した。地文はLR縄文を横走させたものである。内面はミガキ調整で、口縁部は横方向、胴部は縦方向である。2はLR縄文地文施文後LR縄線を施す。内面は横方向のミガキ調整だが、口縁部には輪積痕が残る。3は覆土上位のものと10ラインの沢地形のものが接合した。LR縄文地文施文後沈線文を施す。内面はミガキ調整である。4は覆土上位のものが平坦面のより広い範囲における上位の調査区のものに接合した。LR縄文を縦方向に施文した後、沈線文を施し、円形刺突で充填する。折り返し口縁成形後、沈線文。折り返し口縁上にもLR縄文を施す。摩滅著しい。

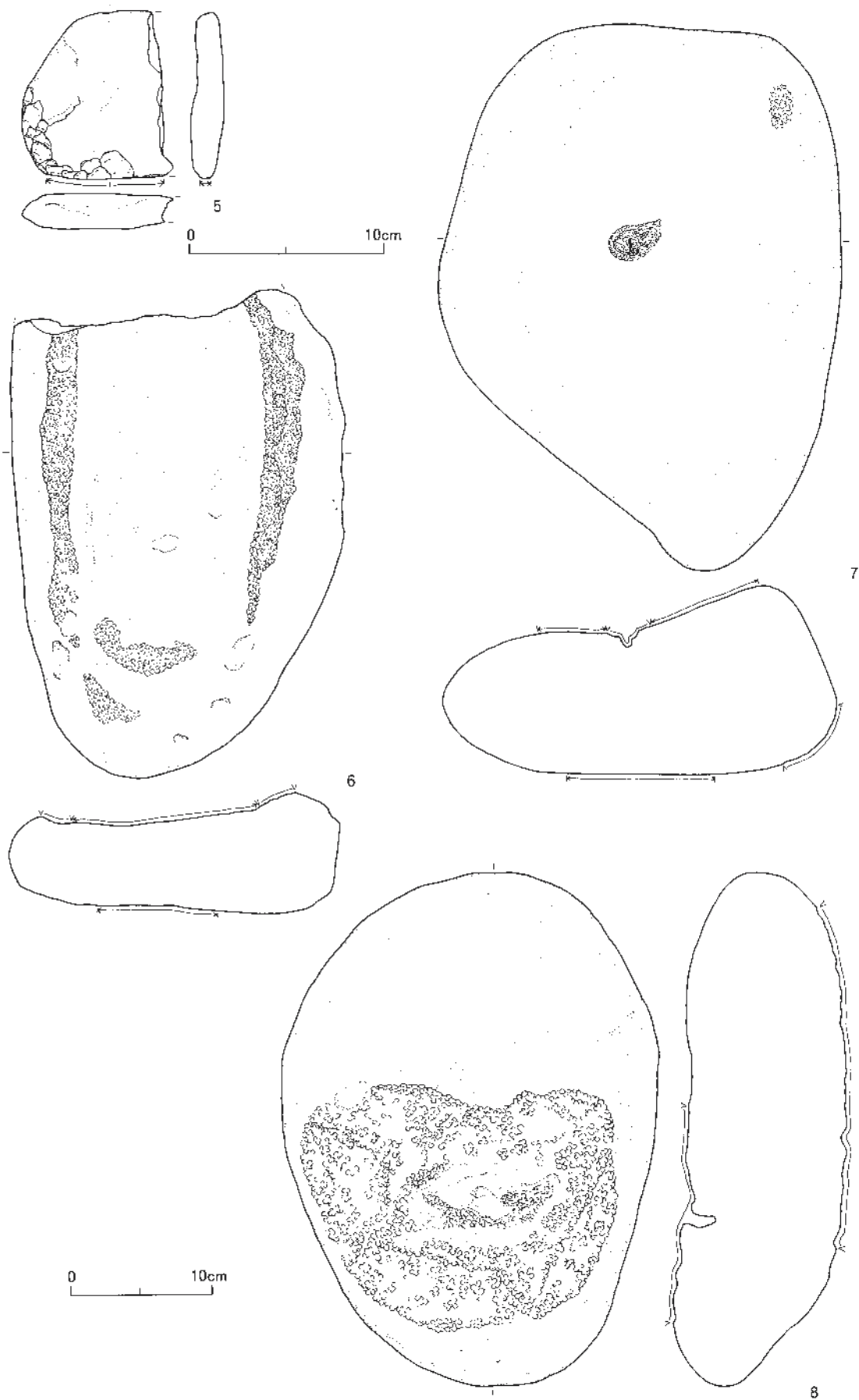
石器：5は覆土上位からの出土である。6～8は土壇上部の配石に用いられていた礫石器である。いずれも安山岩製で、6・8は濁川火砕流起源の安山岩を用いている。

5は扁平打製石器で、扁平な楕円礫を素材とする。一側縁を敲打によって機能面を整形する。側縁の下側についても両面からの打ち欠きによって整形する。機能部は最大幅6mmの面を有する。機能面には長軸方向に擦痕がのびる。敲打痕も観察でき、敲打に伴うものか細かい剥離が周囲にめぐる。機能面からの加撃によるものか割れている。6は石皿で、楕円礫の一面に敲打によって明瞭な皿面を整

P-2



図Ⅲ-42 P-2と遺物(1)



図III-43 P-2と遺物(2)



形し、皿部には擦痕が使用痕なのか明瞭に残る。裏面にも擦痕がある。7は石皿で、磨りによる明瞭な皿面を持つ。皿面のほぼ中央に敲打による孔を持つ。裏の平坦面部分にも擦痕を持つ。8は台石で、両面に擦痕と敲打痕がある。図で表面とした側については浅い凹面をなす。凹面の中央には敲打による孔を持つ。  
(大泰司)

**P-9** (図Ⅲ-44、図版11・58・59)

**位置・立地**：N-9 標高41.0~41.5m。

**規模**：1.40/1.06×(1.20)/1.04×0.18m

**確認・調査**：H-15床面精査中に黒色土の落ち込みを検出した。墳底部の一部がH-15の床面と重なっており、P-9の墳底自体がやや傾斜していたため、H-15床面検出作業において、一部を削平、欠失させてしまった。墳底はやや丸みを帯び、壁は緩やかに立ち上がる。墳底と壁の境が不明瞭な皿状のピットである。残存部分から平面形は円形が想定される。確認面において、土器片が半円状に出土した。覆土内から被熱の範囲が明瞭な炉石が出土したが、本来、重複しているH-15の炉石であった可能性がある。

**時期**：縄文時代中期中葉と思われる。  
(影浦)

**掲載遺物 土器**：いずれもⅢ群a類である。いずれもサイベ沢Ⅶ式土器ないしはそれに並行するものである。1は覆土の上・中位の遺物を主として上位から下位にかけてのものが接合した。2は覆土下位、3・4は覆土上位のものが接合した。1はRL縄文地文であり、摩滅は著しい。2はRL縄文地文で、貫通しない孔を有する。口唇部は横方向、胴部は縦方向のミガキ調整である。3は円筒上層d式である。結束第2種羽状縄文に粘土紐を貼り付けて、上からL縄とR縄を矢羽根状になるように上から押圧する。口縁部には連続して同一の縄線を施す。4の底面はミガキ調整で、内面は円を描くようにミガキ調整を施す。縁辺を打ち欠いた痕跡があり、円板形をした再生土製品の製作に関連する可能性がある。

**石器**：5は扁平打製石器で、覆土中位からの出土である。安山岩の扁平な楕円礫を素材とする。一側縁を敲打によって機能面を整形する。両側縁についても両面からの打ち欠きによって正面観を直線的ないしは凹面に整形する。機能部は最大幅2cmの面を有する。機能面には長軸方向に擦痕がのびる。敲打痕も観察でき、敲打に伴うものか細かい剥離が周囲にめぐる。6はたたき石で、覆土下位からの出土である。安山岩の厚みのある球礫に近い楕円形の礫を用いる。一面の頂部を敲打に敲打痕がある。下端にも微妙な敲打痕を有する。  
(大泰司)

**P-10** (図Ⅲ-45、図版11・59)

**位置・立地**：I-14 標高44m付近の平坦面。

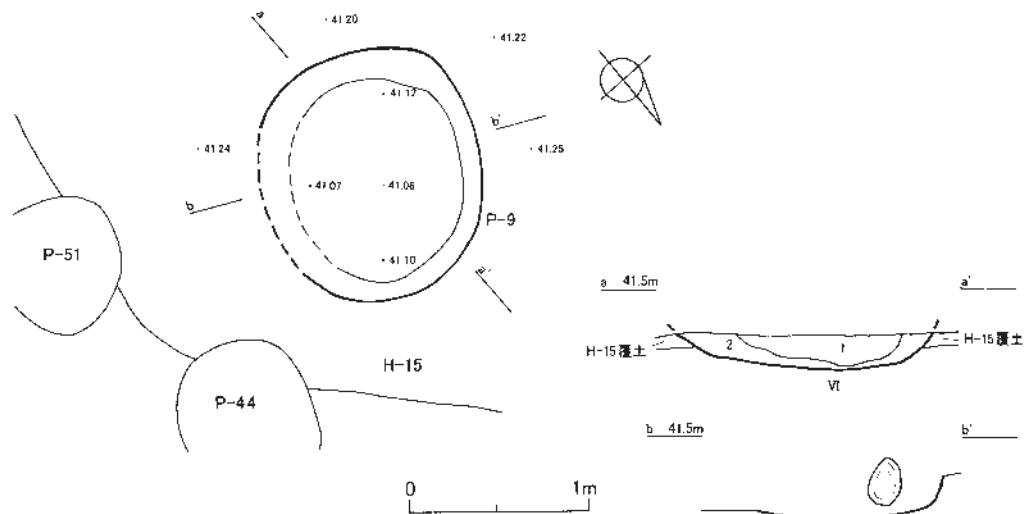
**規模**：0.95/0.81×0.72/0.67×0.28m

**確認・調査**：V層上面で人頭大の礫とほぼ完形の土器のある黒い落ち込みとして確認した。覆土はV層主体の土だが炭化物が混ざり、埋め戻しのもと思われる。平面形は円形で、墳底はほぼ平坦で壁は急角度で立ち上がる。土器と礫の配置から墓壇の可能性が高いが、遺体層などは発見できなかった。遺物は覆土中より土器48点、被熱礫1点が出土した。

**時期**：出土遺物から縄文時代後期前葉のものと思われる。  
(中山)

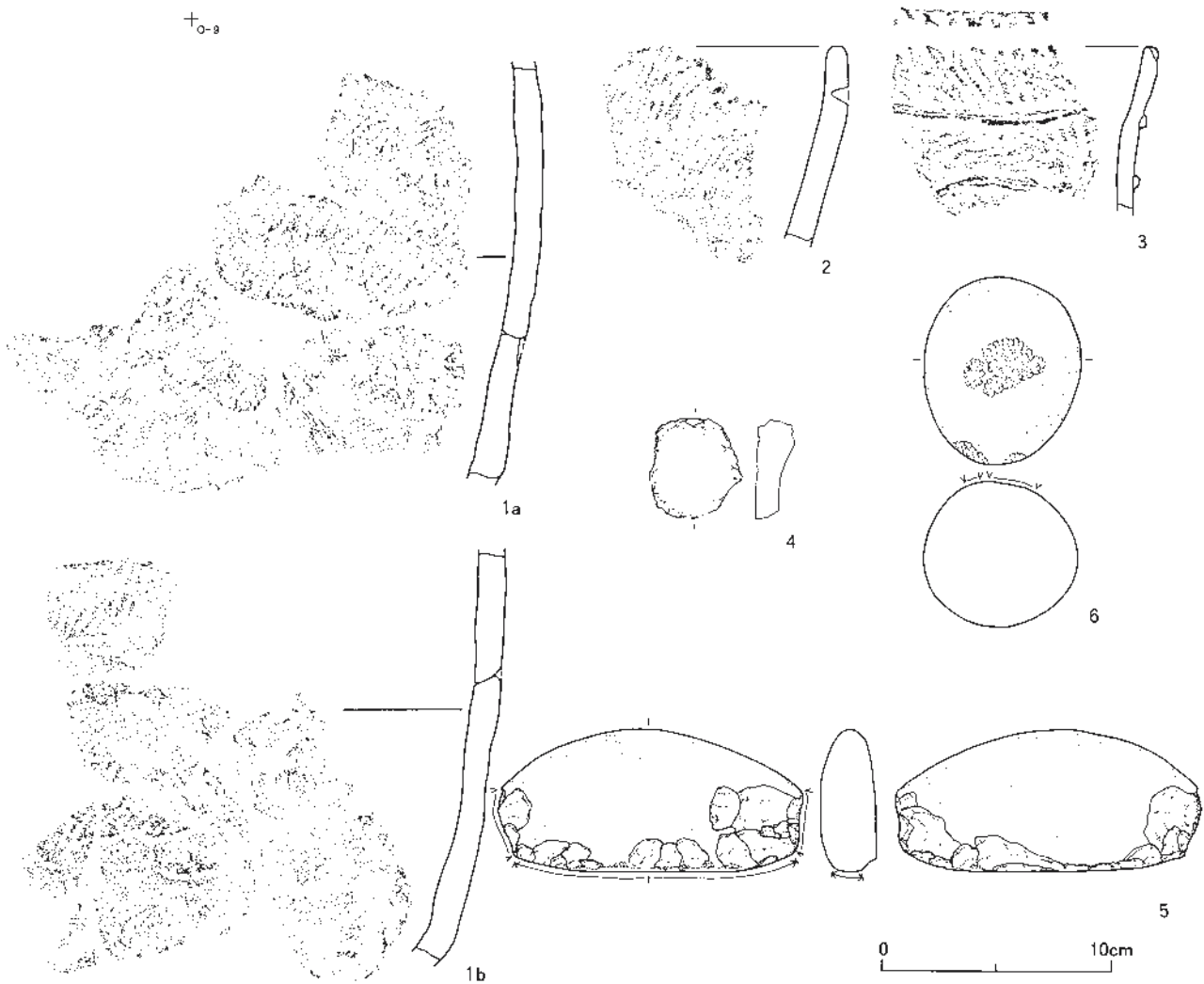
**フローテーション成果**：埋設土器の土器に詰まっていた土を試料として採取し、フローテーション法にて処理した。炭化種子はタデ科の種子が検出された(詳細はⅥ章を参照)。

P-9 <sup>+</sup><sub>N-9</sub>



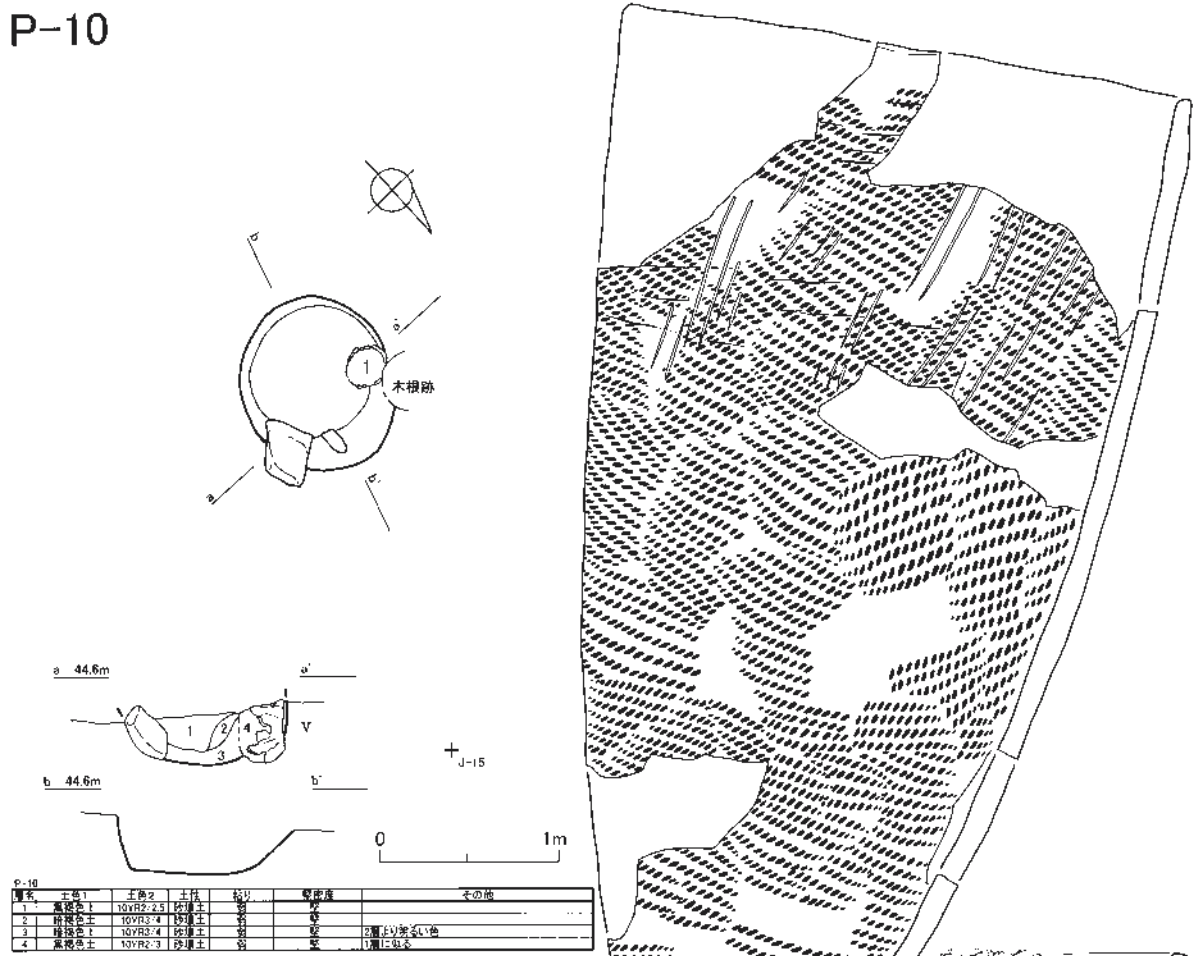
P-9						
層名	名称	土層2	土層1	材料	堅固度	その他
1	覆土	10YR1/1	砂壤土	弱	軟	砂主体 垂直距離5%以内
2	フナリツノ島の土	5Y2/1	砂壤土	弱	硬	砂主体 垂直距離5%以内

<sup>+</sup><sub>O-9</sub>



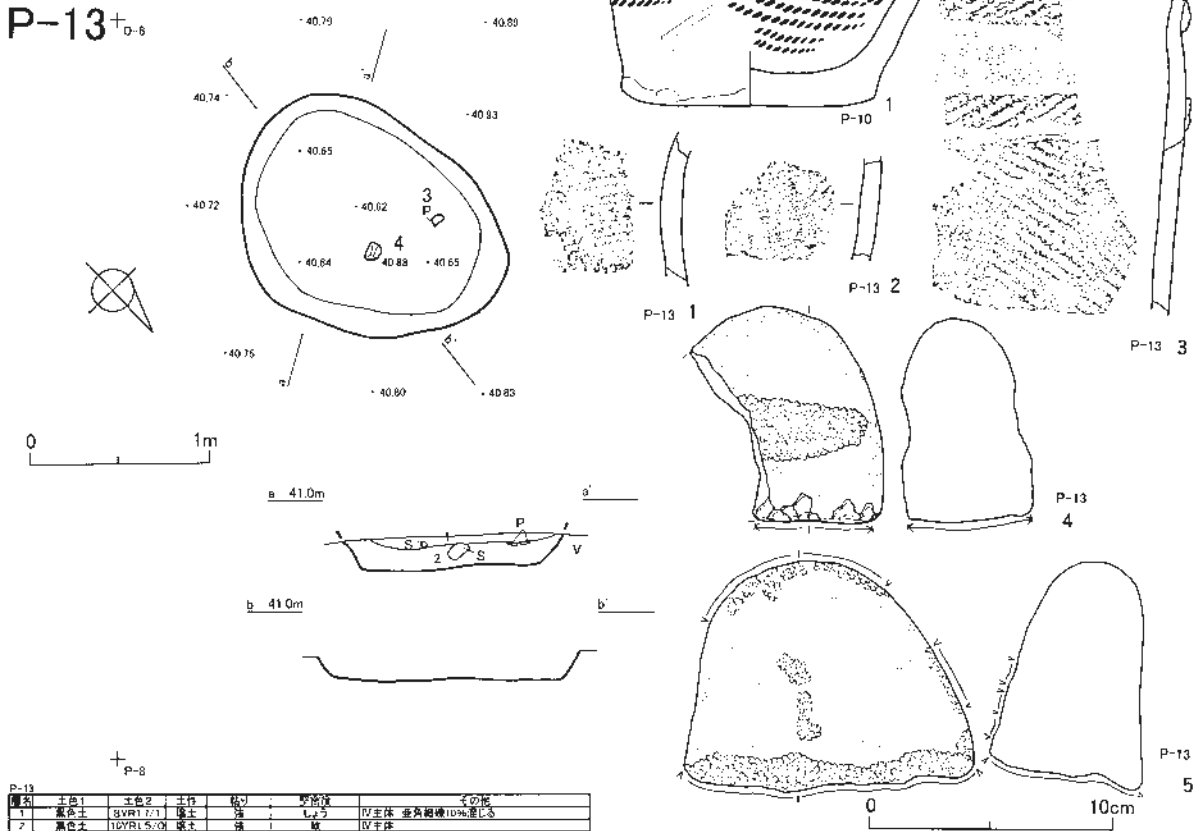
図III-44 P-9と遺物

P-10



層名	土色1	土色2	土質	粘り	堅固度	その他
1	黄褐色土	10YR2-2.5	砂壤土	弱	弱	
2	黄褐色土	10YR3-4	砂壤土	弱	弱	
3	黄褐色土	10YR3-4	砂壤土	弱	弱	IV層より赤い色
4	黄褐色土	10YR2-1	砂壤土	弱	弱	IV層に似る

P-13<sup>+D-6</sup>



層名	土色1	土色2	土質	粘り	堅固度	その他
1	黄褐色土	5YR1 7/1	壤土	強	強	IV主体 垂直層様10%混じる
2	黄褐色土	10YR1.5/0.5	壤土	強	強	IV主体

図III-45 P-10と遺物、P-13と遺物

**掲載遺物 土器**：1はIV群a類である。P-10の覆土とP-10が存在する同一調査区のものに接合した。袈裟懸けに上半分について調査区出土のものなので、遺構上部を掘り過ぎた際に、調査区に属した遺物となった可能性がある。胴部上半について輪積痕を残し気味にし、RL縄文を横走させる。その際の押圧痕が残る。窄まる胴部下半には煤の付着がない。微妙に張り出す底部形態である。底面は摩滅が著しい。口唇部は一本の粘土紐で成形し、平坦面をとる。内面は主に縦方向のミガキ調整である。焼成前の乾燥時にゆがんだものか正中線がゆがんでおり、自立は難しい。(大泰司)

**P-13** (図III-45、図版11・12・59)

**位置・立地**：O-8 濁川河岸段丘縁 標高40.7~40.8mの平坦面。

**規模**：1.54/1.28×1.16/0.96×0.20m

**確認・調査**：V層上面を精査中、F-6と同時に検出した。平面形はややいびつな楕円を呈する。壙底部はほぼ平坦で、壁が緩やかに立ち上がる。覆土は埋め戻しによる。その覆土に一部、F-6の焼土が及んでいたことから、P-13が形成直後にF-6が焚かれた可能性が高い。掘り込み面は確認面とほぼ同じであることが想定される。ほぼ中央の覆土内において北海道式石冠が出土した。

**時期**：覆土内の出土遺物から縄文時代後期前葉の可能性が高い。(影浦)

**掲載遺物 土器**：1はIII群a類、2・3はIV群a類である。1・2は覆土中位のものである。3は覆土上位と中位からのものが接合した。1は魚骨回転文である。内面は横方向のナデ調整である。2はLR縄文の上から強くナデつける。内面は縦方向のミガキ調整である。3はナデ調整によって器面上部を無文にする。その上に天祐寺式に類似したタガ状の粘土紐を貼付する。内面と口唇は化粧土のように薄く粘土をナデつけて調整する。

**石器**：4・5はいずれも多孔質の安山岩を用いている。4は北海道式石冠で、覆土上部からの出土である。楕円礫を短軸で半割したものを素材とする。敲打によって持ち手部分を整形する。機能面には擦痕を有し、短軸に対してほぼ平行に擦痕がはしる。調整の際のものか敲打痕も有し、敲打に伴うものか細かい剥離が周囲にめぐる。5はたたき石で、覆土下位からの出土である。厚みのある楕円礫を短軸で割ったものである。割面と縁辺に微妙な敲打痕がある。北海道式石冠未成品の可能性が高い。(大泰司)

**P-15** (図III-46、図版12)

**位置・立地**：I・J-13・14 標高44.0~44.5m付近の平坦面。

**規模**：1.75/1.63×1.74/1.62×0.34m

**確認・調査**：V層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は壁際にV層を主体とする土の流入が見られ、中央はIV層を主体とした黒褐色土にV層の土が混じりこんだ土層が堆積する。掘り込み面は検出面より上位である。平面形は円形を呈し、壙底はほぼ平坦で、壁は急角度に開きながら立ち上がる。土壌の西側と東側には柱穴様の小土壙が巡る。遺物は覆土の下部からIII群a類土器が別個体の破片のみで80点出土している他には、覆土中から散点的に出土する。

**時期**：覆土下位からまとめて出土したIII群a類土器から、縄文時代中期前半以降のものである。周囲を巡る小柱穴から、特に後期前葉の可能性がある。

**掲載遺物 土器**：1~3はIII群a類であり、いずれもは覆土下位からの出土である。1は魚骨回転文で、摩滅著しい。2は結束を持つL縄文である。内面には煤が付着する。縁辺打ち欠いた痕跡があり、円板状の再生土製品の製作に関連している可能性がある。3は外面を横方向のナデ調整にて無文とする。(大泰司)

P-16 (図Ⅲ-46、図版12・59)

位置・立地：J-12 標高43.5~44.0m付近の平坦面。

規模：0.73/0.70×0.66/0.53×0.15m

確認・調査：V層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。覆土はV・VI層を主体とする土の流入の後、IV層を主体とした黒色土の自然堆積が観察された。掘り込み面は検出面より上位である。平面形は不整な円形を呈し、壙底はほぼ平坦だが、中央にVI層にもともと入っている礫が検出された。壁はおおよそ垂直に立ち上がるが、北西壁はオーバーハング気味で、南東側は開き気味である。遺物の出土は無かった。

時期：周辺の遺物から縄文時代中期前半もしくは後期前葉の遺構と推測される。(大泰司)

P-18 (図Ⅲ-46、図版13)

位置・立地：J-12 標高43.5~44.0m付近の平坦面。

規模：1.20/0.93×1.06/0.93×0.53m

確認・調査：V層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。黒色土の中央にはVI層主体の土が流入していた。覆土はVI層を主体とする土で、大型のVI層ブロックが入り込んでいた。VI層の混在は比較的少ないが、台石が上位に配されており、埋め戻しの可能性がある。その堆積後、何かの掘り上げ土が堆積したものと推定した。掘り込み面は検出面より上位である。平面形は不整な三角形を呈し、壙底はほぼ平坦である。壁は開口部に向かって、おおよそ垂直に立ち上がるが、北西壁はオーバーハング気味で、南東側は開き気味である。遺物は埋め戻し上部の礫集中に台石が1点混在していた他、上部の自然堆積からIV群a類土器1点が出土している。

時期：遺物の出土状況から後期前葉の遺構と推測される。(大泰司)

P-19 (図Ⅲ-46、図版13)

位置・立地：J-12 標高43.5~44.0m付近の平坦面。

規模：0.80/0.48×0.73/0.50×0.38m

確認・調査：V層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。黒色土の中央にはVI層主体の土が流入していた。覆土はVI層を主体とする土の流入の後、何かの掘り上げ土が流入したものと推定した。掘り込み面は検出面より上位である。平面形は不整な三角形を呈し、壙底はほぼ平坦である。壁は開口部急角度に開きながら立ち上がる。遺物は、覆土の下位から台石が2点とIV群a類土器が出土している。

時期：遺物の出土状況および、周辺の遺物から後期前葉の遺構と推測される。(大泰司)

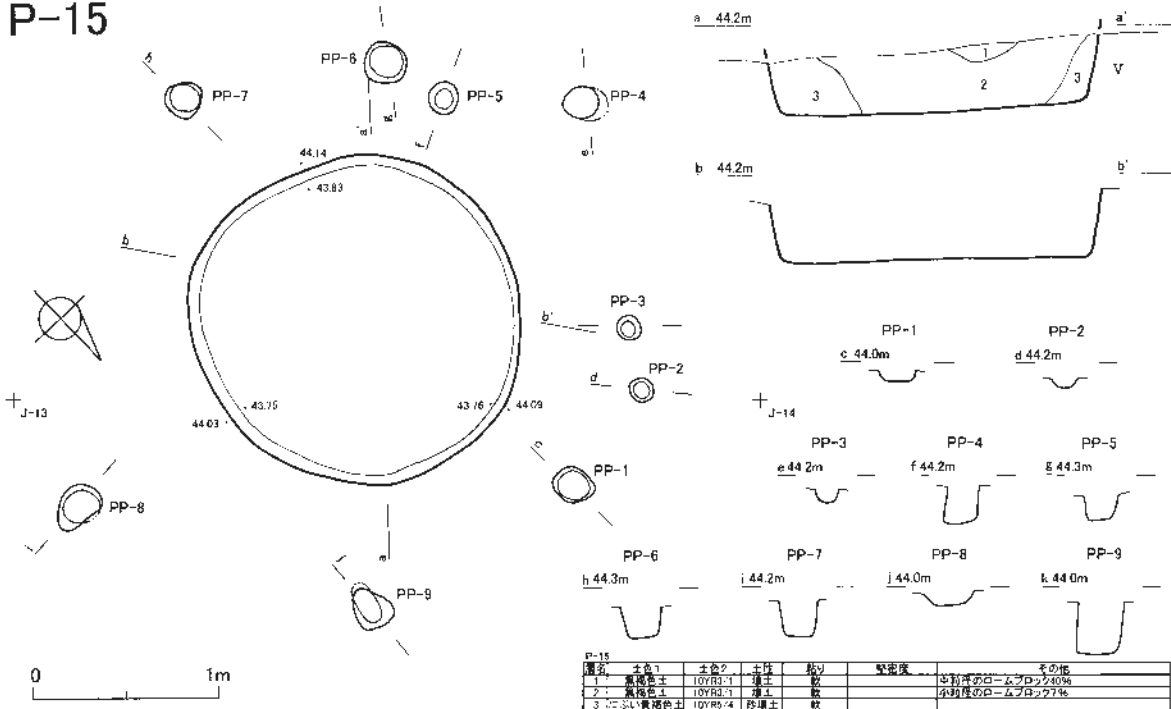
P-20 (図Ⅲ-47、図版13・59・60)

位置・立地：O-11・12 標高41.8~42.0mの平坦面。

規模：1.34/1.12×0.99/0.76×0.38m

確認・調査：IV層下位を掘り下げ中、土器片のまとまりを検出した。遺物を残したままV層上面まで掘り下げ、精査したところ、微細骨片を含んだ黒色土の落ち込みが確認された。半割して断面を観察したところ覆土は3枚に分けられた。骨片は覆土1と2のみに含まれ、壙底部に接する覆土3にはほとんど含まれていなかった。埋め戻しと考える。平面形は楕円を呈する。壙底部はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる形状である。壙底部と壁の境は明瞭ではない。掘り込み面はおそらくIV層中で土器のまとまりが出土した付近と考えられる。掘り込み面と考えられる付近において、土器のまとまり

P-15



P-16  
P-18  
P-19

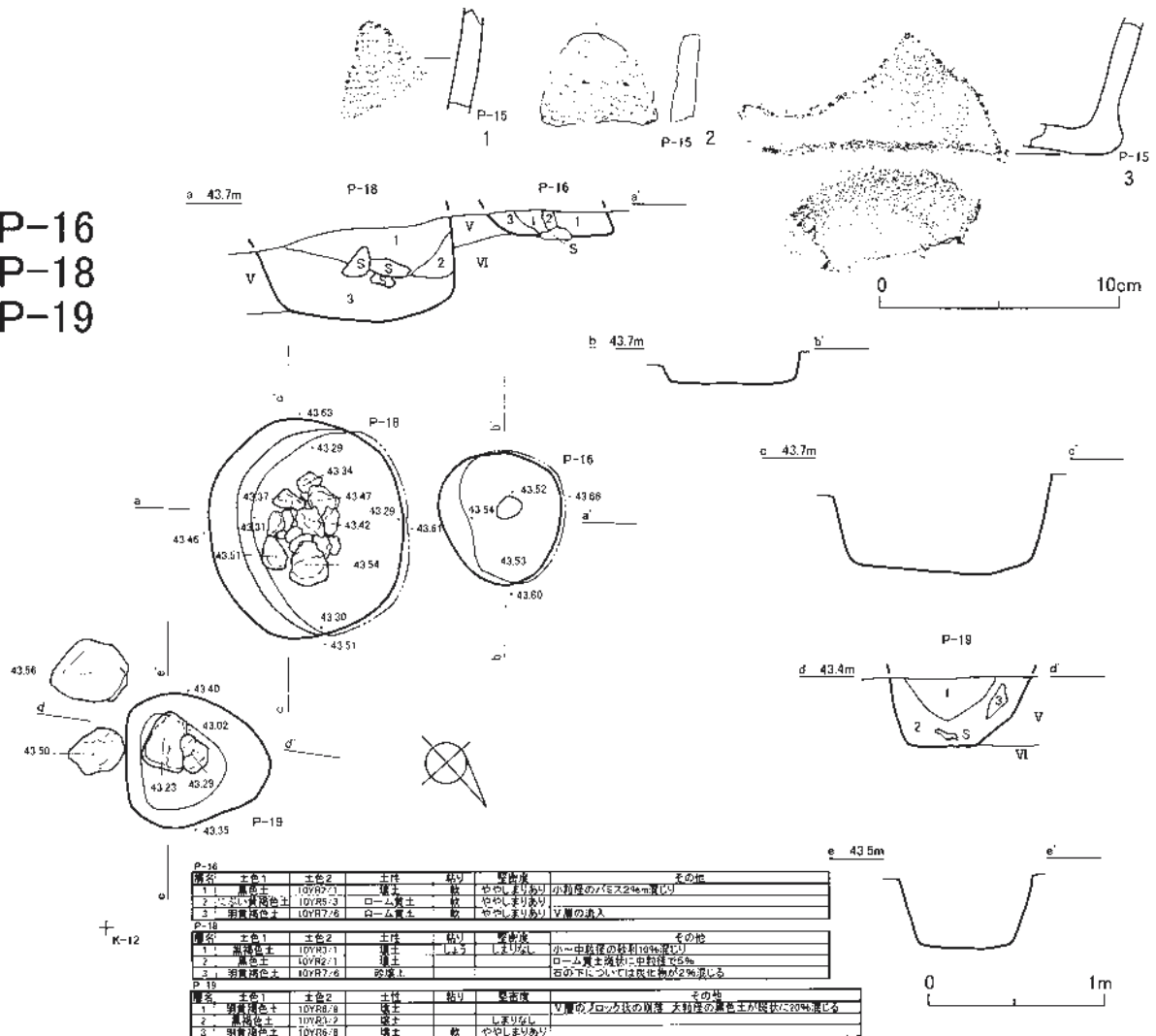


図 III-46 P-15と遺物、P-16・18・19

を検出した。

**時期：**出土した土器から縄文時代中期中葉と考えられる。(影浦)

**フローテーション成果：**覆土の骨片混じりの土を試料として採取し、フローテーション法にて処理した。イワシ、カレイ類、種不明の魚類、種不明の両生類、種不明の海獣類、種不明の獣骨が出土している。炭化種子はヒエ属、タデ科、クルミ属、種不明の種子が検出された。ヒエ属が出土したことに特徴がある(詳細はVI章を参照)。

**掲載遺物 土器：**1・3はⅢ群a類である。1は円筒上層b式、3はサイベ沢Ⅶ式並行である。2はⅣ群a類で、4はⅢ群b1類で、榎林式並行である。1・2・3は覆土上位からの出土であり、4は覆土のものである。1は覆土上部からのものこの遺構より斜面下の調査区から出土したものが接合した。ナデ調整により、胴部から口縁部まで無文にした後、隆帯を貼付する。隆帯上にはL縄の絡条体を回転圧痕する。それに沿って半截竹管を連続押し引き刺突をする。2について、口唇部以外は器面、器内面ともに縦方向のミガキ調整である。突起様の波頂部がある。3は結束第2種羽状縄文地文である。口唇部に平坦面をとり面上に馬蹄形圧痕を連続して施す。4は榎林式並行である。覆土からのものと遺構の立地する調査区と隣接する調査区包含層から出土した。外面横方向のミガキ調整後に沈線を施す。内面は横方向のミガキ調整である。

**石器：**5は北海道式石冠未成品で、覆土中部からの出土である。安山岩の楕円礫を短軸で半割したものを素材とする。敲打によって持ち手部分を整形する。断面と面部分に微妙な敲打痕がある。北海道式石冠未成品の可能性が高い。(大泰司)

#### P-21 (図Ⅲ-47、図版13)

**位置・立地：**M・N-14 標高43m付近の平坦面。

**規模：**1.07/(0.63)×0.75/(0.48)×0.18m

**確認・調査：**F-36付近を精査中にV層上面で確認。平面形は楕円形で、壙底は平坦、壁は緩やかに立ちあがる。覆土は単層で柔らかく、埋め戻しか自然堆積かは判然としない。遺物は覆土上面に台石が1点あった他、覆土中より土器8点、偏平打製石器1点が出土した。覆土上面の台石は落ち込みに流れ込んできたものと思われる。

**時期：**出土遺物と確認面の同じ周辺の遺構から縄文時代後期前葉のものと思われる。(中山)

**掲載遺物 石器：**1は偏平打製石器で、覆土からの出土である。安山岩の板状礫を素材とする。縁辺のほぼ全周を両面からの打ち欠きによって整形する。縁辺についても打ち欠きによって刃部様に整形する。機能部は正面観が直線的であるが面を有するには至らない。機能面には、整形に加えて、使用時の敲打に伴うものか細かい剥離がめぐる。(大泰司)

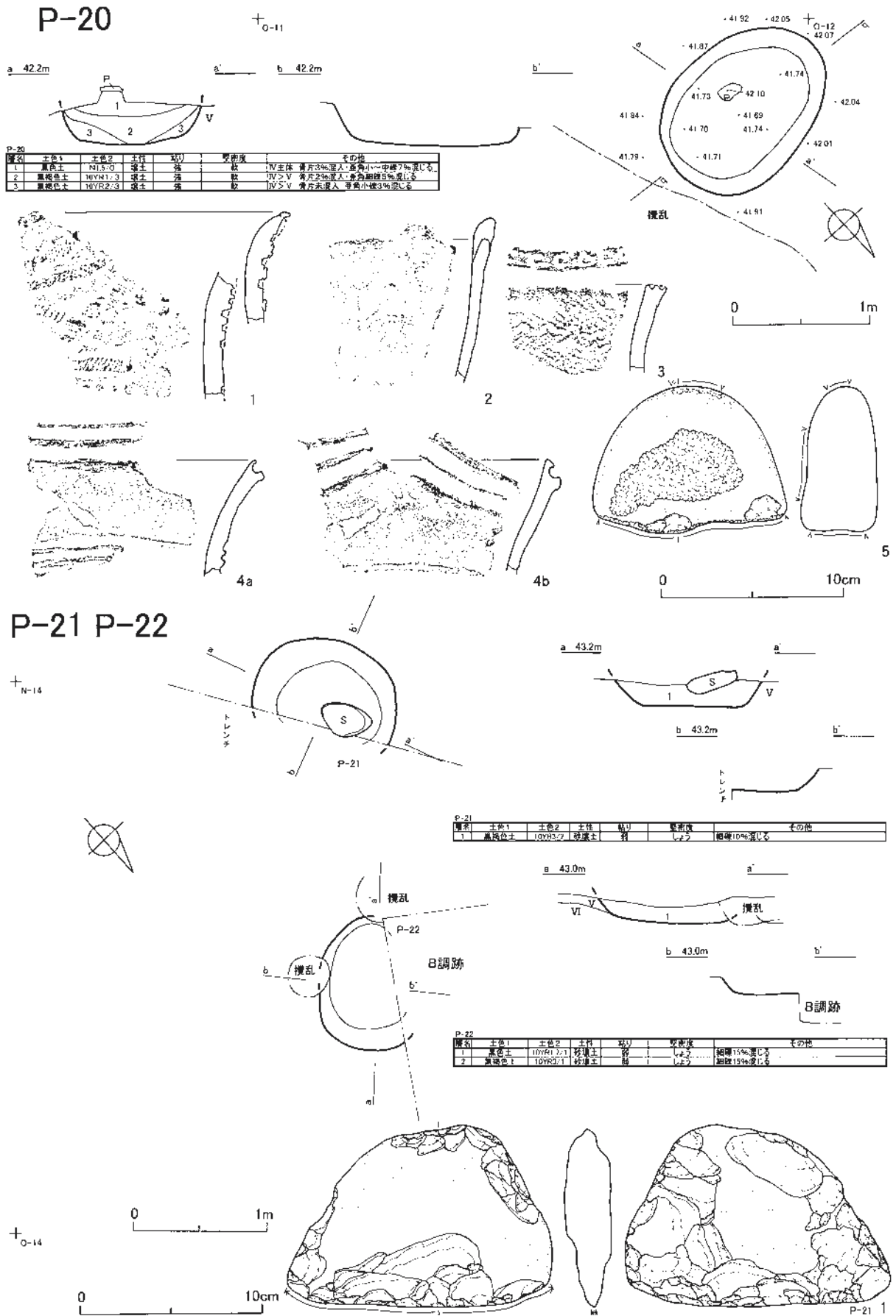
#### P-22 (図Ⅲ-47、図版13・60)

**位置・立地：**N-14

**規模：**0.95/(0.56)×0.74/(0.48)×0.14m

**確認・調査：**F-36付近精査中にV層上面で確認。すぐ近くのP-21と関係のあるものと思われ、形も似ている。平面形は楕円形で、壙底は平坦、壁は緩やかに立ちあがる。覆土は単層で柔らかく、埋め戻しか自然堆積かは判然としない。遺物は出土していない。

**時期：**確認面の同じ周辺の遺構から縄文時代後期前葉のものと思われる。(中山)



図III-47 P-20と遺物、P-21と遺物、P-22



P-23 (図Ⅲ-48、図版14・60)

**位置・立地：**J・K-14 標高44m付近の平坦面。

**規模：**1.23/1.13×0.92/0.92×(0.38)m

**確認・調査：**IV層下面で黒い円形の落ち込みとして確認した。覆土はV層主体で、炭化物が混ざることが単層で、埋め戻しの可能性は低い。覆土上面に30cmほどの台石が立っていた。平面形は円形で壙底はなだらかな皿状を呈すが、壁の立ち上がりは比較的急である。立石から墓壙の可能性もあるが、覆土、遺物からは性格を特定するまでに至らなかった。遺物は前述の礫のほかに覆土中から土器9点、Uフレイク1点が出土した。

**時期：**出土遺物から縄文時代後期前葉のものと思われる。(中山)

**掲載遺物 土器：**1はIV群a類で、涌元Ⅱ式である。覆土と平坦面において遺構より下位の調査区から出土した。横方向のナデ調整によって無文地にした口縁部に折り返し口縁を成形し、折り返し部分にRL縄文を施文した後、沈線文を施す。内面は横方向のナデ調整である。

**石器：**2は台石で、覆土からの出土である。安山岩の楕円礫を素材とする。縁辺のほぼ全周に敲打痕がある。一平面に微妙な擦痕がある。(大泰司)

P-24 (図Ⅲ-48、図版14)

**位置・立地：**N-13 標高42.0~42.5m付近の平坦面に位置する沢地形。

**規模：**1.27/1.13×1.04/0.90×0.38m

**確認・調査：**V層上面で、黒色土と、V層より褐色味の強い土の混在する土の落ち込みとして確認した。覆土は埋め戻し土である。掘り込み面は検出面より上位である。平面形は不整な楕円形を呈し、壙底は平坦である。壁はおおよそ垂直に立ち上がるが、北西壁はオーバーハング気味で、南東側は開き気味である。遺物は埋め戻しの下位から礫が2点、IV群a類土器1点、そしてフレイクが1点出土している。

**時期：**遺物の出土状況と周辺の遺物から縄文時代後期前葉の遺構と推測される。(大泰司)

P-25 (図Ⅲ-48、図版14)

**位置・立地：**N-12・13 標高41.5~42.0m付近の平坦面に位置する沢地形。

**規模：**1.12/1.02×0.38/0.38×0.58m

**確認・調査：**V層上面で、より褐色味の強い土の混在する土の落ち込みとして確認した。覆土は埋め戻し土である。壙底部には粘質を帯びた土層が一枚ある。掘り込み面は検出面より上位である。平面形は不整な円形を呈し、壙底は中央部に窪みがある。壁は急角度に開きながら立ち上がる。遺物は覆土上部から、IV群a類土器5点とフレイクが1点出土している。

**時期：**遺物の出土状況と周辺の遺物から縄文時代後期前葉の遺構と推測される。(大泰司)

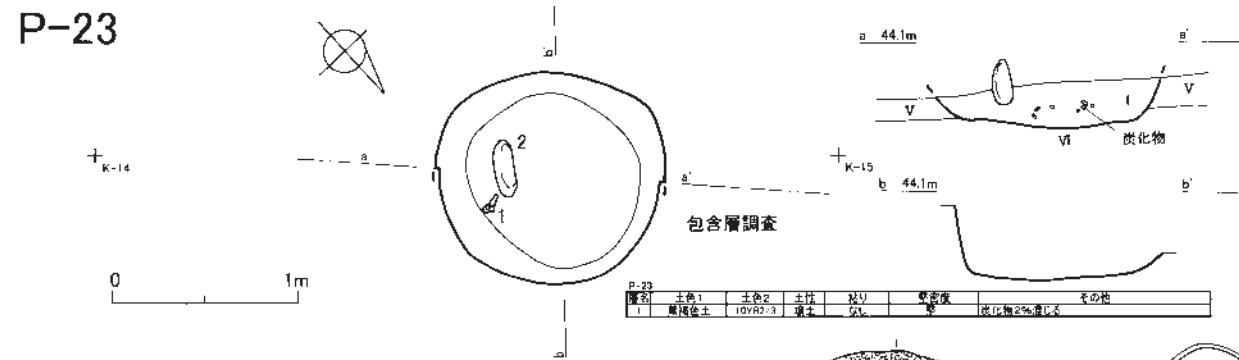
P-26 (図Ⅲ-48、図版14)

**位置・立地：**N-12 標高42.0~42.5m付近の平坦面に位置する沢地形。

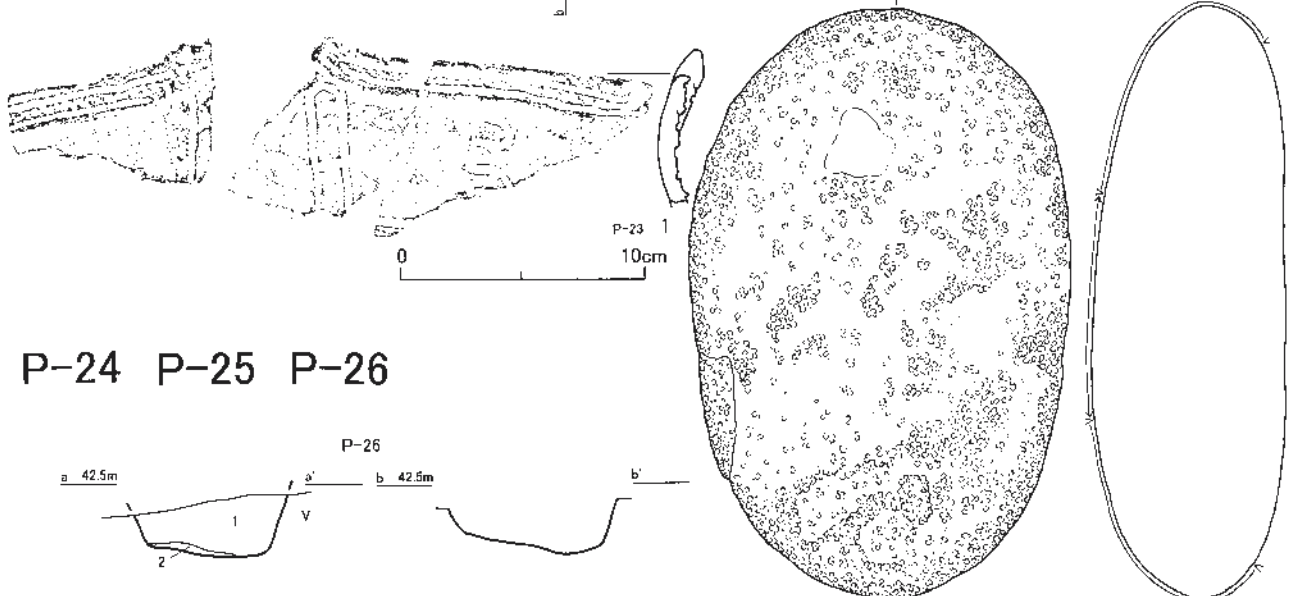
**規模：**0.82/0.70×0.89/0.78×0.32m

**確認・調査：**V層上面で、より褐色味の強い土の混在する土の落ち込みとして確認した。覆土は埋め戻し土である。壙底部には粘質を帯びた土層が一枚ある。掘り込み面は検出面より上位である。平面形は不整な円形を呈し、壙底は西側に窪みがある。壁は急角度に開きながら立ち上がる。遺物は覆土

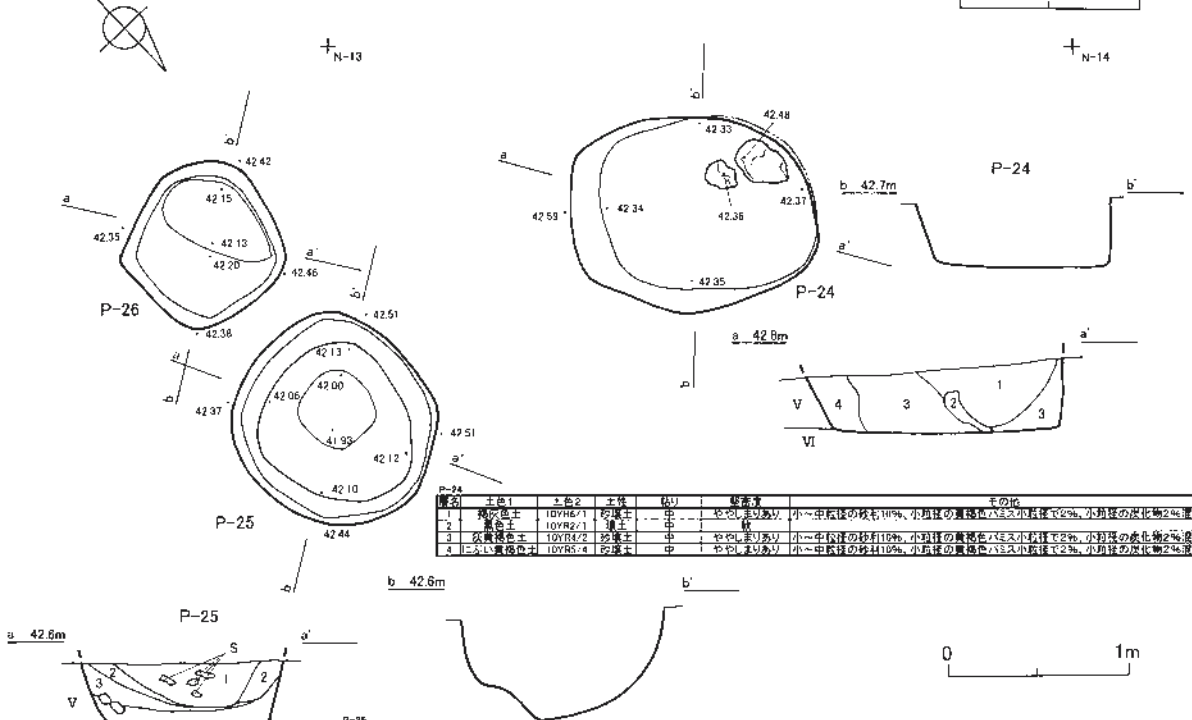
P-23



P-23						
層名	土色1	土色2	土質	粘り	堅固度	その他
1	黒褐色土	10YR2-3	硬土	粘り	弱	炭化物2%混じる



P-24						
層名	土色1	土色2	土質	粘り	堅固度	その他
1	褐色土	10YR5-1	砂壤土	中	やや硬いあり	小~中粒径の砂10%、小粒径の黒褐色が5%、小粒径の炭化物2%混じり
2	黄褐色土	10YR5-2	硬土	粘り	弱	やや粘層を混じる



P-24						
層名	土色1	土色2	土質	粘り	堅固度	その他
1	褐色土	10YR5-1	砂壤土	中	やや硬いあり	小~中粒径の砂10%、小粒径の黒褐色が5%、小粒径の炭化物2%混じり
2	黄褐色土	10YR5-2	硬土	粘り	弱	やや粘層を混じる
3	赤褐色土	10YR4-2	砂壤土	中	やや硬いあり	小~中粒径の砂10%、小粒径の黒褐色が5%、小粒径の炭化物2%混じり
4	黒褐色土	10YR5-4	砂壤土	中	やや硬いあり	小~中粒径の砂10%、小粒径の黒褐色が5%、小粒径の炭化物2%混じり

P-25						
層名	土色1	土色2	土質	粘り	堅固度	その他
1	褐色土	10YR5-1	砂壤土	中	やや硬いあり	小~中粒径の砂10%、小粒径の黒褐色が5%、小粒径の炭化物2%混じり
2	黄褐色土	10YR5-2	硬土	粘り	弱	やや粘層を混じる
3	明黄褐色土	10YR5-3	砂壤土	中	やや硬いあり	ロームブロックからなる層、大粒径の黒色土混じり%
4	黒褐色土	10YR5-2	硬土	やや粘層を混じる	軟	ローム層を混じり7%混じる

図III-48 P-23と遺物、P-24・25・26

から、IV群a類土器1点が出土している。

**時期：**遺物の出土状況と周辺の遺物から縄文時代後期前葉の遺構と推測される。 (大泰司)

**P-27** (図Ⅲ-49、図版15)

**位置・立地：**M・N-13・14 標高42.5~43.0m付近の平坦面。

**規模：**(2.02)/(1.23)×1.97/1.13×0.27m

**確認・調査：**V層上面で、黒色土と、V層より褐色味の強い土の混在する土の落ち込みとして確認した。覆土は埋め戻しである。掘り込み面はIV層下位である。平面形は不整な楕円形を呈し、壙底は凹凸があるがおおよそ平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。南壁と北壁については微妙にオーバーハングする。上部および壁面は木の根によって数か所の攪乱を受けている。壙底中央部も木の根が入り込んだ痕跡がある。覆土から礫が2点出土している他、Ⅲ群a類土器が1点出土している。切り合うP-46より新しい遺構である。

**時期：**遺物の出土状況からは時期は確定できない。周辺の遺物から縄文時代中期前半もしくは後期前葉の遺構と推測される。 (大泰司)

**P-28** (図Ⅲ-49・50、図版15・60・61)

**位置・立地：**P・Q-12 標高41.6mの平坦面。

**規模：**1.28/1.10×1.04/0.82×0.36m

**確認・調査：**V層上面を掘り下げ中、土器のまとまりと北海道式石冠1点が近接して出土した。周辺を精査したところ、黒色土の楕円形の落ち込みを検出した。半割してみたところ覆土内には拳大から人頭大の礫が充填されていた。平面形は楕円を呈する。壙底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。確認面で検出した土器のまとまりと北海道式石冠もこの遺構に伴うものと考えられるが、掘り込み面はその少し上であることが推定される。遺物の出土状況から覆土は埋め戻しによるものと考えられる。覆土内から出土した礫等は全部で28点を数えるが、17点は使用痕の見られない礫・礫片であった。台石3点、石皿1点を数える。人頭大規模の扁平礫はほぼ覆土の中央部に重なり合って検出された。

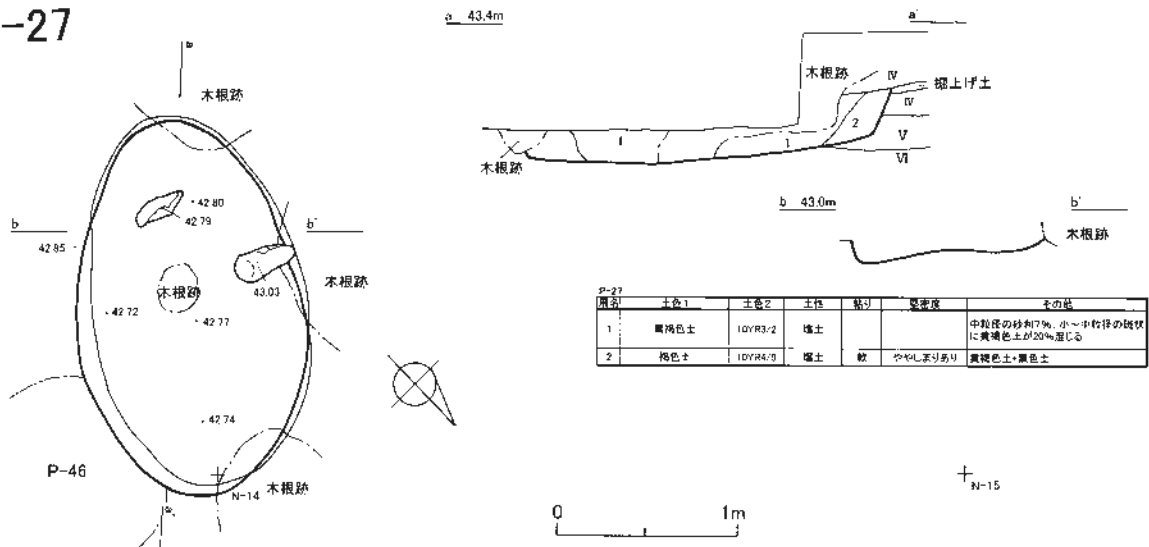
**時期：**上面で出土した土器と北海道式石冠から縄文時代中期中葉であると考えられる。 (影浦)

**掲載遺物 土器：**いずれもⅢ群a類土器で、いずれもはサイベ沢Ⅶ式ないしはそれに並行する土器である。1は覆土の上部にまとまっていたものである。2は覆土から、3は覆土上位からの出土である。1は小型の深鉢で、RL縄文を地文とする。口唇部にはLR縄線を連続圧痕する。内面および底面はミガキ調整である。2は円筒上層d式。結束第1種羽状縄文地文上に隆帯を貼付隆帯上にrとlの矢羽根状の縄線、口唇はLR縄の圧痕を連続する。内面は横方向のミガキ調整を施す。3はRL縄文施文後、底面際は横方向のミガキ調整によって無文張り出す底部、底面ミガキ、底径7.7cm。内面は器壁について縦方向、底部内面は円を描くようなミガキ調整

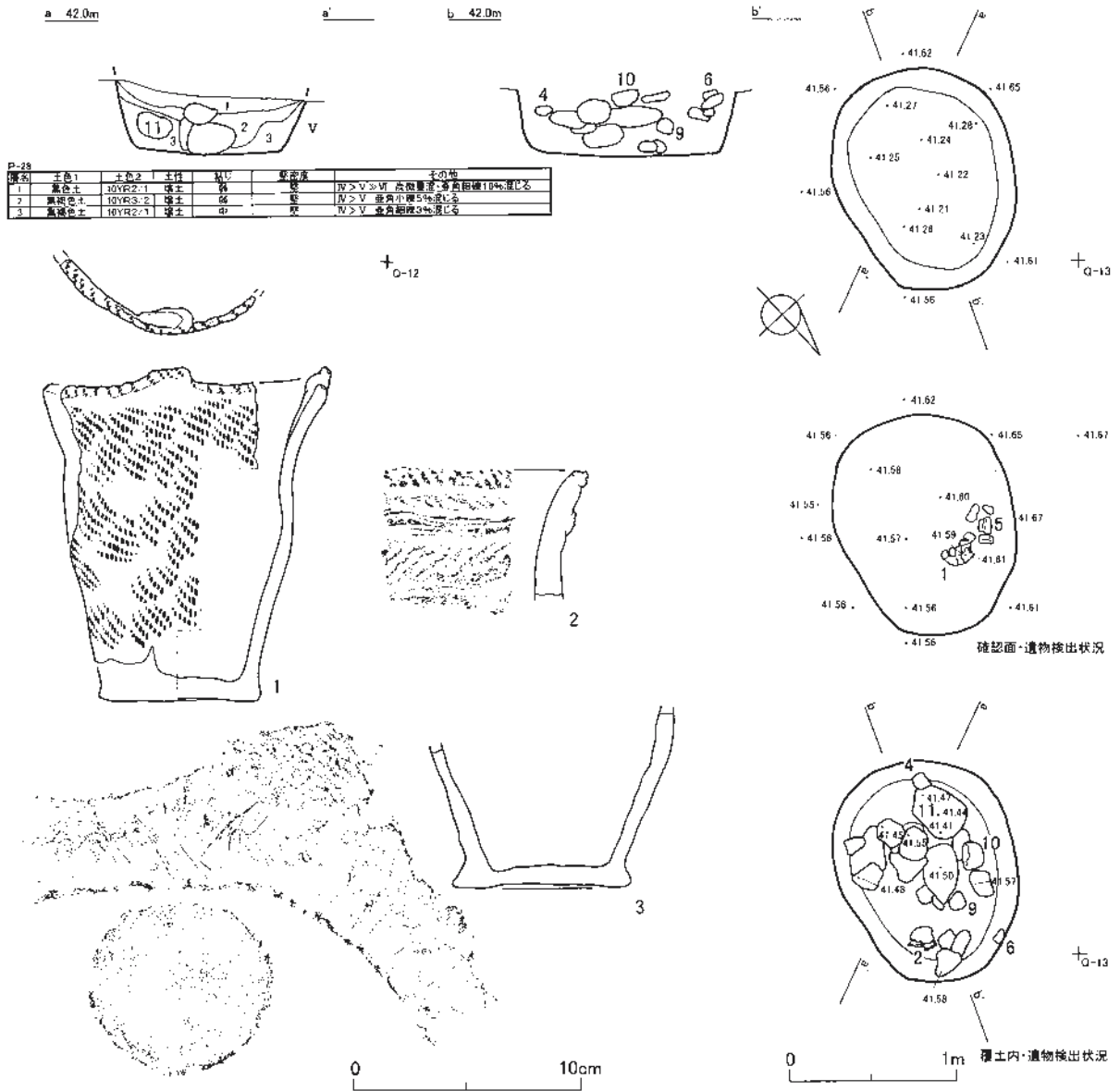
**石器：**6・9~11は覆土から、7・8は覆土中位からの出土である。いずれも安山岩を素材とする。

4~6は北海道式石冠で多孔質の安山岩を素材として全面敲打して整形する。4は機能面には擦痕を有し、短軸に対してほぼ45°の方向に擦痕がはしる。5は機能面には擦痕を有し、短軸に平行して明瞭な擦痕がはしる。4・5については、調整時か使用時のものか判然としないが、機能面には敲打痕も有り、敲打に伴うものか細かい剥離が機能面周辺にまばらにめぐり、6機能面にはかすかな擦痕を有し、短軸に対してほぼ45°の方向に擦痕がはしる。全面に敲打痕を有し、敲打に伴うものか、長軸両端について大きく打ち欠きがあり、細かい剥離が周囲をまばらにめぐり、

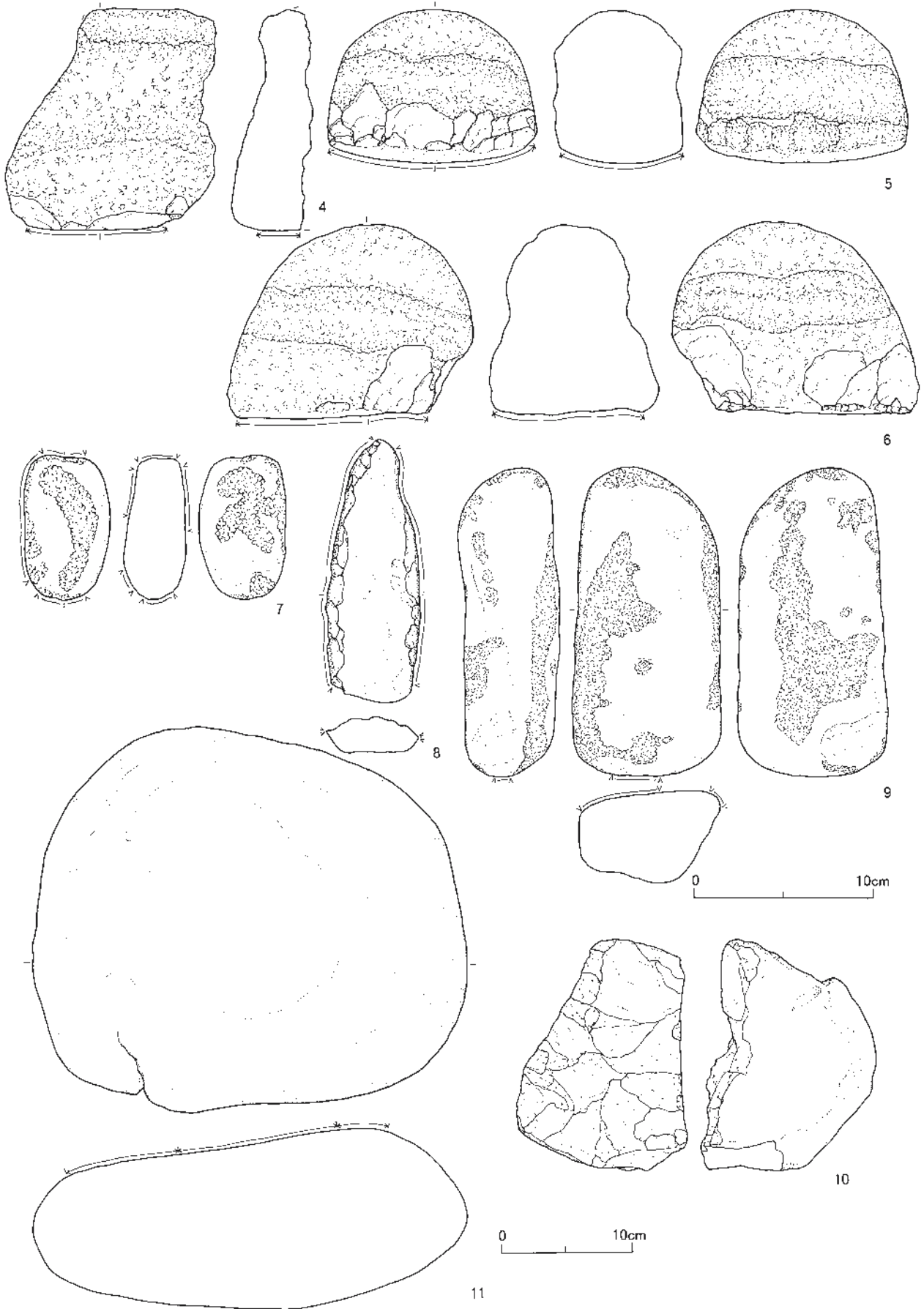
P-27



P-28



図III-49 P-27、P-28と遺物(1)



図Ⅲ-50 P-28の遺物(2)

7～9はたたき石である。7は小型の楕円礫を用いる。ほぼ全面に微妙な敲打痕がある。8は板状の礫を素材とする。両側縁を片面からの打ち欠きによって整形する。側縁を使用したものか、石器の未成品であるのか判然としない。機能部と推定される部分が偏平打製石器に類似している。9は棒状礫を用いる。礫縁辺の稜部を主としてほぼ全面に敲打痕を有する。

10は台石で、両面に擦痕がある。両面から打ち割りがあがる。11は石皿で、平らな一面に擦痕があり、特に中央部は顕著である。(大泰司)

#### P-29 (図III-51、図版15)

**位置・立地：**P・Q-13 標高41.5～42.0m付近の平坦面。

**規模：**0.86/0.81×(0.64)/(0.64)×0.37m

**確認・調査：**V層上面で、灰黄褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は埋め戻し土である。掘り込み面はIV層中位である。平面形は不整な楕円形を呈し、壙底はおおよそ平坦である。壙底部にはVI層に元来存在する礫が露出している。壁はほぼ垂直に立ち上がる。南壁は微妙にオーバーハングする。覆土下位からVI層起源と考えられる礫がまとまって出土する。その他に遺物は確認出来なかった。

**時期：**遺物の出土状況からは時期は確定できない。周辺の遺物から縄文時代中期前半もしくは後期前葉の遺構と推測される。(大泰司)

#### P-30 (図III-51、図版15・62)

**位置・立地：**N-10 標高41.0～41.5m付近の平坦面。

**規模：**0.97/0.87×0.82/0.72×0.10m

**確認・調査：**V層上面で、黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はIV層を主体とする自然堆積である。掘り込み面は検出面より上位である。平面形は不整な楕円形を呈し、壙底はおおよそ平坦である。壁は開口部に向かって開きながら立ち上がる。遺物は焼けた台石とIV群a類土器が2点出土している。

**時期：**遺物の出土状況からは時期は確定できない。周辺の遺物から縄文時代中期前半もしくは後期前葉の遺構と推測される。

**掲載遺物 石器：**1は台石であり、覆土1層からの出土である。安山岩の楕円礫の一部割れたものを用いる。平らな一面に浅い擦痕と敲打痕がある。(大泰司)

#### P-31 (図III-51、図版16・61)

**位置・立地：**O-13 標高41.5～42.0m付近の平坦面。

**規模：**1.14/0.95×0.76/0.59×0.12m

**確認・調査：**V層上面で、黒褐色土の落ち込みの中にさらに黒色土がまとまって入り込んでいた。二つの切り合う遺構を想定してまず黒色土の落ち込みを調査した。すると覆土が単層であるひとつの土壙であることを確認した。覆土はIV層を主体とする自然堆積である。掘り込み面は検出面より上位である。平面形は不整な楕円形を呈し、壙底はおおよそ平坦である。壁は開口部に向かって開きながら立ち上がる。遺物は覆土の最上部で、土壙の中央部に礫が集中している。1点は台石である。他には覆土の上部から前期から後期の土器が合わせて16点と、フレイクが1点出土している。

**時期：**遺物の出土状況からは時期は確定できない。周辺の遺物から縄文時代中期前半もしくは後期前葉の遺構と推測される。

**掲載遺物 土器**：いずれもIV群a類で覆土からの出土である。2は涌元式である。

1はLR縄文を縦方向に施文し、口縁部にナデ調整を施し無文にする。内面は縦方向のミガキだが、輪積痕が明瞭である。口唇部には平坦面をとる。突起様の波頂部には刺突がある。2は折り返し口縁成形後、LR縄文施文をし、その上から沈線文を施す。折り返し口縁上に沈線文を施す。(大泰司)

**P-32** (図Ⅲ-51、図版16)

**位置・立地**：O-13 標高41.5~42.0m付近の平坦面。

**規模**：1.55/1.36×(0.95)/(0.85)×0.14m

**確認・調査**：V層上面で、黒色土の落ち込みとしてP-31の調査終了後、黒褐色の落ち込みを調査した。するとすると覆土が単層であるもうひとつの土壌であることを確認した。覆土はIV層を主体とする自然堆積であるが、ややしまりがある。掘り込み面は検出面より上位である。平面形は不整な楕円形を呈し、壙底はおおよそ平坦である。壁は開きながら立ち上がる。遺物の出土はなかった。P-31より古い遺構である。

**時期**：遺物の出土状況からは時期は確定できない。周辺の遺物から縄文時代中期前半もしくは後期前葉の遺構と推測される。(大泰司)

**P-33** (図Ⅲ-52、図版16・62)

**位置・立地**：O-11・12 濁川に向かう平坦面、標高41.0~42.0m。

**規模**：0.95/0.77×(0.42)/(0.32)×0.32m

**確認・調査**：V層上面の精査で暗褐色土の落ち込みを検出した。落ち込みのほぼ半分が攪乱を受けている。攪乱土の除去後、土層断面を精査したところ、緩やかではあるが明瞭な立ち上りと平坦な壙底を検出し土壌と認定した。平面は楕円形であったことが考えられる。壙底はV層に含まれる礫片が露出している状態である。人為的に平坦に構築しづらい条件だったか、もしくはする必要のない性格の土壌であったと判断する。構築面は検出面より上である。覆土は自然堆積によるものと考えられる。遺物は覆土中よりIV群a類土器が3点、スクレイパー1点が出土した。

**時期**：周辺で検出した遺構、遺物から縄文時代中期前半~後期前葉の土壌と判断する。(袖岡)

**掲載遺物 石器**：1はスクレイパーで、覆土からの出土である。泥岩の縦長剥片を素材とする。一側縁に極浅い調整を施す。(大泰司)

**P-34** (図Ⅲ-52、図版16・62)

**位置・立地**：N・O-12 濁川に向かう平坦面、標高41.0~42.0m。

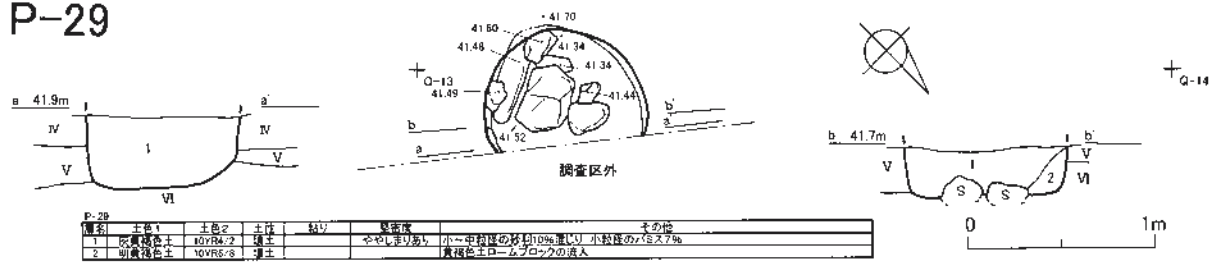
**規模**：1.08/0.78×0.82/0.60×0.22m

**確認・調査**：V層上面の精査で黒褐色土の落ち込みを検出した。半裁したところ平坦な壙底と明瞭な壁の立ち上がりを確認し土壌と認定した。平面は楕円形である。覆土は自然堆積によるものと考えられる。遺物は覆土中よりⅢ群a類土器が23点、IV群a類土器が1点、瑪瑙のフレイク2点、偏平打製石器1点、礫6点、礫片1点が出土した。

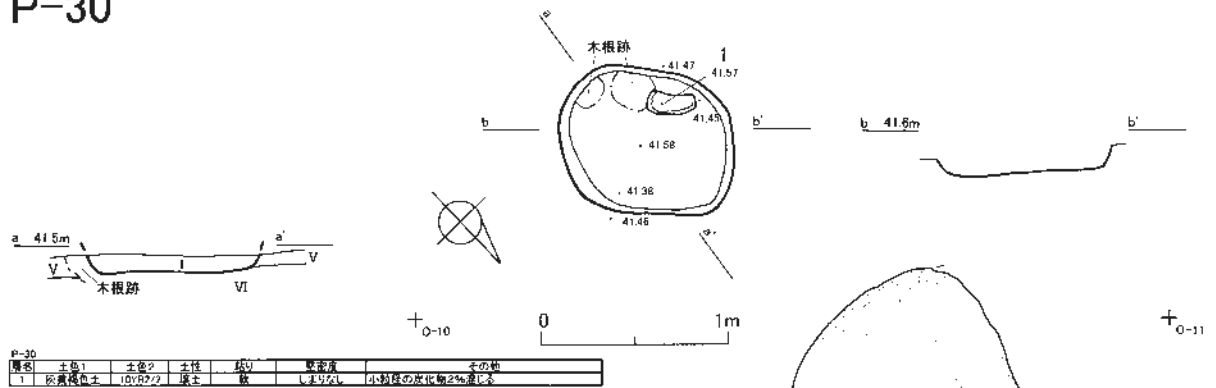
**時期**：周辺で検出した遺構、遺物から縄文時代中期前半~後期前葉の土壌と判断する。(袖岡)

**掲載遺物 土器**：1はⅢ群a類、サイベ沢Ⅶ式に並行するものである。P-34とP-43のそれぞれ覆土1層から出土した。連続する押し引きが天神山式を思わせる。口縁部成形後、第2種の結束を持つLR縄文施文、口縁部には半截竹管状の草本による連続する押し引きとキザミを施す。

P-29

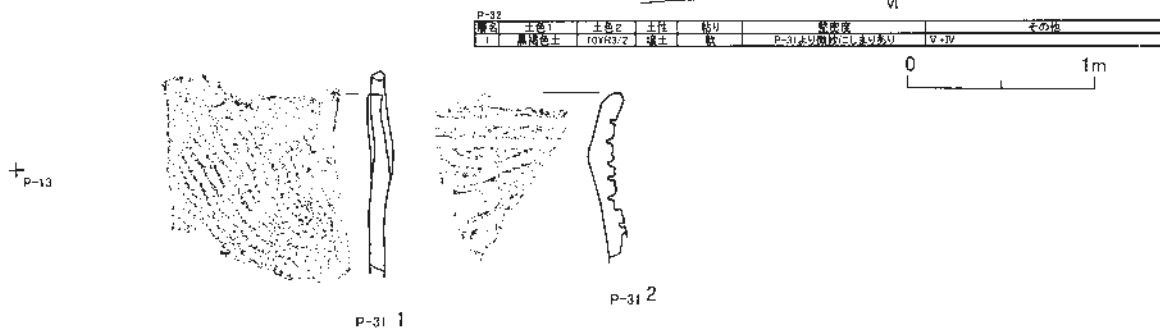
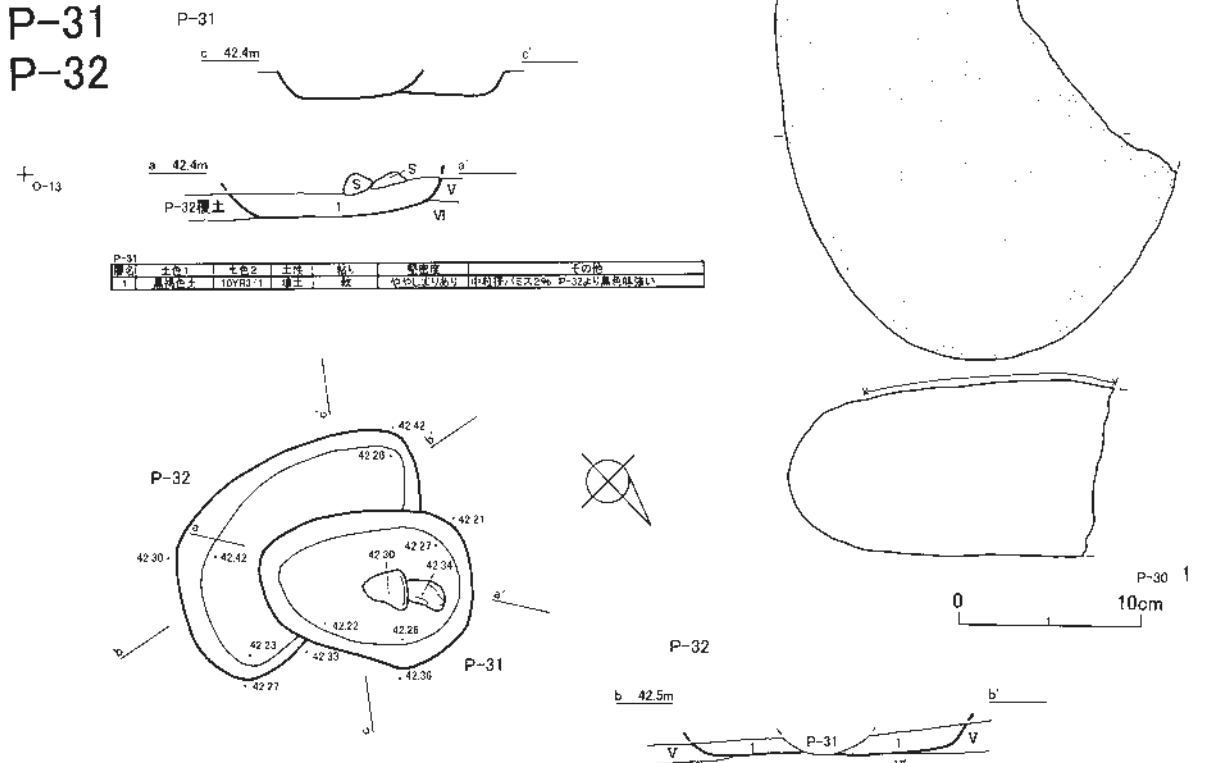


P-30



P-31

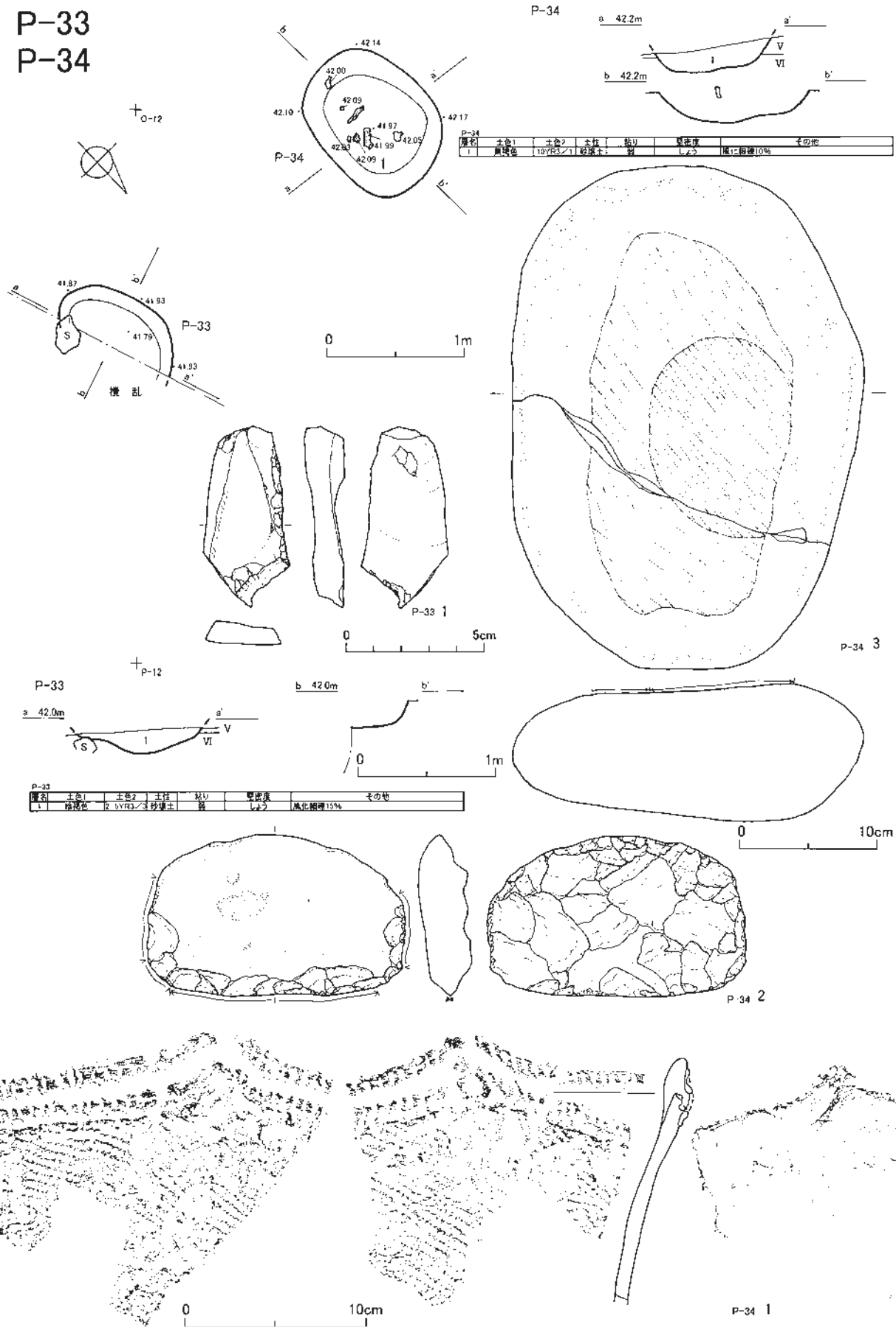
P-32



図III-51 P-29、P-30と遺物、P-31と遺物、P-32



P-33  
P-34



図III-52 P-33と遺物、P-34と遺物

**石器**：2は偏平打製石器で覆土6層からの出土である。安山岩の楕円礫片を素材とする。縁辺のほぼ全周を片面からの打ち欠きによって整形する。両側縁については両面調整の打ち欠きである。機能部は両面からの打ち欠きによって整形し、正面観が直線的で、最大幅1.1cmの面を有し、敲打痕と長軸方向にのびる擦痕が残る。3は石皿で、覆土1のものが接合した。安山岩の楕円礫を用いる中央に擦痕による楕円形の平坦な部分を持つ。その楕円長軸よりやや側縁にずれた位置に楕円形のより顕著な擦痕部がある。 (大泰司)

**P-35** (図III-53、図版17)

**位置・立地**：O-13・14 標高42.0~42.5m付近の平坦面。

**規模**：1.24/1.00×1.09/0.97×0.44m

**確認・調査**：V層上面で、黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は埋め戻し土である。掘り込み面は検出面より上位である。平面形は不整な円形を呈し、壙底はおおよそ平坦である。壁は急角度に開きながら立ち上がる。覆土上部からIV群a類土器が1点出土している。

**時期**：周辺の遺物の状況と、遺物の出土状況から、後期前葉の可能性はある。 (大泰司)

**P-36** (図III-53、図版17)

**位置・立地**：L-8 標高41.0~41.5m付近の平坦面に位置する沢地形。

**規模**：0.61/0.42×0.56/0.42×0.28m

**確認・調査**：V層上面で、黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はしまりがあり、またVI層がブロック状に混じるため、埋め戻し土の可能性はある。掘り込み面は検出面より上位である。平面形は不整な楕円形を呈し、壙底はおおよそ平坦である。壁は急角度に開きながら立ち上がる。遺物の出土はなかった。

**時期**：周辺の遺物から縄文時代中期前半もしくは後期前葉の遺構と推測される。 (大泰司)

**P-37** (図III-53、図版17)

**位置・立地**：O・P-13 標高42.0~42.5m付近の平坦面。

**規模**：(1.02)/0.58×0.96/0.57×0.60m

**確認・調査**：V層上面で、黒色土と、V層より褐色味の強い土の混在する土の落ち込みとして確認した。覆土は埋め戻しである。掘り込み面は検出面より上位である。平面形は不整な円形を呈し、壙底はほぼ平坦である。壁は開口部に向かって開きながら立ち上がる。覆土下位から礫が集中して出土する。そのうち1点は台石である。その他にIV群a類土器が1点、III群a類土器が1点出土している。

**時期**：周辺の遺物の状況と、遺物の出土状況から、後期前葉の可能性はある。 (大泰司)

**P-38** (図III-53、図版17・62)

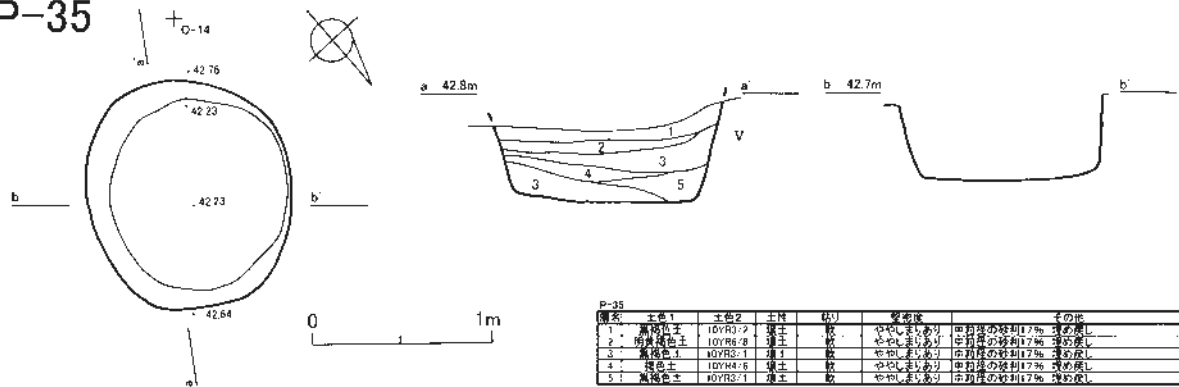
**位置・立地**：J・K-14 標高44m付近の平坦面。

**規模**：0.76/0.72×0.40/0.36×0.56m

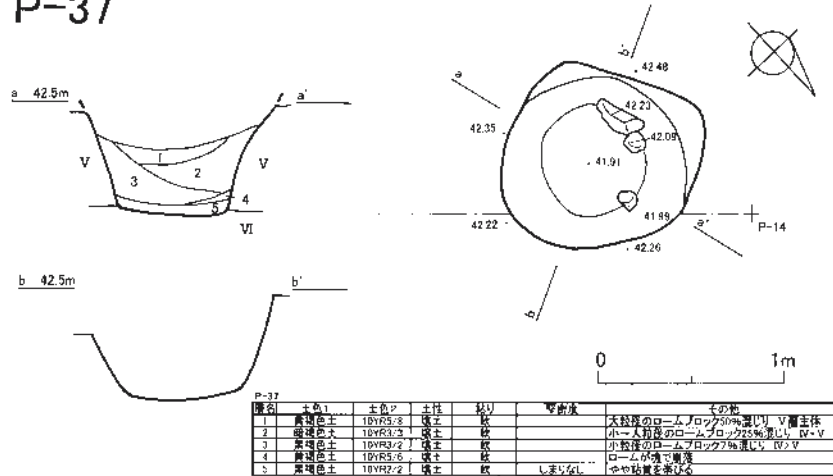
**確認・調査**：IV層下面で円形の黒色土の落ち込みを確認。VI層を40cm程掘り込んで作られている。覆土上層はIV層主体で、下層はV層の崩落したもので、自然堆積である。平面形は円形。壙底は平坦で壁は急角度に立ちあがり、断面で見るとバケツ型。出土遺物は覆土より土器13点がある。

**時期**：出土遺物、確認層位から縄文時代後期前葉のものと思われる。 (中山)

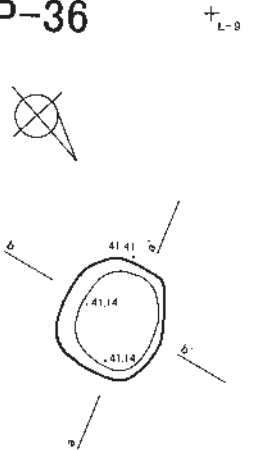
P-35



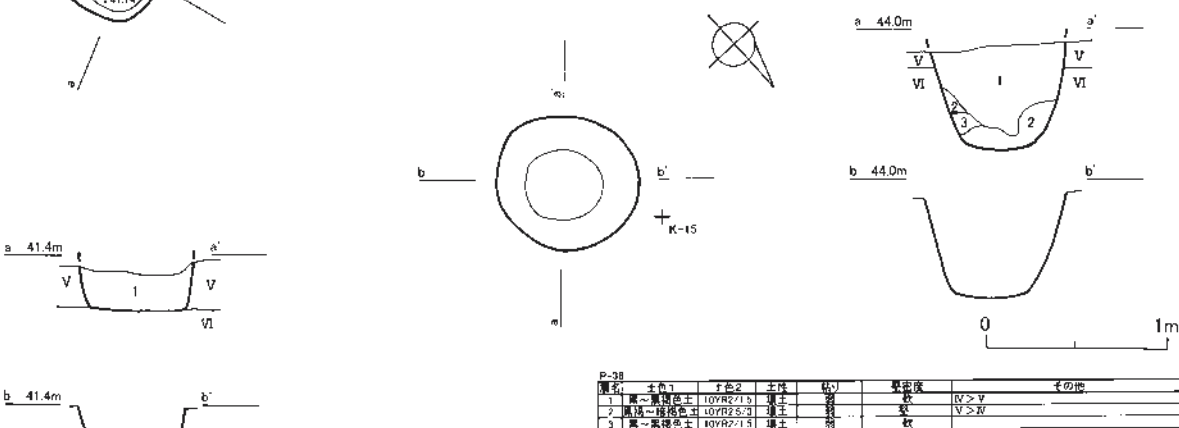
P-37



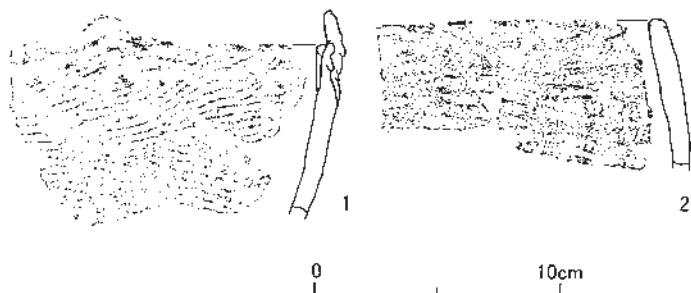
P-36



P-38



層名	土色1	土色2	土性	粘り	気味	その他
1	黒褐色土	10YR3/2	壤土	軟	ややしまりあり	小一中粒砂のロームブロック17%



図III-53 P-35・36・37、P-38と遺物

**掲載遺物 土器**：1・2はIV群a類土器で覆土からの出土である。1はR1縄文施文後、折り返し口縁を成形。その上からLR縄線を施す。2ないし3段の折り返し部分を成形する。内面については、口縁は横、胴部は縦方向のミガキ調整を施すが、輪積み痕跡が明瞭である。2はLR縄文を横走させる。内面は横ナデ調整で、混和材の小砂粒が動くほど右方向に調整する。口唇部を1本の粘土紐で成形して、平坦面をとる。  
(大泰司)

**P-39** (図III-54、図版18・63)

**位置・立地**：N-8 標高41.0~41.5m付近の平坦面に位置する沢地形。

**規模**：0.93/0.69×0.72/0.60×0.24m

**確認・調査**：V層上面で、黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はしまりがあり、またVI層がブロック状に混じるため、埋め戻し土の可能性ある。掘り込み面は検出面より上位である。平面形は不整な楕円形を呈し、壙底はおおよそ平坦である。壁は開きながら立ち上がる。上部の礫集中以外の遺物としては同一個体のIV群a類、白坂3式土器がまとまって出土した事に加えてIII群a類土器が出土し、その中には縁辺が打ち欠かれて出土したものもある。

**時期**：周辺の遺物の状況と、遺物の出土状況から、後期前葉の可能性が高い。

**掲載遺物 土器**：1はIV群a類、白坂3式である。覆土1層の上位からの出土である。LR縄文施文後ミガキ調整にて無文部分を作り、沈線を施す。頸部を成形した際の指頭圧痕が残る。口唇部には平坦面をとり、LR縄文を施す。

2~5はいずれも覆土1層出土のIII群a類である。2は円筒上層a~b式の範疇のものである。2は口縁部文様帯および口唇にlとrの縄線を矢羽根状に施す。内面はミガキ調整である。3、4aと4bそして5は縁辺が打ち欠かれた痕跡があり、円板形をした再生土製品の製作に関連するものと考ええる。4はLR縄文である。

**石器**：6はたたき石で、覆土1層からの出土である。安山岩の棒状礫を素材とする。端部を含めて側縁全周に浅い敲打痕を有する。  
(大泰司)

**P-40** (図III-54、図版18・63)

**位置・立地**：O・P-13 標高41.5~42.0m付近の平坦面に位置する沢地形。

**規模**：1.18/1.07×(0.87)/0.76×0.24m

**確認・調査**：V層上面で、黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はしまりがあり、埋め戻し土の可能性ある。掘り込み面は検出面より上位である。平面形は不整な楕円形を呈し、壙底は凹凸がある。壁は開きながら立ち上がる。上部の礫集中以外の遺物としてはIV群a類土器が3点、覆土中から出土している。礫集中はVI層を掘り下げた際に掘りおこされた礫の可能性ある。

**時期**：周辺の遺物の状況と、遺物の出土状況から、後期前葉の可能性ある。

**掲載遺物 土器**：1はIV群a類。1は覆土からの出土である。LR縄文施文後、折り返し口縁部を成形する。波頂部には地文と同一原体と考えられる圧痕がある。内面横方向のミガキ調整。(大泰司)

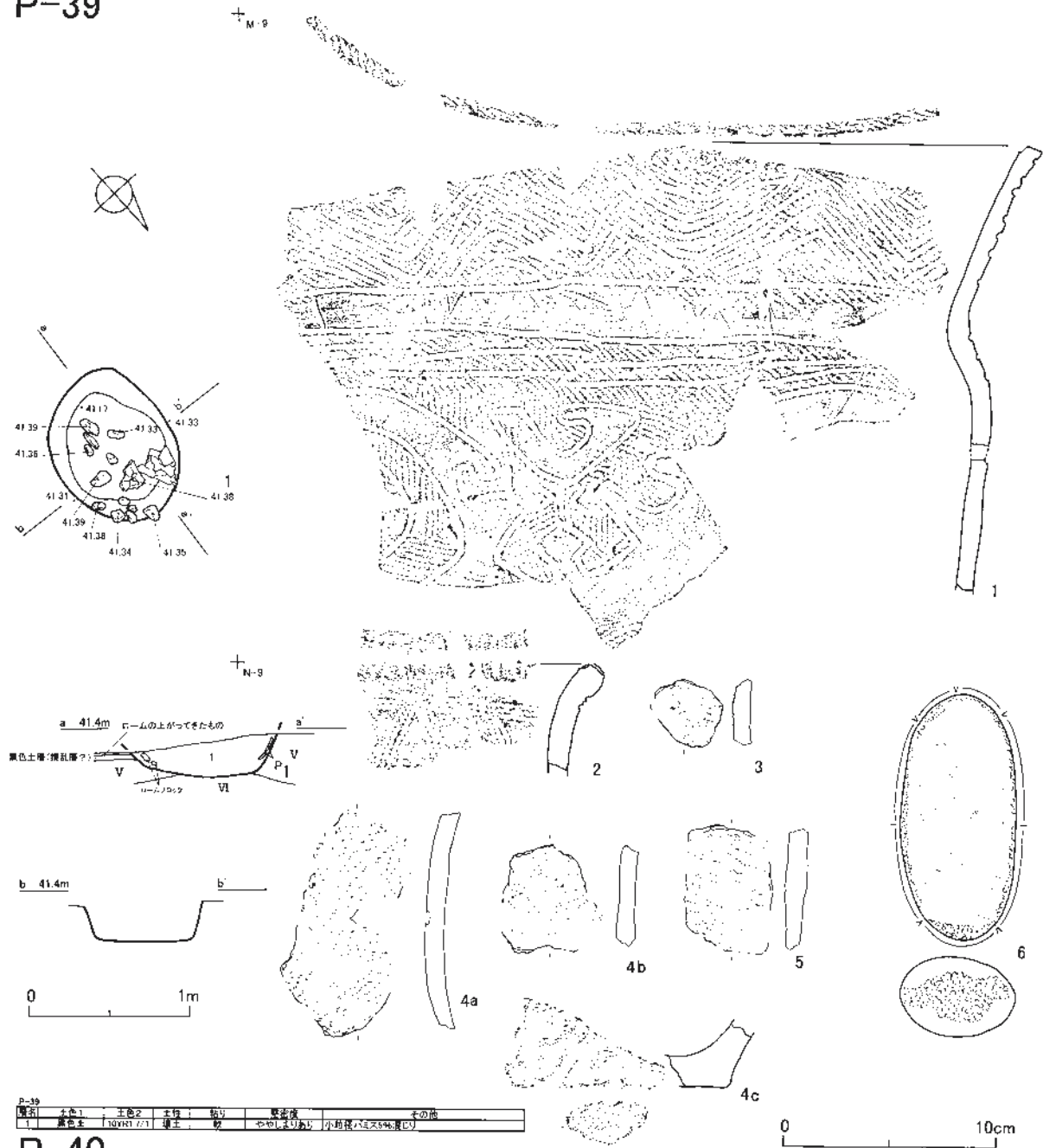
**P-41** (図III-55、図版18)

**位置・立地**：L-9 標高41.5~42.0m付近の平坦面。

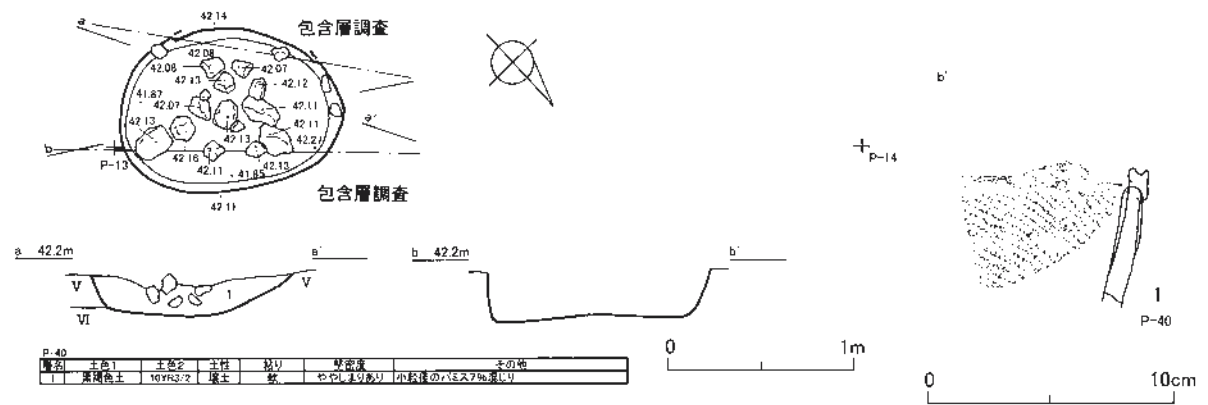
**規模**：0.84/0.73×0.69/0.56×0.24m

**確認・調査**：V層上面で、黒色土と、V層より褐色味の強い土の混在する土の落ち込みとして確認し

P-39



P-40



図III-54 P-39と遺物、P-40と遺物

た。皿状に落ち込んだ覆土上部はIV層を主体とする自然堆積である。最上部から礫が集中して検出された。覆土下部は埋め戻しと考える。掘り込み面は検出面より上位である。平面形は不整な楕円形を呈し、壙底は凹凸が激しい。壁は開きながら立ち上がる。遺物は埋め戻しの層位から、土壌の南西側に、礫がまとまって出土している。同じ層位からIV群 a 類土器 4 点出土している。礫集中はVI層を掘り下げた際に掘りおこされた礫の可能性がある。

**時期：**遺物の出土状況から、後期前葉の可能性が高い。(大泰司)

**P-42** (図III-55、図版19)

**位置・立地：**N-14 標高43m付近の平坦面。

**規模：**0.95/0.94×0.88/0.71×0.08m

**確認・調査：**V層下面で黒色土の落ち込みを確認。壙底面のみ確認で、実際の構築面はかなり上と思われる。このことから遺構付近のV層が何らかの原因で動いていた可能性が考えられる。平面形は隅丸方形に近い円形で、壙底は平坦。壙底から続く傾斜から推定すると壁の立ちあがりはやや緩やかなものと思われる。遺物は無く、性格は不明である。

**時期：**不明。周辺の遺構から縄文時代後期前葉の可能性が高い。(中山)

**P-43** (図III-55・56、図版19・63・64)

**位置・立地：**M・N-8 標高41.0~41.5m付近の平坦面に位置する沢地形。

**規模：**1.90/1.69×1.58/1.40×0.25m

**確認・調査：**V層上面で、IV層を主体とする黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は自然堆積で、砂利が目立つ。掘り込み面は検出面より上位である。平面形は不整な楕円形を呈し、壙底はおおよそ平坦であるが、斜面の傾斜に準じて南東側が低くなっている。壁は急角度に開きながら立ち上がる。上部には木の根が入り込む。

遺物は覆土の中央部に礫が集中して出土している。その中に偏平打製石器 2 点と北海道式石冠が 1 点、メノウ製のフレイクとUフレイクが 1 点ずつ。III群 a 類土器がまとまって出土している。土壌のほぼ中央部からは際立って大型の礫が 1 点検出され、その直下には粘質を帯びた黒色土が分布する。これらの出土状況からなんらかの廃棄の可能性が考えられる。

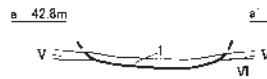
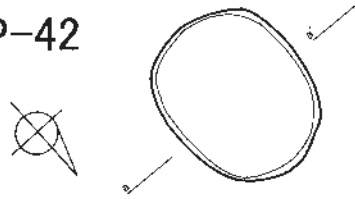
**時期：**遺物の出土状況から縄文時代中期前半の可能性が高い。

**フローテーション成果：**覆土最下位において、大型礫の直下に黒色土のまとまりがあった。その部分を試料として採取し、フローテーション法にて処理した。炭化種子としてクリ属が検出された(詳細はVI章を参照)。

**掲載遺物 土器：**1 はIII群 a 類でサイベ沢VII式である。1 は覆土の上部にまとまっていた。口唇にLR縄文の圧痕が連続する。結束第1種羽状縄文地文である。

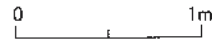
**石器：**いずれも覆土1層からの出土で、安山岩を素材とする。2・3は偏平打製石器である。2は摩滅した安山岩の楕円礫片を素材とする。両側縁については両面調整の打ち欠きである。機能部は片面からの打ち欠きによって整形し、正面観が直線的で、最大幅0.4cmの面を有し、敲打痕が残る。3は割礫を素材とする。両側縁については片面からの打ち欠きである。機能部は片面からの打ち欠きによって整形し、正面観が直線的で、最大幅0.4cmの面を有し、敲打痕と長軸方向にのびる擦痕が残る。4は北海道式石冠である。この器種について特有な持ち手の溝状の帯は器面を一周せずに側縁にのみ敲打痕がある。機能面には長軸方向にのびる擦痕があり、機能面への加撃によるものか、石器が欠損し

P-42

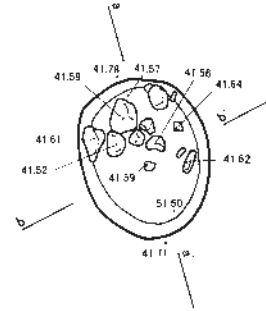


P-42						
層別	土色1	土色2	土性	粘り	堅硬度	その他
1	黒褐色土	10YR2/2	壤土	なし	軟	IV

+O-14



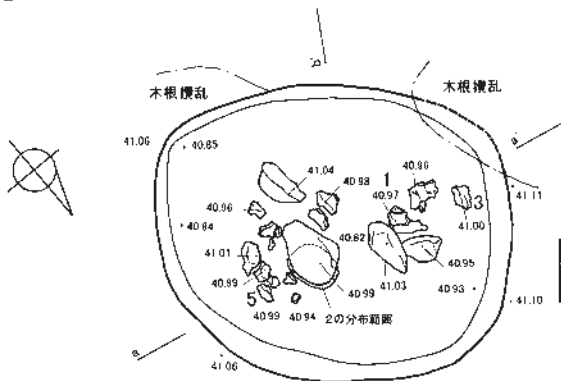
P-41



P-41						
層別	土色1	土色2	土性	粘り	堅硬度	その他
1	黒褐色土	10YR2/1	壤土	軟		黒褐色の強いロームブロック7%混じり
2	黒褐色土	10YR2/4	壤土	軟		黒褐色の強いロームブロック7%混じり
3	黒褐色土	10YR2/6	壤土	軟		ローム主体の土が混入

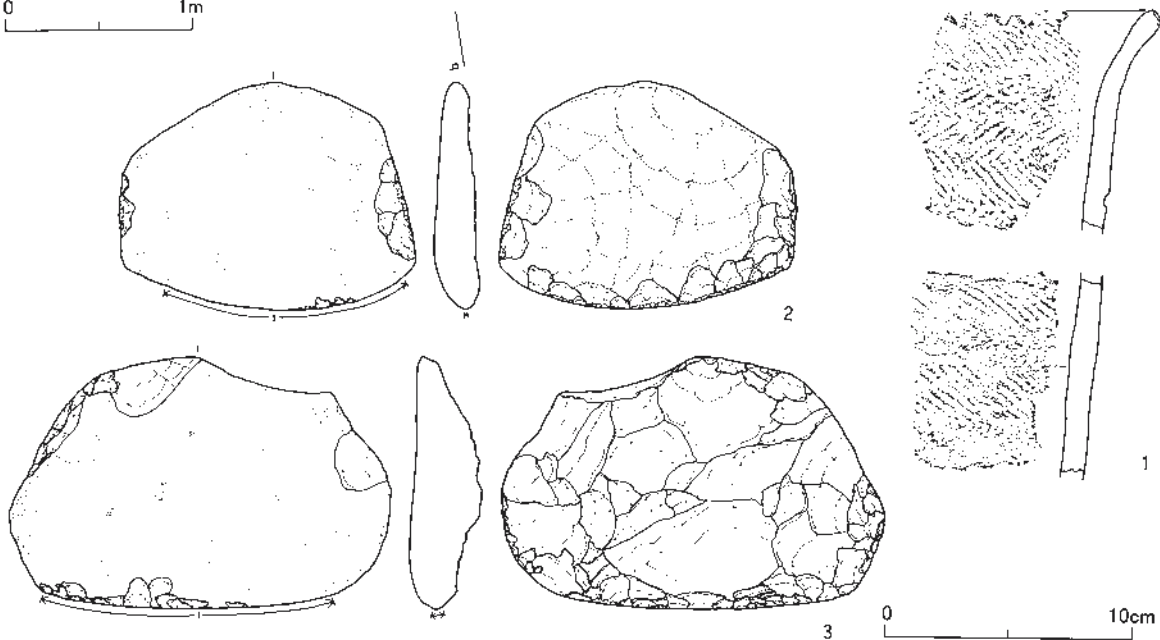


P-43



P-43						
層別	土色1	土色2	土性	粘り	堅硬度	その他
1	黒褐色土	10YR2/3	壤土	軟		小〜大粒径の砂利17%、小〜中粒径のロームブロック5%混じり
2	黒褐色土	10YR1.3/1	壤土	軟		しまひなし、石の下

+N-8



図III-55 P-41・42、P-43と遺物(1)

ている。5はたたき石で、垂角礫を用いる。側縁辺に敲打痕がめぐる。

(大泰司)

**P-44** (図III-56、図版19・64)

**位置・立地**：N-9 標高41.1~41.2mの平坦面。

**規模**：(0.60)／(0.55)×0.74／0.62×0.08m

**確認・調査**：F-7完掘後に周辺のV層上面を精査したところ、黒色土の落ち込みを確認した。東側半分は攪乱穴により失われていた。平面形は残存部分から楕円形であることが想定される。底面は平坦で壁が緩やかに立ち上がる形状である。底面においてH-15の柱穴と思える小ピットを検出しているが、H-15覆土を掘り込んで構築していたものである。

**時期**：H-15との重複関係から縄文時代中期中葉以降と考えられる。(影浦)

**掲載遺物 石器**：いずれも覆土から出土したスクレイパーである。1は頁岩の横長剥片を素材とする。一側縁に極浅い調整を施す。2はメノウの不整な剥片を素材とする。一側縁に明瞭な調整を有する。その対となる縁辺には礫皮が残る。(大泰司)

**P-45** (図III-56、図版19)

**位置・立地**：M-12・13 標高42m付近の平坦面。

**規模**：1.09×0.70×0.20m

**確認・調査**：V層上面で黒色土の丸い落ち込みを確認。平面形は楕円形で、漏斗状のピットである。土層はIV層とV層の混ざったもので、埋め戻しか自然堆積かは判然としない。ほぼ中央にSP-131が構築されているが、断面観察によりP-45より新しいものと確認された。覆土中より土器が5点出土している。H-12の一部にプランがかかっているがより下位の検出である。

**時期**：出土遺物、確認面から縄文時代後期前半のものと思われる。(中山)

**P-46** (図III-56、図版19)

**位置・立地**：M・N-13 標高43m付近の平坦面。

**規模**：1.21／1.04×1.08／0.88×0.59m

**確認・調査**：IV層下面で黒色土の丸い落ち込みを確認。平面形は円形で、口径の大きい浅いピットと径の小さい深いピットが複合したような形である。壙底は平らで、壁はほぼ垂直に立ちあがる。覆土はIV層主体の埋め戻し土で、断面観察から2つのピットの複合でないことがわかる。遺物は覆土より土器7点が出土。形態と埋め戻しであることから墓壇の可能性が考えられる。

**時期**：出土遺物、確認層位から縄文時代中期前半のものと思われる。(中山)

**P-47** (図III-57、図版20)

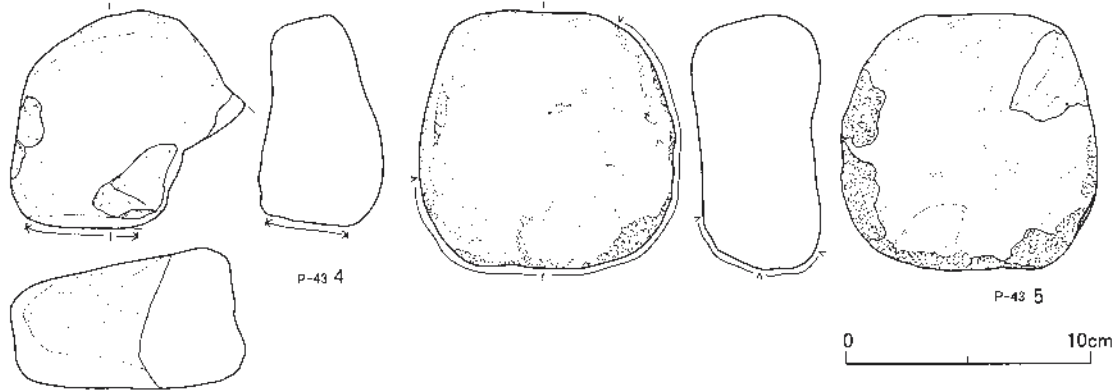
**位置・立地**：J-9 標高42.0~42.5m付近の平坦面。

**規模**：0.94／0.73×0.90／0.75×0.28m

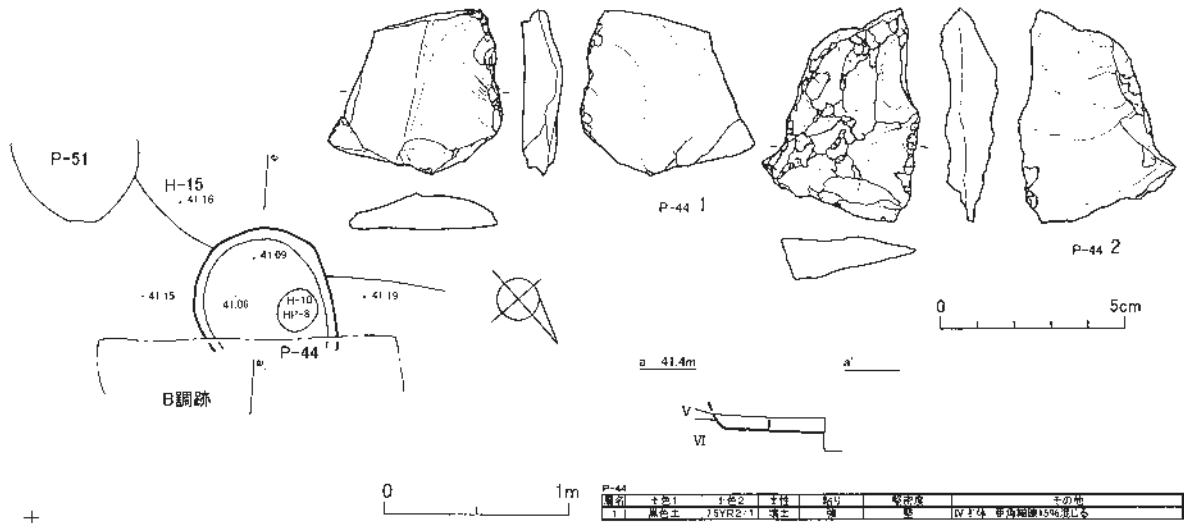
**確認・調査**：V層上面で、黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はIV層とV層が1：1で混じり合う埋め戻し土で、小礫が目立つ。掘り込み面は検出面より上位である。平面形は不整な楕円形を呈し、壙底は平坦である。壁は開口部に向かって開きながら、ほぼ真っ直ぐに立ち上がる。遺物の出土はなかった。

**時期**：周辺の遺物から縄文時代中期前半もしくは後期前葉の遺構と推測される。(大泰司)





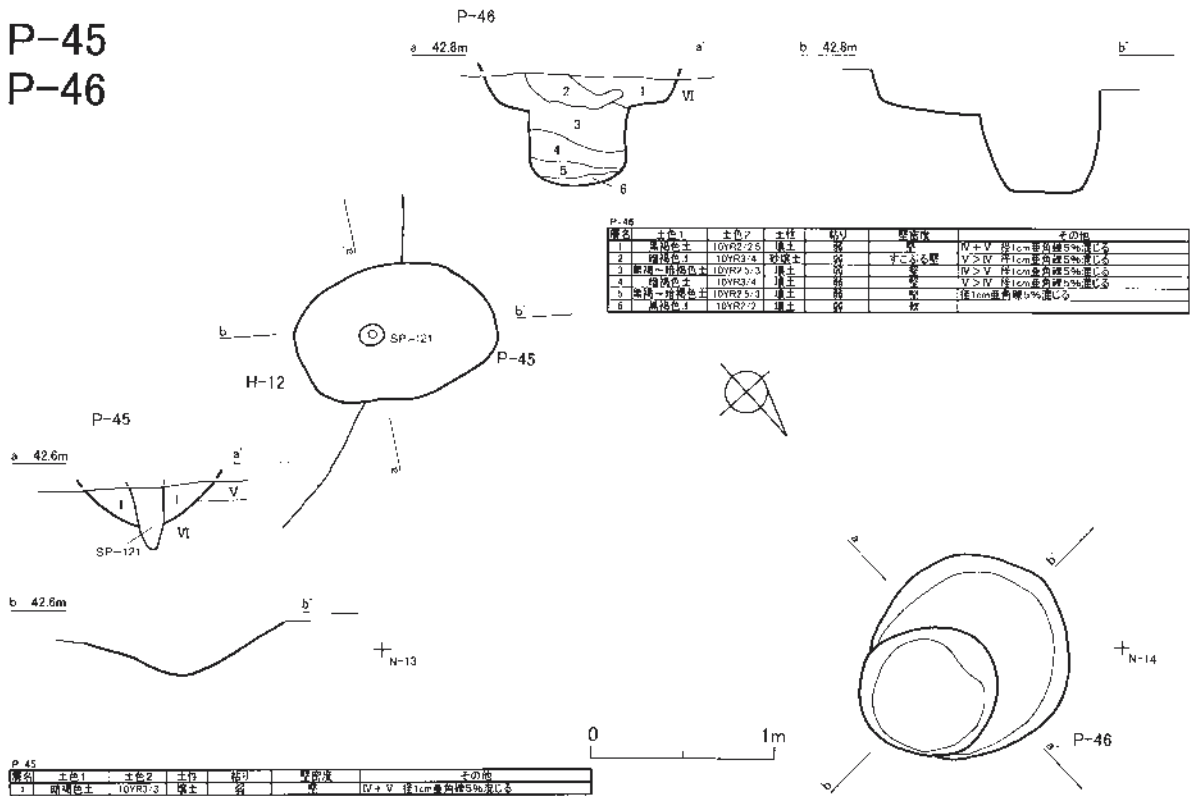
P-44



層別	土色1	土色2	土性	粘り	堅固度	その他
1	黒褐色土	10YR2/2.5	壤土	弱	硬	その他
2	黒褐色土	7.5YR2/1	壤土	強	硬	IV+V 厚1cm 垂直層5%混入

P-45

P-46



層別	土色1	土色2	土性	粘り	堅固度	その他
1	黒褐色土	10YR2/2.5	壤土	弱	硬	W+V 厚1cm 垂直層5%混入
2	黒褐色土	10YR3/4	砂質土	弱	硬	V>IV 厚1cm 垂直層5%混入
3	黒褐色土	10YR3/3	壤土	強	硬	W>V 厚1cm 垂直層5%混入
4	黒褐色土	10YR3/4	壤土	強	硬	V>IV 厚1cm 垂直層5%混入
5	黒褐色土	10YR3/3	壤土	強	硬	厚1cm 垂直層5%混入
6	黒褐色土	10YR2/2	壤土	弱	硬	

層別	土色1	土色2	土性	粘り	堅固度	その他
3	黒褐色土	10YR3/3	壤土	強	硬	IV+V 厚1cm 垂直層5%混入

図III-56 P-43の遺物(2)、P-44と遺物、P-45・46

## P-48 (図III-57、図版20・64)

**位置・立地：**N-10 標高41.5~41.6mの平坦面。

**規模：**0.78/0.62×0.66/0.50×0.25m

**確認・調査：**H-15の床面検出中に黒色土の落ち込みを確認した。半割したところ確認面から25cmほどの深さで壙底に至った。平面形はほぼ円形を呈する。壙底部は堅くしまっており平坦である。壁は急に立ち上がる。H-15と重複するが構築の先後関係は不明である。覆土中に拳大の礫が数点検出された。

**時期：**周辺の状況から縄文時代中期前半ないしは後期の可能性がある。(影浦)

**掲載遺物 土器：**1はスクレイパーで、覆土下位からの出土である。頁岩の縦長剥片を素材とする。一側縁に極浅い調整を施す。2は台石片で、覆土上位からの出土である。濁川火砕流起源の安山岩製で両面に擦痕がある。(大泰司)

## P-49 (図III-57、図版20)

**位置・立地：**P-14 標高42m付近の平坦面。

**規模：**1.78/1.53×1.49/1.26×0.30m

**確認・調査：**VI層上面で黒色土の落ち込みを確認。平面形は不整形で壙底はほぼ平坦な皿状のピット。壁はなだらかに立ちあがる。構築面はV層面と思われる。覆土は2層に分かれ、埋め戻しか自然堆積かははっきりしない。遺物は上面に礫が4点出土した他、覆土より土器3点、石器と礫が合わせて7点出土している。

**時期：**出土遺物、確認層位から縄文時代中期前半のものと思われる。(中山)

## P-50 (図III-58、図版20・64)

**位置・立地：**Q-11・12 標高41m付近の平坦面。

**規模：**0.60/0.55×0.51/0.50×0.17m

**確認・調査：**VI層上面で扁平な礫の入った丸い黒色土の落ち込みを確認。平面形は円形で、壙底は平坦、壁は急角度で立ちあがる。覆土はIV層の単層だが、上面に扁平な礫を並べてあることから埋め戻しと判断する。遺物は上面に10cmほどの大きさの礫8点が出土している。他に覆土より土器5点、石器と礫が合わせて4点出土している。

**時期：**出土遺物、確認層位などから縄文時代中期前半のものと思われる。(中山)

**掲載遺物 土器：**いずれも覆土出土の石器である。1はスクレイパーで頁岩の縦長剥片を素材とする。一側縁に極浅い調整を施す。2は北海道式石冠で、安山岩の割礫に、持ち手部分と側縁を敲打して整形する。機能面には擦痕を有し、おおよそ短軸方向に擦痕がはしる。機能面には敲打痕もあり、敲打に伴うものか細かい剥離が機能面周辺にめぐる。3は偏平打製石器で、覆土からの出土である。安山岩の板状な礫片を用いる。縁辺については、両面から打ち欠くことで半円状に整形する。図示した裏面には、敲打による凹みを有する。機能部は最大幅1.6mmの面を有し、敲打痕と長軸方向にはしる擦痕が残る。敲打によるものか、機能面の周辺には細かい剥離がめぐる。(大泰司)

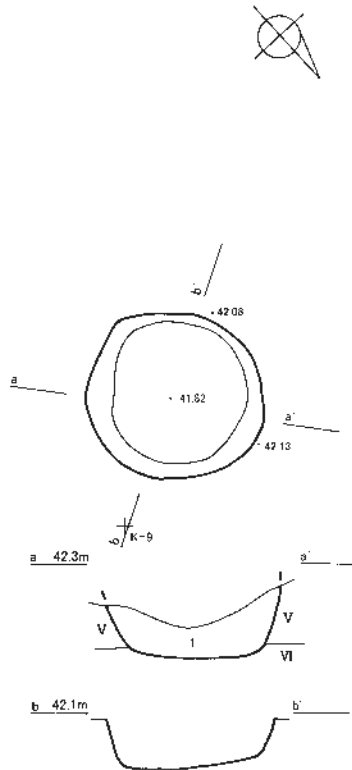
## P-51 (図III-58、図版21・65)

**位置・立地：**N-8・9 標高41.1~41.2mの平坦面。

**規模：**0.76/0.50×0.66/0.44×0.28m

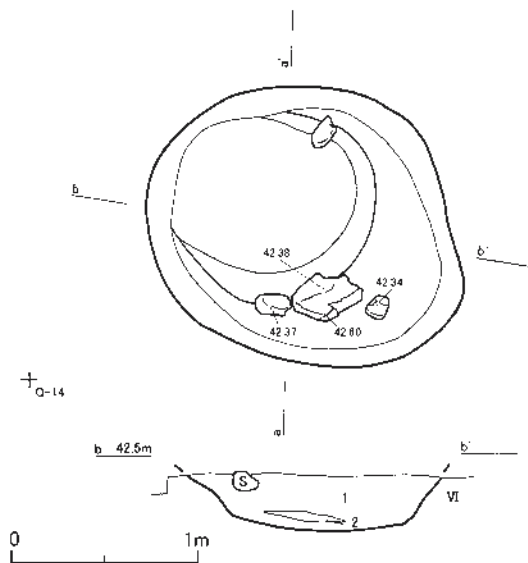
P-47

+J-9



P-47						
層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅硬度	その他
1	暗褐色土	10YR5/2	壤土	軟	ややしまりあり	中~大粒径の礫17% IV-V

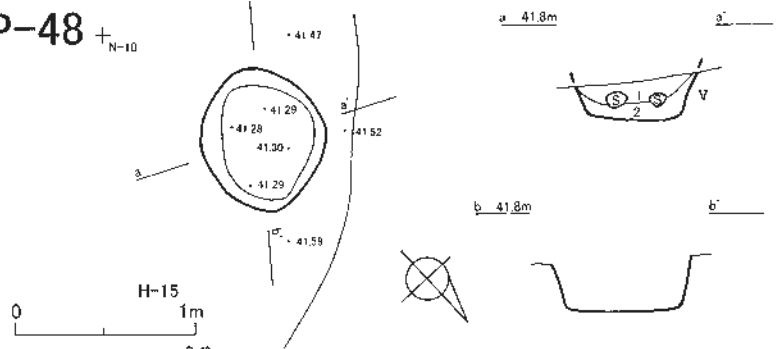
P-49



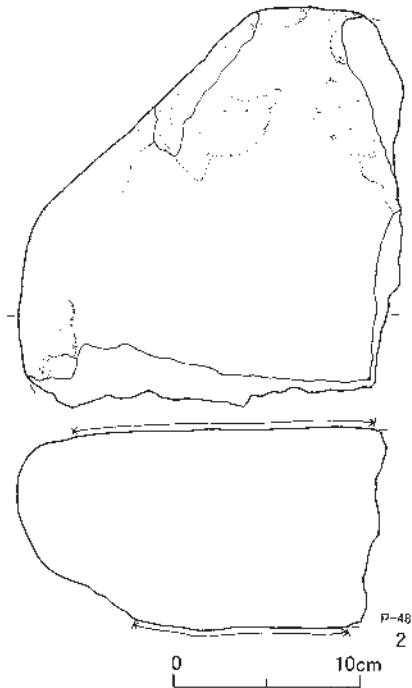
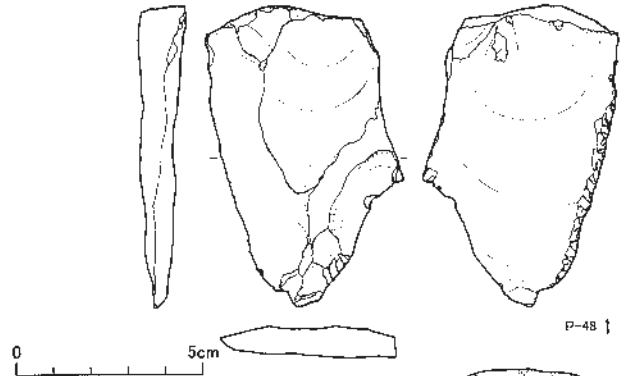
P-49						
層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅硬度	その他
1	暗褐色土	10YR5/2	壤土	軟	堅	IV+V
2	暗褐色~灰褐色	10YR3.5/4	壤土	粘	軟	V>IV

P-48

+N-10



P-48						
層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅硬度	その他
1	黄褐色土	10YR3.7/1	壤土	強	軟	IV+V 礫含量5%以上
2	黄褐色土	10YR3.7/1	壤土	強	軟	IV>V 礫含量10%以上混入



図III-57 P-47、P-48と遺物、P-49

**確認・調査：**H-15の範囲を精査検出中、不整形の黒褐色土の落ち込みを確認した。覆土は埋め戻しである。平面形はほぼ円形を呈する。底面はやや丸みを帯び、壁は緩やかに立ち上がる。底面中央において北海道式石冠を検出した。

**時期：**壙底面直上で北海道式石冠が出土したことから縄文時代中期中葉である可能性が高い。(影浦)

**掲載遺物 土器：**1 北海道式石冠で、覆土からの出土である。安山岩の割礫を、持ち手部分を敲打して整形する。機能面には擦痕を有し、おおよそ短軸方向に擦痕がはしる。調整時か使用時のものか判断としないが、機能面には敲打痕もあり、敲打に伴うものか細かい剥離が機能面周辺にめぐる。

(大泰司)

**P-52 (図III-58、図版21)**

**位置・立地：**M・N-8・9 濁川河岸段丘縁 標高41.3mの平坦面。

**規模：**(0.56)／(0.46)×(0.36)／(0.29)×(0.20)m

**確認・調査：**H-15の床面検出中、黒褐色土の落ち込みを確認した。遺構の南側は一部が草木根痕と考えられる攪乱で失われ、東側は掘りすぎで消失した。覆土は堅密度の軟らかい黒褐色土層1層である。自然堆積であるか、人為的な埋め戻しによるものかは明らかにできなかった。残存部分から平面形は楕円形であることが想定される。確認面の中央において礫を2点検出した。

**時期：**周辺の状況から縄文時代中期前半ないしは後期の可能性がある。(影浦)

**P-54 (図III-59、図版21・65)**

**位置・立地：**N-10 標高40.3mの平坦面。

**規模：**0.46／0.24×0.42／0.24×0.15m

**確認・調査：**H-15床面精査中に検出した。壁の立ち上がりは緩やかである。

**時期：**H-15の覆土を掘り込んでいることから、縄文時代中期中葉以降と考えられる。(影浦)

**P-55 (図III-59、図版21)**

**位置・立地：**Q-13 標高41.6～40.7mの平坦面。

**規模：**(0.40)／(0.26)×(0.33)／(0.24)×(0.25)m

**確認・調査：**Q-13区V層上面を精査中、調査区東境界において黒色土の落ち込みを確認した。調査区壁面で土層を確認するものとして半割した。V層上面からの掘り込みと考えられる。底面はやや丸みを持ち、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は埋め戻しによるものと考えられる。調査区内の残存部分から推察すると、平面形は円形もしくは東西方向に長い楕円形の可能性がある。底面中央に土器の集中があり、同一個体と想定される。

**時期：**出土した土器から縄文時代中期中葉と考えられる。(影浦)

**掲載遺物 土器：**1はⅢ群a類、サイベ沢Ⅶ式である。表面は、水の影響なのか、表面の摩滅が著しい。外面上半、内面下半に煤が付着する。口唇部は断面三角形で外面部に連続して縦位のLR絡条体圧痕を施す。

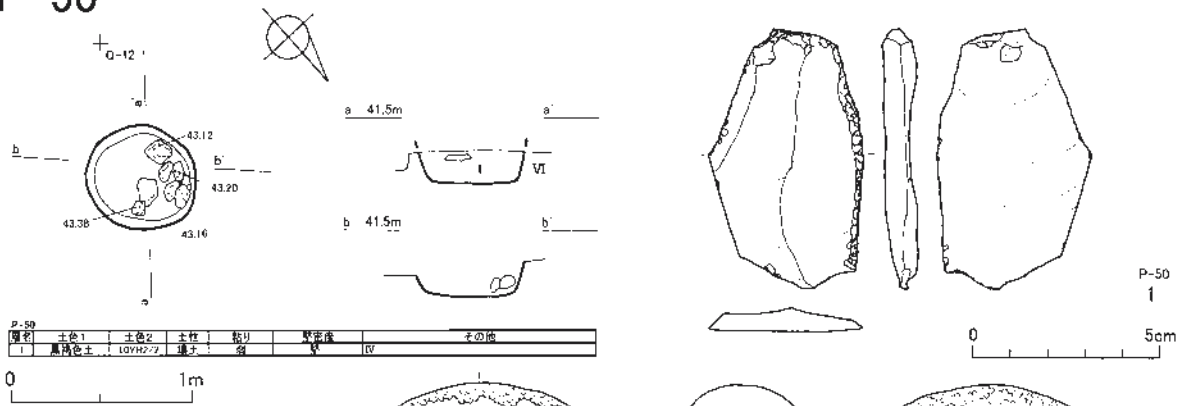
(大泰司)

**P-56 (図III-60・61、図版21・65・66・67)**

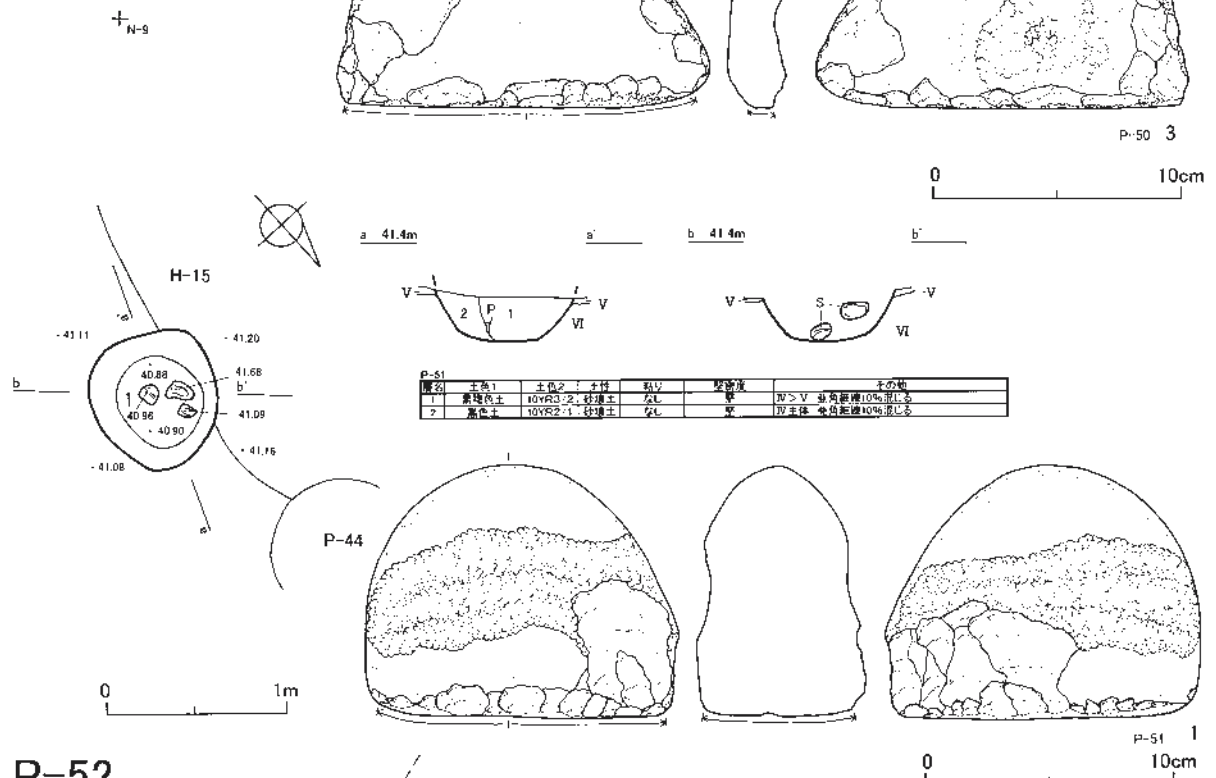
**位置・立地：**O-10 住居跡H-11と重複。

**規模：**(1.88)／2.08×1.74／1.74×0.68m

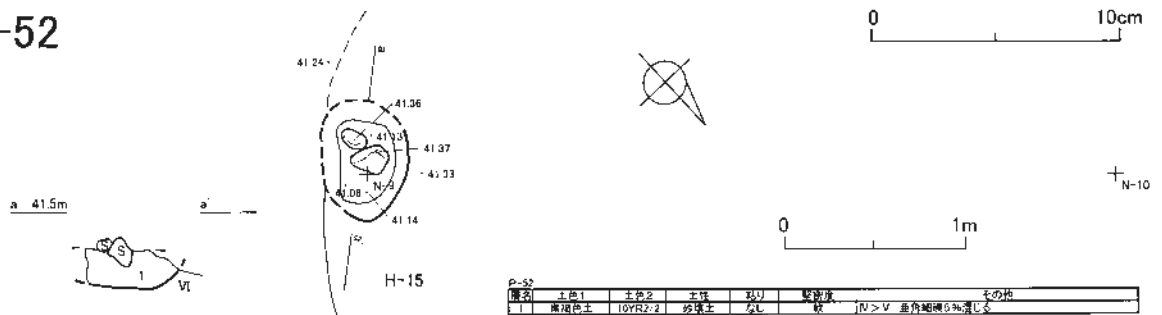
P-50



P-51

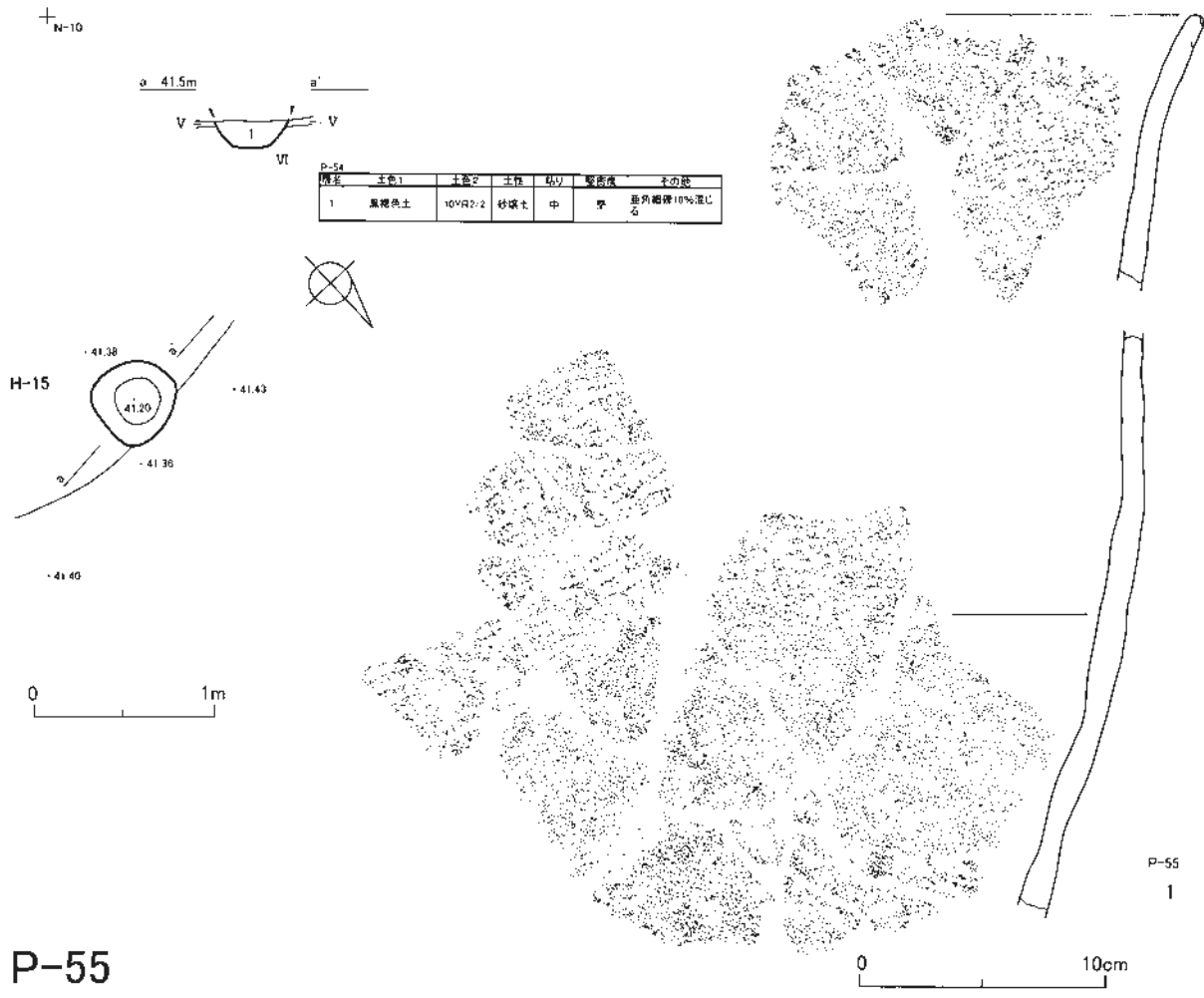


P-52

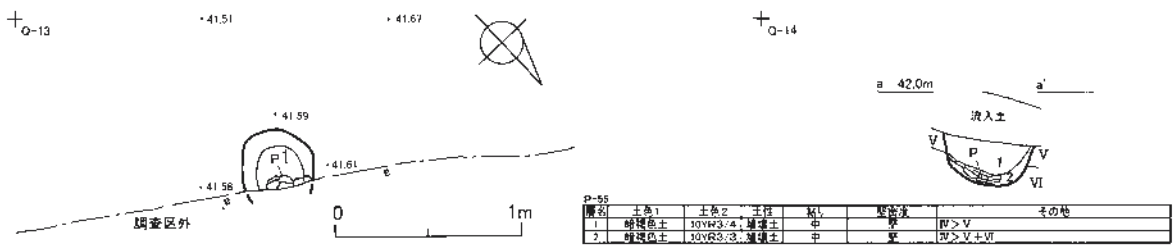


図Ⅲ-58 P-50と遺物、P-51と遺物、P-52

P-54



P-55



図III-59 P-54、P-55と遺物

**確認・調査：**H-11の床面検出中、中央部に大きな黒い落ち込みを確認した。H-11の調査用に設定したベルトに沿って掘り下げたところフラスコ状のピットになった。掘り込み面はIV層の下部で、H-11の覆土埋没後に構築されたと考えられる。覆土中位において焼土が粒状に検出された。その場で焚いたものではなく、他で焚いた焼土を埋没中の落ち込みに投げ入れたものと考えられる。覆土は埋め戻しである。平面形はほぼ円形を呈する。壙底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは約70cmである。おおむね、壁は下部でオーバーハングし、H-11の床面付近ですぼまりを呈した後、壙口部に向け大きく開いている。東側の壁面は壙底部からほぼ直線的な立ち上がりである。

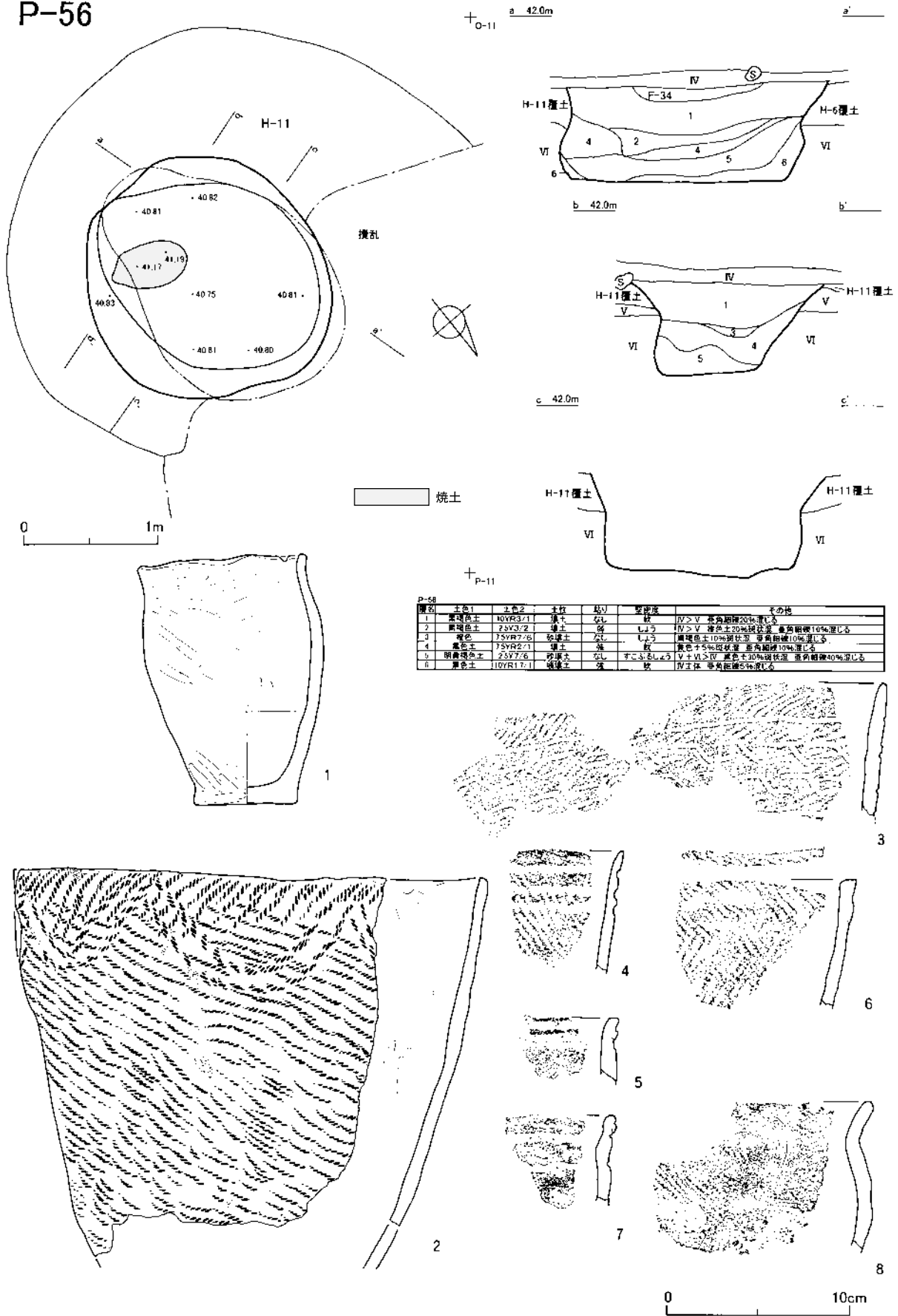
**時期：**H-6とH-11の覆土中に構築していることから、縄文時代後期前葉以降と考えられる。

**掲載遺物 土器：**13・17はⅢ群a類、他はすべてIV群a類である。3・12は大津式である。1・2・6・11・12・14は覆土中位、5・7・8は覆土下位、9・13・17は覆土上位からの出土である。3・17は覆土上位と中位のものが接合した。10・15・16は覆土からの出土である。

1の器面はナデ調整によって無文である。屈曲部とその上には煤が付着する。内面は屈曲部より上は横方向、下は縦方向のミガキ調整である。2は覆土中位にまとまっていたものである。切り合う遺構であるH-6の覆土中位のものとも接合している。口縁部はLR縄文を横方向に施文し、胴部は横走させる。口縁部から胴部にかけてLR縄を波状に押圧する。内面は縦方向のミガキ調整。口唇部は一本の粘土紐で平坦面を成形する。3はH-6の覆土のものとも接合した。RL縄文を施文後、沈線文を施す。胴上部に横走する沈線を施し、その下にクランク状文を横方向に2段、連続させる。4は縦方向にLR縄文を施した後、口縁部を横ナデで無文にし、その上にLR縄線を3本施す。内面は口唇部まで横ナデ調整。5は口縁部文様帯を横ナデで無文にした後、RL縄線を1本施す。口縁部は明瞭な折り返しがあり、帯の上にもRL縄線を施す。口唇部には平坦面をとる。内面は横ナデ調整である。折り返し口縁部を貼付後、もう一本の粘土紐によって口唇部を成形する。6は口唇部に粘土紐を、折り返し口縁風にタガ状に2本貼付する。口縁部文様帯にはRL、その下からはRL縄文を縦方向に施文している。内面はナデ調整だが、輪積痕が明瞭であり口唇部には一本の粘土紐で成形、整えている。口唇部は平坦に面を取りLR縄文を施している。7は口縁部文様帯を横ナデで無文にした後、RL縄線を2本施す。口縁部は明瞭な折り返しがあり、帯の上にもRL縄線を施す。口唇部の断面は丸みをおびる。内面は横ナデ調整で輪積痕が明瞭である。折り返し口縁部を貼付する際の粘土紐によって口唇部を成形する。8はRL縄文を縦方向に施した後、表面をナデ調整が施される。縄文施文時の痕跡の可能性はある。頸部を持つ小型の器形であり、頸部には折り返し風に粘土の継ぎ目が残る。口唇部にはほぼ平坦な面をとる。煤については、胴部の最大径を境として、外面はより上に、内面はより下に付着する。9はRL縄文を横方向に施文。内面は縦方向のミガキ調整が顕著。10・15・16はH-11覆土下位からの遺物と接合している。LR縄文を横方向に施文。内面はナデ調整。口唇部には平坦面をとる。この個体についてはまとまった出土があったが、器形が判別できるほどの接合は出来なかった。円盤状土製品の成形作業によるものと、胎土に小石を多く含むため破片が碎片になりやすいためと考える。18はケズリのようなミガキ調整によって外面は無文である。胎土中の砂粒が右方向にずれていることから、右方向に調整したものと考えられる。13・17はⅢ群a類であり、いずれも節の大きいR撚りの縄文地文である。17は底部の際は直立気味。底面は板状のものでハケメのようなミガキ調整。

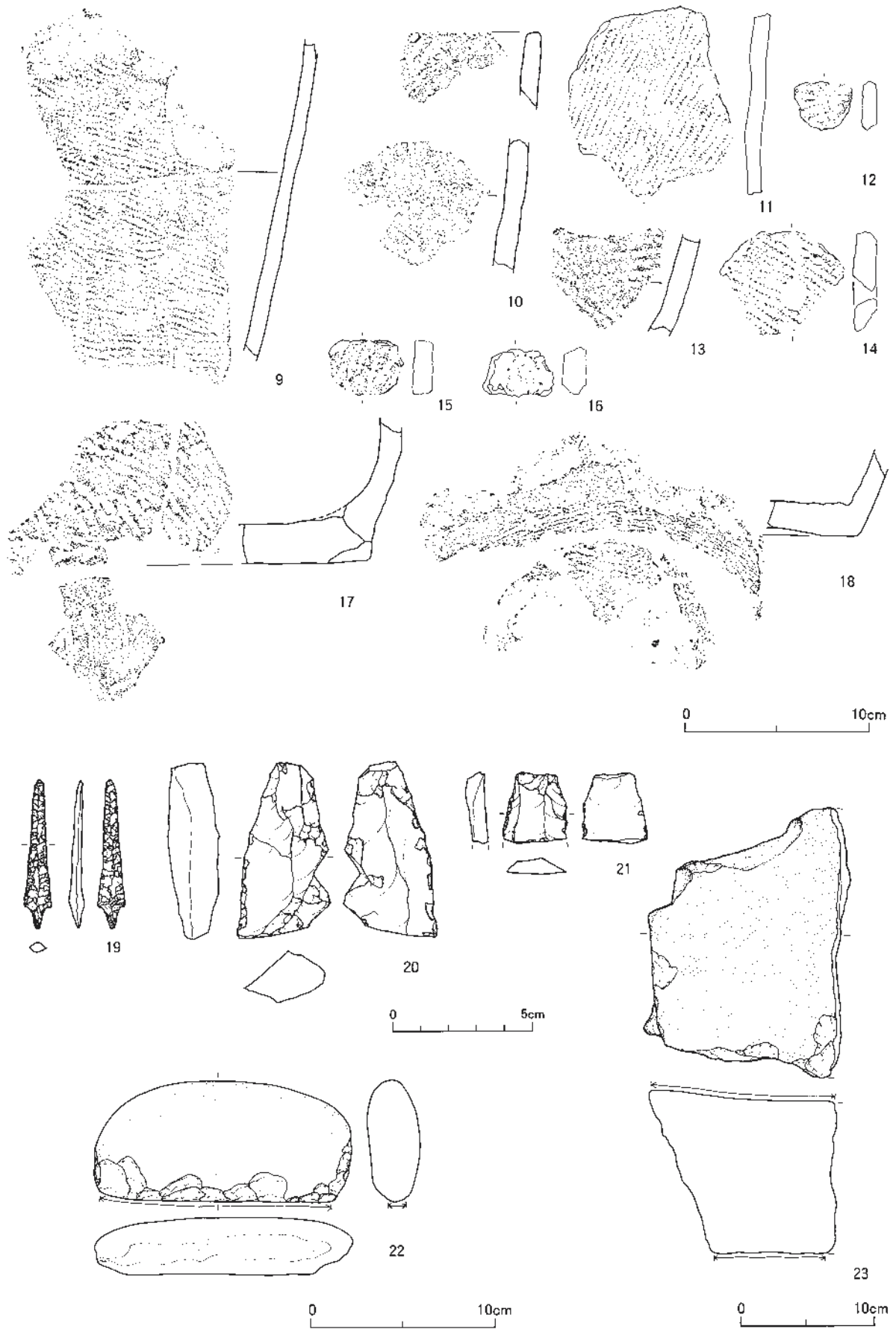
11・12・14・15・16は縁辺に打ち欠きが施された破片であり、再生土製品である。11は縄端を結束したRL縄文を縦方向に施す。内面は縦方向のナデ調整である。胎土には砂粒を含み砂粒部分から亀裂が走る。12は3と同一個体でH-6からも同一個体の破片が出土している。14はRL縄を縦方向に施す。穿孔が残る。15・16は10と同一個体の土器であり、欠損した円板形である。

P-56



図III-60 P-56と遺物(1)





図III-61 P-56の遺物(2)

**石器**：19～22は覆土上位、23は覆土中位、24は覆土下位からの出土である。19は石鏃である。両面全面調整の有茎平基で、幅は比較的狭い。刺突部の長さが長く錐を思わせる。20・21はスクレイパーである。20はメノウ製である。不整な剥片の一侧縁に極浅い調整が並ぶ。21は頁岩製である。縦長剥片の両側縁に極浅い調整が並ぶ。22は偏平打製石器で安山岩製である。長楕円礫の一侧縁に機能部を有する。機能部は面を有し、敲打痕と長軸方向の擦痕が残る。敲打によるものか、機能面の周辺には細かい剥離がめぐる。長軸両端について敲打と打ち欠きによって正面観を直線状にする。微妙に面を有するまで調整する。23は石皿の破片である。濁川火砕流起源で厚みのある安山岩の板状礫を使用したものである。両面に顕著な擦痕を有する。敲打によって打ち欠かれたものである。（大泰司）

**P-57**（図Ⅲ-62、図版22）

**位置・立地**：K・L-13・14 標高43m付近の平坦面。

**規模**：1.79/1.71×1.49/1.35×0.58m

**確認・調査**：包含層をかなり掘り下げた後で確認した。確認面はV層上面であるが、掘り込み面はより上であると考えられる。平面形は隅丸方形で、壙底面は平坦。壁は急傾斜で立ちあがる。覆土はIV層主体の埋め戻し土である。次のP-58同様、形態から貯蔵穴の可能性が考えられる。

**時期**：不明だが、確認層位から縄文時代中期前半のものかと推測される。（中山）

**P-58**（図Ⅲ-62、図版22）

**位置・立地**：L-14 標高43m付近の平坦面。

**規模**：1.79/1.67×1.77/1.59×0.75m

**確認・調査**：P-57同様、包含層を掘り下げた後で確認した。確認面はV層上面であるが、掘り込み面はより上と考えられる。平面形は方形に近い円形で、壙底面は平坦。壁は急傾斜で立ちあがる。覆土はIV層主体の埋め戻し土であった。P-57とは隣接しており、覆土の状態も似ていたので同様の性格の遺構と考えられる。

**時期**：不明であるが、確認層位からP-57と同時期の縄文時代中期前半のものかと推測される。

（中山）

**P-59**（図Ⅲ-62、図版22・67）

**位置・立地**：N-9 住居跡H-15の床面、H-15 HP-9と重複。

**規模**：0.60/0.44×0.38/0.28×0.10m

**確認・調査**：H-15の柱穴調査中に検出した。完掘後、壙底面においてH-15の柱穴（HP-9）を検出したことから、H-15廃絶後に構築されたと考えられる。覆土は埋め戻しである。平面形は楕円形である。壙底面の直上から小型の土器を1個体検出した。

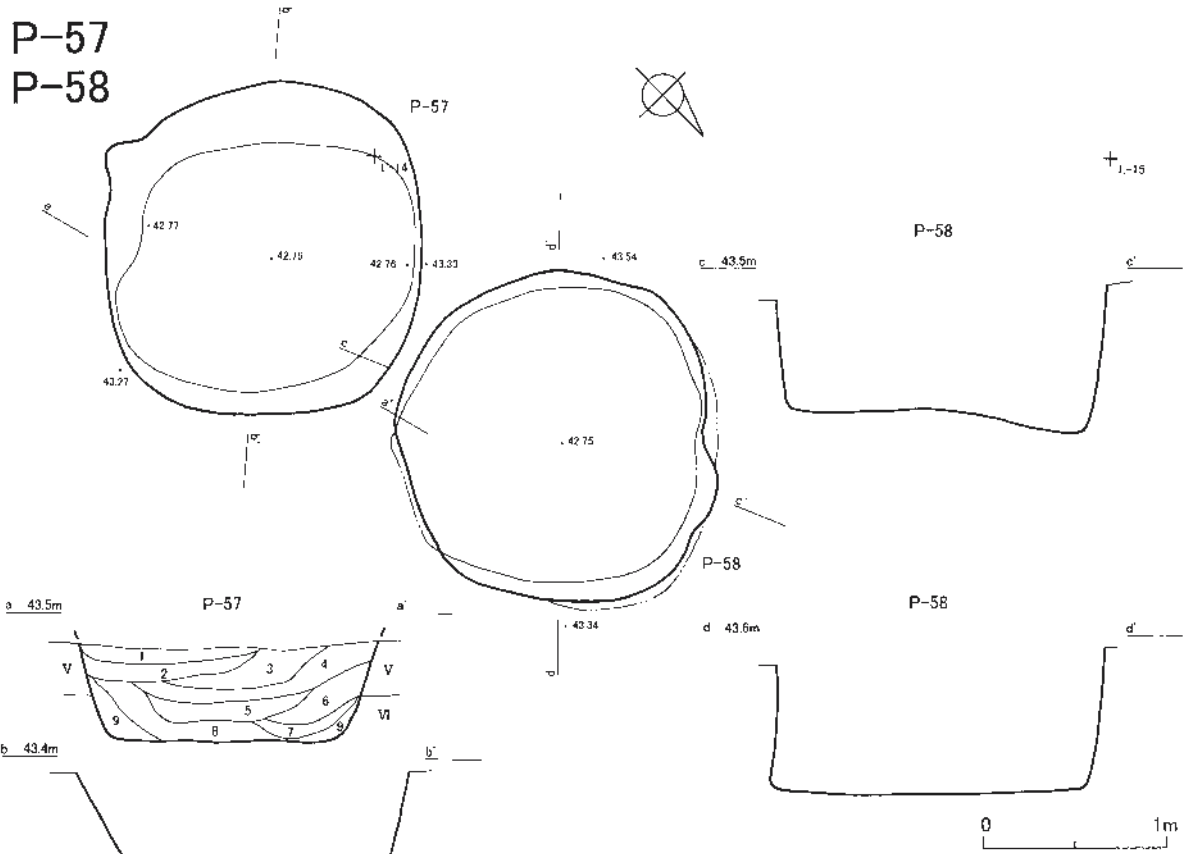
**時期**：出土した土器から縄文時代中期中葉と考えられる。（影浦）

**掲載遺物 土器**：1はⅢ群a類、サイベ沢Ⅶ式である。覆土上位からのものが接合した。同一個体と思われるものを含めると、壙底から上位までのものが接合している。結束第1種羽状縄文地文であり、口唇部には縄圧痕を連続して押圧する。（大泰司）

**P-63**（図Ⅲ-63、図版22・67）

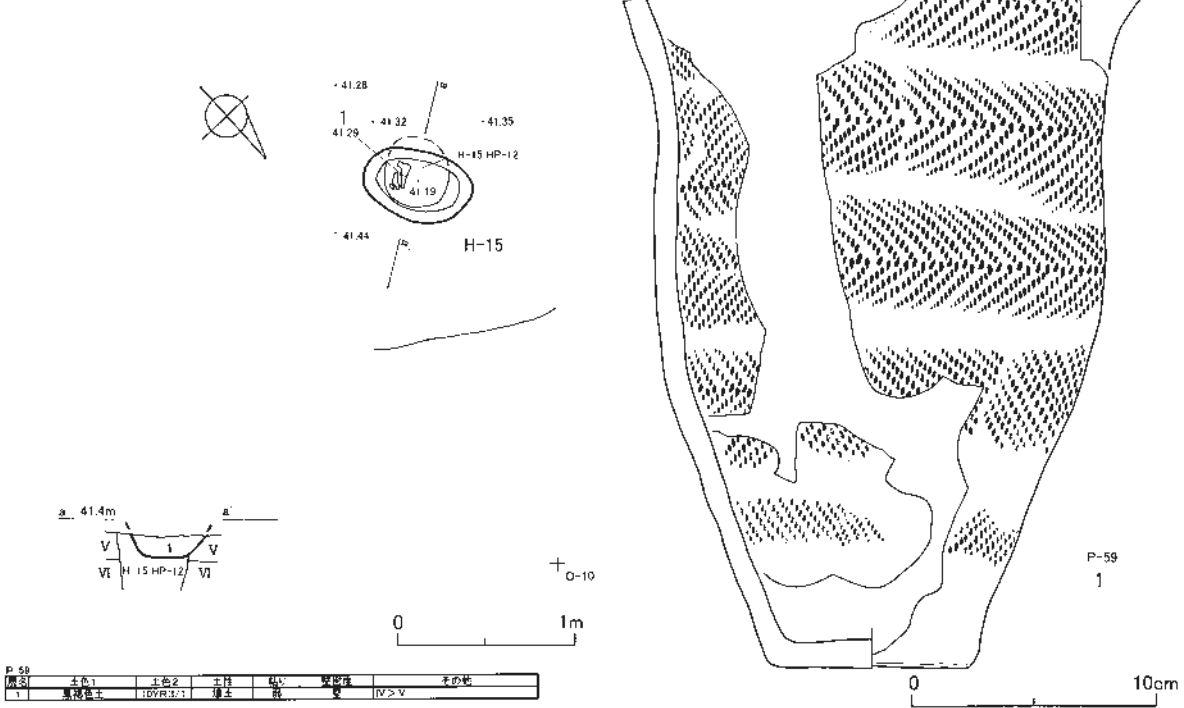
**位置・立地**：I-16 標高44.0～44.5m付近の平坦面。

P-57  
P-58



層名	土色1	土色2	主材	粘り	観察者	その他
1	黒褐色土	10YR2/2.5	粘土	粘	野本V	IV層と境界不明
2	黒褐色土	10YR3/4	砂粘土	粘	宇山V	IV層と境界不明
3	黒褐色土	10YR5/3	粘土	粘	野本V	IV層と境界不明
4	黒褐色土	10YR5/4	粘土	粘	野本V	IV層と境界不明
5	黒褐色土	10YR2.5/5	粘土	粘	野本V	IV層と境界不明
6	黒褐色土	10YR2/2	粘土	粘	野本V	IV層と境界不明
7	黒褐色土	10YR2.5/3	粘土	粘	野本V	IV層と境界不明
8	黒褐色土	10YR3/4	粘土	粘	野本V	IV層と境界不明
9	黒褐色土	10YR2.5/2	粘土	粘	野本V	IV層と境界不明

P-59



層名	土色1	土色2	主材	粘り	観察者	その他
1	黒褐色土	10YR3/3	粘土	粘	野本V	IV層と境界不明

図III-62 P-57・58、P-59と遺物

規模：0.90／0.88×0.88／0.88×0.36m

**確認・調査：**V層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は上部についてはIV層主体の自然堆積であり、中位以下についてはIV層とV層が混合した埋め戻し土である。掘り込み面は検出面より上位である。平面形は不整な円形で、壙底はおおよそ平坦である。壁は壙底部から開口部に向かって直立気味に立ち上がる。南側についてはややオーバーハングしながら立ち上がる。遺物は覆土上部の自然堆積部分からの出土がほとんどであり、埋め戻し部分からも土器が3点出土している。

**時期：**壙底部からの出土遺物が無いが、周辺の遺物から縄文時代後期前葉の遺構と推測される。

**掲載遺物 土器：**1・2はIV群a類である。1は覆土1と覆土2のもの、そして遺構が構築された調査区のものに接合した、2は覆土3の出土である。1はLR縄文を横走するように施し、その上をナデ調整を施すが縄文施文時の痕跡の可能性はある。内面は顕著な縦方向のミガキ調整である。2はRL縄文を横走するように施す。折り返し口縁を持つ。内面は縦方向のミガキ調整であり、口縁部近くには輪積痕が残る。折り返し口縁を整形する際に、粘土紐を一本貼付して整えたものである。

**石器：**3はたたき石で、覆土1層からの出土である。安山岩製である。断面が二等辺三角形をした安山岩の不整な棒状礫を素材とする。二等辺三角形のより鋭角的な角度を有する部分の稜にあたる側縁に両面からの打ち欠き痕があり、それぞれ最大幅約0.8cmで不連続な機能面を持つ。(大泰司)

P-64 (図III-64、図版22・68)

**位置・立地：**M-17 標高43.0～43.5m付近の平坦面。

規模：0.76／0.68×0.38／0.54×0.12m

**確認・調査：**V層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はIV層主体の自然堆積である。掘り込み面は検出面より上位である。平面形は不整な円形で、壙底は平坦である。壁は壙底部から開口部に向かってゆるやかに立ち上がり、皿状を呈する。遺物は覆土から散点的に出土している。

**時期：**壙底部からの出土遺物が無く、不明であるが、周辺の遺物から縄文時代後期前葉の遺構と推測される。

**掲載遺物 土器：**1はIV群a類土器で、覆土1層からの出土である。LR縄文を縦位に施す。底面はミガキ調整を施し、微妙な上げ底である。内面は縦方向のミガキ調整である。(大泰司)

P-66 (図III-64、図版23)

**位置・立地：**N・O-23 標高42.8～42.9mの平坦面。

規模：1.12／0.93×1.02／0.88×0.32m

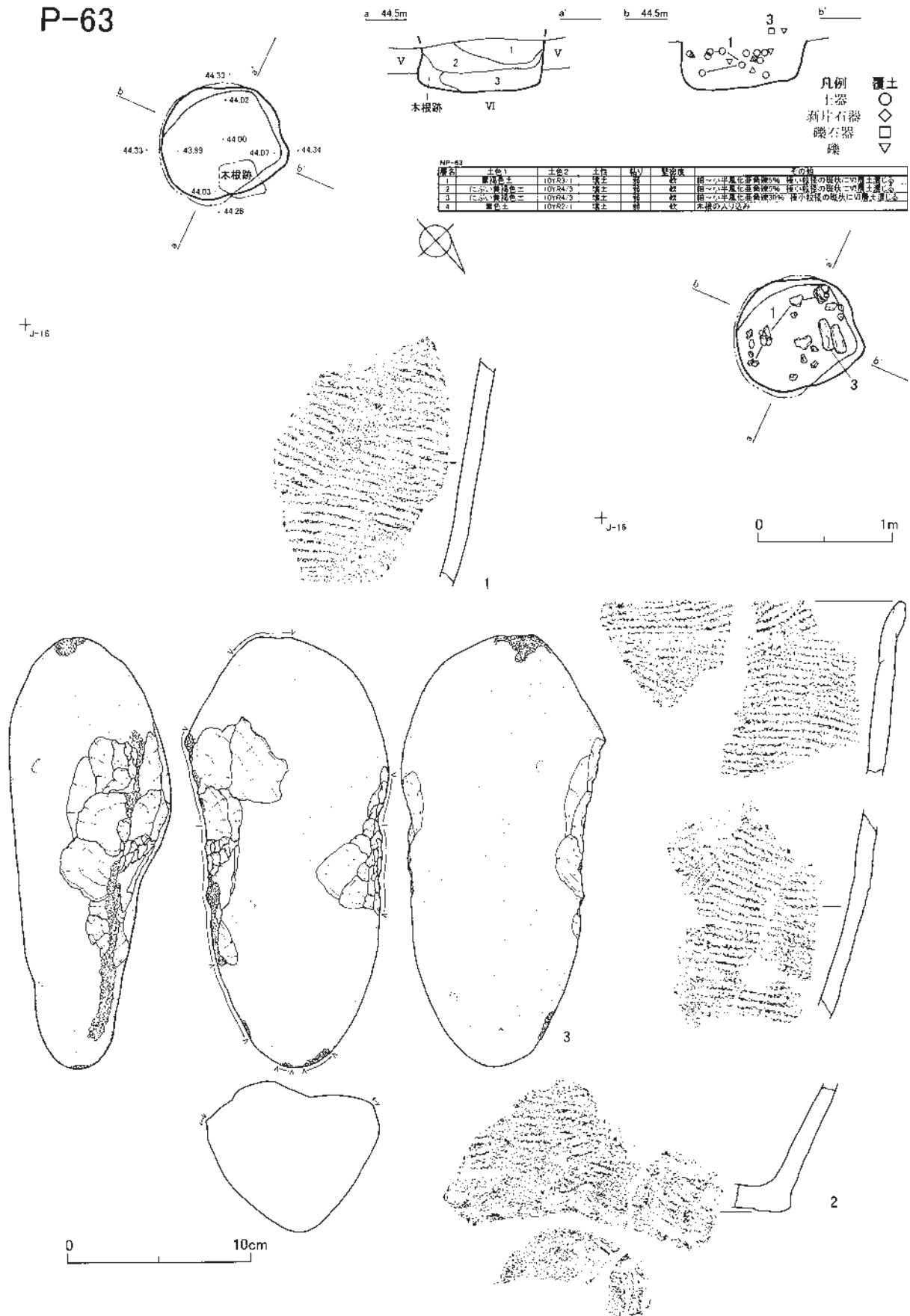
**確認・調査：**V層上面を精査中に検出した。北西側の壁面が一部、樹木の根痕で破壊されていた。覆土は1層であり、埋め戻しによるものか自然堆積によるものかは明らかにできなかった。ピットの規模と形状からすると埋め戻しの可能性のほうが高いと考えられる。平面形はほぼ円形で、壙底面はやや皿状を呈する。壁は垂直気味に立ち上がる。覆土中位において人頭大の扁平礫が出土した。また東側の覆土中から拳大の礫も1点出土した。

**時期：**覆土内から礫しか出土していないが、規模や周辺の出土遺物から、縄文時代後期前葉に構築された可能性が高いと考えられる。(影浦)

P-71 (図III-64、図版23・68)

**位置・立地：**M・N-16 標高42.5～43m付近の平坦面。

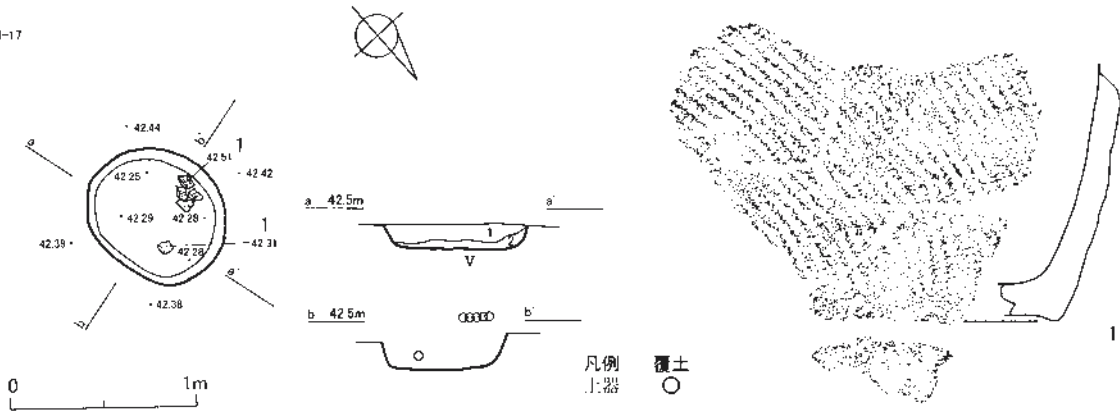
P-63



図III-63 P-63と遺物

P-64

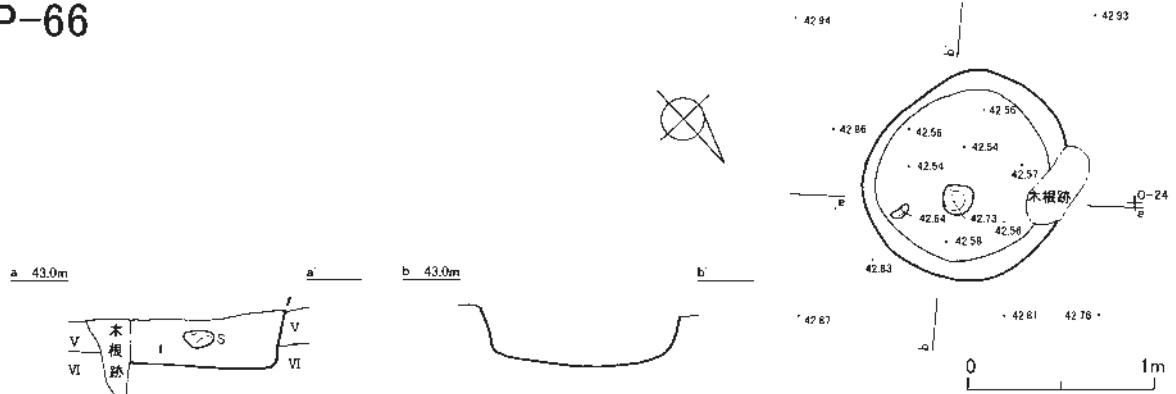
+M-17



層名	土色1	土色2	土質	礫り	堅密度	その他
1	黒褐色土	10YR5/3-1	硬土	弱	軟	中未風化(最高値7%) 礫(小粒径のハミエ混じり)
2	暗褐色土	10YR3/3	硬土	弱	軟	中未風化(最高値1%) 小~中粒径の礫(IV層混じり) IV+V下群のみややしえる

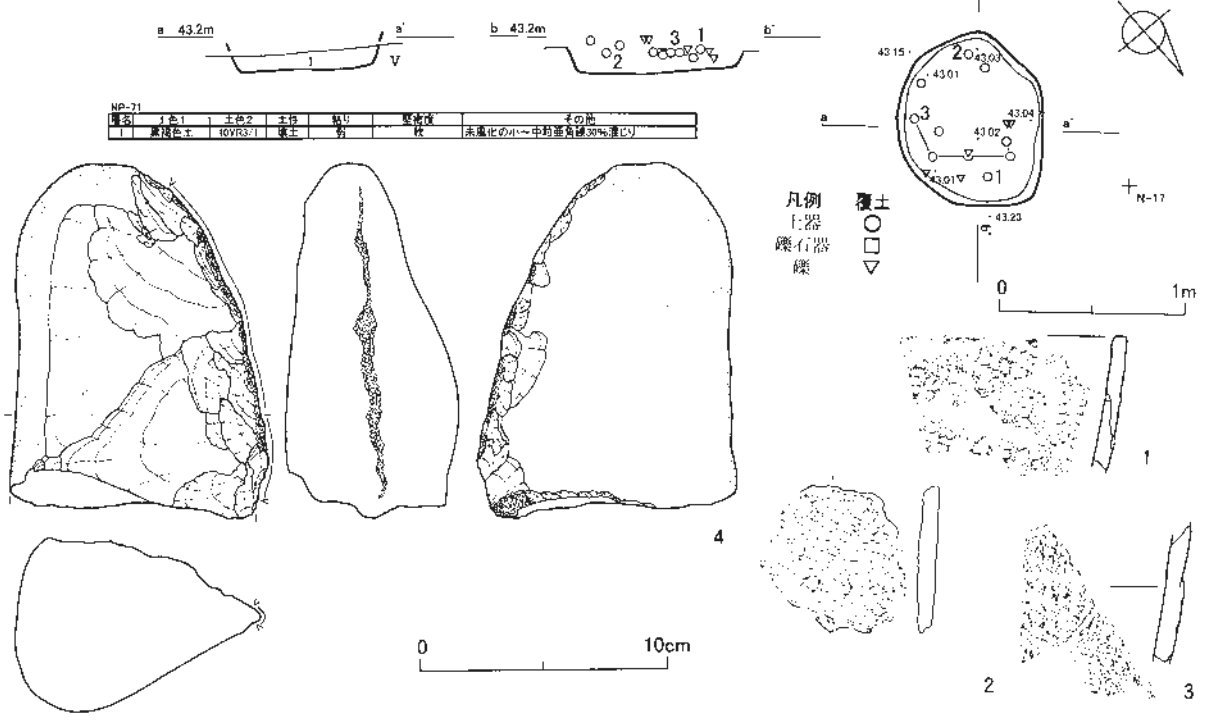


P-66



層名	土色1	土色2	土質	礫り	堅密度	その他
1	黒褐色土	10YR3/2	硬土	弱	軟	小~中粒径の礫(径の切端20%混じり)

P-71



層名	土色1	土色2	土質	礫り	堅密度	その他
1	黒褐色土	10YR3/2	硬土	弱	軟	未風化のハミ~中粒径(最高値30%混じり)

図III-64 P-64と遺物、P-66、P-71と遺物

規模：0.96/0.88×0.80/0.70×0.16m

**確認・調査：**V層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はIV層を主体とした黒褐色土の層で、自然堆積である。掘り込み面は検出面より上位である。平面形は楕円形で、壙底はほぼ平坦である。壁は壙底部からゆるやかに開きながら立ち上がる。遺物は覆土から散点的に出土している。

**時期：**覆土中の遺物と周辺の遺物から縄文時代後期前葉の遺構の可能性が高い。

**掲載遺物 土器：**1～3はIV群a類土器で、覆土1層からの出土である。1は表面が剥落し、細かく割れていたものが接合した。口縁部とその直下でRL縄文の施文の向きを変える。口縁部は横方向、その直下からは縦方向に施文。割れ方から、裏面から棒状のものによる押圧による破砕が想定される。2はRL縄文を縦方向に施文している。縁辺が打ち欠かれており、再生土製品に関連するものである。縄文原体が類似するため1と同一個体の可能性がある。3はRL縄による絡条体を縦方向に施文。胎土は2・3によく類似する。

**石器：**4はたたき石である。覆土1層最上部からの出土である。覆土中に礫の出土が多く、この最上部の礫について位置を記録していなかった。遺物整理をしてみると覆土中の礫には使用痕はなく、結局最上部で取上げたこの礫のみに使用痕があった。P-63とたたき石の出土状況が類似している。安山岩製である。断面が二等辺三角形をした安山岩の不整な棒状礫を素材とする。二等辺三角形の頂点にあたる側縁に両面からの打ち欠き痕があり、最大幅約0.8cmで不連続な機能面を持つ。（大泰司）

P-72（図Ⅲ-65、図版23）

**位置・立地：**I・J-16・17 標高44.0～44.5m付近の平坦面。

規模：1.10/0.96×1.08/0.97×0.08m

**確認・調査：**H-18調査終了後、IV層をさらに掘り下げたところ、IV層下位でより黒色味の強い土の落ち込みとして確認した。覆土はIV層を主体とした自然堆積である。掘り込み面は検出面より上位である。平面形は不整な楕円形で、壙底はほぼ平坦である。壁は壙底部から開口部に向かってゆるやかに立ち上がり、皿状を呈する。遺物は覆土中から土器が1点出土している。

**時期：**壙底部からの出土遺物が無く、不明であるが、周辺の遺物から縄文時代中期前半もしくは後期前葉の遺構と推測される。H-18より古い遺構である。（大泰司）

P-73（図Ⅲ-65、図版23・68）

**位置・立地：**O-16 標高44～44.5m付近の平坦面。

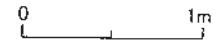
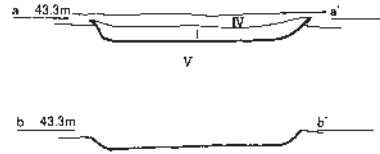
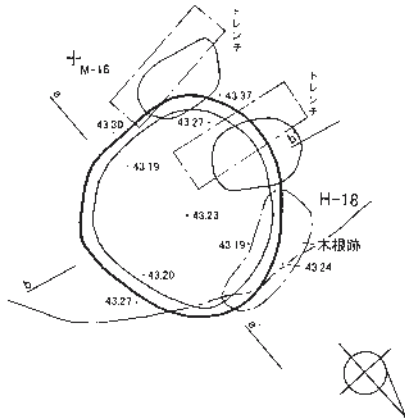
規模：0.82/0.72×(0.56)/(0.49)×0.46m

**確認・調査：**V層上面Ko-gの堆積があるところで褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はIV層にV層が混ざりこんだ褐色土の層で、自然堆積である。掘り込み面はIV層の下位ないしはV層の最上面である。遺構のおよそ半分が調査区外にあるため、調査区内の形状から、平面形は楕円形と考えられる。壙底はほぼ平坦だがやや南西側へ傾斜する。壁は壙底部から壙口に向かってまっすぐに立ち上がる。遺物は覆土中から散点的に出土している。

**時期：**覆土中の遺物と、周辺の遺物から縄文時代後期前葉の遺構の可能性が高い。

**掲載遺物 石器：**1はたたき石で、覆土中位からの出土である。安山岩製である。断面が二等辺三角形をした安山岩の不整な棒状礫を素材とする。二等辺三角形の頂点にあたる側縁に片面からの打ち欠き痕があり、最大幅約0.2cmで不連続な機能面を持つ。（大泰司）

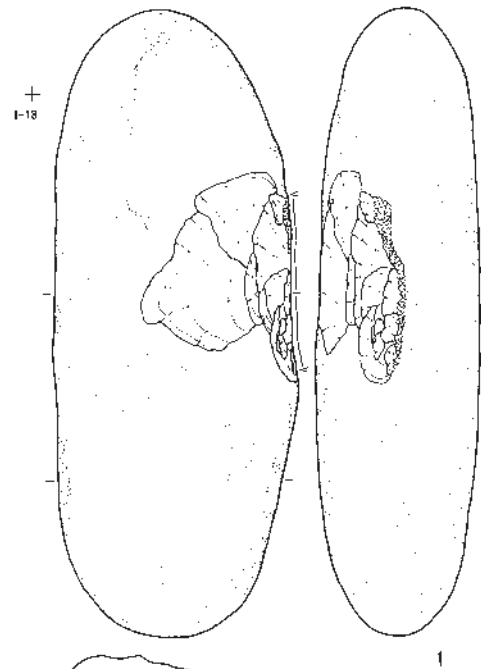
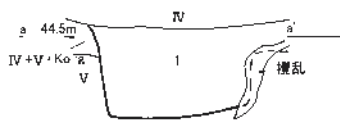
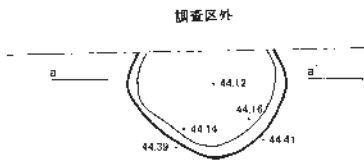
P-72



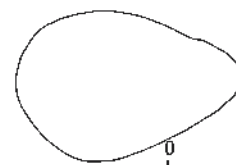
NP-72						
層別	土色1	土色2	土質	粘土	堅密度	その他
1	黒色土	黒褐色土	壤土	弱	軟	未成体の根茎(約1%混じり)・小根茎の切屑土10%以下に埋む

P-73

+ I-17



NP-73						
層別	土色1	土色2	土質	粘土	堅密度	その他
1	褐色土	褐色土	壤土	軟	軟	IV層の塊状礫土の土を混じり混む 砂小〜小粒15%



図III-65 P-72、P-73と遺物



P-74 (図Ⅲ-66、図版24・68)

位置・立地：O-16 標高42.5~43m付近の平坦面。

規模：0.96/0.68×0.76/0.54×0.26m

確認・調査：V層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。覆土はIV層を主体とした黒~黒褐色土の層で、自然堆積である。掘り込み面はIV層の下位ないしはV層の最上面である。平面形は楕円形である。壙底はほぼ平坦だが中央が浅く窪む。壁は壙底部から壙口に向かって漏斗状に広がっている。遺物は覆土上部から散点的に出土している。

時期：覆土中の遺物と、周辺の遺物から縄文時代後期前葉の遺構の可能性が高い。

掲載遺物 土器：いずれもIV群a類土器で、覆土1層からの出土である。1はLR縄文施文後、口縁部に折り返し口縁風に粘土を貼付する。折り返し口縁上にはLR縄線を2本施し、折り返し部分直下には沈線を2本施す。2はLR縄文施文後、沈線文を施す。内面は顕著な縦方向のミガキ調整。

(大泰司)

P-75 (図Ⅲ-66、図版24・68)

位置・立地：J-19 標高約44mの平坦面。

規模：1.07/0.9×(0.98)/(0.68)×0.17m

確認・調査：隣接するF-29の土層を確認するために設定した小トレンチの断面で、黒色土の落ち込みとして確認した。F-29より古い遺構である。覆土はIV層を主体とした黒褐色土で自然堆積である。平面形は円形を呈し、壙底は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。性格は不明。

時期：遺構周辺の遺物から縄文時代後期前葉、IV群a類土器の時期と考えられる。(村田)

掲載遺物 土器：いずれもIV群a類土器で、覆土2層からのものと遺構が構築された調査区ないしは隣接する調査区のものと同接合した。1は地文にはLr縄文が横走するように施文。地文施文後、口縁部を横方向に表面をナデ、特に口縁部を無文にする。口縁部には地文と同一と思われる原体で縄線を2本施す。内彎する口縁部を持つ深鉢である。内面は横方向のナデ調整だが、輪積痕が残る。2の外面は横方向のミガキ調整によって無文にする。破片の表面上端に残る沈線から、大津式ないしは壺形土器の無文部分で、底部際の胴部片と考える。F-29の2と同一である。(大泰司)

P-76 (図Ⅲ-67、図版24)

位置・立地：O-15・16 標高42.5~43m付近の平坦面。

規模：1.14/0.96×0.94/0.80×0.14m

確認・調査：V層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はIV層を主体とした黒褐色土の層で、自然堆積である。掘り込み面は検出面より上位である。平面形は楕円形で、壙底はほぼ平坦である。壁は壙底部からゆるやかに開きながら立ち上がる。遺物は覆土から土器が1点出土している。

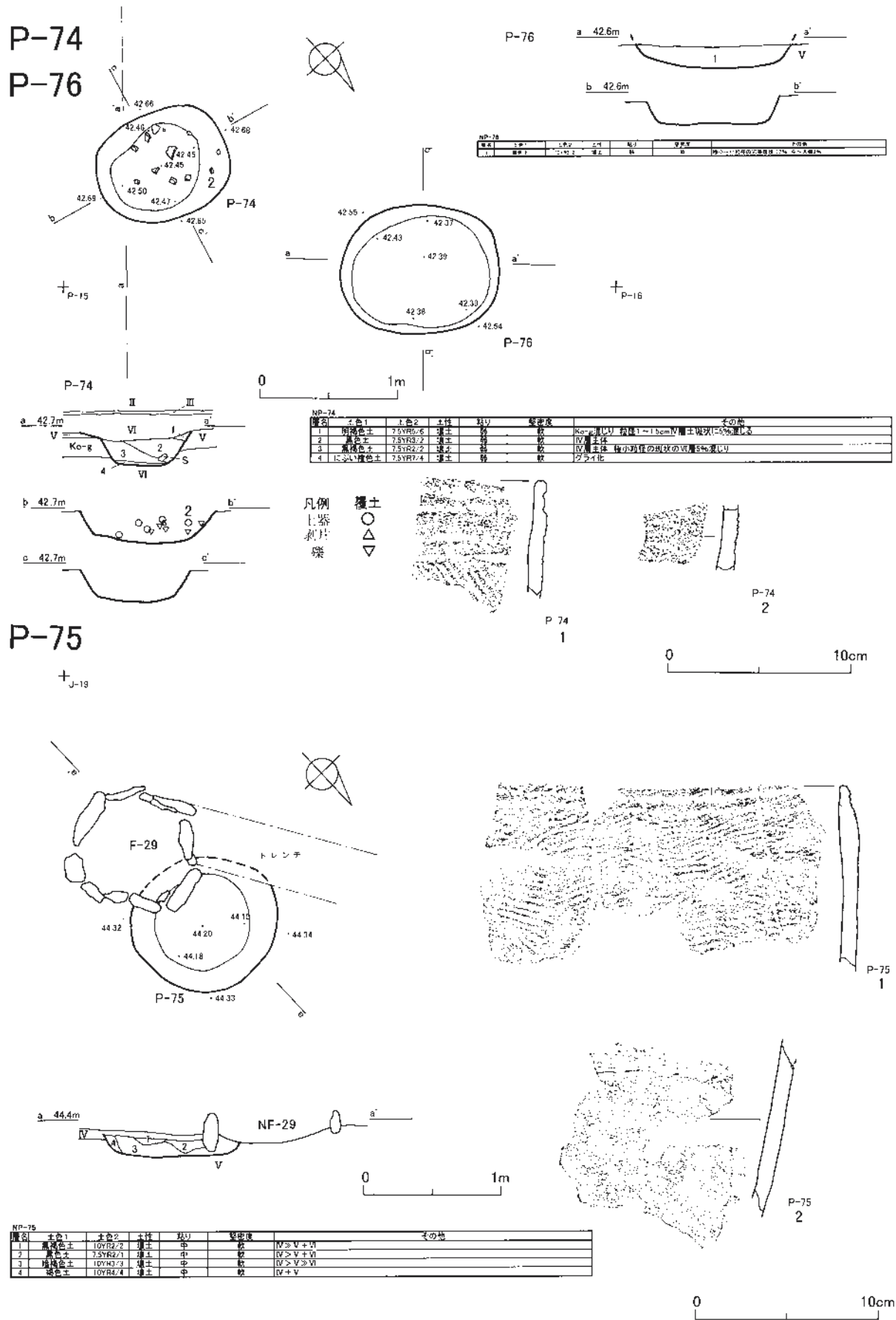
時期：周辺の遺物から縄文時代中期前半もしくは後期前葉の遺構と推測される。(大泰司)

P-83 (図Ⅲ-67、図版24・69)

位置・立地：K-15 標高43.5~44m付近の平坦面。

規模：1.40/0.96×0.84/0.72×0.42m

確認・調査：V層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はIV層を主体とした黒褐色土の単層で、自然堆積である。掘り込み面は検出面より上位である。平面形は楕円形を呈し、壙底はおおよ



図III-66 P-74と遺物、P-76、P-75と遺物

そ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は壙底に礫が1点出土したのみである。

**時期：**周辺の遺物から縄文時代中期前半もしくは後期前葉の遺構と推測される。 (大泰司)

**P-87** (図Ⅲ-67、図版25)

**位置・立地：**M-16 標高42.5~43.0m付近の平坦面。

**規模：**0.42/0.58×0.76/0.52×0.42m

**確認・調査：**V層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。上部が風倒木によって攪乱されていた。風倒木の埋土を除去した時点で明瞭な壁面を確認できたので土壙と判断した。覆土はIV層主体の自然堆積である。掘り込み面は検出面より上位と推定できる。平面形は不整な楕円形を呈していたと考えられる。壙底はおおよそ平坦である。壁は壙底部から開口部に向かって急角度に開きながら立ち上がる。遺物は覆土から散点的に出土している。

**時期：**覆土中の遺物について中期前半の時期の遺物が他の遺構と比べ際立って目立つ。周辺の遺物を踏まえても縄文時代中期中葉の遺構と推測される。

**掲載遺物 土器：**1はⅢ群b1類、大木8b式であり、2・3はⅢ群a類土器である。いずれも覆土1層からの出土で、1はM10区のものを中心に調査区の広い範囲のものと接合した。

1は大木8b式で、キャリパー型の器形である。搬入品の可能性もある。内面について胴部上端からキャリパーの膨らみの最大径あたりまで煤がよく付着する。内面は胴部まで縦方向のミガキ調整キャリパー部は横方向のミガキ調整。胴部はRL縄文を地文に施した後、沈線文様。口縁部は粘土紐の貼り付けで渦巻き文様を半肉彫り状に描く。2の口縁部は一旦外反し、そこから真っ直ぐに立ち上がる。地文はRL縄文で、口縁部の直立部分については横ナデによって無文にした後、縦位の刻みを連続して巡らせる。内面は横ナデ調整だが、輪積痕と成形時の指頭圧痕が残る。3は底部破片。RL縄文地文で、底面際は横方向のナデ調整によって無文である。底面はナデ調整。器壁と底部の接合部分には横方向のミガキによって接合をしている。器壁内面は縦方向のミガキ調整。

**石器：**4は北海道式石冠で、覆土1層からの出土である。安山岩製である。安山岩の楕円礫の割礫を素材とする。持ち手部分を敲打で調整する。機能面には主に長軸方向の擦痕があり、縁辺には長軸に対しておおよそ45°方向に走る擦痕がある。面の縁辺には敲打に伴うものか細かい剥離がめぐる。機能面側からの打ち欠き痕跡は長軸端部に集中し、使用方法に関連するものと考えられる。 (大泰司)

**P-91** (図Ⅲ-68、図版25)

**位置・立地：**M・N-15・16 標高42.5~43m付近の平坦面。

**規模：**0.96/0.84×0.62/0.48×0.11m

**確認・調査：**V層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。覆土はIV層を主体とした黒色土の層で、自然堆積である。掘り込み面は検出面より上位である。平面形は不整な楕円形で、壙底はほぼ平坦である。壁は壙底部からゆるやかに開きながら立ち上がる。遺物は覆土上部から土器が2点に出土している。

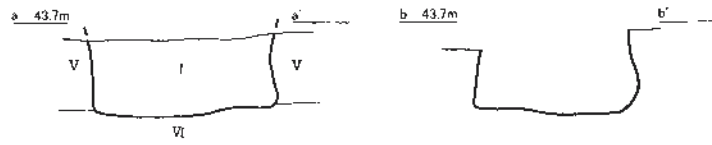
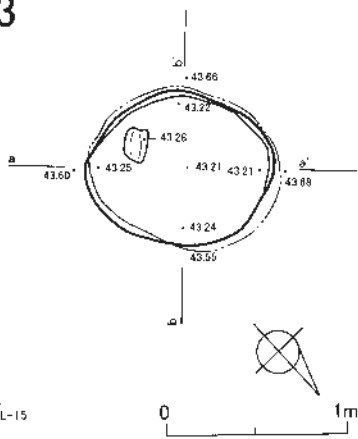
**時期：**周辺の遺物から縄文時代中期前半もしくは後期前葉の遺構と推測される。 (大泰司)

**P-93** (図Ⅲ-68、図版25)

**位置・立地：**I・J-16・17 標高44.0~44.5m付近の平坦面。

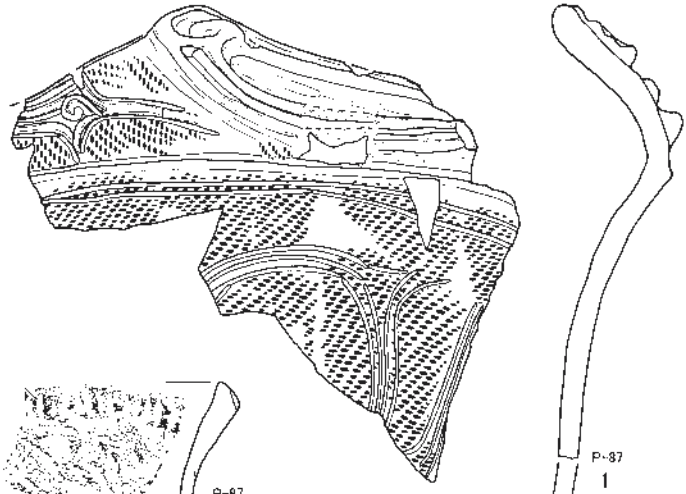
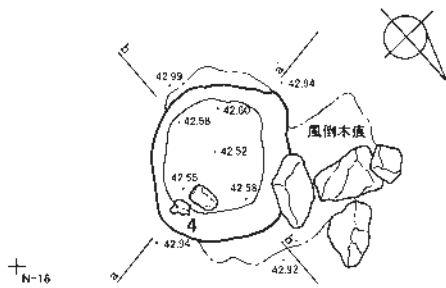
**規模：**1.48/1.28×1.22/1.12×0.12m

P-83

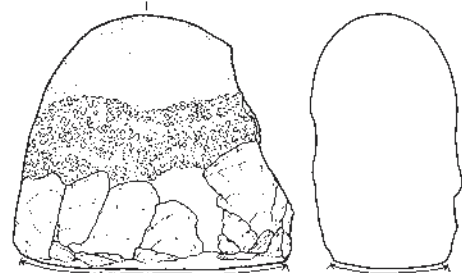


NP-83						
層名	土色1	土色2	土質	粒径	砂含量	その他
1	黒褐色土	10YR3/2	壤土	細	砂	粘土粒の割合の2% 混じり、小礫15% 混じり

P-87



NP-87						
風倒木によって土層が擾乱されており風倒木としての役割が覆い土層の粒径が異なる部分						
層名	土色1	土色2	土質	粒径	砂含量	その他
1	黒褐色土	10YR3/2	壤土	細	砂	小礫粒の割合の13% 小礫平均粒径2%



図III-67 P-83、P-87と遺物

**確認・調査：**IV層中位でより黒色味の強い土の落ち込みとして確認した。覆土はIV層を主体とした自然堆積である。掘り込み面は検出面より上位である。平面形は不整な楕円形で、壙底はほぼ平坦である。壁は壙底部から開口部に向かってゆるやかに立ち上がり、皿状を呈する。遺物は覆土中から土器が1点出土している。

**時期：**周辺の遺物から縄文時代中期前半もしくは後期前葉の遺構と推測される。 (大泰司)

**P-94 (図Ⅲ-68、図版25)**

**位置・立地：**I-15・16 標高44.0~44.5m付近の平坦面。

**規模：**0.92/0.72×0.88/0.78×0.12m

**確認・調査：**IV層中位でより黒色味の強い土の落ち込みとして確認した。覆土はIV層を主体とした、自然堆積である。掘り込み面は検出面より上位である。平面形は円形で、壙底はほぼ平坦である。壁は壙底部から開口部に向かってゆるやかに立ち上がり、皿状を呈する。遺物は覆土中から礫が1点出土している。

**時期：**周辺の遺物から縄文時代中期前半もしくは後期前葉の遺構と推測される。 (大泰司)

**P-95 (図Ⅲ-68、図版26・69)**

**位置・立地：**I・J-15 標高43.5~44m付近の平坦面。

**規模：**1.66/1.88×1.60/1.64×0.50m

**確認・調査：**V層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。覆土は上部についてはIV層主体の自然堆積であり、IV層とV層が混合した埋め戻し土である。掘り込み面は検出面より上位である。平面形は円形で、壙底はほぼ平坦である。壁はオーバーハングしている。遺物は覆土中位からIV群a類土器が散点的に出土している。

**時期：**遺構出土遺物および、周囲の遺物出土状況から後期前葉の遺構の可能性はある。

**掲載遺物 土器：**1はIV群a類土器である。覆土5層のものと周辺のI~K-15区のものに接合した。LR縄文を横方向に施す。折り返し口縁の継ぎ目が明瞭だが、場所によって継ぎ目の部分を指でなぞる。口唇部は1本の粘土紐を貼付して整え、平坦な面をとる。内面はナデ調整であるが、輪積痕、成形時の指頭圧痕が明瞭である。器壁は表面のみ橙色で、堅くしまる。 (大泰司)

**P-96 (図Ⅲ-68、図版26)**

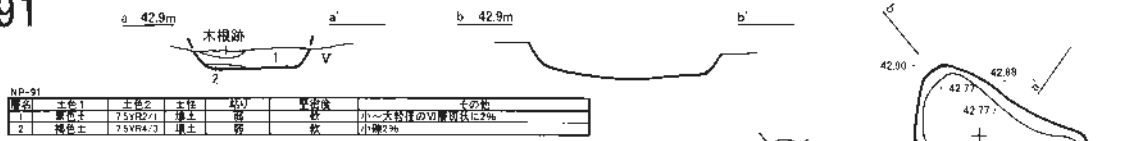
**位置・立地：**I・J-15・16 標高44~44.5m付近の平坦面。

**規模：**0.68/0.52×0.66/0.58×0.10m

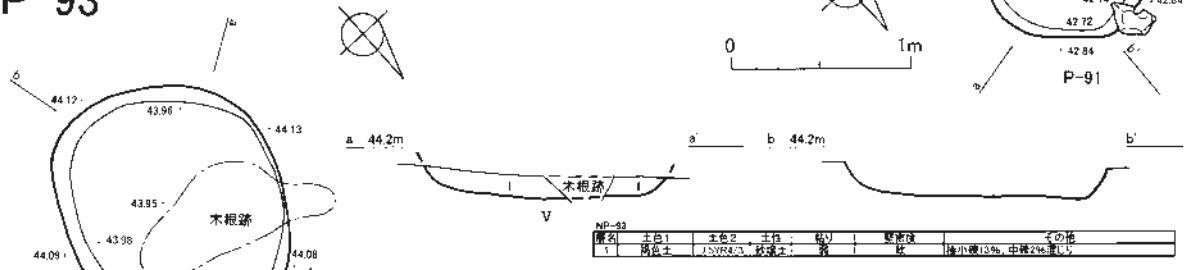
**確認・調査：**Ko-gの堆積層上面で灰黄褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はV層を主体とした層で、自然堆積である。掘り込み面は検出面より上位である。平面形は不整な円形で、壙底はほぼ平坦である。壁は壙底部からゆるく開きながら立ち上がり、皿状を呈する。遺物は出土していない。

**時期：**周辺の遺物から縄文時代中期前半もしくは後期前葉の遺構と推測される。 (大泰司)

P-91



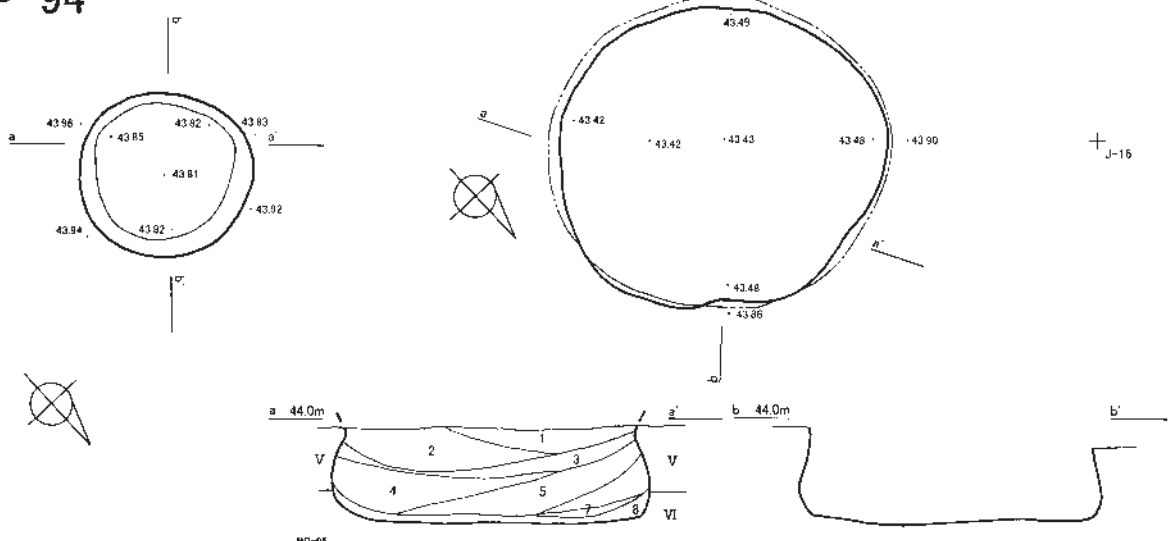
P-93



P-95



P-94



P-96

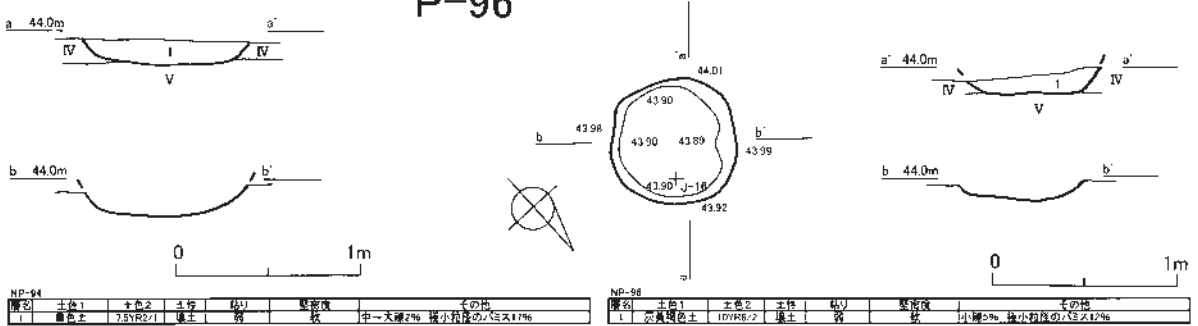


図 III - 68 P - 91 ・ 93 ・ 94、 P - 95 と 遺 物、 P - 96

### 3. 焼土

焼土は後期前葉のものと考えられる石組炉がF-10・11・25・28・29・36である。類似するものとして石組炉を思わせる立石を持つF-37がある。F-28と29は規模が比較的大型なもので形状も類似する。F-28は石組炉を挟んで立石と埋甕が検出された。F-32は焼成面からIV群a類土器がまとまって出土し、当期のものとする。他のものについては時期決定の根拠を見つけにくく縄文時代前期後半～後期前葉の時期のものとして周囲の遺物の出土状況などから決定したものがほとんどである。(大泰司)

#### F-1 (図Ⅲ-69)

**位置・立地：**M-9 標高42m付近、H-15の落ち込み。

**規模：**0.53×0.31×0.06m

**確認・調査：**IV層上面で確認。H-15の落ち込みにある焼土。上面に骨片が散見された。平面形は不整形である。遺物は出土していない。

**時期：**確認層位から縄文時代後期前葉のものと思われる。(中山)

#### F-2 (図Ⅲ-69)

**位置・立地：**K-13 標高44m付近の平坦面。

**規模：**0.65×0.46×0.12m

**確認・調査：**V層上面で確認。平面形は不整形である。遺物は出土していない。

**時期：**確認層位から縄文時代後期前葉のものと思われる。(中山)

#### F-3 (図Ⅲ-69)

**位置・立地：**L-10 標高42.3mの平坦面。周囲に風倒木痕、草木痕多い。

**規模：**0.98×0.48×0.14m

**確認・調査：**V層上面を精査中、黄橙砂質土と明赤褐砂質土の斑状のまとまりが検出された。周囲に風倒木痕が多く見られ、その影響を受けているため輪郭が不明瞭である。骨片の混入が確認された。長軸北側において礫が1点出土した。

**時期：**縄文時代前期後半～後期前葉の可能性がある。(影浦)

#### F-4 (図Ⅲ-69)

**位置・立地：**O-9 標高41m付近の平坦面。

**規模：**0.55×0.34×0.07m

**確認・調査：**V層面で確認。平面形は角の丸い台形。遺物は出土していない。

**時期：**確認層位から縄文時代後期前葉のものと思われる。(中山)

#### F-5 (図Ⅲ-69)

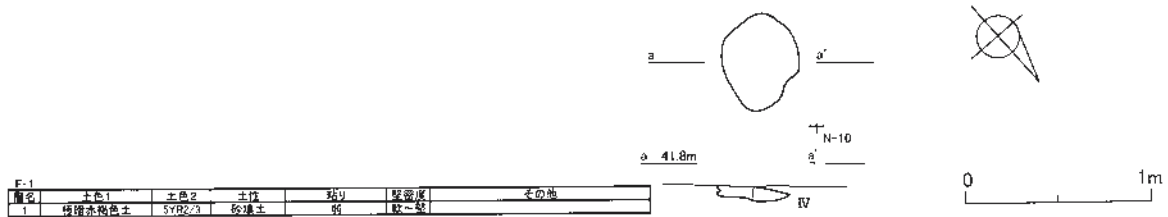
**位置・立地：**P-9・10 標高41m付近の平坦面。

**規模：**0.36×0.19×0.06m

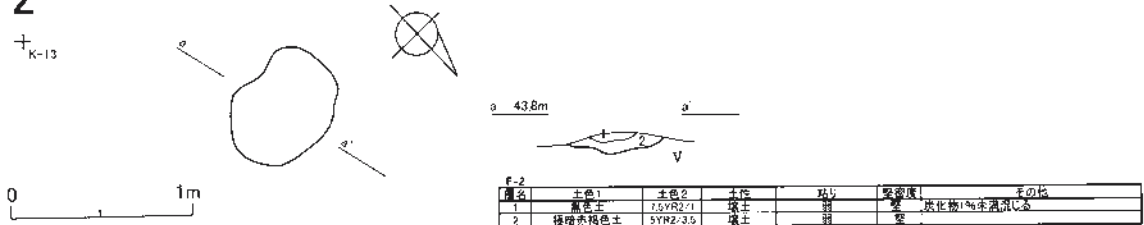
**確認・調査：**V層面で確認。平面形は不整形である。遺物は出土していない。

**時期：**確認層位から縄文時代後期前葉のものと思われる。(中山)

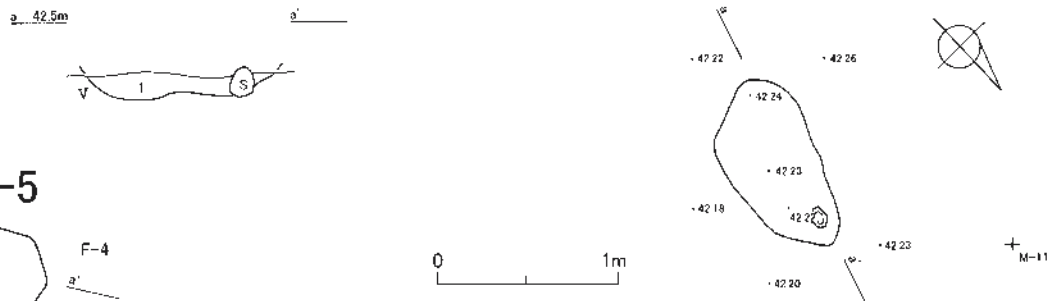
F-1



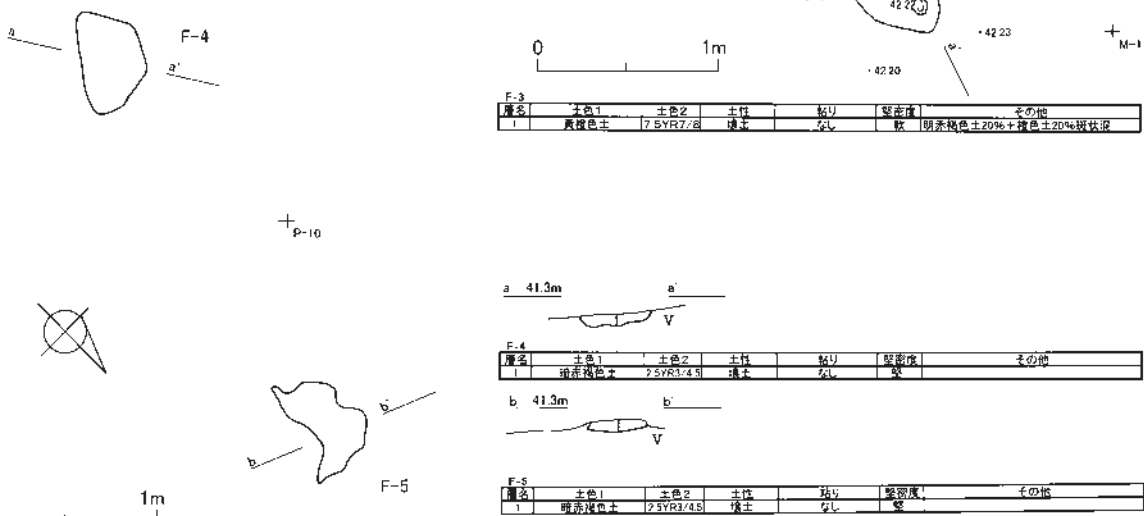
F-2



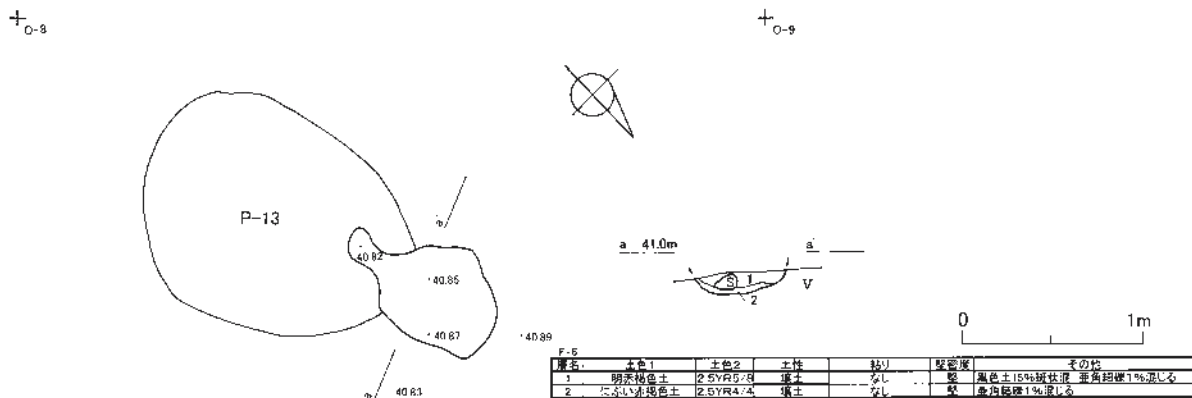
F-3



F-4 F-5



F-6



図III-69 F-1・2・3・4・5・6



F-6 (図Ⅲ-69)

位置・立地：O-8 標高40.7~40.8mの平坦面。

規模：0.92×0.56×0.12m

確認・調査：V層上面を精査中、P-13の上面で検出した。覆土中から礫が1点出土した。

時期：重複するP-13が縄文時代中期中葉の遺構と考えられ、その埋め戻しの覆土に焼土が及んでいることから縄文時代中期中葉の可能性が強い。P-13埋め戻し直後に焚かれた可能性もある。(影浦)

F-7 (図Ⅲ-70)

位置・立地：N-9 標高41.3mの平坦面。

規模：0.82×0.62×0.10m

確認・調査：H-15の覆土掘り下げ中に検出した。焼土掘り上げ後、下からP-44が検出された。H-15とP-44の新旧関係は明確にはつかめなかったが、H-15の廃絶後に、その凹みを利用した焼土である。

時期：縄文時代中期中葉と考えられる。(影浦)

F-8 (図Ⅲ-70)

位置・立地：L-9 標高41.7~41.9mの平坦面。

規模：0.96×0.43×0.10m

確認・調査：IV層掘り下げ中にF-9と並んでV層上面で確認した。

時期：縄文時代前期後半~後期前葉の可能性がある。(影浦)

F-9 (図Ⅲ-70)

位置・立地：L-8・9 調査区南側の沢地形跡の肩付近 標高41.5~41.8mの平坦面部。

規模：(0.60)×0.40×0.15m

確認・調査：IV層(黒色土)掘り下げ中に明赤褐色土の斑状分布(覆土1)が見られた。微細な骨片も確認されたため、半割したところ層厚10cm程度の明赤褐色土(覆土2)を検出した。骨片の混入量は上面(覆土1)に多く、覆土2になると少ない。

時期：縄文時代前期後半~後期前葉の可能性がある。(影浦)

フローテーション成果：焼土部分を採取し、フローテーション法にて処理した。動物遺存体についてはカエル類、種不明の獣類が焼骨片として検出された。他の遺構と比べて、獣類が多く出土している(詳細はVI章を参照)。(大泰司)

F-10 (図Ⅲ-70、図版26・69)

位置・立地：M-11 標高42m付近の平坦面。

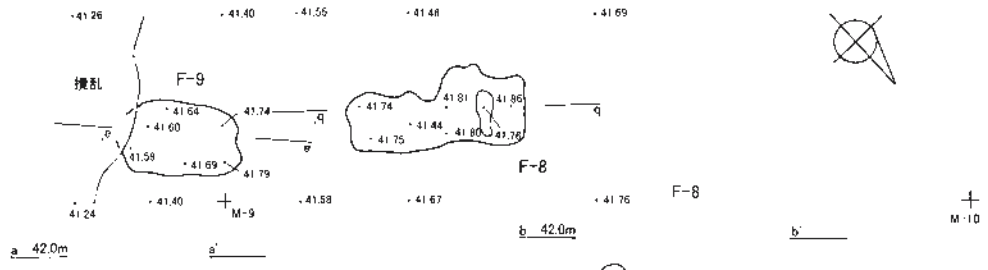
規模：0.67×0.60×0.09m

確認・調査：V層上面で平たい石が半円形に廻っているのを確認した。石は風防であろうが、焼土面は石より外にも広がっている。覆土から土器2点、石器2点と礫が4点出土した。石組炉の炉石は台石1点と礫4点から成る。

時期：確認面と周辺と同様の遺構から縄文時代後期前葉のものと思われる。(中山)

掲載遺物 石器：1は台石で、この焼土に伴う炉石のうち一番大型なものである。覆土からの出土で

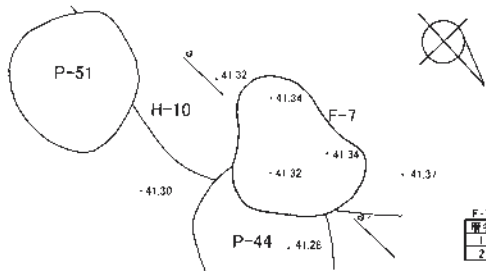
F-8  
F-9



層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅硬度	その他
1	明赤褐色土	5YR5/8	壤土	なし	軟	黒色土50%混状混 垂角細礫1%混じる

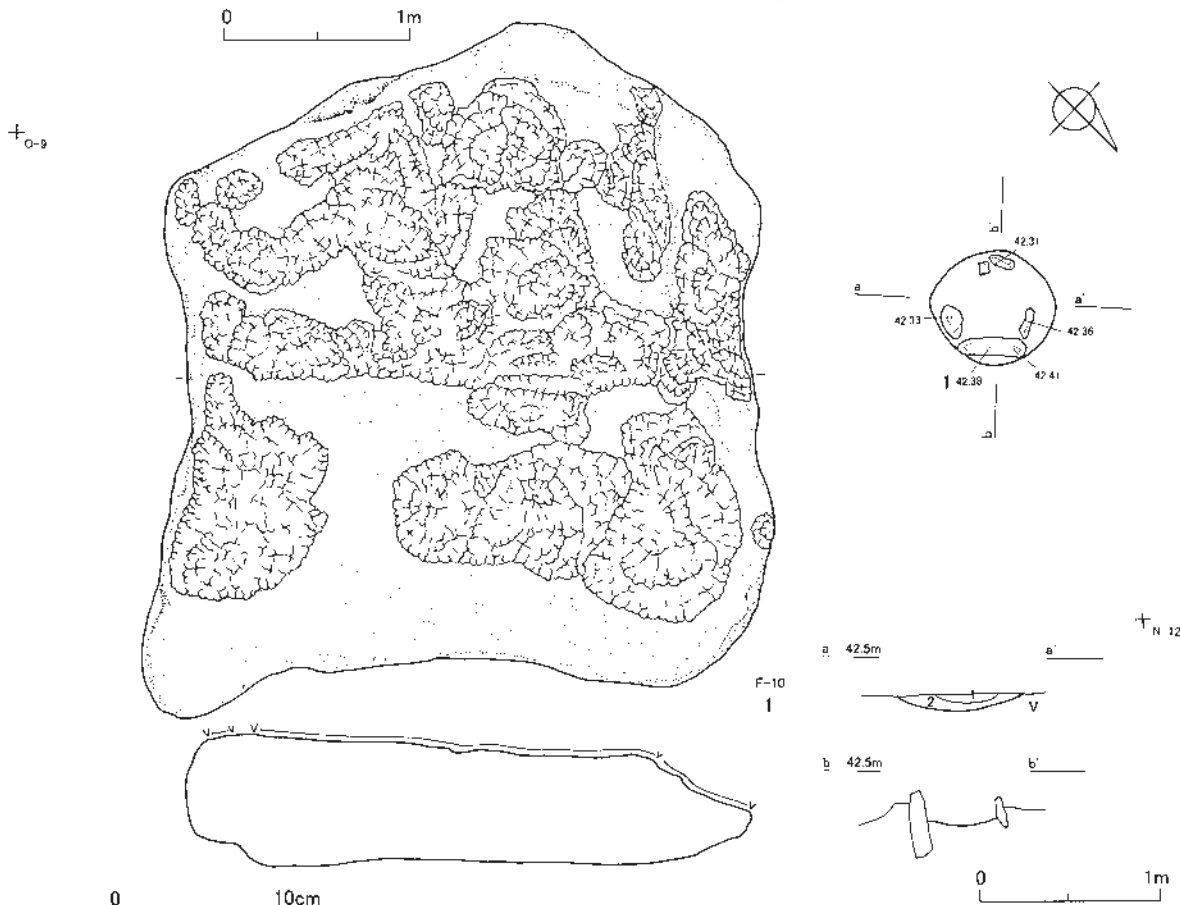
層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅硬度	その他
1	黒色土	5YR1.7/1	壤土	なし	軟	明赤褐色土20%混状混 細砂礫片少量混入 垂角細礫1%混じる
2	明赤褐色土	5YR5/8	壤土	なし	軟	黒色土10%混状混 凝結骨片少量混入 垂角細礫1%混じる

F-7



層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅硬度	その他
1	黒色土	5YR1.7/1	壤土	なし	軟	黒色土20%混状混 黒褐色土10%混状混 垂角細礫15%混じる
2	黒褐色土	7.5YR3/1	砂壤土	なし	軟	棕色土5%混状混

F-10

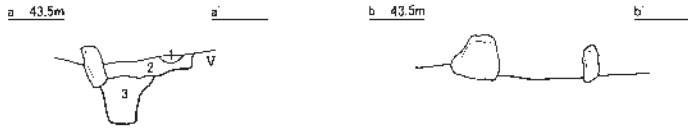


層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅硬度	その他
1	黒色土	10YR1.7/1	埴土	弱	硬	
2	凝結赤褐色土	5YR2/3.5	埴土	弱	硬	

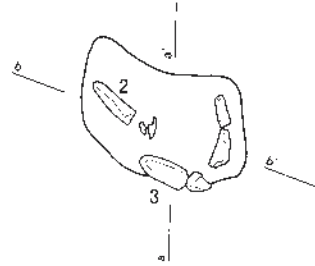
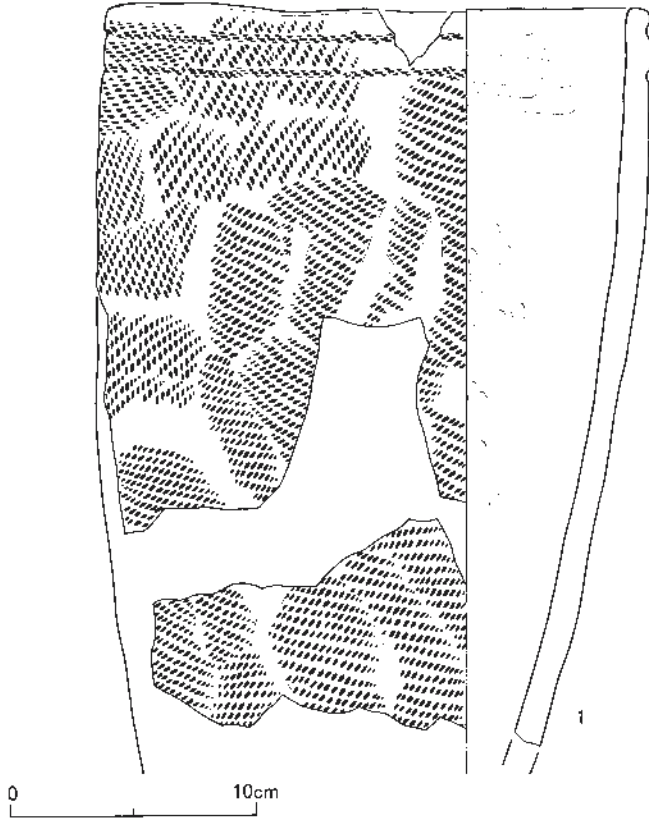
図III-70 F-7・8・9、F-10と遺物

# F-11

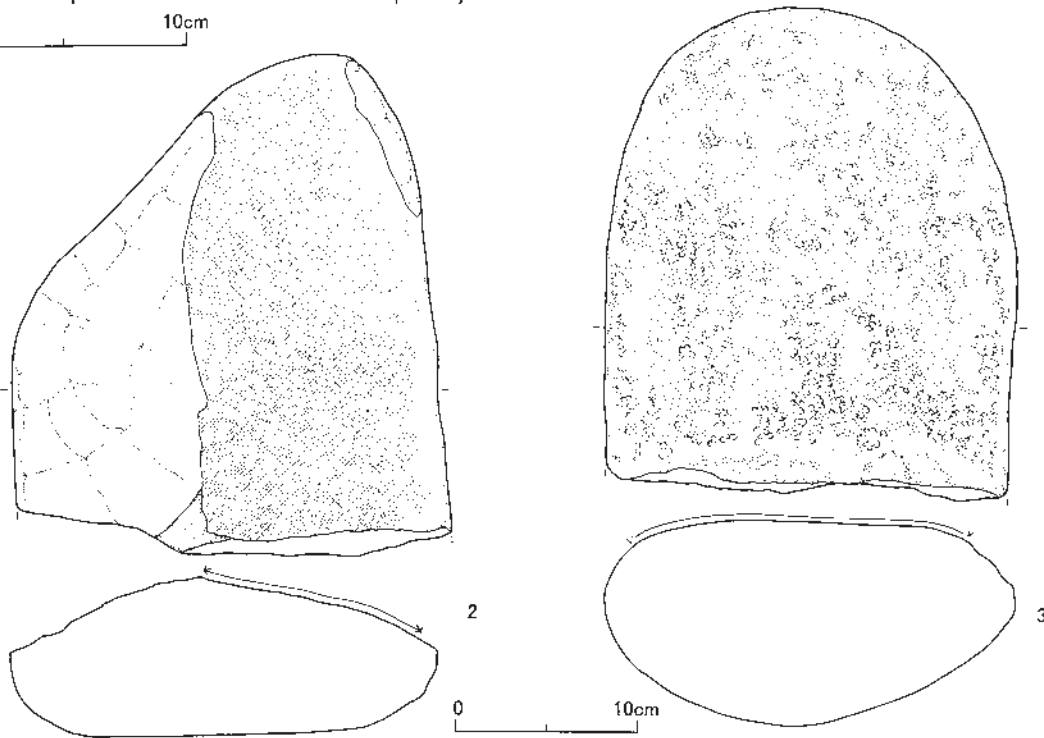
+L-14



F-11						
階名	土色1	土色2	土質	織り	築造層	その他
1	暗赤褐色土	5YR3/4	砂壤土	なし	壁	
2	黒色土	7.5YR2/1	壤土	弱	壁	
3	黒褐色土	10YR2/2	砂壤土	弱	壁-敷	下のピットの本



+M-14



図III-71 F-11と遺物

ある。安山岩の不整で厚みのある板状礫を用いる。両面に顕著な敲打痕ないしは被熱による剥落部分を持つ。図示した正面については、明らかな敲打痕もある。炉の側を向いている面で埋没していない部分は被熱によって赤色化している。 (大泰司)

#### F-11 (図III-71、図版26・69)

**位置・立地**：L-13 標高43m付近の平坦面。

**規模**：0.95×0.57×0.09m

**確認・調査**：IV層下面で10～20cmほどの平たい石が円形に廻っているのを確認。小ピットの埋まった窪みに構築された石組炉である。覆土の赤色化は弱い。遺物は覆土から土器5点出土している。石組炉の炉石は石皿と台石が1点ずつ、礫3点から成る。

**時期**：出土遺物と、周辺の同様な遺構から縄文時代後期前葉のものと思われる。 (中山)

**掲載遺物 土器**：1はIV群a類である。石組炉の覆土のものと遺構周囲の調査区からのものが接合した。特にL13d区にまとまった遺物を主体とする。LR縄文施文後、沈線文を施し、口縁部をおおよそ無文にしてLR縄線を施す。そして口唇部は一本の粘土紐で整えて平坦面をとる。内面はミガキ調整で、口縁部は横方向胴部は縦方向である。

**石器**：2は石皿で3は台石に分類した。覆土からの出土である。いずれも安山岩を素材とする。2は不整で厚みのある礫を用いる。両面に顕著な擦痕を持つ。一側縁に整形なのか明瞭な敲打痕がある。炉の側を向いている面で埋没していない部分は被熱によって赤色化している。3は厚みのある楕円礫を用いる。平坦な側の面に擦痕と敲打痕を持つ。炉の側を向いている面で埋没していない部分は被熱によって赤色化している。割面の縁辺およびに割面に敲打痕がある。 (大泰司)

#### F-12 (図III-72)

**位置・立地**：O-10 標高41.4～41.5mの平坦面。

**規模**：0.58×0.36×0.10m

**確認・調査**：IV層を掘り下げ中、検出した。覆土1は明赤褐色土に、黒褐色土やオリーブ褐色土が斑状に混じる。粘性は下位ほど比較的強くなるが、しまりのない土層によって構成される。

**時期**：縄文時代前期後半～後期前葉の可能性がある。 (影浦)

#### F-13 (図III-72)

**位置・立地**：O-10 標高41.4m前後の平坦面。

**規模**：0.5×0.32×0.08m

**確認・調査**：H-6とH-11を一つの住居と考え平面形の範囲確認を行っていた際に、VI層上面において検出した。

**時期**：周辺の出土遺物から縄文時代中期中葉ないし後期前葉の間の遺構と考えられる。 (影浦)

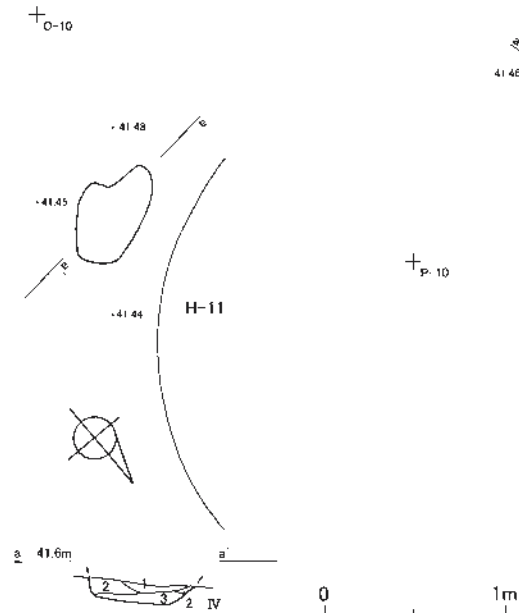
#### F-14 (図III-72)

**位置・立地**：P-10 標高41.5m前後の平坦面。

**規模**：0.74×0.66×0.09m

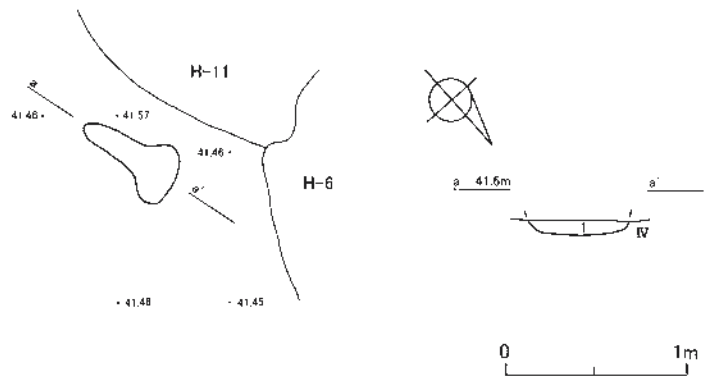
**確認・調査**：H-6の範囲確認でV層上面を精査中に検出した。上面が一部削れてしまったが、層厚は10cm前後である。

### F-12



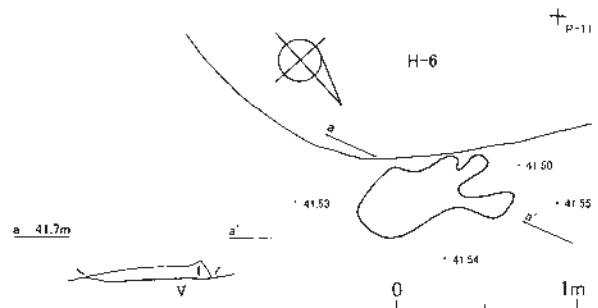
層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	明木褐色土	8YR17:1	砂壤土	なし	軟	黒褐色土30%混状混 オリーブ褐色土25%混状混 黒色土10%混状混
2	褐色土	4YR6/8	壤土	弱	軟	
3	に少し赤褐色土	5YR4:4	壤土	強	軟	

### F-13



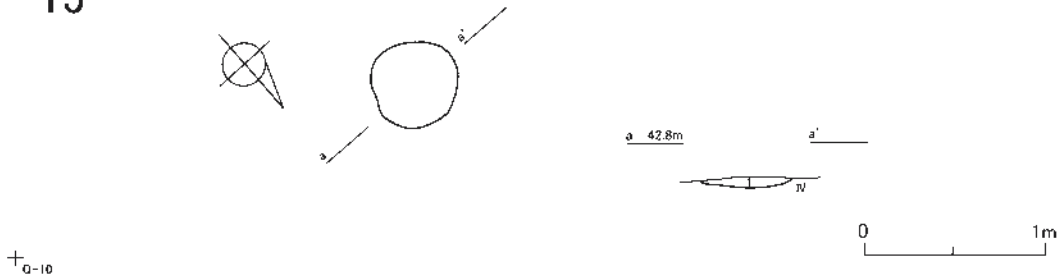
層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	褐色土	5YR6:8	壤土	なし	軟	黒褐色土20%混状混

### F-14



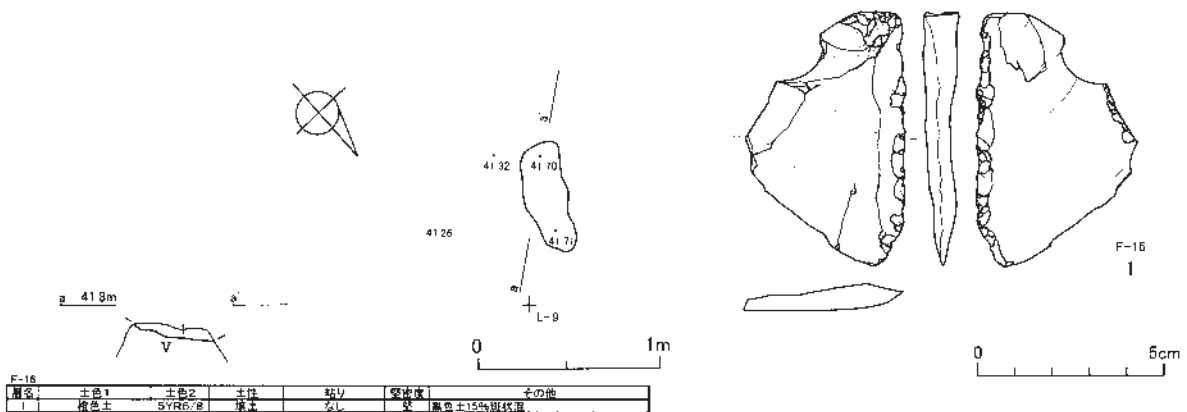
層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	褐色土	5YR6:8	壤土	なし	しよろ	黒褐色土20%混状混

### F-15



層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	に少し赤褐色土	5YR4:4	砂壤土	弱	軟	

### F-16



層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	褐色土	5YR6:8	壤土	なし	軟	黒色土15%混状混

図III-72 F-12・13・14・15、F-16と遺物

**時期：**周辺の出土遺物から縄文時代中期中葉ないし後期前葉のいずれかの時期のものと考えられる。  
(影浦)

**F-15 (図Ⅲ-72)**

**位置・立地：**P-10 標高43m付近の平坦面。

**規模：**0.48×0.46×0.05m

**確認・調査：**IV層上面で確認。平面形は円形。遺物は出土していない。

**時期：**確認層位から周囲の焼土よりは新しい、縄文時代後期前葉のものと思われる。(中山)

**F-16 (図Ⅲ-72、図版70)**

**位置・立地：**K-8・9 調査区南側の沢地形跡の肩部分 標高41.7mの窪地。

**規模：**0.58×0.24×0.06m

**確認・調査：**K-8区からL-8区にかけての沢跡を検出中、沢跡の黒い落ち込み直上で検出した。沢地形の覆土内からF-17~19の焼土群が検出されたが、これは沢が完全に埋没した後で形成された焼土である。

**時期：**隣接するF-17~19の焼土群より新しいと考えられることから、縄文時代後期前葉以降である。  
(影浦)

**掲載遺物 石器：**1はスクレイパーで、覆土からの出土である。頁岩製である。一側縁に明瞭な調整、対となる側面に浅い調整を施す。  
(大泰司)

**F-17 (図Ⅲ-73、図版27)**

**位置・立地：**K-8 調査区南側の沢地形跡 標高41.5m前後の窪地。

**規模：**1.30×0.80×0.16m

**確認・調査：**K-8区の沢地形を掘り下げ中、F-18・19とほぼ同時に検出した。沢跡の窪みを利用した焼土と考えられる。層厚は16cmと厚い。輪郭が不整形であるが、水流等で一部が削られている可能性が考えられる。

**遺物出土状況：**沢地形の上流方向に被熱礫が3個見られるが、この焼土との関係は不明である。

**時期：**この焼土は沢地形の埋没過程で、その窪みを利用したものであるが、上面は標高41.50m前後である。沢地形の下位(標高41.20m付近)で風倒木痕の窪みに中期中葉の土器が1個体投げ入れられてあった。沢跡の周辺で出土している土器が縄文時代中期中葉と縄文時代後期前葉であることから、この焼土の時期は縄文時代後期前葉と考えられる。  
(影浦)

**F-18 (図Ⅲ-73、図版27)**

**位置・立地：**K-8 調査区南側の沢地形跡 標高41.4m前後の窪地。

**規模：**0.77×0.44×0.07m

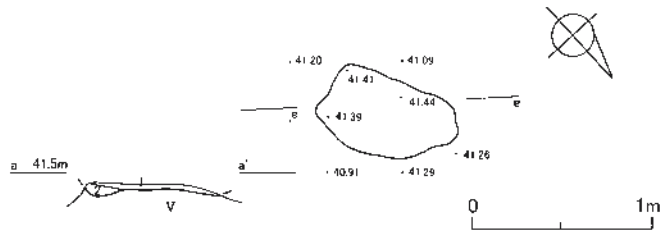
**確認・調査：**K-8区の沢地形を掘り下げ中、F-17・19とほぼ同時に検出した。沢跡の窪みを利用した焼土と考えられる。半割したところ厚さは、厚いところで8cm、薄いところで2cmほどと不均一であった。成因として水の流れの影響で一部が削平された要素が考えられる。

**時期：**検出面の標高から隣接するF-17・19とほぼ同時期。縄文時代後期前葉と考えられる。

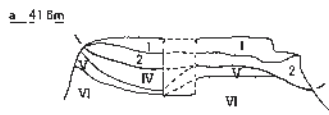
(影浦)

### F-18

+<sub>K-8</sub>



層名	土色1	土色2	土質	粘り	緊密度	その他
1	褐色土	5YR5/8	壤土	なし	堅	黒色土20%混状混 垂直細~中粒10%混
2	棕色土	5YR5/8	壤土	なし	軟	

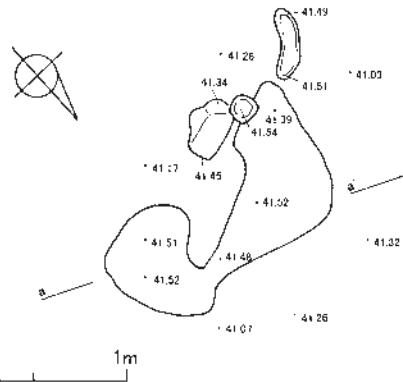


F-17

層名	土色1	土色2	土質	粘り	緊密度	その他
1	黒色土	N1 5/0	壤土	中	堅	棕色土20%混状混 動物骨片混入 垂直細~中粒10%混
2	棕色土	5YR5/8	壤土	なし	堅	動物骨片混入 垂直細~中粒10%混

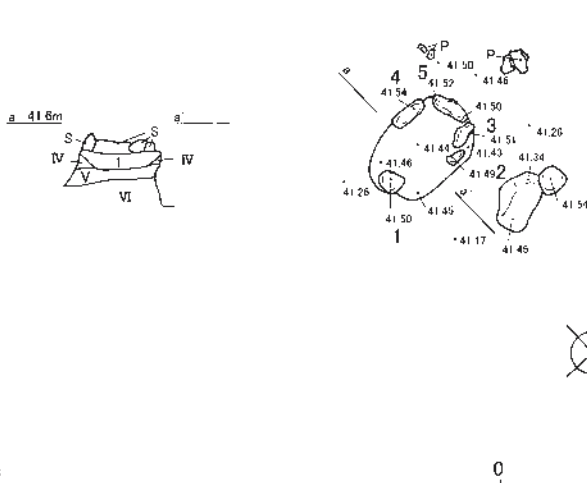
### F-17

+<sub>K-9</sub>



+<sub>L-8</sub>

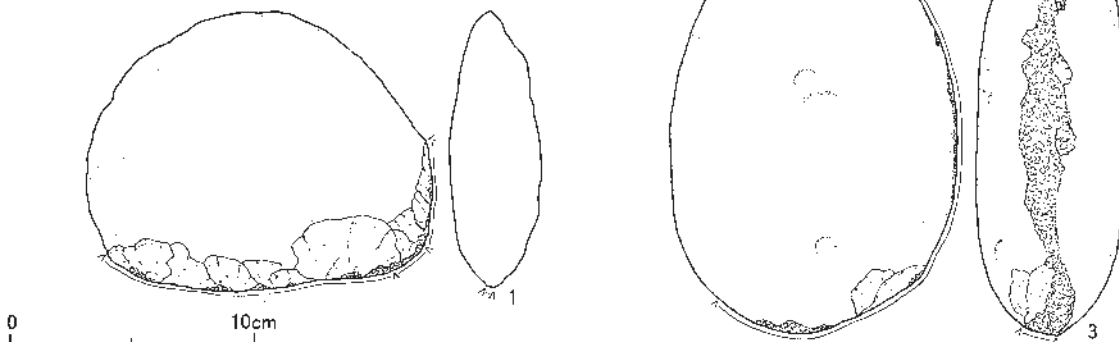
### F-19



+<sub>L-8</sub>

+<sub>L-9</sub>

層名	土色1	土色2	土質	粘り	緊密度	その他
1	黒色土	N2 5/0	壤土	強	堅	黄棕色土10%混状混 動物骨片少量混入



図Ⅲ-73 F-17・18、F-19と遺物(1)

## F-19 (図III-73、図版26・27・70)

**位置・立地：**K-8 調査区南側の沢地形跡 標高41.4~41.5mの窪地。

**規模：**0.62×0.40×0.08m

**確認・調査：**K-8区の沢地形を掘り下げ中、F-17・18とほぼ同時に検出した石組炉である。石組みはもともと全周していた可能性もある。あるいは沢地形の埋没過程において、窪み利用の住居が構築された可能性も考えられる。

**時期：**この焼土は沢地形の埋没過程で、落ち込みを利用したものであるが、上面は標高41.50m付近である。沢地形の下位（標高41.20m付近）で風倒木痕の窪みに中期中葉の土器を1個体検出した（包含層掲載遺物図IV-2-4）。沢跡の周辺で出土している土器が縄文時代中期中葉と縄文時代後期前葉であることから、この焼土の時期は縄文時代後期前葉と考えられる。（影浦）

**掲載遺物 石器：**1~5は炉石であった。いずれも安山岩を素材とする。1は偏平打製石器である。楕円礫の割礫について一側縁に刃部様の機能部を持つほぼ全周に微妙な打ち欠きがめぐる。2~5はたたき石ないしはそれに類するものである。2は赤色化した一側縁側は欠損している。楕円礫の平らな表裏面に対応する敲打痕がある。3は楕円礫の一側縁と長軸両端に敲打痕がある。4は敲打痕のある礫である。大型のたたき石とでもいうべきものである。F-25の炉石と接合した。いずれもそれぞれ炉石であった。楕円礫の一側縁には顕著な敲打痕、対となる一側縁には打ち欠きがある。5は断面三角形をした柱状の礫の三側縁に敲打痕がある。（大泰司）

## F-20 (図III-74)

**位置・立地：**N-10 標高41.5~42m付近の平坦面。

**規模：**0.77×0.33×0.06m

**確認・調査：**V層上面の精査で暗赤褐色の広がりを検出した。焼土を想定し半裁したところ厚さ6cmでV層が焼成により変色した断面を確認し焼土と判断した。焼土が形成されたのは検出面より上であると考えられる。遺物は出土していない。

**時期：**周辺で検出した遺構、遺物から縄文時代前期~後期前葉の焼土と判断する。（袖岡）

## F-21 (図III-74)

**位置・立地：**N-10 標高41.5~42m付近の平坦面。

**規模：**0.66×0.44×0.06m

**確認・調査：**V層上面の精査で暗赤褐色の広がりを検出した。焼土を想定し半裁したところ厚さ6cmでV層が焼成により変色した断面を確認し焼土と判断した。焼土が形成されたのは検出面より上であると考えられる。遺物は出土していない。

**時期：**周辺で検出した遺構、遺物から縄文時代前期~後期前葉の焼土と判断する。（袖岡）

## F-22 (図III-75)

**位置・立地：**N-11 標高42m付近の平坦面。

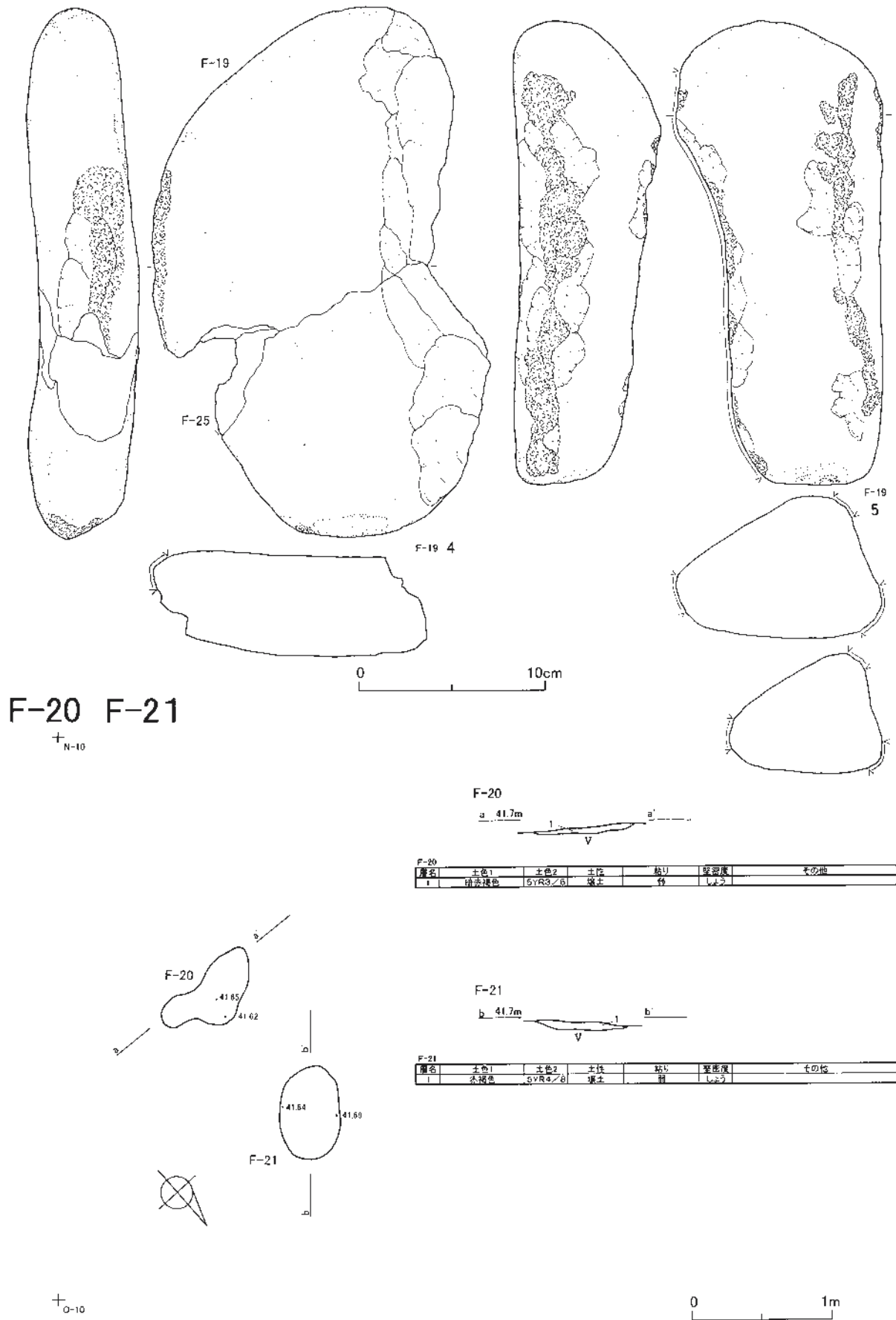
**規模：**0.42×0.28×0.08m

**確認・調査：**IV層上面で確認。平面形は不整形。覆土から土器が1点出土した。

**時期：**遺物は縄文中期のものだが、確認面の同様の遺構から縄文時代後期前葉の可能性が高い。

（中山）





図Ⅲ-74 F-19の遺物(2)、F-20・21

## F-23 (図III-75)

位置・立地：M-9 標高41.5~42.0m付近の平坦面。

規模：0.52×0.48×0.04m

確認・調査：V層上面で橙色土の集中として確認した。V層が焼けたものと判断した。平面形はほぼ円形で、断面は凹レンズ状である。焼成面は検出面とほぼ同一である。中央部分に木の根による攪乱が入り込む。遺物は焼土中から、Ⅲ群a類とⅣ群a類の土器が合わせて8点出土した。

時期：遺物の出土状況からは時期は確定できない。周辺の遺物から縄文時代中期前半もしくは後期前葉の遺構と推測される。(大泰司)

## F-24 (図III-75)

位置・立地：M-8 標高41.0~41.5m付近の平坦面に位置する沢地形。P-43の凹みを利用。

規模：0.52×0.48×0.04m

確認・調査：V層上面でⅣ層を主体とする黒褐色土の落ち込みを検出した。土壌を想定して調査中、橙色土の集中として確認した。土壌P-43覆土が焼けたものと判断した。平面形はほぼ楕円形で、離れて西側に小さな焼土を伴う。断面は凸レンズ状である。焼成面は検出面とほぼ同一である。遺物は伴わない。

時期：P-43が縄文時代中期前半の土壌であるためそれ以降の遺構である。周辺の遺物から縄文時代中期前半もしくは後期前葉の遺構と推測される。(大泰司)

## F-25 (図III-75、図版27・71)

位置・立地：J-11 標高43m付近の平坦面。

規模：0.59/0.55×0.45/0.38×0.15m

確認・調査：V層上面で円形に廻った石組を確認。5~15cmの礫を使用している。覆土1層に炭化物が見られる他は、覆土に焼けた痕跡は見出せない。遺物は覆土から土器10点、石器3点、礫8点が出土している。石器と礫はいずれも石組炉の炉石である。

時期：出土遺物から縄文時代後期前葉のものと思われる。(中山)

掲載遺物 石器：1・2はいずれも炉石であった。1は砥石で濁川火砕流起源の安山岩製である。板状の礫の両面を砥面とする。2はたたき石で安山岩の長楕円礫の両端に敲打および打ち欠き調整を施す。偏平打製石器未成品の可能性もある。(大泰司)

## F-26 (図III-76)

位置・立地：L-12 標高44m付近の平坦面。攪乱の上面に位置する。

規模：0.42×0.35×0.05m

確認・調査：Ⅳ層上面の攪乱を精査中に確認。平面形は円形である。遺物は出土していない。

時期：確認層位から縄文時代後期前葉の可能性が高い。(中山)

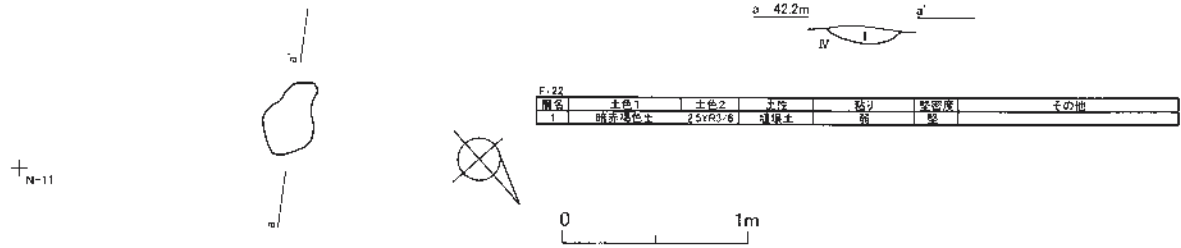
## F-27 (図III-76)

位置・立地：L-12 標高44m付近の平坦面。攪乱の上面に位置する。

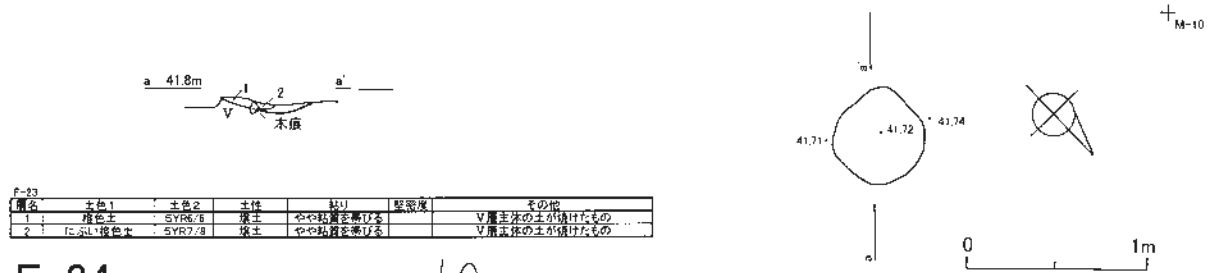
規模：0.84×0.38×0.17m

確認・調査：Ⅳ層上面の攪乱を精査中に確認。F-26と重複しているが間にⅣ層が入り込んでいるの

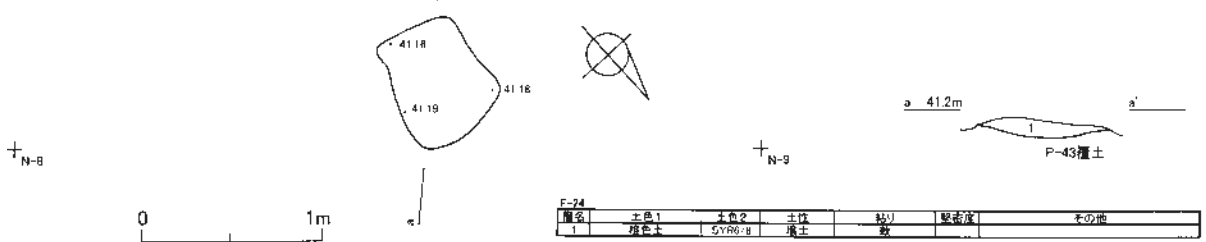
### F-22



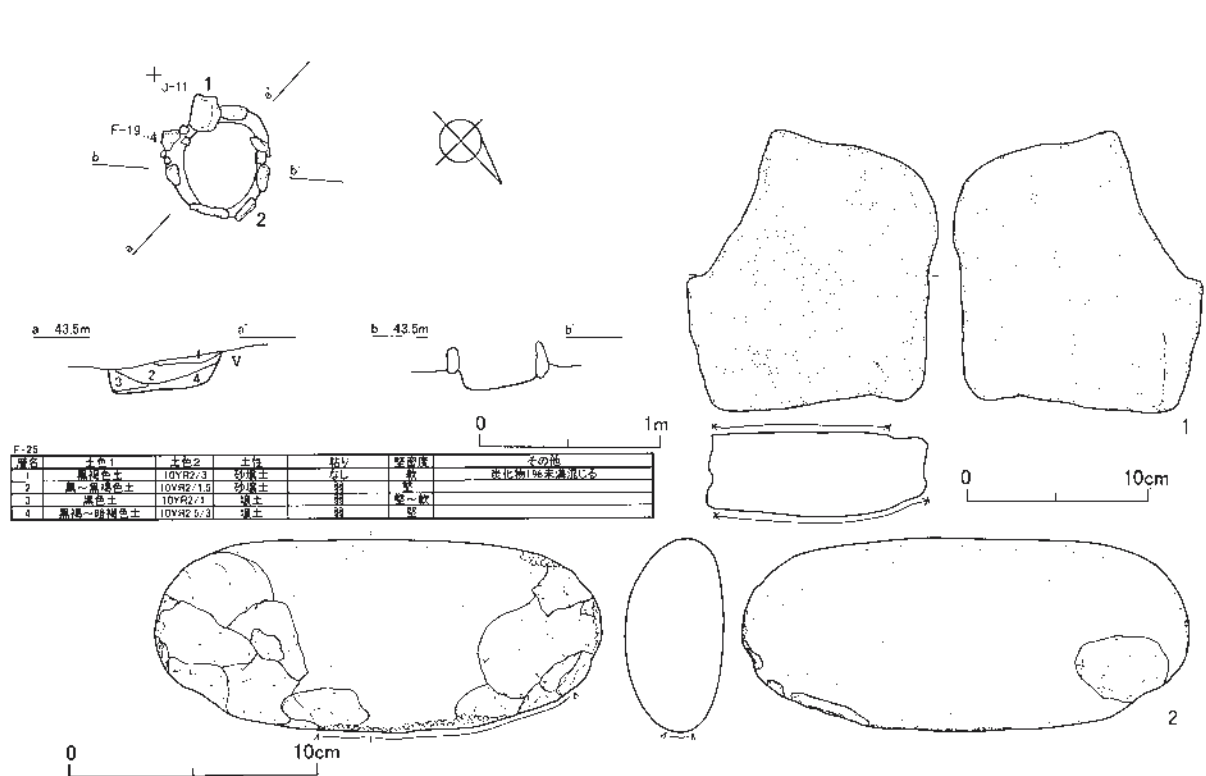
### F-23



### F-24



### F-25



図III-75 F-22・23・24、F-25と遺物

でF-26よりは古い焼土である。平面形は楕円形である。上面には20cmほどの炭化物があった。遺物は覆土より土器7点、礫1点が出土している。

**時期：**遺物と確認層位から縄文時代後期前葉のものと思われる。(中山)

F-28 (図III-77・78、図版27・28・72)

**位置・立地：**P-18 標高41.5~42m付近の平坦面。

**規模：**1.20×0.44×0.18m

**確認・調査：**IV層調査中に方形の石の配列を検出した。石組炉を持つ住居を想定して土層断面観察用の土手を十文字に残して掘り下げたところ、IV層下位で黒褐色土の落ち込みの中に石組が配されていた。覆土はIV層主体の自然堆積である。掘り込み面は検出面と同じである。平面形は不整な楕円形である。土層観察の土手には竪穴住居を想定できる掘り込みは確認出来なかった。また、しまりのある床面も検出できなかったため、単独の石組炉として扱うものとした。石組は方形の北西辺をなす大型礫を初めに埋め込み、その後、南側に向かって連続して埋め込んである。土壌の床面には凹凸があり、壁は墳底部から開口部に向かってゆるやかに立ち上がる。礫を埋め込んだ後に炉として機能した後、自然埋没したものと土層断面から想定される。住居の石組炉に極めて類似した形状でかつ類似する遺構のF-29と検出、調査した日時がほぼ同時であったため、炉を想定して名称を与えたが、視覚的に明瞭な焼土は確認できなかった。ただし石組の礫は顕著に赤色化し、表面が剥落しているため被熱の可能性が高い。石組に対して北側には埋甕を検出した。倒立し、底を打ち欠いた深鉢が埋められていた。埋甕に対して、炉を挟んで反対側には立石を検出した。認知が遅れたため、いずれも検出面は石組炉より下だが、構築の時期は同一と考える。遺物は石組の配されている土壌覆土から散点的に出土している。石組炉の石組は台石3点、石皿1点、礫6点から成る。

**時期：**検出面の遺物出土状況から縄文時代後期前葉、大津式の時期の可能性が高い。また同時性が高いと判断した埋甕についても同一時期である。

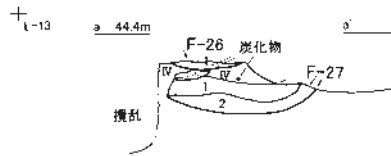
**フローテーション成果：**石組炉の覆土を採取し、フローテーション法にて処理した。動物遺存体については鳥または獣類の破片が焼骨片として1点、検出された。炭化種子はニワトコ属、キハダ属、ミズキ属、他種不明のものが検出された(詳細はVI章を参照)。

**掲載遺物 土器：**いずれもIV群a類大津式である。F-28を挟むように立石と土器が埋設されていた。1はその倒立して、設置された土器である。P18c区出土の遺物は底部付近の胴部であり、遺構と判明する前にあげてしまった一部と思われる。L縄文施文後、ミガキ調整と沈線で磨消し縄文口縁部の無文部分にはより細い施文具で不規則な沈線文を施す。器面は胴部上半、内面について胴部下位に煤が付着する。2はF-28の構築面と判断したものと同じ高さから出土したものである。遺構周辺の調査区出土のものとも接合した。全面をミガキ調整にして無文にした後、沈線文を施す。内面は主に横方向のミガキ調整であり、底面についてもミガキ調整である。

**石器：**3は砥石で、炉とほぼ同じレベルから検出された。砂岩製で両面に幅約5cmの溝が2列連続して並ぶ。石斧の整形を連想させる使用痕である。長方形に折れた形そのままの脇から出土し、調査区P19区の破片が1点接合した。4は頂部に敲打痕を持つ礫で、炉の脇に直立していた立石である。炉を挟んで土器と対になる。覆土3層からの出土である。立石の上部だった場所に敲打痕がある。

5・6は台石で炉石だったものである。いずれも安山岩である。5は板状礫の一平坦面に敲打痕を有する。6は礫の一平坦面に擦痕と敲打痕を有する。凹み部分は磨りによって生じた可能性が高い。被熱によるものか赤色化している。(大泰司)

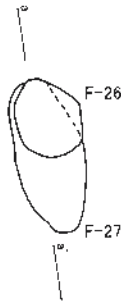
F-26  
F-27



F-26						
層名	土色1	土色2	土性	粘り	炭化物	その他
1	黒褐色土	2.5YR2/4	シルト質壤土	なし	なし	

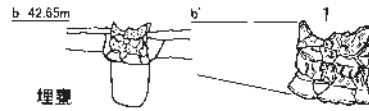
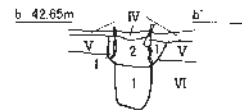
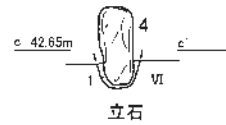
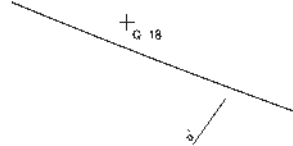
  

F-27						
層名	土色1	土色2	土性	粘り	炭化物	その他
1	暗赤褐色土	2.5YR3/5	シルト質壤土	弱	数	
2	暗赤褐色土	5YR2/3.5	砂壤土	弱	数	

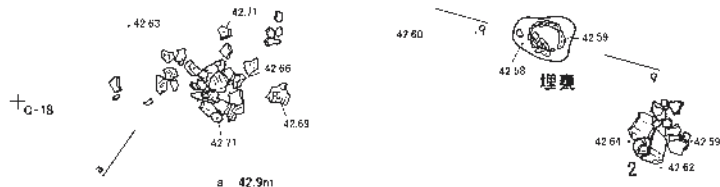
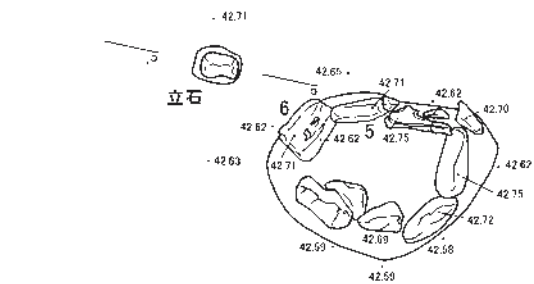


F-28

+P-18

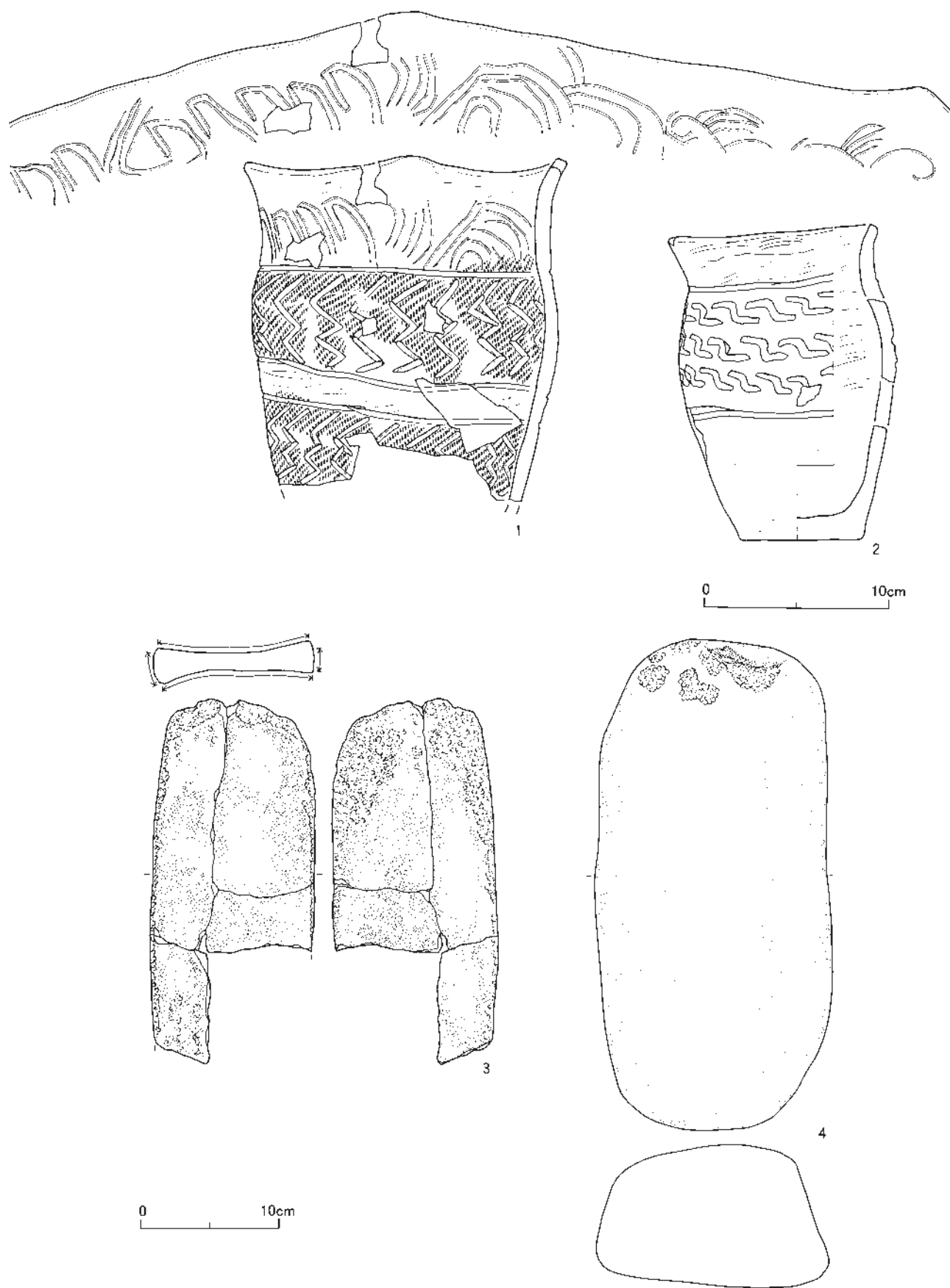


NF-28の埋壘・立石						
層名	土色1	土色2	土性	粘り	炭化物	その他
1	褐色土	10YR5/1	壤土	粘り弱し		ロームブロック中~大粒径で15%混入
2	明黄褐色土	10YR5/3	砂質土	しまりなし		混じりなし

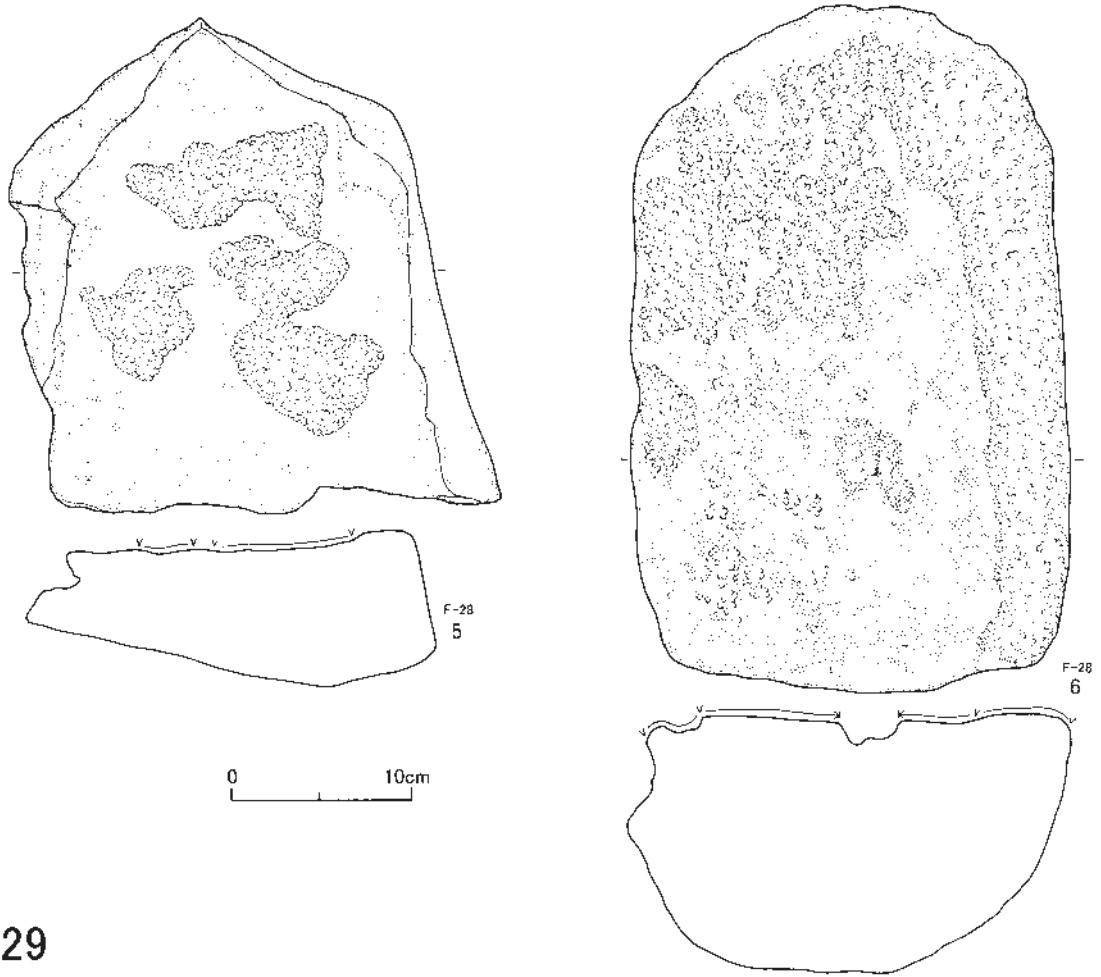


NF-28						
層名	土色1	土色2	土性	粘り	炭化物	その他
1	黒褐色土	10YR2/2	壤土	弱	数	埋壘主体 横小筋様の斑状の炭屑1%混入
2	褐色土	10YR5/1	壤土	弱	数	小~中筋様の炭屑20% 右半壁の土1.0mの中筋様の斑状に厚層土混入
3	褐色土	10YR5/6	壤土	弱	数	小~中筋様の炭屑20% 右半壁の土1.0mの中筋様の斑状に厚層土混入

図 III - 76 F - 26・27・28



図III-77 F-28と遺物(1)



F-29

+J-19

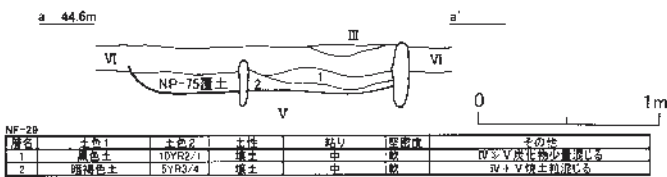
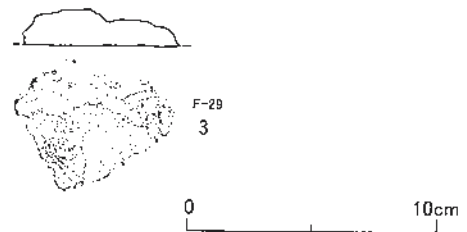
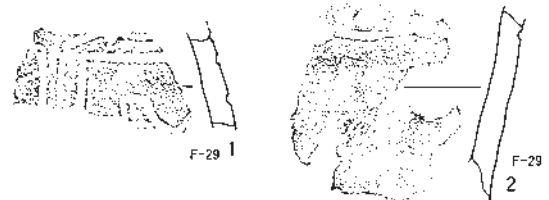
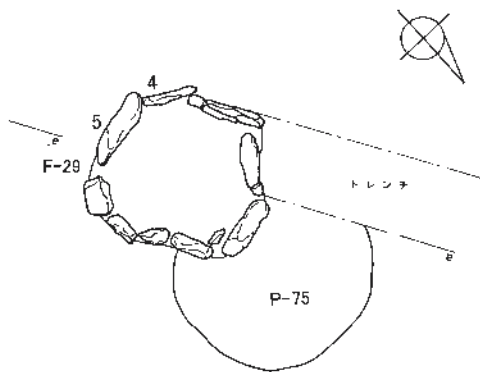
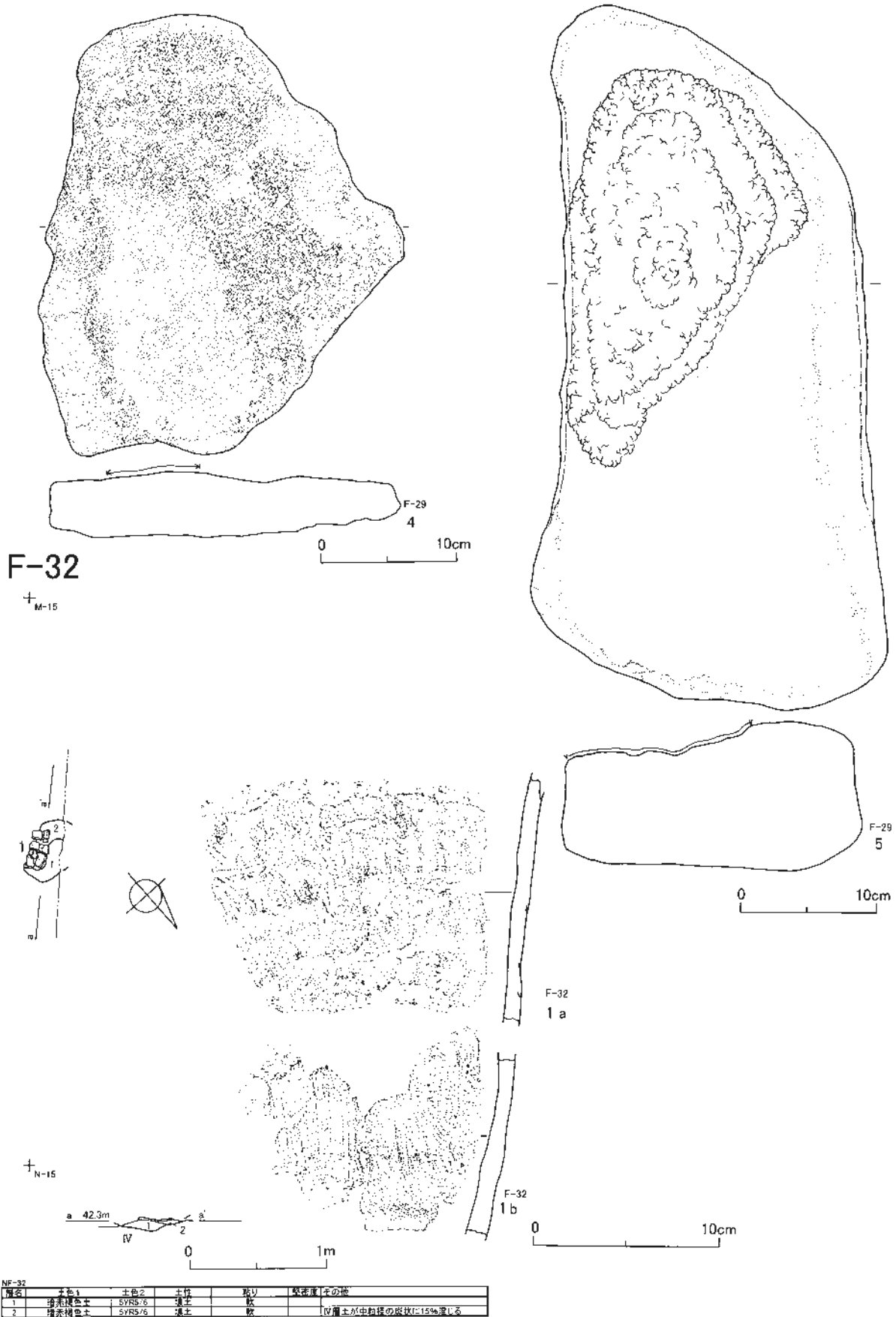


図 III - 78 F - 28 と遺物 ( 2 ) 、 F - 29 と遺物 ( 1 )



図III-79 F-29の遺物(2)、F-32と遺物



F-29 (図Ⅲ-78・79、図版72)

位置・立地：J-19 標高約44mの平坦面。

規模：0.98/0.77×0.98/0.78×0.14m

確認・調査：J19区のIV層調査中、石組炉を検出した。周辺を精査したが、掘り込みなどは確認できなかったため、住居に伴うものではなく屋外の施設と判断した。掘り込みは浅く、壁際に沿うように礫が配置されている。石組炉の石組は、1点が石皿、4点が台石、3点が礫である。覆土は炭化物を微量に含み、地山の焼成は弱い。

時期：遺構周辺の遺物から縄文時代後期前葉、IV群a類土器の時期と考えられる。(村田)

掲載遺物 土器：1は覆土2、2・3は覆土1からの出土である。いずれもIV群a類である。1は壺形土器の胴部上半、肩に近い部位の破片である。LR縄文施文後、ナデ調整を施し、沈線文を描く。内面はミガキ調整である。2の外面は横方向のミガキ調整によって無文にする。破片の表面上端に残る沈線から、大津式ないしは壺形の土器で、底部際の胴部片と考える。P-75の2と同一個体と考える。3は2と同一個体である可能性が高い底部破片。底面にはナデ調整を施す。

石器：4・5は炉石だったものである。いずれも安山岩である。4は石皿で、板状礫の平坦な両面に擦痕を有する。5は台石で板状礫の平らな一面に敲打痕による凹みを有する。(大泰司)

F-30 (図Ⅲ-80)

位置・立地：M-16 標高42.5~43m付近の平坦面。

規模：0.74×0.42×0.07m

確認・調査：H-18調査終了後、IV層をさらに掘り下げたところ、IV層中位で暗赤褐色土の集中として確認した。IV層が焼けたものと判断した。平面形は不整な楕円形で、断面は凸レンズ状の連続である。焼成面は検出面とほぼ同一である。遺物は遺構の検出部分については伴わない。

時期：周辺の遺物から縄文時代中期前半もしくは後期前葉の遺構と推測される。F-31と同一時期の可能性が高い。(大泰司)

F-31 (図Ⅲ-80)

位置・立地：M-16 標高42.5~43m付近の平坦面。

規模：0.70×0.40×0.08m

確認・調査：H-18調査終了後、IV層をさらに掘り下げたところ、IV層中位で暗赤褐色土の集中として確認した。IV層が焼けたものと判断した。平面形は不整な楕円形で、断面は凸レンズ状の連続である。焼成面は検出面とほぼ同一である。遺物は遺構の検出部分については伴わない。

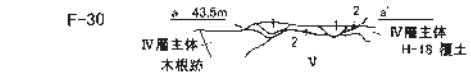
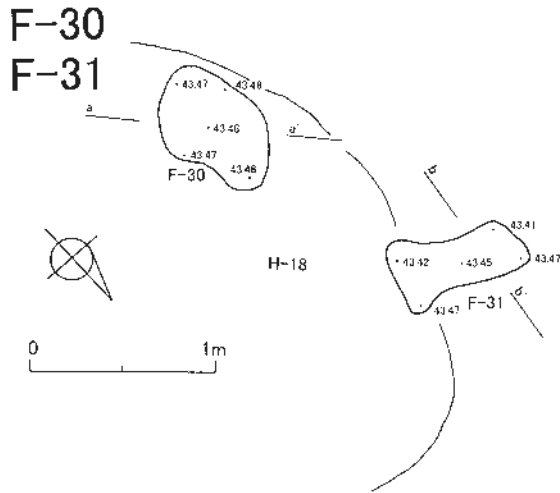
時期：周辺の出土遺物から縄文時代中期前半もしくは後期前葉の遺構と推測される。F-30と同一時期の可能性が高い。(大泰司)

F-32 (図Ⅲ-79、図版72)

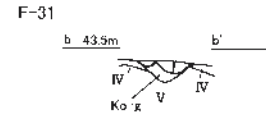
位置・立地：M-15 標高42.5~43m付近の平坦面。

規模：0.44×0.22×0.08m

確認・調査：IV層中位で暗赤褐色土の集中として確認した。IV層が焼けたものと判断した。平面形は楕円形で、断面は凸レンズ状である。焼成面は検出面とほぼ同一である。遺物は焼成面から、土器がまとまって出土している。



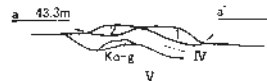
層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅硬度	その他
1	明赤褐色土	5YR5/8	壤土	軟		細～小半風化垂角礫5%混じる
2	褐色土	7.5YR6/8	壤土	軟		細～小半風化垂角礫5%混じる



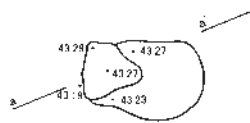
層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅硬度	その他
1	明赤褐色土	5YR5/8	壤土	軟		細～小半風化垂角礫5%混じる
2	褐色土	7.5YR6/8	壤土	軟		細～小半風化垂角礫5%混じる

F-33

+ M-16

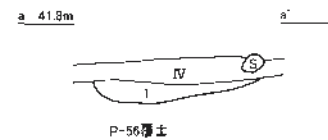
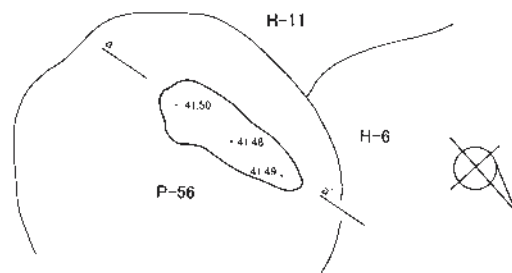


層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅硬度	その他
1	褐色土	5YR5/8	壤土	軟		粗砂0.5～1.3mmのIV層主体1.9%
2	明赤褐色土	5YR5/8	壤土	軟		粗砂0.5～1.3mmのIV層主体50%



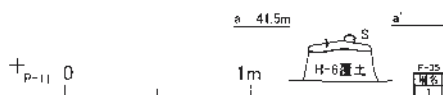
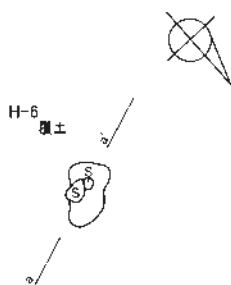
F-34

+ O-11



層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅硬度	その他
1	褐色土	5YR5/8	砂壤土	なし	軟	粗角礫3%混じる

F-35



層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅硬度	その他
1	褐色土	5YR5/8	砂壤土	なし	しよ	

図 III-80 F-30・31・33・34・35

**時期：**焼成面の土器から縄文時代後期前葉の遺構と推測される。

**掲載遺物 土器：**1はIV群a類である。焼土の検出面からまとまって出土した。接合破片は焼土より斜面の下方向から見つかったものである。胴部は縦方向のミガキ調整により無文である。胎土にはメノウの碎片が混じる。(大泰司)

**F-33 (図Ⅲ-80)**

**位置・立地：**M-15 標高43.0~43.5m付近の平坦面。

**規模：**0.34×0.22×0.04m

**確認・調査：**IV層中位で橙色土の集中として確認した。IV層が焼けたものと判断した。平面形は楕円形で、断面は凸レンズ状が並ぶ形状である。焼成面は検出面とほぼ同一である。遺物の出土はない。

**時期：**焼成面の土器から縄文時代後期前葉の遺構と推測される。(大泰司)

**F-34 (図Ⅲ-80)**

**位置・立地：**O-10 P-56の覆土上部、標高41.5m前後の平坦面。

**規模：**0.92×0.34×0.12m

**確認・調査：**H-11とP-56の切り合い関係を確認するため、ベルトを設定し、掘り下げていたところ、P-56の覆土上部で確認された。P-56の落ち込みを利用して焚いたものと考えられる。

**時期：**P-56がH-6とH-11よりも後で構築されたことから縄文時代後期前葉以降のものである。(影浦)

**F-35 (図Ⅲ-80)**

**位置・立地：**O-11 H-6覆土中。

**規模：**0.36×0.22×0.05m

**確認・調査：**H-6覆土中において検出した。H-6の落ち込みを利用したものである。礫が2点一緒に出土した。

**時期：**H-6が縄文時代後期前葉と考えられることから、縄文時代後期前葉以降である。(影浦)

**F-36 (図Ⅲ-81~84、図版28・29・72・73・74)**

**位置・立地：**N-14 標高43m付近の平坦面。

**規模：**0.78×0.56×0.11m

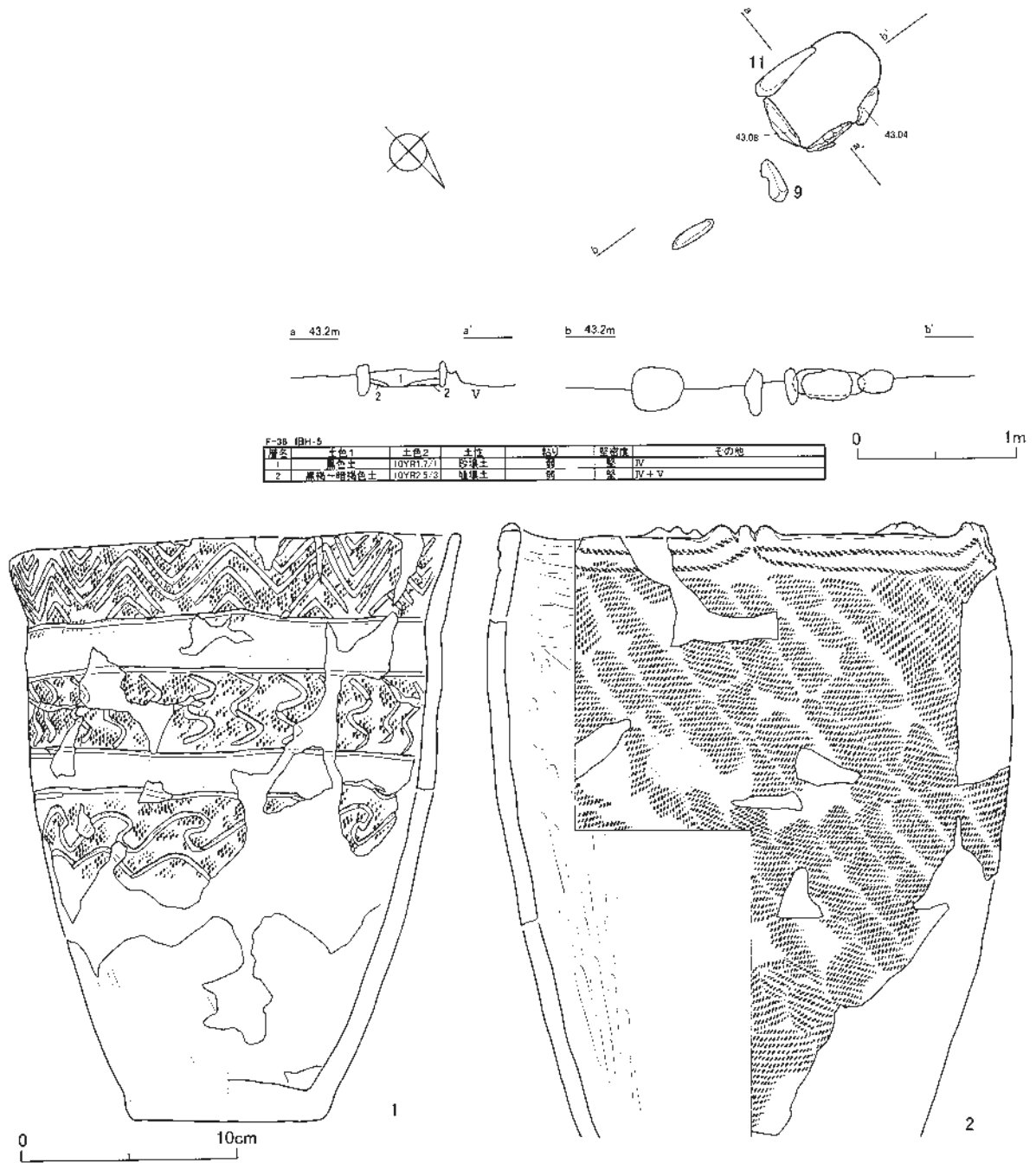
**確認・調査：**IV層上面で方形に廻る石組みを確認。当初は住居の可能性を考慮して周囲の落ち込み、柱穴等付属遺構の精査に努めた、が見出されなかったため石組炉とした。石組の礫1点に被熱による表面の剥落が認められるが、明瞭な焼土は確認できなかった。遺物は覆土より土器1点、石組から、台石2点・礫2点が出土している。

**時期：**構築面、周辺と同様な遺構から縄文時代後期前葉のものと思われる。(中山)

**掲載遺物 土器：**いずれもIV群a類である。1・3は白坂3式、2・5は涌元式に並行するものである。1は旧H-5の覆土上部から出土し、沢地形に対して斜面のより上方出土のもの、特にM14区からのものと接合した。LR縄文施文後、ミガキそして沈線を施し、磨消縄文を施文する。内面は屈曲部より上は横方向、下は縦方向である。器面について胴部中央より上に煤が付着する。底面はミガキ調整である。2は旧H-5覆土上部と沢地形に対してより下位からのものと接合した。LR縄文を横

F-36

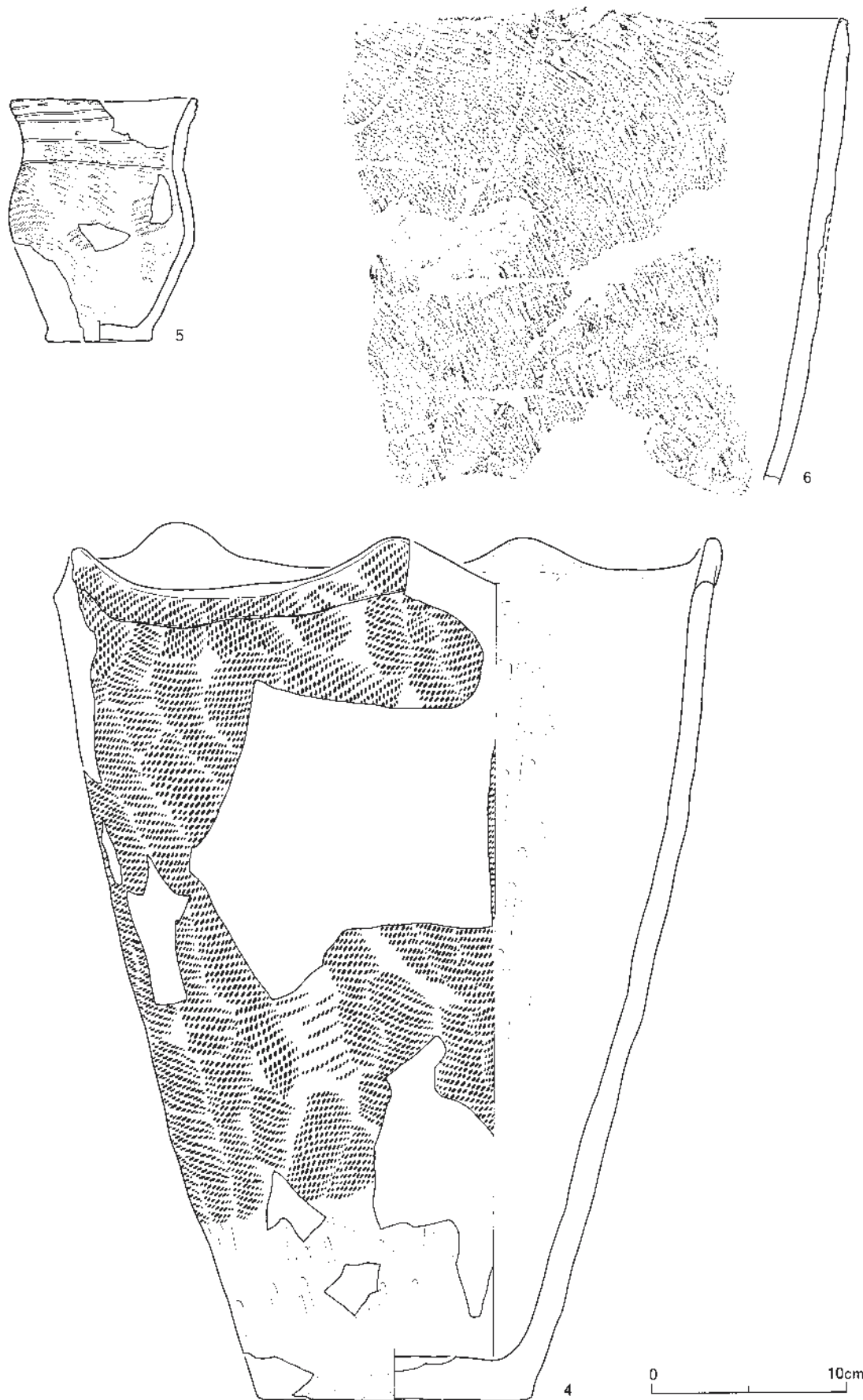
十  
N-15



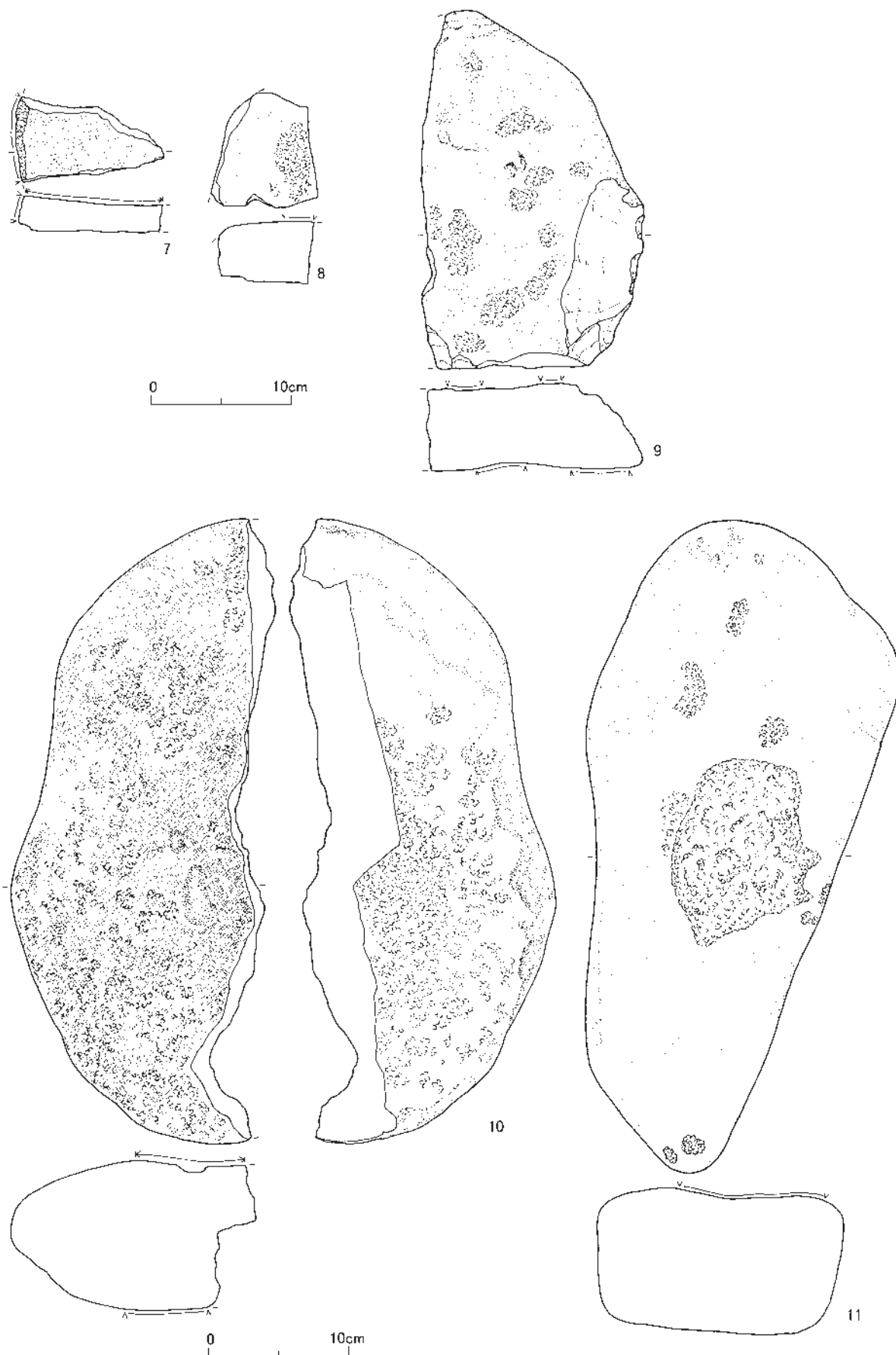
図III-81 F-36と遺物(1)



図Ⅲ-82 F-36の遺物(2)



図III-83 F-36の遺物(3)



図Ⅲ-84 F-36の遺物(4)

走させた後、口縁部をナデ調整で無文にしてLR縄線を2条施す。波頂部にも縄線を押圧する。内面はミガキ調整で、口縁部は横方向、胴部は縦方向である。3は遺構より沢地形に対してより上位の調査区K～R-12～24区出土遺物、特にM14・16区のものと同H-5の覆土上位のものが接合したものである。白坂3式の範疇で、LR縄文をおおよそ文様に則して施文後、沈線文とミガキによって磨消し縄文を施す。内面は摩滅が著しい。底面は微妙な上げ底でミガキ調整である。4は遺構に対して斜面のより上位から出土した遺物と同H-5の遺物が接合したものである。輪積みによって折り返し口縁部成形後、RL縄文を横走させる。底部の際が縦方向のミガキ調整である。口唇部は一本の粘土紐で平坦面をとる。内面はミガキ調整で、口縁部は横方向胴部は縦方向である。底面もミガキ調整である。5は同H-5の覆土上位と下位の遺物が接合したものである。R縄文を横走させた後、折り返し口縁部を成形し、沈線文を施す。底部の際がミガキ調整によって無文とする。内面は横方向のミガキ調整である。底面は微妙な上げ底でナデによって無文である。胴部の膨らみのピークより上には煤が顕著に付着する。6は10ラインの沢地形から散点的に出土し、H-5として調査した際、覆土の上部から出土した。沢地形に分布の中心があり、H-7や11の覆土上部からも出土している。残部から、口径は20cm前後、器高は23cm以上である。R1縄の絡条体による地文を持つ。口縁部文様帯では施文の傾斜を変化させる。口唇部は丸みを帯びてはいるが面をとるように成形している。

**石器：**7・8はH-5を想定してトレンチを入れた際に出土した。7は台石で、安山岩の礫片の平坦な面に擦痕がある。8は台石で、安山岩の礫片の平坦な面に敲打痕がある。被熱によるものか帯状に赤色化する。9は台石で炉石脇の立石だった。安山岩の大型礫の一平坦面にかすかな擦痕と敲打痕を有する。埋没していない部分の炉側については被熱によるものか帯状に赤色化する。10は台石で、同H-5覆土上部からの出土である。濁川火砕流起源の安山岩を用いる。楕円礫が長軸で割れたもので、平坦な面に擦痕と敲打痕がある。表面とした側に擦痕は顕著である。11は台石で同H-5覆土上部からの出土である。安山岩の長楕円礫を用いる。平坦な面に敲打痕による凹みがある。被熱のためか所々赤色化する。 (大泰司)

#### F-37 (図III-85、図版29・74)

**位置・立地：**I-12 標高44m付近の平坦面。

**規模：**0.74×0.46×0.25m

**確認・調査：**V層上面で確認。当初住居の炉と考え、住居範囲の検出に努めたが、明確な床、付属遺構、掘りこみ等が見出されなかったため、単独の焼土とした。平面形は不整形である。北東側に20cmほどの扁平な礫が2点埋め込まれており、南東側は攪乱に切られているので上に礫は無いが、恐らく焼土の周囲を石で囲った石組炉であったと推測される。焼土層は20cmと分厚く均質なものである。礫は掘り込んで埋められている。遺物は覆土から土器が2点出土している。

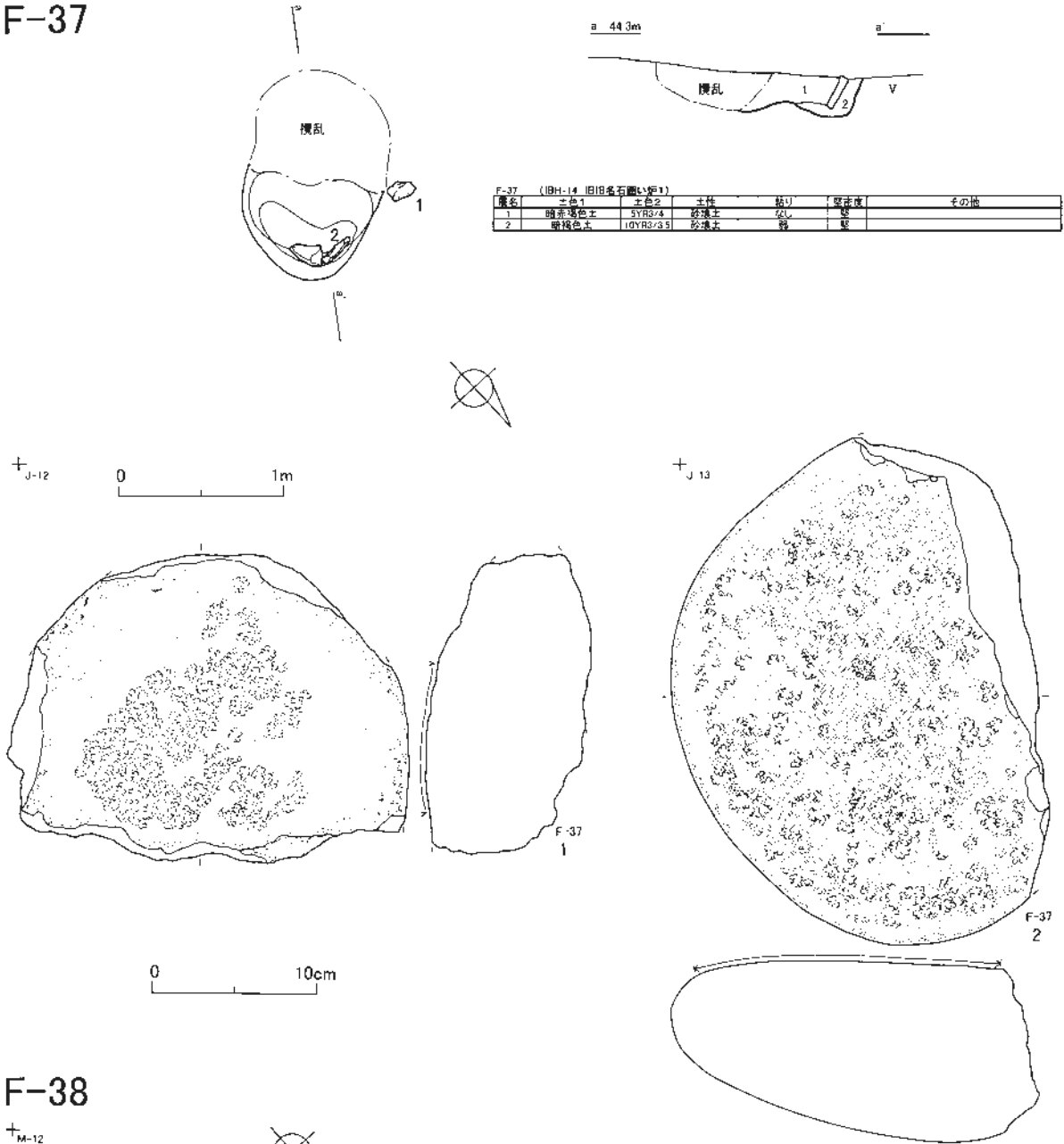
**時期：**確認面の同様の遺構から縄文時代後期前葉のものと思われる。 (中山)

**フローテーション成果：**石組炉の覆土を採取し、フローテーション法にて処理した。炭化種子はニワトコ属、マタタビ属、ブドウ科、他種不明のものが検出された (詳細はVI章を参照)。

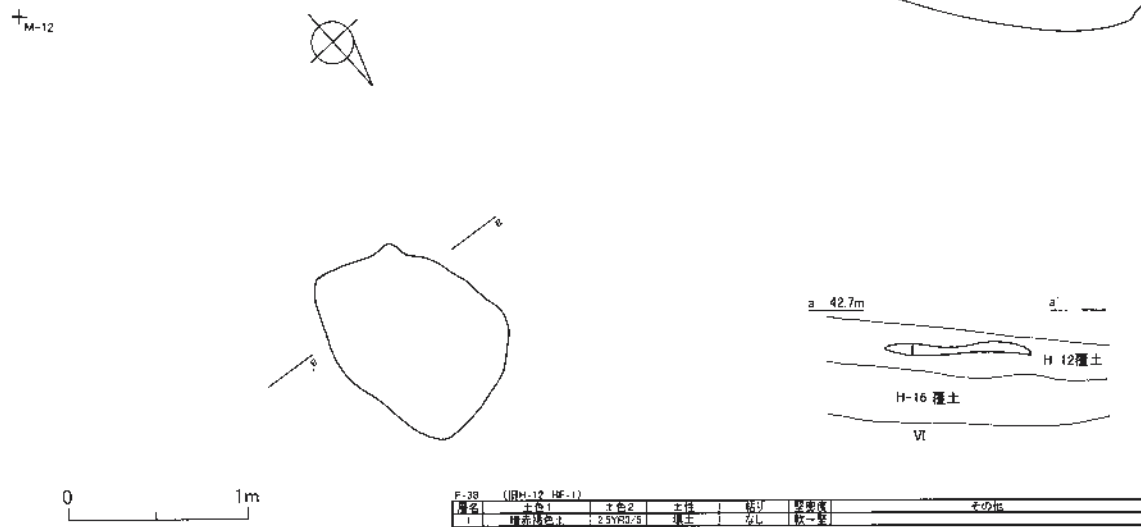
**掲載遺物 石器：**1・2は炉石であった。いずれも安山岩である。1は台石で楕円礫の短軸での割礫を用いる。一面について、敲打による凹みがあり、正面図の頂部および割面にも敲打痕がある。2は石皿で楕円礫の割礫を用いる。平らな一面に、擦痕があり。中央部分が顕著である。 (大泰司)



F-37



F-38



図III-85 F-37と遺物、F-38

F-38 (図Ⅲ-85)

位置・立地：M-12 標高42m付近、H-12の落ち込み。

規模：1.10×0.80×0.06m

確認・調査：H-12の調査中に確認。H-12の落ち込みに作られた比較的大きな焼土である。平面形は不整形。覆土中から土器が9点出土した。

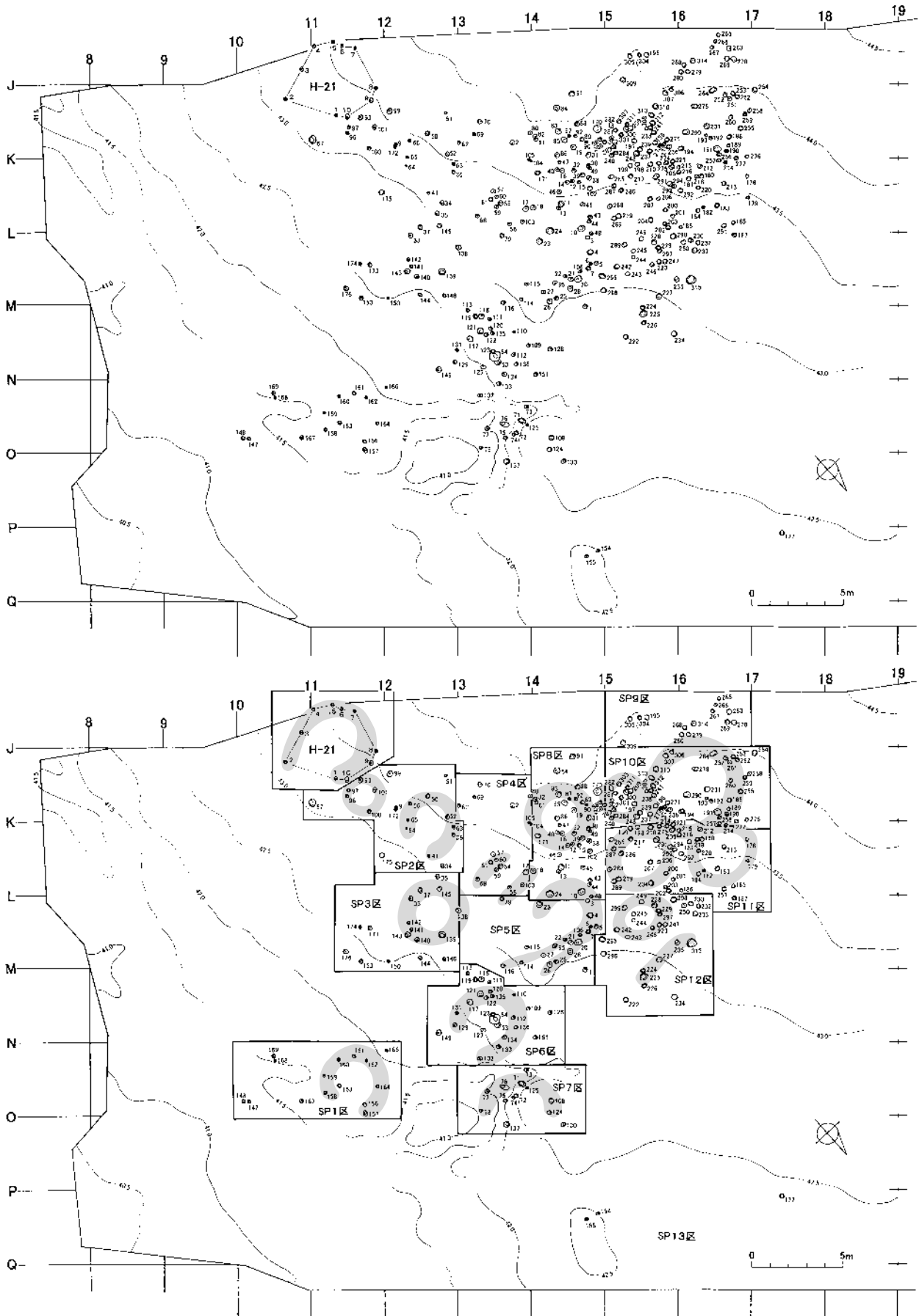
時期：出土した土器から縄文時代後期前葉のものである。 (中山)

#### 4. 柱穴状の小土壇（S P）

2001年においてV層上面まで掘り下げた段階で、柱穴状の小土壇群を検出した。図化後、再度V層を掘り下げた段階で不明瞭であったものがさらに検出された。（図Ⅲ-86～101・図版30・74・75）

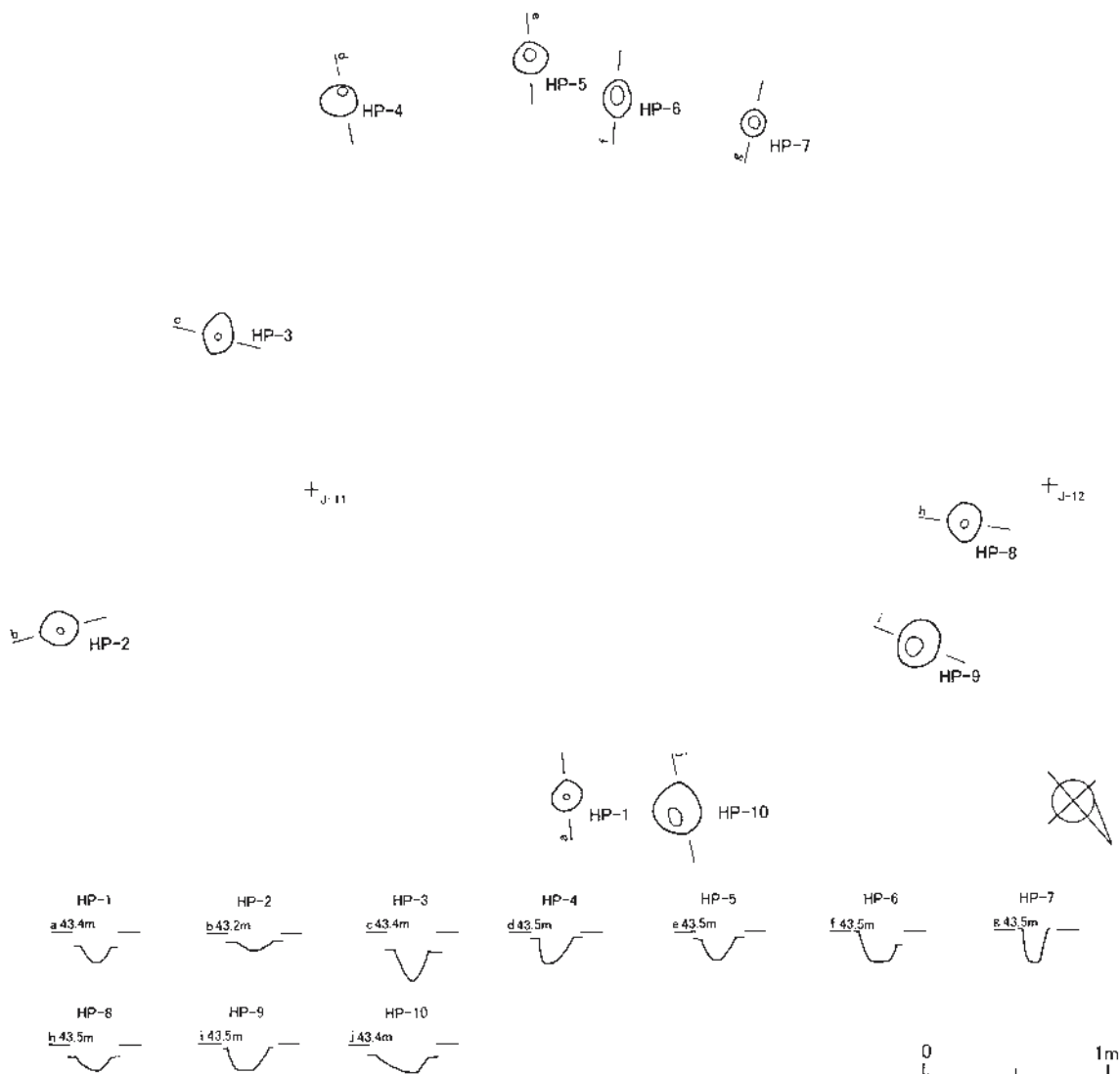
現場調査中に目立った遺物は、S P-1の倒立した土器とS P-2出土の石斧、S P-190に入り込んでいた土器、S P-290・314からは台石が立石状に、S P-225・235については覆土中から出土した。出土する土器は縄文時代後期前葉、IV群a類が主である。沈線文の入るものは14の涌元Ⅱ式のみである。大津式以降の沈線文を持つ土器は出土していない。S P-1の出土状況からこれらが後期前葉で、涌元式前後の遺構の可能性が高い。欠番のものについては、一旦、平面でおさえたが、土層断面観察の結果、木根跡と判断したものである。

覆土は主にIV層の流入である。壁面が崩れたものの崩落ないしは流入が混じりこむものもある。S P-1のような出土状況は、抜き取り行為があったことが想定できる。また土層断面の観察から、打ち込み柱か掘建て柱かは断言し難い状況である。現地で配列が確定できたものはH-21のみである。平成13年と14年の調査の結果を机上で検討すると漠然とではあるが、おおよそ円形にまとまるものとおおよそ直線的に並ぶものの2種類に分けられる。その事実を踏まえて、便宜上13の区に分けて図示した。（図Ⅲ-86～101・S P 1区～13区と称した。）あくまで机上での検討だが、11個の環状の配置と3個のC字状の配置、5列の直線状の配置を検討した。C字状の配置では、東側に環の切れ目がある。東向きとは、石組炉に伴う立石の炉に対する向きと同一である。石組炉を持つ住居も後期前葉の遺構と考えられ、また石組炉を持つ住居と切り合う柱穴状小土壇は今回検出されていない。またS Pに関連が強いものとしてH-21がありこれについて記載する。次に柱穴状小土壇すべてについて、代表的な出土遺物について記載する。 （大泰司）



図III-86 柱穴状の小土壌(1)全体図

# H-21



図Ⅲ-87 H-21

H-21 (図Ⅲ-87、図版10)

位置・立地：I・J-10・11 標高44m付近の平坦面。

規模：4.22×3.80m

確認・調査：V層面で確認した。最終面まで調査が進んでいたため土層確認用ベルトの設定は出来ず、掘り込み・付属遺構の検出に努めたが確認できなかった。他のSPの集中する個所からはやや外れ、隅丸方形に柱穴が廻っていたので住居とした。掘立て柱建物と考えるのが妥当か。

覆土：柱穴の覆土であるが、IV層土の自然堆積である。

形態：平面形は隅丸方形で、掘り込みは認められない。

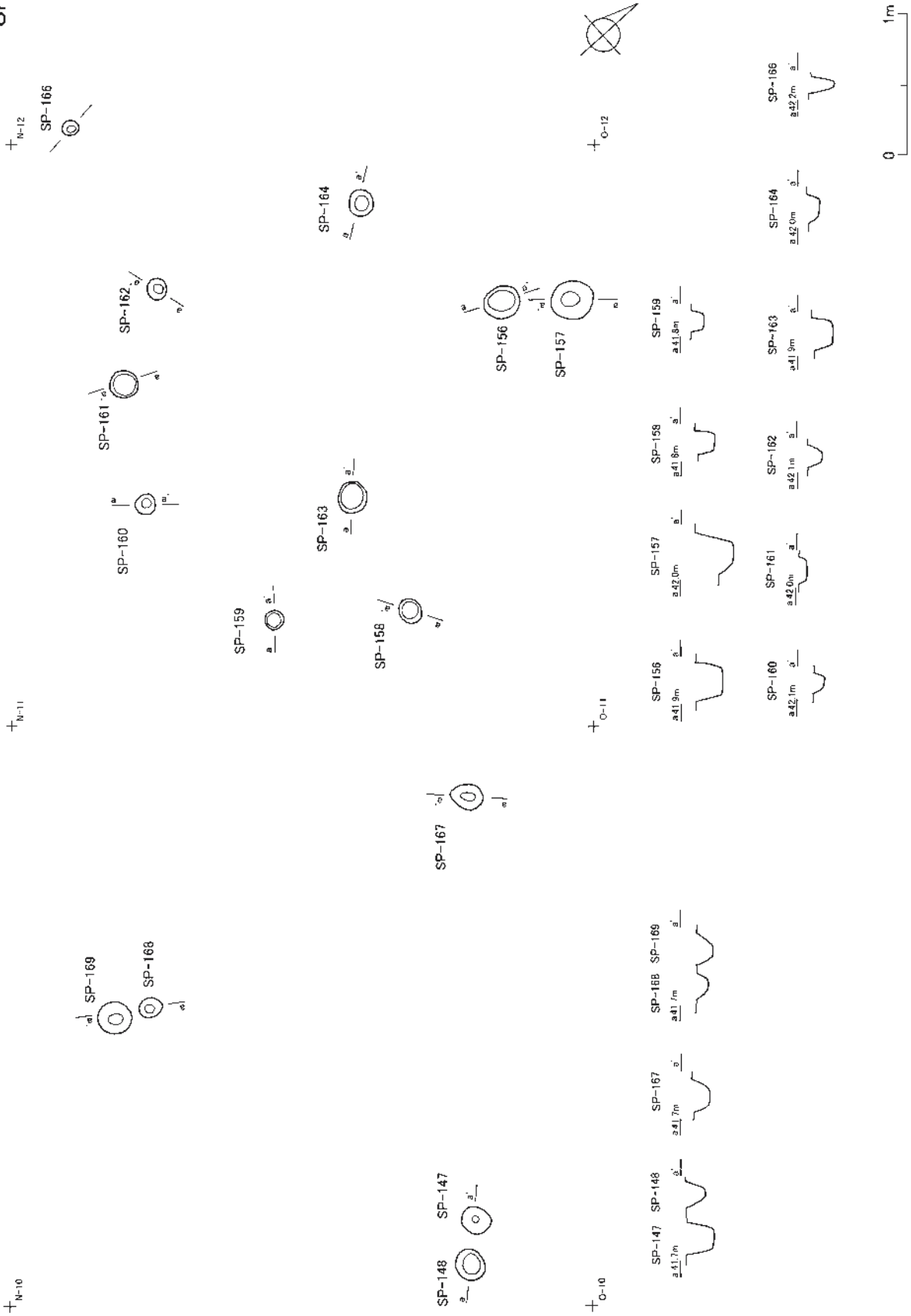
付属遺構：なし。

遺物出土状況：出土していない。

時期：不明。確認層位、付近の遺構より縄文時代後期前葉の可能性が高い。

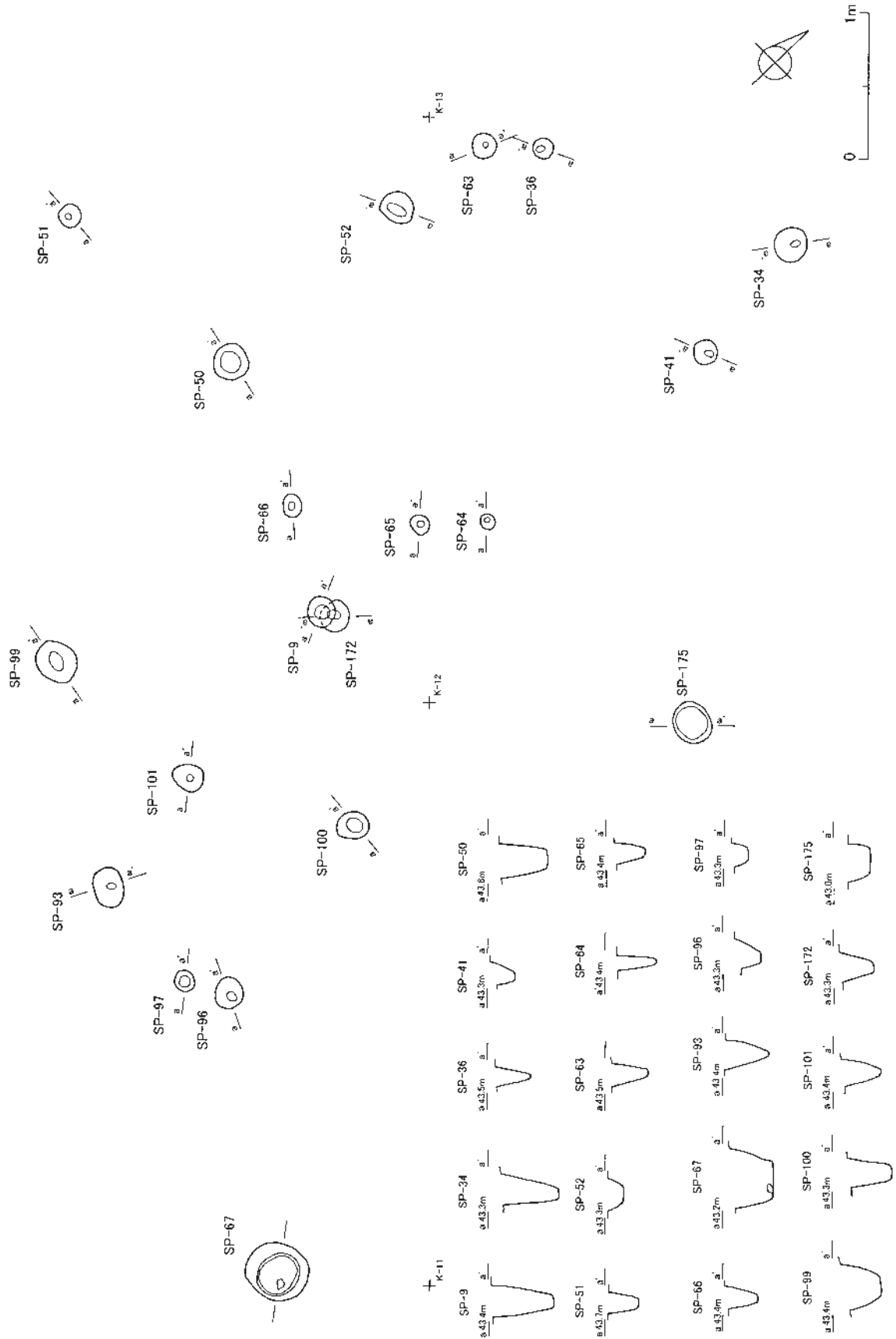
(中山)

SP1区



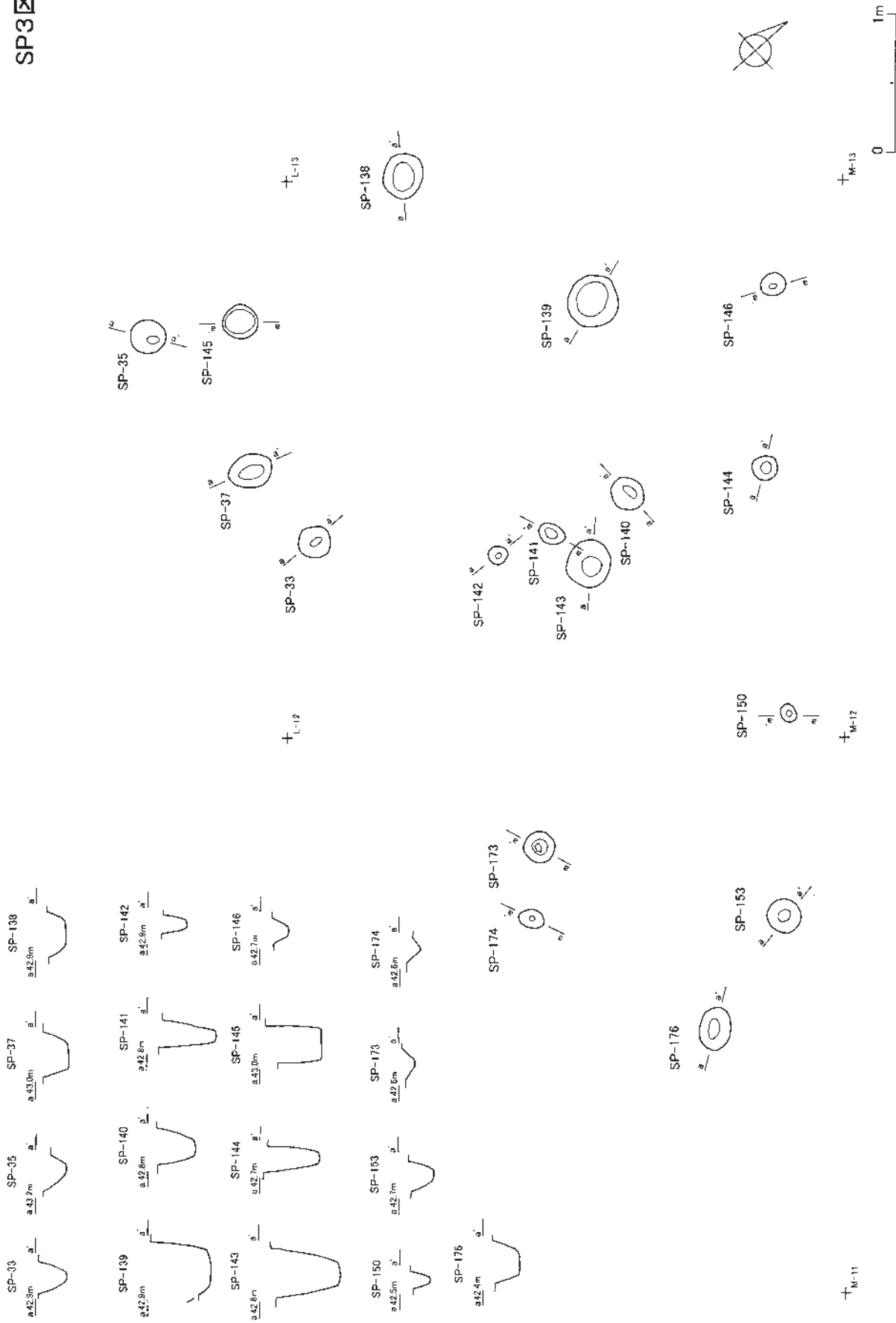
図III-88 柱穴状の小土壇(2) SP1区

SP2区



図III-89 柱穴状の小土壇 (3) SP2区

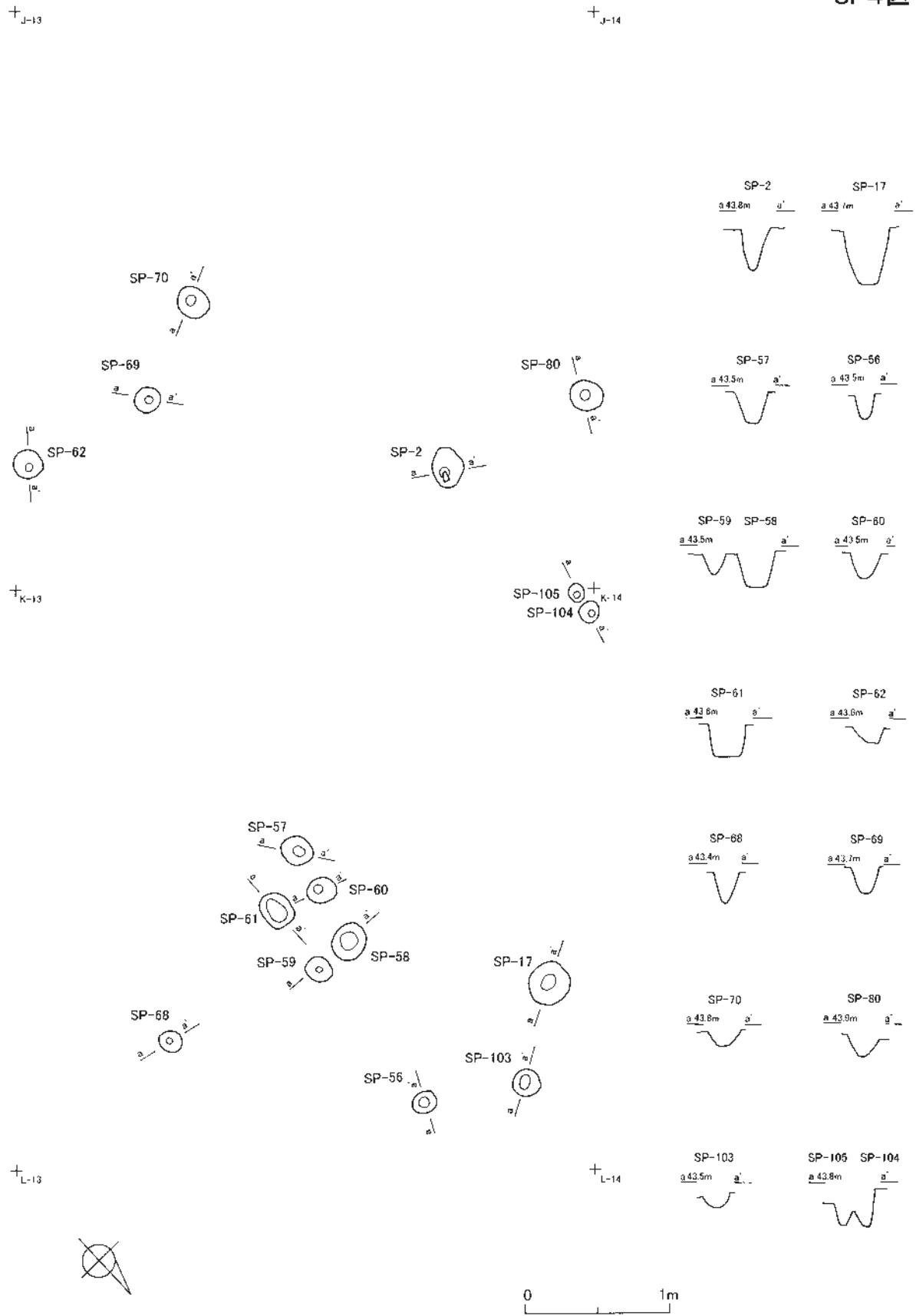
SP3区



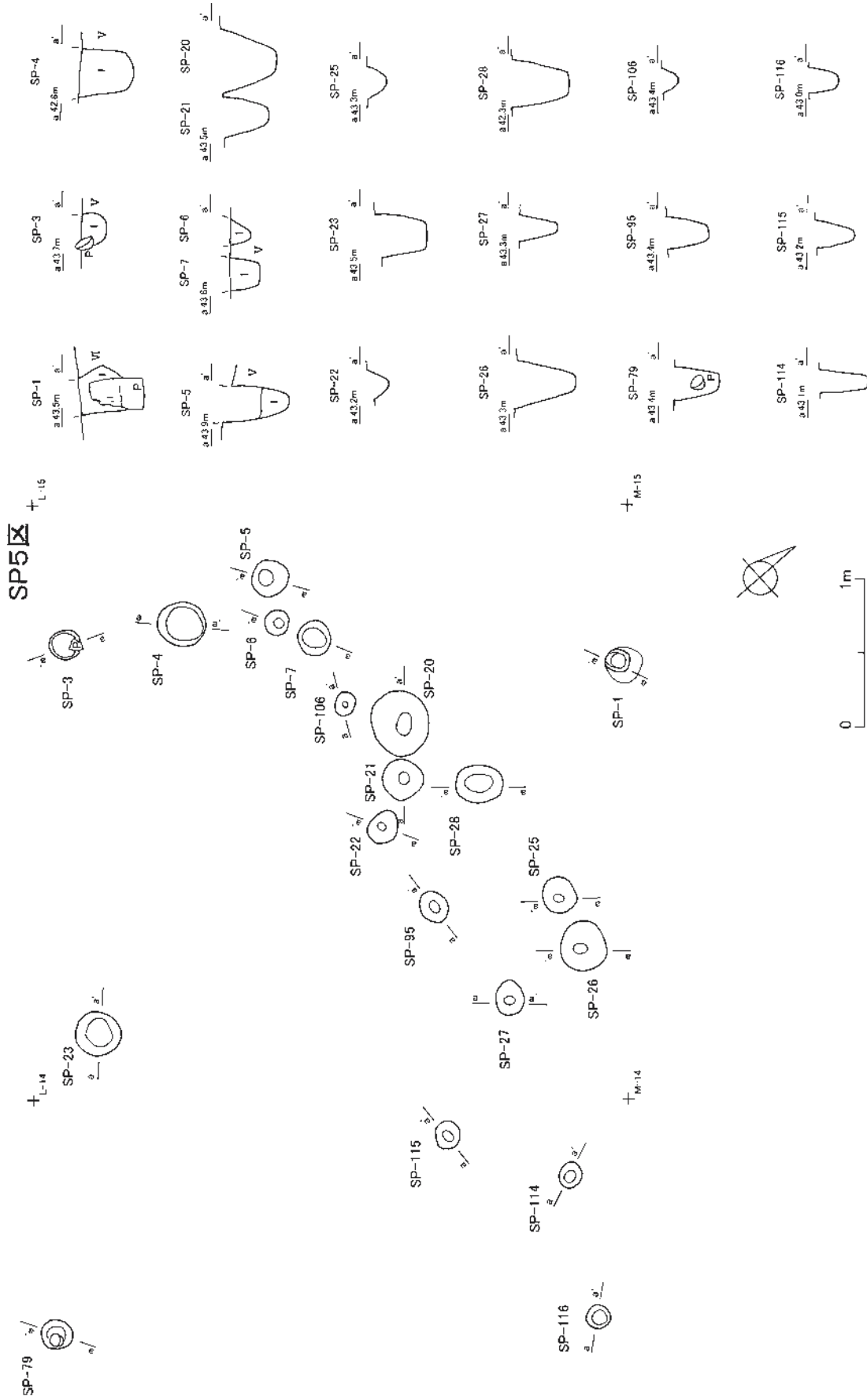
図III-90 柱穴状の小土壇（4）SP3区



SP4区



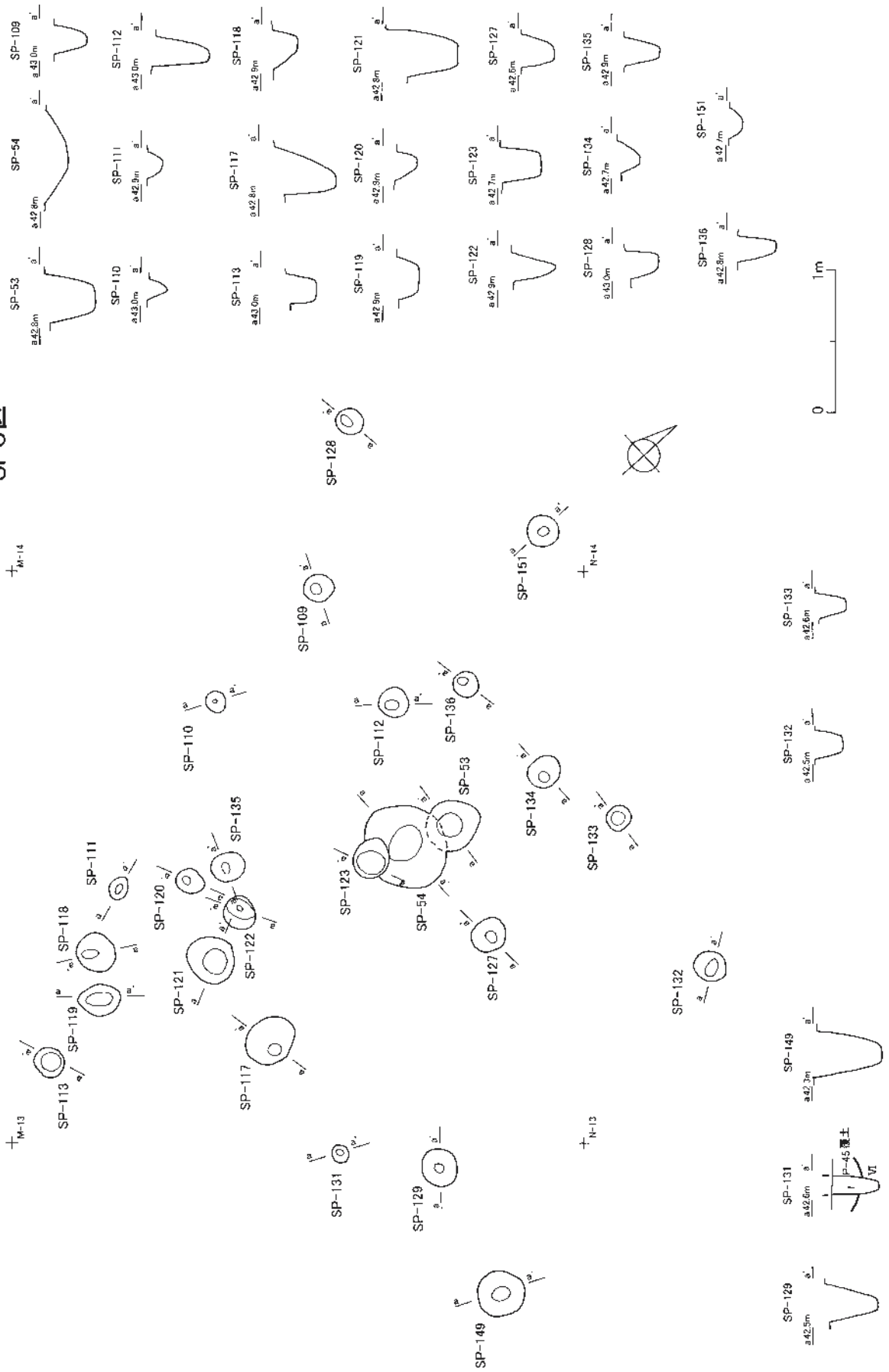
図Ⅲ-91 柱穴状の小土壌 (5) SP4区



SP5区		遺構		調査		調査		調査		調査	
調査	調査	調査	調査	調査	調査	調査	調査	調査	調査	調査	調査
1. 調査	1. 調査	1. 調査	1. 調査	1. 調査	1. 調査	1. 調査	1. 調査	1. 調査	1. 調査	1. 調査	1. 調査
2. 調査	2. 調査	2. 調査	2. 調査	2. 調査	2. 調査	2. 調査	2. 調査	2. 調査	2. 調査	2. 調査	2. 調査
3. 調査	3. 調査	3. 調査	3. 調査	3. 調査	3. 調査	3. 調査	3. 調査	3. 調査	3. 調査	3. 調査	3. 調査
4. 調査	4. 調査	4. 調査	4. 調査	4. 調査	4. 調査	4. 調査	4. 調査	4. 調査	4. 調査	4. 調査	4. 調査
5. 調査	5. 調査	5. 調査	5. 調査	5. 調査	5. 調査	5. 調査	5. 調査	5. 調査	5. 調査	5. 調査	5. 調査

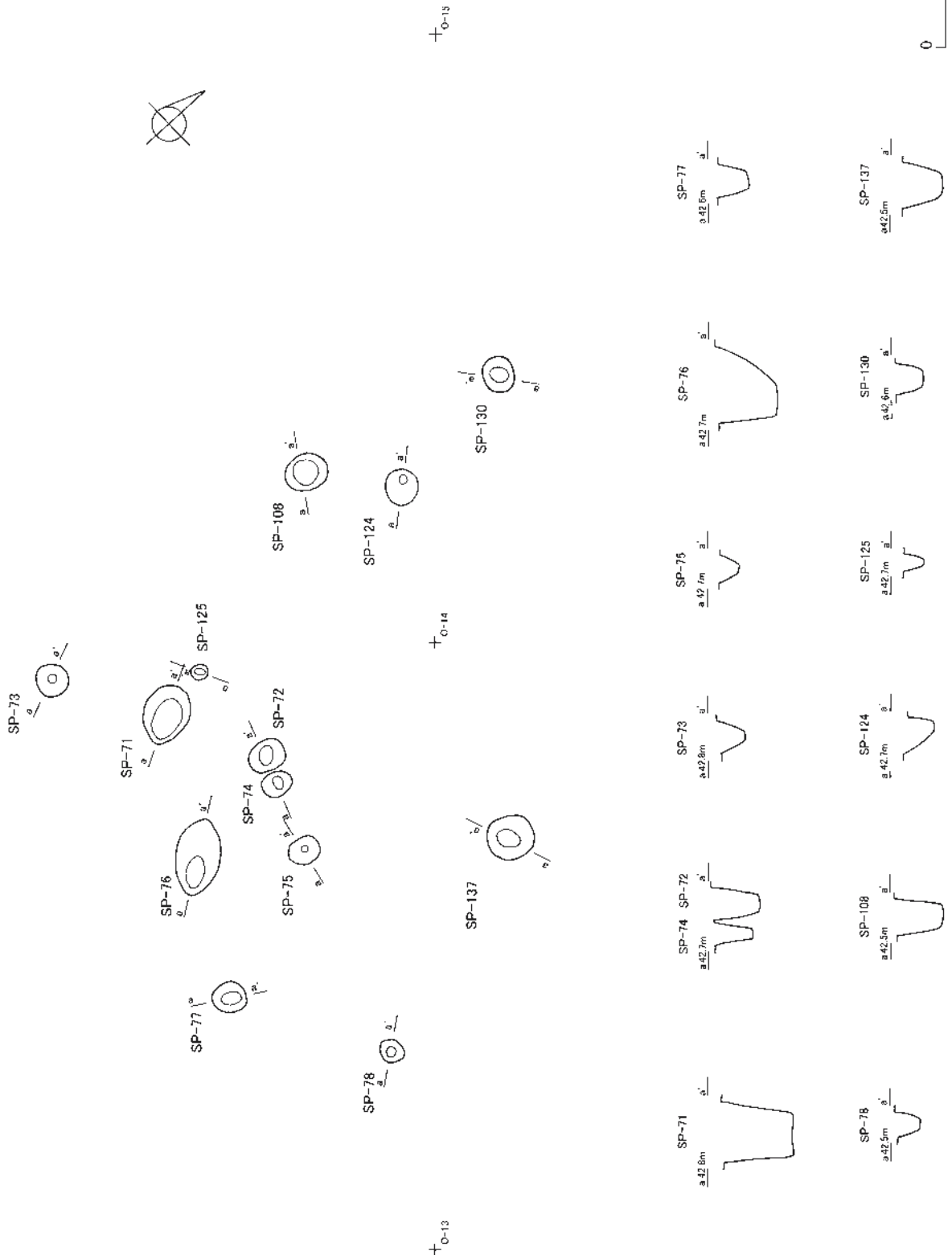
図III-92 柱穴状の小土壇 (6) SP5区

SP6区

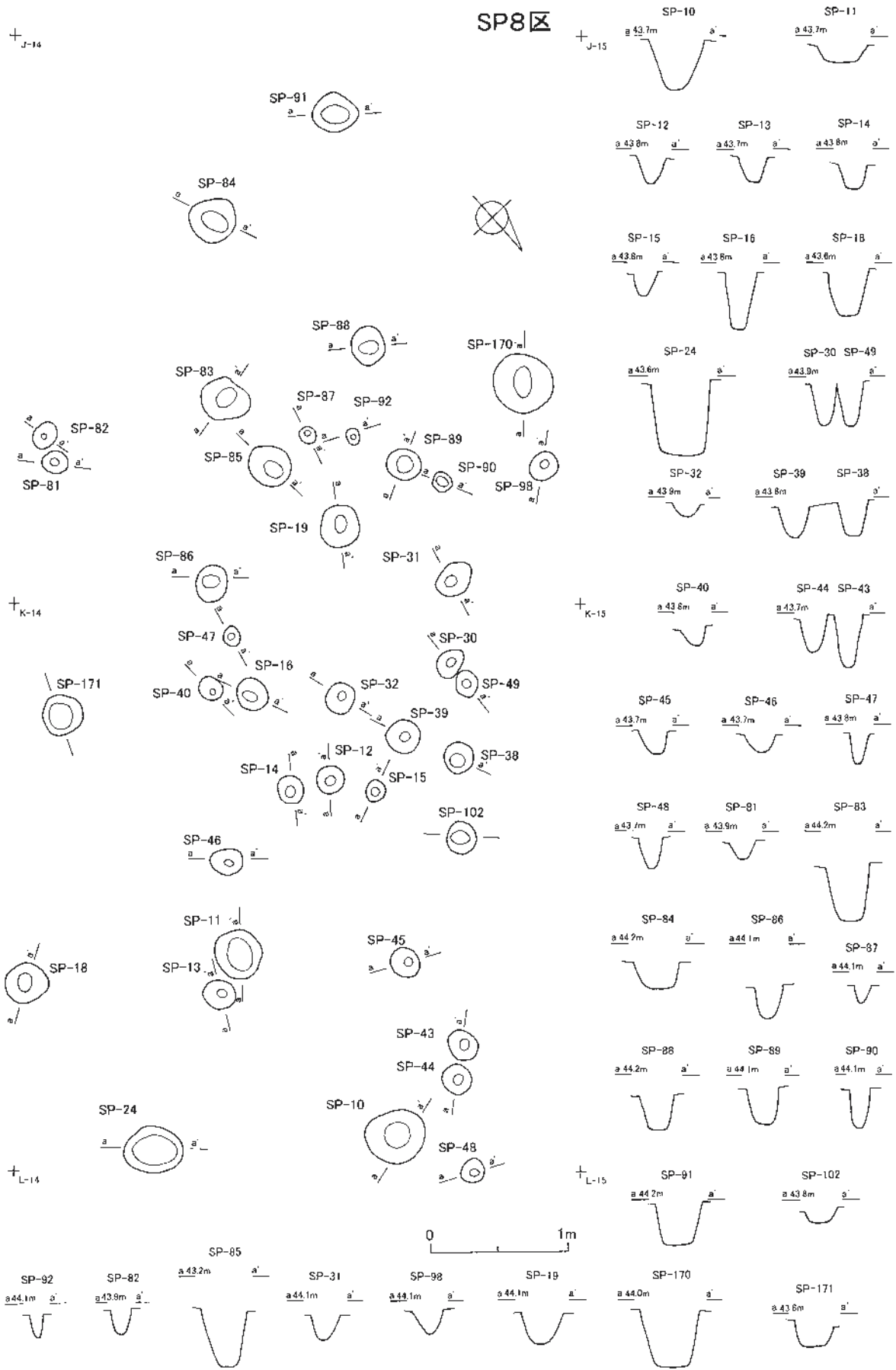


図III-93 柱穴状の小土壇 (7) SP6区

SP7区



図III-94 柱穴状の小土壇 (8) SP7区



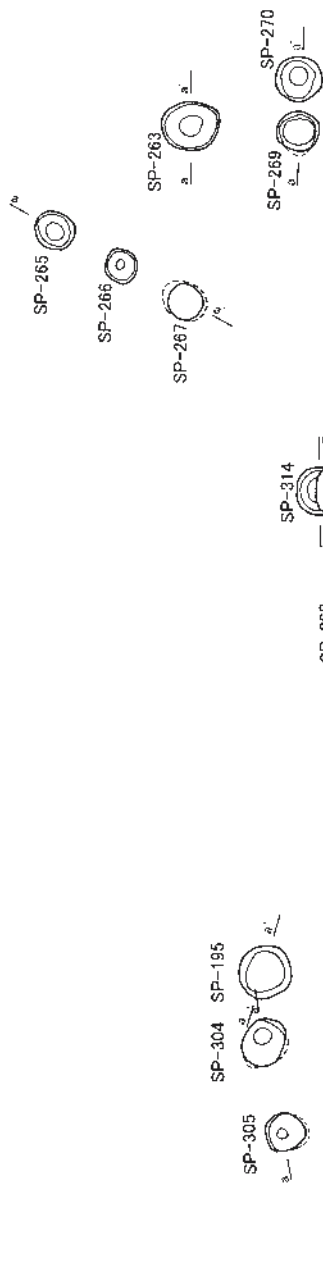
図III-95 柱穴状の小土壌 (9) SP8区

SP9区

↑<sub>J-17</sub>

↑<sub>J-16</sub>

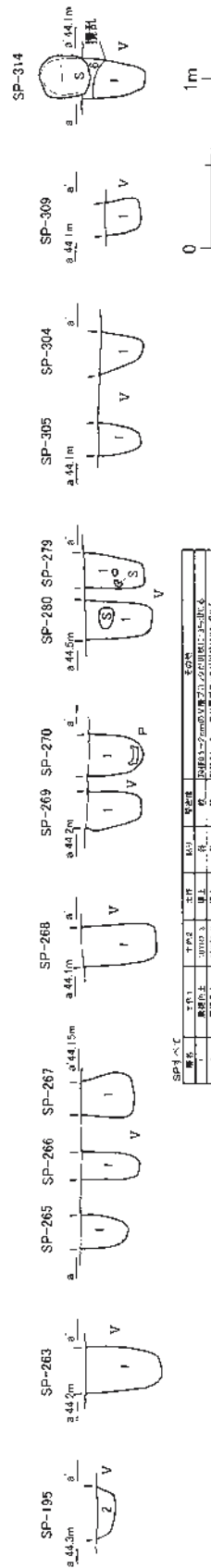
↑<sub>J-15</sub>



↑<sub>J-17</sub>

↑<sub>J-16</sub>

↑<sub>J-15</sub>

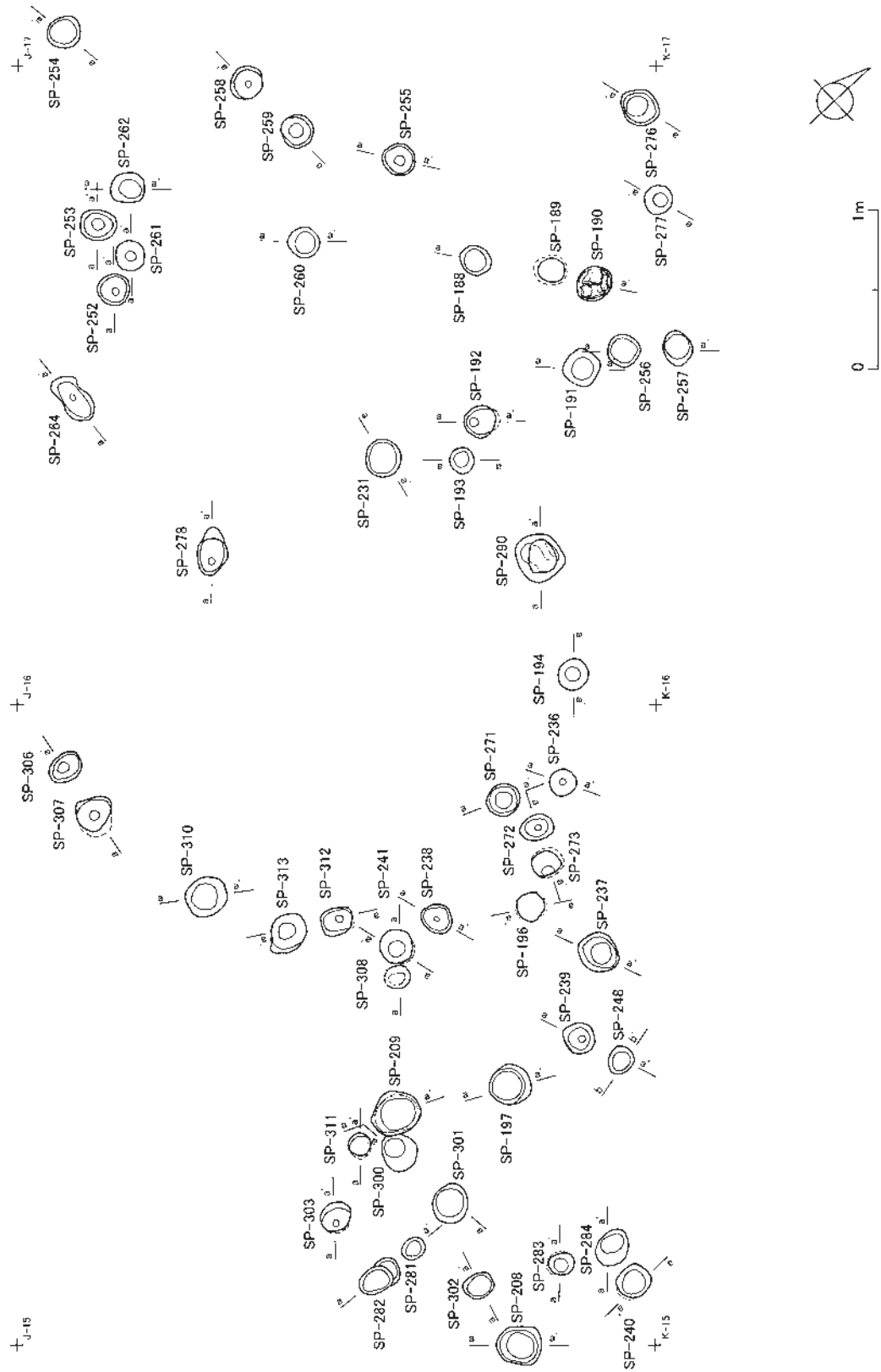


SP9区C

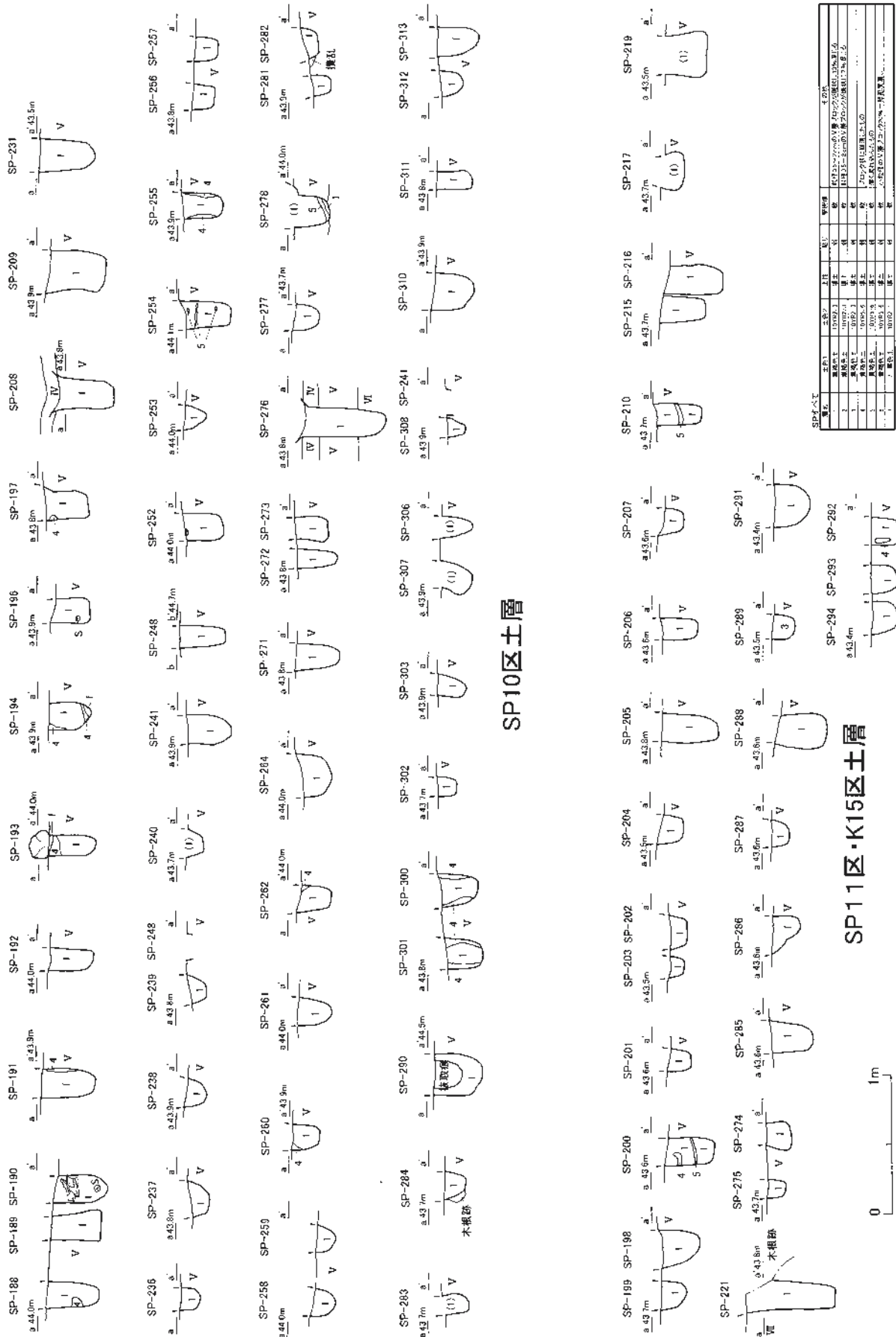
層名	工種	土質	層厚	地質	備考
1	掘削土	3000.3	0.3	砂	SP9区C-1層の掘削土
2	掘削土	3000.3	0.3	砂	SP9区C-2層の掘削土
3	掘削土	3000.3	0.3	砂	SP9区C-3層の掘削土
4	掘削土	3000.3	0.3	砂	SP9区C-4層の掘削土
5	掘削土	3000.3	0.3	砂	SP9区C-5層の掘削土
6	掘削土	3000.3	0.3	砂	SP9区C-6層の掘削土
7	掘削土	3000.3	0.3	砂	SP9区C-7層の掘削土
8	掘削土	3000.3	0.3	砂	SP9区C-8層の掘削土
9	掘削土	3000.3	0.3	砂	SP9区C-9層の掘削土
10	掘削土	3000.3	0.3	砂	SP9区C-10層の掘削土
11	掘削土	3000.3	0.3	砂	SP9区C-11層の掘削土
12	掘削土	3000.3	0.3	砂	SP9区C-12層の掘削土
13	掘削土	3000.3	0.3	砂	SP9区C-13層の掘削土
14	掘削土	3000.3	0.3	砂	SP9区C-14層の掘削土
15	掘削土	3000.3	0.3	砂	SP9区C-15層の掘削土

図III-96 柱状の小土塊 (10) SP9区

SP10区



図III-97 柱穴状の小土壇 (11) S P 10区



SP10区土層

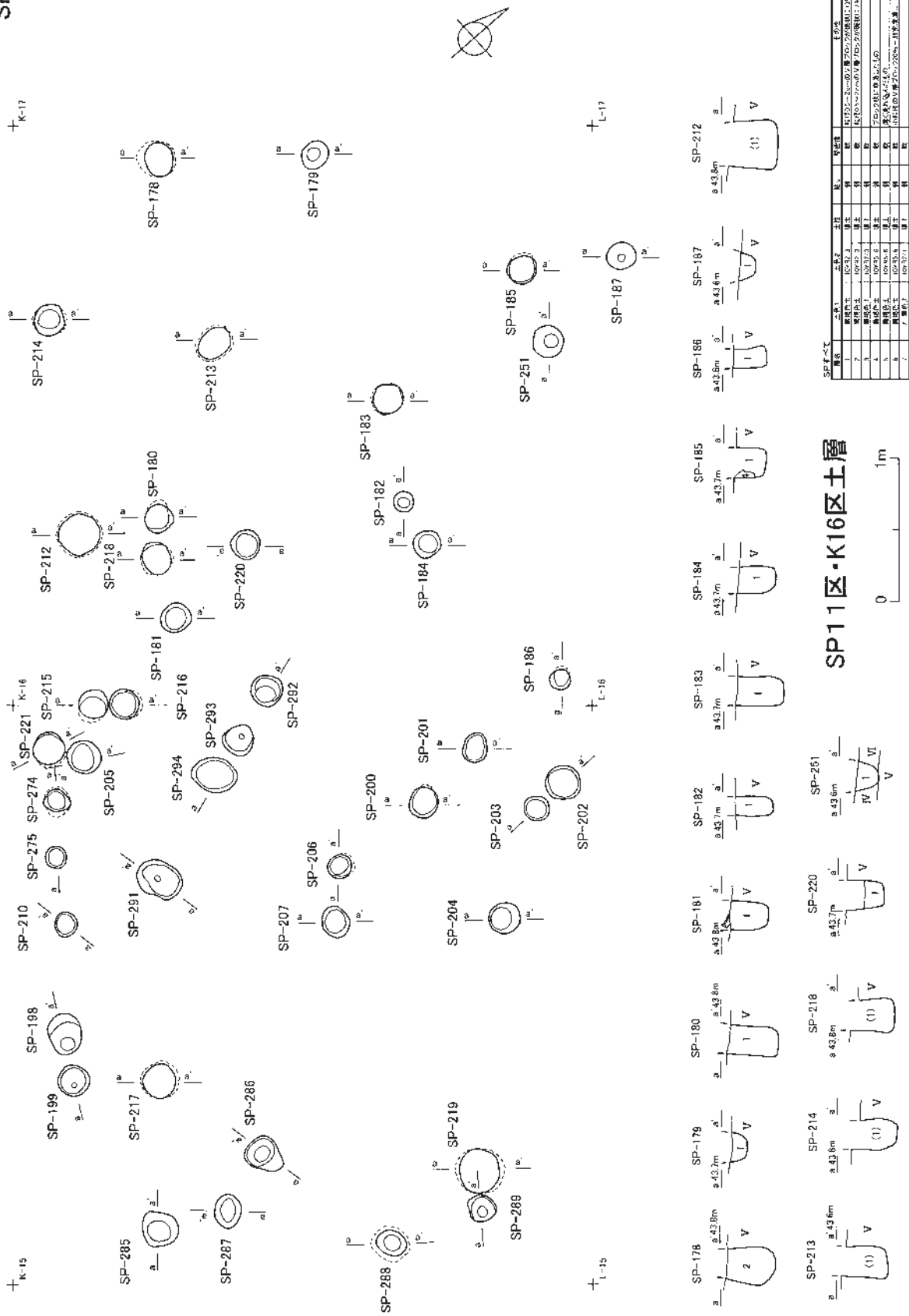
層位	土層	上層	土層	厚さ	備考
1	SP10-1	SP10-2	SP10-3	SP10-4	SP10-5
2	SP10-6	SP10-7	SP10-8	SP10-9	SP10-10
3	SP10-11	SP10-12	SP10-13	SP10-14	SP10-15
4	SP10-16	SP10-17	SP10-18	SP10-19	SP10-20
5	SP10-21	SP10-22	SP10-23	SP10-24	SP10-25
6	SP10-26	SP10-27	SP10-28	SP10-29	SP10-30
7	SP10-31	SP10-32	SP10-33	SP10-34	SP10-35
8	SP10-36	SP10-37	SP10-38	SP10-39	SP10-40
9	SP10-41	SP10-42	SP10-43	SP10-44	SP10-45
10	SP10-46	SP10-47	SP10-48	SP10-49	SP10-50

SP11区・K15区土層

図III-98 柱穴状の小土壇 (12) SP10・11区土層

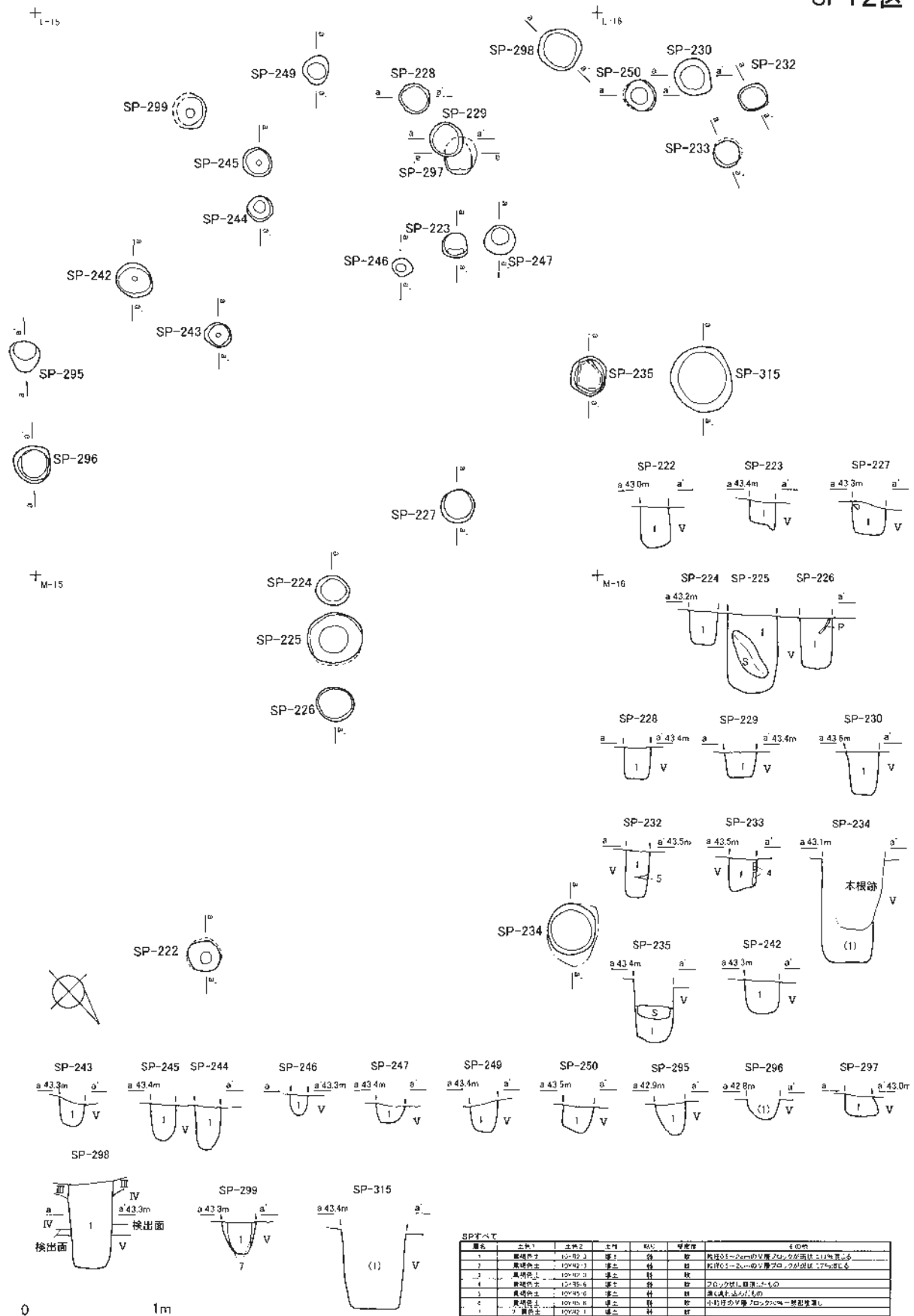


SP11区



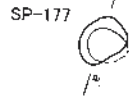
図III-99 柱穴状の小土壇 (13) SP11区

SP12区

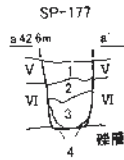


図III-100 柱穴状の小土坑 (14) S P12区

+<sub>P-17</sub>



+<sub>P-18</sub>



MSP-177						
層名	土質1	土質2	土性	貼り	厚程度	その他
1	腐植土	NY4B.2	粘土	弱	概	
2	腐植土	NY2B.8	粘土	弱	概	小粒砂の混入(土田5%)
3	腐植土	NY4B.1	粘土	弱	概	本層上の砂~小礫角径2% 約

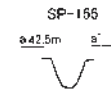
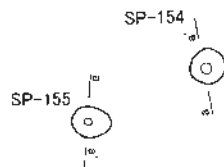
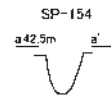


+<sub>Q-17</sub>



+<sub>P-14</sub>

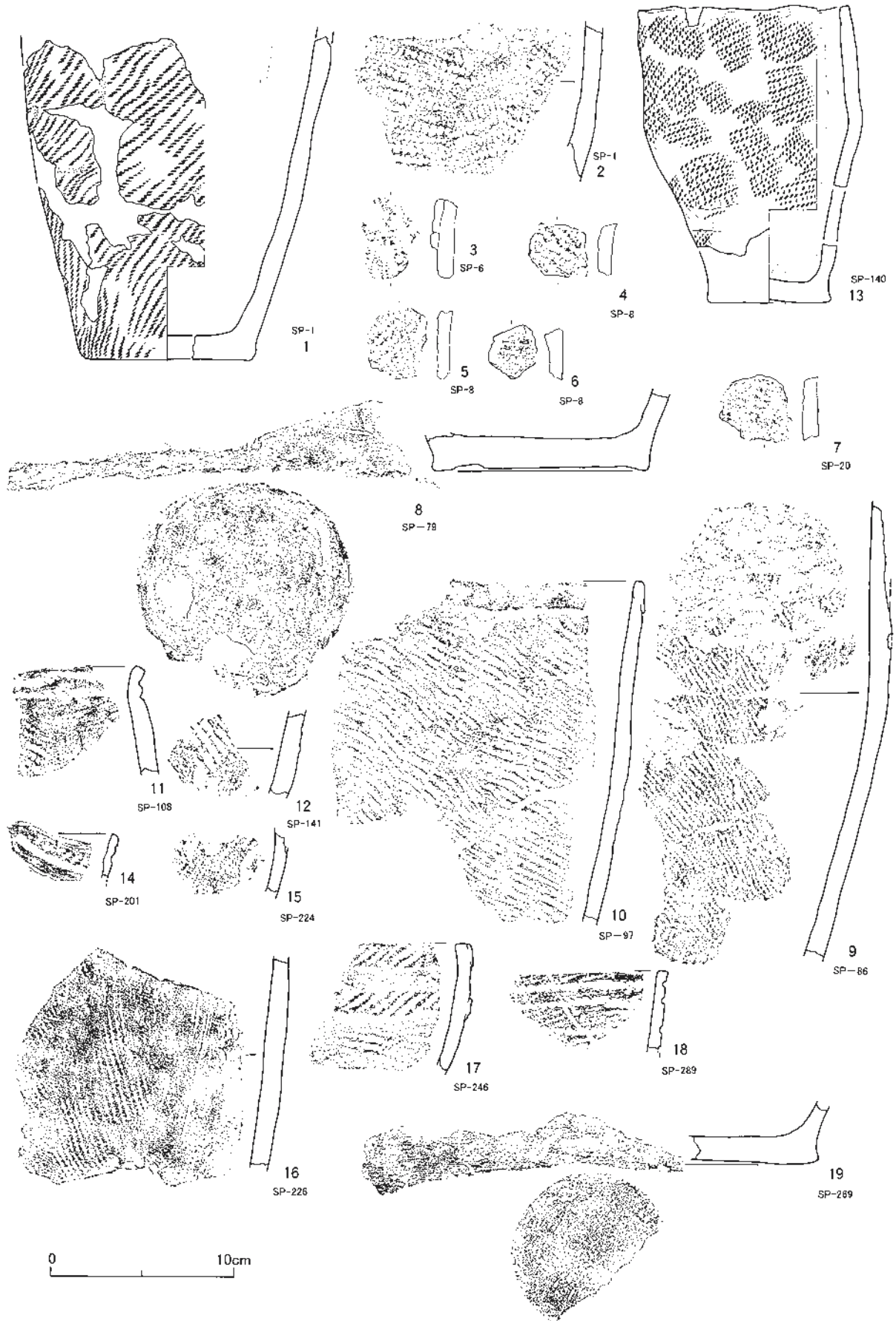
+<sub>P-15</sub>



図Ⅲ-101 柱穴状の小土壇 (15) S P 13区

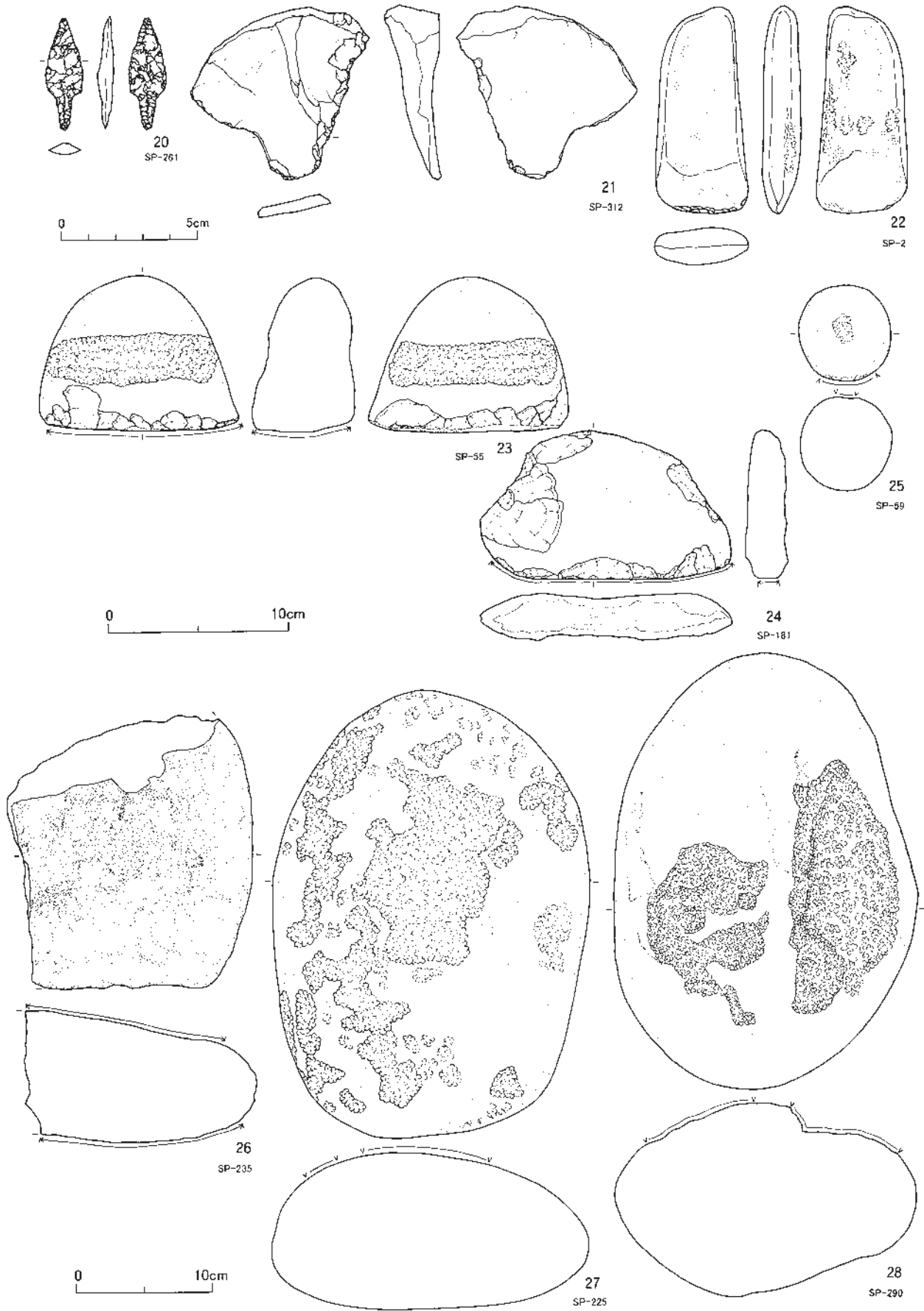
柱穴状小土壇掲載遺物 土器：(図Ⅲ-102、図版75・76) 以下の記載のほかに、K14区に位置するSP-38と49について、覆土出土のIV群a類土器が碎片どうしではあるが接合した。1・2はSP-1の覆土から出土した。いずれもIV群a類である。1は覆土中からほぼ完形で出土した。RL縄文を縦方向に施文する。内面は縦方向のミガキ調整である。底面もミガキ調整である。2はLR縄文を横走させる。内面は縦方向のミガキ調整だが成形時の輪積痕や指頭圧痕が残る。胎土には微細な角閃石粒が密に混じる。3はSP-6の覆土から出土したⅢ群a類である。RL縄文施文後、隆帯文様を貼付し、その上にRL縄文を施す。縁辺が打ち欠かれており、再生土製品と考える。円板形が欠損したものである。4～6はSP-8覆土から出土したⅢ群a類土器である。RL縄文を地文に持つ。縁辺が打ち欠かれており、再生土製品である。円板形が欠損したものである。7はSP-20覆土から出土したIV群a類である。LR縄文を地文に持つ。縁辺が打ち欠かれており、再生土製品である。円板形を作ろうとしたものと考えられる。8はSP-79覆土から出土したIV群a類である。底部破片であり、覆土からの出土である。内外面および底面にミガキ調整を施す。9はSP-86から出土したIV群a類である。覆土中からまとまって出土した。LR縄文を縦方向に施す。内面は縦方向のミガキ調整を施す。10はSP-97から出土したIV群a類である。SPの覆土中からまとまって出土した。折り返し口縁部は無文、LR縄文を縦方向に施文する。外面について胴部上半部にはよく煤が付着、内面は使用によるものか摩滅が著しい。11はSP-108覆土から出土したIV群a類である。LR縄文を縦方向に施文後、ナデ調整によって口縁部を無文地にした後、LR縄線を施す。内面縦方向のナデ調整だが、輪積痕残る。口唇部には平坦面をとる。12はSP-141覆土から出土したIV群a類である。RL縄文地文施文後、ケズリのようなミガキ調整である。

13はIV群a類である。SP-190からまとまって出土したものとO14区のもの1点が接合した。輪積み痕跡を胴部の屈曲部より下、および口縁部などに所々残して器を成形し、LR附加縄文を施文する。胴部の中央に明瞭な屈曲部分がありそこから直立する器形である。屈曲部より上の器面に煤が顕著に付着する。内面は主に縦方向のミガキ調整 やや張り出し気味の底部形態であり、底面はミガキ調整である。14はSP-201覆土から出土したIV群a類である。涌元Ⅱ式である。RL縄文施文後沈線およびミガキ調整。口唇部丹念にミガキ調整。内面は部分的に剥落する。15はSP-224覆土から出土したIV群a類である。LR縄文地文で、内面は縦方向のミガキ調整である。縁辺が打ち欠かれており、再生土製品に関連するものである。円板形を作ろうとしたものと考えられ、中央部に当たる部分に穿孔を試みた痕跡がある。16はSP-226覆土から出土したIV群a類である。胎土には小石が混じる。LR縄文を縦方向に施す。縄文施文後、板ナデを思わせる調整を施す。破片の上部には煤が付着する。17はSP-246覆土から出土したIV群a類である。LR縄文施文後タガ状の貼付帯を持ち、そこにLR縄文を施す。内面は横方向のナデ調整で、器形は口縁部がやや内彎する。18はSP-289覆土から出土したIV群a類である。外面をナデ調整して無文地にした後にLR縄線を施す。口唇部には平坦面をとる。内面は横方向のナデ調整。19はSP-269覆土から出土したIV群a類である。内面はミガキ調整。外面は底面についてもナデ調整が著しい。



図Ⅲ-102 柱穴状の小土壇の遺物(1) 土器

石器：(図Ⅲ-103、図版76) 20はS P-261覆土出土の石鏃である。黒曜石製で両面全面調整である。凸基有茎で長さは幅の3倍以上である。21はS P-312覆土出土のスクレイパーである。頁岩製で、礫皮を側縁に残す。刃部は一側縁にあり、明瞭な調整である。22はS P-2覆土出土の石斧である。緑色泥岩製で、素材の形状を生かしたものだが、全面に研磨が及ぶ。弱凸強凸の偏刃である。23はS P-55覆土中位から出土した北海道式石冠である。安山岩製で楕円礫の割礫を用いている。敲打によって持ち手部分を整形する。機能面には敲打痕と長軸方向にのびる擦痕がある。敲打によるものか機能面には剥離が巡る。敲打痕は面を整形する際のものか使用時のものか両方の可能性がある。24はS P-181覆土最上部からの出土した偏平打製石器である。安山岩の扁平な礫片を用いたもので、縁辺両面に打ち欠き痕が巡る。機能部は最大16mmの面を持つ。機能面には長軸方向に走る擦痕があり、縁辺には敲打痕と細かい打ち欠き痕が巡る。25はS P-59覆土出土のたたき石である。安山岩の球礫を用いたもので、一端に特に明瞭な敲打痕がある。26はS P-235覆土出土の台石である。濁川火砕流起源の安山岩で、楕円礫の平らな両面に擦痕がある。27はS P-225覆土出土の台石である。安山岩の楕円礫の平らな面に敲打痕がある。28はS P-290覆土出土の台石である。安山岩で、厚みのある楕円礫を用いる。比較的平らな側の面に敲打痕がある。(大泰司)



図Ⅲ-103 柱穴状の小土壌の遺物(2) 石器

## IV 包含層の遺物

包含層からは遺物が154422点出土した（図IV-1～97）。土器は縄文時代後期前葉が多く、石器は偏平打製石器の出土量が目立つ。F-36に関しては、旧H-5の炉として調査したものである。遺物を再検討した結果、F-36との関連性が高いと判断した包含層出土遺物（旧H-5）についてはF-36の項に記述している。

### 1. 土器・土製品

土器は145225点出土した（図IV-1～70・94・95）。IV層からの出土が多い。25ライン以南に多く分布するがI26区において160点出土するなど30ラインの沢においても多いところがある。L～N-15～19区において集中している。また、9～12ラインにおいても比較的集中する。

II群b類は887点、III群a類は13614点、III群b1類は790点、III群b2類は47点、III群b3類は6点、III群b類で細分できなかったものが122点、IV群a類が128755点、IV群b類は708点、VI群は214点である。碎片や摩滅しており、接合作業を経ても分類ができなかったものは75点ある。ただしIII群a類か、IV群a類の可能性が高いものである。再生土製品を除いた土製品・焼成粘土塊は7点ある。

II群b類はIV層下位からの出土比率が他の時期に比べて多い。J・K-7～12区に比較的まとまっていた他、P8・9区、I20区、M17・18区、H24区に集中した出土がある。

III群a類はIV群a類に比べてIV層下位からの出土が多い。22ライン以南によく分布する。M8～10区、N8区・O～Q-8～10区の8ライン沢地形付近に特に多い。13ライン以南に多く、また、M16・17区、J20区からの出土が比較的多い。

III群b1類はほとんどがIV層からの出土である。榎林式の可能性が高い、口唇に大木8b式の系譜を引く沈線文を持つものと、ほかに天神山式の相当するものも含めた。III群a類はサイベ沢VII式と見晴町式まで含めたため胴部破片ではIII群a類とIII群b1類の区別ができないものがあった。III群a類のなかにIII群b1類の胴部が含まれている可能性がある。接合作業によって判別できたものはIII群b1類に含めた。J12区、I21区に集中した出土がある。天神山式はK～M-8～10区、J10・11区からよく出土する。

III群b2類はIV層中位からの出土があった。大安在B式、ないしは榎林式の新しい段階のものを含めた。J10区、K14区から出土した。

III群b3類はIV層からの出土である。短刻沈線のあるもの、タガ状の隆帯を持つもので、断面が丸みを帯びる中期末葉の可能性が高いものである。J15区・M11区・O8区から出土している。

III群b類としたものはIII群b1類～b3類に属すると考えられる破片のうち、細分し難いものはここに含めた。K12区、M8区、O12区にまとまりがある。

IV群a類は天祐寺式の可能性のあるもの、涌元式、トリサキ式、大津式、白坂3式と、これらに並行する沈線文を持たない土器群などである。IV層の上位にいくほど出土量が多くなる。M・N-15～18区、I・J-19・20区、8ラインの沢地形際である10ライン付近に比較的まとまって出土した。

IV群b類はウサクマイC式、加曾利B1式並行の土器である。白坂3式と共通する文様要素のものについては、口縁部文様帯の最上部で、口唇部際を一本の沈線で区画するものをIV群b類に分類した。IV層の下位からの出土が少ない。L～P-8～12区におおよそまとまっている。

VI群は続縄文時代の土器である。L-15～18区、N～P-8～10区から比較的集中して出土する。





図IV-1 包含層出土の土器(1)

土製品はI-13・14区、M-15・16区にまとまる。ミニチュア土器について深鉢型のものについてのみそれぞれの土器分類、細分後、集計し、その中から特徴的なものを抽出して土製品の項目に図示した。再生土製品については一旦、土器破片として分類し、細分後、縁辺に加工痕があると判断したものを抽出して土製品の項目に図示した。土器の中から388点を抽出した。その内訳はII群b類が4点、III群a類が272点、IV群a類が110点、VI群が2点である。

**II群b類土器：**(図IV-1、図版78・79) 1~19はII群b類である。縄文時代前期後半、円筒下層b式~d2式が出土している。1は円筒下層c式である。2・4・14は円筒下層d1式である。3・5・15・16・18は円筒下層c~d式にの範疇である。6は円筒下層b~c式に相当する。7・8・9・10・11・12・17・19は円筒下層d2式である。13は円筒下層d式の範疇のものである。いずれも胎土に繊維を含み、内面はミガキ調整が顕著である。1・2・4・7・12・13・14・16は胎土に海綿骨針を含む。

1は口縁部文様帯を単軸絡条体で区画し、綾繰り文と押し引きを施す。2は口縁部に羽状縄文が巡り、胴部には簾状の地文を持つと考える。3は横走する単軸絡条体によって口縁部文様帯を区画し、その直下には絡条体の圧痕が並ぶ。4の口唇部には単軸絡条体が横方向に走る。5は結束第1種羽状縄文を地文に持つ。6は隆帯によって口縁を区画し、隆帯上に縦に縄線を押圧する。7は四単位の波頂部破片とみられる頂部にはボタン状貼付を持つ。絡条体による矢羽根状の圧痕を持つ。8・9は多軸絡条体を地文に持つ。8は口唇部には半截竹管による押し引きが並ぶ。9は隆帯で区画された口縁部文様帯にLR縄による単軸絡条体と半截竹管による押し引きを連続させたもので充填する。10はLR縄にRL縄を単軸絡条体風に巻きつけたものを口縁部に施す。この原体を口唇部に連続して押圧する。11の口縁部文様帯は単軸絡条体に角度を違えて縄をさらに2回巻きつけたものを口縁部に施し、ミガキ調整を加えるためのものである。口唇部にはLR縄を連続して押圧する。口縁部文様帯は隆帯で区画され、隆帯上は円形刺突を押し引く。地文は結束第2種羽状縄文と単軸絡条体を縦方向に施文したものを簾状に組み合わせる。12は多軸絡条体の軸の圧痕とLR縄線を口縁部文様帯に施す。地文は多軸絡条体である。口唇部にはLR縄の圧痕を連続して施す。軸は縄などの柔らかいものという可能性がある。13は単軸絡条体にLR縄を2本密に巻きつけたものを施す。14は結束第1種羽状縄文と単軸絡条体を縦方向に交互に施すものである。15はR縄による網目状絡条体を地文に持つ。底部きわまで地文が施されていること、胎土に繊維が顕著に含まれることから縄文後期前葉の網目状絡条体地文の個体とは区別した。16はR縄の単軸絡条体を縦方向に施文したものである。17は隆帯で口縁部文様帯を区画する。隆帯上から口唇部までRL縄線を施す。胴部は多軸絡条体である。19は多軸絡条体の地文である。

**III群a類・III群b1類：**(図IV-2~11、図版77・80~89) 1~12,14~89、102~109はIII群a類である。円筒上層d式の一部を含めてサイベ沢VII式並行のものが多い。器形等から見晴町式と判断したものと一部並行関係にある可能性が高いものもあるため、III群a類と、同一項目で記述する。13・89~101は榎林式の手集めたIII群b1類である。円筒上層b式並行のものは14~17・23・26である。円筒上層c式並行のものは1・2・18~20・22・25・27・29・33・43、円筒上層d式と並行するものは28・30・31・32・34~38・39・40・41・42・44・45である。サイベ沢VII式の範疇のものと考えられるものは3・5・6・7・8・9・10・11・46・48~77、見晴町式並行のものは47・78~89である。榎林式の手集めたIII群b1類は90~102である。円筒上層式の編年観は三宅徹也(1989)に従った。ただしこの遺跡について、三宅がメルクマールとした文様要素が当てはまらない(馬蹄形の縄圧痕から半截竹管の刺突への変化がb式とc式の差等)可能性がある破片についてはそのつど施文された文

様全体を考慮して分類した。サイベ沢土器型式の変遷は高橋正勝（1994）に従った。d式に並行するもので比較的新しいものや、北海道の在り色が強いものの位置付けにサイベ沢Ⅶ式を用いた。また榎林式については南茅部町大船C遺跡の成果（1996）を参考にした。

1～13は復元個体である。その場でまとまっていたものが接合したものがほとんどである。拓本にした、14の土器は大型で残存率も高かったが、破片数がそれに復元に満たなかったものである。1は口縁部の肥厚した文様帯まで縄文が及ぶものである。これはd式の要素である。胴部の中央部膨らみのピークから隆帯を貼付し、その上に絡条体を転がす。文様には馬蹄形圧痕の連続押圧も用いられる。文様構成からc式の範疇と判断した。2は口縁部まで縄文を施した上に無文の粘土紐を貼付し、波頂部の下にはボタン状の貼り付けを連続して縦方向に貼付する。サイベ沢Ⅶ式の範疇で、円筒上層d式に並行するものである。3は半截竹管による押し引きが口縁部に巡る。文様の簡略化の様子からサイベ沢Ⅶ式並行と判断するが、古い要素を持つものである。4は胴部文様帯の下部から残存しているものである。8ラインの沢地形において焼土F-18・19より下位から出土したものである。胴上部に文様帯を持ち、文様帯には絡条体による施文がある。円筒上層c式の新しいもので1と並行のものと考ええる。5・6はサイベ沢Ⅶ式期の波頂部に付く突起である。いずれも胴体部との接着部分に一筋の溝が走っており、成形時の接着に有効であったものと考ええる。7・8はサイベ沢Ⅶ式の小型器形である。いずれも残存部分から2単位の波頂部が想定できる。8はゆるやかな四単位の波状口縁を持つと考ええる。9は二つで一組の突起様の頂部を4単位持つ。10・11は斜行縄文地文であり、サイベ沢Ⅶ式において新しいものである。小型器形であり、特異的なものではあるが8についてもその可能性がある。12は見晴町式である。2本一組の沈線で円筒上層d式に類する文様を胴部上半に持ち、断面三角形の口縁部は細い粘土紐で縁取る。波頂部については内面も縁取る。13はⅢ群b1類とした榎林式の古手のものである。口縁部は3単位の、大型な山形突起の間に小型の山形突起が一つずつ配されている。断面三角形の口縁部には大木8b式起源の沈線文を施す。12とは、口縁部断面形態と深鉢の形状が似ているため並行関係にある可能性は高い。

14～17は円筒上層b式である。14はF-36の調査の際、H-5を想定してとしてトレンチ調査した時に出土した。接合状況から判断すると、F-36構築以前に沢地形へ向けて廃棄されたものである可能性が高い。結束第2種羽状縄文で、隆帯の区画内にはLR縄やRL縄の縄線がふちどり、RL縄による馬蹄形圧痕が連続する。隆帯上にはRL縄による押圧が連続する。残存部分から、口径は27cm前後、器高は50cmを超えるものと推定できる。P-74の覆土中からも同一個体が出土している。15は口縁部文様帯に縄端を連続して刺突する。17は口縁部の文様帯の幅が広く胴部中央部近くまで及んでいる。

18・20～25・27～29は隆帯によって構成される文様帯が無文地の上に貼付されるものである。18・21・24・25は半截竹管による押し引きが連続する。円筒上層c式並行と考える。25は横方向に直線的に連続する。20・22・23は馬蹄形の縄圧痕が連続する。23については上層b式の破片の可能性もある。20は文様帯が2段構成で、胴部中央まで及ぶため、そして22は隆帯文様の簡略化から上層c式並行の可能性もある。28は隆帯上に刺突を持つもので、単純な隆帯文様の構成と一部縄文地に隆帯が貼付されていることも踏まえると、円筒上層d式の可能性がある。

19・26・30～36・38・42～45は縄文地文の上に粘土紐を貼付するものである。19・43は隆帯の文様構成から円筒上層c式並行の可能性もある。他は円筒上層d式並行と考える。37は無文地に隆帯を貼付するものである。39・40は大型の波頂部中央に付いていた把手である。

41・46～77はサイベ沢Ⅶ式である。41・46～58・78は隆帯による貼付を口縁部に持つものであり、

60～70は隆帯を持たず口唇部に連続する刺突や押圧を持つものである。64・65は縦方向の回転が見られるものである。71～76は魚類の椎骨を回転させた文様を地文に持つものである。これらの魚骨はニシンの可能性が高い。77は半截竹管による沈線文を持つ小型器形である。47の肥厚した口縁部に施された沈線は大木8b式起源のものに類似し、新しくなる可能性もある。57・74は波状口縁中央の把手が剥落したと考えられる痕跡がある。

78～89は見晴町式である。78～82、84、87～89は主に波頂部に無文で細い粘土紐を貼付する。79～81・83～89は断面三角形の口縁部が榎林式の口縁部を思わせる。86・87・89は円筒上層式起源の沈線文を胴部上半に持つ。83の縄線文は榎林式の沈線文を思わせる。

90～101は今回便宜上、Ⅲ群b1類の分類を用いた中期後半の最初の土器群として位置付けた。90～98は榎林式の古手の一群である。90は無文の粘土紐で渦巻き文様を成形する。四単位で向かいあう一組が対となり右回転90aと左回転90bの2種類が交互に隣り合うものである。91～94は断面三角形の口縁部に大木8b式起源の沈線文が施される。91～95は円筒上層式起源の沈線文様を胴部に持つ。98は大木8b式起源の渦巻き文様を胴部に持つものである。96は円筒上層の文様と大木式の文様が複合化ないしは在地化した沈線文を持つ。99～101は天神山式並行のものである。99・100は肥厚した断面三角形の口縁部を持つ。100・101は隆帯の上から半截竹管による連続押し引きを施すものである。101は天神山式そのものである。

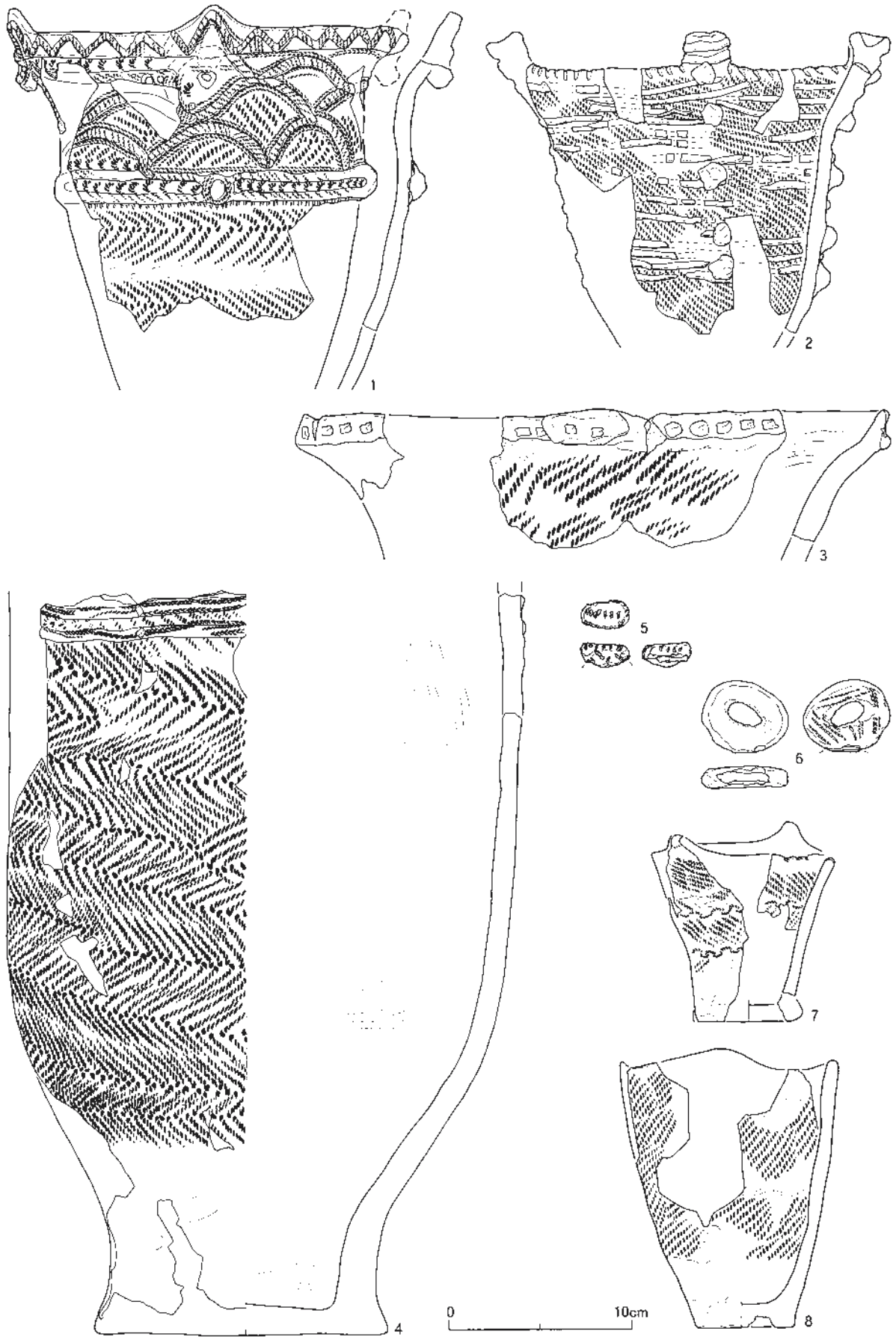
102～109はⅢ群a類もしくはⅢ群b1類の底部である。102は小型の器、104は胎土と形状から見晴町式のもの可能性がある。105は編物圧痕が残る底部である。圧痕の上からミガキ調整を加えたため上げ底となった中央部のみ圧痕が残る。106は板状の篋で一定方向に強くナデたもので、明瞭な擦痕が残る。107は円筒下層d式並行の底部と考える。108は縦方向の短沈線が底部際の胴部連続する。109は魚類の椎骨の圧痕が残る。この骨の魚種は判断できなかった。

**Ⅲ群b2類、Ⅲ群b3類：**(図IV-12、図版89) 110～112は大安在B式に近いもの、大木9式にほぼ並行するものである。110・112については、榎林式のうちⅢ群b1類としたものより新しい段階のものという可能性もある。110は大木式起源の沈線文様を持つ胴部破片であり、111は口縁部を無文にし、大木9式並行のものである。112は絡条体を縦に施文した後、半截竹管による蛇行沈線を胴部に施したものである。113はタガ状の隆帯を持つ口縁部で、隆帯貼付後、その上から胴部にかけて縄文を施す。レンガ台式の可能性もあるものである。114は底部内面につけられた突起である。このようなものは道央部では柏木川式に見られる115は無文の口縁部を持つ可能性が高い胴部破片である。胴部と口縁部の境目は微妙に肥厚し、短刻沈線文が連続している可能性がある。

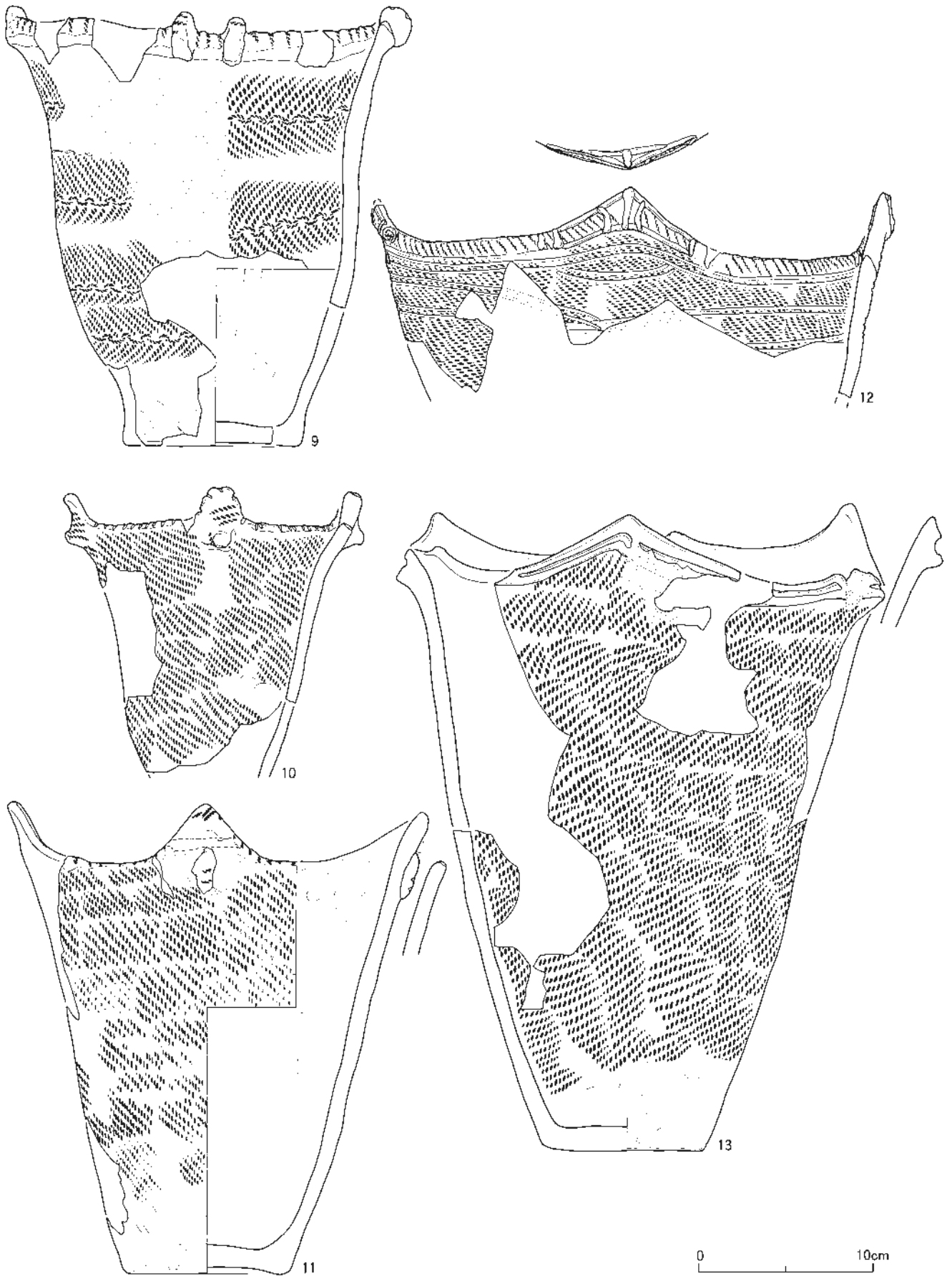
**Ⅳ群a類：**(図IV-13～30、32～67、図版81・90～154) 涌元式に並行するものがほとんどである。内面はミガキ調整であり、口縁部内面を横方向、その下は縦方向のものが多い。折り返し口縁の成形方法については器面に粘土紐を貼付するものより、輪積み成形の一環として口縁部を継ぎ足して折り返し状にするものが多い。図示した量が多いため、図と照合した説明の便宜を計り、「涌元式～トリサキ式とそれらに並行する可能性が高いもの(図IV-13～26、32～61、図版81・90～152・154)」についてまず復元個体の図と破片資料の拓影図の2項目に分けて記載し、その後、「大津式・白坂3式(図IV-27～30・62～67、図版86～106・104～152・154)」に分類されたものについて記述する。

**Ⅳ群a類・涌元式～トリサキ式とそれらに並行する可能性が高いもの(図IV-13～26、32～61、図版81・90～152・154)**

**復元個体(実測図を中心として)：**(図IV-13～26、図版81・90～104) Ⅳ群a類のうち涌元式に関連する復元個体は、1～17が涌元式ないしはそれに並行する沈線文様を持つ土器である。18～84は涌元



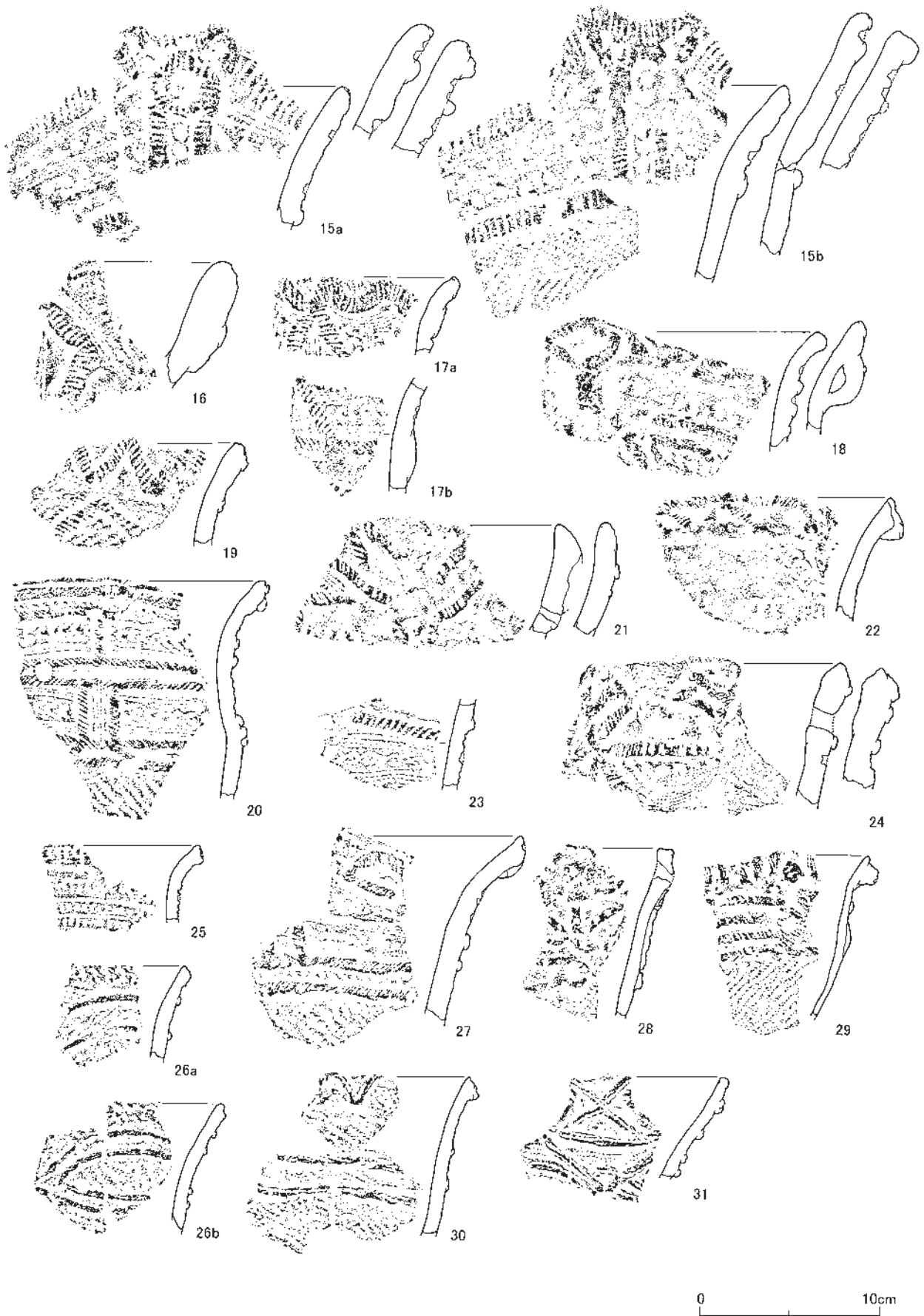
図IV-2 包含層出土の土器(2)



図IV-3 包含層出土の土器(3)

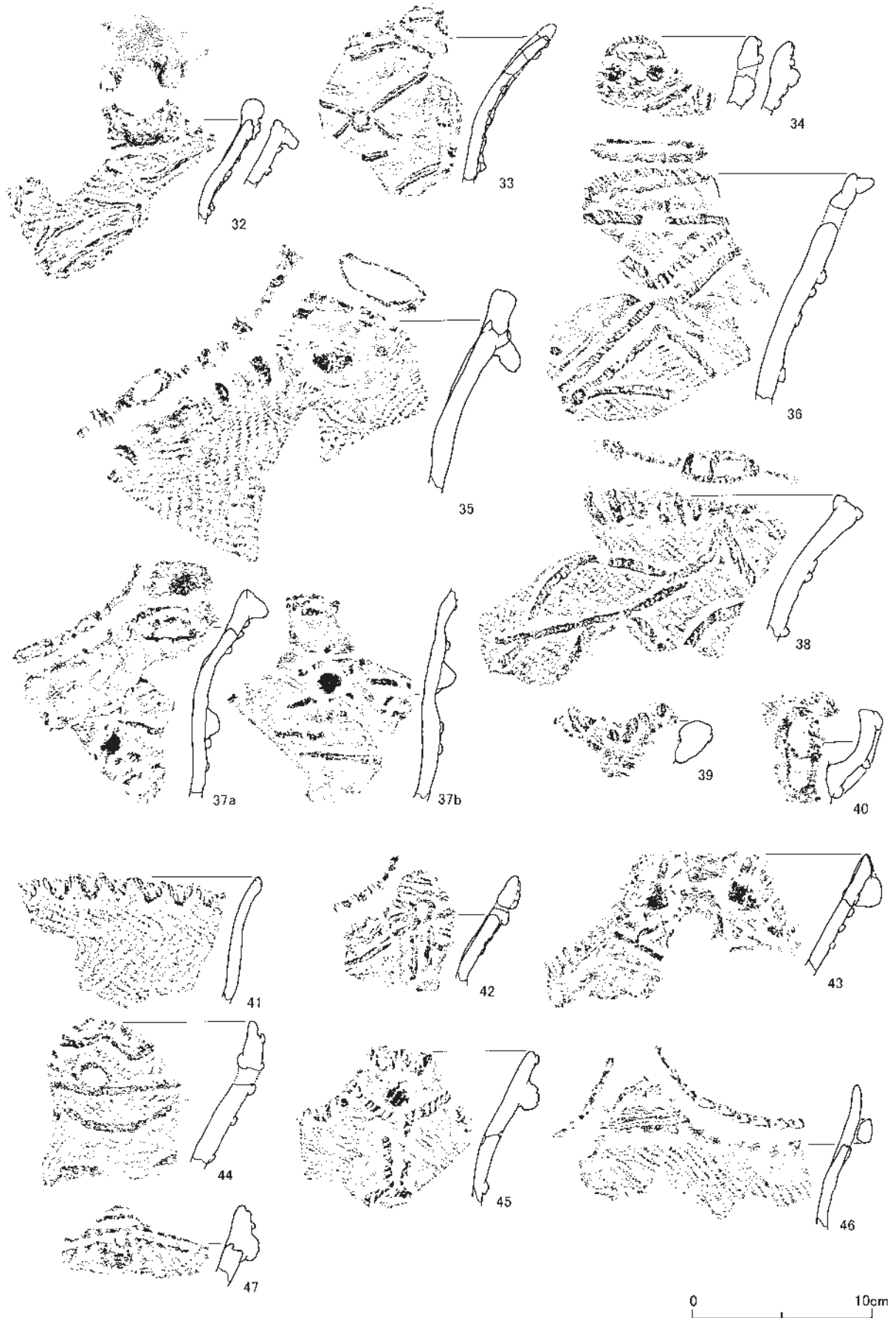


図IV-4 包含層出土の土器(4)

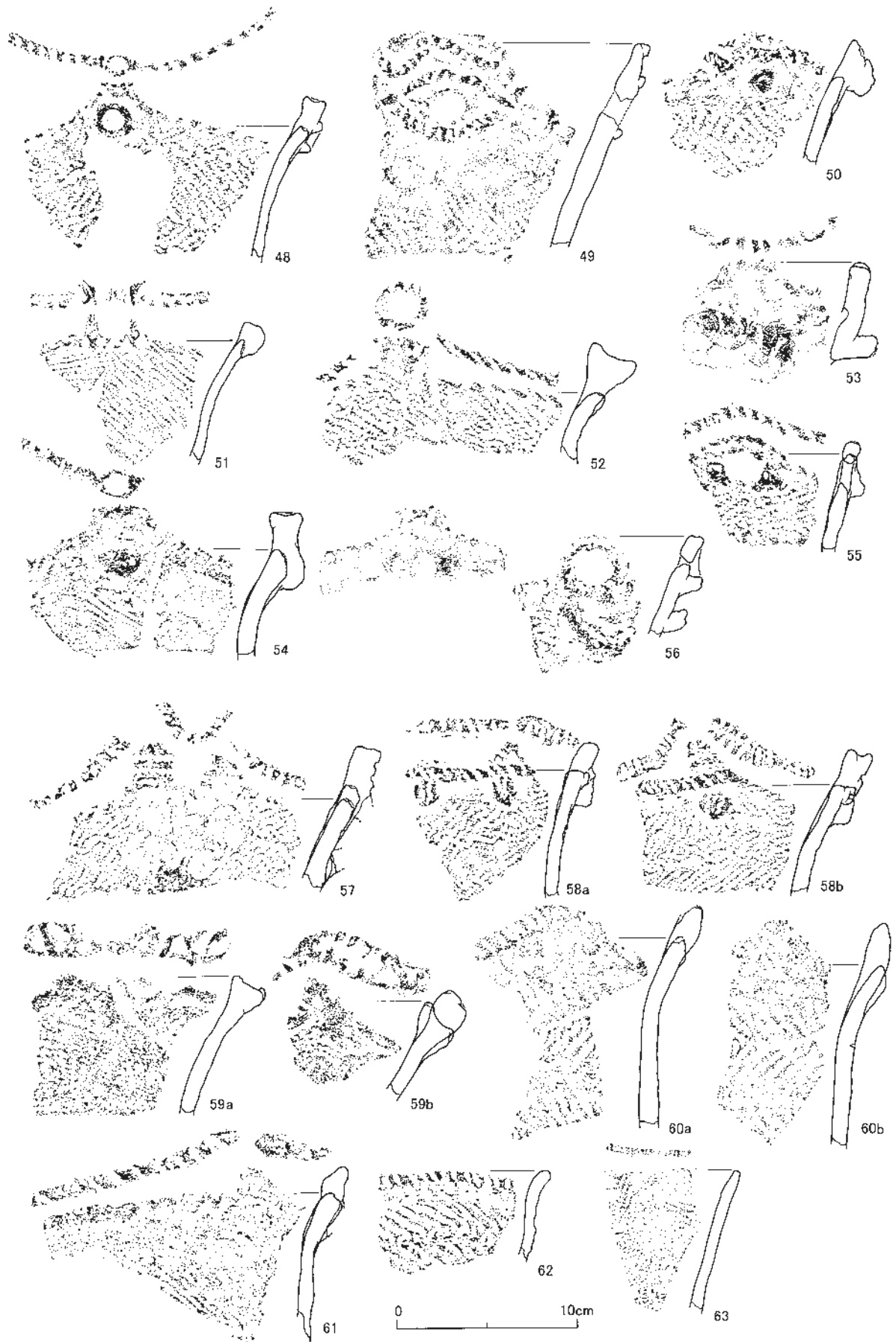


図IV-5 包含層出土の土器(5)

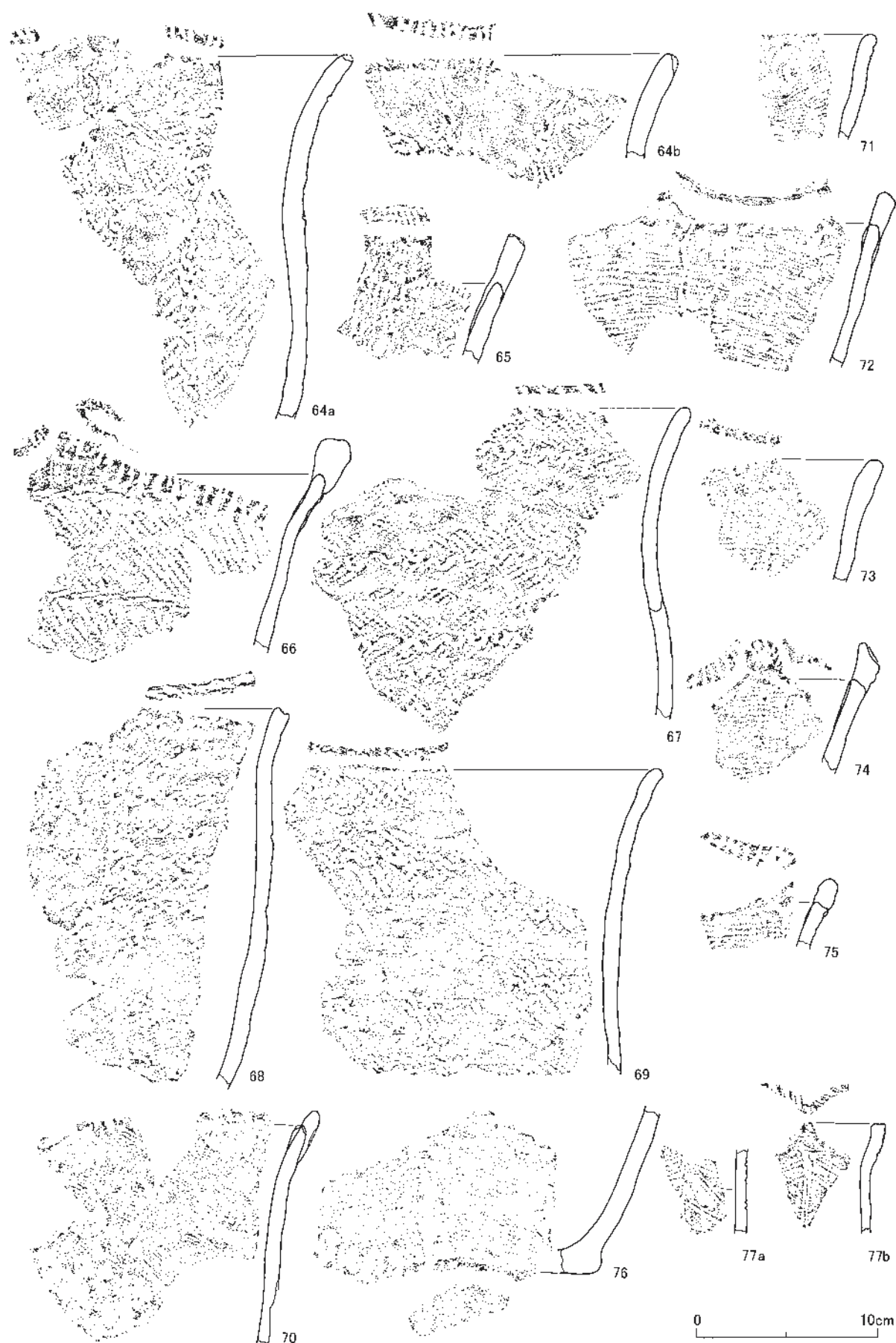




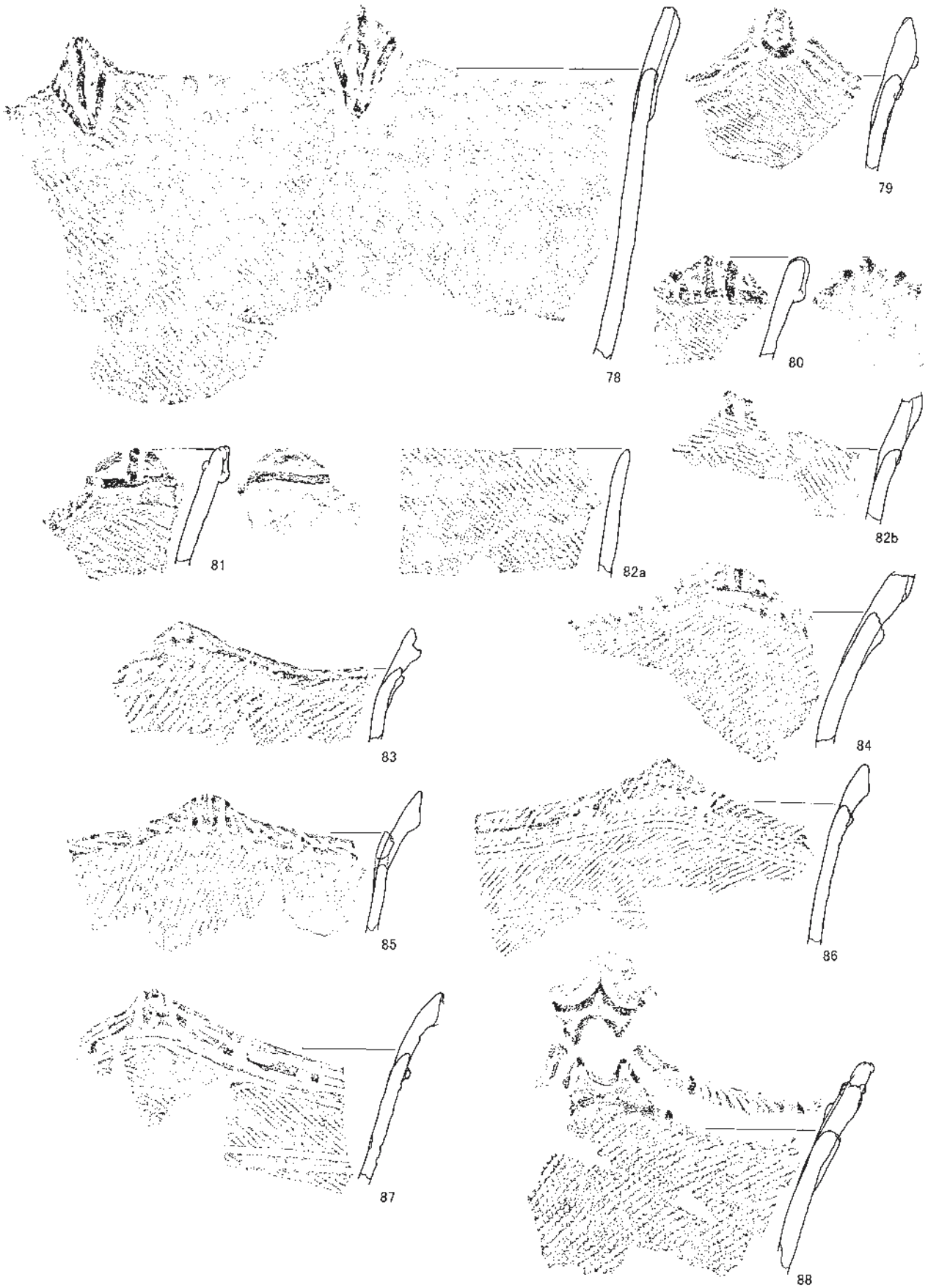
図IV-6 包含層出土の土器(6)



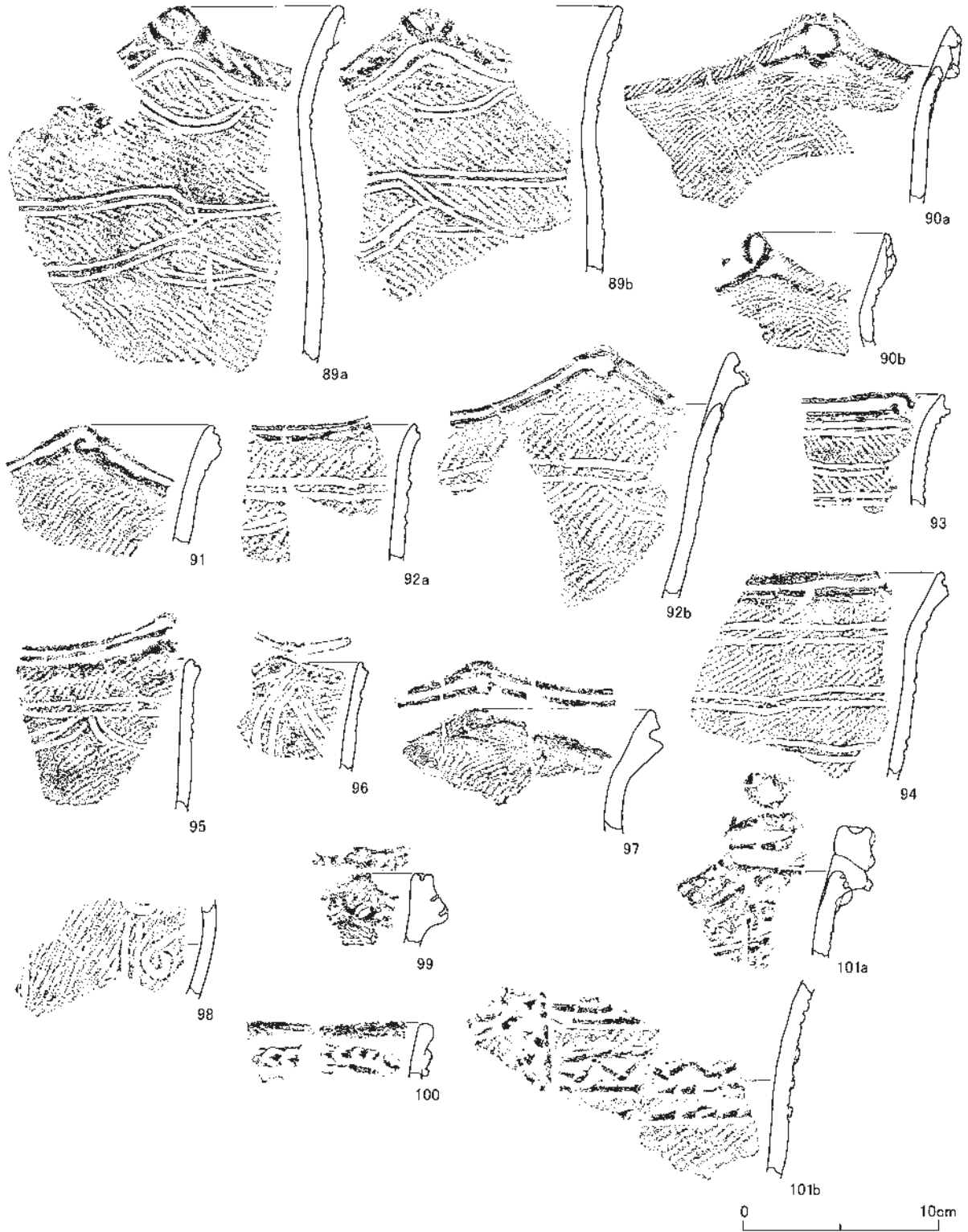
図IV-7 包含層出土の土器(7)



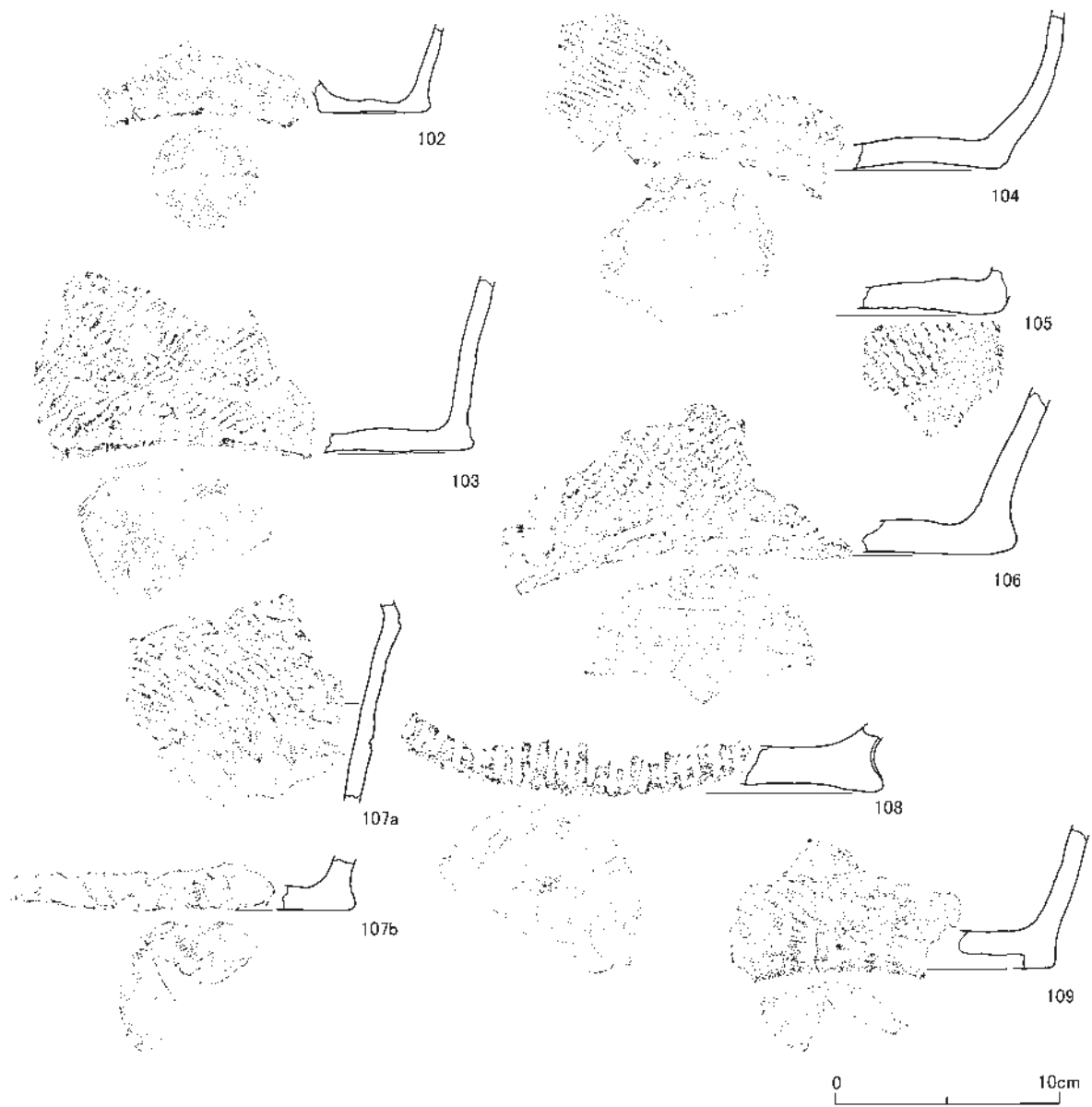
図IV-8 包含層出土の土器(8)



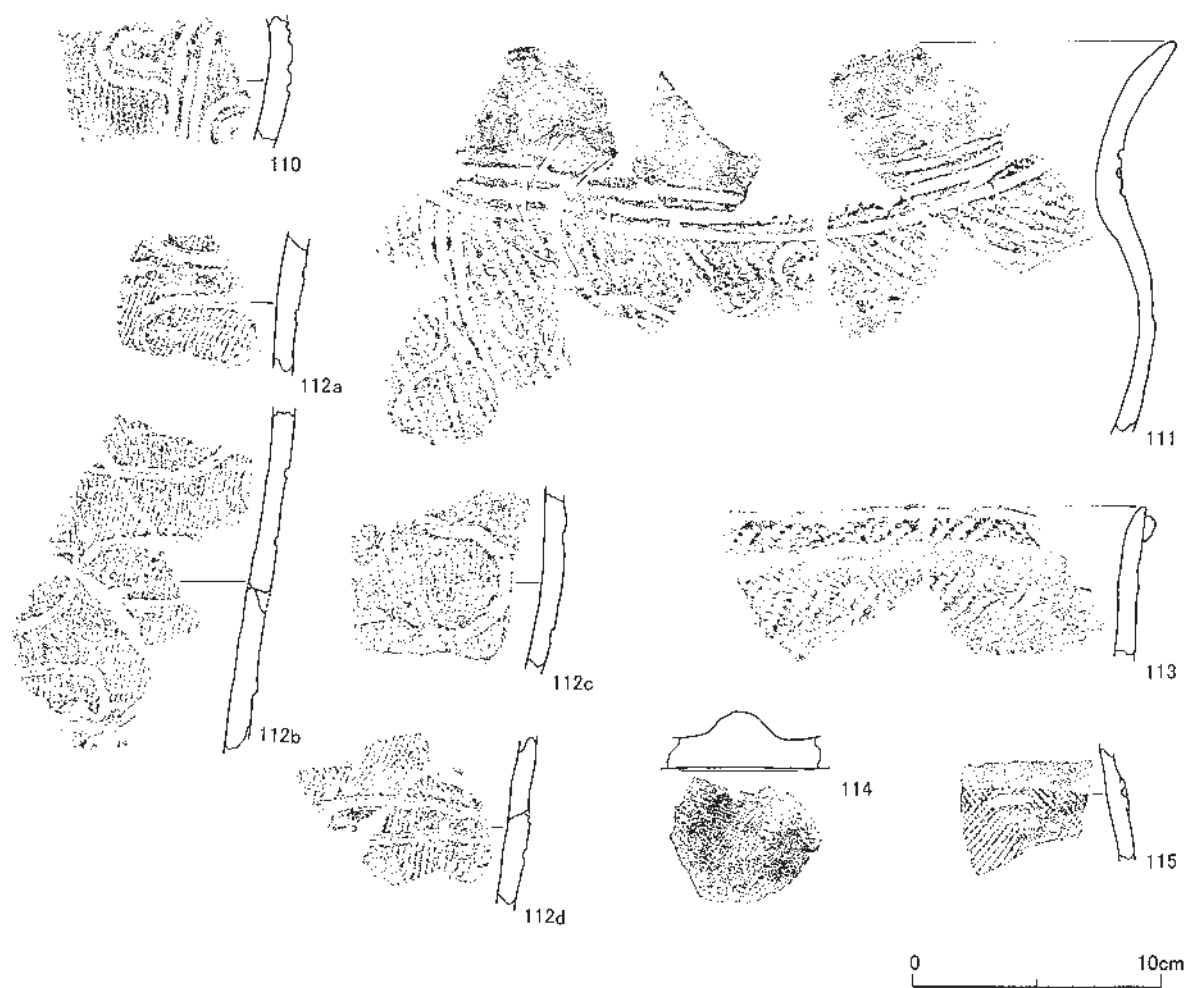
図IV-9 包含層出土の土器(9)



図IV-10 包含層出土の土器 (10)



図IV-11 包含層出土の土器 (11)



図IV-12 包含層出土の土器 (12)

式の沈線文を持つ土器と主に共伴すると考えられる、沈線文を持たない土器である。ただしトリサキ式、大津式、白坂3式に共伴する個体も含まれている可能性がある。

涌元式については解釈の範囲、時期の幅が研究者ひとりひとりについて異なっているのが実情である。特に涌元I式についてまちまちであり、用語として用い難い。担当者自身で涌元式の変遷観を調べたところ（海峡土器偏年研究会 2003）、青森県内出土の土器に共通する要素が多く認められ、対比するにあたって葛西 勵の編年観（2002）に矛盾がなかったため、涌元式について新旧を示すのに利用するものとした。VI章の土器の頃で対応関係を示した。

復元個体について、1～10は青森県内の土器との対比によって、比較的時期が明瞭なものである。1・5はL縄文、2・4・6・7はLR縄文、3・8はRL縄文を地文とする。1・2は横走、4・5・7・8は縦方向、6は縦・横方向に、7は磨消縄文に則して、3は口縁部の肥厚帯は横方向、胴部は縦方向に縄文を施す。横走は施文の結果横方向に縄の条が並ぶもの、縦走は縦方向に並ぶものを指すものとした。縦走横走のものについては、縄文施文後、ナデ調整を加えたように見えるものが多い。表中ではそのように記述した。しかし、この痕跡は、縄文が横走ないし縦走して見えるように、原体を操作した指の痕跡、つまりすでに施された縄文の上で指を滑らせた痕跡も含むものである。

1は古段階のものである。牛ヶ沢（3）式期に並行する、ないしは蛭沢I式の古手のものとする。胴部上半は丸みを帯びて膨らむ。頸部からよく外側へ開く口縁部である。頸部からは無文であり、口縁部には縄線文を持つ。図化した面（1a）にはないが、他の口縁部の波頂部（1b・c）については渦巻き文様を施す。胴部には蛇行する沈線文を横方向に施す。ところどころ隅丸方形の沈線区画内に2列の刺突文様を配したものを施す。

2はLR縄文を横走させた上にLR縄線を2条施す。その上から半截竹管による沈線文を施す。沈線は不規則な斜行する沈線の連続である。蛭沢I期における二等辺三角形区画の鋭角部分のラインを思わせる。内彎する口縁部形態である。3は涌元式並行の土器である。胴下部まで薄い隆帯の両脇を沈線で縁取ったもので器面を飾る。蛭沢I期に並行するものとする。4は無文の折り返し口縁を持つものである。縄線を2条一組にして三角形文を連続させる。所々に縄端圧痕を施す。蛭沢I期の三角形文の連続を連想させる。5～7・10は蛭沢I期と並行するものである。5～7は蛇行沈線を垂下させる文様に特徴がある、頸部を持った深鉢である。5は折り返し口縁の直下に屈曲部を持ち、3本一組の三角形の連続文様について頂部から底辺の中心を結んで蛇行沈線施される。6は頸部から口縁部にかけて無文とし、波頂部から沈線文を垂下させる。無文部分は新しい要素の可能性がある。7は口縁部から胴部にかけて、2本一組の横走する沈線で区画する。10は壺形土器である。頸部に接点が無かったが同一個体である。表面をミガキ調整によって無文とする。8・9は蛭沢II期に並行する土器である。いずれも擦り消し文様を持つ。8は頸部に無文の区画を持つ。横方向の蛇行沈線が三角形の区画内の中心に配される。

11～17は不規則な沈線文を持つものである。11は折り返し口縁部にも沈線文がある。折り返し口縁は直下で屈曲し外反する。不規則な沈線文だが、ところどころに三角形と渦巻き文を思わせる沈線がある。おおよそ横方向へ展開する。蛭沢I～II期の文様要素がある。12は折り返し口縁の土器で、2本一組の沈線と渦巻き文様、斜行する沈線が組み合う。斜行沈線は三角形の一辺の角度を思わせる。蛭沢I期の要素がある。11・13はL縄文、12・16・17はLR縄文、14はRL縄文を地文に持つ。11・13・14は縦方向、12は横方向、16・17の口縁部は横方向、胴部は縦方向に施文する。13は口唇部に微妙な折り返し口縁を持つ。いびつな器形で、成形時にゆがんだものとする。14は無文の折り返し口縁を持つものである。複数本を一組にして蛇行沈線、不規則な文様を垂下させる。15はミガキ調整に



よって無文とし、櫛状の沈線を器面に施す。縦方向に垂下させた沈線を横方向に波状に連続させた上から水平に沈線をおおよそ等間隔に施す。16の口縁部には3本一組の沈線がゆるやかな鋸歯状に横方向に連続し、三角形の区画を思わせる。胴部には渦巻き文様風で、不規則な沈線文様が横方向に展開する。口唇部には刺突が連続する。17は無文の折り返し口縁を持つもので、表面には輪積み痕を残し、多段の折り返し口縁風とする。胴部には渦巻き文様を組み合わせた不規則な沈線文様が横方向に展開する。

18～20は貼付を持つものである。18はL縄文、19・20はLR縄文を原体とする。18・20は横走、19は縦方向に施文する。18・19はボタン状の貼付を持つ。18はタガ状の折り返し口縁部を持ち、口縁部の無文帯を2本の隆帯で区画し、おおよそ六単位で6個一組のボタン状貼付が施されたものである。ボタン状貼付はところどころ剥落している。張り出す胴部と明瞭な頸部に特徴がある。輪郭は直線的で丸みを余り持たない。19は小型で、2本の縄線を口縁部に持つ。四単位の波頂部があり、波頂部の下について、それぞれの縄線上に縦に二つのボタン状貼付を貼り付ける。20は棒状の貼付を三単位で貼り付ける。

21～39は口縁部に縄線を持つ個体である。21・22・24・25・26・29・33・34・37・39はLR縄文、27・36はLR縄による単軸絡条体、28・30・35・38はRL縄文、23・31はL縄文を地文に持つ。22・25・30・32・33・34・35・38は横走、28は縦走、21・24・27・36・37・39は横方向、23・26・29・31は縦方向に施文する。口縁部を無文にし、そこへ縄線を施しているものが多い。38以外は同一原体による縄線を施している可能性が高い。21は口縁部と口唇部に2条の縄線を持つ。22・29は器面に輪積み痕を残す個体である。23は無文の折り返し口縁部の下に縄線が2条並ぶものである。24・33・39は折り返し口縁の折り返し部分に縄線を一条施すものである。25はいびつな双頭の波状口縁を持ち、縄文を横走させるものである。27は単軸絡条体を横方向に施文する。28は縄文を縦走させる個体である。折り返し口縁の上に縄線を一条施し、頂部には粘土の塊で特に肥厚させる。33は双頭の波状口縁を持つ。36は底面に編物圧痕を持ち、上からミガキ調整が施される。絡条体地文で絡条体圧痕が口唇部に施される。37の波頂部には粘土塊を貼付して肥厚させる。

40～48は折り返し口縁を持つ土器で口縁部の上端まで縄文を施すものである。40・41・42・45・46・47・48はLR縄文、43・44はRL縄文、はL縄文、はR縄文、41・45は横走、は縦走、43・44は横方向、46・47は縦方向、40・42・48は口縁部の上部を横方向、胴部を縦方向に施文する。40～43は輪積み痕を器面に残し、複数段の折り返し口縁風に成形する。44は一段目が折り返し口縁で、下部は輪積みみを、口縁とは独立させて、等間隔に残したものである。48は十単位近い波状口縁である。

49・50は底部の残存する胴部破片である。49はLR縄を横走させ、50はL縄を縦方向に施文する。50は胴部中央に貼付帯ないしは輪積み痕を明瞭に残している。

51～67は折り返し口縁部を無文にしたもの、または意図的に口縁部に無文部分を広くとったものである。55・56・58・61・62・64・65・66・67はLR縄文、51・52・53・54・57・63はRL縄文、59・60はL縄文を地文に持つ。51・52・53・54・55・56・57・61・62・63・65・66・67は横走、58・64は横方向、59・60は縦方向に施文する。51は頸部を含む胴上部から口縁部にかけて無文である。口唇部には沈線が走る。52は2段以上の折り返し口縁を持ち、波頂部は粘土塊によって肥厚させる。明瞭な頸部を持つ。53は5～7段の折り返し口縁を持つ。四単位の突起状の波頂部を持ち、頂部には押圧痕がひとつある。54は口縁部の無文帯を一本の沈線で区切る。55～57・59は明瞭な頸部を持つものである。折り返し口縁の直下が頸部であり、無文の折り返し部分が外側へ強く開く。60は胴部中央に原体の圧痕が残る。61は内彎する口縁部形態を持った大型の個体である。58・62は明瞭な頸部を持ち、

波頂部は粘土塊によって肥厚する。58は四単位、62は六単位の可能性がある。63は折り返し口縁部分の輪積み部分からより強く外反する。64～65は不明瞭な折り返し口縁部分を無文にした小型のものである。64・67は内彎する器形であり、66は三単位である。67は不整な波頂部を持つ個体である。不整な無文の折り返し口縁部と張り出す底部形態を持つ。

68～75は折り返し口縁部がなく、口唇部際まで縄文を施したものである。口唇部の成形時に口唇際の部分について幅の狭い無文帯が生じたものが多い。71・72はL R縄文、69・70・74はR L縄文、68・73はL縄文、75はR縄文を地文に持つ。69・71は横走、70・72・74は横方向、68・73・75は縦方向に施文する。68～70・72～74は13と器形が類似する深鉢である。13のように蛇行沈線が施されてはいないが、口唇部について、丸みを帯びた面をとる点と、胴部から底部にかけての丸みをおびたラインが似ている。71は明瞭な頸部を持つ。75は器面全体に軽いナデ調整を施す。

76～84は全面無文としたものである。76～79は折り返し口縁部を持つ。76～78は器面に輪積痕が残る。81・83～84のように小型の器形が目立つ。

**破片資料（拓影図を中心として）：**（図IV-32～61、図版109～144）112～162は涌元式に並行する沈線文を持つものである。

112・114・115・117は牛ヶ沢（3）式期あるいは蛭沢Ⅰ式について古手のものの可能性がある。117は真っ直ぐ立ち上がる胴上部を持つが、ほかは明瞭な頸部を持ち、丸く膨らむ胴部を持つ。口縁部には縄線を持つ112・115と沈線文を施す117がある。113・118もこの時期の破片である。116と119は縄文地を施した折り返し口縁の土器の胴部に沈線文を持つものである。J字文風であり、大木10式の系譜を引く可能性もあるが、貼付帯とは異なる明瞭な折り返し口縁で、横方向の展開を持つ沈線文の可能性が高い。蛭沢Ⅰ式の文様の在地化ないしは簡略化とも考えられる。

134～139は蛇行沈線を垂下させるものである。138と139は口縁部に縄線文が施される。蛭沢Ⅰ式のモチーフの簡略化と考える。135・137のように振幅の大きい蛇行沈線については牛ヶ沢（3）式並行まで遡る可能性もある。半截竹管によるもの（135・138・139）がある。128は小型で、縄線文と横方向に展開する波状文が組み合うものである。141～142は折り返し口縁部を持ち、その下に沈線文を施すものである。143は胴部から底部にかけての破片である。128・141～143の沈線文は、蛭沢Ⅰ式の三角形文様を思わせる角度に斜行する直線ないしは、U字形を呈する曲線が施される。140の口縁折り返し部分には沈線が施される。144は単軸絡条体を縦方向に施文し、渦巻き文様を数本一組の沈線で描く。薄い器壁と丸く膨らんだ胴部を持つ。

145～155、159は蛭沢Ⅰ期に並行するものである。三角形の沈線文が天地交互に横方向に連続し、頂部と底辺中央を結んだライン上に、蛇行沈線または、渦巻き文がある。146・155のように頸部より上が無文地になるものは蛭沢Ⅱ式に近い時期の可能性もある。156・157は刺突列を持つものである。蛭沢の範疇に収まるもので蛇行沈線の垂下文を伴うことから、Ⅰ期の範疇と考えるが、156は146に文様が類似し、157は垂下する直線的な文様を複合させるので、Ⅱ期に近いものと推測する。

158・161～162は蛭沢Ⅱ式に並行するもので、三角形内には渦巻きや横方向の蛇行沈線を縦方向に長軸のある楕円形に納めた文様に変化したものである。頸部は縦方向に長さを持ち、161のように無文帯を持つものもある。160もこの時期と推定される小型のものである。文様構成から推定すると、頸部に無文帯を持つ土器とほぼ並行する時期のものであろう。

120～125は明瞭な磨消縄文を持つものである。120～123のように明瞭に肥厚した口縁部を持つものがある。122～123のように波頂部に縦方向の刺突列や、121のように貫通孔を持つものは堀之内式の文様を思わせる。これらは蛭沢Ⅱ期に並行するものである。

126・127・129～133は横長の長楕円形が連続する文様を持つ。127は微妙な頸部があり、無文である。また折り返し口縁部には一条の縄線を施す。130・132は無文の折り返し口縁の直下に頸部がある。丸みをおびて膨らむ胴部を持つ。130の頸部はよく屈曲し、胴部の丸みも強い。133は草本などの断面による刺突列が縦に並ぶ。

165～167は残存する文様からトリサキ式の可能性が高いと判断したものである。166は縄文地文の上に切れ目のない沈線文様を描くものである。166～167は無文地に沈線文を施したものである。166は輪積み痕跡の上に薄く粘土をナデつけて無文地にした上に沈線文を施している。167についてもその可能性がある。

169～170・172～174は壺形である。無文地の上に沈線文を施す。蛭沢Ⅰ～Ⅱ期の可能性が高いものである。168・169は把手部分である。170は無文地の隆帯を貼付したものである。173は焼成前の生乾きの状態の際、草本の串を連続して刺し込んで、連続する穴を穿ってから、それを利用して切断した壺の胴部側である。171は鉢状の器形である。無文のものは輪積み成形後、薄く粘土を塗りこめて無文地にし、その上に沈線文を施したものである。170・171・174は直線的な文様構成であり、蛭沢Ⅱ期の可能性がある。175～180は無文地の上に沈線文を施した壺形、鉢型のような特殊器形で小型なものである。蛭沢Ⅰ～十腰内Ⅰ式の前半のものとする。176・179はトリサキ式に並行する可能性がある。176は表面が黒色化しており、意図的に焼成上の操作をした可能性がある。177は小型の切断壺である。173と同様な成形方法である。178～180は朱塗りの塗膜がかすかに残る。

181～187・192・203～206・209はボタン状の貼り付けを持つものである。181・203・204は縄線が組み合わされ、貼付上に縄端圧痕が押圧される。209は貼付の中央に刺突を持つものである。184・187は復元個体である18に類似するものである。185・186は縄線が組み合うものである。205・206と209は磨り消し縄文と組み合うものである。205は草本による竹管状の施文具による円形刺突が縦に垂下する。206は大型のボタン状突起を貼付する。中央には刺突がある。磨り消し縄文と組み合うもので牛ヶ沢（3）式並行の可能性がある。

191は半截竹管による刺突列を頸部に持つものであり、頸部より上の口縁部を無文にするものである。193は無文の折り返し口縁部分に指の爪の跡が連続して圧痕されるものである。202は縄線2本の間にC字形の縄圧痕を連続させるものである。

188・189・190・192～201・207・210は刺突列を持つものである。188・189・207は隆帯上に円形刺突が連続するものである。188・189は折り返し口縁に伴うものである。207は隆帯による「し」の字状の貼付に伴うものであり、牛ヶ沢（3）式に並行する可能性がある。190は半截竹管の断面側による沈線による沈線文と刺突列が組み合うものである。192・194は口縁部文様帯を刺突で充填するものである。192はボタン状の貼り付けが伴う。196～200は横走る沈線と横方向に連続する刺突列が組み合うものである。198は縄線が組み合うものである。199は波頂部を粘土塊によって肥厚させる。199はよく内彎する器形である。全体に直線的な輪郭で、屈曲部は丸みを帯びない。210は口縁部まで縄文を施文した深鉢について横方向に2列の竹管による円形刺突を連続する。

208は隆帯を貼付後、その上に半截竹管による押し引きを施すものである。

212～250は縄線文を口縁部に持ち、沈線文を持たない土器群である。211～220は折り返し口縁に伴うものである。211は無文の折り返し口縁部分に縄線2本施し、そしてその間に竹管状の工具による円形刺突文が横方向に連続する。212は内彎する器形で、輪積み痕を外側に残し、複数段の折り返し口縁部を持つものである。213は明瞭な稜を持つ2本の無文の隆帯を口縁部に持ち波頂部の下には環状の貼付を持つ。丸く膨らむ胴部と、隆帯直下には明瞭な頸部を持つ。胴部の膨らみの最大径と頸部

の間には縄線を持つ。牛ヶ沢(3)式段階の土器の可能性ある。217は外反する器形である。214・215・217～222は明瞭な頸部を持ちそこに無文帯を持つものである。214は地文の上をミガキ消して2本の無文帯を形成する。小型で複数の波頂部を持つ。223～226は波頂部である。225・226は粘土塊の貼付によって波頂部を肥厚させる。頂部には縄線による圧痕を持つが、223・225はヘラによるキザミである。227～230は器形が判るものである。微妙な上げ底のものが多い。228・229は三角形の波頂部を持つ。228は三角形に縄線圧痕を施す。229は輪積みによって波頂部を成形した痕跡が明瞭である。231～242は外反する口縁部形態を持つ深鉢である。243～250は内彎する口縁部形態を持つ深鉢である。251～257は沈線文を持たないものである。251～318は折り返し口縁を持つものであり、319～357のように持たないものがある。そして、251～345は縄文地文のものであり、346～357は無文地のものである。

251～271・273～285は折り返し口縁の深鉢で、全面縄文を施すものである。251～253はタガ状の貼付帯の断面について角の稜線が明瞭なものである。天祐寺式からの系譜を引くものである。時期的に後期初頭まで遡るものも含むと考えるが、沈線文様を持つ涌元式が八雲町内ではほとんど出土していない。蛭沢Ⅰ期～Ⅱ期まで、渡島半島の中でも噴火湾沿いの北部を中心に、この形状の貼付帯が残る可能性がある。251・252は胴部にも貼付を施すものであり、252は2本の貼付帯に挟まれた無文帯を持つものである。259・260は貼付帯に比較的、厚みがないもので新しい要素の可能性ある。260～263は口縁部に貼付帯で挟まれた無文帯を持つものである。261～263は縄線を伴うものである。隆帯上に施されるものがほとんどであるが、263のように無文帯中央に施されるものもある。264～270・273～274は頸部を持つ深鉢である。266の屈曲は浅いが、折り返し口縁部直下の頸部に無文帯を持つ。270～272は輪積痕を外側に意図的に残し、多段の折り返し口縁状に仕上げたものである。一段目の口縁部はおおよそ無文にする。271は外反する器形である。272は底部を含む胴下半部の破片である。273は微妙な頸部を持つ。275～277は外反する口縁部を持つ深鉢である。285は口縁部が内彎する器形の深鉢である。283～285は内彎の度合いが強い。280は胴部上半で丸みを持ってひとたび膨らんで開き、そのまま真っ直ぐ立ち上がる器形である。これは微妙に内彎する器形であるが、胴部上半の形状は241・242・266・342について類例がある。

286～318は折り返し口縁部を持つ深鉢のうち、折り返し部分を無文にするものである。286～292・296は頸部を持つ深鉢である、293～295・297～306・308・309・311・312外反する口縁部形態を持つ。307・310・315～318は内彎する口縁部形態の器形である。

386は際立って肥厚する折り返し口縁部を持つ。288と296は折り返し口縁部の直下ないしは折り返し部分に屈曲部がある。289～291は小型の器形で、口唇部の面取りをした結果、折り返し口縁部の端が反りかえりさらに屈曲するものである。283・293～295は輪積み痕を器面に残し、複数段の折り返し口縁に仕上げるものである。折り返し部分は無文にする。301・302は折り返し部分を輪積みする際、より外側へ貼り付けたため、内面に段を持つものである。303は折り返し口縁風に一本の粘土紐で口唇部を成形し、その部分を無文としたものである。粘土が固まってから縄文を施文したためか、施文の圧痕が浅い。313～318は内彎する器形である。316は折り返し口縁部分について貼り付けた口縁部が屈曲するように内彎する。317は顕著に内彎する器形だが、折り返し口縁部分で微妙に外反する。318は突起様の波頂部の頂部に縄線による圧痕を施す。その上から頂部を押し付ける。縄文がかすかに残るが、上から縦方向の擦痕を施す。

319～345は折り返し口縁部を持たない個体であり、口縁部まで縄文を施文するものである。327・333・339・341・342は口縁部と胴部で縄文地文について施文の角度を変える。折り返し口縁部を思わ

せる。342は特にその幅が広い。319～312は頸部を持つ深鉢である。319～320は頸部よりも上を無文にする。322は口唇部のみ成形時の際についていたものか無文とする。323～335は外反する口縁部を持つ器形である。340・344は内面へ器壁が屈曲して、内彎する口縁部を持つ。342は胴上部で丸みを帯びて一端膨らみそのまま真っ直ぐに立ち上がる。343～345は内彎する口縁部を持つ深鉢である。

346～353・355～357は無文地の深鉢である。主に縦方向のミガキ調整によって無文とする。354はL縄文を横走させた後、口縁部に幅広くミガキ調整を施したものである。縄文地文部分も上からナデられたため、条の輪郭が不明瞭である。346～348は折り返し口縁を持つものである。ただし346は頸部を持つ深鉢で、頸部より上を無文にするものの可能性がある。348は輪積み痕を器面に残す。349と350は草本によってミガキを施したのか、擦痕が条線のように明瞭である。351は成形の手順上微妙な頸部と口縁部の膨らみを生じたものと考えられる。355は器壁の焼成が良好で、補修孔を持つものである。356は小型のものである。

358～361・363～366は絡条体による地文を持つものである。363は沈線によって格子目状の文様を描くものである。Ⅱ群b類、前期後半、円筒下層式土器にも網目状絡条体の地文を持つものがある。しかし、地文施文後に底部を成形し、微妙に張り出す底部形態であること、胎土に繊維を多く含まず、焼成が良好なこと、口唇部の作り方が最後に一本の粘土紐を用いて整えていく方法が観察できること、を目安にしてⅣ群a類に分類した。138は無文の折り返し口縁を持つ。360は口縁部と胴部で絡条体施文の角度を変化させる。361は磨消文様を伴い、蛭沢Ⅰ～Ⅱ式並行である。362は輪積み痕を器面に残し、複数段の折り返し口縁風にする。359は絡条体を横方向に施す。365は上げ底形状の底面に編物の圧痕を残す。364は内面の下側によく煤が付着する。366は底面を条痕が残るようなミガキ調整を施す。

367～400は底部破片である。Ⅳ群a類のもので涌元式ないしは沈線文様を持たない後期前葉の土器の底部と判断した。367は底面の縁辺に指頭の圧痕、368は棒状の圧痕が残る。369・373・399は編物の上をミガキ調整、374は編物圧痕の上にナデ調整、370は編物圧痕、371はナデ調整で無文にした後、沈線で格子目文、372・375・376・378～385・398は木の葉の圧痕、387～392は笹の葉を重ねたものの圧痕をそれぞれ底面に持つものである。369は草本、373は縄、399は草本と縄の編物圧痕である。374は編物圧痕を底面に持つものだが、この底面部分の成形は粘土板を積み重ねて作ったものであり、底面の表面が剥落した部分においても同様な網目状圧痕が観察できる。木の葉圧痕を持つものは375・376・380～382・385のように複節縄文の地文を施すものが目立つ。384は木の葉圧痕の他に草本の茎の圧痕も持つものである。398は木の葉圧痕の上にミガキ調整を施すものである。

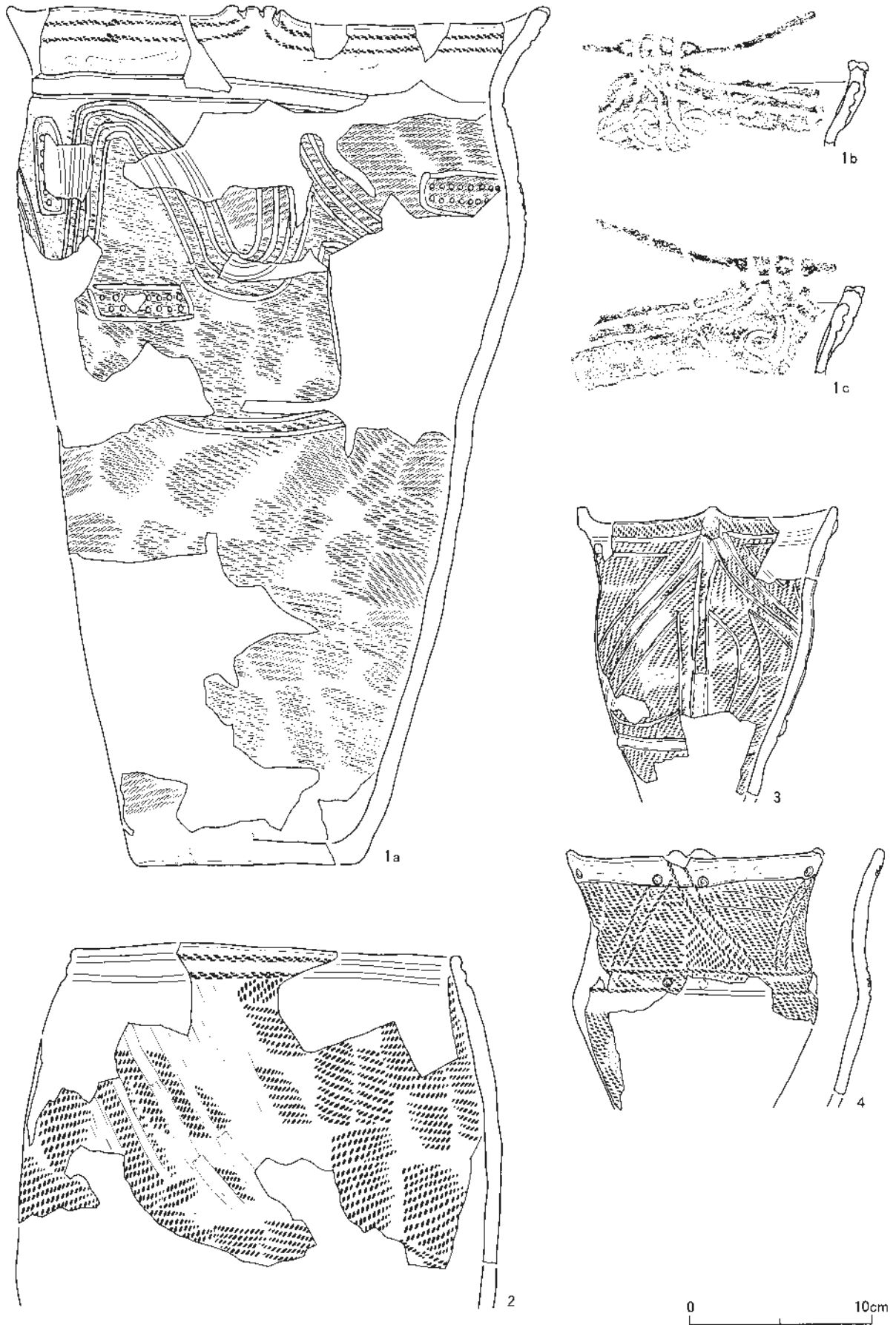
微妙な上げ底に377・395・400はミガキ調整、394・396・397はナデ調整を施して無文にする。395は指頭による成形か、凹みを4ヶ所持つものである。400はミガキの際についていたものか、沈線状の痕跡が残る。393はすぼまる底部に粘土紐を環状に貼付し、高台風にしたものである。

#### Ⅳ群a類・大津式（大津7群）・白坂3式：（図Ⅳ-27～30・62～67、図版86～106・104～152・154）

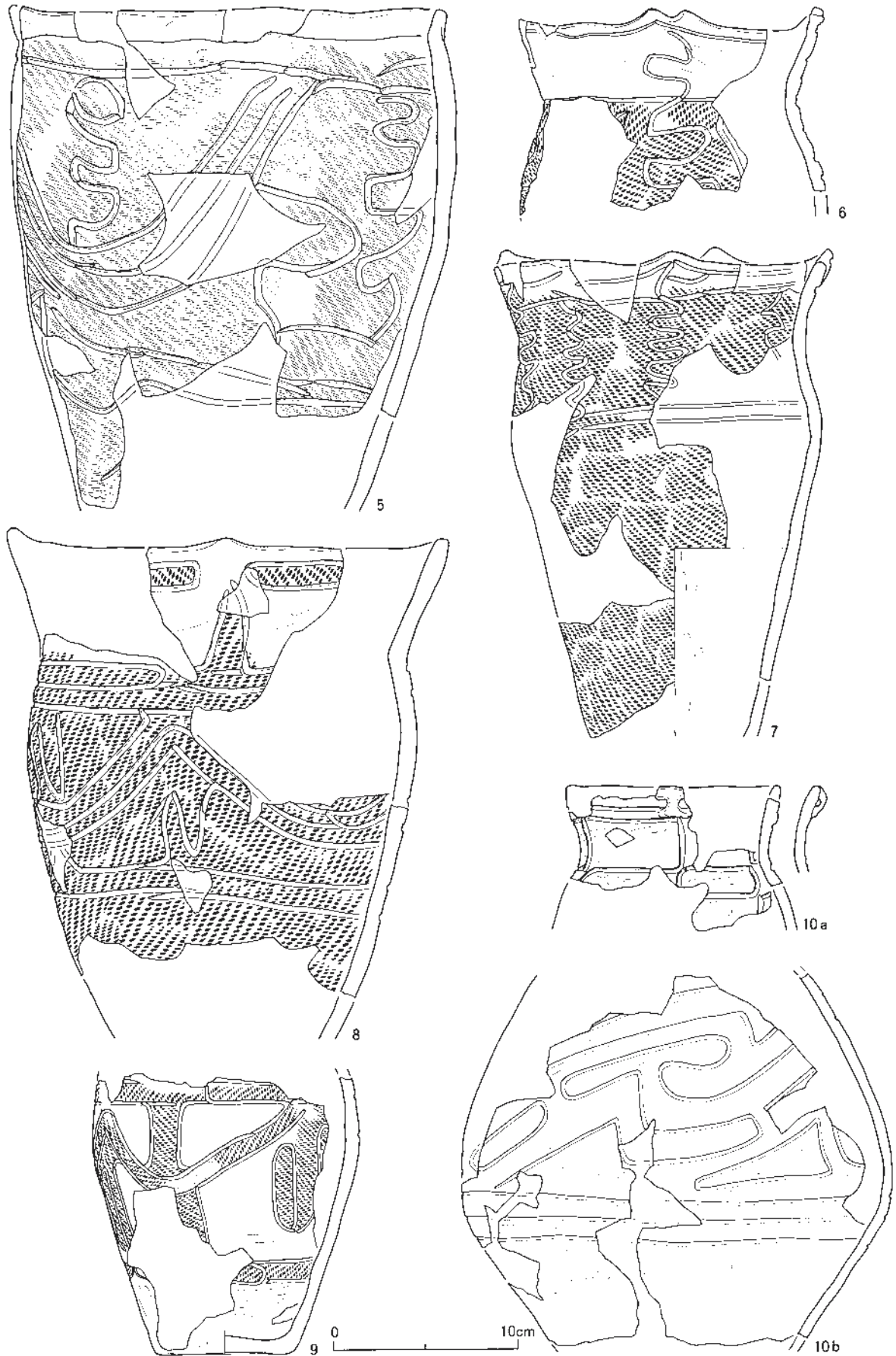
85～102・401～440は大津式と白坂3式である。クランク状文様あるいはその変形した沈線文のみが並んでいるもの、カニバサミ状の文様が文様構成中に入るものを大津式とした。

85～101・401～425・428～430は大津式である。

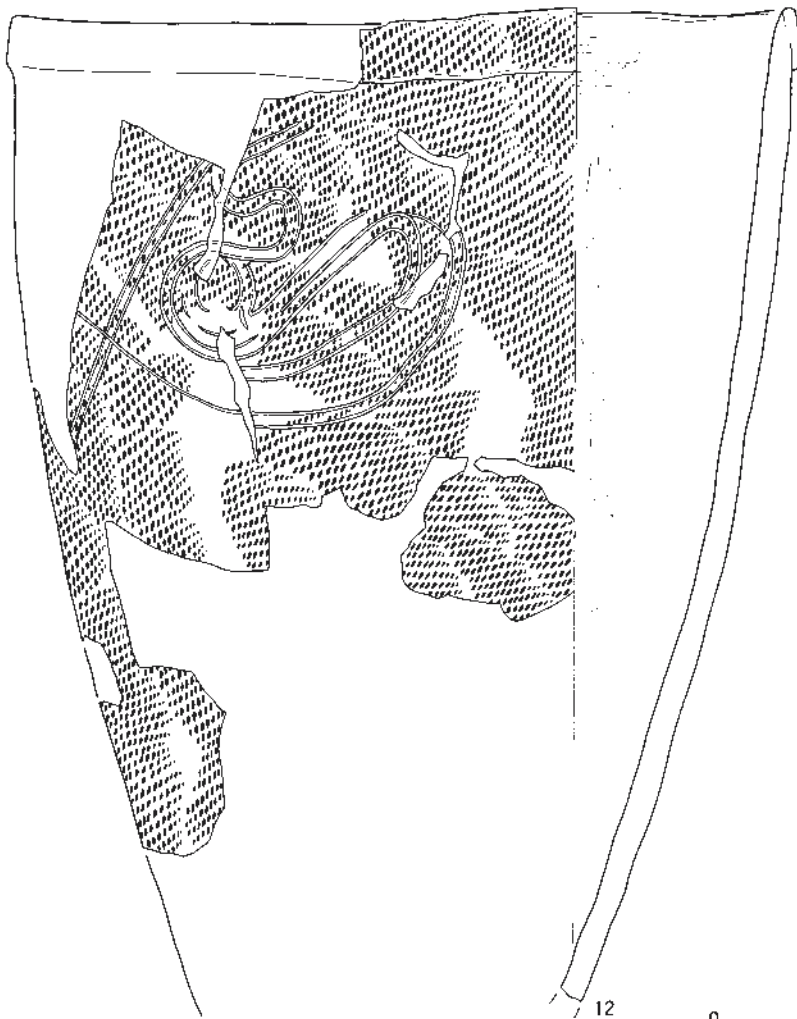
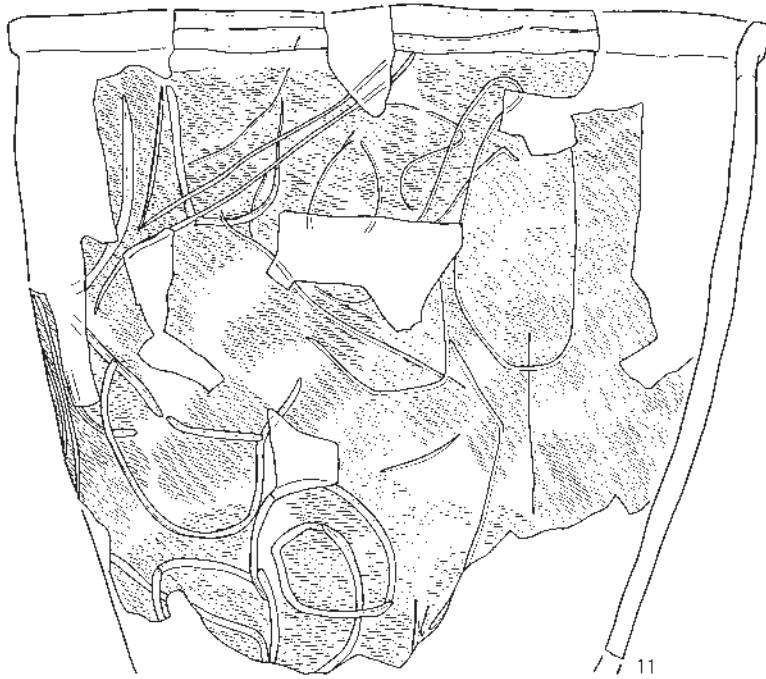
85～90・401～405・412は沈線によるクランク状の文様を連続させるものである。2ないし3段の文様帯を带状に持つ。このような土器がまとまって出土した遺構にF-28がある。86・88・401・402は巴形の沈線文が連続し、クランクがやや斜行するものである。402・403・405は口縁の直径が30cmを超えるものである。大型であるため破片数は多かったが良好な復元はできなかった。408・409・421はクランク文様に波状ないしは鋸歯状の複数本で一組の沈線文を組み合わせたものである。



図IV-13 包含層出土の土器 (13)

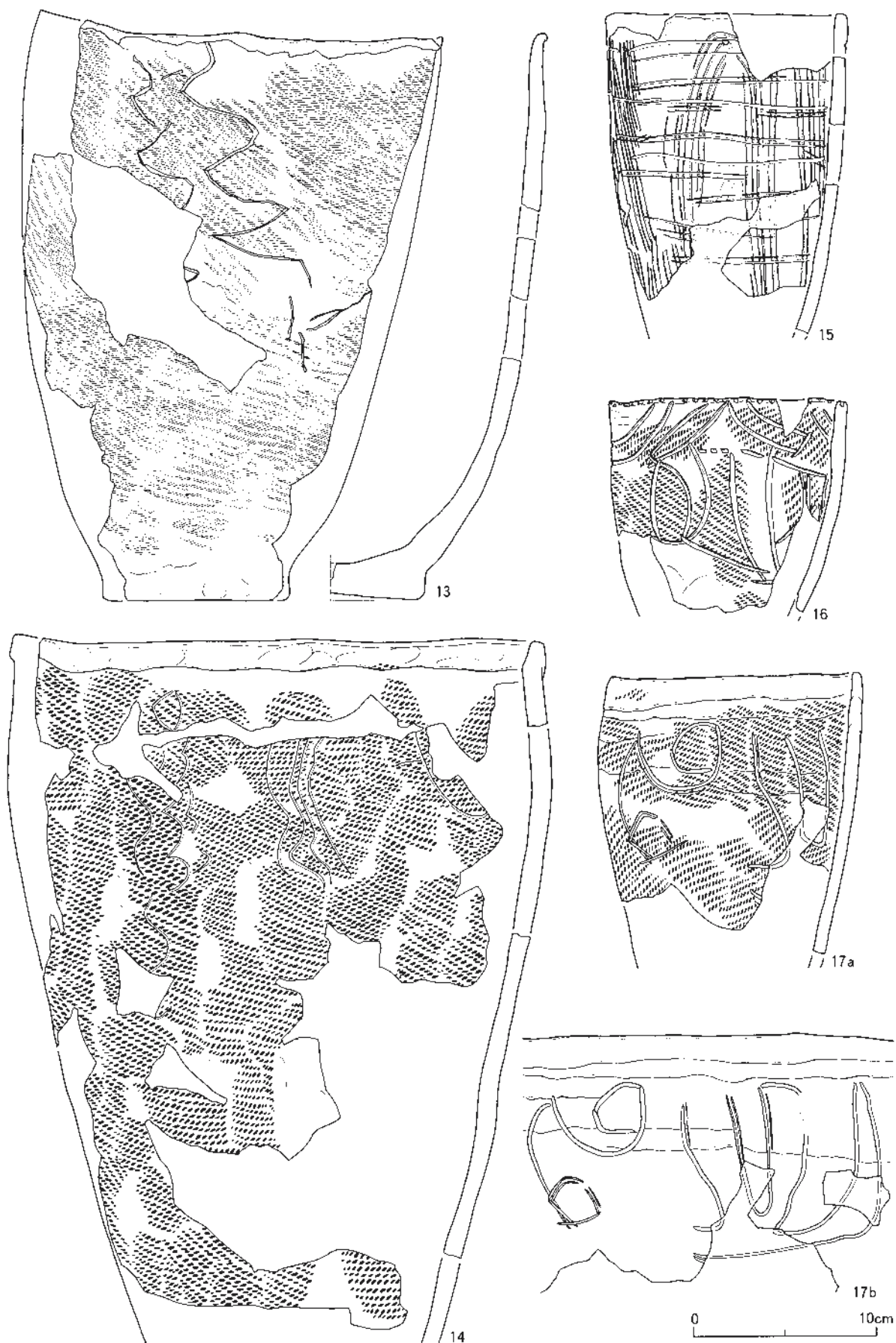


図IV-14 包含層出土の土器 (14)



図IV-15 包含層出土の土器 (15)

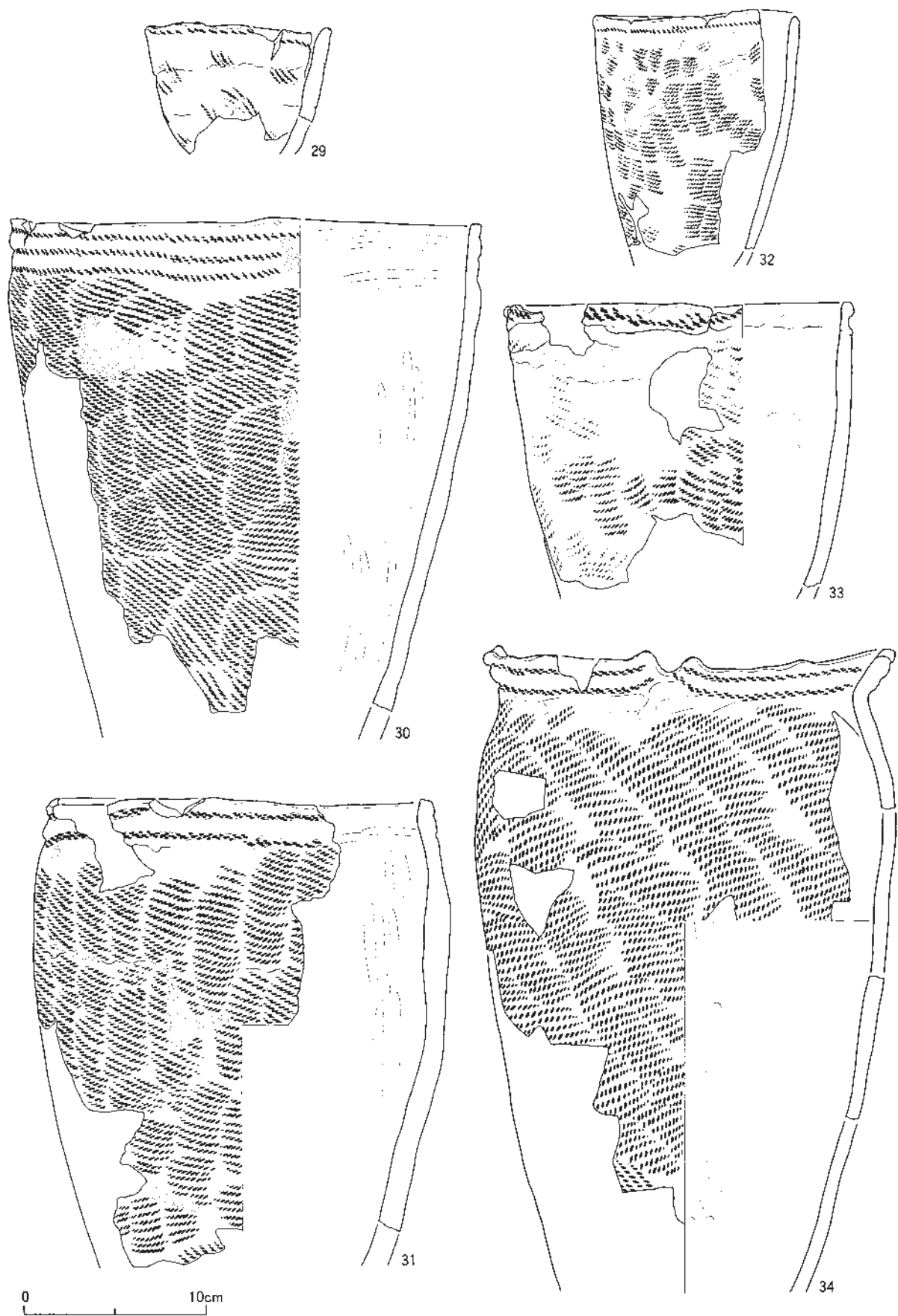




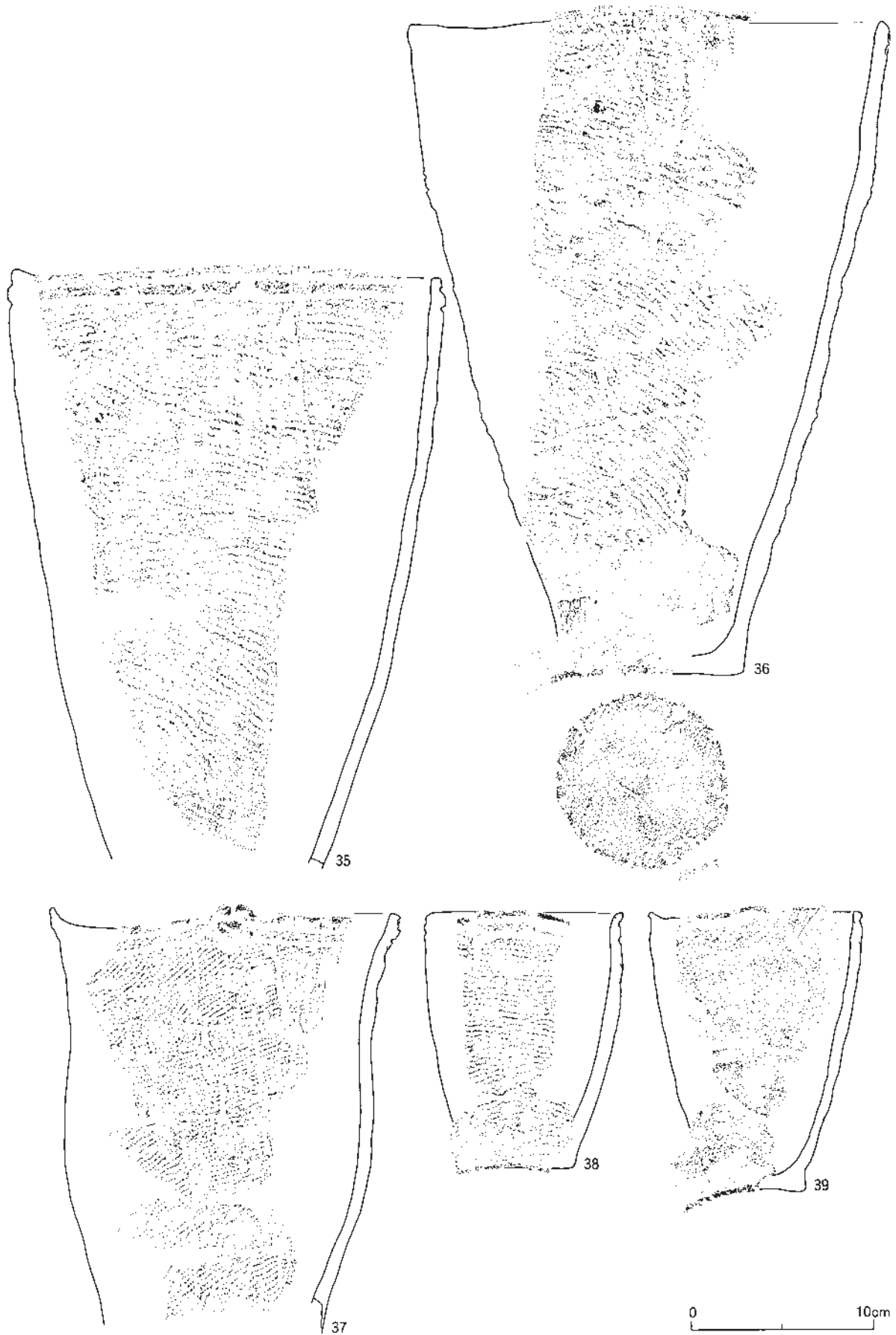
図IV-16 包含層出土の土器 (16)



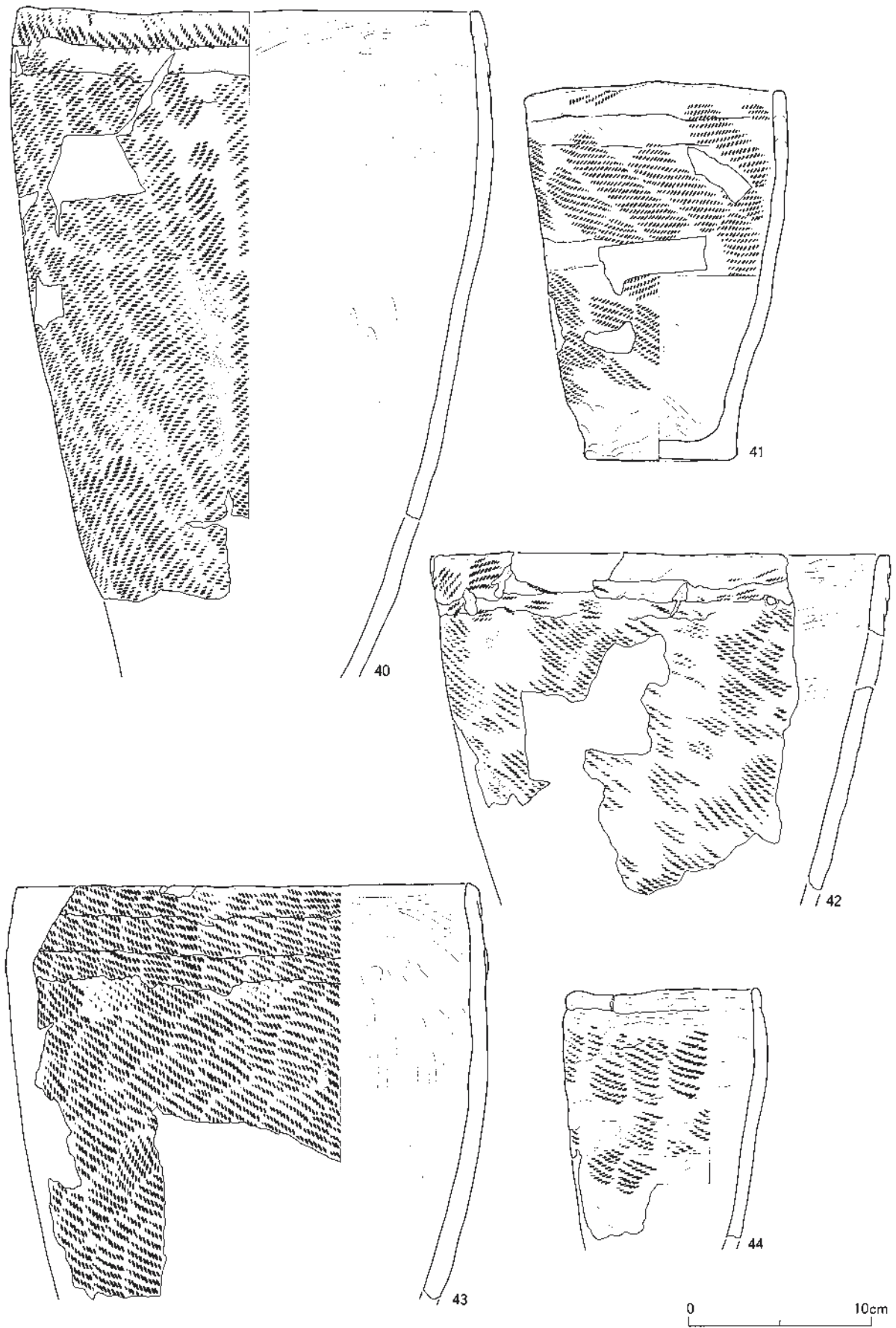
図IV-17 包含層出土の土器 (17)



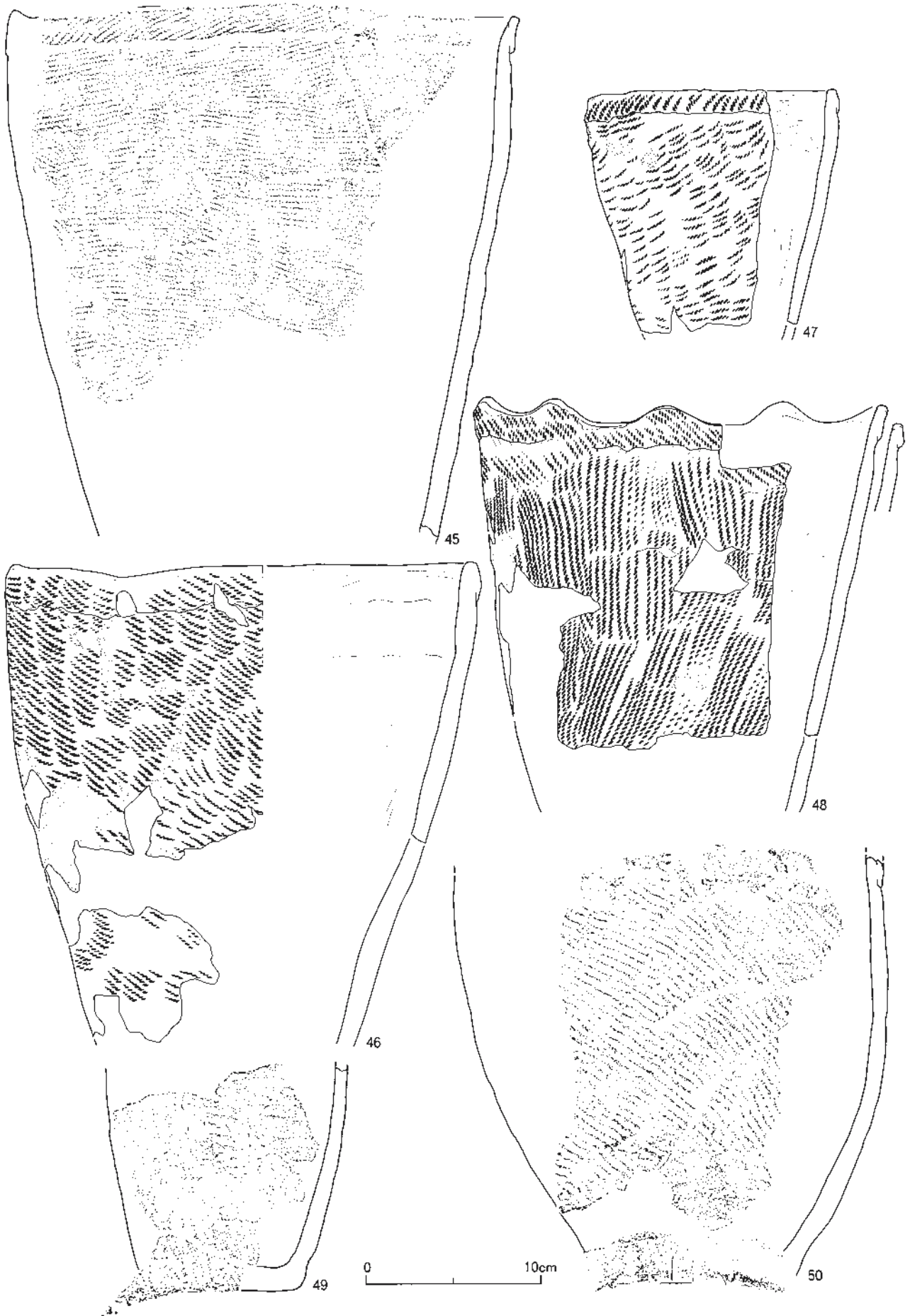
図IV-18 包含層出土の土器 (18)



図IV-19 包含層出土の土器 (19)



図IV-20 包含層出土の土器 (20)



図IV-21 包含層出土の土器 (21)

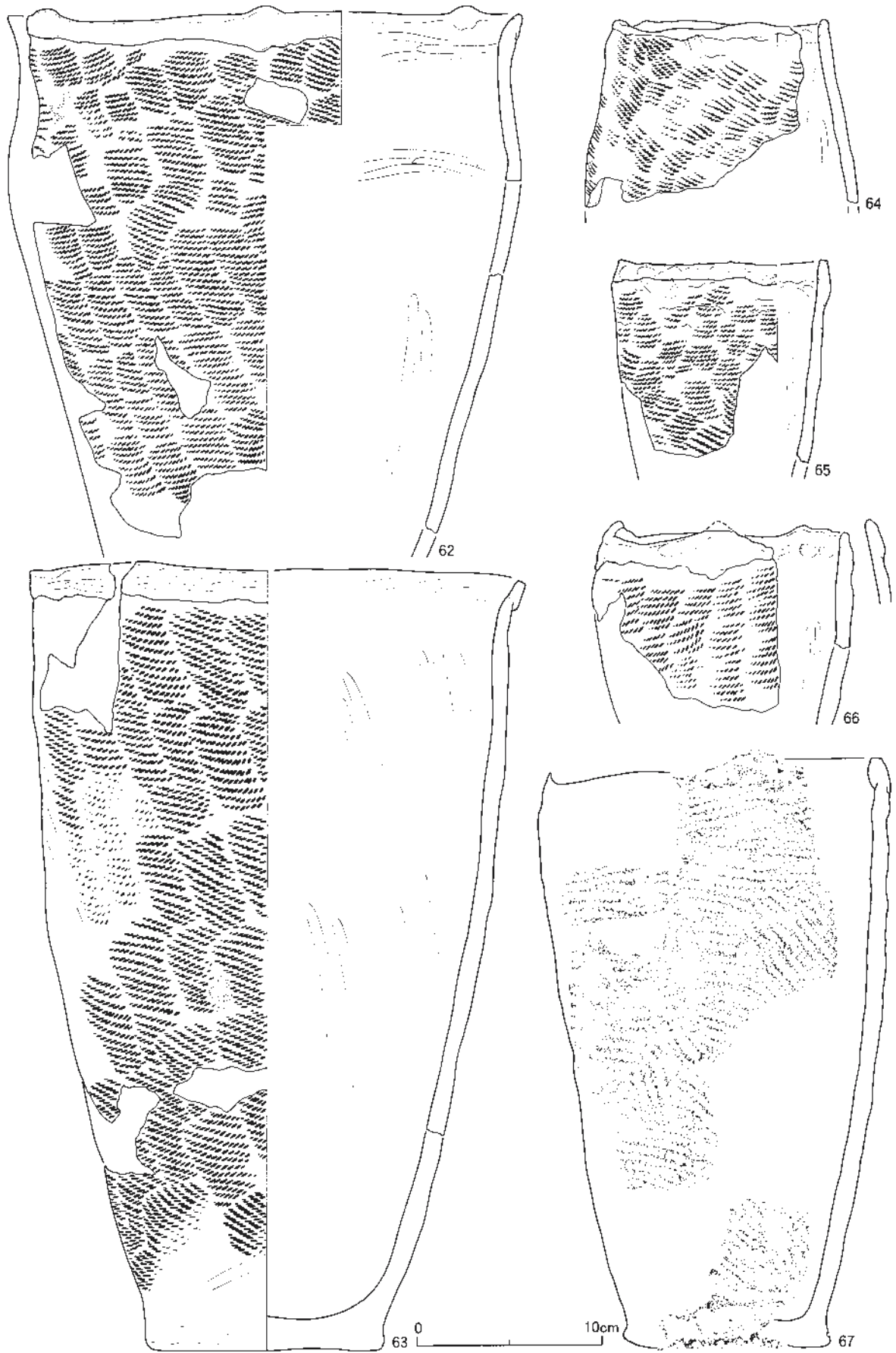


図IV-22 包含層出土の土器 (22)

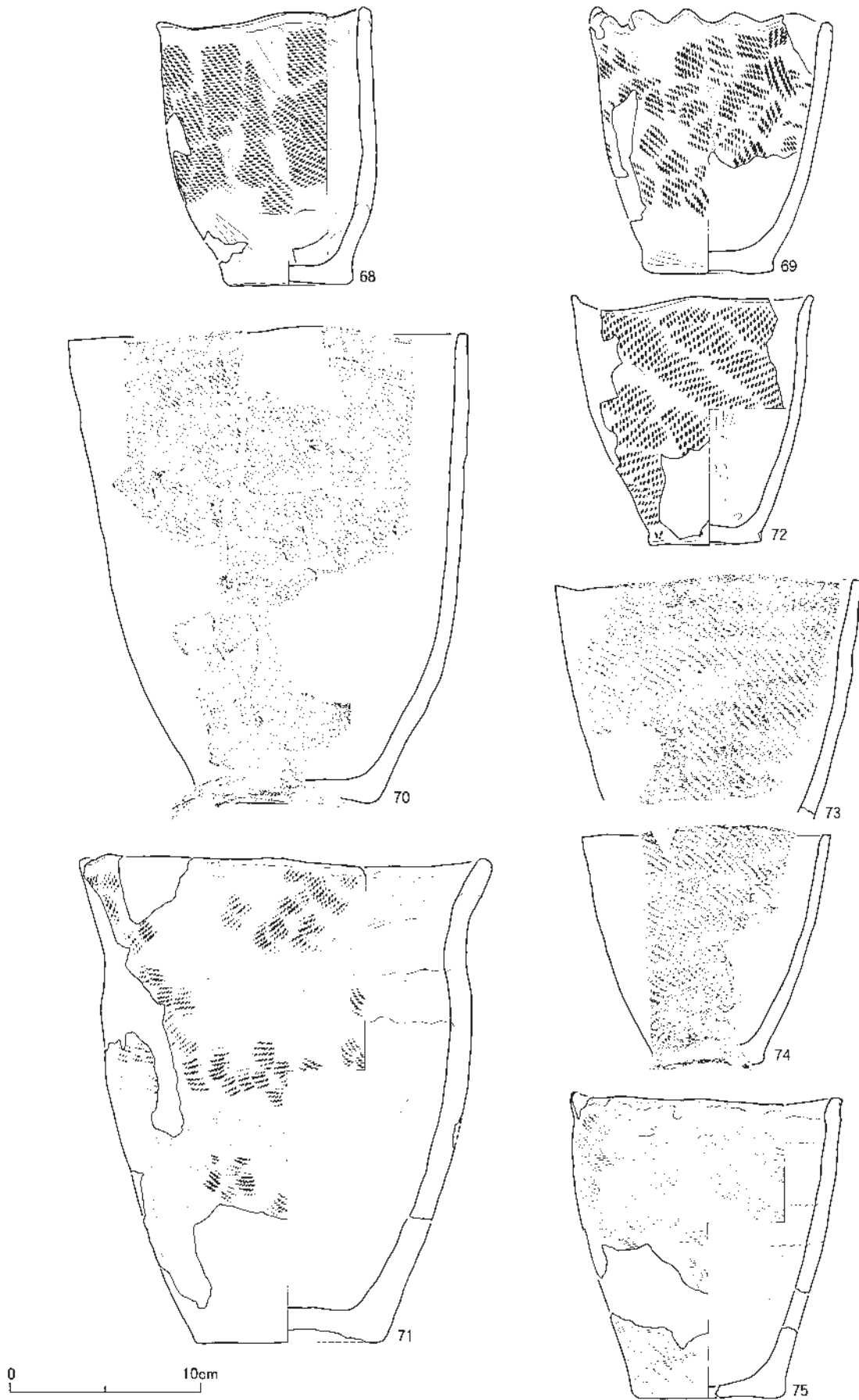


図IV-23 包含層出土の土器 (23)

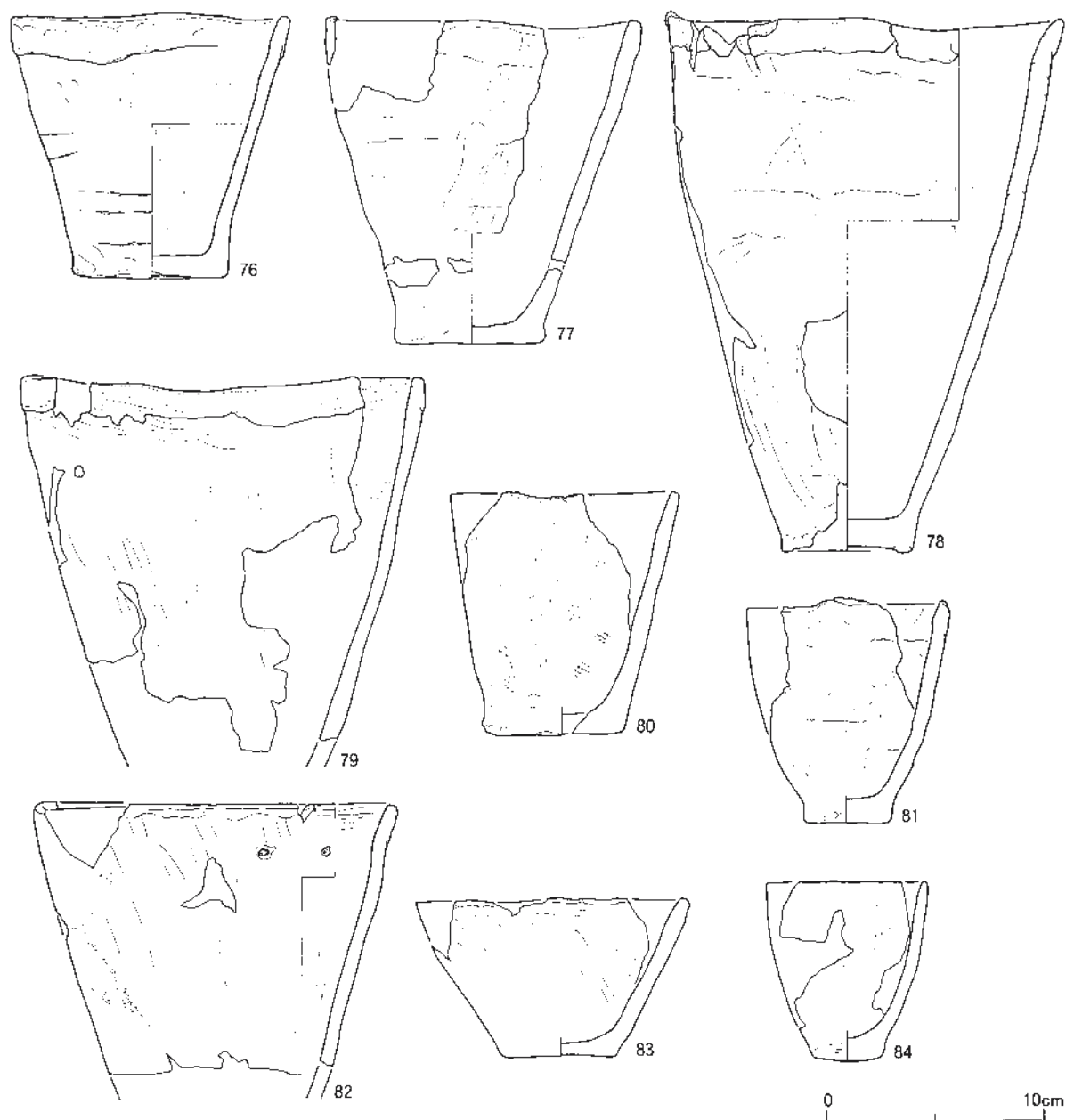




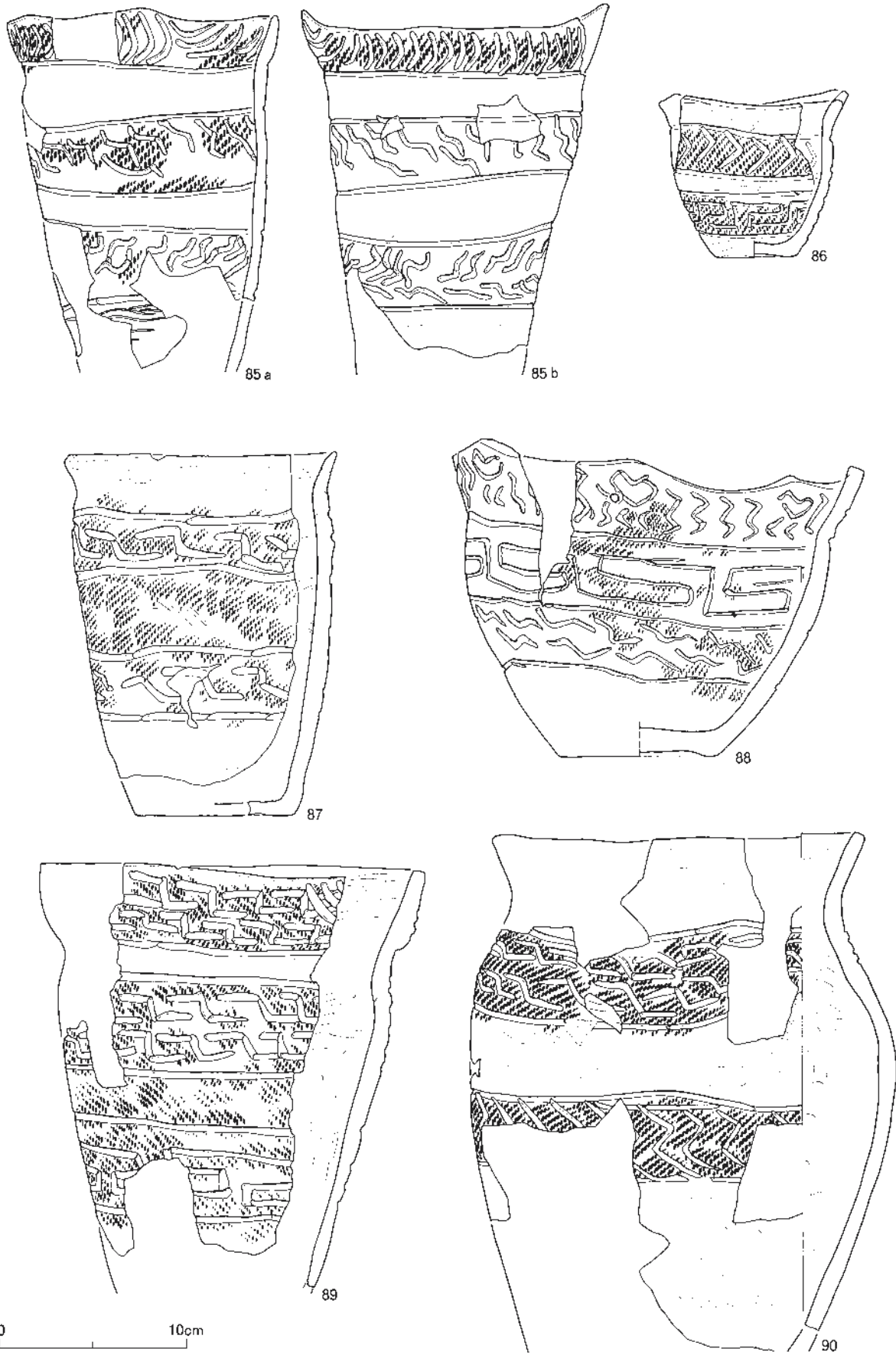
図IV-24 包含層出土の土器 (24)



図IV-25 包含層出土の土器 (25)



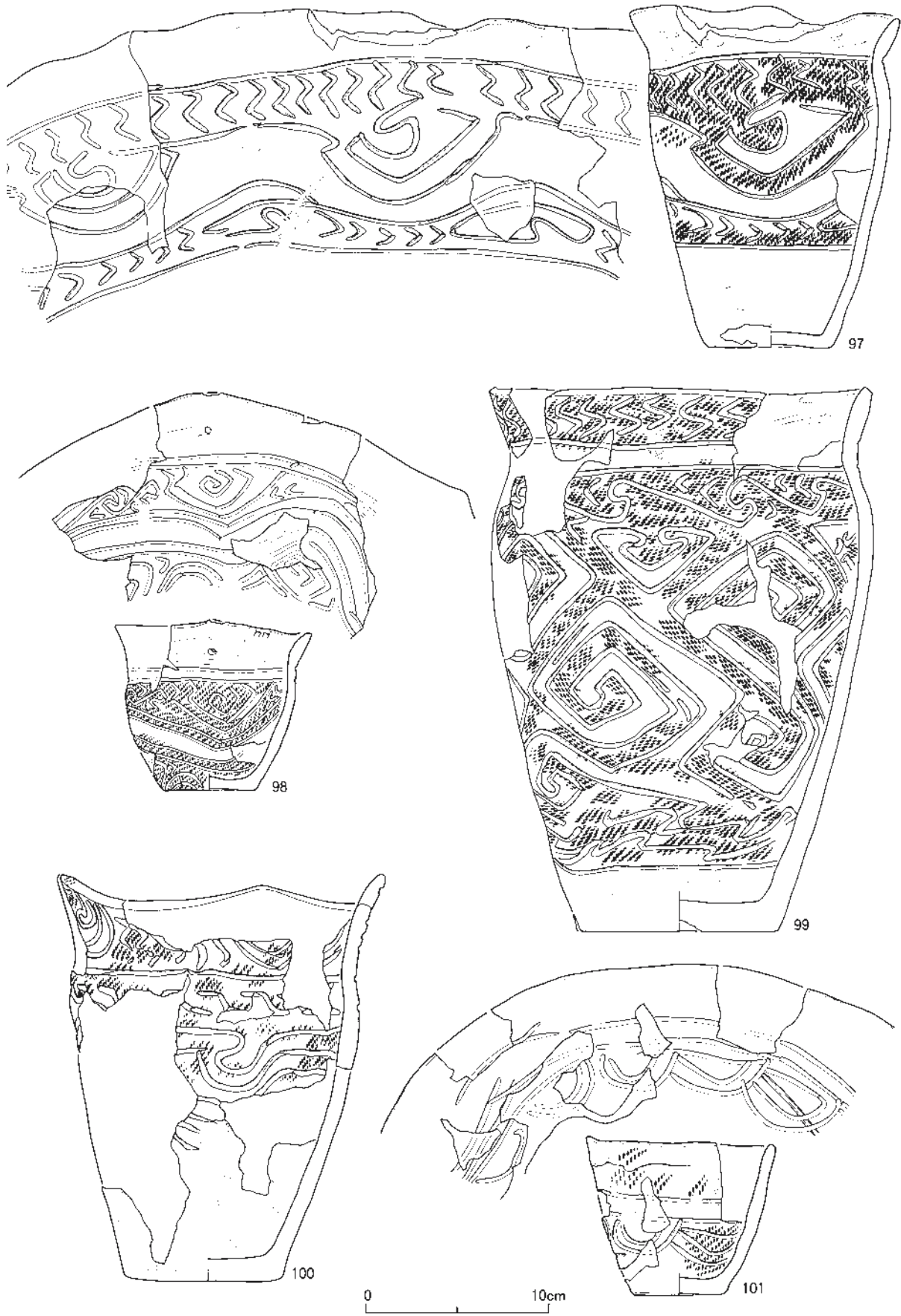
図IV-26 包含層出土の土器 (26)



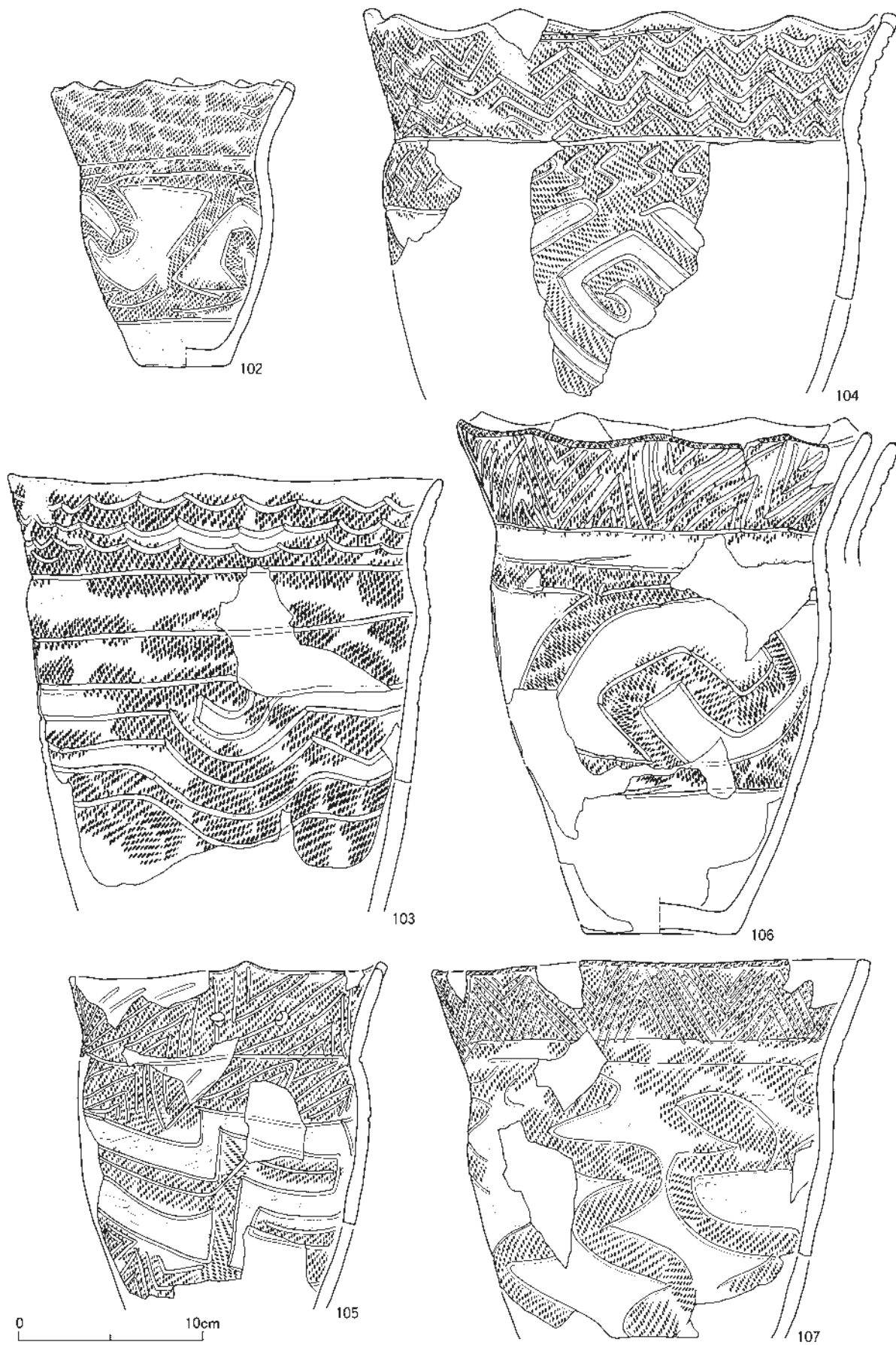
図IV-27 包含層出土の土器 (27)



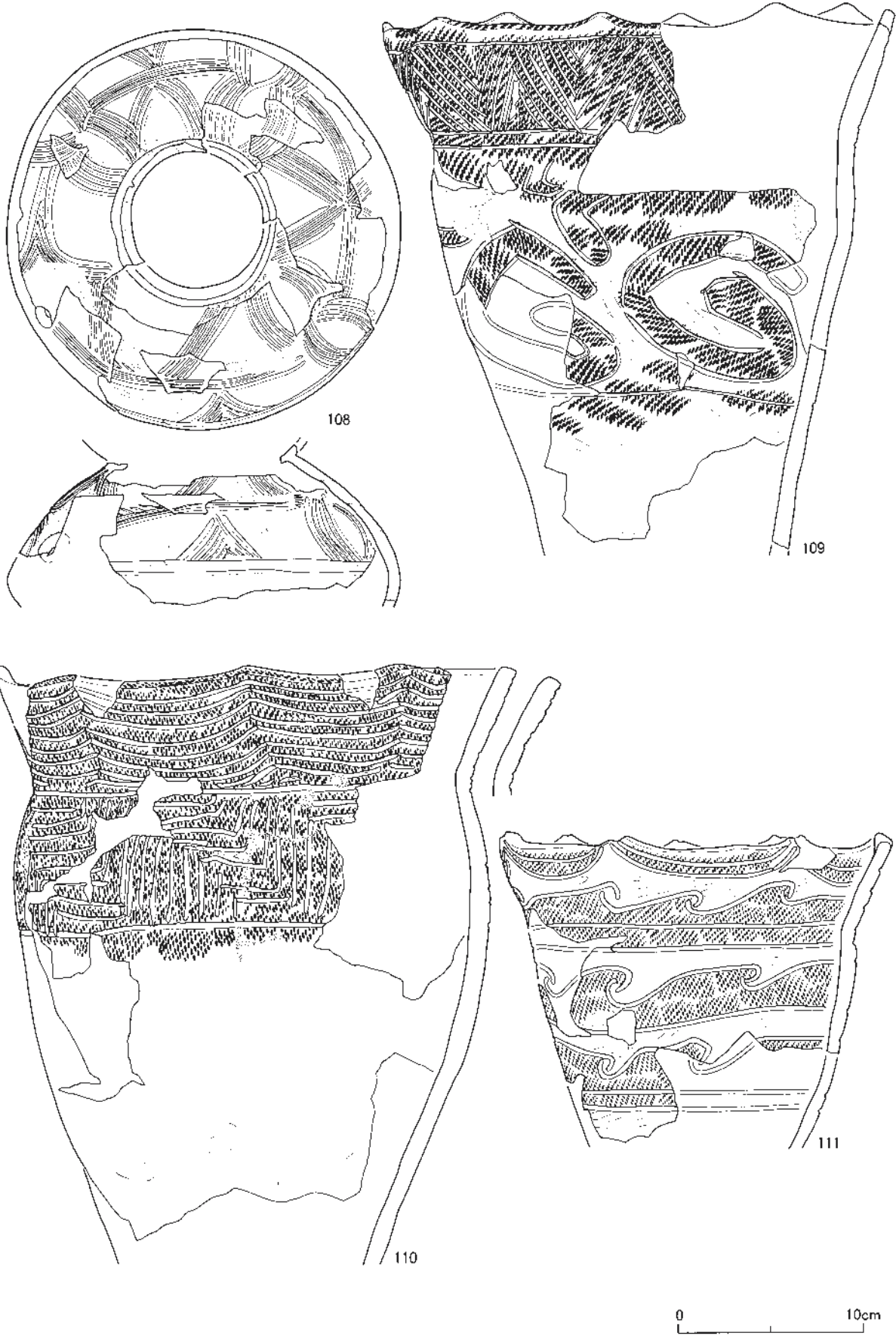
図IV-28 包含層出土の土器 (28)



図IV-29 包含層出土の土器 (29)



図IV-30 包含層出土の土器 (30)



図IV-31 包含層出土の土器 (31)





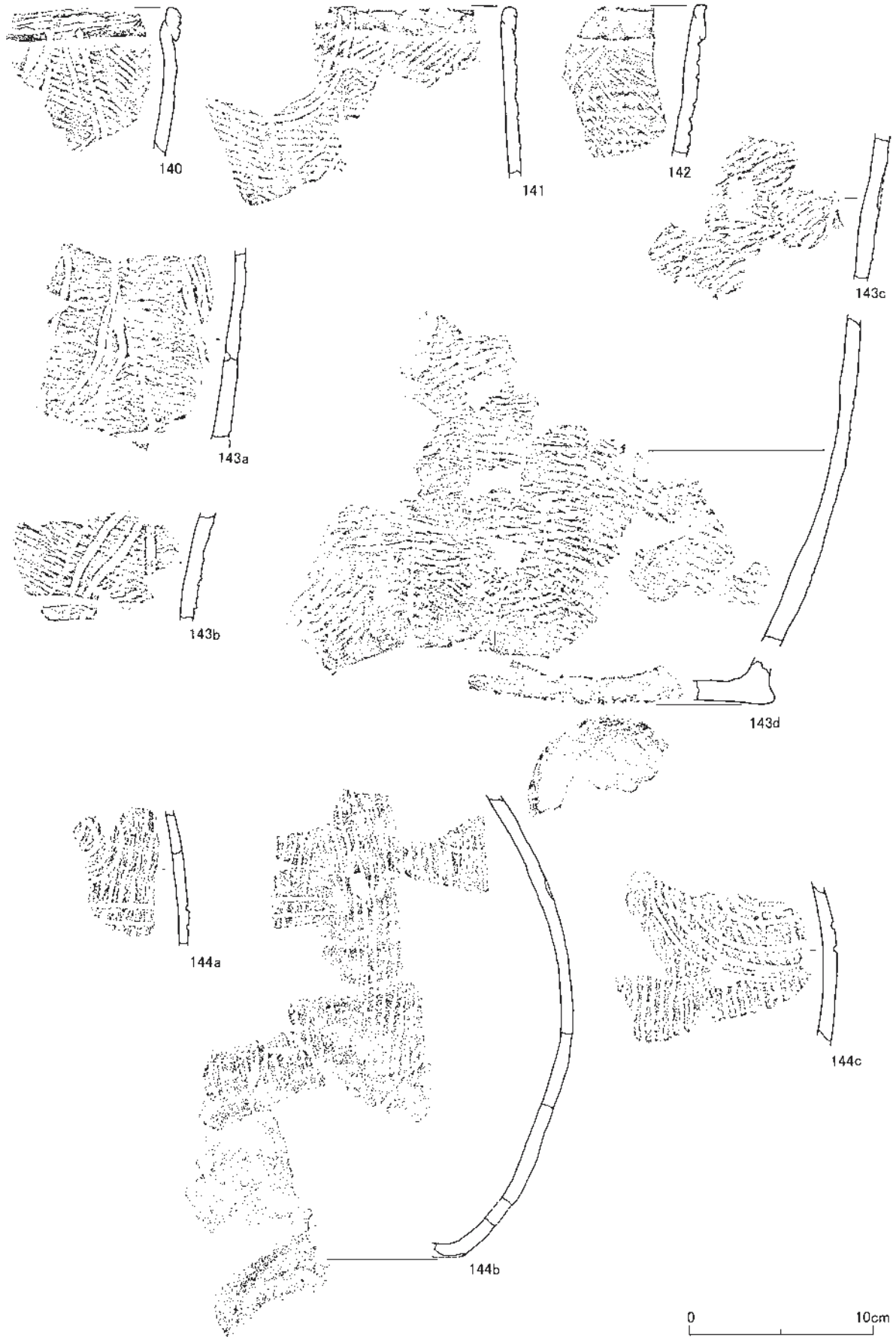
図IV-32 包含層出土の土器 (32)



図IV-33 包含層出土の土器 (33)



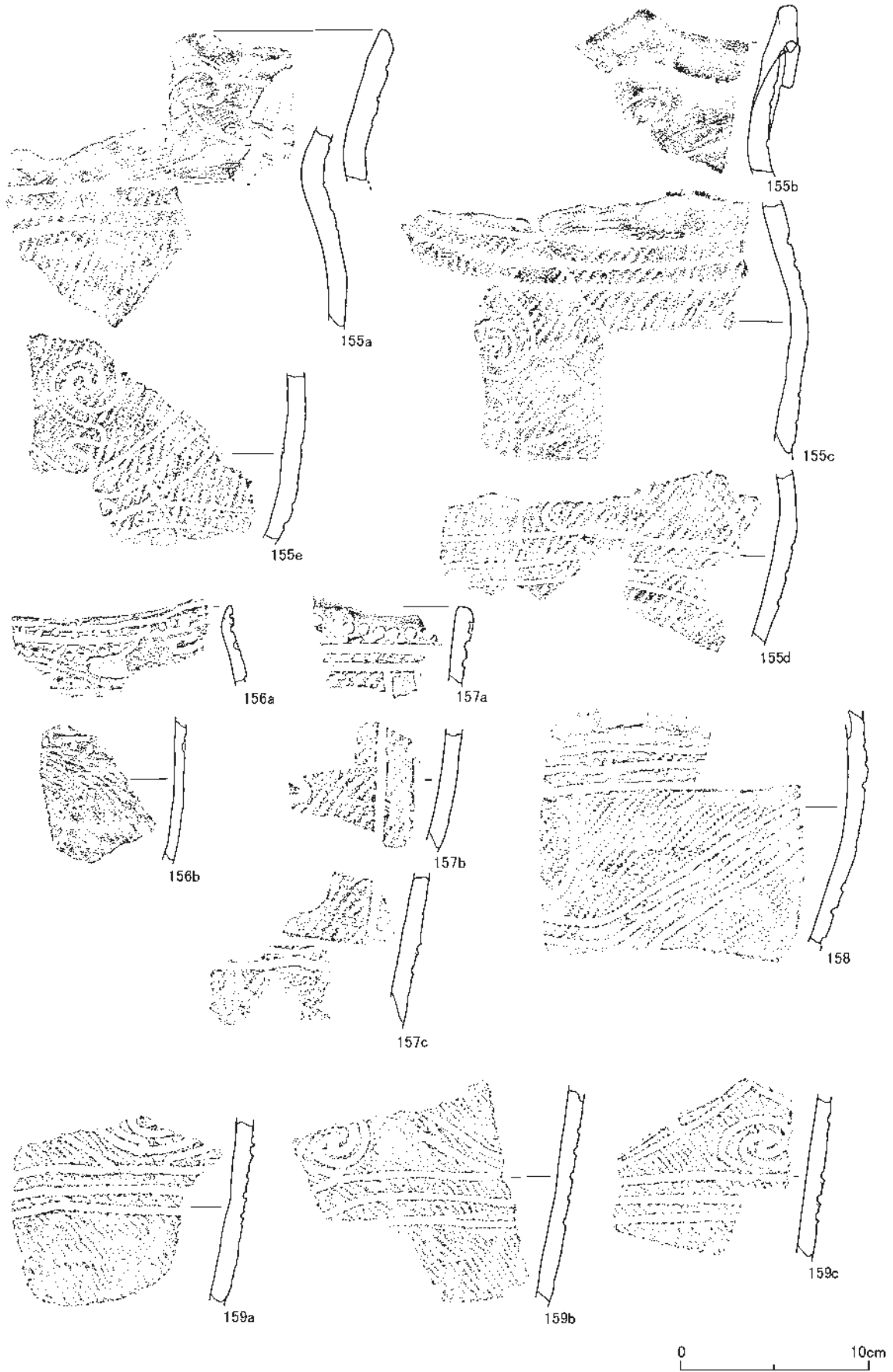
図IV-34 包含層出土の土器 (34)



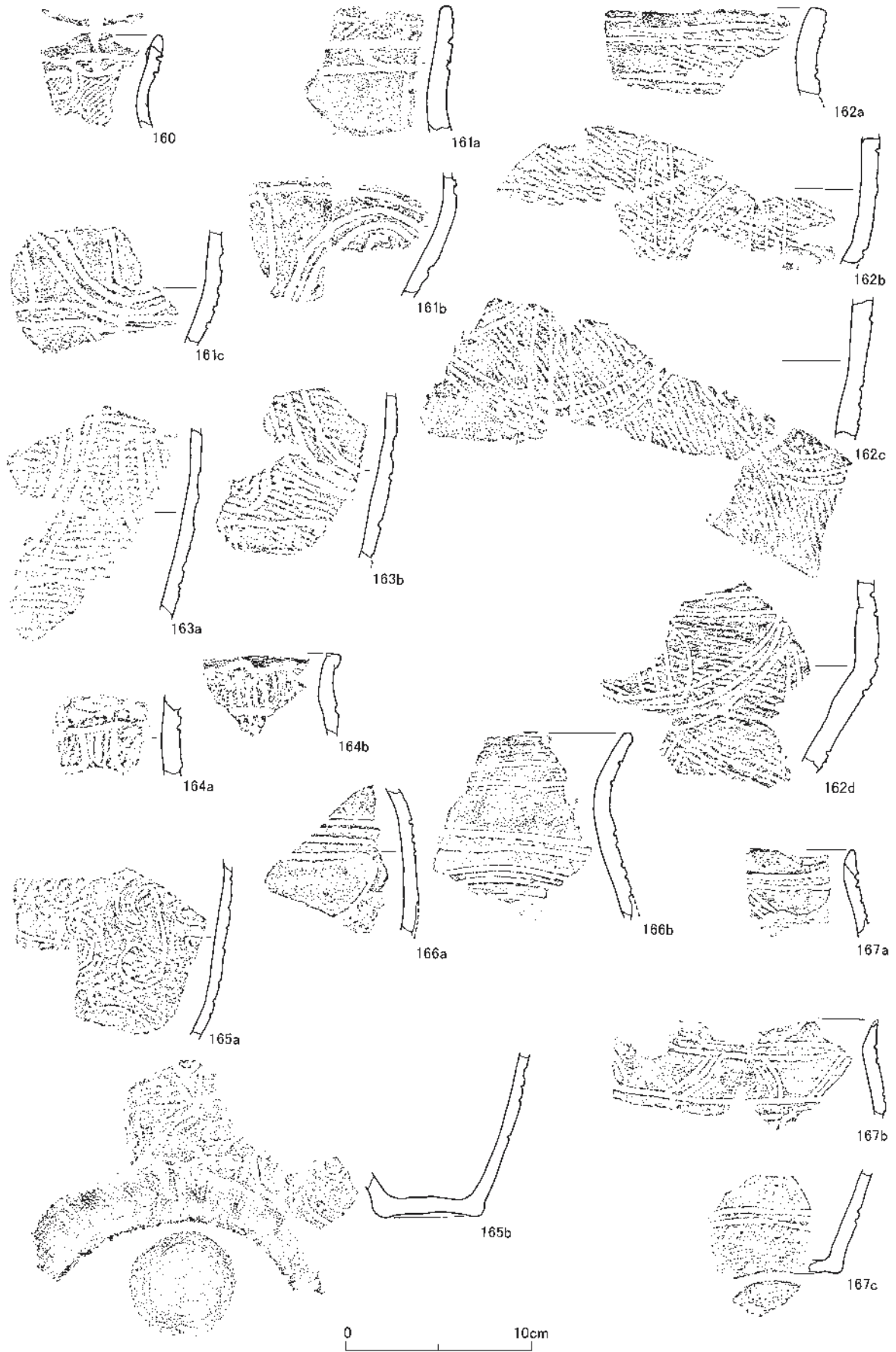
図IV-35 包含層出土の土器 (35)



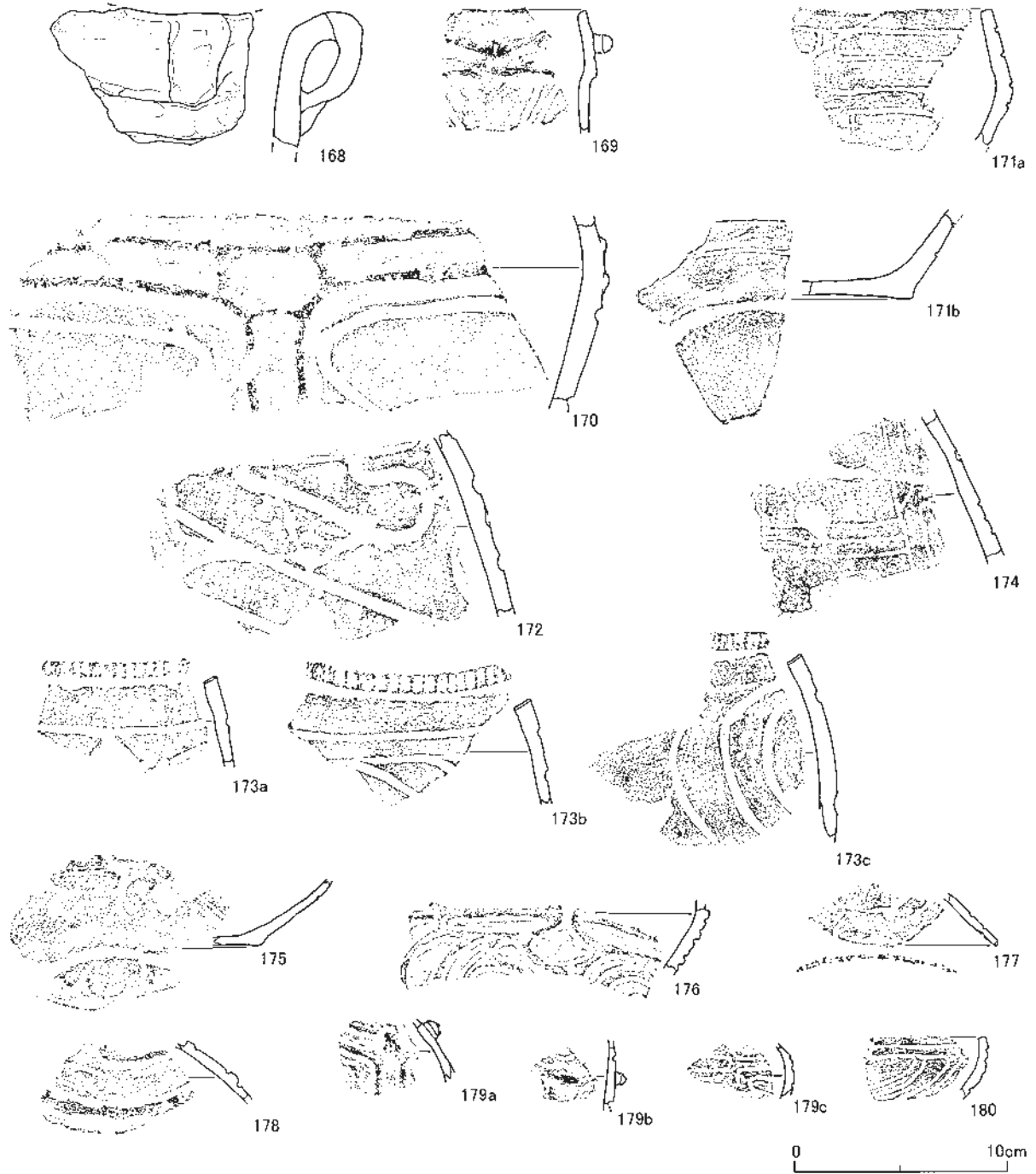
図IV-36 包含層出土の土器 (36)



図IV-37 包含層出土の土器 (37)



図IV-38 包含層出土の土器 (38)

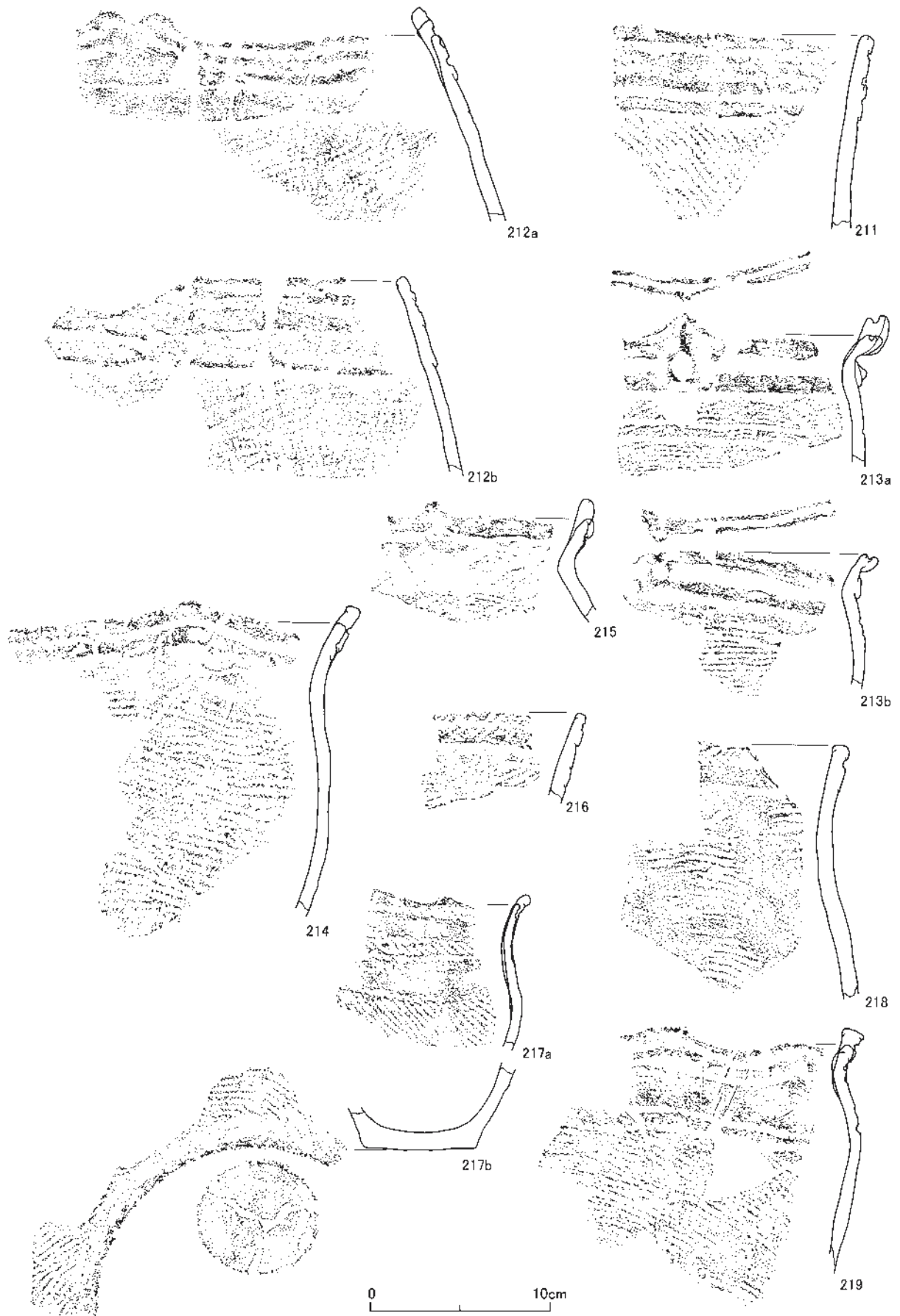


図IV-39 包含層出土の土器 (39)

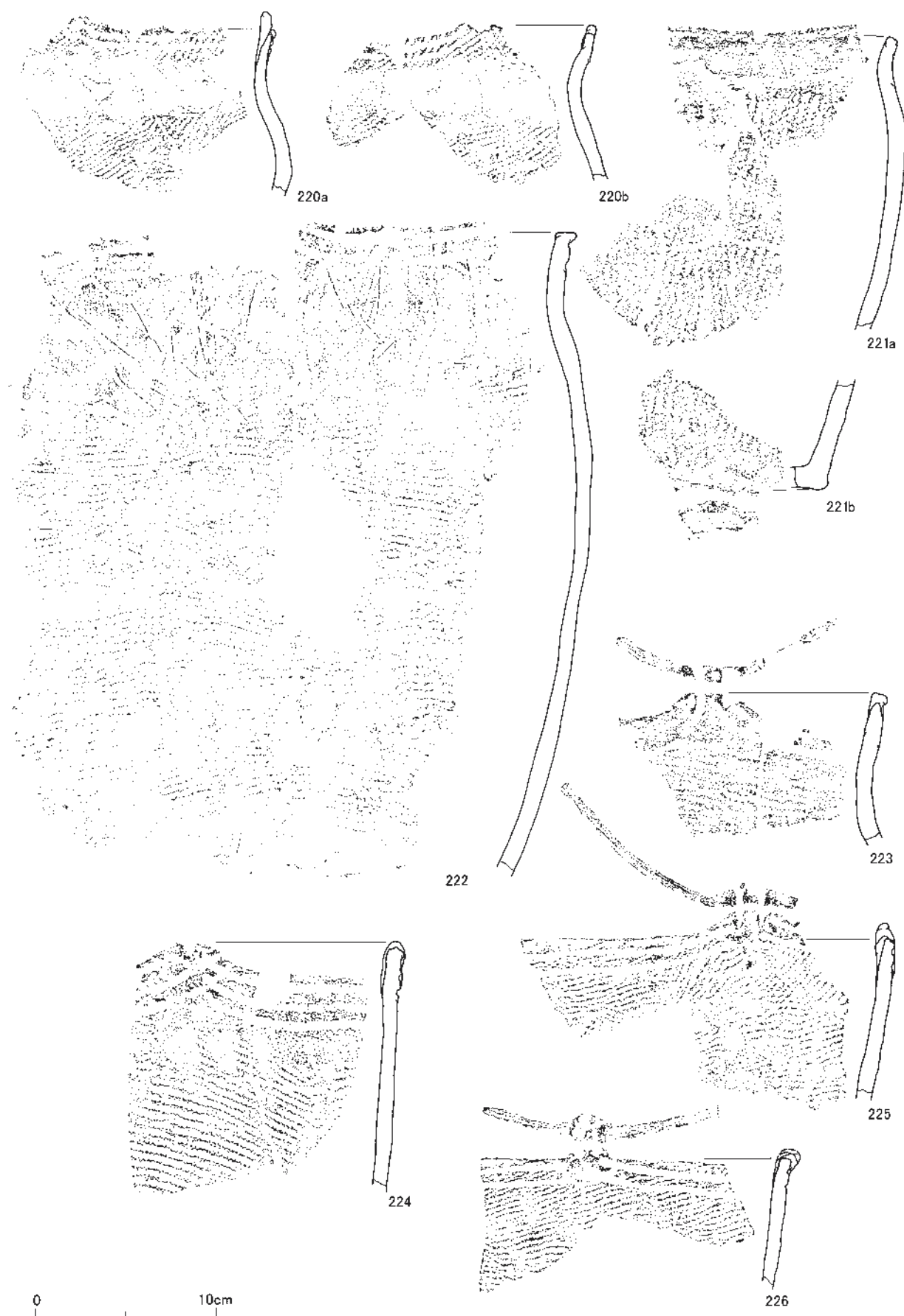




図IV-40 包含層出土の土器 (40)



図IV-41 包含層出土の土器 (41)



図IV-42 包含層出土の土器 (42)



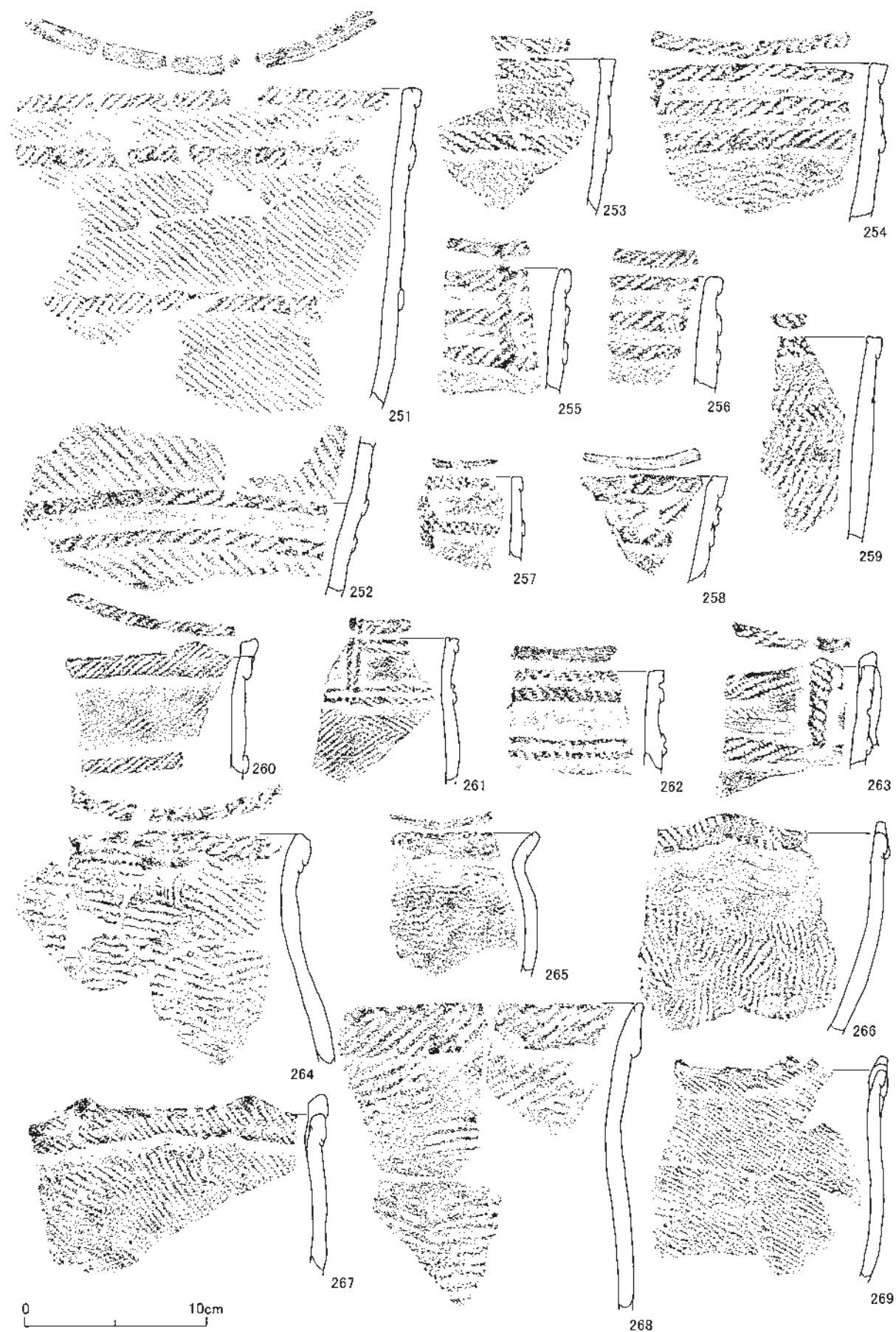
図IV-43 包含層出土の土器 (43)



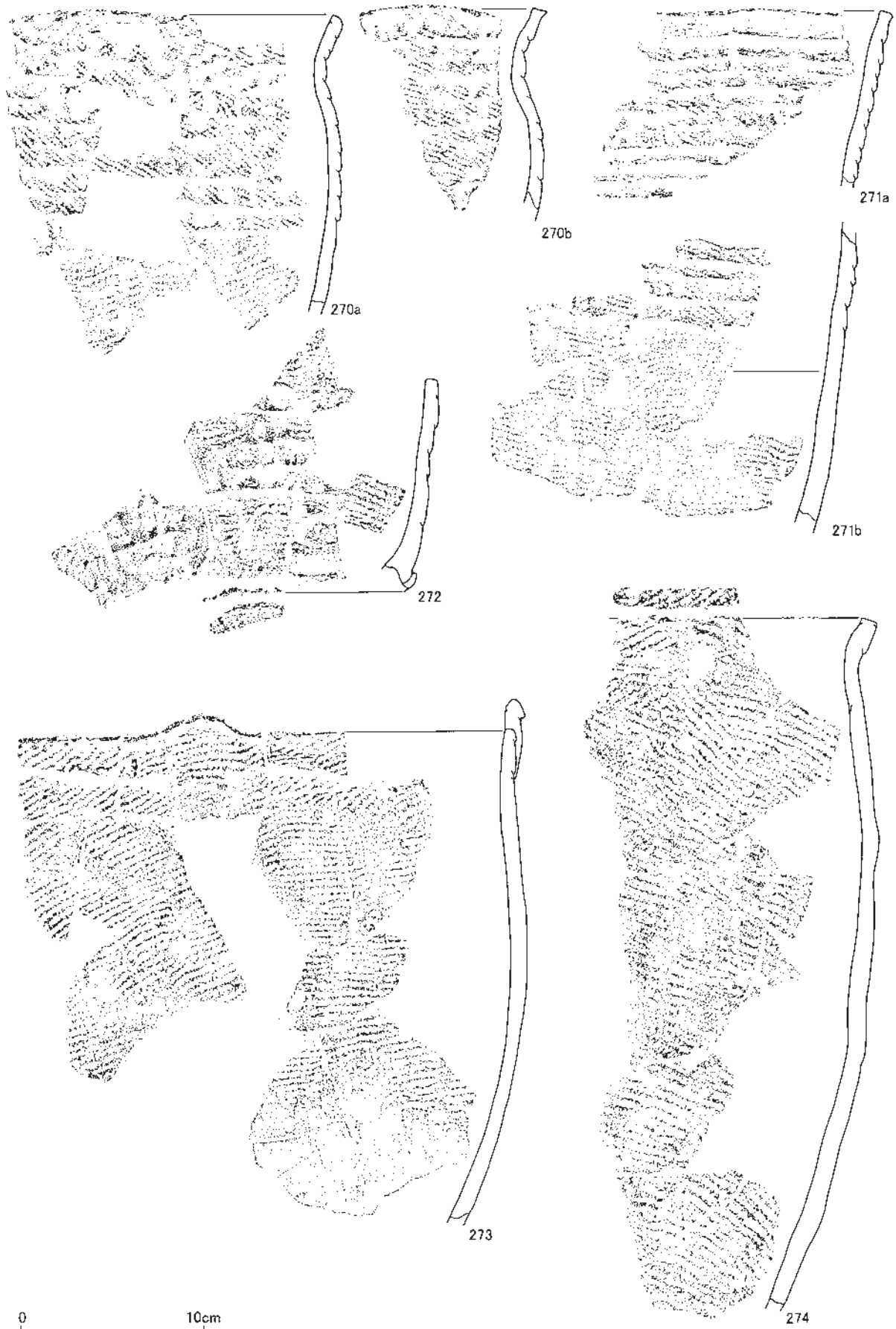
図IV-44 包含層出土の土器 (44)



図IV-45 包含層出土の土器 (45)

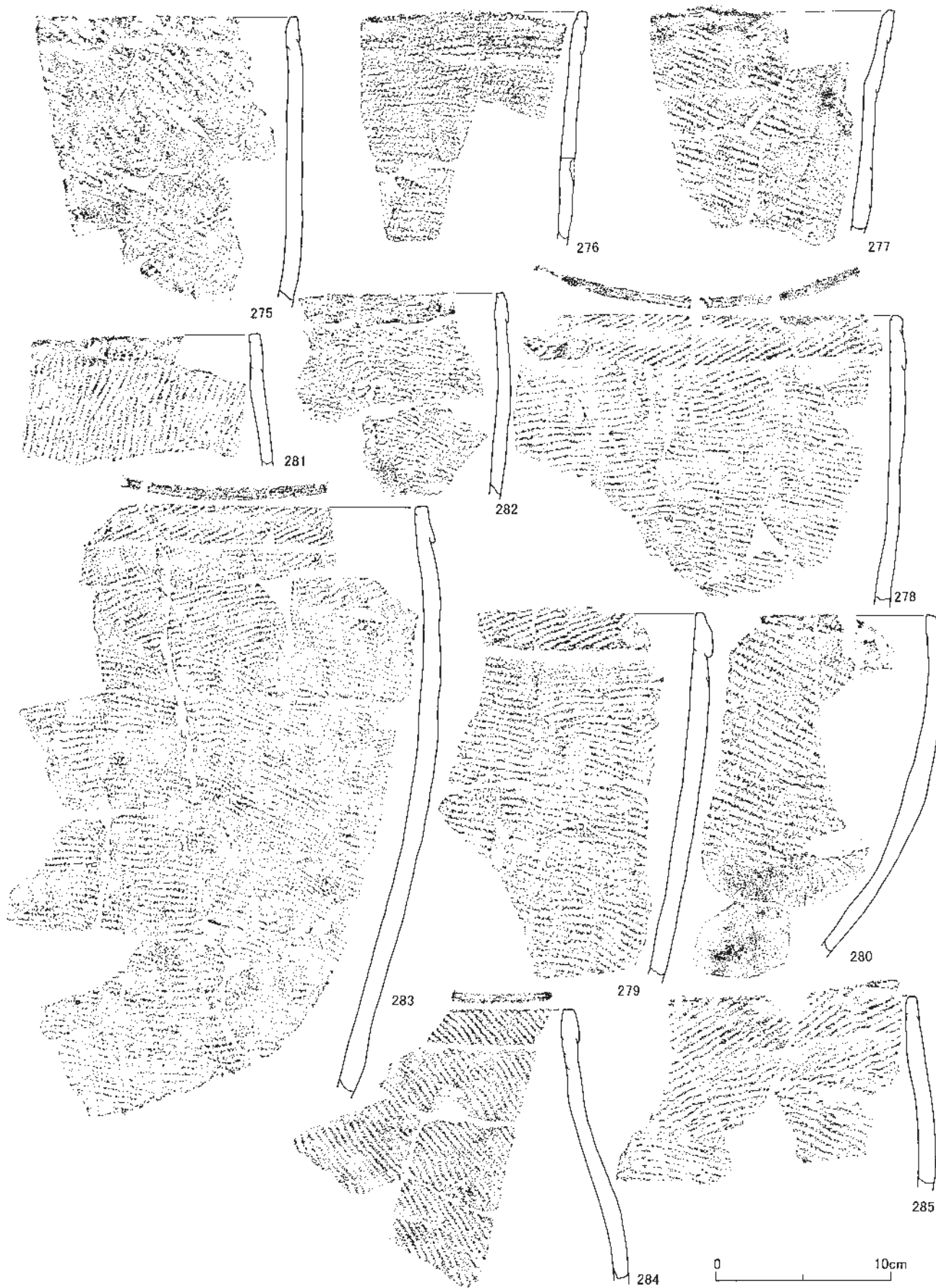


図IV-46 包含層出土の土器 (46)



図IV-47 包含層出土の土器 (47)

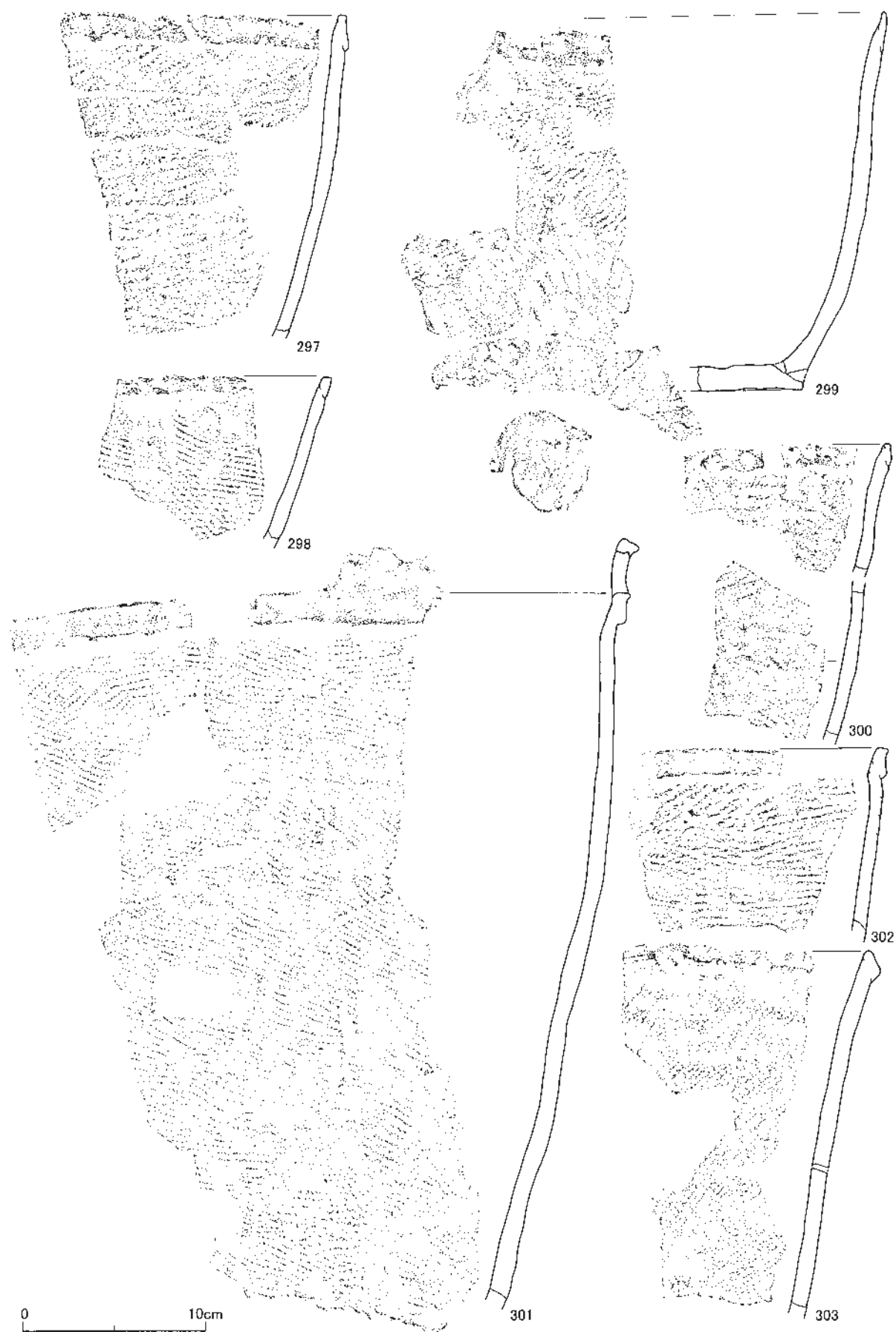




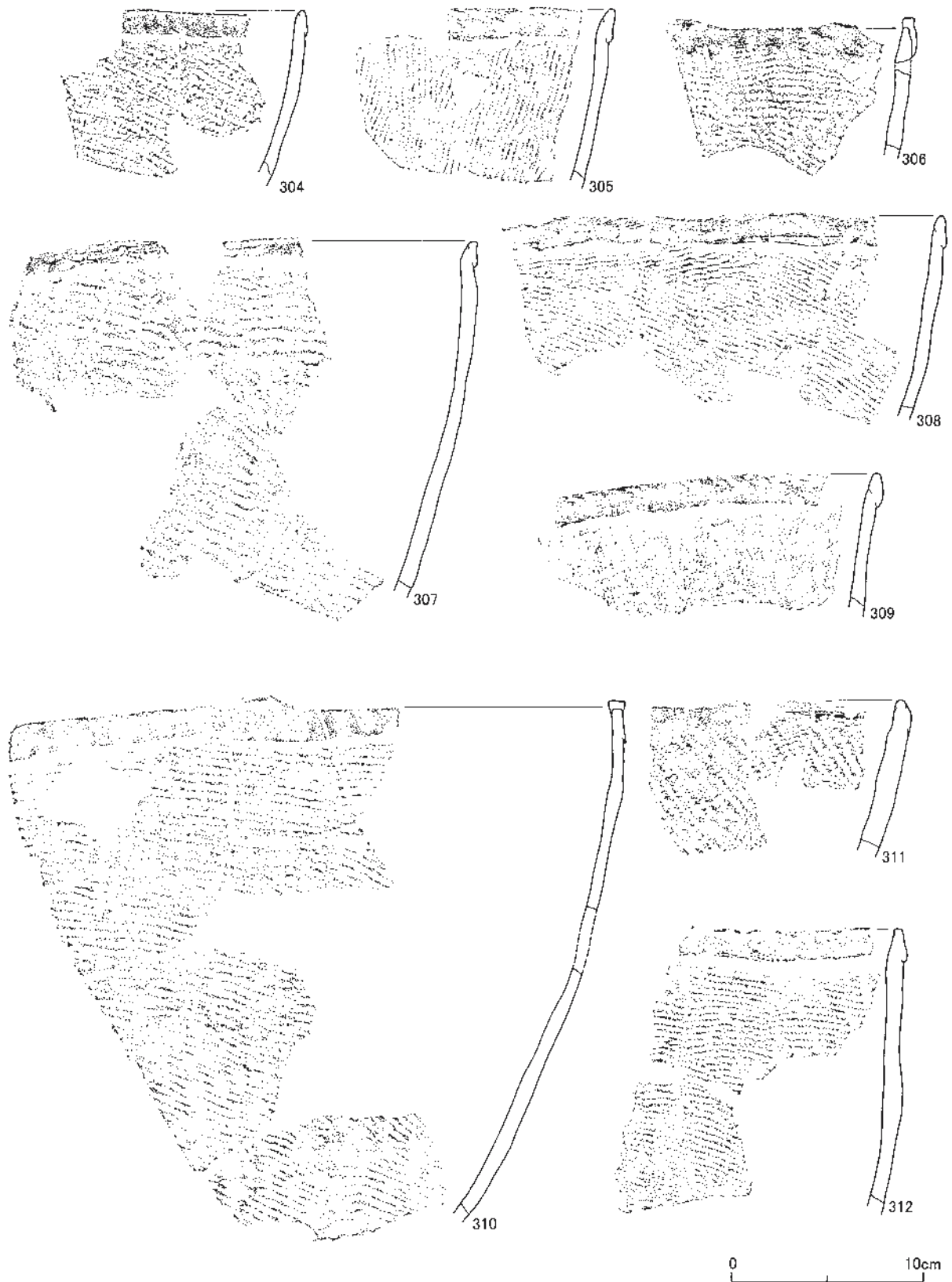
図IV-48 包含層出土の土器 (48)



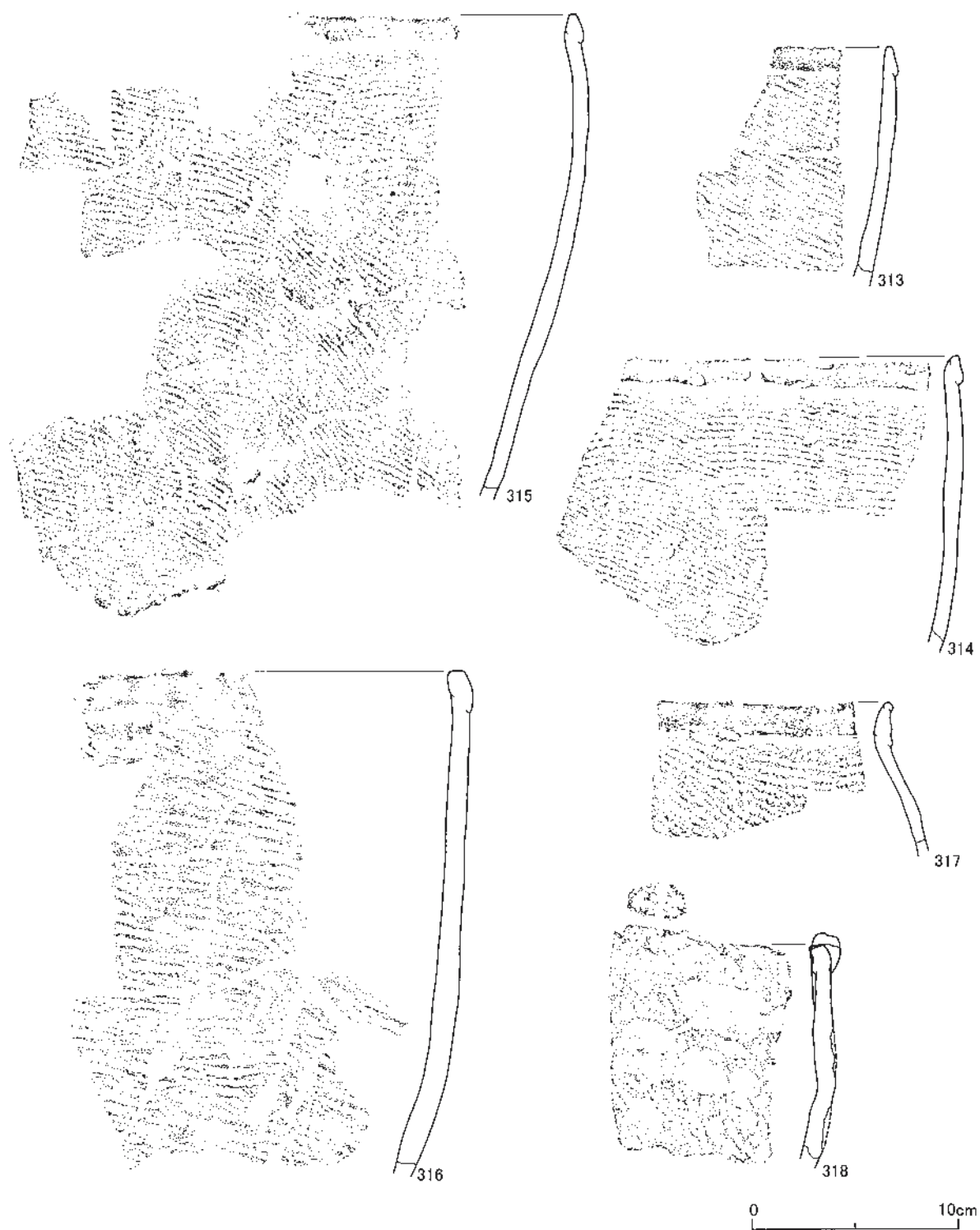
図IV-49 包含層出土の土器 (49)



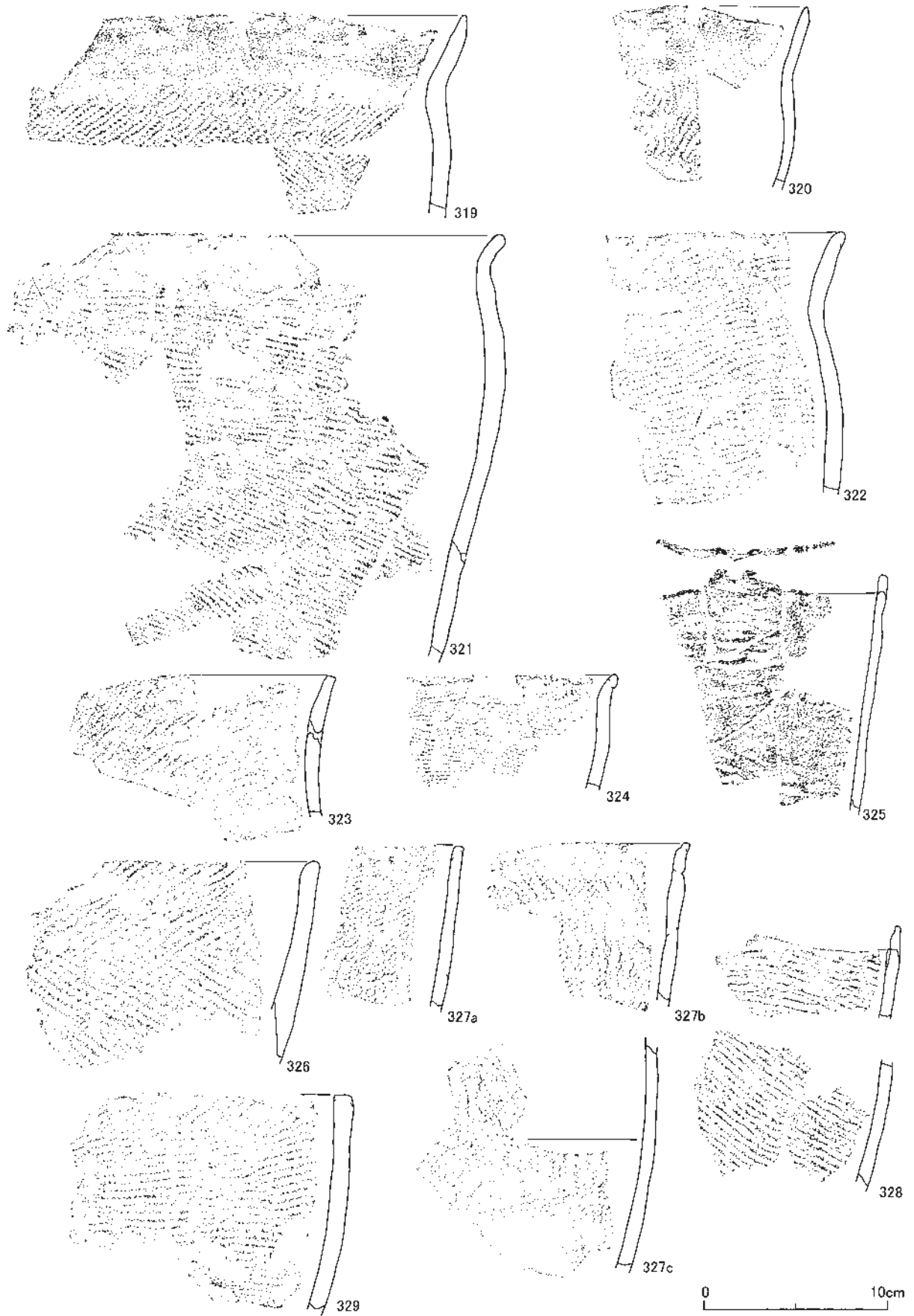
図IV-50 包含層出土の土器 (50)



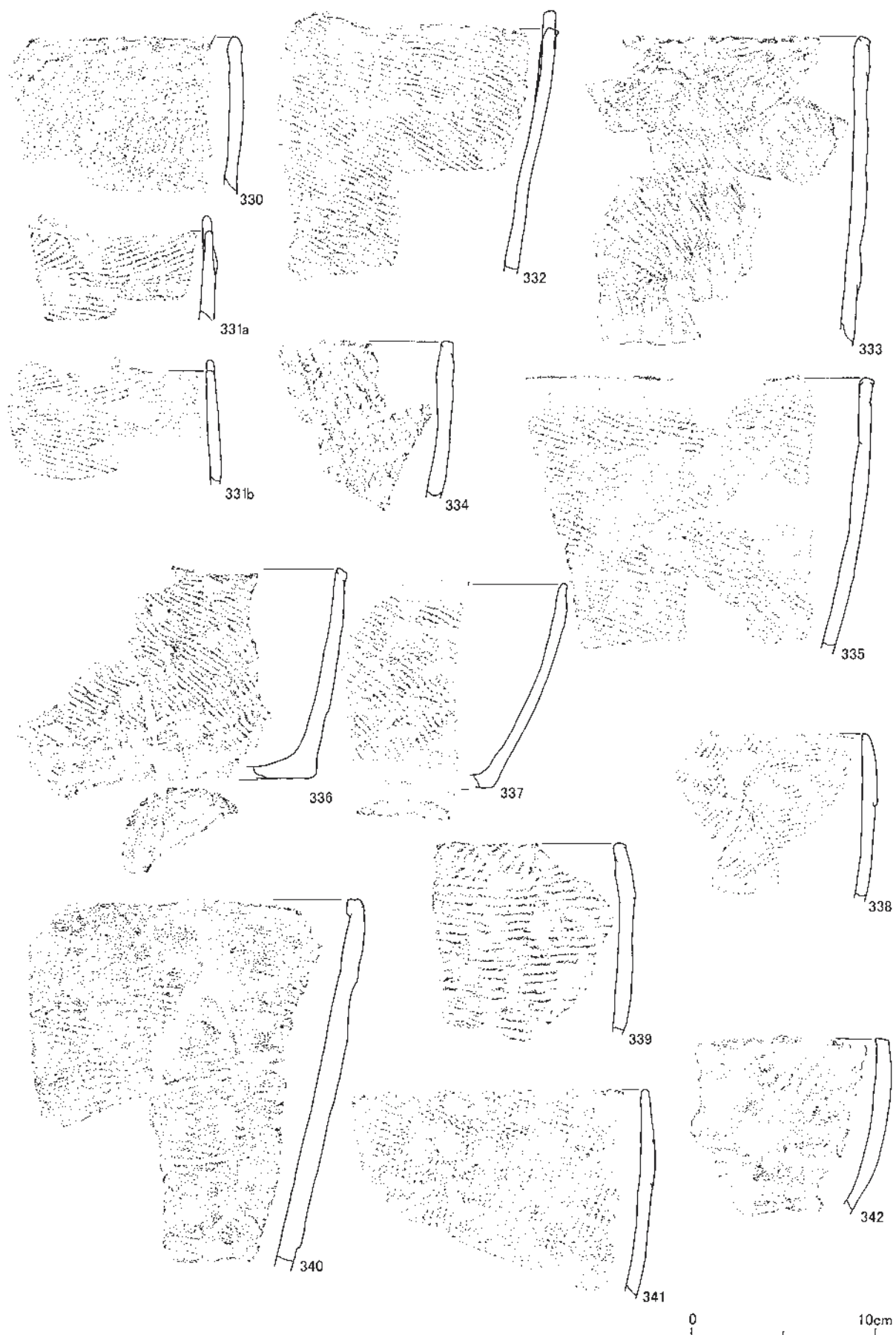
図IV-51 包含層出土の土器 (51)



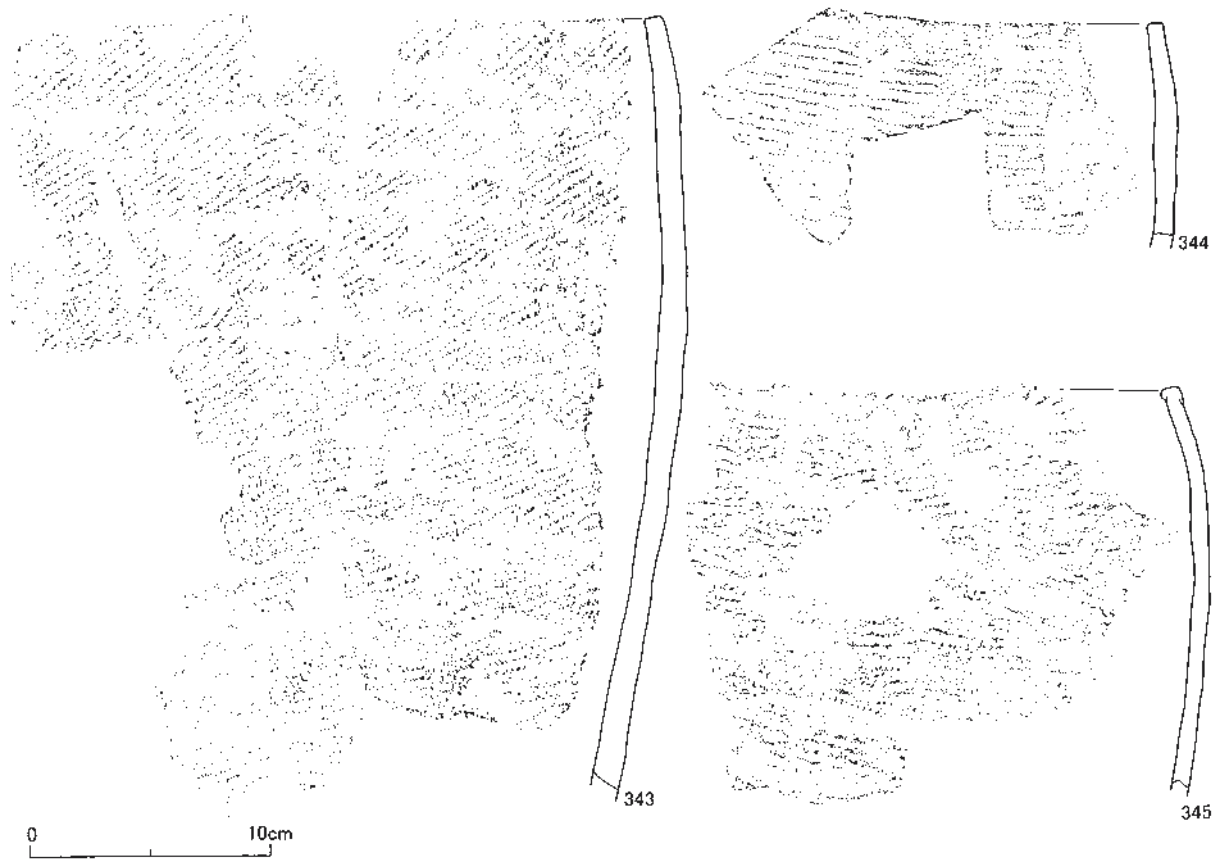
図IV-52 包含層出土の土器 (52)



図IV-53 包含層出土の土器 (53)

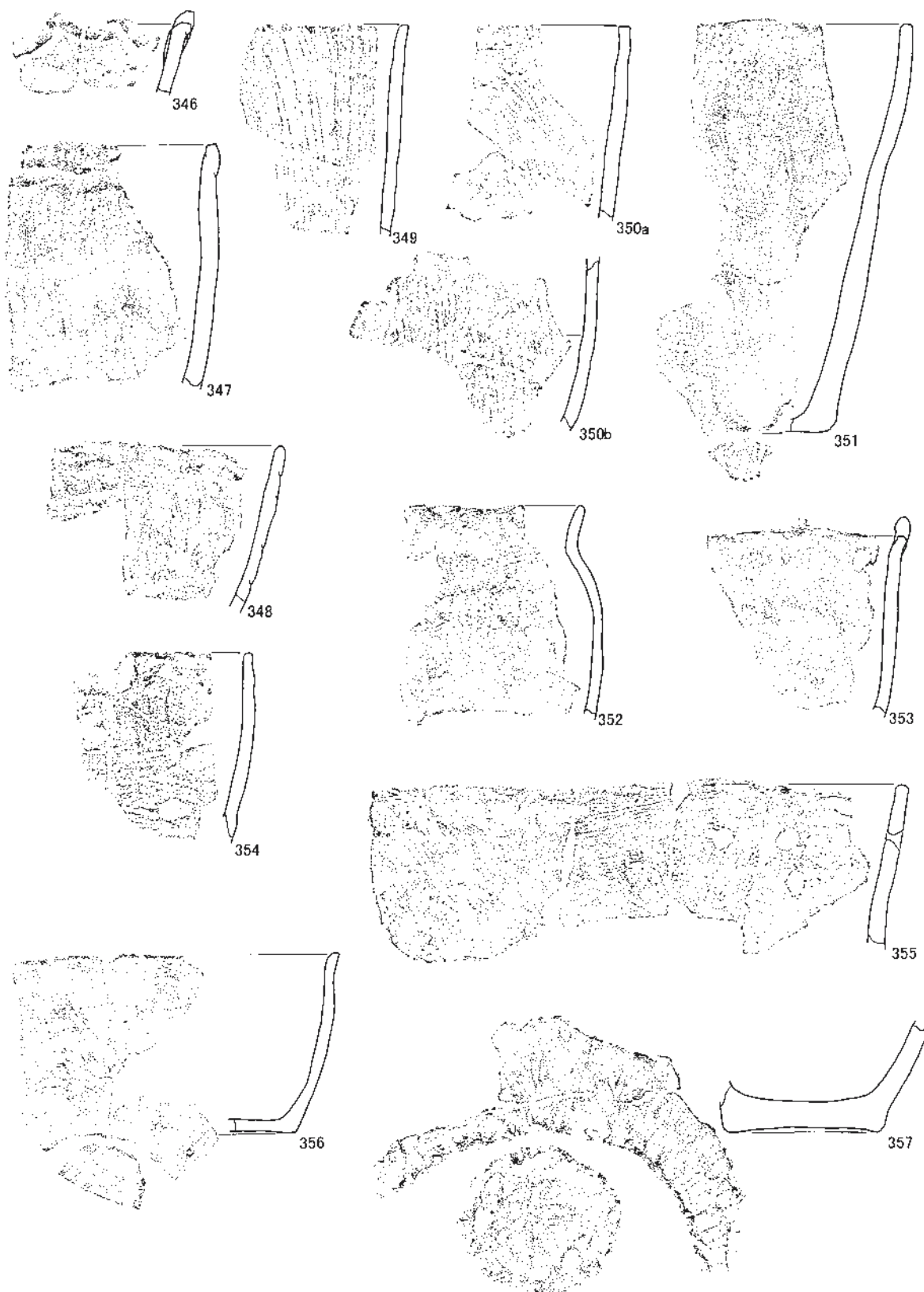


図IV-54 包含層出土の土器 (54)

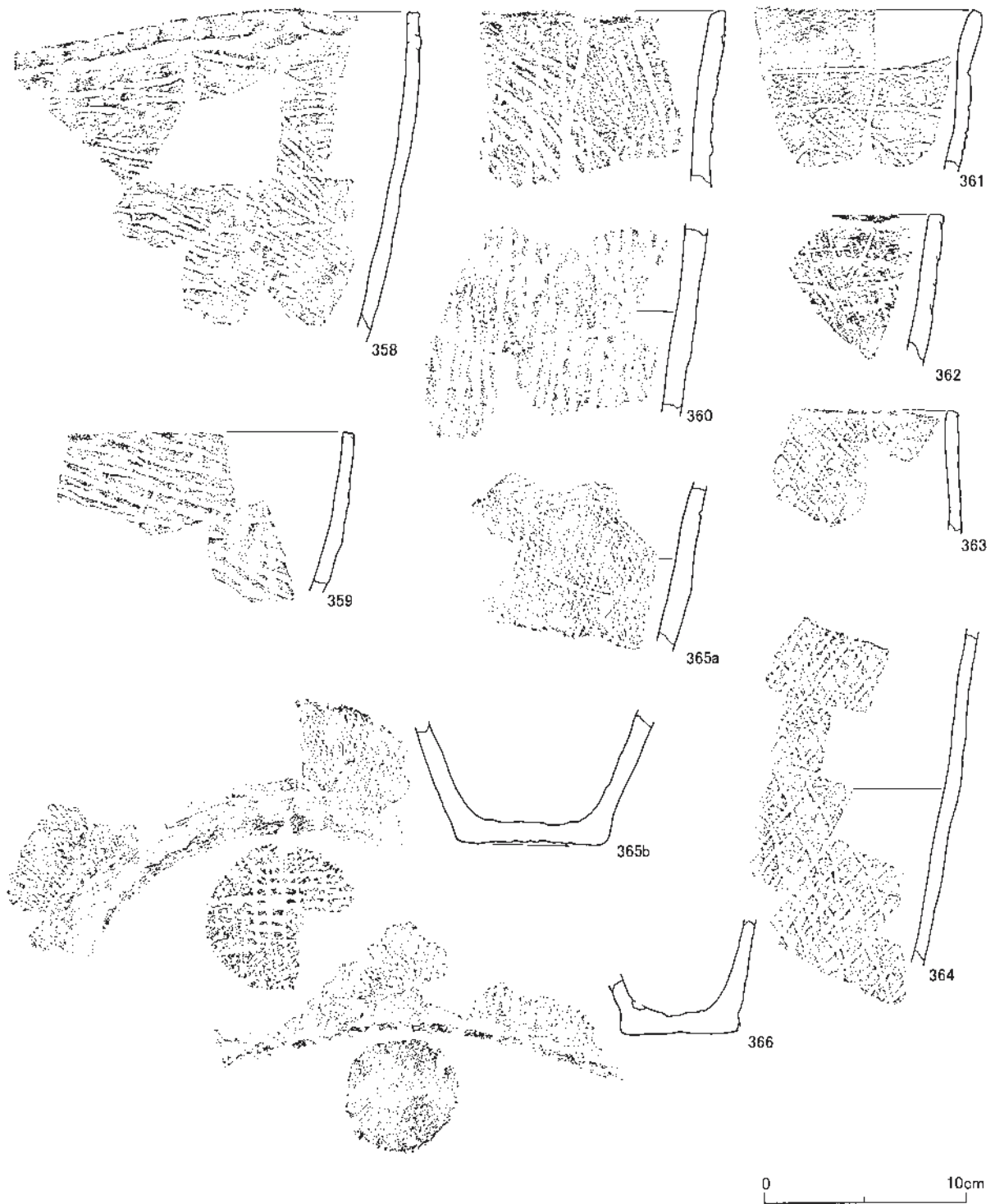


図IV-55 包含層出土の土器 (55)

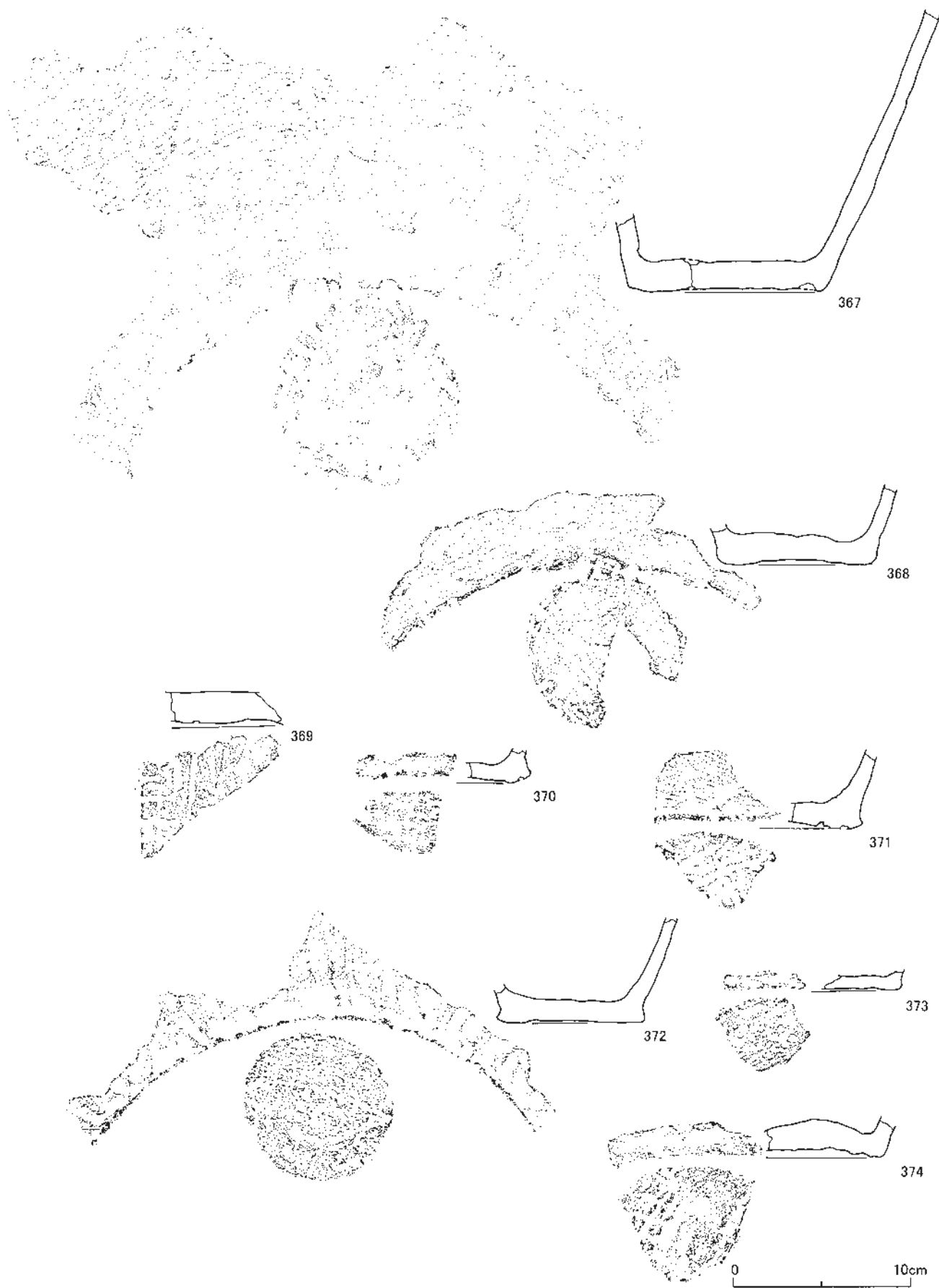




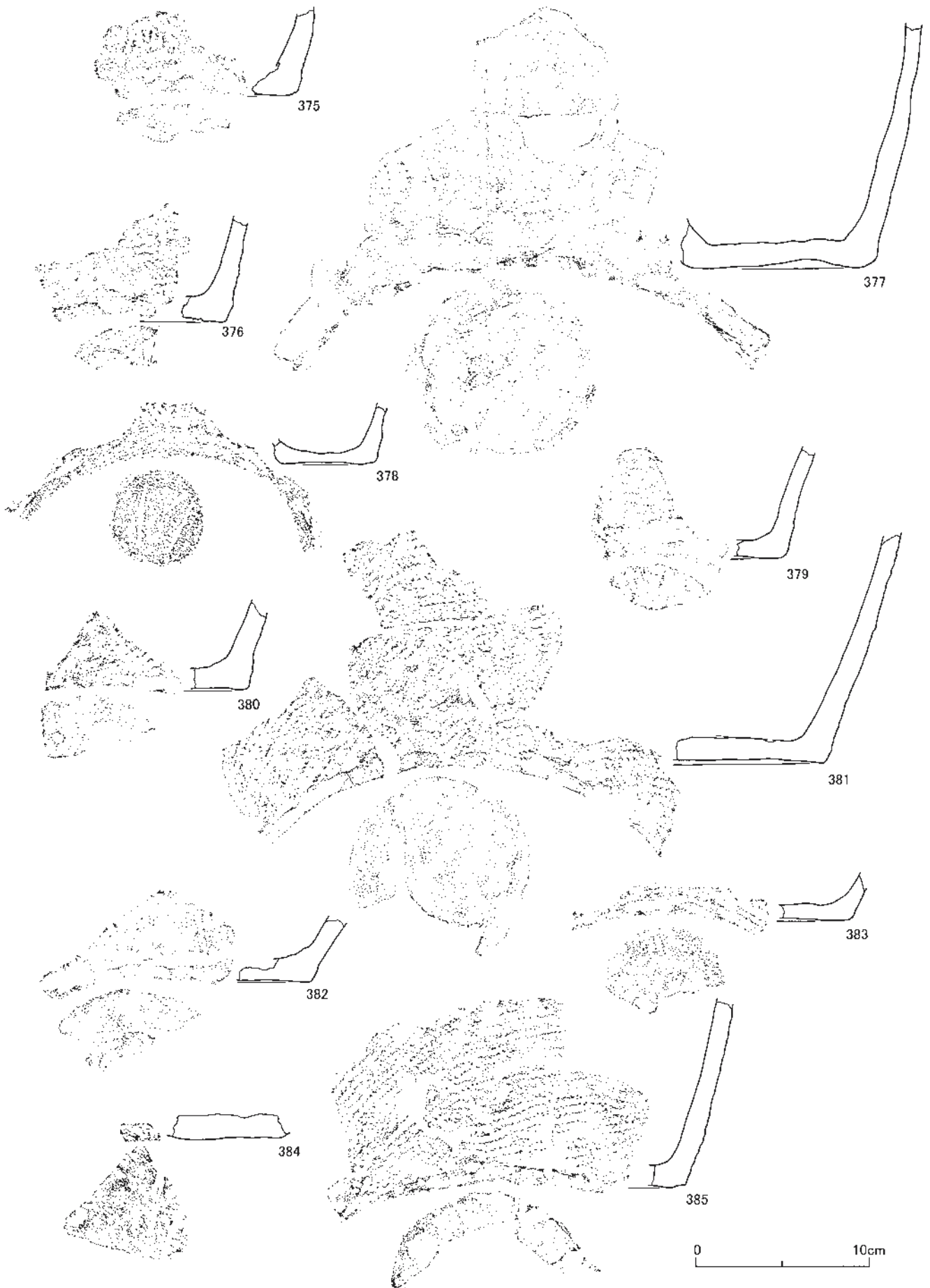
図IV-56 包含層出土の土器 (56)



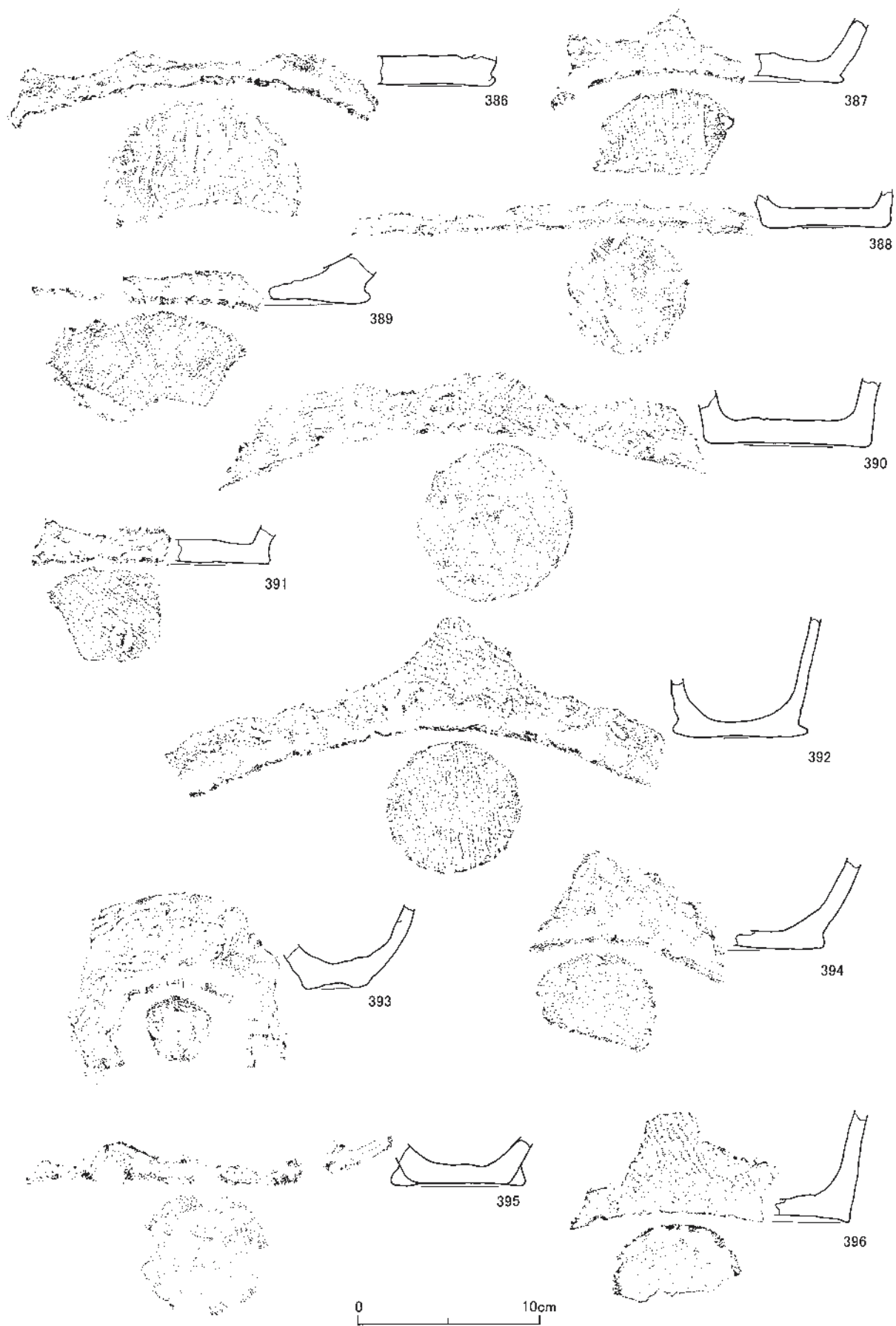
図IV-57 包含層出土の土器 (57)



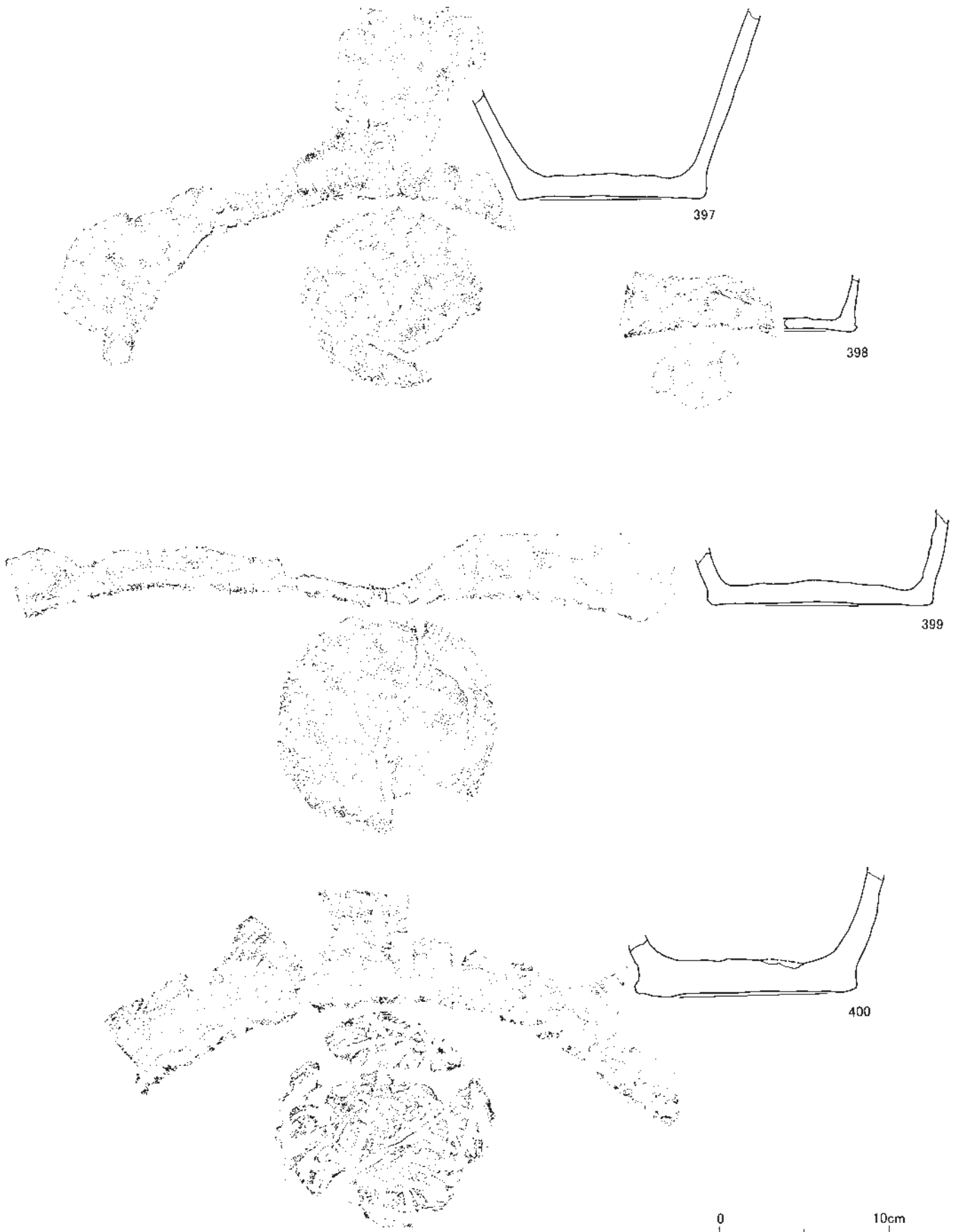
図IV-58 包含層出土の土器 (58)



図IV-59 包含層出土の土器 (59)



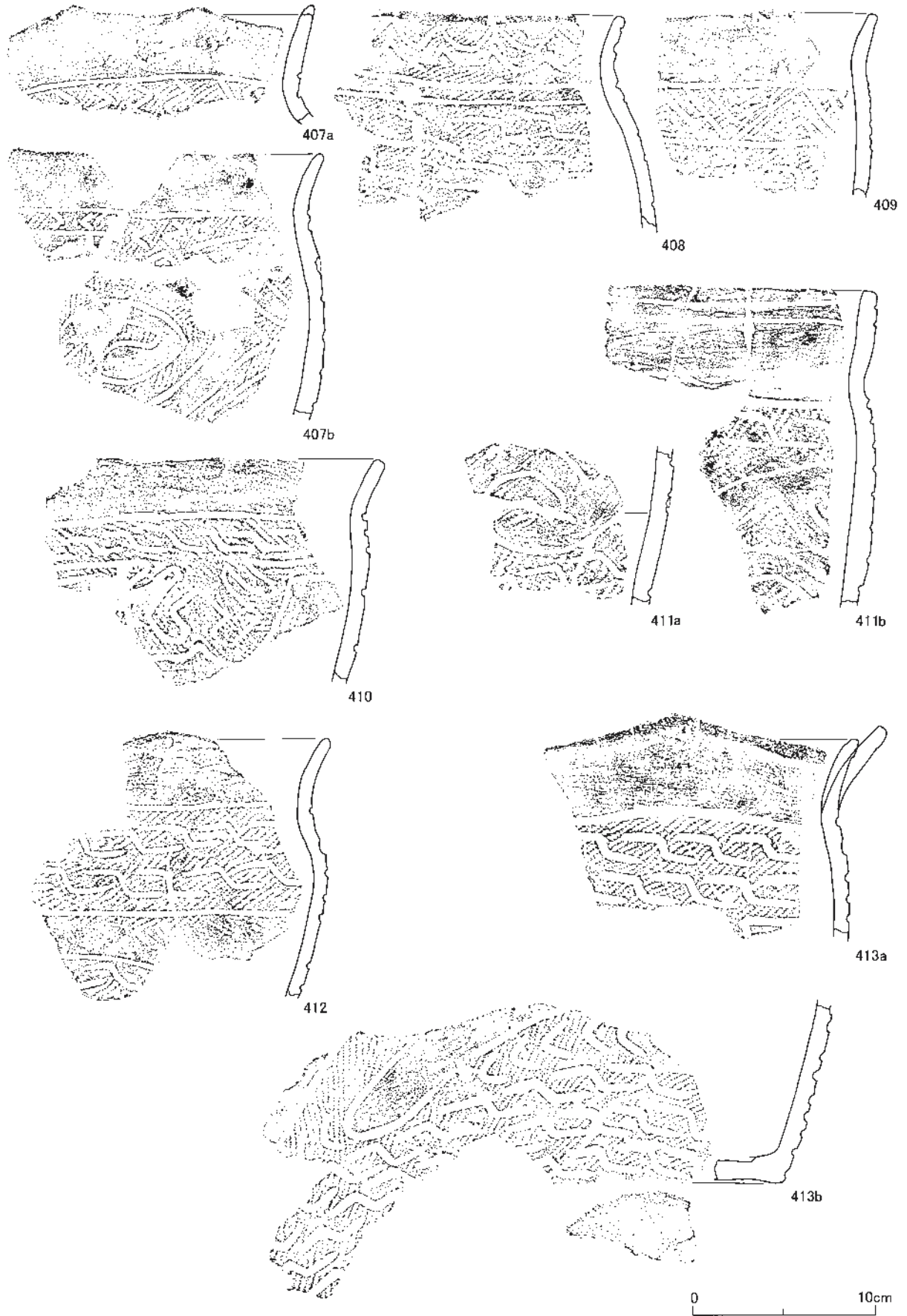
図IV-60 包含層出土の土器 (60)



図IV-61 包含層出土の土器 (61)



図IV-62 包含層出土の土器 (62)

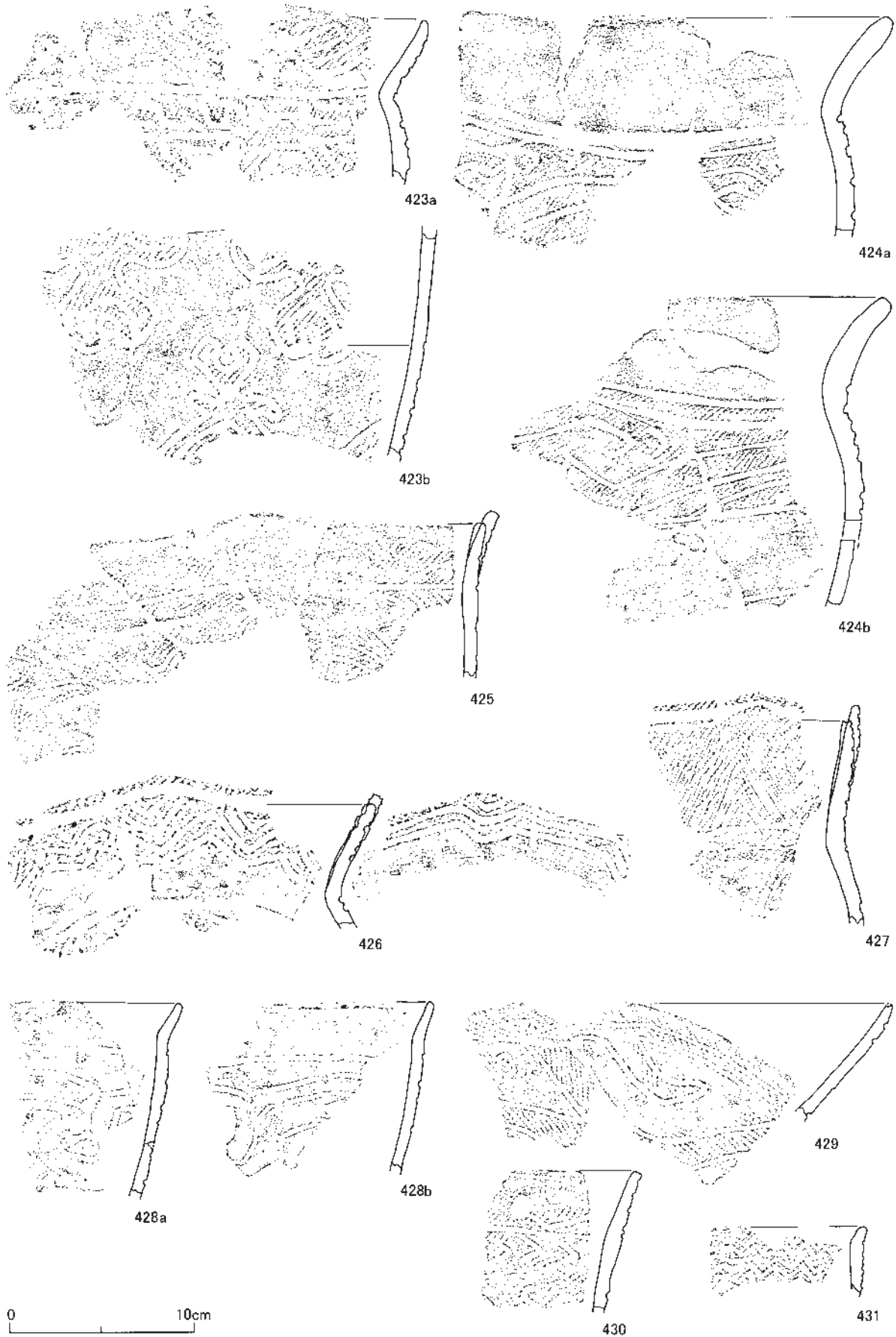


図IV-63 包含層出土の土器 (63)

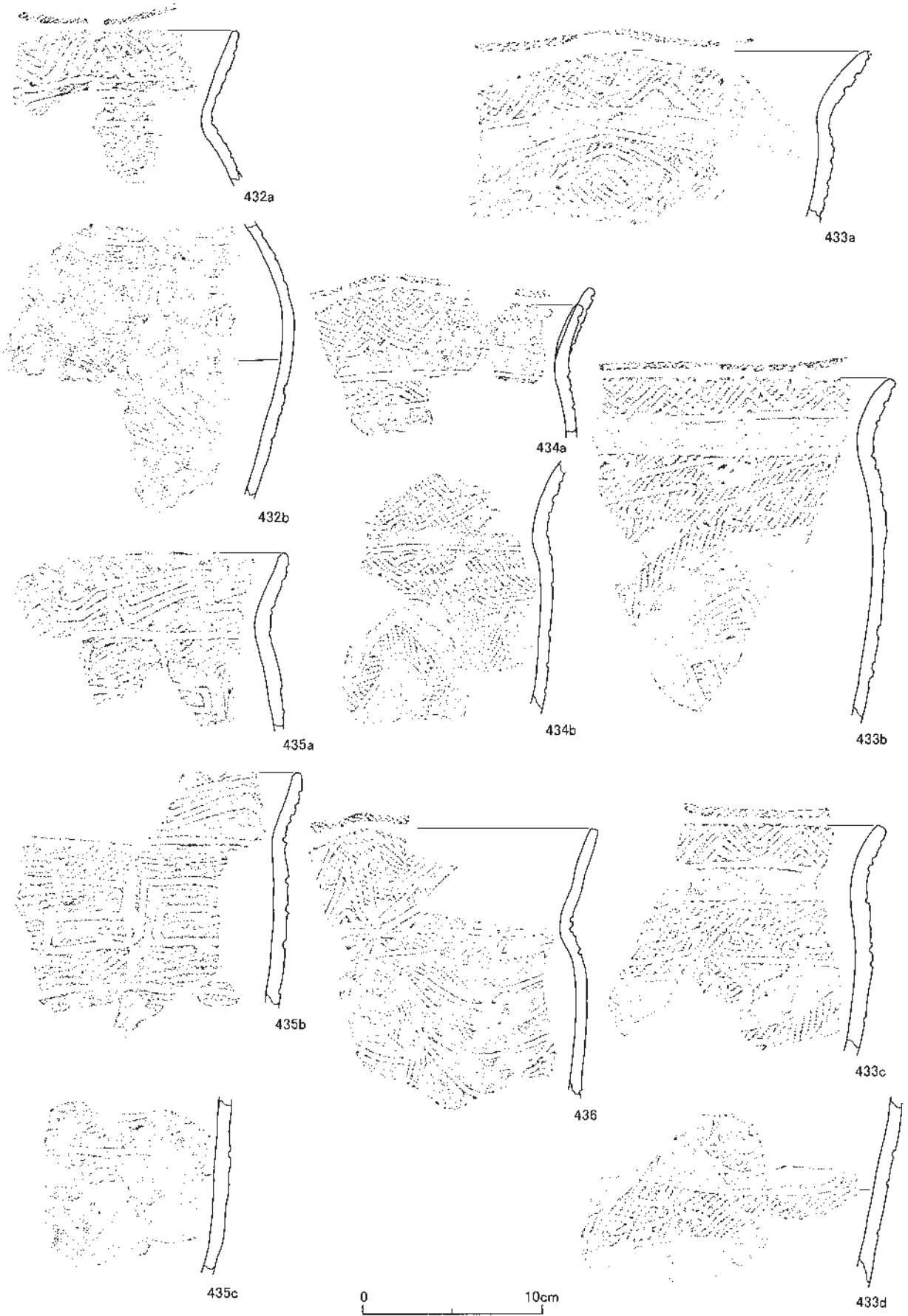




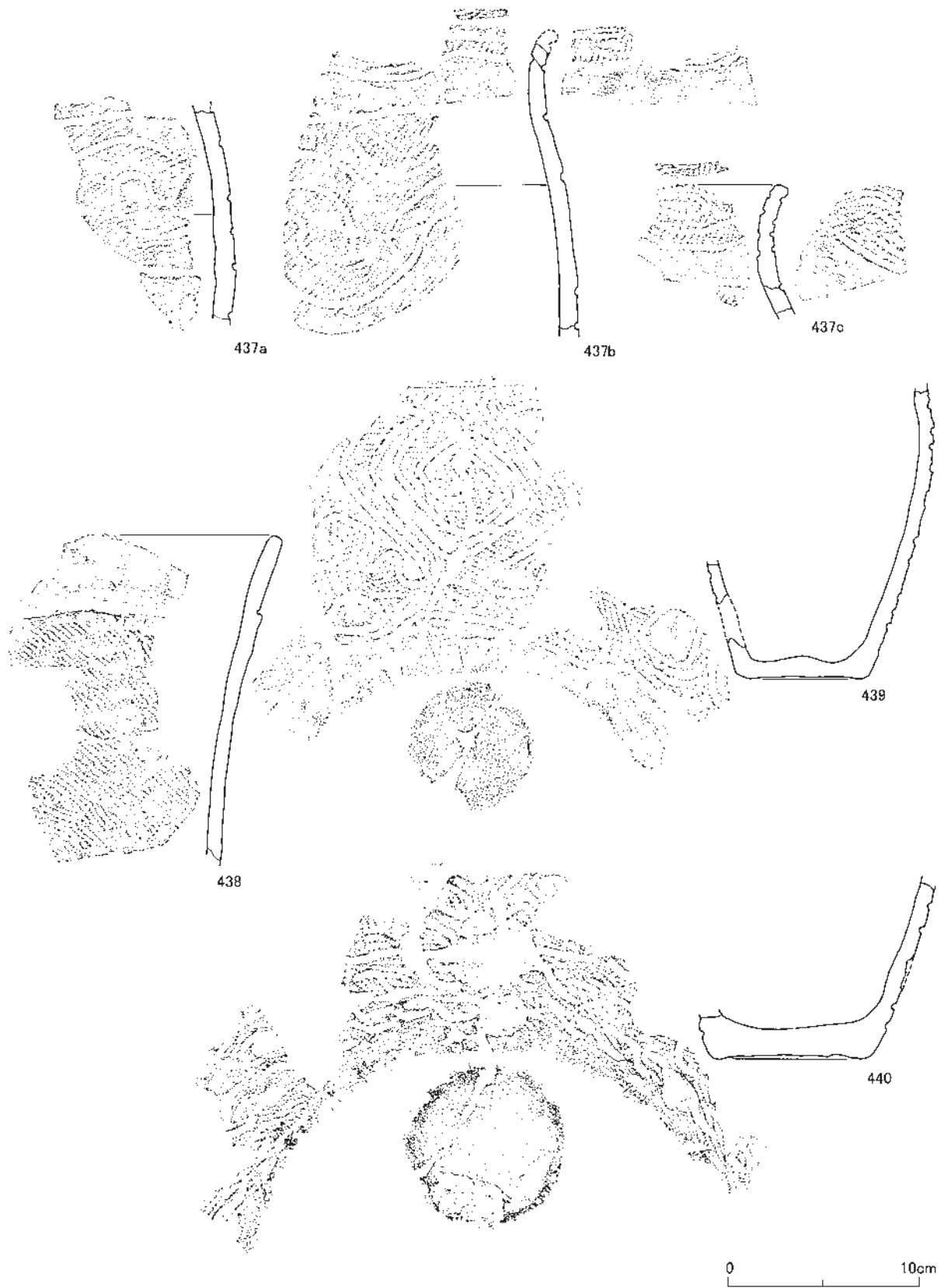
図IV-64 包含層出土の土器 (64)



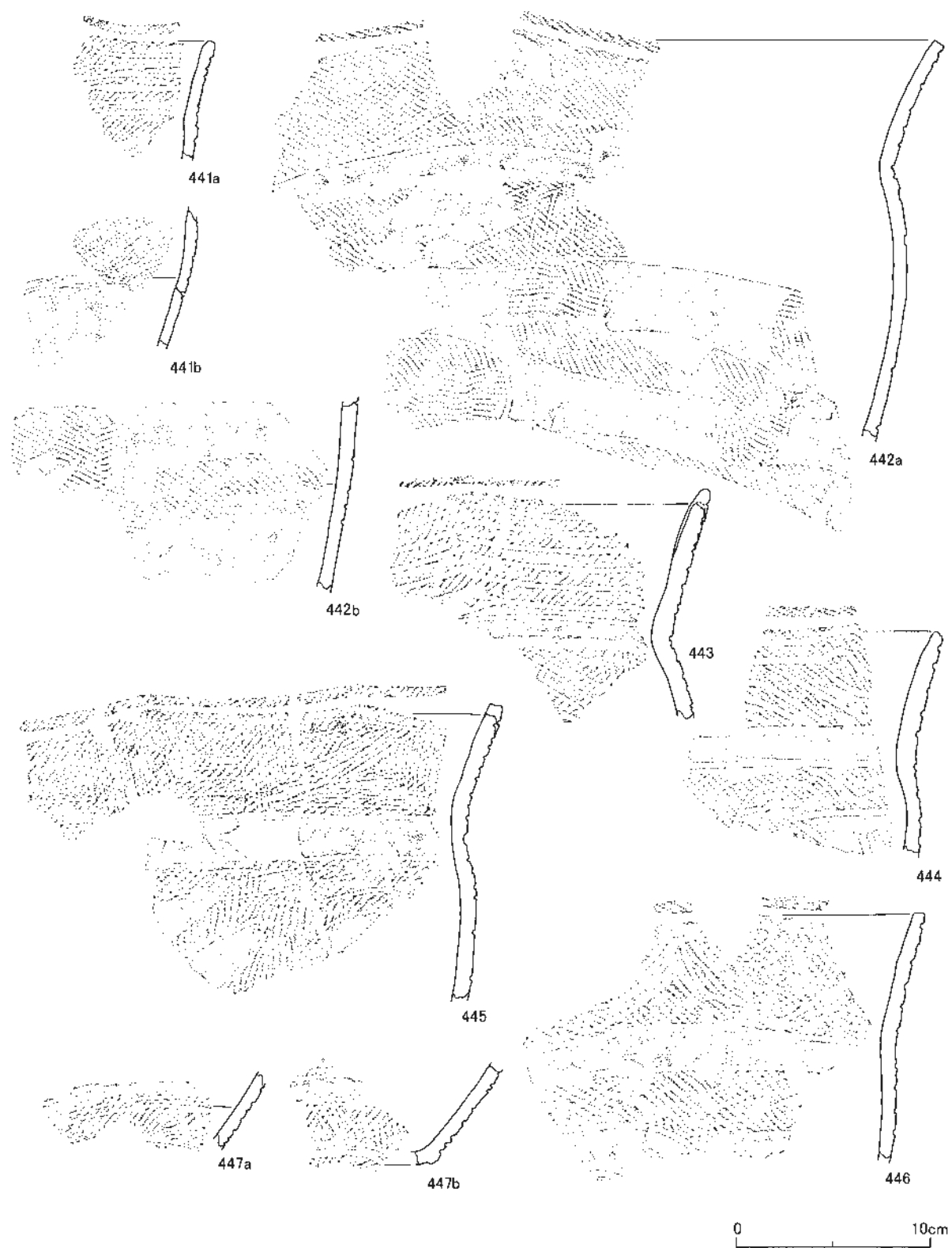
図IV-65 包含層出土の土器 (65)



図IV-66 包含層出土の土器 (66)



図IV-67 包含層出土の土器 (67)



図IV-68 包含層出土の土器 (68)

91～96・410・418～420・422・423・425はカニバサミ形の磨消縄文を持つものである。91は鉢型の器形で、内面にも縄文を施す。口縁部に鋸歯状ないしは波状の沈線文を持つ。92～96は頸部に無文帯を持つ。

97～100・407・417・424は角型の渦巻き状をした磨消縄文を持つものである。411・413・414・428・429も渦巻き文を基調とした磨消文様を持つ。428は全面にミガキ調整を施すものである。429は浅鉢型の器形の一部である。

101は小型で2本一組の沈線によって波状文様を連続する。439と440はカニバサミ状の文様と角張った渦巻き文様が組み合う比較的胴が細い小型の胴～底部破片である。微妙な上げ底である。

430・435・437は白坂3式に近似するものである。便宜的に大津式に分類した。437は大津式とした94・100・411や白坂3式とした103・426に類するものであり、この一群については文様上の便宜でそれぞれの型式にあてはめたが、同一時期の可能性はある。430のような入組み文風な文様を持つ小型のものや435のような巴文風なクランク文様と口縁部の鋸歯状文が組み合うものも同様である。

102～107・426・427・432～434・436・438は白坂3式である。頸部には無文帯ないしは横走する一本の沈線で区画する。口縁部は鋸歯状ないしは直線的な波状文様を、複数本で一組とした沈線によって施す。磨消縄文による施文を施す。あらかじめ文様に則して縄文を施して、沈線で縁取るものもある。口唇部の平坦面に縄文を施文するものが多い。

438は白坂3式からウサクマイC式に並行する縄文地文のものである。口縁部を一段薄くして、そこに丹念にミガキ調整を施した胴部破片である。

**IV群b類：**(図IV-30・31・68、図版108・152～154) 108～111・441～447はIV群b類、縄文時代後期中葉の土器である。

108は加曾利B式に並行する注口土器である。口縁部は欠損し、注口部分は剥落する。109・110はウサクマイC式である。口唇部際を一本の沈線で区画する。111はウサクマイC式並行のものである。胎土は白色味をおび、長石が混じる。入組みながら連続する磨消縄文による渦巻き文様によって構成される文様帯が3段ある。当初は蛭沢I期の可能性を考えたが、器形と胎土の特色および、千歳市キウス5遺跡A地区の類例を参考にして、IV群b類に分類した。441と447は小型のものである。複数本一組で鋸歯状文様によって構成される文様帯を持つ。

**VI群：**(図IV-69、図版154・155) 1～4は恵山式である。1・3・4そのなかでも後半のものである。1・4はアヨロ3a、3は聖山・瀬棚南川に並行する。1は上面観が楕円形の壺で摩滅が著しい。

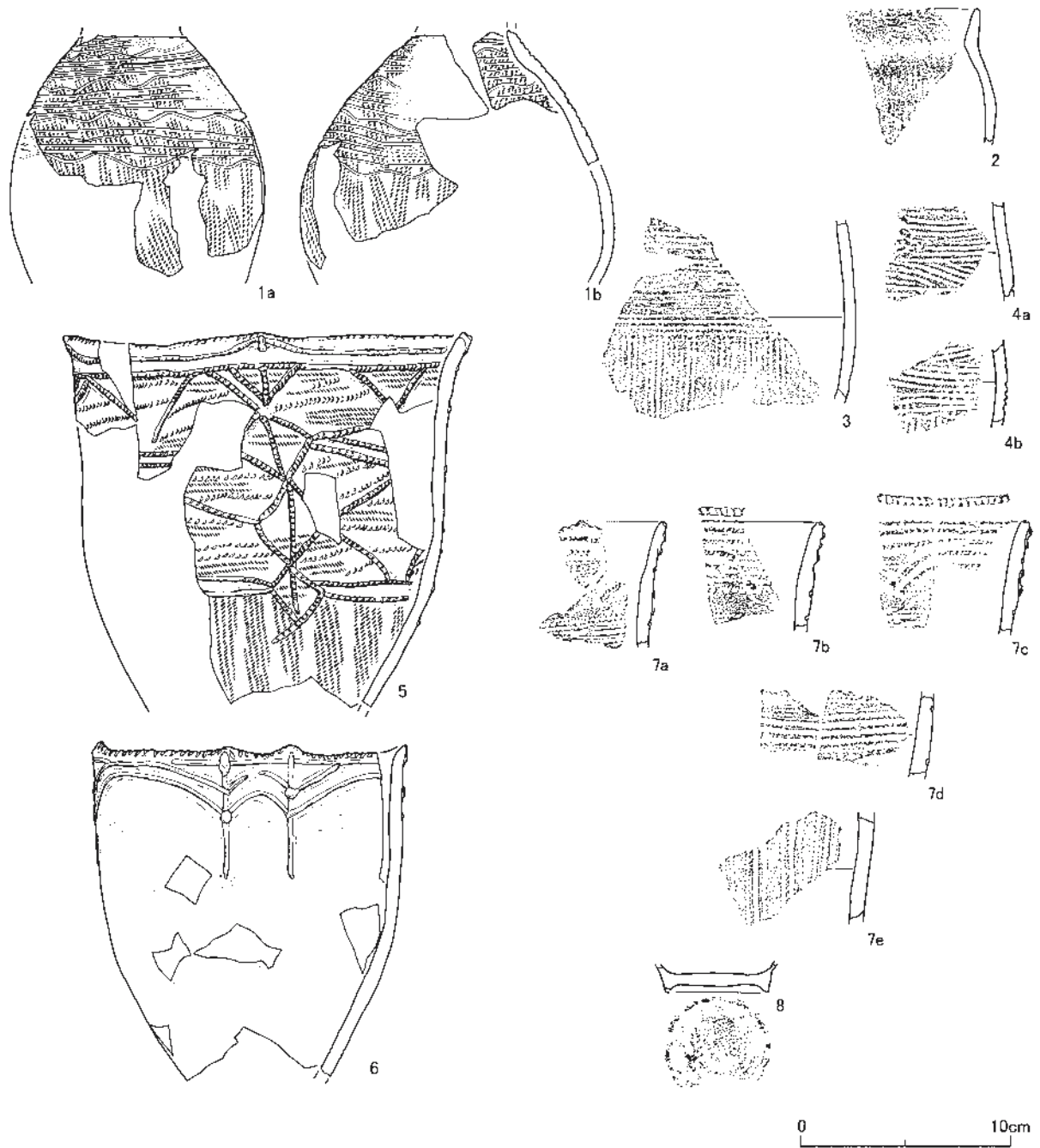
5～8は後北式の破片である。5・7は後北B式、6は後北C1式である。器面を無文地にする。8は上げ底の底部破片である。

**土製品：**(図IV-70、図版155～157) 1は土偶の顔部分である。N8区のIV層から出土した。隆帯を貼り付けた、鼻と鼻上隆起は連続している。目と鼻の穴と口は草本による刺突である。耳にあたる部分には貫通孔がある。類例としては乙部町緑町2遺跡の3号土坑、覆土からの出土遺物がある。この土坑の覆土からは同時に縄文時代後期初頭の土器が出土している。濁川左岸遺跡でも出土する、沈線文のない縄文地文の土器で、折り返し口縁はもたない。

青森県において、多くの土偶が出土している。出土状況が明確なものが多い。影浦が実際に青森県において観察を行ったところ、餅の沢遺跡および三内丸山遺跡の縄文時代中期における円筒上層式の後半(見晴町式並行を含む)の例が類似していることが明らかになった。緑町2遺跡の包含層出土遺物は、ほとんどが後期初頭を中心とするものであり、縄文時代中期中葉の遺物はない。ただし石組炉の炉石に用いられる石器を転用する例のように明らかに縄文時代後期の人間が中期の石器を採集して

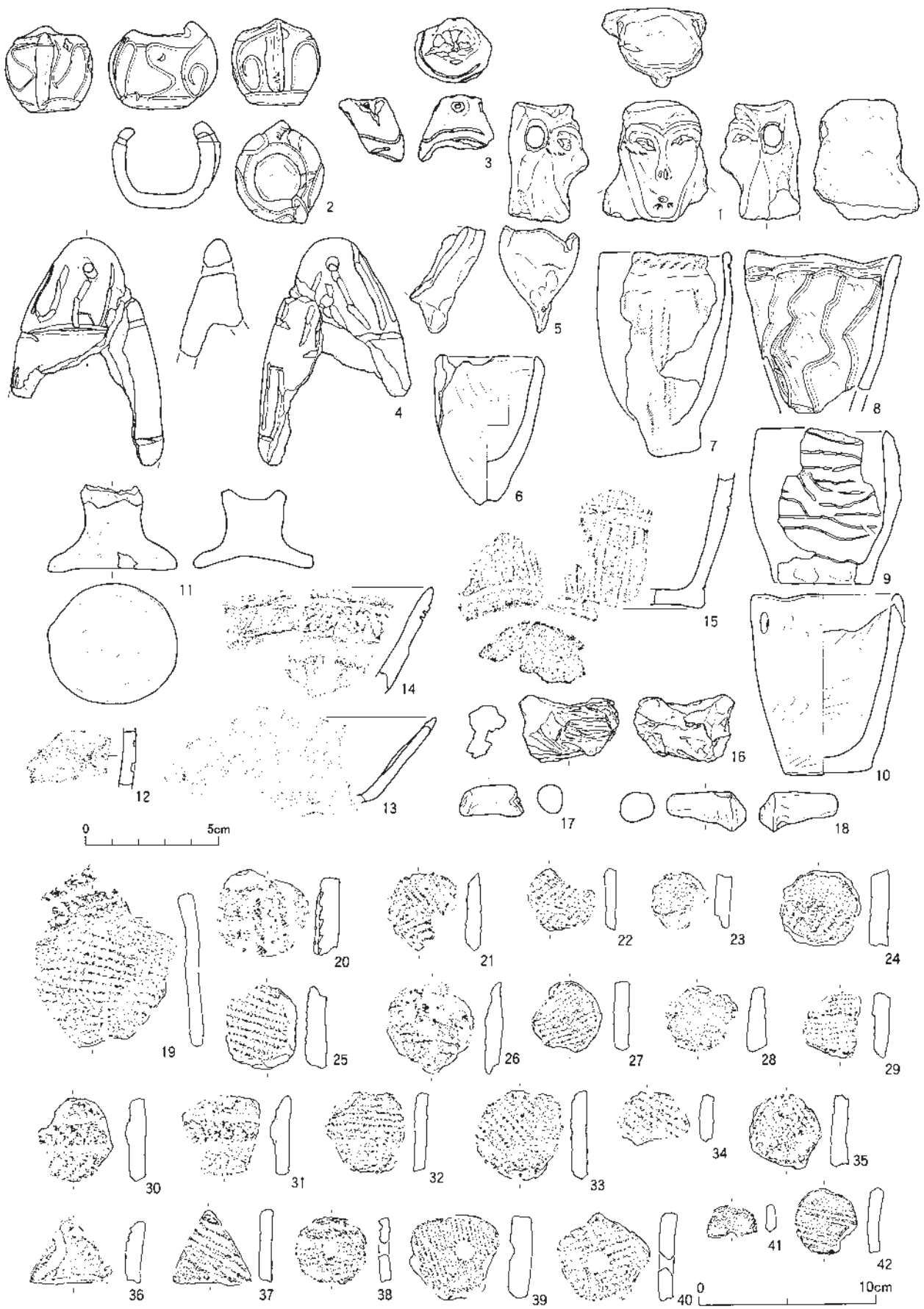
くる例示があるため確定は難しい。

2は船形を球形に矮化したような形状のミニチュア土器である。蛇行沈線と渦巻き文様が涌元式の沈線文を思わせる。3は釣鐘形、4は鐸形をしたミニチュア土製品である。5～7は尖底気味の器形をしたミニチュア土器である。5は漏斗状に先細る形状である。7は無節の縄文を縦走させ、口縁部に縄線を施す。8～10・15は深鉢型のミニチュアである。5は蛇行沈線、9は不整な横方向に平行する直線を施し、15は2本一組の線によって格子目状の沈線文を施す。IV群a類の復元土器15に類するものとする。涌元式の沈線文を思わせる。10は無文のものである。ミニチュアとしたが、小型のものには無文のものが多く、器種組成の一環という可能性もある。11は坏状の小型土器の脚である。12はミニチュアの深鉢で刺突列を持つものである。器形は判断できない。13・14は鉢型のミニチュアと思われるものである。器壁は薄い。14は鋸歯状の沈線文を口縁部に持つものである。16・17・18は焼成粘土塊である。16は草本による条痕をまばらに持つ。17・18は土器成形時の粘土が焼けたものの可能性がある。19～42は再生土製品である。土器破片の縁辺を加工したものである。20～23・26・29・40は縄文時代中期前半の土器破片、30・31は縄文時代中期末葉の土器破片、19・24・25・27・28・32～39は縄文時代後期前葉の破片を利用したものであろう。円形を意識したものがほとんどであるが、36・37は三角形である。36はP-2に図示した土器4と同一個体の可能性が高い。38～41は穿孔を持つものである。41は全面を研磨している。胎土から判断すると、続縄文土器を利用した可能性がある。42は恵山式の破片である。縁辺は「擦り」によって調整する。 (大泰司)



図IV-69 包含層出土の土器 (69)





図IV-70 包含層出土の土器・土製品 (70)

## 2. 石器・石製品

石器は9197点出土した。剥片石器は1357点出土し、100点以上出土したものとしては、Uフレイク438点、スクレイパー384点、Rフレイク177点、石核126点、石鏃110点の順に多い。礫石器は1634点出土し、100点以上出土したものとして、偏平打製石器428点、たたき石426点、台石384点、石斧125点の順に多い。フレイクは4439点出土し、頁岩とメノウのものがそれぞれ2000点近く出土した。石製品は16点出土した。人為的な操作が加わったと判断して1750点の礫を採取、分析した。

**石鏃（1～26）：**（図IV-71、図版158）110点出土した。ほとんどがIV層からの出土である。遺物の出土が集中する21ラインより南東側で、遺構が構築されている調査区際からの出土が目立つ。比較的に立っているのはH-15が立地するN9区と、H-20脇のM18区である。ただし30ラインのすぐ北西側にある大きな沢地形の際28ライン以北からの出土もある。素材別の内訳は、頁岩製（5・9～11・13～16）が65点、黒曜石製（1～3・7・8・17）が35点、メノウ製（4・6・12）が8点、チャート製が1点、流紋岩製が1点である。形状としては有茎のものが多い。凸基有茎（4・10・11・12・13・14・15・16・17・18・19・21・22）が56点、凹基有茎（4・5・9）が16点、平基有茎（6・8・20・23）が14点、尖基（24～26）が10点、である。ただし平基のものには凸基気味のもの（20）が多く、また尖基のものについても少数ではあるが、基部を認めうるもの（24・25）が含まれており、凸基有茎が多い事が傾向として指摘できる。凸基有茎のものについては特に幅の狭いもの（21）がある。有茎石鏃と尖基石鏃について特徴的なものとして、付着物が茎部ないしはそれに準じる位置に観察できるもの（10・14・15・16・18）や、特殊な2段のかえしを持つもの（5）凹基にのみにあった。そして、茎部が短い舌状のもの（4・20・21・22）や、再生にのためか幅に対して長さ短いもの（7～9）は凹基と平基にみられ、かえし部分は5のような特殊な2段のかえしを思わせる。

無茎のものは少なく、凹基無茎（2・3）が4点、平基無茎（1）が1点。3は特に大型のものであり、このようなものは1点のみの出土である。凹基のものは茎部の有無を問わず、頁岩製か黒曜石製であり、加工の容易い素材が選択されているものと考えられる。石鏃はほとんどが両面全面調整であり、調整が全面におよばないもの（11・18・23）は剥片素材の形状そのものについて調整が及び難い形状の部分、平滑ないしは凹んだ形状をしているためである。未成品については7点出土した。

**石槍またはナイフ（27～34）：**（図IV-71、図版158・159）13点出土した。ほとんどがIV層からの出土である。調査区内から散点的に出土するが、焼土が比較的まとまって分布する9ラインの沢地形あるいはH-12が立地する微妙に窪んだ地形部分から目立って出土する。他の石器と比較すると、III層から出土する比率が高い。素材別の内訳は頁岩が9点、黒曜石（27・30）が3点、メノウが1点である。28・29・34は珪質頁岩製である。形状としては凸基有茎（28・30・31・32・33）のものと尖基（27・29・33）がある。29～31は両面全面調整のものであり、32・33は縁辺のみ明瞭な調整がめぐる。32～33は正中線に対して線対称とは言い難い形状であり、4は未成品の可能性もある。

**石錐（35～43）：**（図IV-72、図版159）19点出土した。ほとんどがIV層からの出土である。調査区内から散点的に出土したが、調査区南東側のOライン沿い、O12・13区の沢地形を含むあたりから目立って出土する。素材別の内訳は頁岩が14点、黒曜石が2点、メノウが2点、チャートが1点である。形状としては剥片の一端に刺突部を長く作り出すものがほとんど（35～41）で、特に長いもの（36・39・40）が4点ある。40は回転による磨耗痕はないが、刺突具として捉え、石錐に分類した。また棒状の錐は3点出土し、特徴的なものとしてほぼ両面全面調整で端部に磨耗痕があるものが2点（42・43）ある。この2点は遺構が集中している20ラインより北西側から出土した。

**つまみ付きナイフ (44~59) :** (図IV-72・73、図版160・161) 38点出土した。ほとんどIV層からの出土である。H-15が立地する凹地にいたる、9ラインの沢地形から多く出土した。素材別の内訳は頁岩が36点、黒曜石が2点である。素材の形状がわかるものについては縦長剥片を素材(47・48・49・51・53・54~56)としたものは18点である。そのうち、明瞭な調整を持つものは12点ある。縦長の素材を用いるもの(45・46・50・52)は13点である。明瞭な調整を持つものは8点ある。B地区と比べて刃部整形の位置と調整方法が多岐にわたっていたため代表的なものを今回図示(45~56)した。

縦長剥片や縦長の素材とするものを10点図示した。46・47・49・51・53は両縁片面調整のものである。46は端部にも明瞭な調整が及ぶ。47は一側縁に急角度な刃部を持ち、端部にも調整が及ぶ。49・53の片縁は極浅形な調整である。53の端部は刺突部様である。51は鋸歯状でやや急角度な刃部を持つ。54は片縁に明瞭な調整を持つものである。54は急角度な刃部で縁辺には潰れ痕跡がある。刃部の対となる側縁には礫皮が幅広く残る。

45・52・56・57は両面両縁調整である。45・52は背面に明瞭な、腹面に極浅形の調整がある。52の端部は刺突部様で、つまみ部分が不明瞭である。56・57は両面の対向する片縁について明瞭な調整があり、裏面にも極浅形又は不連続な調整がある。56は背面には礫皮残す。57は横長剥片の形状を残す。

極浅形の調整を連続させて整形する、素材の形状を生かした簡単な作りのものは7点出土し、そのうち3点を図示した。48は両縁両面に極浅形の調整があり、端部は刺突部様である。55は両縁の片面に極浅形の調整がある。50は片縁の片面に極浅形な調整があり表面に礫皮を残す。

特徴のある遺物として、両面全面調整の作りのものがある。44に図示した黒曜石製の1点のみである。端部を刺突部様に作り上げる。また、出土した製品はおおよそ縦長の形状のものがほとんどであるが、横長の形状のもの(58・59)が3点出土した。そのうち2点を図示した(58・59)。いずれも珪質頁岩製で一部に全面調整が見られる。石製品の性質も考える必要がある。

**スクレイパー (60~104) :** (図IV-73~76、図版161・166) 384点が出土した。ほとんどがIV層からの出土である。素材別の内訳は頁岩(60~62・64~66・68・70~75・77~83・85~91・93・95~99・101・103)は269点、メノウ(76・84・92・100)は83点、黒曜石(67・69)は19点、流紋岩(94)は7点、チャート(63・102)が4点、安山岩が3点、泥岩(104)が1点である。22ライン以南の遺構や遺物が集中している地区からまんべんなく出土しているが、8ラインの沢地形周辺とK~N-16~20区のやや平坦な面から比較的集中して出土する。

石篋をふくめて、縁辺に明瞭な調整が巡るもの(60~64・70・71)は23点出土した。トランシェ様の石篋(65・66)は2点、明瞭な調整が片面のほぼ全周をめぐる石器(68・77・78)は5点、急角度の刃部を持つもの(81・85・89・91)は9点、急角度な刃部を持ち、かつ搔器的なものは4点、搔器の機能を併せ持つもの(72・73・76・92)は9点、明瞭に急角度な刃部を作り出してはいないものの、搔器的な機能を想定できる刃部を持つもの(67)は8点である。鋸歯状の刃部を持つもの2点、礫器的なもの(104)は1点出土した。B地区において細分の要素のひとつとして抽出した外側にはりだす曲線的な刃部を持つ明瞭な調整を持つものは今回、細分の要素として用いるほど量がなかった。浅形ないしは明瞭な調整を持つもの(62・68~71・74~76・78~89・91・92・94~100)は206点、礫器的なものに伴う打ち欠きを伴うもの104は1点である。極浅形の調整を施すもの(64~67・77・90・93・101~103)は145点ある。全面調整は石篋や搔器の定型的なもの(60・61・63・72・73)に多く7点ある。比較的定型的な縦長剥片を素材とするもの(69・74~76・79~90・92・93・100・103)は108点出土した。横長の剥片を素材とするもの(63・67・68・70・77・78・91・94~97・99・101・102・104)は67点出土した。代表的なものを図化し、以下に説明する。

60～66・70・71は筥状の石器である。60・61・63は両面全面調整である。60は肉厚で端部が丸みを帯びる。61は縄文時代の靴型石器である。63は小型で端部は切り出し状の刃部である。

62・64～66は肉厚で、両面両側縁から石核を思わせる調整痕があり、端部の縁辺両端は潰れている。62の側縁はノッチ状である。丸みを帯びた端部両端には抉り状に調整が入る。筥状石器に類するものである。64は整形時の調整が全面に及び、側縁には極浅形調整が連続する。65・66は素材の両面両側縁に調整部を残すが素材に厚みがあるため刃部とはならない。端部については刃部をなす。66は板状で厚みのある頁岩を素材とする。端部両端には抉りがある。

68・70・71は両面に明瞭な調整を持つものである。68は横長剥片のほぼ全周に調整がめぐる。70・71は端部にも両面両縁明瞭な調整がある。71の端部両端は潰れ気味である。

77・78は横長剥片の背面について、両側縁に明瞭な調整を持ち、筥状石器を思わせるものである。77の側縁は浅形両面調整で、端部まで調整が及ぶ。78は背面のほぼ全周に明瞭な調整が及ぶ。

67・72・73・76・81・87・92・95は搔器的なものである。67は横長剥片を素材とする。片面全面調整で、刃部には極浅形調整が巡り。72・73はO8c区Ⅲ層から出土した特徴的な搔器である。全面調整だが凹部に調整は及ばない。基部は両面調整で刺突部を思わせる。76・81・87・92・95は搔器的な用途が想定される。76の背面両縁について明瞭な調整で、一側縁は両面調整である。端部には潰れ痕があり、搔器的である。81両縁片面明瞭な調整で、両縁とも急角度な刃部を持つ。端部は裏面に極浅形調整がある。87は片縁片面に明瞭な調整で直線的な刃部を整形する。刃部の対となる側縁に礫皮が残る。肉厚な刃部の縁辺には細かい調整がめぐる。92の端部は丸みを持ち、微妙なつぶれ痕と素材の厚さが特徴的である。95は打点と対となる縁辺に明瞭な調整による曲線的な刃部を整形する。刃部の裏面は微妙に潰れる。

69・75の先端部は折損した鋭利な刺突部を思わせるものである。縦長剥片の両側縁に明瞭な調整を施す。85は両縁片面に明瞭な調整がある。両縁とも急角度な刃部を持ち、端部は刺突部様である。

86・89・91は急角度な刃部を持つものである。86は片面の一側縁には明瞭な調整、端部を含む縁辺には極浅形調整がまばらにめぐる。調整は急角度な刃部を整形する。89は厚みのある素材に対して、一側縁の片面には明瞭な調整で急角度な刃部を整形する。端部には微妙な潰れ痕がある。91は一側縁に整形痕の上に極浅形片面調整で急角度の刃部を整形する。その裏面の端部際には明瞭な調整がある。

74・79・82・83・84・90は縦長剥片に明瞭な調整を持つものである。79・82・83は両縁に明瞭な調整を持ち、一部調整が両面に及ぶものである。79は片面のほぼ全周に調整が回る形状は83・85に類する82の片縁端部が抉れる。83は側縁のごく一部が両面調整である。88は片縁のみに両面調整があり、刃部と対になって礫皮が幅に厚みを持って残る。74・84は両縁片面に調整がある。74はほぼ全周に調整が回り、端部は丸みを帯びる。80は背面に明瞭な調整がめぐるが、背面に調整がないところについては裏面に調整が為されている。90は一側縁の片面に明瞭な調整がある。

94は不整な剥片の一側縁の片面に明瞭な調整を持つL8c区とM9d区のものに接合した。

96・97・99は横長剥片に明瞭な調整を持つものである。96・97・99は打点と対になる縁辺に調整がある。96・97は側縁にも調整がある。96は片面明瞭な調整によって直線的な刃部を持つ。97は両面調整で直線的な刃部を整形する。99は打点側の曲線的な縁辺にも曲線的な刃部を腹縁側に整形する。

98・100・101は不整形なものである。98は一側縁に極浅形と明瞭な調整による調整があり一部両面に及ぶ。縁辺にもまばらに極浅形や明瞭な調整がまばらにある。100は細かい調整が側縁にめぐるものである。101は横長剥片の一側縁に明瞭な調整で直線的な刃部があり、全体に極浅形調整がめぐる。

93・98・102・103は極浅形調整による刃部を持つものである。93は縦長剥片の両縁両面、102は不

整な剥片の一側縁に、103は片縁の両面に極浅形調整がある。

104は 端部に両面調整で打ち欠きがある。石核的なものかあるいは、たたき石の項で刃器と称したものと関連するものとする。

**ピエス・エスキーユ (105~107) :** (図IV-77、図版166) 27点出土した。両端に潰れ痕があるものを選び出した。さらに側縁に調整がめぐるものは4点出土した。縦に裂けた破片(105・106)も含めた。素材別の内訳は黒曜石(105・106)が11点、頁岩が4点、メノウ(107)が2点である。遺跡周辺に露頭が見つからない黒曜石のものが多い事に特徴がある。主にIV層から出土する。H-15埋没による凹みがあるN9・10区と後期前葉の遺構が立地するK~L-19~21区、P12区に出土が集中する。

**両面調整石器 (108・109) :** (図IV-77、図版167) 25点出土している。両面からの整形がほぼ全周するもので、石核的な要素を含んでいると判断したものを抽出した。主にIV層から出土する。全体に点数的が少ないものの、比率的にはIV層の下位からの出土が多い。前期の土器の出土と関連する可能性がある。素材別の内訳は頁岩(109)が14点、メノウ(108)が9点、安山岩が2点である。遺跡周辺で採集できる石材が多い。109の縁辺に細かい剥離が並ぶが、これは剥片を剥がす際の調整面と考える。

**石核 (110・111) :** (図IV-77、図版167) 126点出土した。剥片をとるために打ち欠いた痕跡があるものを抽出した。IV層からの出土が目立つ。比較的、15ライン以北では、IV層の上位からの出土が目立つ。素材別の内訳は、頁岩(110・111)が71点、メノウが51点、黒曜石が3点、泥岩が1点である。111の縁辺に細かい剥離が並ぶが、剥片を剥がす際の調整面に関連するものとする。

**Rフレイク :** 177点が出土した。剥離が短く連続するものを分類した。ほとんどIV層からの出土である。素材別の内訳は頁岩が際立って多い。142点、メノウが23点、黒曜石が8点、泥岩と流紋岩が少数出土している。出土量が比較的多い調査区はK9区、L14区、M16区、K19区である。

**Uフレイク :** 438点出土した。潰れ痕、細かい剥離が連続するものを分類した。ほとんどIV層からの出土であり、IV層上位に多い。頁岩が際立って多く276点、メノウ105点、他に泥岩、チャート等がある。出土はM8・9区とL~N-15~18区に偏る。石鏃の出土が多かった、H-15が立地するN9区と、H-20脇のM18区に似る。

**フレイク :** 4440点出土した。IV層上位からの出土が多い。頁岩が1935点、メノウが1926点とそれぞれ4割強、黒曜石が426点と1割程度である。他にチャート、泥岩、片岩、流紋岩などが10点程度混じる。頁岩のフレイクはJ~N-9・10区とI~M19区に多い。メノウのフレイクはI~K-17~20区とM~O-8~10区に多い。黒曜石のフレイクはK10区、K19区、M~O-9・10区に多い。石材の違いに関わらず、8ラインの沢地形近辺と19ライン付近の沢地形に多いのは、この場所が廃棄場所だった可能性がある。

**石斧 (112~129) :** (図IV-78・79、図版168) 125点出土した。IV層からの出土がほとんどで、IV層の上位から下位にかけて出土する。素材別の内訳は石斧片・石のみを含めて、緑色泥岩(114~116・118・120~122・125・128・129)が82点、片岩製(117・119・123・124・126・127)が35点、砂岩製が4点、安山岩製(112・113)が2点、粘板岩製が2点である。112・113は素材も作りも同じであり、O8区IV層からの出土である。出土の傾向としては、J9区、K12区、O17区、P15区等の比較的平坦で掘り込みのない場所に集中する。

整形調整方法が判るものについて、打ち欠き調整後、全面研磨したもの(115・121~123)は27点ある。そのうち刃部形態が判別できるものとして、弱凸強凸円刃(122・123)が2点、弱凸強凸偏刃(121)が2点、両凸偏刃、両凸平刃が1点ずつある。

敲打調整後、全面研磨したもの（115・116・125）は8点ある。そのうち1点（125）は擦り切り痕がある。そのうち刃部形態が判別できるものとして、弱凸強凸円刃（116）が2点、同じく平刃（115）が2点、同じく偏刃が1点、弱凸強平平刃（125）が1点である。

素材の形状を生かす等、全面を研磨したのみあるいは研磨による調整のみが観察できたもの（112・113・114・117・118・120・124）は45点あった。刃部が潰れている（124）ものなどを除き、刃部形態が判別できるものとして、弱凸強凸円刃（112・113）が13点、同じく平刃（114）が3点、同じく偏刃が3点、両凸円刃（117）が1点、弱平強凸偏刃が1点である。潰れている為、平面形が不明な弱凸強凸刃（118）が1点、弱凸強平の刃部のものが（120）が2点、ある。

石斧未成品（119・129）は12点あり、そのうち、M18区とP10区（129）、L12区とJ21区に接合関係があった。その他に、製品の接合関係としてはL11区とO13区（121）、I14区とJ17区（122）、K12区とK17区（115）がある。未成品は打ち欠き整形の痕跡があるもの（119・129）が目立つ。

石のみの範疇に入ると考えられるもの（126・127）は3点あり、未成品（128）の出土が1点ある。未成品は研磨のみ為されているものである。弱平強凸平刃（127）、弱凸強凸円刃（126）、弱凸強凸平刃が各1点ずつである。126は非実用的な道具の可能性はある。

**すり石**：北海道式石冠や偏平打製石器以外など定形的なもの以外のすり石は53点出土した。199のように擦痕により平滑な面を生じたものは砥石に分類した。形状別にみると、礫の平らな背腹の二面を用いる24点、表面に敲打痕があり、かつ裏面に擦痕がある2点、礫の平らな一面を用いる4点、球礫や垂球礫の一端に擦痕を持つ3点、側縁を用いる13点がある。

**北海道式石冠（130～156）**：（図IV-80～84、図版169・170・171）160点出土した。主にIV層からの出土であるが、下位からの出土は少ない。素材はほとんど安山岩である。例外として、流紋岩製のもの（147）が1点と軽石製のもの（133）が1点出土している。147は小型で、明瞭な擦り面が認められるが、ミニチュアに近い大きさである。133は頂部に明瞭な溝があり、素材から石製品的なものかと推測できる。遺物の分布は、沢地形を中心としたJ～L-8～10区、遺構の掘り込みのないO・P-8・9区などから多く出土する。

調整・整形の方法としては全面敲打によるものB1類（130・131）（略号は遺物のI章（5）石器の分類を参照）と、主に短軸で半割した礫に持ち手の溝を敲打で整形するものB2類（133～151）がある。B1類は10点出土し、B2類は131点出土し、半円形の正面観を持つものが代表的である。ただし全面敲打のものについても正面観半円形のものも2点ほど混じる。また、礫の形状がそのまま生かされたもの（151）もある。B2類の中には、頂部にも調整が及ぶもの（133～137）があり、上面観の楕円形に対して長軸に沿って溝が走るもの（131・134）もある。ミニチュアともいふべき小型のもの（146）が3点、偏平打製石器に類する形状のもの（150）が1点ある。機能面の平面形は、楕円形を呈するものがほとんどで長軸方向または長軸にたいして45°の角度を持つ擦痕があるものが大多数である。また縁辺には敲打痕を併せ持つ。未成品（149・152・154）から敲打によって機能面を整えていく工程が推測できる。しかし、擦り面の縁辺には細かい剥離が2次的についたと考えられるもの（136～145）が多く、叩きと擦りが複合した作業が推測できる。

未成品（132・149・152・～156）は、B1類の未成品の可能性が高いもの（132・154）と、B2類の未成品（149・152・153・155）がある。153は小型なものである。156は133のようなものの未成品の可能性もある。ただし軽石製石製品の可能性もあるため、分布図においては石製品の項に示した。

**偏平打製石器（157～177）**：（図IV-84～87、図版171・172）428点出土した。

正面観の形状、正面観と底面観から見た機能部の形状について、3つの観点から細分を試みたところ

ろ、形状が把握できる385点に対して検討が出来た。素材別の内訳は砂岩が1点、粘板岩が1点、流紋岩が2点、緑色の片岩が1点あったほかは安山岩で424点である。図示した石器はすべて安山岩である。出土はIV層からの出土がほとんどである。19ライン以南によく分布し、11ライン以南に特に多い。M8・9区付近に特に集中する。

正面観が「半円形」のものは202点である。その中では、ほぼ全周を打ち欠いて整形するものが目立ち、8割程度を占める。この機能部について、機能部が底面観について明瞭な面を持つもののうち、機能部の正面観が直線的なもの（164・166・167・171・172）は99点、頂部と底部に機能部を持ち、片方が曲線的でもう片方が直線的なものは2点あった。機能面があるものの明瞭とは言い難いもののうち正面観が直線的なもの（169・174・175）は47点、使用の頻度が高かったものかノッチ状に凹むものは1点あった。頂・底部の両方に機能面を有するものは1点あった。機能面を持たずいわば刃部様の機能部を有するもののうち正面観が直線的なものは35点、曲線的なものは8点、刃部様の機能部を有するもので石器の厚さが3.4cm以上の肉厚で重量感のあるもの（1000g以上を目安とする）で正面観が直線的なものは4点あった。またこの形状で未使用と考えられるものは7点あった。

正面観が「楕円形」のものは98点出土した。その中では、両方の側縁に打ち欠き調整を施すものがほとんどである。この機能部について、機能面が底面観について明瞭な面を持つもののうち、機能部の正面観が直線的なもの（157・158・161・162・165・176）は51点、曲線的なもの（160）は1点、そして頂・底部に機能部があり、機能面の正面観の一方が曲線的でもう一方が直線的なものは2点あった。頂・底部の両方に直線的な機能面を有するものは3点あった。機能面があるものの明瞭とは言い難いもののうち正面観が直線的なもの（170）は10点あり、頂・底部に機能部があり、正面観について片方が曲線的でもう片方が直線的なものは1点、両方に直線的な機能面を有するものは1点あった。機能面を持たずいわば刃部様の機能部を有するもので機能部正面観が直線的なもの（173）が17点、曲線的なものは2点あった。刃部様の機能部を有するもので石器の厚さが3.4cm以上の肉厚で重量感のあるもの（1000g以上を目安とする）で正面観が直線的なものは2点あった。この形状で未使用と考えられるものは9点あった。

正面観が礫素材のそのままの形状を留める不整なものは62点出土した。それらについても、両側縁になんらかの調整を加えるものが多い。板状の礫を素材とするものが多く、虻田町・豊浦町の遺跡でよく出土する赤味をおびた安山岩の板状礫も含まれる。これらの機能部について、機能面が底面観について明瞭な面を持つもののうち、機能部正面観が直線的なもの（163）は15点、曲線的なもの（168）は1点、頂・底部の両方に機能部があり、いずれも直線的な正面観のものは1点あった。機能面があるものの明瞭とは言い難いものは機能部正面観が直線的なものが12点あった。機能面を持たずいわば刃部様の機能部を有するもののうち直線的なものは22点、曲線的なものは4点、使用の頻度が高かったものかノッチ状に凹むものは1点あった。頂・底部に機能部があり片方の正面観が曲線的でもう片方が直線的なものは1点、両方に直線的な機能面を有するものは1点である。刃部様の機能部を有するもので石器の厚さが3.4cm以上の肉厚で重量感のあるもの（1000g以上を目安とする）もので機能部正面観が直線的なものは6点、曲線的なものは2点あった。この形のものには遺構出土の特徴的なたき石（H-20-30・32、P-63-3、P-71-4、P-73-1、F-19-5）との関連を考える。この形状で整形のみで未使用と考えられるものは1点であった。

正面観の形状が方形のものは23点出土した。そのうちで、機能面が底面観について明瞭な面を持つもののうち、機能部正面観が直線的なもの（159）は9点、頂・底部の両方に正面観が直線的な機能面を有するものは1点あった。機能面があるものの明瞭とは言い難いもののうち正面観が直線的なも

のは6点、頂・底部に機能面があり、片方の正面観が曲線的でもう片方が直線的なものは1点あった。機能面を持たずいわば刃部様の機能部を有するもののうち直線的なもの(177)は3点、頂・底部の両方に機能面があり、直線的な正面観を有するものは1点あった。いわば刃部様の機能部を有するもので石器の厚さが3.4cm以上の肉厚で重量感があるもの(1000g以上を目安とする)のうち、直線的なものは2点あった。

石錘のように抉りを持つ側縁のものは半円形以外のものでよくみられる。それらについて機能部の形状別にみても、特徴的な比率の差はなかった。また半円形以外のものは礫素材の縁辺を調整するのみのものが多い。調査区内15ライン以北では後期の遺構がほとんどである。この15ライン以北で微妙ではあるが比率的に半円形以外の出土が多かった。中期中葉以降の石組炉の炉石に転用される例に半円形以外の形状が多い事も踏まえると、これらは後期に近い(あるいは後期の)遺物という可能性がある。また、機能面を持つものについては長軸方向に擦痕が延びるものがほとんどである。159のように擦り面の幅が広いものについては、北海道式石冠と同じように長軸に対して45°の角度で擦痕が延びるものもある。機能部の縁辺に細かい打ち欠きがおよぶものが多い事から、北海道式石冠のように叩き擦るような使用法で、より幅のせまい機能部を持つ事から圧力がより必要な作業が想定される。接合例としてはI21区とM17区、K13区内、K12区とM11区、L21区内、L13区とP9区、M9区内、M10区とM12区、O7・8・9区間、O9区とP8区、O11区とP12区があった。これについて形状による差は認められなかった。機能面からの加撃による破損が想定できるもの(163・164・166)が多い。178は整形に伴う破損の可能性はある。

**たたき石(179~196)**:(図IV-83・84、図版172・173)426点出土した。IV層からの出土がほとんどで、上位から下位にかけて出土する。I24区からP18区以南についてまんべんなく出土する。とりわけ8ラインの沢地形を含んだ、10ライン以南に多い。凹み石(180・182)は13点出土した。182のように側縁にも明瞭な使用痕を持つものもある。

一端に打ち欠きによる明瞭な調整を持つものは18点出土した。これに関連するもので、角柱状の礫ないしは長軸に長さがある楕円礫の側縁に打ち欠きによる調整痕を持つものがあり、24点出土した。この形のもの縄文時代後期前葉の遺構から出土する特徴的なたたき石(H-20-30・32、P-63-3、P-71-4、P-73-1、F-19-5)である。垂球礫のほぼ全面に敲打があるものは5点出土した。割礫の割面に敲打があるものは15点出土した。

両端付近に打ち欠きないしは敲打があるもので、偏平打製石器未成品の可能性のあるもの(179・192)は37点出土した。179はその可能性が大きき、調整の位置から、より可能性が高いものである。形状と敲打の位置から、北海道式石冠未成品の可能性のあるものは4点出土した。

礫の一部に敲打痕を持つもの(180・183~191・193~196)は294点出土した。そのうち楕円礫のものが際立って多く、174点を占める。垂角礫が12点、垂球礫が13点、角柱状の礫が2点である。楕円礫の使用部では、側縁を用いるもの(191・194)が最も多く86点出土している。そのうち単純に側縁のみ使用しているものは72点ある。72点中、両側縁を用いるものは3点である。ほぼ全周に敲打痕がめぐるもの(181)は3点である。このうちの1点には、擦痕がある。181は平らな面についても敲打痕があり、凹み石的な機能部である。次に多いのは端部を用いるもの(193)で側縁も使用しているもの(183・185・187・188)6点を含めて、77点出土している。そのうち両端を用いるもの(185・186・187・188・190)は24点である。

素材の形状とは無関係に、礫の使用部位を、全体的にみると端部を用いるものが最も多く166点を占める。そのうち端部のみの使用は153点である。垂角礫の端部に敲打痕を持つもの(184)、三角形



の礫の端部を用いるもの(195)、垂球礫の両端を用いるもの(196)などがある。側縁ないし縁辺を用いるものは端部を用いるものに次いで多い。全体で109点を占め、側縁のみの使用は94点である。楕円礫の側縁を用いるという形がひとつの定形であることが判る。また礫の平らな一面に敲打痕があるものには、意図的な使用のもの他に、道具としての使用以外の痕跡も含むと考える。なぜなら、VI層に多く混じり込む自然礫の表面が、人為、あるいは自然現象による痕跡が付きやすい状況であったためである。

**石鋸(197・198)：**(図IV-84、図版173) 2点出土した。いずれも安山岩の板状礫を用いたものである。赤色味は顕著ではないが、虻田町、豊浦町の遺跡において、よく出土する安山岩に似た石質である。197はP 8区IV層出土である。打ち欠き整形時に折損した可能性が高い。その後擦り切り用具として使用したものと考える。198はQ22区出土の石鋸未製品と考えられるものである。軽い打ち欠きによって機能部の整形をおこなったものと考えられる。

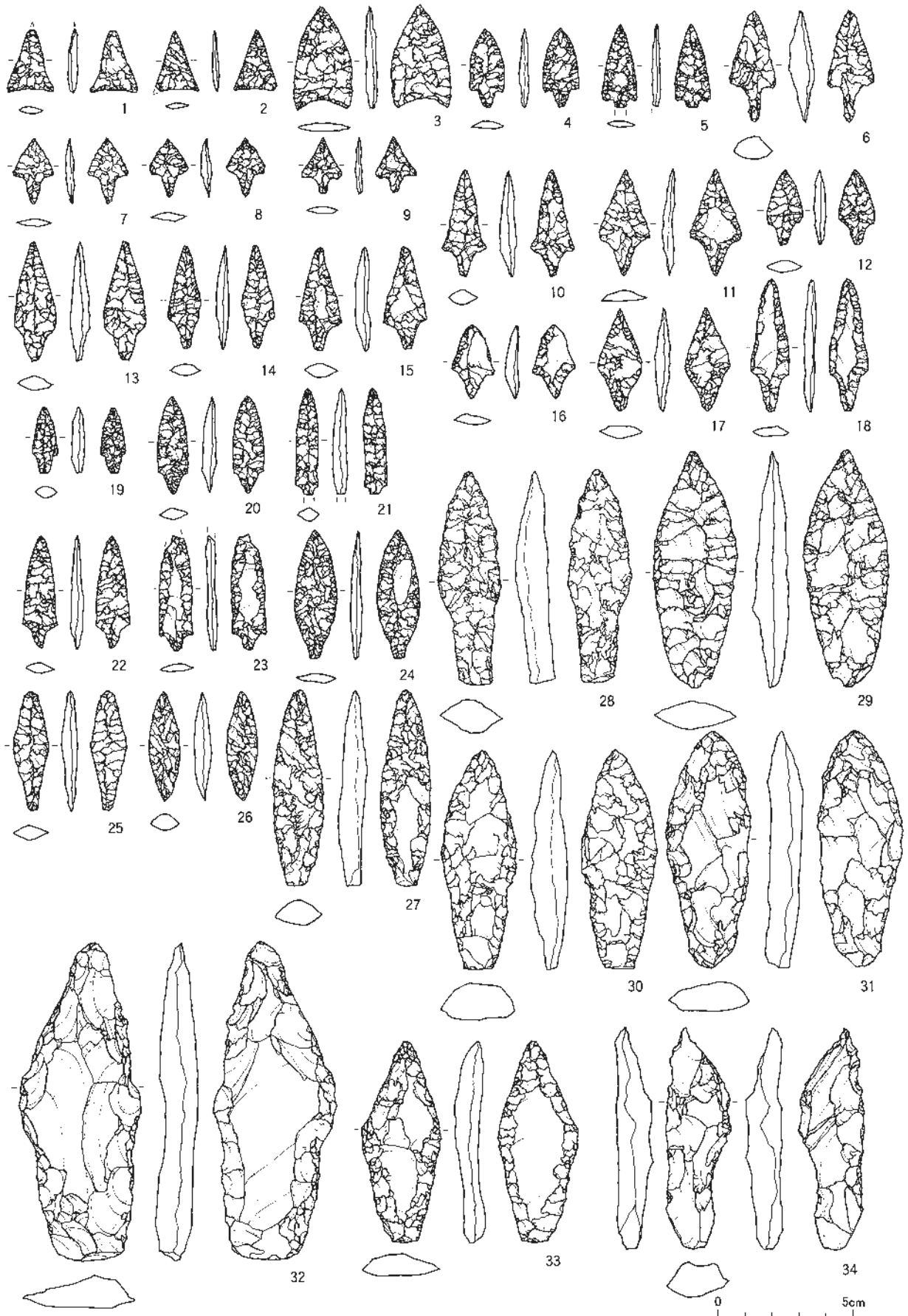
**砥石(199~201)：**(図IV-84・85、図版173) 26点出土した。L・M10区およびL・M-15・16区に比較的集中する。IV層から出土した安山岩を用いたものがほとんどである。軽石製が3点ある。軽石製のものは顕著な擦痕を持つものである。楕円礫の平らな面について平滑になる程、研磨を加えるもの(199)は3点出土した。199はやや凹むほどに研磨が加わる。板状の礫の平らな面に顕著な擦痕を持つもの(200)は13点出土した。板状礫の表裏面と側面に砥面を持つもの(201)は5点出土した。敲打調整によって縁辺を整え、溝状の砥面が複数横に並んだものについては1点出土したが、F-28の際で、遺構の構築面から検出されたので、F-28-3に示した。H-6の遺物(H-6-34)に玉砥石を思わせる明瞭な溝が数条並ぶものがある。

**台石(204)：**(図IV-91、図版174) 384点出土した。IV層から出土した。比率的にIV層中位出土のものが目立つ。L~M-10~11区、L15・16区付近に比較的集中する。遺構のない比較的平坦部に多いこととなるが、遺構覆土からの検出も目立つ。たたき石または偏平打製石器や北海道式石冠などの敲打を伴う石器の台として使用された可能性があるものを、加工痕のある大型礫のうちから抽出した(204)。そのうち、顕著な擦痕があるものや、明瞭な皿状に窪むものは石皿として分類した。

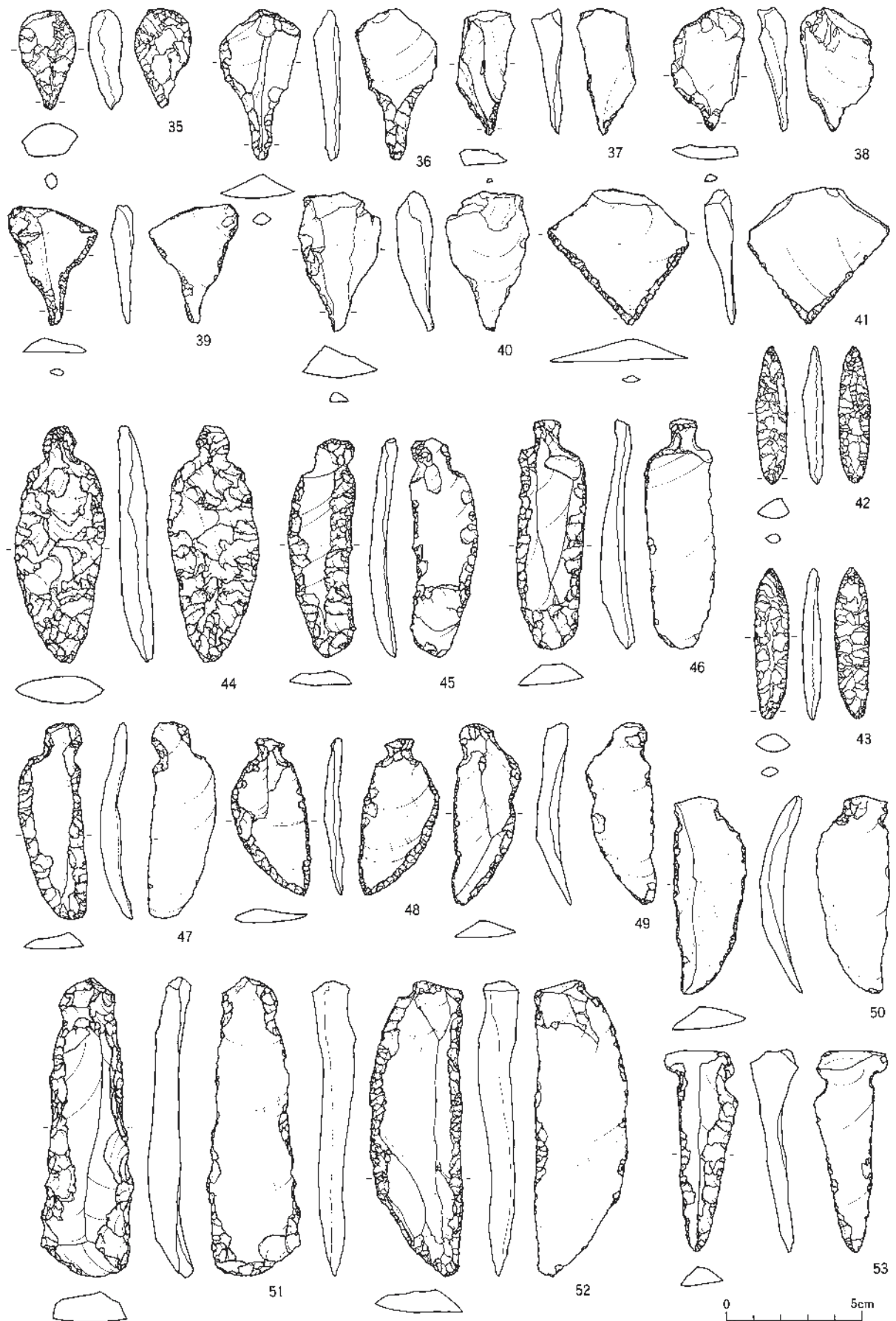
**石皿(202・203・205)：**(図IV-91・92、図版173・174) 30点が出土した。IV層からの出土がほとんどである。N~P-16~18区、K21区に集中して出土する。顕著な擦痕があるもの(202・203)ないしは明瞭な皿状に窪むもの(205)である。202は礫の中央におおよそ円形に広がる擦痕があり、中心ほど研磨が著しいものである。遺構出土のH-12-40、H-15-85、P-28-27、P-34-3が類似する。205の類例としてH-15-88、H-18-9が類するが両面に擦り面はない。

**礫：**A地区については、濁川火砕流の影響がなかったため(当センター花岡主査が考察した結果)、VI層中には大量の礫が包含されていた(I章4(3)を参照)。大型の礫の中にはIV層まで突き出ている大型なものもあり、かすかな敲打痕があるものも認められた。そのような礫群の中で、主にIV層中に含まれる、人為的な操作が加わった可能性の高いものを礫として1750点取上げてきた。被熱しているものが418点、加工痕のあるものが68点、加工痕がある被熱した礫が19点、剥片素材をとるため採取してきたと考えられる原石が97点、軽石が16点、などがあり、その他のものを含めると6種類に大きく分けられる。原石としたものと軽石をのぞくと、ほとんどが安山岩である。

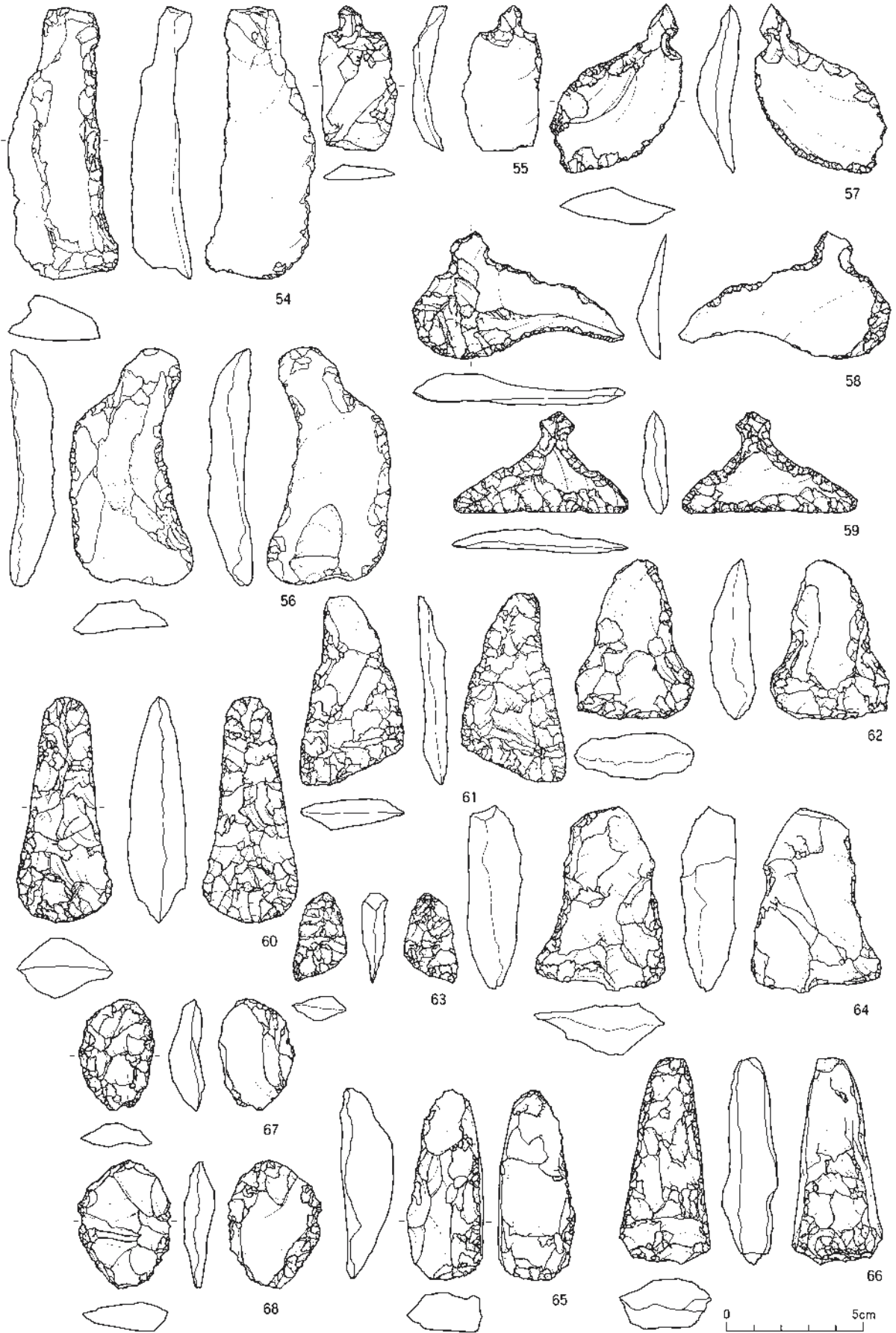
原石のほとんどがメノウであった。フレイクについてはメノウと頁岩の出土比率に差がなかった。そして、Rフレイク・Uフレイクは頁岩が際立って多かった。原石にメノウが多かったのは、メノウが打ち割った段階で(フレイクを打ち割がさずとも)、製品を作りやすいか否かをその石質の粗密で判断できるためと考える。ただし、VI層の礫中には元来メノウが含まれているため、それが上位にあ



図IV-71 包含層出土の石器(1)



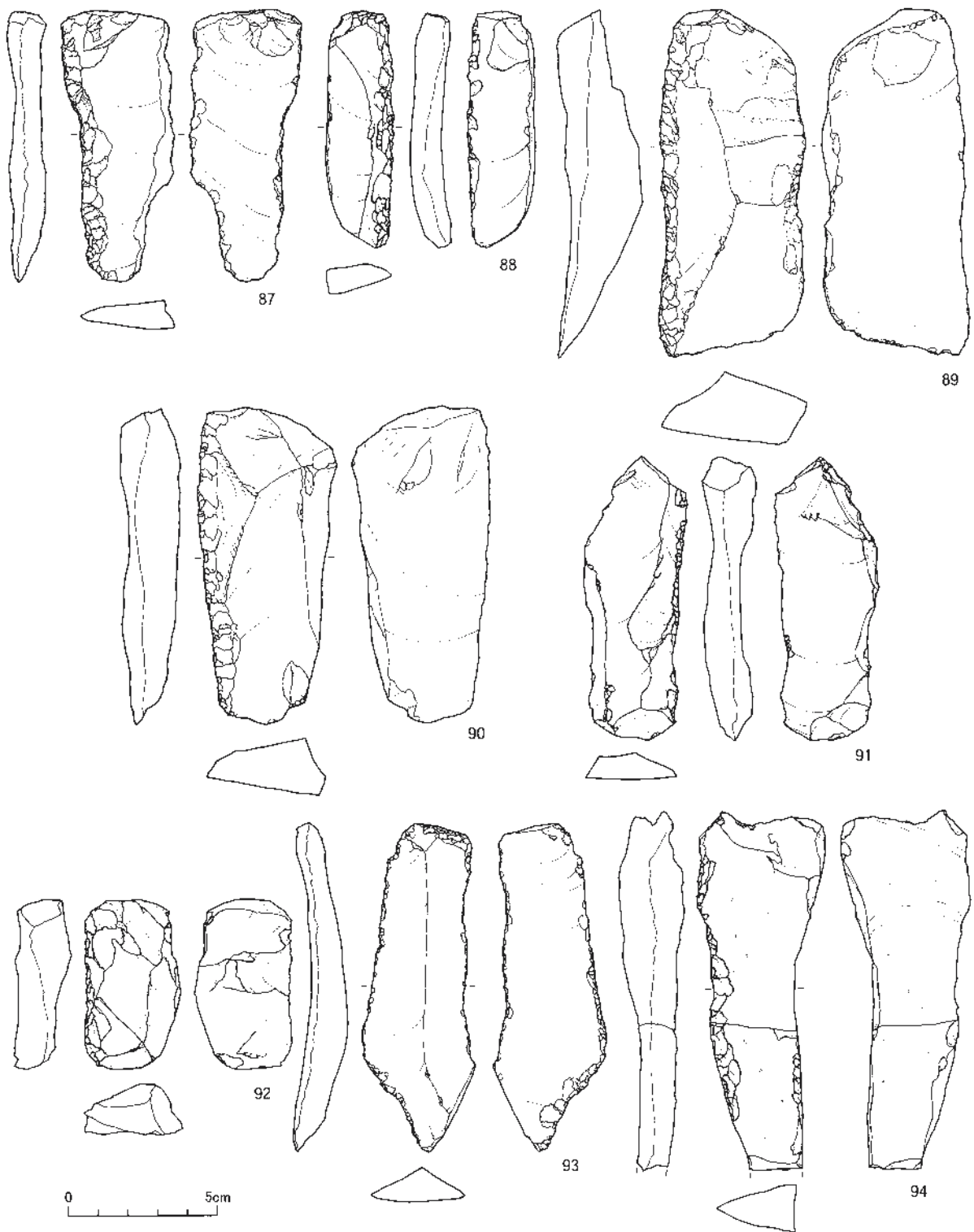
図IV-72 包含層出土の石器(2)



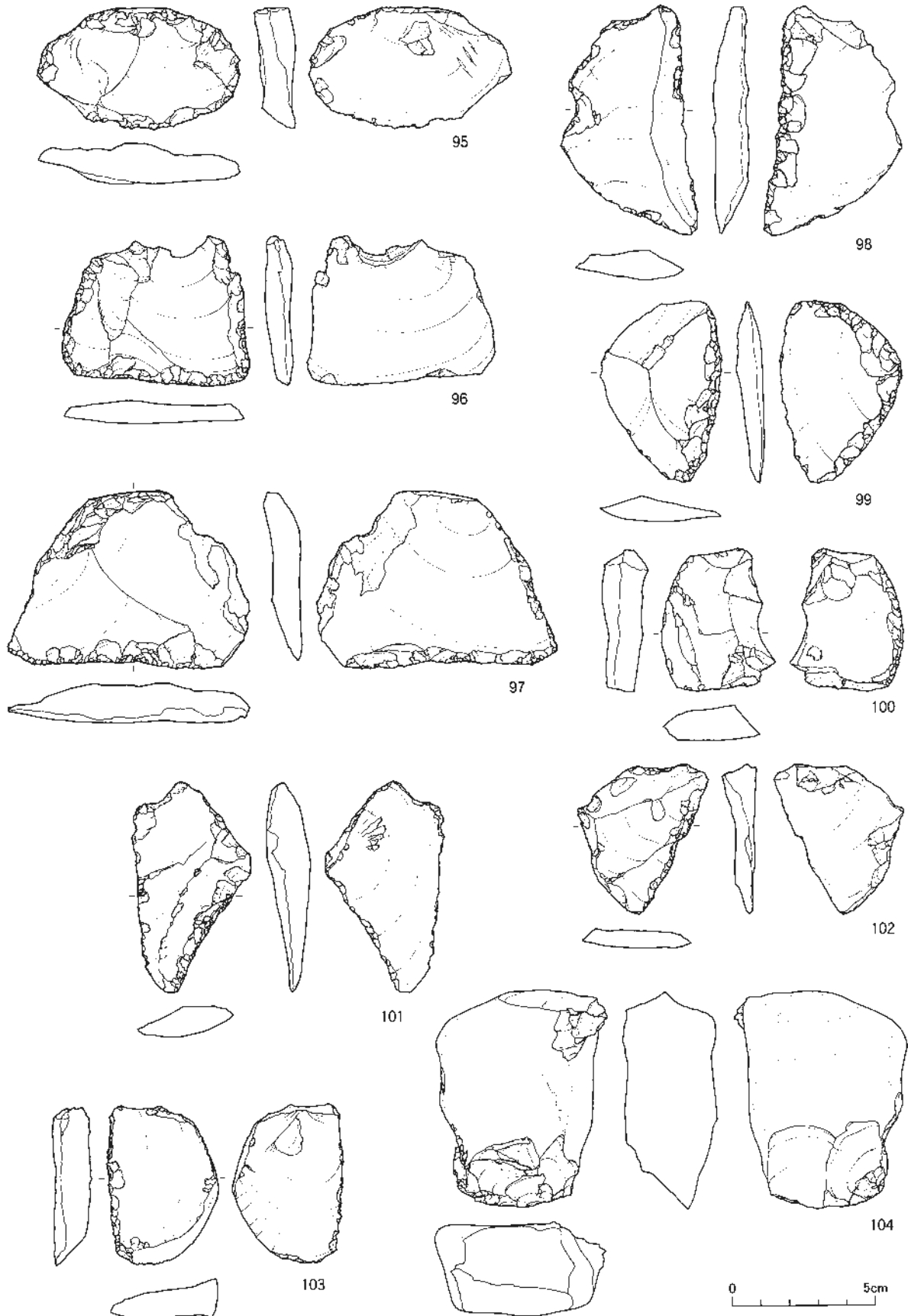
図IV-73 包含層出土の石器(3)



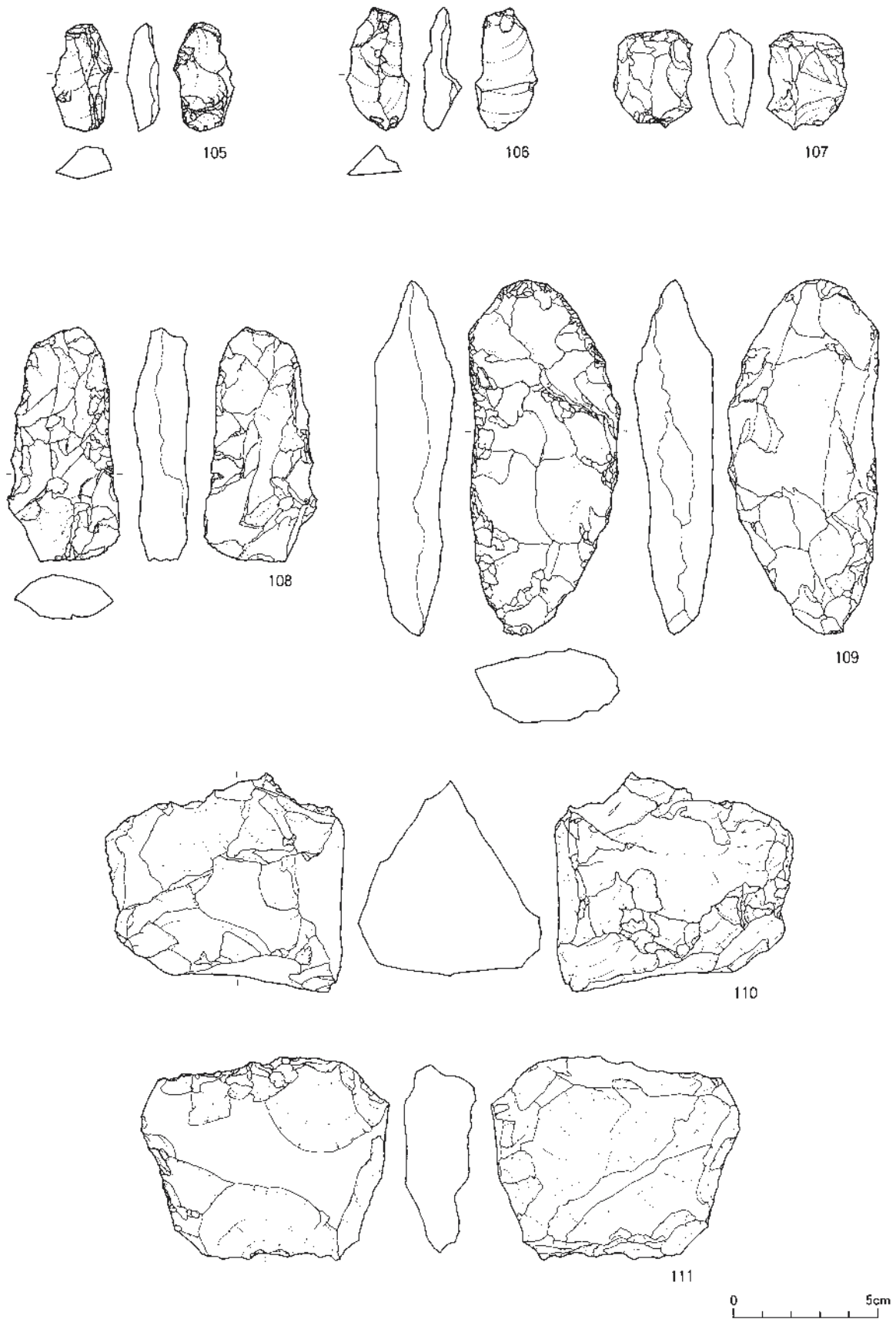
図IV-74 包含層出土の石器(4)



図IV-75 包含層出土の石器(5)

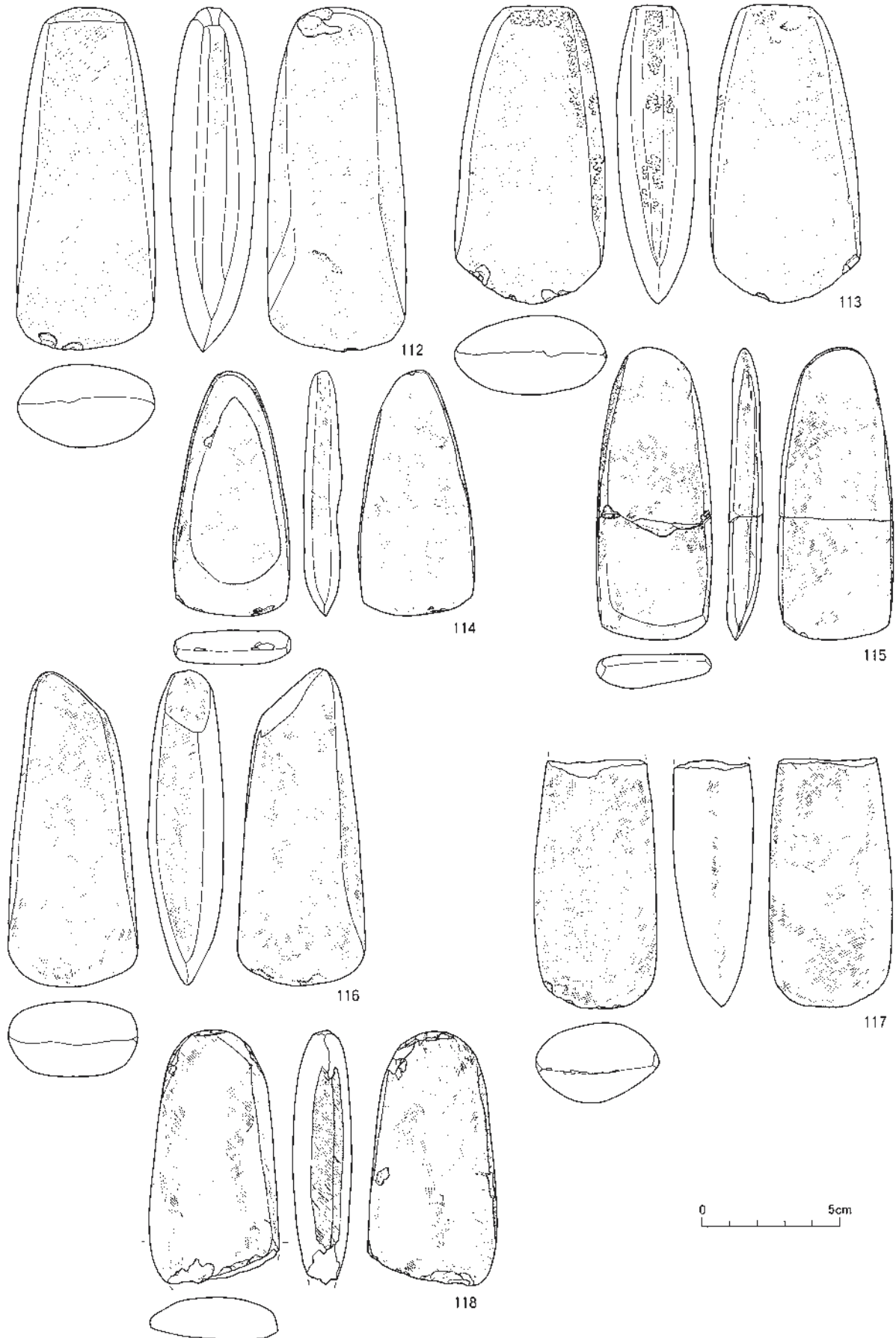


図IV-76 包含層出土の石器(6)

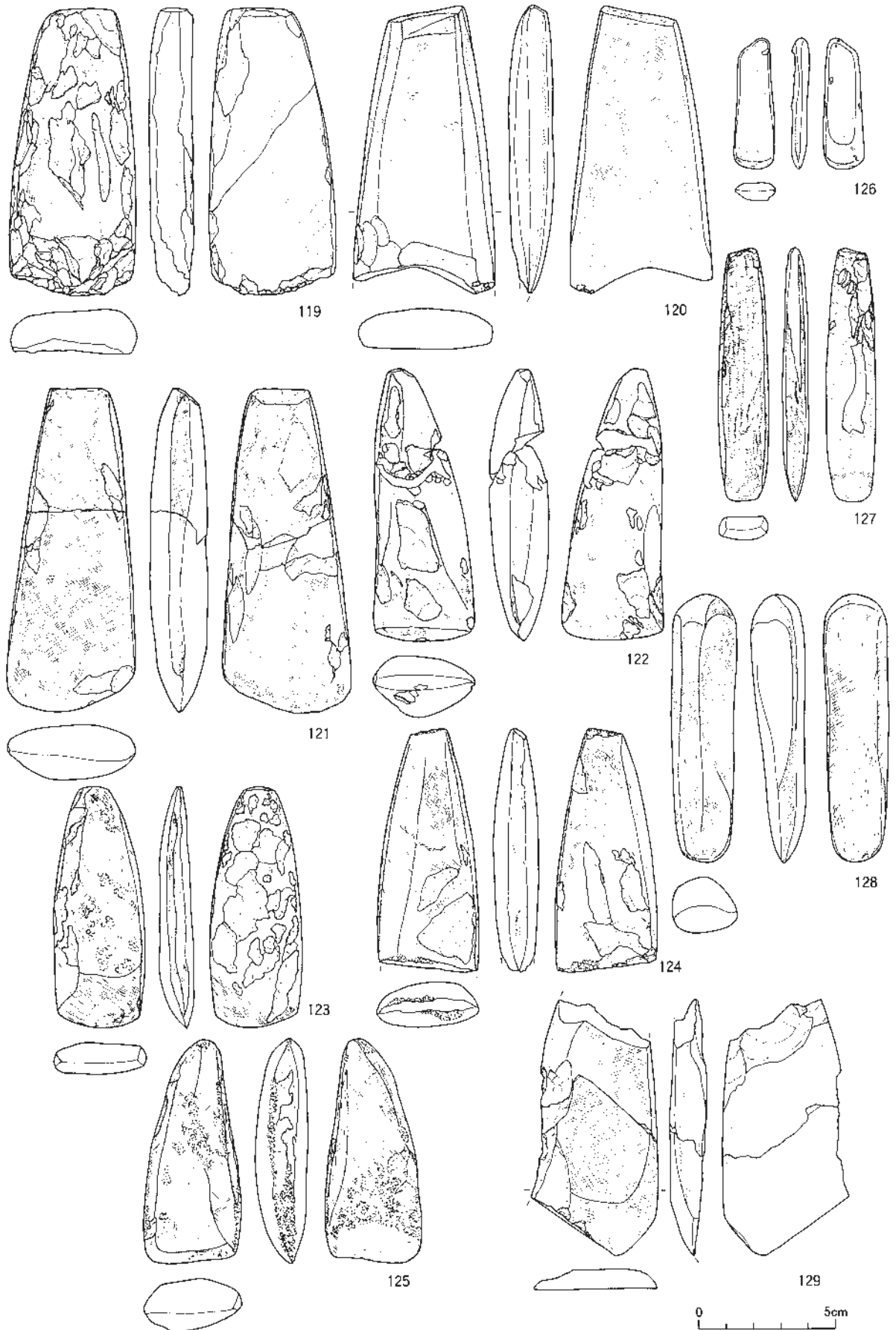


図IV-77 包含層出土の石器(7)

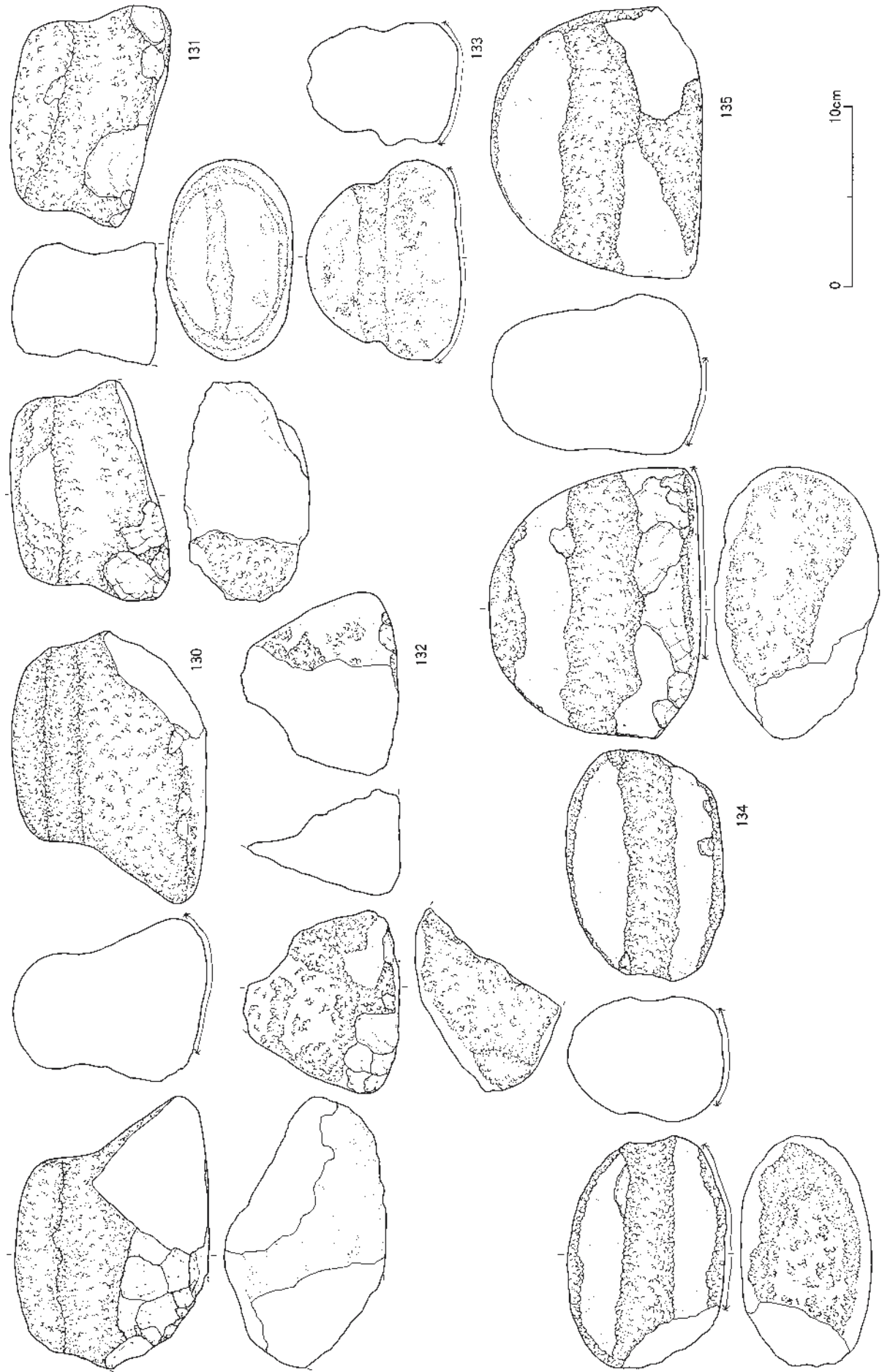




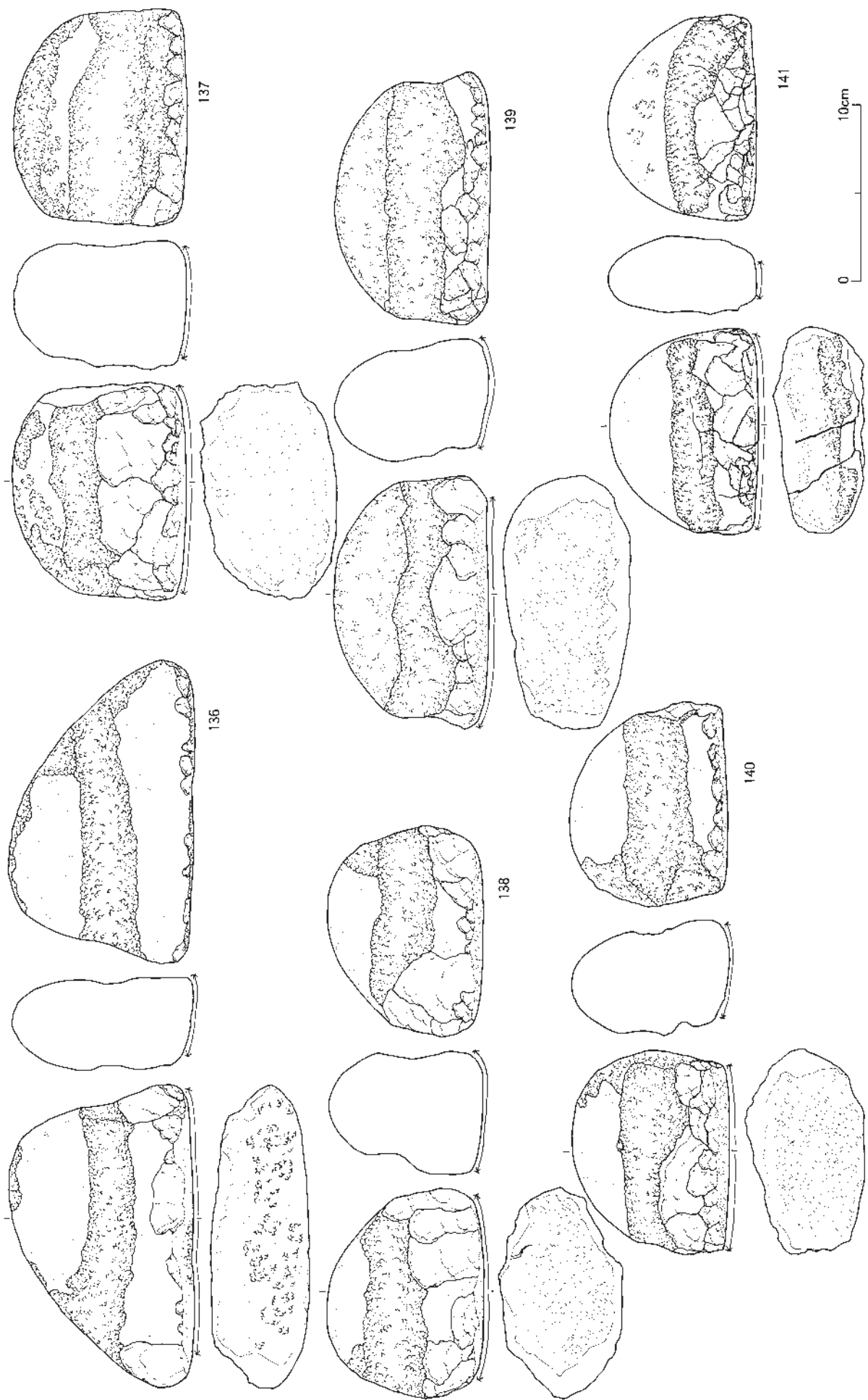
図IV-78 包含層出土の石器(8)



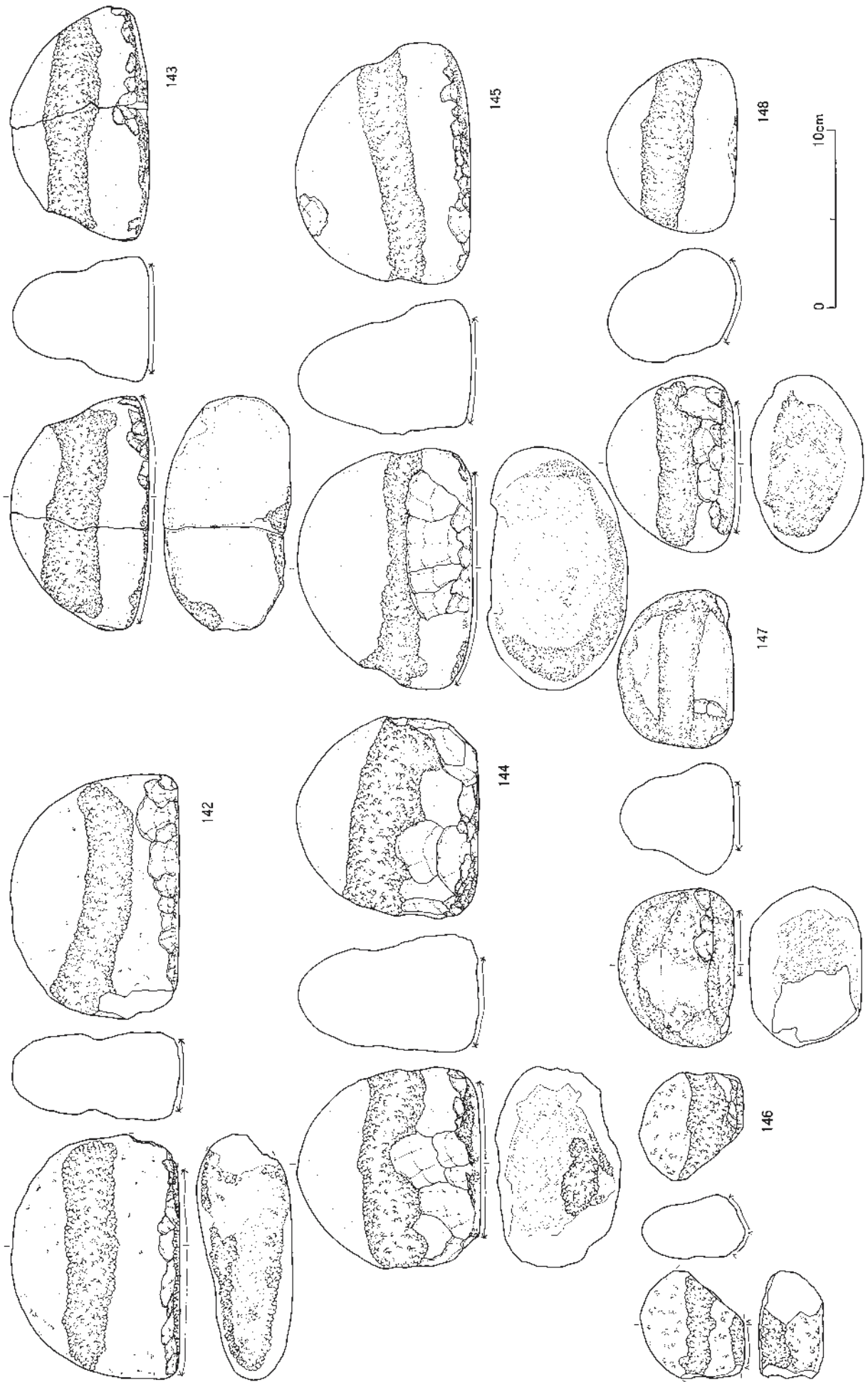
図IV-79 包含層出土の石器(9)



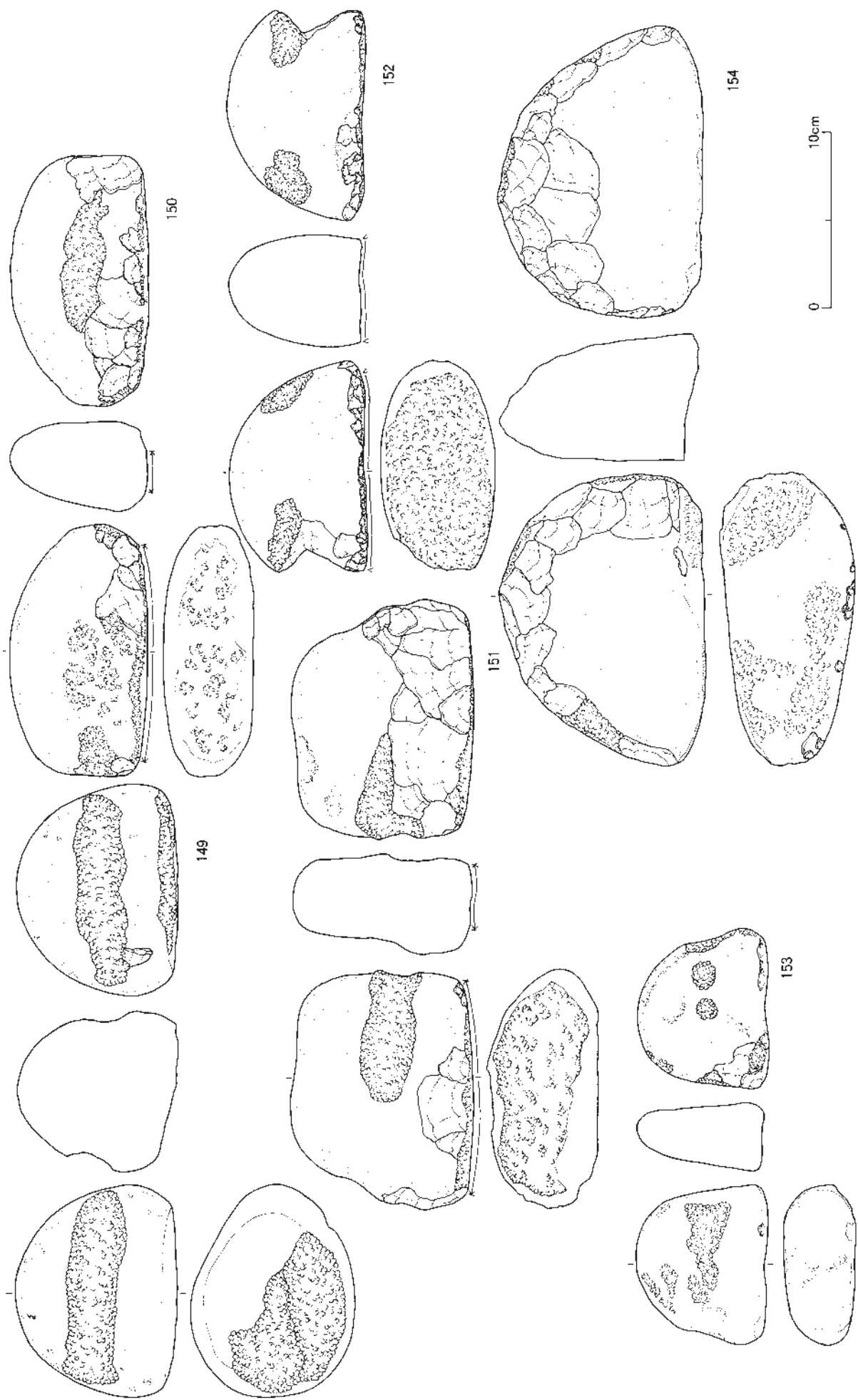
図IV-80 包含層出土の石器 (10)



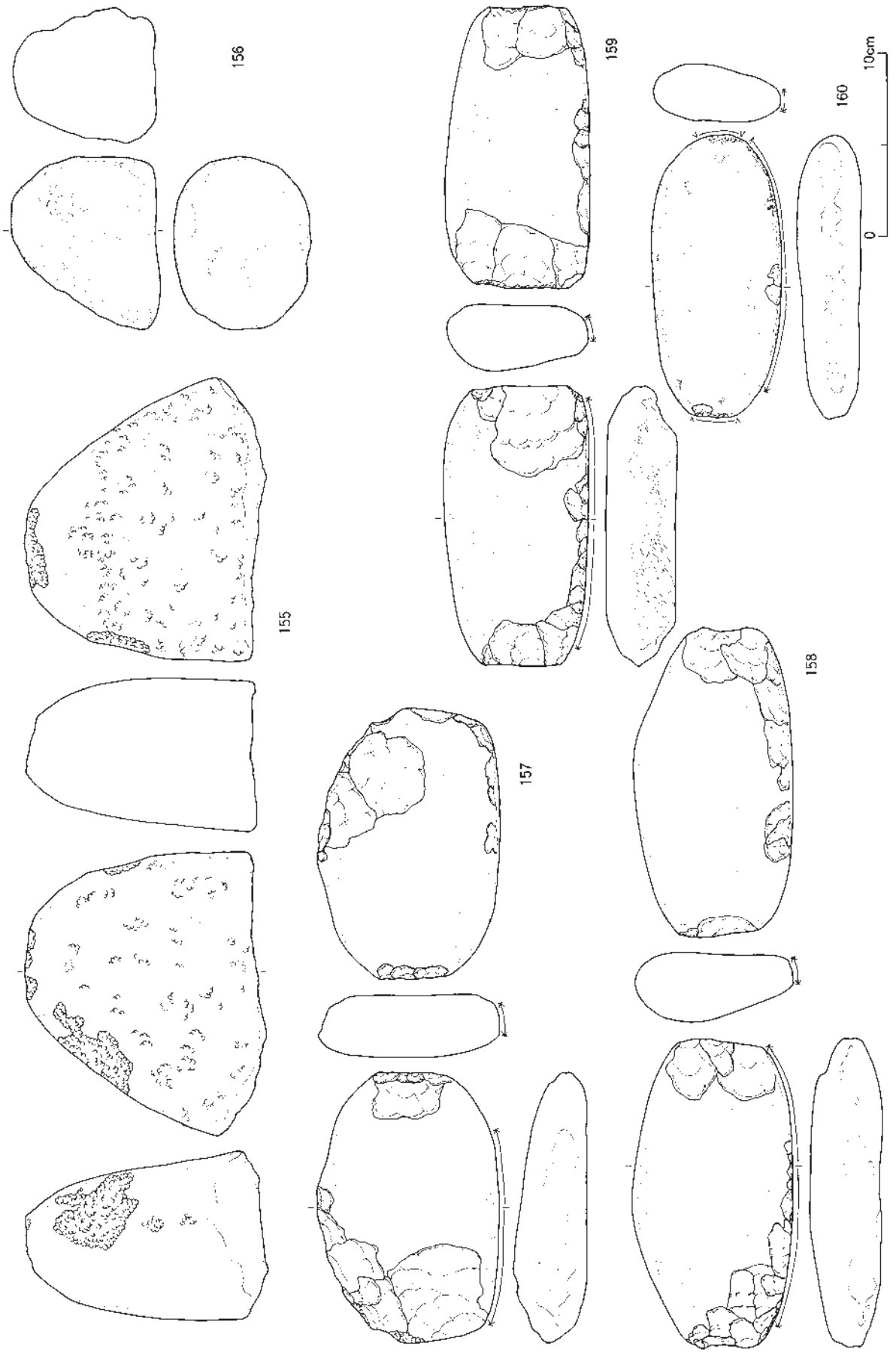
図IV-81 包含層出土の石器 (11)



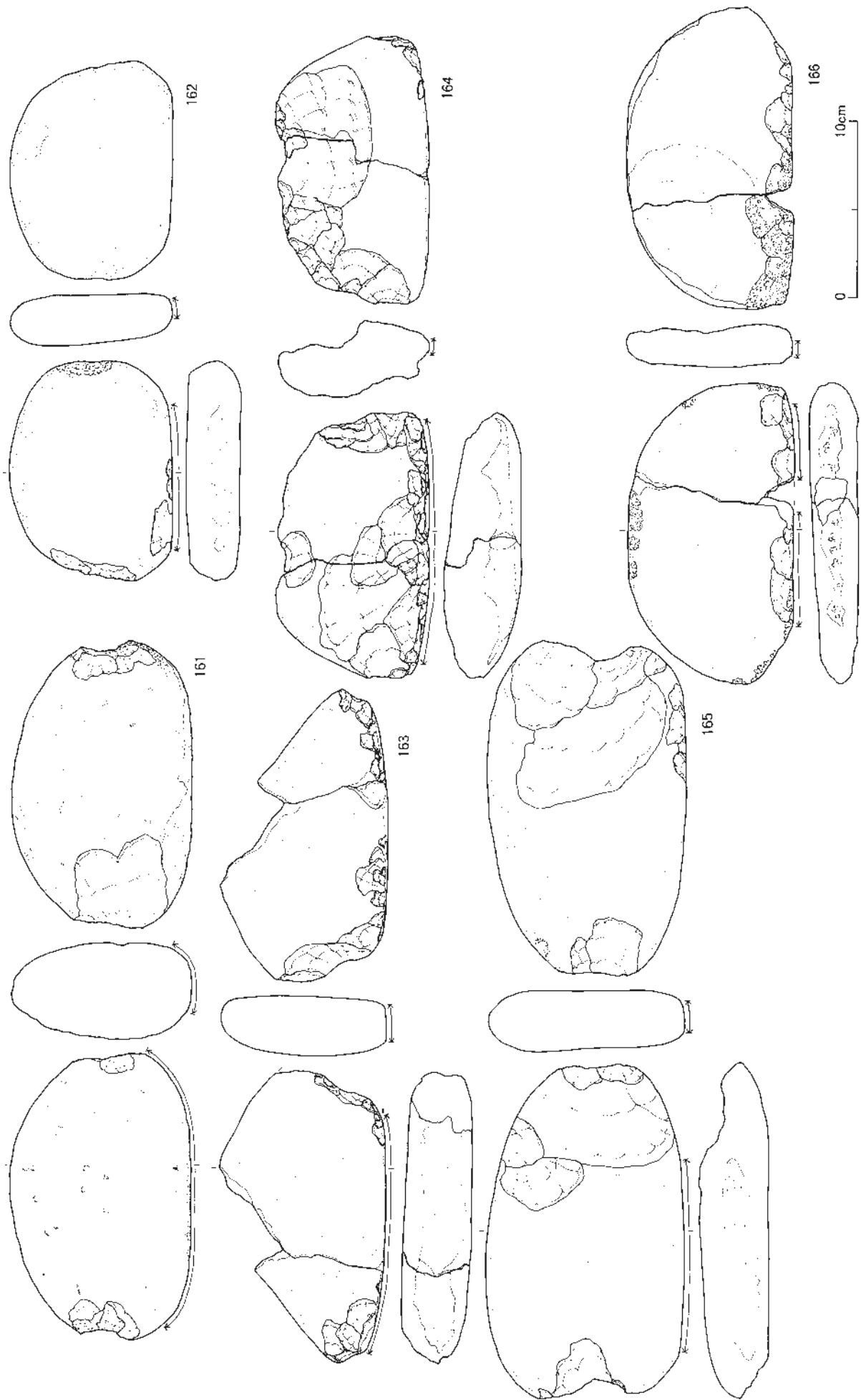
図IV-82 包含層出土の石器(12)



図IV-83 包含層出土の石器 (13)

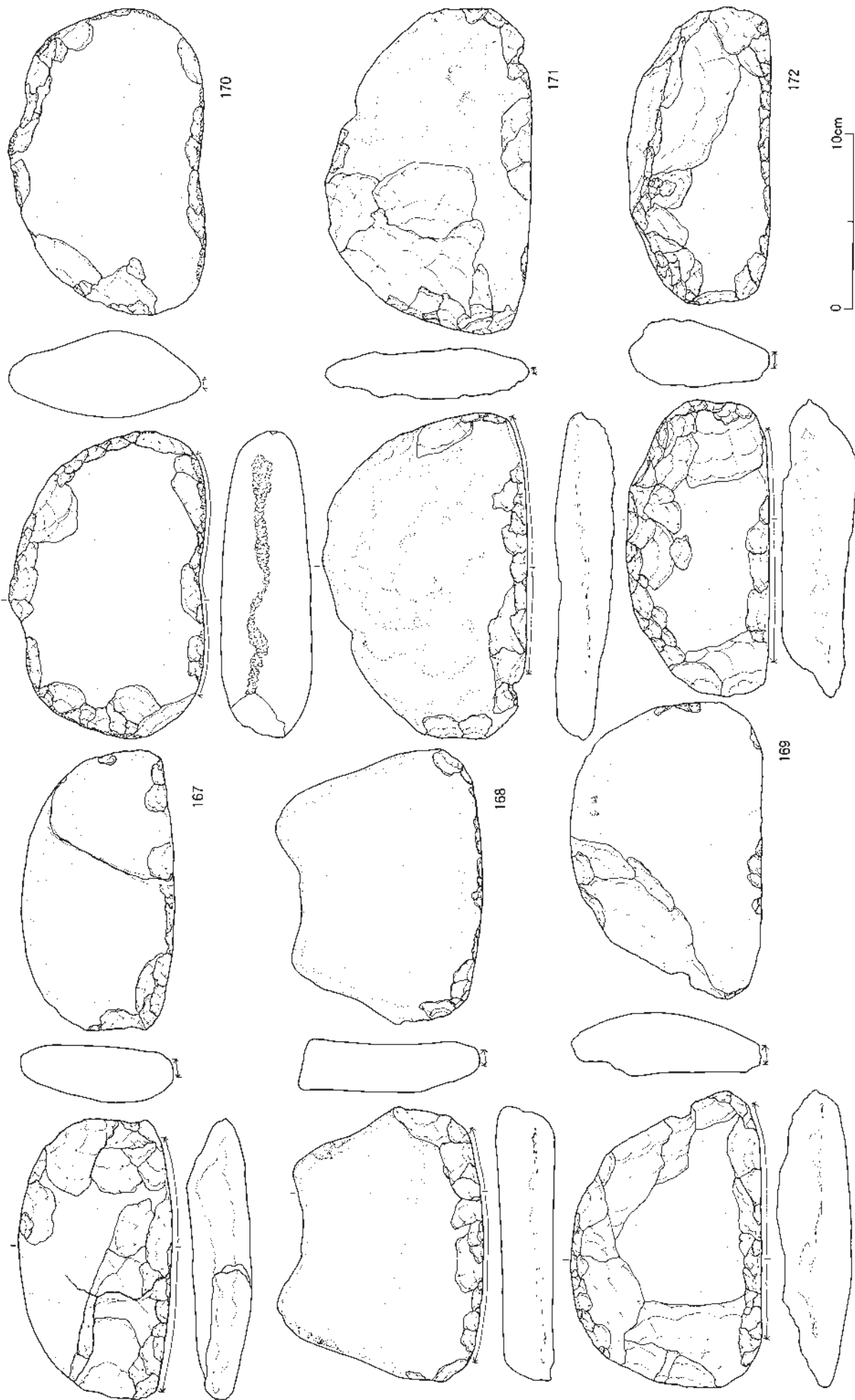


図IV-84 包含層出土の石器 (14)

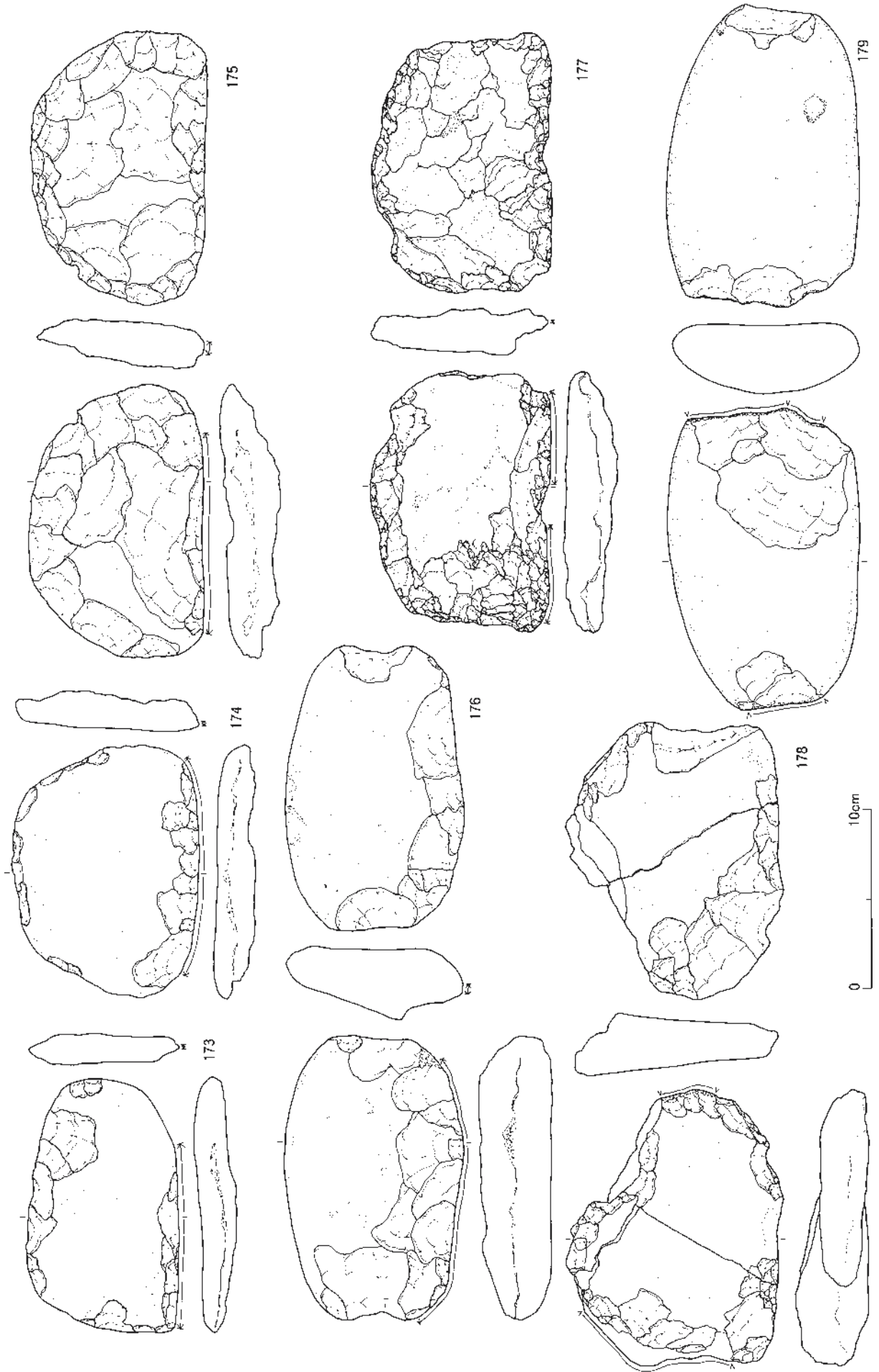


図IV-85 包含層出土の石器 (15)

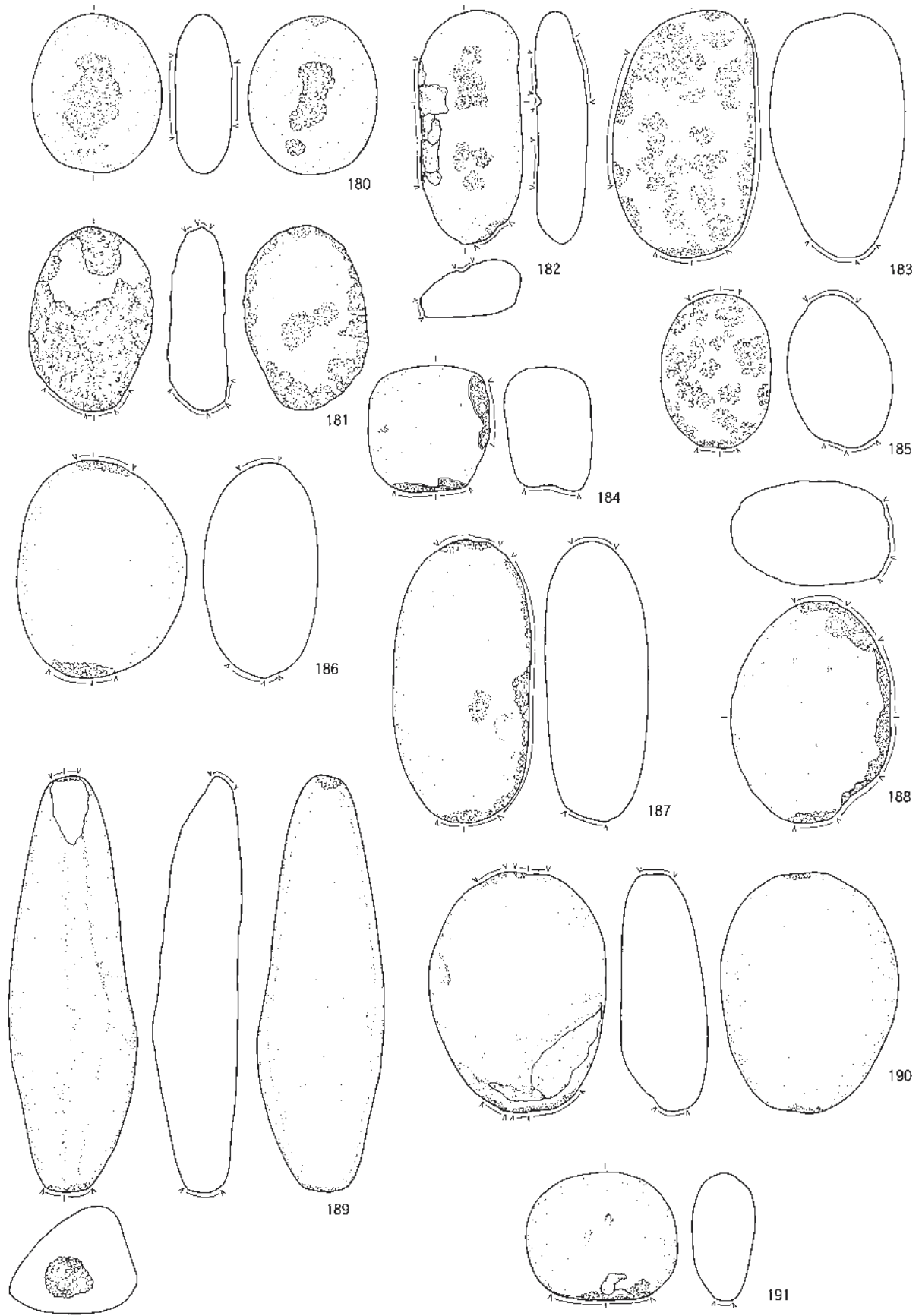




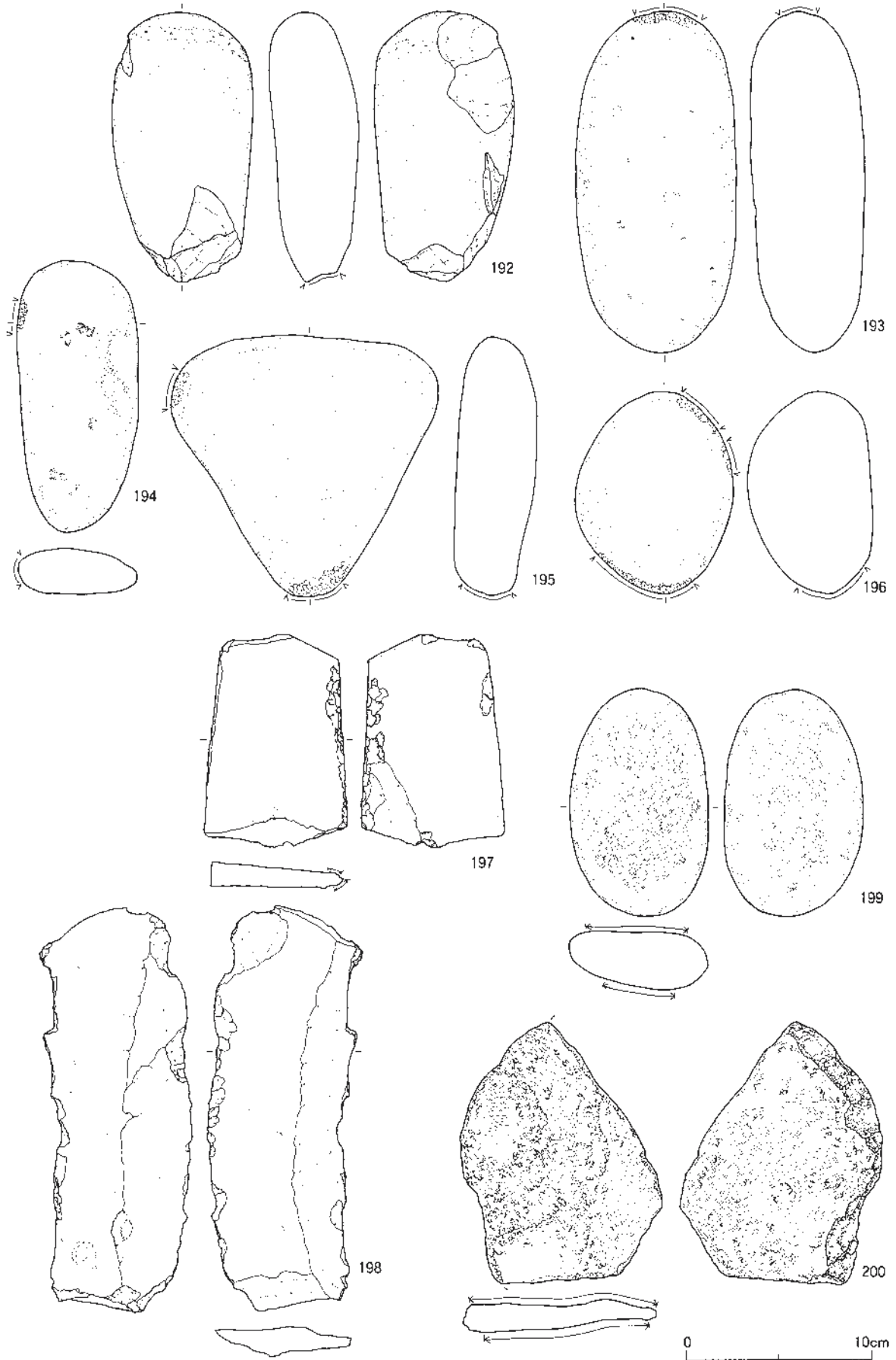
図IV-86 包含層出土の石器 (16)



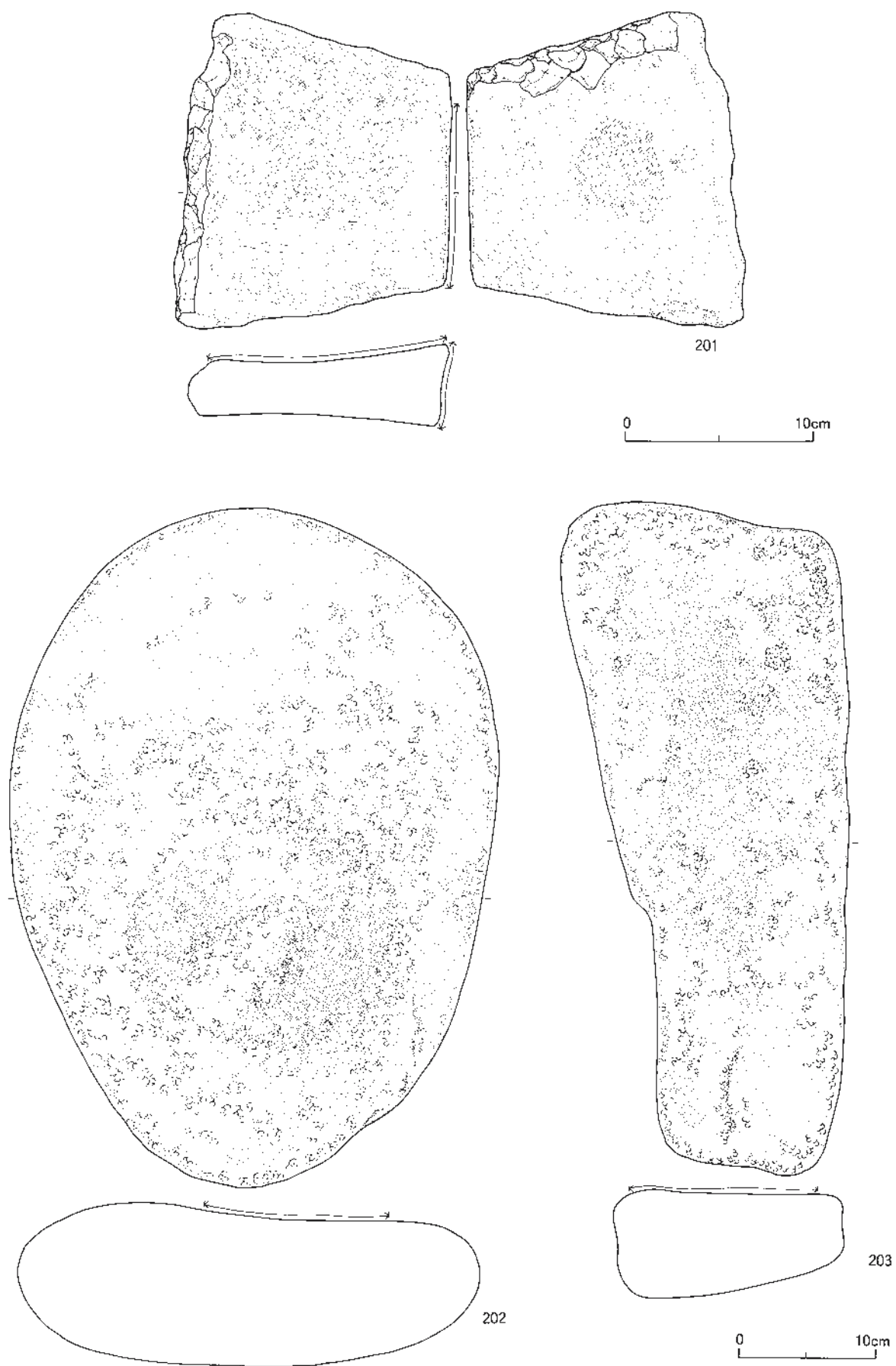
図IV-87 包含層出土の石器(17)



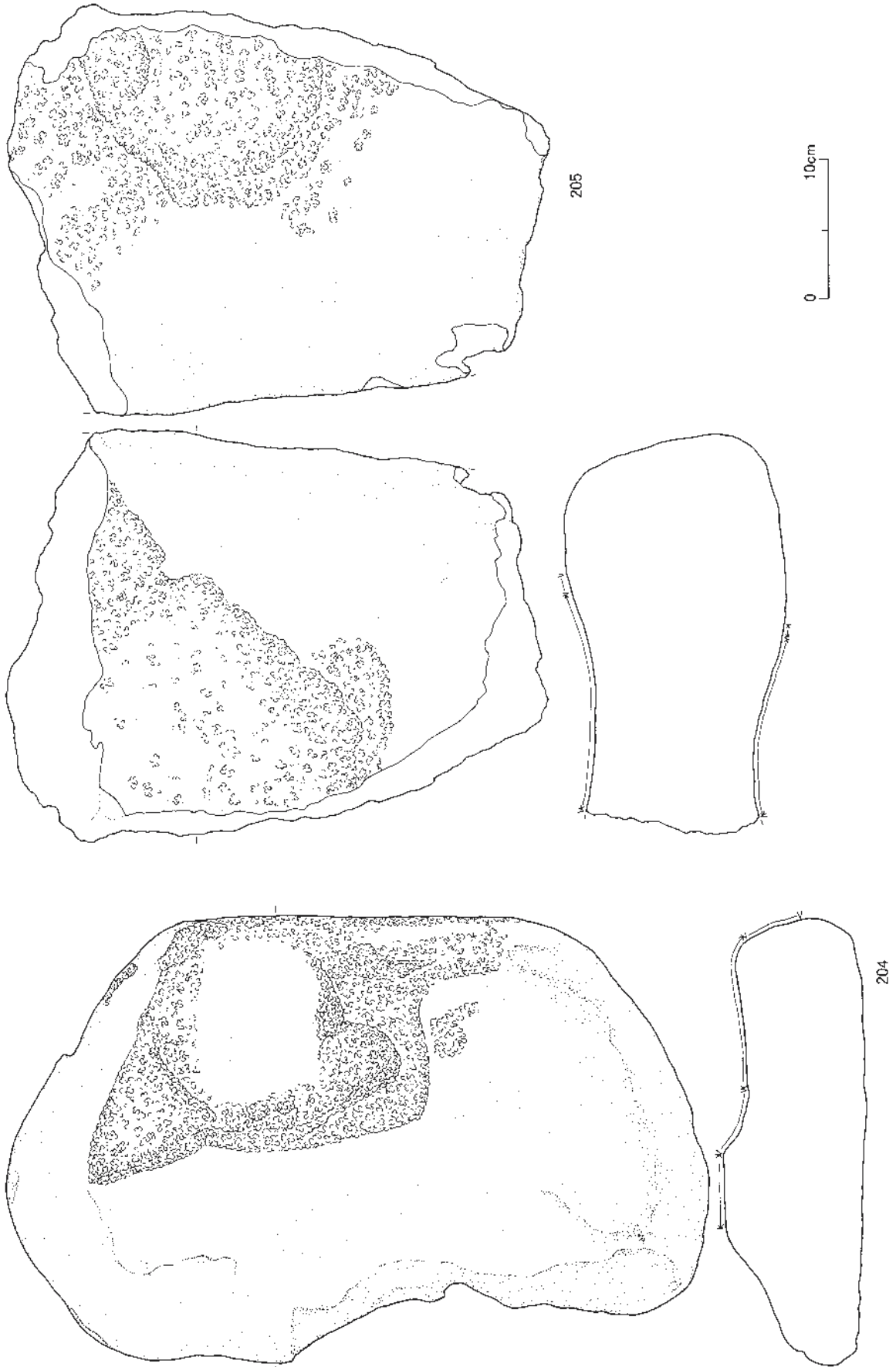
図IV-88 包含層出土の石器 (18)



図IV-89 包含層出土の石器 (19)



図IV-90 包含層出土の石器 (20)



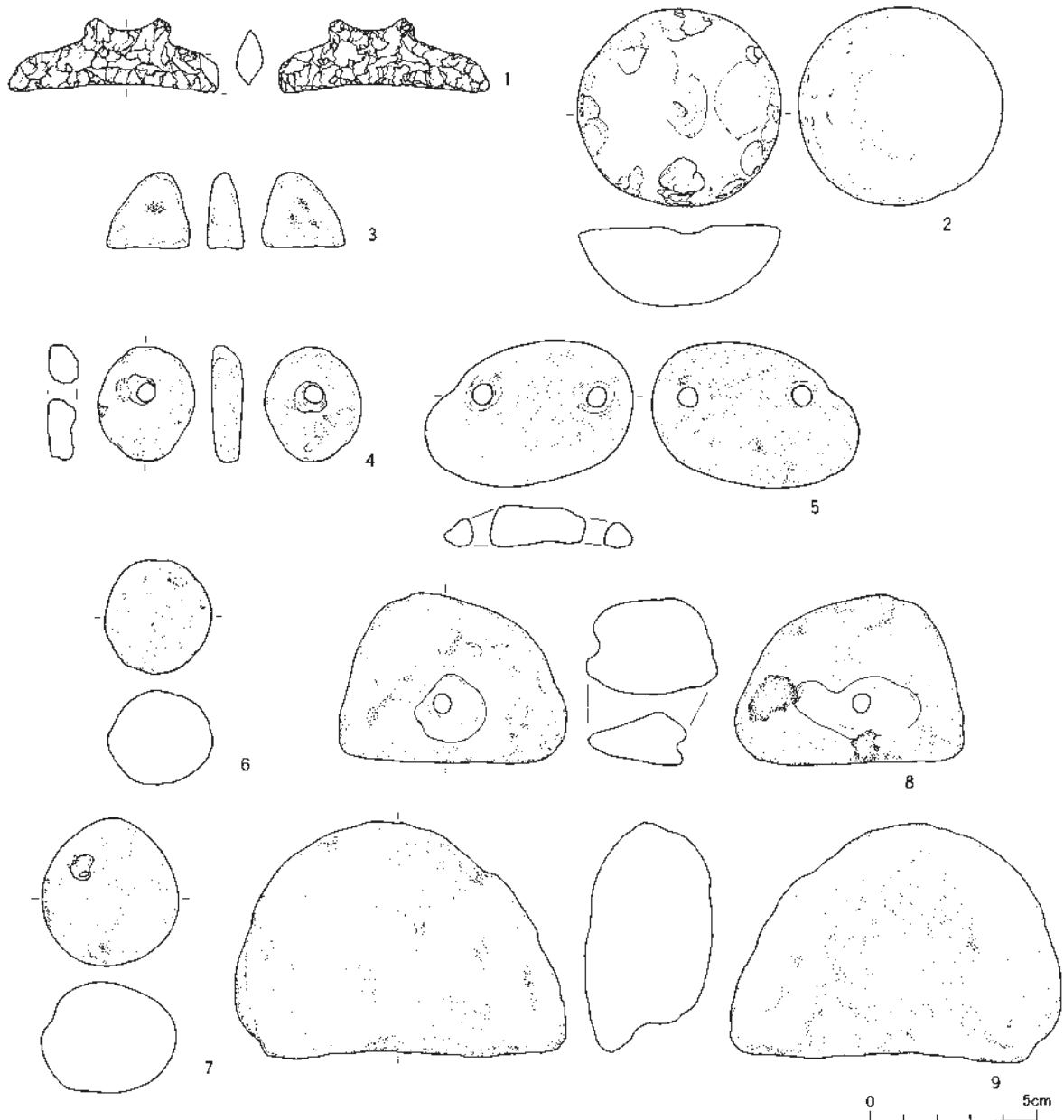
図IV-91 包含層出土の石器 (21)

がってきた可能性もある。加工痕のある被熱礫のなかには棒状で、石棒に関連する可能性があるものも1点ある。

被熱礫・加工痕のある礫・加工痕のある被熱礫の出土はL・M-15~17区付近に多い。これは石鏃・Uフレイクの出土が多い地区とほぼ共通する。

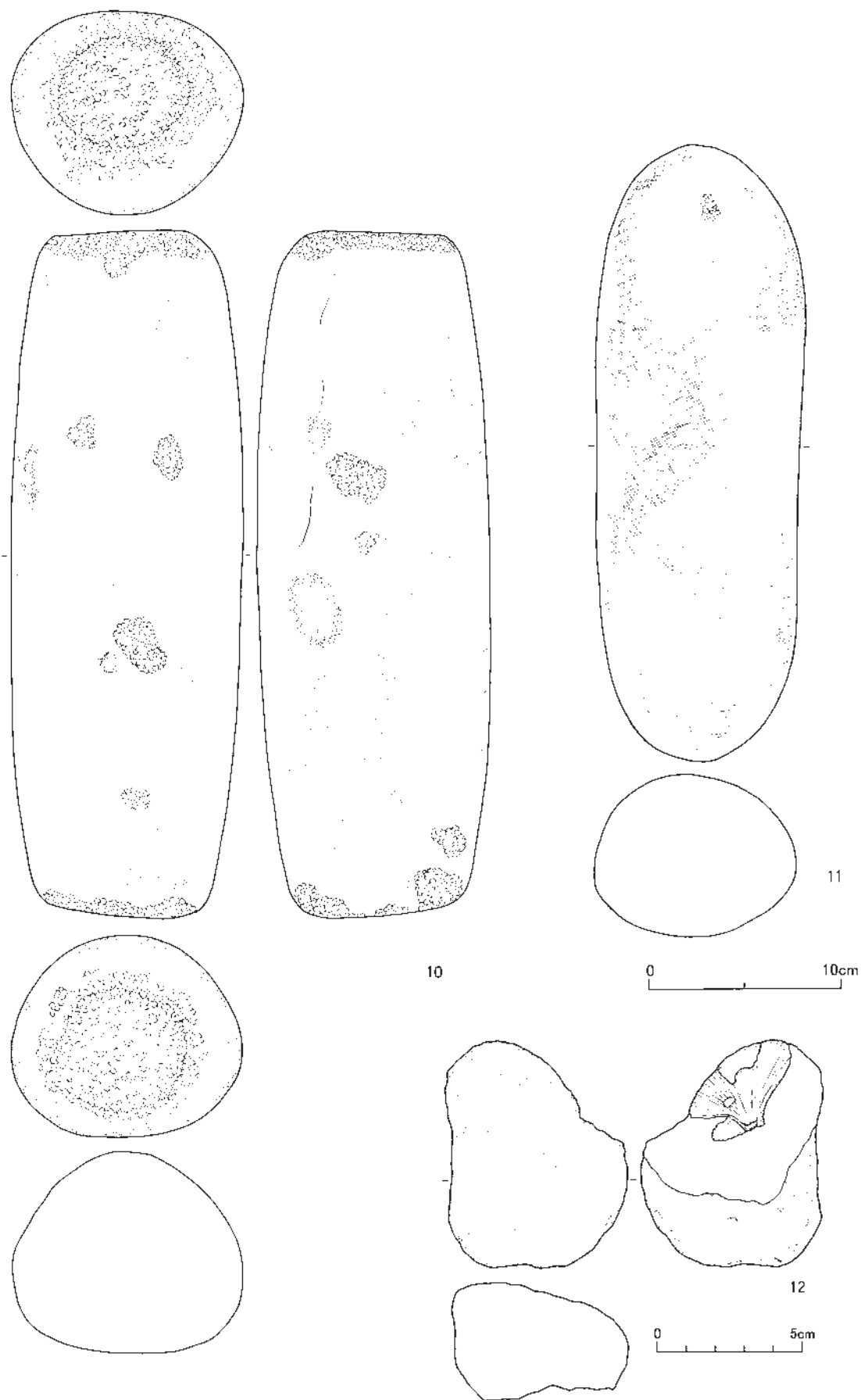
**石製品：**(図IV-92、図版174) 石製品は16点出土した。そのうち11点を図示した。O8区から石棒1点と軽石製品が3点出土していることが分布状況としては際立っている。1は全面両面調整の黒曜石製で、全面が摩滅している。口にはめ込む飾りのような用途も考えられる。2は採取品の頁岩である。縁辺には人為の可能性のある剥離と、自然のものと思われる表面が摩滅した剥離が等間隔に6ヶ所ある。軽石製の石製品は10個出土した。そのうち7点を図示した。全面を研磨によって整え、穿孔をす(4・5・8)。7は穿孔の跡が浅く残る。この図以外に、他に北海道式石冠と関連するもの(156・133)は北海道式石冠の項で $\frac{1}{3}$ のスケールで図示した。10は石棒である。全面敲打調整の後、全面を研磨する。両端は敲打による凹みを持つ。11は自然の棒状礫に研磨を加えたものである。

12で図示したのは包含層中に含まれていた、貝化石である。礫として採取したなかにこの化石が混じっていた。この貝はコシバニシキガイ(イタヤガイ科ニシキガイ属) *Chlamys cosibensis* (Yokoyama) の化石である。絶滅種である。生息年代は中新世(約1300万年前)~前期更新世(約100万年前) 森町付近での推定産出層は八雲層である。これは道南に広く分布する地層である(以上、開拓記念館学芸委員、添田雄二氏からの御教示による)。VI層中の礫に含まれていたものが上がってきた可能性もあるが、縄文時代の人間が採取してきた可能性もある。(大泰司)

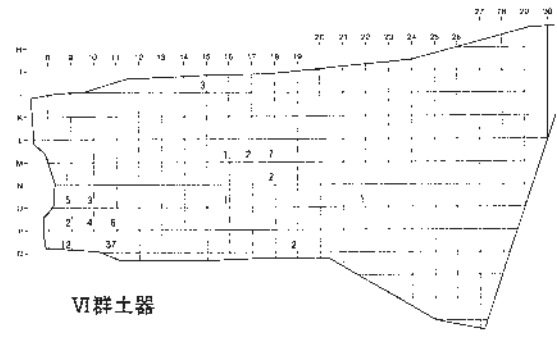
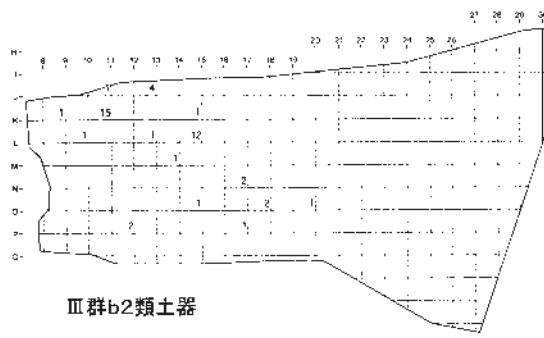
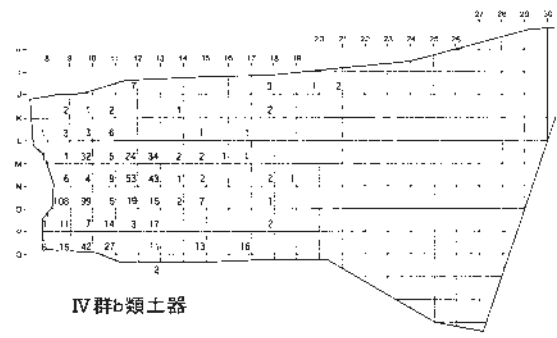
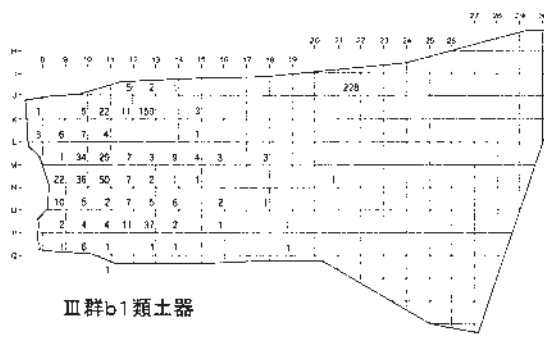
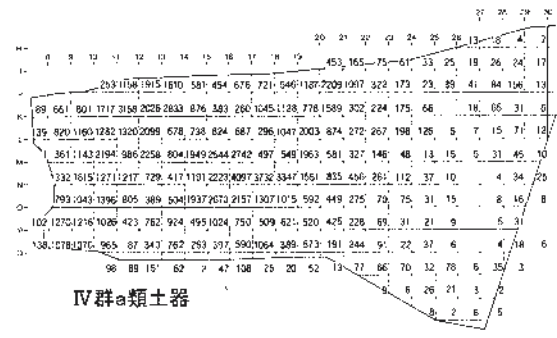
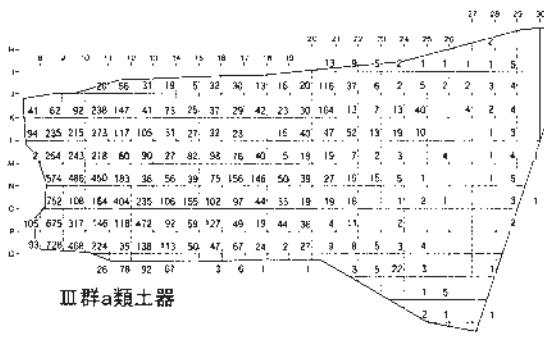
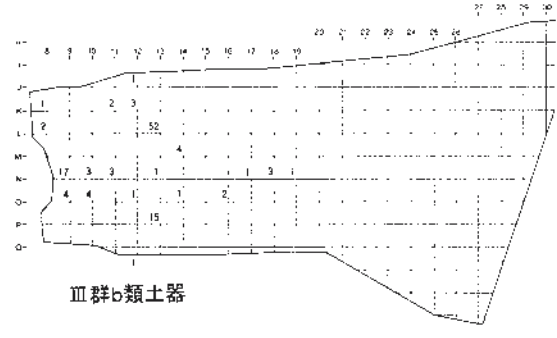
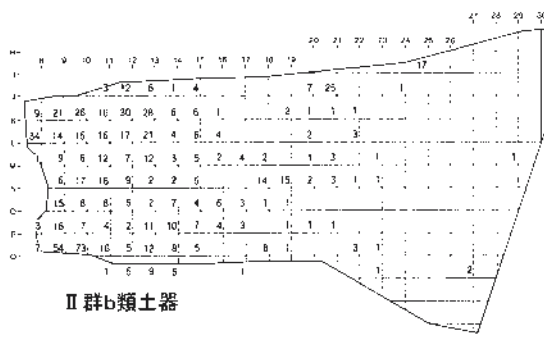
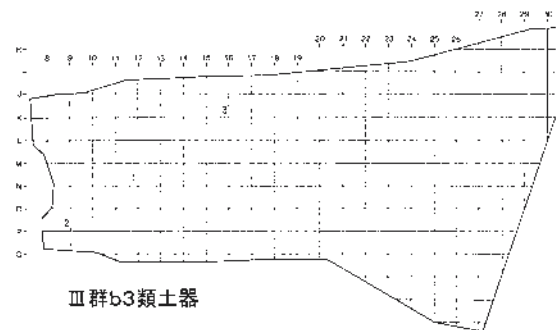
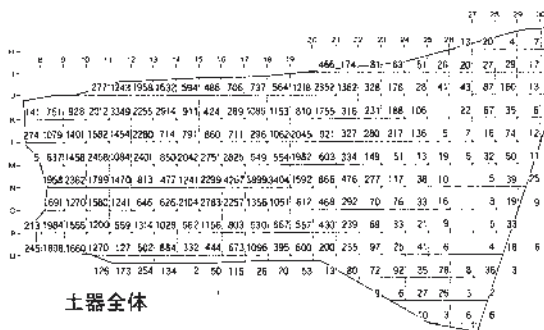


図IV-92 包含層出土の石器・石製品 (22)

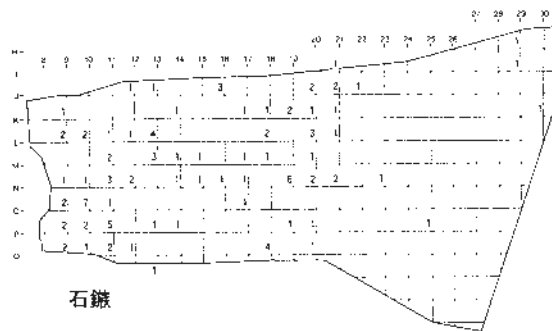
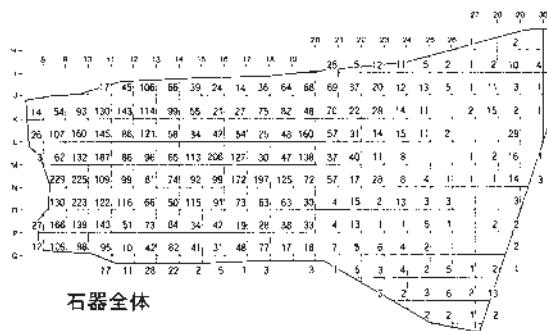
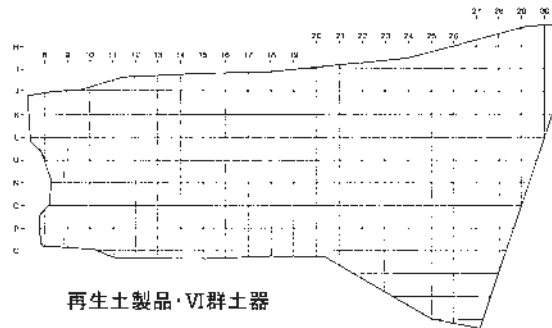
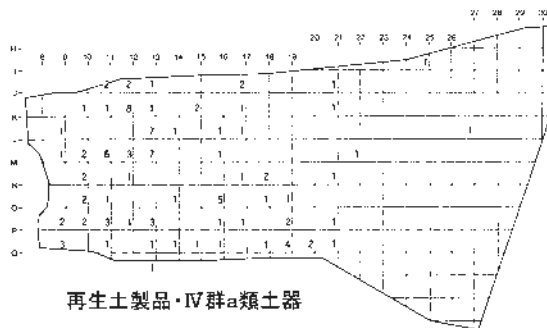
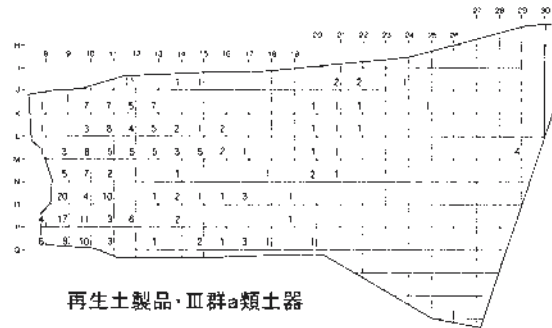
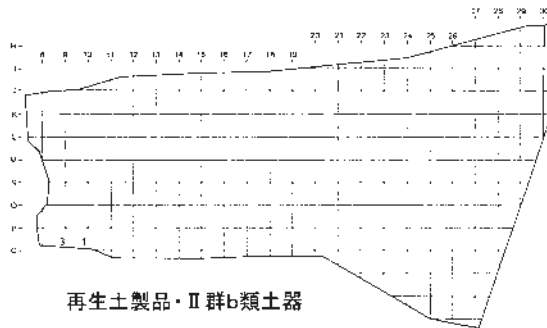
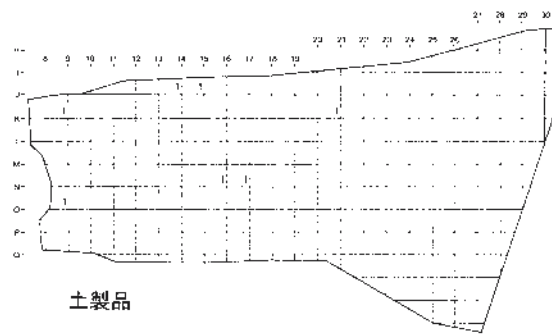
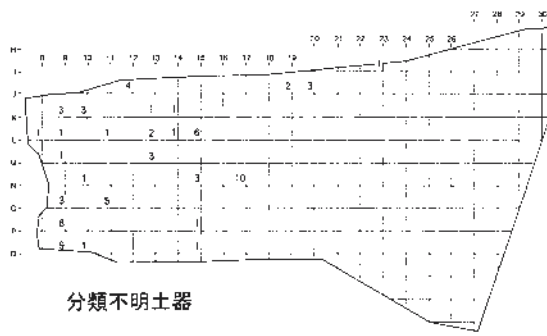




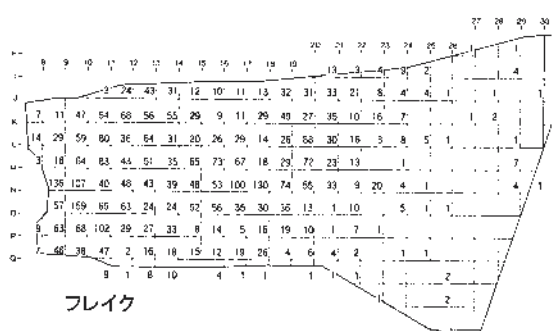
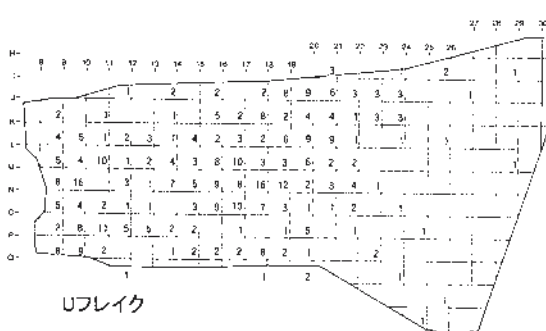
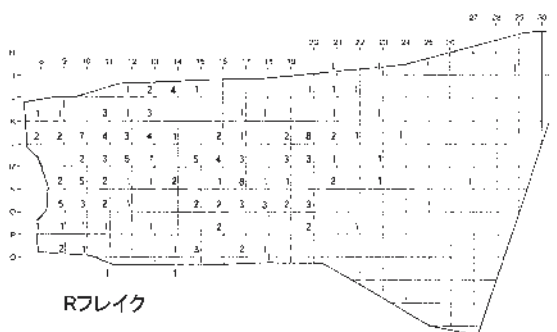
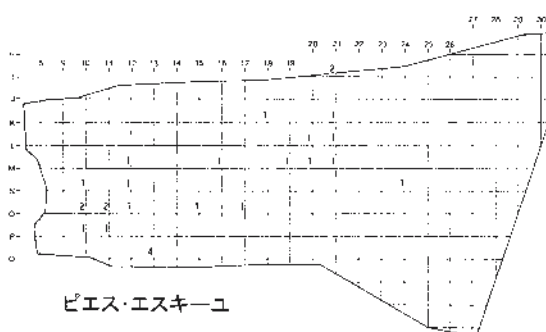
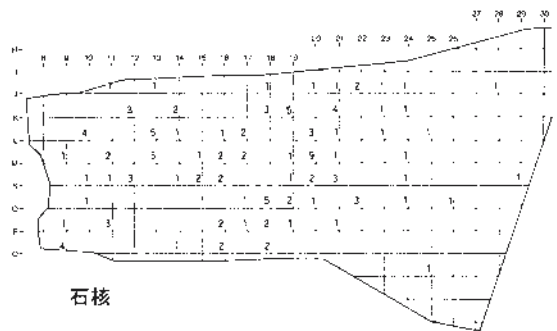
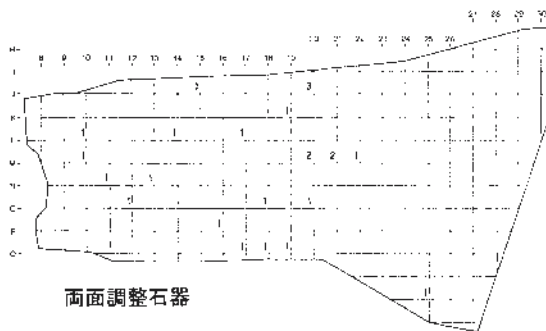
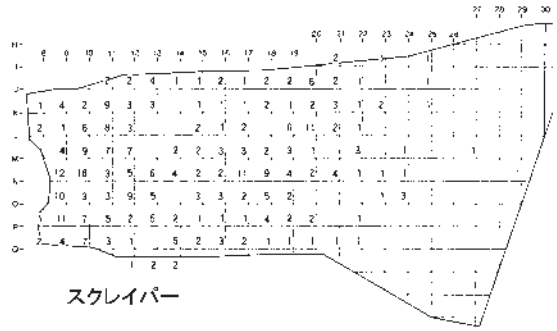
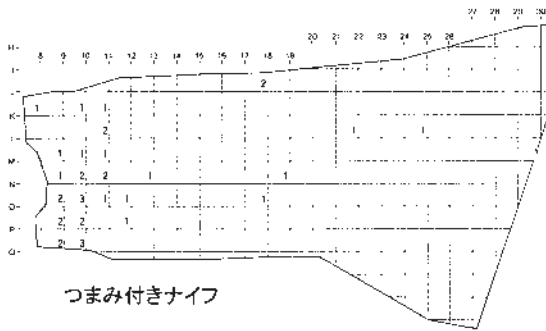
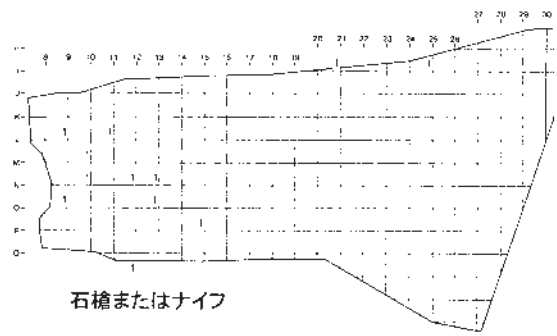
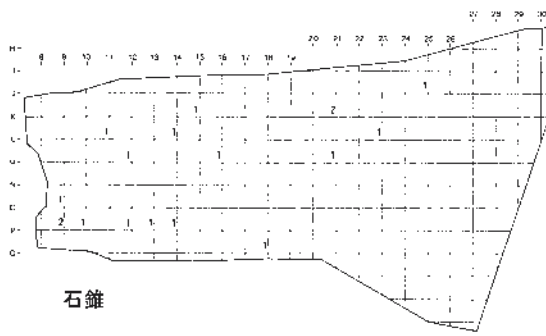
図IV-93 包含層出土の石器・石製品 (23)



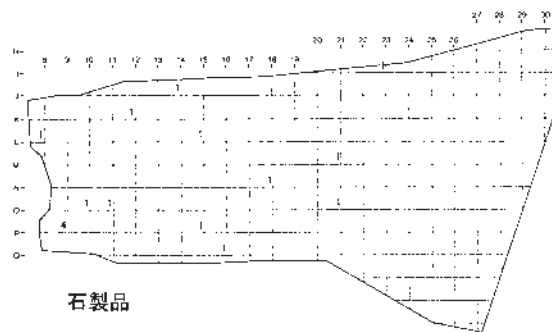
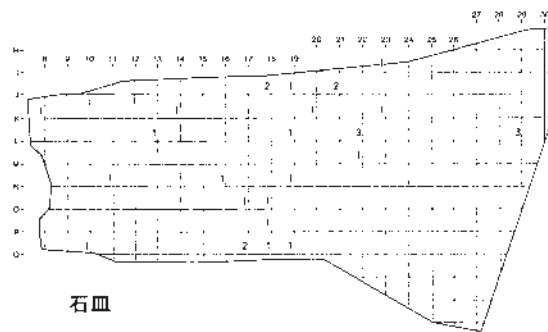
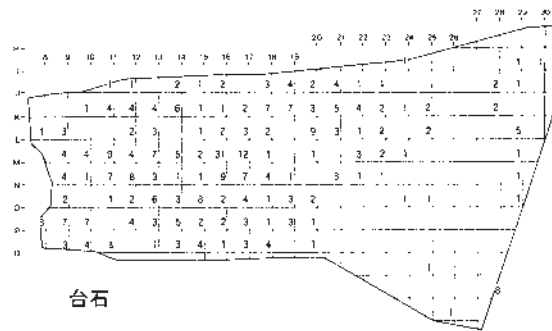
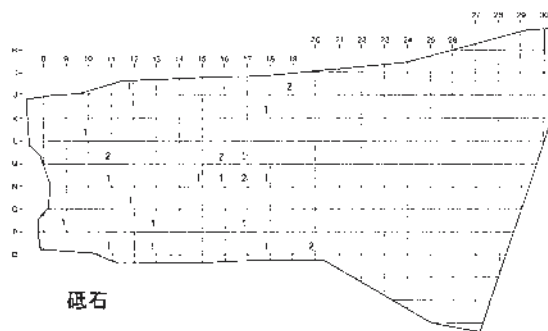
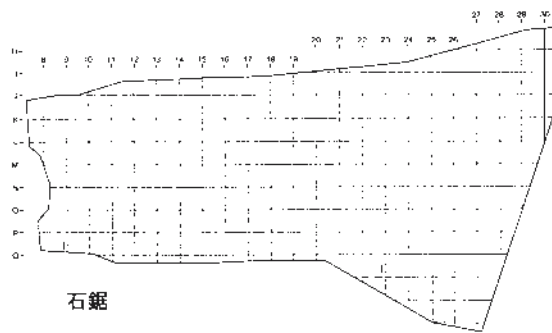
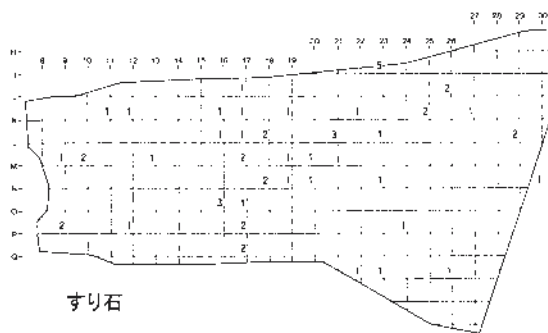
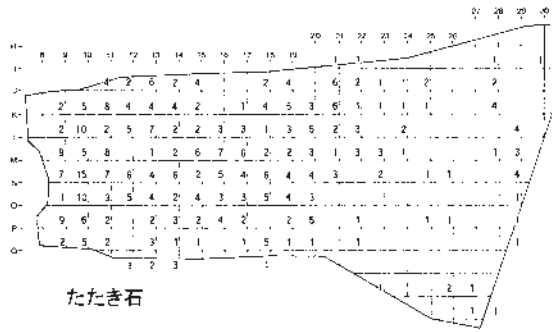
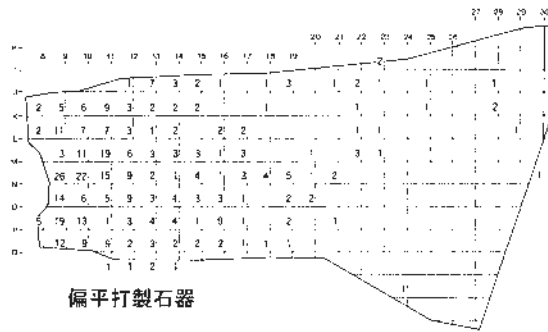
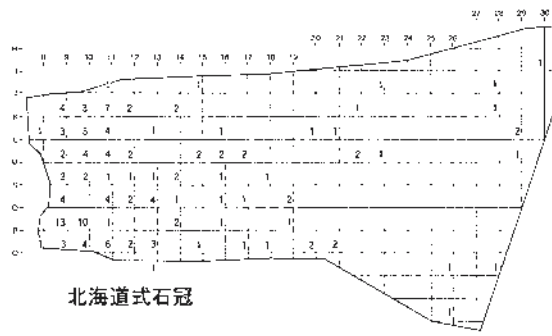
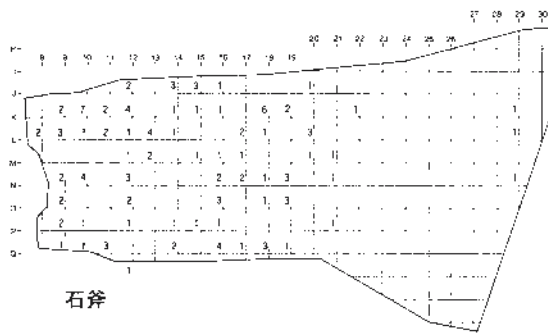
図IV-94 包含層出土の土器分布図(1)



図IV-95 包含層出土の土器・土製品分布図(2)・石器分布図(1)



図IV-96 包含層出土の石器分布図(2)



図IV-97 包含層出土の石器・石製品分布図(3)





表Ⅲ-1-1 遺構一覧 (A地区)

調査年	遺構名	位置(グリッド)	時 期	規 模(m)			特 徴
				長 軸		深 さ	
				確認面/床面	短 軸 確認面/床面		
2001	H-6	O・P-10・11	縄文時代後期前葉	4.80/4.34	(2.94)/(2.69)	0.46	石組炉・涌元式・玉磁石
2001	H-7	K・L-11	縄文時代後期前葉	3.97/3.88	3.71/3.56	0.23	石組炉・台付浅鉢
2001	H-11	O-10	縄文時代中期中葉～後期前葉	3.48/3.16	(1.80)/(1.58)	0.21	偏平礫の立った小土坑・P-56より古い
2001	H-12	L・M-12・13	縄文時代後期前葉	4.44/4.44	4.34/3.98	0.22	石組炉・大型石皿出土・H-16より新しい
2001	H-15	M・N-9・10	縄文時代中期前半	(5.68)/(5.62)	5.44/5.36	0.38	ベンチを持つ住居覆土にサイベ沢VII式の廃棄・骨針の出土・当初、ベンチ部分を旧H-10として調査・P-9より古い
2001	H-16	M-12	縄文時代中期中葉	2.91/2.70	2.28/2.09	0.38	H-12より古い
2002	H-18	L・M-15・16	縄文時代後期前葉	3.40	3.30	0.06	石組炉・掘り込みが浅く、立石を伴う
2002	H-20	M・N-18・19	縄文時代後期前葉	3.80/3.56	3.80/3.60	0.24	石組炉・炉石と立石の抜き取り痕・涌元式の切断壺
2001	H-21	I・J-10・11	縄文時代後期前葉	4.22	3.80		平地式であり、柱穴がならんでいるもの
2001	P-2	O・P-13	縄文時代後期前葉	1.00/0.78	0.76/0.64	0.95	配石を伴う・涌元式・埋め戻し
2001	P-9	N-9	縄文時代中期中葉	1.40/1.06	(1.20)/(1.04)	0.18	H-15より新しい
2001	P-10	I-14	縄文時代後期前葉	0.95/0.81	0.72/0.67	0.28	立石と倒立した深鉢の埋設がある・埋め戻し
2001	P-13	O-8	縄文時代後期前葉	1.54/1.28	1.16/0.96	0.20	覆土からIV群a類土器と北海道式石冠が出土している。F-6より古い・埋め戻し
2001	P-15	I・J-13・14	縄文時代中期前半～後期前葉	1.75/1.63	1.74/1.62	0.34	周辺に柱穴が並ぶ
2001	P-16	J-12	縄文時代中期前半～後期前葉	0.73/0.70	0.66/0.53	0.15	P-18・19と同一時期か
2001	P-18	J-12	縄文時代中期前半～後期前葉	1.20/0.93	1.06/0.93	0.53	VI層を掘り下げた際に出土した礫を投げ込んだものか。P-16・19と同一時期か
2001	P-19	J-12	縄文時代中期前半～後期前葉	0.80/0.48	0.73/0.50	0.38	VI層を掘り下げた際に出土した礫を投げ込んだものか。P-16・19と同一時期か
2001	P-20	O-11・12	縄文時代中期中葉	1.34/1.12	0.99/0.76	0.38	覆土からヒ工属の炭化種子が出土・埋め戻し
2001	P-21	M・N-14	縄文時代後期前葉	1.07/(0.63)	0.75/(0.48)	0.18	
2001	P-22	N-14	縄文時代後期前葉	0.95/(0.56)	0.74/(0.48)	0.14	
2001	P-23	J・K-14	縄文時代後期前葉	1.23/1.13	0.92/0.92	(0.38)	涌元式・台石による立石
2001	P-24	N-13	縄文時代後期前葉	1.27/1.13	1.04/0.90	0.38	P-25・26と同一時期か・埋め戻し
2001	P-25	N-12・13	縄文時代後期前葉	1.12/1.02	0.38/0.38	0.58	P-24・25と同一時期か・埋め戻し
2001	P-26	N-12	縄文時代後期前葉	0.82/0.70	0.89/0.78	0.82	P-24・26と同一時期か・埋め戻し
2001	P-27	M・N-13・14	縄文時代中期前半～後期前葉	(2.02)/(1.23)	1.97/1.13	0.27	P-46より新しい・埋め戻し
2001	P-28	P・Q-12	縄文時代中期中葉	1.28/1.10	1.04/0.82	0.36	サイベ沢VII式・北海道式石冠他礫石器出土・埋め戻し
2001	P-29	P・Q-13	縄文時代中期前半～後期前葉	0.86/0.81	(0.64)/(0.64)	0.37	VI層を掘り下げた際に出土した礫を投げ込んだものか・埋め戻し
2001	P-30	N-10	縄文時代中期前半～後期前葉	0.97/0.87	0.82/0.72	0.10	土器破片・台石
2001	P-31	O-13	縄文時代中期前半～後期前葉	1.14/0.95	0.76/0.59	0.12	土器破片・台石・P-32より新しい
2001	P-32	O-13	縄文時代中期前半～後期前葉	1.65/1.36	(0.95)/(0.85)	0.14	P-31より古い
2001	P-33	O-11・12	縄文時代中期前半～後期前葉	0.95/0.77	(0.42)/(0.32)	0.32	
2001	P-34	N・O-12	縄文時代中期前半～後期前葉	1.08/0.82	0.82/0.60	0.22	割れた石皿が接合
2001	P-35	O-13・14	縄文時代後期前葉	1.24/1.00	1.09/0.97	0.44	明瞭な埋め戻し
2001	P-36	L-8	縄文時代中期前半～後期前葉	0.61/0.42	0.56/0.42	0.28	埋め戻し
2001	P-37	O・P-13	縄文時代後期前葉	(1.02)/0.58	0.96/0.57	0.60	埋め戻し
2001	P-38	J・K-14	縄文時代後期前葉	0.76/0.72	0.40/0.36	0.56	出土土器から、涌元式の填か
2001	P-39	N-8	縄文時代後期前葉	0.93/0.69	0.72/0.60	0.24	白坂3式・埋め戻し
2001	P-40	O・P-13	縄文時代後期前葉	1.18/1.07	(0.87)/(0.76)	0.24	埋め戻し
2001	P-41	L-9	縄文時代後期前葉	0.84/0.73	0.69/0.56	0.24	
2001	P-42	N-14	縄文時代後期前葉	0.95/0.94	0.88/0.71	0.08	
2001	P-43	M・N-8	縄文時代中期前半	1.90/1.69	1.58/1.40	0.25	大型礫直下、黒色土中からクリの出土
2001	P-44	N-9	縄文時代中期中葉以降	(0.60)/(0.55)	0.74/0.62	0.08	H-15より新しい
2001	P-45	M-12・13	縄文時代後期前葉	1.09	0.70	0.20	H-12より古い
2001	P-46	M・N-13	縄文時代中期前半	1.21/1.04	1.08/0.88	0.59	埋め戻し
2001	P-47	J-9	縄文時代中期前半～後期前葉	0.94/0.73	0.90/0.75	0.28	
2001	P-48	N-10	縄文時代中期前半～後期前葉	0.78/0.62	0.66/0.50	0.25	H-15との先後関係不明
2001	P-49	P-14	縄文時代中期前半	1.78/1.53	1.49/1.26	0.30	
2001	P-50	Q-11・12	縄文時代中期前半	0.60/0.55	0.51/0.50	0.17	石器を埋める・埋め戻し
2001	P-51	N-8・9	縄文時代後期前葉	0.76/0.50	0.66/0.44	0.28	H-15より新しい・埋め戻し・北海道式石冠
2001	P-52	M・N-8・9	縄文時代中期前半～後期前葉	(0.56)/(0.46)	(0.36)/(0.29)	(0.20)	H-15より新しい
2001	P-54	N-10	縄文時代中期中葉以降	0.46/0.24	0.42/0.24	0.15	H-15より新しい
2001	P-55	Q-13	縄文時代中期中葉	(0.40)/(0.26)	(0.33)/(0.24)	(0.25)	Ⅲ群a類土器がまとめて出土・埋め戻し
2001	P-56	O-10	縄文時代後期前葉	(1.88)/2.08	1.74/1.474	0.68	H-11より新しい・埋め戻し・焼土投げ込み
2001	P-57	K・L-13・14	縄文時代中期前半	1.79/1.71	1.49/1.35	0.58	P-58と類似・埋め戻し
2001	P-58	L-14	縄文時代中期前半	1.79/1.67	1.77/1.59	0.75	P-57と類似・埋め戻し
2001	P-59	N-9	縄文時代中期中葉	0.60/0.44	0.38/0.28	0.10	Ⅲ群a類土器がまとめて出土・埋め戻し
2002	P-63	I-16	縄文時代後期前葉	0.90/0.88	0.88/0.88	0.36	最上部からたたき石
2002	P-64	M-17	縄文時代後期前葉	0.76/0.68	0.38/0.54	0.12	
2002	P-66	N・O-23	縄文時代後期前葉	1.12/0.93	1.02/0.88	0.32	
2002	P-71	M・N-16	縄文時代後期前葉	0.96/0.88	0.80/0.70	0.16	最上部からたたき石
2002	P-72	I・J-16・17	縄文時代中期前半～後期前葉	1.10/0.96	1.08/0.97	0.08	H-18より古い
2002	P-73	O-16	縄文時代後期前葉	0.82/0.72	(0.56)/(0.49)	0.46	たたき石
2002	P-74	O-16	縄文時代後期前葉	0.96/0.68	0.76/0.54	0.26	
2002	P-75	J-19	縄文時代中期前半～後期前葉	1.07/0.9	(0.98)/(0.68)	0.17	F-29より古い
2002	P-76	O-15・16	縄文時代中期前半～後期前葉	1.14/0.96	0.94/0.80	0.14	
2002	P-83	K-15	縄文時代中期前半～後期前葉	1.40/0.96	0.84/0.72	0.42	
2002	P-87	M-16	縄文時代中期中葉	0.42/0.58	0.76/0.52	0.42	大木8b式・北海道式石冠
2002	P-91	M・N-15・16	縄文時代中期前半～後期前葉	0.96/0.84	0.62/0.48	0.11	
2002	P-93	I・J-16・17	縄文時代中期前半～後期前葉	1.48/1.28	1.22/1.12	0.12	
2002	P-94	I-15・16	縄文時代中期前半～後期前葉	0.92/0.72	0.88/0.78	0.12	
2002	P-95	I・J-15	縄文時代後期前葉	1.66/1.88	1.60/1.64	0.50	埋め戻し
2002	P-96	I・J-15・16	縄文時代中期前半～後期前葉	0.68/0.52	0.66/0.58	0.10	
2001	F-1	M-9	縄文時代後期前葉	0.53	0.31	0.06	
2001	F-2	K-13	縄文時代後期前葉	0.65	0.46	0.12	
2001	F-3	L-10	縄文時代前期後半～後期前葉	0.98	0.48	0.14	
2001	F-4	O-9	縄文時代後期前葉	0.55	0.34	0.07	
2001	F-5	P-9・10	縄文時代後期前葉	0.36	0.19	0.06	
2001	F-6	O-8	縄文時代中期中葉	0.92	0.56	0.12	P-13より新しい
2001	F-7	N-9	縄文時代中期中葉	0.82	0.62	0.10	H-15・P-44より新しい
2001	F-8	L-9	縄文時代前期後半～後期前葉	0.96	0.43	0.10	
2001	F-9	L-8・9	縄文時代前期後半～後期前葉	(0.60)	0.40	0.15	
2001	F-10	M-11	縄文時代後期前葉	0.67	0.60	0.09	石組炉
2001	F-11	L-13	縄文時代後期前葉	0.95	0.57	0.09	石組炉
2001	F-12	O-10	縄文時代前期後半～後期前葉	0.58	0.36	0.10	
2001	F-13	O-10	縄文時代中期中葉～後期前葉	0.50	0.32	0.08	
2001	F-14	P-10	縄文時代中期中葉～後期前葉	0.74	0.66	0.09	
2001	F-15	P-10	縄文時代後期前葉	0.48	0.46	0.05	
2001	F-16	K-8・9	縄文時代後期前葉	0.58	0.24	0.06	
2001	F-17	K-8	縄文時代後期前葉	1.30	0.80	0.16	







表Ⅲ－２ 遺構一覧（B地区）

	遺構名	位置	規模(m)			時期	備考
			長軸	短軸	深さ		
			確認面/床面	確認面/床面			
2001	H-1	I・J-47・48	(4.80)/(4.50)	4.20/4.00	0.2	IV群a類	N-88° - E (炉-立石)の方向H-13より新
2001	H-2	J・K-49	3.28/2.47	2.67/1.87	0.54	III群a類	埋め戻し覆土
2001	H-3	H・I・J-49・50	5.73/4.85	5.42/4.47	0.42	II群b類	H-9より古、P-5より新
2001	H-4	G・H-47・48	4.16/3.72	(3.61)/(1.50)	0.18	IV群a類	P-6より新
2001	H-9	H-49	2.34/2.05	(2.05)/1.85	0.18	III群a類	H-3より新
2002	H-13	I・J・K-47・48	(7.67)/(7.44)	-/-	0.5	II群b類	2001年一部確認
2002	H-17	G・H-43・44	(4.50)/(4.26)	-/-	0.12	IV群a類	N-72° - E (炉-立石)の方向
2002	H-19	H・I-44・45	4.78/4.52	4.08/3.80	0.23	IV群a類	N-82° - E (炉-立石)の方向
2001	P-1	L-49	2.18/1.71	1.89/1.35	0.56	III群a類	埋め戻し覆土
2001	P-3	J-48	1.12/0.80	0.81/0.50	0.43	IV群a類	
2001	P-4	J-47・48	(1.65)/(1.48)	(1.90)/(1.56)	0.4	縄文時代 前期~後期	
2001	P-5	I-49	(1.62)/(1.43)	1.54/1.08	0.64	II群b類	H-3より古
2001	P-6	H-48	0.88/0.65	0.86/0.67	0.34	III群a類	埋め戻し覆土H-4より古
2001	P-7	H・I-49	(2.03)/(1.59)	(1.57)/(1.18)	(0.7)	II群b類	H-3より古
2001	P-8	J-48	2.14/1.70	1.96/1.54	0.54	III群a類	P-3より古
2001	P-11	G-49	1.74/1.88	1.13/1.10	0.58	III群a類	埋め戻し覆土
2001	P-12	E-48	2.12/1.74	(1.31)/(1.20)	0.45	III群a類	埋め戻し覆土
2001	P-14	K-50	(1.56)/(1.09)	(0.61)/(0.36)	0.61	III群a類	埋め戻し覆土
2001	P-17	J-48	(0.90)/(0.69)	(0.75)/(0.69)	(0.24)	III群a類	
2002	P-60	F-43	0.41/0.26	0.40/0.26	0.17	IV群a類	大形フレイク等
2002	P-61	I-46	1.33/0.94	0.98/0.61	0.38	III群a類	埋め戻し覆土P-65より新
2002	P-62	I-44	(1.42)/(1.02)	1.28/0.93	(0.26)	IV群a類	
2002	P-65	J-46	2.02/1.48	(1.70)/1.09	(0.78)	III群a類	P-61より古
2002	P-67	F-43	0.63/0.37	0.58/0.3	0.17	IV群a類	
2002	P-68	F-42	0.64/0.48	0.52/0.32	0.15	IV群a類	
2002	P-69	F-42	0.53/0.26	0.48/0.25	0.15	IV群a類	
2002	P-70	G-41・42	1.66/1.27	1.18/0.9	0.25	IV群a類	
2002	P-77	J・K-47	2.48/2.34	1.87/1.27	0.22	III群a類	H-13より新
2002	P-80	F-46・47	1.0/0.71	0.94/0.69	0.29	III群a類	
2002	P-81	J-45	1.38/1.25	1.15/1.0	0.55	III群a類	埋め戻し覆土
2002	P-82	I・J-45	1.62/1.43	(1.47)/1.13	0.77	III群a類	埋め戻し覆土
2002	P-84	K-46	1.27/1.12	0.84/0.69	0.38	III群a類	埋め戻し覆土
2002	P-85	K-47	(1.88)/(1.73)	1.64/1.47	(0.32)	縄文時代 前期、中期	
2002	P-86	H-46・47	3.00/2.57	2.14/1.83	0.82	III群a類	埋め戻し覆土
2002	P-88	J-44・45	(1.57)/1.2	(1.34)/1.16	0.82	III群a類	埋め戻し覆土
2002	P-89	F-47・(48)	(0.61)/(0.39)	(0.74)/(0.47)	0.44	縄文時代 中期、後期	
2002	P-90	E・F-46	0.94/0.67	0.81/0.66	0.31	縄文時代 中期、後期	
2002	P-92	G・H-44	1.16/0.77	0.96/0.8	0.36	III群a類	H-19より古

表III-3 遺構出土遺物一覽  
住居出土遺物一覽

H-6 床面土の焼結土製石												
分類・層位	IIb 再生土 製石	IIIa 再生土 製石	IIIb 再生土 製石	IVa 再生土 製石	IVb 再生土 製石	Rf レイク	UF レイク	石割 クレー パ アマ	スク レイ パー	つま みけ ナ イフ	備 打 石 磨	合計
トレンチ		1	2	1	3					3		3
遺土					39							42
遺土上層	2	24	4	311	3			1	1	2		34
遺土中位	3	70	2	555	7	2		2	2	22	2	373
遺土下位		26	2	273	1			2	1	12	1	324
床面	5	1122	9	1194	11	3	3	1	5	2	61	78
合計												1487

H-7											
分類・層位	IIIb	IIIa	IVa 再生土 製石	IVb 再生土 製石	Rf レイク	UF レイク	石割 クレー パ アマ	スク レイ パー	つま みけ ナ イフ	備 打 石 磨	合計
トレンチ		2		37					3	1	45
遺土				231					9		250
遺土上層	3	3		1	2			1	9		18
遺土中位	1	2		128	1			7			141
遺土下位	4	1	1	192	1	1	1	11			185
床面	3			91						1	95
ペルト				21				3			24
ペルト上層	1	137		1				1	3	1	145
ペルト中位	17	167	1	137	1			2		1	277
HP-1											3
HP-4	2			3							5
HP-4				11							12
HP-6											1
合計	24	258	2	631	2	3	47	3	27	1	1193

H-11						
分類・層位	IIIa	IIIb-1	IVa 再生土 製石	スク レイ パー	たた ぎ石	合計
トレンチ		1	6			7
遺土上層	8	1	27			36
遺土中位	6	1	21			28
遺土下位	6	1	31	1	3	43
HP-12						1
合計	22	9	79	1	3	116

H-12											
分類・層位	IIIa 再生土 製石	IIIb-1	IVa 再生土 製石	Rf レイク	UF レイク	スク レイ パー	スク レイ パー	石割 クレー パ アマ	たた ぎ石	石皿	合計
トレンチ			9							2	9
遺土										1	12
遺土上層	11		155		1				2	1	167
遺土中位	2	1	36	2	2	3			2		47
遺土下位	7	1	7	58		5					80
HP-1			9								9
HP-4	1		1								3
HP-2											1
HP-4								1			3
HP-5	2										2
HP-8											1
HP-7											1
HP-16											1
合計	23	1	8	274	2	1	2	11	2	5	348

H-15														
分類・層位	IIIa 再生土 製石	IIIb-1	IIIb-2	IIIb-3	IVa 再生土 製石	IVb 再生土 製石	焼結 土製 石	UF レイク	Rf レイク	石割 クレー パ アマ	スク レイ パー	つま みけ ナ イフ	備 打 石 磨	合計
トレンチ(継H-16)	84		3	2	65	1								154
トレンチ														5
遺土	5				10									12
遺土上層(継H-10)	149	4		5	1	2						3		157
遺土中位(継H-10)	1	127	8	8	68							1		208
遺土中位	2	121	2	5	52							1		208
遺土下位(継H-10)	1	391	2	2	45							1		477
遺土下位	4	723	4	1	84							11		827
壁														9
床面(ベンチ部分)	10				3									17
床面	962			1	8							3	1	1020
HP-1	4													4
HP-2														2
HP-5	2													2
HP-6	30													30
HP-9														1
HP-13														1
HP-14														1
合計	17	2918	16	18	6	2	527	3	1	2	3	1	25	3902

H-16							
分類・層位	IIIa 再生土 製石	IIIb-1	IVa 再生土 製石	スク レイ パー	つま みけ ナ イフ	備 打 石 磨	
遺土	6	242	60	3	2	1	2 317
遺土中位							1 2
遺土下位							1 7
床面							2 5
合計	7	242	63	3	5	1 2 4	3 331

H-18					
分類・層位	IVa たた ぎ石	石皿	焼 結 土 製 石	備 打 石 磨	合計
焼出面	5				5
床面	5		2	5	12
石製壁 立ち1の埋り方層土	6	2			8
立ち2の埋り方層土	3		1		4
立ち3の埋り方層土	1			1	2
立ちの上	2	1			4
立ちの下	1				1
伊織の立石	1				1
合計	23	1	3	7	41

H-20														
分類・層位	IIIa 再生土 製石	IIIb-1	IIIb-3	IVa 再生土 製石	Rf レイク	UF レイク	スク レイ パー	つま みけ ナ イフ	備 打 石 磨	たた ぎ石	石皿	焼 結 土 製 石	備 打 石 磨	合計
遺土上層	2			1099	2	2	2	24		3	1			1155
遺土1層	1	1	1	595	2	5	1	39		2			1	675
遺土2層				25				2						46
遺土4層														3
遺土7層				15										16
遺土下位														1
床面(遺土2層下位)				227										229
HP-1 遺土														1
合計	3	1	1	1964	4	7	3	1	65	1	4	6	3	2126



P-73			
分類・層位	IVa	たたき石	合計
焼土1		1	1
焼土中位		1	1
合計	1	1	2

P-74					
分類・層位	IIIa	IVa	フリク	礎	合計
焼土1	4	3	3	5	15

P-75			
分類・層位	IVa	台石	合計
焼土2	35	1	36

P-76	
分類・層位	IVa
焼土1	1

P-83	
分類・層位	IVa
燧石	1

P-91	
分類・層位	IVa
焼土1上部	2

P-94	
分類・層位	礎
焼土1	1

P-87					
分類・層位	IIIa	IIIb-1	北海道式石冠	礎	合計
焼土1	6	3	1	3	13

P-93	
分類・層位	IVa
焼土1	1

P-95	
分類・層位	IVa
焼土1層	6
焼土5層	5
焼土6層	2
合計	13

焼土出土遺物一覧

F-3	
分類・層位	被熱礎
焼土中	2

F-7	
分類・層位	IIIa
焼土中	2

F-27				
分類・層位	IIIa	IVa	礎	合計
焼土中	6	1	1	8

F-38				
分類・層位	IVa	台石	被熱礎	合計
焼土中	1	2	2	5

F-10						
分類・層位	IIIa	たたき石	台石	被熱礎	合計	
焼土中	2	1	1	1	3	8

F-11						
分類・層位	IVa	石皿	台石	被熱礎	合計	
焼土中	5	1	1	2	1	10
伊石伊石						

F-28								
分類・層位	スクレイパー	砥石	台石	石皿	被熱礎	敲打痕のある礎	合計	
礎築面	121		3				124	土器は埋め裏
焼土1層	3	1					4	
焼土2層			3	1	16		20	伊石
立石						1	1	
合計	124	1	3	3	1	16	1	149

F-16	
分類・層位	スクレイパー
焼土中	1

F-18	
分類・層位	IIIa
焼土中	1

F-29							
分類・層位	IVa	フリク	台石	石皿	被熱礎	礎	合計
焼土			2	1			3
焼土1層	8	1	2		3	41	55
焼土2層	31						31
合計	39	1	4	1	3	41	89

F-32	
分類・層位	IVa
礎築面	24

F-19						
分類・層位	IIIa	IVa	たたき石	備平打製石器	敲打痕のある礎	合計
焼土中	1	2	3	1	1	8
伊石伊石						

F-22	
分類・層位	IIIa
焼土中	1

F-23				
分類・層位	IIIa	IVa	被熱礎	合計
焼土中	6	2	1	9

F-25									
分類・層位	IIIa	IVa	たたき石	砥石	台石	被熱礎	敲打痕のある被熱礎	礎	合計
焼土中	1	9	1	1	1	3	1	4	21

F-37 (旧H-14)						
分類・層位	IIIa	IVa	台石	石皿	礎	合計
焼土	1	2	1	1	2	7

柱穴状の小土塊出土遺物一覧

SP-1	
分類・層位	IVa
焼土	67

SP-2	
分類・層位	石片
焼土	1

SP-28	
分類・層位	IVa
焼土	1

SP-30	
分類・層位	IVa
焼土	3

SP-6					
分類・層位	IIIa	IIIa再生土製	IVa	フリク	合計
焼土中	20	1	8	2	31

SP-4	
分類・層位	IIIa
焼土	3

SP-31	
分類・層位	IVa
焼土	1

SP-34	
分類・層位	IIIb
焼土	1

SP-8						
分類・層位	IIIa	IIIa再生土製	IIIa-1	IVa	IVa再生土製	合計
焼土中	5	2	2	55	1	65

SP-10	
分類・層位	IVa
焼土	4

SP-35	
分類・層位	フリク
焼土	1

SP-37			
分類・層位	IVa	スクレイパー	合計
焼土	9	1	10

SP-7	
分類・層位	IIIa
焼土	1

SP-12	
分類・層位	礎
焼土	1

SP-38	
分類・層位	IVa
焼土	4

SP-43	
分類・層位	IVa
焼土	1

SP-11	
分類・層位	IVa
焼土	4

SP-14	
分類・層位	IVa
焼土	2

SP-45		
分類・層位	IVa	
焼土	1	3

SP-46			
分類・層位	IVa	北海道式石冠	合計
焼土1	1		1
焼土中位	2		3
合計	3		4

SP-13	
分類・層位	IVa
焼土	1

SP-16	
分類・層位	IVa
焼土	3

SP-49	
分類・層位	IVa
焼土	1

SP-55	
分類・層位	IVa
焼土	1

SP-15	
分類・層位	IVa
焼土	1

SP-20	
分類・層位	IVa
焼土	1

SP-57	
分類・層位	IVa
焼土	1

SP-59	
分類・層位	たたき石
焼土	1

SP-18	
分類・層位	IVa
焼土	5

SP-20			
分類・層位	IVa	IVa再生土製	合計
焼土中	1	1	2

SP-61	
分類・層位	IVa
焼土	1

SP-67	
分類・層位	IIIa
焼土	3

SP-21	
分類・層位	IVa
焼土	3

SP-25	
分類・層位	IVa
焼土	1

SP-68	
分類・層位	IVa
焼土	2

SP-71	
分類・層位	IVa
焼土	1

SP-26			
分類・層位	IIIa	IVa	合計
焼土	3	4	7

SP-27	
分類・層位	IVa
焼土	1

SP-79	
分類・層位	IVa
焼土	1

SP-80	
分類・層位	IVa
焼土	2

SP-82	分類・層位 IVa	1				
SP-86	分類・層位 IVa	13				
SP-94	分類・層位 IVa	4				
SP-101	分類・層位 IVa	2	1	3		
SP-112	分類・層位 IVa	4				
SP-117	分類・層位 IVa	2				
SP-127	分類・層位 IVa	8				
SP-129	分類・層位 IVa	1				
SP-141	分類・層位 IVa	再生土製	合計	1	1	2
SP-149	分類・層位 IVa	1				
SP-157	分類・層位 IVa	1				
SP-167	分類・層位 IVa	1				
SP-175	分類・層位 IVa	7				
SP-181	分類・層位 IVa	1	備 打製 石器			
SP-185	分類・層位 IVa	1				
SP-190	分類・層位 IVa	22				
SP-200	分類・層位 IVa	3				

SP-85	分類・層位 IVa	9							
SP-91	分類・層位 IVa	1							
SP-97	分類・層位 IVa	13							
SP-108	分類・層位 IVa	2	IVa	合計	2	3	5		
SP-114	分類・層位 IVa	2							
SP-121	分類・層位 IVa	2							
SP-128	分類・層位 IVa	1	IVa	備	合計	1	2	1	4
SP-132	分類・層位 IVa	1							
SP-143	分類・層位 IVa	1	備						
SP-149	分類・層位 IVa	1							
SP-158	分類・層位 IVa	2							
SP-171	分類・層位 IVa	3							
SP-178	分類・層位 IVa	2							
SP-184	分類・層位 IVa	1	備						
SP-186	分類・層位 IVa	2							
SP-192	分類・層位 IVa	1							
SP-201	分類・層位 IVa	1							

SP-93	分類・層位 IVa	1
-------	-----------	---

SP-202	分類・層位 IVa	1				
SP-212	分類・層位 IVa	2				
SP-217	分類・層位 IVa	7				
SP-219	分類・層位 IVa	1				
SP-225	分類・層位 IVa	6	右石	合計	7	
SP-227	分類・層位 IVa	1	フレイク			
SP-233	分類・層位 IVa	3				
SP-246	分類・層位 IVa	1				
SP-252	分類・層位 IVa	1	再生土製			
SP-261	分類・層位 IVa	1	右製			
SP-272	分類・層位 IVa	1				
SP-280	分類・層位 IVa	1	1	2	1	2
SP-285	分類・層位 IVa	1				
SP-289	分類・層位 IVa	1				
SP-298	分類・層位 IVa	1				
SP-314	分類・層位 IVa	1	スクレイパー			

SP-203	分類・層位 IVa	2					
SP-213	分類・層位 IVa	1					
SP-218	分類・層位 IVa	1					
SP-224	分類・層位 IVa	1	IVa再 生土製	合計	1	1	2
SP-226	分類・層位 IVa	2	フレイク	合計	2	2	4
SP-232	分類・層位 IVa	1					
SP-233	分類・層位 IVa	1	右石				
SP-250	分類・層位 IVa	1					
SP-254	分類・層位 IVa	1					
SP-269	分類・層位 IVa	1					
SP-273	分類・層位 IVa	1					
SP-284	分類・層位 IVa	1					
SP-286	分類・層位 IVa	1					
SP-290	分類・層位 IVa	1	右石				
SP-307	分類・層位 IVa	1	右石				
SP-314	分類・層位 IVa	1	右石				

表Ⅲ-4 遺構出土掲載土器一覽 (復元土器)

図番号	掲載番号	土器分類	図化した点数			残			総 点数	寸法(単位cm)				部位	焼成等	目立った 混入物	施文の特徴	備考・追加事項
			通眼(単位)・調査 区(単位)×点数	遺物番号	点数	通眼(単位)・調査 区(単位)×点数	遺物番号	点数		口径	底径	器高	最大径					
図Ⅲ-3	H-6-1	IV群a類 浦元式並行	H-6(覆土 上位)×5	32・40・41	43	J12(IV)×1	a11	14	57	28.6	—	Φ0.9	口～胴 部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小 粒	LR縄文施文後沈線 文とミガキ調整に よって磨消し縄文	内面はミガキ調整 で、胴部上半は横方 向、下半は縦方向	
			H-6(トレン チ)×1	42		M12(IV)×2	b2											
			H-6(覆土 中位)×1	43		N8(IV)×1	c10											
			M8(IV)×1	21		N10(IV)×4	b3・b16・d3											
			N10(IV)×20	b2・b3・b8・b 11・b16・c15		O10(風倒木) ×1	a7											
			O10(IV)×3	a1・d10		O10(IV)×2	a10・a15											
			O10(Ⅲ)×1	b2		O11(覆土)×1	3											
			O10(風倒 木)×8	a7		P10(IV)×1	d4											
			O11(IV)×2	a8・a10		P9(IV)×1	12											
			O11(覆土)×1	a2														
			図Ⅲ-7	H-7-1		IV群a類 白坂3式	H-7(覆土 上位)×1											25
H-7 HP- 4(覆土)×1	1																	
K9(IV)×1	9																	
K10(Ⅲ)×2	c3																	
K10(IV)×1	c7																	
L9(IV)×1	11																	
M11(IV)×9	d11																	
図Ⅲ-7	H-7-7	IV群a類	H-7(覆土 下位)×2	69・82	4	H-7(ベルト 中位)×1	63	1	5	7.1	—	5.1	口～胴 部	良好	長石砂粒・ 角閃石小 粒・ 海綿骨針	ミガキ調整で無文 にした後、貼付によ り無文の折り返し 口縁	内面はナデ調整	
			L-11(IV)×1	9														
			M-11(IV)×1	d4														
図Ⅲ-11	H-12-1	IV群a類 (底面に木の 葉圧痕)	H-12(覆土 上位)×14	1	55	K11(IV)×1	d18	28	83	25.5	10.3	18.2	口～底 部	良好	長石砂粒	LR縄文を横走させ、 口縁部をナデ調整 によって無文とし、 LR縄線を3条施す	内面はミガキ調整、 口縁部は横方向、胴 部は縦方向、張り出 す底部形態であり、 底面は木の葉圧痕 の後、ミガキ調整を 施す	
			H-12(覆土 中位)×3	10		L11(IV)×1	b3											
			H-16(覆土) ×2	18		M11(風倒 木)×2	4・19											
			M12(IV)×34	7・10・11・13		M11(IV)×13	8・14・29・ a7・c9											
			M13(IV)×2	4・b1		M11(風倒 木)×1	28											
						M12(IV)×8	7・11・13・a 1・b2・c1・											
						M13(IV)×1	4											
		N14(IV)×1	16															
図Ⅲ-17	H-15-1	Ⅲ群a類 サイベ沢 VII式	H-10(トレン チ)×2	23	23	H-10(覆土 下位)×5	61	1	24	(26.3)	—	Φ26.5	口～底 部	やや良	長石砂粒・ 繊維	結束第2種R縄文で 結束した2本の原体 のうち一本には縄 を巻きつける。地文 口縁部には粘土 紐を連続して貼 付した上にL縄線	内面は胴部はミガキ 調整、胴部は縦方向、 口縁部は横方向、 器面について煤が胴 部の影らみのピーク より上によく付着	
			H-10(覆土 中位)×10	61														
			H-15(覆土 下位)×2	95														
			H-15(床) ×1	137(No.37)														
			M9(IV)×3	c9														
図Ⅲ-17	H-15-2	Ⅲ群a類	H-15(床) ×41	198(No.53)	47	H-10(覆土 中位)×3	29	47	20.3	9.5	Φ29.4	口～底 部	やや良	長石砂粒・ 長石小石	結束第1種羽縄文地 文施文後、RL縄 痕を口唇に連続し て施文する。波状 口縁の中央に把手 を貼付し、縄圧痕を 施す	口縁の外反部分は 横方向のミガキ調 整、下部は縦方向の ミガキ調整		
			H-10(覆土 中位)×3	29														
			H-10(覆土 下位)×2	31														
			M9(IV)×1	9														
図Ⅲ-18	H-15-3	Ⅲ群a類 サイベ沢 VII式	H-15(床) ×31	118・141(No.2) 173(No.40)・1 76(No.49)・17 9・186(No.47)・ 200(No.56)・1 07(No.32)	41	H-15(覆土 下位)×8	30・31・81・ 177(No.44)・ 138・205	41	41	Φ0.8	Φ3.8	10.8	口～底 部	やや良	長石砂粒・ 繊維	結束第2種羽縄文地 文施文後、隆帯を貼 付し、隆帯上および 口唇にL縄を2本 重ねたものを押す る	内面はミガキ調整 張り出す底部形態 で、底面はミガキ調 整	
			H-15(覆土 中位)×1	39														
			H-10(覆土 下位)×1	101														
図Ⅲ-18	H-15-4	Ⅲ群a類 サイベ沢 VII式	H-10(覆土 下位)×1	66	14	H-10(覆土 中位)×1	51	17	31	17.8	7.7	24.5	口～底 部	やや良	長石砂粒・ 長石小石・ 繊維	結束第1種によるR L縄とR縄の縄文地 文。口唇には縄の 圧痕が連続する	内面について口縁 部は横方向、胴部は 縦方向のミガキ調 整、底面は平底でミ ガキ調整	
			M8(IV)×10	9・16・17・2 6・d7		H-10(床) ×3	130											
						H-10(覆土) ×1	119											
						H-15(覆土 下位)×1	114											
						M8(IV)×5	13・17・d7											
						M9(V)×1	6											
						M9(IV)×2	15・c13											
		N8(IV)×1	21															
		N9(IV)×1	b11															
		N10(IV)×1	c8															
図Ⅲ-18	H-15-5	Ⅲ群a類 サイベ沢 VII式	H-15(床) ×76	135(No.1)・ 139	81	H-15(床) ×7	135(No.1)・ 139	7	88	28.1	11.3	31.3	口～底 部	やや良	長石砂粒・ 繊維	結束第2種羽状縄文 を施文。口唇部 にはへらによる連続 したキザミ	内面はミガキ調整、 外反する口縁部は 横方向その下は縦 方向、底部際には横 方向のミガキ調整、 底面は微妙な上げ 底でミガキ調整	
			H-10(覆土 中位)×5	52														
図Ⅲ-18	H-15-6	Ⅲ群a類 サイベ沢 VII式	H-15(覆土 下位)×7	84・85	78	H-15(覆土 下位)×2	85	13	81	22.9	—	Φ0.7	口～底 部	やや良	長石砂粒・ 小石	RL縄文施文後、全 面をナデ調整し、ほ ぼ無文とする。口 唇部にはへらによる キザミを連続して 施す	内面はミガキ調整、 口縁部は横方向、胴 部は縦方向	
			H-15(床) ×62	105・106・ 108・178		H-15(床) ×9	105・106											
			H-15 HP -6(底)×9	1		H-15 HP -6(底)×2	1											



図番号	掲載番号	土器分類	図化した点数			残			総 点 数	寸法(単位cm)				部位	焼成等	自立した 混入物	施文の特徴	備考・追加事項
			遺物番号	点数	遺物番号	点数	遺物番号	点数		口径	底径	器高	最大径					
図Ⅲ-19	H-15-7	Ⅲ群a類 サイベ沢 Ⅶ式	H-15(床) ×61 H-10(覆土 下位)×1	116(No.6) 129	62	H-15(床) ×58	116(No.6)	58	120	38.3	—	30.0	口～胴 部	やや良	長石砂粒 と小石・ 繊維	隆帯貼付後、結束第 2種羽状縄文を施文 隆帯と口唇部には 縄の圧痕	一对の突起には中 央部貫通孔を成形 内面はミガキ調整	
図Ⅲ-19	H-15-8	Ⅲ群a類 サイベ沢 Ⅶ式	H-10(覆土 中位)×1 H-15(覆土 下位)×5 H-15(床) ×111	42 1+2・95・85 107(No.32) 109(No.32)	117	H-15(床)×5	107(No.32) 109(No.32)	5	122	26.8	9.6	36.8	口～底 部	良好	長石砂粒・ 海綿骨針	結束第2種羽状縄文 を施文 口唇部には へらによる連続 したキザミ、波状口 縁の中央には貫通 孔	内面はミガキ調整 で、口縁部は横方向、 胴部は縦方向のミ ガキ調整 屈曲部 には輪痕が残る 底面は微妙な上げ 底でミガキ調整	
図Ⅲ-20	H-15-9	Ⅲ群a類 サイベ沢 Ⅶ式	H-10(覆土 中位)×1 H-15(床) ×67 H-15(覆土 下位)×11 H-15(覆土 上位)×1 N9(IV)×1	97 40・107(No. 32)・109(N o.32)・116 (No.0)・140 ・141(No.2)・ 190 42・81・85・ 95・138(No. 34)・142(N o.34) 78 11	81	H-15(覆土 下位)×1 H-15(床)×1 N8(IV)×1 O8(IV)×1	42 140 16 13	4	85	36.7	13.0	55.5	口～底 部	やや良	長石砂粒・ 繊維	結束第2種LR縄文 を地文 口唇部には 連続するキザミ 調整	内面はミガキ調整 窄まる胴部下半には 煤が付着せず 底面 には調整時の圧 痕がある	
図Ⅲ-20	H-15-10	Ⅳ群a類	H-10(床) ×1	136(No.9)	1			1	7.0	4.5	10.4	口～底 部	良好	長石砂粒	ナデ調整によって 無文	内面はミガキ調整 底面もナデ調整 H-15ベンチ部分 であるが、胎土、成形 等、また旧H-10の 遺物出土状況から IⅣaと判断した		
図Ⅲ-20	H-15-11	Ⅳ群a類	H-15(覆土 下位)×2	75	2			2	4.7	1.0	3.5	口～底 部	良好	繊維・長 石砂粒	外見は漏斗の形を している ナデ調 整によって無文で ある	内面はナデ調整 胎土と焼成からIⅣa の土製品と判断した		
図Ⅲ-30	H-16-1	Ⅲ群b1類	H-16(覆土 上位)×94	10	94	H-16(覆土 上位)×62	10	62	156	33.0	(8.9)	22.7	口～底 部	やや良	長石砂粒・ 繊維	LR縄文地文、高段 部は断面三角形で、 器面側についてLR 縄文を連続して押 圧する	内面はミガキ調整、 胴部上半は横方向、 下半は縦方向	
図Ⅲ-35	H-20-1	Ⅳ群a類 (葛西動 編年で中 期くらい)	H-20(覆土 1)×23	145	23			23	10.5	—	(8.9)	口～胴 部(切 断壺の 上半部)	良好	角閃石小 石・長石 砂粒いす れも微量	隆帯を貼付後、沈線 を施しミガキ調整 赤彩の痕跡がある 焼成前に細い 串を連続して突き 刺して切断した痕 跡がある	内面はミガキ調整 によって輪痕を 埋める 口縁内面 には蓋の受けのよ うな張り出しがあ る 切断は文様 の渦巻きに則して切 断するため上面観 は対照ではない		
図Ⅲ-35	H-20-2	Ⅳ群a類 涌元Ⅱ式	H-20(覆土 最上部)×1 I11(IV)×6 K11(IV)×1 K12(IV)×2 L12(IV)×2 L12(V)×1 L12(攪乱) ×2 M16(IV)×2 N9(IV)×1 N16(IV)×1	134 3・a1 10 25・c3 19・c7 22 33・43 42・54 b16 9	19	I14(IV)×1 J12(IV)×1 L12(IV)×1 N16(Ⅲ)×1	b7 3 c11 4	4	23	19.5	—	24.5	口～胴 部	やや良	長石砂粒 と小石・ 角閃石小 石	RL縄文を施文後、 沈線施文をし、ミ ガキ調整をして磨 消縄文	内面はみガキ調整 で、頸部とその上は 横方向、胴部は縦方 向	
図Ⅲ-36	H-20-3	Ⅳ群a類	H-20(覆土 最上部)× 201 H-20(覆土 1)×3 M19(IV)× 9 N18(IV)×1 N19(IV)× 10	89・133・13 4・124・186・ 148 203・157 21・27・12・ 38 16 19・25・10	224	H-20(覆土 最上部)× 67 H-20(覆土 1)×3 不明×2 M17(IV)×1 M18(IV)×2 M19(IV)×3 N19(IV)×2	133・134・1 24・91・88・ 111・148 146・203 64 36 21・38・43 25	80	304	41.5	—	64.2	口～胴 部	良好	長石砂粒・ 角閃石小 石	RL縄文を横走させ た後、輪痕みによ って折り返し口縁部 を成形、垂下する 縄文 底部際のは まる胴部はミガキ 調整によって無文 とする	内面はミガキ調整	
図Ⅲ-37	H-20-4	Ⅳ群a類 (葛西動 編年で十 腰内Ⅰ式 の古段前)	H-20(覆土 上位)×1 I15(IV)×2 I19(IV)×1 I20(Ⅲ)×1 I20(IV)×2 J11(IV)×1 J13(IV)×1 J14(IV)×5 J15(Ⅲ)×3 J15(IV)×19 J20(Ⅲ)×1 J20(IV)×1 K12(IV)×1 K19(IV)×3 K22(IV)×1 L14(IV)×2 L15(風倒 木)×2 O11(IV)×1 O17(風倒 木)×1 不明(排土) ×1	168 4・22 36 1 12 a2 a5 b4・b8 2・a1 10・13・20・ 22・28 3 11 4 15・29 4 d14 122・126 a9 26 50	50	H-20(覆土 上位)×1 I21(IV)×1 J12(IV)×1 J13(IV)×2 J14(IV)×2 J15(IV)×1 J18(IV)×1 J20(IV)×1 K10(IV)×1 K11(木根) ×1 K14(IV)×5 L14(IV)×1 L16(IV)×1 L17(IV)×1 L19(Ⅲ)×1 L19(IV)×3 M19(Ⅲ)×2 M19(IV)×1 N14(IV)×1 O8(IV)×1 O9(IV)×1 O20(IV)×1 P8(IV)×1	91 8 a10 a9・b13 b6・b8 22 61 1 b16 14 1・11・a7 c4 10 9 3 26・34 7 d10 18 15 10 34	32	82	4.6	(11.5)	31.0	27.2	頸～底 部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小 石	隆帯を主文様に沿っ て貼付し、沈線文を 施文、そして全体を ミガキ	内面はミガキ調整

図番号	掲載番号	土器分類	図化した点数			残			総 点 数	寸法(単位cm)				部位	焼成等	自立った 混入物	施工の特徴	備考・追加事項
			遺物番号	点数	遺物番号	点数	遺物番号	点数		口径	底径	器高	最大径					
図Ⅲ-37	H-20-5	IV群a類	H-20(覆土最上部)×5	111・178・186	27	H-20(覆土最上部)×7	89・72・160・111・81	71	98	29.9	—	Ø4.6	口~胴部	良好	長石砂粒と小石・角閃石小粒	LR縷文施文後、胴部上半を無文にして横方向に展開する沈線文。口縁部にはLR縷線を2条	内面はミガキ調整で、屈曲部より上は横方向、下は縦方向	
			H-20(覆土最上部)×1	114		H-20(覆土最上部)×1	114											
			M18(Ⅲ)×4	5		H-20(覆土1)×1	184											
			M18(Ⅳ)×9	28・36・43・68		M17(Ⅳ)×3	19・107											
			M19(Ⅳ)×2	29・44		M18(Ⅲ)×21	5											
			N18(Ⅲ)×1	4		M18(Ⅳ)×21	19・28・36・48・63・83・43・88											
			N18(Ⅳ)×3	9・29		M19(Ⅳ)×3	47・21・27											
			N19(Ⅳ)×2	10		N18(Ⅳ)×4	29・9・4											
						N19(Ⅳ)×5	10・25・32											
						N17(Ⅳ)×2	35・40											
		N19(Ⅳ)×2	10	I13(Ⅳ)×1	c7	O20(Ⅳ)×1	3	不明×1										
図Ⅲ-37	H-20-6	IV群a類	H-20(覆土最上部)×4	204	4			4	10.2	5.5	14.6	口~底部	やや良	長石砂粒・小石	L縷文を施文した後、輪積みで無文の折り返し口縁部を成形する	内面は縦方向のミガキ調整 胴部中央より上には煤が付着する		
図Ⅲ-37	H-20-7	IV群a類 (底面に木の葉状痕)	H-20(覆土7)×1	4	45	H-20(覆土1)×7	58・62・116・164・203	11	56	13.4	20.2	7.2	口~底部	良好	長石砂粒・角閃石小粒	LR縷文を縦方向に施文し、口縁部を無文にして、LR縷線を2条施す。底面際はミガキ調整によって無文とする	口縁部は横方向、胴部は縦方向のミガキ調整。底部形態は微妙に張り出し、底面には木の葉状痕	
			H-20(覆土7下)×1	9		H-20(覆土上位)×1	91											
			H-20(覆土2下)×12	11・13・15		H-20(覆土最上部)×3	133・168・178											
			H-20(覆土1)×28	14・16・18														
			P-2(覆土2)×1	10														
			P-2(覆土中位)×1	6														
			P13(Ⅳ)×35	1・13・a7・a12・a14・b5														
図Ⅲ-45	P-10-1	IV群a類	P-10(覆土)×41	3	69	I14(Ⅳ)×5	c5	5	74	23.3	10.3	12.6	口~底部	やや良	長石砂粒・繊維	胴部上半について輪積みを残し気味にし、RL縷文を横走させる。その際の押圧痕が残る	内面はミガキ調整、口縁部は縦方向、胴部は横方向	窄まる胴部下半には煤の付着がない。微妙に張り出す底部形態。底面は摩滅が著しい。口唇部は一本の粘土紐で成形し、平坦面をとる。内面は主に縦方向のミガキ調整。焼成前の乾燥時にゆがんだものか正中線がゆがんでおり、自立は難しい
			I14(Ⅳ)×28	c5														
図Ⅲ-49	P-28-1	Ⅲ群a類	P-28(覆土上位)×11	15	11			11	12.2	6.9	14.3	口~底部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒・繊維	RL縷文施文。口唇部にはLR縷線を連続する	内面はミガキ調整。底面はミガキ調整		
図Ⅲ-60	P-56-1	IV群a類	P-56(覆土中位)×1	18	1			1	9.1	13.4	5.5	口~底部	やや良	長石砂粒と小石・小石	器面はナデ調整によって無文	屈曲部とその上には煤が付着する。内面は屈曲部より上は横方向、下は縦方向のミガキ調整		
図Ⅲ-60	P-56-2	IV群a類	P-56(覆土中位)×7	15	9	O10(Ⅳ)×1	17	1	10	25.4	21.3	—	口~胴部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒・海綿骨針	口縁部はLR縷文を横方向に施文し、胴部は横走する。口縁部から胴部にかけてLR縷文を波状に押圧する	内面は縦方向のミガキ調整。口唇部は一本の粘土紐で平坦面を成形する	
			H-6(覆土中位)×2	61														
図Ⅲ-62	P-59-1	Ⅲ群a類 サイベツⅦ式	P-59(覆土)×20	1	50	H-10(覆土下位)×1	129	16	66	23.9	8.2	30.0	口~底部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒・海綿骨針	結束第1種羽状縷文地文。口唇部には縷文を連続して押圧する	内面はミガキ調整で、外反する口縁部は横方向、胴部は縦方向のミガキ調整。底面際はナデ調整	
			H-15(床)×1	141(No.2)														
			P-59(覆土上位)×30	2		P-59(覆土)×3	1											
						P-59(覆土上位)×11	2											
図Ⅲ-71	F-11-1	IV群a類	F-11(覆土)×2	1	14	O9(Ⅳ)×1	28	1	15	22.1	—	Ø1.0	口~胴部	やや良	長石砂粒と小石・角閃石小粒	LR縷文施文後沈線文後、口縁部をおよよめる無文にしてLR縷線を施す	口唇部は一本の粘土紐で平坦面をとる。内面はミガキ調整で、口縁部は横方向、胴部は縦方向である	
			L13(Ⅳ)×11	d7														
			L14(Ⅳ)×1	11														
図Ⅲ-77	F-28-1	IV群a類 大津式	F-28(埋設土器 西半分)×19	18	47	F-28(埋設土器 東半分)×1	19	1	48	17.2	—	(18.5)	口~胴部	やや良	長石砂粒・繊維	L縷文施文後、ミガキ調整と沈線で磨消縷文。口縁部の無文部分にはより細い施文工具で不規則な沈線文	器面は胴部上半、内面については胴部下半に煤が付着。内面は横方向のケズリのようなミガキ調整	
			F-28(埋設土器 東半分)×23	19														
			P18(Ⅳ)×5	c1														
図Ⅲ-77	F-28-2	IV群a類 大津式	F-28(構築)×17	13	29	P18(Ⅳ)×1	20	1	30	11.3	6.7	16.5	口~底部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒	全面をミガキ調整にして無文にした後、沈線文	内面は主に横方向のミガキ調整。底面はミガキ調整	
			O18(Ⅳ)×2	21・b1														
			P18(Ⅳ)×10	7・a4														
図Ⅲ-81	F-36-1	IV群a類 大津式	H-5(覆土上位)×19	16	52	H-5(覆土上位)×1	16	11	63	20.5	92.0	Ø6.8	口~底部	やや良	長石砂粒	LR縷文施文後ミガキそして沈線を施し、磨消縷文を施文	内面は屈曲部より上は横方向、下は縦方向。器面については胴部中央より上に煤が付着。底面はミガキ調整	
			L14(Ⅳ)×1	c5		M9(Ⅳ)×2	d20											
						M10(Ⅳ)×1	4											
						M14(Ⅳ)×4	10・a4・d2											
						N14(Ⅳ)×2	a11・d2											
						P13(Ⅳ)×1	a3											

図番号	掲載番号	土器分類	図化した点数			残			総 点 数	寸法(単位cm)				部位	焼成等	自立った 混入物	施文の特徴	備考・追加事項													
			遺物(単位)・調査 区(単位)×点数	遺物番号	点数	遺物(単位)・調査 区(単位)×点数	遺物番号	点数		口径	底径	器高	最大径																		
図Ⅲ-81	F-36-2	IV群a類	H-5(覆土 上位)×1	4	25	H-5(覆土 上位)×3	4・40・45	6	31	21.1	—	Ø8.0	口~胴 部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小 粒	LR縄文を横走させ た後、口縁部をナデ 調整で無文にして LR縄文を2条施す 波頂部にも縄文 を押圧	内面はミガキ調整、 口縁部は横方向、胴 部は縦方向														
			H-5(トレン チ)×1	12		N14(IV)×1	b7																								
			M14(IV)×1	b8		N15(IV)×1	36																								
			M15(IV)×1	83																											
			N14(IV)×3	d9-d11																											
			N15(IV)×13	13・14・25・ 31・76・79		O14(IV)×1	1																								
			O8(Ⅲ)×1	b2																											
			O14(IV)×3	1・4																											
			M17(IV)×1	36																											
図Ⅲ-82	F-36-3	IV群a類 白坂3式	H-5(覆土 上位)×7	4・16・42・ 45	87	H-5(覆土 上位)×6	4・16・34・ 42・45	74	161	37.8	15.2	52.5	口~底 部	やや良	小石と長 石砂粒い ずれも微 量	LR縄文をおおよそ 文様に則して施文 後、沈線文とミガキ によって磨消縄文	内面は摩滅著しい 底面は微妙な上 げ底でミガキ調整														
			K12(IV)×1	b3		L14(IV)×1	a2																								
			K13(IV)×1	d13		L15(Ⅲ)×2	1・4																								
			L13(IV)×1	c1		L15(IV)×4	11・19																								
			L14(IV)×1	b2		L16(Ⅲ)×2	2																								
			L15(IV)×5	11・19・46・ 100		L16(IV)×24	10・19・30・ 40・50・83																								
			L16(IV)×8	10・19・30・ 50		M16(IV)×12	21・42・72・ 31・a1																								
			M10(IV)×2	d3		M14(IV)×4	b1・c2・c3																								
			M14(IV)× 15	c2・c3・c9・ d1・d9・d10		M24(IV)×1	7																								
			M15(IV)×1	32		N12(IV)×1	d7																								
			M16(IV)× 26	21・42・a1		N13(IV)×3	c2・b3・d1																								
			N13(IV)×1	c8		N14(IV)×5	a7・d3・d9																								
			N14(IV)× 12	a7・a13・d2・ d3・d9・d10・ d13		N15(IV)×1	13																								
			N15(IV)×2	3・37		N17(IV)×1	50																								
			O13(IV)×1	6		O9(IV)×1	28																								
			P19(Ⅲ)×1	11		O13(Ⅲ)×2	a4																								
			O16(IV)×1	6		O13(Ⅲ)×1	d2																								
						N8(IV)×1	10																								
						J17(IV)× 1	11																								
						K10(IV)× 1	a17																								
			図Ⅲ-83	F-36-4		IV群a類	H-5(トレン チ)×1											27	117	H11(IV)×1	3	15	132	33.8	14.0	44.4	口~底 部	良好	長石砂粒 と小石・ 角閃石小 粒	輪積みによって折り 返し口縁部成形後、 RL縄文を横走させ る。底部の際が縦 方向のミガキ調整	口唇部は一本の粘 土紐で平坦面をとる 内面はミガキ調整 で、口縁部は横方向 胴部は縦方向である 底面はミガキ調整
							L14(IV)×1											b4		J13(IV)×1	a9										
							L15(IV)×1											19		L14(IV)×1	c4										
L19(IV)× 12	11・13・26・ 34・43・49	L15(Ⅲ)×1			4																										
M15(IV)×9	8・16・21・3 9・61・67	L15(IV)×2			11・19																										
M16(Ⅲ)× 22	3・15	L19(IV)×1			11																										
M16(IV)×3	21・42	M14(IV)×1			1																										
M17(IV)×7	19・32	M16(Ⅲ)×3			3																										
N14(IV)×1	5	M17(IV)×1			a2																										
N15(Ⅲ)×2	3	N15(IV)×1			64																										
N15(IV)×9	14・48・58・ 63・71	N16(Ⅲ)×1			4																										
N16(Ⅲ)×1	4																														
N16(IV)×31	4・9・20・26・ 33																														
N19(Ⅲ)×1	1																														
N19(IV)×1	19																														
N19(風倒 木)×7	29																														
O13(V)×1	6																														
O13(IV)×1	c7																														
O15(IV)×6	22・31・35・ 47	O13(IV)×1	c7																												
図Ⅲ-83	F-36-5	IV群a類	H-5(覆土 上位)×7	34・45	17			17	9.0	5.4	12.4	口~底 部	やや良	長石砂粒	R縄文を横走させ た後、折り返し口縁 部を成形。沈線文 を施す。底部の際 はミガキ調整によっ て無文とする	内面は横方向のミガ キ調整。底部は微妙 な上げ底でナデによ って無文である。胴 部の膨らみのピークよ り上には煤が付着する															
			H-5(覆土 下位)×10	53																											
図Ⅲ-102	SP-1	IV群a類	SP-1(覆土) ×46	2	46	SP-1(覆土) ×2	2	2	48	—	9.0	17.3	胴~底 部	良好	長石砂粒	RL縄文を縦方向に 施文	内面は縦方向のミ ガキ調整。底面も ミガキ調整														
図Ⅲ-102	SP-13	IV群a類	SP-190(覆土) ×17	1	18	SP-190(覆土) ×5	1	5	23	12.1	6.6	16.0	口~底 部	やや良	角閃石小 粒・繊維	輪積み痕跡を胴部 の屈曲部より下、お よび口縁部などに 所々残して器を成 形し、LR附加縄文 を施文する。	胴部の中央に明瞭な 屈曲部分がありそこ から直立する器形で ある。屈曲部より上 の器面に煤が顕著に 付着する。内面は主 に縦方向のミガキ調 整。やや張り出し気 味の底部形態であり、 底面はミガキ調整														
			O14(木根) ×1	6																											

表Ⅲ-5 遺構出土掲載土器一覽 (拓影図)

掲載図番号	構名	掲載番号	土器分類	図化した点数			残			総点数	部位	焼成等	目立った混入物	施文の特徴	備考・追加事項	
				遺構(層位)・調査区(層位)×点数	遺物番号	点数	遺構(層位)・調査区(層位)×点数	遺物番号	点数							
図Ⅲ-3	H-6	2	IV群a類	H-6(覆土中位)×1 M10(IV)×1	61 14	2				2	口~胴部	良好	小砂粒・小石	ナデ調整により無紋にした後、縦方向に連続する刺突列を器面に施す	残存部から口径は3ないしは4cmで、口唇にも刺突がある。	
図Ⅲ-3	H-6	3	IV群a類	H-6(覆土中位)×1	67	1	H-6(覆土中位)×1 H-6(覆土下位)×1 O11(IV)×3	64 100 a5-b3		5	6	口縁部	良好	角閃石小粒・長石小石	LR縷文を縦方向に施す。口縁部をナデ調整により無紋にし、沈線および草本による半載竹管によって押し引き	押し返し口縁上に沈線、折り引き施文あり
図Ⅲ-3	H-6	4	IV群a類	H-6(覆土中位)×1	43	1					1	口縁部	良好	長石砂粒	2ないし3段の折り返し口縁を成形した後、LR縷文を施す	内面口縁部横方向、胴部縦方向のミガキ調整
図Ⅲ-3	H-6	5	IV群a類	H-6(覆土下位)×2	71	2					2	胴部	やや良	角閃石と長石の小砂粒	胴部には折り返しを連続し、LR縷文を施す	内面縦方向の調整 補修孔が残る
図Ⅲ-3	H-6	6	IV群a類	H-6(覆土中位)×1	43	1					1	口縁部	良好	角閃石と長石の小砂粒	LR縷文を横走させた後、口縁部ミガキ調整によって無紋 その上からLR縷文	内面横方向のミガキ調整 口唇部には平坦面をとる
図Ⅲ-3	H-6	7	IV群a類	H-6(覆土中位)×2	67	2					2	口縁部	やや良	小石・長石砂粒・海綿骨針	LR縷文を横走させた後、口縁部ナデ調整によって無紋 その上からLR縷文を2本	内面横方向のミガキ調整 だが輪縁部と指面による成形痕が残る 草本によるものらしく草の繊維痕がある 口唇部には粘土紐を一本貼付して整える 胴上部で一端膨らみ一端正直した後、直立して立ち上がる口縁部形態を持つ 口縁部断面形態は丸みをおびる
図Ⅲ-3	H-6	8	IV群a類 満元式	H-6(覆土中位)×1 O11(IV)×1 P10(IV)×1	64 a1 24	3	K8(IV)×1	4		1	4	口縁部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒	LR縷文施文後、沈線として沈線内をミガキ調整	三角形の突起様の波頂部が連続 口唇部は平坦面をとる 内面口縁部は横方向、胴部は縦方向のミガキ調整 残存部から口径12cm
図Ⅲ-3	H-6	9	IV群a類 満元式	H-6(覆土中位)×2	61・64	2					2	口~胴部	やや良	長石砂粒・海綿骨針	LR縷文地文の後、沈線文	内面横方向のミガキ調整
図Ⅲ-3	H-6	10	IV群a類	H-6(覆土中位)×2	43・122	2					2	底部	良好	長石砂粒	LR縷文施文後沈線文	底面および底面際ミガキ調整 内面横方向のミガキ調整
図Ⅲ-4	H-6	11	IV群a類 (天祐寺に類似する)	H-6(覆土中位)×35 H-6(覆土下位)×15	51-61・63-64 97	50	H-6(覆土上位)×1 H-6(覆土中位)×58 H-6(覆土下位)×47 H-6(トレンチ)×1 P-56(覆土上位)×2 P-56(覆土中位)×3 O10(IV)×1	32 61・63・64・67・91 65・97・100・103・109・117 42 7 15 b10	113	163	口~底部	良好	長石砂粒・小石	折り返し口縁成形後、粘土紐貼付をして、LR縷文を横走させる	胴部を縦方向にナデ調整を施した後に、上半を横方向にナデ調整	
図Ⅲ-4	H-6	12	IV群a類	H-6(覆土下位)×1	100	1					1	口縁部	やや良	角閃石小粒・長石砂粒	LR縷文地文、口唇部には平坦面をとりLR縷文	二段で突起様の波頂部
図Ⅲ-4	H-6	13	IV群a類 (天祐寺に類似する)	H-6(覆土下位)×4	65	4					4	口~胴部	やや良	長石砂粒・小石	貼付帯を貼付け後、縦方向のLR縷文を施す 口唇部は2本の貼付帯で区画され、LR縷線を1本押圧する	口唇部には平坦面をとりLR縷文を施す
図Ⅲ-4	H-6	14	IV群a類	H-6(覆土中位)×3 H-6(覆土下位)×1 O10(IV)×3	43・61 103 6・d10	7	H-6(覆土上位)×3 H-6(覆土中位)×2 H-11(覆土上位)×1 O10(IV)×6 O11(IV)×1	41 43・61 5	13	20	口~胴部	良好	角閃石小粒・長石砂粒・小石	内面ナデ調整、外面縦方向のミガキ調整	輪積痕明瞭	
図Ⅲ-4	H-6	15	IV群a類	H-6(覆土上位)×4 H-6(覆土中位)×5 H-6(覆土下位)×2	107・108 61・64・67 103	11	H-6(覆土上位)×8 H-6(覆土中位)×11 H-6(覆土下位)×8 P8(IV)×1 P9(IV)×9	32・108 43・64・110 97・100・103・117 20 9・15	37	48	口~底部	良好	角閃石小粒・長石砂粒・小石・海綿骨針	LR縷文にしを左巻きにした付加条縷文 口唇部にLR縷線2本	底面および底面際ミガキ調整 内面縦方向のミガキ調整	
図Ⅲ-4	H-6	16	IV群a類 大津式	H-6(覆土中位)×1	76	1					1	底部	良好	砂粒・長石砂粒	内・外・底面ヘラによるミガキ調整	張り出す底部形態 底径4.2cmの小型器形
図Ⅲ-5	H-6	17	III群a類	H-6(覆土上位)×1	108	1					1	胴部	やや良	長石粒	縁辺に打ち欠き	再生土製品(円板状)
図Ⅲ-5	H-6	18	III群a類	H-6(覆土中位)×1	112	1					1	胴部	良好	長石粒	縁辺に打ち欠き	再生土製品(円板状)
図Ⅲ-5	H-6	19	III群a類	H-6(覆土下位)×1	116	1					1	胴部	やや良	長石粒	縁辺に打ち欠き	再生土製品(円板状)
図Ⅲ-5	H-6	20	IV群a類	H-6(覆土下位)×1	117	1					1	口縁部	やや良	小石	縁辺に磨りがある	再生土製品(円板状)
図Ⅲ-5	H-6	21	IV群a類	H-6(覆土上位)×1	41	1					1	胴部	やや良	長石小粒・角閃石小粒	縁辺に打ち欠き	再生土製品(円板状)
図Ⅲ-5	H-6	22	IV群a類	H-6(覆土中位)×1	43	1					1	胴部	やや良	長石小粒	縁辺に打ち欠き	再生土製品(円板状)
図Ⅲ-5	H-6	23	III群a類	H-6(覆土上位)×1	66	1					1	胴部	やや良	長石小粒	縁辺に打ち欠き	再生土製品(円板状)
図Ⅲ-5	H-6	24	III群a類	H-6(覆土中位)×1	96	1					1	胴部	やや良	長石小粒	縁辺に打ち欠き	再生土製品(円板状)
図Ⅲ-5	H-6	25	III群a類	H-6(覆土下位)×1	117	1					1	胴部	やや良	長石小粒・海綿骨針	縁辺に打ち欠き	再生土製品(円板状)
図Ⅲ-7	H-7	2	IV群a類	L11(IV)×8	a3・a10・b5	8	H-7(覆土上位)×16 H-7(覆土中位)×2 H-7(ベルト中位)×1 H-7(トレンチ)×1 排土×1	23・25・82 12・51 51 4	21	29	口縁部	良好	角閃石小粒・小石	LR縷文を施した後、折り返し口縁を成形する。口唇部に平坦面をとる	口縁部横方向のミガキ、胴部縦方向のミガキ調整	
図Ⅲ-7	H-7	3	IV群a類	H-7(覆土中位)×2 L11(IV)×1	13 a3	3	H-7(覆土上位)×1 H-7(覆土中位)×4 H-7(覆土下位)×1 H-7(ベルト上)×3 H-7(トレンチ)×1 K11(IV)×3 L11(IV)×1	17 13・20 69 54 4 2・d18 d4		14	17	口縁部	良好	角閃石小粒	折り返し口縁成形後LR縷文を横走させる	内面横方向のミガキ調整
図Ⅲ-7	H-7	4	IV群a類	H-7(覆土中位)×1	68	1					1	口~胴部	良好	長石砂粒・小石・繊維	LR縷文を横走させる	胴の上部に膨らみのピークがある 膨らみのピークの直下には煤がよく付着する 口縁部は頸部から急に外反する口縁部には無紋の折り返し口縁部がある
図Ⅲ-7	H-7	5	IV群a類	H-7(覆土上位)×2 H-7(覆土下位)×3 H-7(ベルト上位)×1	82 69 54	5	H-7(覆土中位)×4 H-7(覆土下位)×9 I16(IV)×2	13 69 7・22	13	18	胴部	不良	長石砂粒・小石	LR縷文を横走させる。	内面縦方向のミガキ調整	
図Ⅲ-7	H-7	6	IV群a類	H21(IV)×1 I16(IV)×2 不明×2	7 d1・20 不明	6	I21(III)×1 I21(IV)×1 O16(IV)×1	2 8 11		5	11	胴部	やや良	長石砂粒・海綿骨針	LR縷文施文後、沈線、無紋部をナデ調整	内面ミガキ調整
図Ⅲ-8	H-7	8	III群a類	H-7(覆土中位)×1	12	1					1	胴部	やや良	長石小粒	縁辺に打ち欠き	再生土製品(円板状)
図Ⅲ-8	H-7	9	III群a類	H-7(覆土中位)×1	20	1					1	胴部	やや良	長石小粒	縁辺に打ち欠き	再生土製品(円板状)
図Ⅲ-8	H-7	10	III群a類	H-7(ベルト上位)×1	51	1					1	胴部	やや良	長石小粒	縁辺に打ち欠き	再生土製品(円板状)
図Ⅲ-8	H-7	11	III群a類	H-7(ベルト中位)×1	63	1					1	胴部	やや良	長石小粒	縁辺に打ち欠き	再生土製品(円板状)
図Ⅲ-9	H-11	1	III群a類 円筒上層d式	H-11HP-12(覆土)×1	1	1					1	胴部	良好	角閃石小粒・海綿骨針	LR縷文地文の上に粘土紐を貼付する	内面縦方向のミガキ調整
図Ⅲ-9	H-11	2	IV群a類	H-11(覆土中位)×1	9	1					1	底部	やや良	長石砂粒・長石英	ミガキ調整により無紋地にした後、赤彩	塗膜残る

掲載図番号	構名	掲載番号	土器分類	図化した点数		残		総点数	部位	焼成等	目立った混入物	施文の特徴	備考・追加事項		
				遺構(層位)・調査区(層位)×点数	遺物番号	点数	遺構(層位)・調査区(層位)×点数							遺物番号	点数
図Ⅲ-9	H-11	3	IV群a類	H-11(覆土中位)×1	11	1			1	底部	やや良	底面は上げ底で、木の葉の圧痕がある	内面ミガキ調整、外面は横方向のミガキ調整で、砂粒が左方向へ抜ける		
図Ⅲ-9	H-11	4	IV群a類	H-11(覆土下位)×1	19	1			1	底部	良好	底面は平底で縄痕が一面所あり	内外面および底面ミガキ調整		
図Ⅲ-11	H-12	2	IV群a類 白板3式た I群b類に 近い	H-12(覆土下位)×2 H-16(覆土)×1	23・32 18	3			2	胴部	良好	長石砂粒	RL縄文による磨消縄文	内面横方向のミガキ調整	
図Ⅲ-11	H-12	3	IV群a類	H-12HF-1(覆土)×1	30	1			1	口縁部	良好	長石砂粒・角閃石小粒	折り返し口縁を成形した後、LR縄文を施文する	内面は横方向のミガキ調整	
図Ⅲ-11	H-12	4	IV群a類	H-12(覆土下位)×6	32	6			6	口～胴部	やや良	長石砂粒	外面ナデ調整によって無紋	内面縦方向のミガキ調整 たか輪痕も残る	
図Ⅲ-11	H-12	5	IV群a類	H-12(覆土下位)×2	32	2			2	口縁部	良好	長石砂粒・海綿骨針・角閃石小粒	口縁部RL縄文、胴部はLR縄文を施す	内面口縁部横方向、胴部は縦方向のミガキ調整	
図Ⅲ-11	H-12	6	IV群a類	H-12(覆土)×5	1	5			5	口縁部	やや良	砂粒	LR縄文地文で口縁部は横方向胴部は縦方向に施文し、折り返し口縁を思わせる	内面縦方向のミガキ調整で、輪痕が残る	
図Ⅲ-11	H-12	7	IV群a類	H-12(覆土上位)×6	1	6			6	底部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒	LR縄文地文を縦方向に施文する	底面は一定方向のミガキ調整	
図Ⅲ-11	H-12	8	IV群a類	H-12(覆土中位)×1	10	1			1	底部	やや良	長石砂粒・骨母	RL縄文地文	底面はミガキ調整	
図Ⅲ-11	H-12	9	IV群a類	H-12HF-16(覆土)×1	1	1			1	底部	やや良	長石小石・角閃石小粒・海綿骨針	ミガキ調整により無紋地	張り出す底部、底面ミガキで上げ底 底径4.5cm	
図Ⅲ-21	H-15	12	III群a類 内筒上層 d式並行	H-10(覆土上位)×1 N8(IV)×6 O8(IV)×6	117 40・44・c1-9 16・24・29・36・d4	13	N8(IV)×7 O7(IV)×1 O8(IV)×1 O9(IV)×1	14・30・44・c1 d3 13 40	10	23	口～胴部	良好	海綿骨針・長石砂粒	LR縄文地文に粘土紐を貼り付け、隆帯に沿わせてL縄文を押し付ける。口唇部にもL縄文を連続して押し付ける	内面は口唇部横方向、胴部縦方向のミガキ調整だが、成形時の指頭圧痕が残る
図Ⅲ-21	H-15	13	III群a類 内筒上層式	H-15(覆土下位)×2 H-7(トレンチ)×1	11・114 (No.29) 3	3			3	口縁部	やや良	長石砂粒・繊維	口唇部、隆帯にL縄文、爪の圧痕による充塊	口縁部横方向のミガキ、胴部縦方向のミガキ	
図Ⅲ-21	H-15	14	III群a類 内筒上層式	H-15(覆土下位)×1 H-15(床)×4 M13(IV)×1	81 105(No.25)・108 6	6	H-6(覆土上位)×1 P-13(覆土中位)×1 L12(IV)×1 L15(風倒木)×1 M13(IV)×1 N14(IV)×1	106 4 11 121 5 d12	6	12	口縁部	やや良	長石砂粒・小石	LR縄文施文後、粘土紐を一組にして隆帯に沿わせて、および口唇部に連続して圧痕を施す	内面は横方向のミガキ調整、ボタ付張り付け、たつのに穿孔
図Ⅲ-21	H-15	15	III群a類 内筒上層式	H-10(覆土下位)×1	119	1			1	口縁部	やや良	長石小粒	隆帯を貼付その上からr縄文を施す	内外面、特に内面の口縁部付近に煤がよく付着する	
図Ⅲ-21	H-15	16	III群a類 サイベ沢 VI式並行	H-10(覆土中位)×2 M9(IV)×1	45 8	3	H-10(覆土中位)×9 H-10(覆土下位)×1 H-10(床)×1 H-15(覆土下位)×4 H-15(床)×2 L13(風倒木)×1 M9(IV)×1	40・45・73・100・119・129 不明 140 2・9・205・206 140・190 7 c20	19	22	口～胴部	やや良	海綿骨針・長石砂粒	L縄文を持つRL縄文を施文後、粘土紐を貼付する	内面は口唇部横方向、胴部縦方向のミガキ調整だが、成形時の指頭圧痕が残る
図Ⅲ-21	H-15	17	III群a類 サイベ沢 VI式	H-10(覆土中位)×2 H-10(覆土下位)×2 H-10(不明)×1 M9(IV)×1	29 29・31 不明 c9	6	H-10(覆土中位)×5 H-10(覆土下位)×5	29・45 31	10	16	口縁部	良好	長石の小砂粒と小石・繊維	rとL縄文の併用、結束第2種羽状縄文、縄文施文後隆帯貼付、口唇部にL縄文	内面ミガキ調整
図Ⅲ-21	H-15	18	III群a類 サイベ沢 VI式	H-10(トレンチ)×6	23・24	6	H-10(トレンチ)×4 H-15(覆土上位)×1 H-15(覆土中位)×2 H-15(覆土下位)×2 M9(IV)×3 M10(IV)×1 N8(IV)×1	23・24 78 45 78・119 22・c5 b1 16	14	20	口～胴部	やや良	繊維	半截竹管文、口唇部にはr縄文	内面には煤付着、胴下半部には特多い
図Ⅲ-21	H-15	19	III群a類 サイベ沢 VI式	H-15(覆土下位)×2 H-15(床)×7 N10(V)×1	81・不明 140・141 (No.2)	10	H-10(トレンチ)×1 H-10(覆土上位)×1 H-15(覆土上位)×1 H-15(覆土中位)×1 H-15(覆土下位)×4	74 44 40 81	8	18	口～胴部	良好	長石小砂粒・繊維	RL縄文施文後半截竹管による施文	内面は横方向のミガキ調整
図Ⅲ-21	H-15	20	III群a類 サイベ沢 VI式	H-10(覆土下位)×2 M9(IV)×1	101 c5	3	H-15(覆土下位)×2 M10(IV)×1	82・215 31	3	6	口縁部	やや良	角閃石小粒	L縄文	内面に成形時の指頭圧痕残る
図Ⅲ-21	H-15	21	III群a類 サイベ沢 VI式	H-10(覆土中位)×1 N8(IV)×1	42 10	2			2	口縁部	良好	長石微細粒	小型器形細いL縄文	内面ミガキ調整、	
図Ⅲ-22	H-15	22	III群a類 サイベ沢 VI式	H-10(覆土中位)×1 H-15(覆土下位)×1 M9(IV)×5 不明(IV)×1	45 138(No.34) 7・c3 不明	8	M8(IV)×1 N8(IV)×1 P10(III)×1	37 43 2	3	11	口～胴部	やや良	繊維・小石	縦縞り文を伴うRL縄文地文	突起様の波頂部にLR縄文、内面横方向のミガキ調整だが、成形時の指頭圧痕残る
図Ⅲ-22	H-15	23	III群a類 サイベ沢 VI式	H-15(床)×4	173(No.40)	4			4	口～胴部	やや良	繊維・長石小粒と小石・海綿骨針・角閃石	縦縞り文を伴うRL縄文地文	口唇部に粘土紐を一本貼付し、成形 内面について口縁部は横方向、胴部は縦方向にミガキ調整 口唇部にキザミが連続する	
図Ⅲ-22	H-15	24	III群a類 サイベ沢 VI式	H-15(覆土下位)×7 H-15(床)×8	114(No.29) 198(No.53)	15	H-15(覆土中位)×3 H-15(覆土下位)×15 H-15(床)×9 H-15(覆土下位)×4	86・184・216 114(No.29)205 198(No.53) 81・95・214	27	42	口～底部	やや良	繊維・長石小粒・海綿骨針	縦縞り文を伴うRL縄文地文	口唇部にL縄文の連続圧痕 内面は口縁部横方向、胴部縦方向のミガキ調整
図Ⅲ-22	H-15	25	III群a類	H-15(覆土下位)×4	2	4	H-15(床)×10 O12(IV)×3	106(No.25)・108・116(No.6)・137(No.37) 10	17	21	口～胴部	やや良	繊維・長石小粒と小石・海綿骨針・角閃石	縦縞り文を伴うRL縄文地文	口唇部に粘土紐を一本貼付し、成形 内面について口縁部は横方向、胴部は縦方向にミガキ調整
図Ⅲ-22	H-15	26	III群a類	H-10(覆土中位)×3 H-10(覆土下位)×1	43・97 119	4			4	口縁部	良好	長石小砂粒・小石・繊維	半截竹管による右方向への連続押し引きを2列	内面は横方向のミガキ調整	
図Ⅲ-22	H-15	27	III群a類 サイベ沢 VI式	H-15(床)×2	115(No.10)	3	H-15(トレンチ)×3 H-15(覆土中位)×1 H-15(覆土下位)×12 H-15(床)×5	27 209 42・65・95・138(No.34)・142(No.34) 115(No.10)・116(No.6)・179・198(No.53)・201(No.56)	21	24	口縁部	良好	長石の小砂粒と小石・繊維	結束第2種羽状縄文	内面横方向のミガキ調整
図Ⅲ-23	H-15	28	III群a類	H-15(床)×3	199(No.54)	1			1	底部	やや良	繊維・長石小粒・海綿骨針・角閃石	結束第2種羽状縄文 底面ミガキ調整 底部際ミガキ調整にて無紋	海綿骨針目立つ	
図Ⅲ-23	H-15	29	III群a類	H-15(床)×3	108	3	H-15(床)×1	108	1	4	底部	良好	長石の小砂粒と小石・繊維	LR縄文地文底部際ナデ無紋	底径8.5cm、底面ナデ調整、胴部と底部は指頭で付を楯くように押し付ける
図Ⅲ-23	H-15	30	III群a類 サイベ沢 VI式	H-15(床)×3	113(No.13)	3			3	底部	やや良	繊維・長石小粒と小石・海綿骨針・角閃石	底面ミガキ調整 底部際ミガキ調整にて無紋		

掲載図番号	構名	掲載番号	土器分類	図化した点数		残		部位	焼成等	目立った混入物	施文の特徴	備考・追加事項			
				遺構(層位)・調査区(層位)×点数	遺物番号	点数	遺構(層位)・調査区(層位)×点数						遺物番号	点数	
図Ⅲ-23	H-15	31	Ⅲ群a類	H-10(覆土下位)×1	65	1		1	胴部	やや良	長石砂粒・繊維	魚骨回転痕・縁辺を打ち欠き	再生土製品(方形)		
図Ⅲ-23	H-15	32	Ⅲ群a類	H-15(覆土下位)×1	85	1		1	胴部	やや良	長石砂粒・繊維	縁辺を打ち欠き	再生土製品(円板状)		
図Ⅲ-23	H-15	33	Ⅲ群a類	H-15HP-2(覆土)×1	1	1		1	胴部	やや良	長石砂粒・繊維	LR縷文・縁辺を打ち欠き	再生土製品(円板状)		
図Ⅲ-23	H-15	34	Ⅲ群a類	H-10(覆土下位)×1	31	1		1	胴部	やや良	長石砂粒	縁辺を打ち欠き	再生土製品(円板状)		
図Ⅲ-23	H-15	35	Ⅲ群a類	H-10(覆土中位)×1	73	1		1	胴部	やや良	長石砂粒	縁辺を打ち欠き	再生土製品(円板状)		
図Ⅲ-23	H-15	36	Ⅲ群a類	H-10(覆土中位)×1	71	1		1	胴部	やや良	長石砂粒	縁辺を打ち欠き	再生土製品(円板状・小型)		
図Ⅲ-23	H-15	37	Ⅲ群a類	H-10(覆土中位)×1	73	1		1	胴部	やや良	長石砂粒	縁辺を打ち欠き	再生土製品(円板状・小型)		
図Ⅲ-23	H-15	38	Ⅲ群a類	H-15(覆土中位)×1	205	1		1	胴部	やや良	長石砂粒	縁辺を打ち欠き	再生土製品(円板状)		
図Ⅲ-23	H-15	39	Ⅲ群a類	H-10(覆土中位)×1	71	1		1	胴部	やや良	長石砂粒	縁辺を打ち欠き	再生土製品(円板状・半円)		
図Ⅲ-23	H-15	40	Ⅲ群a類	H-15(床)×1	139	1		1	胴部	やや良	長石砂粒	縁辺を打ち欠き	再生土製品(円板状)		
図Ⅲ-23	H-15	41	Ⅲ群a類	H-15(覆土下位)×1	85	1		1	胴部	やや良	長石砂粒	縁辺を打ち欠き	再生土製品(円板状)		
図Ⅲ-23	H-15	42	Ⅲ群a類	H-15(覆土下位)×1	138(No.34)	1		1	胴部	やや良	長石砂粒	縁辺を打ち欠き	再生土製品(円板状)		
図Ⅲ-30	H-16	2	Ⅲ群a類 円筒上層d式	H-16(覆土)×1	19	5	M10(IV)×1	a14	3	8	口縁部	良好	長石砂粒・海綿骨針	結果第1種だがLR縷の組み合わせである。隆帯を貼付し、隆帯上に縷線	内面はミガキ調整
				H-15(覆土)×1	1		M13(IV)×2	5・14							
				M10(IV)×1	a4										
				M14(IV)×1	16										
				N11(IV)×1	b6										
H-16(覆土)×1	18														
H-16(覆土)×1	18														
K13(IV)×3	a6・a9	5													
L10(IV)×1	b3														
H-16(覆土)×1	18	1													
H-16(覆土)×1	18	1													
H-16(覆土)×1	18	1													
H-16HP-20(覆土)×1	1	1													
H-18(覆土)×1	29	1													
H-18(立石1の振りかた)×1	1	1													
H-18(立石1の振りかた)×1	2	1													
H-18(床)×1	7	1													
H-18(覆土中位)×1	22	1													
H-18(石組炉の炉石上)×1	4	1													
図Ⅲ-38	H-20	8	Ⅳ群a類	H-5(覆土上位)×1	46	10	I11(IV)×1	d11	10	20	口縁部	良好	角閃石小粒	ミガキ調整により無紋地にした後、楕円・渦巻き文を基調とした沈線文	波状口縁で双頭部分に突起が連続する、トリヤキカ
				H-20(覆土最上部)×1	66		K14(IV)×1	b5							
				I14(IV)×1	c5		L14(攪乱)×1	13							
				L8(IV)×1	d3		L15(IV)×1	61							
				L15(IV)×1	61		L16(木の根)×1	88							
				O16(Ⅲ)×1	11		M11(IV)×1	100							
				P19(Ⅲ)×1	5		M19(Ⅲ)×1	2							
							P12(Ⅲ)×1	c1							
							O12(IV)×1	a1							
							O13(IV)×1	2							
H-20(覆土1)×1	127	1													
H-20(覆土上部)×3	114														
H-20(覆土1)×2	116・120														
N18(IV)×1	16														
N19(IV)×1	10														
O16(Ⅲ)×1	4														
O18(IV)×1	21														
不明×1	不明														
O18(IV)×1	39														
H-20(覆土最上部)×1	111														
H-20(覆土最上部)×2	178														
H-20(覆土1)×5	170・184・190														
N17(IV)×2	23														
N18(IV)×1	29														
O19(IV)×1	12														
H-20(覆土最上部)×1	148														
H-20(覆土1層)×7	190・203														
H-20(覆土2層下)×8	6・9・14・18														
H-20(覆土最上部)×1	148														
H-20(覆土2層下)×4	9														
H-20(覆土最上部)×2	134・148														
H-20(覆土1層)×1	96														
H-20(覆土最上部)×3	109・133														
H-20(覆土上部)×1	91														
M18(IV)×4	43														
H-20(覆土最上部)×4	124														
H-20(覆土1層)×4	97・127・不明														
H-20(覆土2層)×2	52														
O18(IV)×1	21														
O19(Ⅲ)×4	2														
O19(IV)×3	12														
P19(Ⅲ)×2	11														

掲載図番号	構名	掲載番号	土器分類	図化した点数			残			総点数	部位	焼成等	目立った混入物	施文の特徴	備考・追加事項
				遺構(層位)・調査区(層位)×点数	遺物番号	点数	遺構(層位)・調査区(層位)×点数	遺物番号	点数						
図Ⅲ-39	H-20	18	IV群a類	H-20(覆土最上部)×3	143・152	14	H-20(覆土最上部)×3	72・133・143	9	23	口~胴部	やや良	長石砂粒	内外面ともに口縁部は斜方向、胴部は縦方向のミガキ調整	三角形の突起様の波頂部、残存部から、口径12cm、器高17.7cm、底径9cm
				H-20(覆土1層)×10	138・150		H-20(覆土2層)×1	1・2							
				H-20(覆土7層)×1	21		N18(IV)×1	35							
図Ⅲ-39	H-20	19	IV群a類	H-20(覆土1)×1	203	1			1	底部	やや良	長石砂粒・海綿骨針	RL縄文を縦方向に施文する	張り出す底部、底面ミガキ、底径7cm	
図Ⅲ-39	H-20	20	IV群a類	H-20(覆土1)×1	190	1			1	底部	良好	長石砂粒・小石	縦方向のミガキ調整で無文にする	窄まる底部形態、底面ミガキ、底径3.4cm	
図Ⅲ-40	H-20	21	IV群a類	H-20(覆土最上部)×2	81・178	5	K19(IV)×1	64	2	7	胴部	良好	長石小粒	RL縄文を横走させる。内面は縦方向のミガキ調整	cとdは縁辺に細かい打ち欠きがあり再生土製品の範疇に入るものと考え
				H-20(覆土1層)×1	74		L20(IV)×1	18							
				K18(IV)×1	28										
				L21(III)×1	3										
図Ⅲ-40	H-20	22	III群a類	H-20(覆土1層)×1	102	1			1	胴部	やや良	長石小粒		再生土製品	
図Ⅲ-40	H-20	23	IV群a類	H-20(覆土1層)×1	110	1			1	胴部	やや良	長石小石		再生土製品	
図Ⅲ-42	P-2	2	IV群a類	P-2(覆土中位)×2	12	2			2	口縁部	やや良	海綿骨針・長石砂粒・小石	LR縄文地文施文後LR縄文を施す	内面は横方向のミガキ調整だが、口縁部には輪積痕残る。	
図Ⅲ-42	P-2	3	IV群a類、浦元式	P-2(覆土上位)×1	2	2	N10(IV)×2	b16・c15	2	4	胴部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒	LR縄文地文施文後沈線文を施す	内面はミガキ調整
				L10(IV)×1	40										
図Ⅲ-42	P-2	4	IV群a類、浦元II式	P-2(覆土中位)×1	7	11	K9(IV)×1	4	20	31	口~胴部	良好	長石砂粒・海綿骨針	RL縄文を縦方向に施文した後、沈線文を施し、円形突起で充填する。折り返し口縁成形後、沈線文。折り返し口縁上にもLR縄文	摩滅著しい
				K14(IV)×9	1・a2・3		K10(IV)×1	d9							
				不明×1	不明		K13(IV)×3	d3・d5・d13							
							K14(IV)×13	1・7・a2・a3・a8							
							L14(IV)×1	a13							
							M11(IV)×1	20							
図Ⅲ-44	P-9	1	III群a類、内筒上層の後半	P-9(覆土上位)×6	4・5・10・11	16	P-9(覆土上位)×6	2・16	11	27	胴~底部	やや良	繊維・長石砂粒と小石・角閃石小粒・海綿骨針	RL縄文地文	摩滅著しい
				P-9(覆土中位)×7	3・17		P-9(覆土中位)×1	17							
				P-9(覆土下位)×1	不明		H-10(覆土中位)×1	43							
				H-10(覆土上位)×1	47		H-10(覆土下位)×1	119・129							
				H-10(覆土下位)×1	12		不明×1	不明							
図Ⅲ-44	P-9	2	III群a類	P-9(覆土下位)×1	13	1			1	口縁部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒・海綿骨針	RL縄文地文で、貫通しない孔を有する。	口唇部は横方向、胴部は縦方向のミガキ調整である。	
図Ⅲ-44	P-9	3	III群a類、内筒上層d式	P-9(覆土上位)×1	16	1			1	口縁部	良好	繊維・長石砂粒と小石	結束第2種羽状縄文に粘土紐を貼り付けて、上からL縄とR縄を矢羽根状になるように上から押圧する。口唇部には連続して同一の縄文を施す	内面は横方向のミガキ調整	
図Ⅲ-44	P-9	4	III群a類	P-9(覆土上位)×1	6	1			1	底部	やや良	繊維・長石砂粒	底面はミガキ調整	内面は円を描くようにミガキ調整を施す。縁辺を打ち欠いた痕跡があり、円板状の再生土製品の可能性がある。	
図Ⅲ-45	P-13	1	III群a類	P-13(覆土中位)×1	5	1			1	胴部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒・海綿骨針・繊維・小石	魚骨回転文	内面は横方向のナデ調整	
図Ⅲ-45	P-13	2	IV群a類	P-13(覆土中位)×1	5	1			1	胴部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒・海綿骨針	LR縄文の上から強くナデつける	内面は縦方向のミガキ調整	
図Ⅲ-45	P-13	3	IV群a類(天祐寺に類する)	P-13(覆土上位)×1	8	2			2	口縁・胴部	良好	長石砂粒・角閃石小粒・海綿骨針	内面はナデ調整、その上にタガ状に粘土紐を貼付する。	内面と口唇部は化粧土のように薄く粘土をナデつけて調整する	
	P-13(覆土中位)×1	5													
図Ⅲ-46	P-15	1	III群a類	P-15(覆土下位)×1	4	1			1	胴部	やや良	繊維・小石	魚骨回転文	摩滅著しい	
図Ⅲ-46	P-15	2	III群a類	P-15(覆土下位)×1	4	1			1	胴部	良好	角閃石小粒・小石	結束を持つL縄文	内面煤が付着する。縁辺打ち欠いた痕跡があり円板状の再生土製品の欠損品か	
図Ⅲ-46	P-15	3	III群a類	P-20(覆土下位)×1	4	1	P-15(覆土下位)×1	4	1	2	底部	やや良	繊維・小石・角閃石小粒	外面横方向のナデ調整して無紋、内面縦方向のミガキ調整	
図Ⅲ-47	P-20	1	III群a類、内筒上層c式	P-20(覆土上位)×1	1	3			3	口~胴部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒・繊維	ナデ調整により、胴部から口縁部まで無文にした後、隆帯を貼付する。隆帯上にはL結糸体を回転圧痕し、それに沿って半載竹管を連続押し引き刺突	内面は横方向のミガキ調整	
				M10(IV)×1	a14										
				O8(IV)×1	a8										
図Ⅲ-47	P-20	2	IV群a類	P-20(覆土上位)×3	6	5	P-20(覆土上位)×2	6	2	7	口縁部	良好	長石砂粒・海綿骨針	口唇部以外内、外面ともに縦方向のミガキ調整	突起様の波頂部あり
P-20(覆土)×2	7														
図Ⅲ-47	P-20	3	III群a類、サイベ沢VII式並行	P-20(覆土上位)×1	4	1			1	口縁部	やや粗	長石砂粒・角閃石小粒	結束第2種羽状縄文、口唇部に平坦面をとり面上に馬蹄形圧痕	内面は横方向のミガキ調整	
図Ⅲ-47	P-20	4	III群b1類、櫻林式並行	P-20(覆土)×6	3	8	O11(IV)×2	d7	1	9	口縁部	やや良	長石砂粒と小石・角閃石小粒	外面横方向のミガキ調整後に沈線	内面は横方向のミガキ調整
	O11(IV)×2	d7													
図Ⅲ-48	P-23	1	IV群a類、浦元II式	P-23(覆土)×1	3(No.1)	5			5	口縁部	やや良	長石砂粒と小石	横方向のナデ調整によって無紋地にした口縁部に折り返し口縁を成形し、折り返し部分にRL縄文を施文した後、沈線文を施す	内面は横方向のナデ調整	
				L12(IV)×1	b10										
				M10(IV)×1	a11										
				M18(III)×1	5										
				M18(IV)×1	19										
図Ⅲ-49	P-28	2	III群a類、内筒上層d式	P-28(覆土)×1	14(No.21)	1			1	口縁部	良好	長石砂粒	結束第1種羽状縄文地文上に隆帯を貼付隆帯上にrと1の矢羽根状の縄文、口唇部はLR縄文の圧痕	内面は横方向のミガキ調整	
図Ⅲ-49	P-28	3	III群a類	P-28(覆土上位)×1	15	1	P-28(覆土上位)×2	15・16	2	3	底部	良好	角閃石小粒	RL縄文	張り出す底部、底面ミガキ、底径7.7cm
図Ⅲ-51	P-31	1	IV群a類	P-31(覆土上位)×1	1	1			1	口縁部	良好	長石砂粒	LR縄文縦方向施文	内面縦方向のミガキ調整輪積痕明瞭	
図Ⅲ-51	P-31	2	IV群a類、浦元式	P-31(覆土上)×1	1	2			2	口縁部	良好	長石砂粒	LR縄文施文後沈線	折り返し口縁に沈線	
	O13(IV)×1	7													
図Ⅲ-52	P-34	1	III群a類、サイベ沢VII式	P-34(覆土1)×2	15(No.2)	7			7	口縁部	やや良	長石砂粒・海綿骨針	口縁部成形後、第2種の結束を持つLR縄文施文、口唇部には半載竹管状の草本による連続する押し引きと	内面は横方向上半は横方向、胴部下部は縦方向のミガキ調整	
	M8(IV)×4	38・47													
図Ⅲ-53	P-38	1	IV群a類	P-38(覆土)×3	2	3			3	口縁部	やや良	角閃石小粒・長石砂粒・小石	RL縄文施文後、折り返し口縁成形そしてLR縄文	2ないし3段の折り返し部分、内面口縁は横、胴部は縦方向のミガキ調整。	
図Ⅲ-53	P-38	2	IV群a類	P-38(覆土)×1	2	3	K14(IV)×1	d8	2	5	口縁部	やや良	小砂粒	LR縄文を横走させる	内面横ナデ調整、口唇部を1本の粘土紐で成形し、平坦面をとる
	K14(IV)×2	d2・8													

掲載図番号	構名	掲載番号	土器分類	図化した点数			残			総点数	部位	焼成等	目立った混入物	施文の特徴	備考・追加事項
				遺構(層位)・調査区(層位)×点数	遺物番号	点数	遺構(層位)・調査区(層位)×点数	遺物番号	点数						
図Ⅲ-54	P-39	1	Ⅳ群a類 白灰3式	P-39(覆土1上)×8	5(No.1)	10	P-39(覆土1上)×8	5(No.1)	41	51	口~胴部	良好	長石砂粒・ 海綿骨針	LR縄文施文後、ミガキ をそして沈線	口唇に平坦面、内面横方向のミガキとナデ調整
							H-16(覆土)×1	18							
							L11(Ⅳ)×1	d3							
							L12(Ⅳ)×3	a5・b2・c5							
							M10(Ⅳ)×3	e3・d3							
							M10(風倒木)×4	26							
							M11(Ⅲ)×1	a1							
							M11(Ⅳ)×2	8・b2							
							M11(風倒木)×2	5							
							M12(Ⅳ)×1	7							
							M13(攪乱)×1	1							
							M13(Ⅳ)×1	c1							
							N10(Ⅳ)×5	2・d3							
							N11(Ⅳ)×3	21							
			N14(Ⅳ)×1	b7											
			N23(Ⅳ)×1	17											
			O12(Ⅳ)×1	a3											
			O14(Ⅳ)×1	4											
			不明×1	不明											
図Ⅲ-54	P-39	2	Ⅲ群a類 内筒上層 a~b式	P-39(覆土1)×1	4	2	O8(Ⅳ)×1	10	1	3	口縁部	やや良	長石砂粒	lとrの縄線	内面ミガキ調整
図Ⅲ-54	P-39	3	Ⅲ群a類	P-39(覆土1)×1	4	1				1	胴部	やや良	角閃石小粒・ 繊維	LR縄文	再生土製品
図Ⅲ-54	P-39	4	Ⅲ群a類	P-39(覆土1)×6	4	6				6	胴~底部	やや良	長石砂粒・ 繊維・小石	LR縄文	再生土製品に関連
図Ⅲ-54	P-39	5	Ⅲ群a類	P-39(覆土1)×1	3	1				1	胴部	やや良	砂粒	LR縄文	再生土製品に関連
図Ⅲ-54	P-40	1	Ⅳ群a類	P-40(覆土1)×1	1	1				1	口縁部	やや良	角閃石小粒・ 海綿骨針・ 砂粒	LR縄文施文後、折り返し口縁部を成形する。波頂部には地文と同一原体と考えられる圧痕がある。	内面横方向のミガキ調整。波頂部には縄端による圧痕がある。
図Ⅲ-55	P-43	1	Ⅲ群a類	P-43(覆土1)×4	2	4				4	口縁部	良好	長石小砂粒	口唇にLR縄文の圧痕、結束第1種羽状縄文	口縁部横方向のミガキ、胴部縦方向のミガキ調整
図Ⅲ-59	P-55	1	Ⅲ群a類	P-55(覆土)×21	1	21	P-55(覆土)×20	1	23	44	口~胴部	良好	粒径5mm以上のパミス	LR絡糸体圧痕	水に漬かっていたためか摩滅著しい
図Ⅲ-60	P-56	3	Ⅳ群a類	P-56(覆土中位)×1	10	4	P-56(覆土中位)×1	10	14	18	口縁部	やや良	長石小砂粒・ 小石	LR縄文施文後沈線文	摩滅著しい
				H-6(覆土上位)×2	41		H-6(トレンチ)×2	42							
							H-6(覆土中位)×6	43							
							K12(Ⅳ)×1	c4							
							P8(Ⅳ)×2	5・b3							
							O10(Ⅳ)×2	a11・b10							
図Ⅲ-60	P-56	4	Ⅳ群a類	P-56(覆土上位)×1	7	1				1	口縁部	良好	長石小粒・ 角閃石小粒	口縁部に3本の縄線	縄線部は横ナデで無紋の上に縄線
図Ⅲ-60	P-56	5	Ⅳ群a類	P-56(覆土下位)×1	8	1				1	口縁部	やや良	砂粒、角閃石小粒	折り返し口縁上とその下にRL縄線	
図Ⅲ-60	P-56	6	Ⅳ群a類	P-56(覆土中位)×1	23	1				1	口縁部	良好	小砂粒	口唇にLR縄	折り返し風に2本の貼付帯が窪状に
図Ⅲ-60	P-56	7	Ⅳ群a類	P-56(覆土下位)×1	14	1				1	口縁部	やや良	砂粒	折り返し口縁上とその下にRL縄線	
図Ⅲ-60	P-56	8	Ⅳ群a類	P-56(覆土下位)×1	8	1				1	口~胴部	やや良	砂粒、小石	RL縄文	屈曲する口縁部は頸部に折り返し風の粘土の継ぎ目
図Ⅲ-61	P-56	9	Ⅳ群a類	P-56(覆土上位)×1	21	2				2	胴部	やや良	砂粒、角閃石小粒	RL縄文が横走するように施文	内面縦方向のミガキ調整
図Ⅲ-61	P-56	10・ 15・ 16	Ⅳ群a類	P-56(覆土)×6	25	7	P-56(覆土上位)×14	7	39	46	胴部	やや良	砂粒、小石	RL縄文を横方向に施文	内面ナデ調整15と16は再生土製品
							P-56(覆土下位)×1	8							
							P-56(覆土中位)×4	23							
							P-56(覆土)×18	25							
							H-11(覆土下位)×1	18							
							K9(Ⅳ)×1	b4							
図Ⅲ-61	P-56	11	Ⅳ群a類	P-56(覆土中位)×1	23	1				1	胴部	やや良	砂粒	結束のあるRL縄文を縦方向に施文	再生土製品
図Ⅲ-61	P-56	12	Ⅳ群a類	P-56(覆土中位)×1	10	1	P-56・H-6から同一個体			1	胴部	やや良	長石小砂粒	LR縄文施文後沈線文	再生土製品(P-56の14)
図Ⅲ-61	P-56	13	Ⅲ群a類	P-56(覆土上位)×1	20	1				1	胴部	やや良	小砂粒、角閃石小粒	節の大きいRL縄文	内面調整不明 縦方向
図Ⅲ-61	P-56	14	Ⅳ群a類	P-56(覆土中位)×1	15	1				1	胴部	良好	長石の小砂粒	穿孔	再生土製品。穿孔は再生時のものか
図Ⅲ-61	P-56	17	Ⅲ群a類	P-56(覆土上位)×5	20	5				5	底部	やや良	小砂粒、角閃石小粒	LR縄文	内面調整不明 底面際横方向、胴部側は縦方向
図Ⅲ-61	P-56	18	Ⅳ群a類	P-56(覆土中位)×1	10	4				4	底部	やや良	砂粒	ケズリのようなミガキ調整	微妙な上げ底
図Ⅲ-63	P-63	1	Ⅳ群a類	P-63(覆土1)×4	15・1・3	8	P-63(覆土1)×1	10	1	9	口~胴~底部	やや良	長石砂粒と 角閃石小粒	折り返し口縁	LR縄文を横走するように施文、底面微妙に張り出す。内面は縦方向のミガキ調整
				P-63(覆土)×2	5・8										
				P-63(覆土2)×1	17										
				I16(Ⅳ)×1	28										
図Ⅲ-63	P-63	2	Ⅳ群a類	P-63(覆土3)×1	18	1				1	胴部	良好	角閃石砂粒		LR縄文を横走するように施文、内面は縦方向のミガキ調整
図Ⅲ-64	P-64	1	Ⅳ群a類	P-64(覆土1)×4	1	4				4	胴~底部	やや良	繊維・長石小粒	底面ナデ	
図Ⅲ-64	P-71	1	Ⅳ群a類	P-71(覆土1)×7	12	7				7	口縁部	やや良	長石砂粒	口縁部とその直下でRL縄文の施文の向きを変える	口縁部は横方向、その直下からは縦方向に施文
図Ⅲ-64	P-71	2	Ⅳ群a類	P-71(覆土1)×1	1	1				1	胴部	やや良	長石砂粒	外側について、輪積み痕跡が明瞭	縦方向にRL縄文を施文、再生土製品
図Ⅲ-64	P-71	3	Ⅳ群a類	P-71(覆土1)×4	4・5・7・9	4				4	胴部	やや良	長石粒	RL縄による絡糸体が施される	縦方向にRL絡糸体施文
図Ⅲ-66	P-74	1	Ⅳ群a類	P-74(覆土1)×1	14	1				1	口縁部	やや良	長石砂粒	口縁部とその直下でRL縄文の施文の向きを変える	LR縄文を施した後、沈線およびLR縄文。
図Ⅲ-66	P-74	2	Ⅳ群a類	P-74(覆土1)×1	11	1				1	胴部	やや良		LR縄文を施した後、沈線文	内面は縦方向にミガキ調整 補充式か
図Ⅲ-66	P-75	1	Ⅳ群a類	P-75(覆土2)×2	2	8				8	口縁部	やや良	繊維	LR縄文が横走するように施文	口縁部に2本の縄線、内側器形
図Ⅲ-66	P-75	2	Ⅳ群a類	P-75(覆土2)×1	1	3	F-29-2と同一			3	胴部	良好	長石砂粒・ 角閃石小粒	内面ナデ調整 外面ミガキ調整	大津式ないしは壺形の土器
図Ⅲ-67	P-87	1	Ⅲ群b1類	P-87(覆土)×2	3	14	M10(風倒木)×1	19	2	16	口~胴部	やや良	小砂粒角閃石小粒混じり	口縁部には粘土紐による渦巻き文	大木8b式
				L17(Ⅳ)×1	18										
				M10(Ⅳ)×5	4・5・7										
				M11(Ⅳ)×1	30										
				M15(Ⅳ)×1	25										
				M17(Ⅳ)×1	74										
				O18(Ⅲ)×1	4										
				P18(Ⅲ)×1	1										
				不明×1	1										



掲載図番号	構名	掲載番号	土器分類	図化した点数			残			総点数	部位	焼成等	目立った混入物	施文の特徴	備考・追加事項	
				遺構(層位)・調査区(層位)×点数	遺物番号	点数	遺構(層位)・調査区(層位)×点数	遺物番号	点数							
図Ⅲ-67	P-87	2	Ⅲ群a類	P-87(覆土)×1	4	1				1	口縁部	やや良 繊維・角閃石の小粒混じり	口縁部に刻み			
図Ⅲ-67	P-87	3	Ⅲ群a類	P-87(覆土)×3	1・4	3				3	底部	やや良 繊維・小石混じり	やや張り出す底部	内面円念の磨き調整		
図Ⅲ-68	P-95	1	Ⅳ群a類	P-95(覆土5)×1	5	4	I15(Ⅳ)×2	41	5	4	口縁部	やや良 長石砂粒・角閃石小粒	LR縄文を横方向に施文	折り返し口縁、内甕器形		
				I15(Ⅳ)×1	30		J15(Ⅳ)×1	28								
				J15(Ⅳ)×1	22		K15(Ⅳ)×2	19・20								
				K15(Ⅳ)×1	12											
図Ⅲ-78	F-29	1	Ⅳ群a類	F-29(覆土2)×2	13	2				2	胴部	良好 長石砂粒・小石	LR縄文施文後ナデで沈線	大津式ないしは壺形の土器		
図Ⅲ-78	F-29	2	Ⅳ群a類	F-29(覆土1)×1 I19(Ⅳ)×1	14 8	2	P-75-2と同一			2	胴部	良好 長石砂粒・角閃石小粒	内面ナデ調整外面ミガキ調整	大津式ないしは壺形の土器		
図Ⅲ-78	F-29	3	Ⅳ群a類	F-29(覆土1)×1	11	1				1	底部	良好 長石砂粒・角閃石小粒	底面ナデ			
図Ⅲ-79	F-32	1	Ⅳ群a類	F-32(検出面)×10 N15(Ⅳ)×2	1 31・d2	12	F-32(検出面)×12	1	12	24	胴部	良好 長石小石・メノウ小石	縦方向のミガキ	内面は縦方向のミガキ調整たか成形時の指頭圧痕が残る		
図Ⅲ-83	包含層(F-36)旧H-6	6	Ⅳ群a類	L12(Ⅳ)×1	d3	15	H-5(覆土上位)×13	4・14・34	H-5(覆土上位)×1	16	35	50	口~胴部	やや良 長石砂粒	Ri給条体による地文を右下かりに施文、口縁部はより強い傾斜で施文	内面は口縁部については縦方向、胴部については縦方向のミガキ調整
							K12(Ⅳ)×1	b8	H-7(覆土上位)×1	82						
									H-11(覆土上位)×1	6						
									I16(Ⅲ)×1	1						
									I16(Ⅳ)×1	4						
									J10(Ⅳ)×1	3						
									J11(Ⅳ)×1	c23						
									K10(Ⅳ)×3	13・a7						
									K12(Ⅳ)×2	35						
									L8(Ⅳ)×1	5						
									L12(Ⅳ)×2	d14						
									L12(攪乱)×3	43						
									M9(Ⅳ)×1	b15						
									M11(Ⅳ)×1	d2						
									M14(Ⅳ)×1	6						
									M19(Ⅲ)×1	2						
									N10(Ⅳ)×2	2・c3						
									N16(Ⅳ)×2	18						
									O10(Ⅳ)×6	b18・c14・d5・d7						
									O12(Ⅳ)×1	d9						
		O18(Ⅲ)×1	4													
		P8(Ⅳ)×1	a10													
図Ⅲ-102	SP-1	2	Ⅳ群a類	SP-1(覆土)×1	1	1				1	胴部	やや良 角閃石小粒	LR縄文を横走させる	内面は縦方向のミガキ調整たか成形時の輪痕や指頭圧痕が残る		
図Ⅲ-102	SP-6	3	Ⅳ群a類	SP-6(覆土)×1	2	1				1	胴部	やや良 長石砂粒	RL縄文施文後隆帯付し、上にRL縄文	再生土製品		
図Ⅲ-102	SP-8	4	Ⅲ群a類	SP-8(覆土)×1	111	1				1	胴部	やや良 長石砂粒	RL縄文施文	再生土製品		
図Ⅲ-102	SP-8	5	Ⅲ群a類	SP-8(覆土)×1	111	1				1	胴部	やや良 長石砂粒	LR縄文施文	再生土製品		
図Ⅲ-102	SP-8	6	Ⅲ群a類	SP-8(覆土)×1	111	1				1	胴部	やや良 長石砂粒	RL縄文施文	再生土製品		
図Ⅲ-102	SP-20	7	Ⅳ群a類	SP-20(覆土)×1	1	1				1	胴部	良好 砂粒	LR縄文施文	再生土製品、内面横方向のミガキ調整		
図Ⅲ-102	SP-79	8	Ⅳ群a類	SP-79(覆土)×1	1	1				1	底部	やや良 長石小石	内面ミガキ調整外面ナデ調整	底径11.8cm		
図Ⅲ-102	SP-86	9	Ⅳ群a類	SP-86(覆土)×8	1	8	SP-86(覆土)×5	1	5	13	胴部	やや良 長石砂粒	LR縄文を縦方向に施す	内面縦方向のミガキ調整		
図Ⅲ-102	SP-97	10	Ⅳ群a類	SP-97(覆土)×9	1・2	9	SP-97(覆土)×4	1・2	4	13	口~胴部	やや良 小砂粒	折り返し口縁部は無紋、LR縄文を縦方向に施文	外面について胴部上半部にはよく煤が付着、内面は使用によるものか摩滅著しい		
図Ⅲ-102	SP-108	11	Ⅳ群a類	SP-108(覆土)×1	3	1				1	口縁部	良好 角閃石小粒	LR縄文を縦方向に施文後、ナデ調整によって無紋地にした後、LR縄文	内面縦方向のナデ調整だが、輪痕残る、口唇部に平坦面をとる		
図Ⅲ-102	SP-141	12	Ⅳ群a類	SP-141(覆土)×1	1	1				1	底部	良好 角閃石小粒	RL縄文地文			
図Ⅲ-102	SP-201	14	Ⅳ群a類	SP-201(覆土)×1	1	1				1	口縁部	やや良 砂粒	RL縄文施文後沈線およびミガキ調整	内面部分剥落、涌元Ⅱ式		
図Ⅲ-102	SP-224	15	Ⅳ群a類	SP-224(覆土)×1	1	1				1	胴部	やや良 角閃石小粒	LR縄文地文	再生土製品、内面縦方向のミガキ調整、中央部に穿孔を試みた痕跡		
図Ⅲ-102	SP-226	16	Ⅳ群a類	SP-226(覆土)×1	1	1				1	胴部	やや良 小石	LR縄文を縦方向に施す	縄文施文後板ナデ		
図Ⅲ-102	SP-246	17	Ⅳ群a類	SP-246(覆土)×1	1	1				1	口縁部	良好 角閃石小粒	LR縄文施文後籜状の貼付帯	内面横方向のナデ調整		
図Ⅲ-102	SP-269	19	Ⅳ群a類	SP-269(覆土)×1	1	1				1	底部	良好 角閃石小粒・長石砂粒	内外面ミガキ調整			
図Ⅲ-102	SP-289	18	Ⅳ群a類	SP-289(覆土)×1	1	2	K15(Ⅳ)×1	39	1	3	口縁部	やや良 長石砂粒	LR縄文	外面ナデ調整後にLR縄文	口唇部に平坦面をとる	
				K15(Ⅳ)×1	39											

表Ⅲ－6 遺構出土掲載石器・石製品一覧

図番号	遺構名	掲載番号	遺物No.	層位	器種名	素材	縦(mm)	横(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
図Ⅲ-5	H-6	26	50	覆土下	スクレイパー	黒曜石	22.8	12.4	3.8	0.9	
図Ⅲ-5	H-6	27	26	覆土上	つまみ付きナイフ	真岩	12.0	52.0	7.0	5.1	
図Ⅲ-5	H-6	28	11	覆土下	スクレイパー	真岩	67.5	30.3	13.0	24.5	
図Ⅲ-5	H-6	29	68	覆土下	偏平打製石器	安山岩	91.1	115.6	26.0	390.0	
図Ⅲ-5	H-6	30	69	覆土中	偏平打製石器	安山岩	80.0	112.0	24.0	200.0	
図Ⅲ-5	H-6	31	16	覆土下	北海道式石冠	安山岩	87.0	121.0	54.0	750.0	
図Ⅲ-5	H-6	32	15	覆土床	たたき石	安山岩	185.7	95.0	69.0	1,790.0	
図Ⅲ-5	H-6	33	95	覆土中	たたき石	泥岩	57.0	45.0	41.0	132.9	
図Ⅲ-5	H-6	34	19	覆土床面	砥石	凝灰岩	196.0	179.5	89.7	2,550.0	
図Ⅲ-5	H-6	35	20	覆土床面	石皿・台石片	凝灰岩	176.7	141.0	58.0	2,170.0	
図Ⅲ-8	H-7	12	49	覆土上	石鏃	メノウ	33.5	16.0	8.0	3.1	
図Ⅲ-8	H-7	13	37	覆土中	石鏃	真岩	44.0	15.0	4.6	2.6	
図Ⅲ-8	H-7	14	60	ベルト上面	偏平打製石器	安山岩	61.0	113.0	33.0	350.0	
図Ⅲ-8	H-7	15	83	覆土下	たたき石	安山岩	(80.0)	(41.0)	(58.0)	(200.0)	
図Ⅲ-8	H-7	16	70	ベルト中	砥石	凝灰岩	(127.0)	(169.0)	42.0	1,350.0	
図Ⅲ-8	H-7	17	HF1-3	HF-1覆土	台石	安山岩	182.0	240.0	60.5	3,040.0	
図Ⅲ-9	H-11	5	7	覆土下	スクレイパー	流紋岩	59.0	36.5	14.0	23.5	
図Ⅲ-9	H-11	6	12	覆土下	たたき石	安山岩	134.0	70.0	57.0	690.0	
図Ⅲ-12	H-12	10	27	覆土	Rフレイク	チャート	40.0	37.0	10.0	11.8	
図Ⅲ-12	H-12	11	25	覆土中	スクレイパー	真岩	75.0	37.0	9.0	29.5	
図Ⅲ-12	H-12	12	4	覆土上	石斧	緑色泥岩	(89.0)	42.0	19.0	(120.0)	
図Ⅲ-12	H-12	13	3	HP-1覆土	石斧	緑色泥岩	101.0	53.0	28.0	200.0	
図Ⅲ-12	H-12	14	42	覆土	台石	安山岩	156.0	273.0	60.0	(3,400.0)	
図Ⅲ-12	H-12	15	38	覆土	石製品(石棒)	安山岩	307.0	122.0	120.0	6,500.0	
図Ⅲ-12	H-12	16	39	覆土	石製品(石棒)	安山岩	306.0	132.0	110.0	7,500.0	
図Ⅲ-12	H-12	17	HP2-1	HP2覆土	石製品(石棒)	安山岩	211.0	72.0	66.0	1,740.0	
図Ⅲ-12	H-12	18	40	覆土	台石(被熱)	安山岩	332.0	332.0	125.0	19,000.0	
図Ⅲ-12	H-12	19	45	覆土	石皿	安山岩	55.8	38.8	16.3	40,000.0	
図Ⅲ-24	H-15	43	H-10-40	覆土中	つまみ付きナイフ	真岩	(50.0)	46.0	20.0	(30.6)	
図Ⅲ-24	H-15	44	H-10-126	覆土下	つまみ付きナイフ	真岩	74.5	38.0	15.0	35.5	
図Ⅲ-24	H-15	45	H-15-167	床面	つまみ付きナイフ	真岩	75.3	30.8	9.5	18.4	
図Ⅲ-24	H-15	46	H-10-94	覆土中	つまみ付きナイフ	真岩	76.0	36.0	7.5	13.0	
図Ⅲ-24	H-15	47	H-15-59	覆土中	石鏃	真岩	53.0	51.5	10.2	20.5	
図Ⅲ-24	H-15	48	H-10-109	覆土下	石槍またはナイフ	黒曜石	(62.0)	39.0	15.0	(38.0)	
図Ⅲ-24	H-15	49	H-15-5	覆土下	スクレイパー	真岩	(72.0)	35.0	16.7	(41.4)	
図Ⅲ-24	H-15	49	H-15-5	覆土下	スクレイパー	真岩	(72.0)	35.0	16.7	(41.4)	
図Ⅲ-24	H-15	50	H-15-166	床面	スクレイパー	真岩	63.0	23.0	11.1	15.6	
図Ⅲ-24	H-15	51	H-10-105	覆土上	スクレイパー	真岩	70.0	50.0	17.0	60.7	
図Ⅲ-24	H-15	52	H-10-39	覆土中	スクレイパー	真岩	(58.0)	(30.0)	(15.5)	(25.3)	
図Ⅲ-24	H-15	53	H-10-91	覆土上	スクレイパー	真岩	71.0	36.0	13.0	36.4	
図Ⅲ-24	H-15	54	H-15-33	覆土下	スクレイパー	真岩	63.0	47.0	16.1	42.0	
図Ⅲ-24	H-15	55	H-15-171	覆土下	スクレイパー	真岩	63.0	48.5	12.4	28.4	
図Ⅲ-24	H-15	56	H-15-92	覆土下	スクレイパー	真岩	61.5	78.8	13.1	64.6	
図Ⅲ-24	H-15	57	H-15-165	床面	スクレイパー	メノウ	32.0	44.2	10.6	11.8	
図Ⅲ-25	H-15	58	H-15-62	覆土下	ピエス・エスキュー	黒曜石	19.5	21.0	7.3	3.0	
図Ⅲ-25	H-15	59	H-15-163	床面	石核	真岩	50.3	42.3	19.0	16.3	
図Ⅲ-25	H-15	60	H-15-65	覆土下	石斧	緑色泥岩	(66.7)	(42.0)	(13.1)	(56.9)	
図Ⅲ-25	H-15	61	H-15-66	覆土下	石斧	安山岩	(123.0)	(44.0)	19.0	(170.0)	
図Ⅲ-25	H-15	62	H-15-146	床	北海道式石冠	安山岩	(93.0)	(55.0)	(45.0)	(240.0)	
図Ⅲ-25	H-15	63	H-15-8	覆土下	偏平打製石器(北海道式石冠的)	安山岩	(80.0)	(95.0)	(72.0)	(590.0)	
図Ⅲ-25	H-15	64	H-15-122	床面	北海道式石冠	安山岩	126.3	171.5	70.0	1,860.0	
図Ⅲ-25	H-15	65	H-15-144	床面	偏平打製石器(未製品)	安山岩	73.0	110.0	29.0	330.0	
図Ⅲ-25	H-15	66	H-10-115	覆土下	偏平打製石器	安山岩	(73.5)	(61.0)	(38.0)	(220.0)	
図Ⅲ-25	H-15	67	H-15-6	覆土中	偏平打製石器	安山岩	83.0	162.0	47.0	790.0	
図Ⅲ-26	H-15	68	H-15-19	覆土中	偏平打製石器	安山岩	95.0	(106.0)	29.0	(320.0)	
図Ⅲ-26	H-15	69	H-10-3	覆土下	偏平打製石器	安山岩	68.0	138.0	24.0	280.0	
図Ⅲ-26	H-15	70	H-10-82	覆土下	偏平打製石器	安山岩	60.0	125.0	19.0	160.0	
図Ⅲ-26	H-15	71	H-15-120	床面	偏平打製石器	安山岩	86.6	145.0	333.0	600.0	
図Ⅲ-26	H-15	72	H-15-123	床面	偏平打製石器	安山岩	105.8	135.0	30.0	490.0	
図Ⅲ-26	H-15	73	H-15-103	覆土中	偏平打製石器	安山岩	100.0	150.0	26.0	460.0	
図Ⅲ-26	H-15	74	H-15-192	床	偏平打製石器	安山岩	119.0	(126.0)	20.0	(330.0)	
図Ⅲ-26	H-15	75	H-15-154	覆土中	偏平打製石器	安山岩	(104.0)	(102.0)	(23.8)	(300.0)	
図Ⅲ-26	H-15	76	H-15-21	覆土上	偏平打製石器	安山岩	71.0	145.0	36.0	510.0	
図Ⅲ-26	H-15	77	H-15-7	覆土下	偏平打製石器	安山岩	106.0	126.7	26.0	450.0	
図Ⅲ-26	H-15	78	H-15-25	覆土下	偏平打製石器(被熱)	安山岩	(93.0)	(76.0)	(19.0)	(175.0)	
図Ⅲ-26	H-15	78	H-15-25	覆土下	偏平打製石器	安山岩	91.0	164.0	21.7	365.0	H-10-138(床面)と接合(正面観右)
図Ⅲ-26	H-15	78	H-15-138	床面	偏平打製石器	安山岩	(89.0)	(79.0)	(22.0)	(190.0)	
図Ⅲ-27	H-15	79	H-15-151	床面	偏平打製石器	安山岩	127.7	154.0	22.0	523.0	
図Ⅲ-27	H-15	80	H-15-111	覆土下	偏平打製石器	安山岩	75.0	152.0	17.0	280.0	
図Ⅲ-27	H-15	81	H-15-20	覆土上	たたき石	安山岩	179.0	114.0	47.0	1,240.0	
図Ⅲ-27	H-15	82	H-15-99	床面	たたき石	安山岩	103.0	136.0	54.7	1,170.0	
図Ⅲ-27	H-15	83	H-15-56	覆土上	たたき石	安山岩	(106.0)	(60.0)	(48.0)	(230.0)	
図Ⅲ-27	H-15	84	H-15-143	床面	たたき石	安山岩	140.0	48.0	46.0	360.0	
図Ⅲ-27	H-15	85	H-15-128	床面	石皿	安山岩	31.3	22.8	9.7	9,500.0	
図Ⅲ-27	H-15	86	H-15-127	床面	台石	安山岩	(30.4)	26.6	11.1	12,000.0	
図Ⅲ-27	H-15	87	H-10-70	床面	台石	安山岩	347.0	268.0	101.0	13,000.0	
図Ⅲ-27	H-15	88	H-15-23	覆土中	石皿	安山岩	(334.0)	(277.0)	(126.0)	(17,500.0)	被熱
図Ⅲ-30	H-16	8	14	覆土	つまみ付きナイフ	真岩	72.0	37.5	15.0	28.5	
図Ⅲ-30	H-16	9	21	床	スクレイパー	メノウ	57.0	26.0	11.3	17.7	
図Ⅲ-30	H-16	10	4	覆土下	スクレイパー	メノウ	62.5	34.5	15.0	29.3	
図Ⅲ-30	H-16	11	3	覆土下	スクレイパー	メノウ	70.0	50.0	21.0	54.4	
図Ⅲ-30	H-16	12	11	覆土	スクレイパー	真岩	52.5	33.5	11.0	17.4	
図Ⅲ-30	H-16	13	6	覆土中	偏平打製石器	安山岩	103.0	169.0	29.0	520.0	
図Ⅲ-30	H-16	14	2	覆土下	偏平打製石器	安山岩	94.0	168.0	30.0	590.0	
図Ⅲ-30	H-16	15	1	覆土下	偏平打製石器	安山岩	100.0	159.0	40.0	780.0	
図Ⅲ-30	H-16	16	22	床	偏平打製石器	安山岩	72.0	140.0	30.0	500.0	
図Ⅲ-30	H-16	17	24	床	偏平打製石器	安山岩	95.0	147.0	35.0	620.0	
図Ⅲ-33	H-18	7	27	炉石胎の立石	たたき石	安山岩	210.0	75.8	51.7	1,155.0	

図番号	遺構名	掲載 番号	遺物 No.	層位	器種名	素材	縦(mm)	横(mm)	厚さ (mm)	重さ(g)	備考
図Ⅲ-33	H-18	8	16		台石	安山岩	300.0	223.0	100.0	9,500.0	被熱
図Ⅲ-33	H-18	9	15	立石3 1/2	石皿	安山岩	462.0	254.0	99.0	17,500.0	
図Ⅲ-41	H-20	24	191	覆土1	つまみ付きナイフ	頁岩	96.0	33.0	8.6	29.8	
図Ⅲ-41	H-20	25	139	覆土1	スクレイパー	頁岩	46.0	31.0	7.0	8.2	
図Ⅲ-41	H-20	26	153	覆土最上部	スクレイパー	頁岩	64.0	32.0	11.0	9.9	
図Ⅲ-41	H-20	27	135①	覆土最上部	スクレイパー	頁岩	70.0	45.0	15.6	28.8	
図Ⅲ-41	H-20	28	63	覆土1	石斧	緑色泥岩	82.3	40.4	8.9	46.9	
図Ⅲ-41	H-20	29	38	覆土2	たたき石	安山岩	128.0	114.0	25.0	600.0	
図Ⅲ-41	H-20	30	40	覆土2	たたき石	安山岩	196.0	90.8	65.5	980.0	
図Ⅲ-41	H-20	31	188	覆土最上部	たたき石	安山岩	177.5	105.5	49.5	1,270.0	
図Ⅲ-41	H-20	32	37	覆土2	たたき石	安山岩	210.5	101.7	60.0	1,555.0	
図Ⅲ-43	P-2	5	1	覆土上	偏平打製石器	安山岩	86.0	(77.0)	18.0	(165.0)	
図Ⅲ-43	P-2	6	15	覆土	石皿	凝灰岩	330.0	225.0	79.5	6,500.0	
図Ⅲ-43	P-2	7	16	覆土	石皿	安山岩	369.0	271.9	131.0	17,500.0	
図Ⅲ-43	P-2	8	14	覆土	台石	安山岩	346.5	255.0	117.0	11,500.0	
図Ⅲ-44	P-9	5	12	覆土中	偏平打製石器	安山岩	61.0	131.0	25.3	290.0	
図Ⅲ-44	P-9	6	14	覆土下	たたき石	安山岩	80.0	67.0	62.0	440.0	
図Ⅲ-45	P-13	4	15	覆土上	北海道式石冠	安山岩	(87.0)	(78.0)	(52.0)	(390.0)	
図Ⅲ-45	P-13	5	19	覆土下	北海道式石冠未成品	安山岩	93.0	116.0	61.0	720.0	
図Ⅲ-47	P-20	5	2	覆土中	北海道式石冠未成品	安山岩	79.0	105.0	42.0	490.0	
図Ⅲ-47	P-21	1	2	覆土	偏平打製石器	安山岩	98.0	144.0	27.0	440.0	
図Ⅲ-48	P-23	2	5	覆土	台石	安山岩	314.7	204.0	105.0	10,000.0	
図Ⅲ-50	P-28	4	6	覆土	北海道式石冠	安山岩	122.0	116.0	40.0	620.0	
図Ⅲ-50	P-28	5	18	覆土上部	北海道式石冠	安山岩	83.0	115.0	70.0	1,050.0	
図Ⅲ-50	P-28	6	24	覆土	北海道式石冠	安山岩	106.0	135.0	91.0	14,200.0	
図Ⅲ-50	P-28	7	19	覆土中	たたき石	安山岩	79.0	47.0	34.0	170.0	
図Ⅲ-50	P-28	8	21-②	覆土中	たたき石	凝灰岩	52.0	143.0	19.0	190.0	
図Ⅲ-50	P-28	9	13	覆土	たたき石	安山岩	225.4	109.0	68.5	2,710.0	
図Ⅲ-50	P-28	10	22	覆土	台石	安山岩	168.0	128.0	122.0	2,770.0	
図Ⅲ-50	P-28	11	27	覆土	石皿	安山岩	316.5	282.7	133.0	17,500.0	
図Ⅲ-51	P-30	1	1	覆土1	台石片(被熱)	安山岩	(260.0)	(210.0)	(93.0)	(6,500.0)	
図Ⅲ-52	P-33	1	2	覆土	スクレイパー	頁岩	65.4	31.3	14.2	23.6	
図Ⅲ-52	P-34	2	9	覆土6	偏平打製石器	安山岩	87.0	141.0	30.1	440.0	
図Ⅲ-52	P-34	3	4	覆土1	石皿	安山岩	36.2	25.3	9.8	15,000.0	5(No.9) (覆土1) と接合
図Ⅲ-54	P-39	6	1	覆土1	たたき石	安山岩	113.0	53.0	37.0	310.0	
図Ⅲ-55	P-43	2	6	覆土1	偏平打製石器	安山岩	90.0	118.0	16.0	280.0	
図Ⅲ-55	P-43	3	7	覆土1	偏平打製石器	安山岩	100.0	152.0	32.5	630.0	
図Ⅲ-56	P-43	4	8-①	覆土1	北海道式石冠	安山岩	87.5	(94.0)	55.0	(550.0)	
図Ⅲ-56	P-43	5	5	覆土	たたき石	安山岩	104.0	104.0	51.0	960.0	
図Ⅲ-56	P-44	1	3	覆土	スクレイパー	頁岩	44.8	47.2	10.3	19.4	
図Ⅲ-56	P-44	2	4	覆土	スクレイパー	メノウ	57.8	43.0	13.5	25.7	
図Ⅲ-57	P-48	1	4	覆土下	スクレイパー	頁岩	80.5	53.0	12.9	39.0	
図Ⅲ-57	P-48	2	5	覆土上	台石片	安山岩	213.0	204.0	108.0	5,500.0	
図Ⅲ-58	P-50	1	3	覆土	スクレイパー	頁岩	69.5	41.4	9.1	22.3	
図Ⅲ-58	P-50	2	4	覆土	北海道式石冠	安山岩	72.0	118.0	55.0	680.0	
図Ⅲ-58	P-50	3	5	覆土	偏平打製石器	安山岩	88.0	149.0	27.0	450.0	
図Ⅲ-58	P-51	1	1	城底部	北海道式石冠	安山岩	102.0	126.0	66.0	1,100.0	
図Ⅲ-61	P-56	19	2	覆土上	石鏃	頁岩	53.8	9.7	5.4	1.5	
図Ⅲ-61	P-56	20	4	覆土上	スクレイパー	メノウ	63.0	33.5	18.0	32.2	
図Ⅲ-61	P-56	21	3	覆土上	スクレイパー	頁岩	(26.0)	(23.0)	(7.0)	(4.6)	
図Ⅲ-61	P-56	22	16	覆土中	偏平打製石器	安山岩	65.0	138.0	31.0	420.0	
図Ⅲ-61	P-56	23	12	覆土下	石皿片	凝灰岩	192.0	145.0	118.0	369.0	
図Ⅲ-63	P-63	3	6	覆土1	たたき石	安山岩	231.5	109.3	85.6	2,260.0	
図Ⅲ-64	P-71	4	18	覆土	たたき石	安山岩	141.3	102.6	68.8	1,190.0	
図Ⅲ-65	P-73	1	2	覆土中	たたき石	安山岩	250.0	97.0	65.0	2,180.0	
図Ⅲ-67	P-87	4	5	覆土1	北海道式石冠	安山岩	101.5	111.0	60.0	980.0	
図Ⅲ-70	F-10	1	5	炉石(覆土)	台石	安山岩	368.0	337.5	72.0	13,500.0	被熱
図Ⅲ-71	F-11	1	2	炉石(覆土)	石皿	安山岩	(272.0)	237.0	84.0	(8,500.0)	
図Ⅲ-71	F-11	2	3	炉石(覆土)	台石	安山岩	(266.0)	222.0	109.0	(9,500.0)	被熱
図Ⅲ-72	F-16	1	1	覆土	スクレイパー	頁岩	68.0	43.0	9.0	16.0	
図Ⅲ-73	F-19	1	6	覆土	偏平打製石器	安山岩	112.5	138.0	40.0	1,660.0	炉石
図Ⅲ-73	F-19	2	5	覆土	たたき石	安山岩	134.0	82.0	47.0	695.0	炉石
図Ⅲ-73	F-19	3	4	覆土	たたき石	安山岩	158.5	115.0	60.0	1,575.0	炉石
図Ⅲ-73	F-19	4	2	覆土	敲打痕のある礫	安山岩	281.0	176.5	55.0	3,485.0	炉石 F-25-4(No.3)(覆土)と接合
図Ⅲ-73	F-19	5	3	覆土	たたき石	安山岩	246.5	110.0	76.0	2,365.0	炉石
図Ⅲ-74	F-25	1	2	覆土	砥石	安山岩	150.0	134.0	44.5	1,480.0	
図Ⅲ-74	F-25	2	7	覆土	偏平打製石器	安山岩	77.0	179.0	40.0	800.0	
図Ⅲ-77	F-28	3	14	構築面	砥石	凝灰岩	(263.0)	120.0	24.5	(940.0)	P19区-21(IV(2))と接合した。
図Ⅲ-77	F-28	4	17	覆土3	礫(立石)	安山岩	353.0	170.0	13.0	10.5	敲打痕あり
図Ⅲ-78	F-28	5	12	覆土2	台石	凝灰岩	263.0	232.0	75.0	7,000.0	被熱
図Ⅲ-78	F-28	6	3	炉石(覆土2)	石皿	安山岩	375.0	236.0	138.0	1,700.0	
図Ⅲ-79	F-29	4	7	覆土	石皿	安山岩	312.0	257.0	45.0	4,400.0	被熱
図Ⅲ-79	F-29	5	8	覆土	台石	安山岩	49.5	21.0	10.4	21,000.0	被熱
図Ⅲ-84	F-36	7	H-5-31	トレンチ	台石片	凝灰岩	(60.0)	(105.0)	25.0	(180.0)	
図Ⅲ-84	F-36	8	H-5-26	トレンチ	台石片(被熱)	安山岩	(81.0)	(75.0)	(44.0)	(400.0)	
図Ⅲ-84	F-36	9	H-5-62	不明	台石	安山岩	255.0	(158.0)	58.0	2,930.0	
図Ⅲ-84	F-36	10	H-5-51	覆土上	台石	安山岩	444.0	(188.0)	106.0	(8,500.0)	
図Ⅲ-84	F-36	11	H-5-1	覆土	台石	安山岩	462.0	225.0	99.0	17,000.0	被熱
図Ⅲ-85	F-37	1	H-14-2	覆土	台石片	安山岩	(200.0)	(244.0)	(100.0)	(6,500.0)	
図Ⅲ-85	F-37	2	H-14-4	覆土	石皿	安山岩	(308.0)	(228.0)	(107.0)	(11,000.0)	
図Ⅲ-103	SP-261	20	1	覆土	石鏃	黒曜石	41.0	13.5	6.0	2.0	
図Ⅲ-103	SP-312	21	1	覆土	スクレイパー	頁岩	63.0	65.5	16.0	46.7	
図Ⅲ-103	SP-2	22	1	覆土	石斧	緑色泥岩	76.0	34.0	14.0	57.0	
図Ⅲ-103	SP-55	23	1	覆土中	擦り石(北海道式石冠)	安山岩	84.0	109.0	56.0	670.0	
図Ⅲ-103	SP-181	24	1	覆土(最上部)	偏平打製石器	安山岩	80.5	136.3	26.0	350.5	
図Ⅲ-103	SP-59	25	1	覆土	たたき石	安山岩	53.0	50.0	51.0	180.0	
図Ⅲ-103	SP-235	26	1	覆土	台石	安山岩	(200.0)	(168.0)	(89.0)	(2,620.0)	
図Ⅲ-103	SP-225	27	3	覆土	台石	安山岩	328.0	233.0	114.0	14,500.0	
図Ⅲ-103	SP-290	28	1	覆土	台石	安山岩	318.2	221.0	155.0	12,000.0	

表IV-4 包含層出土土器一覽

	Ⅱ群 b類	Ⅲ群 a類	Ⅲ群 b1類	Ⅲ群 b2類	Ⅲ群 b3類	Ⅲ群 b類	Ⅳ群 a類	Ⅳ群 b類	Ⅵ群	分類不 明土器	土製品	合 計
I												
Ⅲ	20	689	238	1		1	13079	88	17	15		14148
Ⅳ	653	9261	487	40	6	92	58744	532	65	41	4	69925
Ⅳ(1)	36	583	1			1	16650	4	6			17281
Ⅳ(2)	35	366	6				12387	3			2	12799
Ⅳ(3)	12	311	1	4		2	8534					8864
Ⅳ(4)	11	212	1				4708	3				4935
Ⅳ(5)	30	123				2	2022	1		10	1	2189
Ⅳ(6)	1	39					186					226
Ⅳ(7)							16					16
Ⅳ(上)	5	14				1	994					1014
Ⅳ(中)		18					129					147
Ⅳ(下)	10	164	1				2977					3152
Ⅳ(柱)	1	26					755		1			783
V	18	808	2				567					1395
B調跡		4					46					50
攪乱	6	60	4				896	1				967
木根	10	224	26			16	1068	21				1365
風倒木	11	493	17	1		7	2757	50		9		3345
排土	26	121	5	1			1635	4	125			1917
表探		2					26					28
不明	2	96	1				579	1				679
合 計	887	13614	790	47	6	122	128755	708	214	75	7	145225

再生土製品

	Ⅱ群b類 再生土製品	Ⅲ群a類 再生土製品	Ⅳ群a類 再生土製品	Ⅵ群 再生土製品	再生土 製品合計
I					
Ⅲ		25	11		36
Ⅳ	4	199	61	2	266
Ⅳ(1)		5	6		11
Ⅳ(2)		6	3		9
Ⅳ(3)		4	9		13
Ⅳ(4)		4			4
Ⅳ(5)		1	2		3
Ⅳ(6)					
Ⅳ(7)					
Ⅳ(上)		1	2		3
Ⅳ(中)					
Ⅳ(下)		1	4		5
Ⅳ(柱)		1	1		2
V		6	3		9
B調跡					
攪乱		4			4
木根			6		6
風倒木		11	1		12
排土		3			3
表探					
不明		1	1		2
合 計	4	272	110	2	388

表IV-2 包含層出土掲載土器一覧 (復元土器)

図版番号	掲載番号	土器分類	図化した点数		残		総点数	寸法 (単位cm)				部位	焼成等	目立った混入物	施工の特徴	備考・追加事項
			遺構(層位)・調査区(層位)×点数	遺物番号	遺構(層位)・調査区(層位)×点数	遺物番号		口径	底径	器高	最大径					
図IV-2	1	Ⅲ群a類 円筒上層 c式	J 10(IV)×1	b 24	J 10(IV)×2	b 21・c 6	8	30	21.6	—	(15.6)	口～胴部	良好	長石砂粒・海綿骨針	結束第1種羽状縄文地文、胴部まで粘土紐を貼付し、縄、R縄で縁取る。隆帯上はL縄の単軸絡全体で回転施工、口縁部は地文の縄文をナテにより無文とし、地文と口縁部を区画する帯部分には馬蹄形圧痕を連続して押圧する	内面はミガキ調整で口縁部の外反部分は横方向、胴部は縦方向である
			J 11(IV)×9	7・b 4・b 7・b 16	J 11(IV)×1	16										
			K 10(IV)×3	15・d 2	K 11(IV)×2	a 16										
			K 11(IV)×8	a 2・a 3・a 16・a 18	K 12(木根)×1	20										
			M 10(IV)×1	d 9	M 10(風倒木)×1	27										
図IV-2	2	Ⅲ群a類 サイハ沢 VII式	N 8(IV)×2	40・44	O 8(IV)×2	20・36	2	14	23.8	—	(17.0)	口～胴部	やや良	長石砂粒・海綿骨針・繊維・角閃石小粒	R L縄文施文後粘土紐を胴部中央より下位まで貼付、口唇部にはR L縄文を連続して押圧	内面はミガキ調整で、口縁部は横方向、胴部は縦方向
			O 7(IV)×1	10												
			O 8(IV)×9	29・35												
図IV-2	3	Ⅲ群a類 サイハ沢 VII式	M 19(Ⅲ)×1	6	N 19(風倒木)×1	29	8	19	31.4	—	(8.1)	口縁部	やや良	長石砂粒・繊維・小石少量	R L縄文地文、半截竹管による押し引き	内面横方向にミガキ調整
			M 20(IV)×3	11・23	M 20(IV)×5	23・24										
			M 22(IV)×1	16	N 17(IV)×1	23										
			N 19(IV)×2	9	N 20(IV)×1	4										
			N 20(IV)×3	4・7												
			N 20(風倒木)×1	9												
図IV-2	4	Ⅲ群a類 円筒上層 c式	K 7(Ⅲ)×1	c 3	J 7(IV)×11	4	19	92	—	15.7	39.8	胴～底部	やや良	長石砂粒・繊維	結束第1種羽状縄文地文に隆帯を貼付、隆帯上はL縄とR縄を矢羽根状上に押圧、口唇部の胴部は押しはまる部分はミガキ調整によって無文	内面は縦方向のミガキ調整、底面はミガキ調整
			K 8(IV)×8	16・20	J 9(IV)×1	3										
			K 8(V)×64	24	K 7(IV)×1	1										
					K 8(IV)×6	10・20・24										
図IV-2	5	Ⅲ群a類 サイハ沢 VII式	M 12(IV)×1	8			1	12.7	25.8	14.7	3.7	口縁部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒	土器の突起	半割した茎の断面による連続刺突
図IV-2	6	Ⅲ群a類 サイハ沢 VII式	O 10 a (IV)×1	17			1	38.1	46.0	10.8	17.6	口縁部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒	土器の突起	r縄線
図IV-2	7	Ⅲ群a類 サイハ沢 VII式	O 18(IV)×8	19・22・24・35	O 8(IV)×1	35	2	10	(98.0)	53.0	90.0	口～底部	やや良	長石砂粒・繊維・小石少量	結束第2種のR縄文地文、口唇部にも縄文帯を連続押圧、残部から2単位の波頂部	内面はミガキ調整、ほとんど残存せず
		O 9(IV)×1	18													
図IV-2	8	Ⅲ群a類 サイハ沢 VII式	M 8(IV)×15	4・6・33			15	(11.8)	5.3	(15.1)	口～底部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒・海綿骨針・繊維	L R縄文地文	4単位のゆるやかな波頂部を持つ小型器形か、底部は微妙な上げ底で底面はナテ調整	
図IV-3	9	Ⅲ群a類 サイハ沢 VII式	K 9(IV)×35	23・26・20・27・40	K 9(IV)×1	23	1	36	23.0	10.2	24.6	口～底部	やや良	長石砂粒・繊維	結束第2種羽状縄文施文後、隆帯貼付、断面三角形の口唇部上面および隆帯上に縄線が飛	内面はミガキ調整、口縁部は横方向、胴部は縦方向
図IV-3	10	Ⅲ群a類 サイハ沢 VII式	M 8(IV)×1	14	O 9(IV)×2	24・28	2	11	16.9	—	(6.4)	口～胴部	やや良	長石砂粒・海綿骨針・繊維	R L縄文施文後、突起を成形し、口唇部はペラによるキザミを連続して施す	内面はミガキ調整で口縁部は横方向、胴部は縦方向
図IV-3	11	Ⅲ群a類 サイハ沢 VII式	J 10(IV)×15	19・20	J 10(IV)×1	19										
		K 10(IV)×1	25	K 7(IV)×1	2											
				K 8(IV)×1	7											
				M 9(Ⅲ)×1	c 12											
図IV-3	12	Ⅲ群a類 見晴町式	L 10(IV)×5	17・21・38	N 12(不明)×1	1	2	14	29.3	—	(12.0)	口縁部	やや良	長石砂粒・小石少量・海綿骨針	R L縄文を縦方向に施文後、断面三角形の口縁部にL R縄を連続して押圧、その後沈線文および粘土紐を波頂部に貼付	内面横方向にミガキ調整
		M 10(木根)×6	16・17・22	O 11(IV)×1	d 3											
図IV-3	13	Ⅲ群b 1類 椀林式	K 12(IV)×82	26・30	H-12(覆土下)×1	35	4	92	27.5	9.0	35.7	口～底部	良好	長石砂粒・砂粒	L R縄文地文施文後、口縁部を成形、底面際之底面はミガキ調整	内面はミガキ調整、口縁部は横方向、胴部は縦方向
				K 12(木根)×1	8											
				L 7(IV)×1	c 9											
				M 12(IV)×1	9											
図IV-13	1	Ⅳ群a類 浦元I式	L 10(IV)×1	34	I 18(Ⅲ)×1	2	134	205	29.1	12.1	46.2	口～底部	良好	長石砂粒・角閃石小粒	L縄文を横走させた後、屈曲部より外反する口縁部形態を持つ。内面はミガキ調整で、球胴部分には縦方向のミガキ調整である。波頂部にはL縄を押しはまる器形である	
			L 19(Ⅲ)×15	3	I 21(Ⅲ)×1	2										
			L 19(IV)×21	13・26・23・49・55	J 8(IV)×1	12										
			L 20(Ⅲ)×10	5・2	J 18(IV)×2	19・34										
			L 20(IV)×12	10・18・34	J 19(IV)×1	34										
			K 20(Ⅲ)×2	4	K 20(Ⅲ)×1	4										
			K 27(IV)×1	2	K 24(IV)×1	不明										
			H 25(IV)×1	4	L 19(Ⅲ)×11	3										
			I 12(IV)×1	d 13	L 19(Ⅲ)×3	34・55・56										
			I 21(IV)×1	16	L 20(Ⅲ)×2	5										
			I 19(IV)×1	40	M 10(IV)×1	4										
			M 20(IV)×5	11・24・29	M 16(IV)×1	84										
					M 15(IV)×1	8										
					M 19(IV)×1	47										
					M 20(IV)×1	11										
					N 22(IV)×1	8										
					N 23(IV)×1	12										
					N 27(IV)×1	3										
					O 8(IV)×1	34										
					O 19(Ⅲ)×1	2										
					O 19(IV)×2	12										
					O 20(IV)×4	3・5・10										
					O 20(風倒木)×1	12										
					O 22(Ⅲ)×1	5										
					P 22(Ⅲ)×13	5										
		P 22(IV)×3	3・8・13・15・17													
		P 23(Ⅲ)×3	1													
		P 23(IV)×5	4													
		P 24(IV)×6	1・3・7・10													
		Q 21(Ⅲ)×1	2													
		Q 22(IV)×1	9													
		Q 23(Ⅲ)×20	1・3													
		Q 23(IV)×8	5・7・12													
		Q 24(IV)×2	3													
		Q 25(IV)×1	1													
		R 24(IV)×3	1													
図IV-13	2	Ⅳ群a類 浦元式	H 21(IV)×2	5・7	H 21(IV)×5	2・11・14	66	95	20.8	—	(14.2)	口～胴部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒・繊維	L R縄文施文後、L R縄線を2条施す。最後は半截竹管によって沈線文を施す。器面の所々に輪轡痕を残す	内面は縦方向のミガキ調整だが、輪轡痕と指頭圧痕が明確に残る。極端に内凹する器形である
			I 21(Ⅲ)×2	2	I 21(Ⅲ)×2	2										
			I 21(IV)×25	8・16・21・30	I 21(IV)×59	8・16・21・27										

図版番号	掲載番号	土器分類	図化した点数			残		総点数	寸法(単位cm)			部位	焼成等	目立った混入物	施文の特徴	備考・追加事項	
			遺構(層位)・調査区(層位)×点数	遺物番号	点数	遺構(層位)・調査区(層位)×点数	遺物番号		点数	口径	底径						器高
図IV-13	3	IV群a類 涌元I式の後半	I 13(IV)×9	3・10	14	I 13(IV)×1	c 7	3	17	14.0	—	(15.9)	口～底部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒	肥厚する口縁部を成形し、主文様に粘土紐を縦方向に施文し、口縁部の肥厚帯には横方向に施文する。その後沈線文を施文	内面はミガキ調整。胴部の裾の最大径より上部に煤が付着する
			J 12(IV)×1	a 5		K 11(IV)×1	b 6										
			K 10(IV)×2	d 8		K 12(IV)×1	d 6										
			K 14(IV)×2	a 7													
図IV-13	4	IV群a類 涌元I式	I 12(IV)×13	c2・c7・c18	13	I 12(IV)×3	c7・d5	3	16	13.8	—	(14.0)	口～胴部	やや良	長石砂粒密	L R縷文を施文後、無文の折り返し口縁部を輪積みによって成形し、L R縷文と縷文で器面に施文する	内面はミガキ調整で、頸部とその上は横方向の、下は縦方向である
図IV-14	5	IV群a類 涌元式	I 11(IV)×13	1・3・4・7・18・c7・c26	22	I 11(IV)×1	c 11	11	33	23.2	—	(26.8)	口～胴部	良好	長石砂粒・角閃石小粒	L R縷文を縦方向に施文した後、輪積みによって折り返し口縁部を成形する。胴部には沈線文	折り返し口縁部は屈曲するように外反する。内面について屈曲部とその上は横方向、下は縦方向のミガキ調整
			J 12(IV)×4	13・d12・d13・d14		J 11(IV)×1	c 19										
			L 10(IV)×1	a 3		J 12(IV)×1	c 3										
			J 9(IV)×1	c 6		L 10(IV)×1	a 3										
			J 12(IV)×2	b 3・b 13		L 11(IV)×1	b 8										
			N 8(Ⅲ)×1	a 2		L 12(IV)×1	a 16										
						M 10(IV)×1	38										
						N 8(IV)×1	19										
						N 17(IV)×1	49										
						M 10(IV)×1	d 2										
		P 13(IV)×1	c 3														
図IV-14	6	IV群a類 涌元II式	N 15(Ⅲ)×4	3	11			11	16.3	—	11.2	口～胴部	やや良	長石砂粒・織維	胴部にL R縷文を施文した後、沈線文と口縁部のミガキ調整を施す	内面はミガキ調整で口縁部は横方向、頸部より下は縦方向。口唇部の沈線で器面が区画された部分の内面の輪積痕が明瞭である	
			N 15(IV)×7	13・14・65・36													
図IV-14	7	IV群a類 涌元II式	H-10(覆土下)×1	50	29	I 11(IV)×1	4	9	38	18.0	—	(25.7)	口～胴部	良好	長石砂粒・角閃石小粒	L R縷文施文後沈線文	内面は胴部上半は横方向、下半分は縦方向のミガキ調整
			I 11(IV)×1	1		K 15(IV)×8	12・17・20・39・44										
			K 14(IV)×5	7・c5・c10													
			K 15(IV)×22	39・44													
図IV-14	8	IV群a類 涌元II式	H-15(覆土)×1	31	24	L 15(IV)×1	11	3	27	23.4	—	(27.0)	口～胴部	良好	角閃石小粒密	R L縷文を縦走させ、肥厚した口縁部を成形した後、沈線文を施文し、頸部にミガキ調整	内面はミガキ調整で、屈曲部とその上は横方向、胴部は縦方向
			I 21(IV)×2	21		M 16(Ⅲ)×1	3										
			J 17(IV)×1	11		K 22(IV)×1	17										
			J 18(IV)×1	17													
			J 21(IV)×1	5													
			K 20(Ⅲ)×2	4													
			K 20(IV)×1	14													
			K 22(IV)×1	4													
			L 14(IV)×2	c 2・c 4													
			L 15(IV)×2	31・3													
			L 16(IV)×5	19・10・30・40													
			L 19(IV)×1	34													
			M 15(IV)×1	21													
			M 17(IV)×1	32													
O 23(IV)×1	3																
M 18(IV)×1	36																
M 16(IV)×1	21																
図IV-14	9	IV群a類 涌元II式	M 17(Ⅲ)×5	4・5	18	M 17(Ⅲ)×2	4	4	22	—	7.4	10.0	口～底部	やや良	長石砂粒と小石・小石	L R縷文文様に則して、および施文後、沈線文をミガキ調整	内面は縦方向のミガキ調整、胴部際および底面はミガキ調整
			M 17(IV)×12	17・19・32・36		L 16(IV)×1	30										
図IV-14	10	IV群a類	M 17(Ⅲ)×1	4	46	H-20(覆土1)×1	190	64	110	11.3	—	(27.7)	口～胴部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒	隆帯貼付後、沈線文を施文し、その後ミガキ調整	内面ミガキ調整
			M 18(Ⅲ)×2	5		M 18(Ⅲ)×9	5										
			M 18(IV)×36	19-43-63・72-19-66・53-36・70		M 18(IV)×51	70-36-19・90-76-53・63-43										
			不明×7			排土×1	25										
図IV-15	11	IV群a類 涌元式	M 11(IV)×25	8・a 6・a 16・a 7	37	M 11(IV)×34	8-29-23・a 4・a 6・a 16・c 8・c 20	33	70	30.2	—	(26.5)	口～胴部	良好	角閃石小粒密・長石砂粒と海綿骨針まぼろし	L R縷文を縦方向に施文後、輪積みによって折り返し口縁部を成形する。その後沈線文を施す	内面はミガキ調整、折り返し口縁部の内面は横方向、その下は縦方向
			M 11(風倒木)×1	35		M 10(IV)×4	d 2・d 10・a 16										
			L 11(IV)×10	4・14・b 5		M 10(風倒木)×4	27・19										
			L 12(IV)×1	c 8		L 11(IV)×1	14										
図IV-15	12	IV群a類 涌元式	I 13(IV)×1	b 10	71	J 13(IV)×13	15・a 9・b 2・b 4・b 5・b 10・b 17・b 23・c 23	14	85	31.5	—	(39.8)	口～胴部	やや良	長石砂粒と小石	L R縷文施文後、貼付によって折り返し口縁部を成形し、折り返し部分にL R縷文を施文し、その後半截竹管によって渦巻きを基調とする沈線文	内面はミガキ調整。口縁部は横方向、胴部は縦方向
			I 14(IV)×1	a 6		未注記×1											
			J 13(IV)×69	1-4・5・a 4・a 5・a 11・b 1・b 2・b 4・b 10・b 11・b 16・b 18・b 22・b 23・c 20・c 22													
図IV-16	13	IV群a類	L 15(IV)×1	61	30	L 15(IV)×1	31	11	41	21.5	31.2	(9.8)	口～底部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒・織維	口縁部に浅い折り返し口縁部を成形後、L R縷文を施文し、沈線文	内面はミガキ調整、口縁部は横方向、胴部は縦方向。底部は微妙な上げ底でミガキ
			L 16(IV)×9	10・40・74・83		L 16(Ⅲ)×1	2										
			M 15(IV)×2	32		M 15(IV)×1	16										
			M 16(IV)×10	21-31-46・56-80-95		M 16(IV)×7	31-42-45・54-74-95										
			M 18(IV)×6	1・36		O 15(IV)×1	35										
			N 16(IV)×1	33													
			O 15(IV)×1	22													
図IV-16	14	IV群a類	I 13(IV)×2	b 9	60	I 13(IV)×3	b 10・c 6	14	74	28.8	—	(38.0)	口～胴部	良好	長石砂粒と小石・角閃石小粒・海綿骨針	最上部器面に輪積痕を残し気味にしてR L縷文を施文し、そこに無文の折り返し口縁部を貼付する。口唇部は一本の粘土紐で整え、その輪積痕が内面に残る器面は不規則な沈線文を施文する	内面について、口唇部には横方向の成形痕が残る、その下には縦方向のミガキ調整
			J 13(Ⅲ)×1	c 1		J 13(IV)×6	b 22・c 11・d 17・d 19										
			J 13(IV)×9	3・4・12・a 14・c 2・d 17		J 14(IV)×5	5・b 12・b 13・b 17										
			J 14(IV)×48	4-5・b 7・b 12・b 13・b 14・c 12・d 10													
図IV-16	15	IV群a類	I 12(IV)×1	c 18	22	I 13(IV)×1	c 1	2	24	13.2	—	(17.5)	口～胴部	良好	長石砂粒・角閃石小粒・小石	輪積みによって折り返し口縁部を成形後、格子目状にへらによって柔線風に沈線文を施す	口唇部は一本の粘土紐で平坦面を成形する。内面は厚薄が著しい
			J 13(IV)×11	4・a 9・b 25・c 8・c 11・d 9		J 13(IV)×1	a 1										
			K 12(IV)×6	b 12													
			N 13(IV)×1	b 4													
			L 12(IV)×3	a 6													

図版番号	掲載番号	土器分類	図化した点数		残		総点数	寸法(単位cm)				部位	焼成等	目立った混入物	施文の特徴	備考・追加事項		
			遺構(層位)・調査区(層位)×点数	遺物番号	点数	遺構(層位)・調査区(層位)×点数		遺物番号	点数	口径	底径						器高	最大径
図IV-16	16	IV群a類 浦元式	K8(IV)×5	15・19・22	5	K8(IV)×5 L9(不明)×1 L10(IV)×1 M11(IV)×1	15・33 3 18 8	8	13	12.9	—	(11.5)	口～胴部	良好	角閃石小粒・長石砂粒微量	L R織文施文後、ナデ調整をし、その上に沈積層・口唇部には連続刺突	内面はナデ調整	
図IV-16	17	IV群a類	J19(IV)×33	17・28	33			33	13.5	—	(15.9)	14.1	口縁～胴部	やや良	長石砂粒密	複数段の折り返し口縁を成形するかのようにつまみ口縁を器面に残し、L R織文施文、1～3段目までをナデ調整によって無文とし、口縁で不規則な高差を文様を施す	内面はミガキ調整 口唇部は平坦面をとる	
図IV-17	18	IV群a類	I12(IV)×53 J12(IV)×3 不明(排土)×10	c18・c16・c19・c7 d13 96	66	不明(排土)×1 I12(IV)×6 J13(IV)×5	96 c16・c18・c19 d7・d13	12	78	23.5	—	(30.9)	25.5	口縁～胴部	やや良	角閃石小粒・長石砂粒	L R織文施文後、胴部より上の折り返し口縁部を輪積みによって成形し、さらにその上から無文の貼付帯を力状に2本施す。区画としてはボタン状の突起を6つ貼り付ける区画の単位としては残部より6単位の可能性がある	内面はミガキ調整 よく屈する胴部の膨らみを持ち、そのまま内彎する器形である。胴部の膨らみのブークにはよく煤が付着する
図IV-17	19	IV群a類	M16(IV)×5 M17(IV)×1 N15(IV)×3 N16(III)×1	31・54 100 48 4	10			10	8.0	4.4	9.2		口～底部	良好	長石砂粒	無文の折り返し口縁部を輪積みによって成形し、L R織文を縦方向に施文後、L R織線を施文し、その上にボタン状の貼付	内面はミガキ調整	
図IV-17	20	IV群a類	I21(III)×1 L15(IV)×1 M17(III)×1 M17(IV)×7	2 31 4 19・30・50・64	10			10	9.8	5.7	13.2		口～底部	やや良	長石砂粒	L R織文を横走させ、3単位で粘土紐を貼付し、L R織線を2条押庄	内面はミガキ調整 底部ミガキ調整	
図IV-17	21	IV群a類	J14(IV)×13	a3・a9・a12	13	J14(IV)×3	a12・d11	3	16	9.8	5.0	11.6	口～底部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒	外側に輪積痕を残した状態でL R織文を施文、口縁部は無文としてL R織線を施す	内面は主に縦方向のミガキ調整、底部は微妙に上げ底でミガキ調整を施す	
図IV-17	22	IV群a類	I20(IV)×6 I21(III)×2	12・32・43 2	8	I20(III)×2 I20(IV)×3 I21(III)×2	12 12	6	14	10.0	—	(12.0)	10.5	口縁～胴部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒	外側に輪積痕が明確に残るような成形後、輪積みによって無文の折り返し口縁部を成形、そしてL R織文を横走させ、その後ナデ調整、口縁部にはL R織線	内面はミガキ調整口縁部は縦方向、胴部は縦方向口縁部については輪積痕残る
図IV-17	23	IV群a類	I12(IV)×7 不明(排土)×9	b2・d13 88	16	I12(IV)×1	b2	1	17	14.7	7.9	19.1	口～底部	良好	長石砂粒・角閃石小粒・海綿骨針	貼付気味にミガキ調整によって無文の折り返し口縁部を成形後、L R織文を縦方向に施文し、折り返し部分直下に口縁部を2条施す	内面はヘラの跡が突として明確に残るミガキ調整、胴部上半は縦方向、下半は縦方向、折り返し口縁部は縦方向、底面には内面と同様なミガキが為される	
図IV-17	24	IV群a類	K11(IV)×8 L12(IV)×2	c14・c15 28	10			10	16.0	—	(17.8)		口～胴部	やや良	長石砂粒と角閃石小粒	折り返し口縁部を輪積みによって成形後、L R織文を施文、その後口縁部にL R織線を押庄	内面はミガキ調整、口縁部は縦方向、胴部は縦方向	
図IV-17	25	IV群a類	N18(III)×16 N18(IV)×2	4 9	18	N18(III)×1	4	1	19	14.0	16.1	—	口～胴部	やや良	長石砂粒	L R織文施文後、L R織線を2条施文する	内面はミガキ調整で屈曲部より上は縦方向、下は縦方向のミガキ調整	
図IV-17	26	IV群a類	M18(IV)×4 N18(IV)×8	53 9・16・29	12	N18(III)×1 N18(IV)×2	4 29・58	3	15	13.7	6.7	15.5	口～底部	やや良	長石砂粒	輪積痕を上部に一段残し、折り返し口縁部を輪積みによって成形する。その後L R織文およびミガキ調整、口縁部にはL R織線	内面は摩擦する 底部は粘土紐を貼付し、極低い高台風、それによって微妙な上げ底となる	
図IV-17	27	IV群a類	J11(IV)×3 J12(IV)×9 不明(排土)×2	d1・d17 a2・a7・a14・a16・a17 44・93	14			14	16.1	—	14.9		口～底部	やや良	角閃石小粒・長石砂粒	L R織による単軸輪積痕を施文後、口縁部にはL R織線を押庄する	内面は縦方向のミガキ調整	
図IV-17	28	IV群a類	J19(IV)×1 J18(IV)×3 K19(IV)×12 L20(IV)×1 P17(IV)×1 不明(排土)×1	17 2・9 29・17・50・64・77 5 25 5	19			19	17.1	8.0	18.3		口～底部	良好	長石砂粒・角閃石小粒	L R織文を縦走させた後折り返し口縁部を輪積みによって成形その上にL R織線を押庄、口縁部頂部にも同様の圧痕	内面はミガキ調整、口縁部は縦方向、胴部は縦方向、底面はミガキ調整、器面の上半部にはすずが付着	
図IV-18	29	IV群a類	P10(IV)×7	2・12・21・a13	7	P10(IV)×1 O11(IV)×1	12 a3	2	9	10.0	—	7.1	口～胴部	やや良	長石砂粒	器面に輪積痕が連続するように器面を整えた後、L R織文を施文後、L R織線と器面をナデ調整	内面はミガキ調整 口唇部にはL R織文を回転施文	
図IV-18	30	IV群a類	M17(III)×18 M17(IV)×21 未注記×1	4 19・36・48・50・64・68・78・84	40	M17(III)×12 M17(IV)×1	12 19・36・64・75・105	26	66	25.3	—	(28.1)		口～胴部	良好	長石砂粒・海綿骨針・角閃石小粒	L R織文を横走させた後、口縁部をナデ調整によって無文とし、L R織線を3本施す	内面はミガキ調整で、口縁部は縦方向、胴部は縦方向
図IV-18	31	IV群a類	L12(IV)×9 L12(木根)×6 L12(攪乱)×5	6・9・23・d17 14 30・31・33	20	J12(IV)×4 L12(木根)×3 L12(攪乱)×1 M10(IV)×1	b13・c13・d9 9・23・d4 43 a16	14	34	20.8	(25.3)	—	口～胴部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒	L R織文を縦方向に施文後、口縁部は無文にしてL R織文を2条押庄する	内面はミガキ調整、口縁部の輪積痕部分は縦方向、その下から縦方向	
図IV-18	32	IV群a類	L12(IV)×26	a16・a23	26			26	(13.7)	(6.1)	(11.2)		口～胴部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒	L R織文を施した後、口縁部は無文にしてL R織を押し庄する	内面はミガキ調整で、口縁部は縦方向、胴部は縦方向である。口縁部には輪積痕が残る器面上半に煤が残る	
図IV-18	33	IV群a類	L12(攪乱)×38	43	38			38	17.2	—	(15.9)		口～胴部	やや良	長石砂粒・小石	L R織文を横走させた後、折り返し口縁部を輪積みによって成形、ナデ調整で折り返し部分を成形した後、L R織線	内面は縦方向のミガキ調整 折り返し口縁部は輪積痕が残る	
図IV-18	34	III群a類	I13(IV)×64	1・5・15・16・b5・b7・b10	64	I13(IV)×13	1・5・15・16・b10	13	77	22.7	—	(34.8)	口～胴部	やや良	角閃石小粒・長石砂粒	器形を成形後、L R織文を横走させ、一端空まった胴部から直立する口縁部にL R織線を2条施す	内面はミガキ調整で屈曲部より上は縦方向、下は縦方向のミガキ調整、器内外ともに屈曲部に輪積痕残る	
図IV-19	35	IV群a類	J11(IV下)×22	c12	22	J11(IV下)×2	c12	2	24	23.2	—	(31.6)	口～胴部	良好	長石砂粒・角閃石小粒	L R織文を横走させた後、無文の折り返し口縁部を輪積みによって成形、折り返し部分にL R織線を押し庄する	内面はミガキ調整、口縁部は縦方向、胴部は縦方向	
図IV-19	36	IV群a類	J11(IV)×15 K11(IV)×5 K12(IV)×2	c17・d14・d17・d18 11・c9・d5・d17・c5 8・43	22	J9(IV)×3 J10(IV)×1 J11(木根)×5 J11(IV)×1	11・18・c8 b22 1 a8	13	35	25.7	9.0	35.2	口～底部	やや良	長石砂粒・海綿骨針・角閃石小粒・小石	L R織の単軸輪積痕を施文する地文、口縁部には絡糸体の圧痕を施文する。底部には縦方向のミガキ調整	底部は微妙な上げ底で編物の圧痕の上からナデ調整を施す。内面はミガキ調整で、口縁部は縦方向、胴部は縦方向のミガキ調整	

図版番号	掲載番号	土器分類	図化した点数		残		総点数	寸法(単位cm)				部位	焼成等	目立った混入物	施文の特徴	備考・追加事項			
			遺構(層位)・調査区(層位)×点数	遺物番号	点数	遺構(層位)・調査区(層位)×点数		遺物番号	点数	口径	底径						器高	最大径	
図IV-19	37	IV群a類	J13(IV)×10 K13(IV)×24	14・b19 a7・a9	34	J12(IV)×2 未注記×1 K13(IV)×1 K13(木根)×1	7・a15 a9 11	2	36	18.9×19.8	21.4	(11.8)		やや良	長石砂粒・小石	LR縷文を横方向に施文後、2単位の突起を成形し、LR縷線を2条施文	内面はミガキ調整、口縁部は縦方向、胴部は縦方向		
図IV-19	38	IV群a類	M17(III)×1 M17(IV)×8 不明×1	4 19・36・50・64 31	10			10	10	10.6	5.9	13.7		やや良	長石砂粒・角閃石小粒	折り返し口縁を輪積痕に付して成形後、LR縷文を横走させ、口縁部をナデによって無文にした後、LR縷線を2条施文	内面は縦方向のミガキ調整、底面もミガキ調整		
図IV-19	39	IV群a類	O8(IV)×4	b3・c7	4	O8(IV)×1 O8(III)×2	21 b4・c5	3	7	11.4	5.15	15.1		やや良	角閃石小粒・長石砂粒	LR縷文施文後、折り返し口縁部にLR縷線をその上をナデ調整および摩擦によって文が薄れる	内面は磨減が著しいが所々調整の際に輪積痕が残る、底部は微妙に張り出す形態で、底面は微妙に上げ底である		
図IV-20	40	IV群a類	M16(IV)×68	9・21・42・a2・c2	68	M16(IV)×3 M17(IV)×1 N16(IV)×1	20・c2・d1 36 33	5	73	25.0	—	(36.1)			良好	長石砂粒	輪積痕を器面に残すことにより多段の折り返し口縁部に成形後、LR縷文を一致目は縦方向、下部はすべて縦方向に施文	内面はミガキ調整で、口縁部は縦方向、胴部は縦方向に施文、口唇部は一本の粘土紐で成形し、平坦面をとる	
図IV-20	41	IV群a類	L18(IV)×1 M18(IV)×30 M18(III)×2 M19(IV)×1 P19(III)×17	13 1・19・28・36・43・53・56・63・70・76 5 12 5	34			34	14.3	8.3	20.5			やや良	長石砂粒と小石・角閃石小粒・海綿骨針	輪積痕を外側に残すよう折り返し口縁部を横走させ、その際、口縁部一段目の折り返し部分は特に無文とする	内面はミガキ調整、主に横断面、口唇部は縦方向に施文、口唇部は微妙に残る		
図IV-20	42	IV群a類	P19(IV)×3	14	20	P19(III)×14 P19(IV)×11	5 14・16・24	25	39	23.2	—	19.0		やや良	長石砂粒・角閃石小粒・海綿骨針微量	3段の折返し口縁部風に輪積痕を残して成形後、LR縷文を一致目は縦方向、胴部は縦方向	内面はミガキ調整、胴部上半は縦方向、下半は縦方向、口唇部は粘土紐によって成形し、調整し、ナデ調整によって平坦面に成形		
図IV-20	43	IV群a類	N11(IV)×7 不明(排土)×1 P10(IV)×1	2・15・16・c5 11 2	9	P10(IV)×1	25	1	10	23.2	—	22.4			良好	長石砂粒・角閃石小粒・小石	貼付帯成形後、LR縷文を横方向に施文	内面はミガキ調整で、口縁部は縦方向、胴部は縦方向	
図IV-20	44	IV群a類	L13(IV)×15	c3	15			15	(10.5)	(8.0)	(14.0)			やや良	長石砂粒・角閃石小粒・海綿骨針	胴部上半について輪積痕が残るよう成形し、無文の折り返し口縁部を成形する、それからLR縷文を横方向に施文した上からナデ	内面はミガキ調整で、口縁部は縦方向、胴部は縦方向であるが輪積痕が残る		
図IV-21	45	IV群a類	N10(IV)×8	b2・b9	8	N10(IV)×2	b3・b9	2	10	28.4	—	(29.2)			やや良	長石砂粒・角閃石小粒	LR縷文を横走させた後、折り返し口縁部を貼付によって成形、折り返し部分もLR縷文を横方向に施文する	内面はミガキ調整、口縁部は平坦面をとってミガキ調整	
図IV-21	46	IV群a類	O9(IV)×36	8・15・17・16・21	36	O9(風倒木)×2 O9(IV)×4	b6 15・19	6	42	26.6	—	(27.2)			やや良	長石砂粒・角閃石小粒・海綿骨針微量	折り返し口縁部成形後、LR縷文を縦方向に施文する	内面は主に縦方向のミガキ調整だが、ところどころ輪積痕が残る	
図IV-21	47	IV群a類	I22(IV)×26	6・15	26			26	14.0	—	(14.0)				良好	角閃石小粒・長石砂粒	折り返し口縁部LR縷文縦方向、胴部同一平面で横走、折り返し成形後縷文	内面はミガキ調整、口唇部は一本の粘土紐によって平坦面を成形し、地文と同一平面で縷文を施文する、内面ミガキ調整、口縁部は縦方向、胴部は縦方向、途中でやめた穿孔後(図化範囲外写真図版参照)	
図IV-21	48	IV群a類	J11(IV)×13 J12(IV)×4 K11(IV)×26 K12(IV)×1	c5・c24・c26・c28 a5・b8 5・d5・d9・d18・d20・d23 c9	44	J11(IV)×2 J12(IV)×2 K11(IV)×1 K12(IV)×2	c5・d10 a3・a13 d10 25	7	51	(23.2)	—	(23.4)			良好	長石砂粒・角閃石小粒	口縁部成形後、LR縷文を折り返し口縁部は縦方向、胴部は縦走させる	口唇部は一本の粘土紐で平坦面をとる、内面はミガキ調整で、口縁部は縦方向、その下は縦方向である	
図IV-21	49	IV群a類	M17(IV)×30	19	30	M17(IV)×3	19	3	33	—	7.4	(12.6)	13.6		やや良	長石砂粒と小石・角閃石小粒	LR縷文を横走させた後、底面際を縦方向のミガキ調整によって無文	内面は縦方向のミガキ調整、底面はナデ調整	
図IV-21	50	IV群a類	I11(IV)×6 J11(IV)×18	7・12 8・12・a4・a8・a11・d8・d17	24			24	—	10.7	(23.9)	23.5			良好	長石砂粒・角閃石小粒・海綿骨針	LR縷文を縦方向に施文、底面際を縦方向のミガキ調整によって無文とする	底面は微妙な上げ底にミガキ調整、内面は縦方向のミガキ調整、口唇部は微妙に残る	
図IV-22	51	IV群a類	N15(III)×1 N15(IV)×1 L15(III)×1 L15(IV)×5 L19(III)×1 L19(IV)×1 I11(IV)×1	3 6 4 19・46・72・101 3 13 c不明	10	L19(IV)×1 J21(IV)×1	26 5	2	12	22.1	—	29.0	24.5			良好	長石砂粒・角閃石小粒密	LR縷文を横走させた後、胴部をミガキ調整、口唇部の平坦面には沈線	内面はミガキ調整、口縁部は縦方向、胴部は縦方向
図IV-22	52	IV群a類	J11(IV)×46	d4・d7・d10・d14・d17・d20	47	J11(IV)×3 K14(IV)×1	c19・d17 b1	4	51	23.0	—	(37.6)			良好	長石砂粒・角閃石小粒	胴部より上部について輪積痕を外側に残し、上2~3段は無文の折り返し口縁とする、胴部はLR縷文地文	内面はミガキ調整、口縁部は縦方向、胴部は縦方向	
図IV-22	53	IV群a類	J11(IV)×85 K12(IV)×2	b9・c1・d1・d4・d14 b6	87	I11(IV)×1 I12(IV)×1 J11(IV)×17 J13(IV)×1 K11(IV)×2 K12(IV)×1 K14(IV)×1 L14(IV)×2 不明(排土)×1	c9 b2・b5・b8・b9・b11・c4・c16・c19・c24・d14・d17 b26 d15・d20 25 c5 b12・c11 90	27	114	29.7	—	(37.0)			やや良	長石砂粒・角閃石小粒	胴上部を成形後、LR縷文を横走させる、その際、輪積痕を外側へ、折り返し口縁部を成形する、胴の最下部は縦方向のミガキ調整によって無文とする	内面は縦方向のミガキ調整、胴部は縦方向、口唇部は微妙に残る、波頂部は4折り返し口縁を成形する、折り返し口縁は無文である	
図IV-22	54	IV群a類	L13(IV)×13 L13(風倒木)×6	c3・d7・20	19	L13(IV)×2	c3	2	21	22.5	—	(33.6)			やや良	長石砂粒・海綿骨針	LR縷文を横走させた後、口縁部を輪積痕で成形し、横方向のミガキ調整とし、地文との境界に沈線を施す	内面はミガキ調整、口縁部は縦方向、胴部は縦方向	
図IV-23	55	IV群a類	N15(IV)×45	31・25・d2	45	N15(IV)×20	31・d2	20	65	17.4	—	(29.0)			やや良	長石砂粒・角閃石小粒	よく絡める胴部までLR縷文を横走させた後、折り返し口縁部を成形する、胴の最下部は縦方向のミガキ調整によって無文とする	内面は胴部より上は縦方向、下は縦方向のミガキ調整	
図IV-23	56	IV群a類 涌元式	K19(IV)×9	50・64	9	K19(IV)×2	50・64	2	11	16.2	—	(13.4)			良好	長石砂粒・角閃石小粒	LR縷文施文後、貼付によって折り返し口縁部を成形する、折り返し部分にはナデによって無文だが成形による指頭圧痕が残る	内面はミガキ調整、胴部までは縦方向、波頂部は反り返るよう外反する口縁部形態	



図版番号	掲載番号	土器分類	図化した点数		残		総点数	寸法(単位cm)			部位	焼成等	目立った混入物	施文の特徴	備考・追加事項		
			遺構(層位)・調査区(層位)×点数	遺物番号	点数	遺構(層位)・調査区(層位)×点数		遺物番号	点数	口径						底径	器高
図IV-23	57	IV群a類	J12(IV)×3   J12(IV)×2	a10・a14 b2・c19	5		5	12.9	—	(9.8)	口～胴部	良好	長石砂粒・角閃石小粒・海綿骨針	R L織文を横走させた後、折り返し風の口縁部をナデによって無文とする	口縁部は輪積痕を外側に残して屈曲部をもって外反する内面はミガキ調整で、外反部分は横方向、下は縦方向		
図IV-23	58	IV群a類	J23(IV)×4 K23(IV)×2 K24(III)×8 K24(IV)×2 O21(IV)×3	4・6 28 1 4 7	19	K19(IV)×1	50	23.4	—	(21.5)	口～胴部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒	折り返し口縁を輪積みによって成形後、L R織文を施文	内面について頸部とその上は横方向のミガキ調整、胴部は縦方向のミガキ調整、折り返し成形時の輪積痕残る		
図IV-23	59	IV群a類	L20(III)×1 L20(IV)×3 M20(III)×3 M20(IV)×5 M22(IV)×1 P16(風倒木)×1 P12(IV)×1 P13(IV)×5 P14(風倒木)×1	5 10・18・29 1 11 22 3 6 3・a7・b4 b5	14	L19(IV)×1 L20(IV)×2 M20(III)×1 M20(IV)×1	26 18 11 1	4	18	—	(19.0)	口～胴部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒	L織文地文施文後、輪積みによって無文の口縁部を成形する	よく反り返る折り返し口縁部を成形する。内面はミガキ調整で、口縁部は横方向、胴部は縦方向	
図IV-23	60	IV群a類	J11(IV)×1 J12(IV)×50 J12(V)×1 不明(排土)×3 L19(III)×2	8 a2・a3・a7・a8・a11・a14・a16・b5・b11・b13 13 93 3	55	J12(IV)×21 J13(IV)×3 J11(IV)×3 L19(III)×3	3・8・a3・a14・a16・b3・b5・b11・b13・d12 3・4・c9 11・a11・d17	27	82	30.2	—	(32.7)	口～胴部	良好	長石砂粒と小石	L R織文を横走させた後、板状の粘土を貼付し口縁部を成形する。折り返し口縁部を成形する。折り返し部分はミガキによって無文である	内面はミガキ調整、口縁部は横方向、胴部は縦方向。輪積痕を化粧土で埋めるようにしてナデつけた上からミガキ
図IV-24	62	IV群a類	L19(IV)×58	13・15・26・34	60	L19(III)×3 L19(IV)×64	3 13・26・34・43・49・53・55	67	127	27.2	—	(29.3)	口～胴部	良好	角閃石小粒・長石砂粒	L R織文を横走させた後、輪積みによって折り返し口縁部を成形する。口唇部はナデつけるような粘土塊の貼付によって成形され、残部から6単位と考えられる	内面はミガキ調整、胴部上半は横方向、下は縦方向。口唇部は粘土紐によってところどころ貼付して調整しながらナデ調整によって平坦面に成形
図IV-24	63	IV群a類	M17(IV)×75	19・36・50・d1・d2・d3	75	M16(IV)×1 M17(IV)×4	21 36・d1	5	80	26.4	12.8	(41.9)	口～底部	良好	長石砂粒・角閃石小粒	R L織文を横走させた後、輪積みによって無文の折り返し口縁部を成形する。底面際の内面は横方向のミガキ調整	内面はミガキ調整で、口縁部は横方向、胴部は縦方向。底面はミガキ調整
図IV-24	64	IV群a類	N17(III)×1 N17(IV)×3	5 23・35・49	4			4	11.1	—	(9.9)	口縁～胴部	やや良	長石砂粒・海綿骨針・繊維	L R織文を縦方向に施文した後、口唇部を輪積みで成形	縁端に内溝する器形。内面は主に縦方向のミガキ調整	
図IV-24	65	IV群a類	K19(IV)×13	41	13	K19(IV)×1	41	1	14	11.0	—	(11.6)	口～胴部	良好	長石砂粒・繊維	外側に輪積痕が明瞭に残るような成形後、横方向にL R織文を横走させる。その後輪積みによって無文の折り返し口縁部を成形し、全体にナデ調整を施す	口縁部断面形態は丸みを帯び、一本の粘土紐で成形する。内面はミガキ調整で、口縁部は横方向、胴部は縦方向である。折り返し口縁部の縦目には指頭圧痕が残る
図IV-24	66	IV群a類	L20(III)×1 L20(IV)×5 M20(IV)×1	5 10・18 24	7	L20(IV)×2 M20(IV)×3	10 24・41	5	12	13.0	—	(10.9)	口縁～胴部	やや良	長石砂粒・海綿骨針・角閃石小粒	L R織文を横走させた後、折り返し口縁部を成形する	内面はミガキ調整、折り返し口縁の成形部は横方向、下は縦方向
図IV-24	67	IV群a類	J18(IV)×3 K19(III)×2 K19(IV)×17 L19(IV)×2 L20(IV)×8	2・50・61 3 15・50・53・64 13・26 32・43・50	24	K19(IV)×1 M17(IV)×1	15 36	2	26	17.7	30.1	9.0	口～底部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒	L R織文を横走させた後、口唇部を一本の粘土で整えて折り返し口唇部にすると、その際突起も成形する	内面はミガキ調整、折り返し口縁の成形部分は横方向、より下は縦方向。底面は平底でミガキ調整
図IV-25	68	IV群a類	J21(IV)×8	16・21・26	16			16	11.0	6.6	14.3	口～底部	やや良	長石砂粒微量・繊維	口縁部は輪積痕を残し、折り返し口縁風とし、L織文を縦方向に施文する。その上からナデ調整。胴部下位は極度に窄まり、横方向のミガキ調整	内面はミガキ調整で、口縁部は横方向、胴部は縦方向	
図IV-25	69	IV群a類	M17(IV)×7	19・36・50	7	M17(IV)×3	19・36	3	10	(12.5)	6.8	13.6	口～底部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒・海綿骨針	R L織文を施した後、口縁部の波状部分を成形	内面は縦方向のミガキ調整で、口縁部は輪積痕が残る。器形について胴部上半には煤が付着する
図IV-25	70	IV群a類	J10(IV)×42	16・19・21	42	J10(IV)×21	21	12	54	20.5	8.3	24.1	口～底部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒・海綿骨針微量	R L織文施文後、口縁部を一本の粘土紐で整形して折り返し口縁部風にする	内面はミガキ調整、口縁部は横方向、胴部は縦方向。底面は微妙な上げ底でミガキ調整
図IV-25	71	IV群a類	K18(IV)×10 K18(III)×2 K19(IV)×7 L15(IV)×1 L19(III)×4 M17(III)×2 M17(IV)×1 N17(III)×1	21・11・28・33・40・4・7 29.50.64 1 3 2・4 19 58	28	K18(IV)×1 K19(IV)×1	28 24	2	30	21.2	9.7	25.1	口～底部	やや良	小石微量	L R織文を横走させて施文後ナデを加える	内面はミガキ調整で、頸部より上は横方向だが下は縦方向、頸部付近は輪積痕残る。底面は二次的な被熱によるものか表面が剥落している
図IV-25	72	IV群a類	K11(IV)×15	5	15	K11(IV)×4	5・a15	4	19	(12.5)	5.8	12.9	口～底部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒・繊維	L R織文を横方向に施文する	内面はミガキ調整、口縁部は横方向、胴部は縦方向。器形について胴部上半には煤が付着する
図IV-25	73	IV群a類	P13(IV)×3	a7・b7・b9	3			3	15.8	—	(12.2)	口～胴部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒	L織文を縦方向に施文後、口唇部の平坦面を成形	内面は主に縦方向のミガキ調整だが、輪積痕残る	
図IV-25	74	IV群a類	N13(IV)×17	5	17			17	12.8	5.2	11.8	口～底部	良好	長石砂粒・角閃石小粒・繊維	R L織文地文施文後、底面際をナデによって無文とする	内面はミガキ調整。底面は平底でミガキ	
図IV-25	75	IV群a類	M11(IV)×13	6・8・29・a6・a8・a10・a7	13			13	14.0	7.8	15.6	口～底部	良好	長石砂粒・角閃石小粒	R織文施文後口縁部を一本の粘土紐で平坦に成形し、器面全面を軽くナデ調整	内面はミガキ調整で胴部上半は横方向、下半分は縦方向。底面もミガキ調整。器面について胴部上半に煤が付着する	
図IV-26	76	IV群a類	I11(IV)×12	1・4・14	12			12	12.7	7.1	12.0	口～底部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒	外側に輪積痕を残して、さらに口縁部は輪積みによって成形する。口縁部はミガキ調整によって無文とし、器面には縦方向のナデ調整。一部折り返し部分もナデ済	内面はミガキ調整で、口縁部は横方向、より下は縦方向のミガキ調整。底面はナデによって無文とする	
図IV-26	77	IV群a類	K8(IV)×13	7・15・a9	13	K8(IV)×6 L8(IV)×1 P9(IV)×1 不明(排土)×1	15・b9・c10 1 a8 14	9	22	14.3	14.8	6.8	口～底部	良好	長石砂粒・繊維	外側に輪積痕が明瞭に残るような成形後、縦方向のミガキ調整。微かに張り出す底部形態	内面は縦方向のミガキ調整。底面はミガキ調整
図IV-26	78	IV群a類	M16(IV)×36	88・66・95	36	M16(IV)×13	88・85・54・42・c2	13	49	18.0	5.9	24.4	口～底部	やや良	長石砂粒	複数段の折り返し口縁を成形するように輪積痕を器面に残し、その上から縦方向のミガキ調整	内面はミガキ調整、口縁部は横方向、より下は縦方向。底面は上げ底で、高台風に粘土紐の貼付も見られる

図版番号	掲載番号	土器分類	図化した点数		残		総点数	寸法(単位cm)				部位	焼成等	目立った混入物	施文の特徴	備考・追加事項	
			遺構(層位)・調査区(層位)×点数	遺物番号	点数	遺構(層位)・調査区(層位)×点数		遺物番号	点数	口径	底径						器高
図IV-26	79	IV群a類	I 12(IV)×25 未注記×2	c9・c18	27	I 12(IV)×36 未注記×2	c9・c16・c18・d5・d12・d13	37	64	18.3	—	(17.5)	口～胴部	やや良	長石砂粒密・角閃石小粒	輪積みにより折り返し口縁を成形後、器面にミガキ調整折り返し部分は縦方向でその下は縦方向である	内面は胴部上半は横方向、下半は縦方向のミガキ調整、横方向の場合砂粒は左方向へ抜ける
図IV-26	80	IV群a類	I 21(III)×2 I 21(IV)×1 N 17(III)×1	2 8 5	3				3	9.9	6.3	11.0	口～底部	やや良	長石砂粒と小石	L 縄文施文後 縦方向のミガキ調整によってほぼ無文とする	内面はミガキ調整 椀形の器形
図IV-26	81	IV群a類	N 17(IV)×4	14・23	5	N 17(III)×2	5	2	7	9.1	4.0	10.2	口～底部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒	口縁部および胴部の一部について外側に輪積痕を残し、縦方向のナデ調整によって無文とする	内面は主に縦方向のミガキ調整、底面もミガキ調整
図IV-26	82	IV群a類	N 15(IV)×16	31・48・58・d2	16				16	(16.4)	—	13.3	口～胴部	やや良	長石砂粒	口縁部成形後、ヘラによるナデ調整	内面はミガキ調整、口縁部は横方向、胴部は縦方向、口唇部は一本の粘土層で成形しおおよそ平坦な面をとる 補修孔を削けようとしたものが貫通しない穿孔がある
図IV-26	83	IV群a類	H 27(III)×1 H 27(IV)×2 J 23(III)×1	1 2 1	4				4	12.3	6.1	7.2	口～底部	やや良	長石砂粒と小石	斜方向のミガキ調整によって無文	内面は横方向のミガキ調整
図IV-26	84	IV群a類	L 17(IV)×4	22	4				4	7.4	3.0	(8.2)	口～底部	やや良	長石砂粒・小石	主に縦方向のミガキ調整によって無文	内面は縦方向のミガキ調整
図IV-27	85	IV群a類 大津式	I 17(IV)×3 K 15(IV)×31 K 16(III)×1 K 16(IV)×2 L 15(IV)×1 J 21(IV)×1	5・10 6・12・16・17 3 6・35 11 13	38	K 15(IV)×4 L 15(IV)×2	6・12・28 11	6	44	14.3~16.2	09.2	—	口～胴部	やや良	縄文・長石砂粒	L R 縄文を施文後、ミガキを以て沈線をし、口縁部は横方向、胴部は縦方向	内面はミガキ調整で、口縁部は横方向、胴部は縦方向
図IV-27	86	IV群a類 大津式	J 22(III)×1 J 22(IV)×1 J 22(風倒木)×3 I 22(IV)×13 K 23(III)×2 K 23(IV)×1 K 24(III)×1 K 24(IV)×3	1 7 23 6・15 2 28 1 4・12	20	J 22(III)×1 J 22(風倒木)×1 未注記×1	1 23	3	9	9.8	4.2	18.8	口～底部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒	L R 縄文を施文後、沈線とミガキ調整によって磨消縄文	内面は横方向のミガキ調整、底面は微妙な上げ底でミガキ調整
図IV-27	87	IV群a類 大津式	I 22(IV)×13 K 23(III)×2 K 23(IV)×1 K 24(III)×1 K 24(IV)×3	6・15 2 28 1 4・12	20				20	14.4	8.3	19.1	口～底部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒	L R 縄文を施文後沈線とミガキで磨消縄文	内面は横方向のミガキ調整だが、胴部について輪積痕が残る 器面について頭部によく煤が付着、その上にもうすく付着
図IV-27	88	IV群a類 大津式	M 16(IV)×5 N 16(III)×5 N 16(IV)×7 N 17(IV)×5 N 17(風倒木)×1	d1・42・a1 4 7・9・33・53 14・23 43	23	M 16(III)×1 N 16(III)×1 N 16(IV)×1	3 3 9	3	26	21.4	8.3	16.6	口～胴部	良好	長石砂粒・角閃石小粒いずれもまばら	L R 縄文を施文後、ミガキを以て沈線をし、口唇部は横方向、胴部は縦方向	内面は横方向のミガキ調整、口唇部は一本の粘土層で整えて平坦面をとる
図IV-27	89	IV群a類 大津式	I 17(IV)×5 I 19(IV)×1 J 19(IV)×2 J 20(III)×2 J 20(IV)×9 J 20(木根)×2 K 20(III)×2 L 16(IV)×1 L 21(III)×1 L 21(風倒木)×1 M 21(IV)×1	5 33 d2 3 11・19 55 13 3 27 10	27				27	20.2	—	(22.0)	口～胴部	良好	長石砂粒	R L 縄文を施文後ミガキと沈線で磨消縄文	内面は横方向のミガキ調整で屈曲部より上の一部に煤がよくこびり付く
図IV-27	90	IV群a類 大津式	J 18(III)×5 J 18(IV)×7 K 17(III)×1 K 17(風倒木)×3 K 18(III)×2 K 18(風倒木)×1 L 19(IV)×3 L 18(III)×1 L 19(IV)×3 M 18(III)×1 N 9(IV)×1 N 10(IV)×1	2 9・17・26・30 1 6 4 39 15・29・64 1 57 5 d3 d3	29	K 18(III)×3 K 18(IV)×4 J 17(IV)×1 J 18(IV)×1 L 19(IV)×1 M 15(IV)×1	7 11・28 33 34 13 37	11	40	18.6	—	(27.3)	口～胴部	やや良	長石砂粒と小石	L R 縄文を施文後、沈線とミガキ調整で磨消縄文	内面はミガキ調整で、頭部より上は横方向、下は縦方向
図IV-28	91	IV群a類 大津式	I 23(IV)×12	4・7	12				12	19.1	7.0	9.1	口～底部	やや良	長石砂粒と小石・海綿骨針	L R 縄文を施文後、沈線とミガキ調整	内面も器面と同様の手順、底部は微妙な上げ底で底面にミガキ調整
図IV-28	92	IV群a類 白坂3式	P 18(IV)×10 Q 18(IV)×18	b4 d1	28	P 18(IV)×2	b4	2	30	13.5	6.6	17.8	口～底部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒	L R 縄文を施文後、沈線とミガキ調整によって磨消縄文	内面はミガキ調整、底面もミガキ調整
図IV-28	93	IV群a類 大津式	J 22(IV)×64 J 22(III)×2 K 22(III)×5 K 22(IV)×3 K 23(IV)×1 I 27(IV)×1 L 23(風倒木)×1	7・14 1 1 4 31 3 7	77	J 22(IV)×2 K 22(III)×2 K 22(IV)×1	14 1 8	5	82	21.5	10.9	29.5	口～底部	良好	長石砂粒・角閃石小粒	L R 縄文を施文後、沈線とミガキ調整にて磨消縄文	内面はミガキ調整、屈曲部より上は横方向、胴部は縦方向 底面はミガキ調整
図IV-28	94	IV群a類 大津式	I 17(IV)×1 J 18(III)×1 J 18(IV)×12	16 2 9・17・26・30・34	14	J 18(IV)×1	34	1	15	11.7	—	(18.5)	口～胴部	やや良	長石砂粒・小石	折り返し口縁部成形後、全面をミガキ調整し、その後沈線文	内面は横方向のミガキ調整 壺形器形
図IV-28	95	IV群a類 大津式	J 19(III)×13 J 19(IV)×42	1・3 17・c3・c6	55				55	28.0	13.0	18.5	口～底部	やや良	長石砂粒	L R 縄文を施した後、沈線とミガキによって磨消縄文	内面は横方向のミガキ調整、底面は微妙な上げ底 貫通していない、補修孔が一面ある
図IV-28	96	IV群a類 大津式	I 16(III)×1 J 17(III)×1 J 17(IV)×1 J 18(IV)×2 K 17(風倒木)×8 K 17(IV)×2 L 16(IV)×1 L 19(III)×2 L 19(IV)×2 M 14(IV)×1 M 16(IV)×1 M 17(III)×2 M 18(III)×4 M 18(IV)×4 M 19(III)×2 M 19(IV)×2 N 15(IV)×2 N 16(III)×2 N 17(IV)×6 N 17(風倒木)×1	1 3 52 17・26 6 17 19 3 26 21 21 4 5 19・28・43 7 21・55 6・48 4 35 43	52	K 17(IV)×1 L 19(III)×1 M 17(IV)×1 M 18(IV)×2	17 13 19 5・35	5	57	24.5	—	(31.8)	口～胴部	やや良	長石砂粒	L R 縄文を施文後、沈線とミガキによって磨消縄文	内面は横方向のミガキ調整

図版番号	掲載番号	土器分類	図化した点数		残		総 点数	寸法(単位cm)				部位	焼成等	目立った 混入物	施文の特徴	備考・追加事項	
			遺構(層位)・調査区(層位)×点数	遺物番号	点数	遺構(層位)・調査区(層位)×点数		遺物番号	点数	口径	底径						器高
			N18(Ⅲ)×2 N18(Ⅳ)×1 N20(風倒木)×1 不明×1	4・69 43 13 12													
図IV-29	97	IV群a類 大津式	P17(Ⅲ)×1 P17(Ⅳ)×1 P18(Ⅲ)×4 P18(Ⅳ)×18 P19(Ⅲ)×1	5 66 2 5 5	25		25	14.6	6.8	18.5	口～ 底部	やや良	長石砂粒・角 閃石小粒	L織文を施文後、沈線 と主に横方向のミガキ 調整で磨消縄文	内面はミガキ調整で、口縁 部の外反部は横方向、胴部 は縦方向、底部は平底でミ ガキ調整。口唇の欠損部分 は焼成前に欠損		
図IV-29	98	IV群a類 大津式	O16(Ⅲ)×9 P14(Ⅳ)×1	4 a4	10	O16(Ⅳ)×1	27	1	11	10.5	5.0	9.2	口～ 底部	良好	長石砂粒微量・ 角閃石小粒密	R織文を施文後、沈線と ミガキによって磨消縄文 頂部の下に貫通孔	内面はミガキ調整 小型器 形
図IV-29	99	IV群a類 大津式	P18(Ⅳ)×80	b4	80	P18(Ⅳ)×14	b4	14	94	20.7	10.8	29.4	口～ 底部	やや良	長石砂粒	おおそ文様に則して R織文を施文後、沈線文で 縁取り、それから無文 部にミガキ調整を施し て磨消縄文	内面はミガキ調整で、頸部 とその上は横方向、下は縦 方向 底面もミガキ調整
図IV-29	100	IV群a類 大津式	J20(Ⅲ)×1 J20(Ⅲ)×4 K19(Ⅲ)×7 K19(Ⅳ)×11 L16(Ⅲ)×5	1 3 3 15・29 2	23	K19(Ⅲ)×1	3	1	24	17.8	21.9	8.5	口～ 底部	やや良	長石砂粒・小 石まばら	L織文を施文後、沈線 とミガキによって磨消 縄文	内面はミガキ調整、口縁部 は横方向、胴部は縦方向
図IV-29	101	IV群a類 浦元式	L16(Ⅳ)×13	10・19・30	18			18	10.2	5.0	8.6	口～ 底部	良好	繊維・長石砂 粒微量	折り返し口縁を輪襷み によって成形後、R織 文を施文後、L織文を 縁取りを全面に施 し、その上から沈線文	内面はナデ調整 折り返し 口縁の裏面には輪襷痕が残 る	
図IV-30	102	IV群a類 白坂3式	P13(Ⅳ)×12	8・a4・a8・ a9	12			12	13.0	4.7	15.4	口～ 底部	やや良	長石砂粒・角 閃石小粒・小 石	R織文を施文後、沈線 とミガキによって磨消 縄文	内面はミガキ調整で、胴部上 半は横方向、下半は縦方向 底面は平底でミガキ調整	
図IV-30	103	IV群a類 白坂3式	J18(Ⅳ)×15 J17(Ⅳ)×1 K19(Ⅳ)×14	24・26 11 29・50	30	J18(Ⅲ)×1 J18(Ⅳ)×2 J18(Ⅳ)×1 L15(Ⅳ)×1 J19(Ⅳ)×1 K19(Ⅳ)×1	1 1 5 6 c3 50	7	37	23.3	—	23.4	口～ 底部	やや良	長石砂粒・小 石	L織文を施文後、沈線文、 所々ミガキ調整	内面の頸部より上によく煤 が付着する。内面調整はミ ガキで、口縁部は横方向、胴 部は縦方向
図IV-30	104	IV群a類 白坂3式	L14(Ⅳ)×2 L15(Ⅲ)×1 L15(Ⅳ)×5 M15(Ⅲ)×1 M15(Ⅳ)×1 N13(Ⅳ)×2 N15(Ⅲ)×1 O14(Ⅳ)×1 P16(風倒木)×1	c5 4 31・46・61 90 61 1・d1 3 a3 4	15	L15(Ⅳ)×1 M14(Ⅳ)×1 M15(Ⅳ)×1 N14(Ⅳ)×1	11 d2 8 d10	4	19	28.5	—	(21.0)	口～ 底部	やや良	長石砂粒・角 閃石小粒	R織文を施文後、ミ ガキ調整と沈線によっ て磨消縄文	内面は横方向のミガキ調整 内面の屈曲部より下に煤 がよく付着
図IV-30	105	IV群a類 白坂3式	M11(Ⅳ)×38	8・10・c2・d5・ d10・d7・c8	38	M8(Ⅳ)×1 M11(Ⅳ)×3	d7 d5・d9	4	42	17.0	—	(18.7)	口～ 底部	やや良	長石砂粒・角 閃石小粒	L織文を施文後、沈線 とミガキ調整によっ て磨消縄文	内面はミガキ調整、頸部よ り上は横方向、胴部は縦方 向
図IV-30	106	IV群a類 白坂3式	H-16(覆土)×1 M12(Ⅳ)×35 不明(排土)×5 L12(Ⅳ)×10	18 6・7・11・ 16・5・a1・ a6・c5・d1 31・15 c10・c12・c5	51	M12(Ⅳ)×1	13	1	52	22.3	8.2	27.0	口～ 底部	良好	長石砂粒と小 石・角閃石小 粒	L織文をおおよそ文 様に則して施文した後、 沈線とミガキ調整によっ て磨消縄文	内面はミガキ調整で、頸部 より上は横方向、胴部は縦 方向のミガキ調整 屈曲部 には輪襷痕が残る。底面は 微妙な上げ底でミガキ調整
図IV-30	107	IV群a類 白坂3式	L11(Ⅳ)×33	b2・b8・ b9	33			33	23.5	—	(20.3)	口～ 底部	やや良	長石砂粒と小 石	L織文をおおよそ文様 に則して施文後、沈線と ミガキで磨消縄文。口唇 部にもL織文	内面はミガキ調整で、頸部 とその上は横方向、胴部は 斜方向	
図IV-31	108	IV群b類 加増利B 式並行	N8(Ⅳ)×8 N8(Ⅲ)×18	12・24・42・ a4・a5 43・a1・ d2	26			26	(11.4)	—	(8.7)	胴部	良好	長石砂粒・角 閃石小粒	注口土器の胴部上出で ある。注口部分は欠 落する。ミガキ調整の 後、おおよそ5本一組で 沈線文を施す	内面はナデ調整で、輪襷痕 が明瞭である	
図IV-31	109	IV群b類 ウツクマ イC式	L9(Ⅲ)×1 L9(Ⅳ)×13 K9(Ⅳ)×1 不明(排土)×18	b2 8・11・24 6 59・60	33	L9(Ⅳ)×9 不明(排土) ×9	8・11・12・ a3 59・60	18	51	27.2	—	(27.0)	口～ 底部	良好	長石砂粒・海 綿骨針	L織文を施文後、沈線 文を施しそしてミガキ 調整。口唇部の平坦面 にもL織文	内面はミガキ調整で、屈曲 部より上は横方向、下は縦 方向 一對の補修孔あり
図IV-31	110	IV群b類	H-10(覆土下)×1 N8(Ⅳ)×26 N8(Ⅲ)×5 N9(Ⅳ)×7 M9(Ⅳ)×1	68 1・4・9・46・ a5・b11・ c8・d5・d6 b8・c3・ d4・d11 a8・a19 c9	40	N8(Ⅳ)×12 N8(Ⅲ)×1 N9(Ⅳ)×15	1・9・15・2 3・c10・d5 b8 a20・b2・ b4・b5・ b6・b15	28	68	28.0	—	31.8	口～ 底部	やや良	長石砂粒微量	L織文を施文後、沈線文 と縦方向のミガキ調整 によって磨消縄文	内面はミガキ調整
図IV-31	111	IV群b類	L12(Ⅳ)×17 M12(Ⅳ)×12 N11(Ⅳ)×4 不明(排土)×2	c4 a2・d2 d3・d9 32	35	L12(Ⅳ)×7 M12(Ⅳ)×2 N12(Ⅳ)×1	c4・c5 d1・d3 d1	11	46	21.0	—	(16.9)	口～ 底部	やや良	長石砂粒	L織文を施文後、沈線 文様およびミガキ調整 によって磨消縄文	内面は頸部より上は横方向、 下は縦方向のミガキ調整 一對の補修孔を持つ
図IV-69	1	VI群アヨ 口3a	O8(Ⅲ)×11 O8(Ⅳ)×1	b4 b3	12	O8(Ⅲ)×7	b4	7	19	—	—	11.7 × 14.4	胴部	やや良	砂粒	R織文を帯状に縦走さ せた上に沈線。横断面 が楕円形の歪形器	磨滅著しい。内面調整は丁 竈だが、輪襷痕残る
図IV-69	5	VI群後北 B式	O10(Ⅳ)×3 O10(Ⅲ)×4 P9(Ⅳ)×1 P10(Ⅲ)×13 P10(Ⅳ)×3	c2・c6・d16 c5・d2 c1 a3・b3・d3 a6・a9	24	P10(Ⅲ)×1	d3	1	25	18.9	—	(17.6)	口～ 底部	良好	長石砂粒・角 閃石小粒	R織文を帯状に施文 後、隆帯を貼付し、隆帯 上および隆帯の区画 内に爪状文。口唇部 には連続するキザミ	内面はミガキ調整
図IV-69	6	VI群後北 C1式	P10(Ⅲ)×31	b3	31			31	14.8	—	(15.8)	口～ 底部	やや良	長石砂粒・角 閃石小粒・海 綿骨針	表面はミガキ調整で、胴下 部の平まる部分は縦方向、 胴部のまっすぐに立ち上る部 分は横方向のミガキ調整 によって無文にした上に 細い隆帯、口唇部にはキザミを 連続する	内面は横方向のミガキ調整	
図IV-70	6	IV群a類	M17(Ⅲ)×4	3	4			4	4.0	0.8	5.6	口～ 底部	良好	長石砂粒・角 閃石小粒	外面ナデ調整によって 無文	内面ナデ調整	
図IV-70	7	IV群a類	J12(Ⅳ)×2	b11	2	J12(Ⅳ)×1	b11	1	3	4.9	1.8	7.6	口～ 底部	良好	長石砂粒・角 閃石小粒	R織文を施文後、折り返 し口縁部を成形し、R 縄文を施す	内面は横方向のミガキ調整
図IV-70	8	IV群a類	J14(Ⅳ)×4	b15	4			4	15.8	—	(6.0)	口～ 底部	やや良	長石砂粒と小 石	ナデ調整によって無文 にした後、半截竹管に よる沈線	内面はナデ調整だが輪襷痕 残る	
図IV-70	9	IV群a類	H-20(Ⅳ)×7	4	7	H-20(Ⅳ) ×2	4	2	9	5.1	3.6	5.8	胴部～ 底部	やや良	白色砂粒・角 閃石小粒	ナデ調整で無文にした 後沈線	内面はナデ調整 底面は微妙 な上げ底で底面はナデ調整
図IV-70	10	IV群a類	N9(Ⅳ)×1	b23	1			1	5.7	3.3	6.7	口～ 底部	良好	長石砂粒・角 閃石小粒	外面縦方向のミガキ調 整によって無文とする 穿孔が一箇所ある	内面はミガキ調整	

表IV-3 包含層出土掲載土器一覽 (拓影図)

図番号	掲載番号	土器分類	図化した点数			残			部位	焼成等	目立った混入物	施文の特徴	備考・追加事項													
			遺構(層位)・調査区(層位)×点数	遺物番号	点数	遺構(層位)・調査区(層位)×点数	遺物番号	点数																		
図IV-1	1a+b	II群b類円筒下層c式	P8(IV)×1	16	3			3	口縁部	やや良	長石砂粒・繊維・海綿骨針	rと1編をひと組にしたものと結束による綾織り文によって口縁部を充填する連続刺突で口縁部文様帯を区画する	内面は横方向のミガキ調整													
			L14(IV)×2	12																						
図IV-1	2	II群b類円筒下層d1式	P14(IV)×1	5	1			1	口縁部	やや良	繊維・海綿骨針・角閃石	結束第1種羽状縄文と1編の絡糸体	内面横方向のミガキ調整													
図IV-1	3	II群b類円筒下層c~d式	O16(IV)×1	35	1			1	胴部	やや良	長石砂粒・繊維	r編を2本一組にして口縁部を充填、口縁部文様帯は単軸絡糸体を横走させたものの直下に絡糸体の圧痕連続する	内面は縦方向のミガキ調整													
図IV-1	4	II群b類円筒下層d1式	L13(攪乱)×1	1	1			1	口縁部	やや良	海綿骨針・長石小砂粒・角閃石	1編の絡糸体、口縁部と口唇部は横方向	内面横方向のミガキ調整													
図IV-1	5	II群b類円筒下層c~d1式	D12(IV)×1	7	1			1	口縁部	やや良	繊維・長石小砂粒・角閃石	結束第1種羽状縄文	内面横方向のミガキ調整													
図IV-1	6	II群b類円筒下層b式	O8(IV)×1	a13	1			1	頸部	やや良	繊維・砂粒	バンドの貼付、L縄文を横走L縄線の押圧	内面ミガキ調整													
図IV-1	7	II群b類円筒下層d2式	N8(V)×1	39	1			1	口縁部	やや良	海綿骨針・長石小砂粒・繊維	ボタン状の貼付、口縁部文様帯を半載竹管の連続刺突で区画し、矢羽根状にしたLRとRL縄線が充填	内面横方向のミガキ調整													
図IV-1	8	II群b類円筒下層d2式	N9(IV)×1	a15	1			1	口縁部	やや良	長石砂粒・繊維	口縁部文様帯について、太めの1編を2本一組で4列施す口唇部は半載竹管による押し引き	地文は多軸絡糸体、内面横方向のミガキ調整													
図IV-1	9a~e	II群b類円筒下層d2式	K7(IV)×9	1・2・3・7・d4・d5・d6	11	H-15(覆土上位)×1	45	17	28	口縁部	やや良	繊維・小石	頭部の隆帯で口縁部文様帯を区画内にLR縄線と半載竹管による連続刺突を施す	地文は多軸絡糸体で頭部の隆帯から施す												
						J7(III)×1	c1																			
			J9(III)×1	c8																						
			K7(IV)×7	2・3・8・d5																						
			K8(IV)×3	2・9・17																						
			K9(IV)×1	35																						
			O12(IV)×2	16・17																						
			P9(IV)×1	33																						
			図IV-1	10a+b		II群b類円筒下層d2式	P9(IV)×2								27	2	P9(IV)×2	27	2	4	口縁部	やや良	繊維	LR縄にRL縄を単軸絡糸体風に着きつけたものを口縁部文様帯に施す。貼付RLを回転しながら軸のLRを等間隔に押圧する。	地文の原体を口唇部に連続押圧摩滅著しい	
図IV-1	11a~c	II群b類円筒下層d2式	J9(IV)×3	5・17・25	5	J9(IV)×5	11・17・25	8	13	口~胴部	やや良	長石砂粒・繊維・角閃石小粒	単軸絡糸体を軸としてすでに巻いてある縄と角度を違えて2本一組のLR縄を螺旋状に着きつけたものを口縁部文様帯に施すミガキを加えたものである。	口唇部にはLR縄の連続圧痕、口縁部文様帯は隆帯で区画し、隆帯上には凹形刺突を押し引く。地文にはLR縄による単軸絡糸体の上に結束のあるRL縄文を施し、簾状の地文。内面は口縁部文様帯までは横方向、胴部は縦方向のミガキ調整												
															J10(IV)×2	3・22	K8(IV)×1	2								
																			K9(IV)×2	32・d2						
図IV-1	12a~d	II群b類円筒下層d2式	K8(IV)×1	26	11	J12(IV)×2	4・d2	13	24	口~胴部	やや良	長石砂粒・繊維・角閃石小粒・海綿骨針	r編による多軸絡糸体の圧痕とLR縄線が口縁部文様帯を充填する、地文は多軸絡糸体である。軸は柔らかいものであり、傾斜具合から、LR縄の可能性はある。	内面は横方向のミガキ調整、口唇部にはLR縄文を連続圧痕する												
						K12(IV)×1	11																			
						K13(IV)×1	b4																			
						K14(IV)×4	26・b4																			
						L8(III)×1	d4																			
						L12(IV)×1	10																			
						L12(木根)×1	16																			
						P8(IV)×1	13																			
						図IV-1	13								II群b類円筒下層d式	K7(IV)×1	8	2			2	口縁部	やや良	海綿骨針	多軸絡糸体にLR縄を密に着きつけ、その上から2本一組にした縄を巻きつける	地文には結束のある縄文で、口唇にはRL縄文を施す
図IV-1	14	II群b類円筒下層d1式	N13(IV)×1	7	1			1	胴部	やや良	海綿骨針・長石小砂粒・角閃石・繊維	1編の絡糸体施文後結束第1種羽状縄文を縦方向	摩滅著しい													
図IV-1	15	II群b類円筒下層c~d式	O12(IV)×1	13	4	O12(IV)×1	13	4	8	胴~底部	やや良	長石砂粒・繊維・角閃石小粒	r編による網目状絡糸体圧痕を地文	底部はミガキ調整												
															P9(IV)×3	32	P9(IV)×3	32								
図IV-1	16a+b	II群b類円筒下層c~d1式	P13(IV)×2	b4・d8	4	M10(風倒木)×1	24	1	5	胴部	やや良	海綿骨針・長石小砂粒・角閃石・繊維	r編の短軸絡糸体を縦方向に施文	内面縦方向のミガキ調整												
															M9(IV)×1	c15										
															M11(風倒木)×1	3										
図IV-1	17a+b	II群b類円筒下層d2式	排土×4	100・101	4			4	口縁部	やや良	繊維・砂粒	頭部の隆帯で口縁部文様帯を区画、隆帯から口唇部までRL縄線を施す	地文は多軸絡糸体摩滅著しい													
図IV-1	18	II群b類円筒下層c~d式	I11(IV)×6	6・10・b5	7			7	胴部	やや良	長石砂粒・繊維・角閃石小粒	LRとRL縄を2本一組にして単軸に着きつけたものを原体とする	横方向のミガキ調整													
														J11(IV)×1	d2											
図IV-1	19	II群b類円筒下層d2式	M8(IV)×2	18・42	2	J9(IV)×2	15・25	3	5	胴部	やや良	繊維	多軸絡糸体	内面ミガキ調整												
						M9(IV)×1	d20																			
図IV-4	14	III群a類円筒上層b式	P-74(覆土)×1	6	24	H-5(トレンチ)×1	13	22	46	口~胴部	やや良	長石砂粒	隆帯上にRL縄線、隆帯に区画された中に馬蹄形圧痕、LRとRLの縄線結束第2種羽状縄文	III群a類円筒上層b式口径27cm前後、器高は50cm前後												
						H-5(トレンチ)×2	13・30																			
						H-5(覆土)×1	32																			
						M17(IV)×1	91																			
						N15(III)×1	2																			
						N15(IV)×9	47・69・74・84																			
						N16(IV)×1	25																			
						O15(IV)×6	6・26・31・51・57																			
						O19(IV)×2	11												L13(風倒木)×1	8						
																			M17(III)×1	2						
																			N8(IV)×1	5						
																			N14(IV)×3	6・d12						
																			N15(IV)×6	12・47・69・24・63・74						
																			N19(風倒木)×1	34						
																			O8(III)×1	c4						
																			O14(IV)×1	d3						
O15(IV)×3	21・51																									
O16(III)×1	4																									
P16(IV)×1	45																									
P19(III)×1	4																									

図番号	掲載番号	土器分類	図化した点数			残			総点数	部位	焼成等	目立った混入物	施工の特徴	備考・追加事項
			遺構(層位)・調査区(層位)×点数	遺物番号	点数	遺構(層位)・調査区(層位)×点数	遺物番号	点数						
図IV-5	15a-b	Ⅲ群a類円筒上層b式	L14(IV)×3	b6	9	H-5(トレンチ)×2	28	79	口縁部(残は未接合の胴部)	やや良	繊維・長石砂粒・小石	口縁部文様帯を区画する降帯上にはL織の単軸絡糸体、L織とR織を組み合わせたL織と連続する馬蹄形圧痕を交互に口縁部文様帯区画内に施す。	内面はミガキ調整	
			M11(IV)×1	c19		H-5(覆土上位)×1	32							
			M15(IV)×1	15		J14(IV)×1	b15							
			P7(IV)×1	4		J21(風倒木)×1	24							
						M15(IV)×1	70							
						M17(IV)×3	18・50・75							
						M18(IV)×1	52							
						N13(IV)×4	6・8・c7							
						N14(IV)×27	5・6・7・8・14・15・19-a12-a16-c2-c3-c7-c12-c14-d11-d12							
						N14(木根)×2	12							
						N15(IV)×1	47							
						N16(IV)×1	47							
						N18(IV)×1	38							
						O13(IV)×3	1・2							
						O14(Ⅲ)×3	11							
						O14(IV)×11	1・3・6-c1・c8-d2							
						O14(木根)×1	6							
						O15(IV)×2	6							
						O16(IV)×4	8・19・27							
						O17(IV)×1	8							
		O17(風倒木)×1	40											
		P13(IV)×4	2・4											
		P14(IV)×1	3											
		P15(IV)×1	25											
		P19(IV)×1	24											
図IV-5	16	Ⅲ群a類円筒上層b式	O10(IV)×1	c13	1			1	口縁部	やや良	繊維・小石	口縁部文様帯を区画する降帯上にはL織の単軸絡糸体、L織とR織を組み合わせたL織を区画内に施す。	内面はミガキ調整	
図IV-5	17a-b	Ⅲ群a類円筒上層b式	J10(IV)×1	10	2			2	口縁部	やや良	小石砂粒・長石砂粒	口縁部文様帯を区画する降帯上にはL織の単軸絡糸体、L織とR織を組み合わせたL織と連続する馬蹄形圧痕を区画内に施す。	内面は横方向のミガキ調整	
			O7(風倒木)×1	1										
図IV-5	18	Ⅲ群a類円筒上層c式	Q11(V)×2	7	2			2	口縁部	やや良	繊維・角閃石小粒	口縁部文様帯を区画する降帯上にはL織の単軸絡糸体、半載竹管による押し引きを区画内に施す。	内面は頸部より上は横方向のミガキ調整、頸部より下は縦方向にミガキ調整である。	
図IV-5	19	Ⅲ群a類円筒上層c式並行	O12(IV)×1	8	1			1	口縁部	やや良	小石	RL織文を口縁部まで施しその上に粘土紐を貼付、R織の単軸絡糸体を施す。	内面は横方向のミガキ調整	
図IV-5	20	Ⅲ群a類円筒上層c式	O7(IV)×2	17	2			2	口縁部	やや良	繊維・角閃石小粒	口縁部文様帯を区画する降帯上にはL織の単軸絡糸体、L織とR織を組み合わせたL織と連続する馬蹄形圧痕を区画内に施す。	内面は頸部より上は横方向のミガキ調整、頸部より下は縦方向にミガキ調整である。	
図IV-5	21	Ⅲ群a類円筒上層b式	K11(IV)×1	c15	1			1	口縁部	やや良	繊維・小石	降帯には半載竹管による連続するL織、半載竹管状の押し引きをL織で区画。	内面はミガキ調整	
図IV-5	22	Ⅲ群a類円筒上層c式	K10(IV)×1	15	1			1	口縁部	やや良	繊維・長石小石	口縁部文様帯を区画する降帯上にはR織の単軸絡糸体、馬蹄形圧痕を区画内に施す。	内面は頸部より上は横方向のミガキ調整である。	
図IV-5	23	Ⅲ群a類円筒上層c式	P8(風倒木)×1	3	1			1	胴部	やや良	繊維・小石	口縁部文様帯を区画する降帯上にはL織の単軸絡糸体、L織とR織を組み合わせたL織と連続する馬蹄形圧痕を区画内に施す。	横方向のミガキ調整	
図IV-5	24	Ⅲ群a類円筒上層b~c式	O9(Ⅲ)×2	a1	2			2	口縁部	やや良	繊維・小石	降帯にはL織の絡糸体圧痕、半載竹管状の押し引きをL織で区画。	内面はミガキ調整	
図IV-5	25	Ⅲ群a類円筒上層c式	L10(IV)×2	b4・b14	2			2	口縁部	やや良	繊維・長石砂粒	半載竹管状の押し引きと沈線	摩滅著しい 小型の器形	
図IV-5	26a-b	Ⅲ群a類円筒上層d式	J10(IV)×1	c13	3	K10(IV)×1	c21	2	5	口縁部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒・繊維	結節のある織文を口縁部まで施しその上に粘土紐を貼付、その上にL織を施し、口唇部にはL織の連続圧痕。	内面はミガキ調整
			J11(IV)×1	16		K11(IV)×1	d11							
			K10(IV)×1	15										
図IV-5	27	Ⅲ群a類円筒上層c式	I10(IV)×1	8	2	M8(IV)×2	4・17	2	4	口縁部	やや良	繊維・長石小石	口縁部文様帯を区画する降帯上にはL織とR織を組み合わせた単軸絡糸体、馬蹄形圧痕を区画内に施す。	内面は頸部より上は横方向のミガキ調整である。
			M8(IV)×1	14										
図IV-5	28	Ⅲ群a類サイベツV式・円筒上層d式並行	N11(IV)×2	a6・b10	2			2	口縁部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒・繊維	織文を口縁部まで施しその上に粘土紐を貼付、その上にL織を施す。口唇部にも同様にL織の圧痕を連続して押圧する。	内面はミガキ調整	
図IV-5	29	Ⅲ群a類円筒上層c~d式	K11(IV)×3	a13・d11・d21	3	K11(IV)×1	7	2	5	口縁部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒・繊維	RL織文を口縁部まで施しその上に粘土紐を貼付、その上にL織の単軸絡糸体を施す。口唇部にも同様に降帯を鋸歯状に貼付する。	内面はミガキ調整 口唇部は横方向に丁寧に施す
			L11(IV)×1	d10										
図IV-5	30	Ⅲ群a類円筒上層d式	J18(IV)×3	8	3	J18(IV)×1	33	1	4	口縁部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒・繊維	結束第1種のLR織文を口縁部まで施しその上に粘土紐を貼付、その上にL織の単軸絡糸体を施す。口唇部にも同様に降帯を波状に貼付する。	内面はミガキ調整
図IV-5	31	Ⅲ群a類円筒上層d式	L28(IV)×1	9	2	M20(IV)×1	10	1	3	口縁部	やや良	長石砂粒・繊維	LR織文を口縁部まで施しその上に粘土紐を貼付、その上にL織の単軸絡糸体。口唇部にはR織の圧痕を連続して押圧する。	内面はミガキ調整
	M28(IV)×1	11												
図IV-6	32	Ⅲ群a類円筒上層d式	J11(IV)×3	21・d17・d19	3			3	口縁部	やや良	長石砂粒・繊維	LR織文を口縁部まで施しその上に粘土紐を貼付、その上にL織の単軸絡糸体。口唇部にはR織の圧痕を連続して押圧する。	内面はミガキ調整	
図IV-6	33	Ⅲ群a類円筒上層c式	P8(IV)×3	29	3			3	口縁部	やや良	長石砂粒・繊維・微量の海綿骨針	胴部上半はナデによって無文にし、上に粘土紐を貼付、その上にR織。	内面はミガキ調整	
図IV-6	34	Ⅲ群a類サイベツV式・円筒上層d式並行	O10(IV)×1	b14	1	O9(IV)×1	29	1	2	口縁部	やや良	長石砂粒・繊維	RL織文を口縁部まで施しその上に粘土紐を貼付、その上にL織。	内面はミガキ調整

図番号	掲載番号	土器分類	図化した点数			残			総点数	部位	焼成等	目立った混入物	施文の特徴	備考・追加事項		
			遺構(層位)・調査区(層位)×点数	遺物番号	点数	遺構(層位)・調査区(層位)×点数	遺物番号	点数								
図IV-6	35	Ⅲ群a類 円筒上層d式並行	N10(IV)×2	14	3	J10(IV)×1	19	3	6	口縁部	やや良	長石砂粒・繊維・海綿骨針	LR縷文を口縁部まで施文、口唇部と突起状の口縁部には2本一組のLR縷線、口唇部には縷文施文後粘土紐の貼付とその上にR縷線	内面はミガキ調整		
			P11(IV)×1	4		O10(IV)×1	5						O10(風倒木)×1		a9	
図IV-6	36	Ⅲ群a類 円筒上層d式並行	L9(IV)×1	d10	3			3	3	口縁部	やや良	長石砂粒・繊維・海綿骨針	結束第1種羽状縷文を突起を除いて口縁部まで施文しその上にL縷の単軸縷条体、口唇部には縷の圧痕	内面はミガキ調整		
			M9(V)×2	18												
図IV-6	37	Ⅲ群a類 円筒上層d式並行	O18(Ⅲ)×1	2	7	O16(IV)×1	19	12	19	口～胴部	やや良	繊維・小石	ナデ調整の上に粘土紐貼付	内面はミガキ調整		
			O18(IV)×4	13・31		O18(IV)×10	13・14・20・21・31・34									
			O18(風倒木)×2	37		O18(風倒木)×1	37									
図IV-6	38	Ⅲ群a類 円筒上層d式並行	P10(IV)×1	b14	2	N10(IV)×1	c7	4	6	口縁部	やや良	長石砂粒・繊維・角閃石小粒	RL縷文を口縁部まで施文しその上に粘土紐を貼付、その上にL縷の単軸縷条体、口唇部にも同様の粘土紐を貼付する。口縁部の成形後縷文地文	内面はミガキ調整		
			P12(IV)×1	10		P10(IV)×3	7・9									
図IV-6	39	Ⅲ群a類 円筒上層d式並行	M9(IV)×1	10	1			1	1	把手	やや良	長石砂粒・繊維・海綿骨針・角閃石小粒まばら	細い粘土紐を貼付し、R縷線	指頭による成形痕		
図IV-6	40	Ⅲ群a類 サイベ沢Ⅶ式 円筒上層d式並行	K10(IV)×1	b14	1			1	1	把手	やや良	長石砂粒・繊維	細い粘土紐を貼付	指頭による成形痕		
図IV-6	41	Ⅲ群a類 サイベ沢Ⅶ式	M10(IV)×3	5	4	M10(IV)×1	4	3	7	口縁部	やや良	長石砂粒・繊維	結束第1種羽状縷文を突起を除いて口縁部まで施文、口唇部には上に連続してキザミをつけた粘土紐を貼付	内面はミガキ調整、口唇部付近は横方向それぞれ以下は縦方向、口唇は12cm前後の小型器形		
			M11(V)×1	24		M11(IV)×1	30								M11(V)×1	24
						M12(IV)×1	b4									
図IV-6	42	Ⅲ群a類 円筒上層d式	N11(IV)×2	1	2	K11(IV)×1	3	4	6	口縁部	やや良	長石砂粒・繊維・角閃石小粒	胴部上半はナデによって無文に仕上げ粘土紐を貼付、その上にR縷線、口唇部にはR縷の圧痕を連続して押圧する	内面はミガキ調整		
			P11(IV)×1	d1		L9(V)×2	26									
			Q11(V)×1	7												
図IV-6	43	Ⅲ群a類 円筒上層c式	P11(IV)×1	d1	2			2	2	口縁部	やや良	長石砂粒・繊維・海綿骨針・角閃石小粒まばら	胴部上半はナデによって無文に仕上げ粘土紐を貼付、口唇部にはキザミを連続して押圧する	内面はミガキ調整		
			Q11(V)×1	7												
図IV-6	44	Ⅲ群a類 サイベ沢Ⅶ式	O8(IV)×1	19	1			1	1	口縁部	やや良	長石砂粒・繊維・角閃石小粒密	結束第2種羽状縷文を口縁部まで施文しその上に粘土紐を貼付、その上にL縷の単軸縷条体、口唇部にはL縷の圧痕を連続して押圧する	内面はミガキ調整		
図IV-6	45	Ⅲ群a類 円筒上層d式並行	P14(IV)×4	4	4			4	4	口縁部	やや良	長石砂粒・繊維・海綿骨針	R縷文を口縁部まで施文しその上に粘土紐を貼付、その上に連続するキザミを施す。口唇部にも同様の粘土紐を波状に施す	内面はミガキ調整		
図IV-6	46	Ⅲ群a類 サイベ沢Ⅶ式	J20(木根)×4	54	4	J20(木根)×2	54	2	6	口縁部	やや良	長石砂粒・繊維	結束のあるLR縷文を口縁部まで施文し突起部分に粘土紐を貼付、その上にL縷を2本組み合わせた縷線口唇部には円形の竹管文を押し引き	内面はミガキ調整		
図IV-7	47	Ⅲ群a類 見晴町式	M9(IV)×1	d5	1			1	1	口縁部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒	断面三角形の口縁部には押し引き後沈線文	摩滅著しい		
図IV-7	48	Ⅲ群a類 サイベ沢Ⅶ式	Q23(IV)×4	2・6・8	4	Q23(Ⅲ)×1	2	1	5	口縁部	やや良	長石砂粒・繊維・角閃石小粒・海綿骨針・小石	結束第2種羽状縷文を口縁部まで施文、突起に伴う環状の粘土紐貼付は、その上は無文、口唇部には地文と同一原体によるものかRL縷ないしはLR縷の連続圧痕	内面はミガキ調整		
図IV-7	49	Ⅲ群a類 サイベ沢Ⅶ式	排土×1	22	1			1	1	口縁部	やや良	長石砂粒・繊維・角閃石小粒密	結束第1種羽状縷文を突起を除いて口縁部まで施文しその上に粘土紐を貼付、その上にR縷の単軸縷条体、口唇部には同様の粘土紐を貼付	内面はミガキ調整		
図IV-7	50	Ⅲ群a類 サイベ沢Ⅶ式	M8(IV)×1	17	1			1	1	口縁部	やや良	長石砂粒・小石・繊維	端を縛ったLR縷文とRL縷文を口縁部まで施文しその上に粘土紐を貼付、突起や隆帯上にL縷線とr縷の単軸縷条体	内面はミガキ調整		
図IV-7	51	Ⅲ群a類 サイベ沢Ⅶ式	Q13(IV)×1	1	2			4	4	口縁部	やや良	長石砂粒・繊維・角閃石小粒	RL縷文を口縁部まで施文し突起として粘土紐を貼付、その上にL縷線、口唇部にはL縷を2本組み合わせた縷線を連続して圧痕	内面はミガキ調整、口縁の折り返し成形後に縷文地文施文		
			P13(IV)×1	b12												
図IV-7	52	Ⅲ群a類 サイベ沢Ⅶ式	J18(IV)×2	16・17	2			2	2	口縁部	やや良	長石砂粒・繊維・角閃石小粒・海綿骨針	結束のあるLR縷文を口縁部まで施文、口唇部と突起状の口縁部には地文と同一原体によるものかLR縷の連続圧痕	内面はミガキ調整		
図IV-7	53	Ⅲ群a類 サイベ沢Ⅶ式	P10(IV)×1	9	1			1	1	口縁部	やや良	繊維・小石	貼付した隆帯および口唇部にRL縷を連続して圧痕	摩滅著しい		
図IV-7	54	Ⅲ群a類 サイベ沢Ⅶ式	M12(風倒木)×1	4	2			2	2	口縁部	良好	長石砂粒・繊維・海綿骨針	RL縷文を口縁部まで施文、口唇部と突起状の口縁部には地文と同一原体によるものか裏面におよぶRL縷の連続圧痕およびキザミ	摩滅著しい		
			M13(IV)×1	5												
図IV-7	55	Ⅲ群a類 サイベ沢Ⅶ式	L9(IV)×1	d10	1			1	1	口縁部	やや良	長石砂粒・繊維・海綿骨針	結束のあるLR縷文を口縁部まで施文、口唇部と突起状の口縁部には地文と同一原体によるものかLR縷の連続圧痕	摩滅著しい		
図IV-7	56	Ⅲ群a類 サイベ沢Ⅶ式	N12(IV)×1	6	1			1	1	口縁部	やや良	長石砂粒・繊維	結節のあるLR縷文を口縁部まで施文しその上に粘土紐を貼付、その上にLR縷線、口唇部にはキザミを連続して押圧する	内面はミガキ調整		

図番号	掲載番号	土器分類	図化した点数			残			総 点数	部位	焼成等	目立った 混入物	施文の特徴	備考・追加事項
			遺構(層位)・調査 区(層位)×点数	遺物番号	点数	遺構(層位)・調査 区(層位)×点数	遺物番号	点数						
図IV-7	57	Ⅲ群a類 サイベ沢Ⅶ式	J8(Ⅳ)×1	26	3	J8(Ⅳ)×7	14・15・26	11	14	口縁部	やや良	長石砂粒・ 繊維・角閃 石小粒・海 綿骨針	結束のあるLR縷文を口 縁部まで施文、口唇部と 突起状の口縁部には地文 と同一原体によるものか LR縷の連続圧痕および 突起にはLR縷線、把手 が剥落している	摩滅著しい
			J10(Ⅳ)×1	c6		K8(Ⅳ)×3	10・16・32							
			不明×1	不明		不明×1	不明							
図IV-7	58a+b	Ⅲ群a類 サイベ沢Ⅶ式	J10(Ⅳ)×1	13	2				2	口縁部	やや良	長石砂粒・ 繊維	結束のあるLR縷文を口 縁部まで施文、口唇部と 突起状の口縁部には地文 と同一原体によるものか LR縷の連続圧痕および LR縷の連続圧痕口縁部 成形後、縷文地文	内面はミガキ調整
			O10(Ⅳ)×1	c10										
図IV-7	59a+b	Ⅲ群a類 サイベ沢Ⅶ式	N8(Ⅳ)×3	30・31・45	3	J10(Ⅳ)×1	b12	1	4	口縁部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒	結束第1種羽状縷文を口 縁部成形後施文、断面三 角形の口縁部には粘土紐 を鋸歯状に貼付	内面はミガキ調整
図IV-7	60a+b	Ⅲ群a類 サイベ沢Ⅶ式	J24(風倒木) ×2	29	5	J16(Ⅳ)×3	15・28	38	43	口～胴部	やや良	繊維・長石 砂粒	縷端を縛った結束第1種 羽状縷文地文	摩滅著しい
			K24(Ⅳ)×2	10		J24(Ⅳ)×10	4・10・16・18・ 20・31							
						J24(風倒木) ×7	21・29							
						J24(木根)×2	25							
						J26(Ⅳ)×2	1							
						K15(Ⅳ)×1	39							
						K24(Ⅲ)×1	1							
		K24(Ⅳ)×12	10											
図IV-7	61	Ⅲ群a類 サイベ沢Ⅶ式	N12(Ⅳ)×1	b7	3				3	口縁部	やや良	長石砂粒・ 繊維	結束のあるRL縷文施文 後口縁部成形、口唇部 にはRL縷の圧痕	内面はミガキ調整
		N13(Ⅳ)×2	1・4											
図IV-7	62	Ⅲ群a類 サイベ沢Ⅶ式	M9(Ⅴ)×1	18	1				1	口～胴部	やや良	繊維・長石 砂粒	結束第1種羽状縷文地文 口縁部にはキザミ	内面はミガキ調整、口縁 部は横方向、胴部は縦方 向、口径は7cm前後
図IV-7	63	Ⅲ群a類 サイベ沢Ⅶ式	L9(Ⅳ)×3	d7	3	L8(Ⅳ)×1	8	3	6	口縁部	やや良	砂粒海綿骨 針	L縷の絡糸体、口唇部 にキザミ	内面はミガキ調整、口縁 部は横方向、胴部は縦方 向、小型筋形
				L9(Ⅳ)×2	12									
図IV-8	64a+b	Ⅲ群a類 サイベ沢Ⅶ式	K10(Ⅳ)×1	18	8	M8(Ⅳ)×1	14	2	10	口～胴部	やや良	長石砂粒・ 繊維・海綿 骨針	結束第2種羽状縷文を主 に縦方向に施文する、口唇 部にはキザミが連続する	内面はミガキ調整、口縁 部は横方向、胴部は縦方 向だが輪積痕が残る
			K12(Ⅳ)×1	9										
			M8(Ⅳ)×1	17		M9(Ⅳ)×1	15							
			M9(Ⅳ)×5	21										
図IV-8	65	Ⅲ群a類 サイベ沢Ⅶ式	L10(Ⅳ)×1	31	1				1	口縁部	やや良	長石砂粒と 小石・繊維	結束のあるRL縷文を口 縁部まで施文、口唇部 にはキザミ	内面はミガキ調整
図IV-8	66	Ⅲ群a類 サイベ沢Ⅶ式	M10(Ⅳ)×1	5	3				3	口縁部	やや良	長石砂粒・ 繊維・海綿 骨針	縷端を縛ったRL縷文を 施文口縁部にはRL縷の 連続圧痕、波頂部には 加えてキザミ	内面はミガキ調整、口縁 部は横方向、胴部は縦方 向
		M10(木根) ×2	36											
図IV-8	67	Ⅲ群a類 サイベ沢Ⅶ式	O8(Ⅳ)×1	31	3	O8(Ⅳ)×2	20	7	10	口～胴部	やや良	長石砂粒・ 繊維・海綿 骨針・角閃 石小粒	結束第2種羽状縷文を口 縁部まで施文する、口唇 部にはLR縷の押圧が連 続する	内面はミガキ調整
			O9(Ⅳ)×1	不明		P8(Ⅳ)×3	23・29・35							
			P10(Ⅳ)×1	22		P9(Ⅳ)×2	31							
図IV-8	68	Ⅲ群a類 サイベ沢Ⅶ式	M8(Ⅳ)×5	37	5				5	口～胴部	やや良	長石砂粒・ 繊維・海綿 骨針・小石	接納の結束を持つと思わ れるLR縷文を口縁部ま で施文する	内面はミガキ調整、口縁 部は横方向、胴部は縦方 向だが輪積痕が残る
図IV-8	69	Ⅲ群a類 サイベ沢Ⅶ式	P9(Ⅳ)×6	18・31	6	N12(Ⅳ)×1	6	17	23	口～胴部	やや良	繊維・長石 砂粒	結束のあるRL縷文地文、 口唇部にも縷文	内面はミガキ調整、口縁 部は横方向、胴部は縦方 向だが輪積痕が残る
						P8(Ⅳ)×7	7・15・22・a12・ b4							
						P9(Ⅳ)×8	15・18・30・31							
						不明×1	不明							
図IV-8	70	Ⅲ群a類 サイベ沢Ⅶ式	P9(Ⅳ)×3	30・31	3	O8(Ⅳ)×2	28・35	21	24	口～胴部	やや良	長石砂粒・ 繊維・海綿 骨針・角閃 石小粒	R縷文地文、口唇部には LR縷の圧痕	内面はミガキ調整
						O9(Ⅳ)×8	1・9・13・20・2 2・28・32							
						O9(Ⅴ)×2	43							
						O9(不明)×1	30							
						P9(Ⅳ)×2	9・31							
						P8(Ⅳ)×1	35							
						P10(Ⅳ)×4	3・7・25							
						L12(Ⅳ)×1	11							
図IV-8	71	Ⅲ群a類 サイベ沢Ⅶ式	P8(Ⅳ)×1	28	1				1	口縁部	やや良	繊維・長石 砂粒	魚骨回転文	内面横方向のミガキ調整
図IV-8	72	Ⅲ群a類 サイベ沢Ⅶ式	O9(Ⅳ)×3	9・27・29	3				3	口縁部	やや良	繊維・長石 砂粒	魚骨回転文	内面横方向のミガキ調整 口径9cm前後
図IV-8	73	Ⅲ群a類 サイベ沢Ⅶ式	P11(Ⅳ)×1	b1	1				1	口縁部	やや良	繊維・小石	魚骨回転文	摩滅著しい、小石目立つ
図IV-8	74	Ⅲ群a類 サイベ沢Ⅶ式	M8(Ⅳ)×1	10	1				1	口縁部	やや良	繊維	魚骨回転文、口唇部と突 起にはL縷圧痕	摩滅著しい、繊維目立つ
図IV-8	75	Ⅲ群a類 サイベ沢Ⅶ式	K9(Ⅳ)×1	22	1				1	口縁部	やや良	繊維	魚骨回転文、口唇部と突 起にはL縷圧痕	摩滅著しい、繊維目立つ
図IV-8	76	Ⅲ群a類 サイベ沢Ⅶ式	O13(Ⅳ)×3	d9	3				3	胴～底部	やや良	繊維・小石	魚骨回転文	摩滅著しい、繊維目立つ
図IV-8	77a+b	Ⅲ群a類 サイベ沢Ⅶ式	O11(攪乱)×1	1	2				2	口～胴部	やや良	繊維・長石 砂粒と角閃 石小粒微量	ナデ調整によって無文に した後半截竹管によって 沈縷文、口唇部にはキザ ミ	内面はミガキ調整
			P15(Ⅳ)×1	11										
図IV-9	78	Ⅲ群a類 見晴町式	G26(不明)×7	1	10				10	口～胴部	良好	角閃石小粒・ 繊維・長石 小石	RL縷文施文後、隆帯の貼 付、その脇をRL縷線押圧 によって留める	内面はミガキ調整、口縁 部は横方向、胴部は縦方 向
G27(Ⅳ)×3	4・7													
図IV-9	79	Ⅲ群a類 見晴町式	O9(Ⅳ)×1	22	1	J10(Ⅳ)×1	13	1	2	口縁部	やや良	角閃石小粒・ 繊維・長石 小石	RL縷文施文後、粘土紐貼 付、断面三角形の口縁を 成形し、口縁部には沈縷	内面はミガキ調整、口縁 部は横方向
図IV-9	80	Ⅲ群a類 見晴町式	M9(Ⅳ)×1	15	1				1	口縁部	やや良	繊維・長石 砂粒	RL縷文施文後、粘土紐の 貼付し、その上にもRL縷 文、口唇部はRL縷線の 連続圧痕	内面はミガキ調整
図IV-9	81	Ⅲ群a類 見晴町式	O12(Ⅳ)×1	10	1				1	口縁部	やや良	繊維・長石 砂粒・海綿 骨針	RL縷文施文後、粘土紐の 貼付、口唇部はRL縷線 の連続圧痕	内面はミガキ調整後、 隆帯貼付
図IV-9	82a+b	Ⅲ群a類 見晴町式	O12(Ⅳ)×3	10・a10	8	O12(Ⅳ)×5	6・a5	11	19	口縁部	良好	長石砂粒・ 角閃石小粒・ 海綿骨針・ 繊維	粘土紐貼付後RL縷文施 文	内面はミガキ調整、口縁 部は横方向
			O13(Ⅳ)×4	1・2・a6		O13(Ⅳ)×6	1・a5・a6							
			排土×1	51										
図IV-9	83	Ⅲ群a類 見晴町式	L9(Ⅳ)×1	b6	2				2	口縁部	良好	角閃石小粒・ 繊維・長石 小石	RL縷文施文後、断面三 角形の口縁を成形し、口縁 部にはLR縷線	内面はミガキ調整、口縁 部は横方向
			M8(Ⅳ)×1	15										
図IV-9	84	Ⅲ群a類 見晴町式	J10(Ⅳ)×1	19	2				2	口縁部	やや良	繊維・長石 砂粒・小石	RL縷文施文後、粘土紐の 貼付、口縁部はL縷線の 連続圧痕	内面はミガキ調整後、 隆帯貼付、65と同一の可 能性
J11(Ⅳ)×1	26													

図番号	掲載番号	土器分類	図化した点数			残			総 点数	部位	焼成等	目立った 混入物	施文の特徴	備考・追加事項	
			遺構(層位)・調査 区(層位)×点数	遺物番号	点数	遺構(層位)・調査 区(層位)×点数	遺物番号	点数							
図IV-9	85	Ⅲ群a類見 晴町式	L9(Ⅳ)×1 M8(Ⅳ)×2	21 31	3	L9(Ⅳ)×1 M8(Ⅳ)×4 M9(Ⅳ)×1 N8(Ⅳ)×1	21 15・17・26・31 15 14	7	10	口縁部	やや良	繊維・長石 砂粒	LR縄文施文、口縁部はL 縄線の連続圧痕	内面はミガキ調整	
図IV-9	86	Ⅲ群a類見 晴町式	O11(Ⅳ)×7	d3	7				7	口縁部	やや良	繊維・長石 砂粒	L縄文施文後、沈線、口縁 部L縄線の連続圧痕	内面はミガキ調整	
図IV-9	87	Ⅲ群a類見 晴町式	J10(Ⅳ)×4	4	4				4	口縁部	良好	繊維・長石 砂粒	RL縄文施文後、沈線と 半隆起線の貼付	内面はミガキ調整	
図IV-9	88	Ⅲ群a類見 晴町式	J11(Ⅳ)×5	25・26	5				5	口縁部	やや良	繊維・長石 砂粒・小石	LR縄文施文後、粘土紐の 貼付、口縁部はL縄線の 連続圧痕	内面はミガキ調整後、 隆帯貼付 64と同一の可 能性	
図IV-10	89a・b	Ⅲ群a類見 晴町式	O11(Ⅳ)×2 O12(Ⅳ)×3	a6・d3 a10	5	J18(Ⅳ)×2 M9(Ⅳ)×1 N11(Ⅳ)×3	b18 17 4・d2・d8	6	11	口縁部	やや良	長石砂粒・ 小石	RL縄文施文後沈線	脚厚した口縁にはRL縄 線の連続圧痕	
図IV-10	90a・b	Ⅲ群b1類 櫻林式並行	I11(Ⅳ)×2 J10(Ⅳ)×4	11 10・a11・14・b9	6				6	口縁部	やや良	長石砂粒・ 繊維・小石	口縁部成形後、LR縄文施 文後、沈線、波頂部から 蛇行沈線を垂下	断面三角形の口縁部を成 形、細い粘土紐で渦巻き 文様を施文	
図IV-10	91	Ⅲ群b1類 櫻林式並行	I12(Ⅳ)×1	c8	1				1	口縁部	やや良	砂粒	RL縄文施文後沈線	口縁断面三角形、内面に ついて口縁部は横方向、 胴部は縦方向のミガキ調 整	
図IV-10	92	Ⅲ群b1類 櫻林式並行	J9(Ⅳ)×1 M9(Ⅳ)×1 N8(Ⅲ)×3	d2 c21 d12	5	H-10(覆土中 位)×2 N8(Ⅳ)×1	97・137 d9	3	8	口縁部	良好	長石砂粒・ 小石	RL縄文施文後沈線	口縁断面三角形、内面に ついて口縁部は横方向、 胴部は縦方向のミガキ調 整	
図IV-10	93	Ⅲ群b1類 櫻林式並行	I13(Ⅳ)×1	a3	1				1	口縁部	やや良	繊維・長石 小砂粒	RL縄文施文後沈線	口縁断面三角形、内面に ついて口縁部は横方向、 胴部は縦方向のミガキ調 整	
図IV-10	94	Ⅲ群b1類 櫻林式並行	H-6(攪乱)×1	24	3	H-6(攪乱)×1	24	1	4	口縁部	良好	長石砂粒・ 角閃石小粒	RL縄文施文後沈線	口縁断面三角形、内面に ついて口縁部は横方向	
図IV-10	95	Ⅲ群b1類 櫻林式並行	M9(Ⅳ)×2	17	2					口縁部	良好	角閃石小粒・ 小石・繊維	RL縄文施文後、沈線	断面微妙に肥厚し、沈線 を施す。内面は口縁部横 方向に、胴部縦方向にミ ガキ調整	
図IV-10	96	Ⅲ群b1類 櫻林式並行	M9(Ⅳ)×1	14	1					口縁部	良好	長石砂粒	RL縄文施文後沈線	口唇部に平坦面、そこに 沈線、IV群a類のIV群a類 渦元の可能性あり	
図IV-10	97	Ⅲ群b1類 櫻林式並行	J12(Ⅳ)×3	c13・c14	3					口縁部	良好	砂粒	RL縄文施文	断面三角形の口縁部を成 形後、縄文施文、口唇部 に渦巻き文様	
図IV-10	98	Ⅲ群b1類 櫻林式並行	J7(Ⅳ)×2	3	2					胴部	やや良	長石砂粒	RL縄文施文後表面を軽 くナデ、そして沈線文	内面ミガキ調整	
図IV-10	99	Ⅲ群b1類 天神山式並行	K8(Ⅳ)×1	6	1				1	口縁部	やや良	長石砂粒・ 小石	LR縄文施文、円形刺突の 連続	波頂部、ボタン状突起 の上から刺突	
図IV-10	100	Ⅲ群b1類 天神山式並行	K9(Ⅳ)×1 M9(Ⅳ)×1	12 d21	2				2	口縁部	良好	長石砂粒	RL縄文施文後、隆帯を貼 付、隆帯上は半載竹管に よる押し引き	屈曲するように外反する 口縁部、内面横方向のナ デ調整	
図IV-10	101a・b	Ⅲ群b1類 天神山式並行	M8(Ⅳ)×3 J10(Ⅳ)×1 I11(Ⅳ)×1 L9(Ⅳ)×1	32・34 d6 c9 14	6	K9(Ⅳ)×1 L9(Ⅳ)×1 M8(Ⅳ)×2	7 22 29・30	4	10	口～胴部	やや良	長石砂粒・ 繊維・小石	RL縄文施文後半載竹管 による沈線文、隆帯上は 半載竹管による押し引き	棒状突起、内面胴部は縦 方向のミガキ調整、断面 三角形の口縁部には2列 の円形刺突	
図IV-11	102	Ⅲ群a類	O13(Ⅳ)×1	1	1	O13(Ⅳ)×7	1	7	8	底部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒・ 海綿骨針・ 繊維	ミガキ調整	底径5cm前後	
図IV-11	103	Ⅲ群a類	J9(Ⅳ)×1	29	1				1	底部	やや良	繊維・長石 砂粒と小石	結束のあるLR縄文 底 面ミガキ調整	底径9cm前後 内面縦方 向のミガキ調整	
図IV-11	104	Ⅲ群a類	O12(Ⅳ)×3 O13(Ⅳ)×2	6・d5 1	5				5	底部	やや良	角閃石小粒・ 海綿骨針・ 繊維いすれ も微量	RL縄文 底面微妙な上 げ底にミガキ調整	底径8cm前後	
図IV-11	105	Ⅲ群a類	M10(Ⅳ)×1	38	1				1	底部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒・ 海綿骨針・ 繊維・石英	底面際は繩物の圧痕の上 に周囲のみ粘土を薄く盛 る	摩滅著しい	
図IV-11	106	Ⅲ群a類	M8(Ⅳ)×1	25	1	K9(Ⅳ)×1 M8(Ⅳ)×3	27 17	4	5	底部	やや良	繊維・長石 骨針・海綿	RL縄文 底面ナデ調整	底径10cm前後	
図IV-11	107a・b	Ⅲ群a類	J20(木椀)×9	54	9				9	底部	やや良	繊維・長石 砂粒と小石	結束のあるRL縄文 底 面ミガキ調整	底径6.5cm前後	
図IV-11	108	Ⅲ群a類	K9(Ⅳ)×1	28	1				1	底部	やや良	繊維・長石 砂粒と小石	底面際は短刻線の連続 微妙な上げ底にミガキ調 整	底径9cm前後	
図IV-11	109	Ⅲ群a類	M17(Ⅳ)×1	35	1				1	底部	やや良	繊維・長石 砂粒と小石	RL縄文 底面ミガキ調 整の上に魚類の椎骨	底径9cm前後	
図IV-12	110	Ⅲ群b2類大 安在B～Ⅲ 群b1類櫻林 まで下る可 能性あり	L9(Ⅳ)×1	8	1				1	胴部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒・ 海綿骨針・ 小石	r縄による単軸絡糸体を 縦方向に施した後、沈線 文	摩滅著しい	
図IV-12	111	Ⅲ群b2類中 の平(大木 9)式並行	H-15(覆土上) ×1 H-15(覆土中) ×5 K9(Ⅳ)×1 L13(Ⅳ)×1 N17(Ⅳ)×1 O16(風倒木) ×1 表面採集×1	47 39・40 29 9 35 33 4	11	K9(Ⅳ)×1 M16(Ⅳ)×1	37 42	2	13	口～胴部	やや良	長石砂粒・ 小石	LR縄文施文後、沈線文、 円形刺突	内面横方向のミガキ調整	
図IV-12	112a～c	Ⅲ群b2類大 安在B式	I10(Ⅳ)×1 I12(Ⅳ)×3 J8(Ⅳ)×1 J14(Ⅳ)×1 K14(Ⅳ)×2	7 d13 b5 b7 a不明・d2	8	I12(Ⅳ)×1 J10(Ⅳ)×15 K12(Ⅳ)×1 K13(Ⅳ)×1 K14(Ⅳ)×10 N14(Ⅳ)×1 N19(Ⅲ)×1	2 2・b5・b10・b1 1・b14・b15・b 23・d8 d6 9 8・14・a2・a6・ a7・a9・b1 d1 2	30	38	胴部	やや良	長石砂粒・ 小石	r縄による単軸絡糸体を 縦方向に施した後、半載 竹管による沈線文	内面縦方向のミガキ調整	
図IV-12	113	Ⅲ群b3類 レンガ台式	H-10(トレン チ)×1 O8(Ⅳ)×1	80 a8	2				2	2	口縁部	やや良	長石小石	隆帯貼付後、RL縄文施文、 隆帯直下は無紋地	内面横方向のミガキ調整、 口唇部に沈線
図IV-12	114	Ⅲb-2～3類	M18(Ⅳ)×1	35	1				1	1	底部	良好	砂粒	底面ミガキ、底面内部突 起	
図IV-12	115	Ⅲ群b3類ノ ダツⅡ式	J7(Ⅳ)×1	7	1				1	1	頸部	良好	角閃石小粒・ 海綿骨針	RL縄文施文	隆帯貼付後、縄文施文、そ の後短刻沈線文



図番号	掲載番号	土器分類	図化した点数			残			総 点数	部位	焼成等	目立った 混入物	施文の特徴	備考・追加事項
			遺構(層位)・調査 区(層位)×点数	遺物番号	点数	遺構(層位)・調査 区(層位)×点数	遺物番号	点数						
図IV-32	112a・b	IV群a類 元I式	I28(IV)×1 J20(III)×1 K26(IV)×2 K27(IV)×1 K28(IV)×1 L28(III)×2	7 3 1 2 2 3	8	J17(IV)×1 K16(IV)×1 L15(IV)×1 L16(IV)×1 P17(IV)×1	52 52 11 30 55	5	口～胴部	良好	長石砂粒・ 角閃石小粒・ 繊維	LR縷文を横走させた後、 沈縷文を胴部に施文、口 縁部にLR縷線を施す	強い屈曲部を持つ、内面 について胴部の膨らみの ピークより上は横方向の ミガキ調整、下は縦方向 のミガキ調整である	
図IV-32	113	IV群a類 元I式	H28(IV)×1	13	1				1	口縁部	良好	角閃石小粒 密	RL縷文を横方向に施文した 後、2本一組の沈縷で文様	内面について横方向のミ ガキ調整
図IV-32	114	IV群a類 元I式並行	I16(III)×3 I16(IV)×4	1 4・7	7	I16(IV)×5	4・20	5	12	口縁部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒・ 砂粒・海綿 骨針	ナデ調整によって器面を 無文にし、沈縷文様、口縁 部を沈縷によって折り返 し口縁裏にするが、折り 返し形状はない	内面はミガキ調整
図IV-32	115a・b	IV群a類 元I式	H20(III)×1 I19(IV)×4 I20(IV)×1 J21(IV)×1	2 55 50 5	7				7	口～胴部	やや良	角閃石小粒 密・海綿骨 針	L縷文を横走させた後、 沈縷文を胴部に施文、口 縁部にLR縷線を施す	強い屈曲部を持つ、内面 について胴部の膨らみの ピークより上は横方向の ミガキ調整、下は縦方向 のミガキ調整である
図IV-32	116	IV群a類 元I式	J11(IV)×3	a8・c19・c22	3	J11(IV)×12	b11・c12・c22・ c24・c26	12	15	口～胴部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒・ 海綿骨針微 量	LR縷文を施した後、折り 返し口縁を成形する。口 縁部は無文とし、縷文地 文の上から沈縷文を施す	内面について縦方向のミ ガキ調整、口縁部内面 のみ輪積痕が残る、口唇 部は一本の粘土紐で成形し、 平坦面をとる
図IV-32	117a・b・c	IV群a類 元I式	M9(IV)×1 O9(IV)×14 P8(IV)×1 P9(IV)×1	c5 8・15・17・b7・b9 32 a8	17	L9(IV)×1 M9(IV)×1 O9(IV)×5 P9(IV)×2 P13(IV)×1	b6 8 28・30・32・41・b9 15・a2 d1	10	27	口～胴部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒	LR縷文を横走させた後、 沈縷文を施す	頸部とその上は横方向、 下は縦方向のミガキ調整 だが、頸部からよく外反 する
図IV-32	118	IV群a類 元I式新	M15(IV)×2	21	2	M20(III)×3 N20(III)×1 M20(IV)×1	1 2 11	5	7	胴部	やや良	長石砂粒・ 砂粒	LR縷文地文を横走させ た後、沈縷文様を施す	内面について胴部の膨ら みのピークより下は縦方 向、その上は横方向のミ ガキ調整である。
図IV-32	119a・b	IV群a類 元I式	N14(IV)×3	c9・d11	3	N14(IV)×2	c9・d11	2	5	口～胴部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒	LR縷文地文に折り返し 口縁を成形し、口縁部 にはLR縷文を横走させる 器面には沈縷文を施す	内面についてミガキ調整 だが、輪積痕が残る
図IV-33	120	IV群a類 元I式・磨消 し	L18(IV)×1 M16(IV)×1 M18(IV)×3 M18(風倒木) ×1	28 21 19・44・53 41	6	L12(IV)×1 L15(IV)×1 M12(IV)×1 M17(IV)×2 M18(IV)×3 N16(IV)×1 N17(III)×1 N17(IV)×1 N19(IV)×1 S26(IV)×1	b5 95 c7 36・64 19・80 33 5 43 10 1	13	19	口縁部	やや良	長石砂粒と 小石	折り返し口縁成形後、RL 縷文縦方向に施文、そして 磨消	内面について、口縁部に 沿って肥厚帯、そして沈 縷で縁取り。主にミガキ 調整
図IV-33	121	IV群a類 元I式	M20(III)×1	18	1				1	口縁部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒	折り返し口縁成形後、沈 縷文	内面について横方向のミ ガキ調整
図IV-33	122	IV群a類 元I式・磨消 し	K13(IV)×2	1	2	J12(IV)×1 L13(風倒木)×1	6 18	2	4	口縁部	やや良	長石砂粒	折り返し口縁成形後、RL縷 文縦方向に施文、そして磨消 し	内面について横方向のミ ガキ調整
図IV-33	123	IV群a類 元I式	I12(IV)×1	c16	1				1	口縁部	良好	長石砂粒	折り返し口縁成形後、LR 縷文施文、そして沈縷 頂部から真通孔を穿つ	内面について磨滅著しい
図IV-33	124	IV群a類 元I式・磨消 し	I20(III)×1 J10(IV)×1 K12(木根)×1 L12(IV)×3 J9(IV)×4	1 a2 17 9・a9 6・13・20	6	K10(IV)×1 L15(IV)×1 M18(IV)×1 O13(IV)×2 J9(IV)×1	c6 31 53 1・7 16	5	11	胴部	良好	長石砂粒	RL縷文施文後、磨消文様	内面について縦方向のミ ガキ調整
図IV-33	125a～e	IV群a類 元I式・磨消 し	N8(IV)×1 N9(IV)×3 O8(IV)×4	c8 b15 18・21・34・37	12	K9(IV)×1 N8(IV)×5 O8(IV)×1 O9(IV)×1	d3 7・c1・c7・c8 22 38	9	21	口縁部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒・ 海綿骨針	RL縷文施文後、磨消文様	内面について横方向のミ ガキ調整
図IV-33	126a・b	IV群a類 元I～II式 並行	N20(III)×2	2	2	N18(III)×1 N19(IV)×1 N20(IV)×1	4 19 5	3	5	口縁部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒・ 砂粒	貼付によって折り返し口縁 を成形後、RL縷文施文お よびナデによって無文にした 口縁部に長柄円形の沈縷 文、縷文地文にも沈縷文と ミガキで磨消縷文	内面はミガキ調整、口縁 部は横方向
図IV-33	127a・b	IV群a類 元I式	J12(IV)×1 J12(IV)×2 排土×1	c19 d9・13 96	4	I11(IV)×1 J12(IV)×8 J13(IV)×2 J14(IV)×1 M16(III)×1	18 a2・a10・a11・c 3・d1・d12・d13 b22・d13 a4 3	13	17	口縁部	やや良	角閃石小粒・ 長石砂粒	LR縷線を横走させた後、 折り返し口縁部を貼付に よって成形、口縁部には 同一原体を縦走させ、上 縁部は無文にして沈縷を施 す	内面は横方向のミガキ調 整
図IV-33	128a・b	IV群a類 元I式	K10(IV)×1 L11(IV)×1	22 a5	2				2	口縁部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒	ナデ消して無文にした器 面にLR縷線を2本施し、 単本による沈縷文を施す	内面についてミガキ調整
図IV-33	129	IV群a類 元I式並行	M14(IV)×3	22	3				3	口縁部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒	L縷文を施文後、沈縷文を折 り返し部分にかかのように 施す。口縁部はナデ調整に よって無文としその下から 平行沈縷文を連続する	内面はミガキ調整、口 縁部は横方向
図IV-33	130a・b	IV群a類 元I式新	I11(IV)×1 I12(IV)×1 J13(IV)×2 K11(IV)×1	20 a2 a17 4	5	M11(IV)×1 I12(IV)×1 I12(攪乱)×2 L13(攪乱)×1	22 c18	2	7	口～胴部	やや良	長石砂粒	R縷による単軸絡糸体を 縦方向に施文するミガキ 調整にて無文部分を成形 後沈縷文を施す	内面横方向のミガキ調整
図IV-33	131	IV群a類 元I式並行	O16(III)×1 O16(IV)×3 O16(風倒木)×1	4 8 33	5				5	口～胴部	やや良	長石砂粒密	LR縷文を縦方向に施文 後、沈縷文を施す	磨滅著しい
図IV-33	132a・b	IV群a類 元I式新	K8(IV)×1 M15(IV)×1	7 78	2				2	口～胴部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒	LR縷文を縦方向に施文 した後折り返し口縁を成 形し、沈縷文を施す	内面横方向のミガキ調整
図IV-33	133a・b	IV群a類 元I式	L19(III)×1 N16(IV)×1 O14(木根)×1	3 9 6	3	L15(IV)×2	61・95	2	5	胴部	やや良	長石砂粒・ 海綿骨針	LR縷文を縦方向に施文 後、沈縷文様	内面についてナデ調整
図IV-34	134	IV群a類 元I式	J18(IV)×1 K19(IV)×3	a3 15・50	4				4	口～胴部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒・ 繊維	口縁部はLR縷文を横方 向に施し、胴部はLR縷文 を縦方向に施すその上から 沈縷文を施す	内面について口縁部は横 方向のミガキ調整、胴部 は縦方向のミガキ調整 口唇部は一本の粘土紐で 成形し、平坦面をとる
図IV-34	135a・b	IV群a類 元I式	H-16(覆土)×2 L12(IV)×7 L13(風倒木)×3 M11(IV)×1	18 9・d1・d4 6 8	13	K13(IV)×1 L12(IV)×3 L12(木根)×1 L12(攪乱)×2 L13(攪乱)×1 L13(風倒木)×2 M12(IV)×1	b1 9・24 14 30・31 1 6 a1	11	24	口～胴部	良好	小石・海綿 骨針	折り返し口縁を成形後、 LR縷文を横走させ、単本 による半枝竹管によって 沈縷文を施す	内面について胴部の膨ら みのピークより上は横方 向のミガキ調整、下は縦 方向のミガキ調整である

図番号	掲載番号	土器分類	図化した点数			残			総 点数	部位	焼成等	目立った 混入物	施工の特徴	備考・追加事項	
			遺構(層位)・調査 区(層位)×点数	遺物番号	点数	遺構(層位)・調査 区(層位)×点数	遺物番号	点数							
図IV-34	136	IV群a類 元I式並行	J12(IV)×5	c10・c11・c17	5				5	口～胴部	良好	長石砂粒・ 角閃石小粒	RL縄文施文後、口縁部を 沈線で区画して折り返し口 縁風に無文とするが、折 返し形状はない。胴部に平 行沈線と蛇行沈線を施す	波頂部にはRL縄線の押 圧 摩滅著しい	
図IV-34	137	IV群a類 元I式	J20(Ⅲ)×1 J20(IV)×1 K20(IV)×1 K23(Ⅲ)×1	3 11 51 2	4	I20(IV)×1 K20(IV)×1 M17(Ⅲ)×1 N13(IV)×1	32 14 4 b3		4	胴部	良好	角閃石小粒	LR縄文を横走させた後、 胴上部にナデ調整を加え 上から沈線文を施す	内面について縦方向のミ ガキ調整	
図IV-34	138	IV群a類 元I式	J13(IV)×4	a12・b7・d16・ d19	4	J12(IV)×1 J13(IV)×3 J14(IV)×2	d13 3・c3・c11 a10・d11		6	口～胴部	やや良	長石砂粒	L縄文を横走させた後、口 縁部を無文にし、その上L 縄線を2本施す。草本の半 截竹管による蛇行沈線を 施す	内面は摩滅著しい、口 縁部については輪積が残 る	
図IV-34	139	IV群a類 元I式並行	L19(Ⅲ)×1 N15(IV)×2 N16(IV)×1	3 13 64	4	H24(IV)×1 L18(Ⅲ)×1 L18(IV)×2 M18(IV)×1	7 1 13 83		5	口～胴部	やや良	長石砂粒密	LR縄文施文後口縁部を ナデによって無文にし、 LR縄線口縁部文様帯下 の胴部には草本の半截竹 管による蛇行沈線の垂下	内面についてはミガキ調 整、口縁部は横方向	
図IV-35	140	IV群a類 元I式並行	M18(攪乱) ×1	6	1	M18(IV)×2 M18(攪乱)×4	46・53 6		6	口縁部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒 密	L縄文を施文後、沈線文を折 り返し部分にかかるとに施 す。口縁部はナデ調整によ って無文としてここに平行沈線文	折り返し口縁を環積みに よって成形する。内面は ミガキ調整だが輪積が残 る	
図IV-35	141	IV群a類 元I式並行	M18(IV)×4 M18(攪乱) ×1	43・76・53 6	5	M18(IV)×11	28・36・43・53		12	口縁部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒・ 海綿骨針微 量	L縄文を施文後、沈線文を 折り返し部分にかかるとに よって施す	折り返し口縁を環積みに よって成形する。内面は ミガキ調整、口縁部は横 方向、胴部は縦方向	
図IV-35	142	IV群a類 元I式	P19(Ⅲ)×1	11	1				1	口縁部	良好	角閃石小粒 密	LR縄文を横走させた後、 折り返し口縁を成形し、 沈線文を施す	内面について口縁部は横 方向、胴部は縦方向のミ ガキ調整	
図IV-35	143a～c	IV群a類 元式並行	L10(IV)×38 排土×1	18・23・35・c6・ 不明 71	38	L10(IV)×50 L11(IV)×2 M11(IV)×1	9・16・18・23・3 5・b6・b12・b13 25・b8 8		53	胴～底部	良好	長石小石・ 砂粒	L縄文を横走させた後沈 線文を施す	内面はミガキ調整	
図IV-35	144a～c	IV群a類 元I式並行 b2類の可 能性あり	L15(IV)×4 M17(Ⅲ)×6 M17(IV)×4 M18(Ⅲ)×2 N16(Ⅲ)×1 N16(IV)×1	11・29・61・101 1・4 17・36 5 4 9	19	H-20(覆土最 上部)×1 K21(Ⅲ)×1 K23(IV)×1 K28(IV)×1 L15(IV)×1 L20(IV)×1 L21(Ⅲ)×1 L22(風倒木)×1 M17(Ⅲ)×3 M17(IV)×8 N16(Ⅲ)×1 N17(Ⅲ)×1 N17(IV)×1 N23(Ⅲ)×1 O22(IV)×2 P17(IV)×1 P22(IV)×2	197 2 28 12 63 10 3 10 4 17・19・50 2 2 14 7 3・5 24 1・13		31	26	胴部	やや良	長石砂粒	ナデ消して無文にした器 面にL縄文による単軸器 全体を縦方向に施文、そ の上から沈線文を施す	内面縦方向のミガキ調整
図IV-36	145a・b	IV群a類 元I式並行 H-20に 関連	L13(IV)×1 M14(IV)×1 M16(IV)×3 M16(不明)×1 O16(IV)×1	d3 15 31 不明 11	7	H-20(覆土)×1 H-20(覆土)×1 K11(IV)×1 L17(IV)×1 M16(IV)×2 N15(IV)×1 N16(IV)×2 N19(IV)×1 不明×4	20 25 c14 18 21・31 48 43 10 不明		14	21	口～胴部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒 密	RL縄文を施文後貼付に よって折り返し口縁を成形 し、沈線文を胴部にかか てて施す	ミガキ調整
図IV-36	146	IV群a類 元式	P8(IV)×2	5・11	2				2	口縁部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒	口縁部に折り返し口縁風に 輪積み痕を微妙に残した上 に沈線文様を描く、折り返 し口縁成形前にRL縄文を 施文している可能性がある	内面について横方向のミ ガキ調整	
図IV-36	147	IV群a類 元I式新	M12(IV)×1 P15(IV)×1	c3 26	2				2	口縁部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒・ 海綿骨針	LR縄文地文を横走させ た後、沈線文様を施す	内面については横方向の ミガキ調整	
図IV-36	148	IV群a類 元I式新	P20(IV)×1	9	1	P20(IV)×5 不明×2	9・15 4		7	8	口縁部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒	RL縄文を縦方向に施文 し、折り返し口縁部分を 成形ミガキ調整を施すそ の上で沈線文様を施文	内面について横方向のミ ガキ調整
図IV-36	149	IV群a類 元式26a之 別個体	K14(IV)×3	a2・6	3	K12(IV)×2 K13(IV)×2 K14(IV)×2 L14(IV)×1	25・33 a5・c6 7・b3 a13		7	10	口縁部	やや良	長石小粒と 小石	RL縄文を縦走させた上 に沈線文様を描く	内面について縦方向のミ ガキ調整
図IV-36	150a・b	IV群a類 元I式新	M17(IV)×4 N17(IV)×3 I15(IV)×1	64・75・92 64・75 35	7				7	胴部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒	LR縄文を縦方向に施文 した後、沈線文を施す	内面横方向のミガキ調整 だが輪積が残る	
図IV-36	151	IV群a類 元I式並行	K15(IV)×1 L16(IV)×1 P17(IV)×1	20 19 25	4				4	胴部	やや良	長石砂粒・ 砂粒	LR縄文を縦方向に施文 後、沈線文を施す	内面はミガキ調整	
図IV-36	152a・b	IV群a類 元I式新	O8(IV)×1 N17(IV)×1	c8 40	2	L9(IV)×1	d9		1	3	口縁部	やや良	長石砂粒・ 小石	LR縄文を縦方向に施文し、 折り返し口縁部分を整形 した後、沈線文を施文する。	内面について横方向のミ ガキ調整
図IV-36	153	IV群a類 元I式新	P8(Ⅲ)×1 P8(不明)×1 P9(IV)×8 P9(不明)×1	d1 c3 12・14・15・a8 不明	11	P9(IV)×5	12・19・a7		5	16	胴部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒	LR縄文を縦方向に施文 した後折り返し口縁を成 形し、沈線文を施す	内面横方向のミガキ調整
図IV-36	154a～c	IV群a類 元I式新	I19(IV)×1 I20(IV)×2 J20(IV)×5 K19(IV)×1 M16(IV)×1	40 19・不明 19・44 50 88	9	I20(Ⅲ)×1 J20(IV)×1 M10(風倒木)×1 P17(IV)×1 N15(IV)×15	5 19 19 25 31・36・75		4	13	胴部	やや良	長石砂粒・ 海綿骨針	LR縄文を縦方向に施文 した後、沈線文を施す	内面は摩滅により調整不 明
図IV-37	155a～e	IV群a類 元I式並行	N15(IV)×10 N16(IV)×1 O9(IV)×1 O19(IV)×1 I11(IV)×1	13・25・26・31・ 36・70 33 8 12 b6	14	N16(IV)×1 P13(IV)×2	33 a12・b9		18	32	口～胴部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒・ 海綿骨針	RL縄文縦方向に施文後、 沈線文を施す。沈線文 文前に貼付によって折 返し口縁成形をする	内面はミガキ調整
図IV-37	156a・b	IV群a類 元式	M15(IV)×1 O20(IV)×2 P15(IV)×1	8 5 4	5	L13(風倒木) ×1	18		1	6	口縁部	やや良	長石砂粒・ 海綿骨針	RL縄文を施文後、沈線文 を描く。沈線間には剥突 並ぶ	内面について横方向のミ ガキ調整・内筒する器形

図番号	掲載番号	土器分類	図化した点数			残			総 点数	部位	焼成等	目立った 混入物	施工の特徴	備考・追加事項
			遺構(層位)・調査 区(層位)×点数	遺物番号	点数	遺構(層位)・調査 区(層位)×点数	遺物番号	点数						
図IV-37	157a~c	IV群a類通元I式並行	I19(IV)×1 O19(III)×1 O19(IV)×1 O20(IV)×2 P19(IV)×2	23 2・5 21 3・5 5・11	7	M17(IV)×1 O18(IV)×2 O19(III)×1 O20(III)×1 P19(III)×3 P19(IV)×1 不明×1	19 14・20 2 1 5 7 14	10	口~胴部	やや良	角閃石小粒 密	口縁部成形後RL縄文を縦方向に施工し、その上に沈線と円形刺突	内面はミガキ調整	
図IV-37	158	IV群a類通元I式並行	H-10(トレンチ)×1 H-16(掘土下位)×1 M9(IV)×1 J9(IV)×2 J10(IV)×3 K10(IV)×1	79 82 c21 13 2・a11・c12 5	3			3	胴部	やや良	長石砂粒・ 繊維・海綿 骨針	折り返し口縁部が剥落。 RL縄文施工後沈線文施工	内面はミガキ調整	
図IV-37	159a~c	IV群a類通元I式新	J10(IV)×3 K10(IV)×1	2・a11・c12 5	6	K10(IV)×1	12	1	7	胴部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒	LR縄文地文を縦方向に 施工後、沈線文様を施す	内面については縦方向の ミガキ調整
図IV-38	160	IV群a類通元I式新	L16(IV)×1	30	1	L19(IV)×1	34	1	2	口縁部	やや良	長石砂粒・ 小石	LR縄文を横方向に施工 した後、沈線文を施す	内面は摩滅により調整不 明
図IV-38	161a~c	IV群a類通元II式	I12(IV)×4 J10(IV)×1	a10・c11 d3	5	I12(IV)×2 I13(IV)×1 J10(IV)×2 J12(IV)×4	c11 5 b20 a11・d12	9	14	胴部	やや良	長石砂粒	L縄文を縦方向に施した 後、沈線文を施す	内面については横方向の ミガキ調整
図IV-38	162a~d	IV群a類通元II式	J12(IV)×2 J13(IV)×1 K12(IV)×8 K12(木根)×1 L12(IV)×1	6・b13 b8 a3・17・b8・d3・6・7 23 a5	13	H-7(ヘルト 上位)×1 J10(IV)×2 J11(IV)×5 J12(IV)×2 K10(IV)×1 K11(IV)×6 K12(IV)×2 L10(IV)×1 I11(IV)×2	54 b20・c14 a2・b11・c19・d4 6・b9 5 a7・b6・b8・d20 a7・d6 a9 c11	22	35	口~胴部	やや良	長石砂粒・ 小石	L縄文を縦方向に施工後、 沈線文を施す	内面横方向のミガキ調整 たか輪模痕残る
図IV-38	163a~b	IV群a類通元I式新	L20(III)×2 L20(IV)×2 M20(III)×2 M20(IV)×1	2 10・29 1 11	7			7	胴部	やや良	長石砂粒・ 砂粒	LR縄文地文を横走させ た後、沈線文様を施す	内面については胴部の膨ら みのピークより下は縦方 向、その上は横方向のミ ガキ調整である。	
図IV-38	164a~b	IV群a類トリサキ式	M9(IV)×1 N9(IV)×1	b7 a18	2			2	口縁部	やや良	長石砂粒・ 繊維	ナデ調整によって無文にし た後、LR縄の車軸線全体を 縦方向に施工の後、口唇部 に粘土紐を一本貼付して平 坦面を整え、沈線文を施す	内面は横方向のミガキ調 整	
図IV-38	165a~b	IV群a類トリサキ式	J18(III)×1 K19(IV)×3 K20(III)×1 K20(IV)×1	1 15・29 4 12	6	K20(III)×1	4	1	7	胴~底部	やや良	長石砂粒	LR縄文を横方向に施工、 その後沈線文を施す。底 面は微妙に上げ底でミガ キ調整	縦方向のミガキ調整
図IV-38	166a~b	IV群a類トリサキ式	I19(IV)×1	40	2	I18(IV)×1 I19(III)×1 I19(IV)×2 I20(III)×2 I20(IV)×1 J19(IV)×1 J20(III)×1 J20(IV)×1 K19(III)×1 K19(IV)×2	38 9 3・5・1 5 50 c4 3 11 3 15・29	13	15	口縁部	やや良	角閃石小粒・ 長石砂粒	器面をナデ調整によって 無文にし、その上に沈線 文を施す	内面は横方向のナデ調整・ 口縁部断面はやや上方に 伸ばし気味に、丸みをお びた面をとる
図IV-38	167a~c	IV群a類トリサキ式	I13(IV)×2 I14(IV)×1 J14(IV)×1	c7 b4 b6	4	I13(IV)×5 J13(IV)×1 J14(IV)×1	2・5 10・c6・c9 d8	7	11	口~底部	良好	角閃石小粒・ 長石砂粒・ 繊維	ナデ調整して無文にし た後に沈線文を施す	内面は横方向のナデ調整
図IV-39	168	IV群a類通元式並行トリサキ式よりは降らない	P14(IV)×1	a6	1			1	1	口縁部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒	頸部の肥厚帯と把手部分 を粘土紐で貼付後、ナデ 調整をして無文の器面に する	内面は頸部より上は横方 向のミガキ調整、頸部より 下は縦方向にミガキ調整 である。壺形の器形である
図IV-39	169	IV群a類通元式並行トリサキ式よりは降らない	L23(III)×1	1	1	N23(III)×1	7	1	2	口縁部	良好	長石砂粒・ 角閃石小粒	粘土紐貼付後、ミガキ調 整をして沈線文および 貫通孔を施す	内面は横方向のナデ調整 である壺形の器形である
図IV-39	170	IV群a類通元式並行トリサキ式よりは降らない	M17(IV)×1 N15(IV)×1 N16(IV)×1	50 48 43	3			3	3	胴部	やや良	長石砂粒・ 海綿骨針・ 角閃石小粒	ミガキ調整を施した後、 無文の隆帯を貼付。区画 内を沈線文で縁取る	内面は横方向のミガキ調 整。壺形の器形である
図IV-39	171a~b	IV群a類通元式並行トリサキ式よりは降らない	J17(IV)×1 K20(IV)×2	39 51	3	I16(IV)×1 J17(IV)×1 J18(IV)×2 J20(IV)×1 K12(IV)×1 K18(IV)×2 K19(III)×1 K19(IV)×3 L16(IV)×1 M15(III)×1	7 37 9・35 19 33 11・15 3 29 10 1	14	17	口縁部と 底部	良好	長石砂粒・ 角閃石小粒 小石	沈線文施工後、ミガキ調 整を施す	浅鉢型の器形である
図IV-39	172	IV群a類通元式並行トリサキ式よりは降らない	M15(IV)×8	39・71・75	8			8	8	底部	やや良	長石砂粒が 密である	丁寧なナデ調整の後に沈 線文を施す	壺形と考える。内面はミ ガキ調整である
図IV-39	173a~c	IV群a類通元式並行トリサキ式よりは降らない	O15(IV)×4	7・22	4			4	4	胴部の切 断部分	良好	長石砂粒・ 角閃石小粒	壺形器形を成形後、草本 の蓋を割ったもので貫通 孔を連続して施し、切り離 したものである。沈線文 の後にミガキ調整を施す	内面はミガキ調整。壺形 の器形である。切断後 にもミガキ調整
図IV-39	174	IV群a類通元式並行トリサキ式よりは降らない	J18(IV)×2 不明×1	26・30 不明	3			3	3	胴部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒	沈線文を施工後、ミガキ 調整を施す	内面は摩滅著しい
図IV-39	175	IV群a類通元式並行トリサキ式よりは降らない	L14(IV)×6	a13	6			6	6	胴部	やや良	角閃石小粒	沈線文を施工後、隆帯を 貼付し、ミガキ調整を施 す。黒色化の処理をする	内面に黒色の塗膜残る
図IV-39	176	IV群a類通元式並行トリサキ式よりは降らない	L9(IV)×1 M9(IV)×2	a2 2	3	I17(IV)×1 N8(III)×1 N8(IV)×1	44 c3 39	3	6	胴部	良好	長石砂粒・ 角閃石小粒	沈線文施工後、ミガキ調 整を施す。表面に未塗り 痕残る	壺形と考える。内面はミ ガキ調整である
図IV-39	177	IV群a類通元式並行トリサキ式よりは降らない	I20(IV)×2	32	2			2	2	胴部の切 断部分	良好	長石砂粒と 角閃石小粒 でいずれも 筒細なもの がまばらに	壺形器形を成形後、細い 針状のもので貫通孔を連 続して施し、切り離れた ものである。ミガキ調整 がまばらにの後に沈線文 を施す	内面はナデ調整で砂粒が 動く。壺形の器形である 。切断後にもミガキ調整
図IV-39	178	IV群a類通元式並行トリサキ式よりは降らない	I19(IV)×1	47	1			1	1	胴部	良好	角閃石小粒	粘土紐貼付後、ミガキ調 整をして沈線文を施す 未塗り痕が残る	内面はナデ調整で砂粒が 動く。壺形の器形である

図番号	掲載番号	土器分類	図化した点数			残			総 点数	部位	焼成等	目立った 混入物	施工の特徴	備考・追加事項
			遺構(層位)・調査 区(層位)×点数	遺物番号	点数	遺構(層位)・調査 区(層位)×点数	遺物番号	点数						
図IV-39	179a~c	IV群a類 元式並行ト リサキ式より は降らない	L14(IV)×1 L14(覆土)×1 I20(IV)×1	a12 13 49	3	I20(IV)×2	43	2	5	胴部	良好	長石砂粒・ 角閃石小粒	沈線文施文後、隆帯を貼 付し、ミガキ調整を施す	小型の歪形と考える。内 面はミガキ調整である 朱塗り痕残る
図IV-39	180	IV群a類 元式並行ト リサキ式より は降らない	M14(IV)×1	5	1				1	口縁部	良好	長石砂粒・ 角閃石小粒	沈線文施文後、ミガキ調 整を施す	小型の浅鉢型の器形であ る。内面はミガキ調整で ある。朱塗り痕残る
図IV-40	181	IV群a類 元式並行 I式の範 疇	M8(IV)×2	43	2	P9(IV)×1	12	1	3	口縁部	やや良	長石砂粒と 小石・角閃 石小粒	LR縷文を横走させた後 にボタン状突起を貼付し その上に、LR縷線を2本 押圧する。突起の中心に LR縷線を押圧する	内面はミガキ調整、口縁 部は横方向、より下は縦 方向
図IV-40	182	IV群a類 元式並行 I式の範 疇	P10(IV)×1	a13	1				1	口縁部	良好	角閃石小粒・ 長石砂粒・ 海綿骨針	無文部分にR縷の単軸絡 糸体を横走させ、その上 にボタン状突起を貼付し、 中央に縷線を圧入する	内面はミガキ調整だが口 唇部裏面に折り返し口縁 風に輪積痕が残る
図IV-40	183	IV群a類 元式並行 I式の範 疇	M18(IV)×1	43	1				1	口縁部	やや良	長石砂粒・ 小石	LR縷文を施文後、ボタン 状突起を貼付し、その上 から円形刺突を押し、口 縁部には円形刺突を押し 引き風を施す	内面はミガキ調整
図IV-40	184	IV群a類 元式並行 I式の範 疇	J13(IV)×1	c20	1				1	口縁部	やや良	角閃石小粒 密	ナデ調整で無文の上 にタグ状の貼付帯と、ボタ ン状の貼付を施す	内面についてナデ調整だ が輪積痕が残る
図IV-40	185	IV群a類 元式並行 I式の範 疇	L10(IV)×1	3	1				1	口縁部	良好	長石砂粒・ 角閃石小粒	無文部分にRL縷線、その 上に無文のボタン状突起 を貼付	内面はミガキ調整、口縁 部は横方向
図IV-40	186	IV群a類 元式並行 I式の範 疇	排土×2	30	2				2	口縁部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒	ナデ調整の上にボタン状 貼付を押し、その上か らLR縷線を押し引き	内面はミガキ調整だが指 頭圧痕残る
図IV-40	187	IV群a類 元式並行 I式の範 疇	M18(IV)×1	19	1				1	口縁部	やや良	角閃石小粒 密	ナデ調整で無文の上 にタグ状の貼付帯と、ボタ ン状の貼付を施す	内面についてナデ調整だ が輪積痕が残る
図IV-40	188	IV群a類 元式並行 I式の範 疇	O8(IV)×1	21	1				1	口縁部	やや良	角閃石小粒・ 長石砂粒・ 長石小石	ナデ調整にして無文にし た後、LR縷線、その後隆 帯を貼付し、隆帯の上に 円形刺突の連続	内面ナデ調整
図IV-40	189	IV群a類 元式並行 I式の範 疇	K10(IV)×1 L10(IV)×1	16 a9	2	K10(IV)×1 L10(IV)×2 L14(風倒木)×1	c8 13・d3	4	6	口縁部	やや良	角閃石小粒・ 長石砂粒・ 長石小石	LR縷文施文後、隆帯を貼 付して折り返し口縁を成 形する。無文の隆帯の上 に円形刺突の連続	内面ナデ調整
図IV-40	190a・b	IV群a類 元式並行 I式の範 疇	I11(IV)×1 L10(IV)×1 P24(IV)×1	a8 18 3	3	J11(IV)×1 L9(IV)×2 M11(IV)×1	d17 d4・d9 8	5	8	口縁部	やや良	角閃石小粒・ 長石砂粒	ナデ調整にして無文にし た後、半截竹管によって 沈線文および円形刺突で 沈線文の区画を充填	内面は横方向のナデ調整
図IV-40	191	IV群a類 元式並行 I式の範 疇	O12(IV)×2	a3	2	N12(IV)×1 N13(IV)×1 O12(IV)×2	b2 b3 a3・10	4	6	口縁部	やや良	長石砂粒・ 海綿骨針ま ばら	LR縷文施文後口縁部をミ ガキ調整によって無文にし た後、頸部を草本のへら によって連続して押し引き	内面は横方向のミガキ調 整
図IV-40	192	IV群a類 元式並行 I式の範 疇	P10(IV)×1	6	1				1	口縁部	やや良	長石砂粒	輪積痕を外側に残し、多 段の折り返し口縁を成形 する。その上からナデ調 整を施し無文にした上、 円形の連続刺突を施しそ の上にボタン状の貼付	内面ナデ調整
図IV-40	193	IV群a類 元式並行 I式の範 疇	M16(IV)×1	21	1				1	口縁部	やや良	長石砂粒	無文の折り返し口縁部を 成形していた粘土紐の剥 落、爪による刺突が並ぶ	内面ナデ調整
図IV-40	194a・b	IV群a類 元式並行 I式の範 疇	O9(IV)×2	17・28	2	O8(IV)×2	8・9	2	4	口縁部	やや良	長石砂粒	LR縷文を施文後、口縁部 にナデ調整を施して無文 とするとともに円形刺突 を連続して施す	内面ミガキ調整、口唇部 は横方向その下は縦方向
図IV-40	195	IV群a類 元式並行 I式の範 疇	M17(IV)×1	19	1	M17(IV)×2	19・32	2	3	口縁部	やや良	長石砂粒・ 繊維	LR縷文を横方向に施文後、 棒状の粘土紐による突起 を貼付し、L縷線を2条施す	内面はミガキ調整、口唇 部は横方向、より下は縦 方向
図IV-40	196	IV群a類 元式並行 I式の範 疇	N12(IV)×1	c10	1				1	口縁部	やや良	長石砂粒・ 海綿骨針	RL縷文施文後、口縁部に、 平行沈線の間に円形刺 突の連続を施す	内面ナデ調整
図IV-40	197	IV群a類 元式並行 I式の範 疇	N10(IV)×1 不明10(風倒 木)×1	c8 27	2				2	口縁部	やや良	小石・長石 小石	LR縷文施文後、屈曲部よ り上に、LR縷線と円形刺 突の連続を交互に施す	内面ナデ調整
図IV-40	198	IV群a類 元式並行 I式の範 疇	M9(IV)×1	26	1				1	口縁部	やや良	長石砂粒密	ナデ調整により口縁部を無 文にした後、LR縷線と円 形刺突の連続を交互に施す	摩滅著しい
図IV-40	199	IV群a類 元式並行 I式の範 疇	L11(IV)×3	14・15	3	H-12(覆土上 位)×1 I11(IV)×2 K12(木根)×1 L14(IV)×1 M10(IV)×1 M11(IV)×1 N10(III)×1 N11(IV)×1 N17(IV)×1 O9(IV)×1	1 1・b7 17 11 d7 8 a13 d8 23 33	11	14	口縁部	やや良	長石砂粒・ 海綿骨針・ 砂粒	RL縷文を施文後、胴部の 屈曲部より上に沈線と 円形刺突の連続を交互に 施す。沈線施文前に無文 の折り返し口縁部を成形 する	内面は横方向のミガキ調 整だが輪積痕残る
図IV-40	200a・b	IV群a類 元式並行 I式の範 疇	M15(III)×1 O13(IV)×1	1 12	2	K14(IV)×4 L14(IV)×1	3・b1・b5・c10 a11	5	7	口縁部	良好	長石砂粒・ 砂粒	RL縷文施文後、沈線文と 刺突を施す。口唇部には 粘土紐を一本貼付し、平 坦面を成形する	内面は横方向のミガキ調 整
図IV-40	201	IV群a類 元式並行 I式の範 疇	O8(IV)×1	27	1				1	口縁部	やや良	角閃石小粒・ 長石砂粒	ナデ調整によって無文に した上にLR縷線を施し、 その下に円形の押し引き を多段に施す	内面は横方向のミガキ調 整
図IV-40	202	IV群a類 元式並行 I式の範 疇	L28(III)×1 M28(IV)×1	2 8	2	M28(IV)×2	12	2	4	口縁部	やや良	長石砂粒・ 小石・繊維	LR縷文を縦方向に施文し た後、口縁部についてL 縷線の間に半截竹管のC 字状圧痕を連続する	内面ナデ調整 断面丸 みをおびる口唇部は一本 の粘土紐で調整
図IV-40	203	IV群a類 元式並行 I式の範 疇	P8(IV)×2	10・20	2	O8(IV)×1 O9(IV)×3 P8(IV)×4 P9(IV)×1	b3 15・17・b9 17・20・b6・c4 19	9	11	口～胴部	やや良	角閃石小粒・ 長石砂粒	LR縷文を横走させた後 にLR縷線を3本押圧する その上にボタン状突起 を貼付し、その中心にLR 縷線を押圧する	内面は縦方向のミガキ調 整
図IV-40	204	IV群a類 元式並行 I式の範 疇	H20(IV)×3	4	3				3	口縁部の 際から胴 部	良好	角閃石小粒・ 長石砂粒と 小石・海綿 骨針	LR縷文を横走させた後 にLR縷線を2本押圧する その上にボタン状突起 を貼付し、その中心にLR 縷線を押圧する	内面はミガキ調整、口縁 部は横方向、胴部は縦方 向
図IV-40	205	IV群a類 元式並行 I式の範 疇	P20(IV)×1 P20(6調査の 覆土)×1	9 2	2	P20(IV)×1	9	1	3	口～胴部	やや良	角閃石小粒・ 長石砂粒	隆帯および突起を成形後、 RL縷文施文、沈線および ミガキ調整として波 部から円形の刺突列点を 垂下させる	内面はミガキ調整、屈曲 部より上は横方向

図番号	掲載番号	土器分類	図化した点数			残			総点数	部位	焼成等	目立った混入物	施文の特徴	備考・追加事項
			遺構(層位)・調査区(層位)×点数	遺物番号	点数	遺構(層位)・調査区(層位)×点数	遺物番号	点数						
図IV-40	206	IV群a類 涌元I式の範疇	K8(IV)×1	19	1			1	口縁部のきわ	良好	長石砂粒と小石・角閃石小粒	RL縄文を施文後幅広い施文具で沈線を描き、環状の貼付をする。貼付の中心は断面円形の棒状の工具で押圧	内面はミガキ調整	
図IV-40	207	IV群a類 涌元I式の範疇	J11(IV)×1	a4	1			1	口縁部	やや良	角閃石小粒・長石砂粒・海綿骨針	ナデ調整によって無文にした上に粘土紐を貼付し、隆帯上に円形の刺突を連続させる	内面は横方向のミガキ調整	
図IV-40	208	IV群a類 涌元I式の範疇	M10(風倒木)×3	23・25	3	M11(IV)×1	11	1	口～胴部	良好	長石砂粒	RL縄文施文後、粘土紐貼付、その上に半管竹管によって押し引きを施す	内面はミガキ調整、屈曲部より上は横方向	
図IV-40	209a・b	IV群a類 涌元I式の範疇	I21(Ⅲ)×1 H20(IV)×1	1 15	2			2	口縁部	良好	砂粒・長石砂粒・海綿骨針	LR縄文施文後、沈線文と粘土の貼付、ボタン状の貼付の中央には刺突を施す	内面はミガキ調整	
図IV-40	210	IV群a類 涌元I式の範疇	H-5(覆土上位)×2	16	2			2	口縁部	やや良	砂粒・長石砂粒・海綿骨針	口縁部と三角形の突起様の波頂部を成形後、RL縄文を施文、円形の連続刺突を2段持つ	内面は縦方向のミガキ調整	
図IV-41	211	IV群a類	M17(IV)×2	36・84	2	K17(IV)×1 L15(IV)×1 M16(IV)×1 M17(IV)×4 N17(IV)×1 O9(Ⅲ)×1 O18(IV)×1 P17(IV)×1 O19(IV)×1	92 46 20 64・73 75 c3 14 25 8	12	14	口縁部	やや良	繊維・長石砂粒・海綿骨針・石英・雲母	LR縄文を縦方向に施文後、幅の広い折り返し口縁部を成形する。口縁部はナデ調整によって無文であり、LR縄線2本と無文によるものか環状の刺突が巡る	口唇部には平坦面をとる 内面についてはナデ調整
図IV-41	212a・b	IV群a類	M16(IV)×14	31・42・d2	14	H15(IV)×1 J16(IV)×1 M16(IV)×41	21 12 3・21・31・42・46・88・92・95・98・a1・d2	43	57	口縁部	やや良	繊維・長石砂粒・角閃石小粒	LR縄文を横方向に施文した後、2段の折り返し口縁部を成形するRL縄線を上段の口縁部に施文、頂部は指による成形	口唇部には丸みをおひた面をとる。内面について口縁部は横方向、胴部は縦方向のミガキ調整
図IV-41	213a・b	IV群a類	M14(IV)×3 N15(IV)×1 N19(IV)×1 O19(Ⅲ)×1 O19(IV)×1	c9・d3 43 29 2 12	7	N18(IV)×3 O13(IV)×2 O21(IV)×1 P12(IV)×1	16・29 b3・b5 7 d4	7	14	口縁部	やや良	長石砂粒・海綿骨針	LR縄文を横走させた後、頸部を挟むようにタガ状に2本の隆帯を貼付する。隆帯上は無文である。頸部の下にはLR縄線を2本施す	口唇部には平坦面をとり、一本の沈線で縁取る。内面について横方向のミガキ調整
図IV-41	214	IV群a類	M17(IV)×7	19・36・50	7				18	口～胴部	やや良	長石小石・繊維	LR縄文を横走させ頸部より上は無文とするそして折り返し口縁を成形した上にLR縄線を施す	内面について頸部とその上部は横方向、胴部は縦方向のミガキ調整である。
図IV-41	215	IV群a類	I20(Ⅲ)×1	5	1	M17(IV)×11	36・50・64	11	1	口縁部	やや良	角閃石小粒多量に	ヘラと指頭によるナデ調整によって無文にした上に、紐状の粘土を輪縁として折り返し口縁を成形する。折り返し口縁の直下にLR縄線	内面は横方向のミガキ調整
図IV-41	216	IV群a類	J21(風倒木)×1	25	1				1	口縁部	やや良	角閃石小粒・小石	外側に輪縁痕を残すようにして成形後、ナデ調整の上からLR縄文を横方向に施し、折り返し口縁部にはLR縄線	内面は横方向のナデ調整
図IV-41	217a・b	IV群a類	H20(IV)×4	9・15	4	I19(IV)×2 I20(Ⅲ)×1 I20(IV)×3	16 1 32・43	6	10	口縁部と底部	やや良	角閃石小粒・長石砂粒・海綿骨針まばら	RL縄文を縦方向に施し、頸部を挟んで2ヶ所を帯状に横方向にミガキ調整する。帯は2本のLR縄線で挟む。口唇部直下にも縄線を施す	内面は丹念に磨き調整を施す。頸部より上は横方向、胴部は縦方向である。器面について底部と底部分の器面はミガキ調整で無文にする
図IV-41	218	IV群a類	L10(IV)×4	3・18	4	L10(IV)×8	3・10・18・b11・c8・d12	8	12	口縁部	やや良	角閃石小粒・長石砂粒・長石小石	LR縄文を横走させた後、ナデ調整によって口縁部を無文にする。そこにLR縄線を1本走らせる	頸部とその上は横方向、下は縦方向のミガキ調整である。器底が縁取る。胴部は1本の粘土紐で平坦に整える
図IV-41	219	IV群a類	J20(Ⅲ)×1 J20(IV)×6	3 11・19	7	I20(IV)×1 J20(IV)×4 L20(Ⅲ)×1 L20(IV)×1	12 11・19・31 2 29	7	14	口～胴部	良好	長石砂粒・小石	LR縄文を横走させ、頸部は横方向にナデで無文にする。無文の折り返し口縁の上からLR縄線を施す	内面について胴部の膨らみ部分とその上は横方向、下は縦方向のミガキ調整である
図IV-42	220a・b	IV群a類	J11(IV)×6 J11(IV下)×2	c19・21・24・25 c12	8	J11(IV)×4 J11(IV下)×6 排土×1	c2・c19・c22・c26 c12 116	11	15	口縁部	良好	角閃石少量	LR縄文を横走させた後、頸部を横方向のミガキ調整で無文にする。口縁部にL縄線を2本施す	内面は横方向のミガキ調整
図IV-42	221a・b	IV群a類	I12(IV)×7 K10(IV)×1	a3・5・9・15 b10	8	I11(IV)×1 I12(IV)×8 I13(IV)×1 J10(IV)×2 K10(IV)×1 K11(IV)×1 K12(木根)×1 K12(IV)×2 N11(IV)×1	b3 a3・a10・b2・b12 8 21 b13 b6 17 a17 b4	18	26	口～胴部	やや良	角閃石小粒・長石砂粒・海綿骨針	LR縄文を縦走させた後、頸部より上をミガキ調整によって無文とし、そこに3本の縄線を施す	内面は磨減が著しいが、口縁部に横方向の調整が観察できる。煤が器の肩部分から上によく付着している。
図IV-42	222	IV群a類	I12(IV)×20	b2・c16・c18・c19	20	I10(IV)×1 I12(IV)×8 J12(IV)×3 L14(IV)×1 M17(Ⅲ)×1 N16(IV)×2 N19(IV)×1 O16(Ⅲ)×1 O21(Ⅲ)×1	c14 a9・b2・c16・c18・d12・d13 a2・a14・b13 c4 4 20 2 19 5	19	39	口～胴部	やや良	角閃石小粒・長石砂粒・海綿骨針	L縄文を横走させた後、胴部まで縦方向のミガキ調整で無文にする。口縁部にL縄線を2本施す	口唇部は一本の粘土紐で整え、平坦面を取る。内面について口縁部は横方向、胴部は縦方向のミガキ調整である
図IV-42	223	IV群a類	K20(Ⅲ)×2 M15(IV)×1	4 8	3	O20(風倒木)×9	15	9	12	口縁部	やや良	砂粒	LR縄文を横走させた上にLR縄線を施文	口縁部内面は横方向のミガキ調整
図IV-42	224	IV群a類	J8(IV)×4 L10(IV)×1	12・a8・d8 3	5	J8(IV)×2 K8(IV)×1 L10(IV)×2	d5・d6 a1 3	5	10	口縁部	やや良	長石砂粒・小石・海綿骨針・塩小粒の角閃石	R縄を縦方向に施文した後、R縄線を施す	口唇部には平坦面をとる。内面について口縁部は横方向、胴部は縦方向のミガキ調整
図IV-42	225	IV群a類	N14(IV)×3	8・c8	3			3	3	口縁部	やや良	長石砂粒・繊維・海綿骨針	RL縄文を横方向に施文した後、RL縄線を口縁部に施文、頂部にはヘラによるキザミ	口唇部には平坦面をとる。内面について口縁部は横方向、胴部は縦方向のミガキ調整
図IV-42	226	IV群a類	J10(IV)×3	9・a6・a8	3			3	3	口縁部	やや良	長石砂粒・海綿骨針	L縄文を横走させ、口縁部にL縄線を2本施す。	口唇部には平坦面をとる。内面について口縁部は横方向、胴部は縦方向のミガキ調整

図番号	掲載番号	土器分類	図化した点数			残			総 点数	部位	焼成等	目立った 混入物	施工の特徴	備考・追加事項
			遺構(層位)・調査 区(層位)×点数	遺物番号	点数	遺構(層位)・調査 区(層位)×点数	遺物番号	点数						
図IV-43	227	IV群a類	P10(IV)×16	2・4・6・b12・b16	16	M9(IV)×1 b4 N10(IV)×2 2 N13(IV)×1 18 N16(IV)×2 20・53 O8(IV)×2 2・c7 O10(IV)×2 6・b7 O11(IV)×2 b7・d5 P8(IV)×1 5 P10(IV)×17 2・8・b9・b12・ b16・d4 K11(IV)×1 5	31	47	口～底部	良好	長石砂粒	L縄を縦方向に施工し、口縁部にL縄線を2本施す。	口唇部には平坦面をとる内面について口縁部は横方向、胴部は縦方向のミガキ調整。底面は沈積状の痕跡が残る、底面際の際面には粘土を押し上げて成形した痕跡がある。	
図IV-43	228	IV群a類	I10(IV)×8 I11(IV)×4 J10(IV)×1 J11(IV)×3	1・3・6・7 1・5・a8・b7 d14 a8・b2	16	I10(IV)×9 1・2・3・6・8・c 2・c6 I11(IV)×11 3・4・5・18・a2・ a3・b4 J10(IV)×1 b5 J11(IV)×3 a6 K11(IV)×1 a6 K12(IV)×1 b6 L10(IV)×1 d8	27	43	口縁部	良好	長石砂粒・ 角閃石小粒・ 海綿骨針	L縄を横走させた後、口縁をナデ調整によって無文にし、そこにLR縄線を施す	口縁部は横方向のミガキ調整、胴部は縦方向ミガキ調整	
図IV-43	229	IV群a類	L9(不明)×6 L9(IV)×6	3 c11・12	12	L8(IV)×1 9 L9(Ⅲ)×1 c5 L9(IV)×7 12・c11・d5・9 L9(不明)×43 3	52	64	口～底部	良好	砂粒・水箒 よしたかのよ うな胎土	RL縄を横走させてから輪積痕が表面に残るよう無文で多段の折り返し口縁部を成形、LR縄線を2本施す	口唇部には平坦面をとる内面については主に横方向のナデ調整だが輪積痕が観察できる。底面は無文・底面際は横方向のナデ調整	
図IV-43	230	IV群a類	K8(IV)×2	15・29	2			2	口～底部	やや良	長石砂粒ま ぼろ	LR縄を横走させた後、口縁の無文部分にLR縄線を施す	口唇を1本の粘土紐で成形する。口径は7cm、底径は5cm器高は11cmである。内面について上半分は横方向、下半分は縦方向のミガキ調整	
図IV-44	231	IV群a類	H-20(覆土)×2 N19(IV)×2	146 19	4	H-20(覆土)×1 109 H-20(覆土)×4 138・146 M20(Ⅲ)×1 1 M20(IV)×2 11 N20(Ⅲ)×2 2 N20(IV)×2 5 N20(風倒木)×2 10・13 P17(Ⅲ)×1 5	15	19	口縁部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒・ 海綿骨針	LR縄文地文施工後、新たな輪積を積み上げ、無文部分を成形し、LR縄線を3本施した口縁部文様帯を持つ	内面については口縁部裏は横方向のミガキ調整、胴部は縦方向のミガキ調整	
図IV-44	232a・b	IV群a類	P21(Ⅲ)×2 P21(IV)×3	2 7	5	P21(Ⅲ)×4 2 P21(IV)×8 7・9・12 P23(IV)×1 6	13	18	口～胴部	良好	角閃石小粒・ 長石砂粒	L縄を横走させた後折り返し口縁を貼付によって成形し、L縄線を施す	内面縦方向のミガキ調整	
図IV-44	233	IV群a類	H20(IV)×10 I21(IV)×1	9 16	11			11	口～胴部	良好	角閃石小粒・ 長石砂粒	LR縄文を横走させた上に口縁部を縦方向にミガキ調整を加えて無文とし、その上に折り返し口縁を貼付して成形する。無文地の折り返し口縁上にLR縄線を施す	内面は口縁部横方向のミガキ調整だが輪積痕が残る、胴部は縦方向のミガキ調整	
図IV-44	234	IV群a類	J12(IV)×3	13・a11・b9	3			3	口縁部	やや良	長石砂粒・海 綿骨針および 角閃石小粒	LR縄文を縦方向に施工後、ナデ調整によって無文にし、LR縄線3本を施す	内面は縦方向のナデ調整、口唇のみ横方向	
図IV-44	235	IV群a類	K11(IV)×1	5	1			1	口縁部	やや良	角閃石小粒・ 長石砂粒・ 海綿骨針	LR縄文地文施工後、LR縄線を2本施した口縁部文様帯を持つ	口縁部の外反している部分は横方向、胴部は縦方向ミガキ調整	
図IV-44	236	IV群a類	I10(IV)×2 I11(IV)×1	5 d17	3			3	口縁部	やや良	長石砂粒	LR縄文を縦方向に施したのち口縁部に同一原体で3本の縄線	口唇部には平坦面をとる内面について口縁部は横方向のミガキ調整	
図IV-44	237	IV群a類	L16(IV)×3	30	3			3	口縁部	やや良	砂粒	LR縄を縦方向に施工し、口縁部をナデつけて無文にした上にLR縄線を3本施す	横方向のミガキ調整	
図IV-44	238	IV群a類	J11(IV)×4	d17	4			4	口縁部	良好	長石砂粒多 量を含む	口縁部表面に輪積痕を残しその上からLR縄文を横走させる	内面は口縁部は横方向、胴部は縦方向のミガキ調整	
図IV-44	239	IV群a類	M17(IV)×2	107	2			2	口～胴部	やや良	角閃石小粒	LR縄を横方向に施工した後、LR縄線を施す	口唇部には一本の粘土紐を貼り付けて平坦面をとる。内面について縦方向のミガキ調整	
図IV-44	240	IV群a類	N18(IV)×2	9	2	N18(IV)×4 16・38	4	6	口縁部	やや良	繊維・海綿骨 針・砂粒を微 妙に含む	器面に輪積痕を残し、その上からLR縄文を縦方向に施す	内面は横方向のナデ調整	
図IV-44	241	IV群a類	L28(Ⅲ)×1 M28(IV)×4	3 1・3	5			5	口～胴部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒	RL縄を縦方向に施工した後、RL縄線を施す	内面について口縁部横方向、胴部縦方向のミガキ調整、口径8.5	
図IV-44	242	IV群a類	J8(IV)×3	9・16	3	J8(IV)×2 9・18	2	5	口縁部	やや良	角閃石小粒・ 海綿骨針・ 微塵	LR縄文を口縁部には横方向に施工し、胴部には縦方向に施工する。その上にLR縄線を施す	口唇部は一本の粘土紐で整えて平坦面を成形した後、RL縄文を施す。内面調整は摩擦により不明だが、成形時の指頭圧痕が残る。口径10cm前後	
図IV-45	243	IV群a類	M15(IV)×1 L15(IV)×7	83 117・b2	8	M15(IV)×1 46 L15(IV)×8 46・61	9	17	口～胴部	やや良	角閃石小粒	L縄文を横走させた後貼り付けによって無文の折り返し口縁を成形する。折り返し口縁部と折り返し直下にL縄線	口唇部には平坦面をとる内面について口縁部は横方向、胴部は縦方向のミガキ調整	
図IV-45	244	IV群a類	P9(IV)×7	9・12	7	P8(IV)×4 5・10・14 P8(風倒木)×1 1 P9(IV)×21 9・12・30 O10(IV)×1 d9	27	34	口～胴部	良好	繊維・長石 砂粒と小石	LR縄文を横方向に施したのち口縁部に同一原体で1本の縄線	口唇部には平坦面をとる内面については主に横方向のナデ調整	
図IV-45	245	IV群a類	N19(IV)×2	10・19	2	N19(Ⅲ)×1 2	1	3	口縁部	やや良	角閃石小粒・ 長石砂粒・ 石英	LR縄文を縦方向に施工する。その上にLR縄線を施す。	口唇部は一本の粘土紐で整えて平坦面を成形する。内面は縦方向のミガキ調整	
図IV-45	246	IV群a類	L16(Ⅲ)×2 L16(IV)×3 L13(Ⅲ)×2 L14(IV)×1	2 10・30 9 a13	5	L16(IV)×1 74 L13(風倒木)×1 18 L14(風倒木)×1 1 L14(Ⅲ)×6 11・a11・a13 L14(攪乱)×1 13 N14(IV)×2 d11 O13(IV)×1 9 排土×1 116	13	18	口縁部	良好	角閃石小粒・ 海綿骨針・ 長石小石	LR縄を縦方向に施工した後、口縁部を横方向のナデ調整で無文にした上にLR縄線を施す	口唇部の断面形態は丸みをおびる。内面について口縁部は横方向、胴部は縦方向のミガキ調整である。内面について2段の輪積痕が明顯に残る。	
図IV-45	248	IV群a類	J18(IV)×1 K19(IV)×2 K20(IV)×1 K20(風倒木)×1	26 15 51 38	5	I19(IV)×1 16 J18(IV)×1 9 J20(Ⅲ)×2 3 J20(IV)×1 b1 K20(Ⅲ)×1 12	6	11	口～底部	良好	長石砂粒・ 角閃石小粒	結束のあるLR縄文を施したのち口縁部に同一原体で3本の縄線縄文はどこどころ口唇の平坦面にいる	口唇部には平坦面をとる内面について口縁部は横方向、胴部は縦方向のミガキ調整。底面は微妙な上げ底でミガキ調整、底面際の際面についても横方向のミガキ調整	
図IV-45	249	IV群a類	L23(Ⅲ)×1 L23(IV)×1 M15(IV)×2	1 11 89	4	K20(Ⅲ)×2 12 L21(Ⅲ)×1 3	3	7	口縁部	やや良	長石砂粒・ 繊維	LR縄文を横走させた上にLR縄線を3本施す	内面について口縁部は横方向、胴部は縦方向のミガキ調整である。	

図番号	掲載番号	土器分類	図化した点数			残			総 点数	部位	焼成等	目立った 混入物	施工の特徴	備考・追加事項
			遺構(層位)・調査 区(層位)×点数	遺物番号	点数	遺構(層位)・調査 区(層位)×点数	遺物番号	点数						
図IV-45	250	IV群a類	L15(IV)×1	31	2	M13(IV)×1	4	10	12	口縁部	良好	角閃石小粒・ 長石砂粒・ 海綿骨針	RL縄文を横走させた後、 ナデ調整によって口縁部 を無文にする。そこにLR 縄文を2本走らせる	内面は横方向のナデ調整
			M15(IV)×1	21		M15(IV)×1	16							
			M16(IV)×5	42+d2		M17(IV)×3	84+105							
図IV-46	251	IV群a類	M8(IV)×14	21・22・27・28	15	M8(IV)×4	16・28+b3	4	19	口縁部	良好	角閃石小粒・ 長石砂粒と 小石	粘土紐でタガ状に口縁部 区画区画、タガは胴部にも 巡る。隆帯貼付後LR 縄文を縦方向に施工タガ 部分は横方向に施工	内面はナデ調整 口唇部 には平坦面をとる
			不明×1	不明										
図IV-46	252	IV群a類 (天祐寺に 類似する)	L8(IV)×3	3	3			3	胴部	粗	角閃石小粒・ 長石砂粒	LR縄文・地文 胴部に2本 のタガ状にてんぶされた 隆帯、隆帯間無文、隆帯上 は縦方向、地文は横方向 に同一原体でLR縄文	摩擦著しい	
図IV-46	253	IV群a類	O16(IV)×1	19	2			2	2	口縁部	良好	長石砂粒	粘土紐でタガ状に口縁部 区画、最上段は2段連続する 折り返し口縁、隆帯貼付後 LR縄文を横方向に施工	内面は横方向のナデ調整 だが、成形時の指頭圧痕 を残す。口唇部には平坦面 をとる、RL縄文施工
			O17(風倒木)×1	11										
図IV-46	254	IV群a類 (天祐寺に 類似する)	L14(IV)×1	b14	1			1	口縁部	粗	角閃石小粒・ 長石砂粒と 小石	粘土紐でタガ状に口縁部 区画区画内無文、隆帯貼 付後LR縄文を横方向に 施工。地文は同一原体に よって縄文を横走させる	内面は横方向のナデ調整 だが、成形時の指頭圧痕 を残す。口唇部には平坦面 をとる、RL縄文施工	
図IV-46	255	IV群a類 (天祐寺に 類似する)	P9(IV)×1	c7	1			1	口縁部	やや良	角閃石小粒・ 長石砂粒と 小石・海綿 骨針	粘土紐でタガ状に口縁部 区画区画内無文、隆帯貼 付後LR縄文を横方向に 施工。最上段は2段の折り 返し口縁地文は縦方向に 施工	内面は横方向のナデ調整 口唇部には平坦面をと り、LR縄文施工	
図IV-46	256	IV群a類 (天祐寺に 類似する)	P17(IV)×1	25	1			1	口縁部	やや良	角閃石小粒・ 長石砂粒と 小石	粘土紐でタガ状に口縁部 区画区画内無文、隆帯貼 付後LR縄文を横方向に 施工。最上段は2段の折り 返し口縁地文は縦方向に 施工	内面は縦方向のナデ調整 口唇部には平坦面をと り、LR縄文施工	
図IV-46	257	IV群a類 (天祐寺に 類似する)	L19(III)×1	3	1			1	口縁部	粗	角閃石と長 石の小粒が まばらに	粘土紐でタガ状に口縁部 区画区画内無文、隆帯貼 付後LR縄文を縦方向に 施工	内面は横方向のミガキ調 整。口唇部には薄く粘土 を貼り付けて平坦面をと る	
図IV-46	258	IV群a類 (天祐寺に 類似する)	M9(IV)×1	16	1			1	口縁部		角閃石小粒・ 長石砂粒	粘土紐でタガ状に口縁部 区画区画内無文、隆帯貼 付後LR縄文を横方向に 施工。地文は別原体によ ってLR縄文を貼付前に 横方向に施工	内面は横方向のナデ調整 口唇部には平坦面をと り、口唇部には薄く粘土 を貼り付けて平坦面をと る	
図IV-46	259	IV群a類 (天祐寺に 類似する)	O15(IV)×1	7	1			1	口縁部	良好	角閃石小粒・ 長石小石が まばらに	粘土紐でタガ状に口縁部 区画区画、タガは胴部 にも巡る。隆帯貼付後 LR縄文を縦方向に施工 タガ部分は横方向に施 工。隆帯を区画する隆帯 は施工時に潰れて微妙 である	内面は口唇部について 横方向のナデ調整その下 は縦方向のナデ調整。口 唇部には平坦面をとる、 LR縄文施工	
図IV-46	260	IV群a類 (天祐寺に 類似する)	J8(IV)×2	c5	2			2	口縁部	良好	角閃石小粒 が密に・海 綿骨針	タガ状に口縁部区画区 画内無文、隆帯貼付後 隆帯を横方向に施工した 上、LR縄文また胴部は 同一原体で横方向のRL 縄文	内面は横方向のナデ調整 口唇部には平坦面をと り、LR縄文施工	
図IV-46	261	IV群a類 (天祐寺に 類似する)	O8(IV)×1	21	1			1	口縁部	良好	角閃石・長 石砂粒	タガ状に口縁部区画区 画内無文、隆帯貼付後 隆帯を横方向に施工した 上、LR縄文また胴部は 同一原体で横方向のRL 縄文	内面は横方向のナデ調整 口唇部には平坦面をと り、LR縄文施工	
図IV-46	262	IV群a類 (天祐寺に 類似する)	O9(IV)×1	8	1			1	口縁部	良好	角閃石小粒 が密に	RL縄文・地文施工後粘土 紐でタガ状に口縁部区 画区画内無文、隆帯貼 付後帯上にRL縄文を縦 方向に施工し、さらに RL縄文	摩擦著しい。口唇部は 平坦面をとる	
図IV-46	263	IV群a類 (天祐寺に 類似する)	P10(IV)×1	b13	1			1	口縁部	良好	長石砂粒	粘土紐でタガ状に口縁部 区画区画内無文・地文に 一條のLR縄文、隆帯貼 付後LR縄文を横方向に 施工	内面は横方向のナデ調整 口唇部には平坦面をと り、LR縄文施工	
図IV-46	264	IV群a類	N17(IV)×5	14・23	5			5	口～胴部	やや良	角閃石小粒・ 長石砂粒・ 海綿骨針	2段の折り返し口縁を成 形後、RL縄文を横走さ せる。最上段の折り返し 口縁は施工の方向を変 える	口唇部にはRL縄文を施 す。内面は口縁部には横 方向、胴部には縦方向、 胴部には縦方向のミガキ 調整を施す。輪痕が明 瞭である。	
図IV-46	265	IV群a類	O16(III)×1	4	1			1	口～胴部	やや良	角閃石小粒・ 長石砂粒・ 海綿骨針	頭部までいたる折り返 し口縁を持つ。LR縄文 を横方向に施工する	頸部が明瞭な小型器形 である。口径3cm。	
図IV-46	266	IV群a類	J15(III)×1	2	1	J19(III)×1	3	4	5	口～胴部	やや良	角閃石小粒・ 長石砂粒と 小石・繊維	折り返し口縁を成形後、 RL縄文を縦走させる。そ の後折り返し口縁直下 に横方向にミガキ調整 で無紋にする	内面は口縁部は横方向 にミガキ調整、胴部は 縦方向にミガキ調整。口 唇部には平坦面をとる
図IV-46	267	IV群a類	J10(IV)×1	d4	2			2	2	口縁部	やや良	長石砂粒・ 海綿骨針	折り返し口縁を成形後、 LR縄文を縦方向に施 工する。	内面は口縁部は横方向 にミガキ調整、胴部は 縦方向にミガキ調整。口 唇部には平坦面をとる
		K9(IV)×1	40											
図IV-46	268	IV群a類	N15(IV)×3	48	3			3	3	口縁部	やや良	長石砂粒・海 綿骨針・繊維	折り返し口縁を成形後、 LR縄文を横方向に施 工する。	内面は口縁部は横方向に ミガキ調整、胴部は縦 方向にミガキ調整
図IV-46	269	IV群a類	J11(IV下)×1	c12	6			6	6	口～胴部	やや良	長石砂粒	折り返し口縁を成形後、 LR縄文を縦方向に施 工する。	内面の口縁部横方向の ミガキ調整、胴部は縦 方向のミガキ調整
			J12(IV)×1	b8										
			K11(IV)×2	d15										
			K12(IV)×2	a6										
			K18(III)×1	7										
図IV-47	270a・b	IV群a類	K18(III)×2	3	12	K18(IV)×4	21・28・33	16	28	口～胴部	良好	長石砂粒少 量・角閃石 小粒・海綿 骨針	胴部上半について、輪 痕を外側にし、多段の 折り返し口縁を思わせる ように成形し、RL縄文 を施した上からナデ調 整。胴部下半部にはLR 縄文を施文、いずれも 縄文は横方向からの施 文	内面について、口縁部 は胴部まで横方向、胴 部は縦方向のミガキ調 整。特に上半部について 化粧土風。粘土がナ デ付付がなされている 可能性がある。口唇部 は1本の粘土紐で成形 し平坦面をとる。IV a2 の2と同一である可 能性もある。
			K19(IV)×7	50・64		K19(III)×1	3							
			K20(IV)×2	25・47		K19(IV)×10	15・29・50・64							
						K21(IV)×1	不明							
図IV-47	271a・b	IV群a類	N10(IV)×6	b7・b10・c15	11	H-8(覆土上)×2	41	33	44	口～胴部	良好	長石砂粒・ 小石	胴部上半について、輪 痕を外側にし、多 段の折り返し口縁を思 わせるように成形し、 LR縄文を縦方向に施 した上からナデ調整。 胴部下半部にはLR 縄文を横走させる。	内面について、口縁部 は横方向、胴部は縦 方向のミガキ調整。特 に上半部について化粧 土風。粘土がナデ付 付がなされている可 能性がある。口唇部 は1本の粘土紐で成形 し平坦面をとる。
			O10(IV)×3	1・a1		H-11(覆土上)×1	6							
			O10(風倒木)×1	a9		N9(IV)×3	a8・c6							
						N10(IV)×19	2・b2・b3・b7・b8・ b10・b15・b18・c15							
						O9(IV)×2	17							
図IV-47	272	IV群a類	K18(IV)×1	11	7			7	7	胴～底部	やや良	角閃石小粒 が密に	輪痕を外側にし、折 り返し口縁を思わせる ような器面である。LR 縄文施工後ナデを加 える	内面は胴部については 縦方向のミガキ調整。底 部付近は横方向のミガ キ調整
			K19(IV)×5	50・64										
			不明×1	不明										
			L14(IV)×1	c2										
			M14(IV)×1	d8										
図IV-47	273	IV群a類	M16(III)×6	3	17	K18(IV)×1	28	6	23	口～胴部	やや良	繊維・小石・ 角閃石小粒	折り返し口縁を成形後、 LR縄文を横走させる。	内面は口唇部付近は横 方向にミガキ調整。その 際まで縦方向にミガキ 調整。口唇部には平坦 面をとる
			M17(IV)×7	50・a2		N12(IV)×1	c9							
			N14(IV)×2	d10		排土×1	14							
						不明×1	不明							

図番号	掲載番号	土器分類	図化した点数			残			総 点数	部位	焼成等	目立った 混入物	施工の特徴	備考・追加事項
			遺構(層位)・調査 区(層位)×点数	遺物番号	点数	遺構(層位)・調査 区(層位)×点数	遺物番号	点数						
図IV-47	274	IV群a類	N16(IV)×5	9・20	11	N16(Ⅲ)×4	4	4	15	口～胴部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒	折り返し口縁部成形後に LR縷文地文・折り返し部 分にはLR縷文をやや角 度を変えて、いずれも縷 文を横走させる	内面は口縁部について横 方向のミガキ調整だが、 輪積痕が残る。胴部につ いては縦方向のミガキ調整 口唇部には平坦面をと り、LR縷文施工
			N17(IV)×6	14・23・35		N16(IV)×2	9							
図IV-48	275	IV群a類	M11(IV)×9	8	9	M11(IV)×27	8・14・23	32	41	口縁部	良好	角閃石小粒・ 長石砂粒・ 海綿骨針・ 砂粒	折り返し口縁を成形後、 LRL縷文を縦方向に施工 する。	口唇部には平坦面をとる 内面について口縁部には 横方向、胴部には縦方 向のミガキ調整を施す
図IV-48	276	IV群a類	J13(IV)×3	3	3	J12(IV)×2	b8	5	8	口縁部	やや良	長石砂粒・ 海綿骨針・ 角閃石小粒	折り返し口縁を成形後、 LR縷文を横走させる。	内面は口唇部付近は横方 向にナデ調整・その際ま で縦方向にミガキ調整 口唇部には平坦面をとる
図IV-48	277	IV群a類	J19(IV)×4	c4	4	K19(IV)×3	29・50	3	7	口～胴部	やや良	角閃石小粒・ 長石砂粒と 小石	折り返し口縁を成形後、 LR縷文を横方向に施工 する。	内面は縦方向のミガキ調 整だが輪積痕が残る
図IV-48	278	IV群a類	I12(IV)×9	c16・c18	9	I12(IV)×7	c16・c18	30	39	口～胴部	やや良	角閃石小粒・ 長石砂粒・ 海綿骨針	LR縷文を横走させた後 に連続した2段の折り返 し口縁を成形する。1段目 はナデによって不明瞭で ある。折り返し口縁部は LR縷文を横方向に施工 する。	内面は口縁部は横方向に ミガキ調整・胴部は縦方 向にミガキ調整。口唇部 には平坦面をとる。折返 し口縁部は輪積みのつ けたして成形する
						J12(IV)×5	a3・a14・a16・b3							
図IV-48	279	IV群a類	J11(IV)×5	c19・c22	7	J11(IV)×9	b11・c19・c22・ c26・d14	15	22	口～胴部	やや良	角閃石小粒・ 長石砂粒・ 海綿骨針・ 繊維	LR縷文を横走させた後 に折り返し口縁を成形す る。折り返し口縁部はLR 縷文を横方向に施工す る。	内面は口縁部は横方向に ミガキ調整・胴部は縦方 向にミガキ調整。口唇部 には平坦面をとる。折返 し口縁部は輪積みのつ けたして成形する
			K11(IV)×1	d3		K11(IV)×3	a17・c14・d15							
図IV-48	280	IV群a類	P8(IV)×5	14・31・b6	5	P8(IV)×8	7・10・11・14・17 28・30	11	16	口～胴部	良好	角閃石小粒・ 長石砂粒・ 小石	折り返し口縁を成形後、 LR縷文を横方向に施工 する。	口唇部に平坦面をとる 器の上半分に影らみがある
図IV-48	281	IV群a類	K20(Ⅲ)×1	3	2	L22(Ⅲ)×4	1	5	7	口縁部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒	折り返し口縁を成形後、 LR縷文を縦方向に施工 する。	内面は口縁部は横方向に ナデ調整・胴部は縦方向 にミガキ調整。口唇部 には平坦面をとる
			L22(Ⅲ)×1	1		L22(IV)×1	15							
図IV-48	282	IV群a類	P8(IV)×4	5・10	4	P8(IV)×4	5・21	4	8	口～胴部	やや良	長石砂粒	R縷文を横走するように 施工する。折り返し口縁 部にも縷文を施した痕跡 があるが、ナデ消している。	口唇部には平坦面をとる 内面はミガキ調整
図IV-48	283	IV群a類	L17(IV)×3	9・22・26	15	L17(IV)×2	9・26	18	33	口～胴部	良好	長石砂粒・ 海綿骨針・ 角閃石小粒	折り返し口縁を成形後、 LR縷文を横方向に施工 する。	内面は口縁部は横方向に ミガキ調整・胴部は縦方 向にミガキ調整。口唇部 には平坦面をとる
			M17(Ⅲ)×2	4		M18(Ⅲ)×3	5							
図IV-48	284	IV群a類	K10(IV)×1	5	4	H-7(覆土中 位)×1	20	17	21	口縁部	やや良	砂粒・海綿 骨針	折り返し口縁を成形後、 LR縷文を縦方向に施工 する。	口唇部には平坦面をとる 内面はミガキ調整
			J10(IV)×1	b23		J11(IV)×8	15・b11・b17・c5							
図IV-48	285	IV群a類	L16(IV)×4	30・50・83	4	I15(IV)×4	27	28	32	口～胴部	やや良	長石砂粒・ 海綿骨針	LR縷文を横方向に施工 する。折り返し口縁を2段 持つが、ナデによって不 明瞭である。	内面は口縁部は横方向に ナデ調整・胴部は縦方向 にミガキ調整。口唇部 には平坦面をとる
						K16(IV)×1	16							
図IV-49	286	IV群a類	M12(IV)×3	13・21	3	L12(IV)×1	9	2	5	口縁部	やや良	角閃石小粒 多し・長石 砂粒・海綿 骨針・微塵	R縷文を横走させた後、 頭部を無文にする。その ち折り返し口縁を成形 したもののか	横方向のナデ調整である。 内面は横方向のナデ調整 である。輪積痕の上から 化整土を塗りつけた可能 性が高い。上部でよく膨 らむ器形であり直立す る口縁部形態である。
						L13(風倒木) ×1	5							
図IV-49	287	IV群a類	I21(Ⅲ)×1	2	1			1	1	口縁部	やや良	角閃石小粒	複数段連続する折り返し 口縁部	内面は横方向の調整
図IV-49	288	IV群a類	N16(IV)×9	33・a2	9	K28(IV)×1	12	15	24	口～胴部	良好	繊維・角閃 石・長石小 粒と小石	太さの異なる縷をより合 わせたLR縷文を横走さ せる。折り返し口縁部分 は板状の粘土紐を輪積み する。	内面は頸部より上は横方 向のミガキ調整、頸部よ り下は縦方向にミガキ調 整である。胴部について はヒューク部部について は輪積痕が明瞭である。
						L27(IV)×7	2							
図IV-49	289	IV群a類	M16(IV)×2	21	2	K18(IV)×5	21・33・40	7	9	口～胴部	やや良	角閃石小粒・ 長石砂粒	LR縷文を縦方向に施工 する。口縁部の断面形態 は三角形で、器面側の口 唇部は無文にする。	内面について口縁部は横 方向、胴部は縦方向のミ ガキ調整である。
						K19(IV)×1	41							
図IV-49	290	IV群a類	M9(IV)×3	22・c13	3			3	3	口縁部	良好	長石砂粒	LR縷文を横方向に施工 後、ナデ調整によって口 縁部を無文に成形する。	内面は横方向のミガキ調 整である。頸部より口径 は6cm前後
図IV-49	291	IV群a類	M18(IV)×2	28	2			2	2	口縁部	やや良	長石砂粒	折り返し口縁は貼付によ るが、屈曲部を併せ、また 端部の外縁には1本の粘土 紐で口唇に平坦面をつ つたものに関連する	
図IV-49	292	IV群a類	M16(IV)×2	46	3			3	3	口～胴部	やや良	角閃石小粒	LR縷文を横走させた後、 幅の狭い折り返し口縁部 を成形する。	内面について口縁部は横 方向、胴部は縦方向のミ ガキ調整である。胴部の 膨らみのヒュークおよび 頸部には輪積痕が残る。
			M16(不明) ×1	不明										
図IV-49	293	IV群a類	N15(IV)×6	13・14・25	6	L16(IV)×5	19・30・40	6	12	口縁部	やや良	長石砂粒・ 繊維	LR縷文施工後、Ⅲ段の折 り返し口縁部を成形する。 口縁部には指頭状残る。	内面について横方向のミ ガキ調整
						N17(IV)×1	23							
図IV-49	294	IV群a類	P13(IV)×16	1・5・a3・a4・a 9・a12・a16・c 2・d4・d8・d9	16	P13(IV)×42	b9・d3・d4・d5・ d6・d9	43	59	口～胴部	良好	角閃石小粒・ 長石小石	L縷文を横走させて、明瞭な 無紋で4段の折り返し口縁 を成形する。輪積痕を器面 に出すことにより4段成形 する最上部は1本の粘土紐 を貼付し、平坦面をとる	内面について折り返し口 縁部は横方向、胴部は 縦方向のミガキ調整
図IV-49	295	IV群a類	L13(風倒木) ×1	10	1			1	1	口縁部	やや良	角閃石・長 海綿骨針・微 塵	3段連続する折り返し口 縁部であるかのように器 面に輪積痕を表に出す。 その上にLR縷文を横走 させ、その上をナデつける。	内面は横方向のナデ調整 であるが、輪積痕が明瞭 に残る
図IV-49	296	IV群a類	M15(IV)×2	16	5	L27(IV)×7	2	10	15	口～胴部	良好	繊維・長石 小石	LR縷文を横走させて、無 紋の折り返し口縁を成形 し、器面にナデ調整	内面は折り返し口縁部分 は横方向、胴部は縦方向 のナデ調整。特に上半部 について化整土風には粘 土がナデ付けがなされて いる可能性がある。折返 し口縁部は1本の板状の 粘土紐で成形する。口唇 部は1本の粘土紐で成形 し平坦面をとる。
						L28(Ⅲ)×1	3							



図番号	掲載番号	土器分類	図化した点数			残			総 点数	部位	焼成等	目立った 混入物	施工の特徴	備考・追加事項
			遺構(層位)・調査 区(層位)×点数	遺物番号	点数	遺構(層位)・調査 区(層位)×点数	遺物番号	点数						
図IV-50	297	IV群a類	J11(IV)×4	a8・b5・c22	5	J11(IV)×15	23・a11・b5・b7・b11・c4・c19・c22・c26・d7・d14・不明	32	37	口～胴部	やや良	長石小粒と小石	LR縄文を折り返し口縁の直下については横方向に施工し、胴部については横走させる。無文の折り返し口縁は貼付である。	内面は摩滅が著しいが、胴部に縦方向のミガキ調整が観察できる
			不明×1	不明		J12(IV)×16	a18・b3・b5・b8・b11・b13・d13						J12(IV)×16	
図IV-50	298	IV群a類	L19(IV)×2	34	2	L19(Ⅲ)×2	3	15	17	口縁部	やや良	角閃石小粒	LR縄文を横走させた後、無文の折り返し口縁部を成形する。折り返し口縁の成形には板状の粘土紐を輪積みする。	内面については縦方向のミガキ調整だが輪積みが残る
					L19(IV)×13	26・34・43・49								
図IV-50	299	IV群a類	O8(IV)×11	9・12・23・a9	11	M9(IV)×1	d20	7	18	口～底部	良好	長石小石・角閃石小粒	LR縄文を横方向に施工後、無文の折り返し口縁部を成形する。胴部下半部はケズリのような縦方向のミガキ調整である。	内面について、口縁部は縦方向、胴部は縦方向のミガキ調整を施す。折り返し口縁部は板状の粘土紐を輪積みして成形し、口唇部は一本の粘土紐を貼り付けて成形する。
					O8(IV)×6	8・12・21・d3								
図IV-50	300	IV群a類	M9(IV)×6	d20	6	M9(IV)×4	d20	4	10	口～胴部	良好	長石砂粒・角閃石小粒	LR縄文施工後、折り返し口縁を成形し、口縁部には指頭圧痕が残る	内面について口縁部縦方向、胴部縦方向のミガキ調整
図IV-50	301	IV群a類	L19(Ⅲ)×1	3	24	I17(IV)×1	10	19	43	口～胴部	良好	角閃石小粒	RL縄文を横走させて、明瞭な無紋の折り返し口縁を成形する	内面は口縁部は横方向、胴部は縦方向のナデ調整。特に上半部について化粧土に粘土がナデ付けがなされている可能性がある。折り返し口縁部は一本の板状の粘土紐で成形する。口唇部は一本の粘土紐で成形し平坦面をとる。
			L19(IV)×22	34・43		I18(IV)×2	5・26							
			L20(IV)×1	34		J18(IV)×4	9・34							
						J19(IV)×1	c1							
						K19(IV)×1	64							
						L16(Ⅲ)×1	2							
						L16(IV)×2	30・40							
						L19(IV)×4	34・43							
						M16(Ⅲ)×1	3							
						M18(IV)×2	28・53							
図IV-50	302	IV群a類	K12(IV)×2	43	2	K11(IV)×1	d18	2	4	口縁部	やや良	長石砂粒・海綿骨針・角閃石小粒・小石	器の上半部について輪積痕を見えるようにした上に縄文を横走させ、明瞭な無紋の折り返し口縁を成形する	内面は横方向のナデ調整。特に胴部内面について粘土による化粧土にナデ付けが明瞭である。
				K12(IV)×1	43									
図IV-50	303	IV群a類	M8(IV)×4	24・25・48・不明	5	M8(IV)×19	4・20・24・27・30・38・49	20	25	口～胴部	やや良	繊維・長石小石と砂粒	口縁部成形後、LR縄文を横方向に施工する。粘土が硬く、押圧が弱い。	内面は胴部上半は横方向、下半は斜め方向のナデ調整より下位については縦方向のミガキ調整。ナデにより砂粒が右方向へ動く。口唇部は一本の粘土紐で成形し、断面三角形で器内面は無文である。
			N8(IV)×1	26		M9(IV)×1	11							
図IV-51	304	IV群a類	M18(IV)×3	43	3			3	口縁部	やや良	角閃石小粒が密	RL縄にR縄を巻きつけたものを施工した後、無文の折り返し口縁を成形する	貼り付けに近い折り返し口縁の貼付で内面は横方向のミガキ調整	
図IV-51	305	IV群a類	J12(IV)×4	c2・c3・d9	4	I11(IV)×1	c11	4	8	口縁部	良好	長石砂粒・海綿骨針・角閃石小粒	R縄文を縦走するように施工させた後、無文の折り返し口縁部を成形する。折り返し口縁部は板状の粘土紐を輪積みして成形し、口唇部は一本の粘土紐を貼り付けて成形する。	内面について、口縁部は横方向、胴部は縦方向のミガキ調整を施す。特に上半部について粘土が化粧土風にナデ付けがなされた後の調整である。折り返し口縁部は板状の粘土紐を輪積みして成形し、口唇部は一本の粘土紐を貼り付けて成形する。
						I13(IV)×1	2							
						K12(IV)×1	b6							
						O9(IV)×1	15							
図IV-51	306	IV群a類	L13(風倒木)×1	4	1			1	口縁部	やや良	砂粒多し	LR縄文を横走させ、口唇部は無文にする。折り返しはないが無文部分は一本の粘土紐で輪積みして作られる	内面について、口縁部は横方向、胴部は縦方向のミガキ調整を施す。	
図IV-51	307	IV群a類	J13(IV)×5	a10・d4・d10・d19	5			5	口～胴部	良好	角閃石小粒・長石砂粒	R縄文を横走させた後、無文の折り返し口縁部を成形する	内面は口縁部は横方向、胴部は縦方向のナデ調整。折り返し口縁部は板状の粘土紐で輪積みによって成形し平坦面をとる。	
図IV-51	308	IV群a類	N9(IV)×8	a20・b15・b17・d9	8	H-5(覆土上位)×1	16	13	21	口～胴部	やや良	繊維・長石小石	L縄を横走させその上に折り返し口縁を成形する。折り返し口縁の成形には板状の粘土紐を輪積みする。	内面については口縁部裏は横方向のミガキ調整、胴部は縦方向のミガキ調整
						M9(IV)×2	b11							
						N9(IV)×8	a10・a14・a20・b8・b15・b17							
						O10(IV)×2	d9							
図IV-51	309	IV群a類	N14(B調の攪乱)×2	1	3	K14(IV)×1	17	2	5	口縁部	良好	長石砂粒・角閃石小粒・海綿骨針	LR縄文を横走させた後、無文の折り返し口縁部を成形する。折り返し口縁の成形には板状の粘土紐を輪積みする。	内面については、折り返し口縁の裏面は横方向、その下については縦方向のミガキ調整
M15(IV)×1	16	M14(IV)×1	1											
図IV-51	310	IV群a類	J13(IV)×8	14・a2・a3・a10・a12	10	I13(IV)×5	5・c1・c4・不明	18	28	口～胴部	良好	長石砂粒	LR縄文を横走させて、明瞭な無紋の折り返し口縁を成形する	内面は口縁部は横方向、胴部は縦方向のナデ調整。折り返し口縁部は一本の板状の粘土紐で成形する。口唇部は一本の粘土紐で成形し平坦面をとる。
			N12(IV)×2	c9		J13(IV)×13	14・a1・a2・a3・a8・a8・a10							
図IV-51	311	IV群a類	J17(IV)×3	20・33・37	4	J17(Ⅲ)×3	3・8	7	11	口縁部	良好	長石砂粒・繊維	LR縄文を縦方向に施工し、口唇部は無文にする。折り返しはないが無文部分は一本の粘土紐で輪積みして作られる	内面について、口縁部は横方向、胴部ナデ調整を施す。
			J17(風倒木)×1	49		J17(IV)×3	11							
			J17(風倒木)×1	49		J17(風倒木)×1	49							
図IV-51	312	IV群a類	J11(IV下)×4	c15	5			5	5	口縁部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒目立つ	LR縄文を横走させて、明瞭な無紋の折り返し口縁を成形する	内面は口縁部は横方向、胴部は縦方向のナデ調整。特に上半部について粘土が化粧土風にナデ付けがなされている可能性がある。口唇部は一本の粘土紐で成形し平坦面をとる。
			J11(IV)×1	23										
図IV-52	313	IV群a類	L14(IV)×2	d3	2	M15(Ⅲ)×2	1	3	5	口縁部	やや良	角閃石小粒・長石砂粒	L縄を横走させた後無文の折り返し口縁部を成形する。折り返し口縁部は板状の粘土紐を輪積みして成形する	内面について口縁部は横方向、胴部は縦方向のミガキ調整
				M15(IV)×1	21									
図IV-52	314	IV群a類	J11(IV)×3	c10・c26	3			3	3	口縁部	良好	長石砂粒・海綿骨針・角閃石小粒・小石	L縄文を横走させて、明瞭な無紋の折り返し口縁を成形する	内面は口縁部は横方向、胴部は縦方向のナデ調整。特に上半部について粘土が化粧土風にナデ付けがなされている可能性がある。口唇部は一本の粘土紐で成形し平坦面をとる。
図IV-52	315	IV群a類	K12(IV)×17	33・39・c1・c4・c9・c11	19	K12(IV)×30	33・36・39・43・b12・c1・c3・c4・c9・c11・d6	33	52	口～胴部	良好	角閃石小粒・小石	L縄文を横走させて、明瞭な無紋の折り返し口縁を成形する。輪積みによって折り返し部分を成形する。	内面について折り返し口縁部分については縦方向のミガキ調整である
						K13(IV)×1	6							
						K13(木根)×1	17							
						L13(攪乱)×1	1							
図IV-52	316	IV群a類	I12(IV)×11	1・3・8	11	I12(IV)×18	1・8・a2	18	29	口～胴部	やや良	角閃石小粒多し・長石砂粒	RR縄文を横走させて、無紋の折り返し口縁を成形し、器面にナデ調整	横方向のミガキ調整だが輪積み痕跡が明瞭である。上半部について化粧土風に粘土がナデ付けがなされている可能性がある。折り返し口縁部は一本の板状の粘土紐で成形する。口唇部は一本の粘土紐で成形し平坦面をとる。

図番号	掲載番号	土器分類	図化した点数			残			総 点数	部位	焼成等	目立った 混入物	施工の特徴	備考・追加事項
			遺構(層位)・調査区(層位)×点数	遺物番号	点数	遺構(層位)・調査区(層位)×点数	遺物番号	点数						
図IV-52	317	IV群a類	M17(Ⅲ)×2 M17(Ⅳ)×1	4 50	3	M17(Ⅳ)×1	102	1	4	口縁部	やや良	海綿骨針・ 織維	LR縄文施文後、無文地の 折り返し口縁を成形する。	内面はミガキ調整である。 折り返し口縁部は板状の 粘土紐を輪積みして成形 する。
図IV-52	318	IV群a類	O12(Ⅳ)×2	d7	2	O12(Ⅳ)×1 P11(Ⅳ)×1	d3 11	2	4	口縁部	やや良	角閃石小粒・ 小石・織維	表面は輪積痕跡を残し、 その上から縦方向のナデ 調整を施す	口縁部は横方向のナデ調 整、胴部は縦方向ミガキ 調整
図IV-53	319	IV群a類	I19(Ⅳ)×1 N14(Ⅳ)×1 不明×1	42 b7 不明	3	J19(Ⅳ)×1 K19(Ⅳ)×4 J23(Ⅲ)×2	23 3・15・29・64 1	7	10	口縁部	やや良	長石砂粒・ 海綿骨針	LR縄文を頸部は横方向 その下の胴部は縦方向に 施文後、ナデ調整によっ て口縁部を無文に成形す る。	内面は頸部より上は横方 向のミガキ調整で、胴部 は縦方向のミガキ調整で ある。
図IV-53	320	IV群a類	I22(Ⅳ)×2 I22(風倒木) ×1	15 25	3	I22(Ⅳ)×1	23	1	4	口縁部	やや良	長石砂粒	LR縄文を横方向に施文 後、ナデ調整によって口 縁部を無文に成形する。	内面は頸部より上は横方 向のミガキ調整で、胴部 は縦方向のミガキ調整で ある。残部より口縁はbc 前後
図IV-53	321	IV群a類	M18(Ⅳ)×10 M19(Ⅳ)×11	14・80 27・a1	21	L17(Ⅳ)×1 M18(Ⅳ)×4 M19(Ⅲ)×2 M19(Ⅳ)×15	18 43・80 2・7 12・21・27・44・a1	22	43	口～胴部	良好	長石砂粒	RL縄文を横走させて、屈 曲の強い外反する口縁部 を成形する。口縁部は横 方向のミガキ調整で無文 にする	内面について、口縁部の 外反部分について横方 向のミガキ調整、その下 部は縦方向ミガキ調整
図IV-53	322	IV群a類	M16(Ⅳ)×4	21・31・c12	4				4	口～胴部	良好	長石砂粒と 小石・海綿 骨針	LR縄文を横走させる	内面は頸部より下は縦方 向のナデ調整、上は縦方 向のナデ調整だが輪積痕 跡が残る。口縁部は断面形 態について丸みをおる
図IV-53	323	IV群a類	J10(Ⅳ)×2 L10(Ⅳ)×1	d7 a3	3	J10(Ⅳ)×5 K10(Ⅳ)×1	b20・b23・d1 d13	6	9	口縁部	やや良	長石砂粒	LR縄文を横走させる	口唇部には平坦面をとる 内面について口縁部は 横方向、胴部は縦方向の ミガキ調整 補修孔を持 つ
図IV-53	324	IV群a類	M16(Ⅲ)×2 M16(Ⅳ)×2	3 21	4	M16(Ⅲ)×4 M16(Ⅳ)×1	3 71	5	9	口縁部	やや良	長石砂粒密・ 海綿骨針微 量・角閃石 少量	LR縄文を横走させる	横方向にミガキ調整、 口縁部の屈曲は折り返し 口縁の成形と同様な方法 で成形する。
図IV-53	325	IV群a類	O19(Ⅳ)×5 不明×1	2・12 不明	6				6	口～胴部	やや良	角閃石小粒・ 長石砂粒	折り返し口縁を成形後、 LR縄文を横走させる。	摩擦著しい
図IV-53	326	IV群a類	J10(Ⅳ)×2	12・b5	2				2	口縁部	良好	長石砂粒小 量・角閃石 小粒多量	胴部はLR縄文を縦方向、 口縁部は横方向に施す	内面は縦方向のナデ調整 口唇部は丸みをおびた 面をとる 補修孔がある
図IV-53	327a～c	IV群a類	J13(Ⅳ)×1 N16(Ⅳ)×8	b5 9・20・26・43	9	M15(Ⅳ)×2 M17(Ⅲ)×1 N16(Ⅲ)×4 N16(Ⅳ)×4b 9・20・26・43・ 59	16・48 4 4 9・20・26・43・ 59	55	64	口縁部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒・ 海綿骨針	RL縄文を口縁部は横方 向に施し、胴部は縦走さ せる。	内外面ともに輪積痕を残 した上に化粧土を施すか のように縦方向に粘土で 充填する。口唇部はその 上から縄文、口唇部は本 の粘土紐で平坦面をとる 補修孔が残る
図IV-53	328	IV群a類	M16(Ⅳ)×5	92・67・不明	5	M16(Ⅳ)×2 1	31・42・46・54・ 67・88・92	21	26	口縁部	やや良	長石砂粒・ 海綿骨針	L縄文を横走させる	横方向のミガキ調整
図IV-53	329	IV群a類	J12(Ⅳ)×3	a16・b12	3	I12(Ⅳ)×1 J12(Ⅳ)×11 6・b5	c7 a10 b11	12	15	口縁部	やや良	長石砂粒	口縁部についてLR縄文 は縦方向、胴部について は横走させる	内面について口唇部のみ 横方向、胴部は縦方向の ミガキ調整
図IV-54	330	IV群a類	L10(Ⅳ)×2 M10(Ⅳ)×1	13・b11 d10	3	L10(Ⅳ)×4 L11(Ⅳ)×1 N9(Ⅳ)×1	c13 a10 b11	6	9	口縁部	やや良	長石砂粒	LR縄文を施文後、縦方向 のナデ調整、ヘラによる ものか	内面は縦方向のナデ調整 口唇部には一本の粘土 紐で成形し、断面三角形 風に2面をとる
図IV-54	331a・b	IV群a類	M21(Ⅳ)×2 M22(Ⅲ)×1 M22(Ⅳ)×1	4・10 1 10	4	L20(Ⅲ)×1 L20(Ⅳ)×1	6 29	2	6	口縁部	やや良	角閃石小粒・ 長石砂粒	口縁部はLR縄文を横方 向に施し、胴部はLR縄 文を横走させる	内面は横方向のナデ調整、 口唇部は一本の粘土紐で 成形し、口縁の断面形態 は丸みをおびる
図IV-54	332	IV群a類	L19(Ⅳ)×3	26	3				3	口～胴部	良好	長石砂粒密・ 角閃石小粒	LR縄文を横走させる	内面横方向のミガキ調整
図IV-54	333	IV群a類	P12(Ⅳ)×1 P13(Ⅳ)×8	4 1・a7・a15	9	P13(Ⅳ)×14	1・a7・15	14	23	口～胴部	やや良	長石砂粒・ 微量の角閃 石小粒・海 綿骨針	口縁部は縦方向、胴部は 縦方向のミガキ調整、口 唇部は一本の粘土紐で成 形し、平坦面をとる	口唇部は横方向、胴部は 縦方向のミガキ調整、口 唇部は一本の粘土紐で成 形し、平坦面をとる
図IV-54	334	IV群a類	K9(Ⅳ)×2	17・19	2	K8(Ⅳ)×27 K9(Ⅳ)×11	4・7・15・19・2 2・25・29・32・ 33・c10 3・9・13・17・2 9・37	38	40	口縁部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒	摩擦して不明瞭であるが 太さの異なる縄を擦った ものである。口縁部につ いてLR縄文は縦方向、胴 部については横走させる	内面について横方向のミ ガキ調整だが輪積痕があ る
図IV-54	335	IV群a類	M21(Ⅳ)×1 N20(Ⅲ)×5 N20(風倒木) ×1	4 2 13	7	L14(Ⅳ)×1 M21(Ⅲ)×1 M21(Ⅳ)×2 M22(Ⅳ)×1 N20(Ⅲ)×17 N20(Ⅳ)×15 N21(Ⅲ)×4 N21(Ⅳ)×4 N21(風倒木) ×1 O21(Ⅲ)×2 O21(Ⅳ)×1	9 1 10・23 18 2 5・7 2 7 16 5 7	49	56	口縁部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒・ 小石	LR縄文を横走させる	内面については縦方向の ミガキ調整、口縁部裏に は輪積痕跡を化粧土で 覆うかのようにナデ調整 が施される。口唇部には 一本の粘土紐で成形し、 平坦面をとる
図IV-54	336	IV群a類	K20(Ⅲ)×2 K20(Ⅳ)×1	4 32	3	J19(Ⅳ)×2 L20(Ⅲ)×1	17・34 5	3	6	口～底部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒	L縄文を縦方向に施す	内面ナデ調整・底面ミガ キ調整、口唇部は丸みをお びた面を持つ
図IV-54	337	IV群a類	N11(Ⅳ)×6	c2・c5	6	N11(Ⅳ)×15	15・c5	15	21	口～底部	良好	長石砂粒・ 海綿骨針	LR縄文を縦方向に施文 し、口縁部をナデにより 無文にする	内面はミガキ調整、口唇 部には一本の粘土紐で成 形し断面は丸みをおびる
図IV-54	338	IV群a類	O18(Ⅲ)×1 P18(Ⅳ)×2	4 7・a1	3	O18(Ⅳ)×2	14	2	5	口縁部	良好	角閃石小粒 が密・長石 砂粒	LR縄文を横方向に施文 する	内面は口縁部横方向のミ ガキ調整、胴部は縦方向 のミガキ調整
図IV-54	339	IV群a類	K14(Ⅳ)×1	a2	1				1	口縁部	良好	長石砂粒	LR縄文を横走させた後、 口縁部に縦方向に同一原 体で施文する	口唇部には平坦面をとる。 口縁部横方向のナデ調整、 胴部は縦方向のナデ調整
図IV-54	340	IV群a類	N17(Ⅳ)×3 N17(風倒木) ×3	35 43	6				6	口～胴部	良好	長石小石・ 角閃石小粒	RL縄文を横走させた後、 表面にナデ調整を施す。口 唇部には無文にする	内面について、口縁部は 横方向、胴部は縦方向の ミガキ調整を施す。口唇 部は一本の粘土紐で整え る
図IV-54	341	IV群a類	O19(Ⅳ)×3	12・21	3	J8(Ⅳ)×1	a5	1	4	口縁部	良好	長石砂粒・ 角閃石小粒・ 小石	RL縄文を縦走させる	内面について口縁部裏側に 成形時の指痕が残り、胴 部には縦方向のミガキ調整 が残る。口唇部 には丸みをおびた面をと る
図IV-54	342	IV群a類	M14(Ⅳ)×1	d4	1				1	口縁部	やや良	長石砂粒と 小石・角閃 石小粒比較 的密	RL縄文を縦方向に施文 する	横方向のミガキ調整、口 唇部は一本の粘土紐で成 形し、平坦面をとる。

図番号	掲載番号	土器分類	図化した点数			残			総 点数	部位	焼成等	目立った 混入物	施文の特徴	備考・追加事項
			遺構(層位)・調査 区(層位)×点数	遺物番号	点数	遺構(層位)・調査 区(層位)×点数	遺物番号	点数						
図IV-55	343	IV群a類	H-5(覆土上 位)×3 J14(IV)×2 M14(IV)×7 L20(III)×1	4 c2 2・11・15 5	12	H-5(覆土上 位)×1 M14(IV)×2 N14(IV)×1 L20(III)×1	4 15・c2 a8 5	4	口～胴部	良好	長石砂粒・ 角閃石小粒・ 小石	LR縷文を横方向に施す	内面は摩滅が著しく調整 不明。口唇部は丸みをお びた面をとる	
図IV-55	344	IV群a類	L20(IV)×3 M20(IV)×1 J8(IV)×1	10 24 12	5	L20(IV)×9 M20(IV)×3 J9(IV)×1 K9(IV)×14 L8(IV)×1 L9(IV)×4	10・18・29 11 16 9・29・36・38・39 8 a3・c11・c14・d9	13	口縁部	やや良	角閃石小粒	R縷文を横走させる。口 縁部はナデ調整によっ て無文にする。	内面について口縁部は横 方向、胴部は縦方向の ミガキ調整である。口唇 部は一本の粘土紐を貼付 して平坦面をとる	
図IV-55	345	IV群a類	L9(IV)×5 M15(IV)×1 O17(風倒木) ×1	d9 61 26	6	K22(III)×1	1	20	口縁部	良好	角閃石小粒 密・長石砂 粒・海綿骨 針	LR縷文が横走する	内面については口縁部は 横方向、胴部は縦方向の ミガキ調整。口唇部は一 本の粘土紐で整え、平坦 面をとる	
図IV-56	346	IV群a類	N15(III)×1 N15(IV)×1	3 46	2			1	口縁部	良好	角閃石小粒・ 海綿骨針	横方向にナデ調整をして 無文にした後、折り返し 口縁を成形する	内面横方向のミガキ調整	
図IV-56	347	IV群a類			2			2	口縁部	口縁部	角閃石小粒 密・長石砂 粒・小石	縦方向のミガキ調整によっ て無文にした器面につい て、貼付によって折り返し 口縁を成形	口唇部は丸みをおびた面 をとる。内面について口 縁部は横方向、胴部は縦 方向のミガキ調整	
図IV-56	348	IV群a類	I11(IV)×2	d7	2			2	口縁部	やや良	長石砂粒	輪積みを外面に残し、折 り返しが連続するように みせて成形する。折り返 し口縁部内面は横方向の ミガキ調整		
図IV-56	349	IV群a類	J21(III)×1 J21(IV)×1	2 13	2	J20(III)×1 J20(IV)×1 J21(IV)×1 K18(IV)×1 K19(IV)×1 K21(III)×1 K21(IV)×1 L18(III)×1 L18(IV)×1 M17(III)×1	3 31 5 11 15 2 10 1 13 4	10	口～胴部	やや良	角閃石小粒 密・長石砂 粒・小石	ハゲ目を思わせる擦痕が 縦方向に施される	口縁部の断面は丸みをお びる。内面は主に縦方向 、より口唇に近い口縁部 のみ横方向のミガキ調整	
図IV-56	350a・b	IV群a類	J20(IV)×1 K18(IV)×3 L17(IV)×1 K22(III)×1 K23(III)×1	不明 11 44 1 1	7	J20(木根)×2 J21(III)×2 J21(IV)×7 K18(IV)×2 K20(IV)×1 K21(III)×1 N18(III)×1	12 8 3 11・19・31・44 55 2 5・13・29 11・33 47 2 4	31	口～胴部	やや良	長石砂粒	L縷を2本束ねた単軸絡 糸体をおおよそ縦方向に 施文する。	口縁部の断面は丸みをお びる。内面は主に縦方向 、より口唇に近い口縁部 のみ横方向のミガキ調整	
図IV-56	351	IV群a類	M不明(IV)×1 N16(IV)×1	84 26	2			2	口～底部	やや良	角閃石小粒 密・長石砂 粒・小石	縦方向のミガキ調整によっ て無文にした器面	口唇部は平坦面をとる 内面について縦方向のミ ガキ調整	
図IV-56	352	IV群a類	K12(IV)×2	4・a11	2			2	口～胴部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒・ 海綿骨針	縦方向のミガキ調整によっ て無文とする。器面につ いて胴部の膨らみのビツ クより上は煤が付着する	内面について胴部の膨らみ より下位は縦方向のミガキ 調整、屈曲部より上は横 方向のミガキ調整。口縁 部の断面は丸みをおびる	
図IV-56	353	IV群a類	J8(IV)×3	17・c不明・c9	3			3	口～胴部	やや良	長石砂粒・ 海綿骨針	縦方向のナデ調整	横方向のナデ調整。補修 孔がある。口唇部は一本 の粘土紐で整えて平坦面 をとる	
図IV-56	354	IV群a類	L19(IV)×3	13・26	3			3	胴部	やや良	長石砂粒・ 繊維	横方向のナデ調整に沈線 文を持つ	内面は縦方向のミガキ調整 だが一部に縷文が焼える	
図IV-56	355	IV群a類	L13(IV)×2 M14(IV)×3	c6・不明 1	5			5	口縁部	良好	角閃石小粒・ 長石砂粒・ 小石・海綿 骨針	主に縦方向のナデ調整に よって無文にする。器面 の一部に輪積が残るが、 表面を化粧土のように粘 土をナデつけて充填した 痕跡がある。	口唇部は平坦面をとる 内面について横方向のミ ガキ調整	
図IV-56	356	IV群a類	J28(IV)×4	1・2・7	4			4	口～底部	良好	長石砂粒・ 角閃石小粒	主に縦方向のナデ調整で 無文にする	内面は横方向のナデ調整 に胴部上半に煤が付着す る。残存部分から口径6cm、 底径4cm、器高8.5cmの小型と 推定できる	
図IV-56	357	IV群a類	I18(IV)×3	19・26	3			3	底部	やや良	角閃石小粒 密・長石砂 粒・小石	縦方向のミガキ調整。微 妙な上げ底はナデによっ て無文である	底面内面は円を描くよう にミガキ調整	
図IV-57	358	IV群a類	H-10(覆土上 位)×2 K8(IV)×1 M9(IV)×3 N9(IV)×2	46 2 3・a10・b11 a13・b8	8	M9(IV)×1	b12	1	口～胴部	やや良	角閃石小粒 密・長石砂 粒	RL縷糸体を施文後折 返し口縁部を成形する。	内面について口縁部は横 方向、胴部は縦方向のミ ガキ調整。口唇部は一本 の粘土紐を貼り付けて平 坦面をとる。板状の粘土 紐を輪積みによって成形 する。煤は器面について 胴部上半によく付着し、 内面については胴部下半 に良く付着する。	
図IV-57	359	IV群a類	J12(IV)×1 K11(IV)×1 K12(IV)×1	c15 d15 b3	3	L11(IV)×1	b9	1	口縁部	やや良	角閃石小粒 密	R縷糸体を施文後、口唇 部を整える。	内面について口縁部は横 方向、胴部は縦方向のミ ガキ調整。口縁部につい ては輪積みが残り、折返 し口縁部については板状 の粘土紐を輪積みによっ て成形する。	
図IV-57	360	IV群a類	N14(IV)×1 N15(IV)×5 O14(IV)×2	a9 13・15・25・d2 1	8	N14(IV)×7 N14(木根)×2 N15(IV)×18 O14(IV)×1 P15(IV)×1	a14・a18・c2・ d11・13 1・11 6・13・14・25・ 31・36・43・46・ 48・58・64・65 1 20	29	口～胴部	良好	長石砂粒と 小石・角閃 石小粒	RL縷の単軸絡糸体を用 いて網目状圧痕を地文と する。口縁部成形後に地 文、口縁部断面形は丸 みをおびる	内面はミガキ調整、口唇 部のみ横方向、下は縦方 向	
図IV-57	361	IV群a類	M11(IV)×2 不明×2	9・20 14	4	L11(IV)×1 L15(IV)×1 M11(IV)×1 P19(III)×1	b2 46 9 11	4	口縁部	やや良	長石砂粒と 小石・角閃 石小粒	R縷の単軸絡糸体を用 いて網目状圧痕を地文とす る。頸部をミガキによっ て無文とする。頸部の下 には沈線施す	口縁部成形後に地文を施 す。内面はミガキ調整	
図IV-57	362	IV群a類	P17(IV)×2	25	2			2	口縁部	やや良	長石砂粒・ 繊維	輪積みを外側に残し、多 段の折り返し口縁を成形 する。その上から草本を 胴体とすると思われる沈 線によって網目状を描く	内面はミガキ調整、口唇 部には粘土紐を一本貼付 し平坦面をとって丸める	

図番号	掲載番号	土器分類	図化した点数			残			総 点数	部位	焼成等	目立った 混入物	施工の特徴	備考・追加事項	
			遺構(層位)・調査 区(層位)×点数	遺物番号	点数	遺構(層位)・調査 区(層位)×点数	遺物番号	点数							
図IV-57	363	IV群a類	J8(IV)×1	7	2	I26(IV)×1	3	3	5	口縁部	良好	長石砂粒・ 角閃石小粒 密・海綿骨 針	RL織の単軸絡糸体を用 いて網目状圧痕を地文と する。地文施工後口唇部 を成形	内面はミガキ調整、口唇 部には粘土紐を一本貼付 し平坦面をとって整える	
			K9(IV)×1	29		J9(IV)×2	11・16								
図IV-57	364	IV群a類	I11(IV)×1	9	4	I11(IV)×2	18・c11	5	9	胴部	良好	長石砂粒	RL織の単軸絡糸体を用 いて網目状圧痕を地文と する	内面はミガキ調整、縦方 向	
			J11(IV)×1	24		J13(IV)×1	13								
			M9(IV)×1	a10		K11(IV)×1	c17								
			O8(IV)×1	27		M11(IV)×1	20								
図IV-57	365a・b	IV群a類	M10(風倒木) ×1	19	8	H-12(覆土上 位)×1	1	9	17	胴～底部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒 密・海綿骨 針・石英	R織の単軸絡糸体を用 いて網目状圧痕を地文とす る。底面には草本を簾状 に編んだものの圧痕があ る	摩滅著しい	
			M11(IV)×3	22・c3・c5											
			N14(IV)×2	a13											
			P9(IV)×2	12・c3											
図IV-57	366	IV群a類	J12(IV)×1	a12	3				2	底部	やや良	長石砂粒・ 小石	R織の単軸絡糸体を用 いて網目状圧痕を地文とす る	内面と底面はミガキ調整 底径9.5cm	
			排土×2	88・89											
図IV-58	367	IV群a類	K18(IV)×2	28・33	14	K18(IV)×2	28	13	27	胴～底部	やや良	長石砂粒と 小石・角閃 石小粒	R織文施工後、胴部下部 には砂粒が動くほどのケ ズリのような縦方向のミ ガキ調整。底面は摩滅が 著しい。底面際には指頭 による圧痕が残る	内面は縦方向のミガキ調 整。底面の内側には成形 時の指頭圧痕とケズリ様 の磨きにもちいたものと 同一なのかへらによる成 形時の押圧が残る	
			K19(IV)×11	14・15・29・41・ 50・64		K19(IV)×3	64								
						M17(Ⅲ)×1	4								
			M18(Ⅲ)×1	5		M17(IV)×6	19・32・33・36・50								
図IV-58	368	IV群a類	L16(IV)×2	19・50	2				2	底部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒	胴下部はミガキ調整によ って無文。底面は微妙な上 げ底でミガキ調整を施す 底面際に棒状の圧痕	内面ミガキ調整	
図IV-58	369	IV群a類	I12(IV)×1	c18	1				1	底部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒 密	草本を編んだと考えられ るものの圧痕の上をミガ キ	内面はミガキ調整	
図IV-58	370	IV群a類	N11(IV)×1	d12	1				1	底部	やや良	角閃石小粒	底面は編物の圧痕	摩滅著しい	
図IV-58	371	IV群a類	M17(IV)×1	64	1				1	底部	やや良	長石砂粒と 長石小石・ 角閃石小粒	RL織文が横走する地文 。底面はナデ調整の後、 沈線を格子目にする	内面は横方向のナデ調整	
図IV-58	372	IV群a類	I12(IV)×2	d12・d13	2				2	底部	良好	長石砂粒と 長石小石・ 角閃石小粒 ・海綿骨針	底面際は縦方向のナデ調 整。底面は木の葉圧痕	内面はミガキ調整	
図IV-58	373	IV群a類	排土×1	96	1				1	底部	やや良	角閃石小粒・ 長石砂粒	底面は編物なのか織圧痕 が残る、その上にミガキ 調整	内面は剥落	
図IV-58	374	IV群a類	L10(IV)×1	3	1				1	底部	やや良	角閃石小粒・ 長石砂粒・ 砂粒	底面は上げ底で草本の編 物の圧痕が残る、その上 ナデ。底面の剥落部分につ いても同様の圧痕がある	内面は摩滅著しい	
図IV-59	375	IV群a類	I20(IV)×1	12	1				1	底部	やや良	長石砂粒・ 長石小石が 目立つ・角 閃石小粒	RL織文を縦走させる地 文。底面には木の葉圧痕 。底面際はナデ	内面は摩滅著しい	
図IV-59	376	IV群a類	M12(IV)×1	11	1				1	底部	やや良	長石砂粒・角 閃石小粒密	RLR織文地文。底面には 木の葉圧痕。底面際はナ デ	内面は摩滅著しい	
図IV-59	377	IV群a類	L13(IV)×2	c3・d6	3				3	胴～底部	やや良	海綿骨針・ 角閃石小粒 ・長石砂粒	L織文を縦方向にほどこ し、縦方向のミガキ調整 で胴下部を無文にする 。微妙な上げ底でミガキ 調整を施す	内面はミガキ調整。胴部 と底部の継ぎ目を粘土で 充填して整える	
			L14(IV)×1	a13											
図IV-59	378	IV群a類	N18(IV)×1	29	1				1	底部	やや良	長石砂粒密・ 角閃石小粒	RL織文を縦走させる底 面には木の葉圧痕	摩滅著しい	
図IV-59	379	IV群a類	K8(IV)×1	b9	1				1	底部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒 密・海綿骨 針	RL織文を横走させる地 文。底面には木の葉圧痕 。底面際はナデ	内面は縦方向の調整	
図IV-59	380	IV群a類	M18(IV)×1	66	1				1	底部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒 密	RLR織文地文。底面には 木の葉圧痕。底面際はナ デ	内面は摩滅著しい	
図IV-59	381	IV群a類	L18(IV)×6	16・20	8	J15(Ⅲ)×1	2		17	25	胴～底部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒 密	RLR織文を横走させる地 文。底面には木の葉圧痕	内面は横方向のミガキ調 整
			M17(IV)×1	36		K15(IV)×4	6・12・34								
						L16(IV)×3	30・40・92								
						L17(IV)×3	18								
			排土×1	8		L18(IV)×2	16・20								
						M15(IV)×1	21								
						M18(IV)×1	70								
					M17(IV)×1	a2									
					Q17(IV)×1	1									
図IV-59	382	IV群a類	I20(IV)×1	32	2				2	底部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒 が目立つ	複節の織文を施工後、底 面際はナデ調整によって 無文とする。底面は微妙 な上げ底で木の葉圧痕が 残る	摩滅著しい	
			不明×1	43											
図IV-59	383	IV群a類	K9(IV)×1	b5	1				1	底部	やや良	角閃石小粒 が密・長石 砂粒	底面際はナデ調整によ って無文とする。底面は 木の葉圧痕	摩滅著しい。胴部と底部 の継ぎ目を粘土で充填 して整える	
図IV-59	384	IV群a類	Q16(IV)×1	7	1				1	底部	やや良	長石砂粒が 密・長石小 石・角閃石 小粒	底面には木の葉の圧痕お よび植物の茎と思われる 圧痕	内面は剥落	
図IV-59	385	IV群a類	J15(IV)×7	11	7	J15(IV)×2	11・13		2	9	底部	やや良	角閃石小粒 密・長石砂 粒	RLR織文を横走させた地 文。底面際はナデ調整 。底面には木の葉圧痕	内面ミガキ調整
図IV-60	386	IV群a類	I13(IV)×1	b10	1				1	底部	やや良	海綿骨針・ 角閃石小粒 ・長石砂粒	底面際はナデ調整によ って無文とする。底面 には木の葉の圧痕が残 る	内面はミガキ調整	
図IV-60	387	IV群a類	J10(IV)×1	a4	1				1	底部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒 密・海綿骨 針	底面には木の葉を交互 に配したものの圧痕。底 面際はナデによって無 文	内面はミガキ調整	
図IV-60	388	IV群a類	O7(IV)×1	4	1				1	底部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒 密	底面には木の葉の圧痕	内面は摩滅著しい	
図IV-60	389	IV群a類	K18(IV)×2	28	2				2	底部	やや良	角閃石小粒・ 長石砂粒密	底面際はナデ調整。底 面は木の葉圧痕	内面は剥落と摩滅	
図IV-60	390	IV群a類	N21(Ⅲ)×1	2	1				1	底部	やや良	長石砂粒と 長石小石・ 角閃石小粒	R織文を縦走させた地 文。底面際はナデ調整 。底面は木の葉圧痕の上 にナデのあるもの	内面はミガキ調整。底 面裏側には指頭圧痕残 る	
図IV-60	391	IV群a類	K13(IV)×1	a3	1				1	底部	やや良	角閃石小粒・ 長石砂粒・ 小石	底面際はナデ調整。底 面には木の葉圧痕と小石 がひとつ浮き出ている	摩滅著しい	
図IV-60	392	IV群a類	J13(IV)×1	14	1				1	底部	やや良	長石砂粒	RL織文地文。底面には 木の葉圧痕。張り出す底 部形態	内面は胴部との継ぎ目 が判らないように胴部 と底部の継ぎ目を粘土 で充填したうえでミガ キ調整。胴部はミガキ 調整	

図番号	掲載番号	土器分類	図化した点数			残			総点数	部位	焼成等	目立った混入物	施工の特徴	備考・追加事項	
			遺構(層位)・調査区(層位)×点数	遺物番号	点数	遺構(層位)・調査区(層位)×点数	遺物番号	点数							
図IV-60	393	IV群a類	J10(IV)×1	a11	1				1	底部	やや良	角閃石小粒・長石砂	L縄文地文 窄まる底部に環状に粘土紐を貼り付し高台風にする	内面はナデ調整で輪痕残る	
図IV-60	394	IV群a類	N15(IV)×1	d2	1				1	底部	やや良	角閃石小粒・長石砂	ナデ調整によって無文の胴部と底部 張り出す底部形態	内面は胴部との継ぎ目が判らないように胴部と底部の継ぎ目を粘土で充填したうえで丁寧な調整	
図IV-60	395	IV群a類	P13(IV)×1	a11	1				1	底部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒	底面はミガキ調整で指の胴部と底部を十字型に成形する	内面は胴部との継ぎ目が判らないように胴部と底部の継ぎ目を粘土で充填したうえで丁寧な調整	
図IV-60	396	IV群a類	L15(木根)×1	79	1				1	底部	やや良	長石砂粒	L縄文を縦走させた地文 底面際はナデ調整 底面はナデ調整で上げ底である	内面は縦方向のミガキ調整・棒状工具による圧痕残る	
図IV-61	397	IV群a類	J13(IV)×4	12・b15	4				4	胴～底部	良好	長石砂粒と小石・海綿骨針	L縄文を横走させた後、縦方向のミガキ調整で胴下部を無文にする	内面はミガキ調整 胴部と底部の継ぎ目を粘土で充填して整える	
図IV-61	398	IV群a類	N11(IV)×1	6	1				1	底部	やや良	長石砂粒	RL縄文地文 底面際はナデ調整によって無文とする 底面は木の葉圧痕の上にミガキ調整	ミガキ調整	
図IV-61	399	IV群a類	M16(IV)×5 M17(IV)×1	2 64	6				6	底部	やや良	長石砂粒・海綿骨針	底面際は縦方向のミガキ調整 底面には草本と縄を纏んだものの圧痕があり、その上をミガキ調整	内面はミガキ調整	
図IV-61	400	IV群a類	J11(IV)×8 J11(IV)×1	a8・b9・b11・d14 不明	9				9	底部	やや良	繊維・角閃石小粒・長石砂粒	LR縄文を横走させ、底面際はナデ調整によって無文とする 底面には沈線状にミガキの圧痕が残る	内面はナデ調整だが輪痕残る	
図IV-62	401	IV群a類大津式	J16(IV)×4	7-12	4	I16(IV)×1	4		1	5	口縁部	やや良	海綿骨針	LR縄文を施文後、沈線	内面はミガキ調整 口径11cm前後、椀状の器か
図IV-62	402a	IV群a類大津式	H-5(覆土上位)×1 K14(IV)×1 K15(IV)×2 L14(IV)×3 L15(IV)×13	208 3 12・39 d2・d5 11・19・119	20	H-15(覆土上位)×3 J14(IV)×1 K14(IV)×5 K15(IV)×3 L12(IV)×1 L13(IV)×3 L14(IV)×4 L15(Ⅲ)×1 L15(IV)×12 L16(IV)×4 M15(Ⅲ)×2 M15(IV)×1 N14(IV)×1	31・208 c7 3・c10 6・39 c2 c1 a11・b9・d5・d6 11・45・100・119 10・19・30 1 94 d10	41	61	口～胴部	良好	角閃石小粒・長石砂粒	LR縄文を施文後、ミガキ調整、その上に沈線文	内面は横方向のミガキ調整	
図IV-62	402b	IV群a類大津式H-7に同じ可能性あり	L14(IV)×2 M15(IV)×2	a10・b11 8	4	K15(IV)×1 L12(IV)×1 L14(IV)×1 L15(IV)×2 M14(IV)×2 排土×1	6 c2 c2 19・119 c9・d10 7		8	12	胴部	やや良	長石砂粒と小石・角閃石小粒	LR縄文を施文後、ミガキと沈線で磨消縄文	内面はミガキ調整
図IV-62	403	IV群a類大津式H-7に関連	H-7(覆土中位)×1 J10(IV)×2 J15(IV)×1 K14(IV)×2 K15(IV)×3 L11(IV)×1 L12(IV)×1 M11(IV)×1 M16(Ⅲ)×3	12 b20・c7 b1 c8 6・12 b3 b1 d8 3	15	J10(IV)×2 K15(IV)×1 K16(IV)×1 K19(IV)×1 L10(IV)×1 L14(Ⅲ)×1 L14(IV)×1 M14(IV)×1 M15(Ⅲ)×2 M16(Ⅲ)×8 M16(IV)×17 M17(IV)×1 排土×1	c14 6 11 15 a3 1 b9 a3 1・3 3 21・31・42・71 32 32	38	53	口～胴部	やや良	長石砂粒と小石	RL縄文を横走させた後、ナデ調整、その上に沈線文	内面はミガキ調整、上半は横方向、下半分は縦方向	
図IV-62	404	IV群a類大津式	P16(IV)×4 Q16(IV)×1	13・20 7	5	P16(IV)×7 P16(風倒木)×2 Q16(IV)×5 J11(IV)×1 J15(Ⅲ)×1 M16(Ⅲ)×5 M16(IV)×7 P8(IV)×1	13・20・31 3・53 6・9 a8 2 3 21・32・42・46・84 14		14	19	口縁部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒・海綿骨針	LR縄文を施文後、ミガキと沈線で磨消縄文	内面はミガキ調整、屈曲部より上は横方向
図IV-62	405	IV群a類大津式	L15(IV)×1 L16(Ⅲ)×1 M16(Ⅲ)×8 M16(IV)×13	b61 10 3 21・31・42	23	J11(IV)×1 J15(Ⅲ)×1 M16(Ⅲ)×5 M16(IV)×7 P8(IV)×1	a8 2 3 21・32・42・46・84 14		15	38	口～胴部	やや良	長石砂粒・角閃石焼粒	横方向のナデ調整で無文にした後、沈線文	内面はミガキ調整
図IV-62	406	IV群a類大津式	L14(IV)×1	d3	1				1	口縁部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒・繊維・小石	L縄文を横走させ、口縁部に縦方向のナデ調整を施す	口縁部の断面は丸みをおびる 内面は主に縦方向、より口唇に近い口縁部のみ横方向のナデ調整	
図IV-63	407a・b	IV群a類大津式	J20(Ⅲ)×1 J20(IV)×3 不明×1	3 11 不明	5					7	口縁部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒・海綿骨針	LR縄文を施文後、ミガキと沈線で磨消縄文	内面はミガキ調整、屈曲部より上は横方向
図IV-63			I18(Ⅲ)×1 L15(IV)×1	2 72	2						口～胴部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒・海綿骨針	LR縄文を施文後、ミガキと沈線で磨消縄文	内面はミガキ調整、屈曲部より上は横方向
図IV-63	408	IV群a類大津式	N14(IV)×8	d3・d4・d9・d13	8	N14(IV)×6	d3・d9・d13		6	14	口～胴部	やや良	長石砂粒・海綿骨針	LR縄文を施文後、沈線	内面は横方向のミガキ調整
図IV-63	409	IV群a類大津式白坂3に近いもの	P17(IV)×5	25	5				5	口縁部	良好	長石砂粒・角閃石小粒	LR縄文を施文後、ミガキと沈線で磨消縄文	内面は横方向のナデ調整	
図IV-63	410	IV群a類大津式(白坂3の可能性あり)	M19(IV)×1	21	1	M20(IV)×1 M21(Ⅲ)×2	11 1		3	4	口～胴部	やや良	長石砂粒・砂粒・海綿骨針	RL縄文を施文後、ミガキと沈線で磨消縄文	内面はミガキ調整
図IV-63	411a・b	IV群a類大津式	I16(Ⅲ)×2 I16(IV)×2 J17(IV)×3 J20(木根)×1	1 4 11 55	8	I17(IV)×3 J17(IV)×5 J18(IV)×1	4・5 20・11・33 34		9	17	口～胴部	やや良	繊維・長石砂粒	LR縄文を施文後、ミガキと沈線で磨消縄文	内面はミガキ調整、屈曲部より上は横方向
図IV-63	412	IV群a類大津式	N8(IV)×1 O8(IV)×2	10 22	3	P7(IV)×1 P8(IV)×1	a2 b10		2	5	口～胴部	やや良	長石砂粒と小石・角閃石小粒	LR縄文を施文後、ミガキと沈線で磨消縄文	内面は横方向のミガキ調整

図番号	掲載番号	土器分類	図化した点数			残			総 点数	部位	焼成等	目立った 混入物	施工の特徴	備考・追加事項
			遺構(層位)・調査 区(層位)×点数	遺物番号	点数	遺構(層位)・調査 区(層位)×点数	遺物番号	点数						
図IV-63	413a・b	IV群a類大津式	J13(IV)×1	b9	14	J16(Ⅲ)×1	1	17	31	口～底部	良好	長石砂粒・角閃石小粒・海綿骨針	LR縄文を施工後、ミガキと沈線で磨消縄文	内面はミガキ調整、胴部の膨らみのピークより上は横方向、下は縦方向
			J16(IV)×2	7		K16(IV)×10	6・22・23・35							
			K16(IV)×1	12		K16(木根)×4	5							
			K16(IV)×7	6・11		M8(IV)×1	9							
			L17(IV)×1	9		M17(IV)×1	19							
			M17(Ⅲ)×1	4										
M18(IV)×1	36	M8(IV)×1	7											
図IV-64	414	IV群a類大津式	M11(IV)×5	20・d1	8	M10(風倒木)×2	27	5	13	口～胴部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒・海綿骨針	LR縄文を施工後、ミガキと沈線で磨消縄文	内面はミガキ調整、屈曲部より上は横方向、口径9cm前後
			M12(IV)×2	7・不明		M11(IV)×1	c16							
						M12(IV)×1	16							
図IV-64	415	IV群a類大津式	Q19(IV)×1	6	1	K15(IV)×1	6	5	6	胴～底部	やや良	長石砂粒・海綿骨針	LR縄文を施工後、ミガキと沈線で磨消縄文	内面はミガキ調整
						L14(IV)×1	c2							
						L15(IV)×1	19							
						M17(IV)×2	32							
図IV-64	416	IV群a類大津式7aと別個体	J17(IV)×1	4	3				3	口～胴部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒・海綿骨針・小石	LR縄文を施工後、ミガキと沈線で磨消縄文	内面はミガキ調整、屈曲部はケズリを思わせる
			J17(IV)×2	10・37										
図IV-64	417	IV群a類大津式7aと別個体	J16(Ⅲ)×2	1	6				9	口～胴部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒・海綿骨針・小石	LR縄文を施工後、ミガキと沈線で磨消縄文	内面はミガキ調整、屈曲部より上は横方向
			J17(Ⅲ)×4	1										
図IV-64	418	IV群a類大津式	O16(IV)×9	11・19・24・37	10				10	口～胴部	やや良	長石砂粒と小石・角閃石小粒・海綿骨針	LR縄文を施工後、ミガキと沈線で磨消縄文	内面はミガキ調整、口縁部は横方向、胴部は縦方向
			O16(風倒木)×1	33										
図IV-64	419	IV群a類大津式	J18(Ⅲ)×1	2	11				11	口～胴部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒と小石	LR縄文を施工後、ミガキと沈線で磨消縄文	内面はミガキ調整、屈曲部より上は横方向
			J18(IV)×10	9・17										
図IV-64	420	IV群a類大津式	L15(Ⅲ)×1	4	6	M16(IV)×2	72	2	8	口縁部	やや良	長石砂粒と小石・角閃石小粒	RL縄文を施工後、ミガキと沈線で磨消縄文	内面はミガキ調整、頸部より上は横方向
			L15(IV)×2	11・19										
図IV-64	421	IV群a類大津式	M15(IV)×3	6・11・12	3				3	口～胴部	やや良	長石砂粒と小石・角閃石小粒・海綿骨針	LR縄文を施工後、ミガキと沈線で磨消縄文	内面はミガキ調整、口縁部は横方向、胴部は縦方向
図IV-64	422	IV群a類大津式	L19(IV)×3	26・34	3				3	口～胴部	やや良	長石砂粒と小石・海綿骨針	RL縄文を施工後、ミガキと沈線で磨消縄文	内面は横方向のミガキ調整
図IV-65	423a・b	IV群a類大津式	J18(IV)×1	c1	10	J18(Ⅲ)×1	2	6	16	口～胴部	良好	長石砂粒	LR縄文を施工後、ミガキと沈線で磨消縄文	内面は横方向のミガキ調整
			K18(Ⅲ)×3	7・44		L16(Ⅲ)×2	94							
			K18(IV)×6	11・21・40		L16(IV)×1	10							
						M16(Ⅲ)×1	3							
図IV-65	424a・b	IV群a類大津式	M16(IV)×16	a1	16	K15(Ⅲ)×1	3	66	82	口～胴部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒・角閃石尖	RL縄文を器面全面に施工後、ミガキと沈線で磨消縄文	内面はミガキ調整、屈曲部より上は横方向
						L15(IV)×1	11							
						M15(Ⅲ)×1	1							
						M16(IV)×62	72・79・92・a1							
						N16(IV)×1	9							
図IV-65	425	IV群a類大津式	P16(風倒木)×1	3	6	P16(風倒木)×1	4	3	9	口～胴部	やや良	長石砂粒	LR縄文を施工後、ミガキと沈線で磨消縄文	内面は横方向のミガキ調整
			P17(IV)×4	25・43										
			P17(不明)×1	不明										
図IV-65	426	IV群a類白坂3式	N14(IV)×5	a11・a14	6	N14(IV)×5	a11・a14	5	11	口縁部	良好	長石砂粒と小石	器面にミガキ調整後、LR縄文を施工後、沈線で縁取って磨消縄文	内面は横方向のミガキ調整、L16(Ⅲ)を施工後、沈線で縁取って磨消縄文
			O14(IV)×1	a3										
図IV-65	427	IV群a類白坂3式	N12(IV)×4	8・a7	4			4	口縁部	やや良	長石砂粒と小石・角閃石小粒	LR縄文を横走させた後、沈線文	内面は横方向のミガキ調整	
図IV-65	428a・b	IV群a類大津式	J17(Ⅲ)×4	3	7	J17(Ⅲ)×1	3	2	9	口～胴部	良好	長石砂粒・海綿骨針	器面にミガキ調整後、沈線文様を施す	内面はミガキ調整
			J17(IV)×1	11										
			K19(IV)×2	15										
図IV-65	429	IV群a類大津式	L12(IV)×2	b1・c4	3	L12(IV)×3	b5・b8・b10	7	10	口縁部	やや良	長石砂粒・小石	器面をナデ調整後、RL縄文を施工後、沈線で縁取って磨消縄文	内面は横方向のナデ調整
			排土×1	15										
			M10(風倒木)×1	27										
図IV-65	430	IV群a類大津式白坂3に近いもの	P16(IV)×1	13	1				1	口縁部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒	LR縄文を施工後、沈線文	内面は横方向のミガキ調整
図IV-65	431	IV群a類白坂3式	L14(IV)×2	c6	2	L14(IV)×3	b9・c2・c4	4	6	口縁部	やや良	長石小石・角閃石小粒・砂粒	LR縄文を施工後、沈線文	摩滅著しい
図IV-66	432a・b	IV群a類白坂3式	P12(IV)×8	c3	8	P12(IV)×19	c3	19	27	口～胴部	やや良	長石小石・角閃石小粒	L縄文を施工後、ミガキと沈線で磨消縄文	内面は砂粒が動くほどのナデ調整、頸部とその上は横方向
図IV-66	433a～d	IV群a類白坂3式	L13(IV)×1	d2	14	K15(IV)×3	6・12	22	36	口～胴部	良好	長石砂粒・角閃石小粒・海綿骨針まばら	あらかじめ模様通りにしてLR縄文を施工後、沈線文でなぞった後ミガキ調整を施す。口唇部にもLR縄文	内面はミガキ調整、上半は横方向、下半は縦方向
			L14(IV)×2	a2・a18		L13(IV)×3	d1・d2							
			M14(IV)×1	c3		L16(IV)×1	50							
			M15(Ⅲ)×1	1		M14(IV)×2	c3・d8							
			M15(IV)×5	8・32・39		M15(IV)×8	7・8・16・39・43							
			M16(IV)×1	21		M16(IV)×3	21・46							
			N14(B調査の攪乱)×1	1		N14(IV)×1	2							
			B調査の際に出た土器×2	NS6B-8		N15(IV)×1	15							
図IV-66	434a・b	IV群a類白坂3式	K10(IV)×5	c19・c20	9	O14(IV)×2	a3	2	11	口～胴部	やや良	粒径1～2mm前後の長石砂粒・石	RL縄文を縦方向に施工後、ミガキと沈線で磨消縄文	内面はミガキ調整、頸部とその上は横方向
図IV-66	435a～c	IV群a類大津式白坂3に近いもの	M9(Ⅲ)×1	b1	18	M9(IV)×2	b4・b6	8	26	口～胴部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒	LR縄文を横走させた後、沈線文	内面は横方向のミガキ調整
			M9(IV)×2	b8・b9										
			N9(IV)×15	b11										
図IV-66	436	IV群a類白坂3式	排土×2	15	2	N11(IV)×1	d5	2	4	口～胴部	良好	長石砂粒と小石・角閃石小粒・海綿骨針	LR縄文を縦方向に施工後、ミガキと沈線で磨消縄文	内面は横方向の深いミガキ調整
図IV-67	437a～c	IV群a類大津式	I16(Ⅲ)×1	1	8	I16(Ⅲ)×2	1	4	12	口～胴部	やや良	長石砂粒・角閃石小粒	LR縄文を施工後、ミガキと沈線で磨消縄文	内面は横方向の深いミガキ調整
			I16(IV)×7	4・7・11・16										
図IV-67	438	IV群b並行の沈線文がない土器か	N9(IV)×5	d12	5			5	口～胴部	良好	長石砂粒・角閃石小粒・繊維	RL縄文を施工後、口唇部を縦向きにして無文の文様帯を成形する。	内面は横方向のミガキ調整	

図番号	掲載番号	土器分類	図化した点数			残			総 点数	部 位	焼成等	目立った 混入物	施文の特徴	備考・追加事項
			遺構(層位)・調査 区(層位)×点数	遺物番号	点 数	遺構(層位)・調査 区(層位)×点数	遺物番号	点 数						
図IV-67	439	IV群a類大 津式	I16(Ⅲ)×7 I16(Ⅳ)×4	1 7	11	I16(Ⅳ)×1 I17(Ⅳ)×1	7 4	2	13	胴～底部	やや良	長石砂粒・ 小石	あらかじめ模様 に削してRL 縄文施文後、沈 線文でなぞ った後ミガキ 調整を施す 口唇部にもRL 縄文	内面はミガキ調整
図IV-67	440	IV群a類大 津式	J27(Ⅳ)×1 J28(Ⅳ)×1 L19(Ⅳ)×2 M19(Ⅳ)×5 M20(Ⅲ)×1 N19(Ⅳ)×1	16 11 26・43 21 1 26	11				11	胴～底部	やや良	砂粒密・長 石砂粒	RL縄文を施文 後、ミガキ と沈線で磨消 縄文	底面と内面は ミガキ調整 底面の内面 のみ煤が付 着していない
図IV-68	441a・b	IV群b類ウ サクマイC 式	O12(Ⅳ)×4	d2・3	4	O12(Ⅳ)×6 P10(Ⅳ)×2	c3・d2・d3 32・b5	8	12	口～胴部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒	LR縄文を施文 後、ミガキ と沈線で磨消 縄文 口唇 部にもLR縄文	内面はミガキ調整、 屈曲部より上は 横方向
図IV-68	442a・b	IV群b類ウ サクマイC 式	M12(Ⅳ)×2 M12(木根) ×2 M12(風倒木) ×4 P14(風倒木) ×4	c3・d7 1 2 b3	12	M12(Ⅳ)×1 M12(木根) ×4 M12(風倒木) ×1 M13(Ⅳ)×1 N12(Ⅳ)×1 P14(風倒木) ×1	c3 1 2 a6 a1 b3	9	21	口～胴部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒 密・まばら に海綿骨針	あらかじめ模様 に削してRL 縄文施文後、 沈線文でな ぞった後ミガ キ調整を施 す 口唇部 にもRL縄文	内面は横方向 のミガキ調整
図IV-68	443	IV群b類ウ サクマイC 式	M12(Ⅳ)×2 P14(Ⅳ)×1	b1 d3	3				3	口縁部	やや良	長石砂粒・ 砂粒・海綿 骨針・角閃 石小粒	LR縄文を施文 後、ミガキ と沈線で磨消 縄文 口唇 部にもLR縄文	内面は横方向 のミガキ調整
図IV-68	444	IV群b類ウ サクマイC 式	K8(Ⅳ)×1 K10(Ⅳ)×1	b7 d13	2				2	口縁部	やや良	長石砂粒・ 砂粒・海綿 骨針・繊維 角閃石小粒	RL縄文を施文 後、ミガキ と沈線で磨消 縄文 口唇 部にもRL縄文	内面はミガキ調整、 屈曲部より上は 横方向、下は 縦方向
図IV-68	445	IV群b類ウ サクマイC 式	M12(Ⅳ)×8	a2・a4・a9	8	L13(風倒木) ×1 N10(Ⅳ)×1 N11(Ⅳ)×1 M12(Ⅳ)×3	4 3 c1 a2	6	14	口縁部	やや良	長石砂粒・ 角閃石小粒	LR縄文を施文 後、ミガキ と沈線で磨消 縄文 口唇 部にもLR縄文	内面は横方向 のミガキ調整
図IV-68	446	IV群b類ウ サクマイC 式	N8(Ⅳ)×4	b11・c8・c10	4	L9(Ⅳ)×1 N8(Ⅳ)×1	c11 d10	2	6	口縁部	やや良	長石砂粒・ 砂粒・海綿 骨針・角閃 石小粒	LR縄文を施文 後、ミガキ と沈線で磨消 縄文 口唇 部にもLR縄文	内面はミガキ調整、 屈曲部より上は 横方向
図IV-68	447a・b	IV群b類ウ サクマイC 式の後半	L10(Ⅲ)×1 M11(Ⅳ)×4	c1 31・a3・c5	5	L10(Ⅳ)×1	b5	1	6	口～底部	やや良	長石砂粒	LR縄文を施文 後、ミガキ と沈線で磨消 縄文 口唇 部にもLR縄文	偽口縁風の剥落 内面は ミガキ調整
図IV-69	2	VI群恵山式 の後半	P8(Ⅳ)×1	14	1				1	口～胴部	やや良	角閃石小粒・ 長石砂粒	LR縄文施文	内面横方向の調整
図IV-69	3	VI群聖山・ 瀬崩南川	P8(Ⅳ)×3	5・6・21	3	P8(Ⅳ)×2	b7	2	5	胴部	やや良	角閃石小粒・ 長石砂粒・ 小石	LR縄文施文 後表面ナデ 調整 縦方向 の後、横方 向	表面煤が付着、 内面摩滅
図IV-69	4a・b	VI群アヨ口 3a	P12(攪乱)× 3	3	3				3	胴部	やや良	角閃石小粒・ 長石砂粒	RL縄文施文 後沈線	内面摩滅
図IV-69	7a～e	VI群後北B 式	L15(Ⅲ)×1 L16(Ⅲ)×1 L16(Ⅳ)×1 L17(Ⅲ)×4 L17(Ⅳ)×1 N15(Ⅳ)×1 N21(Ⅳ)×1	3 4 11 4 10 88 8	10	I14(Ⅳ)×1 J17(Ⅳ)×1 K16(Ⅲ)×1 L14(Ⅳ)×1 N8(Ⅲ)×1 P18(Ⅲ)×1	b2 c2 4 a8 b6 3	6	16	口～胴部	やや良	角閃石小粒・ 長石砂粒・ 小石	L縄文、爪形 の刻みを地文 と微隆起線上	内面ミガキ調整
図IV-69	8	VI群後北式 の範疇	O9(Ⅳ)×2	21	2				2	底部	やや良	角閃石小粒・ 長石砂粒・ 小石	LR縄文施文	高台あり
図IV-70	12	IV群a類	K10(Ⅳ)×1	b15	1	K10(Ⅳ)×1	b1	1	2	口～底部	やや良	長石砂粒と 小石が微量	内外面ナデに より無文	良く開く口縁部 と窄まる底部
図IV-70	13	IV群a類	J20(Ⅲ)×4	3	4				4	胴部	やや良	長石砂粒微 量	列点文による 文様	内面ナデ調整
図IV-70	14	IV群a類H- 7に関連	H-7(覆土中 位)×1 M12(Ⅳ)×1	12 a10	2	H-7(覆土上 位)×1	82	1	3	口～胴部	やや良	繊維・長石 砂粒	ミニチュア 縦 方向のナデ 調整によって 無文とし、 口唇部を縁取 るように沈線 をしてその直 下に2本一組 で鋸歯状の沈 線文	内面は横方向 のナデ調整 口径4.5cm前後
図IV-70	15	IV群a類	J8(Ⅳ)×3	16・b7	3				3	胴～底部	やや良	長石砂粒	ミニチュア 縦 方向のナデ 調整によって 無文とし、 格子状に沈線 を施す	内面ミガキ調整 底径4cm前後

表IV-4 包含層出土掲載土製品一覧

図版 番号	掲載 番号	調査 区	遺物 番号	層 位	器 種 名	備考・追加事項	
図IV -70	1	N 8	48	IV	土製品	鼻と鼻上隆起を貼付し目と鼻の穴と口を草本による刺突 耳は貫通孔 顔面のみ胎土には長石小粒・海綿骨針混じる	
	2	K12	29	IV	IV群a類 土製品 ミニチュアの器	涌元Ⅱ式的な沈線文上面観は正中線をまたいで対角線状に穿孔	
	3	J 20	20	IV(2)	IV群a類 釣鐘型土製品	釣鐘型土製品 十文字に穿孔あり 胎土には長石・角閃石小粒が微量混じる	
	4	M16	70	IV(2)	IV群a類 鐸形土製品	潰れた釣鐘型をした土製品 混和材として白色砂粒・角閃石小粒・小石が微量	
	5	I 13	7	IV	IV群a類 土製品	ミニチュアの尖底土器形 長石小粒が微量混じる	
	図IV-70-6~10は復元土器の表に記載・12~15は拓影図の表に記載						
	11	L 17	42	IV(3)	IV群a類 土器底部片	坏形土器底部片	
	16	J 8	2	IV	焼成粘土塊	胎土には長石・海綿骨針微量混じる	
	17	I 14 a	4	IV	焼成粘土塊	胎土には長石混じる	
	18	K16	12	IV(2)	焼成粘土塊	胎土には長石混じる	
	19	O 8	1	風倒木	再生土製品(円板状・IV群a類)	胎土には長石・繊維混じる	
	20	L 20	2	IV	再生土製品(円板状・Ⅲ群a類)	胎土には長石小粒と小石混じる	
	21	P 11	4	IV	再生土製品(円板状・Ⅲ群a類)	胎土には長石・繊維混じる	
	22	Q12	4	IV	再生土製品(円板状・Ⅲ群a類)	胎土には長石・繊維混じる	
	23	Q 7	1	風倒木	再生土製品(円板状・Ⅲ群a類)	胎土には長石・繊維混じる	
	24	Q12	5	IV	再生土製品(円板状・IV群a類)	胎土には長石・角閃石小粒と小石混じる	
	25	M17 d	4	IV	再生土製品(円板状・IV群a類)	胎土には長石・角閃石小粒混じる	
	26	N10	2	IV	再生土製品(円板状・Ⅲ群a類)	胎土には長石・繊維混じる	
	27	J 14 a	3	IV	再生土製品(円板状・IV群a類)	胎土には長石・角閃石小粒と海綿骨針混じる	
	28	I 16	16	IV	再生土製品(円板状・IV群a類)	胎土には長石・繊維混じる	
	29	K 9	39	IV	再生土製品(円板状・Ⅲ群a類)	胎土には繊維混じる	
	30	L 9	8	IV	再生土製品(円板状・Ⅲ群b3類)	胎土には長石・角閃石小粒混じる	
	31	L 8	8	IV	再生土製品(円板状・Ⅲ群b3類)	胎土には長石・角閃石小粒混じる	
	32	L 12 c	11	IV	再生土製品(円板状・IV群a類)	胎土には長石・角閃石小粒混じる	
	33	K 7 d	3	IV上	再生土製品(円板状・IV群a類)	胎土には長石・繊維混じる	
	34	K16	43	IV	再生土製品(円板状・IV群a類)	胎土には角閃石・小石混じる	
	35	K20	51	IV	再生土製品(円板状・IV群a類)	胎土には角閃石・小石混じる	
	36	P 13 d	5	IV	再生土製品(三角形・IV群a類)	胎土には長石小粒混じる	
	37	O 7	19	IV	再生土製品(三角形・IV群a類)	胎土には長石・角閃石小粒混じる	
	38	O 8	15	IV	再生土製品(円板状穿孔有・IV群a類)	胎土には長石小粒・繊維混じる	
	39	P 8	9	IV	再生土製品(円板状穿孔途中・Ⅱ群b類)	胎土には繊維混じる	
	40	H24	9	IV	再生土製品(円板状穿孔有・Ⅲ群a類)	胎土には長石・角閃石小粒と繊維混じる	
	41	M 8	40	IV	再生土製品(円板状穿孔有・Ⅵ群か全面研磨)	胎土には長石小粒混じる	
	42	P 8	26	IV	再生土製品(円板状・Ⅵ群)	胎土には長石小粒混じる	



表Ⅳ－５－１ 包含層出土石器一覧（剥片石器）

	石 鏃	石槍又は ナイフ	石 錐	つまみ付 きナイフ	スクレイ パー	Uフレイ ク	Rフレイ ク	ピエス・ エスキー ユ	両面調整 器	石 核	剥片石器 合計
I											
Ⅲ	17	3		2	37	55	27	4	3	12	160
Ⅳ	54	6	10	28	208	152	88	14	8	46	614
Ⅳ(1)	13	3	4	1	30	57	8	2	7	15	140
Ⅳ(2)	10		3		23	54	13	3	1	17	124
Ⅳ(3)	4		1	2	27	28	8	2		9	81
Ⅳ(4)	2			1	13	25	10		3	10	64
Ⅳ(5)					1	12	1		1	1	16
Ⅳ(6)					2	1					3
Ⅳ(7)					1					1	2
Ⅳ(上)					1	2					3
Ⅳ(中)	1				1	3	1				6
Ⅳ(下)	1			1	11	19	4		2	5	43
Ⅳ(柱)	2				1	3	3	1			10
V		1		1	8	2	3			1	16
B調跡											
攪乱	2		1		3	5					11
木根				1		3	2				6
風倒木	2			1	11	13	4	1		8	40
排土	2				4	2	3			1	12
表採 不明					2	2	2				6
合計	110	13	19	38	384	438	177	27	25	126	1357

表Ⅳ－５－２ 包含層出土石器一覧（礫石器）

	石 斧	すり石	偏平打製 石 器	北海道式 石 冠	たたき石	砥 石	石 鋸	石 皿	台 石	礫石器の 合計
I										
Ⅲ	7	4	21	6	35	2	1	5	17	98
Ⅳ	70	12	293	106	216	9	1	11	168	886
Ⅳ(1)	13	9	19	4	39	3		1	30	118
Ⅳ(2)	5	4	11	8	29	4		6	33	100
Ⅳ(3)	4	6	15	6	24	1		1	58	115
Ⅳ(4)	3	6	7	1	20	3		1	15	56
Ⅳ(5)	3	2	4	2	9	2		1	6	29
Ⅳ(6)	1	2	1		1			1		6
Ⅳ(7)					1					1
Ⅳ(上)	2		1		1				2	6
Ⅳ(中)										
Ⅳ(下)	6	3	2	2	14			2	11	40
Ⅳ(柱)				1	1				4	6
V	2	1	8	7	10				2	30
B調跡				1						1
攪乱	1		2	1	3			1	11	19
木根			20	5	7	1			8	41
風倒木	1	4	14	2	10				12	43
排土	2		8	5	1				1	17
表採 不明	1			1						2
不明	4		2	2	5	1			6	20
合計	125	53	428	160	426	26	2	30	384	1634

表Ⅳ－５－３ 包含層出土石器一覧（礫関係）

	被熱礫	敲打痕のある被熱礫	敲打痕のある礫	その他の礫	原石	軽石	礫の合計
I							
Ⅲ	38		2	41	17	5	103
Ⅳ	177	2	10	928	13	10	1140
Ⅳ(1)	27	4	16	18	25		90
Ⅳ(2)	77	5	20	15	11		128
Ⅳ(3)	30	2	9	4	7		52
Ⅳ(4)	16	2	6	1	13		38
Ⅳ(5)	6		2	4	4		16
Ⅳ(6)	1						1
Ⅳ(7)				1			1
Ⅳ(上)	2			1			3
Ⅳ(中)							
Ⅳ(下)	13	3	3	5	3		27
Ⅳ(柱)	1			1	1		3
V	2			15			17
B調跡							
攪乱	3			14			17
木根	10			21			31
風倒木	14			26	2	1	43
排土				17	1		18
表採							
不明	1	1		20			22
合計	418	19	68	1132	97	16	1750

表Ⅳ－５－４ 包含層出土石器一覧（剥片関係）

	安山岩	頁岩	黒曜石	メノウ	流紋岩	泥岩	チャート	砂岩	片岩	剥片の合計
I		1	1							2
Ⅲ	2	233	75	253	1	2	1			567
Ⅳ	5	1094	292	997		14	7			2409
Ⅳ(1)	2	169	12	202	1	9				395
Ⅳ(2)	2	121	17	143	2	11				296
Ⅳ(3)		109	3	91	1	4				208
Ⅳ(4)		53	10	48	1	5		1	1	119
Ⅳ(5)		26		40	1	2	1			70
Ⅳ(6)		6		4						10
Ⅳ(7)		1								1
Ⅳ(上)	1	11		9	1					22
Ⅳ(中)		2		1						3
Ⅳ(下)		39		22		4				65
Ⅳ(柱)		11	1	12						24
V		10	2	15						27
B調跡		3								3
攪乱		5	3	13						21
木根		16		14						30
風倒木		54	5	44						103
排土		26	4	17		1				48
表採										
不明		10	1	5						16
合計	12	2000	426	1930	8	52	9	1	1	4439

表IV-5-5 包含層出土石器一覽（石器類合計）

	剥片石器 合計	礫石 合計	剥片	石製品	礫合計	石器全体の 合計
I			2			2
III	160	98	566	1	103	928
IV	614	886	2413	13	1140	5066
IV(1)	140	118	395		90	743
IV(2)	124	100	297	1	128	650
IV(3)	81	115	208	1	52	457
IV(4)	64	56	119		38	277
IV(5)	16	29	70		16	131
IV(6)	3	6	10		1	20
IV(7)	2	1	1		1	5
IV(上)	3	6	22		3	34
IV(中)	6		3			9
IV(下)	43	40	65		27	175
IV(柱)	10	6	24		3	43
V	16	30	27		17	90
B調跡		1	3			4
攪乱	11	19	21		17	68
木根	6	41	30		31	108
風倒木	40	43	99		43	225
排土	12	17	48		18	95
表採		2				2
不明	6	20	16		22	64
合計	1357	1634	4439	16	1750	9196
				156は石製品としてカウントした自然の穿孔が為される礫をこの項に加えた		

表IV-6 包含層出土掲載石器・石製品一覧

図番号	掲載番号	調査区	遺物No.	層位	器種名	石質	縦(mm)	横(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
図IV-71	1	I 15	24	IV(1)	石鏃	黒曜石	(23.0)	17.0	3.5	(1.0)	
図IV-71	2	M22	2	III	石鏃	黒曜石	22.0	16.0	2.5	0.6	
図IV-71	3	J 8 a	1	III	石鏃	黒曜石	37.0	22.0	3.0	2.8	
図IV-71	4	K 17	2	III	石鏃	メノウ	29.0	13.0	3.5	1.1	
図IV-71	5	M18	8 c	III	石鏃	頁岩	(30.0)	13.0	3.0	(1.0)	
図IV-71	6	L 12 d	3	IV	石鏃	メノウ	41.0	12.0	8.0	3.3	
図IV-71	7	O 10 a	10	IV	石鏃	黒曜石	24.0	14.0	3.0	0.6	
図IV-71	8	N 9 c	6	IV	石鏃	黒曜石	(22.0)	14.0	3.0	(0.6)	
図IV-71	9	N 9 d	2	III	石鏃	頁岩	20.0	15.0	2.0	0.5	
図IV-71	10	排土	28	排土	石鏃	頁岩	39.0	16.0	5.0	2.3	
図IV-71	11	K 9	23	IV	石鏃	頁岩	39.0	19.0	4.0	2.0	
図IV-71	12	K 12 d	12	IV	石鏃	メノウ	27.0	13.0	4.0	1.3	
図IV-71	13	P 10	5	IV	石鏃	頁岩	44.0	15.0	5.0	3.0	
図IV-71	14	O 12	2	IV	石鏃	頁岩	38.0	12.0	4.0	1.5	
図IV-71	15	M13	5	IV	石鏃	頁岩	38.0	16.0	5.5	2.2	
図IV-71	16	L 10 d	11	IV	石鏃	頁岩	27.0	16.0	5.0	1.3	
図IV-71	17	M10	8	IV	石鏃	黒曜石	38.0	16.0	5.0	2.1	
図IV-71	18	L 10 c	11	IV	石鏃	頁岩	48.0	14.0	4.0	2.6	
図IV-71	19	M18	8 a	III	石鏃	頁岩	24.0	9.0	4.5	1.0	
図IV-71	20	K 19	88	IV(柱)	石鏃	頁岩	35.0	11.5	5.0	1.7	
図IV-71	21	M18	8 b	III	石鏃	頁岩	(39.0)	8.5	4.5	(1.4)	
図IV-71	22	K 12 d	7	IV	石鏃	頁岩	41.0	13.0	4.0	1.8	
図IV-71	23	M19	8	III	石鏃	頁岩	(42.5)	12.5	3.5	(2.0)	
図IV-71	24	H28	17	IV(3)	石鏃	頁岩	47.0	15.5	4.0	2.7	
図IV-71	25	I 11 b	2	IV	石鏃	頁岩	44.0	13.0	6.0	2.4	
図IV-71	26	P 17	6	III	石鏃	頁岩	39.0	11.0	6.5	2.5	
図IV-71	27	H20	5	IV(1)	石槍又はナイフ	黒曜石	71.0	19.5	9.5	12.5	
図IV-71	28	K 8 d	2	III	石槍又はナイフ	頁岩	78.0	23.0	11.9	18.6	
図IV-71	29	O 14	4	V	石槍又はナイフ	頁岩	86.0	31.0	12.4	27.1	
図IV-71	30	M12	11	IV	石槍又はナイフ	黒曜石	80.0	28.0	13.0	23.8	
図IV-71	31	M 9	51	IV	石槍又はナイフ	頁岩	87.0	31.0	11.0	33.3	
図IV-71	32	K 10	19	IV	石槍又はナイフ	頁岩	116.0	45.0	14.0	66.1	
図IV-71	33	I 20	14	IV(1)	石槍又はナイフ	頁岩	73.0	29.0	10.0	17.7	
図IV-71	34	H24	8	IV(1)	石槍又はナイフ	頁岩	81.0	24.0	13.5	21.5	
図IV-72	35	P 17	28	IV(2)	石鏃	頁岩	36.0	20.4	12.1	8.5	
図IV-72	36	O 13 d	6	IV	石鏃	頁岩	55.0	29.0	9.5	9.4	
図IV-72	37	N 8	56	IV	石鏃	頁岩	46.0	22.0	8.4	6.4	
図IV-72	38	P 18 c	4	IV(3)	石鏃	チャート	45.0	26.5	10.3	8.5	
図IV-72	39	O 12 a	15	IV	石鏃	黒曜石	43.0	32.0	6.2	5.0	
図IV-72	40	K 10 d	7	IV	石鏃	メノウ	51.0	30.5	12.8	13.7	
図IV-72	41	J 14 a	2	IV	石鏃	頁岩	49.0	51.5	8.8	15.2	
図IV-72	42	I 24	6	IV(2)	石鏃	頁岩	50.0	11.7	7.3	4.5	
図IV-72	43	K 22	5	IV(1)	石鏃	頁岩	55.0	12.5	7.0	5.2	
図IV-72	44	P 9 a	3	IV	つまみ付きナイフ	黒曜石	86.0	33.0	11.0	29.0	
図IV-72	45	M 9	14	IV	つまみ付きナイフ	頁岩	80.0	25.0	6.0	13.5	
図IV-72	46	M12 d	4	IV	つまみ付きナイフ	頁岩	84.0	25.0	9.0	18.9	
図IV-72	47	K 24	11	IV(下位)	つまみ付きナイフ	頁岩	71.0	25.0	7.5	11.9	
図IV-72	48	O 9 c	2	III	つまみ付きナイフ	頁岩	27.0	29.0	5.8	7.5	
図IV-72	49	N 9	1	IV	つまみ付きナイフ	頁岩	66.0	25.0	8.5	12.5	
図IV-72	50	L 29	3	IV(3)	つまみ付きナイフ	頁岩	72.0	27.0	9.0	14.9	
図IV-72	51	K 10 d	10	IV	つまみ付きナイフ	頁岩	109.0	34.0	12.0	43.1	
図IV-72	52	I 17	27	IV(4)	つまみ付きナイフ	頁岩	108.0	34.0	15.0	45.7	
図IV-72	53	J 10	2	IV	つまみ付きナイフ	頁岩	73.0	22.0	17.0	14.7	
図IV-73	54	P 9	39	IV	つまみ付きナイフ	頁岩	98.2	39.8	19.6	63.5	
図IV-73	55	O 11 d	2	IV	つまみ付きナイフ	頁岩	52.0	29.0	8.0	9.2	
図IV-73	56	L 8	9	IV	つまみ付きナイフ	頁岩	85.8	44.5	15.0	45.9	
図IV-73	57	M10	7	IV	つまみ付きナイフ	頁岩	61.0	48.0	12.0	18.7	
図IV-73	58	N 8	17	V	つまみ付きナイフ	頁岩	46.0	76.0	8.8	18.8	
図IV-73	59	I 17	2	III	つまみ付きナイフ	頁岩	32.0	69.0	8.5	10.8	
図IV-73	60	M14 d	9	IV	スクレイパー	メノウ	81.0	34.0	20.0	45.7	ヘラ状石器
図IV-73	61	P 8	26	IV	スクレイパー	頁岩	68.0	30.5	10.2	20.3	ヘラ状石器
図IV-73	62	O 15	8	IV	スクレイパー	頁岩	58.0	43.5	16.0	35.1	
図IV-73	63	M28	16	IV	スクレイパー	チャート	32.0	20.0	9.0	4.6	
図IV-73	64	I 15	17	IV(下位)	スクレイパー	頁岩	67.0	46.0	19.5	54.0	
図IV-73	65	I 17	21	IV	スクレイパー	頁岩	69.0	28.0	19.0	38.8	
図IV-73	66	M16	47	IV(4)	スクレイパー	頁岩	74.5	32.0	18.0	47.3	
図IV-74	67	O 10 b	15	IV	スクレイパー	黒曜石	40.0	32.0	11.0	9.7	
図IV-74	68	K 14 b	5	IV	スクレイパー	頁岩	46.5	33.0	11.0	15.5	
図IV-74	69	N 10 b	3	IV	スクレイパー	黒曜石	42.5	23.0	13.0	19.3	
図IV-74	70	J 10 d	2	IV	スクレイパー	頁岩	45.7	38.0	11.9	23.2	
図IV-74	71	J 12 b	8	IV	スクレイパー	頁岩	65.8	36.7	17.7	127.7	
図IV-74	72	O 8 c	8	III	スクレイパー	頁岩	49.0	26.0	11.0	10.3	搔器
図IV-74	73	O 8 c	9	III	スクレイパー	頁岩	50.0	22.0	10.0	9.6	搔器

図番号	掲載番号	調査区	遺物No.	層位	器種名	石質	縦(mm)	横(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
図IV-74	74	N14 c	5	IV	スクレイパー	頁岩	65.0	39.0	8.5	19.4	
図IV-74	75	N11	4	IV	スクレイパー	頁岩	69.0	22.5	6.5	11.6	
図IV-74	76	M8 d	3	IV	スクレイパー	メノウ	55.5	31.2	11.0	21.2	
図IV-74	77	O9	30	IV	スクレイパー	頁岩	67.0	39.0	14.0	38.5	
図IV-74	78	K10	7	IV	スクレイパー	頁岩	72.0	43.0	10.0	37.4	
図IV-74	79	N12 d	2	IV	スクレイパー	頁岩	84.2	36.2	6.5	28.4	
図IV-74	80	L11	4	IV	スクレイパー	頁岩	58.0	30.0	7.5	11.7	
図IV-74	81	M9	20	IV	スクレイパー	頁岩	75.8	45.8	15.9	61.6	
図IV-74	82	M8	20	IV	スクレイパー	頁岩	63.5	34.4	11.5	26.3	
図IV-74	83	J10	4	IV	スクレイパー	黒曜石	65.0	31.1	12.2	21.7	
図IV-74	84	N12	2	IV	スクレイパー	メノウ	52.0	25.4	0.6	8.2	
図IV-74	85	M9	26	V	スクレイパー	頁岩	77.5	39.2	9.9	27.5	
図IV-74	86	L8 c	5	III	スクレイパー	頁岩	91.0	46.0	15.5	63.0	
図IV-75	87	O8	14	IV	スクレイパー	頁岩	90.0	37.7	12.4	139.7	
図IV-75	88	K16	53	IV(下)	スクレイパー	頁岩	79.0	23.0	11.0	26.8	
図IV-75	89	Q13	5	IV	スクレイパー	頁岩	115.0	49.3	24.5	135.3	
図IV-75	90	J11 d	10	IV	スクレイパー	メノウ	104.8	46.6	19.9	93.9	
図IV-75	91	M9	22	V	スクレイパー	頁岩	94.0	34.5	17.5	45.1	
図IV-75	92	I11	2	IV	スクレイパー	メノウ	56.0	32.0	18.0	32.7	
図IV-75	93	N8 d	10	III	スクレイパー	頁岩	109.0	38.0	13.3	38.2	
図IV-75	94	L8 c	1	III	スクレイパー	流紋岩	11.9	43.0	21.0	80.2	M9 d 1(III)と接合
図IV-76	95	M13	9	V	スクレイパー	頁岩	42.3	70.0	12.8	31.0	
図IV-76	96	M12	30	V	スクレイパー	頁岩	52.0	65.3	9.2	27.9	
図IV-76	97	L9	11	IV	スクレイパー	頁岩	61.7	83.2	18.7	60.7	
図IV-76	98	J10 a	5	IV	スクレイパー	頁岩	79.0	48.0	12.0	29.2	
図IV-76	99	P15	27	IV(下)	スクレイパー	頁岩	63.0	42.0	9.0	21.1	
図IV-76	100	P13	1	IV	スクレイパー	メノウ	49.3	39.4	15.2	25.6	
図IV-76	101	M8	19	IV	スクレイパー	頁岩	41.3	73.0	15.2	27.9	
図IV-76	102	N12	7	IV	スクレイパー	チャート	51.7	45.0	12.0	16.3	
図IV-76	103	K9	47	IV	スクレイパー	頁岩	55.0	38.5	12.7	25.1	
図IV-76	104	J16	25	IV(下位)	スクレイパー	頁岩	75.0	60.0	32.0	220.0	
図IV-77	105	N10 c	8	IV	ピエスエスキーユ	黒曜石	27.0	21.0	11.0	5.6	
図IV-77	106	L11 d	5	IV	ピエスエスキーユ	黒曜石	42.0	21.0	11.0	6.0	
図IV-77	107	J20	23	IV(2)	ピエスエスキーユ	メノウ	33.7	27.0	16.0	14.6	
図IV-77	108	N19	11	IV(1)	両面調整石器	メノウ	80.4	38.5	18.7	55.8	
図IV-77	109	I19	24	IV(4)	両面調整石器	頁岩	121.8	52.3	27.0	171.5	
図IV-77	110	L15 b	3	IV	石核	頁岩	74.5	82.0	63.5	340.0	
図IV-77	111	L12	7①	IV	石核	めのう	69.0	84.0	24.1	170.0	
図IV-78	112	O8	70	IV	石斧	安山岩	124.0	50.0	30.0	290.0	
図IV-78	113	O8	71	IV	石斧	安山岩	107.0	55.0	28.0	240.0	
図IV-78	114	J10 a	15	IV	石斧	緑色泥岩	89.0	42.0	14.0	77.0	
図IV-78	115	K12 d	13	IV	石斧	緑色泥岩	105.0	42.0	12.0	110.0	K17区21(風倒木)と接合(基部側)
図IV-78	116	Q11	5	V	石斧	緑色泥岩	114.0	46.0	27.5	240.0	
図IV-78	117	J17	13	IV(1)	石斧	片岩	(90.0)	45.0	29.0	(182.0)	
図IV-78	118	M8 c	2	IV	石斧	緑色泥岩	(92.0)	47.0	21.5	(149.0)	
図IV-79	119	M15	84	IV(上位)	石斧	緑色泥岩	104.0	46.0	16.0	115.0	
図IV-79	120	M9	6	IV	石斧	緑色泥岩	(104.0)	52.0	16.0	(146.0)	
図IV-79	121	O13 b	8	IV	石斧	緑色泥岩	117.0	47.0	20.0	171.0	L11 d区4(IV)と接合(刃部側)
図IV-79	122	I14 b	11	IV	石斧	緑色泥岩	98.5	37.0	22.0	105.7	J17区60(IV)と接合(刃部側)
図IV-79	123	I15	18	IV(下位)	石斧	片岩	87.5	33.5	12.0	61.0	
図IV-79	124	P15	34	IV	石斧	緑色泥岩	(88.0)	37.0	17.0	(87.0)	
図IV-79	125	I13	5	不明	石斧	緑色泥岩	81.0	35.0	19.0	79.0	
図IV-79	126	M9	7	IV	石斧(石のみ)	片岩	48.0	15.0	5.5	6.7	
図IV-79	127	J9 b	2	III	石斧(石のみ)	片岩	92.0	18.0	9.0	29.0	
図IV-79	128	不明	25	表面採集	石斧(石のみ未成品)	緑色泥岩	97.0	24.0	19.0	75.0	
図IV-79	129	M18	57	IV(3)	石斧(石斧未成品)	緑色泥岩	(93.0)	(46.0)	(13.0)	(69.0)	P10区(IV)8と接合(基部側)
図IV-80	130	K28	14	IV	北海道式石冠	安山岩	107.0	(148.0)	89.0	(1330.0)	
図IV-80	131	N12	20	V	北海道式石冠	安山岩	(81.0)	123.0	63.0	(940.0)	
図IV-80	132	S25	5	IV	北海道式石冠(未成品)	安山岩	(86.0)	(101.0)	(73.0)	(550.0)	
図IV-80	133	N10	17	IV	北海道式石冠(石製品)	安山岩	84.0	110.0	65.0	270.0	
図IV-80	134	K8 c	12	IV	北海道式石冠	安山岩	87.0	(126.0)	68.0	(1.1)	
図IV-80	135	J10	21	IV	北海道式石冠	安山岩	115.0	(148.0)	87.0	(2.1)	
図IV-81	136	P14	6	V	北海道式石冠	安山岩	102.0	168.0	52.9	1.3	
図IV-81	137	L8	43	IV	北海道式石冠	安山岩	97.0	122.0	72.0	1.4	
図IV-81	138	O9	54	IV	北海道式石冠	安山岩	87.0	117.0	68.0	870.0	
図IV-81	139	P8	50	IV	北海道式石冠	安山岩	86.0	140.0	61.0	1.2	
図IV-81	140	M8	65	IV	北海道式石冠	安山岩	88.0	114.0	61.5	920.0	
図IV-81	141	J8 c	3	IV	北海道式石冠	安山岩	83.0	115.0	43.0	650.0	
図IV-82	142	K10	30	IV	北海道式石冠	安山岩	94.0	(135.0)	50.0	(880.0)	
図IV-82	143	Q25	2	IV	北海道式石冠	安山岩	77.0	130.0	69.0	820.0	O9区-41(IV)と接合(正面図左側)
図IV-82	144	L16	33	IV(3)	北海道式石冠	安山岩	102.0	113.0	67.0	1070.0	
図IV-82	145	N10	14	V	北海道式石冠	安山岩	97.0	134.0	74.3	1.4	
図IV-82	146	O8	49	IV	北海道式石冠	安山岩	58.0	(60.0)	35.0	(140.0)	
図IV-82	147	L14 b	4	IV	北海道式石冠	安山岩	65.0	89.0	61.0	480.0	
図IV-82	148	L14 c	15	IV	北海道式石冠	安山岩	72.0	98.0	58.0	550.0	

図番号	掲載番号	調査区	遺物No.	層位	器種名	石質	縦(mm)	横(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
図IV-83	149	J 13 d	1	IV	北海道式石冠	安山岩	90.0	119.0	92.1	1.2	
図IV-83	150	N 18	7	III	北海道式石冠	安山岩	77.0	140.0	50.0	690.0	
図IV-83	151	N 8 d	7	III	北海道式石冠	安山岩	102.0	134.0	53.0	1.1	
図IV-83	152	K 10	31	IV	北海道式石冠	安山岩	77.0	119.0	63.0	880.0	
図IV-83	153	K 9	25	IV	北海道式石冠	安山岩	73.0	90.0	38.0	370.0	
図IV-83	154	P 11	6	IV	北海道式石冠	安山岩	115.0	164.0	71.0	2.0	
図IV-84	155	L 15	84	IV	北海道式石冠(未成品)	安山岩	130.0	152.0	80.0	2420.0	
図IV-84	156	N 10 b	6	IV	北海道式石冠(石製品)	軽石	78.0	92.5	71.0	240.0	
図IV-84	157	M 8	54	IV	偏平打製石器	安山岩	98.0	145.0	33.0	800.0	
図IV-84	158	M 8	52	IV	偏平打製石器	安山岩	86.0	166.0	38.0	840.0	
図IV-84	159	M 9 d	27	IV	偏平打製石器	安山岩	78.0	151.0	35.3	710.0	
図IV-84	160	M 8	51	IV	偏平打製石器	安山岩	151.0	70.0	33.4	460.0	
図IV-85	161	L 12	33	攪乱	偏平打製石器	安山岩	100.5	159.0	54.0	1060.0	
図IV-85	162	N 8	57	IV	偏平打製石器	安山岩	91.0	122.0	28.0	540.0	
図IV-85	163	M 9	43	IV	偏平打製石器	安山岩	(93.0)	(163.0)	37.0	(680.0)	L 14 d区-10(IV)と接合(正面図右側)
図IV-85	164	M 12	25	IV	偏平打製石器	安山岩	85.0	149.0	42.5	560.0	M 10区-27(木根)と接合(正面図右側)
図IV-85	165	M 8	87	IV	偏平打製石器	安山岩	110.0	186.0	34.0	100.0	
図IV-85	166	O 11	15	IV	偏平打製石器	安山岩	93.0	169.0	27.0	630.0	P 12区- 8 (IV)と接合(正面図右側)
図IV-86	167	L 21	24	IV	偏平打製石器	安山岩	86.0	157.0	34.0	580.0	L 21区-33(風倒木)と接合(正面図右側)
図IV-86	168	P 8	39	IV	偏平打製石器(被熱)	安山岩	115.0	154.0	29.0	730.0	
図IV-86	169	P 8 b	2	III	偏平打製石器	安山岩	106.0	166.0	35.0	720.0	
図IV-86	170	I 13 b	5	IV	偏平打製石器	安山岩	110.0	172.0	50.0	1340.0	
図IV-86	171	M 11	21	IV	偏平打製石器	安山岩	115.0	182.0	29.6	830.0	
図IV-86	172	M 11	26	IV	偏平打製石器	安山岩	80.0	167.0	41.7	660.0	
図IV-87	173	P 10 b	9	IV	偏平打製石器	安山岩	84.0	140.0	17.0	310.0	
図IV-87	174	N 10	11	V	偏平打製石器	安山岩	102.0	140.0	20.0	410.0	
図IV-87	175	M 10 b	7	IV	偏平打製石器	安山岩	97.0	151.0	24.0	480.0	
図IV-87	176	M 9 a	10	IV	偏平打製石器	安山岩	99.0	157.0	40.5	750.0	
図IV-87	177	M 11 c	14	IV	偏平打製石器	安山岩	99.0	144.0	29.0	430.0	
図IV-87	178	O 9	42	IV	偏平打製石器	安山岩	119.0	153.0	40.0	690.0	O 7区- 2 (風倒木)(正面図左側) / O 8区-57 (IV)と接合(正面図右側)
図IV-87	179	M 9	49	IV	たたき石	安山岩	106.0	168.0	38.0	1.0	偏平打製石器未成品である
図IV-88	180	O 14	9	木根	たたき石	安山岩	68.0	83.0	30.0	250.0	
図IV-88	181	L 14 c	10	IV	たたき石	安山岩	96.0	66.0	31.7	260.0	
図IV-88	182	O 8 a	6	III	たたき石	安山岩	123.0	54.0	30.7	300.0	
図IV-88	183	M 9 c	12	IV	たたき石	安山岩	130.0	75.0	70.0	980.0	
図IV-88	184	K 8 c	1	III	たたき石	安山岩	67.0	64.0	47.3	300.0	被熱
図IV-88	185	M 10 c	1	IV	たたき石	安山岩	81.0	58.0	54.7	350.0	
図IV-88	186	M 11	20	IV	たたき石	安山岩	114.0	89.0	60.0	850.0	
図IV-88	187	I 13	17	IV	たたき石	安山岩	148.0	73.0	54.0	880.0	
図IV-88	188	M 13 c	4	IV	たたき石	安山岩	85.0	105.0	55.0	790.0	
図IV-88	189	J 11	18	IV	たたき石	安山岩	220.0	66.0	55.0	850.0	
図IV-88	190	N 12	21	IV	たたき石	安山岩	126.0	93.0	44.0	780.0	
図IV-88	191	L 10	26	IV	たたき石	安山岩	68.0	79.0	33.0	260.0	
図IV-89	192	M 13	12	IV	たたき石	安山岩	142.0	74.0	46.3	650.0	
図IV-89	193	N 12	26	V	たたき石	安山岩	180.0	85.0	60.0	1.3	
図IV-89	194	J 8 c	12	IV	たたき石	安山岩	143.0	65.0	24.0	390.0	
図IV-89	195	Q 13	8	IV	たたき石	安山岩	137.0	141.0	44.3	1.1	
図IV-89	196	P 9	5	攪乱	たたき石	安山岩	106.0	92.0	65.0	780.0	
図IV-89	197	P 8	41	IV	石鋸	安山岩	111.8	75.5	15.0	160.0	
図IV-89	198	Q 22	5	III	石鋸	安山岩	214.0	80.5	17.1	335.0	
図IV-89	199	M 10 b	6	IV	砥石	安山岩	120.0	74.0	30.0	410.0	
図IV-89	200	O 8 c	11	IV	砥石	安山岩	(138.0)	(107.0)	15.0	(250.0)	
図IV-90	201	L 10 c	2	IV	砥石	安山岩	164.0	146.0	45.0	1260.0	
図IV-90	202	K 28	33	IV	石皿	安山岩	476.0	342.0	115.0	32000.0	
図IV-90	203	J 19	25	IV	石皿	安山岩	472.0	202.0	75.0	10500.0	
図IV-91	204	L 10 d	20	IV	台石	安山岩	481.0	305.0	110.0	17000.0	
図IV-91	205	L 9	44	IV	石皿	安山岩	371.0	282.0	167.0	22500.0	
図IV-92	1	L 20	24	IV(3)	石製品	黒曜石	22.0	(63.0)	8.0	(10.0)	
図IV-92	2	N 20	3	III	石製品	頁岩	58.5	60.0	23.5	119.4	
図IV-92	3	N 9 d	18	IV	石製品	軽石	23.0	25.0	11.0	2.3	
図IV-92	4	K 14 b	1	IV	石製品	軽石	35.0	29.0	9.5	3.4	
図IV-92	5	O 8	8	IV	石製品	軽石	44.0	62.0	12.0	22.3	
図IV-92	6	O 8	47	IV	石製品	軽石	33.8	31.4	28.0	12.8	
図IV-92	7	O 8	61	IV	石製品	軽石	44.0	41.0	32.5	22.3	
図IV-92	8	H 22	4	IV	石製品	軽石	51.0	68.0	39.0	62.3	
図IV-92	9	P 15	7	IV	石製品	軽石	71.0	99.0	38.0	125.9	
図IV-92	10	O 8	72	IV	石棒	安山岩	350.0	118.0	130.0	7000.0	
図IV-92	11	M 17	40	IV(2)	石棒に類する礫	安山岩	314.0	107.0	83.0	4500.0	
図IV-92	12	K 7 c	2	IV	貝化石	砂岩	78.0	62.0	48.7	390.0	コシバニシキガイ(イタヤガイ科ニシキガイ属) <i>Chlamys cosibensis</i> (Yokoyama) 絶滅種 生息年代: 中新世(約1300万年前)~前期更新世(約100万年前) 森町付近での推定産出層は八雲層 道南に広く分布する地層



# V 自然科学的分析

## 1. 森町濁川左岸遺跡出土の動物遺存体

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

濁川左岸遺跡は、噴火湾である内浦湾に面した海岸段丘上（標高約37～45m）に位置する縄文時代中期～後期の集落跡であり、調査区南側に濁川が、北側に無名沢が流れている。これまでの発掘調査の結果、住居跡、ピット、焼土などが検出されている。これら検出された遺構の中で、住居跡覆土から当時の食物残滓とみられる焼骨が検出された。そこで、当時の動物利用を明らかにするために、今回出土した焼骨について骨同定を実施する。

### 1. 試料

試料は、A地区で検出された4基の住居跡（H-6、H-15、H-16、H-18）、土坑1基（P-20）、焼土（F-9）、石組み炉（F-28）より、フローテーション法で処理された際に得られた（表V-3）焼骨片である。なお、これらフローテーション法によって得られた試料の詳細を表V-2に示す。

H-6は、楕円形を呈する縄文時代後期前葉の竪穴住居址である。コの字形を呈する石組炉の床面から試料が採取された（NSA-1）。

H-15は、サイベ沢Ⅶ式土器が比較的まとまって廃棄された縄文時代中期中葉の竪穴住居址である。平成14年度と平成15年度の2回に渡って分析調査を実施され、覆土中位から2点（NS02-2、NSA-3）、床面直上に薄く広がる焼土層から2点（NS02-1、NSA-4）が採取された。この内、NS02-2には、骨針とみられている骨角器1点が含まれる。

H-12は、縄文時代後期前葉に属し、床面に焼土と別に石組がみられる、不整な円形を呈する住居址である。床面の焼土から試料が採取された（NSA-5）。

H-18は、縄文時代後期前葉に属するとみられ、不整な円形を示す住居址で、石組み炉を持つ。試料は、石組炉の覆土から採取された（NSA-6）。

P-20は、縄文時代後期前葉に属し、覆土が3層に分層されている。覆土には、土坑底部の覆土3に焼骨がほとんど含まれていないが、覆土2および覆土1に微細な焼骨が含まれる。試料は、覆土上部から採取された（NSA-8）。

F-9は、縄文時代中期前半から後期前葉に属すると考えられている。覆土1および覆土2に分層され、上部の覆土1に微細な焼骨片が多く含まれる。試料は、覆土上部（覆土1）から採取された（NSA-10）。

F-28は、縄文時代後期前葉に属し、掘り込みが確認されずまた床面も検出されないことから、単独の石組炉とされている。試料は、石組炉南側の炉覆土から採取された（NSA10）。

### 2. 分析方法

試料を肉眼およびルーペで観察し、その形態的特徴から、種類および部位の特定を行う。計測には、デジタルノギスを用いる。なお、同定および解析には、金子浩昌先生に協力をお願いしたので、署名原稿として原稿を掲載させて頂いた。



3. 結果および考察

濁川左岸遺跡の出土骨

金子浩昌

(1) 検出状況

検出される動物分類群一覧を表V-1に、同定結果を表V-3に示す。検出された分類群は、魚類12種類(イワシ、ニシン、サケ・マス類、ウグイ類、タラ類、アイナメ、ホッケ、カジカ類、ブリ、マダイ、ヒラメ、カレイ類)、両生綱カエル類?、鳥類1種類(スズメ目)、哺乳類(海獣類?を含む)に同定される。以下、遺構ごとに結果を示す。

<H-6>

魚類の鱗棘と部位不明破片が検出される程度にとどまる。

<H-15>

比較的多くの種類が検出されている。以下、種類ごとに結果を示す。

・ニシン

椎骨、耳骨、主上顎骨が検出される。椎骨と耳骨の検出が最も多い。特に耳骨は、左右に2個付くので、個体数の推定も可能である。ただし、破損し易い部分であるので、現存する標本が当時の埋存量をどの程度反映しているか問題が残る。主上顎骨も検出されているので、頭部や胴部がまとめて廃棄されていると推定される。ニシンは、体長25cm程度の個体が推定されるが、さらに小さい個体も存在している可能性がある。

・サケ・マス類

椎骨片が僅かに検出される程度である。

・ウグイ類

尾椎骨2点が検出される。ニシンとほぼ同じサイズであるとみられる。

・タラ類

前上顎骨ないし歯骨とみられる顎骨の破片である。他の魚種よりは大形の個体の破片である。

・アイナメ類

アイナメとホッケの尾椎が検出されている。量的には、ウグイ類と同様に少ない。漁獲量も多くなかった可能性がある。この他、アイナメ科の一種の右角骨破片が1点検出されている。

・ブリ

前上顎骨と歯骨が検出される。前上顎

表V-1 検出動物分類群一覧

脊椎動物門	Phylum Vertebrata
硬骨魚綱	Class Osteichthys
条鰭亜綱	Subclass Actinopterygii
ニシン上目	Superorder Clupeomorpha
ニシン目	Order Clupeiformes
ニシン科	Family Clupeidae
ニシン亜科	Subfamily Clupeinae
イワシ	<i>Sardinops melanostictus</i>
ニシン	<i>Clupea pallasii</i>
原棘鰭上目	Superorder Protacanthopterygii
サケ目	Order Salmoniformes
サケ科	Family Salmonidae
サケ・マス類	<i>Oncorhynchus</i> sp.
骨鰭上目	Superorder Ostariophysi
コイ目	Order Cypriniformes
コイ科	Family Cyprinidae
ウグイ亜科	Subfamily Leuciscinae
ウグイ類	<i>Tribolodon</i> sp.
側棘鰭上目	Superorder Paracanthopterygii
タラ目	Order Gadiformes
タラ科	Family Gadidae
タラ類	Gadidae gen. et sp. indet.
鱗棘上目	Superorder Acanthopterygii
カサゴ目	Order Scorpaeniformes
カジカ亜目	Suborder Cottoidei
アイナメ科	Family Hexagrammidae
アイナメ	<i>Hexagrammos otakii</i>
ホッケ	<i>Pleurogrammus azonus</i>
カジカ科	Family Cottidae
カジカ類	Cottidae gen. et sp. indet.
スズキ目	Order Perciformes
スズキ亜目	Suborder Percoidei
アジ科	Family Carangidae
ブリ	<i>Seriola quinqueradiata</i>
タイ科	Family Sparidae
マダイ亜科	Subfamily Pagrinae
マダイ	<i>Pagrus major</i>
カレイ目	Order Pleuronectiformes
ヒラメ科	Family Paralichthyidae
ヒラメ	<i>Paralichthys olivaceus</i>
カレイ科	Family Pleuronectidae
カレイ類	Pleuronectidae sp.
両生綱	Class Amphibia
無尾目	Order Anura
カエル類?	Anura? fam. et gen. indet.
鳥綱	Class Aves
スズメ目	Order Passeres
スズメ目の一種	Passeres fam. et gen. indet.
哺乳綱	Class Mammalia
獣類	Mammalia Ord. et Fam. indet.

骨は破損標本のみで左右不明。歯骨は近位骨端部と遠位骨端部がそれぞれ各1点検出される。近位骨端部は原形をとどめ、本種類の歯骨の特徴が明瞭に現れている。

- マダイ

内蔵骨の方骨が検出される。近位骨端幅7.14mmあるので、体長30cmを測る個体と推定される。この他、タイ類の臼歯状の歯が検出されている。種までの同定が不可能であるためタイ科としているが、おそらくマダイであろう。数量的には極めて少ない。臼歯状歯は、大きいもので径2.8mmを測る。一個の顎骨から遊離したものとしても数量が少ない。

- ヒラメ

椎体、前上顎骨、歯骨、間鎖骨が検出されている。椎体は腹椎、尾椎骨が含まれ、破損標本もあるが、ほぼ同じ体長の個体である。腹椎体径6.00mmを測り、他の椎骨もこの程度とみられるが、さらに小さい標本も含まれる。前上顎骨、歯骨はきわめて脆弱であるが、歯を付けた状態で検出している。標本から推定される個体は4個体になり、この魚の埋存がもっとも多かったことになる。焼けているために原形を保っていないが、椎骨とほぼ見合うサイズの体長25cm前後と推定される。

- カレイ類

前鋤骨、前頭骨（蝶耳骨/翼耳骨片）、顎骨、第1血管間棘、尾椎などが検出される。

- その他魚類

種類不明であるが、椎体片、鱗棘/肋骨、部位不明の破片などが検出されている。

- 鳥類

スズメ目程度のサイズの鳥で、脛骨と末節骨である。ほぼ同じサイズ（現存長5.02mm）の末節骨が2点ある。なお、他にも種類不明であるが、鳥類の骨片を僅かに含む。

- 獣類

小断片があったのみである。大型獣や中型獣などの破片と想定される。

- 骨針とみられる骨角器

長さ15.91mm、最大径2.84mmを測る。内側が粗い海綿質で構成され、さらに緻密部分が薄いことから、魚類の棘の部分と推測される。

#### 〈H-16〉

魚類の鱗棘と部位不明破片が検出される程度にとどまる。

#### 〈H-18〉

魚骨を主体とする。ニシンの耳骨片、サケ・マス類の椎体片、タイ類の臼歯状歯、カジカ類の舌骨、種類不明魚類の椎体や鱗棘片などが確認されている。

#### 〈P-20〉

焼骨の出土が多い遺構である。獣骨片が少なく、焼骨の大部分は魚骨である。ただし、種類および部位を確認できたのは、イワシの尾椎1点、カレイ類?の椎体片4点である。これら魚類の焼骨は、カサゴ類、アイナメ、タイ類に由来している可能性がある。また、両生類とみられる破片が検出される。

#### 〈F-9〉

カエル類?の四肢骨の破片が検出される。また、他の遺構と比較して、獣類の破片が多く検出される点に特徴がある。ただし、あまりにも細片化しているため、これら獣類の種類を明らかにすることができない。

〈F-28〉

鳥獣骨の破片1点である。

(2) 動物遺体の総括的考察

本遺跡で採集された焼骨片は、全体量として特に大量のものではない。しかし、複数の住居址、炉跡などについて多量の土壌中から検出された骨片であり、この中にどの程度種類が判明する骨格が残されるものか興味をもたれた。資料を分類すると、検出された骨は、魚類12種類のほか、両生類、鳥類、獣類が検出された。

検出された魚類では、サケ・マス類、ニシン、ヒラメを多くみることができた。さらにウグイ類、タラ類、カサゴ類、ブリ、マダイ、カレイ類もあり、多彩な内容となった。おそらく、これらは本遺跡の近海で普通に漁獲される種類であったものと思われ、漁業の主要な対象魚であったと推定される。この中で、ブリ、マダイの含まれることに興味をもたれる。マダイは、北海道以南から尖閣諸島、朝鮮半島南部、東シナ海、南シナ海、台湾に生息するとされる(中坊ほか, 1988)。ブリは、琉球列島を除く日本各地、朝鮮半島に生息するとされている(中坊ほか, 1988)。ただし、これらの種類は、現在漁獲されることが稀になっている。ブリやタイ類の出土は、近年調査された白老郡白老町の虎杖浜2遺跡でまとまった数の標本が検出されている(金子, 2002)。このことは、水温が現在よりも少し暖かかったことを意味している可能性がある。

獣類では、あまりにも小片となっているため、その種類を特定するにいたらなかった。しかし、これまでの調査例などを考慮すると、ニホンジカなどの破片の可能性はある。本遺跡では、獣類の他に、鳥類、両生類も検出されているが、これらの検出個数は僅かである。このことから、本来、魚類を多く含むものであったことがわかる。

もともと焼骨という偶然の機会にできた資料であるので、実際にはさらに多くの漁獲があったものと思われる。今回の分析調査によって、貝塚の形成される機会のなかった本遺跡において、当時の漁獲の内容を実証できたことは、貴重な成果であったと言える。今後、他の遺構についても同様な調査を行うことで、当時の動物利用や食糧事情について、より詳細に検討ができるものと期待される。

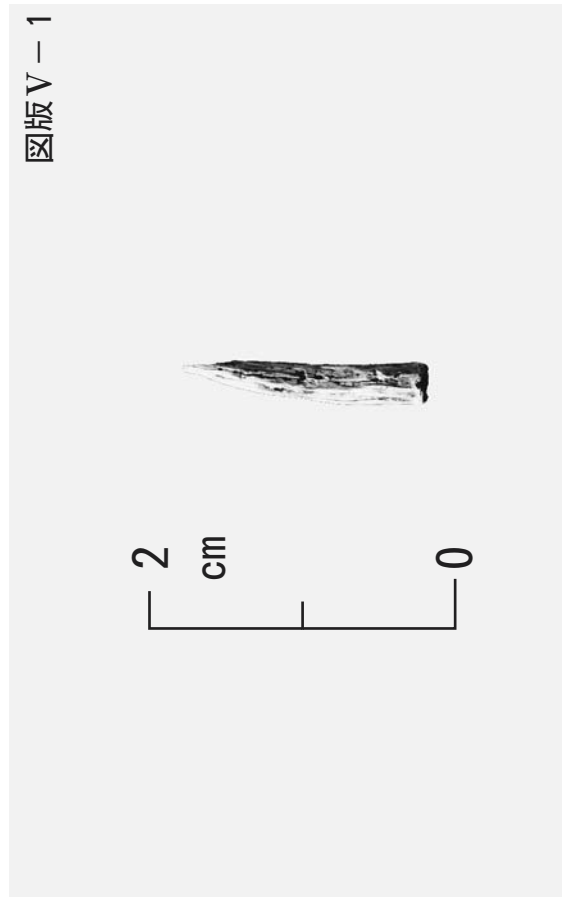
引用文献

金子 浩昌, 2002, 虎杖浜2遺跡A貝塚出土動物遺体にもみる特徴. 北埋調報172, 白老町虎杖浜2遺跡(2), 財団法人北海道埋蔵文化財センター, 201-205.

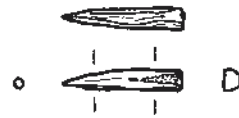
中坊 徹次・藍澤 正宏・青沼 佳方・明仁・池田 祐二・岩田 明久・坂本 勝一・島田 和彦・瀬能 宏・波戸岡清峰・林 公義・細谷 和海・山田 梅芳・吉野 哲夫, 2000, 中坊徹次編, 日本産魚類検索 全種の同定 第二版, 東海大学出版会, 1748p.

表V-2 分析試料の一覧

試料番号	遺構名	採取位置	層位	時期	重量(kg)	体積(%)	浮遊重量(g)			残渣重量(g)	炭化種子(粒)	動物遺存体(g)	炭化材(g)	人工遺物(g)	備考
							2mmメッシュ	0.425mmメッシュ	0.075mmメッシュ						
NS02-1	H-15	床面直上骨片集中	床面	縄文時代中期中葉	3.1	4.3	0	25.16	411.9	5	3.05	20.75	25.28	NSA-4と同一箇所	
NS02-2	H-15	覆土中位	骨片集中	縄文時代中期中葉	42.65	57.05	140.52	211.202	5648.17	37	20.873	223.69	115.95	NSA-3と同一箇所	
NSA-1	H-6	石組炉	炉覆土	縄文時代後期前葉	2.6	2.4	0.75	3.05	951.25	1	0.19	1.15	10.8		
NSA-3	H-15	覆土中位	骨片集中	縄文時代中期前半	1.6	1.8	46.6	9.46	287.37	0	0.32	7.4	6.3	NS02-2と同一箇所	
NSA-4	H-15	床面直上骨片集中	床面	縄文時代後期前葉	2.2	2.25	0.3	0.8	735	2	0.5	0.7	0	NS02-1と同一箇所	
NSA-5	H-12	H F-1	床面	縄文時代後期前葉	2.6	2.8	0.13	2.27	1175.8	0	0.03	0.33	0.5		
NSA-6	H-18	石組炉	炉覆土	縄文時代後期前葉	4.4	4.8	3.53	14.15	232.58	2	1.67	6.2	13.3		
NSK-8	P-20	骨片混じりの焼土	覆土	縄文時代後期前葉	28.21	41.5	49.9	181.145	2428.28	13	4.76	108.57	21.72		
NSK-10	F-9	焼土	焼土	縄文時代中期前半-後期前葉	0.03	0.03	0	0.02	28.24	0	2.3	0.01	25.6		
NSA-11	F-28	石組炉覆土南側	炉覆土	縄文時代後期前葉	9.8	11.8	3.61	33.23	94.15	74	0.01	3.99	21.91		



H-15出土の骨針



図V-1 骨針 (H-15出土)

表V-3. 骨同定結果

調査年次	試料番号	遺構名	採集位置	層位	時代	遺存体重量(g)	分類群	部位	部分	数量	備考	
H14	NS02-1	H-15	床面直上 焼土層	床面	縄文時代中期中葉	3.05	ニシン	左上上顎骨	近位端	1		
								耳骨		6		
								腹椎		1		
								腹椎/尾椎		26	他微細片含む	
								尾椎	破片	5	椎体長 3.48mm	
							サケ・マス類	尾椎		1		
							アイナメ	歯骨	破片	1		
							ヒラメ	尾椎	破片	2		
							カレイ類	第1血管間棘	破片	1		
								尾椎		1		
							魚類	椎体	破片	2		
								鰭棘/肋骨	破片	82		
								不明	破片	6		
								微細片	破片	多	1.89g	
							鳥類/中型獣	不明	破片	1		
	NS02-2	H-15	覆土中位	覆土	縄文時代中期中葉	20.873	ニシン	左上上顎骨	破片	1		
								耳骨	破片	25		
								腹椎		12		
								尾椎		21		
								椎体		22	他微細片 34	
							サケ・マス類	椎体	破片	2		
							ウグイ類	尾椎		2		
							タラ類	顎骨	破片	8		
							アイナメ	尾椎		3		
							ホッケ	尾椎		6		
							アイナメ科	右角骨	破片	1		
							フリ	前上顎骨	破片	3		
								左歯骨	近位端	1		
									遠位端	1		
							マダイ	右方骨	破片	1	近位骨端幅7.14mm	
							タイ類	歯	臼歯状	10	最大径 2.8mm	
							ヒラメ	左上上顎骨	破片	4		
								右上上顎骨	破片	1		
								左歯骨	破片	3		
								右歯骨	破片	2		
								歯		2		
								腹椎	破片	4		
								椎体	破片	14	他微細片 17	
								間鎖骨	破片	2		
							カレイ類	前鎖骨	破片	1		
								前頭骨	破片	2	蝶耳骨/翼耳骨片	
								顎骨	破片	3		
							魚類	椎体	破片	283	他微細片含む	
								鰭棘/肋骨	破片	659	他微細片含む	
								不明	破片	58		
								微細片	破片	多	12.13g	
							スズメ目	末節骨	破片	2		
							脛骨	破片	1	小型		
鳥類							不明	破片	1			
獣類							不明	破片	13			
魚類?	鰭棘?	破片	1	骨針(骨角器)								
H15	NSA-1	H-6	炉	床面	縄文時代後期前葉	0.19	魚類	鰭棘	破片	20		
								不明	破片	47		
	NSA-3	H-15	覆土中位	骨片集中	縄文時代中期前半	0.32	ニシン	耳骨	破片	2		
								ニシン/イワシ	椎体骨	破片	3	
								サケ・マス類	椎体骨	破片	5	
								タイ類	歯	破片	1	
								魚類	微細鰭棘	破片	7	
		鰭棘	破片	19								
		不明	破片	4/								
	NSA-4	H-15	床面直上 焼土層	床面	縄文時代中期前半	0.5	サケ・マス類	椎体	破片	1		
								魚類	角骨	破片	1	
									鰭棘	破片	16	
									不明	破片	3	
									不明	破片	多	0.24g
	中型獣	不明	破片	10								
	NSA-5	H-16	HF-1	床面	縄文時代後期前葉	0.03	魚類	鰭棘	破片	6		
								不明	破片	9		
	NSA-6	H-18	石組炉	炉覆土	縄文時代後期前葉	1.67	ニシン	耳骨	破片	1		
								サケ・マス類	椎体	破片	5	
								タイ類	歯	破片	1	臼歯状
								カジカ類	舌骨	破片	1	
								魚類	椎体	破片	1	
		鰭棘	破片	36								
		不明	破片	多	1.38g							
	NSK-8	P-20	骨片混じりの 覆土	覆土	縄文時代後期前葉	4.76	イワシ	尾椎	破片	1		
								カレイ類?	椎体	破片	4	
								魚類	鰭棘	破片	1	基部を残す
								鰭棘	破片	50		
								不明	破片	多	3.87g	
	不明	破片	1									
両生類	不明	破片	1									
海獣類?	不明	破片	3									
獣類	不明	破片	2									
NSK-10	F-9	焼土	焼土中	縄文時代中期前半 ~後期前葉	2.3	カエル類?	四肢骨	破片	3			
							獣類	不明	破片	35		
NSA-11	NF-28	石組炉南側	炉覆土	縄文時代後期前葉	0.01	鳥獸類	不明	破片	1			

数量の項において数字の後の"+は、他に微細片があることを示す。

## 2. 森町濁川左岸遺跡A地区から出土した炭化植物種子

\* 椿 坂 恭 代

### 1) 遺跡と調査の概要

遺跡の名称：濁川左岸遺跡（B-15-22）A地区

遺跡の所在：北海道茅部郡森町字石倉町401ほか。

調査の機関：財団法人北海道埋蔵文化財センター

調査期間：平成14年7月24日～10月26日

平成14年5月7日～8月30日

調査面積：4,930㎡

調査担当者：熊谷仁志、村田大、影浦覚、大泰司統

遺跡の立地：JR森駅から北西方向に約9km離れた標高37～45mの濁川河岸段丘上に立地する。

遺跡の年代：縄文時代前期後半、中期前葉～後期中葉、続縄文時代。その他の詳細については本文を参照していただきたい。

### 2) 扱った資料

分析資料として扱った炭化植物は、縄文時代後期前葉の竪穴住居跡内の炉、焼土からと、縄文時代中期、後期の遺構から土壌を採取し、フローテーション法で処理後、種子の第一次選別を経て送付されてきた。これらの資料について実体顕微鏡で観察並びに撮影を行った。検出された植物種子の出土表は表V-4に示しておいた。

### 3) 検出された種子

ヒエ属*Echinochloa* Beauv. (図V-2-1 a,b,c：P-20 覆土から出土)

縄文時代後期前葉の遺構、土壌（P-20）の覆土から1粒検出された。穎果は広楕円形。背面には果長の $\frac{2}{3}$ ほどを占める楕円形の大きな胚がある。その反対側の腹面にはへら型状のヘソがある（椿坂1993）。出土した資料はやや胴部が膨らみ栽培型のヒエに近い形態を示す。1粒の出土であるが縄文ヒエの形態の範疇に分類される。計測値は長さ1.40mm、幅1.25mm、厚さ0.60mm

タデ科POLYGONACEAE (図V-2-2：H-15の覆土から出土)

縄文時代中期中葉の竪穴住居跡（H-15）の覆土からと縄文時代後期前葉の土壌（P-10、P-20）から合計7粒検出された。瘦果は三角状紡錘形。タデ科種子は形態の類似した種類が多いため、詳細な分類は困難である。計測値は長さ2.30mm、幅1.15mm

アカザ属*Chenopodium* L. (図V-2-3：H-15の覆土から出土)

縄文時代中期中葉の竪穴住居跡（H-15）の覆土からと縄文時代後期前葉の竪穴住居跡（H-6）の炉から合わせて2粒検出された。種子は扁平球形。側面には嘴状に突出したヘソがある（写真資料の右上）。計測値は長さ1.00mm、幅0.90mm、厚さ0.60mm。

マタタビ属*Actinidia* Lindl. (図V-2-4：石組炉から出土)

縄文時代後期前葉の遺構、石組炉（F-37）から1粒検出された。種子は長楕円形。種皮には凹点

による網目模様がある。この仲間にはマタビ *Actinidia polygama* Planch. et Maxim. とサルナシ *Actinidia arguta* Planch. があるが、両者の種子は形態と表面組織がきわめて良く似ている。しかし粒形の特徴からはサルナシ *Actinidia arguta* Planch. であろう。計測値は長さ1.85mm、幅1.10mm、厚さ0.70mm。

ニワトコ属 *Sambucus* L. (図V-2-5 a, b: 石組炉F-37から出土)

縄文時代後期前葉の遺構、石組炉 (F-28、37) から合わせて3粒検出された。種子は狭楕円形。背面は円みがあり、腹面は鈍稜をなす。種皮は皺状に隆起した模様があり粗面である。これらの特徴からニワトコ *Sambucus racemosa* L. と判断される。ただし、日本では本州北部から北海道の林中にエゾニワトコ *S. buergeriana* var. *miquelii* (Nakai) Hara が分布するという。計測値は長さ1.90mm、幅1.15mm、厚さ0.60mm。

キハダ属 *Phellodendron* Rupr. (図V-2-6: 石組炉の覆土から出土)

縄文時代後期前葉の遺構、石組炉 (F-28) の覆土から1粒検出された。種子は半横広卵形で表皮に浅い凹みによる網目模様がある。これらの特徴からキハダ *Phellodendron amurense* Rupr. と判断される。計測値は長さ3.70mm、幅2.05mm、厚さ1.200mm。

ブドウ科 VITIDACEAE (図V-2-7 a, b: 石組炉から出土)

縄文時代後期前葉の遺構、石組炉 (F-37) から1粒検出された。堅果は広倒卵形、背面は円みがあり、倒へら形の凹みがある。腹面の中央に稜をなす。稜の両側に針形の凹みがある。ブドウ属種子で形態の類似した種子にヤマブドウ *Vitis coignetiae* Pulliat。サンカクズル *Vitis flexuosa* Thunb.、エビヅル *Vitis ficifolia* Bunge var. *lobata* があるが、サンカクズル、エビヅルの分布域は北海道の南部に限られているという。形態の特徴からはヤマブドウ *Vitis coignetiae* Pulliat に似る。計測値は長さ3.50mm、幅3.00mm、厚さ2.050mm。

ミズキ属 *Cornus* L. (図V-2-8: F-28の石組炉覆土から出土)

縄文時代後期前葉の遺構、石組炉 (F-28) の覆土から8粒と破片が24片検出された。核は偏球形で浅い縦溝があり、先に穴がある (写真では上部にあたる)。この特徴からミズキ *Cornus controversa* Hemsley と判断される。計測値は長さ3.70mm、幅4.00mm。

クリ属 *Castanea* Mill. (図V-2-9 a, b: H-15の覆土から出土)

縄文時代中期前半の遺構、土壌 (P-43) の覆土からと縄文時代中期中葉の竪穴住居跡 (H-15) の床面直上の骨片集中と覆土から子葉の碎片が合計0.36g検出された。堅果は三角状楕円形。一側面は円みがあり、反対面は平らな形が多い。子葉部分は両面に縦に深い溝状の模様がある。いずれも碎片のため計測はできなかった。

クルミ属 *Juglans* L. (図V-2-10a, b: H-15の覆土から出土)

縄文時代中期中葉の竪穴住居跡 (H-15) の床面直上の骨片集中と覆土からと縄文時代後期前葉の遺構、土壌 (P-20) の覆土上部の焼土から合計0.52g検出している。すべて内果皮の碎片である。核表面には縦に浅い溝状の模様がある。これらの特徴からオニグルミ *Juglans sieboldiana* Maxim

と判断される。いずれも碎片のため計測はできなかった。

#### 不明種子1 (図V-2-11: 石組炉覆土から出土)

縄文時代後期前葉の遺構、石組炉(F-28)から1粒検出された。種子は長楕円形で針形で種子の表面はやや粗面である。アサダ*Ostrya japonica* Sarg. の種子の形態に似るが種皮の表面組織が異なるなどから分類出来なかった。計測値は長さ4.10mm、幅1.90mm。

以上述べたもの以外に資料の保存状態がきわめて悪く分類出来なかったものを不明として扱った。

#### 4) 若干のコメント

今回の調査で、縄文時代中期前半、中葉の遺構からクリ属とクルミ属が検出された。山田らによると、北海道におけるクリの出現を自然植生の拡大と考えず、人為的現象ではないかと推定している(山田・柴内1993)。近年、フローテーション法の導入でクリ属の検出例は増加する傾向にあり、今後のクリ属の問題解明に期待したい。

縄文時代後期前葉の遺構からヒエ属種子が1粒検出された。写真に見るようにヒエ属の形態と計測値からは、縄文ヒエの範疇に分類される。

これまで、フローテーション法で得られたヒエ属種子は、北海道では縄文時代早期末から近世まで連続して検出されている(吉崎2003)。各時期のヒエ属種子の出土例を時系列に並べてみると、縄文時代早期末から縄文時代中期末にかけてイヌビエ*Echinochloa crus-galli* Beauv. タイプの種子が徐々に形態が丸みをおび、種子の下半分が膨らみ、栽培型の形態に近づいていく傾向が読みとれる。こうした縄文時代中期末の代表例としては、青森県富ノ沢遺跡(2)遺跡の例がある(吉崎1992)。ここではイヌビエタイプとやや膨らんだタイプの種子が存在していた。縄文時代後期からは栽培型に近いヒエが多くなる(吉崎・椿坂2003)。続縄文時代になると栽培型のものが出土する地域と(吉崎・椿坂1998)、イヌビエタイプに近いものが出土する地域がみられる(吉崎・椿坂1995)。擦文文化、中・近世からは、形態的に現生の栽培型になる。今後はこうした変遷過程を持つヒエ属の実態を明らかにする作業を進めていく必要があると考える。

\* 札幌国際大学博物館/客員研究員

#### 引用文献

吉崎昌一

1992: 青森県富ノ沢(2)遺跡出土の縄文時代中期の炭化植物種子。青森県教育委員会編「富ノ沢(2)遺跡IV発掘報告書3」1097-1110、青森県教育委員会

2003: 先史時代の雑穀 52-70 雑穀の自然史 - その起源と文化を求めて - 山口裕文・河瀬眞琴 編著 北海道大学図書刊行会

椿坂恭代

1993: アワ・ヒエ・キビの同定 吉崎昌一先生還暦記念論文集「先史時代と関連科学」261-281



山田悟郎・柴内佐知子

1997：北海道の縄文時代遺跡から出土した堅果類 - クリについて - 「北海道開拓記念館研究紀要」  
第25号 17-30 北海道開拓記念館

吉崎昌一・椿坂恭代

1995：H317遺跡から検出された植物種子「H317遺跡」238-253, 図版92-97 札幌市文化財調査  
報告書46 札幌市教育委員会

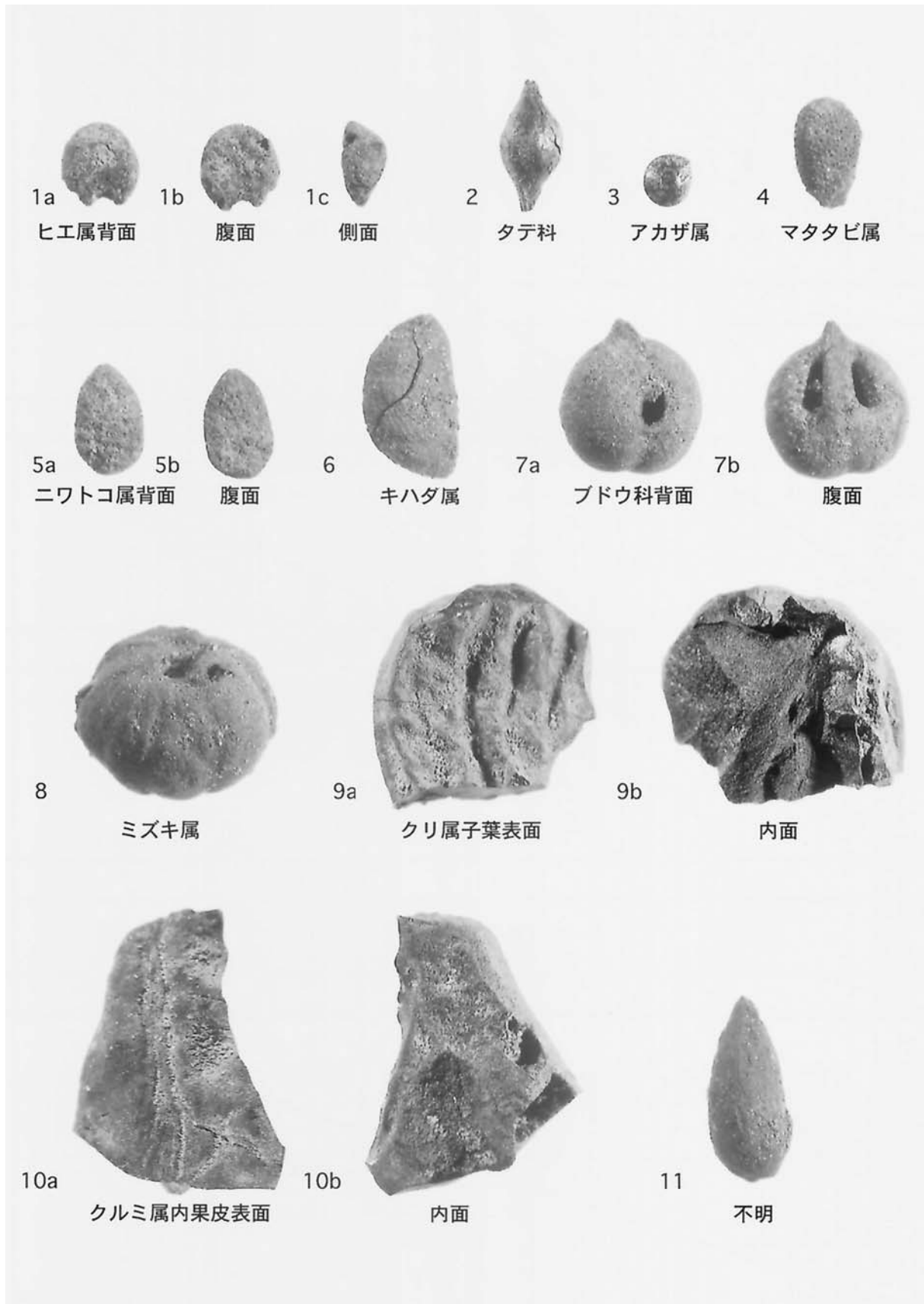
1998：茂別遺跡から出土した炭化植物種子について「茂別遺跡」第2分冊 84-99 北埋調報121  
財団法人 北海道埋蔵文化財センター

2003：キウス4遺跡R地区から出土した縄文時代の植物種子 「千歳市キウス4遺跡(9)」第2分冊  
193-206 北埋調報180 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

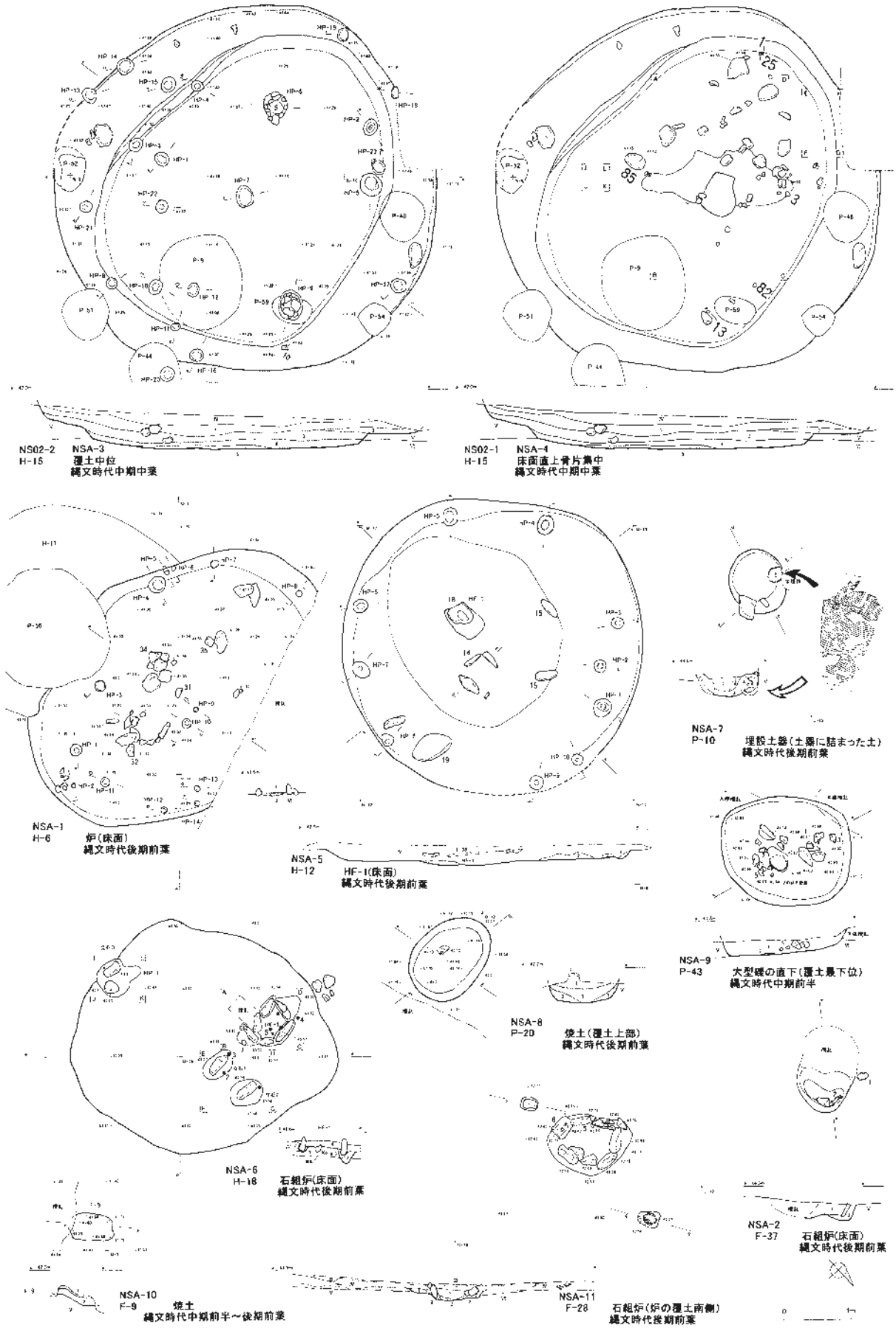
表V-4 森町濁川左岸遺跡A地区炭化種子出土表

試料番号	遺構名	採取位置	推定時期	ヒ	タ	アカ	ニ	マ	フ	キ	ミズ		ク	ク	不		備 考
				工	テ	ザ	ワ	タ	ド	ハ	ズ	リ	ル	明	明		
				(粒)	(粒)	(粒)	(粒)	(粒)	(粒)	(粒)	(粒)	(片)	(g)	(g)	(粒)	(片)	
NSA-4	H-15	床面直上の骨片集中	縄文時代 中期中葉										0.14	0.05			
NSA-3	H-15	覆土中位	縄文時代 中期中葉		5	1							0.07	0.45		11	
NSA-1	H-6	炉(床面)	縄文時代 後期前葉			1											
NSA-6	H-18	石組炉(炉内の覆土)	縄文時代 後期前葉													2	
NSA-7	P-10	埋設土器(土器に詰 まった土)	縄文時代 後期前葉		1												
NSA-8	P-20	覆土(肉眼で骨片が 混じっていた)	縄文時代 後期前葉	1	1								0.02			5	
NSA-9	P-43	大型礫の直下(覆土 最下位)	縄文時代 中期前半										0.15				
NSA-11	F-28	石組炉(炉の覆土南 側)	縄文時代 後期前葉				1			1	8	24			1		
NSA-2	F-37	石組炉	縄文時代 後期前葉				2	1	1							6	旧遺構名 H-14 炉 (HF-2)(床面)

図版V-2



濁川左岸遺跡出土の炭化種子



図V-2 フローテーション試料採取位置図

## VI 成果と課題

### 1. 遺構

**縄文時代中期の住居：**H-15はベンチ状の構造を持つ住居であり、遺物出土状況から判断して、縄文時代中期前葉のものである。平面形は不整な円形だが、一段低くなっているベンチより内側部分の平面形は楕円形である。楕円形の長軸は東-西方向を向く。前期末～中期前葉のもののように（小笠原1984）ベンチ部分の輪郭に沿うような支柱穴の配列はない。ただしHP-6と9が柱穴の掘り方を礫で埋めた支柱穴と考えられる。2本の支柱穴が円形の平面形に対して南東-北西方向の軸をなしており、ベンチ部分内面部分と軸がずれた状況である。HP-5・7が補助的に立てられた比較的太い柱であるとする。他の柱穴はベンチ部分内面と壁に沿うように住居の中心からおおよそ同心円状に配置される。出土遺物をもとにするとサイベ沢Ⅶ式ないし円筒上層d式の時期、またはそれらの直前の遺構である。中期中葉のベンチ部分を持つ竪穴式住居の例と判断した。

H-16はサイベ沢Ⅶ式ないしは円筒上層d式以前の住居である。不整な楕円形で長軸は南-北方向である。

**縄文時代後期の住居：**後期前葉の住居は5軒である。H-6は石組炉を持つものである。配石は伴わないが、長軸が東-西方向を向く。覆土上位から出土した涌元式の新しい段階（堂沢Ⅱ期以降）の土器より古いものと推測される。覆土下位から出土した天祐寺を思わせる貼り付けが施された、折り返し口縁の土器の時期に近いものである。H-7の炉は西側に簡単な石組を持つものである。炉は中心より東側にずれる。白坂3式が柱穴から出土しているが、折り返し口縁の土器が主に出土している。H-12は焼土が不明瞭な石組炉を中央に持つ円形の住居である。沈線文のない土器が覆土下位から出土している。H-18は掘り込みが極めて浅い住居である。土層観察用の土手に現れた微妙な掘り込みの痕跡としまりのある部分から床面プランを想定した。一对の立石を伴う石組炉を持ち、また別にもう一か所の立石がある。炉は中心より西側にずれている。炉の正中線と一对の立石の中心を結ぶラインは東-西方向である。折り返し口縁の土器を伴う。H-20は平面形が円形であり、一对の立石を持つ石組炉の痕跡が残るものである。立石は片一方のみ残り、石組炉およびもう一方の立石は抜き取り穴のみ残っている。炉の正中線と一对の立石の中心を結ぶラインは東-西方向である。住居はところどころに炭化材と炉と無関係な焼土が残る。その焼土のうち明瞭なものをHF-2として記録した。検出状況から石組を抜き取り後の焼失と考える。住居廃棄後の凹みには涌元式土器のまとまった廃棄がみられた。H-11はH-6に大部分を切られているため不明瞭であるが、出土遺物と平面形が円形であることから、後期前葉の住居という可能性が高い。またH-21は他の柱穴状の小土壇が後期前葉の可能性が高い事から後期前葉のものとして推測した。

一对の立石を持つものについては炉の正中線と立石の中心の空間を結ぶ線が東-西方向である。これはB地区についても同じである。立石は中期中葉以来続く複式炉の痕跡を示すものであろう。

そこで類例について検討する。類例の集成には当センター主任、坂本尚史の協力を得た。

トリサキ式の新しい段階（成田滋彦編 2003大泰司の頃）の遺跡と考える浜松5遺跡の対になるふたつの礫（埋設していない）と石組炉を持つ8号住居については北東側にその軸がある。出入り口構造についてはその脇に添うようにして北側にある。4・6号住居は出入り口構造が石組炉の北東側にある。石組炉と入り口の角度はほぼ同一である。同じくトリサキ式の新しい段階の住居が検出された

八雲町栄浜1遺跡（当センター 2002）においては立石を東側に配するH-1と規則性のない配列の立石が北側にかたまっているH-4と、礫が炉の東側と西側におかれているH-2があった。

釜谷2遺跡I（戸井町教育委員会 1988）においてHP-2・9・19が地床炉の南西側に出入り口構造を思わせる布掘り様の細長い小土壌が2列並ぶ。HP-3が地床炉の南西側に出入り口構造を思わせる2個一組で2列の柱穴状小土壌がある。HP-2・3・9・19は後期中葉の可能性はある。HP-10は長軸が南-北方向で石組炉の南側に出入り口構造を思わせる数個一組で2列の柱穴状小土壌がある。後期前葉、前十腰内式並行の土器を伴う。HP47は石組炉の南側に一對の配石がある。後期前葉の可能性はある。

八戸市（市教委 1986）丹後谷地遺跡第19号竪穴住居跡の石組炉は単体の礫が立石として伴う。炉の南東側に位置する。同じく第20号竪穴住居では地床炉の東側に入り口状遺構を思わせる2個一組で2列の柱穴状小土壌がある。第36号竪穴住居は同様の配列で小土壌が南東側に並び、炉のすぐ南東脇に単体の立石がある。第28・34・42・48・54号竪穴住居は同様に地床炉の東側に出入り口構造を思わせる布掘り様の細長い小土壌が2列並ぶ。47号竪穴住居は南東側に同様の構造がある。47・54号竪穴住居は後期中葉以前のものでされている。19・20・28号竪穴住居は共に磨消し縄文を持つものや網目状絡条体を持つ後期前葉の土器を伴う。第30号住居は中央に埋甕があり、南東側へ葺石状の遺構が延びるものである。第33・36号竪穴住居は石組炉の南東側へ立石が連続し、複式炉といっても差し支えない状況である。30・33・34・36・42・48号竪穴住居は共に磨消し縄文を持つ後期前葉の土器を伴う。

八戸市（市教委 1987）田面木平遺跡（1）第4号竪穴住居は地床炉の南東側に出入り口構造を思わせる布掘り様の細長い小土壌が2列並び、炉のすぐ南東脇に単体の立石がある。磨消し縄文を持つ後期前葉の土器を伴う。第6号竪穴住居は地床炉の東側に布掘り様の細長い小土壌が2列並ぶ。

六ヶ所村大石平遺跡（県教委 1989）において第5号竪穴住居は出入り口構造を思わせる布掘り様の細長い小土壌と柱穴状の小土壌が北東側に並び、炉のすぐ東脇に単体の立石がある。第8号竪穴住居は同様に地床炉の南東側に布掘り様の細長い小土壌が2列並ぶ。第61号竪穴住居については石組炉の東側にふたつの土壌が連続している。いずれも十腰内Ib式の住居という可能性がある。

以上の例を考察すると、石組炉と立石は方位そのものに意味があると考えられるより、台地の斜面方向に対して下側に入り口がおおよそ向いている事と関連するものと考えられる。この入り口が台地の斜面下側を向くという事実は成田滋彦（2000）が示した傾向と合致する。また後期前葉の住居にのみ関していうと一對の配石は中期中葉に現れた複式炉の開口方向の痕跡と考えられ、複式炉の開口方向は出入り口とおおよそ（軸は多少ずれるが）向きを同じくする例が多い。住居の入り口が斜面下側を向いていた事によって複式炉の開口部の系譜を引く一對の立石が同一方向を向いていたものとする。濁川左岸遺跡の場合は河岸段丘のへりの方向である東側へ入り口が向いた結果、炉に対して東側向く結果になったものとする。これは坂本真弓（2002）によると複式炉の前庭部を出入り口部分に利用した可能性が高いという考察とも合致する。立石に出入り口施設の可能性を求めるよりは複式炉の開口部が入り口を向く事によって炉が機能していた事の名残と考える。そしてトリサキ式の新しい段階の時期（十腰内Ibにさしかかる頃）には複式炉の痕跡である一對の立石に意味が無くなるためか、立石を埋設しなくなる、あるいは石組炉に対する立石の方向性が無くなるなどの衰退ともいえる状況が現れるものとする。

**土壌：**時期が判然としないものが多いが、縄文時代中期中葉～後期前葉のものがほとんどである。

時期的に不確定な要素があるものの特徴的なものを挙げる。P-29はVI層を掘り込んだ段階で大形礫がまとまって出てきたためそこで掘り止めたものであろう。P-20は東-西方向に長軸を持つ楕円

形の土壌である。時期は断言できないが、覆土中位から北海道式石冠の未成品が出土した。覆土上位の土器のまともは中期中葉のものである。覆土をフローテーション法で処理したところヒエ属の炭化種子が出土した。この結果と縄文時代のヒエ属についてはVI章—2 椿坂氏の分析に詳しい。P-18・24・31・39・40はVI層の礫層を掘り込んだ際に出てきた礫を穴に放り込んだ状況が想定される。

フラスコ状土壌が数基検出されている。P-15・57・58・95は直径が1.5mを超える大型のものである。P-95は後期前葉のものである。他は時期判断の根拠が乏しいものである。P-15は埋め戻し土であり、周辺に柱穴状の小土壌が巡るものである。検出時の状況から土壌に伴うものと判断した。P-57・58について調査者は中期中葉のもので推測した。P-56は後期前葉の土壌であり、埋め戻しのフラスコ状土壌である。出土遺物から後期前葉のもので推測できる。

中期の土壌として特徴的なものを挙げる。P-28は北海道式石冠をはじめとして、礫石器が多量に出土した。P-34は遺物が比較的まとまって出土した。P-28・34は口縁部内面に「し」の字状の粘土紐貼付がある中期中葉の土器が出土している。これはB地区（2002刊行分）の成果と課題において論及された土器で、大木8式の影響があるものと考えられる。P-35・37は円形の土壌で、明瞭な埋め戻し土である。P-43は偏平打製石器、たたき石など出土した。P-46は2段の掘り込みで埋め戻し土である。P-50・51は北海道式石冠が出土した。P-55は埋め戻し土の底から同一個体の土器がまとまって出土した。P-56も同様であり、いずれもサイベ沢VII式土器である。P-83からはキャリパー型をした大木8b式の出土がある。この土器は搬入品の可能性がある。北海道式石冠も出土した。

後期の土壌として特徴的なものを挙げる。P-63は後期前葉の土壌であり、折り返し口縁を持つ土器およびたたき石の出土がある。たたき石はほぼ類する形状の礫と並んで出土した。類似する土壌としてはP-71と73がある。P-2は配石を上部に持つ土壌である。出土遺物から涌元式の頃のものと考えられる。配石には石器をよく用いる。P-9は埋め戻しの土壌である。長軸は北東—南西方向を向く。P-10は立位の状態では埋設された土器に伴う。埋設土器の底部は残存している。土壌の軸上で対をなして板状の立石が埋設される。P-13は埋め戻しの覆土で、北海道式石冠とその未成品が1点出土した。ただし出土した土器は後期前葉のものである。中期後半から後期前葉の石組炉の炉石として中期中葉の北海道式石冠を採取し、転用する例が示すように、採取してきたものという可能性がある。P-23は涌元式が出土した土壌であり、時期も同じないしは直後のものと考えられる。台石が立った状態で出土した。P-31は涌元式の土壌である可能性が高い。P-39は白坂3式がまとまって出土した土壌である。

**石組炉**：IV層下位から検出された、縄文時代前期後半～後期前葉のもので石組炉とが主だった形態である。前期後半～後期前葉としたものはIV層下位から出土する包含層出土の土器からの時期判断である。その中で伴う遺物から、明らかに後期前葉のものと言えるのはF-32である。

石組炉は後期前葉のものである。F-10は比較的大形な台石が北東側に配されており南西側が開く。F-11は南側に開く形状である。F-19は長軸が東—西方向を向いており、東側が開く。F-25は長軸方向が北東—南西を向き、比較的北東側が開く。F-28とF-29は大形で不整な楕円形の平面形を持つものである。大津式の時期と考えられる。F-28は検出面から出土した土器から時期が明らかである。埋甕と立石が炉を挟んで南—北方向に配されているが、住居を思わせる竪穴や堅くしまった床面は検出できなかった。この二基の炉を結んだラインを境界として北西側には遺構がほとんど検出されていない。また遺物の量も減ることからなんらかの境界を示す施設の可能性がある。

F-36は長軸が東—西方向を向く石組炉であり西側が開く。配石を伴う石組炉で、配石は仮に2個一組と仮定するとその間を長軸の延長線が通るものであるが配石はひとつだけである。ただしこの炉

は掘り下げ過ぎた状況から調査を開始したため立石を誤って引き抜いてしまった可能性がある。比較的窪んだ地形のところに作られているため白坂3式の大形土器などが旧H-5出土遺物としてあるが、実際は図Ⅲ-83-3が旧H-5覆土下位から出土している。むしろ涌元式のころのものとも推測できる。F-37は石組炉とは言い難いが南東側に大形の礫が立石風に配されたものである。

**柱穴状の小土壇：**H-21が調査中に判断できた配列であり、他は机上の操作によって想定したものである。環状のものと一直線の列に並ぶものの二通りある。環状のものはその東側において土壇の間隔が広いものが多く、柱立ちの平地式住居を想定すると、後期前葉の石組炉を持つ家で述べた様に斜面下方を意識した出入り口の可能性がある。

## 2. 土器・土製品

**サイベ沢Ⅶ式：**H-15の廃絶直後にサイベ沢Ⅶ式で円筒上層d式に並行する土器がまとまって廃棄されていた。出土状況から多少の時間的な幅はあったにせよ、ほぼ同一時期の資料と捉えることが出来る。土器によって粘土紐貼付の有無があり、貼付を持つものについては、その隆帯文様の多様性が円筒上層式土器の終末の様相を呈するものとする。円筒上層式土器様式後半期における隆帯文様の規則性が無くなっていく状況を示しているものとする。

**涌元式：**涌元式は1965年吉崎昌一が提唱した。縄線文を口縁部に施すものおよび蛇行沈線と渦巻き文様を2本一組で施文するものを含む一群である。後期初頭に位置づけられるものである。これを涌元1式とし、高橋正勝が1974年に設定した涌元式を涌元2式としてより新しい段階とするのが通例である。上磯町矢不來2遺跡の土器のまとまりを、涌元1式と2式の間位置づける「矢不來2式」について鈴木克彦(2001)が提案している。矢不來2式の資料のうち沈線文を持つ土器は鈴木克彦が言うところの馬立式、葛西 勳(2002)が言うところの蛭沢Ⅰ期に相当するものである。ただしこの時期については慣例的に北海道においては涌元1式の範疇として捉えることが多かった。

2003年に行われた海峡土器編年研究会において涌元式についての大沼忠春からの発言があった。大沼は1996年に北東北の3県(青森・秋田・岩手県)と北海道の関係者によって行われた検討会を踏まえて涌元1式と2式を再度定義した。涌元1式については、吉崎(1965)で涌元式とされた資料は1972に知内町教育委員会が刊行した『涌元遺跡』が標識となっており、そこに図化された資料のみでは不確定な要素が多いが、乙部町栄浜遺跡・知内町湯の里1遺跡の資料を追加して後期初頭の土器を含む(大木10式起源の磨消縄文の土器を含み、ボタン状の突起、列点による口縁部区画の充填するものも含む)一群を涌元1式とするという内容であった。そして涌元2式とは高橋(1974)に加えて、松前町原口遺跡のまとまった資料(頸部に縄文を施さない帯を持ち、口縁の折り返し部分に横走する平行沈線文を持つものが出現する。頸部は無文帯の場合と密ではない沈線文を持つ。また上下交互に三角形が横方向に連続するなど涌元式の沈線文を持つが縄文地を持たないものも現れる)に並行するものと理解がなされた。

大沼の発言を今回は重視するものとする。その結果では、涌元1式の時間幅が広くなり、2段階以上の幅を持つこととなる。このことについて質疑応答のなかで筆者が確認したところ、大沼もそのような理解であった。この研究会では共通理解を得たものと解釈する。従って、鈴木克彦(2001)が矢不來2式と提唱した木古内町矢不來2遺跡のまとまった資料を涌元式の一段階として捉える事は無理がない。ただし矢不來2式の算用数字「2」が遺跡名か段階名を示しているのか判りづらいこともあり今回の文中においては、筆者の個人的見解から、これを型式名としては用いないものとした。

筆者はこの海峡土器編年研究会において、遺構あるいは貝塚の調査で、層位的なまとまりとして取

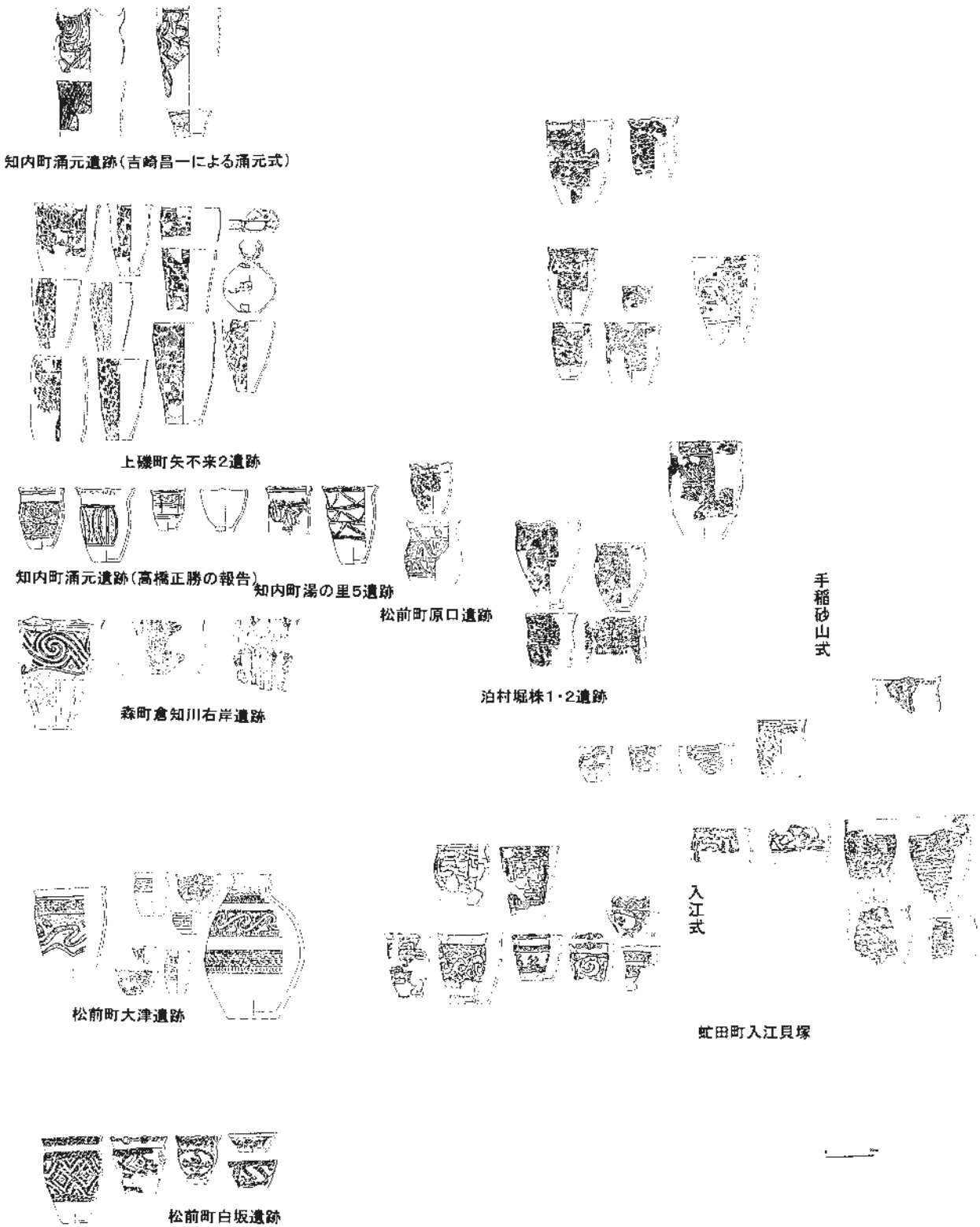


図VI-1 葛西編年と濁川左岸遺跡出土土器の対比





図VI-2(1) 縄文時代後期前葉土器編年図



図VI-2(2) 縄文時代後期前葉土器編年図

上げられた資料に新旧関係を与える作業を行った（層位的に取上げたものであっても、埋没過程あるいは作業上の便宜によって新旧の資料が上下入れ替わることは念頭においた）。そこで流れを確認したところ葛西(2002) および児玉大成(1999)の編年の流れと矛盾しなかった。前十腰内式をより細分した葛西の編年を用いるならば、涌元式が前十腰内式の牛ヶ沢(3)式～蛭沢Ⅰ期～蛭沢Ⅱ期～一部小牧野3期の一部まで、トリサキ式が小牧野3期～十腰内Ⅰ式期(古)～十腰内Ⅰ式期(新)の一部までの流れに沿うものと理解した。また十腰内Ⅰ式期(新)は従来十腰内Ⅰbと呼ばれていたものにほぼ相当するものであり、前十腰内式と呼ばれる一群の土器の編年観は、青森の研究者によって見解が異なることに対し、十腰内ⅠaとⅠbの編年観については研究者によってさほど見解を異としないものと筆者は理解している。

以上のことから涌元Ⅰ～Ⅱ式が3段階以上あることが明らかになったものとして、今回の調査で出土した涌元式に対比できる資料について整理を行った。Ⅲ～Ⅳ章の本文中では葛西編年の時期区分名称を用いて涌元式の新旧を表した。これについて集成を行った(図Ⅵ-1)。

その結果蛭沢Ⅰ式からⅡ式にかけての資料が濁川左岸遺跡の涌元式土器の主体をなすと考えた。渦巻き文様および蛇行沈線の垂下を主体とする不規則な沈線文を持つものについてはこの2段階の範疇であると考え、図Ⅲ-3-H-6-1については確実に合致するものではないが、小牧野3期に並行し、当期の文様が在地で略化したものという可能性を挙げておきたい。また同H-6-9についてはトリサキ式の文様を思わせる区画が崩れて崩れて縦方向の展開を持つ文様が考えられる。

図Ⅲ-37-H-20-3や図Ⅳ-13-1、図Ⅳ-32-117はよく似た土器である。胴部上半で丸く膨らみ胴部下は明瞭な頸部があり口縁部はよく開き頸部以上は無文にする。口縁部は渦巻き文様か、縄線を横方向に平行に施文する。胴部は横方向に連続する渦巻き文様を施し、沈線で方形に区画した中を刺突で充填する。列点の使い方と渦巻き文様が連続して横方向に展開することから蛭沢Ⅰ期より古い様相と推測する。しかしこのような胴上部で膨らみ明瞭な頸部とよく外反する口縁部を持つ器形は、単純に内彎する口縁部形態のものとは違い、後期初頭(木古内町泉沢2遺跡など)のまとまりよりは矢不來2遺跡の段階以降に多いため、後期の初頭までは遡らないものとする。牛ヶ沢(3)式期の新しいないしは蛭沢Ⅰ式期の古手で、北海道の独自性として挙げられる要素として捉えたい。図32-112・115・118・119、図42-213は器形と施文方法と部位からこれらと同時期のものとした。

図Ⅳ-40・41にまとめた上下に突起が並ぶものや列点により区画を充填するものについては、タガ状の貼付帯を持つものも出土していることから後期初頭の一群の可能性はある。特に図Ⅳ-40-188・190・205・206・207・図41-211はその可能性はある。上下に突起が並ぶものについては、トリサキ式に近い土器型式である、手稲砂山式にもこの施文が残るため、他の要素がないものについては一概には言えない。

図Ⅳ-32・33にまとめた磨消文様を持つ土器群について蛭沢Ⅱ期のものが多く、大木系の系譜を引く門前式に並行するものは認知し難い。ただし図Ⅳ32-119は「J」ないし「U」字を思わせる文様構成である。図33-127は無文帯を頸部に持ち、折り返し口縁部に沈線ではなく縄線が横走するものである。頸部に無文帯が発生することは涌元2式の特徴と考える蛭沢Ⅱ期の影響により無文帯ないしは縄文を施さない帯に簡単な沈線文を施すものが発生する。そして無文帯による口縁部文様帯と胴部文様帯が確立することにより次段階であるトリサキ式につながるものとする。

図Ⅳ-17-18および図Ⅳ-40にまとめた無文のボタン状突起を並べるものについては角度をもって屈曲して膨らむ胴部と無文の折り返し口縁を持つことからタガ状の貼付帯を持ち縦方向にも同様の隆帯を貼付して区画する天祐寺式の影響が強い土器が特異化したものと判断した。図Ⅲ-4-H-6-

11のように明らかに折り返し口縁の土器に後からの隆帯貼付によって天祐寺風にする個体についても特異化の例で捉えたい。時期的には、後期初頭というよりはむしろやや時期を経た、蛭沢Ⅰ～Ⅱ式の範疇であろう。図Ⅳ-40-199は図Ⅳ-17-18とよく類似した器形の土器であるがこれは刺突列を持つものであり、前段で述べたような要素的には古いが蛭沢Ⅰ式期初現前後の時期における北海道の独自性として挙げられる要素に含まれると今回は判断した。

図Ⅲ-38-H-20-8は無文地に沈線文を描いたものである。この類例は鳥崎川の資料とされる熊野喜蔵コレクション（開拓記念館所蔵）のうちにもある。この熊野の資料についてはトリサキ式とされている。文様の展開方法等は牛ヶ沢（3）式に似ており、知内町湯の里2遺跡で牛ヶ沢（3）式とされる復元土器も無文地に縄線で渦巻き文様等を施すものである。新旧は不明瞭であるが、トリサキ式に比定するには渦巻き文様の構成等に差異が明瞭なため、今回は涌元式の範疇でおさめた。

〔付記〕涌元式土器の理解にあたり、まず、2003年に行われた海峡土器編年研究会において発表者の共通理解を阻害する要因がふたつあったことを記しておきたい。道央の関係者と渡島半島および青森県の関係者の間で余市式の認知が異なることと、大木10式の拡大解釈、の2点である。

鈴木克彦（1999）が指摘している様に大木10式の拡大解釈が一部の研究者によって慣例的に為されてきた事実はある。岩手県において後期初頭、門前式と呼ばれる一群に大木10式に系譜を求められる「J」ないしは「U」字型の磨消文様がある。これらをすべて大木10式並行として捉える傾向があるため、後期における磨消文様の理解に弊害があった。また、余市式の理解において北海道中期末のノダップⅡ式・レンガ台式は様式的には余市式土器様式の範疇に入るものであるが、道南では後期初頭天祐寺式にまでその系譜があり、その後、涌元式、トリサキ式と共伴する折り返し口縁の土器へと変化していく。道央においては余市式の成立に北筒式が存在することにも由来するためかタブコブ式（大津式並行）まで大沼忠春が示した（1982）、余市式土器様式で捉えることが可能なものとする。涌元式と呼ばれる沈線文の土器は八雲町では、コタン温泉遺跡において器形は異なるが文様要素に当期の可能性の高い遺物が見つまっているが、まとまった出土はない。噴火湾沿いでは、今回の濁川左岸遺跡がまとまった出土をする遺跡ではもっとも北に位置し、日本海側では乙部町緑町2遺跡にまとまった出土がある。トリサキ式の時期に八雲町へ十腰内起源の文様を持つ土器の拡散があるものと思いたい。またこのトリサキ式の拡散は共通する文様から手稲砂山式の成立と関連するものと考えられる。泊村堀株1・2遺跡の資料には涌元式に由来する可能性がある蛇行沈線の垂下文様や三角形の区画文が2段で横方向に連続するものなどがある。ただしこのふたつの文様はトリサキ式の新しい段階で十腰内Ⅰb式と並行する（浜松5遺跡H-8の土器のまとめり）ものにも類似した文様が見られるため涌元式まで手稲砂山式が遡ることについては今後の検討を要する。この十腰内式に起源を持つ文様が同じ渡島半島において津軽海峡沿岸とより北部では受容の時期にずれがあることと道央部においては余市式特有のタガ状の貼付帯が残ることは今後、共通理解していくべき事柄である。八雲町コタン温泉遺跡の土器様相がトリサキ式の拡散以前、涌元式の時期における八雲町の土器様相を示しているとすると可能性がある。この遺跡からは北筒式トコロ6類の出土も見られ、比較的道央からの影響が及ぶ地域の可能性がある。また登別市においては、千歳5遺跡で後期初頭の大木10式からの系譜を引く磨消文様の土器が出土していることや、川上B遺跡から、縄文地文に口縁部から刺突を施した垂下する隆帯を貼付した手稲砂山式のほかに、トリサキ式が出土する。陸路においては難所である豊浦～長万部間を経由しない登別市の様相は、トリサキ式の拡散の背景に海上路の活性化も想定し得る。

沈線文の無い土器、折り返し口縁を持つ土器については縄文施文後に縄文の条が横走ないしは縦走するものがある。これらについては意図的なものであり、縄文施文後にナデ調整を施して見えるもの

については条を水平ないしは垂直に走らせる操作の際についた痕跡も含まれているものであろう。折り返し口縁のものが多いが、貼付によるものもあるがほとんどは器を成形する際の輪積み作業の手法によるもので、輪積痕を外側に残した状態のものである。このような手法は焼成時の貼付の剥落を防ぐ効果がある。また多段の折り返し口縁を思わせる深鉢の存在は輪積み痕を外側に出す作業を繰り返したものである。無文地の土器は壺形土器が涌元式の蛭沢Ⅰ式並行段階から現れ、涌元Ⅱ式の一部、そしてトリサキ式においてよくみられる。これらの中には、輪積みの後、化粧土のように水分の多い粘土を塗り込める操作によって無文にするものがあり、当時の輪積みを基調とした成形技術が窺われる。

壺形土器のうち特徴的なものとしては切断蓋付きの壺（図Ⅲ-35-H-20-1、図Ⅳ-39-173・177）がある。粘土を成形し乾燥後に草本によって刺突による貫通孔を連続させそこから切り離すものである。復元ができたものとしては、図35-H-20-1がある。切断には施した渦巻き文様を意識している。上から覗き込むと頸部内面にC字型の張り出しがあり、内径同じ直径の円板があれば蓋として使用できる。上半部のみの出土であり、下半分は別個体の胴部図Ⅳ-39-173・177のみ出土した。図Ⅳ-39-177は小型の壺の破片である。

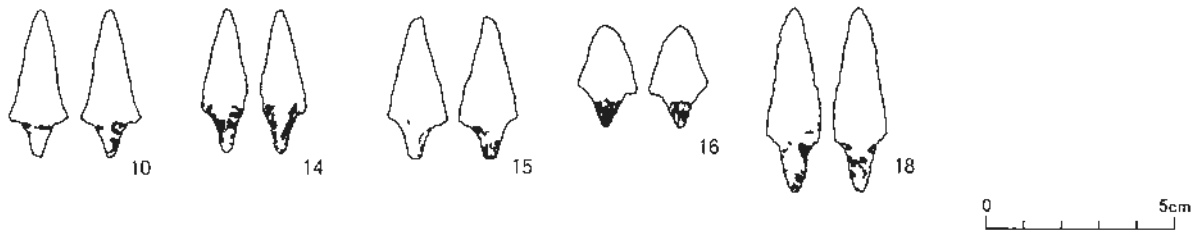
**大津式・白坂Ⅲ式・ウサクマイC式**：クランク状文様あるいはその変形した沈線文が並んでいるもの、カニバサミ状の文様が文様構成中に入るものを大津Ⅶ群とした。口縁部に鋸歯状の沈線文が入れ子状、または波状文が同心円状に並ぶ文様があるものうち口唇部際を一本の沈線で区画するものをウサクマイC式とした。その間の時期に変遷した文様を持つものを白坂Ⅲ式とした。

特異なものとして、その胎土と文様から、搬入品の可能性が高い加曾利Ⅱ式の注口土器がある。注口部は剥落している。

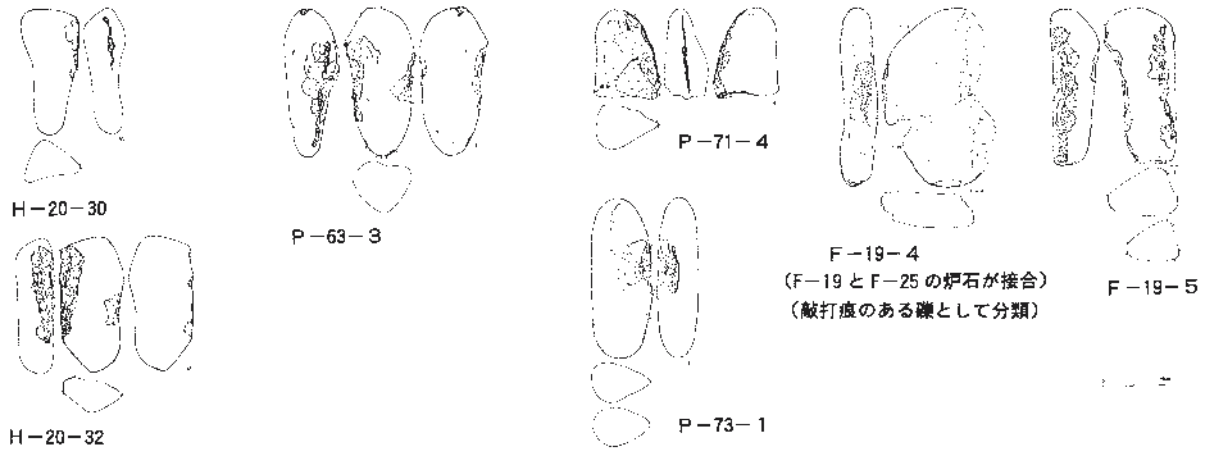
**土偶**：図Ⅳ-70-1は土偶の顔部分である。N8区のⅣ層から出土した。隆帯を貼り付けた、鼻と鼻上隆起は連続している。目と鼻の穴と口は草本による刺突である。耳にあたる部分には貫通孔がある。類例としては乙部町緑町2遺跡の3号土坑、覆土からの出土遺物がある。この土坑の覆土からは同時に縄文時代後期初頭の土器が出土している。濁川左岸遺跡でも出土する、沈線文のない縄文地文の土器で、折り返し口縁はもたない。青森県において、多くの土偶が出土している。出土状況が明確なものが多い。当時の担当者であった影浦が実際に青森県において観察したところ、餅の沢遺跡および三内丸山遺跡の縄文時代中期における円筒上層式の後半（見晴町式並行を含む）の例が類似していることが明らかになった。これは鈴木克彦（1998）の土偶の研究を参照すると、当遺跡出土の土偶が十腰内文化の土偶というよりは大木系文化の土偶の特徴と合致する。緑町2遺跡の包含層出土遺物は、ほとんどが後期初頭を中心とするものであり、縄文時代中期中葉の遺物はない。ただし石組炉の炉石に用いられる石器を転用する例のように明らかに縄文時代後期の人間が中期の石器を採集してくる例示がある。ただし北海道中期後半の土偶の出土例が青森県ほどなく、青森県の文化がやや遅れて北海道に伝播する可能性もあり、青森県の編年をそのまま用いる事ができるか否かについて断言できない事もまた事実である。類例の増加を待ち、中期中葉から後期前葉の可能性を指摘しておく。

### 3. 石器

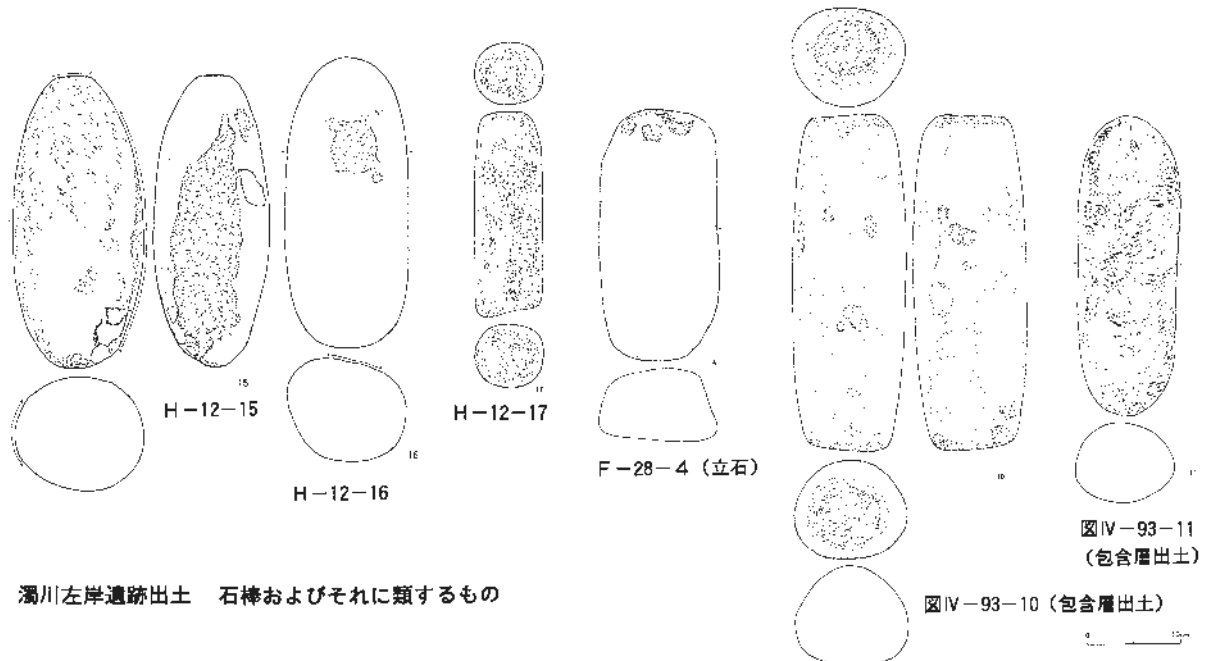
**石鏃の付着物**：5点の石鏃に付着物を確認した（図Ⅳ-10・14～16・18）。その位置については図Ⅵ-3に図示した。前回、濁川左岸遺跡-B地区-（2002）の報告で類例を集成したところ、有茎凸基の石鏃の茎部付け根によく付着する傾向があった。今回報告したものについても同様である。付着物はアスファルトの可能性もある。道南の遺跡出土のアスファルトについては八雲町野田生1遺跡の調査



濁川左岸遺跡出土 付着物のある石鏃 付着位置図 実測図は図IV-71に掲載



濁川左岸遺跡出土 縄文時代後期前葉に特徴的なたたき石



濁川左岸遺跡出土 石棒およびそれに類するもの

図VI-3 成果と課題に関する濁川左岸遺跡出土の石器・石製品

結果の整理と考察（福井 2002）に詳しい。

**扁平打製石器：**今回目立って出土した。石錘のように抉りを持つ側縁のものは半円形以外のものによくみられる。それらについて機能部の形状別にみて、特徴的な比率の差はなかった。半円形以外のものは礫素材の縁辺を調整するだけのものが多い。調査区内15ライン以北では後期の遺構がほとんどである。この15ライン以北で微妙ではあるが比率的に半円形以外の出土が多かった。これらの形状について、2003年に刊行したB地区の報告書のVI章「成果と課題」において、中期中葉以降の石組み炉の炉石に転用される例について集成した結果、半円形以外の形状のものを炉石として用いる例が多い。青森県についても類例がある。中期以前の石器を採取し炉石に転用する例があることを差し引いてもこれらが中期において後期に近い（あるいは後期の）時期に所属する遺物という可能性がある。

機能面を持つものについては長軸方向に擦痕が延びるものがほとんどである。図IV-84-159のように擦り面の幅が広いものについては、北海道式石冠と同じように長軸に対して45°の角度で擦痕が延びるものもある。機能部の縁辺に細かい打ち欠きがおよぶものが多いことから、北海道式石冠のように叩き擦るような使用方法なのであろう。より幅のせまい機能部を持つことから圧力がより必要な作業が想定されると同時に北海道式石冠の出土量が減る中期後半以降においては、使用によって機能面の幅が広がったものについては代替されていく可能性もある。

**たたき石：**石組炉の石組から、あるいは土壌の上部から出土する特徴的なたたき石（H-20-30・32、P-63-3、P-71-4、P-73-1、F-19-5（F-19とF-25の炉石が接合））がある。たたき石のなかから定形的なものは凹み石とこの形態のものである。比較的重量のある、細長い楕円礫ないしは柱状の礫について横断面について稜線がたっている部位を用いる。使用時のものと思われる両面ないしは片面からの打ち欠きが敲打痕からなる機能部縁辺に巡る。機能部については扁平打製石器の厚みがあり刃部様の機能部を持つものが類似している。使用方法も類似している可能性があるが、稜線の全面ではなく中央部を主に使用している。

**石棒：**泊村堀株1・2遺跡（1993）の小括の項において土屋千恵子が柱状石器と称した型式のものと柱状の礫の一部に擦痕ないしは敲打痕があるものが出土した。柱状石器と称したもので明らかなものは包含層出土のものである。H-12HP-1に立てられていた小型のものもこの範疇に分類できる。最近の出土例では焼失家屋の廃棄に関連する石棒の出土状況が森町石倉2遺跡（当センター 2003）にある。自然礫の形状を生かしたものについては厳密には石棒と断定できないものであるが、使用痕から、機能を推定する（鞍状の石皿に伴うすり石など）ことは出来なかったためこの種の石製品として扱ったものである。F-28に伴う立石はこの範疇で捉えるべきかどうか判断に迷ったものである。頂部にのみ敲打痕があり、穴に据えつける際、上から敲打した痕跡である可能性を持つ。（大泰司）

## 引用・参考文献

- 森浩一編 1998 『古代翡翠文化の謎』 新人物往来社
- 石岡憲雄 1994 「撚糸文」『縄文文化の研究』 5 雄山閣
- 石川 徹 1967 「札幌郡手稲町砂山出土の土器について」『北海道考古学』 第3輯
- 今井富士夫・磯崎正彦 1968 「十腰内遺跡」 岩木山
- 大島直行ほか 1979 『知内川中流域の縄文時代遺跡』 知内町教育委員会
- 大泰司統 2004 「縄文文化 前・中期」『北海道考古学』 第40輯
- 大沼忠春 1981 「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」『考古学雑誌』 66-4
- 大沼忠春 1982 「続縄文時代型式の編年」『縄文土器大成』 5 講談社
- 大沼忠春 1986 「道南の縄文前期土器群の編年について(2)」『北海道考古学』 第22輯
- 大沼忠春 1989 「続縄文土器様式」『縄文土器大観』 4 小学館
- 小笠原忠久 1984 「北海道南西部における縄文時代前・中期の集落」『北海道の研究』 第1巻
- 葛西 勵 1979 「十腰内I式土器の編年的細分」『北奥羽古代文化』 第11号
- 葛西 勵 2002 『再葬土器棺墓の研究』 - 縄文時代の洗骨葬 -
- 児玉大成 1999 「小牧野遺跡における環状列石の構築時期」『青森県考古学』 第11号
- 坂本真弓 2002 「沢部型石組炉の現在」『海と考古学とロマン』
- 縄文文化検討会 1986 『第1回縄文文化検討会発表資料』
- 鈴木克彦 1998 「大木系(土器)文化の土偶の研究」 - 土偶の研究(3) - 『土偶研究の地平』 「土偶とその情報」研究会
- 鈴木克彦 1999 「北海道渡島・松山地域の中期末葉から後期初頭の編年」『北海道考古学』 第35輯
- 鈴木克彦 2001 『北日本の縄文後期土器編年の研究』 雄山閣
- 高瀬克範 1998 「恵山式土器群の成立・拡散とその背景」『北海道考古学』 第34輯
- 高橋正勝 1974 「知内町涌元遺跡出土の土器と北海道南西部の縄文時代後期前半について」『北海道の文化・31』
- 高橋正勝 1994 「北海道南部の土器」『縄文文化の研究』 4 雄山閣
- 高橋正勝・小笠原忠久 1980 「4 縄文文化前期・中期」『北海道考古学講座』
- 千代 肇 1984 考古学ライブラリー-25 『続縄文文化』 ニュー・サイエンス社
- 千代 肇 1994 「道南地方の土器」『縄文文化の研究』 6 雄山閣
- 土屋千恵子 1993 「小括 2. 石器 柱状石器」『堀株1・2遺跡』 北海道文化財研究所
- 富樫泰時 1981 「東北地方」『縄文土器大成2』 講談社
- 成田滋彦 1994 「青森県の土器」『縄文文化の研究4』 雄山閣
- 成田滋彦 1989 「入江・十腰内式土器様式」『縄文土器大観4』 小学館
- 成田滋彦 2000 「縄文時代住居跡の出入り口」『青森県埋蔵文化財センター紀要』
- 成田滋彦編 2003 『東北・北海道の十腰内I式再検討』 海峡土器編年研究会
- 羽賀憲二 1995 「北海道式石冠」『縄文文化の研究7』 雄山閣
- 羽賀憲二 1998 「道央部における縄文時代後期初頭の土器 - 「仮称手稲砂山式土器」について -」『時の絆 道を辿る』 石附喜三男先生を偲ぶ本刊行委員会編
- 藤原秀樹 2002 「半円状扁平打製石器について」『山越3遺跡・山越4遺跡』 北埋調報166
- 三宅徹也 1974 「青森県における円筒下層式土器群の地域的展開」『北奥古代文化』 第6号



- 村越 潔 1976「円筒土器に伴う特殊な石器」『東北考古学の諸問題』
- 村越 潔 1984『増補 円筒土器文化』雄山閣考古学選書10
- 三浦孝一 1984「第二編 先史時代」『改訂八雲町史 上巻』八雲町
- 吉崎昌一 1965「1 北海道」『日本の考古学Ⅱ 縄文時代』河出書房
- 青森県教育委員会 1983『弥栄平遺跡（2）』
- 青森県教育委員会 1984『青森県六ヶ所村大石平遺跡』
- 青森県教育委員会 1985『青森県六ヶ所村大石平Ⅱ遺跡』
- 青森県教育委員会 1986『青森県六ヶ所村大石平Ⅲ遺跡』
- 青森県教育委員会 1987『上尾駮（2）遺跡Ⅱ』
- 青森市教育委員会 1995『小牧野遺跡』
- 乙部町教育委員会 1976『元和』
- 乙部町教育委員会 1989『緑町2遺跡』
- 上磯町教育委員会 1992『三ツ石2遺跡』
- 上磯町教育委員会 1992『石倉野3遺跡』
- 上ノ国町教育委員会 1985『小岱遺跡』
- 木古内町教育委員会 2003 泉沢2遺跡A地点
- 白老町教育委員会 1992『アヨロ遺跡』
- 戸井町教育委員会 1988『釜谷2遺跡Ⅰ』
- 戸井町教育委員会 1988『釜谷2遺跡Ⅱ』
- 八戸市教育委員会 1986『丹後谷地遺跡』
- 八戸市教育委員会 1987『田面木平遺跡（1）』
- 松前町教育委員会 1974『松前町大津遺跡発掘調査報告書』
- 松前町教育委員会 1976『松前町原口遺跡発掘調査報告書』
- 松前町教育委員会 1978『鬼沢B遺跡・棚石遺跡調査報告』
- 松前町教育委員会 1983『白坂』
- 南茅部教育委員会 1986『白尻B遺跡 vol. VI』
- 南茅部教育委員会 1985『白尻B遺跡 vol. V』
- 南茅部町埋蔵文化財調査団 1993『八木A遺跡・ハマナス野遺跡』
- 森町教育委員会 1975『鳥崎遺跡』
- 森町教育委員会 1994『御幸町』
- 森町教育委員会「鷲ノ木4遺跡・栗ヶ丘1遺跡」2002・3
- 森町 1980『森町史』
- 函館市教育委員会 1999『函館市石倉貝塚』
- 函館市教育委員会 1988『寺町貝塚』
- 八雲町教育委員会 1980『山崎遺跡発掘調査報告書』
- 八雲町教育委員会 1982『栄浜1遺跡発掘調査概報』
- 八雲町教育委員会 1983『栄浜』
- 八雲町教育委員会 1986『栄浜1遺跡』
- 八雲町教育委員会 1987『栄浜1遺跡』
- 八雲町教育委員会 1988『山越5・6遺跡発掘調査報告書』

- 八雲町教育委員会 1989『浜松 2 遺跡』
- 八雲町教育委員会 1990『八雲 3 遺跡発掘調査報告書』
- 八雲町教育委員会 1991『浜松 2 遺跡』
- 八雲町教育委員会 1992『コタン温泉遺跡』
- 八雲町教育委員会 1995 a『浜松 5 遺跡』
- 八雲町教育委員会 1995 b『栄浜 1 遺跡』
- 八雲町教育委員会 1997『大新遺跡』
- 八雲町教育委員会 1998 a『大新遺跡』
- 八雲町教育委員会 1998 b『旭丘 1 遺跡』
- 八雲町教育委員会 1998 c『栄浜 1 遺跡Ⅳ』
- 北海道第四期研究会 1974『西股』
- (財) 北海道埋蔵文化財センター1986『知内町湯の里 3 遺跡』北埋調報32
- (財) 北海道埋蔵文化財センター1986『上磯町矢不來 2 遺跡』北埋調報37
- (財) 北海道埋蔵文化財センター1987『木古内町建川 2・新道 4 遺跡』北埋調報43
- (財) 北海道埋蔵文化財センター1988『木古内町新道 4 遺跡』北埋調報52
- (財) 北海道埋蔵文化財センター1997『千歳市キウス 5 遺跡 (3)』北埋調報115
- (財) 北海道埋蔵文化財センター2000『八雲町シラリカ 2 遺跡』北埋調報142
- (財) 北海道埋蔵文化財センター2001『八雲町ボンシラリカ 1 遺跡・黒岩 3 遺跡』北埋調報155
- (財) 北海道埋蔵文化財センター2001『八雲町山崎 4 遺跡』北埋調報162
- (財) 北海道埋蔵文化財センター2002『八雲町山崎 5 遺跡』北埋調報165
- (財) 北海道埋蔵文化財センター2002『八雲町山越 3 遺跡・山越 4 遺跡』北埋調報166
- (財) 北海道埋蔵文化財センター2002『八雲町野田生 2 遺跡』北埋調報167
- (財) 北海道埋蔵文化財センター2002『八雲町野田生 4 遺跡』北埋調報171
- (財) 北海道埋蔵文化財センター2002『八雲町栄浜 1 遺跡』北埋調報175
- (財) 北海道埋蔵文化財センター2003『森町本内川右岸遺跡』北埋調報182
- (財) 北海道埋蔵文化財センター2003『森町濁川左岸－B地区－』北埋調報190
- (財) 北海道埋蔵文化財センター2003『森町本茅部 1 遺跡』北埋調報191
- (財) 北海道埋蔵文化財センター2004『森町石倉 2 遺跡』北埋調報197
- (財) 北海道埋蔵文化財センター2004『森町石倉 3・5 遺跡』北埋調報205



# 写真図版



## 撮影データ

### 現場：機材

マミヤRZ67プロII  
セコール50<sup>mm</sup>F4.5  
セコール65<sup>mm</sup>F4L-A  
セコール90<sup>mm</sup>F3.5W  
ニコンF3  
AiAFズームニッコール35~70<sup>mm</sup>F2.8D  
Aiニッコール24<sup>mm</sup>F2.8S  
酒井マシンツール トヨ・ビュー45GX II  
フジノンSW90<sup>mm</sup>F8  
フジノンW135<sup>mm</sup>F5.6  
クイックセット ハスキー 3段  
ジッツオ G505

### フィルム

フジRDPⅢ、ネオパンアクロス  
コダックE100S、TMX

### 室内：機材

酒井マシンツール トヨ・ビュー45GX II  
ニッコールW210<sup>mm</sup>F5.6  
ニッコールAM210<sup>mm</sup>F5.6  
酒井マシンツール トヨ・無影撮影台  
酒井マシンツール トヨ・ウェイトスタンド100

### フィルム

フジRDPⅢ、ネオパンアクロス



1 平成13年度調査風景



2 平成14年度調査風景

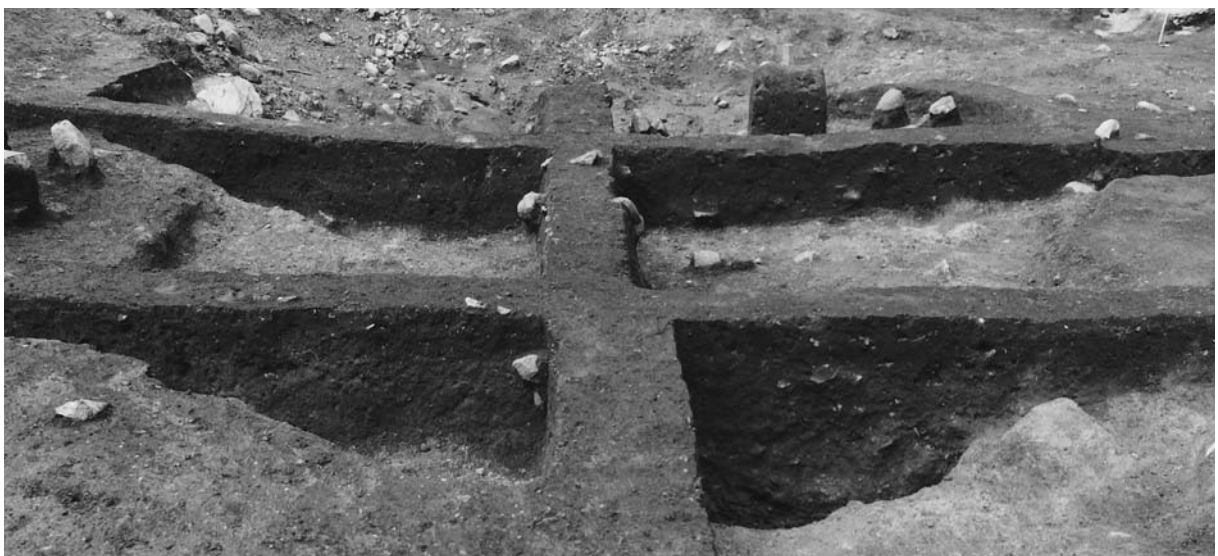
図版 2



1 H-6, 11南-北セクション(右も同)



2 H-6, 11東-西セクション



3 H-11東-西セクション



1 H-6, 11完掘



2 H-7北西-南東セクション



3 H-7北東-南西セクション



図版 4



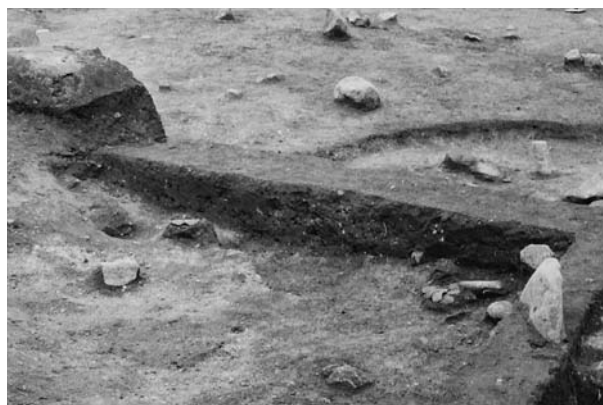
1 H-7 HF-1と黒いしみ



2 H-7 HF-1セクション



3 H-7完掘



1 H-12南-北セクション



2 H-12東-西セクション



3 H-12 HP-2~4セクション



4 H-12完掘

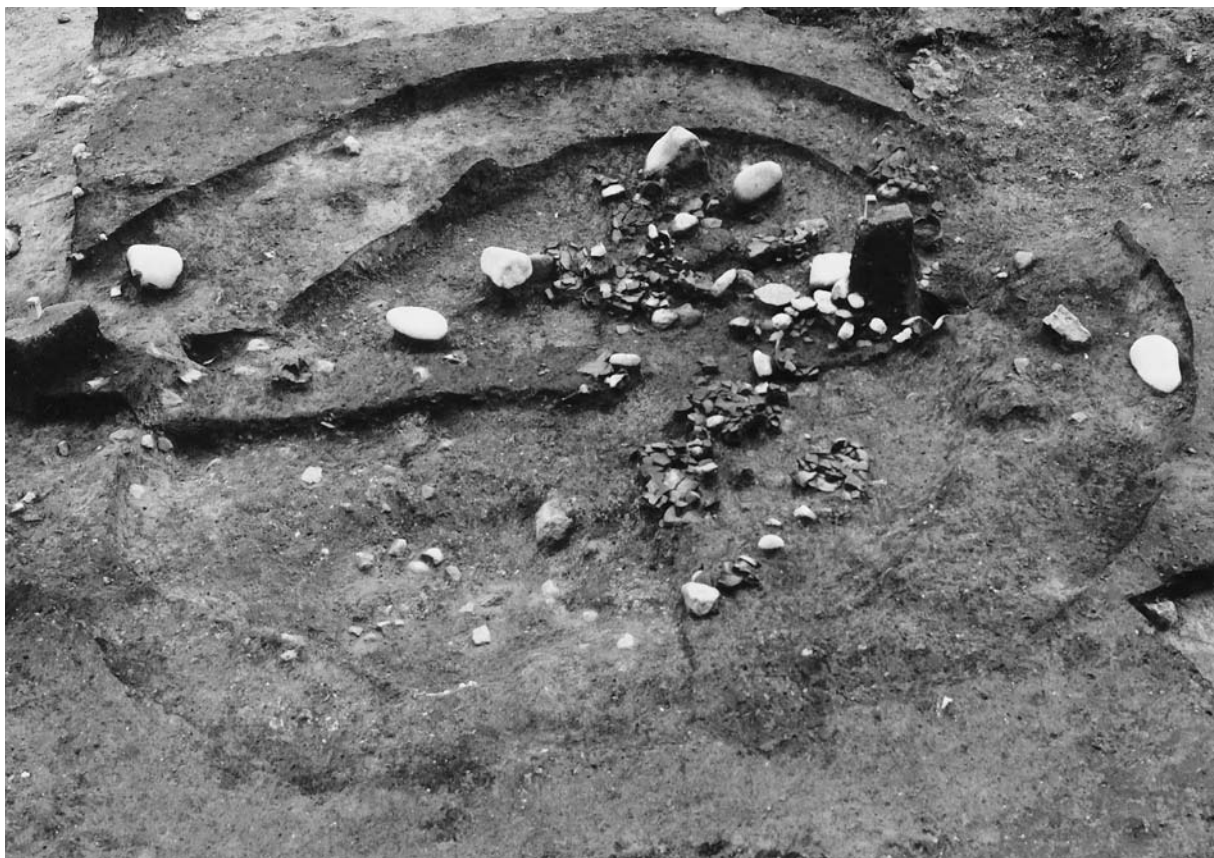
図版 6



1 H-15北東-南西セクション



2 H-15北西-南東セクション



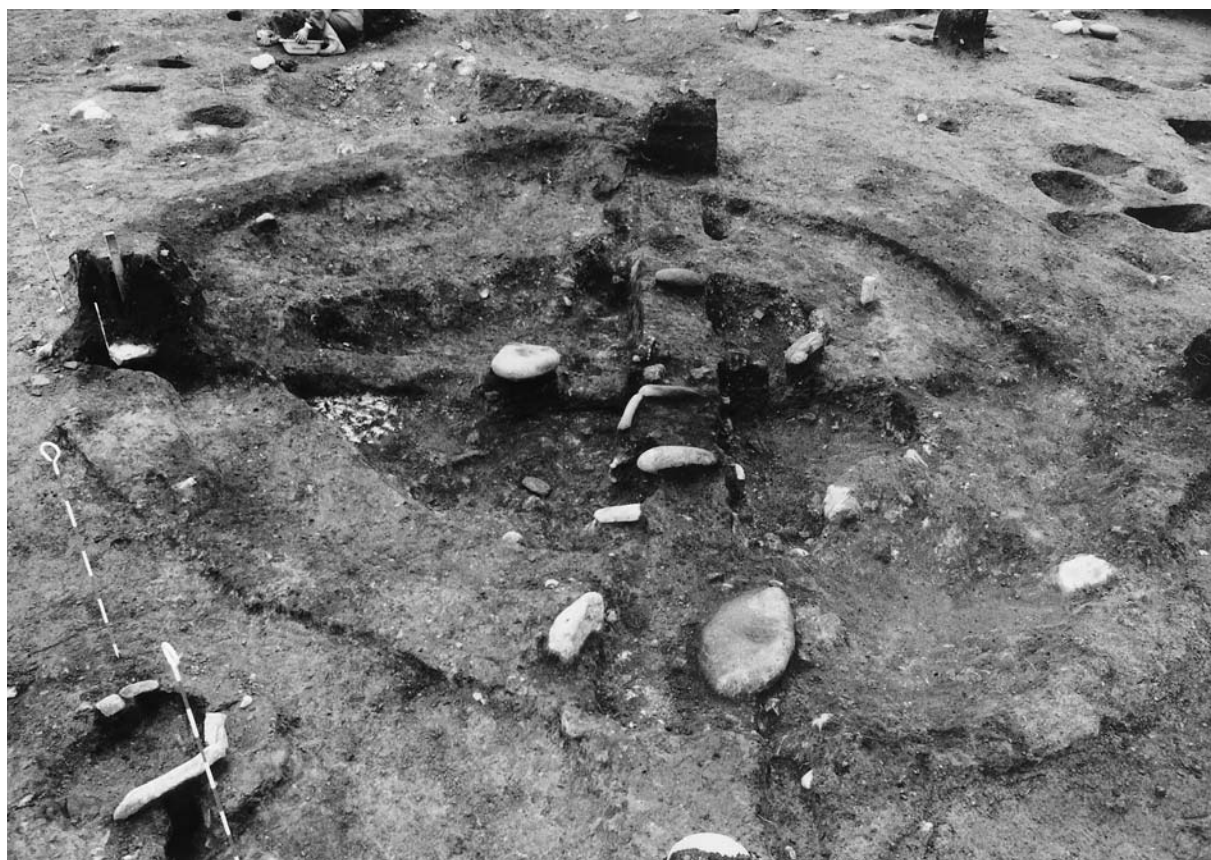
3 H-15完掘



1 H-12, 16東-西セクション



2 H-12, 16南-北セクション



3 H-12, 16完掘



1 H-18確認



2 H-18東-西セクション



3 H-18南-北セクション



1 H-18 HF-1 セクション



2 H-18立石1,2 セクション



3 H-20確認

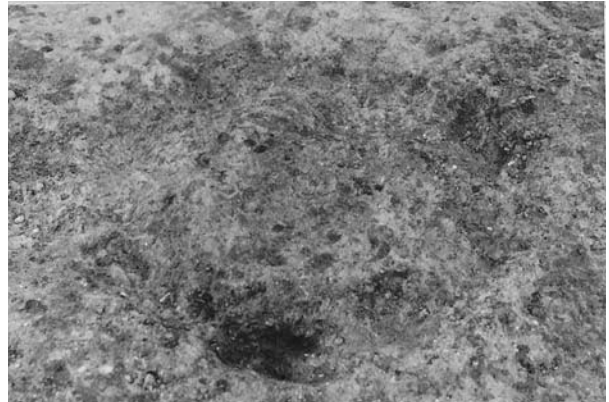


4 H-20セクション

図版10



1 H-20 HP-1 セクション



2 H-20 HF-1 確認



3 H-20遺物出土状況



4 H-20上面遺物出土状況



5 H-21完掘



1 P-2 確認



2 P-2 セクション



3 P-9 セクション



4 P-10 セクション



5 P-10 遺物出土状況



6 P-13 セクション



図版12



1 P-13完掘



2 P-15確認



4 P-15完掘



3 P-15セクション



6 P-16完掘



5 P-16セクション



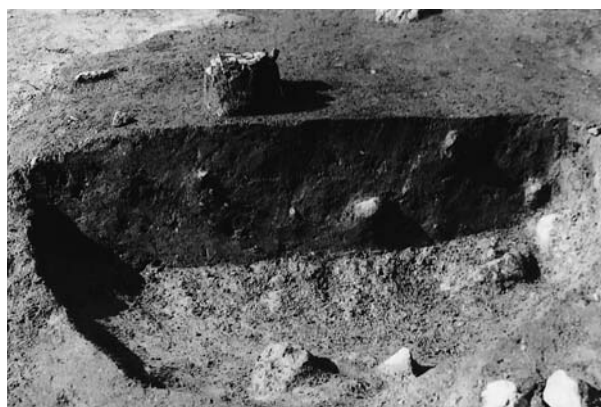
1 P-18セクション



3 P-18, 19遺物出土状況



2 P-19セクション



4 P-20セクション



5 P-20完掘



6 P-21セクション

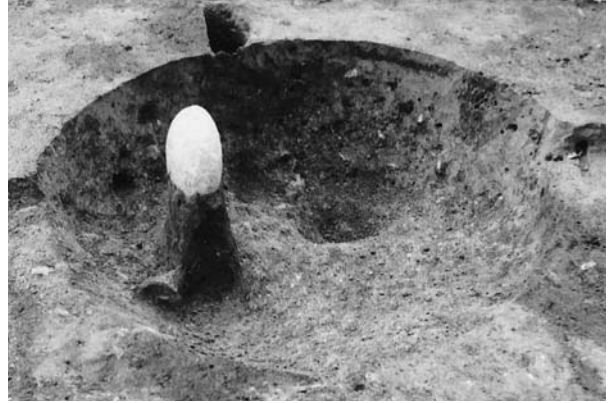


7 P-22セクション

図版14



1 P-23セクション



2 P-23完掘



3 P-24確認



4 P-24セクション



5 P-24完掘



6 P-25セクション



7 P-25完掘



8 P-26完掘



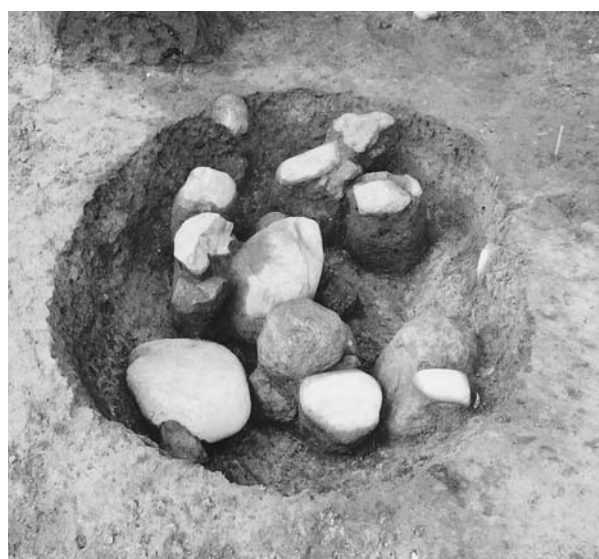
1 P-27セクション



2 P-27完掘



3 P-28セクション



4 P-28遺物出土状況



5 P-29セクション



6 P-30セクション



7 P-30完掘

図版16



1 P-31セクション



2 P-31完掘



3 P-32セクション



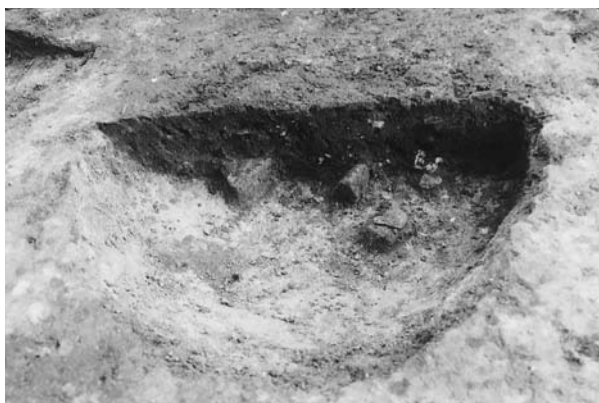
4 P-32完掘



5 P-33セクション



6 P-33完掘



7 P-34セクション



8 P-34完掘



1 P-35セクション



2 P-35完掘



3 P-36セクション



4 P-36完掘



5 P-37セクション



6 P-37完掘



7 P-38セクション



8 P-38完掘

図版18



1 P-39セクション



2 P-39遺物出土状況



3 P-39完掘



4 P-40セクション



5 P-40遺物出土状況



6 P-40完掘



7 P-41セクション



8 P-41完掘



1 P-42完掘



2 P-43セクション



3 P-43完掘



4 P-44セクション



5 P-44完掘



6 P-45セクション



7 P-46セクション



8 P-46完掘



図版20



1 P-47セクション



2 P-47完掘



3 P-48セクション



4 P-48完掘



5 P-49セクション



6 P-49完掘



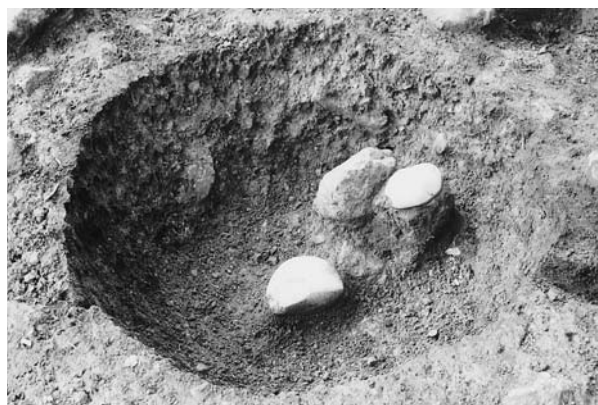
7 P-50セクション



8 P-50遺物出土状況



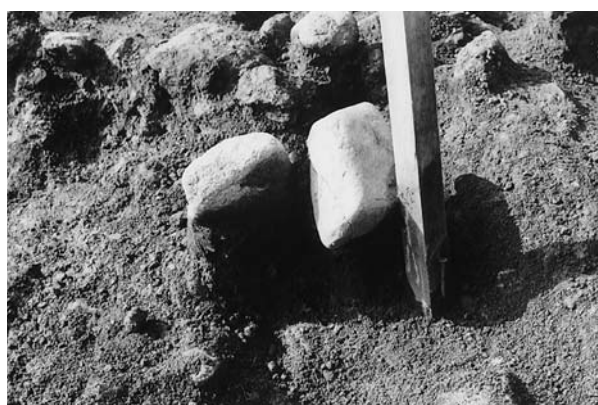
1 P-51セクション



2 P-51完掘



3 P-52セクション



4 P-52完掘



5 P-54セクション



6 P-55セクション



7 P-56セクション



8 P-56完掘



1 P-57, 58完掘



2 P-59セクション



3 P-63セクション



4 P-63遺物出土状況



5 P-64セクション



6 P-64完掘



1 P-66セクション



2 P-66完掘



3 P-71セクション



4 P-71遺物出土状況



5 P-72セクション



6 P-72遺物出土状況



7 P-73セクション



8 P-73完掘

図版24



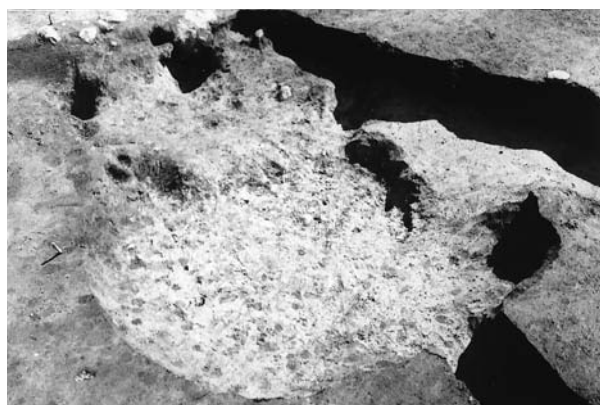
1 P-74セクション



2 P-74遺物出土状況



3 P-75セクション



4 P-75完掘



5 P-76セクション



6 P-76完掘



7 P-83セクション



8 P-83完掘



1 P-87検出



2 P-87完掘



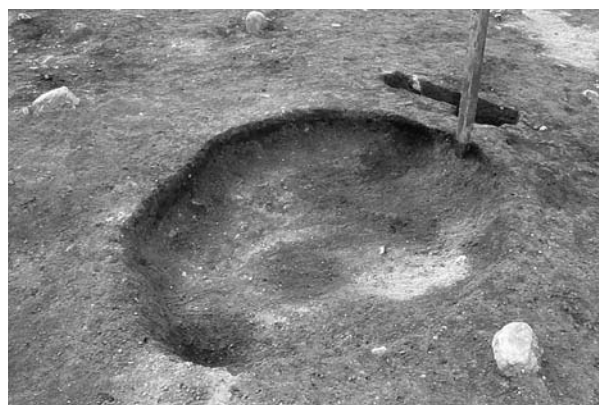
3 P-91セクション



4 P-91完掘



5 P-93セクション



6 P-93完掘



7 P-94セクション



8 P-94完掘

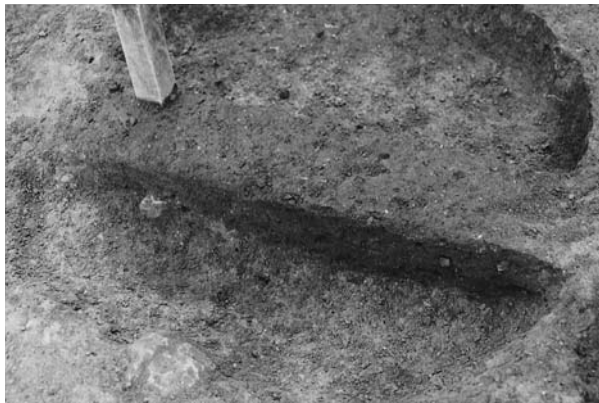
図版26



1 P-95セクション



2 P-95完掘



3 P-96セクション



4 P-96完掘



5 F-10確認



6 F-11確認



7 F-11セクション



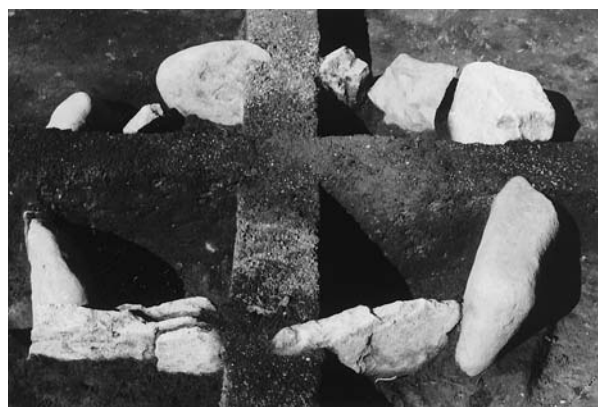
8 F-19セクション



1 F-17, 18, 19確認



2 F-25確認



3 F-29セクション



4 F-28セクション



5 F-28遺物出土状況





1 F-28確認



2 F-28立石セクション



3 F-36セクション



1 F-36確認



2 F-37確認



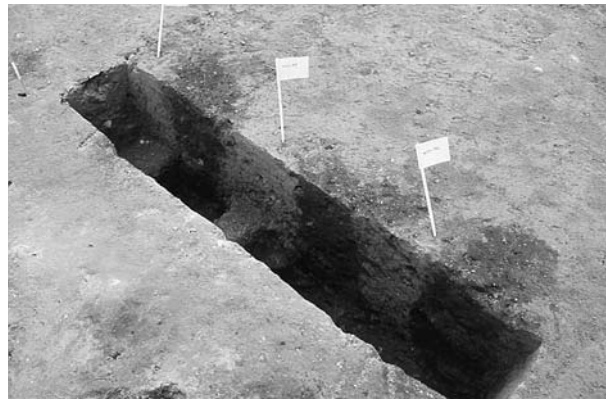
1 SP-1 遺物出土状況



2 SP-2 遺物出土状況



3 SP-5, 6 セクション



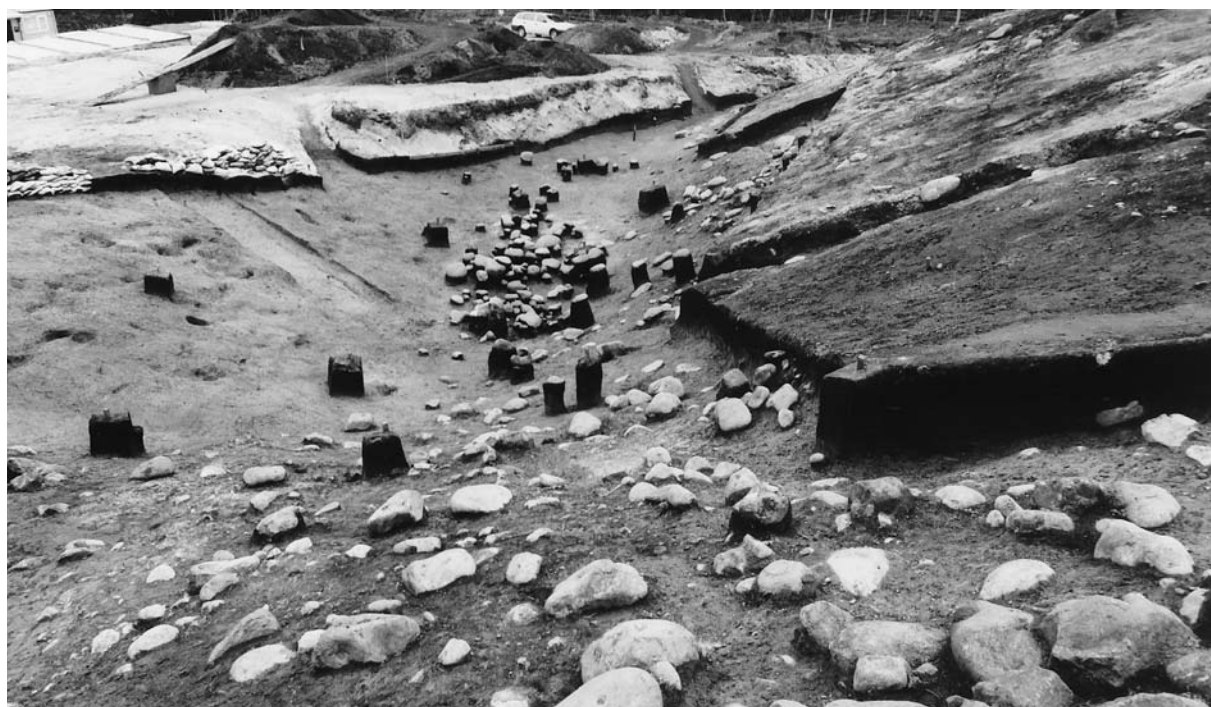
4 SP-188, 189, 190 セクション



5 2002年SP群完掘



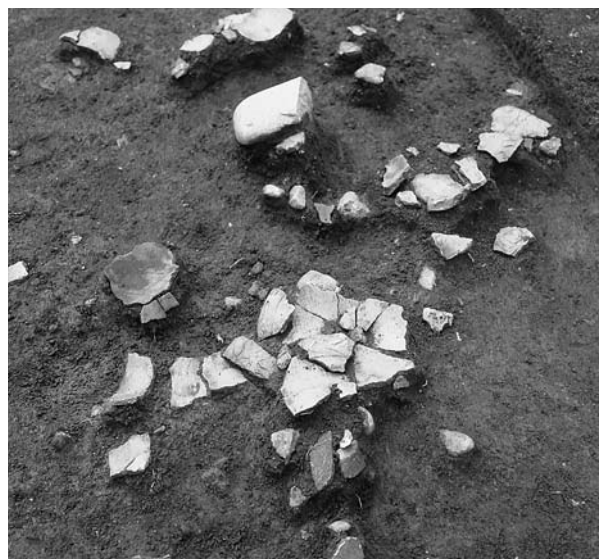
1 沢セクション



2 沢完掘



3 IV層遺物出土状況



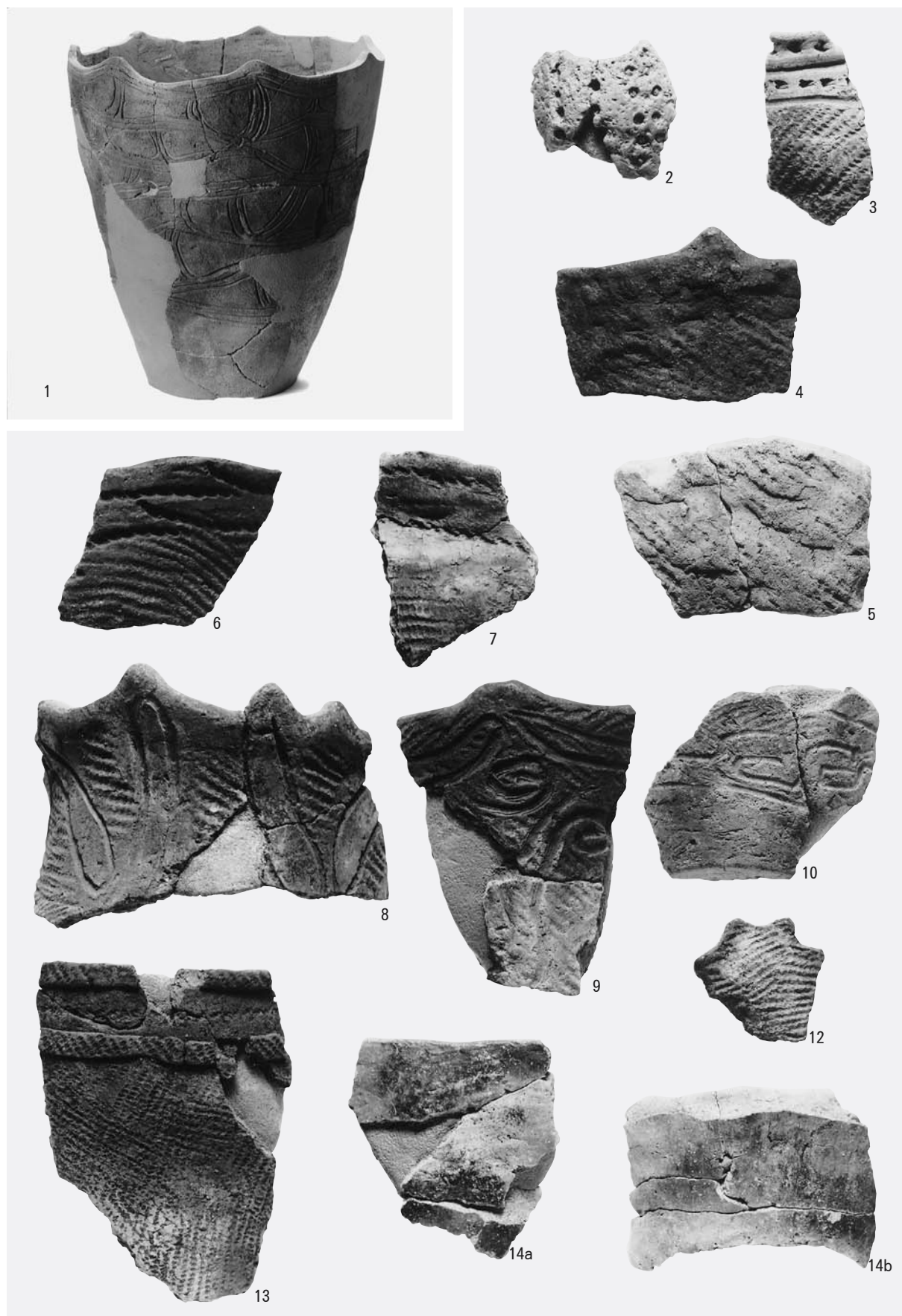
4 IV層遺物出土状況



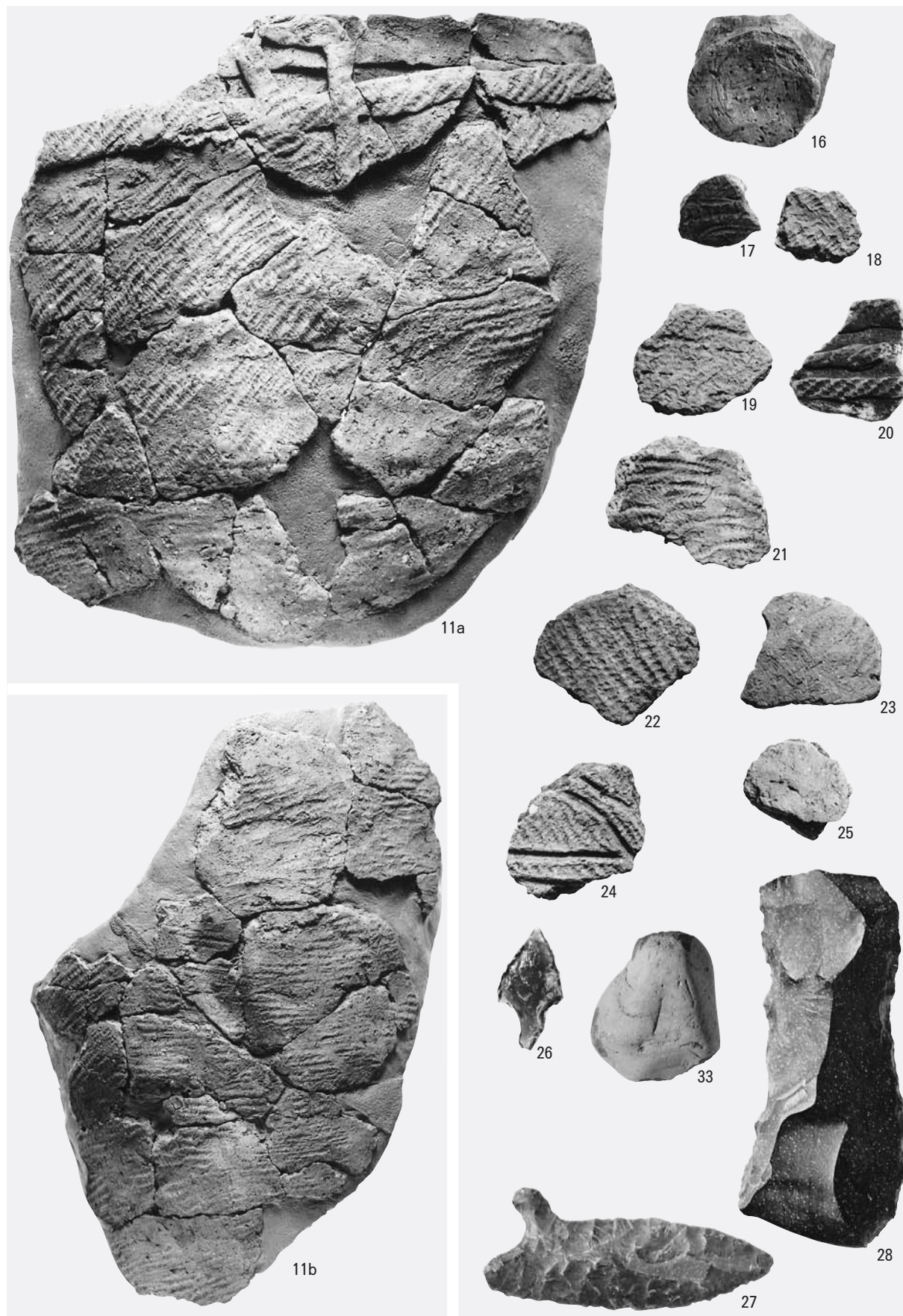
1 平成13年度A地区完掘



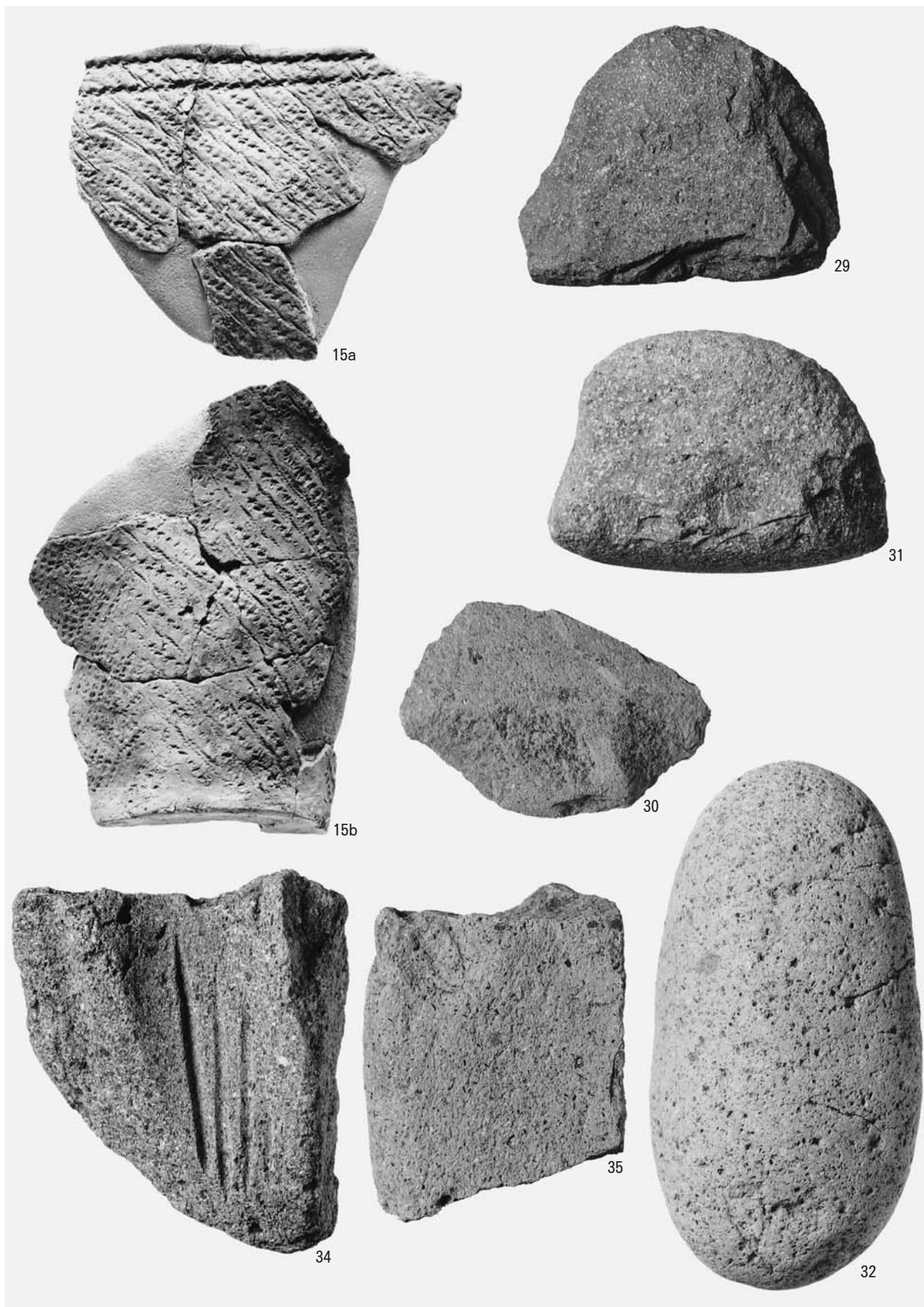
2 平成14年度A地区完掘



H-6 出土遺物 1~10, 12~14



H-6 出土遺物11, 16~28, 33

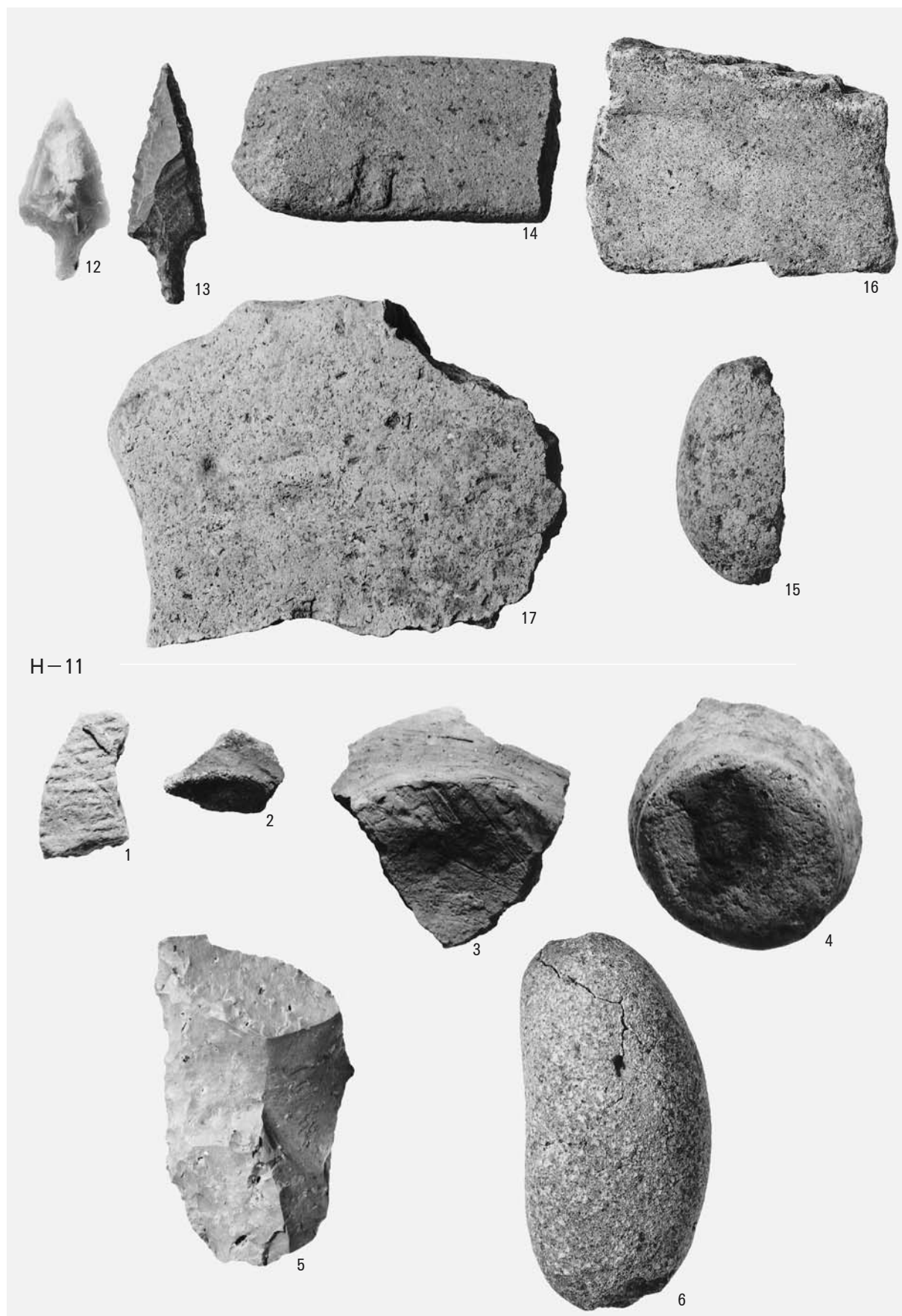


H-6 出土遺物15、29~32、34、35

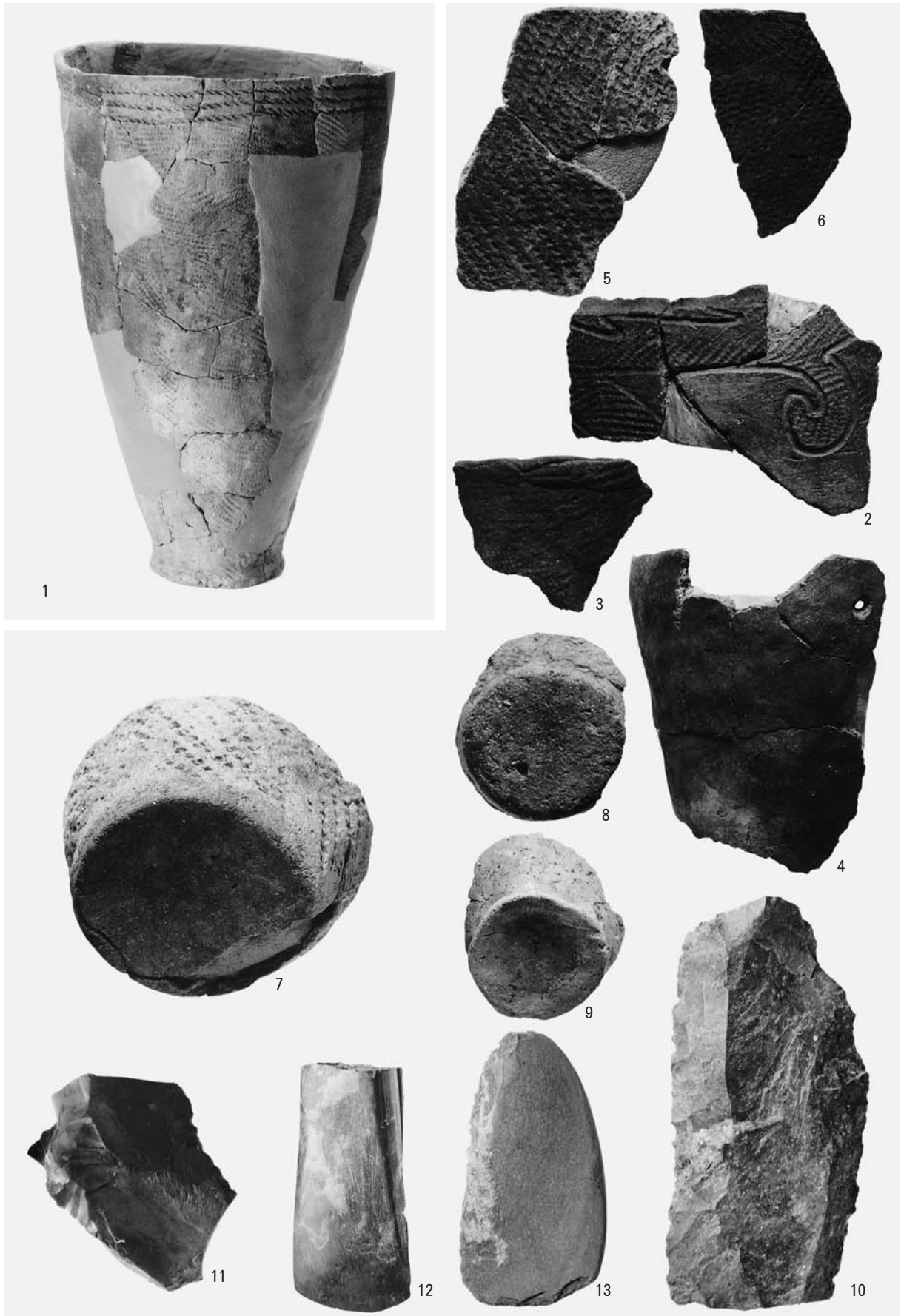




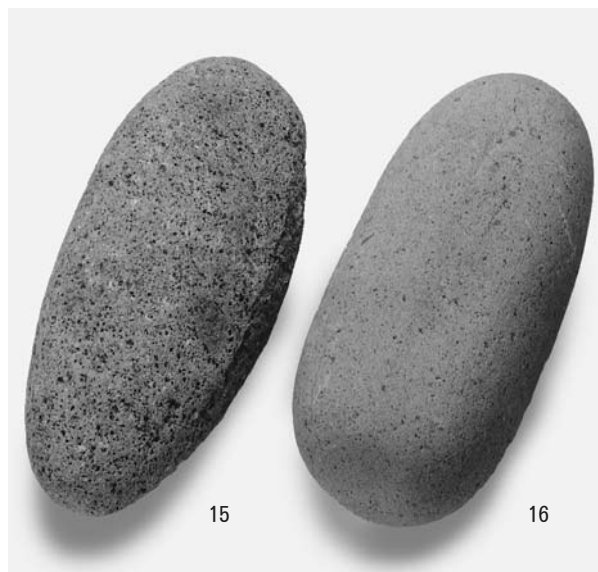
H-7 出土遺物 1~11



H-7 出土遺物12~17 H-11出土遺物1~6



H-12出土遺物 1 ~ 13



H-12出土遺物14~19 H-15出土遺物1,2

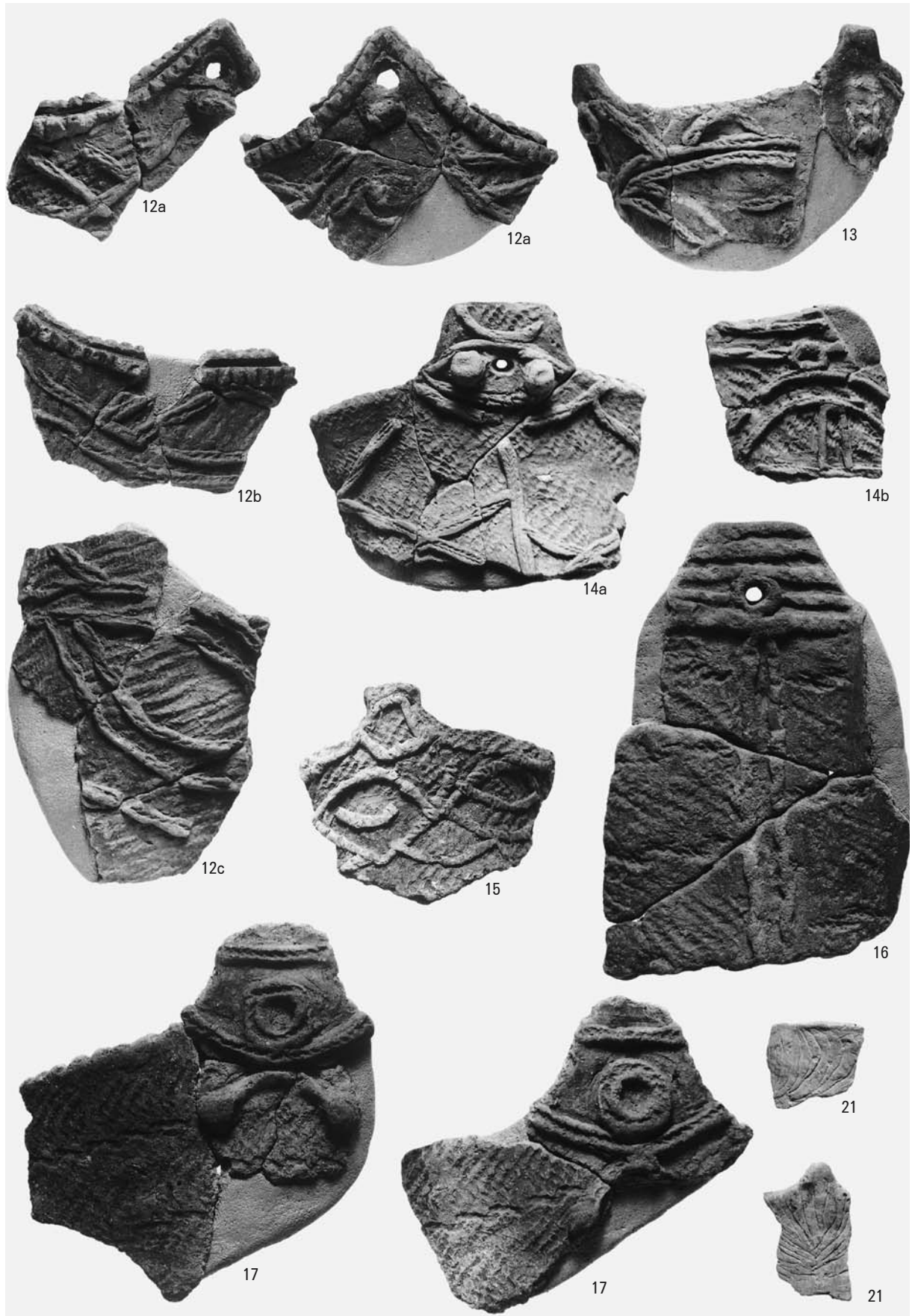
图版40



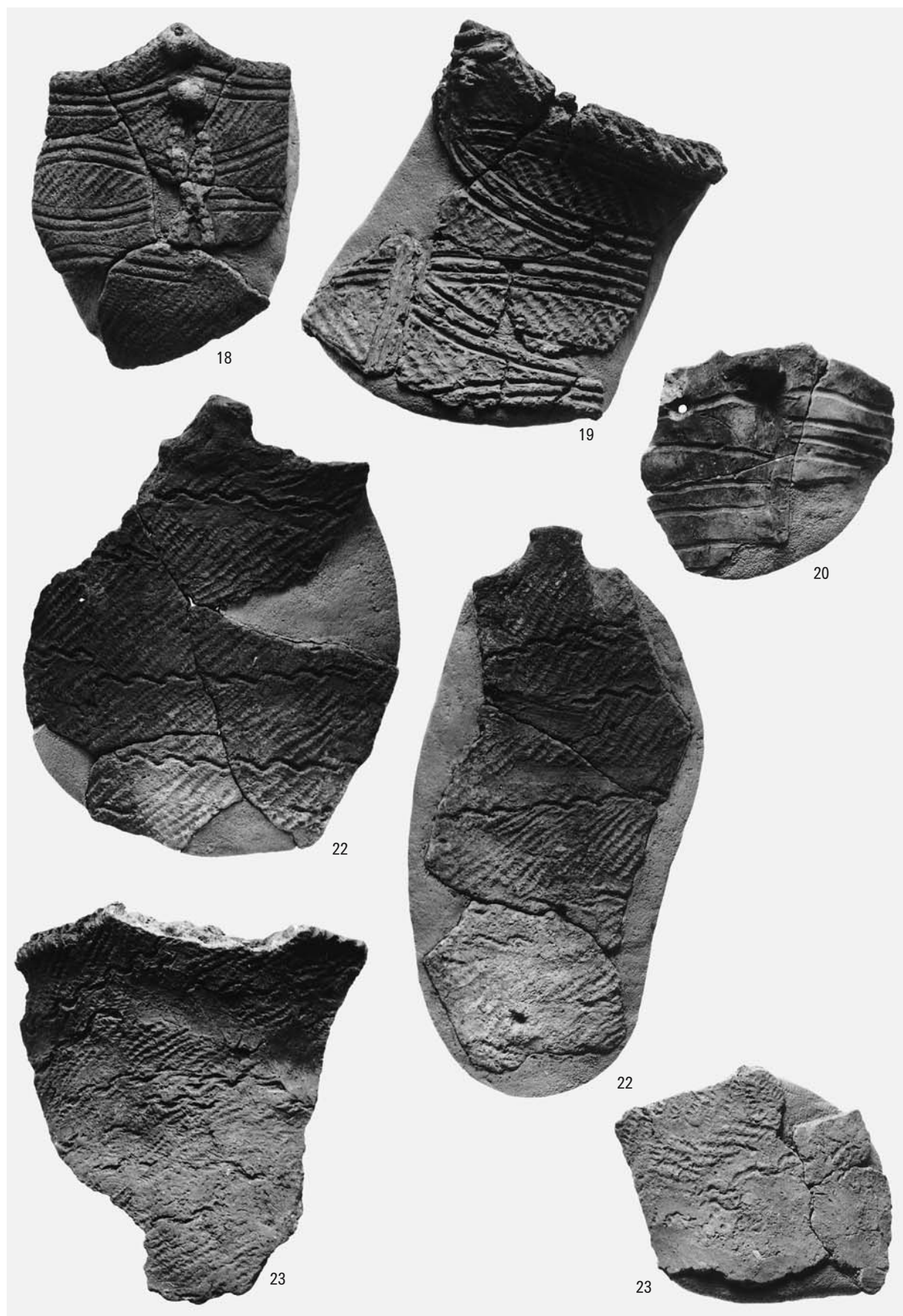
H-15出土遺物 3 ~ 7



H-15出土遺物 8~11

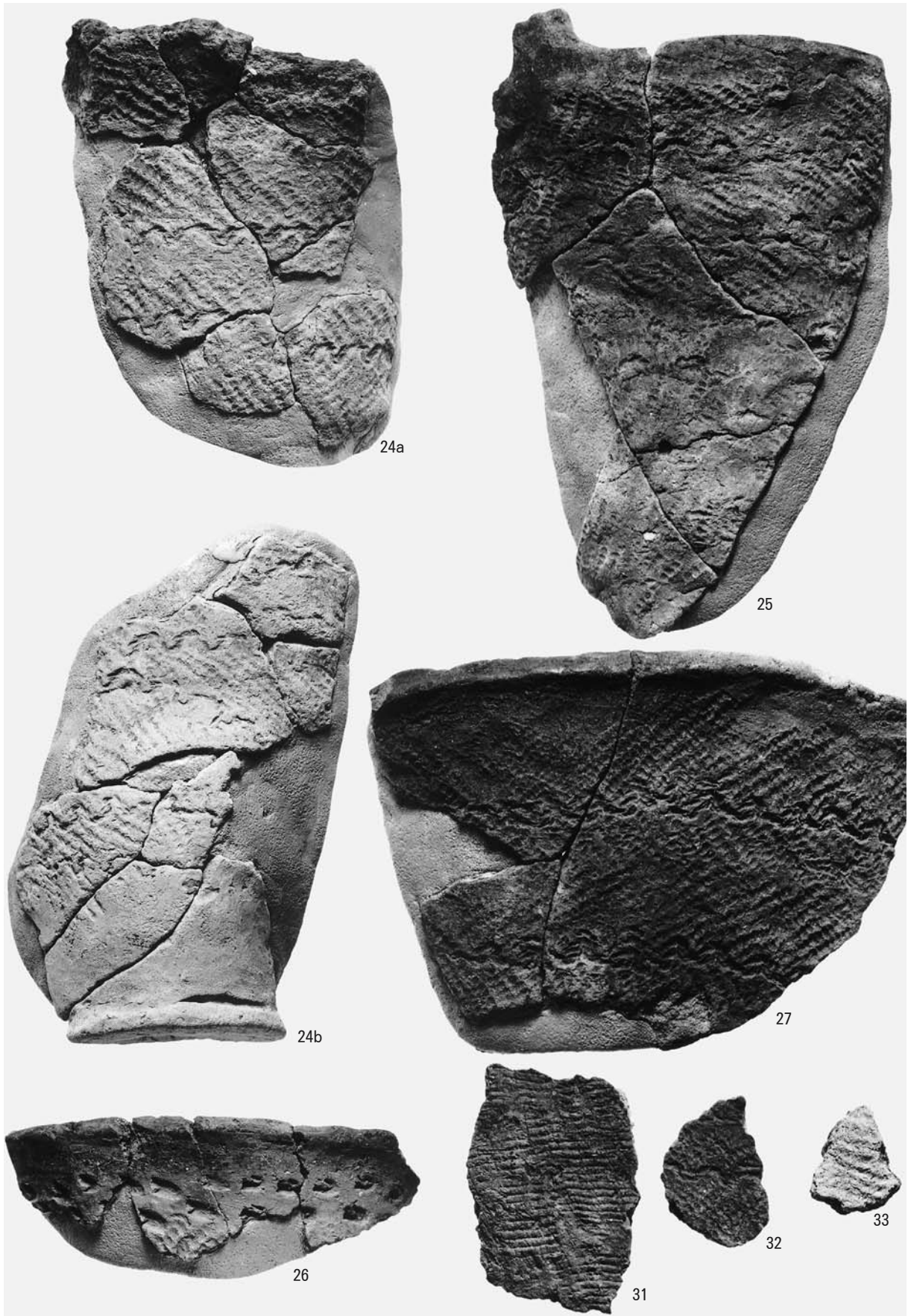


H-15出土遺物12~17, 21

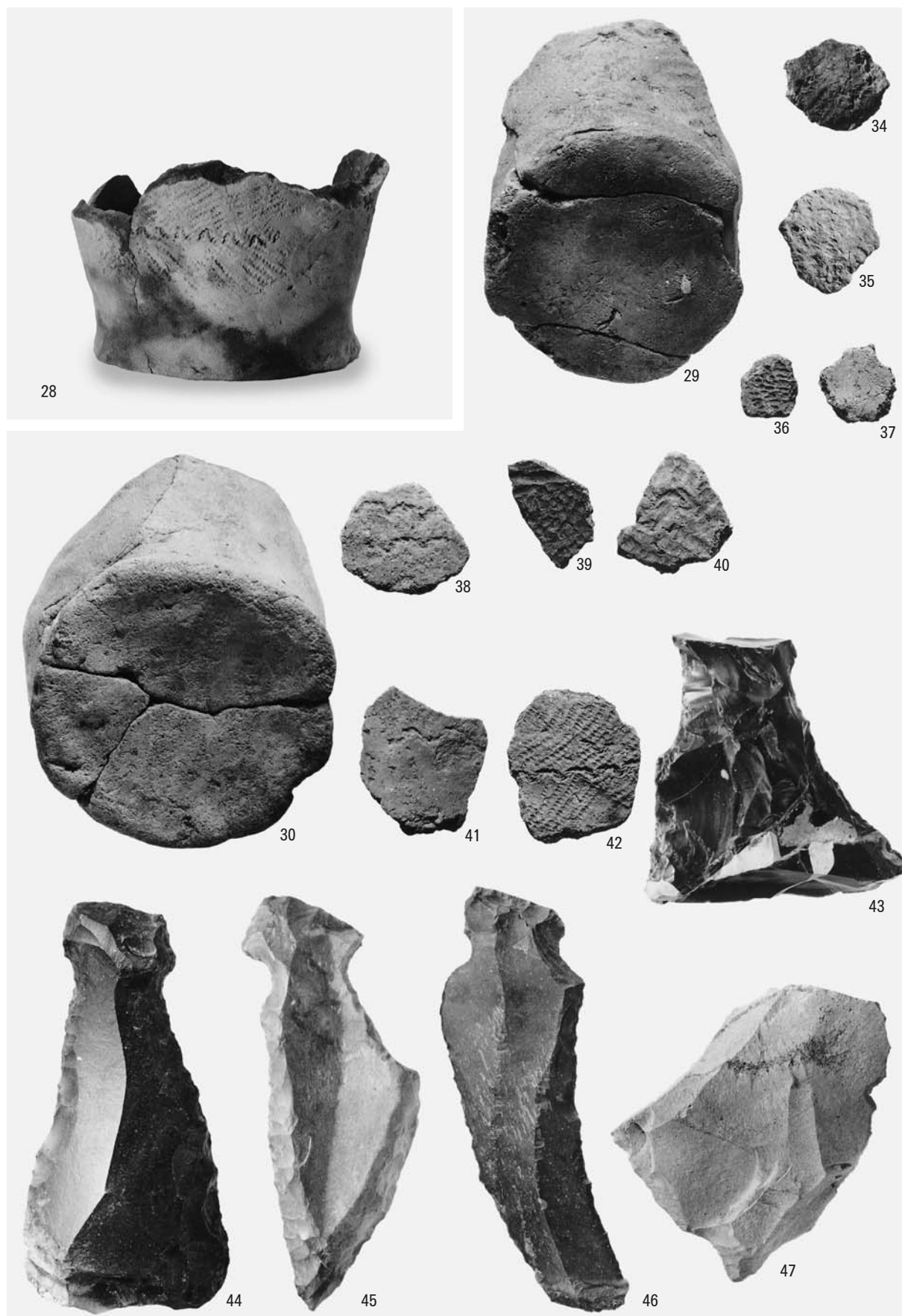


H-15出土遺物18~20, 22, 23

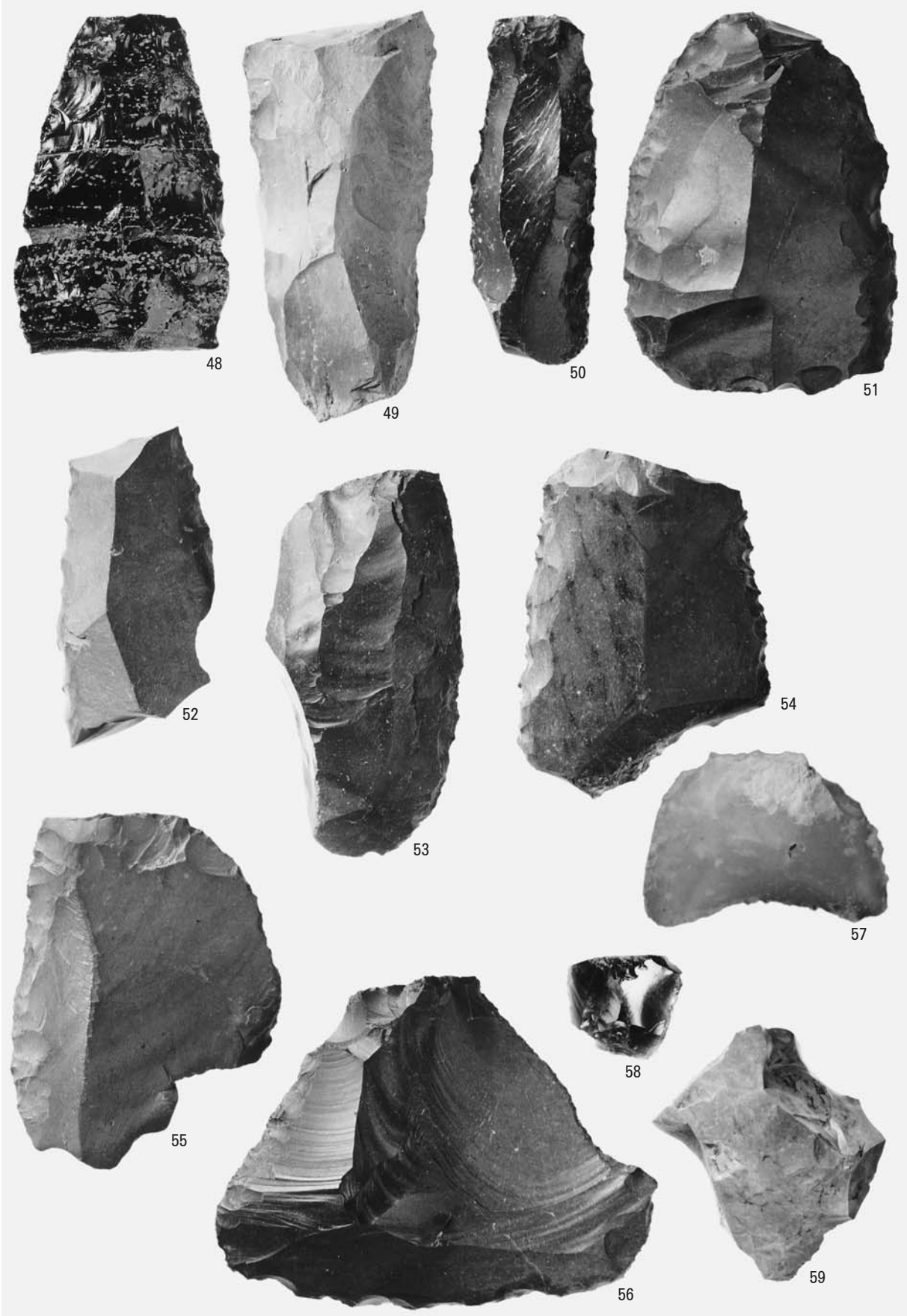




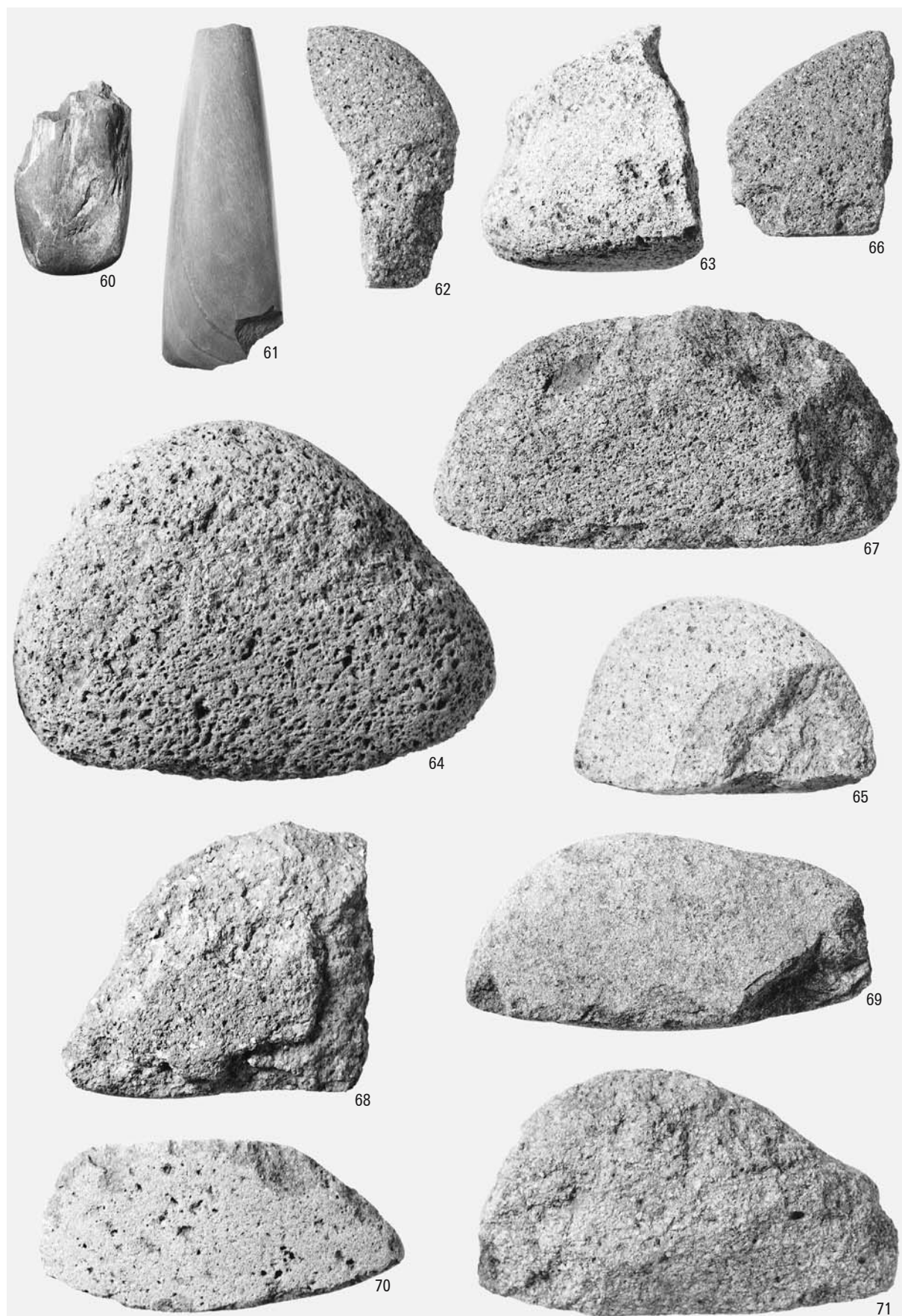
H-15出土遺物24~27, 31~33



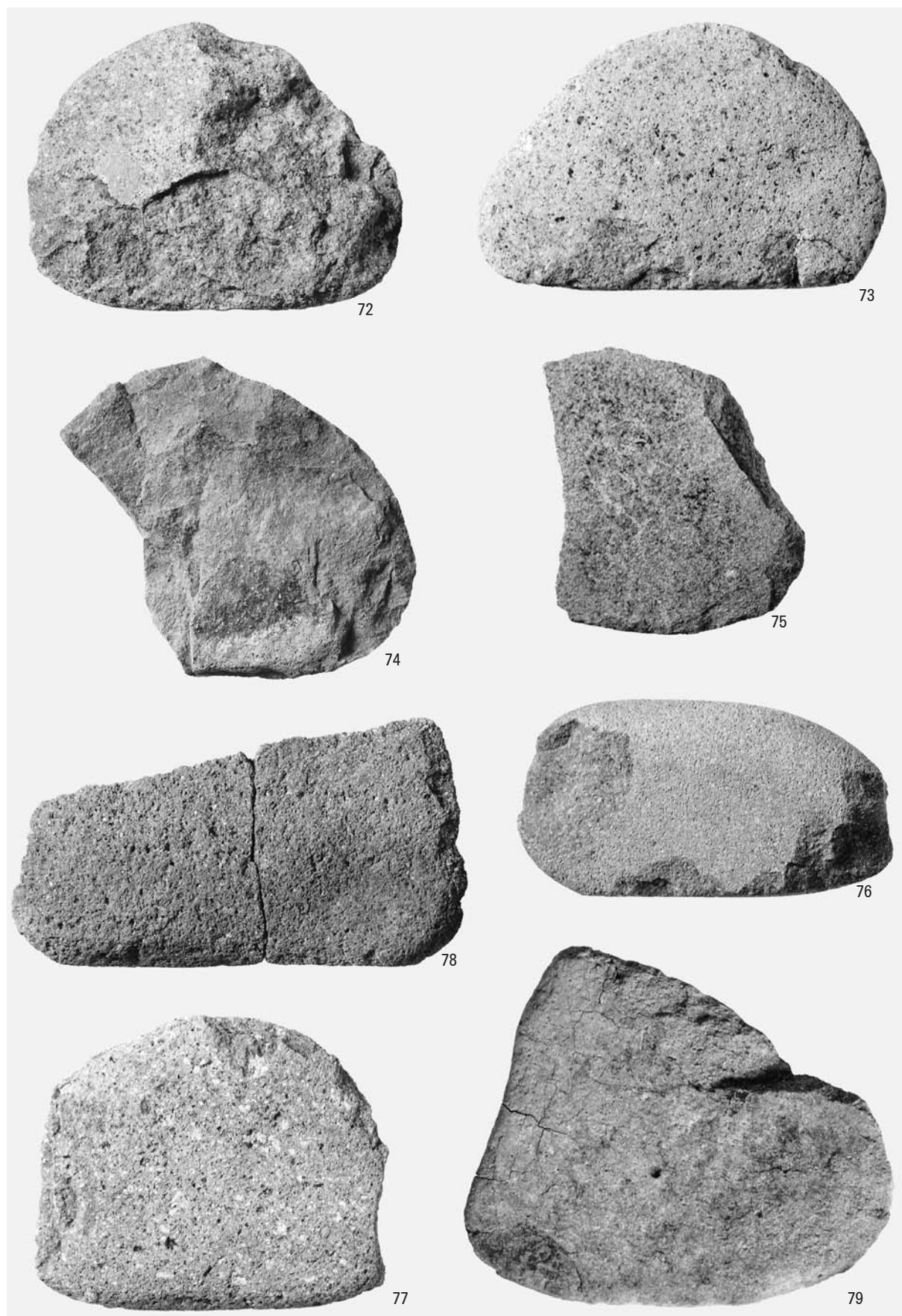
H-15出土遺物28~30, 34~47



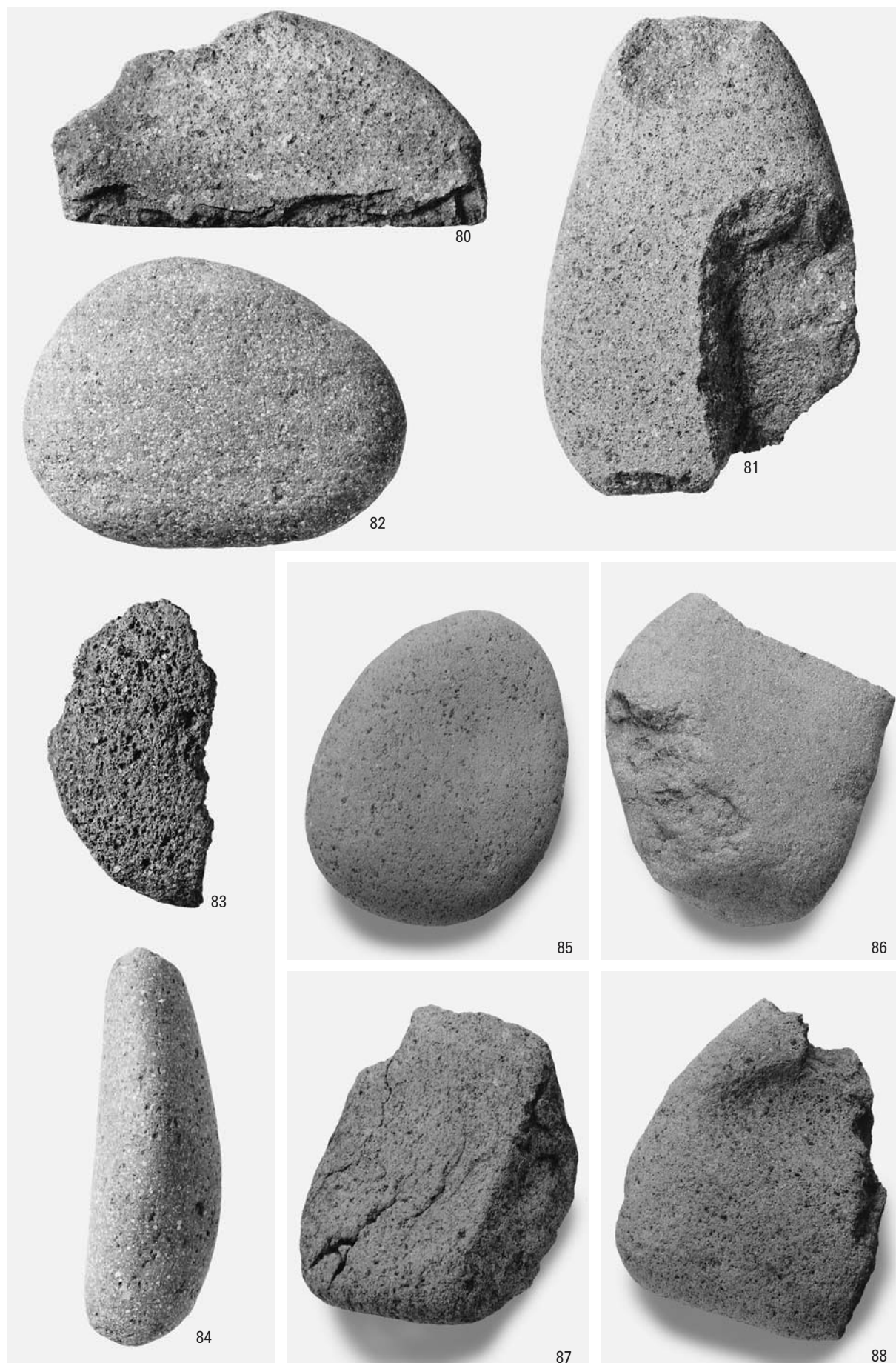
H-15出土遺物48~59



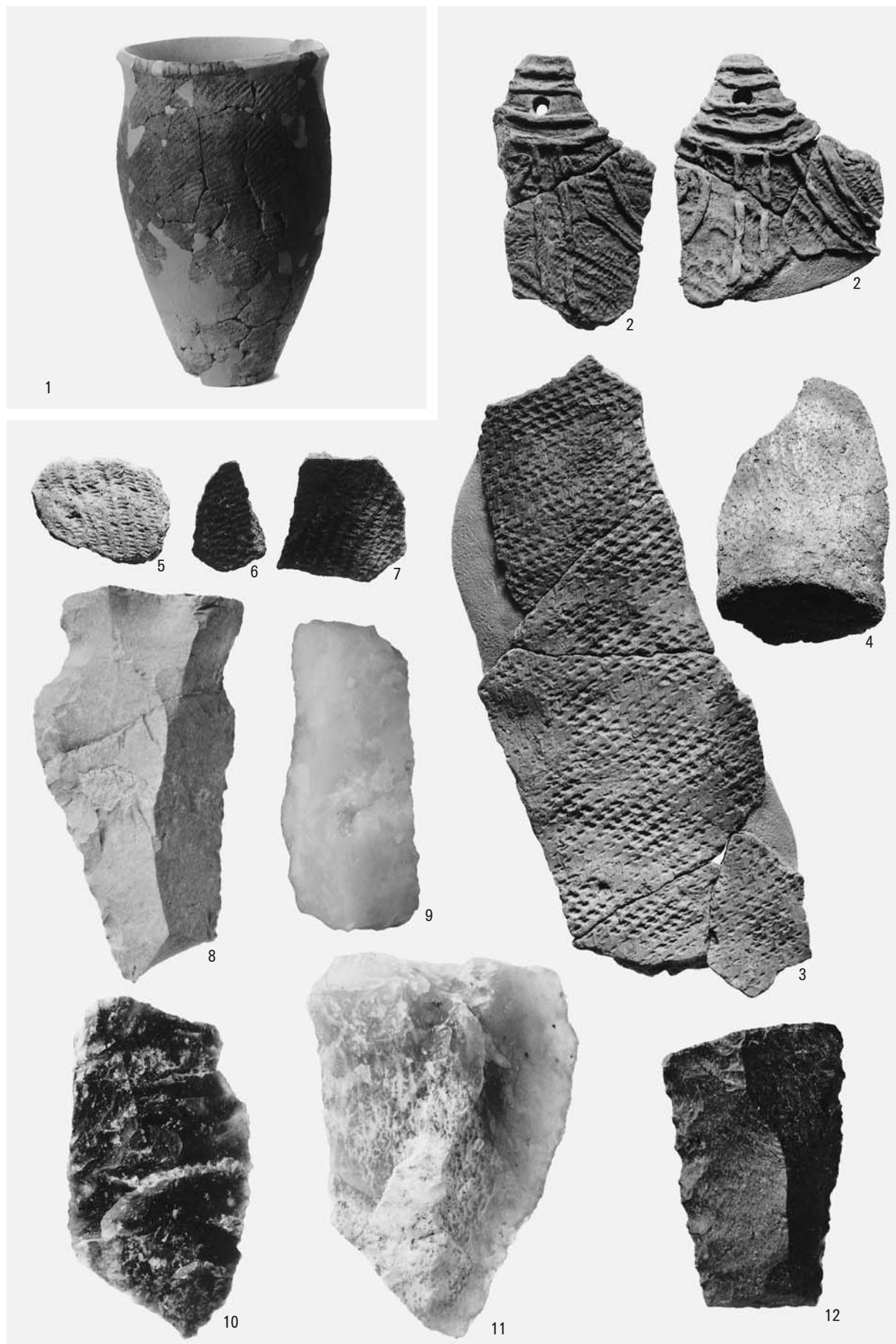
H-15出土遺物60~71



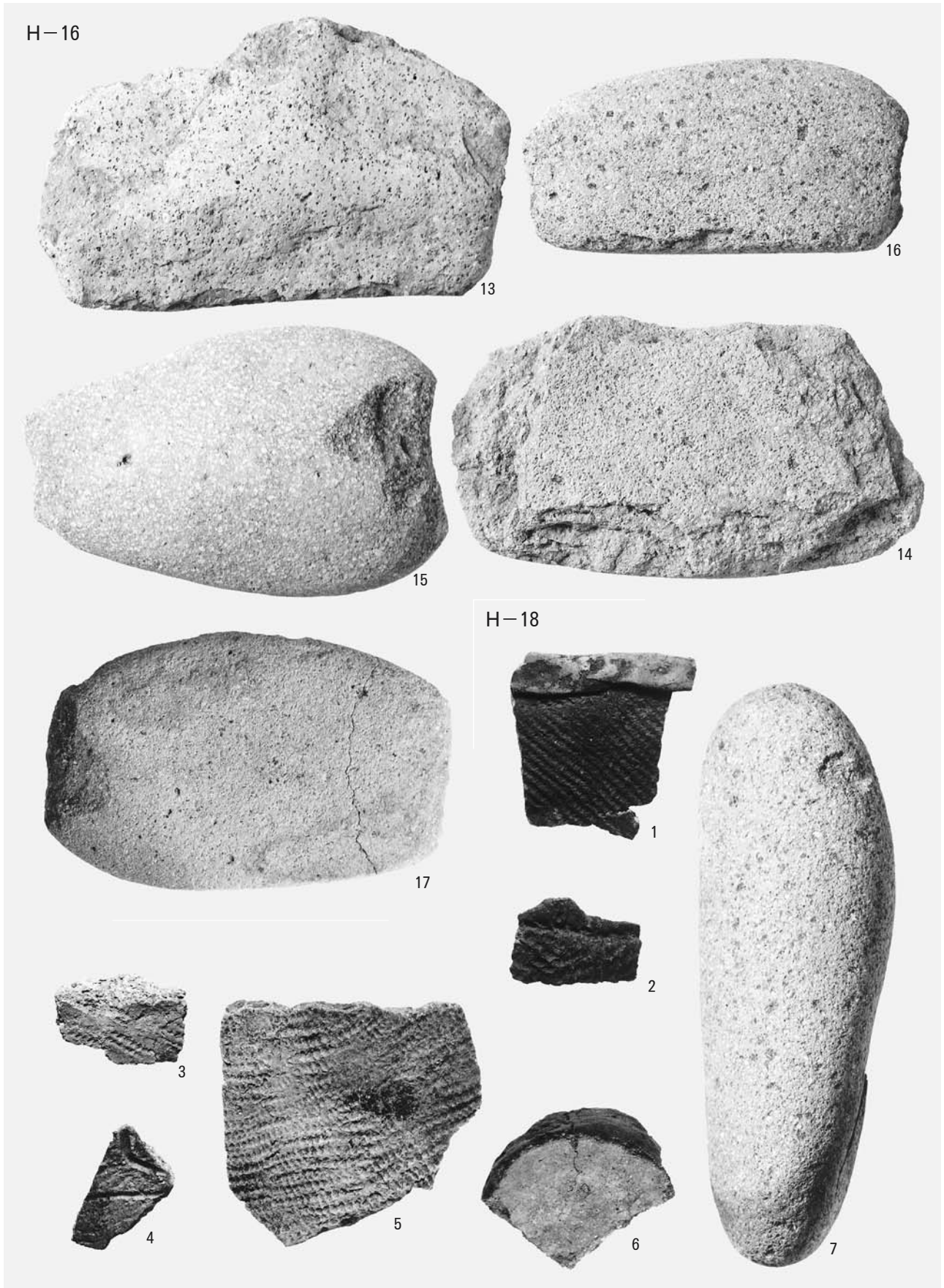
H-15出土遺物72~79



H-15出土遺物80~88



H-16出土遺物 1~12



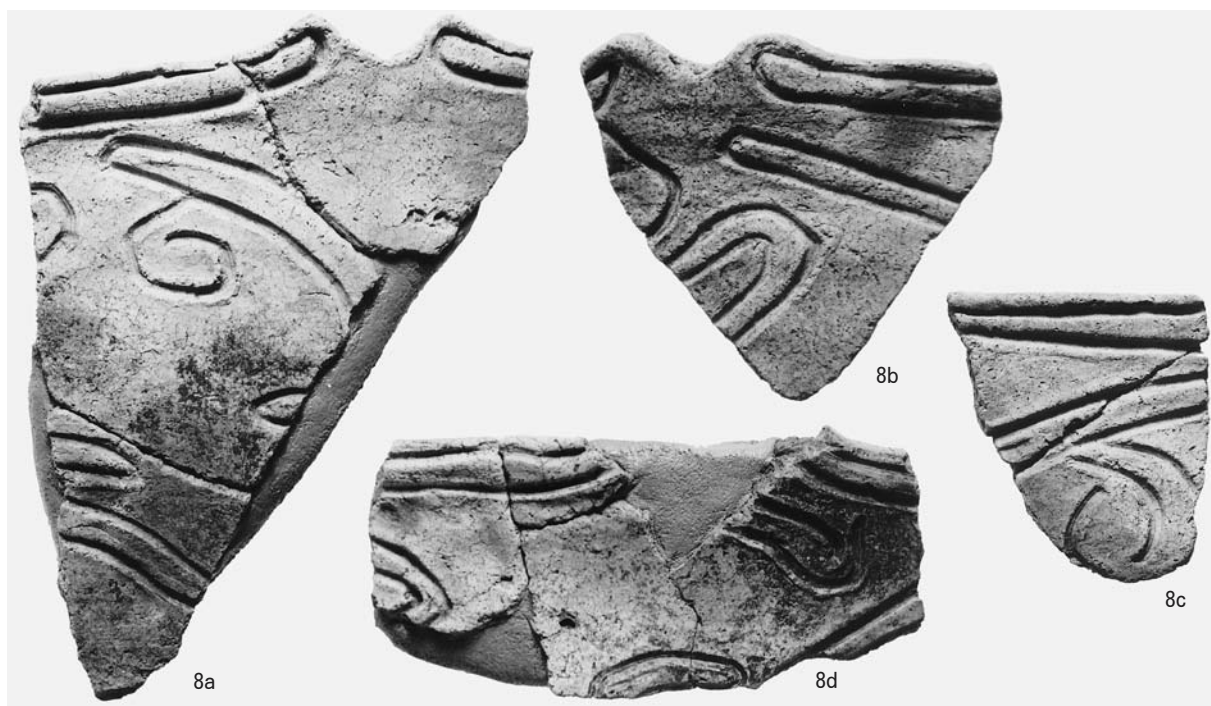
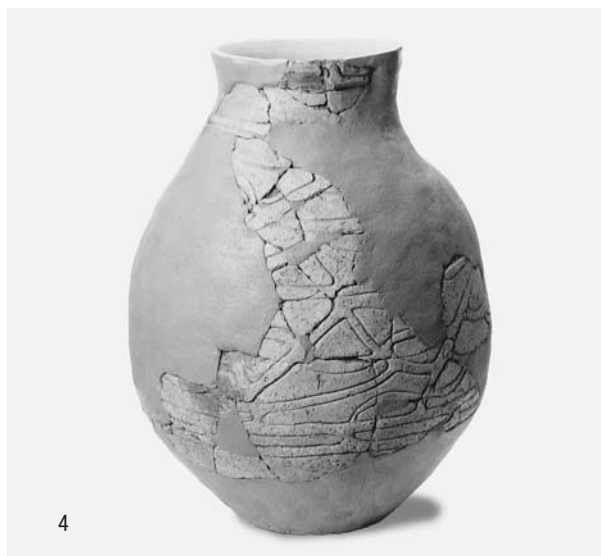
H-16出土遺物13~17 H-18出土遺物1~7



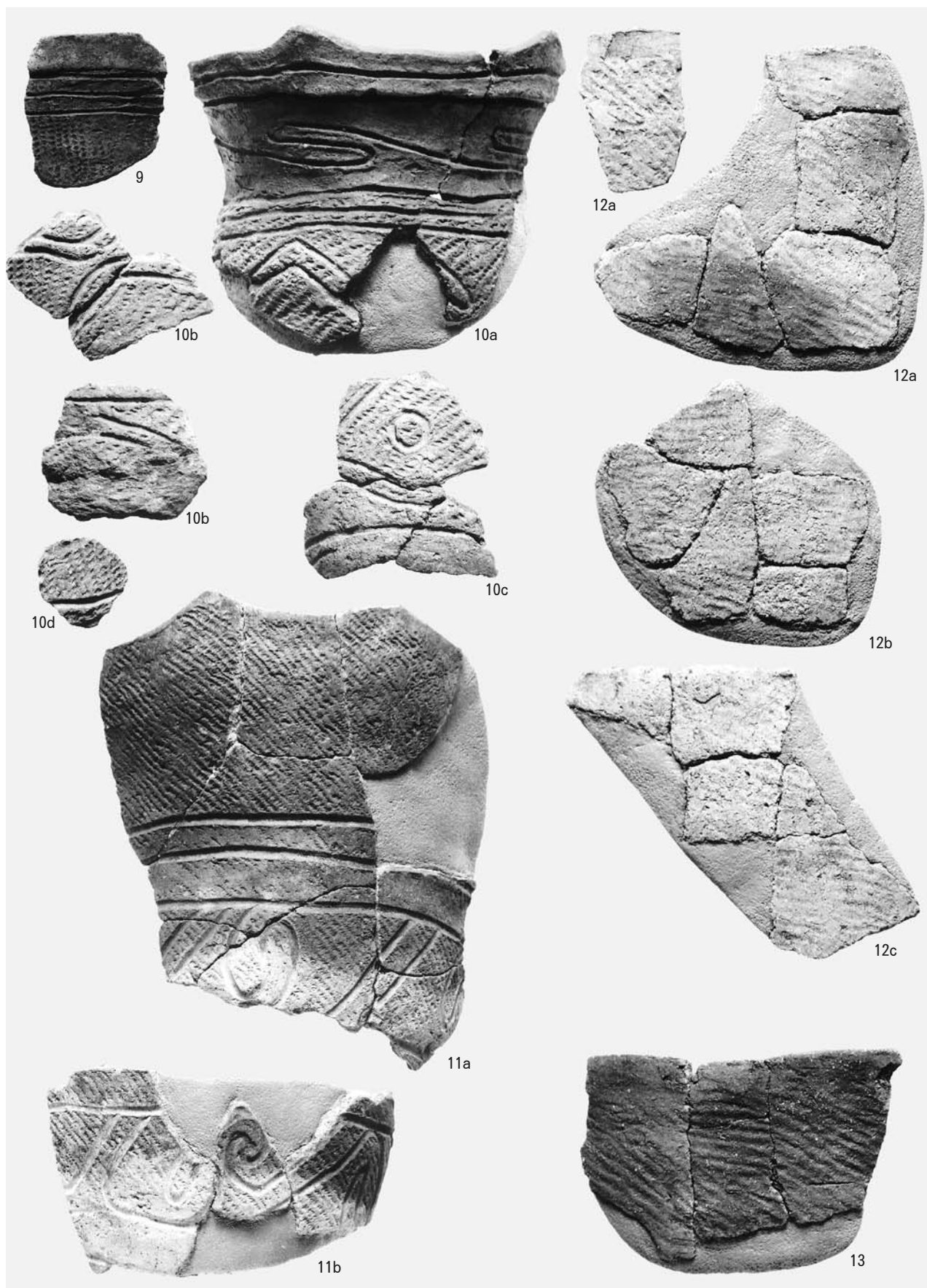
图版52



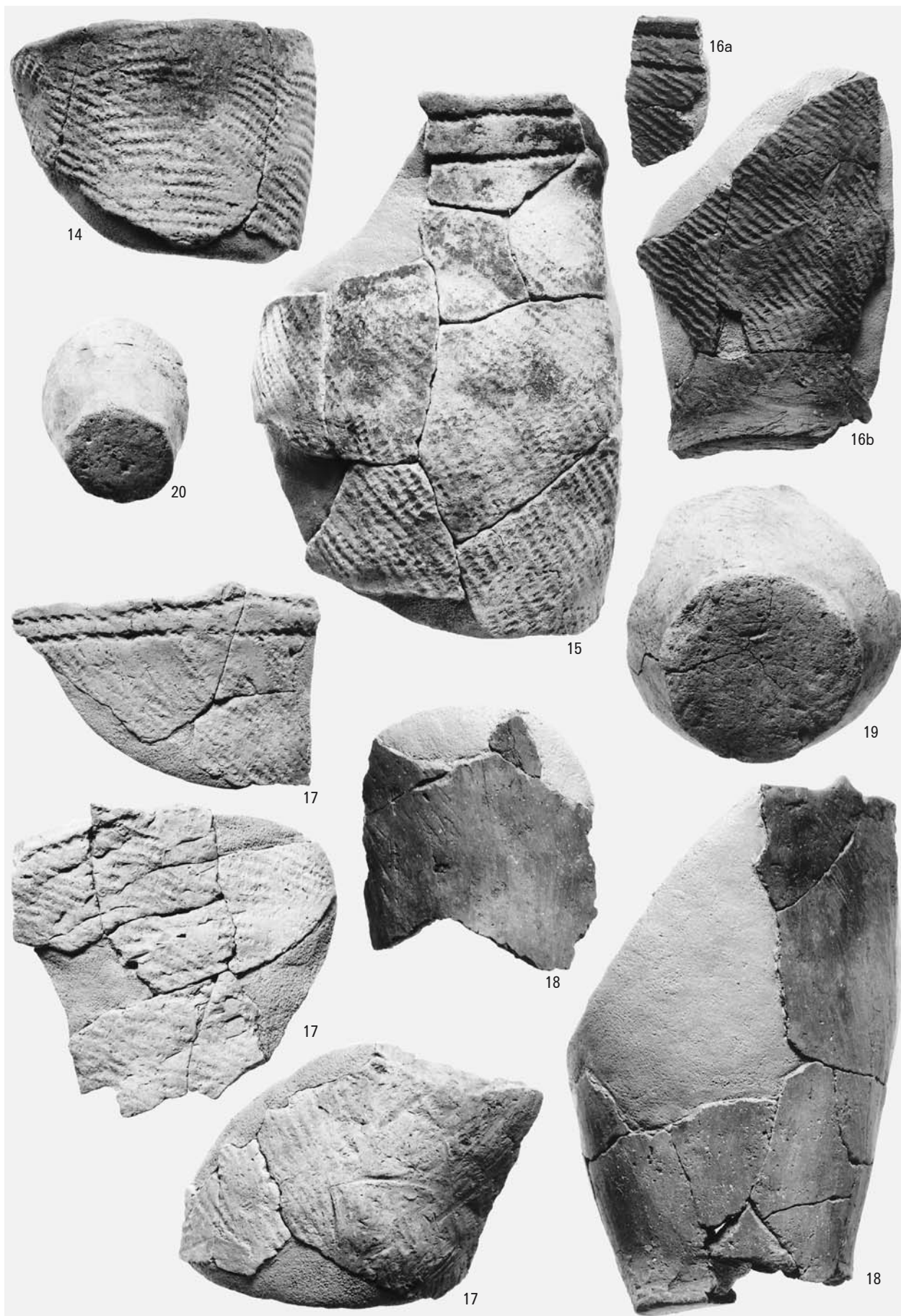
H-18出土遺物8,9 H-20出土遺物1~3



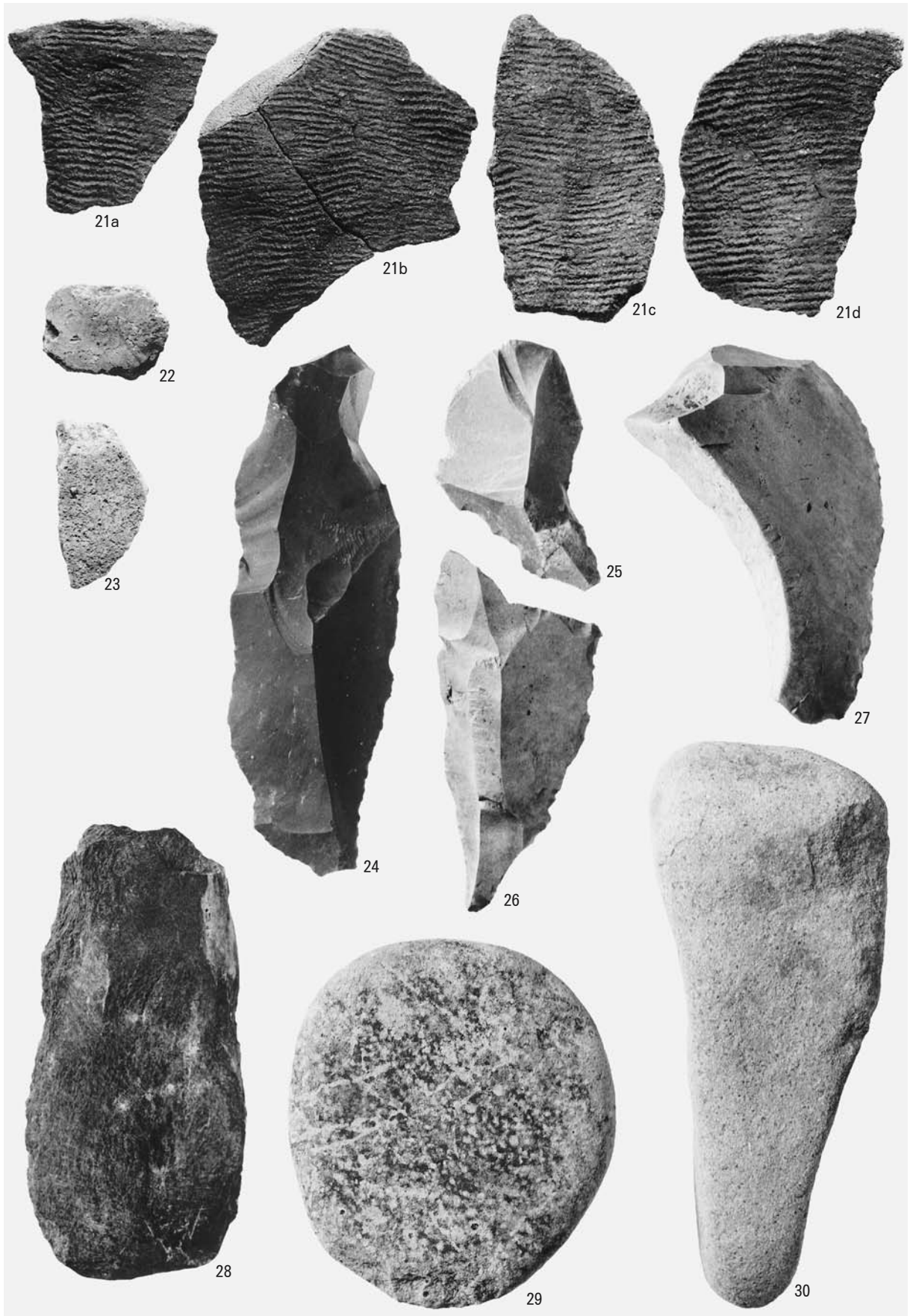
H-20出土遺物 4 ~ 8



H-20出土遺物 9~13



H-20出土遺物14~20

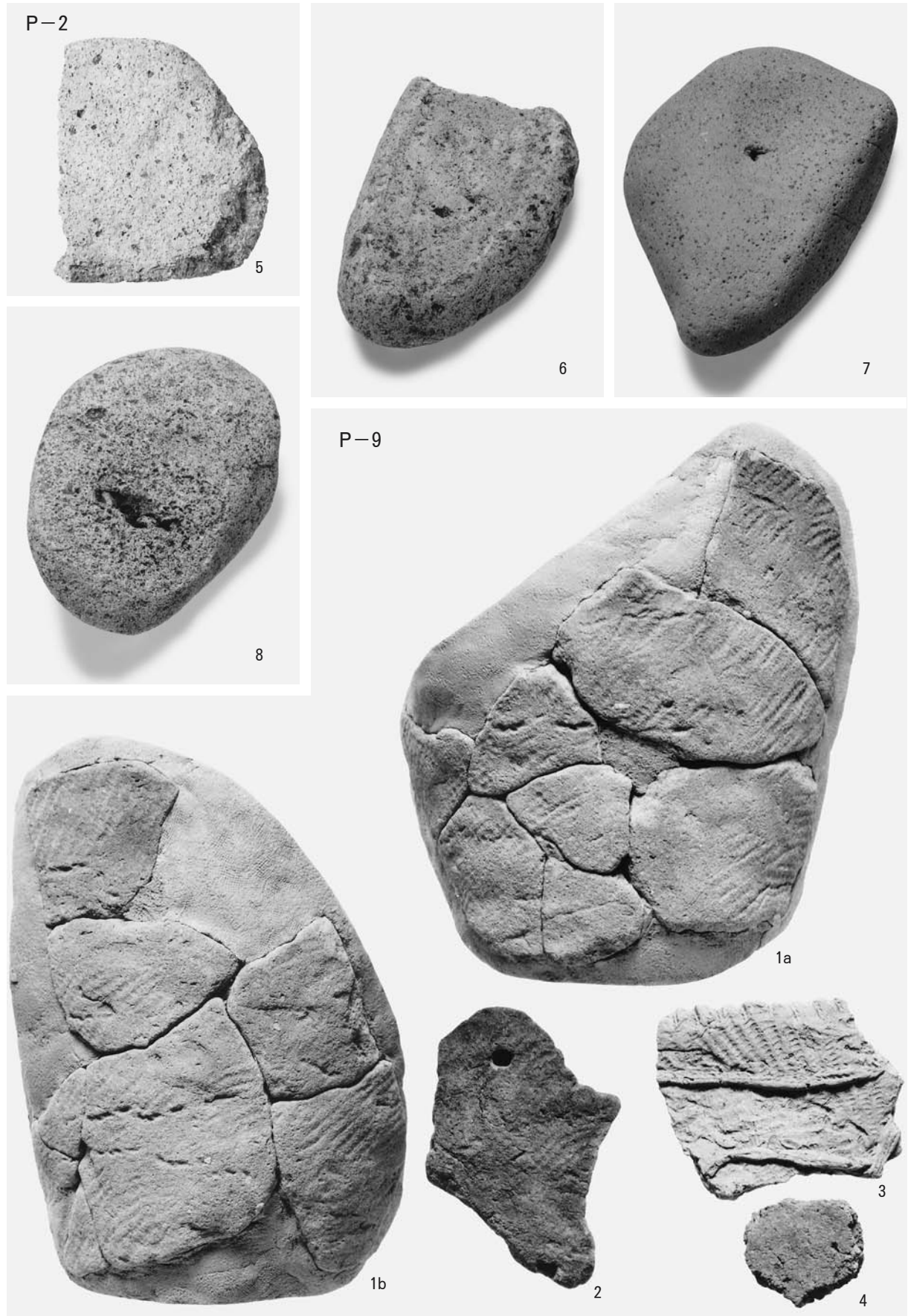


H-20出土遺物21~30

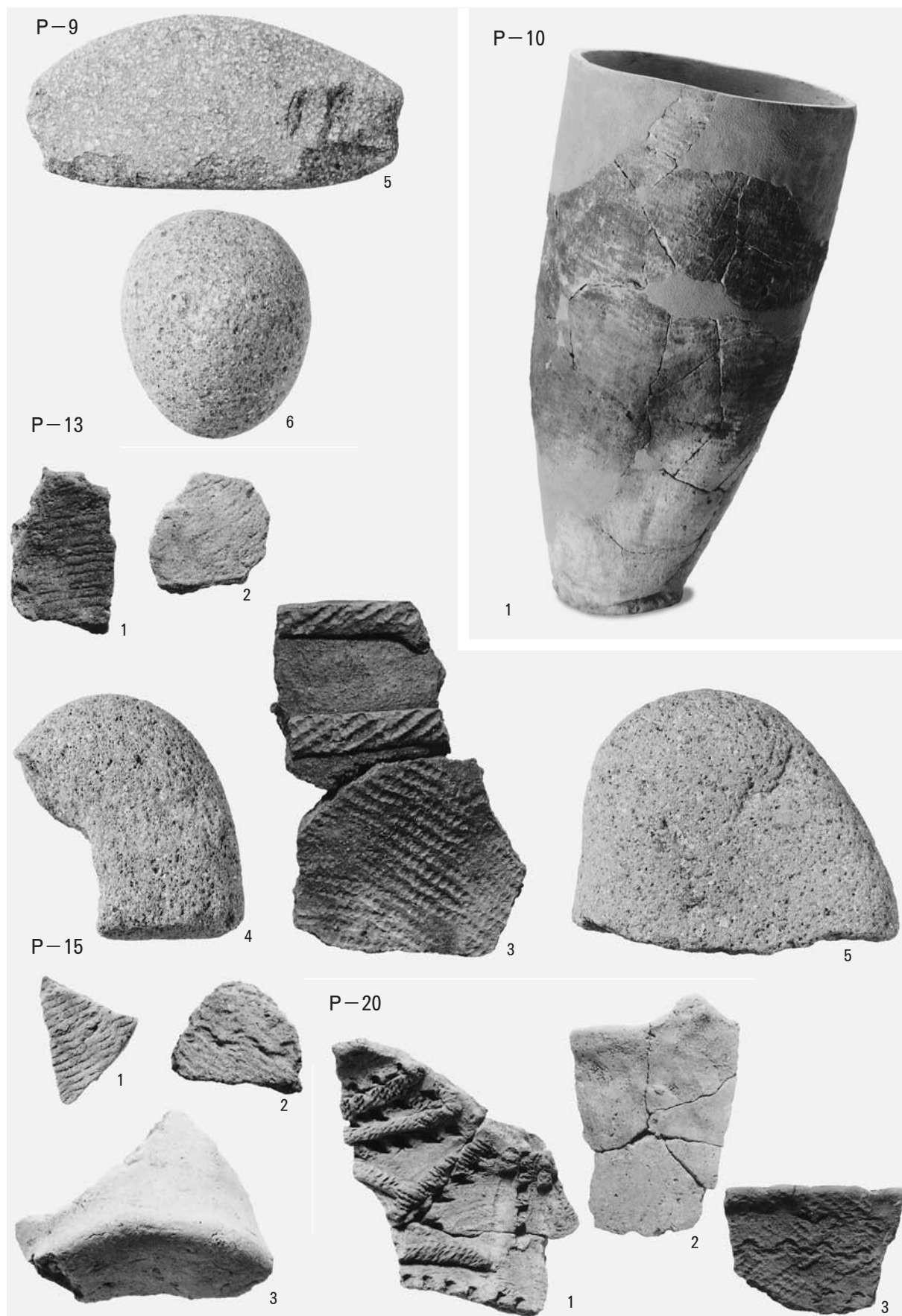


H-20出土遺物31, 32 P-2出土遺物1~4

図版58



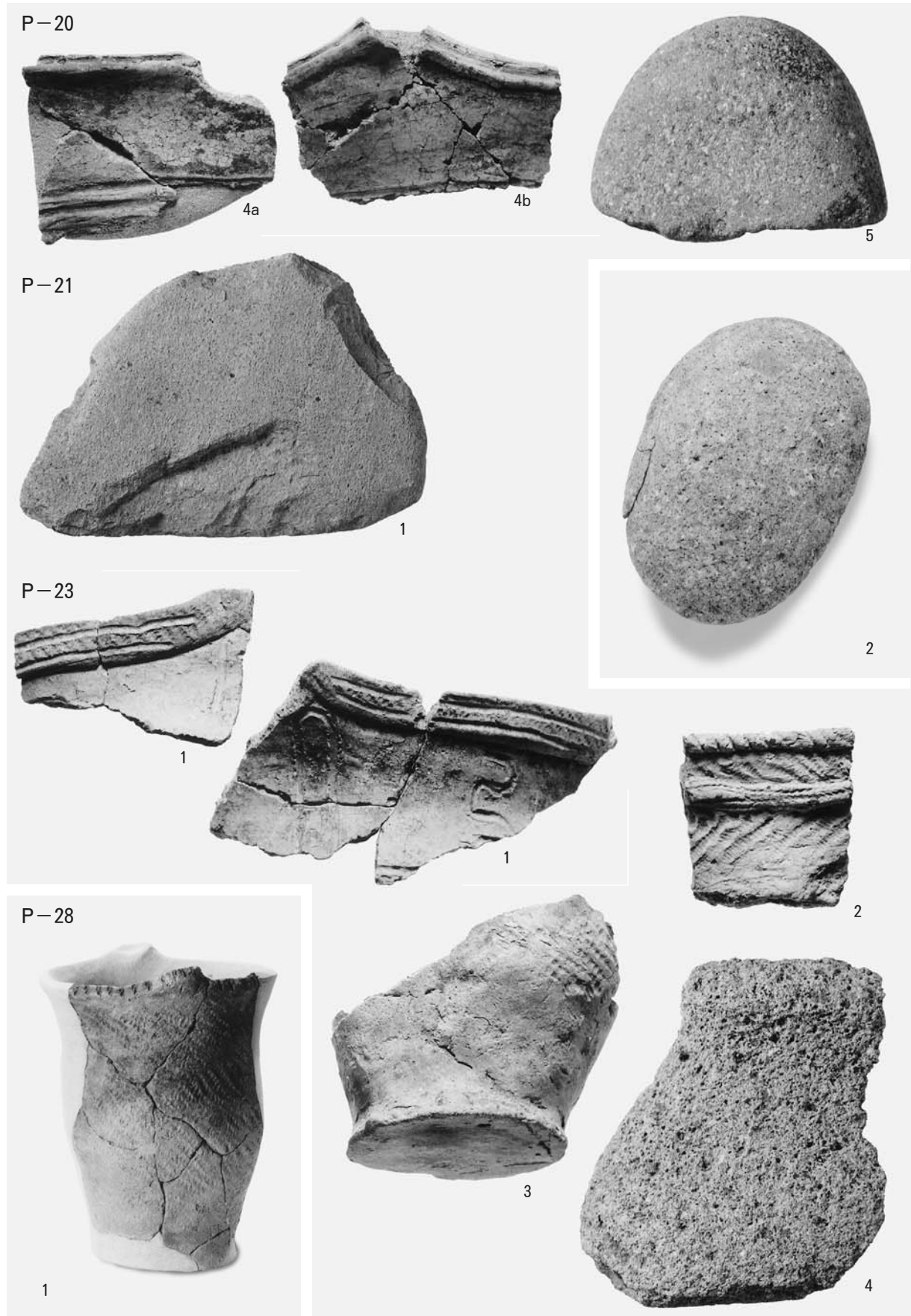
P-2 出土遺物 5 ~ 8    P-9 出土遺物 1 ~ 4



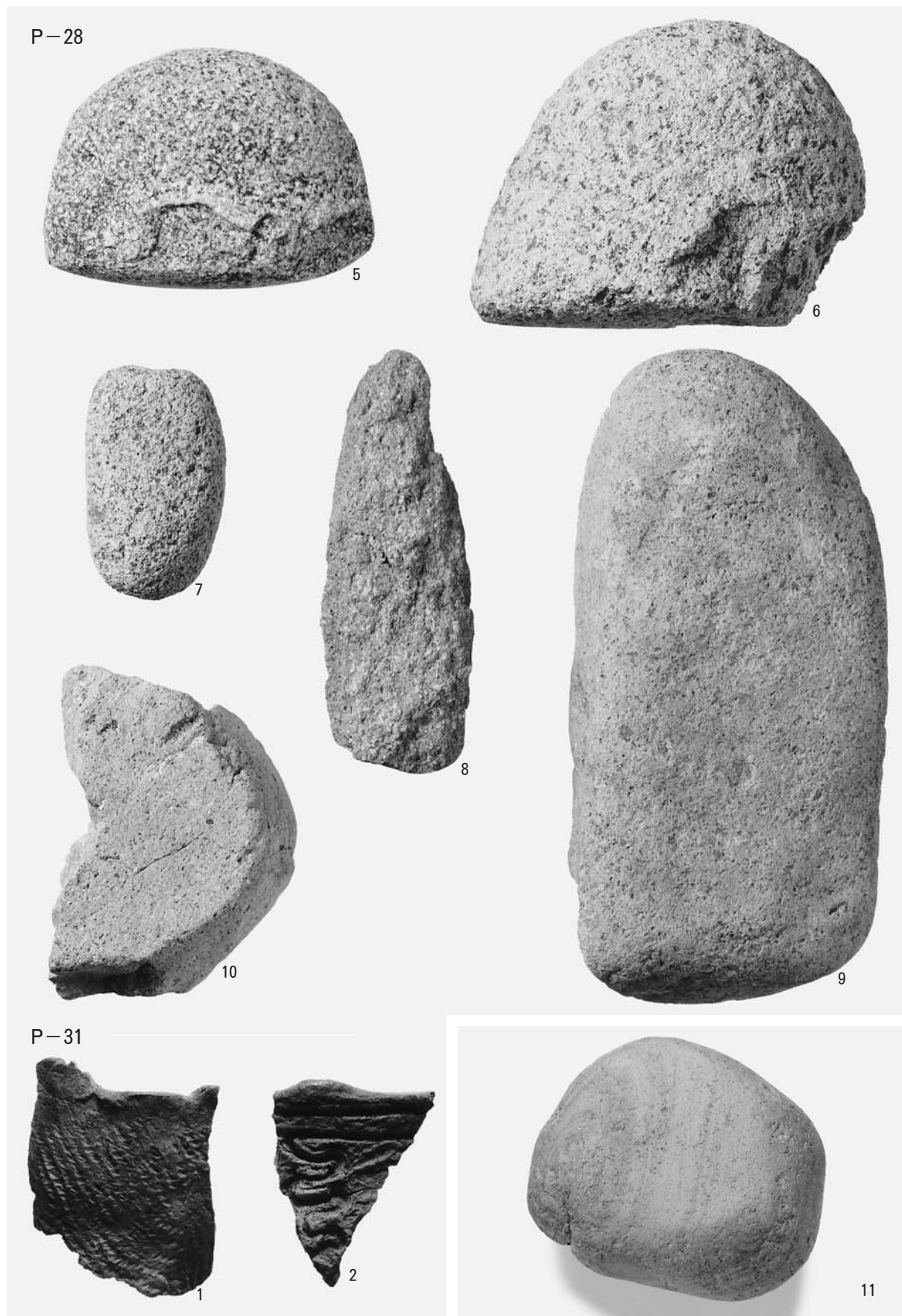
P-9 出土遺物5,6 P-10出土遺物1 P-13出土遺物1~5 P-15出土遺物1~3 P-20出土遺物1~3



图版60

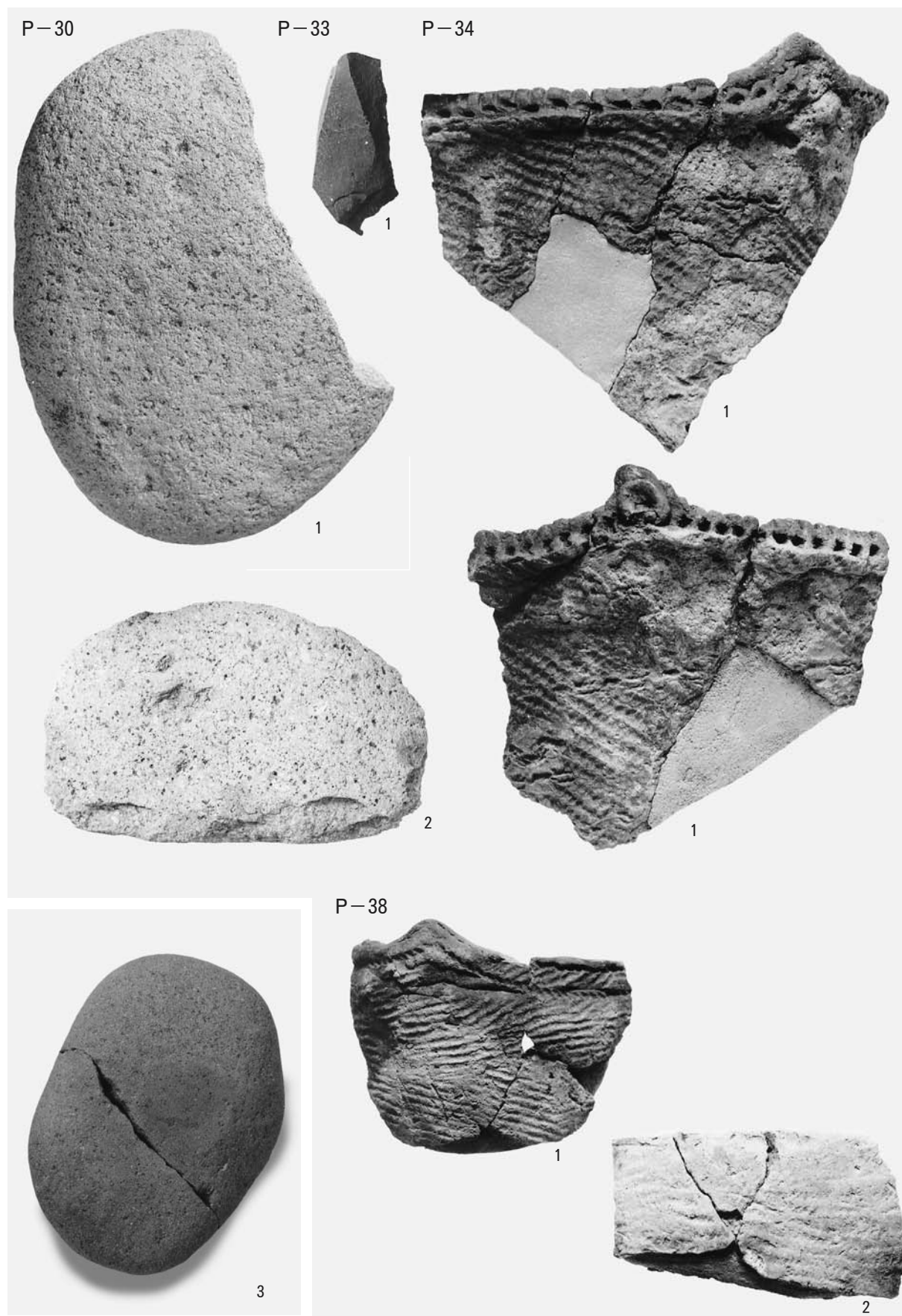


P-20出土遺物4, 5 P-21出土遺物1 P-23出土遺物1, 2 P-28出土遺物1~4

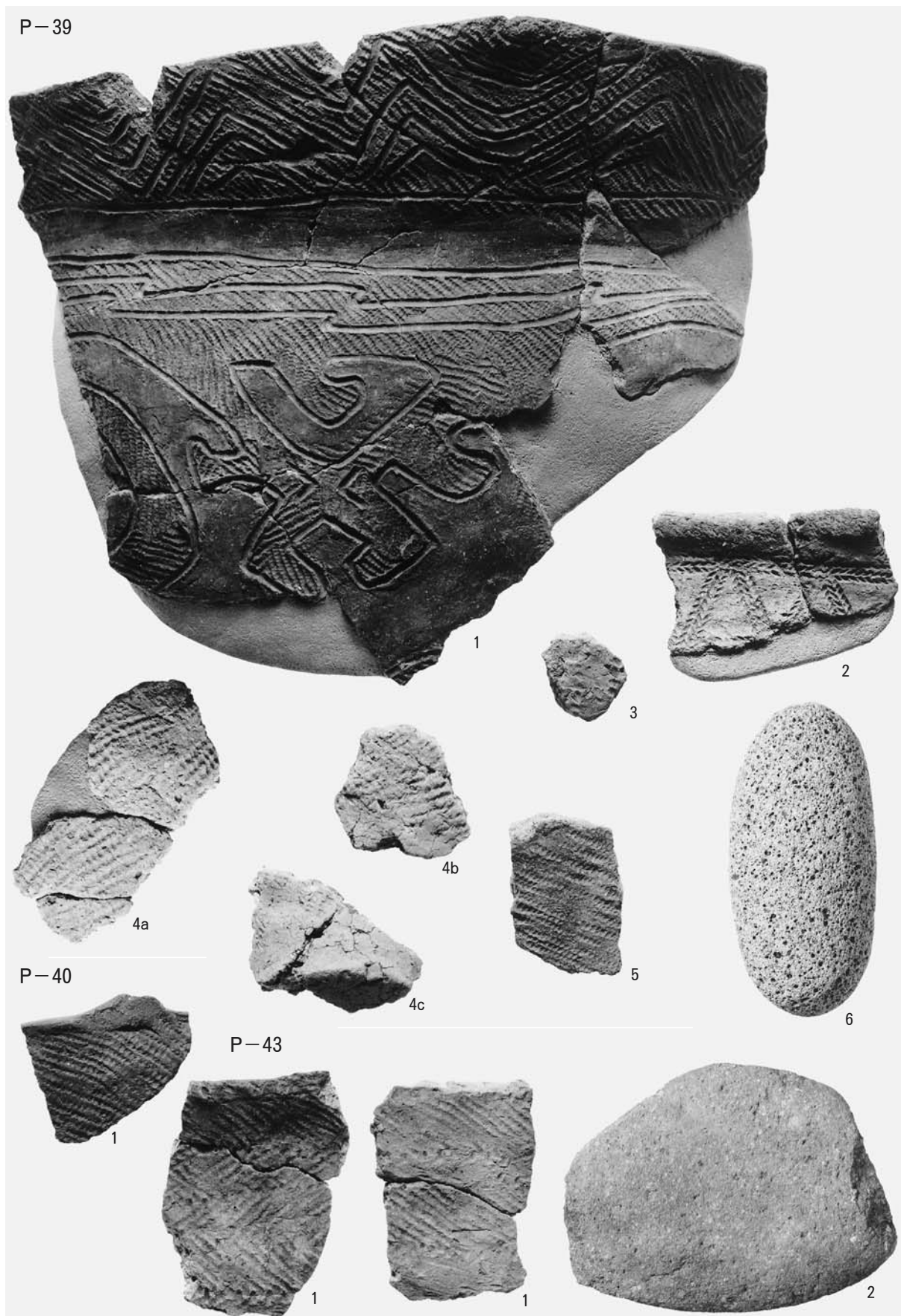


P-28出土遺物 5~11 P-31出土遺物1,2

图版62

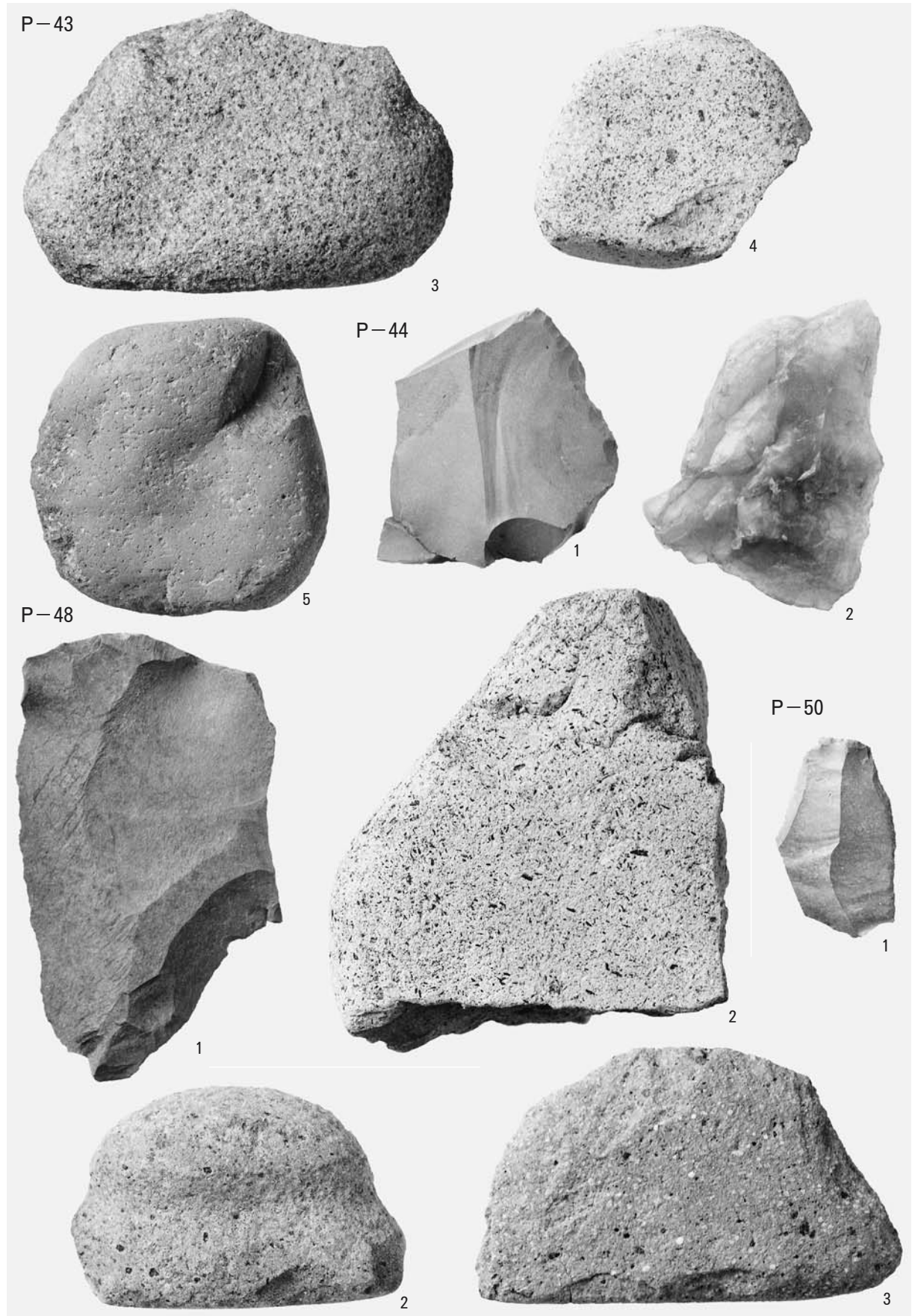


P-30出土遺物 1 P-33出土遺物 1 P-34出土遺物 1~3 P-38出土遺物 1, 2

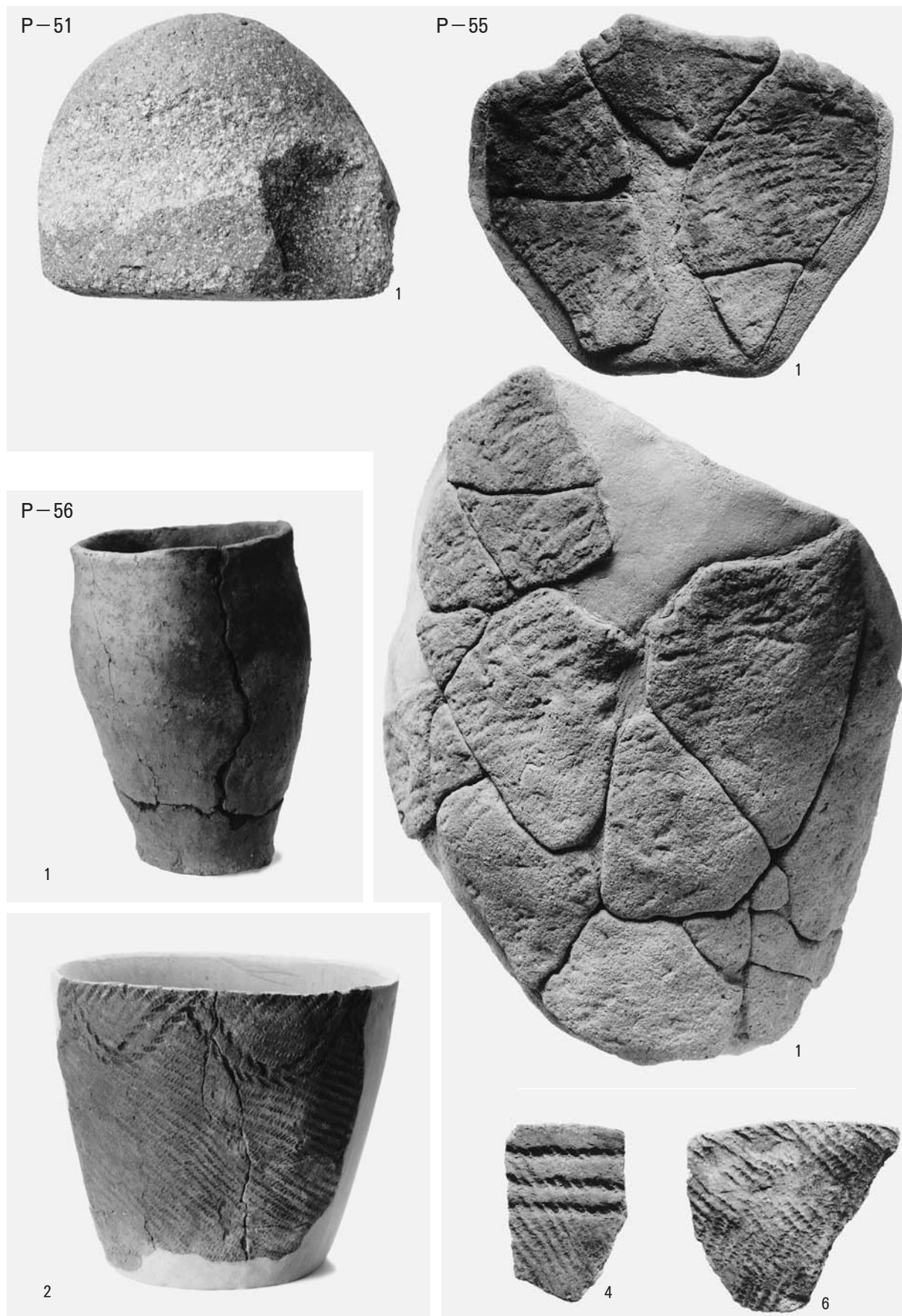


P-39出土遺物 1 ~ 6    P-40出土遺物 1    P-43出土遺物 1, 2

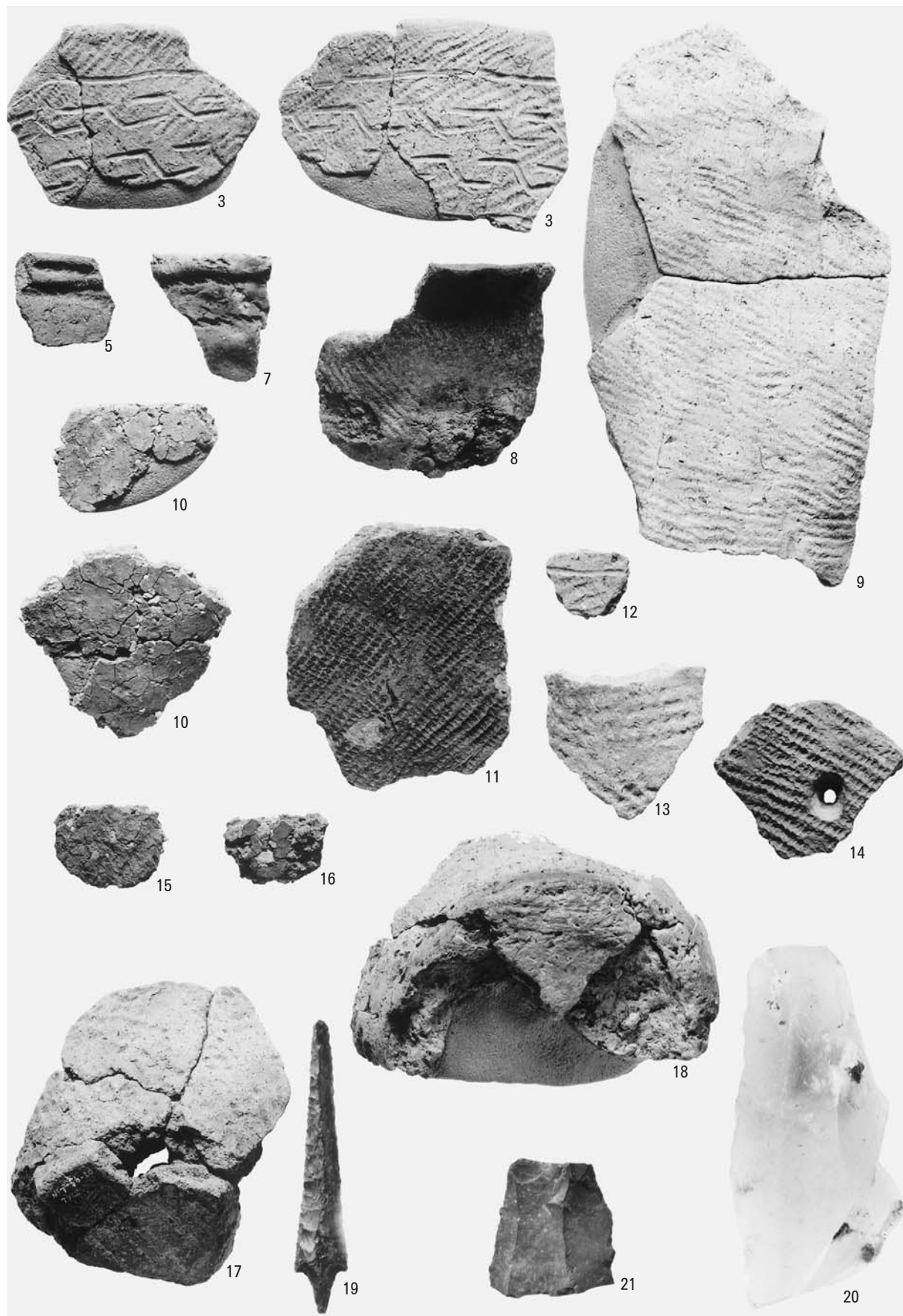
图版64



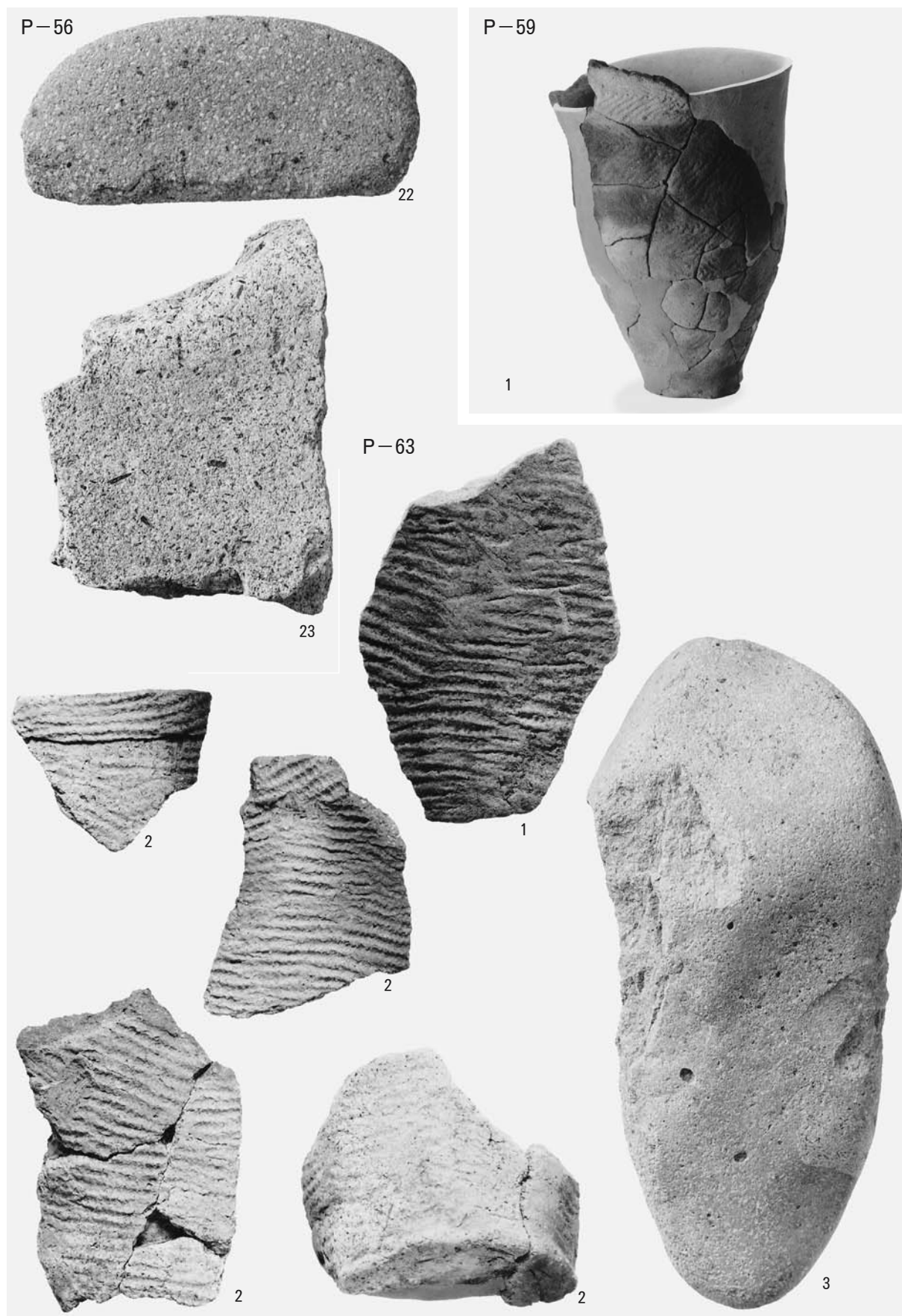
P-43出土遺物 3~5 P-44出土遺物 1, 2 P-48出土遺物 1, 2 P-50出土遺物 1~3



P-51出土遺物 1    P-55出土遺物 1    P-56出土遺物 1, 2, 4, 6



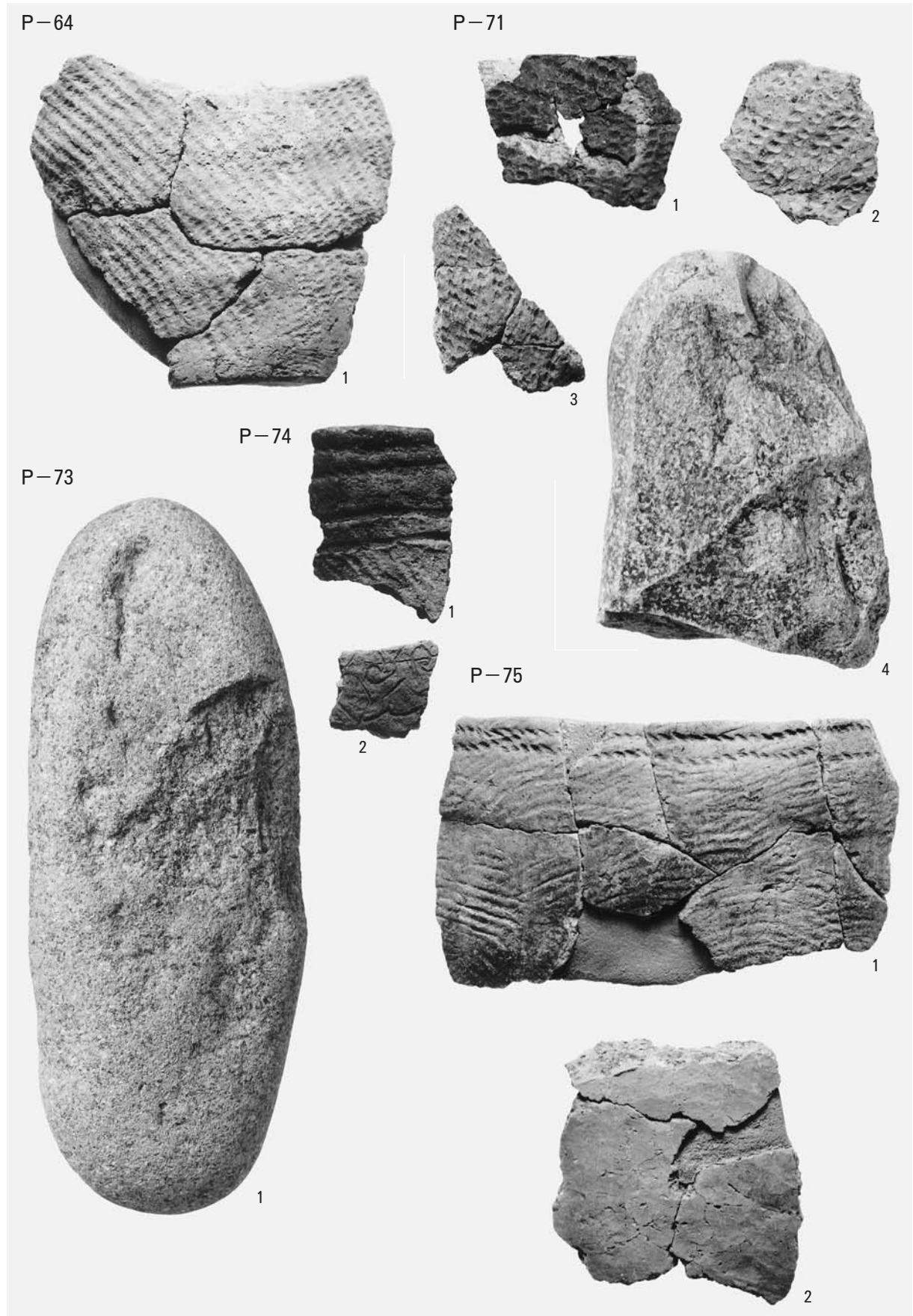
P-56出土遺物3, 5, 7~21



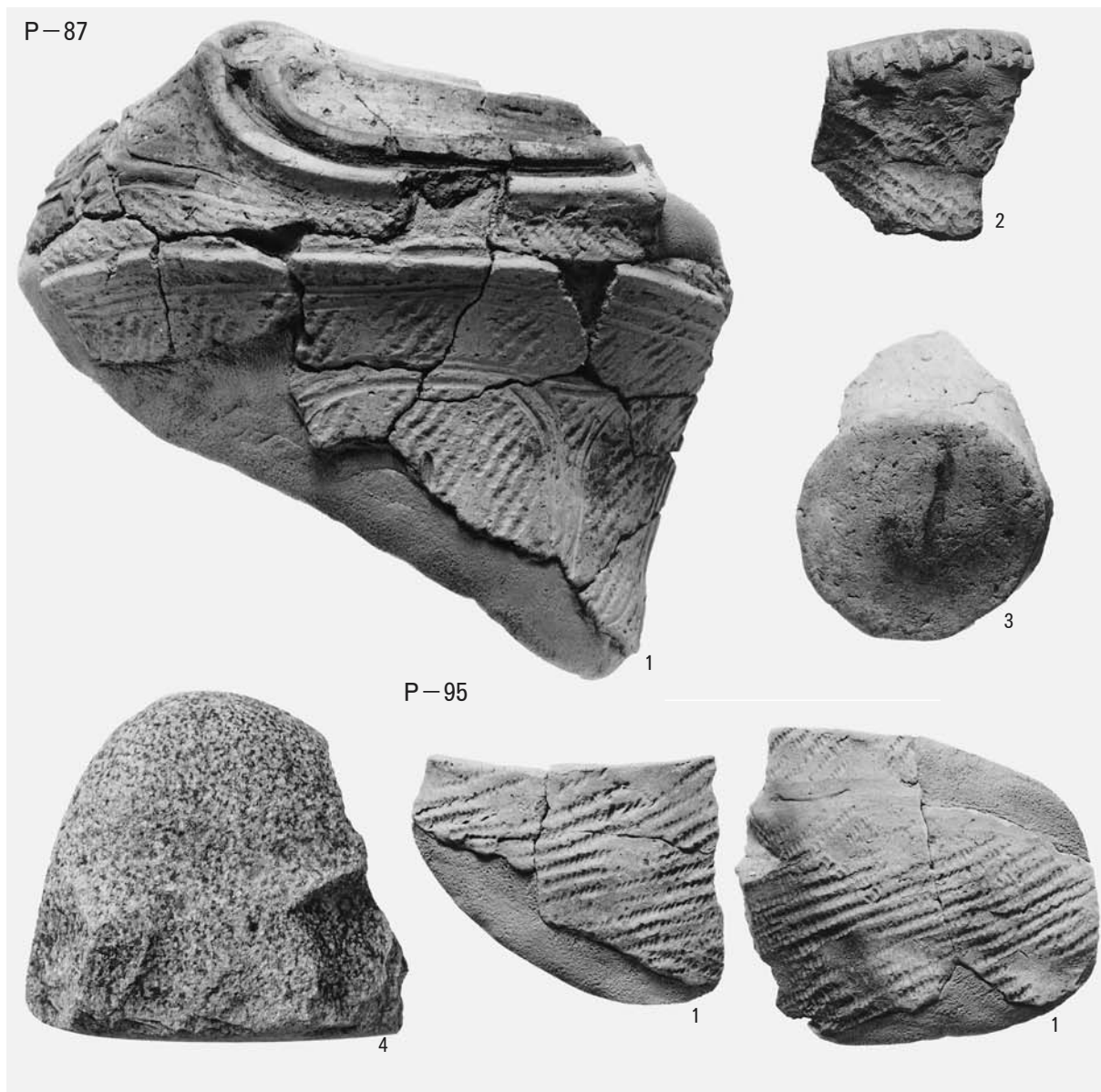
P-56出土遺物22, 23 P-59出土遺物1 P-63出土遺物1~3



图版68

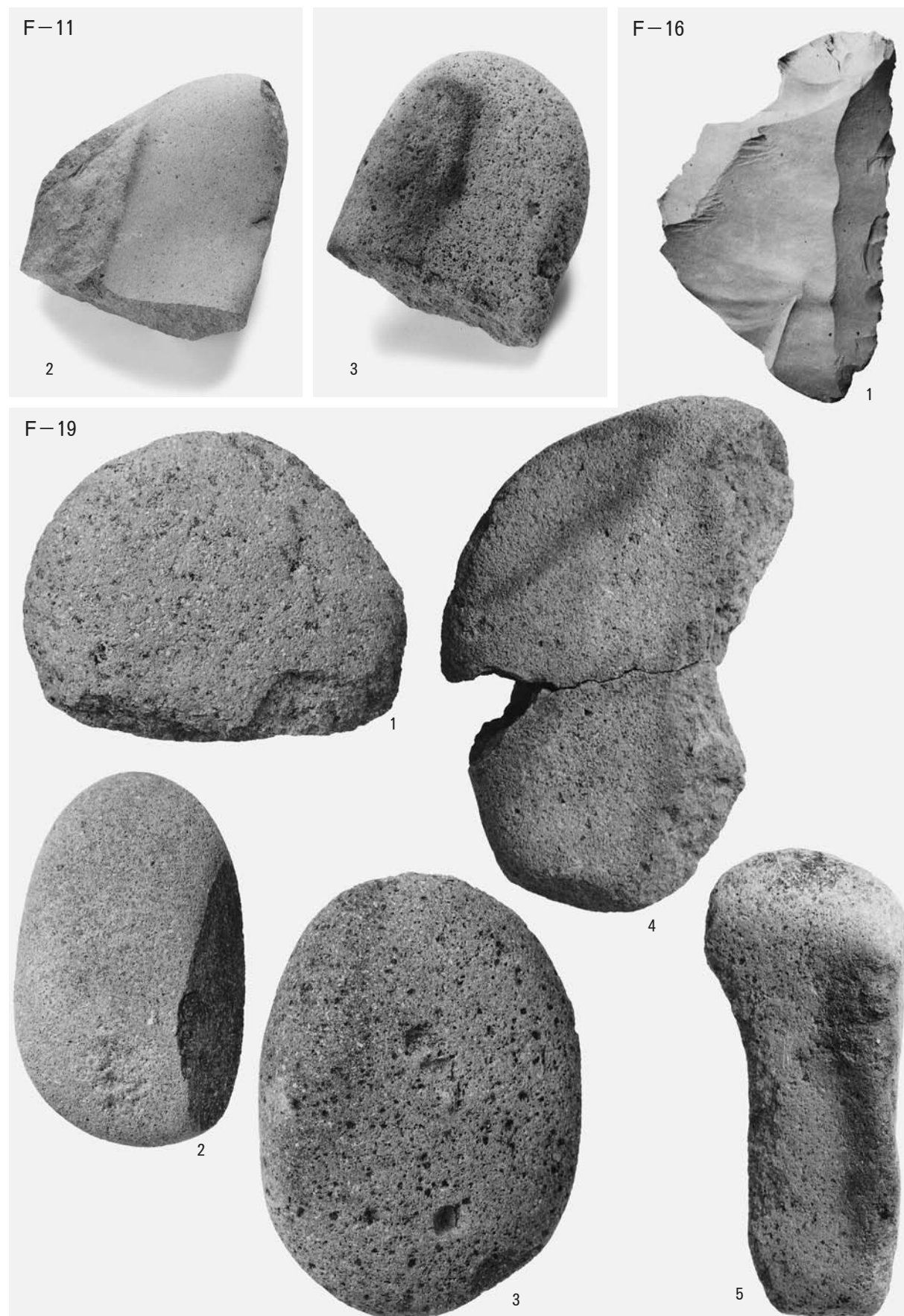


P-64出土遺物 1 P-71出土遺物 1~4 P-73出土遺物 1 P-74出土遺物 1,2 P-75出土遺物 1,2

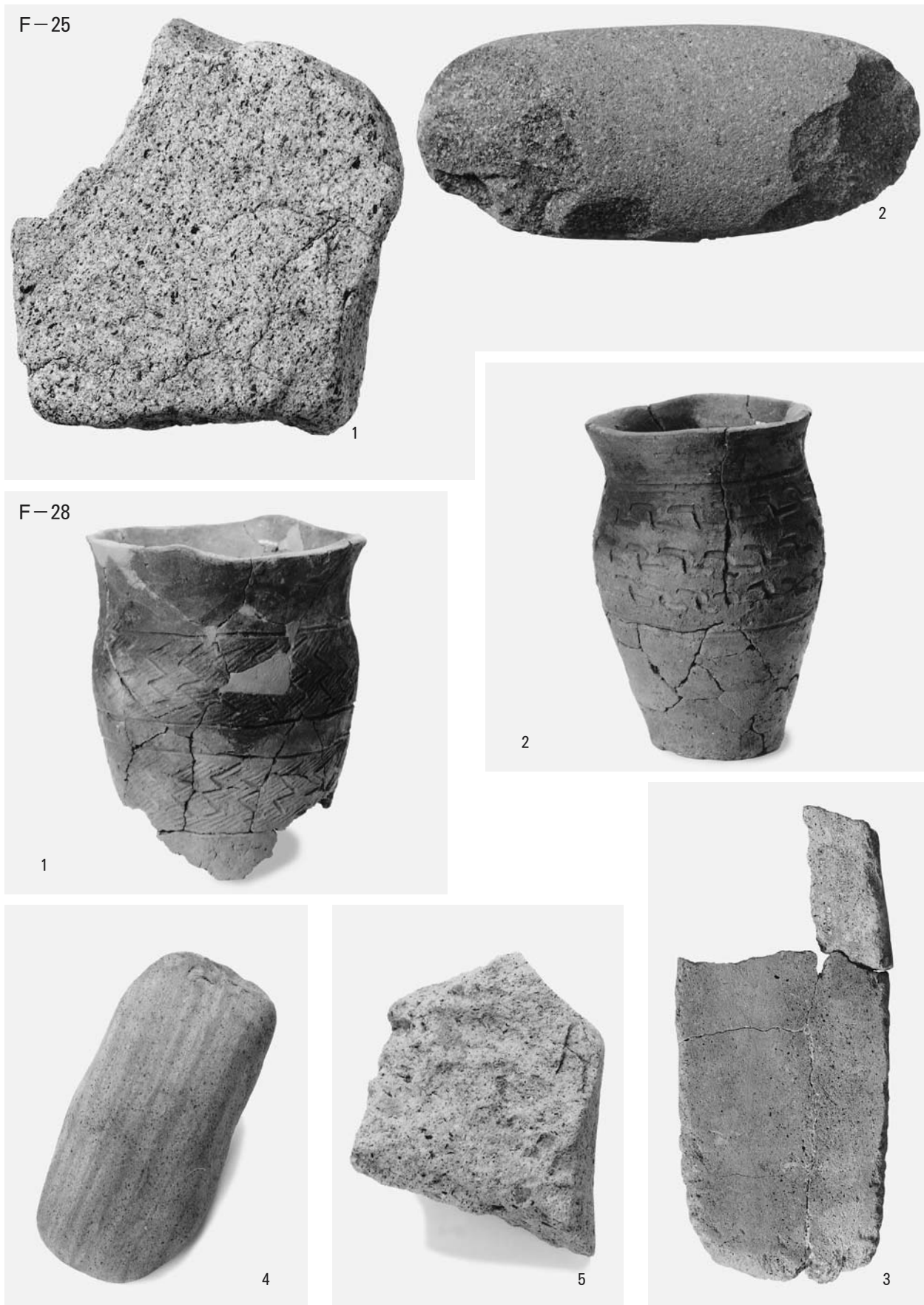


P-87出土遺物 1～4    P-95出土遺物 1    F-10出土遺物 1    F-11出土遺物 1

图版70

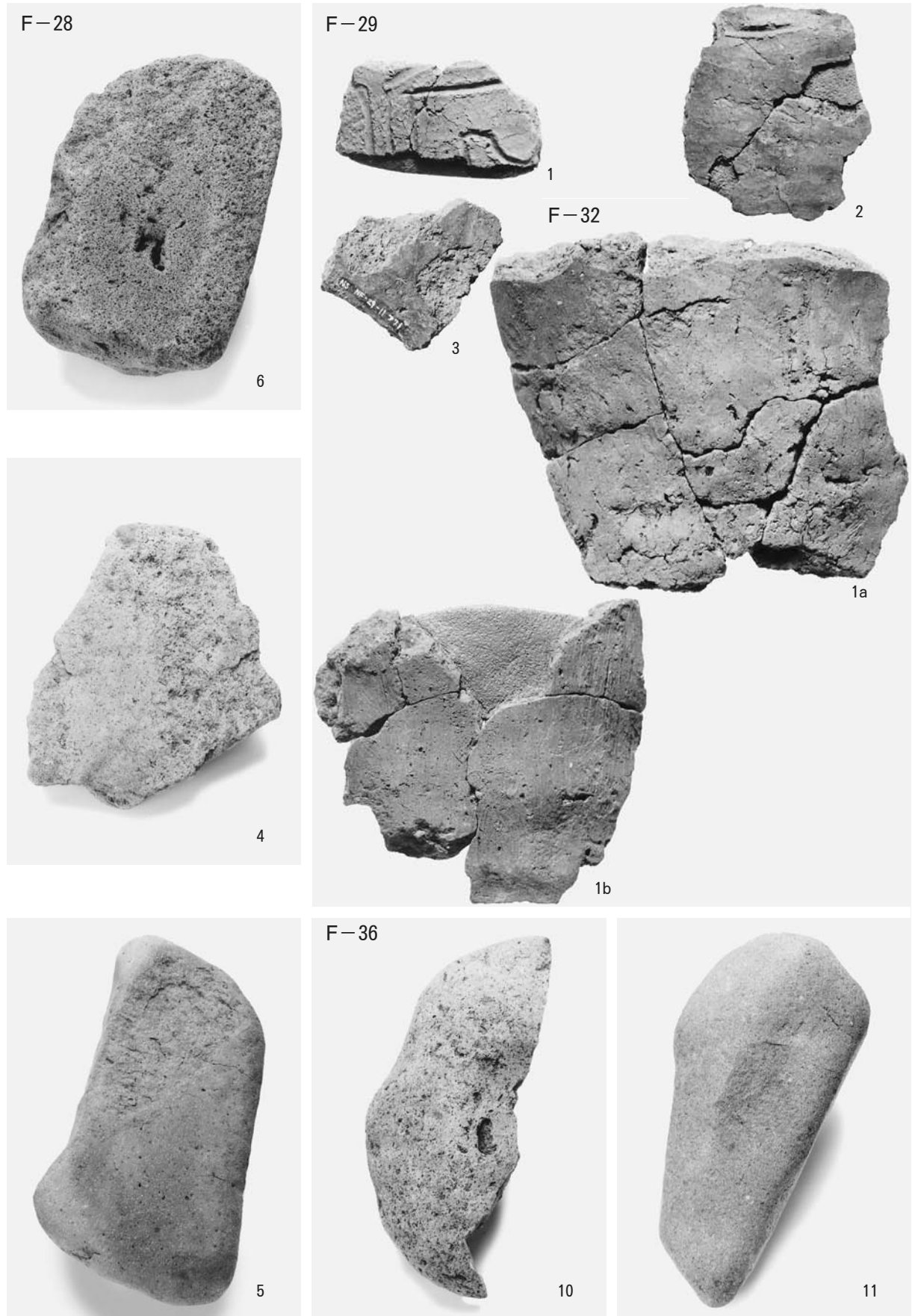


F-11出土遺物2, 3 F-16出土遺物1 F-19出土遺物1~5



F-25出土遺物1, 2 F-28出土遺物1~5

图版72



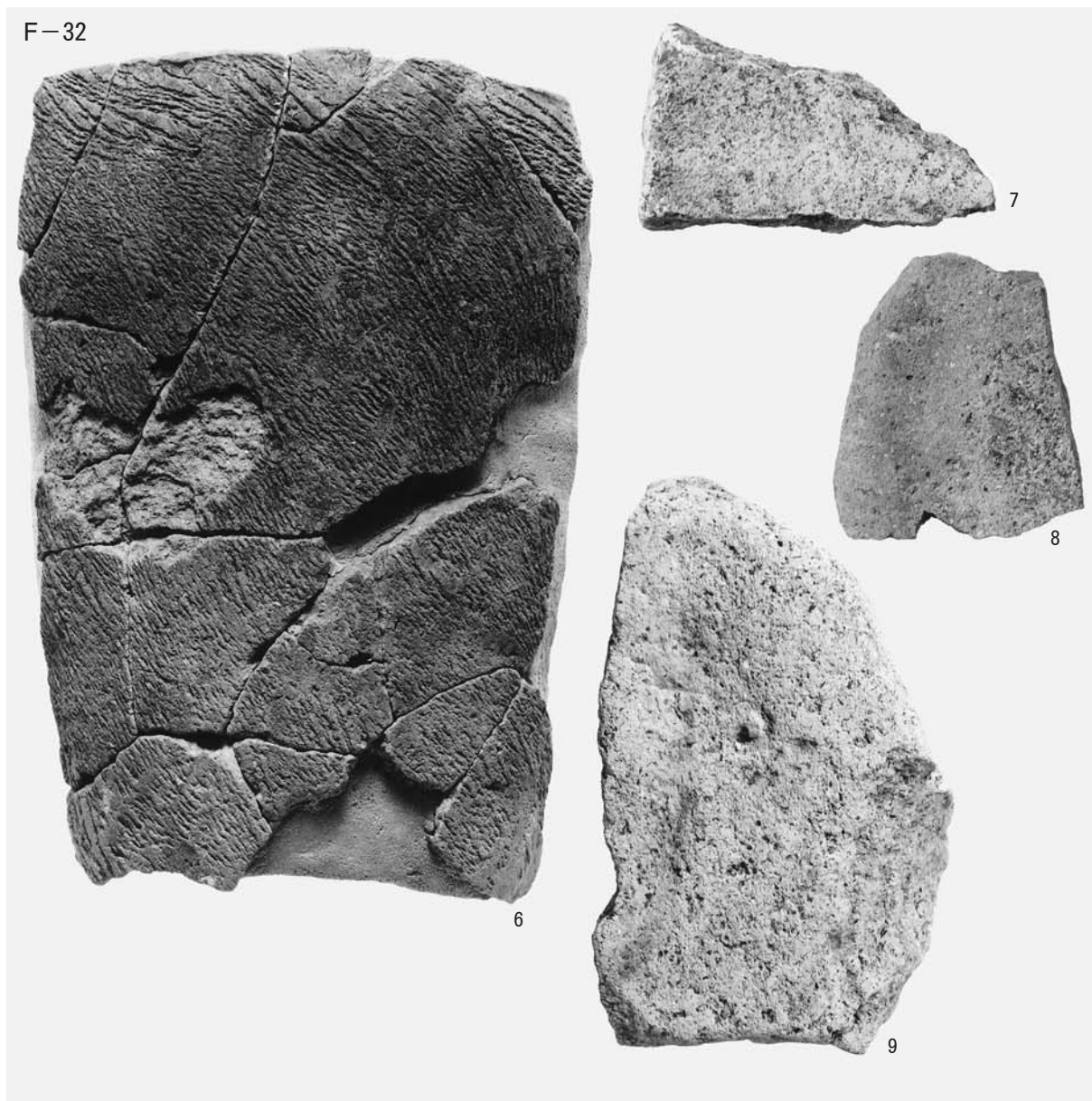
F-28出土遺物 6    F-29出土遺物 1~5    F-32出土遺物 1    F-36出土遺物 10, 11



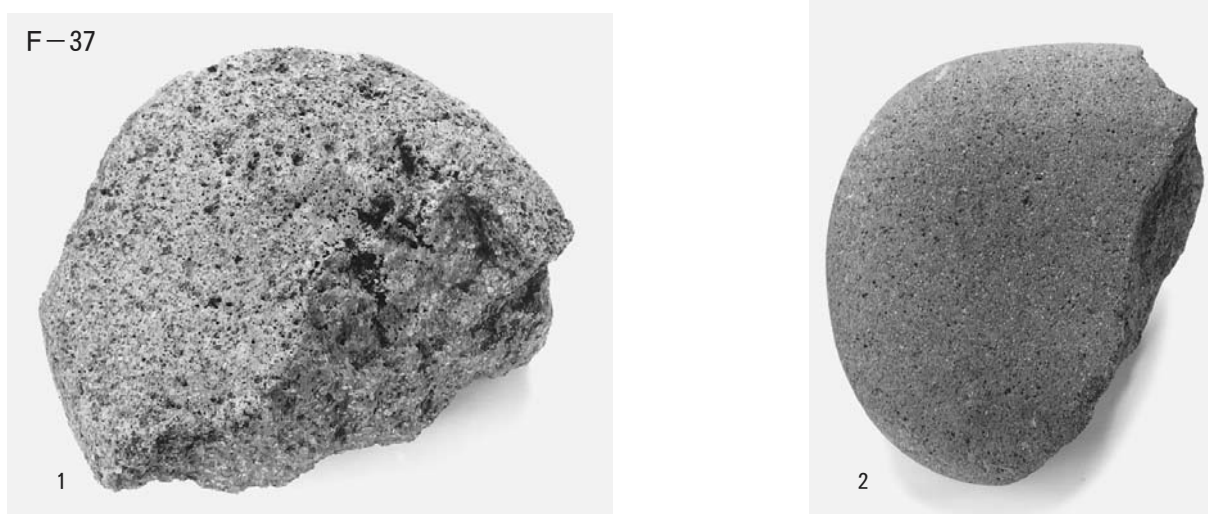
F-36出土遺物 1 ~ 5

图版74

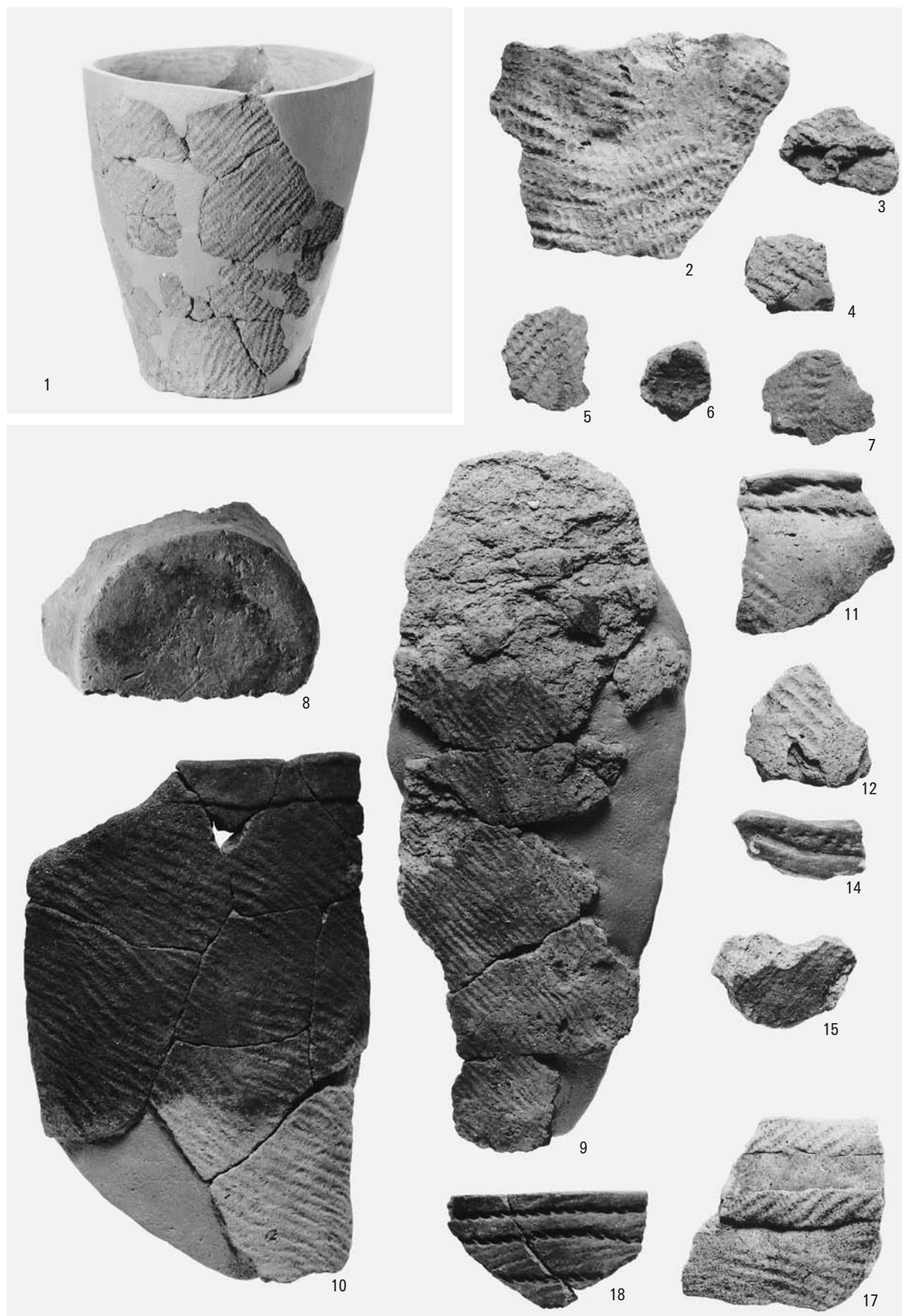
F-32



F-37

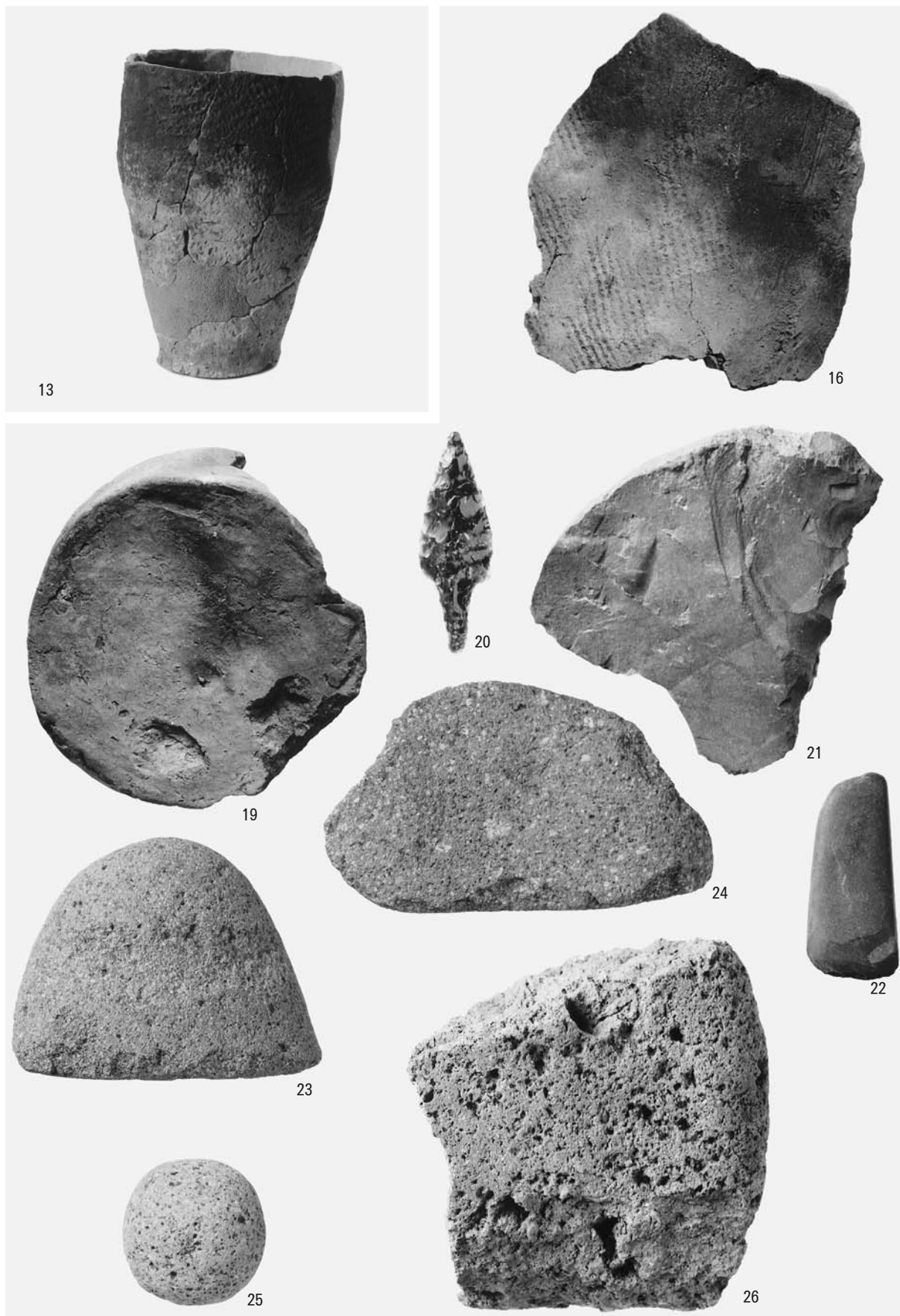


F-36出土遺物 6 ~ 9    F-37出土遺物 1, 2



S P 出土遺物 1 ~12, 14, 15, 17, 18

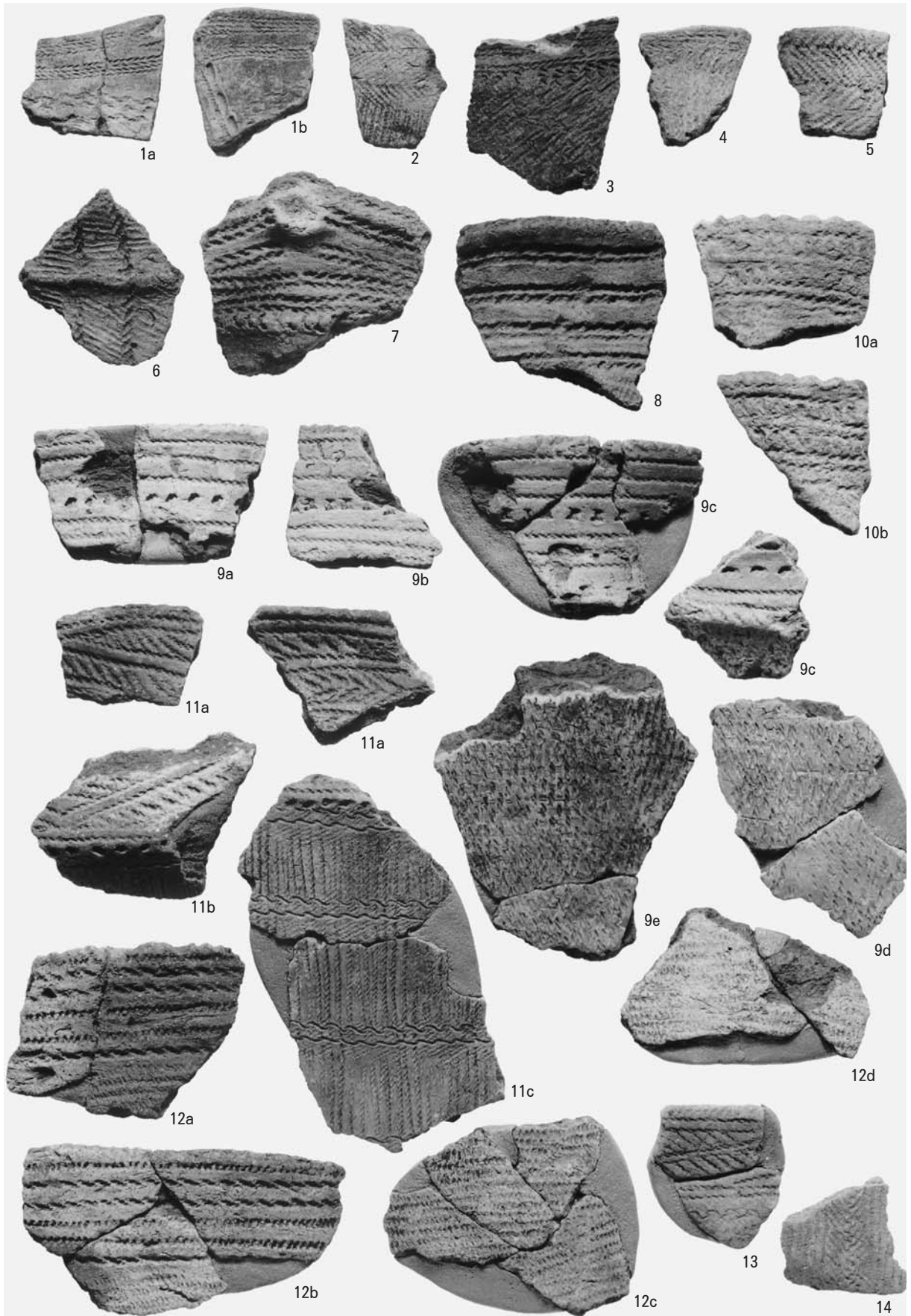




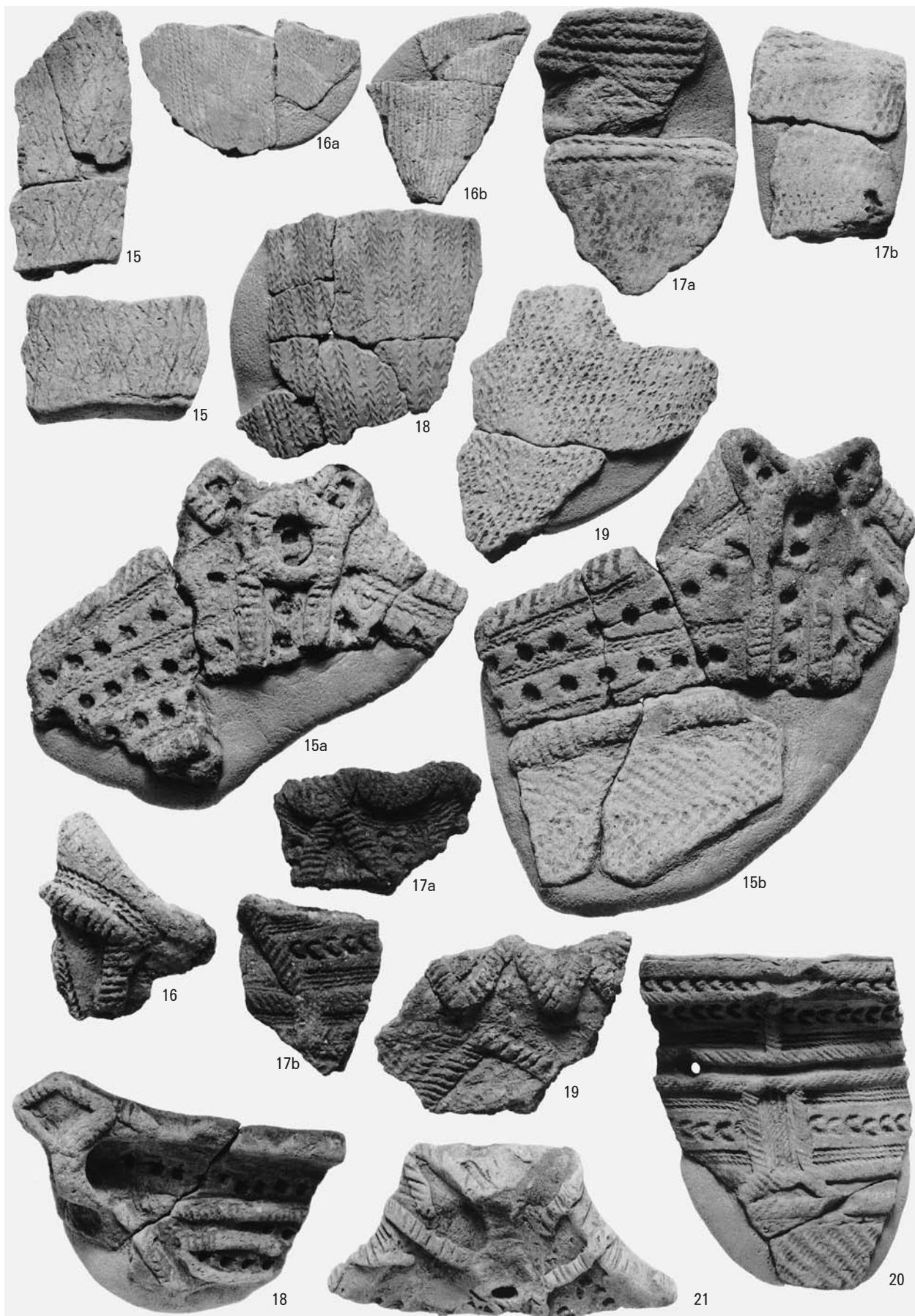
S P 出土遺物13, 16, 19~26



S P 出土遺物27, 28 包含層出土土器Ⅲ群 1 ~ 6



包含層出土土器Ⅱ群 1~14



包含層出土土器Ⅱ群15~19, Ⅲ群15~21

图版80

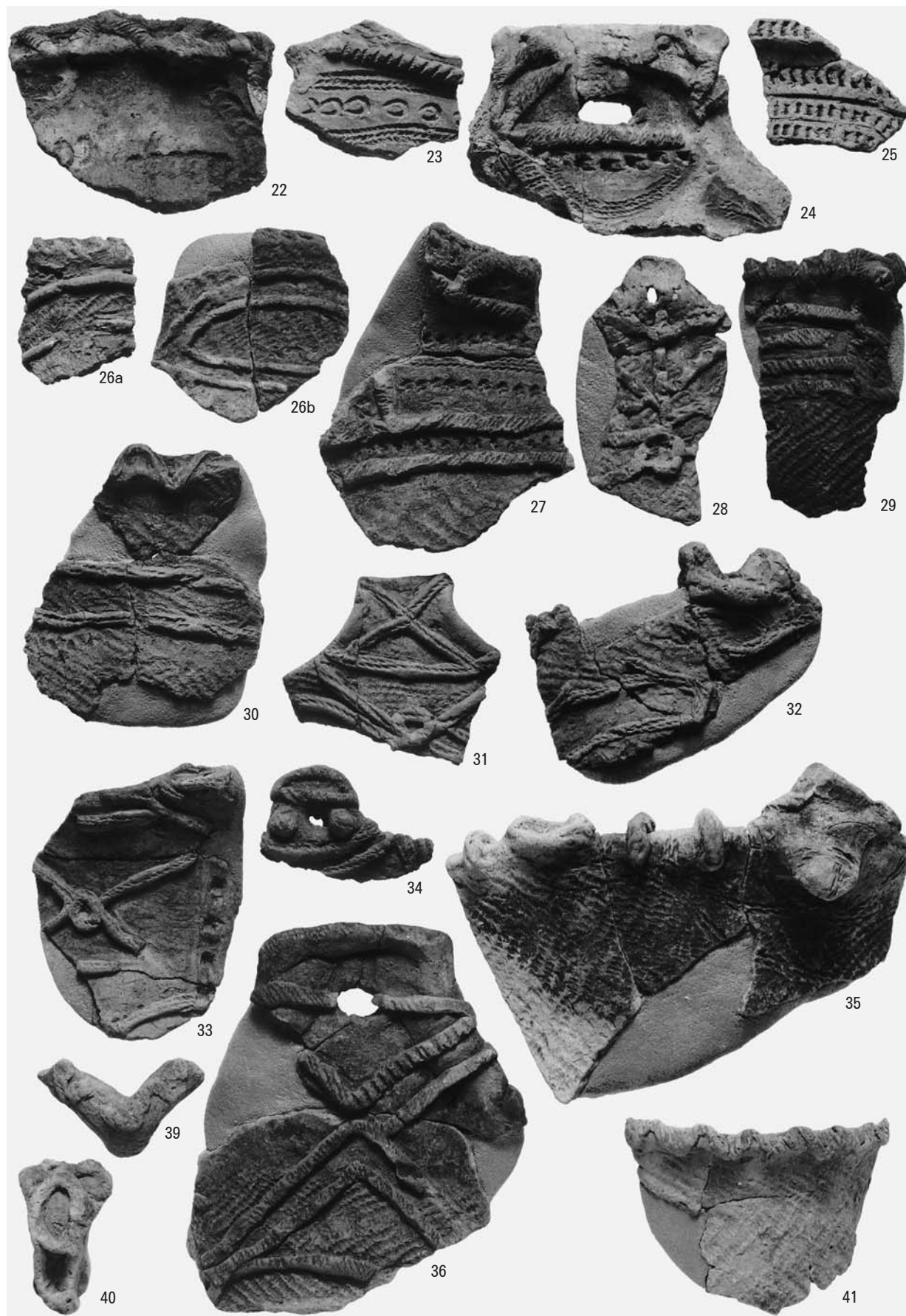


包含層出土土器Ⅲ群 7~12

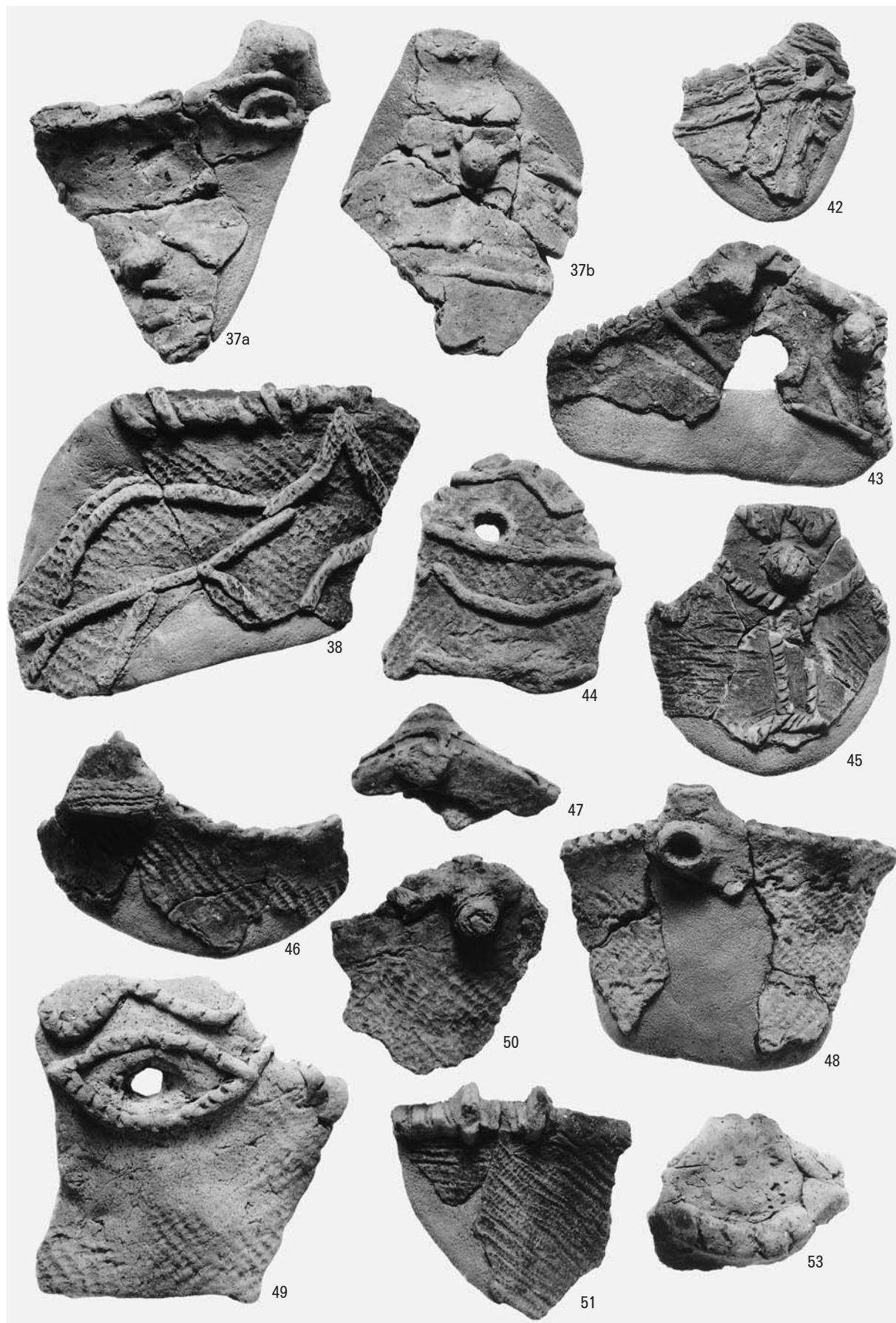


包含層出土土器Ⅲ群13, 14, Ⅳ群 1 ~ 3

图版82

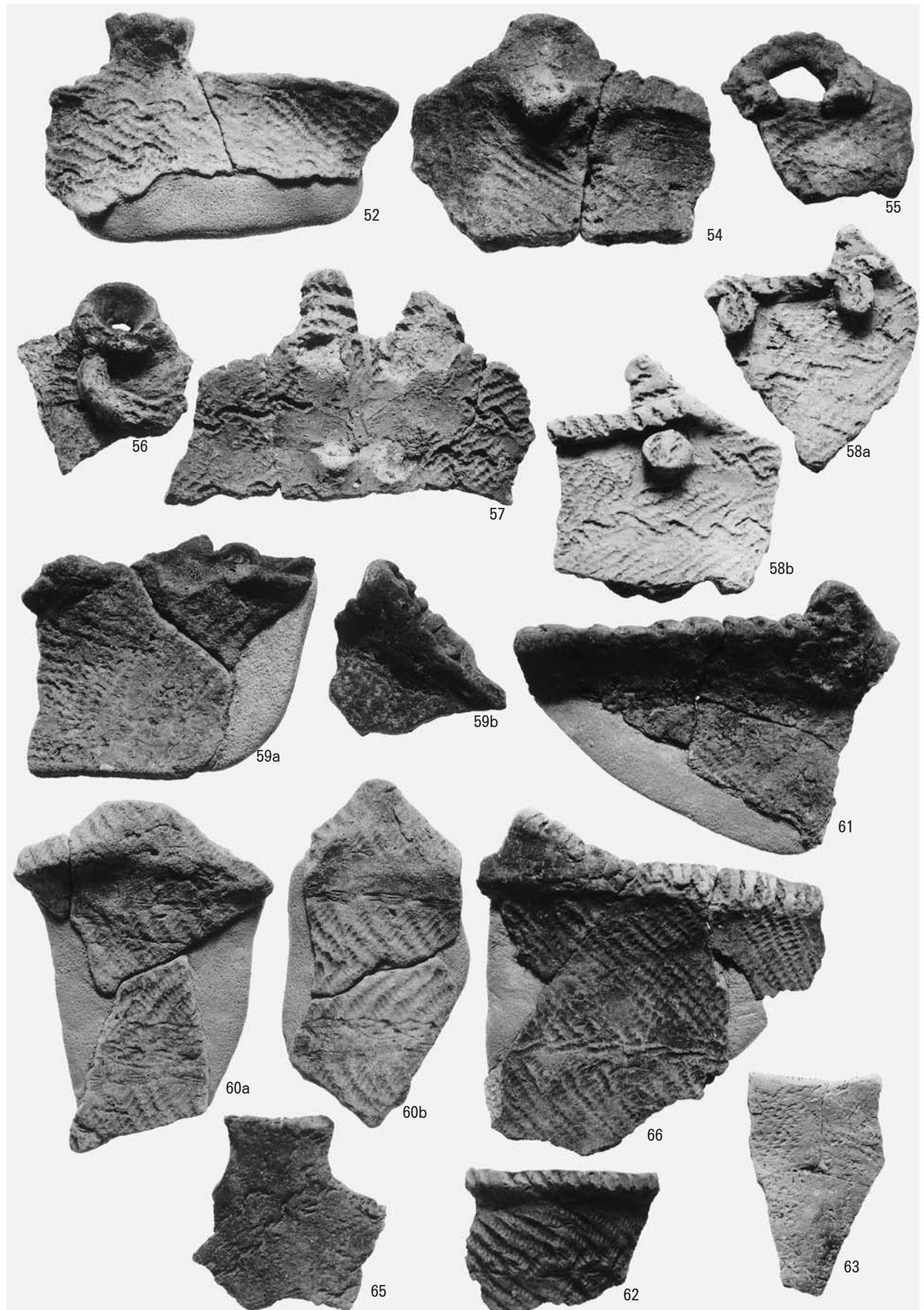


包含層出土土器Ⅲ群22~36, 39~41



包含層出土土器Ⅲ群37, 38, 42~51, 53

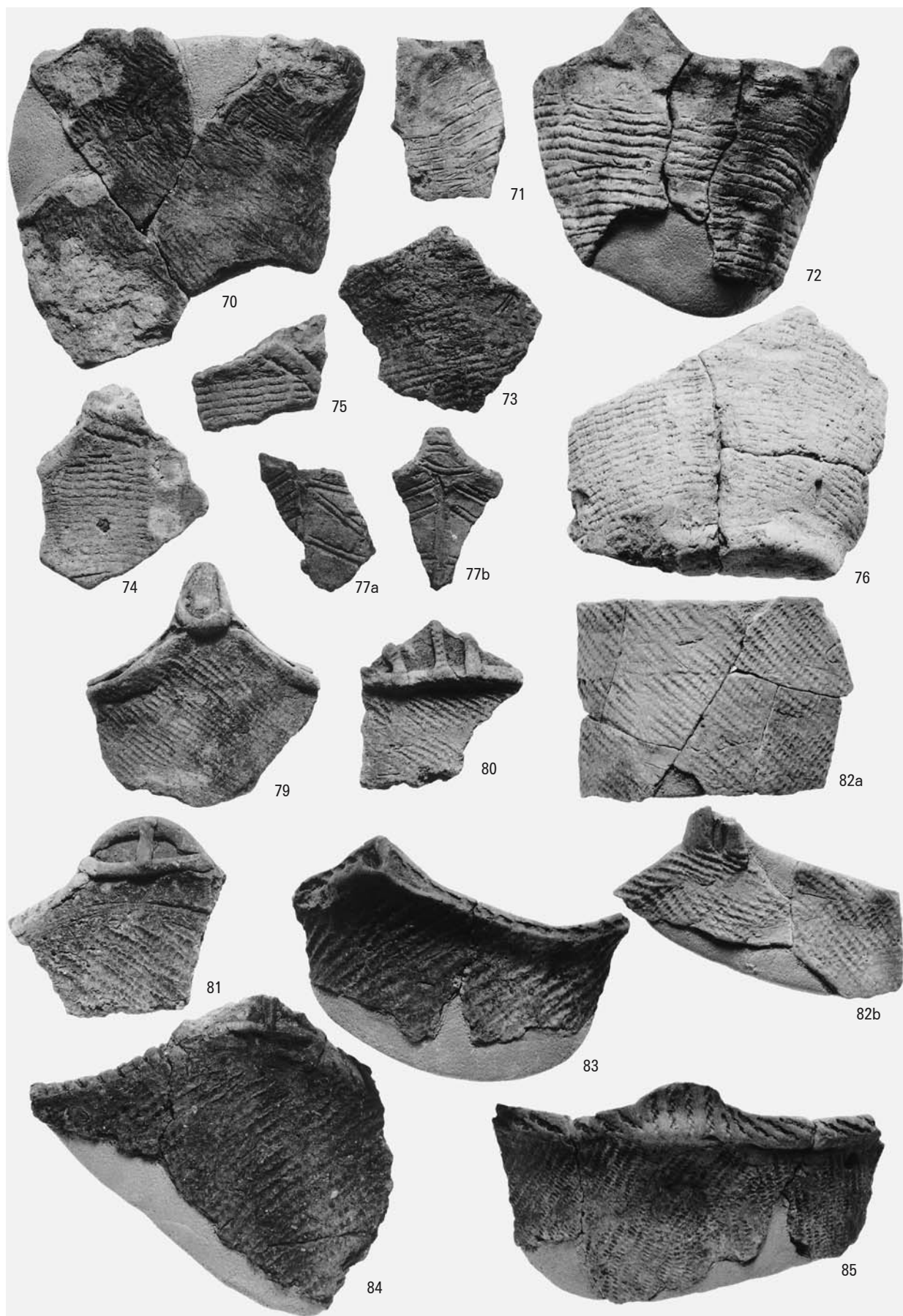




包含層出土土器Ⅲ群52, 54~63, 65, 66



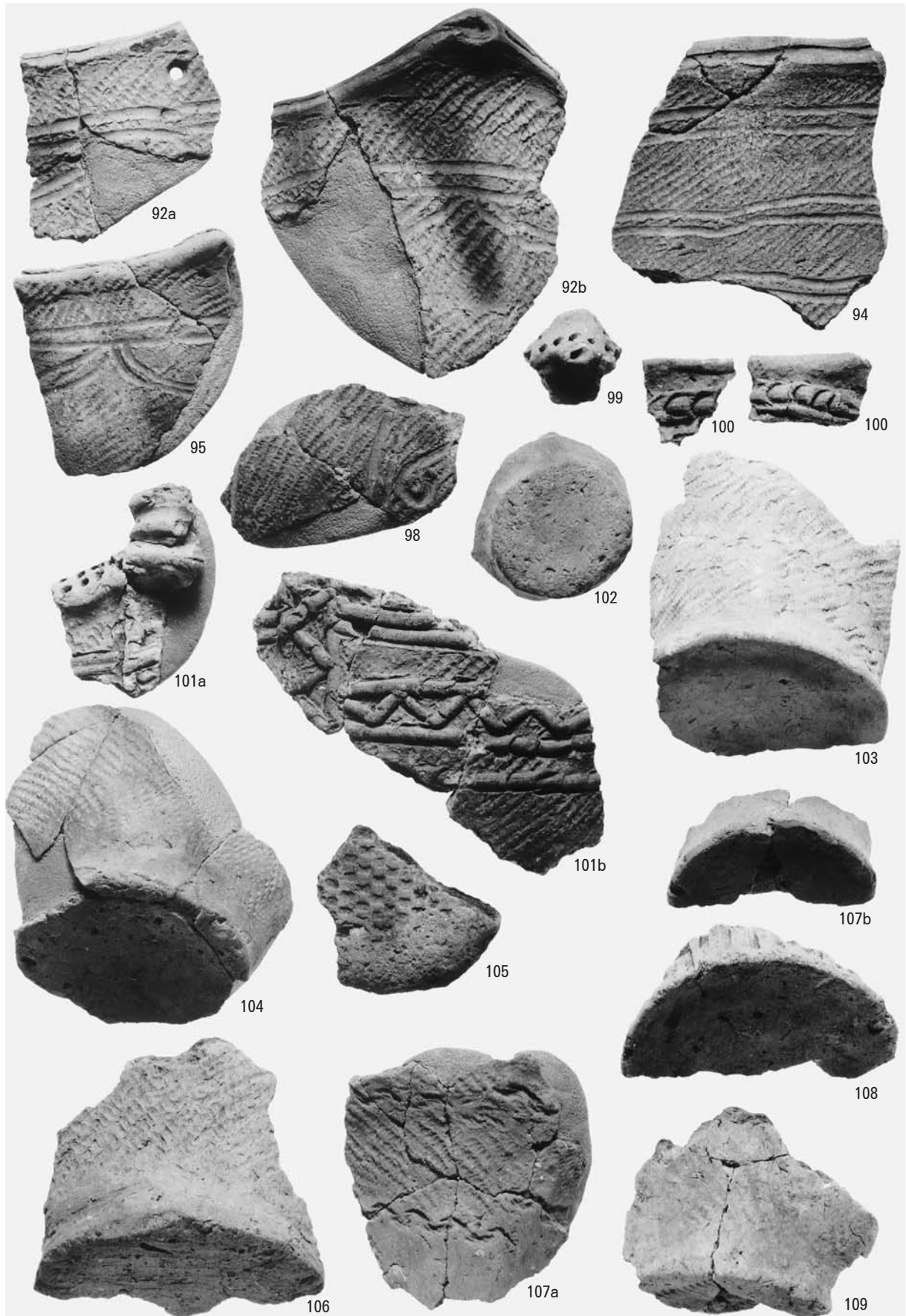
包含層出土土器Ⅲ群64, 67~69



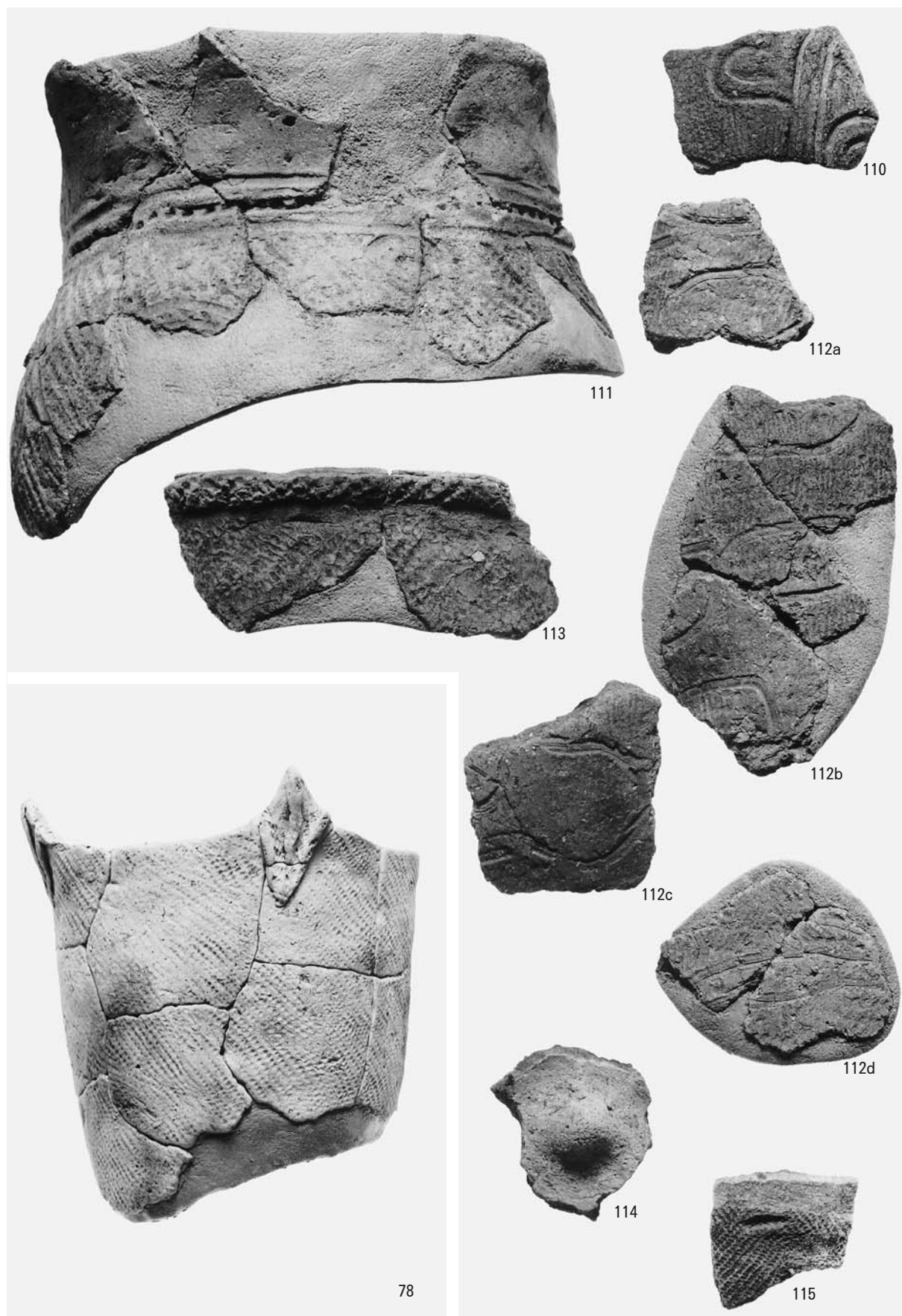
包含層出土土器Ⅲ群70~77, 79~85



包含層出土土器Ⅲ群86~91, 93, 96, 97



包含層出土土器Ⅲ群92, 94, 95, 98~109

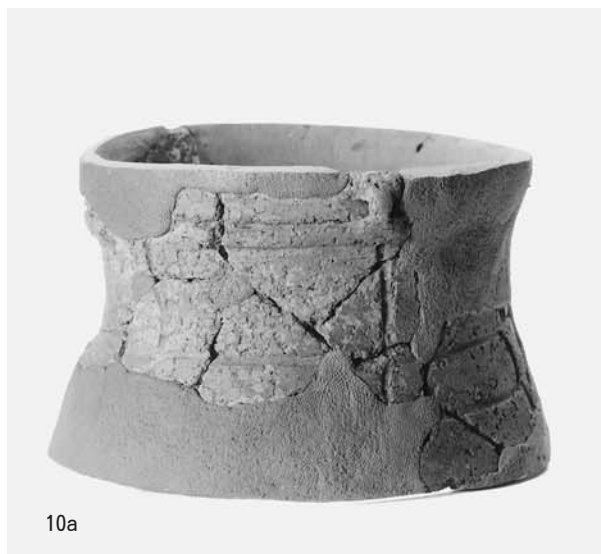


包含層出土土器Ⅲ群78, 110~115

图版90



包含層出土土器IV群 4 ~ 9



包含層出土土器IV群10~13



图版92



包含層出土土器IV群14~19

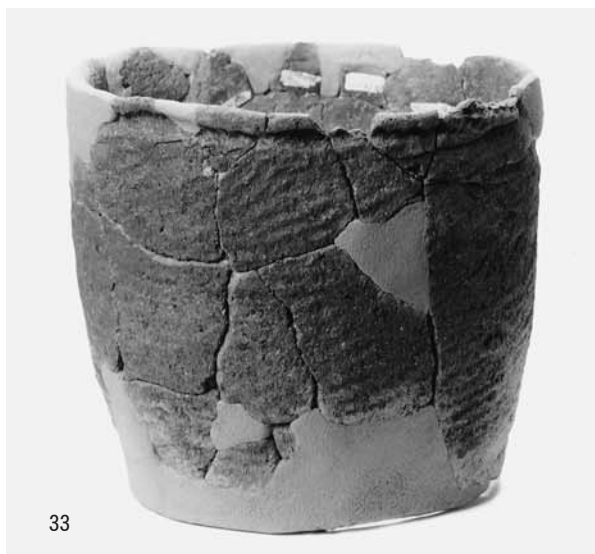


包含層出土土器IV群20~25

图版94



包含層出土土器IV群26~31



包含層出土土器IV群32~37

图版96



包含層出土土器IV群38~42



包含層出土土器IV群43~48

图版98



包含層出土土器IV群49~54



包含層出土土器IV群55~60



图版100



包含層出土土器IV群61~65



包含層出土土器IV群66~71

图版102



包含層出土土器IV群72~77



包含層出土土器IV群78~83

图版104



包含層出土土器IV群84~89



包含層出土土器IV群90~95

图版106



包含層出土土器IV群96~101



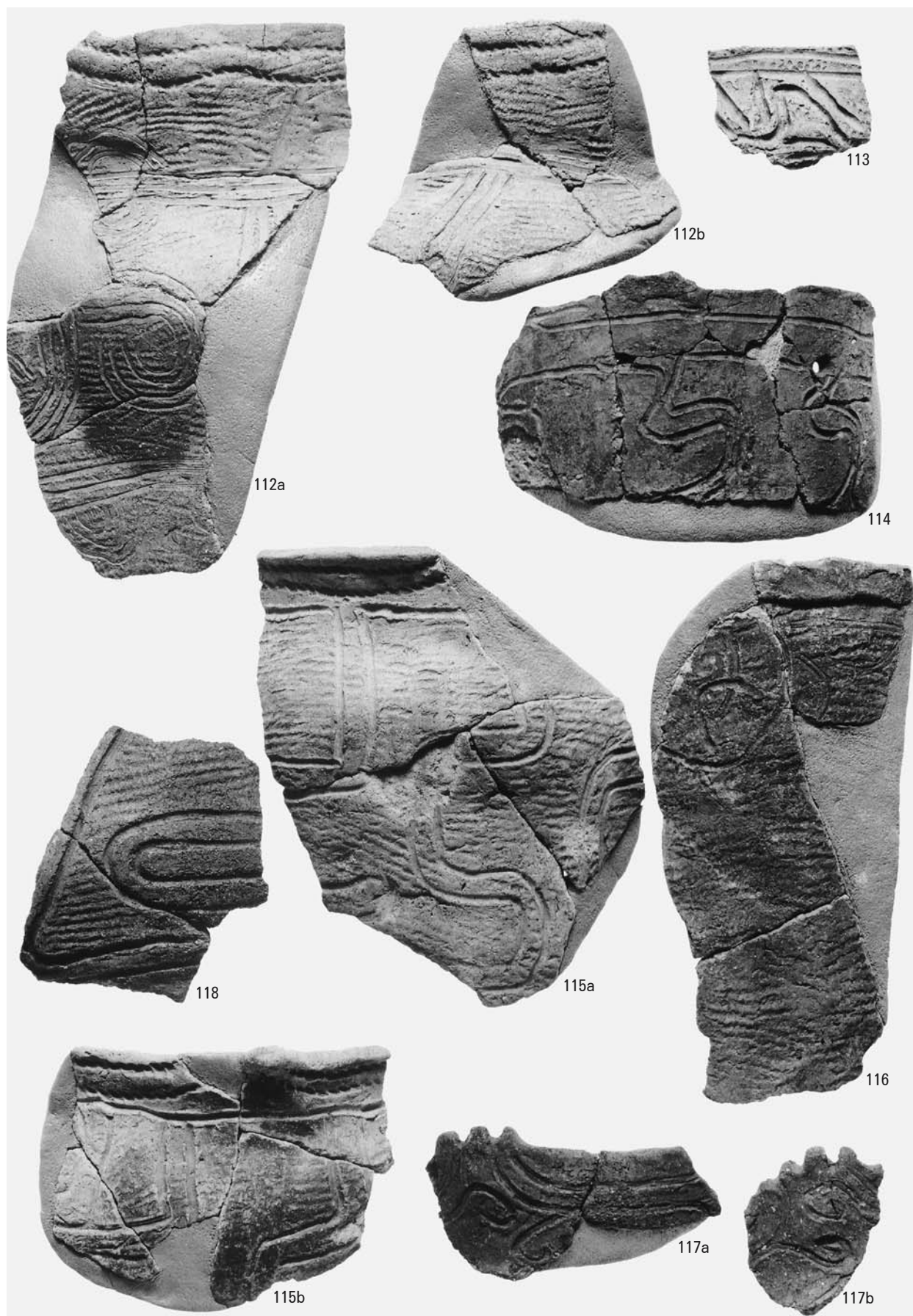
包含層出土土器IV群102~107



图版108



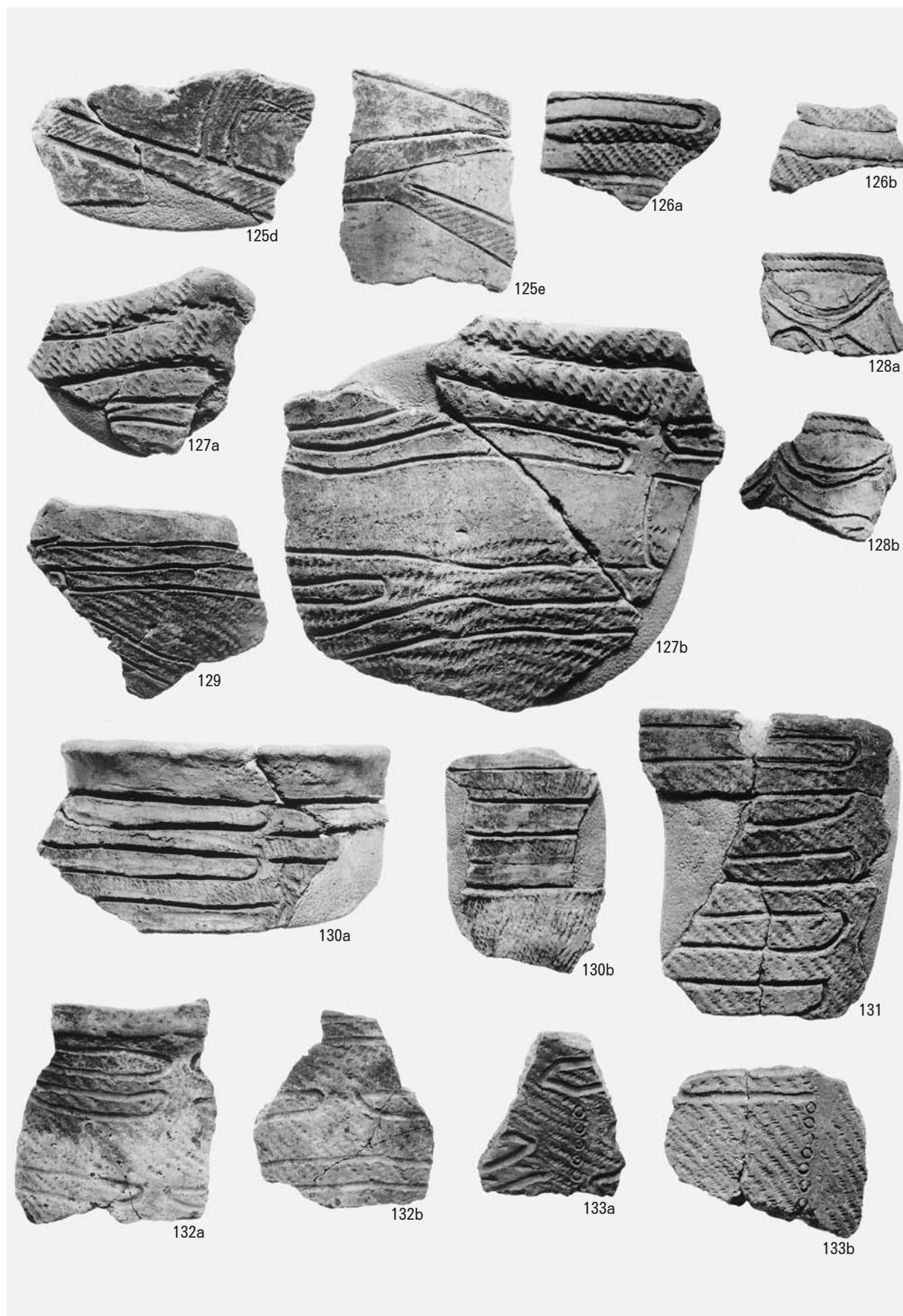
包含層出土土器IV群108~111, 222



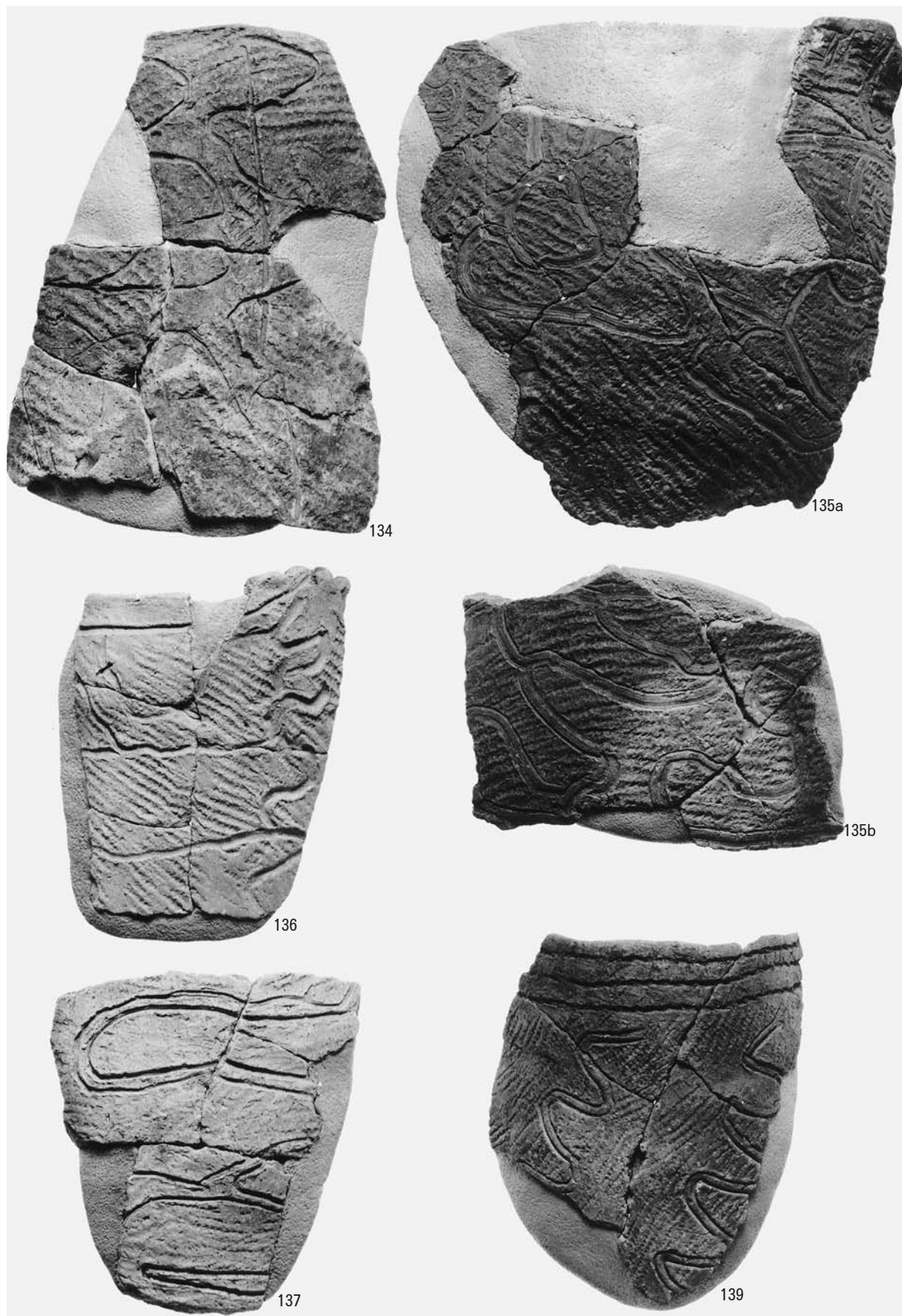
包含層出土土器IV群112~117b, 118



包含層出土土器IV群117c, 119~125c



包含層出土土器IV群125d~133



包含層出土土器IV群134~137, 139



包含層出土土器IV群138, 140~144a, c



包含層出土土器IV群144b, 145~150

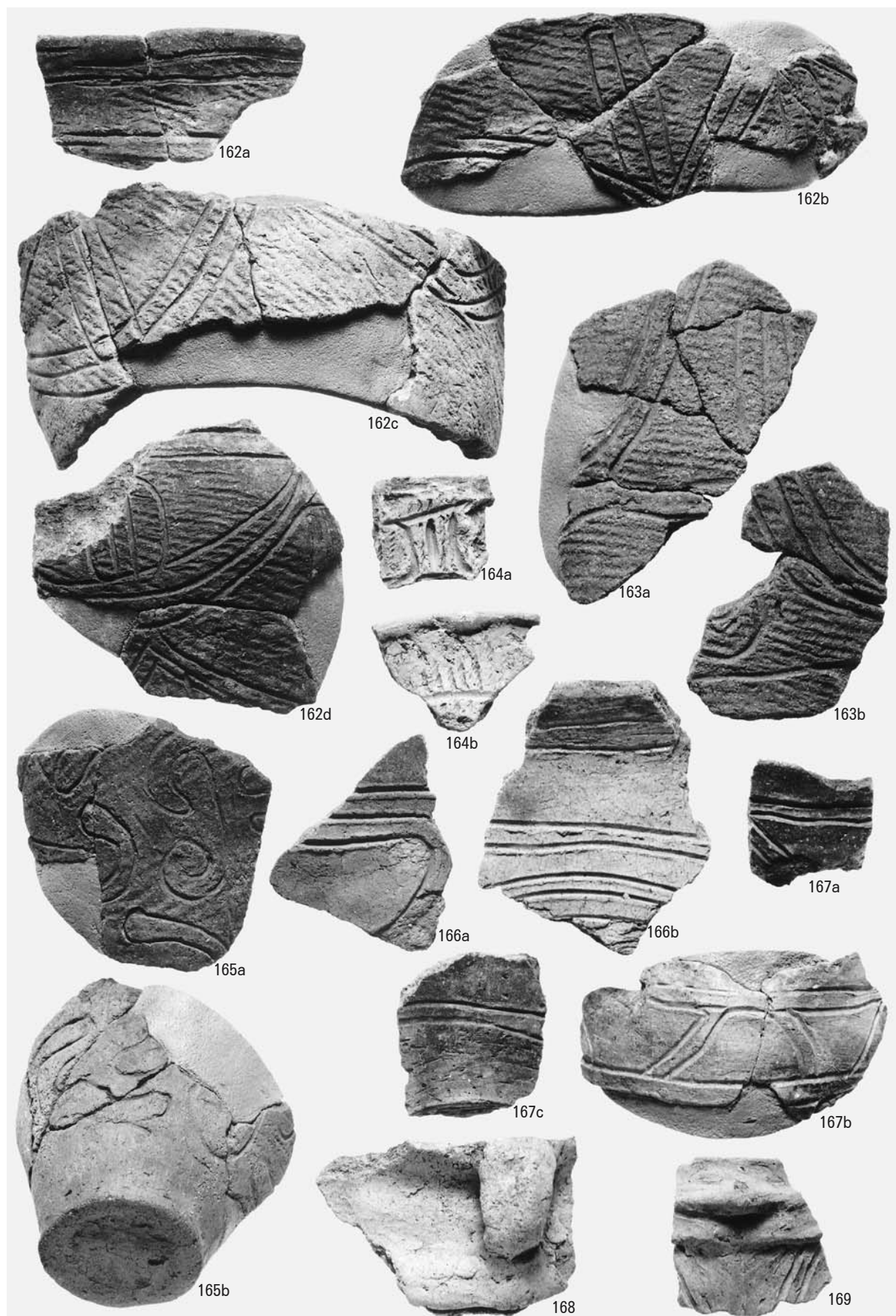


包含層出土土器IV群151~154, 156~158

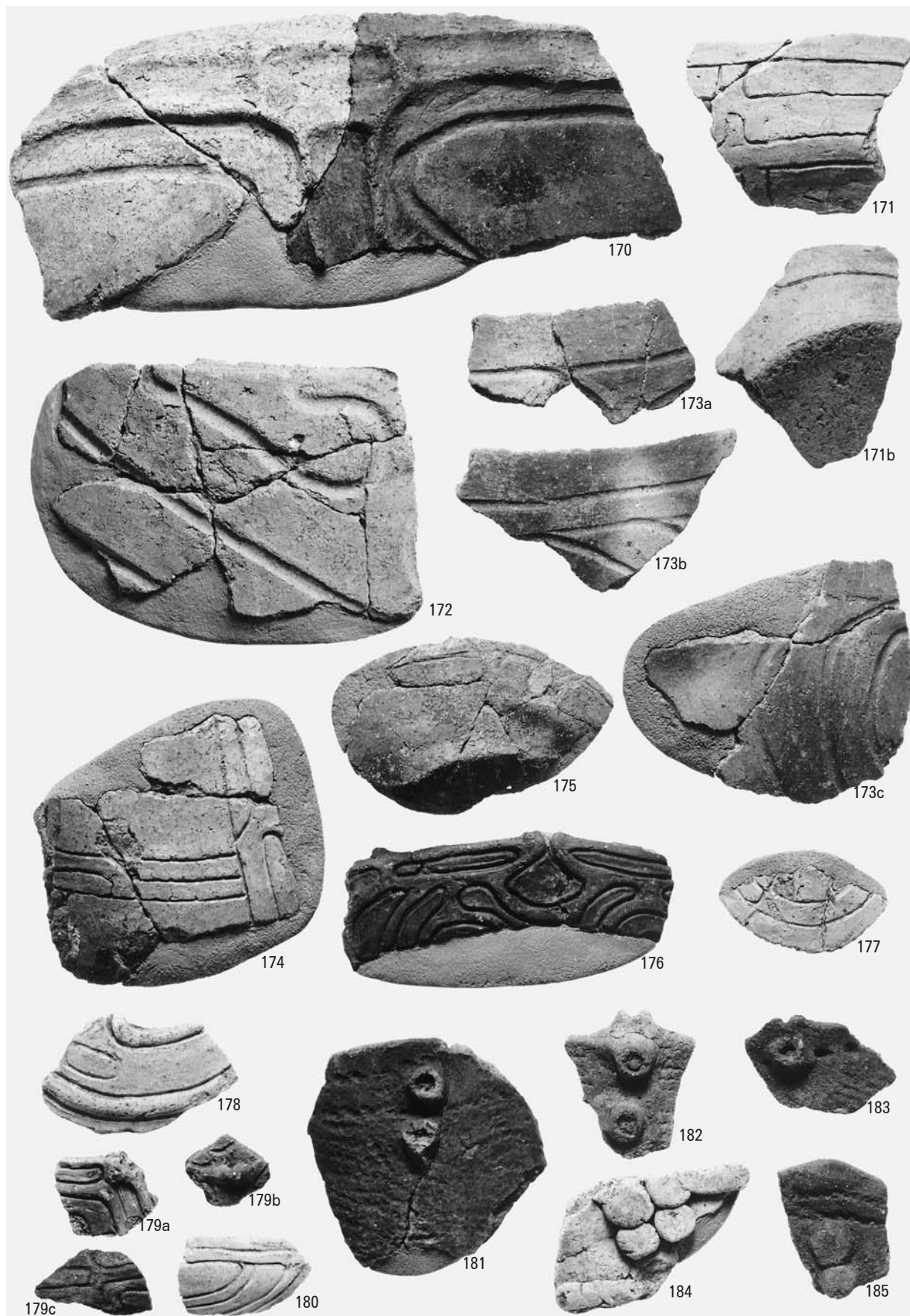




包含層出土土器Ⅳ群155, 159~161



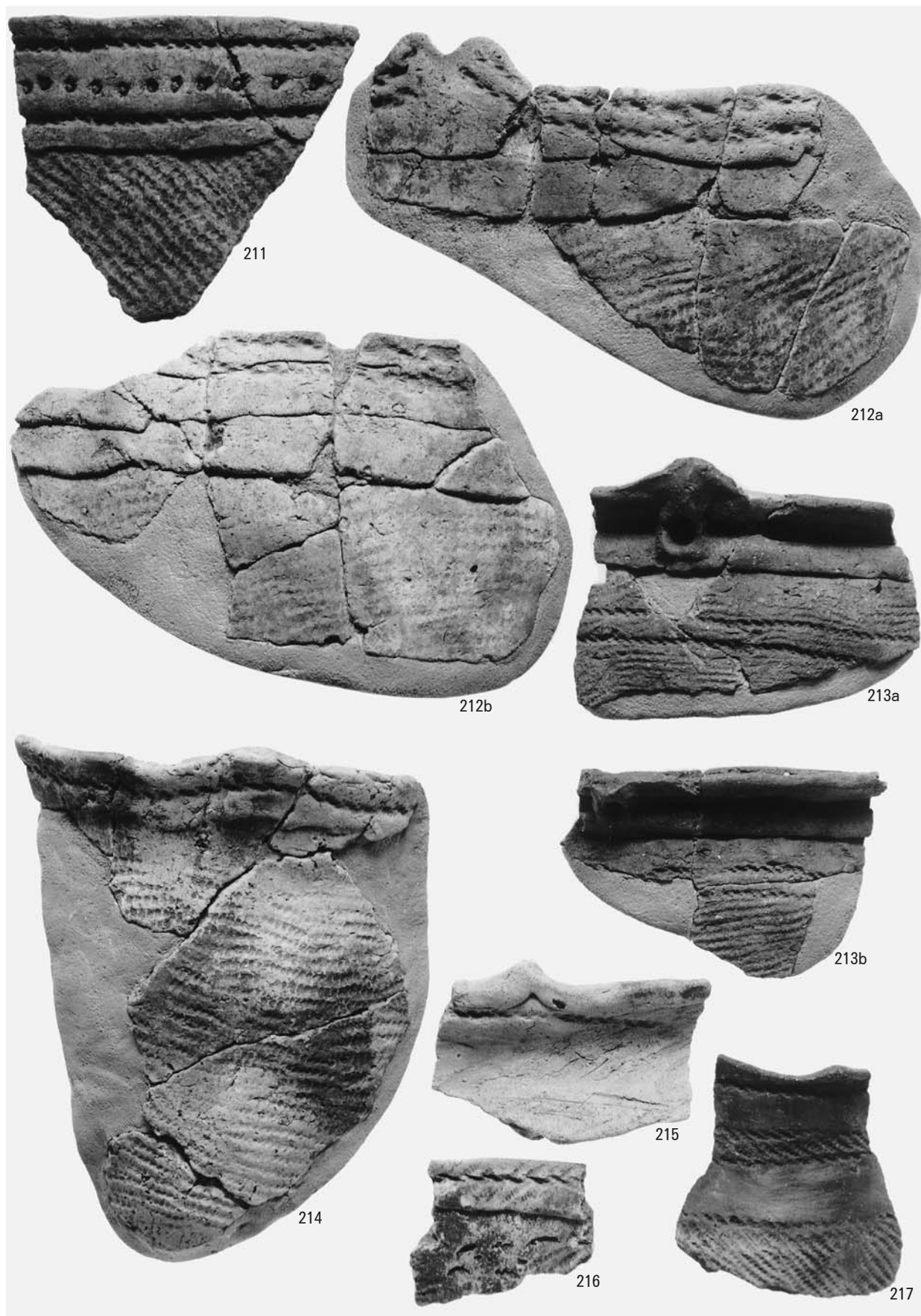
包含層出土土器IV群162~169



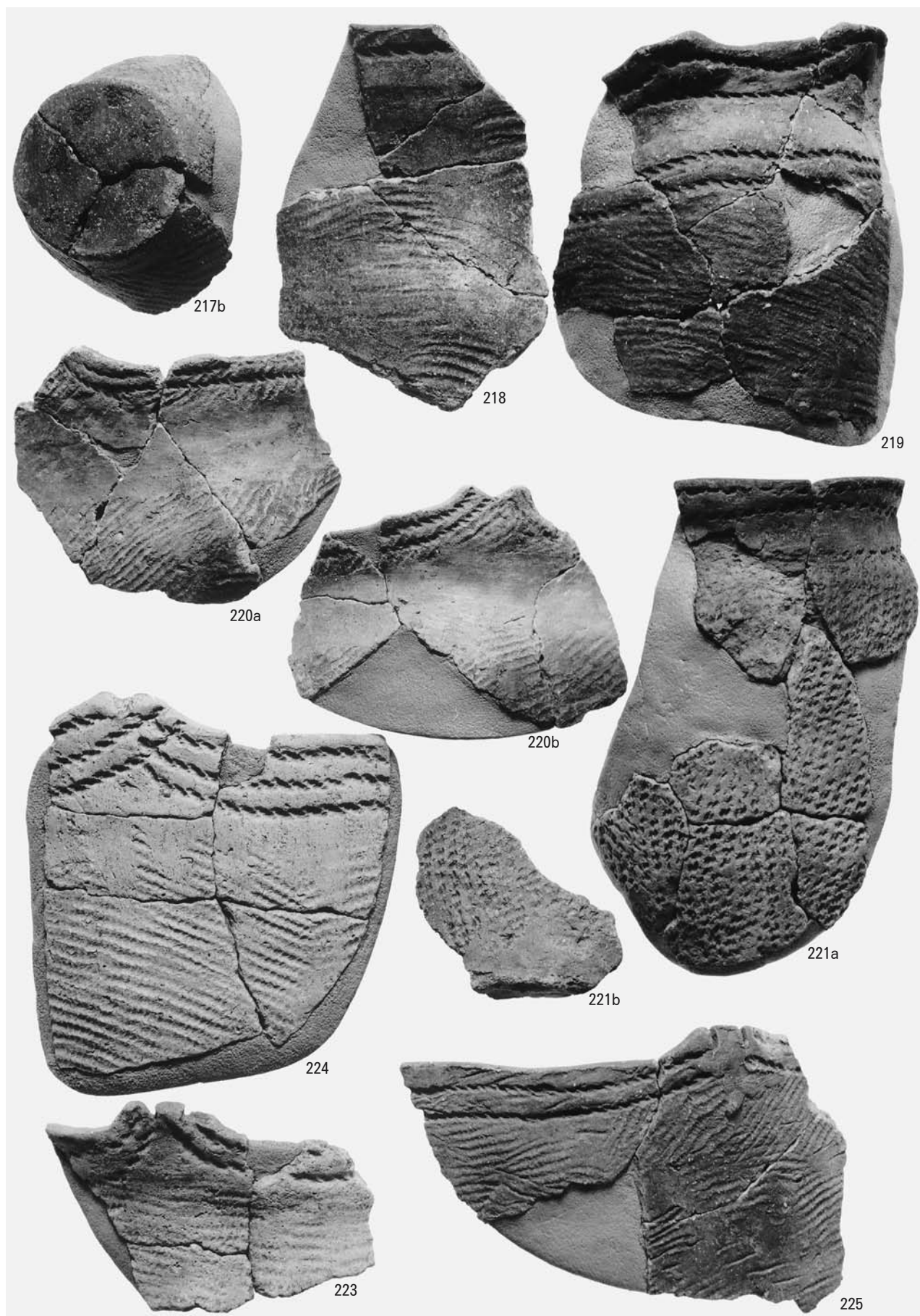
包含層出土土器IV群170~185



包含層出土土器IV群186~210



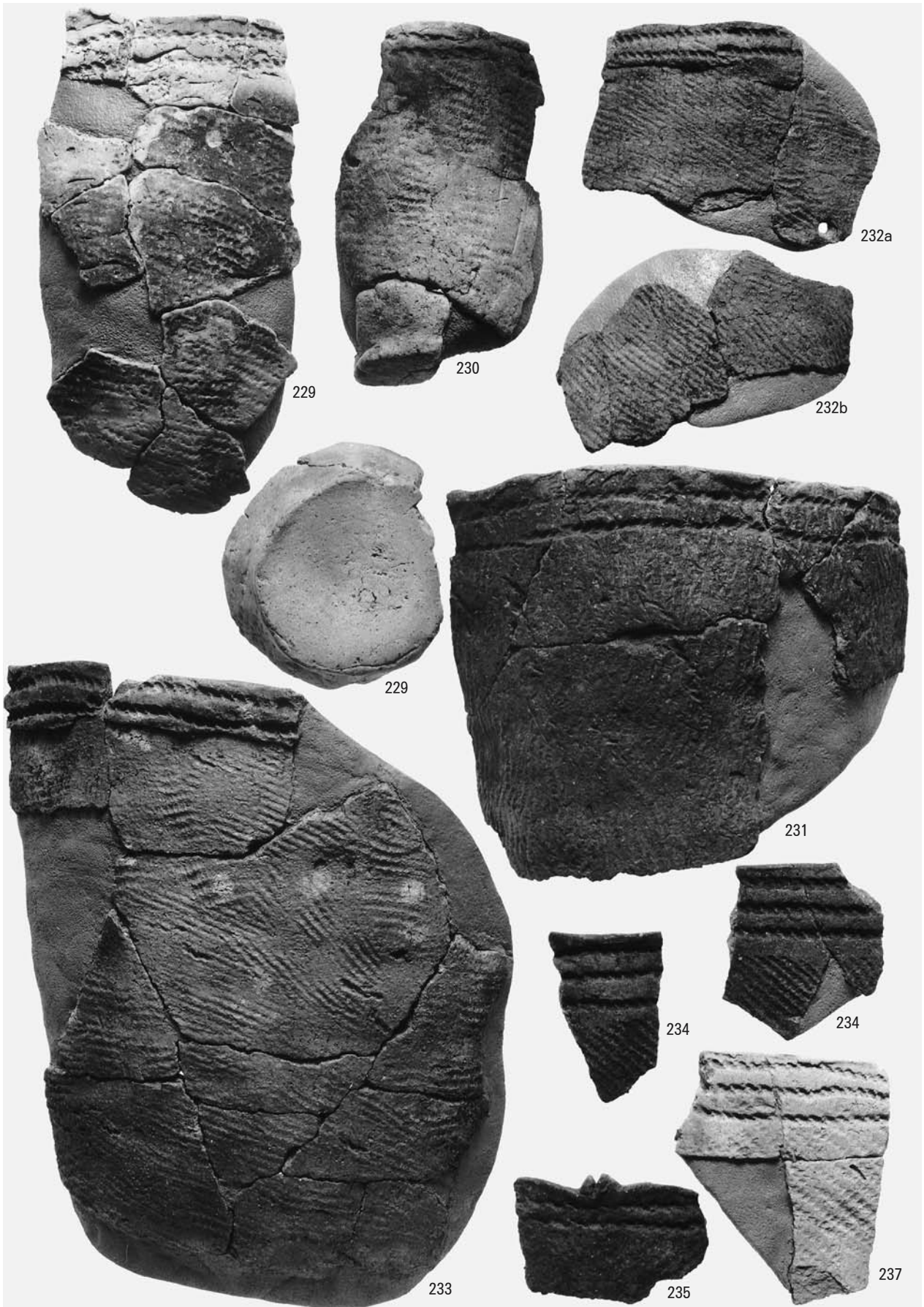
包含層出土土器IV群211~217a



包含層出土土器IV群217b~221, 223~225



包含層出土土器Ⅳ群226~228

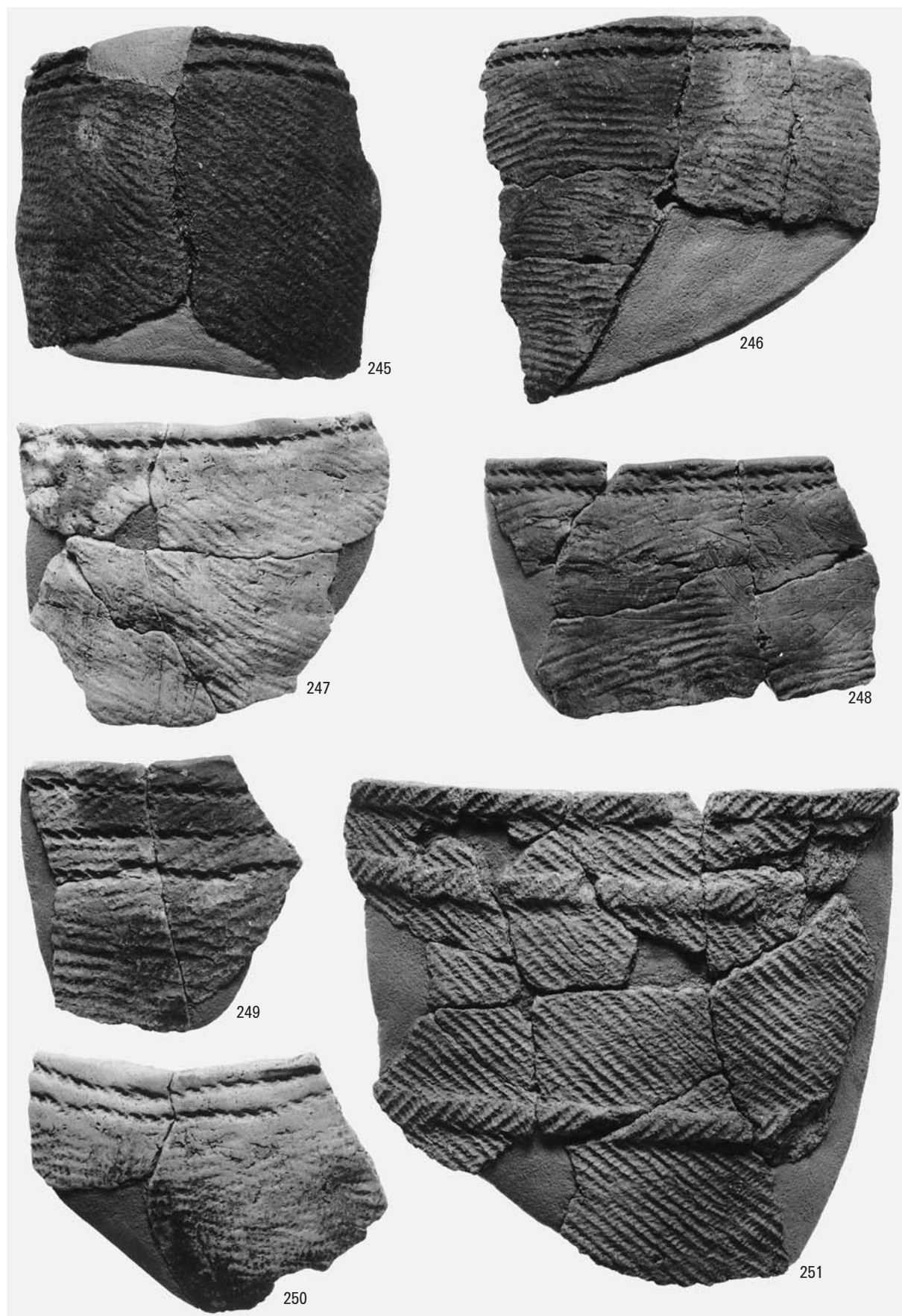


包含層出土土器Ⅳ群229~235, 237

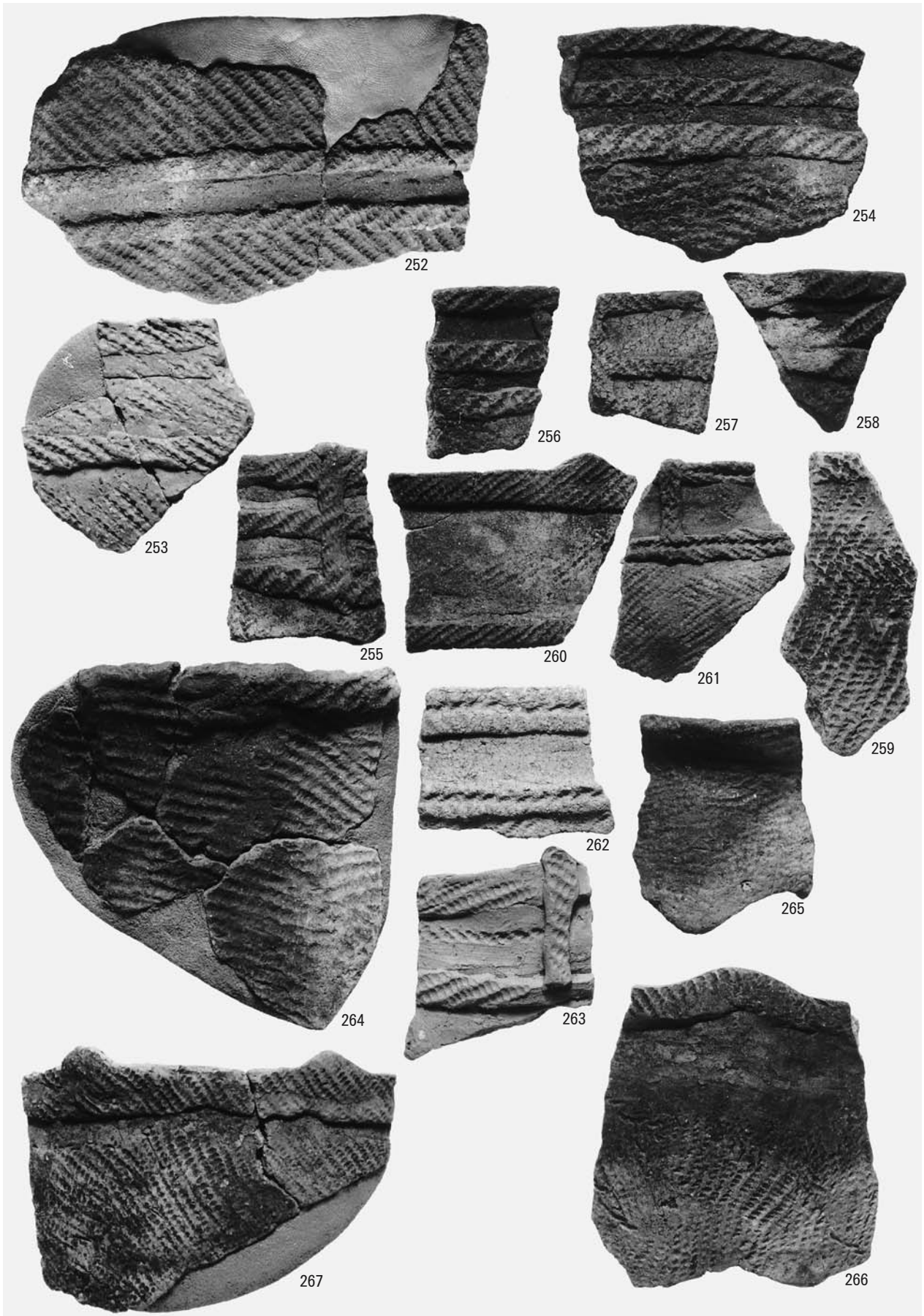




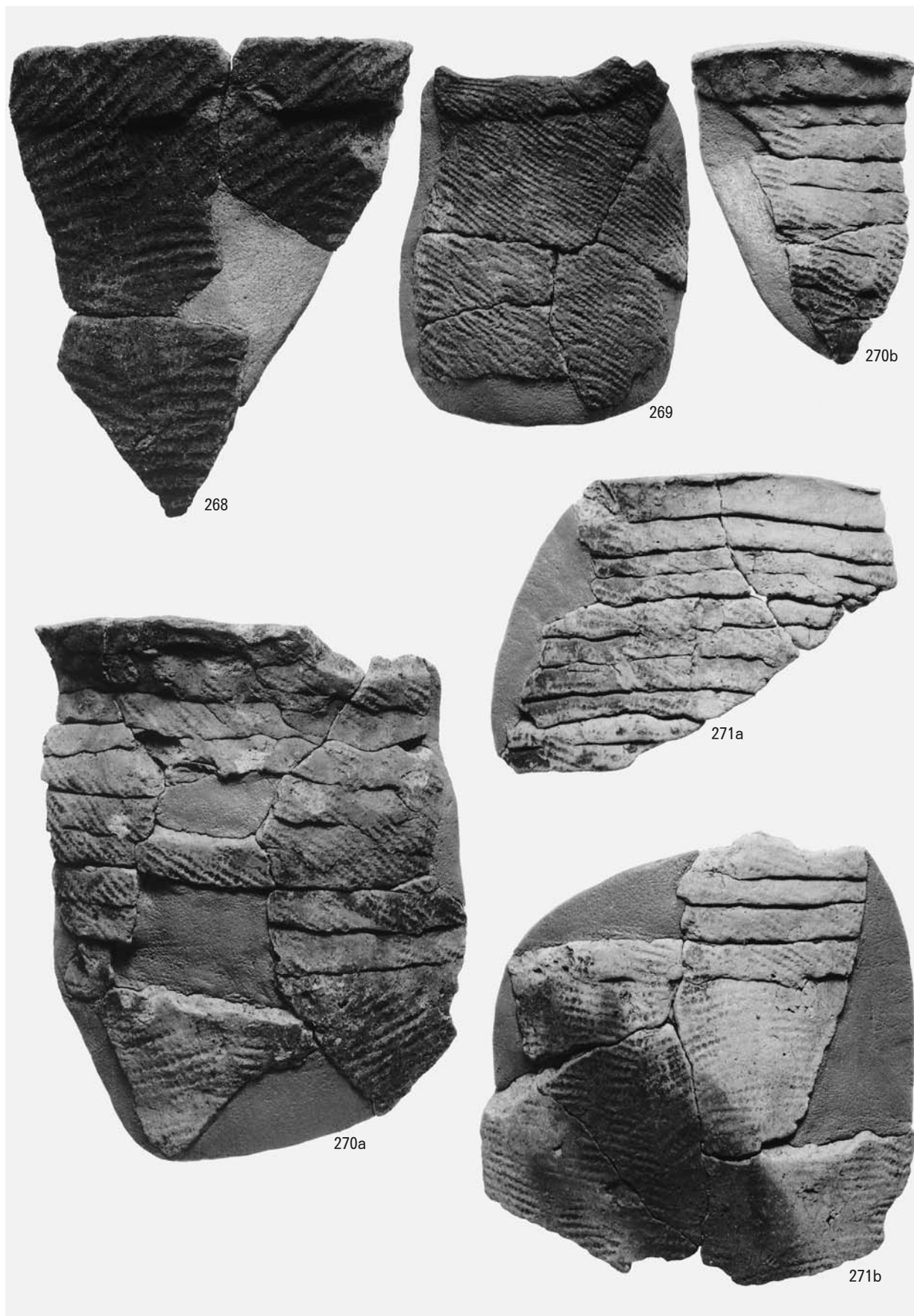
包含層出土土器IV群236, 238~244



包含層出土土器IV群245~251



包含層出土土器Ⅳ群252～267



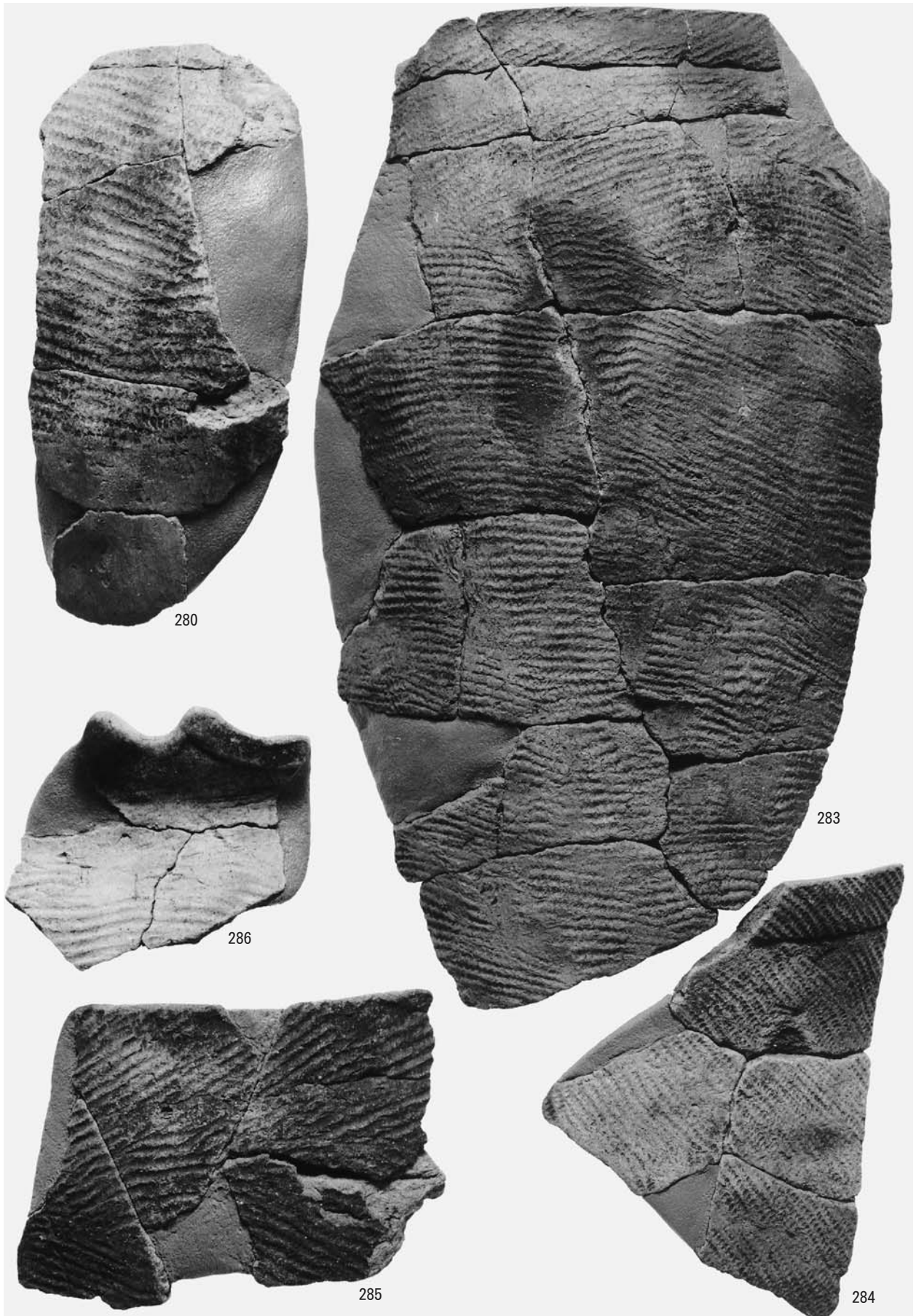
包含層出土土器Ⅳ群268~271



包含層出土土器Ⅳ群272~274



包含層出土土器IV群275~279, 281, 282

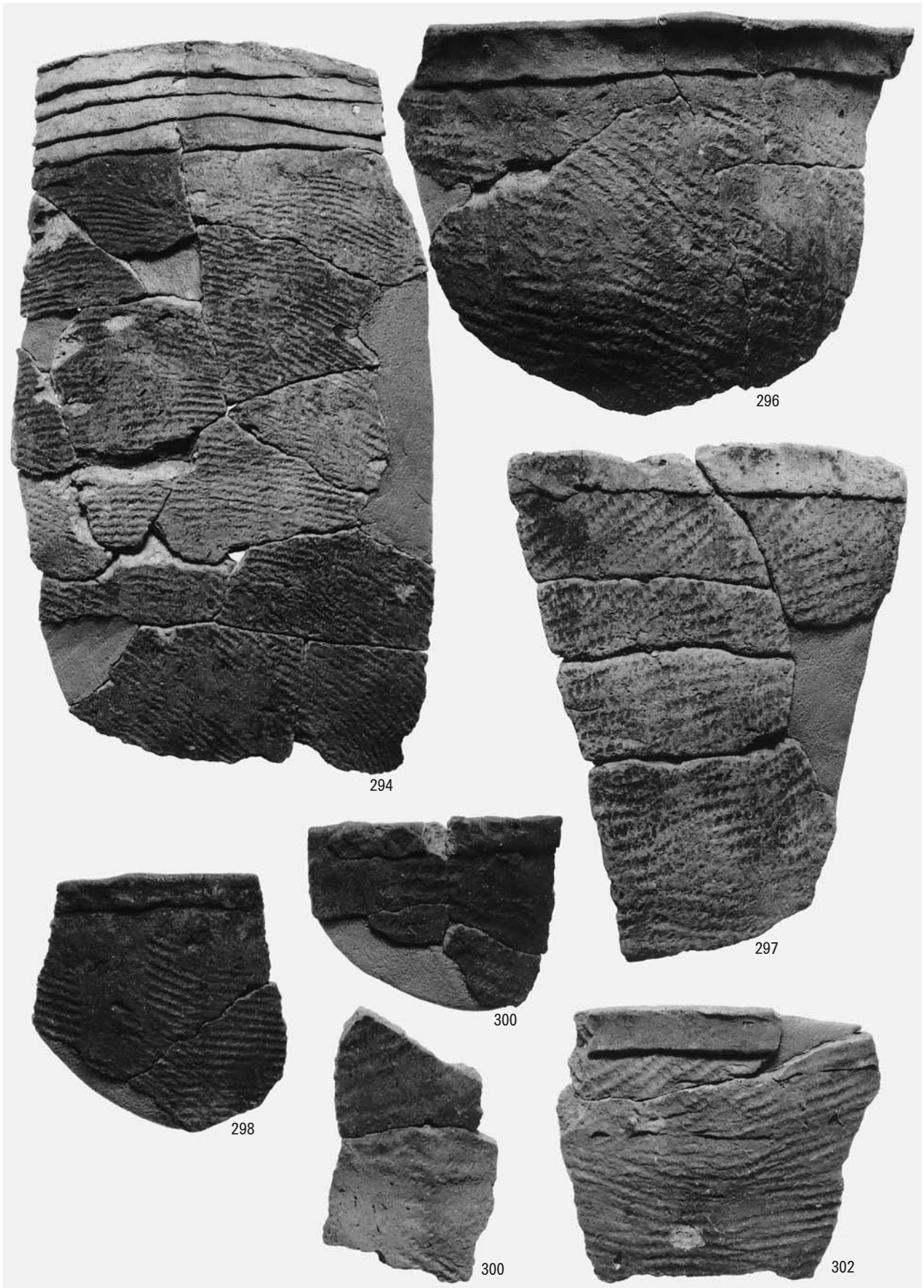


包含層出土土器280, 283~286



包含層出土土器IV群287~293, 295

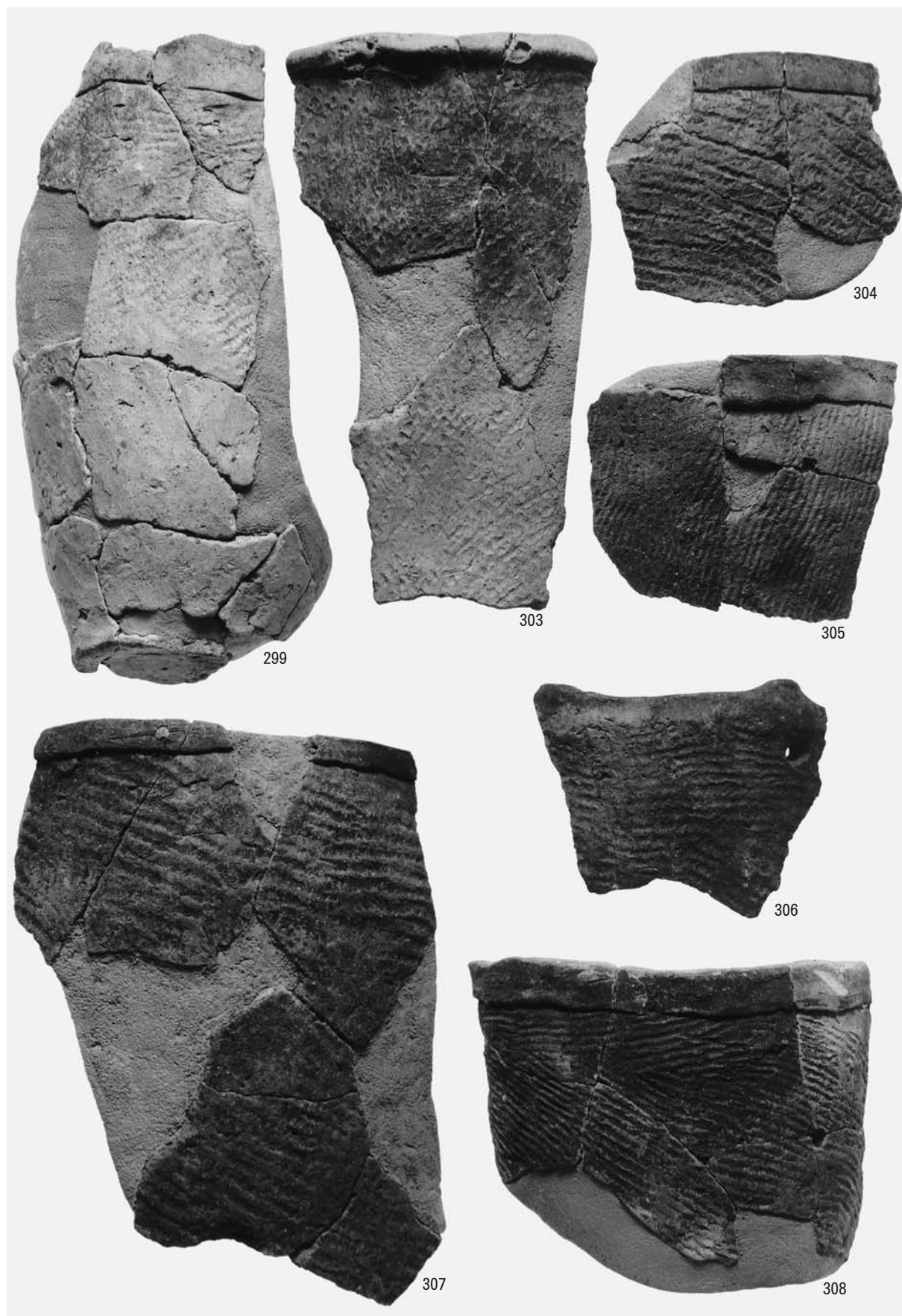




包含層出土土器IV群294, 296~298, 300, 302



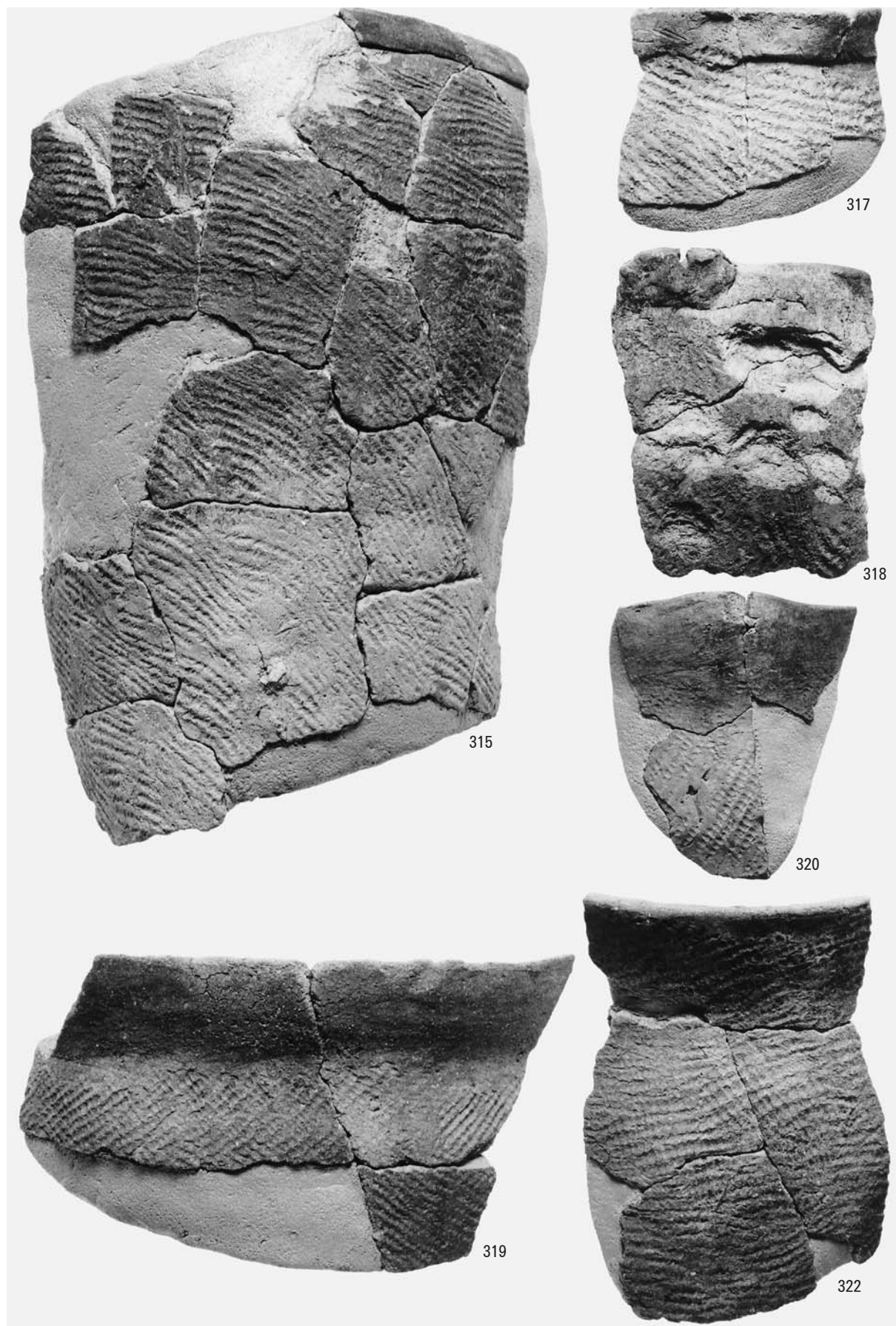
包含層出土土器IV群301, 343, 367, 439



包含層出土土器IV群299, 303~308



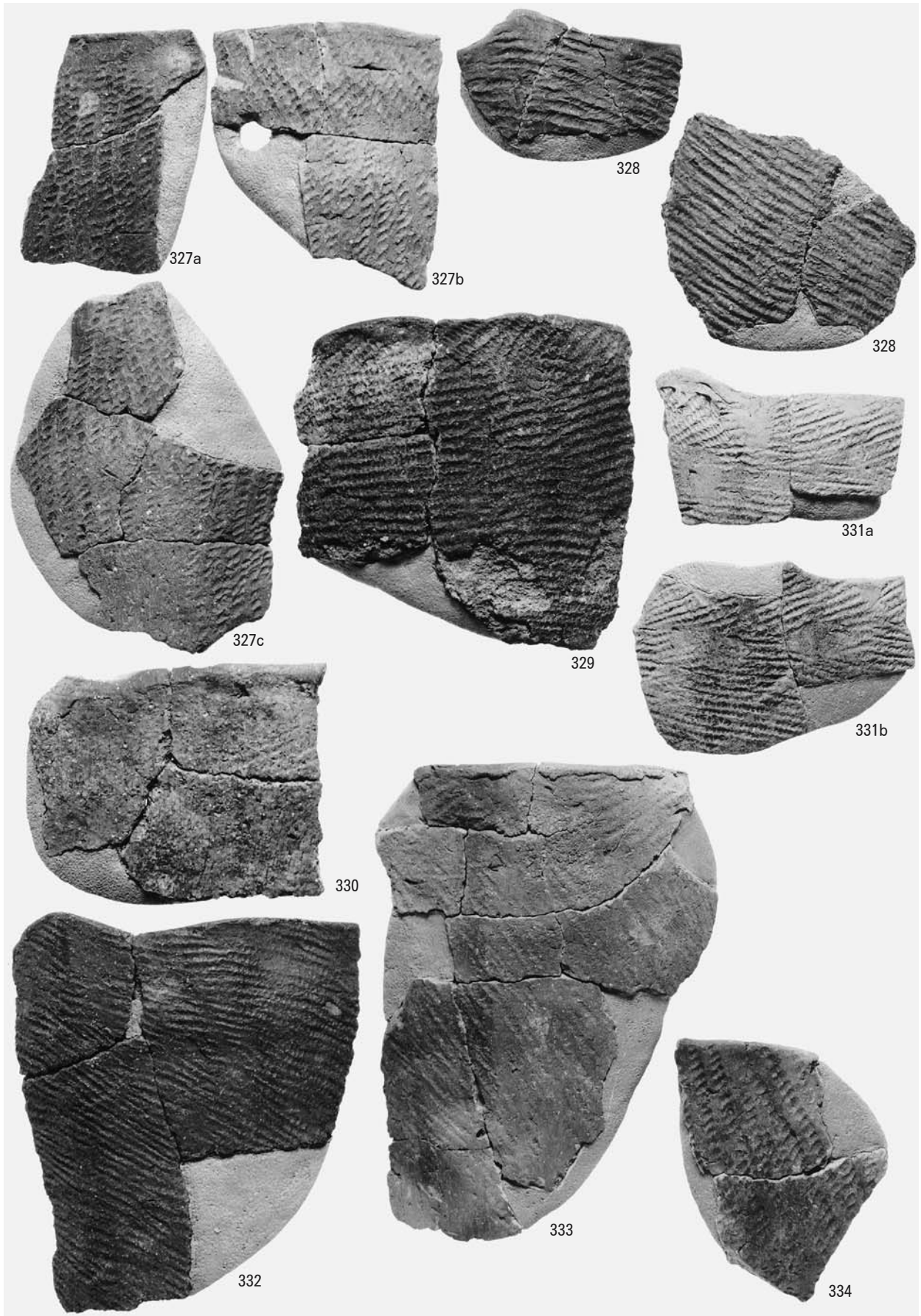
包含層出土土器IV群309~314



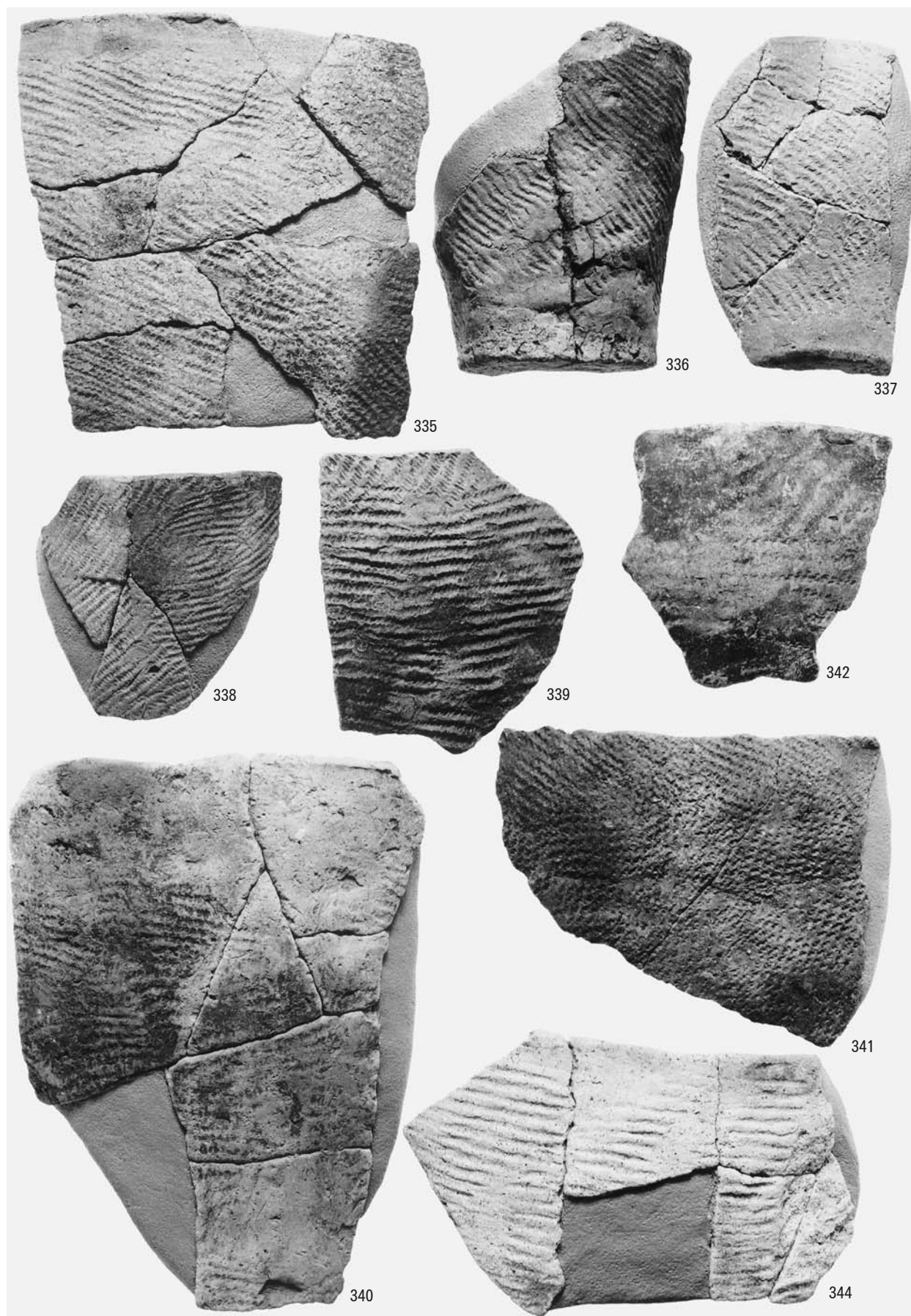
包含層出土土器IV群315, 317~320, 322



包含層出土土器IV群316, 321, 323~326

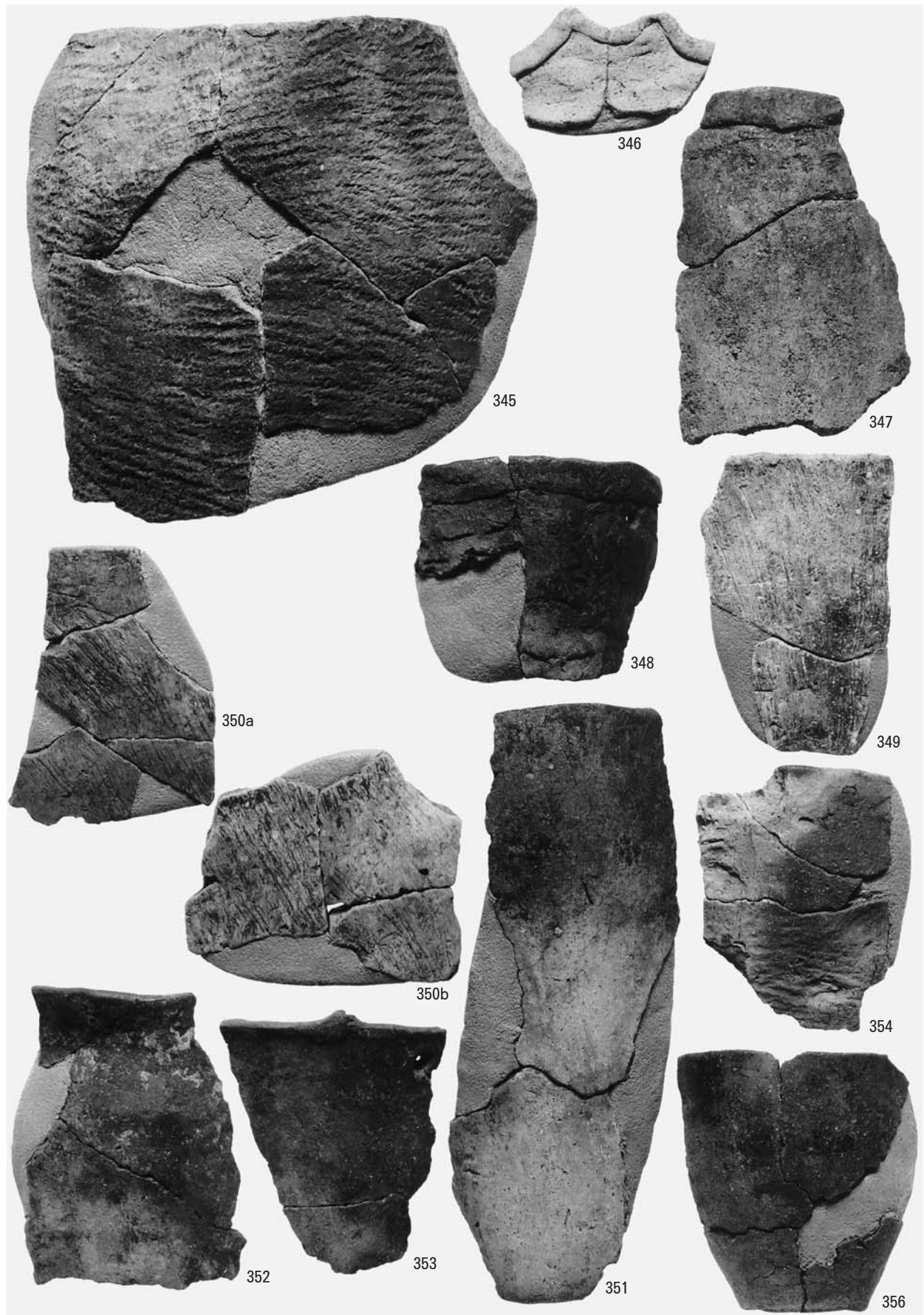


包含層出土土器IV群327~334

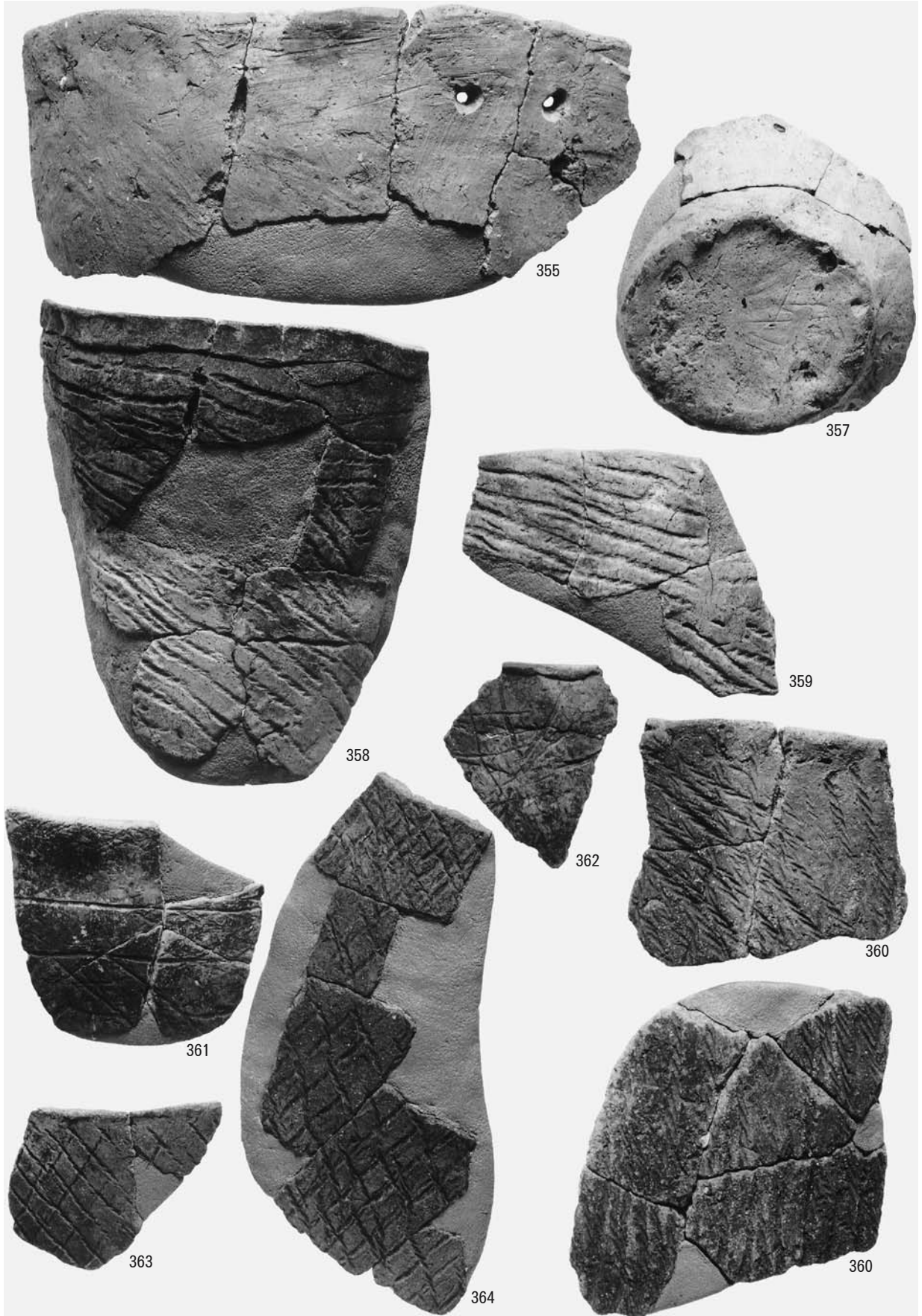


包含層出土土器IV群335~342, 344

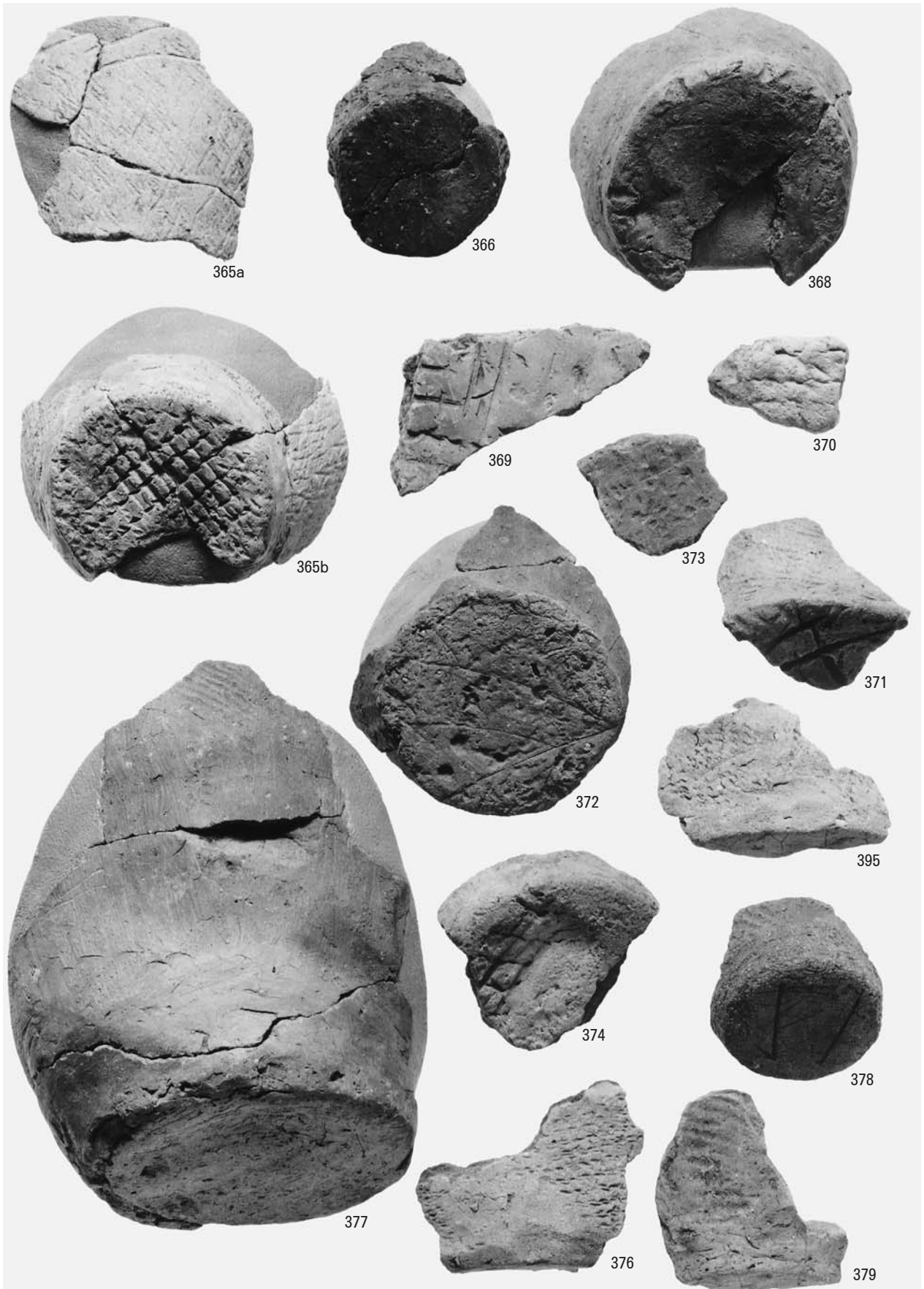




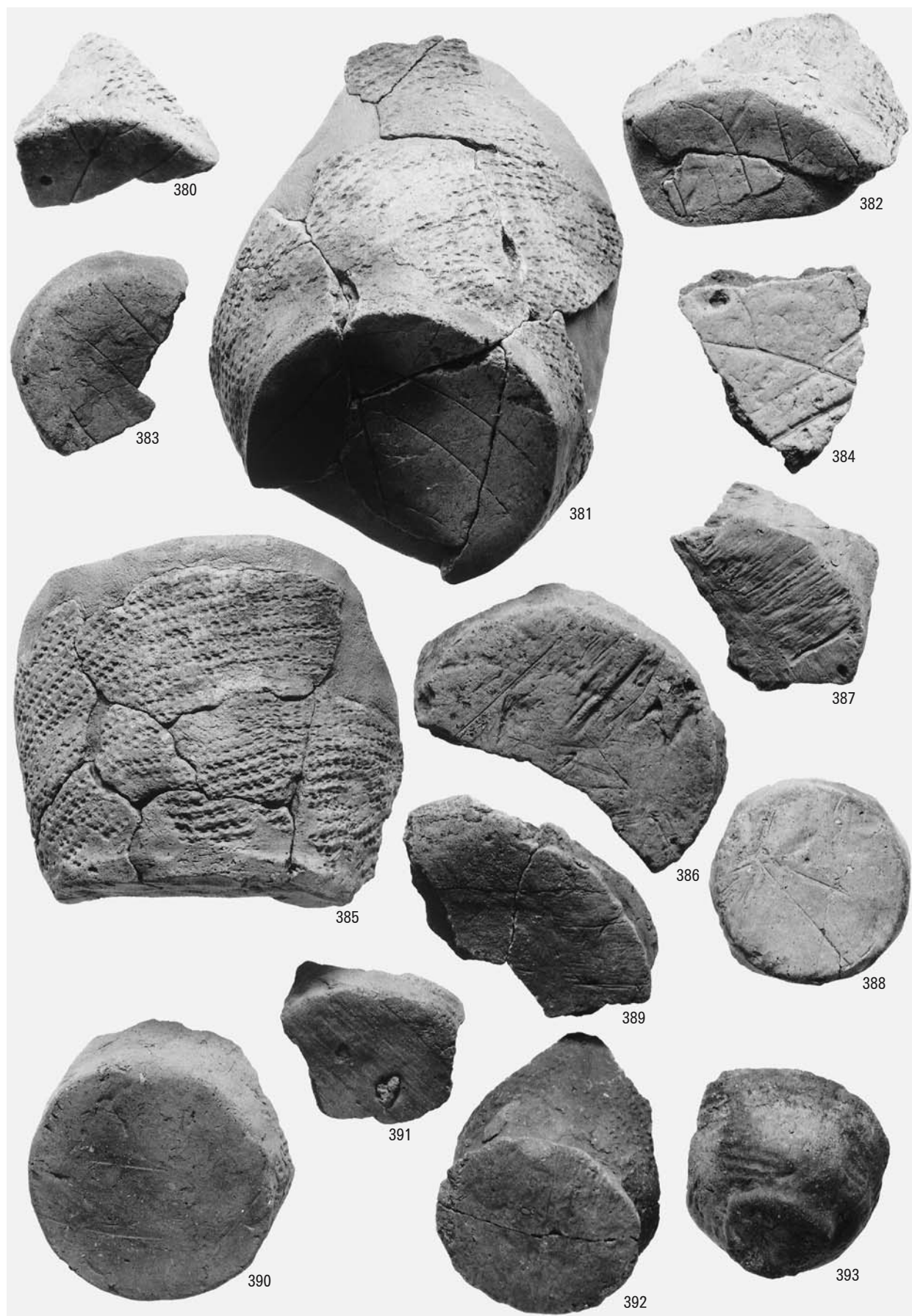
包含層出土土器IV群345~354, 356



包含層出土土器IV群355, 357~364

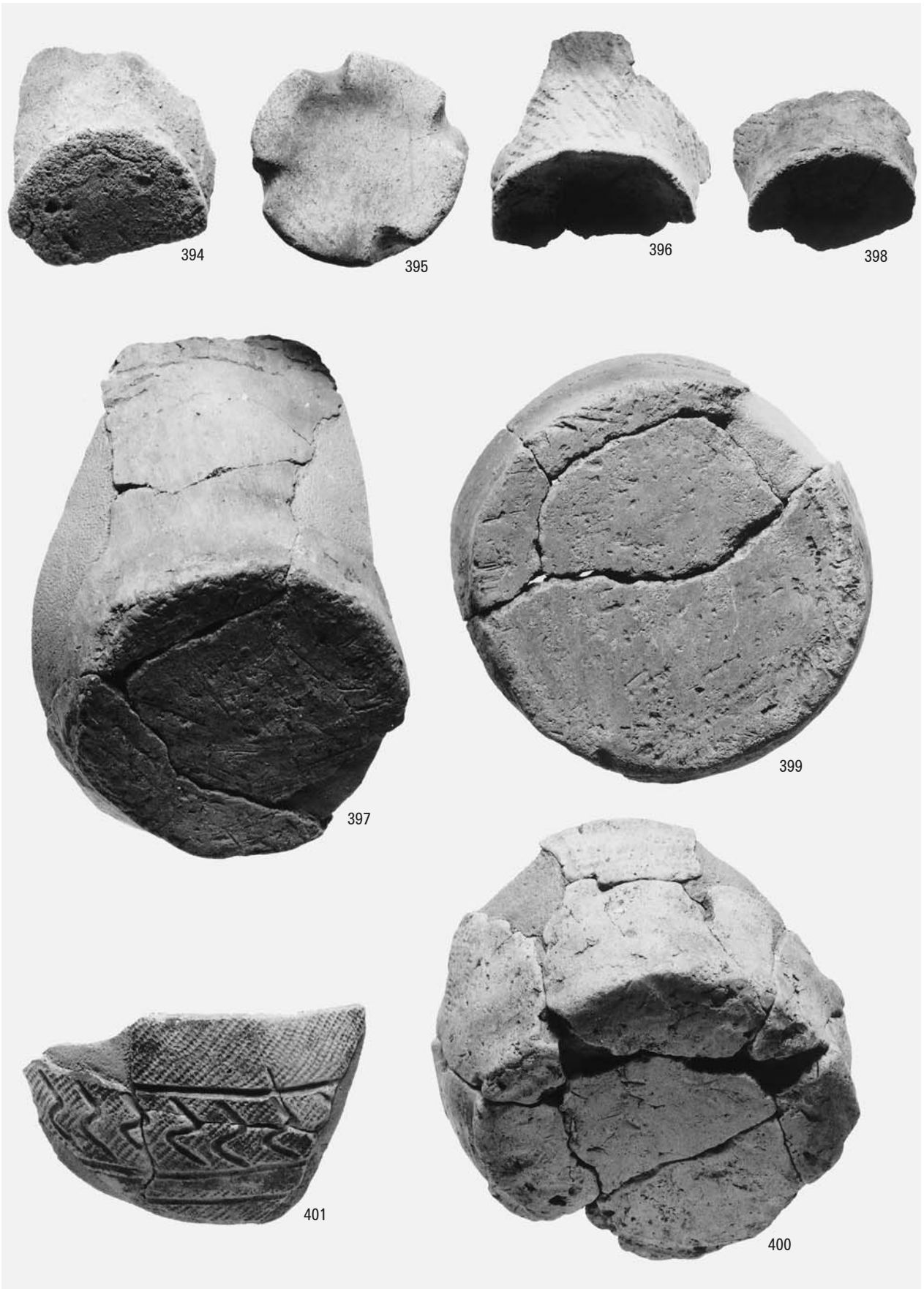


包含層出土土器IV群365, 366, 368~379



包含層出土土器IV群380~393

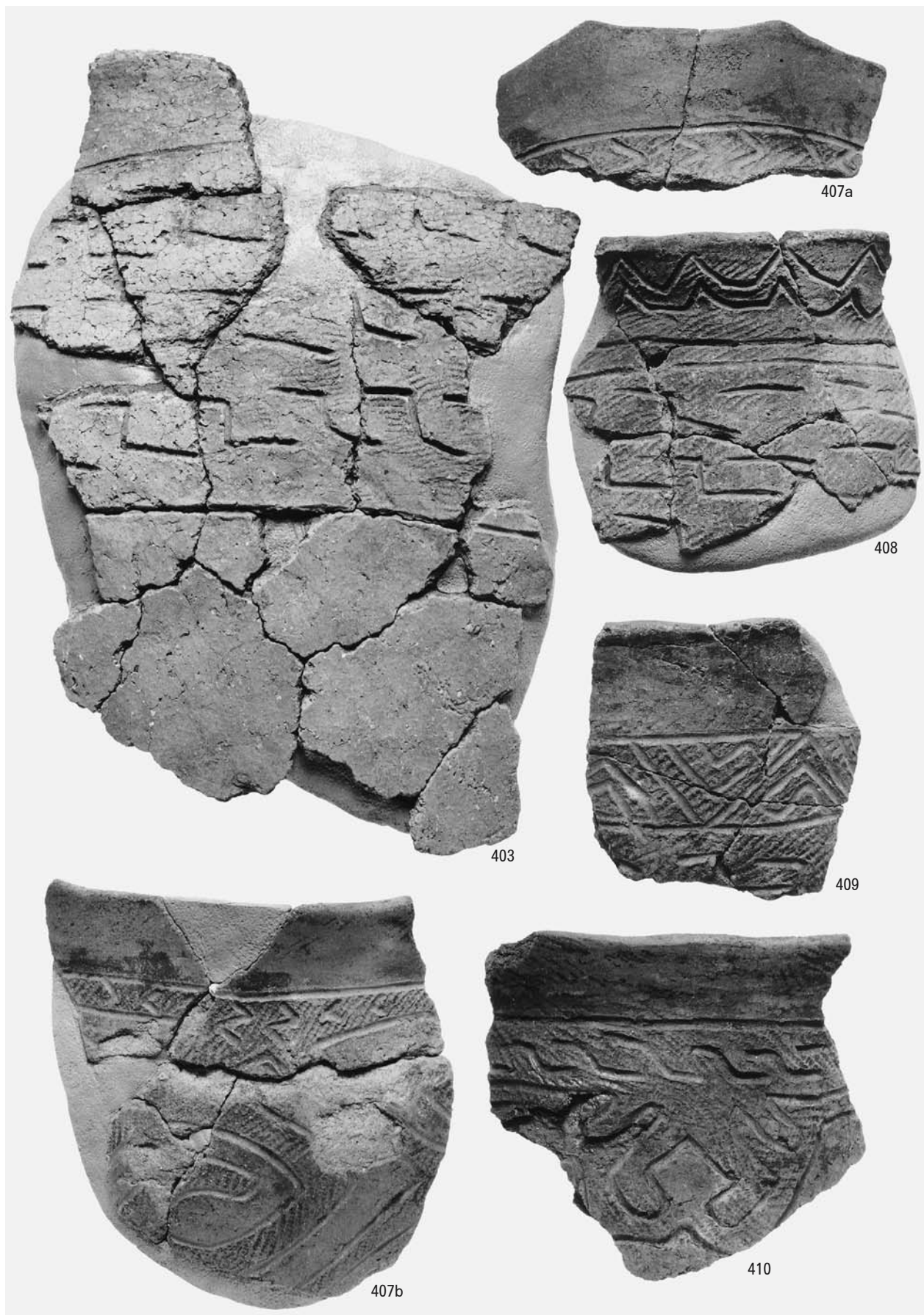
图版144



包含層出土土器IV群394~401



包含層出土土器IV群402, 404, 406



包含層出土土器Ⅳ群403, 407~410



包含層出土土器IV群405, 411, 412

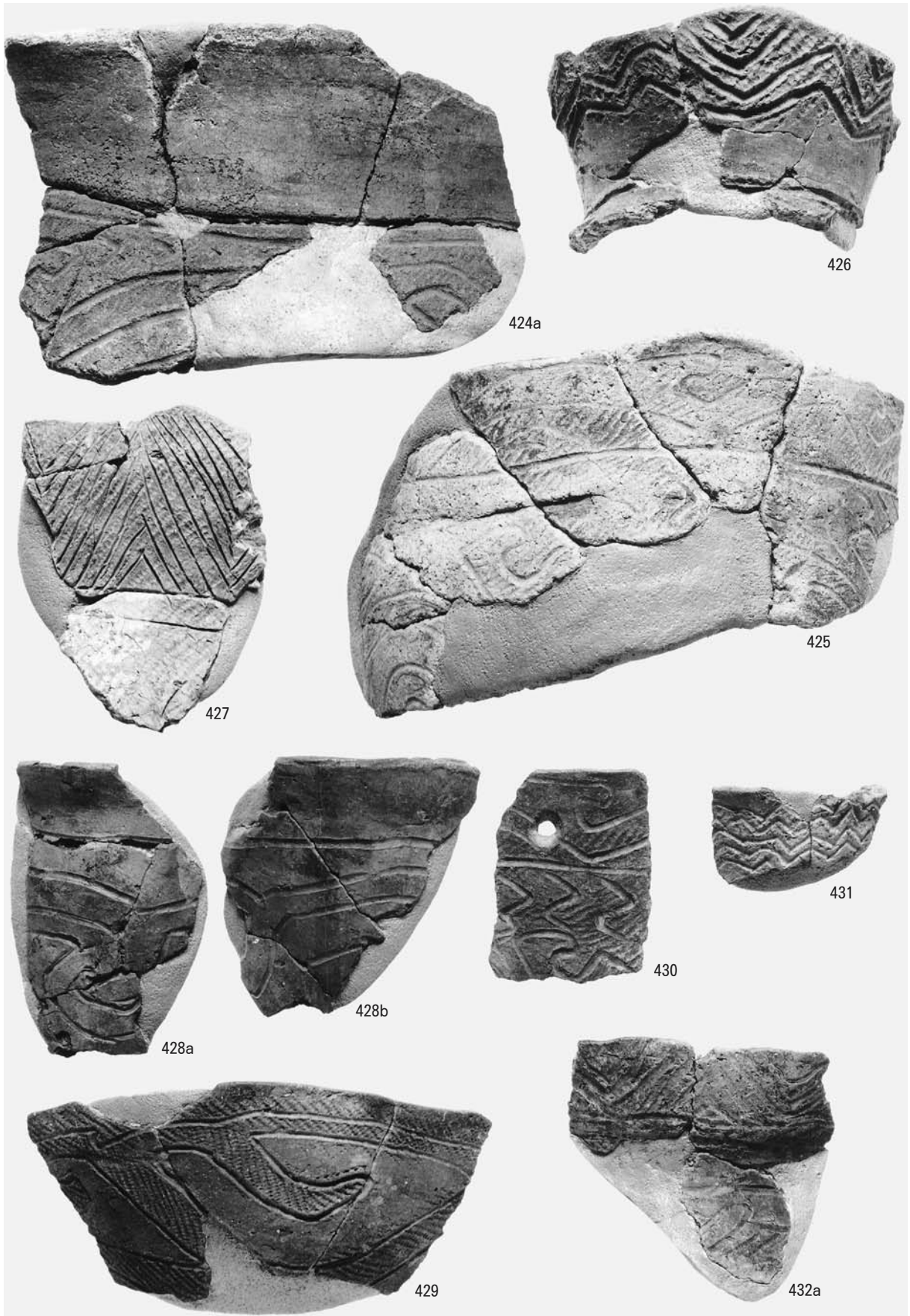




包含層出土土器IV群413~417, 420~422



包含層出土土器IV群418, 419, 423, 424b



包含層出土土器IV群424a, 425~432a



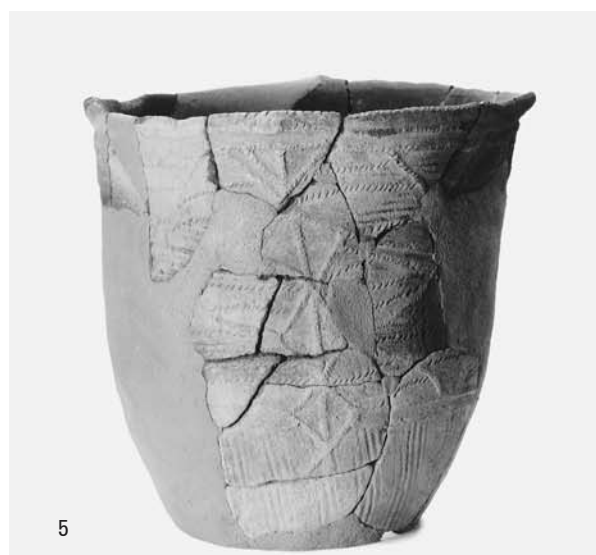
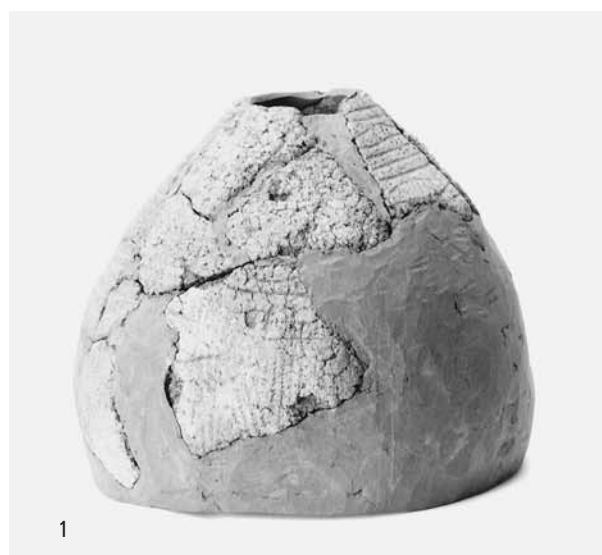
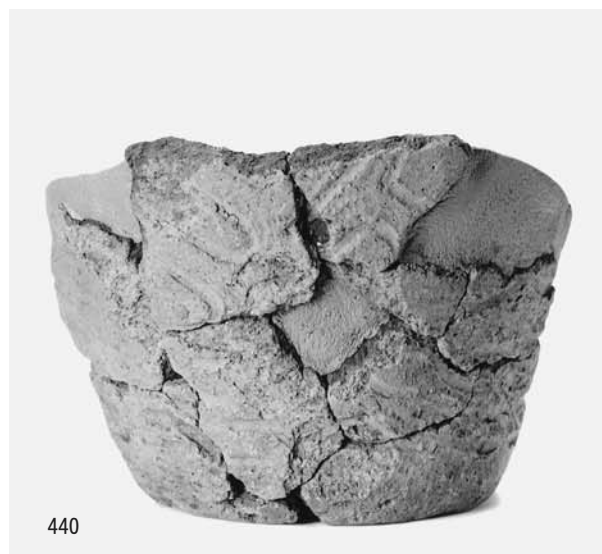
包含層出土土器IV群432b, 433a, b, 434, 435



包含層出土土器IV群433c, d, 436~438, 441



包含層出土土器IV群442~445, 447



包含層出土土器IV群440, 446, VI群1, 5, 6 土製品 2



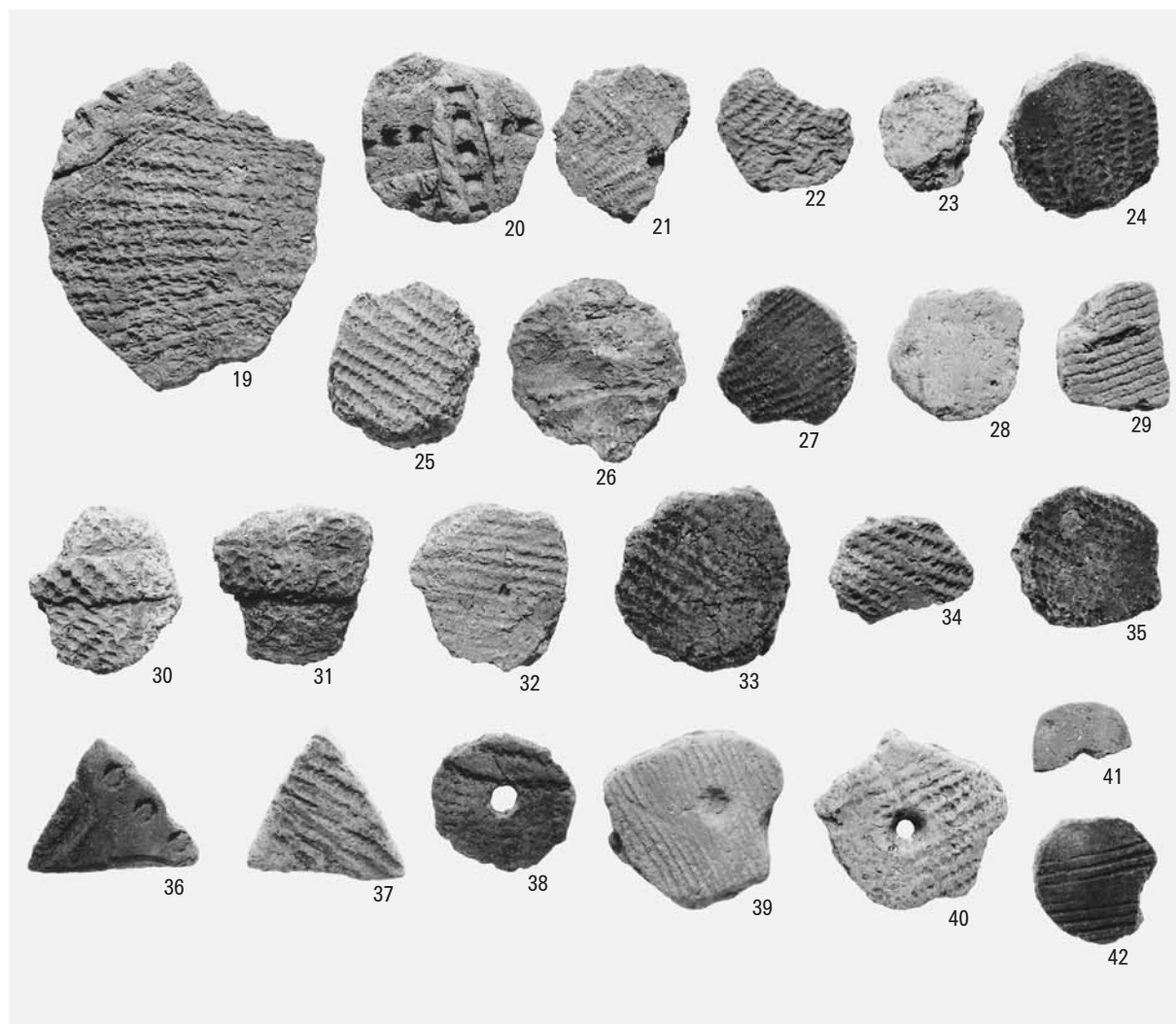
包含層出土土器VI群 2~4, 7, 8 土製品1, 3~6, 12~18



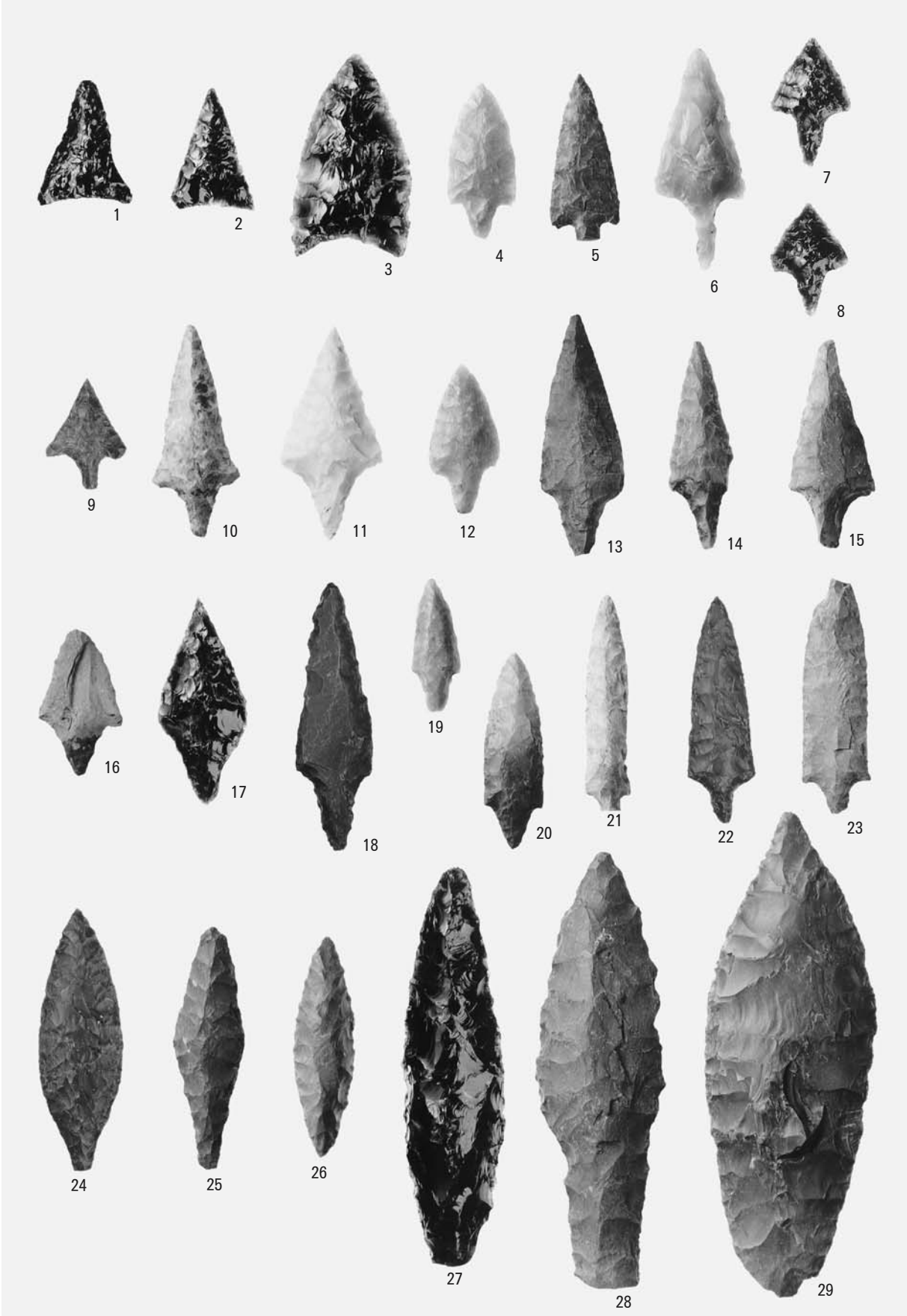
図版156



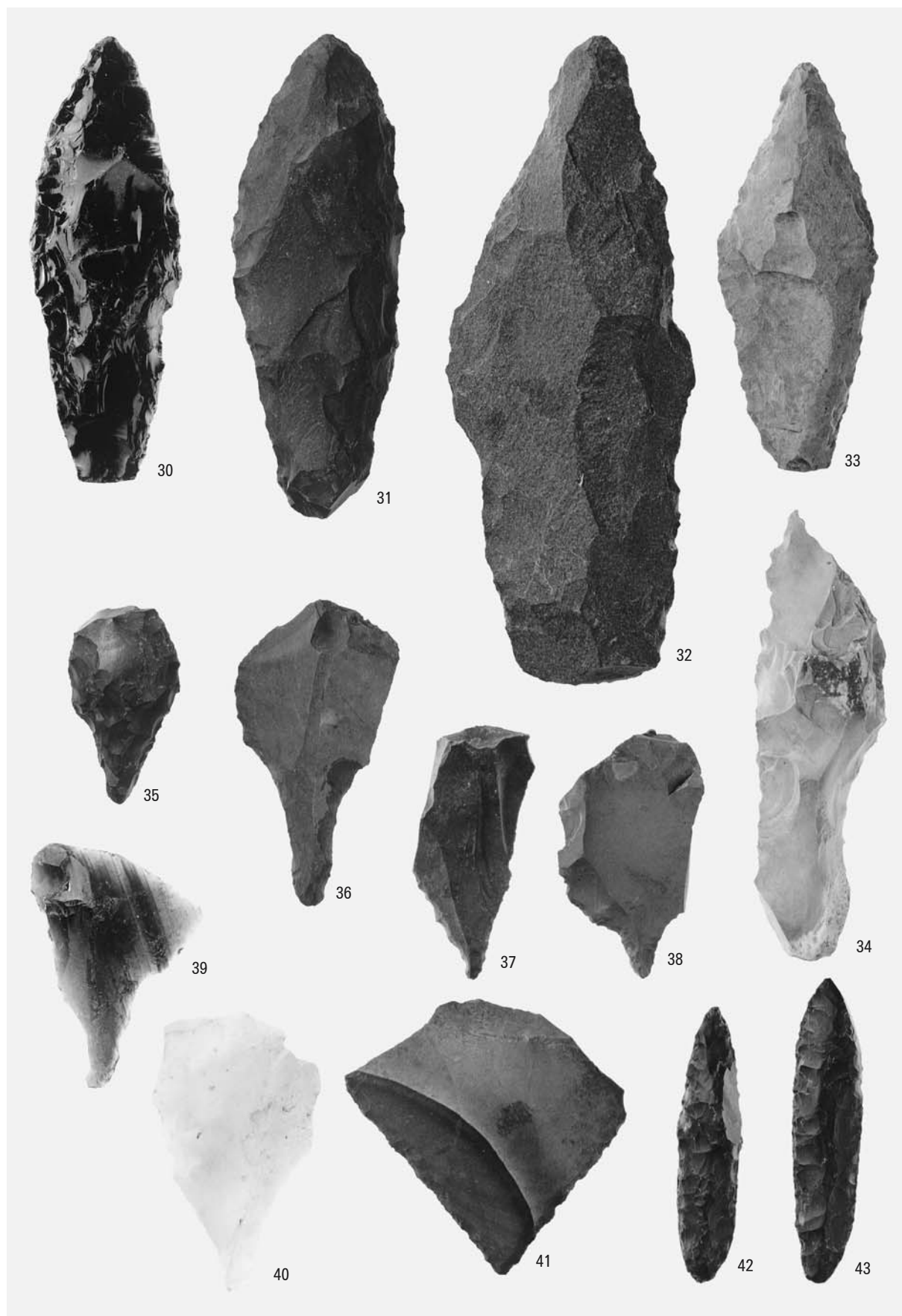
包含層出土土製品 7～11 石製品 1



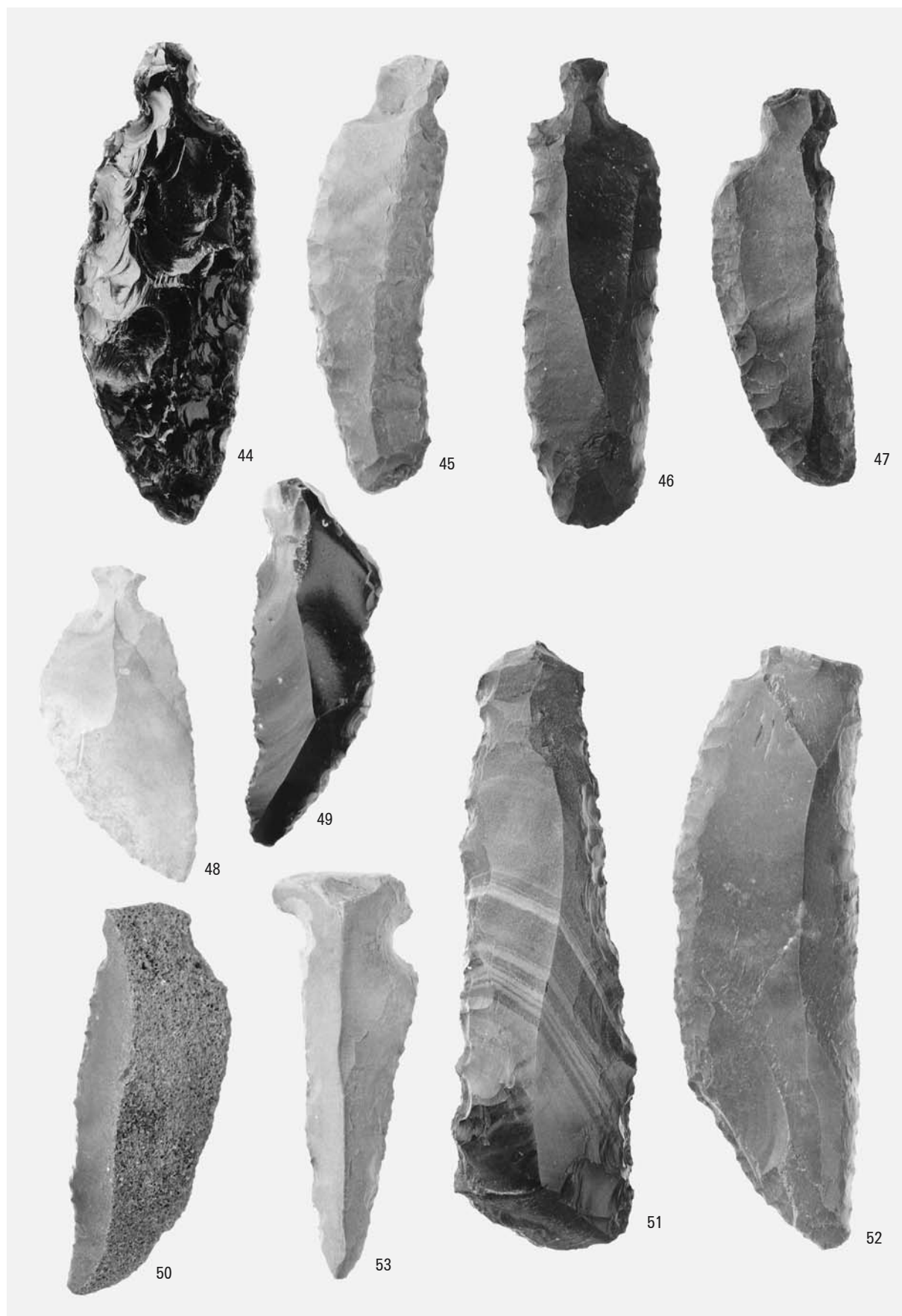
包含層出土土製品19~42 土製品1 正面, 側面



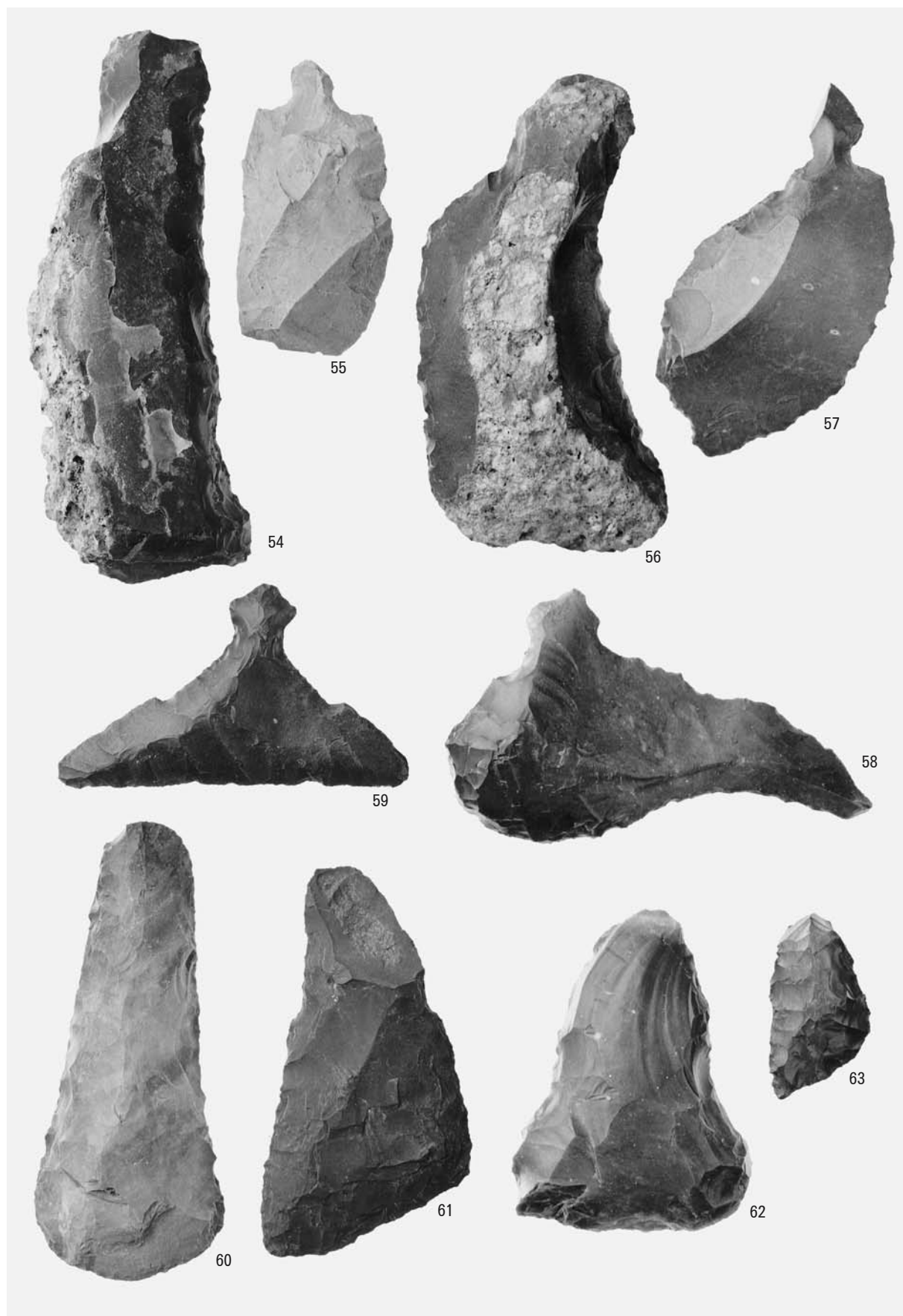
包含層出土石器 1 ~ 29



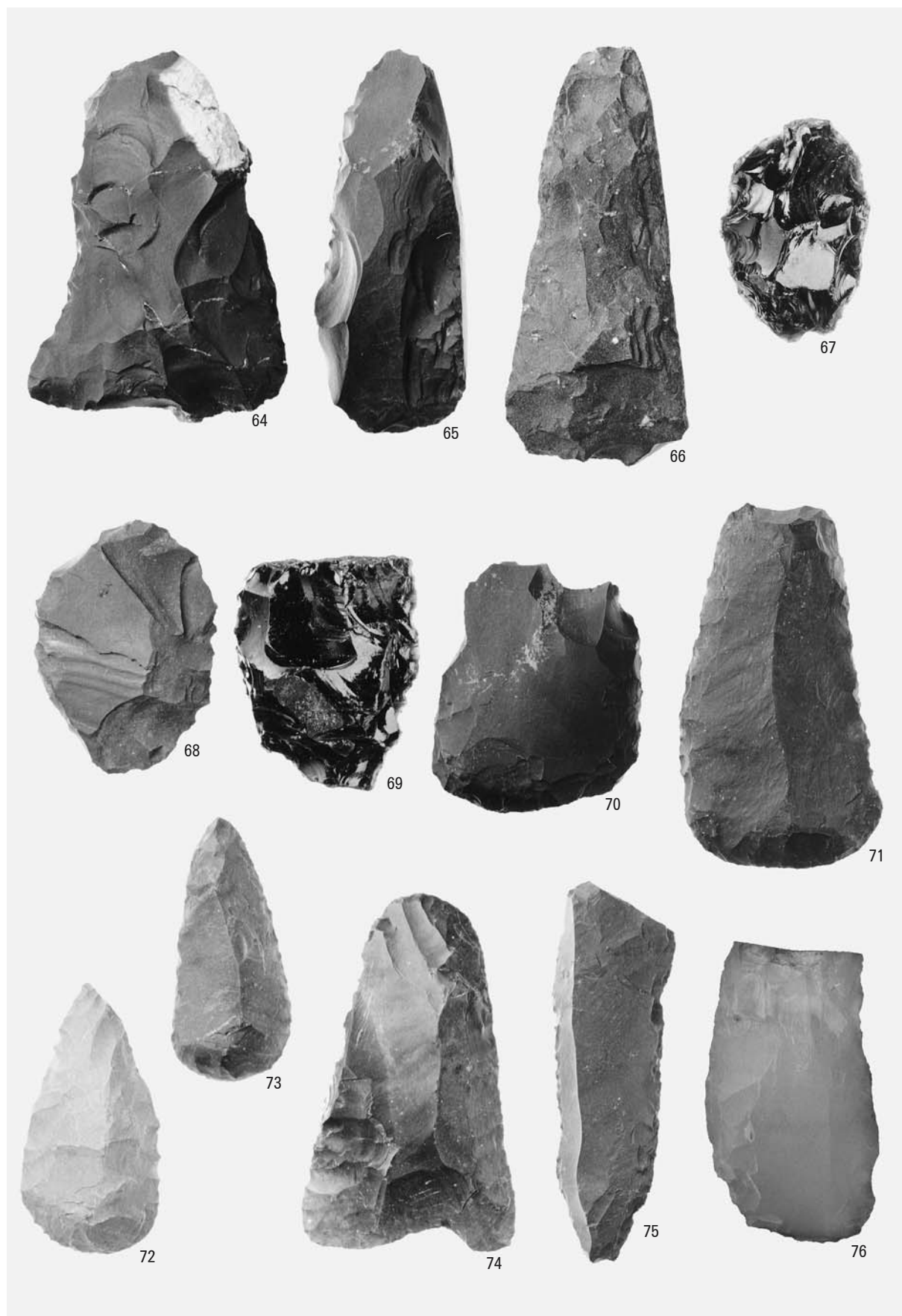
包含層出土石器30~43



包含層出土石器44~53



包含層出土石器54~63



包含層出土石器64~76

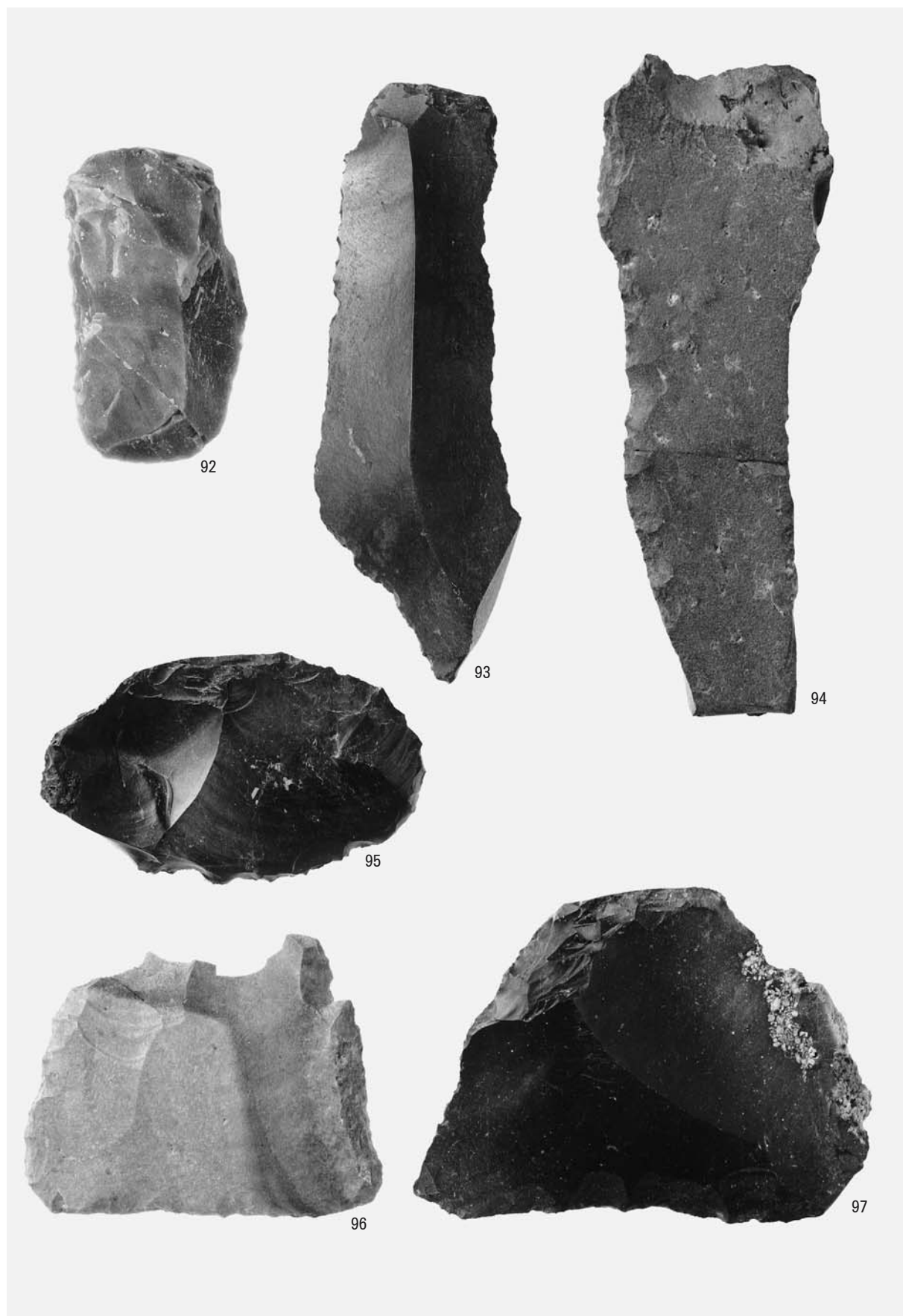


包含層出土石器77~85

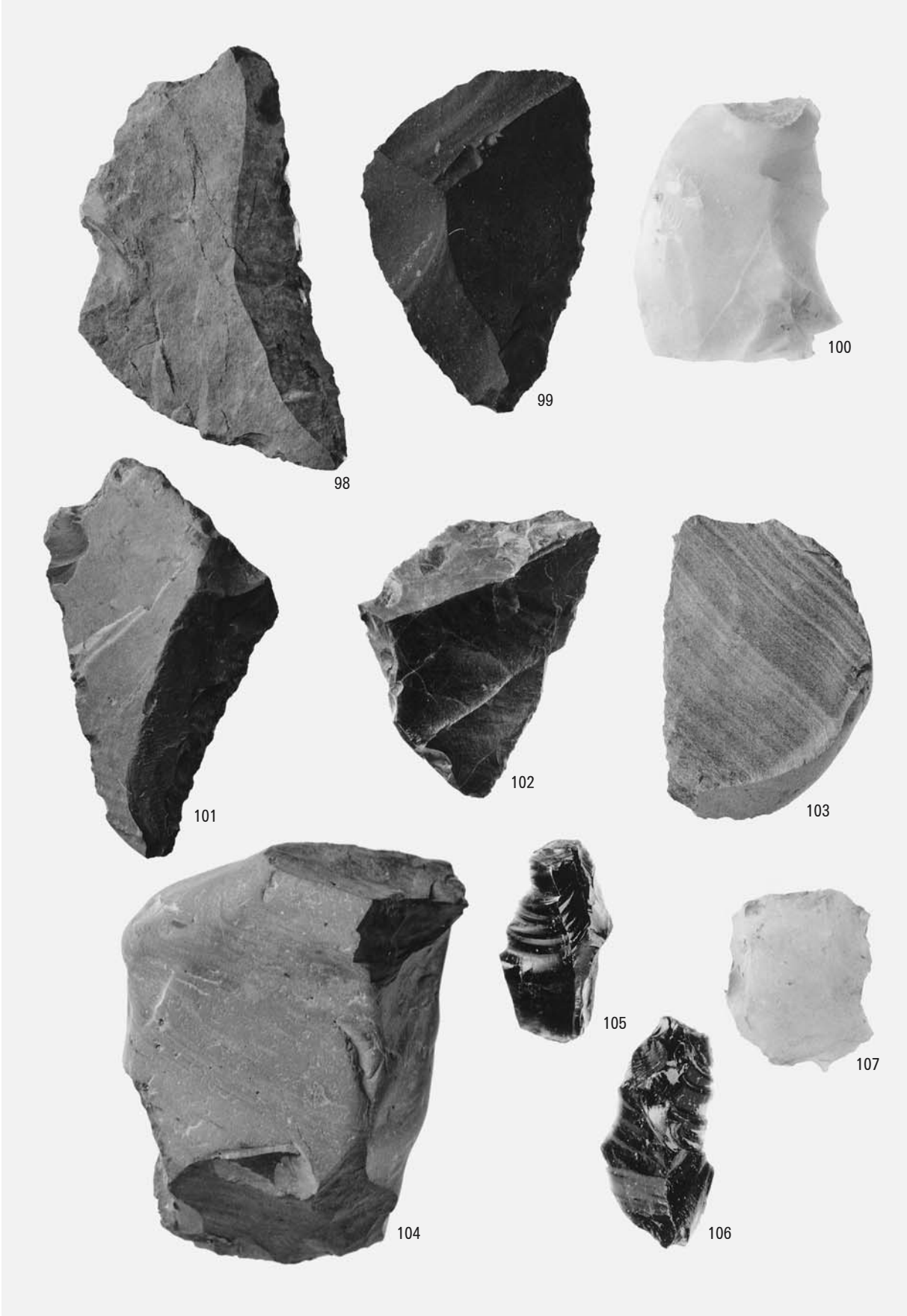




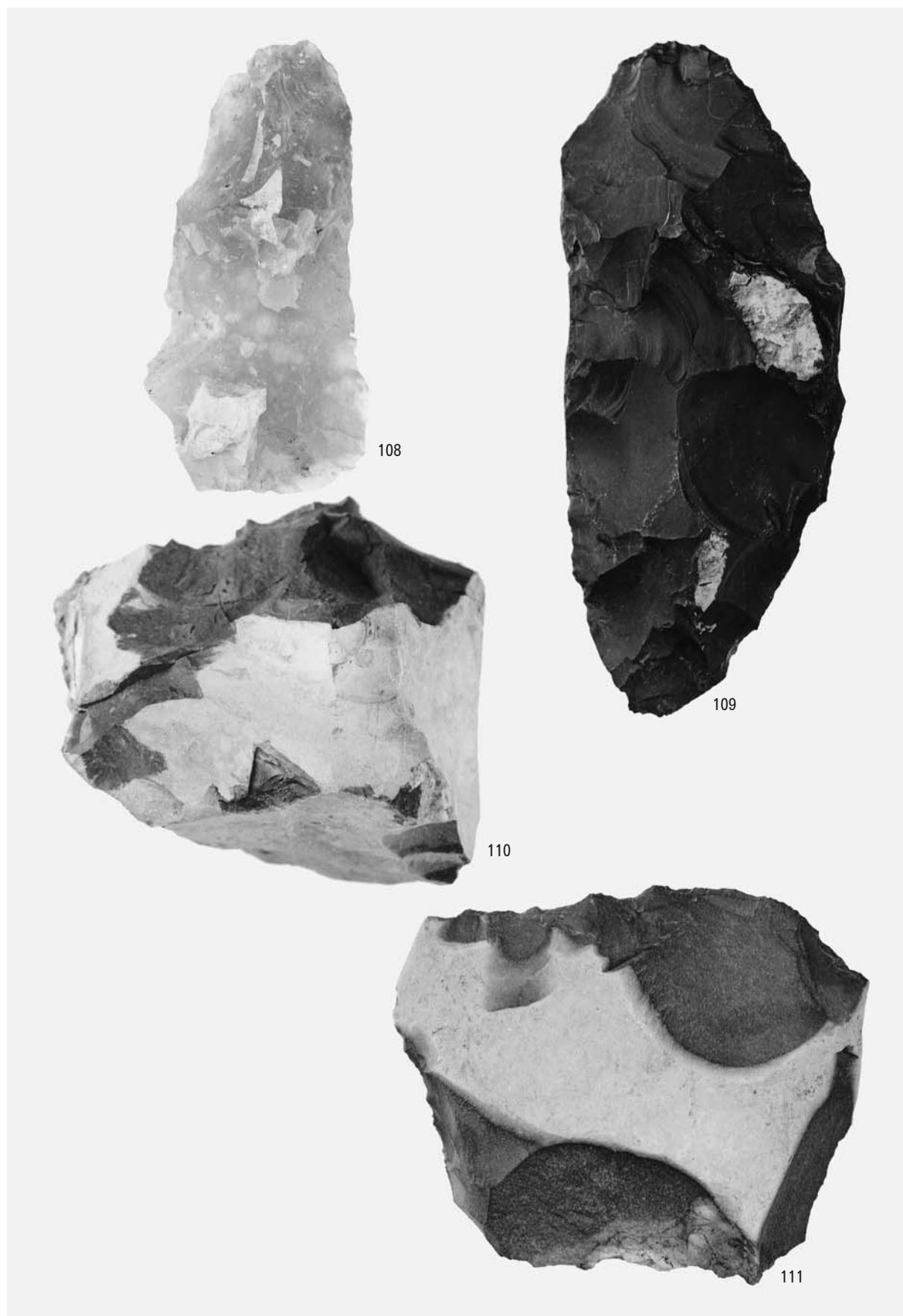
包含層出土石器86~91



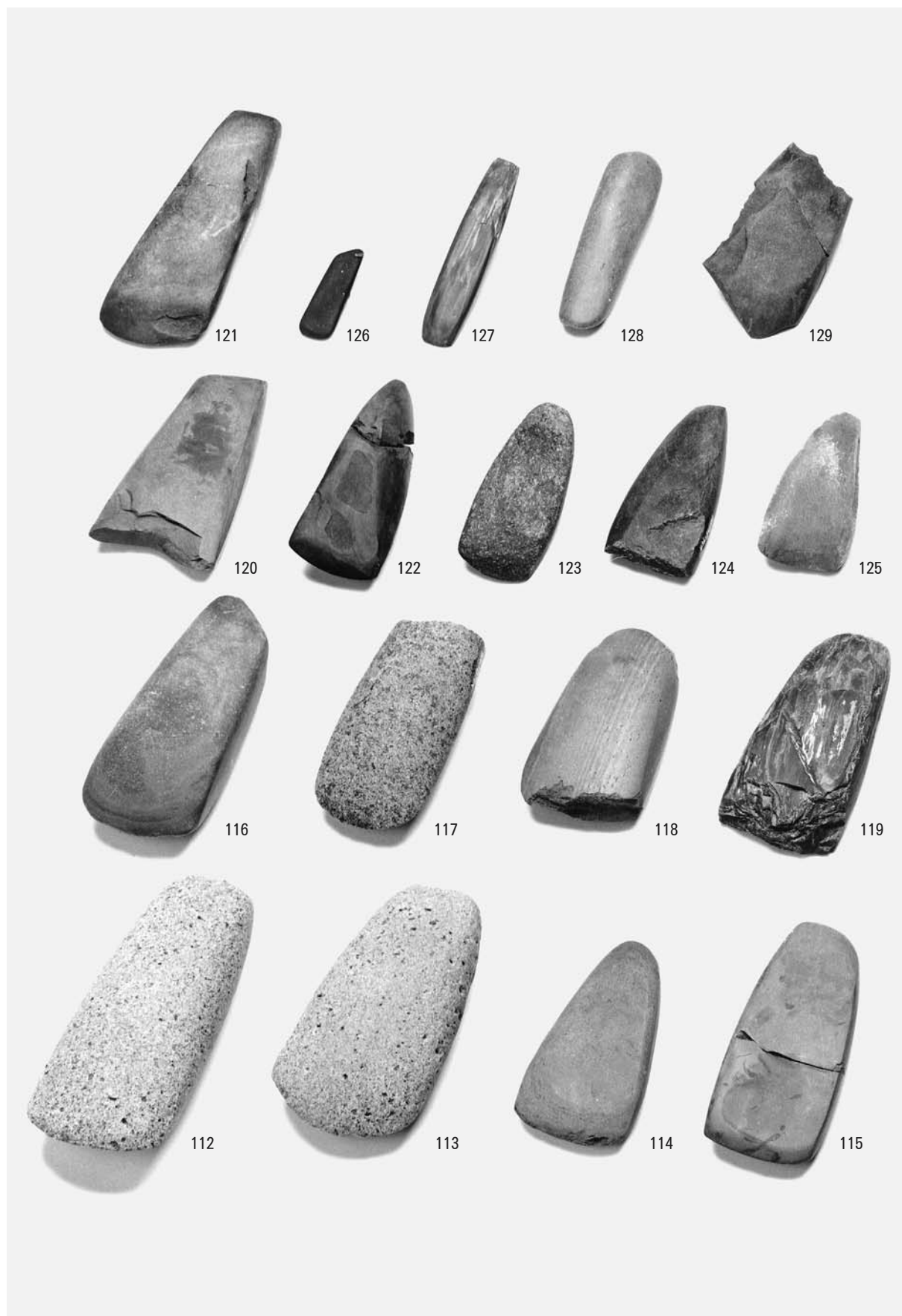
包含層出土石器92~97



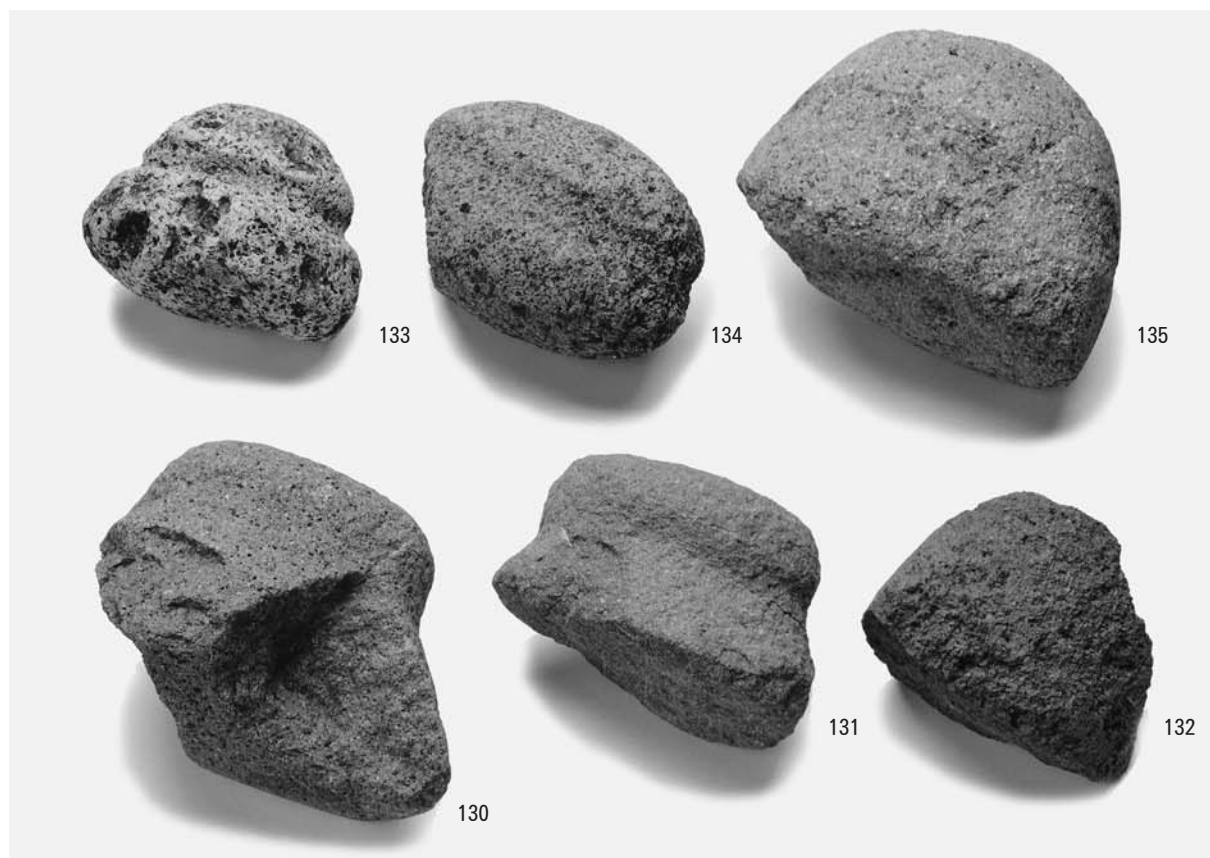
包含層出土石器98~107



包含層出土石器108~111

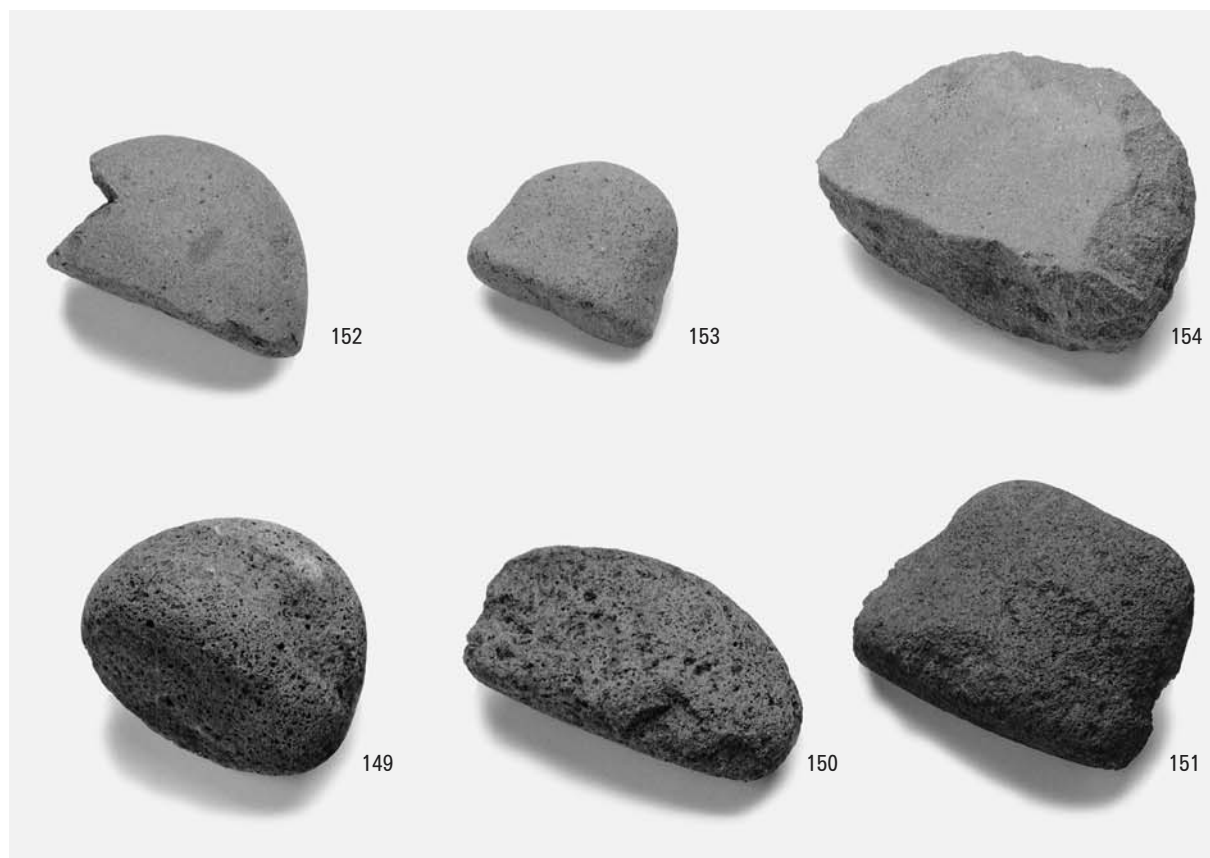
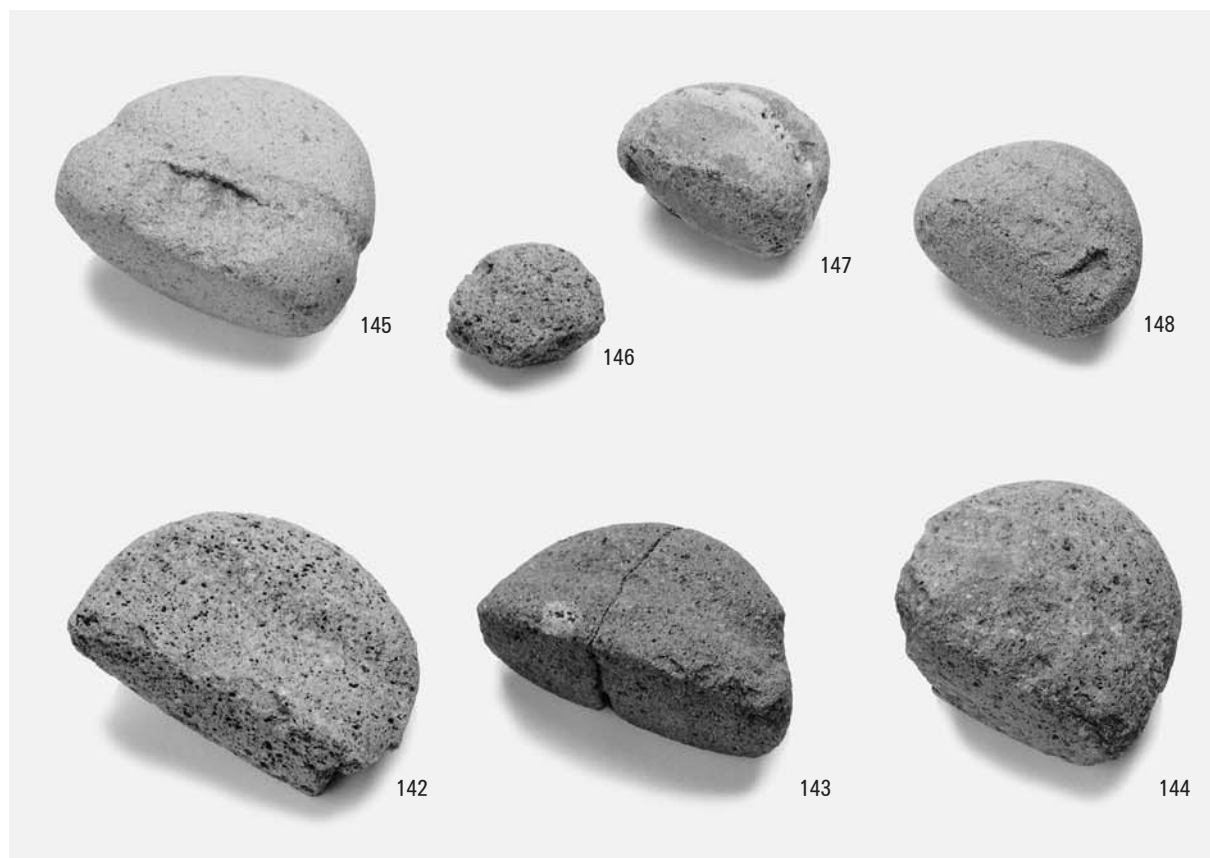


包含層出土石器112~129

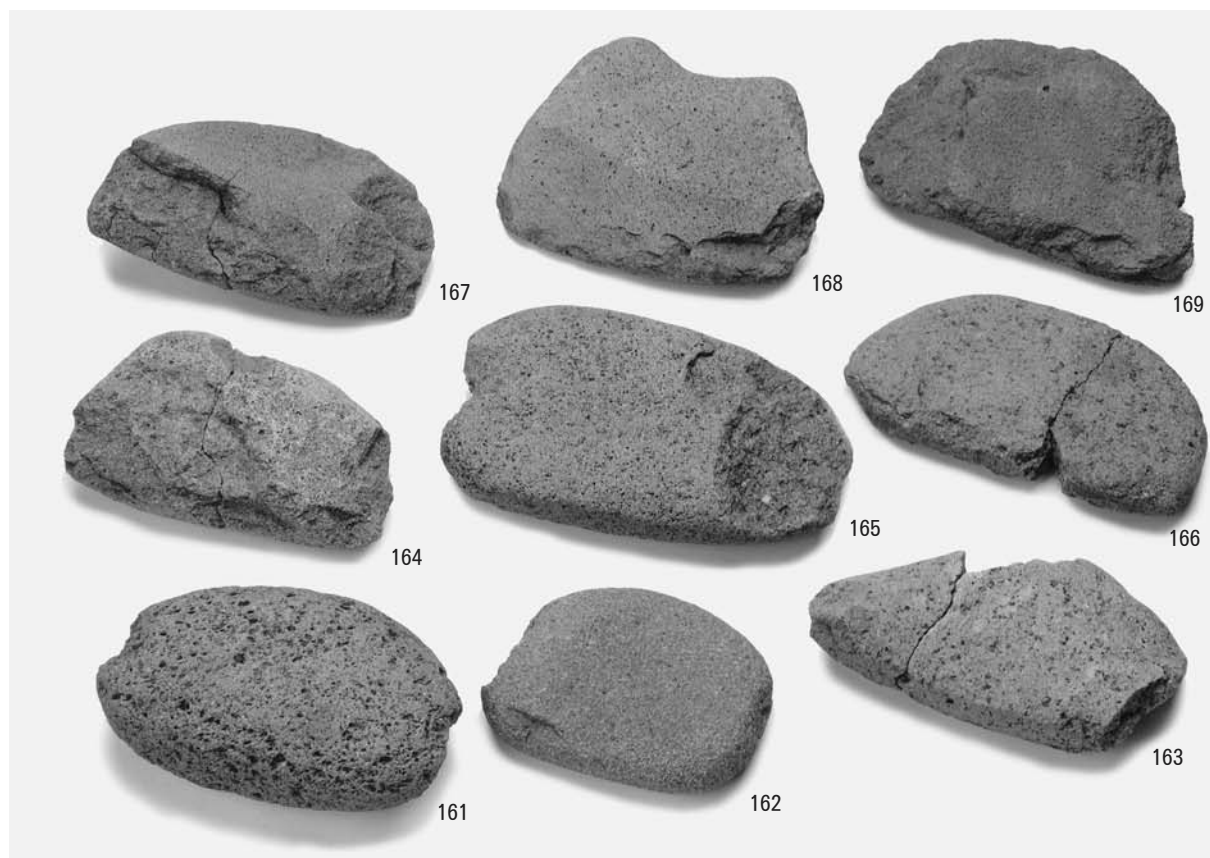
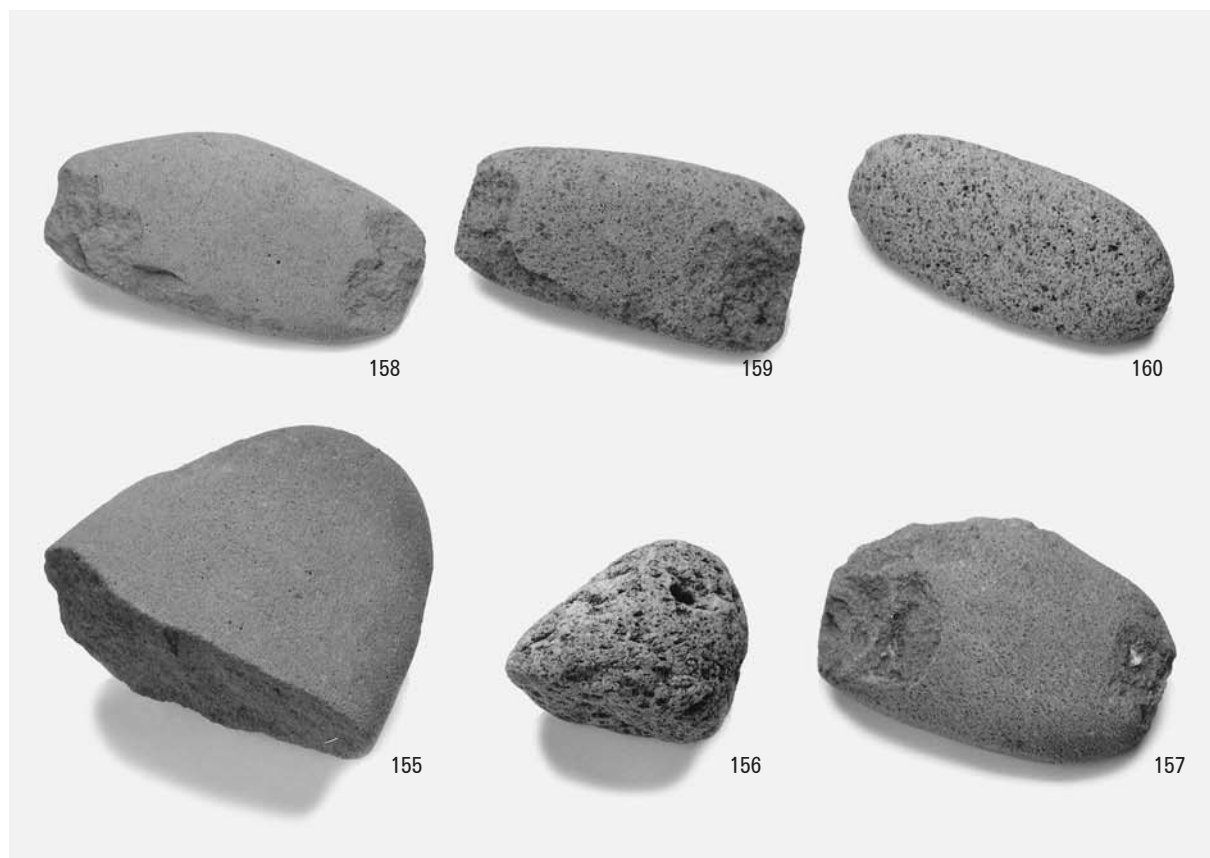


包含層出土石器130~141

图版170



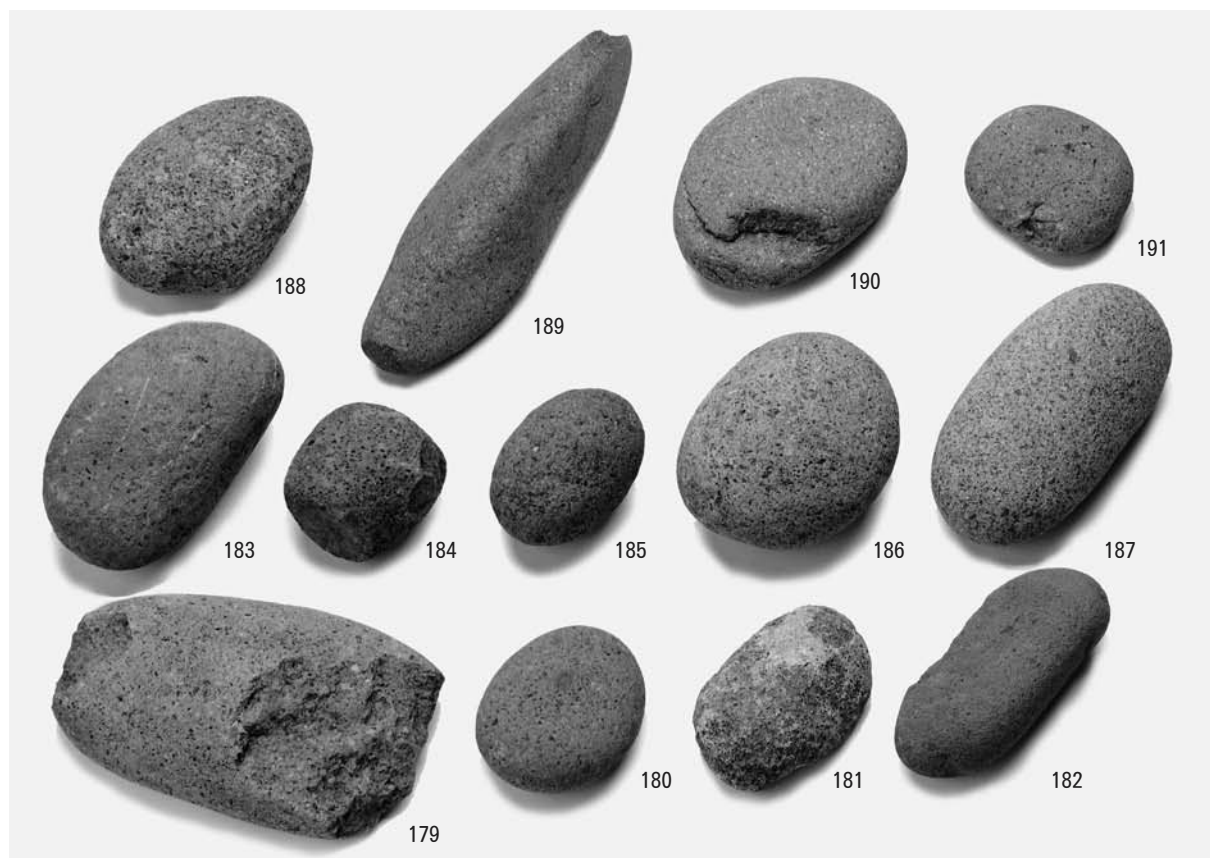
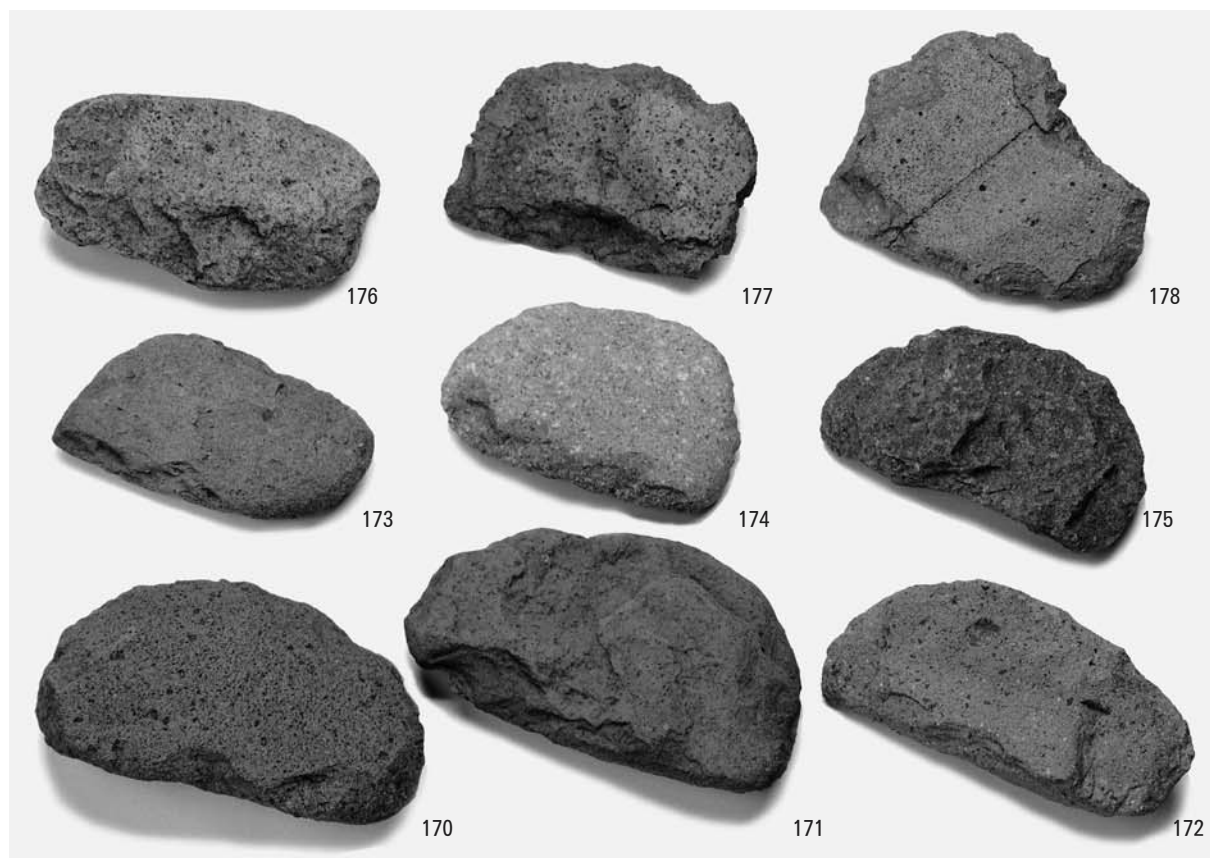
包含層出土石器142~154



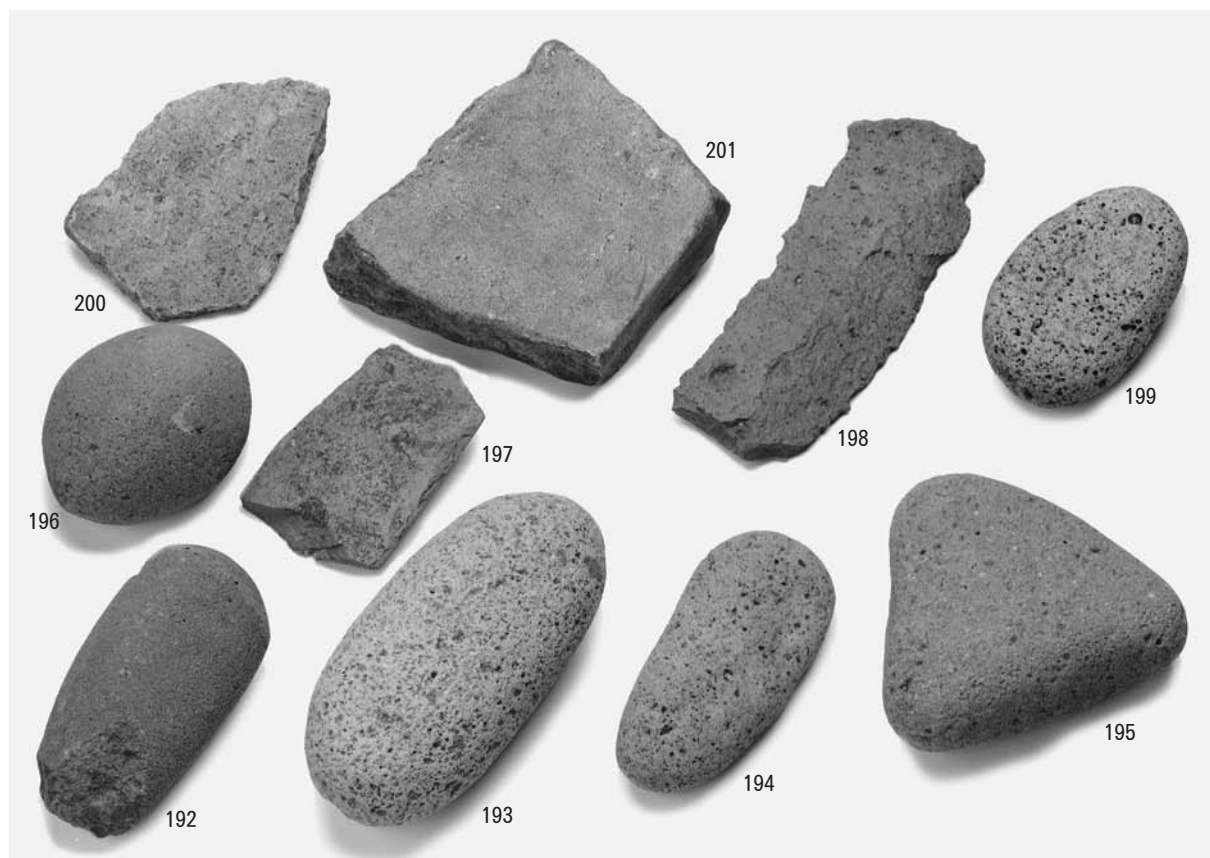
包含層出土石器155~169



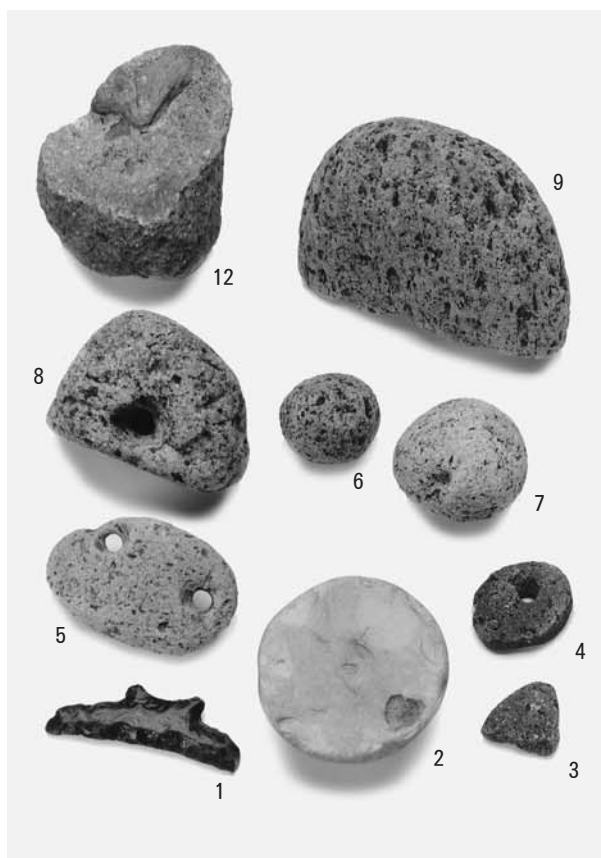
图版172



包含層出土石器170~191



包含層出土石器192~203



包含層出土石器204, 205 包含層出土石製品 1 ~12

# 報告書抄録

ふりがな		もりまち にごりかわさがんいせき えいちく						
書名		森町 濁川左岸遺跡 - A地区 -						
副書名		北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次								
シリーズ名		財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号		第208集						
編著者名		大泰司統・中山昭大・村田大・影浦覚・袖岡淳子・熊谷仁志・鎌田望						
編集機関		財団法人 北海道埋蔵文化財センター						
所在地		〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地-1 TEL 011-386-3231						
発行年月日		西暦2004年7月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	° / ' / ''	° / ' / ''			
にごりかわさがんいせき 濁川左岸遺跡	ほっかいどうかやべぐん 北海道茅部郡	01345	B-15-22	42	140	20010724 ～20011026	1,300	高速道路 北海道縦 貫自動車 道（七飯 ～長万部） 建設工事 に伴う事 前調査
	もりまちいしくらちょう 森町石倉町			8	28			
	401ほか			49	57	20020507 ～20020830	3,630  (A・B地区)	
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺物	主な遺物		特記事項		
濁川左岸遺跡	集落跡	縄文時代 前期 中期 後期 続縄文時代	住居跡 9軒 土壇 63基 焼土 38ヶ所 柱穴状の土壇 305基 (A地区)	縄文土器 円筒土器下層式 円筒土器上層式 サイベ沢Ⅶ式 見晴町式 榎林式 大安在B式 トリサキ式 大津式 白坂3式 加曾利B式 続縄文土器 恵山式 後北式 土製品 石器等 石鏃・石槍・石錐・ つまみ付きナイフ・ スクレイパー・偏平 打製石器・石核・フ レイク・石斧・たた き石・すり石・砥石・ 石皿・台石・加工痕 のある礫・焼成礫・		縄文時代中期前半～後 期前葉の集落・墓域 (A地区)		
			北埋調報190 B地区 住居跡 8軒 土壇 30基	の礫・焼成礫・ 礫など 石製品				

---

---

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第208集

森 町

**濁川左岸遺跡** - A地区 -

—北海道横断自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成16年7月30日

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

〒069-0832 江別市西野幌685番地1

T E L (011) 386-3231 (代表)

F A X (011) 386-3238

印 刷 中西印刷 株式会社

〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1番34号

TEL (011) 781-7501

---

---